

# ファイアーエムブレム 紺碧のコントレイル I・II

右利きのサウスポー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ベルン動乱の終結後談。

エレブ新暦1000年から始まる、イリアの天馬騎士団を舞台にした長編小説です。

主人公には封印の剣の時点で見習い騎士だったシャニーを据え、騎士団内の権力争いに巻き込まれながら自分たちだけの『イリア騎士の誓い』を見出していく姿を描きます。

※Ⅲ部は別スレッドにて展開中

( <https://syosetu.org/novel/298743> )

騎士として貫きたい道、掟との葛藤、上層部との確執、そして……聞こえないはずの声……。

団内での対立や外部の敵とのバトルに加え、ほのぼのの日常や恋愛と少しずつ成長していく姿を描いていきます。よろしくお付き合いください。

※原作知識は有るに越したことは無い……くらいの影響度です

※以下のオリジナル要素があります

・登場キャラクター（原作キャラの独自設定やオリジナルキャラの登場があります）

・クラス・武器

・地名および団体

※カップリングはロイヤリティニ  
参考：人物相関図（Ⅱ終了時点）

## 目次

紺碧のコントレイルI 第1章 黎明の鼓動

第1話 Prelude 1

第2話 銀の意志 10

第3話 凍てつく剣 22

第4話 第十八部隊 36

第2章 春陽のセクステット

第1話 青空と闇夜(1) 54

第2話 青空と闇夜(2) 64

第3話 自分たらしめるもの 75

第4話 同郷の夢 87

第5話 交差する意志 95

第6話 誰もいない木立 105

第3章 血盟のリペンタンス

第1話 一人前の騎士(1) 115

第2話 一人前の騎士(2) 124

第3話 独善の末路(1) 131

第4話 独善の末路(2) 142

第5話 喪失と創出 147

第6話 憧れの人 160

第7話 先駆の狙撃手 169

第4章 決裂と絆のフェイトフル・ナイト(前編)

第1話 団長選出戦 174

第2話 剣の在り処 183

第3話 咽び泣く剣 191

第4話 挫折の残照 | 201

第5話 果てしなき野望(1) | 209

第6話 果てしなき野望(2) | 216

第5章 決裂と絆のフェイトフル・ナイト(後編)

第1話 羨望と孤独(1) | 224

第2話 羨望と孤独(2) | 233

第3話 『疾風』の覚悟 | 246

第4話 切り拓く手 | 254

第5話 戦友同士 | 263

第6話 新たななる出発 | 276

第6章 理想と孤独

第1話 暗躍の太刀 | 286

第2話 来訪者 | 291

第3話 守る者 支える者(1) | 303

第4話 守る者 支える者(2) | 312

第5話 名誉の数字 | 319

第7章 妖精と魔剣

第1話 旅の傭兵 | 330

第2話 背中を押す者 | 348

第3話 閃電の魔術師 | 354

第4話 追憶の誓い | 367

第5話 剣折れて | 379

第8章 ヴァルキューレの休息

第1話 反目の槍 | 392

第2話 誓いと矛盾 | 400

第3話 銀の貴公子 | 415

第4話 一刻の相聞歌 | 427

第9章 対立の予兆

第1話 戦虎の教え | 438

第2話 魔剣の囁き | 457

第3話 97人目の業 | 468

第4話 軋轢と轍 | 480

第5話 『閃電』の怒り | 490

第6話 聖天騎士団 | 496

第10章 空知らぬ雨を越えて

第1話 瓦礫の勇者 | 506

第2話 譲れぬ瞳 | 519

第3話 誓いの一閃 | 529

第4話 交わした約束 | 543

第5話 決断の時 | 556

第11章 恋慕のシルフィードダンス

第1話 『赫竜』のソルバーン | 564

第2話 親友からの手紙I | 572

第3話 唯一無二の名 | 582

第4話 総べて薙ぐ銀翼 | 593

第5話 親友からの手紙II | 601

第6話 フェリーズからの依頼 | 610

第7話 脆き剣 | 623

第8話 業火の魔人(1) | 633

第9話 業火の魔人(2) | 641

紺碧のコントレイルⅠ 終章 それでも、前を向いて

第1話 八英雄 653

第2話 故郷と恋心と 660

第3話 彷徨う太陽 666

第4話 最重要任務 674

第5話 真白の門出 681

第6話 幻の栄光 690

第7話 第十八部隊Ⅱ 697

第8話 『三誓』——フルール・オブリージュ 710

第Ⅰ部 最終話 イリアの礎たれ 721

紺碧のコントレイルⅡ 第1章 エンジェルヘイロー

第1話 黎き剣（前編） 732

第2話 黎き剣（後編） 738

第3話 黎き悪夢の目醒め 743

第4話 いざ部隊長会議へ！ 753

第5話 悪夢の古傷（前編） 759

第6話 悪夢の古傷（後編） 766

第7話 先輩の警告 775

第8話 思わぬ刺客 781

第9話 とっておきの企画 788

第10話 ふるさとの母 798

第2章 斉いし舞台

第1話 白と黒の騎士団 807

第2話 眩耀の裏に 816

第3話 抹殺命令 826

第4話 白き聖者と黒鉄の魔女

第5話 譲れぬ誓い (前編)

第6話 譲れぬ誓い (後編)

第7話 毒牙の応報

第8話 雪花旋風の如く

第9話 紅血の思慕 (前編)

第10話 紅血の思慕 (後編)

第11話 黎き妖精

第3章 恋歌千里を翔け

第1話 内憂外患

第2話 墮天の烙印

第3話 霜雪のステイグマータ

第4話 風の妖精

第5話 堅き信念、揺れる瞳

第6話 密室裁判

第7話 墮天使たちの誓い

第8話 天翔けるセレナーデ

第9話 リキアの若獅子

第10話 重なる影

第11話 きずなの詩

第4章 黎明の剣

第1話 妖精の飛翔

第2話 黎き風の囁き

第3話 失った名前

第4話 天馬と射手



第5話 均衡崩壊

第6話 絆繋ぐ(前編)

第7話 絆繋ぐ(中編)

第8話 絆繋ぐ(後編)

第9話 新風の息吹

第10話 元気かな、会いたいな

第11話 この白銀に誓って

第5章 風の魔人 く懊悩と慟哭とそして、憧憬とく

第1話 交錯する声

第2話 侵食する夜

第3話 風の精霊セチ(前編)

第4話 風の精霊セチ(後編)

第5話 青き妖精

第6話 無間と無尽のバリトウッド

第7話 春の夢

第8話 罪雪ぎ、業繋ぐ

第9話 孤塁の女王

第10話 いつか飛び立つあなたへ

紺碧のコントレイルII 終章 蒼天に繋がれ

第1話 こんなの夢だ

第2話 ラスト・オーダー

第3話 明日を掴むために

第4話 黎き空の向こうに(前編)

第5話 黎き空の向こうに(後編)

第6話 夢に終わるものか

129512881280126712571245

1234122512161205119711871177116611561146

1132112111101099109010811071

第7話 これが夢だ！

第8話 芽吹きの雨

第9話 風光る（前編）

第II部 最終話 風光る（後編）

1337132713161305

紺碧のコントレイルI 第1章 黎明の鼓動  
第1話 Prelude

「——どうしてもダメなの？ これだけお願いしても？」

椅子に座る年上の女性へひたすら頭を下げる。何度空色の髪が揺れただろうか。

それでも、目の前の女性は笑って返してはくれなかった。皆が望んでいるのに。

今まで黙って話を聞いていた女性が、承諾を得られなくて困惑する乙女へ重い口を開いた。

「それは、あなたの仕事よ。テイト」

——エレブ新暦1000年 3月

ここはエレブ大陸の北部にある国、イリア。

豪雪地帯で知られるこの国は名物である雪の為にまともな農耕を行えず、人々は常に貧困に苦しんでいた。

その上短い夏が終れば、今度はブリザードが死を運んでくる。

まともな収入源の無いこの国で唯一まとまった金を手に入れることの出来る仕事、それは——傭兵だ。

傭兵として大陸中で起こる争いに参加することで手に入れた金で各地を騎士団がまとめ、民を養い、そして針葉樹林帯を切り開いていく。

当然、安全な仕事ではない。一歩間違えれば、命を落とすかもしれない危険な仕事。

それでもイリアの騎士達にはそれを拒む術はなかった。

死の恐怖に怯えれば、自分達の帰りを心待ちにする祖国の民が寒さに震え、飢えに苦しまねばならない。

赤子が生まれても乳がろくに出ず、死んでしまうことも珍しくない。民を……見殺しにすることになる。

その赤子が育てばまた祖国を守る騎士として命を危険に晒さなければならぬ。

それだけではない。戦争をしに他国に行くのだから、他地域の人々からの視線がどうかは言うに及ばないだろう。

何の為に生まれるのか？ 何の為に生きるのか、そして、誰の、何の為に戦うのか……。

すべては、国のため、民の為。自分の為に戦うわけではない。

それは世界中で有名となった『イリア騎士の誓い』にも明記されたことだった。

生き延びる事さえできれば、戦死さえしなければ、少なくとも明日はある。

希望？ そんな金にもならないモノに構っていられる余裕など、ありはしない。

生き残ることが精一杯の人間に、夢も希望も単なる作り話だった。



ベルン動乱で生き残った天馬騎士ティトは、各地を飛び回って生存している天馬騎士たちを探し出していた。

イリア騎士の誓いがあったにせよ、騎士団の長を倒し、それを壊滅させたのは誰でもない自分。

彼女は重い責任を感じていた。皆は仕方が無いと言ってくれる。でも……それでは自分の心が許さない。

「おねえちゃん……。おねえちゃんは、わるくないよ。おねえちゃん  
はエライよ。あたしには、出来ないよ」

必死に、気丈に振舞った。だが妹だけには、自分の気持ちを敏感に感じ取られていたようだった。

自分自身にすら嘘をつけても、彼女には嘘がつかない。

彼女なりに自分を励ましてくれていたようだったが、逆にそれが重く押し掛かるように感じずにはいられない。

シャニーも成長している。姉であり、先輩である自分が落ち込んで  
いるわけには行かない。

団長を倒し、騎士団を壊滅させた。民に不安な思いをさせた者として一刻も早く騎士団を再建せねば。その気持ち自分が更へ更に嘘をつ

かせ、心配してくれる者へささえ、呈する苦言へ拍車がかかる。

「シャニー、何を言っているの？ 出来ないでは済まないのよ？ あなたも叙任騎士になれば、当然のようにそれをこなさなければならぬの」

自分のその言葉を聞いたときの妹の顔は、あまり思い出したくない。

気苦労の多い自分を何とか励まそうといつも笑顔を湛える彼女が、そのときばかりは顔が泣いていた。

——出来ないよ……

そんな気持ちが顔に滲み出ていた。親しい者へ感情を隠すことが下手な子だった。

（シャニー、本当は、本当はあなたが正しいのよ。同胞を何の悪びれもなく殺す事ができる人間なんて、いるはずないし。本当は！ 本当は……許されるはずも無いこと。でも、イリアではそれが『正しいこと』でなければ、生きていけないの）

テイトはそう言い聞かせるようにシャニーを睨みつけた。それは自分への戒めでもあった。

騎士になるって何なのだろうか。人として壊れてしまう為に、騎士になつたのだろうか……。

天馬の突然の一声にテイトははっと我に返る。どうやら天馬が目的地に到着したようだった。

「この子……。よく行き先が分かったわね」

テイトは天馬を撫でると彼から降り、目の前にある城の入り口へと歩いていった。そこは、生き残った天馬騎士の中でも最も自分に身近な存在のいる城だった。



一時期姉妹で住んでいたエデツサ城。

ベルン動乱以降、他国からはイリア諸騎士団の中心人物とみなされているゼロットの同族として扱われて来たが、エデツサ城は何回来ても緊張する。

「あら、テイトじゃない。元気だった？ 仕事は順調？」

執事に妹の登城を聞かされて現れた姉ユーノがテイトの顔を見るや、落ち着いた感じのある彼女には珍しく階段を小走りで下りてくる。

ユーノは彼女の顔の目の前まで迫り着くなり、本当に嬉しそうな顔をした。そして……。

「ね、姉さん！ それは……やめてっば。子供じゃないんだから」  
恒例というか何と言うか。ユーノはテイトを抱きしめ、頭を撫でる。

嬉しく無いといえは嘘になるけれど、その嬉しさを羞恥心が掻き消そうとする。周りには侍女や衛兵がいるのだから。

弱さを他人に見せるわけにはいかない彼女には、姉の行為は拒否するしかなかった。姉は寂しそうな顔をするが仕方が無い。

早くに両親を戦死で亡くしたユーノ、テイト、シャニーの三姉妹。シャニーなんかは物心がついて間もなかった。

そんな妹二人を、ユーノは母親代わりになって育ててくれた。見習い修行は本来14歳からの1年間だが、ユーノは12歳から修行に出ていた。

家族を養う為に必死だった。

イリアに帰ってきた彼女は、国でも五本の指に入る騎士へ成長し、とにかく働いた。恋をする暇も、オシャレに気を使う時間も無いほどに。

唯一の癒しは、テイトの思いやりと、シャニーの笑顔。そして、そんな二人を撫でる事。

苦労に苦労を重ねて育てた「娘」だ。大切な妹に拒否されては悲しがつて当然だろうけども、甘えてはもらえない。

(ごめんなさい、ユーノ姉さん)

テイトの心の中は葛藤と罪悪感が渦巻いていたが、そんな気持ちを「母」はお見通しのようだ。

「テイト……。大変でしょう？ いつでもどこでも、強がっていなくていいのよ？ 私の前ではあなたはいつまでも大切な妹なんだから」

姉の言葉に涙が止まらなくなる。

自分にとつても姉は大切な姉であり、母でもある。

テイトは人の前ではいつも責任感ゆえ強がっているから、周りの人からはとてもたくましい人だと思われがちだ。

ユーノもシャニーも、テイトの本当の顔を知っていたから、姉は彼女を心配し、妹も精一杯甘えていた。

いつまでも一緒に……。何度もそう願ったが、それは叶わぬ願い。

ユーノは結婚し、シャニーもまた、一人の天馬騎士としてこれから辛く厳しい道を歩んでいくことになる。

もう、誰にも甘えてはおれない。

一番の甘えん坊は、シャニーではなく自分だったのかもしれない。

そう思つて彼女は戦後、今までより一層肩肘張つて生きていた。

その気持ちを見透かしたような姉の言葉。

「姉さん……」

「離れ離れでも、私達はずっと家族よ？ あなたは独りじゃないわ」

ユーノはテイトを抱きながら、彼女の顔がまわりに見えないように自分の部屋へと連れて行つた。



ユーノは妹を椅子に座らせて一度部屋を後にした。

一人になつて静かになつた部屋で、テイトは自己嫌悪に陥る。

あれだけもう甘えないと誓つたのに、なんて意志が弱いのだろう

か。こんなことでは天馬騎士団の再建なんて出来やしない。

彼女は自分の頭を両手に拳を作つて何度も小突く。

暫くすると、ユーノは温かい紅茶を持つて部屋に戻ってきた。侍女に持つてこさせればよいのに。

その姿に、テイトは実家に姉妹三人で暮らしていた頃を思い出す。

「外は寒かつたでしょう？ さ、ジンジャーティーよ」

姉のぬくもりにも似た温かい紅茶が、芯まで冷えた体を癒してくれる。

ユーノは本当に温かい人だ。自分もこんな人になりたい。大きな

愛で、皆を包んであげたい。そう思つて止まない。

暫く他愛も無い話を楽しむ。

この頃は忙しくて、ユーノのいるエデツサ城どころか、シャニーのいる実家にすら帰っていない。

仕事の話ぐらしいしかなかつたこの3カ月。話したい事は山とあつた。

ユーノはその話を興味津々に笑顔で聞き入つてくれる。

いつも物静かな彼女からは想像できないほど、ティトは話し込んでしまう。楽しい……。

そんな彼女を現実に引き戻したのは、甲高い泣き声だった。

「まあ、アリスが泣いているわ。ティト、ちよつと待つていてね」

ユーノは小走りに部屋を出て行く。

姉はもう結婚して子供もいる。そんな姉に自分は何て事をお願いしに来たのだろう……。

そこまで考えてティトは、はつと時計に目をやる。城に来てからもう2時間が経とうとしていた。

随分無駄話を聞かせてしまった。姉が帰ってきたら本題に入ろうと気合を入れる。

向こうの部屋から聞こえていた泣き声が止み、間もなく姉は帰ってきた。

「おまたせ。で、そのお友達はどうなったの？」

「姉さん……。ごめんさい、その話はあとにしましょう。姉さんにお願いがあつて、私はここに来たの」

話の続きを楽しみにする姉にティトは本題を振つた。

唐突に持ちかけられたユーノだが、彼女はさして驚きもせずティトの話をそのまま聞く。

「今、天馬騎士団は団長を失つて統率が取れない状況にあるわ。なんとか生き残つた騎士達を集めて再建はできそうだけど、リーダーが不在なの。だから……」

「ダメよ、ティト。それはダメ」

ユーノはティトの言葉を拒否した。



テイトも断られる事は分かっていたし、最後の最後まで避けようと思っていた選択肢だ。

姉にはもう家庭がある。大切な子供を城に残すわけにはいかないし、イリアの騎士を統べるべく戦場に旅立つ夫ゼロットの手助けをしなければいけないユーノの立場は理解しているつもり。

せつかく幸せを手に入れた姉に、これ以上の負担をかけたくなかった。

だが、天馬騎士達はユーノの事を『伝説』の天馬騎士と尊敬し、彼女がリーダーなら誰も不満はなかった。

だからテイトは残された最後の手段として、何とかユーノに新生天馬騎士団の初代団長の任へ就いて欲しかった。

「姉さんは戦場に出ないで、色々私達の指導してくれるだけでいいから、だから！」

断られても、断られても、テイトは必死に姉へ懇願した。

ユーノに向かって、何度も何度も頭を下げた。何度空色の髪が揺れたことだろうか。

それでも、姉の首が縦に振られる事はなく、笑顔を返してくれることもなかった。

「どうしてもダメなの？　これだけお願いしても？　姉さんが育児やゼロット義兄さんの手伝いで忙しい事は分かるわ。でも、天馬騎士団復興には姉さんの力が必要なのよ」

「違うの。そうではないのよ、テイト」

今まで黙っていたユーノが、ここに来て再び口を開く。

ユーノとて、自分達が築き上げてきた天馬騎士団がこのまま朽ち果ててしまう事を黙って見ていられるはずはなかった。

「イリアとして諸騎士団が団結しないといけない中で、私達は望まなにいにしても派閥を作ってしまった。そして国の存亡をかけた大切な時に、反ベルン派と親ベルン派に分かれて、意味の無い戦いを引き起こしてしまった。それは、そういった仕組みを長い時間の中で造り上げてしまった私達の責任。人々を置き去りにして、自分達の為に戦ってしまったの」

「そんな……」

「だから、天馬騎士団、いえ、イリアもまた他の国同様生まれ変わらなければならぬのよ。その大切な仕事を担っていくのは、あなた達若い騎士」

ユーノは机の引き出しから何かを取り出すと、団長就任を引き受けてもらえなくて困惑する妹に歩み寄り、妹の手を取って自分が持っていたものを彼女に強く握らせる。

「過去の天馬騎士団はもう無い。生き残った者をまとめ、新たな歴史の礎を作っていくリーダー。それは、あなたの仕事よ、ティト」

ティトは握らされた手を開いてみて驚いた。手の中にあっただのは、天馬騎士団団長の証である騎士団の紋章が入った金のブローチだった。

「ね、姉さん!? 私には、そんな大任はととも……」

狼狽するティト。ユーノは動転する妹の肩をしっかりと持ち、いつもの優しい声では無い、しっかりとした声で彼女を諭した。

妹としてではなく、これからのイリアを創っていく若いリーダーとして。

「ティト、あなたも分かっているはず。新しい世界には、新しいリーダーが必要なの。これはあなたの仕事よ。私も、精一杯あなた達の手助けをするわ。だから、お願い。あなたならできる!」

姉のいつもと違う瞳に、ティトは決意を固めた。

甘えてはいられない。過去を壊したのが自分なら、未来を創っていくのもまた、自分でなければならぬ。

彼女は自分にそう言い聞かせた。困ったら、疲れたら……家族がいる。甘えるのではなく、助けてもらえばいい。

「分かったわ、姉さん。でも、もし困ったら、その時は助けてね。私一人では……きつと荷が勝ちすぎると思うから」

ユーノはそれに笑顔で返し、またティトの妹を撫でた。

「ええ、勿論よ。困ったらいつでもいらっしやい。あなたは独りじゃないわ」

いつの間にか、ティトは姉に胸に顔を埋めていた。頭を撫でられて

も、羞恥心は湧いてこなかった。純粹に嬉しかった。独りじゃない。「ゼロット義兄さんから授かった『疾風』の称号に誓って、精一杯がんばるわ」

## 第2話 銀の意志

テイトは姉からブローチと想いを受け取ると、そのままエデツサ城を後にする。

城の外まで見送ってくれた姉の姿がどんどん小さくなって、そして見えなくなってしまった。

鈍色の空に舞い、実家のある村を飛び越え……天馬騎士団の本拠地であるカルラエ城に戻ってきた。

そこで出迎えてくれたのは、意外な人物だった。

「ホッホ、お帰りなすったか、毎日大変じゃね」

「あ、あなたはニイメさん！ どうしてこんな所に?!」

天馬から飛び降りたテイトは、『山の隠者』と名高い闇魔法の大家ニイメに深々と頭を下げた。

ニイメはそんな彼女を見ているのか見えていないのか、カルラエ城を見上げている。

「世界が変わりつつある……。その現場を見に来ただけさ」

世界の理を追及するニイメにとっては、欲で動く人間の行動などどれも取るに足らないものであった。

歴史は繰り返される……ただそれだけのこと。それでも、祖国が生まれ変わろうとしているところは見ておきたかった。

「はい、必ずイリアを正しい方向へ。天馬騎士団の総力を挙げて、きつと！」

ニイメはテイトの力強い言葉に彼女を見上げた。

細い体にも、その瞳には強い意志が燃えている。年寄りが出てくる幕ではないと改めて悟る。

「ホッホ、強い娘だねえ。まるでわたしの若い頃を見ておるようじゃ」「光栄です。私もニイメさんのように、後世に誇れる人になりたいと思います」

ニイメは後ろを向くと、テイトが言い終わるか終わらないかのうちにそのまま歩き出し、ある程度距離開けた後によりやく止まってテイトの賛辞へ返した。

「あたしはあたし。あんたはあんただ。思うようにやるといいさ。あたしは単に、自分の知識欲を満たしたいだけなのさ。だけど、あんたはあたしのように、自分の為に動いちゃダメだ。誰の為に戦うのか、よおーく考えるんだね」

背の曲がった白髪の老婆が角を曲がり、姿が見えなくなるまでテイトはずっと彼女の背を見つめていた。

イリアの大先輩からの期待を胸に刻んで城に戻ると、城にいた天馬騎士達にユーノの言葉を告げ、そして自分が暫くは団長として天馬騎士団の再建に尽力を注ぐ旨を明らかにした。

皆は、テイトが寝る間も惜しんで自分達を探して訪ねてきてくれたことを知っていたし、彼女の生真面目な人柄を嫌う人物はあまりいなかった。誰も異を唱える者はいない。

「隊長……あ、団長。私達も協力しますから、きっと天馬騎士団を再建しましょう」

かつてテイトと共にあつた部下が真つ先に彼女へ声をかける。

テイトは無言でうなずくとそのまま部屋に入っていく。団長としてやる事は山のようにあるのだ。

「やれやれ、あんなヒヨッコが暫定とは言え団長ですか。先が思いやられますね」

テイトが部屋に入って行ったことを確認するや否や、すぐさま聞こえる声があった。

それは、生き残った天馬騎士の中でも一番のベテラン、シグーネ前団長のときに副団長として影から支えた旧天馬騎士団第二部隊長、イドウヴァだった。

(経験から考えても、私が団長に推されても良いはずなのに……)

彼女は不満を隠しきれない。それを昔からの部下が慰めるが、慰めにはなっていないかった。

「きつとイドウヴァさんなら、新団長も悪い待遇はしませんよ」

「いえ、あの人はきつと、新体制を作るために旧幹部は組織の上位には組み込まない。ヒヨッコだけで何ができると言うのでしょうか。あ

と一息だったと言うのに……」

何の為に何年もシグーネに頭を下げて彼女の言いなりになっていたのか、イドウヴァには分からなくなってしまう。どうしても愚痴が先行する。

それを、騎士とは到底思えないような格好の女性が窓の縁に座って聞いていた。

「ホント、あと一息だったのにな。さっき、自分がやると何で言えなかったんだか」

ポツリと漏らす蒼緑の髪の女性はすっと立つと、風を斬るようなスピードで突如姿を消した。

他の騎士にとっては今の女性が誰なのか、よく知っているものはない。

「姉貴は可哀相だね。まともな部下に恵まれなくて。ま、一人はまともなのがいたようだけど、そいつに殺されてちや世話ないわね」



テイトは部屋に籠ると、それつきり出てこなくなってしまう。

彼女は部屋で新生天馬騎士団の人事について悩んでいた。

精鋭部隊の隊員名簿……。各部隊の部隊長の選任。人事についての99%は決まっていた。残りの1%が、テイトを部屋に幽閉している。

誰にするべきか、本当に悩む。人を配置することが如何に難しいことか……。

ここの部隊長ばかりは、経験でも、実力でもない。大切なのは人柄。不向きな人間を選任すれば、天馬騎士団の存亡に関わる。

「おやおや、頑張ってるね、団長さん」

テイトははっとして後ろを見る。そこには、先程の蒼緑の髪を揺らす女性が居た。

「レイサさん!? 今は中に入ってこないでください!」

必死に忠告したが、彼女は自分の話を聴いているのかいないのか……。

彼女が気付いた時には、レイサは机の上に広げてあったメモ書きし

た紙を手にとって眺めていた。

「人事かあ、姉貴もこれにいつつも時間かけてたよ。人には、仕事はさっさとしろって煩かったのにさあ」

レイサには机で奮闘する若い団長の姿が、在りし日の姉に重なって見えてしまった。

居なくなってみると……何かこう、重いものを感じる。ケンカする時には、さっさとクタバレと何度罵った相手だったろう。

——人間って、本当に気付くのが遅いよね。気付いた時に後悔しても、どうしようもないのにさ

「レイサさん、その……シグーネさんの事は、本当に申し訳ありませんでした。謝って許してもらえないのですが……」

テイトは自分が殺めてしまった、前団長にして姉であったシグーネを思い出すレイサに頭を下げたが、レイサはすぐに彼女の肩を持って上体を起こしてやり笑顔で返した。

「まあそんな事言ってるの？ あんたも姉貴も騎士だったんだ。騎士って人殺しが仕事じゃん？」

「それは……」

「騎士は民を守るために戦う？ それは建前じゃん？ 結局、人殺しってことじゃない？ 何で私に謝るのさ。あんたは騎士として誓いを守った。ただ、それだけのことさ」

テイトにはレイサのことが良く分からなくなった。

騎士だから敵を倒すのは当たり前だ。特に自分達は傭兵騎士。やらなければ、やられる。

それでも、やはり家族が殺されたら、自分がどういう行動をとってしまうか分からない。

姉を殺した人間が、目の前にいる。自分なら、仕方ないと……口では言うだろう。レイサも、そんなところだろうか。きっと内心、自分を憎んでいる。邪推かもしれないが。

「あんたも私も。いや、イリアに生きる軍人は皆、民を養うために戦ってる。私は別に、あんた達騎士のやる人殺しが悪い事だとは思わないよ。自分達が生きていくには、誰かを殺さなきゃいけない。それが、

イリアって国だ」

彼女は本当にサツパリとした物言いをする。時には他人がぎよつとすることでも平気で言ってしまう。

しかし、そのサツパリとした言葉の中に、どれだけの意味が込められているのかを考えると、時々怖くなった。

「それに、あんた達は力の無い人たちを殺しているわけじゃない。相手もそれなりに力を持って、それを仕事としている者達なんだ。……自分を責めすぎて、いい事なんか一つもありやしないよ。私に謝るくらいなら、せめて姉貴があので心配しなくてもいいような、立派な団長になってやんなよ」

テイトには、ぼろきれをまとったような格好をしているレイサがシグーネに見えた。

かつて、彼女はシグーネによく可愛がってもらっていた。

見た感じは近寄り難い雰囲気、いかにも厳つい女將軍という感じのシグーネ。

だが実際近くで仕事を共にすると、とても面倒見の良い人だった。特に新人隊員に対しては、精鋭部隊のことで忙しい合間を縫ってはよく世話をしていた。

その頃によく言われた言葉がテイトの脳裏にはつきりと今でも刻まれている。

——謝るぐらいなら手を動かしな。あたしはね、あんたが憎くて怒っているわけじゃないんだ。あんたなら、もっと良い結果をきつと出せると思つて叱っているんだよ。

——いいかい？ 謙遜も自慢もいらないよ。結果を出せば、周りの者が自分を見て評価してくれる

「分かりました。レイサさん。私、きつとシグーネさんのような立派な団長になって、レイサさんのような強い人になります」

テイトにまっすぐ見つめられてレイサは照れたような格好をしたが、すぐにそれを否定した。

「姉貴のようになっちゃいけないよ。そして、私のようにもね。私は、



平気で力の無い人間を殺して、欲しい物があればかつぱらってしまうだけの盗賊さ」

テイトは飛びそうになるぐらいの勢いで首を横に振る。

レイサはシグーネからの命令で、密偵やら要人の暗殺やらをするアサシンだ。

妹に暗殺を依頼する姉の気持ち……テイトには分からなかった。

「あんたは希望や夢を失っちゃいけないし、私みたいに闇の中でしか生きられなくなっちゃダメさ。自分の意志で歩かなきゃね」

アサシン……手を一撃で死へ至らしめる『瞬殺』という闇の剣の使い手。

だから彼女は、命の儂さを誰よりも強く知っていた。陽の下で暮らせる喜びを知っていた。

さつきまで笑っていた人間を、単なる肉の塊に変えることがどうしてこども簡単なのだろうか。

いくら仕事といっても、無抵抗の人間の喉元を狙うのは……昔は何も感じなかった。仕事だから。

レイサもその姉も、失ってはいけないものを失ってしまっていた。そして彼女は今もこうして生きている。

レイサの場合は、失ってしまったもののお陰で、取り戻したものもあつたようだが。

「邪魔したね。さあて、仕事でもしてこようかな」

「レイサさん！ 仕事って何ですか？」

「しがない盗賊の仕事といったら、一つしか無いだろ？」

レイサは言い終わるか終わらないかのうちに、疾風の如く目の前から消えてしまった。

一人残されたテイトは、机に残されたメモをじっと見つめ、書いてあつた新人部隊の部隊長候補の名前の全てに横線を引つ張つた。

「単なる傭兵で……新人を終らせてはいけないかもしれない……」



盗賊風の女が団長の部屋から出てきたことに違和感を覚えた者は

少なくなかった。

同じ天馬騎士団所属の者とは言っても、アサシンのことをよく知る者は少ない。

ましてそれが、前団長の妹だなどと知る者は殆どいなかった。数名を除いては。

「あれは……レイサではないですか。なぜあんな奴を。シグーネも何を考えていたのだから」

イドウヴァだった。彼女は向こうで短剣を使ってジャグリングをするレイサに何か腹が立った。

姉を殺されても、飄々とした顔つきで遊んでいる。

それどころか、姉を殺した相手の許へ媚を売りに行くとは、流石の自分でも出来ないだろう。

「レイサ、少しは鍛錬でもしたらどうなのですか?」

「私は盗賊なの。戦う事は向いていないのさ。私の専門はかつぱらいと逃げること。そんな事の練習していいの?」

レイサは手に財布を取ってイドウヴァに見せ付けた。

それを見た彼女が焦ったのは言うまでも無い。その財布は彼女のものだったからだ。

笑顔で財布を見せ付けるレイサから、ぱっとそれを取り上げる。

(いつの間に私の懐から盗み出したのか……)

馬鹿にされたようで余計に腹が立つ。

「あなたという人は……。妹が低俗な盗賊だなんて、シグーネもさぞ惨めでしょうね。もつとも、自分が死んでも涙一つ流さない薄情な妹が相手なら、もうとっくに見捨ててしまっているかもしれないませんが」「姉貴は騎士だった。いつか死ぬのは分かっていた。ま、私には槍とか扱う素質がなかったから、これぐらいでしか役に立てなかったけど、それなりに尽くしたつもりだよ。少なくとも、自分が死んでも後継者争いにしか目が無い部下よりはね。よつと……!」

レイサは再びジャグリングを始めだす。

(こんな女に……!)

普段討伐される側の低俗な盗賊に馬鹿にされてついカツとなった

イドウヴァは思わず槍を取って、レイサへ向かってそれを突き向ける。

「なっ……」

気付いた時には、もう自分の首筋にレイサが短剣を当てていた。そこは寸分の狂いもなく、首の急所。

(あの短時間に身を翻して首筋に噛み付いたというのか?!)

舌なめずりをしながら、短剣を徐々に首筋に食い込ませるレイサの目は殺気に満ちている。

「ふふ……。人間つてき、本当の事を言われると熱くなっちゃうものだよね」

「ぐ……っ」

「確かに私は闇でこそ生きてるゴミかもしれない。私だつて、弱い人間は殺したくない。でもね……。姉貴を侮辱する奴が相手なら、強かろうが弱かろうが、無性に殺したくなるよ？ ふふふ……。このまま、ぐちやぐちやにしちゃっていい？」

とうとう、イドウヴァが前言を撤回しその場は収まった。

何事もなかったかのように再びジャグリングを始める。この飄々とした顔、何を考えているのかサツパリ分からない。

そこへ、聞きなれた若い声が呼ぶ。

「レイサさん、少し話があります。ちよつと向こうまでよろしいですか？」

「はいはい。私はいつでも暇だし、なんなら朝まで付き合ってもいいよっ。」

(どうしてあんな盗賊を、団長は……)

二人の後姿をじつと見つめるイドウヴァの口元はこれでもかど唇に歯が食いこむ。

やはり、先程団長に媚を売っていたのは確かのようにだ。

しかし、あんな若い者が団長では、次期団長を狙う頃に自分が現役でいるかどうか分からない。

それも分ならず媚を売るとは、所詮盗賊の頭ではその程度。イドウヴァはレイサを貶めることで、自分の怒りを納めた。

◆ 「ええ?! ちょっと、待ってよ。私がどうして部隊長なんか務めなきゃいけないのさ!」

レイサの仰天する声が廊下に響く。

テイトはあろうことか、新人部隊の部隊長の任に就いて欲しいとお願いしていた。

新人は弱いし、何も知らないし。おまけに今年は、戦後の人手不足を補う為に見習い修行を免除することのこと。

見習い期間を経て成人となる15歳で入団が普通だが、今年は天馬の乗り方すら知らない14歳まで入団してくるというのだ。

そんな者達を、自分のような盗賊が従えていけるわけがなかった。「待ってよ! 私は天馬の乗り方も槍の扱い方も知らない、ただの盗賊なんだよ? 教えられるのは瞬殺の技術ぐらいだし、部隊長を任せられる人なんて他にもいくらでもいるじゃない。何で選りにも選って私なのよ」

「これからの新人に必要なのは、天馬の乗り方や、槍の扱い方を教えられる人ではないのです。もちろん、それも大切な事ですが、イリアが生まれ変わる為にもっと他の事を新人に学んで欲しいのです」

テイトの真剣な目に、レイサも狼狽することをやめた。

自分より若い団長が、強い意志を持って自分に接している。

(彼女も大変だよ。自分も役に立ってる事は頑張ろうか。それが……姉貴への償いになるならさ。出来の悪い妹を持って不幸せだっただろうし)

レイサはそう自分を落ち着かせる。

「……で、私に何ができて言うのさ」

「あなたは、よく人の事を見えています」

「そりゃ、そうさ。密偵なんて仕事は、人の表情一つとっても貴重な情報源だからね」

——盗賊なんだから当たり前じゃん とは言えなかった。

ちよつとした隙を突いてモノをいただくカッパライだった自分に

とつて、人の視線一つも見逃すわけにはいかない大切な情報。

それが密偵、そして瞬殺剣を扱うことにも大切な事だったのは偶然だった。

「あなたは優しい人です。そして、誰よりも強い人だと思えます。命の大切さ、脆さを、誰よりも知っている人だと思えます。だから、隊員たちにあなたの知っている事をすべて教えてあげてください。新人を単なる傭兵の駒として終わらせてはいけません。イリアを担っていける人物へ育てて欲しいのです」

(私が優しい?)

そう思ったが、レイサはそれを喉元でぐつと押し込んだ。

姉も言っていた。自分では自分は分からない。

周りの評価したものが自分であるのだと。自分が教えられること……。心構えや、瞬殺剣ぐらいしかない。

「教えられることなんて殆ど無いよ。傭兵に命の大切さなんて教えても、意味無いんじゃないかな。それに、散々人を殺してきた私が教えたところで説得力無いよ。瞬殺剣でも教える?」

「傭兵だからこそ、命の大切さを知っておいて欲しいのです。槍の扱い方などは、時をみて私達が教えますので。命の大切さが分かれば、自分達が何の為に戦うのか、きつとわかります。……分かってもらわなければ、イリアが生まれ変わる事は出来ないでしょう。レイサさんは、いつまでもイリアが傭兵を生業として、血で血を洗っても良いと思いますか?」

「思わないね。姉貴みたいな人間は出ないようになって欲しい」

テイトはレイサの即答に黙ってうなずいた。

彼女もまた、かつて戦場で同胞を何人も殺した。その都度、自分がイリアを支えていくからとその者たちを吊った。

そしてベルン動乱。大切な妹シャニーすら、自分は手がけそうになかった。

二度とそんな思いはしたくないし、これからの新人にも出来る限りさせたくない。

しかし、イリアが傭兵を生業とする限り、それは叶わない。

何の為に戦っているのか、新人のうちに明確にして欲しい。そして、イリアを変えていつて欲しい。

一人では、そんな大業は為し得ない。でも、一人ひとりの意識が変われば、それは無理ではないはず。

意識を作るには、新人の時期が一番肝心だ。

そこで槍の扱い方だの、天馬の乗り方だのを教えるだけでは何も変わらない。テイトはそう考えた。

「新人は、イリアを支えていく大事な人財。傭兵だけで終わらせてはいけないのです。お願いです、力を貸してください。レイサさんは、誰よりも命の大切さを知っています。それを教えてあげてください。そして、その大切な命をぶつけ合う仕事を、彼女らに教えて欲しいのです」

レイサは今までずっと独りで仕事をしてきた。誰かを従えるなど初めてで将としては新人。

それがいきなり、どの部隊長よりも責の重い新人部隊を任せられるとは。

本当なら逃げたいところだ。だが……この新団長からは逃げられそうに無い。逃げるのが自分の専門なのに。

「分かったよ。できる限りはやってみる」

承諾を得られて、テイトの顔にも束の間の笑顔が宿る。

またユーノの時のように断られたらどうしようかと思っていたのだ。とても嬉しい。

「ありがとうございます！ では、もうすぐ正式に人事を発表するのでそのまま控えていてください」

テイトは再び団長室へと戻っていった。

独りになったレイサは腰の両側に差している短剣ではなく、腰の後ろに差していた短めの騎士剣を鞘から引き抜いてみる。

それは立派な銀製の剣。イリア騎士を束ねるゼロットから、姉貴が賜ったもの。

「姉貴……。姉貴は本当に良い部下を持ったね。あいつなら、手伝ってやろうと思うよ。姉貴みたいに命令口調じゃないしね。でも、何か

と気負つちやう性格みたいだね。助けてやらないと」

春を迎えたイリアの空には雲の隙間から眩しい太陽の光がこぼれ、  
今ここに新生天馬騎士団が産声を上げた。

そして、イリアは大きな変化の時代へと突き進んでいく。

### 第3話 凍てつく剣

イリア傭兵騎士団。民を養う為に他国に傭兵として参加し、その報酬を祖国へ惜しみなく送る。

常に死と隣り合わせ。だが、逃げればイリアの民は残らず死に絶える。

国を背負って騎士達は戦場に立つ。そんな過酷な世界へ、まだようやく成人を迎えようという少女が足を踏み入れようとしていた。

一年間の見習い修行を終えた彼女は、今度の叙任式で正式なイリア天馬騎士団の一員になる予定だ。

姉の戦う姿に憧れ、自らも同じ天馬騎士の道を志した。彼女の名前はシャニー。

短く整えられた青髪を揺らしながら、彼女はある場所へ向かっていった。

そこは景色を一望できる小高い丘。

「おかあさん、おとうさん。あたし、来週から一人前の天馬騎士として認められるんだよ。一年間、あつという間だったなあ」

シャニーは一面に様々な色の花を広げる丘に作られた両親の墓に花を手向けると、祈るように話しかける。

静かな場所にいると見習い修行の事が一つ一つ思い出されてくる。見習い騎士とは言え、英雄ロイの下で最後まで戦い、ベルン動乱を、

そして第二次人竜戦役を未然に防いだ八英雄と呼ばれるほど功績を残した一人。

多くのものに助けられながら彼女は見る見る頭角を現し、大きな功績を挙げて人脈も広がった。

「早く叙任を受けて、人々を助けてあげたいよ」

それでも、故郷に戻ればただの見習い騎士であり、一人の少女。

シャニーは両親に騎士の誓いを宣誓する。それは、騎士団で決められたものではない、自分だけの誓い。

ベルンに攻め込まれ、騎士団と言う騎士団は壊滅してしまった。人々は不安な生活を送っている。



天馬騎士団も、前団長シグーネ率いる精鋭部隊は自分が所属したエトルリア軍が壊滅させた。

同胞をこの手で仕留めることなど、出来はしなかった。

しなくてはいけないとシグーネの目が怒鳴っても、若い騎士には団長のその命令はあまりにも過酷だった。

叙任を受けてイリア騎士として自覚していた姉ティトと違い、彼女にはシグーネを攻撃することなどできなかった。

そして戦後、ティトがなんとかバラバラになっていた天馬騎士たちを集めて天馬騎士団を再建。

天馬騎士団は世界でも数少ないほぼ女性で構成される騎士団で、その大半が天馬騎士で編成されている。

自分も早く叙任騎士として世界を巡り、人々を助けたい。そう彼女は思っていた。

圧倒的に人手不足となった天馬騎士団、そして自分のベルン動乱での功績。

憧れの第一部隊——団長配下の精鋭部隊に入る事だつて夢では無い。

自分が配属されるのはどの部隊だろう。

「よおし、やる気になってきたぞー！ さっそく帰って剣の稽古だ！」  
彼女は両親の墓を後にすると、ダツシユで家のある村まで帰っていった。

何も知らない。騎士団と言う組織の大変さ、虚しさ、そして儂さを。見習いでは分からなかった国内の悲惨さを。

それを知らない穢れなき『色』を持った少女が、イリアの寒空の下で懸命に咲く花達の中を颯爽と駆けて行く。

その途中、彼女は今までの事を思い出していた。特にシグーネと師匠のこと。

シグーネから名前と呼ばれた事はなかったが、一人カルラエ城の隅で棒切れを振り回す自分を度々指導してくれていた。

あの頃、一人では寂しくなつて、姉のいるカルラエ城まで幾度となく足を運んだ。

だが、その都度関係者以外は立ち入り禁止と言われてしまい、姉に甘える事が叶わなかった。

姉の帰りを待ちながら他の騎士が鍛錬する様子を見て、見よう見真似で棒切れを槍や剣に見立てて振って練習したものだ。

いつか、自分があそこにいる騎士達と同じ立場になったときの為に。

憧れの天馬騎士に、一日も早くなりたくて。

.....

「あんだ……ユーノの末妹じゃないか。何やってんだい？ そんなところで」

その時声をかけてきた人こそシグーネだった。

いきなり怖そうな天馬騎士に話しかけられてシャニーは体を縮こまらせた。

だが、ユーノがやってくれるように頭を撫でてくれて、いつものような人懐っこい笑顔をシグーネに見せる。

「あたしね、おねえちゃんを待つてるの」

「ああそれは分かるよ。でも、棒切れを振り回したりして何やっているんだい？」

「あたしね！ おねえちゃんみたいな天馬騎士になるんだ。だから、その練習」

シグーネはそのまま黙って見ていた。他の騎士がやっているのを見てやっているだけの割には筋が良い。

やはりユーノの妹。もしかすると良い騎士になれるかも知れない。しばらくして、シグーネは城へ歩いていき、そしてすぐ戻ってきた。「あんだ、ママだらけじゃないか。ほら、籠手つけて槍は振るもんだよ」

彼女は素手で棒切れを振るい、ママやササクレで赤く染まったシャニーの手に気付いていた。

それから彼女は、ユーノが迎えに来るまで一緒に練習してくれた。

「細っこい体だねえ。そんなんじや槍に潰れちまうね」

「あううう……」

シグーネに本物の鋼製の槍を持たされたシャニーはふらついていった。

すぐに取り上げられ、今度は剣を握らされる。槍に比べれば軽いものの、やはり重い。

「ふんっ……ふんっ！」

「こら、そんな肩に力入れて振ってたら懐に入られるよ。……こいつは結構イジメ甲斐のあるタイプかもねえ」

……………

それから毎日、彼女に特訓してもらう事が日課となっていた。

ユーノにはあまり彼女に手をかけさせてはいけないと言われたが、シャニーはシグーネのことが好きだった。

城ではシグーネに、家では姉二人に槍術を習い、彼女はみるみる成長していった。

その後、彼女も見習い天馬騎士として世界へ羽ばたき、ロイ率いるエトルリア軍で修行を積んだ。

他の天馬騎士では経験できないような、転戦に転戦を重ねた激戦。

彼女は実戦の中で才能を開花させる。自分を受け入れてくれた傭兵団の仲間が良い人間ばかりであった事もそれを助けた。

シャニーはその傭兵団のリーダーに憧れた。強くてかっこよかった。

彼の名はディーク。手負いの虎と噂され、名前を聞くだけで兵が逃げ出すほどの実力を持った傭兵。

シャニーはディークを師と仰ぎ、剣を習った。実践タイプだったディークには、活発なシャニーの扱い方も良く分かっていた。

「おい、剣はそんな風に扱うんじゃないよ。槍じゃねーんだから」

「え？」

「もつと広く使うんだ。攻撃の時は切っ先で、受けるときは根元で受ける。最初は怖いかもしれないがな」

それまで槍を専門に扱ってきた彼女にはちんぷんかんぷん。

イマイチ納得できていない様子シャニーにディークは剣を抜き、彼女に向かって一気に切りかかった。避けられないように、意表を突

いて。

「うわっ?! な、何するのよ! 殺す気い!?!」

「そうだ。分かっくんじゃねーか。もう少し根元で受けるようにしろ。お前は力が無いから、先で受けるとそのまま剣を弾き飛ばされるぞ」

デイクも自分の事をかなり気遣ってくれていた。

本当に色々教わった。自分が激戦を生き残り、こうして修行を終えられたのもデイクに助けてもらったから。

剣を通じて戦いの心構え、傭兵としての心構え。それだけでは無い、自分の視野がかなり広がった気がする。

いつしか戦場でも剣を握る時間が増え、悩んだ時も剣を振って自身を整理するようになった。

そうしているとデイクが助けてくれたし、今でも何か彼の言葉を思い出す気がするから。

何度まわりから騎士と言うより剣士と笑われただろうか。もう今ではだいたい慣れた。

「お前は救いようもねえバカだが、光るものも持っている。他のヤツが持っていないぐらい眩く光るものかな。皆が願っても手に入らないものを、お前は持っているんだ。お前はそれをしっかり磨いて、皆の為に使え。俺には剣しかねえが、お前はそうじゃない。これからお前が入っていく世界は、お前にとっちゃ過酷かもしれねえ。だがな、それはお前が選んだ道だ。その中でも、自分を、光るものを失うんじゃないぞ」

それが、師匠と別れるときに貰った最後の言葉だった。

シグーネからはイリア騎士の宿命を、デイクからは傭兵としての心構えを学び、二人から優しさや人を育てることの大切さを感じ取った。

そして今、自分は叙任騎士になろうとしている。

様々な事を吸収して強くなった。騎士としてだけではなく人としても、もう一人前だ。

これからはもう誰かに甘えてはいけけない。

自分を守ってくくれる人はいない。逆に民を守る側に立ったのだから恩返ししていかなくては。

シャニーは自分に色々言い聞かせながら村に帰って行った。「いちにんまえ」と言う言葉に半場酔いしれながら。



「おかえり、シャニー」

彼女を出迎えてくれたのは、幼馴染のウツデイだった。

やや長めのモスグリーン髪の髪はすっかり整えられ、落ち着いた口調でシャニーを出迎えるとメガネをずり上げた。

「たっだいま！ ウツデイじゃ剣の稽古の相手にはできないあ。ねえ、ルシャナやセラは何処？」

「さあ。それにしても……本当に騎士になっちゃうんだね」

彼は残念そうにシャニーを見る。

やや凜々しくなったようにも見えるが彼にとってはシャニーは今でも幼馴染だった。

近くにいるのに、何か遠い人になってしまったようにも感じる。

「うん、昔からの憧れだもん！ ウツデイのほうはどうなのさ」

「僕も、来週天馬騎士団に入団するんだよ」

「ええ!? ウツデイが?!」

幼馴染の意外な言葉に、シャニーはややオーバーリアクションとも取れるような声をあげた。

「……オカマにでもなるの？」

無理も無い。天馬騎士団はほぼ女性のみで構成される世界でも珍しい騎士団だ。

稀に男の古代魔法使いや弓兵が入団する事はあるが、彼にそれらの才能があるとは思えない。

「シャニー。戦いは騎士だけでやるものじゃないって習わなかったっけ？」

「え？ えーと……。じゃあ、魔法使いにでもなったの？」

「君達騎士が深く傷ついたら、誰が治してくれるの？」

考え込むシャニーに、ウツデイは呆れたように問いかける。

あまたの戦線を潜り抜けてきたと豪語していた彼女なのに、答えが出ない。

やっぱホラだったのかと彼はシャニーを見つめた。

第一、彼にはシャニーがベルン動乱を鎮めた一人だなどと到底信じられなかった。こんなお調子者が。

「軍医でしょう？ 僕は天馬騎士団の軍医見習いになったんだよ」

シャニーは手を打って分かった事を彼に伝える。

そういえば、騎士見習いの修行に出るときも、彼は両手に一杯の本を持って見送ってくれた覚えがある。

その時も彼は騎士見習いにはならず、軍医になるべく勉強をしている身だった。

軍医になる条件で奨学金まで貰っているから、勉強をやめるわけにはいかない。

シャニーにとっては、無理矢理勉強させられているかわいそうな奴だった。

「だから、これからはバツチリ怪我してくれていいよ。僕が治してあげるからさ」

「バカ言わないでよ！ そう簡単にケガなんて出来るわけないじゃん。この白い柔肌が！」

「はいはい……」

シャニーの言葉を彼は軽くあしらうと、横で鉄製の剣を振るう彼女を眺めていた。

剣を持っている時は別人のように映る。

つい最近まで、棒切れでチャンバラゴッコしていたが、彼女が今持っているのは真剣だ。

(やはり、本当に騎士になってしまったんだ)

ウツデイは現実の前に天を仰いだ。

彼の前では天真爛漫な女の子だ。だが、彼女はイリアの天馬騎士。女傭兵として世界を飛び回ることになる。

もし他の国に生まれていれば、今頃は普通に田畑を耕し、実りある生活を送っていただろう。

それが、毎日命を危険に晒す傭兵として、これからは生きていかねばならない。

不憫だと思った。不公平だと思った。

どうして、イリアに生まれた彼女は他の国に生まれた女の子と同じように、穏やかな生活を送れないのか。

(エリミーヌ様は、どうしてイリアにだけこのような過酷な試練をお与えになるのだろうか)

嘆いてばかりはいられない。自分には武の才が無い。でも、彼女を助けたい。その一心で軍医を目指した。

そして、今見習いではあるけれども、ようやく彼女を助けることが出来るようになった。

(これからはずっと一緒さ。でも、できれば僕のところには来て欲しくない。苦痛に顔を歪ませる君の顔は見たくない……)

「あー！」

目の前で金属が弾け飛ぶ音がして、ウツデイはびっくりして現実に取り戻された。

見ると自分が座っている目の前に、先程シャニーが振っていた剣が刺さっている。

「だ、だいじょうぶだった!? ケガ無い??」

どうやらシャニーの手から剣がすっぽ抜けて飛んできたらしい。血の気が引いた。

「……生きた心地がしない。ん?」

シャニーの手に目をやってみる。彼女の左手はマメだらけだった。余程鍛錬しているのだろう。

普段は朗らかな彼女だが、一度集中すると人が変わった様に打ち込む頑張り屋でもあった。

単に周りが見えなくなるだけでも言うのだが、ウツデイはそんな彼女を応援しなかった。

そして、失いたくなかった。大切な友達、幼馴染……。

「手を診せてみなよ。沁みるけど我慢して」

「あうー！」

ウツデイは持ち合わせていた手製の傷薬で彼女の手を治療する。彼女が悲鳴を上げる顔を楽しむかのように、彼は薬のついたガーゼを破れたマメに押し付けてやる。

「シャニー。沁みるって事は、生きてる証拠だ。命を粗末にするようなことだけはしないでくれ。約束だぞ？」

「わ、分かってるよ。あたしはウツデイと違って、もう一人前なんだからね」

いきなり彼にお説教をされたシャニーは、ウツデイの優しさと知りながらふいつと顔を背けた。

元氣な証拠だ。彼は無言で笑みを浮かべる。こういう顔が見られるなら嫌われても良かった。

「あ、こんなところにいた！」

二人の許に元氣な声が聞こえ、向こうからパーマのかかった紫のボブと紺のロングの女性がやってくる。

二人は同じく幼馴染のルシャナとセラである。

彼女たちは手を振りながら笑顔で寄って来るも、ちよつと距離を開けたところで立ち止まった。

「あ、二人ともやつほー。どーしたのさ、そんなところで。こつち来なよ」

シャニーが手招きするも、彼女たちは近寄ってこなかった。

ルシャナはいかにも悪意ある笑顔を作ってシャニーに話しかける。

「あんた達の邪魔しちゃ悪いし、いいよ、いいよ。どうぞそのままごゆつくり〜」

意識とは無関係に、シャニーの口からは反論が飛び出す。

「ち、違うもん！ 別にあたしはウツデイとは何の関係も……！」

ルシャナがセラと一度顔を見合わせて、来たと言わんばかりに焦るシャニーへ言い返す。

「私、別にあんたとウツデイに何か関係あるとは一言も言つて無いけど？」

悪癖の早合点でまた赤っ恥をかいてしまった。

やつと治療を終えたウツデイに八つ当たりして憂さを晴らす。



「もう！ ウツデイがさつきと治療しないから誤解されたじゃない！」

「いてて！ ルシヤナは、僕が君を治療する邪魔をしちゃいけないって気遣ってくれたんじゃないか。だから丁寧に……」

「あたしはそこまでヤワじゃないもん！」

「……さつきは柔肌云々言ってたくせに」

「それは……。あー！ もう、みんな性格悪すぎだよ！」

シヤニーは堪らず、下を向いて膨れ面を作った。

みんなとはもう十年以上の付き合いのある仲間だ。からかうと面白い事も、三人はよく知っていた。

いつもどおり彼女で遊ぶことが出来、腹を抱えて笑ってしまう。当のシヤニーも、毎度のことなのにハメられてから気付いて地団駄踏むのだから、オモチャにされても仕方が無い。

「あはは！ あー、おもしろ」

「ふふふつ、腹がよじれるよ」

笑い転げる彼らを、シヤニーは真つ赤に顔を膨らせて睨む。

でも、シヤニーもどこか嬉しい。戦争中は自分のことで精一杯だったが、戦争が終ると途端に故郷の人々が心配になってきた。

亡くなってしまった人も当然いたが、自分の大切な親友は生き残ってくれていた。

また幼い頃と同じように皆で笑っていられると思うと、これからの不安も多少なりと払拭できた。

知らないうちに、シヤニーも笑っている。何でだろう。自然に笑顔が漏れる。

「それにしても、またあなたの笑顔を押めるとはね」

「何よ、神様でも見るみたいに」

ルシヤナの言い草にシヤニーもおかしくてついつい声をあげて笑ってしまうが、ルシヤナの目は本気だった。

「いやあ、あなたのその抜け面に昔は結構元気を貰っていたからね。戦死してたら……どうしようかと思ったよ」

抜け面と言われてまた怒ろうかと思ったが、ルシヤナのいつもと違

う様子にそれをやめた。

彼女も彼女なりに、自分を心配してくれていた。

自分だって彼女のことを心配していたし、ウツデイに至っては何も出来ないから、故郷に帰るまでの間ちゃんとか何か食べているかすら心配だった。

「あたしだってみんなの事、心配だった。みんな無事でよかったよ」

シャニーの口から、自然とそんな言葉が漏れた。

無事でよかった。今まで言われる側だったけれど、もうこれからは自分も一人前。相手を気遣う必要も出てくる。

でも今の言葉は、必要に駆られて出てきたものではなかった。こういった言葉は意識して使う言葉ではないのかもしれない。

みんな大切な仲間。彼らだけではない。イリアに住む人みんなが無事であれば、どんなに嬉しいだろうか。

でも、イリアは傭兵の国。みんなが無事という事はまずありえない。

テイトの部下の人たちや、シグーネが戦死してしまったことが何よりの証拠だ。

こうやってみんなで見られる時間が、今までより凄く貴重に思える。

皆にしてもそうだった。極寒の傭兵国家イリアにおいては、ストイックな考えがどうしても先行する。

そんな中で、いつでも笑顔を振りまいていたシャニーは仲間には春陽のようだった。

だから失いたくなかった。皆が皆、お互いが尊い。

そう言えば皆は戦争中何処に居たのだろう。ふとシャニーは気になって二人に目をやる。

「ねえ、ルシヤナやセラは何処に見習い修行に出ていたの？」

「私？ 私はエトルリアの貴族の屋敷に行ってた。アクレイアでちよつとした戦いがあったけど、騎士団はその争いには参加しなかったの。だから運が良かったかも。ルシヤナは？」

「私はリキア。私は裏方と言うか、物資輸送で戦場には出てないんだ

よね」

派遣先で大きく変わる運命。ルシヤナのように戦場に出ない者もいれば、セラのように第一線に放り出されることもある。

アクレイアでの戦い……それはどう考えても、クーデター派とベルン南方軍の連合軍相手に、ロイ率いるリキア同盟軍にシャニーが所属して戦った、王都奪還戦である。

一歩間違えば……セラと剣を交えていたかもしれない。考えたくも無い。

もしそうだった時、自分は親友と戦えるのだろうか。

自分は姉のように強く無いから、逃げ出してしまいかもしれない。そうシャニーは思った。

しかしそれは、イリア騎士の誓いの中でもタブーとされることの一つ。

例え同胞同士が主を違え、戦場で戦うことになっても、最期まで主の命に背いてはならない……。

「ねえ、二人とも。もし……、あたしと戦場で剣を交えることになったら、どうする？」

唐突なシャニーからの質問にルシヤナは困惑したようだが、セラはさらっと答えた。

戦場経験がある彼女にとっては聞きたいことだったから。

「……そのときは、あんたを殺すかもしれない。イリア騎士の誓い……。私たちは逆らうわけには行かない」

「そう……だよね」

顔も声も沈み込む。分かっているにしても、やはり避けたい。

怖いという感情ではない。それでも、すくんで動けなくなってしま

う。  
姉を相手にしたときも、シグーネを相手にしたときもそうだった。すくんだ自分を、二人ともイリア騎士として戦わせた。

その後は、同胞の天馬騎士を相手にしても、何とか戦うことが出来るようにはなった。

だが、それは同胞でも知らない人だったから。家族も同然の人たち

を殺せるだろうか……。

——出来ないでは済まされない。イリア騎士なら当然に出来なくてはならない

姉の言葉が蘇った。

「あたしは……出来ないかもしれない。皆を戦場で見かけたら、逃げ出すかもしれない。たとえ……ルールに反しても、あたしには……。だって、皆はあたしの大切な……！」

泣きそうになるシャニーをセラが支える。

分かっている、そんな事は。誰だつてしたく無いし、ましてシャニーのような甘い性格なら、その選択は過酷過ぎる。

（ああ、あんたはイリアに生まれてきちやいけないヤツだったのかも知れないね。もつと心を殺せる人間じゃないと……）

セラは自分も泣きそうになるのをぐつと堪え、ルシヤナが二人の肩に手を乗せて祈りにも似た弱い声で励ました。

「ね、もし戦場であっても、できるだけ戦わずに済む方法を探そう？ あんたの姉さんとゼロツト様も、そうやって戦闘を回避して番になつたんじやない。あたし達にだって出来るよ」

「うん……。そうだね。そろそろ暗くなつてきたし……帰ろうか」

シャニー達は肩を寄せ合いながら自宅へと帰って行く。

彼女らの背にのしかかる宿命は、あまりにも大きすぎて、重すぎて。姉に憧れて天馬騎士を志した。その道は、相手は勿論、自分の心すら殺さなければやっていけない厳しい世界。

ましてあんな性格だ。自分を持っている者ほど、自らの考えと相反するものを掟だからと割り切る事は難しい。

その考えが、現実と違えば違うほど、苦しむ。

「間違っているよな……。誰もが間違っていると思つていても、肯定しなくちや生きていけないんだ。何とか……何とかなら無いのか。僕は、またしても彼女らの力になつてあげる事は出来ないのだろうか。こんなに、こんなに大切な親友が、あんなに悩んでいるのに。変えられないのか……この曲がつた理を……！」

なごり雪が降り始めていた。その中を歩く三人の姿を、ウツデイは

ずっと見つめている。

拳には力が入り、いつの間にか壁を殴りつけていた。

戦争が終って、どの国も新たな理を引いた。イリアだけ、イリアだけ従来どおりでいいのか。

今までも一番曲がったものを理としてきたこの国が。

しかし、聖女エリミーヌは見捨てたわけではなかった。どこかの高僧が戦時中に残した言葉にこんなものがある。

—— 神が人を救わないのは、神が人を信じているからだ

今、イリアの騎士団には、国を変える力を持った若者達が集結しようとしていた。考え方や手法は違えど、目指すものは唯一つ。それは……。

## 第4話 第十八部隊

——エレブ新暦1000年 4月

翌日、四人は軍服に着替えて外で待ち合わせをすることにしていた。

シャニーは新しくデザインされた軍服を着て、叙任騎士の証でもある天馬騎士団の紋章が入ったマントをクローゼットからそつと出すと、やつとお披露目とばかりに羽織る。

最後に自分の相棒をしっかりと帯剣ベルトに差すと背筋を伸ばして鏡の前に立た。

何か気が引き締まるものを感じる。鏡に映る自分が、ちゃんとした騎士に見える。

もう、後戻りは出来ない。もう、村一番のやんちゃ娘には戻れない。これからはイリアを支える天馬騎士団の一員として、敵と、そして自分と戦っていかなくてはいけない。

ふうつと深呼吸し、ふともう一度鏡を見るとそこに母がいたような気がした。

責任感が強くて、いつもイリア騎士の誓いを幼い自分に言い聞かせてくれたらしい。

物心がつくか、つかないかの自分を残して逝ってしまった両親だが、顔はうつすらと覚えている。

ユーノにもよく言われていた。自分の目元が母親にそっくりであると。

明るく、しつかりとした自分の考えを持って生きていたそうだ。

そんな母や姉と同じ道を、自分は歩んできて、これからも歩んでいく。もう、甘えてはもらえない。そう言い聞かせた。

——イリア騎士として何があっても、命を危険に晒しても、仕事を投げ出していけない。

——自分の考え、自分なりの誓いをしっかりと持ちなさい。自分の抛り所となるものを、明確にするのよ

あのころは、うんうんと聞いているだけだったが、今になってよう

やく、母の言葉が分かる。

「あたしの誓い……それは、イリアのみんなが戦わなくても幸せに暮らせるようにしたい……いや、してみせる！ でも、そのためにあたしが戦わなくちゃいけないんだよね。なーんかムジユンしてる気もするけど。うーん、でも、おねえちゃんみたいに、自分が頑張ってみんなを助けるって言うのも悪くないかなー」

彼女にとって、ユーノこそが憧れの対象であり、目指すものだった。姉のやっている事は、どれも必ず正しい事で見習うべき事。そう信じて疑わなかった。

◆ 「お待たせー」

シャニーが待ち合わせ場所に行くと、もう三人は彼女の事を先に来て待っていた。

皆、昨日会ったときのような普段着ではなく、自分と同じ軍服。別人にでも会っている様な気がする。

「へえ……。馬子にも衣装って言うけど、本当だね」  
「なんだとおー！」

シャニーは村の学問所ですつと寝ていたし、どうせ諺を使っても分からないだろうとウツデイは思った。

彼は「それほどでも！」と返して欲しかったのだが、彼女には珍しく反論してきたので面食らう。

「うわ、シャニーも諺知ってたんだ。すごいじゃん」  
セラも便乗してからかいに入る。朝っぱらから緊張感などない。

「知ってるよ！ だって、見習い中にも傭兵団の人に言われたし！」  
(何処に行っても同じ事言われているのかよ……)

そうとは言えず、セラもウツデイも黙ってしまった。シャニーも、デイークに言われた時は褒められたのだと思った事は黙っておく。  
「あんた、どうせそれほどでも！ とか言ったんじゃないの？」

ルシヤナだけが厳しく突いてきてシャニーは視線を外すとさっさと歩き出し、彼女に連れられるように残りの三人も叙任式に参加するべくカルラエ城へと向かう道を行く。

今までは関係者以外立ち入り禁止だった城へ、関係者として堂々と入場することが出来るようになるのだ。

一度だけ見習い騎士の手続きをする為に入城した事はあったが、こうして軍服を着て、武器を腰に差しては初めてだ。

妙に緊張してきた。手洗いに行っておけばよかったと周りをきよるきよると振り向く。

「はいはい、新人さんだね。あんた達はこっちに来て、前から座つていて」

到着すると、何か騎士というより盗賊のような格好をした人がまるで客寄せでもするかのように声をあげて、自分達や他に到着した新人達を席へとつかせている。

ウツデイはシャニー達とは違う列に案内されていった。

自分達の周りに居るのはきつと天馬騎士ばかりなのだ。

それにしても……女ばかりの中に男が居ると、やはり目立つ。皆もついついそつちを見てしまっていた。

シャニー達はその正体が分かっているからその視線の先にいるのは先程の女性。

「なんだろう、あの人」

どう見ても盗賊風の格好に、天馬騎士団のマントを羽織っているだけのあの女性。

シャニーはついつい隣のルシャナに話しかける。自分達は席の一番先頭列だというのに。

「さあ、人手不足で盗賊にも手伝ってもらってるのかな」

「そんなわけ無いでしょ」

シャニーの右隣に座っていたセラも加わって話しだした途端だった。

「……お前達、静かにしてもらえないか？」

突然の声に、シャニー達は視線をその声の元の元へ向けた。

声の主は、ルシャナの横にいた同じ新人。

短く切り揃えられた、イリアには珍しい炎のような赤髪の間から、鋭い視線が真っ直ぐこちらを突き刺してきていた。



「いめんなさい」

シャニー達は謝るがその女性は返さなかった。

——分かれればいい

そんな様子が滲み出ている。

三人にとつてはバツが悪いがこの場から立ち去るわけにも行かず、妙な緊張感が包む。

叙任式がついに始まり、団長ら幹部が壇上に出てきた。

その女性を見てシャニーは思わず声をあげそうになる。

そこには、自分の知るよりも格段に凛々しく見える、姉テイトの姿があった。

噂では、ユーノが団長の座に就くのではないのかと言われていたから、シャニー以外にも驚いた新人はいたようだ。

テイトは他の叙任騎士や士官服に身を包む部隊長達ともと少々色の違う軍服を身にまとい、マントには団長の証である大きな金のブローチを止め具として用いていた。

自分の姉では無いような感じすら、彼女は漂わせている。

「二年の見習い修行できっと色々なご経験をしたと思います。しかし、それらはこれから貴女方が踏み込もうとしている世界の、ほんの序に過ぎません。これから色々辛いことがあるでしょう。しかし、イリアを支える騎士として誓いを胸に世界に向けて羽ばたいていってください。そして、命を大事にしてください。傭兵は、生きて帰るまでが任務です。生きて、イリアの発展に力を尽くしてください。私たちは、夢を共にするイリア騎士。先輩も後輩もありません。分らないことや意見があれば、どんどん発表してください。イリアもまた、他の国同様、生まれ変わらなければならぬのです。そのためには、貴女方の若い力が必要なのです」

団長の祝辞が終ると、皆からはいつせいに拍手が送られた。

シャニーもまた姉に睨まれながらも手を振りつつ、彼女へ拍手をした時だった。

ふと横を向くと、先程の赤髪の騎士は拍手をするどころか、舌打ちをしていた。

「……。イリアも生まれ変わらなければならぬ……。当たり前だ。こんな腐った国、必ず……！」

ぎよつとした。赤髪の女性の視線は真っ直ぐ団長や部隊長などの幹部に向けられ凄まじい形相で睨みつけていたのだ。

(……)の子、近寄らない方がいいタイプかもしれない)

そう考えながら相手の目を見ていたら気付かれたようだ。

鋭い視線が今度は自分に注がれて、全身の毛が逆立つようにシャニーは焦って視線を逸らした。

もう一度そちらを見ると、彼女は自分のほうを見て笑みを浮かべている。

やはり、何考えてるか分からない。シャニーの勘がピンピンと警告を発していた。

先輩達のありがたい言葉やら何やらが続いて、シャニーはついつい居眠りをしそうになる。

こういう風にじっとしているのは苦手だ。何度ルシャナに足を踏まれて起こされただろう。

そのたびに壇上からテイトが睨んでいるのが分かった。

式も後半に差し掛かり、新人達がイリア騎士の誓いを皆で宣誓するところまで来た。

テイトが壇上へ上がり、新人の代表者——新人でも一番見習い時に功績を挙げた者もその壇へ上がるはずだ。

シャニーは自分の名前が呼ばれる瞬間をワクワクしながら待っていた。

何と言っても自分はベルン動乱でずっとロイの傍で戦い、それを鎮めた英雄の一人と戦時報にも載ったのだから。

姉の前で騎士宣誓は少し恥ずかしいが、姉に自分が一人前になったことを見せ付けることが出来る。

昨日すっかり練習もしたし、準備は万端だ。

「新人代表……アルマさん」

シャニーも、幼馴染たちも顔が引きつった。引きつったと言うより、頭が真っ白になった。

自分より功績を挙げたヤツがいる……？ 自分より、上がいる？  
あれだけ、あれだけ死ぬ気で戦ったのに、姉はまだ自分を認めてく  
れていないことになる。

名前を呼ばれて立ち上がったのは、自分の横にいたあの赤髪の子  
だった。

彼女は名前を呼ばれるときつと団長を見据え、そのまま静かに、し  
かし力強く壇上へと登っていく。

「あいつ、ベルンに修行に行つて、動乱でエトルリア軍と直接戦つて唯  
一生き残つて帰ってきたヤツらしいよ……」

後ろから声が聞こえる。自分達と戦つて、生き残つて帰ってくる。  
見習いの身で、正規軍を相手に遜色ない戦い方をする。

（でも、でもあたしだって、相手はベルン正規軍だった。なのに、なん  
でおねえちゃん……）

シャニーの頭の中は、それがぐるぐる回っていた。

皆が壇上の代表の後に続き、騎士宣誓を行う。傭兵として決して雇  
い主を裏切らず、最期まで使命を全うする事。

例え戦場で同胞を見つけても、敵であるなら容赦しない事。イリア  
の民を大事にする事……。

シャニーは二つ目の誓いは黙っておいた。守ることも出来ない誓  
いなど出来ない。

ルシャナは、そんな親友の様子を見て、その気持ちが痛いほど伝  
わってくるのを感じた。

（昔から思ってたけど、コイツは自分の考えを曲げないなあ……。芯  
が強いというか、ガンコというか……）

先頭の列だから目の前には団長ら幹部がいて、宣誓してなければバ  
レそうだ。

それでも、彼女は口にしない。自分だってそうしたいところだが、  
ルシャナは敢えて宣誓を行つた。

（だからこそ……戦いを避ける方法を探さなくちゃいけないんだ。  
シャニー、考えよう、その方法を。仲間同士で殺しあわなくちゃいけ  
ないようなことがなくなるような方法を）

騎士宣誓も最後の段階を迎えていた。——イリア騎士として、自分のためではなく、国のために戦うこと

そのとき、誰もが予想だにしないことが起きた。

この場所に聞こえるはずのない高い音が突然響く。

壇上に居たアルマが、宣誓の書いてある紙の一部を破り捨てていた。騒然となる講堂。

もちろんテイトも目の前で起きたハプニングに、動揺を隠せない。

「お騒がせして申し訳ありません。しかし、守る事が出来ない誓いを宣誓するほど、私も卑屈ではありませんので」

余計に講堂は慌ただしくなる。新人がイリア騎士の誓いを拒否するのは前代未聞だ。

慌ててイドウヴァがアルマのところへ駆け寄る。

「君、なんてことを言うの？ 新人ならほら、早く宣誓しなさい！」

何という鋭い眼光なのだろうか。

自分よりはるかに若いアルマに睨みつけられたイドウヴァは、威圧感に押されて一歩退いた。

アルマは彼女の方から視線を外すと、テイトに一礼する。

「代わりに、私個人の騎士宣誓をします。この腐った国を、他国に負けない強国にすることに、私の持てる力すべてを、命ある限り注ぎます。以上です」

彼女は再度、団長に一礼すると静まり返る講堂の中を静かに歩いて自分の席まで戻っていく。

彼女が席につき終わるまでテイトはずっと彼女を見ていた。

「団長、お騒がせして申し訳ありません」

「謝らないでください、イドウヴァさん。求めているものは……きつと同じです」

それだけ言うとテイトも席につき、何事もなかったかのように式が続けられた。

シャニーは隣に座るアルマに圧倒されて体が押し飛ばされそうな気分。

堂々と人前で、あれだけ型破りな行動に出ることが出来るなんて。

(あたしは……宣誓代表にならなくて良かったのかもしれない)

もし自分なら、あそこでアルマのように誓いたくない誓いを誓わないと言ってしまうだろうか。誓えば一生縛られることになる。シャニーはこの時、初めて同世代の同性で凄いと思える相手を見つけた。

しかし、周りはそうは見えていなかった。規律に従えない愚か者。当然の反応だ。

特に先輩騎士達は、生意気なあの赤髪に敵意すら感じ取っていた。自分達の世界を壊そうとしている人間が入ってきた……と。



半日くらい経ったのではないかと思うほどの式が終わり、いよいよ団長から配属先が発表されはじめる。

普段なら掲示で済まされるのだが、今年は戦後の次の年度という事もある、新人数は見習い修行に出ていない者を含めても例年に比べて極端に少ない。

ならば、団長直々に指名していきたい。皆戦争を生き残った者なのだから。そうテイトは幹部達を説得していた。

新人達の顔を、一人ひとり覚えておきたい。シグーネのように。

皆が次々に配属先を言い渡されていく。

それなりに見習い時代に功績のあった者は、即戦力として上位部隊に配属されていった。

ついに呼ばれたシャニーの名前。とうとう自分の番。

(さあ来たよ！…どの部隊に所属して、どこで活躍しちゃうのかな！) シャニーが胸を躍らせていると、アルマがテイトから配属先を書いた紙を受け取って帰ってきた。

彼女の手は震えていた。紙が握り潰れるほどに。

そんな彼女に疑問を抱きながら、団長である姉の許に歩いて行く。姉に向かってニコニコしていたが、相手はいつものようには接してこない。

「頑張ってね、シャニーさん」

シャニーさん……姉にさん付けで呼ばれてしまった。ここでは、自分と姉は部下と上司の関係。

——特別扱いはしない

姉の顔がそう自分に語りかけている。

姉が何か遠い人になってしまったように感じて妙な違和感が体をぞくぞくさせるが、自分も一人前の叙勲騎士。

ここは姉を安心させる為にも、凜とした態度で臨まなければならぬと気を引き締めた。

「はい、ありがとうございます。団長」

笑顔でテイトから紙を受け取り、テイトもそれに笑顔で返した。

必死に隠そうとしているが、シャニーへと他の人へとは、笑いかけ方が違う。

妹が、騎士としてしつかり成長している。それが嬉しかった。

シャニーは席へ戻ると、逸る気持ちを抑えられず早速紙の中身を空けてみる。

(第一部隊かな？ さすがにいきなりそれは無いよね。ワクワク……ん?!)

——貴下へ、第十八部隊所属を命ずる

全身の血がすうつと頭から抜けていくかのようだった。

姉は、渡す紙を間違えたのではないのかとすら思った。

第十八部隊……それは、今年から新設された部隊。

人手不足で見習いを免除された実戦未経験者や、修行をしたというだけであまり実績の無い者が所属する、いわゆる『新人部隊』。

信じられなかった。ベルン動乱であれだけの功績を残した自分が、世界を救った一人である自分が。

まさか、他の槍をまともに扱ったことも無いような人たちと同レベルだと姉に思われていたなんて。

もしや、さつき宣誓しなかった事を姉に見抜かれてしまったのだろうか。

テイトは固い人だから、そういうところにルーズな人間にはかなり厳しい。

それでも、あんまりな仕打ちだと思った。

◆ 式が終わってすぐに、シャニーは姉のところへ突撃して行った。

「ねえ！ おねえちゃん！」

振り向いてくれない。忙しそうでもないのに、彼女は聞こえていないかのように背を向けて歩いていく。

「おねえちゃんってば！」

しつこく騒ぐがティトは見向きもせず、式の片づけをしていた。

我慢ならなくなったシャニーは姉の腰を引っ張り、無理矢理こちらを向かせる。

「どうしたの？ シャニーさん」

「なんで、なんであたしが新人部隊なのよ！ おねえちゃん、あたしの実力を見くびりすぎてない?！」

ティトにとっては、来たなど言ったところだ。妹が黙って十八部隊の管理区へ向かうわけがない。

予想通りの質問が飛んできて、やはりその目は怒りに満ちている。

「じゃあ、逆に聞くけど、貴女は自分を買いかぶりすぎてない?！」

「え……?！」

自分を突き放すような姉の言葉。その眼差しはとても冷たい。

「確かに、貴女はベルン動乱で大きな功績を挙げた。エトルリアでもロイ様を助けた仲間として、史実に名を刻んだよね。でも、今の貴女はそれだけ。剣や槍を扱うことに長けているだけ。本当にそれだけだわ」

姉から予想だにしない強硬な態度を取られ、シャニーは縮こまってしまった。

精鋭部隊でやっていけるほどの剣の腕は、姉も認めているのだ。

実力を認めていて何故……。シャニーの頭にはそれしかなかった。

「今でも、貴女は私の事をなんて呼んだの?！」

「え? あ……おねえちゃんって呼んだ」

言われてようやくやくに気付く。ここは騎士団。そして、姉と自分は完

全な上下関係にある。

相手は団長。仕事中は姉ではないのだ。

「でしょ？ 基本すら分かっていない貴女を、今実戦に出したらどうなる？」

「……」

「貴女が今他国に行って売ることが出来るのは、イリアの恥だけよ」

「な……っ！」

つつい反論しようとした。だが、ぐつと奥歯を噛みこんでよく考えてみた。

今の自分の言動を考えて見ると……姉の言う事は否定できない。悔しかった。

「分かったら、基礎を学んでいらつしやい。よろしい？ シヤニーさん」

「はい……。了解しました……」

シヤニーは胸に痞える悔しさをぐつと押し込めてその場を後にした。

その様子を姉として見送るティト。そこに突然現われる、一筋の黒い風。

「団長、いいのかい？ 実の妹にそんな酷い事言つて」

「レイサさん。良いんです。あの子はあのぐらい言わないと、分からない子ですから」

レイサは笑ってしまった。彼女は自分にそっくりだとも思う。

自分も、姉に完膚なきまでに言い負かされて、ようやく動いていた。悔しさに身を震わせた覚えがある。

「誓いを言わなかったこと、怒っているのかい？ あの赤髪の子も新人部隊に配属したんだろ？」

ティトにはすべて見えていた。シヤニーが誓いの一部を宣誓しなかったことも、アルマが配属先を見て体を震わせていたことも。新人達の顔を少しでも多く覚えたくていろいろ見ていたのだから。

「いいえ、シヤニーが宣誓をしないことぐらいは分かっています。あの子は、ああ見えて自分の考えを持っていてなかなか曲げようとし



ないので。でも、あの子達を新人部隊に配属したのは、もっと違う理由です」

「へえ、何さ？」

「私は以前言いましたよね？ イリアは変わらなければならぬ。なら、一番報酬を稼げそうな二人をわざわざ新人部隊に配属した理由。レイサさんなら、きつと分かってくれていると思いますよが」

テイトの言葉に、自分の任務の重さを再確認したレイサは、硬い空気を嫌って笑ってみせる。

この団長がこう言って、この仕事を任せてくれたのだ。きつといい結果を出してみせようと誓う。

「へ。分かっているよ。じっくり育ててやるさ。だから、あんたももう少し肩の荷を降ろしなよ？」

レイサは短剣を回転させて遊びながら、ふらふらと廊下を出て行った。その背に、期待の視線を浴びながら。

その視線を送る主は視界を移し、中庭を歩いていく妹を窓から見送った。

(シャニー……やはり貴女は成長しているわ。昔の貴女なら、きつとあの後も悔しさに身を任せて反論してきたでしょうね。シグーネさんの言っていた、イジメ甲斐のあるタイプって言う意味、ようやく分かったわ。頑張るのよ)

傭兵としてだけで、新人を終らせてはいけない。その気持ちだが、シャニーを新人部隊配属へと動かしていた。もっと色々知って、様々なことを考えて欲しい……と。



思わぬ洗礼を受けた。中庭を歩き、新人部隊の集合場所に向かうその青の瞳には闘志が漲っていた。

絶対に、姉がケチの付けようも無いくらいに成長して、彼女の一番隊に入ってやると。

(何さ何さ。礼儀ぐらい、ちよつとやれば身につくはずだもん)

彼女はそう考えていた。足りないものはいくらでもあるというの

に。

それを持ち前の吸収力を生かして身につけて欲しいと姉が願っていることに気付かずに。

今の彼女には、地面に転がっているものは全て石に見えて蹴飛ばしていた。

集合場所には思ったとおり、まだ槍を持つことすら不慣れなものが一杯集まって不安げな顔をしている。

自分も一、二年前はこうだったと思うと、シャニーは何か照れくさい。

その集団から少し外れたところに、目立つ赤……アルマが居た。

当たり障りの無いように接しておこうと思っただけだが、やはり興味を惹かれる。自然と足が話しかけに向かう。

「ねえ、あなたってアルマさんって言うの？」

「……そうだが？ 何か用か？」

やはりぶっきらぼうな返事しか返ってこない。

しかし、シャニーには相手の気持ちが分かっていた。アルマも不満を隠せないで居るに違いない。

「あたし達が新人部隊とか、信じられないよね！」

「ああ。……お前はどうか知らないが、私がこんな素人と一緒に部隊だなんて。あの団長は舐めすぎだ」

予想は的中した。やはり配属先のことでも不満だったようだ。

アルマの見習いの時の事を聞いた後、自分も同じことを話した。

最初こそあまり興味は無いと言った感じだったが、人懐っこい性格のシャニーに対し、少しは心を許してくれたようで目元が最初よりは緩んでいる。

剣や槍も然ることながら、この誰とでもすぐ仲良くなれる性格は、本人には自覚は無くとも大きな武器だった。

「そうだったのか。お前となら稽古のレベルも合わせられそうだな」

「今度一緒に稽古しようよ。あたしだって負けないから！」

にこつと白い歯を見せて笑うと、あの鋭い眼差しが少しだけ緩んだ気がした。

その後も互いの好物だの他愛もない話をしていると向こうから人が歩いてきた。叙任式で自分達を先導してくれた人だ。

「お、集まってるね〜」

その女性はニヤニヤしながら、まだ初々しい顔をしている隊員たちを眺める。

「どいつもこいつも……可愛い顔している。」

「こんなのが戦場で互いを殺しあうのかと思うとやはり虚しい。」

「私はレイサって言うんだ。今日からあんた達と行動を共にすることになったからよろしく」

いきなりさらっと挨拶をするレイサ。皆は意表を突かれた感じで、焦って会釈する。

だが、彼女たちはまた城の方を向いて隊列を整えている。

まるで挨拶する前に巻き戻ったかのようだ。

「どうしたのさ、あんた達。挨拶終ったし、とりあえず解散していいよ？」

皆は顔を見合わせる。ここに集まるようにと言われたのは、自分達の上司となる部隊長が来るからだだった。

しかし、その部隊長はまだ現われていない。目の前に居るのは盗賊風の人だけ。

皆はそのまま隊列を崩さないようにして待機していた。

「ねえ……？ どーしたの、あんた達」

「あたし達は部隊長がお見えになるのを待ってるんですけど」

緊張する新人達。シャニーは見習い時代にこういう雰囲気は慣れたし、周りが不安がつているのが分かっていたからハキッと発言したのだが、途端レイサがあからさまに肩をがくつと落として見せた。

「え?! いや、私がこの部隊の部隊長だから」

皆は思わず声をあげてしまう。

どんな風貌の天馬騎士が目の前に現われるかと思ってみれば。

これを聞いたアルマは舌打ちを残して去っていった。どこまで舐めれば気がすむのか、あの団長は。背から伝わってくるそんな思いをシャニーは感じていた。

彼女もタイトが基礎から学んで来いと言うから、どんな厳格で立派な天馬騎士が部隊長なのかと思っていたのに、目の前に現われた女性はどう見ても騎士ではない。

彼女もまた、へそを曲げてしまった。やはり、姉は自分の実力を見くびっている。

「まあ仲良くやろうよ？　ということで、解散、解散」

「えっ、え？　待つて欲しいッス！　稽古は？」

新人の一人がレイサに声をかけるが、もう彼女は木の上だった。

「稽古？」

「ほら、ウチら、まだ何も知らなくて。槍の扱い方とか、天馬の乗り方とか」

若草色の髪をヘアバンドであげた少女が桃色の瞳に困惑をありあり浮かべながら木にかじりつくようにして部隊長を見上げている。

どうやら彼女は見習い修行にも行っていない特例の一人のようだ。

「あ、私ね、カツパライと逃げるのが専門なの。槍の扱い方なんかこれっぽっちも知らないし、天馬なんか触った事すらないよ。だから私に聞いても無駄」

戸惑う新人達。部隊長から色々教えてもらえると期待していたのに。

部隊長も教えられる側だったのでは、自分達はどうしたらいいのだろうか。

それを尋ねると、彼女は木の上からアゴで向こうのほうを向くように指示した。

そこには精鋭部隊が訓練する様子が見える。自由自在に天馬を操り、槍が自分の体の一部かと思うようにきれいな動きをする。

「あれ見ればいいんじゃない？　精鋭部隊ならきつと参考になるよ。いいかい？　誰かにやってもらおうとか、そんな甘えた考えは捨てなよ。強くなりたきや自分でなんとかしな」

それだけ言うと、彼女は頭に被っていたバンダナを目の上に被せて木の上で寝転がってしまった。

全然頼りにならない……。しかたなく、新人達は精鋭部隊の訓練風

景を眺めだす。

見ているだけでは体が鈍るのでアルマと一緒に稽古をしようとしてシャニーが歩き出した、そのときだった。

「ちよつと、そこの青くて短い髪の子!」

木の上から突然呼び止められる。何かと思つて後ろを振り向こうとしたそのときだった。

!!

迫る強烈な殺気。意識より先に騎士としての血が剣を引き抜き、牙をむいた短剣を喰い止め火花が散る。

鋭い金属音に、他の新人たちが焦つてそちらを見て思わず悲鳴が漏れた。

部隊長が、新人の一人の背に二つの短剣を食い込ませようとしており、青髪の子はなんとか剣で受け止めていた。

「へえ……私の瞬殺剣を回避するとは。やっぱあんた、実力はホンモノのようだね」

「いきなり何をするんですか?!」

「あんた、シャニーってんだろ? 新人部隊なんかに入れられて不満のようだけど、仲良くやろうね? あんただって、仲間と殺し合いなんかしたくないんだろ? 誓いを宣誓しないほどに」

「何故、それを……」

この人は何処で自分の事を見ていたのだろうか。

確か壇上には彼女の姿はなかった。なのに、何故? おまけに、自分の動きを知つて攻撃を仕掛けてきたと言うのか。自分が不満に思っていることまで。

「なら、この部隊でしか得られないものを得るんだね。仲間同士が殺しあうイリアなんて……変えたいんだろ? 私だつて変えたいし、仲良くやろう、ね?」

レイサは短剣をしまうとシャニーの肩をポンと叩いて再び木の上へ飛び乗った。

何か、心を見透かされているような、そんな気分が陥る。

盗賊が新人部隊の隊長だなどと聞いたときは、腹が立って仕方な

かったが、侮れない。

きつと、自分を助けてくれる存在に違いないとシャニーはそう直感する。

怒りや落胆はいつの間にかその感情の後ろに退いてしまっていた。

(それにしても……なんか悲しそうだったなあ)

木の上で寝転がり、バンダナの下に隠れてしまった瞳を思い出す。

「大丈夫だった?!」

「うん、全然へーきだよ」

ルシャナや他の新人がシャニーの周りに集まってくる。

心配する同僚にシャニーは剣を鞘に納めると朗らかに返した。

不安でいっぱいの中で起きた事件は新人たちの心をますます震わせていたが、目の前で笑顔を見せられると何故かほつとする。

「ねえ、武器の扱いには慣れてるの?」

「まあね〜」

皆が口々にシャニーに話しかける。彼女も喋る事は大好きな人間だったので、そのまま会話を楽しむ。

いつの間にかレイサが昼寝をする樹の下には新人たちが集まっていた。

「ウチ、ミリアって言うんだ。よろしく!」

「あたしはシャニー。こちらこそよろしくね」

先ほどレイサに稽古を懇願していた若草色の髪の子が元気よく声をかけてきた。

早口でお調子者っぽい釣り目の彼女はどこか自分に似ていて、シャニーはいつの間にか握手していた。

桃色の瞳はどこにイタズラできる場所がないか探しているかのような活発さが伝わってくる。

「その剣、どこで習ったの? もっと見せて!」

「いいよ。その構え、剣持ったことないでしょ。あっちで一緒にやろう」

「シャニー、その前に天馬の乗り方からだよ」

ミリアを連れて行くシャニーの後ろからルシャナが走っていく。

いつの間にか、重い雰囲気は柔らかくなっていく。

レイサは木の上から感じていた。彼女が団長の言うとおりに、人の気持を明るくすることが出来る人間であることを。

他には無い、大切なものを持っている。だが今は原石。磨かなければただの石。

その手解きぐらいしか出来ないが、これでいいのだ。テイトもこのやり方で不服は無いだろう。

知ってもらわなければならぬ事は山とある。

彼女は知らなさ過ぎる。騎士としての心構えも、傭兵の厳しさも、姉の想いも。

(それが分からなきや、あんたはただの傭兵で終わるよ。そうさせないために、私がいるんだけどね)

レイサはシャニーの周りで天馬と格闘する新人達を眺めていた。

## 第2章 春陽のセクステット

### 第1話 青空と闇夜（1）

翌日から、レイサからは本当に基本的な事柄しか教えられなかった。

天馬騎士として重要視されるであろう、槍術や騎乗術などは一切教えてくれない。シャニーやアルマにとっては、あくびが出るほどに暇な時間。

いつからかアルマはレイサの指示を無視して、ひとり黙々と稽古するようになっていた。

シャニーもそうだったのだが、横で他の隊員が必死な目で稽古しているのを見ると、どうしてもそれを実行に移せなかった。

とてつもなく時間が長く感じる。

ようやく部隊長の指示から解放されたと思えば、後は精鋭部隊の訓練風景でも見て独学しろとのこと。……無責任だ。誰もがそう思った。

シャニーは配布された修練用の剣を取り出すと、一人で黙々と振った。

誰かとペアで稽古したほうが確実に良いのだが、槍を持つことすら初めての隊員たちと稽古をしても彼女達に迷惑をかけるだけだろう。

姉は……こんな部隊で何を学べというのだろうか。

「へえ、昨日の受け方でそうかなとは思ってたけど、あんた剣使いなんだ。騎士のクセに珍しいね」

後ろからの不意の声に振り向くとレイサがニヤニヤしながらこちらを見ていた。

（またか……）

どこに行つても、剣を主戦武器として扱う姿を見た者は同じような反応だった。

天馬騎士なら槍を使えと指示された事だつてある。

何か師匠までをもバカにされた気がしてその都度反論してきたが、



今はそれよりも気配を感じさせることもなく、自分の背後に回りこんできた事への驚きのほうが勝った。

昨日のあの剣術といい侮れない。

「あたしに何か用ですか？ 部隊長」

「んー。剣なら私でも少しは扱えるから見てただけ。あんた、それ我流？ 結構いい太刀筋してるからさ。つつい見とれちやつてたのさ」

褒められてついつい口元が緩み、自分の剣はちゃんと師匠がいて学んだものだということの説明した。

（ディークさん、今何処で何をしているのだろう。やっぱり戦場で剣を振るっているのかな）

同じ傭兵なのに、自分はこんな戦場にも出してもらえない部隊で一人稽古している。

何か師匠に申し訳が立たなかった。

「へえ、ディークか。私は知らない名前だ。あんたの剣は、人を護れるいい剣だ。あんたの師匠も、きつと護りたいものがあつたんだろうね。強だけじゃないよ、その剣は」

レイサから放たれた言葉にシャニーは戸惑った。

（人を護れる剣？ 護りたいもの？）

確かにディークは強かったし、何度も助けてもらった。

（強い剣に人を護れるも護れないもあるの？ 強ければ人を守れるじゃん？）

「でも、あんたが使っても、その剣術はモノにならないんじゃないの？」

その疑問を軽く吹き飛ばして余りある、いきなり実力を否定する声。

相手が部隊長とは言っても、今まで不満が溜まっていたせいかな怒りが爆発する。

何も教えてくれないくせに、批判だけは一人前にする部隊長など。

「いくら部隊長でも、そこまで言われる謂れはありません！」

「……あんた、人を殺せる剣技、知りたい？」

彼女の怒りを軽く別の方向へ流し、レイサは彼女に話を振った。  
どんな反応が返ってくるかと思っていたら意外なことを言うので  
シャニーの目が揺れる。

——面白いじゃないか

目がそう伝えてくる。何も教えてくれない部隊長が、剣を教えると言ったのだ。

怒りは驚きの中に飲まれ、興味本位で彼女について行く。



「いいかい？ 今教えたのが、私たちアサシンの使う剣技、瞬殺術さ」  
教えられた剣技に寒気を感じる。この剣は、自分の知っている剣とは全く違う。何が違うのかはよく分からないが。シャニーが戸惑っている様子をレイサはしばらく見下ろしていた。

「どうした？ 強い剣を教えてやったんだよ？ ちったあお礼ぐらい言ったらどうなのよ？」

「うん……。でも、あたしの剣とは大分違うものだし……」

「違わないよ、全然。ま、同じ剣でも、あんたじゃなくて師匠が使つてれば、違うのだろうけどね」

意味がサッパリつかめない。シャニーにはレイサが何を考えているかよく分からなかった。

大抵の人は、大体考えている事が表情から予測できるし、話を聞いていれば何を求めているかも分かる。

だが、この人は飄々としていて、本当につかみどころが無い。手強い……シャニーはそう感じていた。

「あんたの剣は、傭兵として人を殺せる剣だ。強いよ。でも、ただそれだけじゃん」

「……部隊長、何を言いたいんですか？」

「剣を振るのに、もう少し思慮を伴って言ってるの」

（自分が思慮の欠けた剣を振っている？ そんなはずない）

反射的に心の中でレイサの言葉を否定する。

デイクからその事を徹底的に叩き込まれた。相手の隙を、急所

を、周りの状況を良く考えて戦えと。

シャニーの表情に曇りが生じ、自分の言ったことが理解されていない事を察したレイサは問いかけを続ける。

「分からない？ あんたは、何の為に剣を振っているの？」

「何の為って……」

「それを考えて無いんなら、思慮が伴っているとは言わないよ。思慮の伴わない剣なんて、私らの使う暗殺術と変わんないね。人を殺せる。ただ、それだけさ。師匠が悲しむよ？」

そこまで言われてやっと分かった。今の自分と変わらないもの。だけど、使っている剣技がそれは違うと教えてくれるもの。

もう一度考えてみる。何の為に剣を振るい、何の為に血を流すのか。

「そりや、国の為です」

「国のため？ そのために、あんたは何をするのさ。傭兵として人殺しをする？ それだけ？ あんたは騎士なのか傭兵なのかどっちだ？」

この人に最後まで言わせたなら何か悔しい。馬鹿にするこの人をなんとかぎやふんと言わせてやりたい。

シャニーは質問せずによく考えてみる。

自分が教わったものは、人を護ることができる剣。

でも、自分達の仕事は傭兵に出て報酬を貰う事。剣術も、その手段に過ぎない。……はずだった。

「部隊長、分かったよ。手段と目的を取り間違えていたみたい」

レイサはふうつと笑って、シャニーの頭を撫でてやった。

「私たちアサシンは命令を受けてターゲットを殺す。それだけだ。でも、あんた達は違う。傭兵に出て、報酬を貰って……更にその先がある。あんた達の使命は、戦うことじゃない」

傭兵に出るのは、それしか民を養う術が無いからだ。戦う事はその手段でしかない。

戦って、報酬を得て、民を養い、守る。戦いさえ上手くこなせば一流ではない。

デイークの『護りたかった』ものは結局彼女にはよく分からないままだが、自分の『護らなければならぬもの』は……イリアの民であると。それをはつきりと頭に焼き付けて深くうなずいた。

——己の剣は全て民のためにあれ

ぱつと答えられなくて悔しかった。これが、思慮が無かったということなのか。

「うん、ありがとう。あたし、よく分かった」

「ま、そんな簡単に答えを出さなくていいんじゃないの？　じっくり考えたらいいよ。考えて考えて、悩んでもがいて、それで身の振り方を決めれば。考える時間は一杯あるんだから、この部隊にいる間はさ」

意外とあっさり分かったと言ってくれたようだが、頭で考えることと実際に動くことが出来るかは別の話。

行動を伴わなければ想像力など何も意味はないのだから。

警告したのに「大丈夫！」と元気よく返ってくる言葉がそれを物語る。

何か途方もない話をされた気がするが、シャニーはここに長居をするつもりなど全くなかった。

「でもさ、あたしは部隊長にも、誰かを守るためにその剣術を使って欲しいな」

「なあに一人前なこと言ってるのさ。私はカッパライと逃げることに専門の嫌われ者さ」

「でも、なんかあの剣技使ってるとき、部隊長悲しそうだよ？　ホントは使いたくないんじゃないの？」

先が思いやられると額に手を当てていると、不意を突かれるような言葉をかけられた。

レイサにとつて、表情を隠さないシャニーほど考えてることを読みやすい相手もない。

だがまさかその子に自分の心を読まれるなんて。

(この子は……気のせいかな。でも……)

レイサは何か胸を刺された様な感触に陥った。

「あたしは部隊長のこと、嫌いじゃないよ。色々教えようとしてくれるって分かったから。誤解してごめんさい」

とどめを刺すかのように人懐っこい笑顔を見せてきた。さっきまでお節介される筋合いは無いとか言っていたのに。

でも、レイサには何かグサツとくるものがあつた。

心へ何のためらいもなく入り込んできて、自分の失ったものを再び呼び覚まそうとノックしてくる。

盗賊として人を悲しませ、アサシンとして闇のうちに人を葬って家族を泣かせる。

そんな自分を、嫌いじゃないと言ってくれる人物が、亡くなった姉以外に居る。

自分でも驚くくらい、何か涙が溢れてきた。

「……ありがとう……」

「ええ?! うわ、ちよつと、泣かないでよー!」

自分を愛し、育ててくれた姉は既にこの世に居ない。

自分を愛してくれる者は誰も居なくなった。そう感じていた矢先。

自分を愛してくれる人が居る事が、どんなに幸せな事なのか、失つ

てみて初めて気付いた。

「あんた、青空みたいな子だね」

「? それほどでも」

また唐突に訳の分からない事を言われてきよとんとするシャニーは、とりあえずお決まりの台詞だけは言っておく。

(いいんだよ、分からなくても)

雨上がりの混沌とした白の如く、失つて、空っぽになって、色を無くしてしまった者へ、新たな色を再びつけることが出来る者。

だからこそ、余計に思慮を伴わない剣を振るって欲しくなかった。

染め方を間違えれば大変なことになる。染める者が間違っている、染められた側が正しい道を歩む事は無い。

傭兵と言うだけなら、それでもいい。

だが、託されたのだ。新人を傭兵としてだけで終わらすな、と。

だから、シャニーが正しく染められるように、自分は助けてやらない

ければならない。

それが、自分なりのイリア民を『護る』ということだ。レイサは決意する。

「よし、じゃあみんなのところに戻ろうか」

「うん、了解、部隊長」

「部隊長とかさ、ガラじゃないから、名前で呼んでいいよ」

「え、でも他の部隊ではみんなそう呼んでるし」

シャニーには、この会話がどこかで聞き覚えのあるような気がして仕方がなかった。

「いいのいいの。レイサさんでいいよ。それよりさ、あんたはみんなに天馬の乗り方教えてきて」

「はい」

今まで見せてくれなかった天真爛漫な顔で、青髪を揺らしながら駆けていく。

やっぱり若いって良い。レイサはそう感じていた。自分も昔はあいう風であったものだ。

シャニーが他の隊員のところに到着すると、化学反応でも起きたかのように空気が変わっていく様子がこちらから見ても分かった。

「きつと良い色に染めてあげてよ。私には何も教えてあげられないけどさ。さて……、次はあの子だな」



レイサは向きを変えて部隊とは反対の方向へ歩き出した。

城壁に沿って曲がった先の誰もいないはずの場所には、部隊とは離れ独り黙々と手槍の稽古をするアルマの姿があった。

「みんなと別行動するっていうのは、感心しないね」

レイサが声をあげる前に、アルマは彼女の存在に気付いていたようだった。

だが、それでも振り向くこともなく、ひたすら手槍の稽古をしている。

本当に無口な人間。話しかけても返事どころか応答もしない。

「私は部隊長として聞いているんだよ？ 部下なら答えなよ」

そこまで言われてようやく手槍を握る手が緩んだかと思うと、アルマは鋭く睥睨してきただけ。

「あんな子供遊びに付き合っても、時間の無駄だからです」

彼女は休めていた手を再び動かし、手槍を放る。

その槍は放物線を描いて、向こうの的の枠内でも中心付近へ見事に突き刺さっていた。

——レベルが違うんだよ

そう、彼女の背は主張していた。

「でもね、そんな事していると仲間から浮くよ？」

レイサの言葉に、アルマは再び手を止めて、今度は体も彼女の方を向けた。

「浮いたら、何か問題でも？」

呆れたようにレイサは大きく息を吐き出した。

(これまた変わった子が入って来たもんだ)

こういう人間はたまにいるが、自信満々のまま戦場に出て行ってたいてい早死にする。

レイサの対応をする時間も惜しいと言わんばかりに、手槍を投げて背を向けたままアルマは喋っている。

「同胞とは言え私たちは傭兵。仲間同士で殺し合いをしなくてはいけない時だってある。そのときに、下手な仲間意識なんて邪魔にしかありませんよ。そんな下らない感情に付き合っていられるほど暇じゃないし、興味もありません」

「新人のクセによく言うじゃないの」

「これは、大変なご無礼をお許してください」

感心するような、呆れるようなレイサにアルマは一礼する。

一筋縄では行きそうに無い。こいつの心は読めない。シャニーとは全くの正反対だ。

自分というものを絶対に見せてはこない。心の表面が漆黒に塗られているかのようだ。

「じゃああなたは……共同生活を強いられる天馬騎士団に、何故入っ

たの？」

「もちろん、天馬騎士団のトップに立つ為です。イリアを変える為にね」

冗談で入団当初に団長になりたいと宣言する者は居ても、団長になるために天馬騎士団に入団したなどと言った新人は初めてだった。

精鋭部隊の人間をも凌駕するほどの実力に、この性格。間違いなく、権力の階段を彼女は上っていくだろう。

力のある者が、人の上に立つ。騎士団では当たり前のことだ。

シャニーもイリアを変えたいと言っていたが、その理由も考え方も明らかに違う。

レイサにはテイトが何故、この全く正反対の性格の人間を新人部隊に仲良く入隊させたのか、分かった気がした。

（団長……あんたも良くやるね。下手をすれば、どちらかが潰れてしまいかもしれないのに。それを潰れないようにしろってことか、私の仕事というのは）

予想以上の難題に息が詰まる。今は一旦退くしかないか。

「そうか、なら何も言わないよ。でもね」

レイサは背を向けて部隊の方へ帰る途中で、背を向けたままアルマに話しかけた。

「親友は作っておいたほうがいいよ。慢心と孤独は隙を生む。私はアサシんだ。正直、あんたともう一人の経験者の子。どっちが暗殺しやすいかって聞かれたら間違いないくあんたを選ぶよ」

アルマは無言で再び手槍の稽古をし始めた。

レイサは感じていた。アルマは、シャニーと何処までも正反対だと。

シャニーが青空なら、アルマは何者にも染まらない闇夜か。

そこに優劣はなく、イリアを変えていくにはなくてはならない人物だとも感じていた。

染める者と、染まらない者。調和と制圧。

どちらもなくてはならない、同じ志を持つこの二人をなんとか融合させる方法は無いか。



レイサは他の隊員に囲まれるシャニーを見ながら悩んでいた。  
しかし、そんな心配をする必要はなかった。自分に無いものへ人は  
羨望の眼差しを送り、全部欲しいと囁く。そう、磁石の両極が引き合  
うように。

## 第2話 青空と闇夜（2）

その夜、部隊の稽古が終わった後に自身の剣の型のチェックをし終わったシャニーが時計を見るとすでに19時を回っていた。

どうにも一度集中すると時間を忘れてしまう。

早く帰って食事にしようと早足で稽古場を抜けようとした時だ。まだ奥に明かりがあることに気づく。自分が消し忘れたのだろうか。

「あれ……あなたは確か……ミリア？」

誰かいる。上がった息と雑味のある武器の振れる音。

室内稽古場に入ったシャニーの視界に映ったのは若草色の髪の少女。初日から声をかけてきたあの子だった。

必死に槍を振ってはいるが、バランスがバラバラで見えられず声をかけた。

「あ、シャニー。ちいっすー！」

額の汗をぬぐいながら手を挙げて気持ちのいい返事が返ってくる。

再び黙々槍を振る姿に、シャニーはその様子をじつと横から眺めていた。

一体どれだけ稽古をしているのか、大粒の汗がヘアバンドの色を変えている。

「まだやるの？ 体、フラフラしてるよ？」

「ウチは見習い修行に出てないから、ちよつとでも人より稽古して追いつかないと」

陽気な顔をしているが、桃色の眼差しは真剣だ。その姿にシャニーは幼いころの自分を思い出していた。

城の隅っこで木の棒を振り、シグーネに見つかって稽古をつけてもらったあの頃。自然と体が動く。

「ほら、もっと腰に力入れて。腕の力じゃなくて腰を使って振るんだ」  
ひたすらに振っているのと、見てもらって悪いところを直しながらではまるで違う。

ミリア自身でも驚くくらい、さつきまでと自分の動きが違っているのが分かる。

「うんうん、良くなったよ!」

それを自分のことのようにシャニーが喜んでくれるので俄然やる気が出る。

「よしっ。じゃあ、あたしに向かって振ってきて」

「そ、そんなことできるわけ?!」

ついにはシャニーが稽古用の木の槍を取り出して相對してきたものだから思わず腰が引けてしまう。

いきなりレベルを上げすぎたかと思ったが、シャニーは構えを解かずにミリアの槍の穂先を突いた。

「実戦ではやらなきゃやられる。大丈夫さ、そう簡単には当てさせないよ」

しばらく木製の槍が打ち合う音だけが室内に響いていたのだが、すぐにミリアは槍を下ろしてしまった。

「どうしたの?」

目つきが元に戻って不思議そうに見てくるシャニーに彼女は申し訳なさそうに頭をかいた。

「悪いよ、帰ろうとしてたんじゃ?」

彼女の視線の先にはシャニーが持ってきた帰りの荷物がある。

「仲間が一生懸命になってるのに、見て見ぬ振りなんてできないじゃん。ほら、構えなよ。あたしにとつても防御のいい稽古になるんだからさ」

何だ、そんなことかと笑った同期にミリアはあつけにとられた。

自分は右も左も分からなくて、何もかも精いっぱいなのにとても同期とは思えなかつた。

じれったくなって攻めてきたシャニーの槍に反応して再び打ち合いが始まり、それからどれだけ経っただろうか。月がだいぶ高い場所にいる。

「もうダメ。もうムリ。もう腕が上がらないよ」

槍を握ったままの手が固まって動かずミリアが倒れこむ。

「はあはあ……さすがに疲れたね」

シャニーも槍を置くと倒れたミリアの横にばったり寝ころんだ。

「はあ、思い出すなあ。見習いに出る前、あたしもよくシグーネさんやお姉ちゃんに稽古をつけてもらったな」

独り言のように上がった息に任せて口にした言葉にミリアがえつと驚いて上体を起こす。

「シャニー、年いくつ?」

いきなり問われた内容にきよとんとしたシャニーも起き上がるとぱつと左手を開いて見せた。

「15だよ。なんで?」

見習い修行は通常14歳からの1年。1年修行したのち、15歳で成人となり叙任騎士の資格を得るルールだ。

今年には戦後の人材不足でやむなく見習いが免除されている。

「じゃあ、先輩なんスね。失礼しましたツス、先輩」

急に口調が変わってぎよつとするシャニーだが、「同い年だと思っただ……」と聞こえないようにボソツとミリアが口にした言葉には口元が歪んだ。

幼く見えるということか。それでも先輩と言う言葉にはゾクつと来た。何だかむず痒い。

「同期なんだし先輩とかやめようよ。1つしか違わないだし」

「それもそうツスね。じゃあ、名前で呼ばせてもらおうツスよ」

明るい感じの子で気が合う。休憩も兼ねて喋っていても気疲れしないのでどんどん話が弾む。

叙任式で緊張したこと、部隊長に拍子抜けしたこと、今日の食堂のランチ……。

あれこれ話したところで、入団までの経緯を話すとミリアは目を爛々とさせて聞き入ってきた。

「いやあ、やっぱり見習い修行って大変なんスね」

「なんで今年入団しようと思ったの?」

ミリアは聞けば今年14だといい、例年なら見習い修行に出る年だ。

むろん、今年とてこの形をとる者が大半でミリアのような者は珍しい。

興味から聞いたのだが、彼女はそれまでの笑みが消えて俯きながら苦笑いしてきた。

「ウチ、孤児で幼馴染のところに居候してるから早く稼ぎに出たいなって思ってる。でも……甘かったみたいッス」

ここにもいた。戦死して親がいない者が。

騎士団は学校ではないから一から教えてくれなくて当然だが、入団からまさかこんなに差がついているなんて思いもしなかった。

取り残される……その不安が今ここに彼女を呼び寄せていた。

「シャニー、無理を承知でお願いッス。ウチにこれからも稽古をつけて。お願いッス、先輩！」

入団したてで心細い中、新しい友達ができ、その彼女が困っている。もともとなんにでも首を突っ込みたくなる性格だ。

急に頭を下げられてシャニーはどうすればいいか分からなくなっってしまったが、とりあえず頭をあげさせるといつも通りニコツと笑って見せた。

「無理も何も、困ったら助けるよ。仲間じゃない、あたしたち」

「これからずつとついて行くッス、先輩！」

救われたような笑みを浮かべてミリアが抱き着いてきて、その顔が嬉しくてシャニーも受け止めた。

タイトに完膚なきまで砕かれた自信を少しだけ取り戻せた気がする。

必要だと言ってくれる人がいることがこんなにも嬉しいことだなんて。

その時だ、何やら聞こえてくるたくさんの声。夜勤組の休憩時間らしい。

「いけない！ もう帰ろう、さすがに遅いよ！」

時計はすでに2時半を過ぎていた。

急いで片付けて消灯し、部屋を出てそのまま天馬の待つ厩舎へ走ろうとしたが、後ろから腕を引っ張られた。

「待つて欲しいッス！ レンを連れてくるッス」

踵を返して走り出したミリアをシャニーも追いかけることにする。

レン……彼女の幼馴染のことだろうか。

しばらく廊下を走り、袋小路に入って扉を開ける。ここは練習用の武器の倉庫……その中の光景に二人とも哑然とした。

「レン……見かけないと思っただらばとそこにいたの？」

「うん。槍、重くて持てなかった」

そこには小柄な少女がいた。白に近い水色のロングヘアの下から、ポーっとしたような銀色の眼差しが無表情にミリアを見ている。覇気の薄さはミリアとは正反対のよう。

そんな彼女がミリアやシャニーを驚かせたのは槍を引きずっている様子ではなく、姿を見なかった理由がずっと槍を倉庫から引つ張り出そうと奮闘していたからだだった。

「だったらウチに言えばよかったでしょ！」

「ミリア、どこに行くか言わなくて分からなかった」

「あーそうだったね、ごめんよ。へへっ、先輩に稽古つけてもらってたんだ」

白い歯を見せながら自慢するようにミリアはシャニーを指さし、向けられた指の方向をじっと銀色の瞳で見つめていたレンは突然メモを取り出した。

「シャニー……十八部隊所属の天馬騎士、主戦武器は剣でレフティ、エデッサ城主婦人ユーノの妹……」

「あー、シャニー気にしないで欲しいッス。こいつ、こういうことばっかしてるんで」

いきなり自分のプロフィールを話し始めた銀色の瞳にびっくりするシャニーに、またミリアが申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる。

今年の新人は変わり者が多いと早くも噂をされているらしいが、いきなりそんな代表例のような二人と出会うことになるとは。

「私はレン。よろしくお願いします。シャニー」

ちよこちよこと歩いてきてすつと手を差し出された。シャニーも決して背が高いほうではないがそれでも小さく感じる。

145センチもないのではないか。無機質に見えた色白でどこか儂げな顔の中で小さな口が優しそうに上向いた。

「うん。こちらこそよろしく。へへっ、ミリア、稽古に付き合ってたよ。友達が二人もできて嬉しい」

三人は厩舎までの道をずっと話題が尽きることなく歩いていき、明日の朝からルシヤナも入れた四人で稽古をすることに決めたのだった。



翌日、朝はカルラエ城の食堂でとることになっているルシヤナは、同じく横でもぐもぐと元気に食べ続けるシャニーに苦笑いしていた。

良く食べるは彼女の信条だが、それにしても良く食べる。

「シャニー先輩、チーイツス！」

元気な声が聞こえてきて、口がリスのように膨らんでいるシャニーが手を振るほうを見ると、若草色の髪の毛の背の高い子と、水色の髪の毛の低い子が手を振っているのが見える。

「先輩だつてさ！」

クスクスとルシヤナが笑うので文句を言うが、もごもご言うだけで何を言っているか分からず、顔を食器のほうにむけられた。

「こいつに先輩なんてつけなくていいよ。聞いてるこつちが恥ずかしいよ」

「どういう意味?!」

食事を終えて稽古場に向かう道中、ルシヤナが笑いながら口にした言葉に肩をぶつけてやるが、「気持ち悪いじゃん」と即返ってきて口を尖らせた。

昨日は大きく見えたシャニーをおもちゃにする紫色のボブを揺らすルシヤナにミリアの興味が移る。

「ルシヤナさんはシャニーと友達なんスか？」

「腐れ縁だよ。お互い親がいなかったから、何でも協力して生きてきたって感じ」

ユーノやテイトが村にいた時はいつも彼女たちに助けてもらってきた。

その二人が騎士として旅立ってしまうと、同い年のシャニーしかい

なかった。そこからは何をするにも一緒。

困っていたら助ける。これは二人が生きてきた中で自然と培われてきた絆そのものだった。

「ウチらと同じなんスね。ウチの場合は、レンの両親に良くしてもらったけど」

「レンはどうして天馬騎士団に入ろうと思ったの？」

「どうして……？ 質問の意図が理解できません」

聞けばレンの家はイリアの中ではそこそこ裕福な家系らしく、ミリアのように一刻も早く仕事を探さなければならぬ立場ではなかった。

おまけにこの体格だ。武器を扱うこと自体に四苦八苦することは目に見えていた。「何か理由が要りますか？」開口一番に返って来た逆質問に問いかけたシャニーはルシャナと顔を見合わせた。

「あなた達と同じ。ミリアが行くなら、私も行く。それだけです」顔を見合わせていた二人は返ってきた答えに思わず頷いてしまった。

自分たちがそうであるように、彼女たちもお互いを姉妹のように大事に思っている。

同じ働くなら、一緒の場所で助け合いながら。困っているなら助けて。理由なんてそれで十分か。



「うーん……一番軽い剣を探してきたつもりだったんだけど……」

だが、現実はその甘くはない。ここは士官学校ではない。

昨日の様子からして槍は無理だと判断したシャニーは倉庫から剣を持ってきてレンに握らせていた。

それでも、構えを取るところからして右腕が下がって重さに負けているのが分かる。

最初は自分もそうだった。彼女にとっての剣の始まりも、槍が重いからなどと言う軽い理由。

ふうっと思案に暮れて大きく息を吐く。



門戸の広い剣はその分奥が深い。一度教えを乞うたらデーイクは剣を放ることを許してはくれなかった。

彼から半スパルタ的に剣の道を教えてもらい、ルトガーと言う生きた教材がいなかったらとてもこの道で行こうとは思えなかった。

それが、こんな剣を振るだけで重さに負けて転んでしまうのでは先が思いやられる。

「ねえ、レイサさん、その短剣どこで手に入れたの？」

ふと、今日も木の上で朝から寝転がっているレイサの腰から垂れている短剣に目が行きシャニーが声をかけるも「やめときな」こちらを向くこともなく諦めろと手を振られてしまった。

「そんな子に暗殺剣を使わせるのかい？ アマくないよ、この世界は」  
—— あんたも身をもって知ったはずだろう

レイサの鋭い眼差しが突き刺さってシャニーにはそれ以上食い下がる気になれなかった。

だけど、他に聞けるような人はこの新人部隊にはいない。その中で仕方なくあの人物の許へ向かった。

今日も一人で稽古に励む騎士が一人。天馬から急降下して動く的を切り裂くと、上昇と共に背を向けて手槍を見舞う。

見事に動く的を射抜いた手槍が地面に音を立てて突き刺さった。

その光景にミリア達だけでなくシャニーも口を開けて見入ってしまった。

羨望の眼差しを送られる騎士がまた急降下から牙をむき、上昇と共にこちらを向いた……。

「危ない!!」

あつけにとられていたミリア達を突き飛ばしてシャニーもその場から飛び出した。

「アルマ!! いったい何をするの!」

シャニーの立っていた場所に突き刺さった手槍が左右に揺れている。

周りの連中も腰が抜けていた。こちらに飛んできてゆっくりと降

下してくるアルマの手に新しく握られている手槍は、間違いなく実戦用の本物だ。

「お前こそ何をしている？ そんな足手まとい共と一緒に城を遠足なご休憩時間にしろ。気が散る」

——足手まとい

明確な蔑視の言葉を浴びせられてミアアの顔に怒りが浮かぶが何も言い返せなかった。

相手の動きはもはや精鋭の第一部隊の動きに勝るとも劣らないことは素人でも分かる。

見下してくる目線に耐えられなくなって顔を逸らした途端だ、横から腹が震えるような大きな声が飛んできた。

「取り消しなさいよっ、今の言葉！」

アルマの口元に笑みが浮かぶ。踏み出してきたシャニーの目つきが変わったからだ。

他の連中には興味はないが、こいつのことだけはもう少し知りた

い。  
体を正面に向け、槍を握りなおすとその穂先をまっすぐにシャニーへと向けた。

「必要はない。それとも、お前は負け犬の中で大将を気取って満足なのか？」

「こっつ、この二！」

思わず左手が剣にかかる。だがその手を上から強く握って抜かせまいとすると手が伸びてきて、体が後ろに引つ張られた。

「やめなよ、シャニー」

後ろを振り向くとルシャナが見つめて諭してくる。こんなことをする為にここに来たわけではないと。

目を瞑って怒りを腹から大きく吐き出すと静かに剣にかかった手を下す。

「あたし達は仲間に向う武器を探してる。仲間の命に係わることなんだ。この子でも扱える武器種、アルマは知らない？」

白けてしまった。もう少しであの剣をどのように捌くか見ること

ができたのに。シャニーの問いかけにも無言で背を向けたアルマは天馬にまたがってしまふ。

「仲間だど？ いつからお前たちの仲間になった？ 部隊が同じと言っただけで随分お花畑だな。クラブ活動か何かと勘違いしていないか？」

冷たくあしらわれて、再び拳が強く握られる。

その手を今度は優しく包む手。驚いて振り向くと今度はレンが見上げてきて、初めて微笑んだ。

「もう、行きましよう」

箱入り娘だった彼女にとって、アルマのような攻撃的な人間も、目の前にいるような立ち向かう姿も初めての経験。

だが、これだけは分かる。これ以上、仲間を傷つけたくないと。

「あたしたちは仲間だ。仲間のピンチはあたしのピンチでもある。勘違いなんてしてないよ！」

踵を返したシャニーはレンの手をしつかり握ってずんずん友と来た道を戻っていく。その背にふいに声が飛んできた。

「そんなに足手まといを戦力にしたいなら、武器以外にもいろいろ調べさせればいいだろ？ 何でお前がいちいち動く？」

一度は立ち止まったが、もう振り返らなかつた。もう、その問いに対してはさつき答えた。

それでも分からないのなら、今はただ怒りが湧くだけ。

レイサのいる部隊の集合場所まで戻ってきたところでようやく立ち止まり大きく息を吐いた。

「あの、シャニー、本当に申し訳ないツス」

「うん、私たちのせいでケンカさせちゃった」

頭に手をやりながらミリアが頭を下げてきて、レンも小さな声で震えていた。

自分たちの無力がこんなにも友達に迷惑をかけることになるとは思っていないかった。

入団数日目にしてもう、ついていけるか不安で仕方なくなる。

「何言ってるのさ。仲間でしょ？」

そんな沈んだ顔にかけられた笑顔が傷心を癒してくれた。

「武器の選択を間違ったら命に係わるもの。あいつは仲間の命を何とも思っていないんだ。許せないよ」

「仲間のピンチは自分のピンチね。あんたにしてはいいこと言うじゃない」

シャニーが怒ったところなど久しぶりに見た気がしてルシヤナも面食らったが、あの時は良く自分も止められたと思った。

仲間が困っていたら助ける。それは互いの幼いころからの約束。

それを実践する友をたまには褒めてやることにした。

「師匠によく言われてたからさ。あの時は、あたしがピンチを作る側だったけど」

——共に戦う連中の事をもっと考えろ。戦いは一人でするもんじゃねえ

デイークの声が聞こえた気がした。動乱中、耳にタコができるほどかけ続けられた言葉だ。

手柄が欲しくて単騎突撃しては毎回そう言われていた。

今、仲間たちに自然と言葉になったものを心の中で復唱してみる。

自分はその頃の自分より、師匠の気持ちを汲むことができているのだろうか。

「もうあたしは、誰も失いたくないんだよ」

シグーネをはじめ、戦争は大事な人たちを二度と会えない場所へと連れて行ってしまった。

せっかく出会った友とそんなことになるのはもう嫌だ。

同時に湧き上がる自己嫌悪。一番隊で手柄を立ててやると意気込んでいたのはまだ最近で、まるで成長できていない。

だが、今湧き上がる気持ちは嘘なんかではない。自分の中にまるで自分が二人いるかのような矛盾に彼女は唇を噛んでいた。

### 第3話 自分たらしめるもの

その日も、基礎的な練習が繰り返されていた。

他の部隊から借り物の「講師」を招いて、天馬の乗り方と槍の扱い方を学ぶ。

歴戦を生き抜いてきた二人にとっては温いことこの上ない稽古とも言えない稽古。

アルマはもう当然のように皆のところを後にする。

「まあ、あなた。アブリをしないと危険よ？ アブリの必要性は……」  
シャニーもまた、講師の話をうんざりして聞いていた。

この講師、きつと姉の回し者に違いない。彼女と同じことを言うから半分以上を聞き流す。

自分がしたい稽古は、もつと実戦的な物だった。

「これこれ。十を志す者が一をおろそかにするとは何事じゃ」

ふいにシャニーは後ろから頭を何かで叩かれた。

焦って後ろを見てみると、そこには腰の曲がった婆が杖を自分の頭に乗せている。

「げっ?! ニ、ニイメの婆さん!」

いつものように昼寝をしていたレイサが落ちそうになった体をなんとか翻し、慌てて木の上から降りてくる。

降りてきて早々、シャニーと同じように杖で頭を殴られて説教が始まった。

何か周りの隊員には、そんな二人が姉妹に見えて仕方がない。

「全くお前というヤツは! 昼間から寝腐りおって! わしが若い頃はね!」

「あー、分かったよ婆さん。で、どうして邪魔しに来たのさ」

「研究の合間の散歩じゃよ。今年の若いのにイキの良いヤツはいるのかと思つてな」

レイサは何とかニイメを追い返そうと必死。

だが、ニイメはそんな彼女を無視するかのようになり、他の隊員の顔をまじまじと見つめて回る。

「……ねえ、レイサさんとニイメのおばあちゃんって、どんな関係なの？」

「シャニーが耳打ちするとレイサはため息をついた。

身の上話なんて柄でもないのだが、こうもウロウロ徘徊されてはやりづらい。」

「私がまだ、ただのカツパライだった頃ね……」

「今も単なるカツパライだろうが。おまけに部下を放り出して昼寝とは。何処まで墮落してるんじゃない！ わしの若い頃はね！」

「聞こえないように言っただけなはずなのにすっかりお見通しのようにだった。」

レイサはもう返す言葉も無いとヘラヘラと笑ってみせる。

「孫がちゃんと仕事をしているかと思っただけ、案の定の体たらくでニイメはご立腹だ。」

「……でさ、婆さんは古代魔法の大家だろ？ なら、きつと色々古代魔法の書を持っていると思っただけ、貰いに言っただけよ。あれかなり高価だからさ。考えただけでもヨダレが……おっと」

レイサはニイメに睨みつけられた事に勘付き、この先を言うのを止めた。

「で、書庫漁ってたら婆さんに見つかって。婆さん、気配消して忍び寄るの滅茶苦茶うまいんだもの。それで、後ろから突然闇の球に包まれたかと思うと、急に体が動かなくなっちゃってさ」

「バカモノ。お前が盗賊のクセに鈍いだけじゃ。イクリプスにも気付かん盗賊など聞いたことが無いわい」

その後、気を失ったレイサをニイメは柱に縛りつけ素性をすべて吐かせた。

彼女は、傭兵で早くに親をなくした遺児だった。

生きるために、人の物を奪い、容赦なく殺す。あの頃のレイサにとっては当然のような生活だったようだが、

今となつてはもう苦笑いしてニイメの無駄話を聞いているしかなかった。

自分でも、あの頃の自分は壊れていたとすら思えるほどに、人を殺して奪って、貪った。生きるために。

——生きるために、奪うしかないじゃないか。他に構っている余裕なんてあるものか

今でもあのときをお互いは覚えていた。生きるために狂う人々。ニイメは多くを見てきた。

当時も少女盗賊がカルラエ付近を荒らしまわっていると噂になっていたから、警戒していた中にまんまと忍び込んできたレイサ。

それが今、こういう運命を辿るとは。

「あの時に婆さんに会っていなかったら、今の私は無いかもね」

「わしはあんたみたいに死ぬ気で生きてる人間は嫌いじゃないよ。ただ、手段が気に食わなかっただけだね」

捕まえたレイサに飯を食わせてやって身の上話を聞いていると、話を聞きつけた騎士団がニイメの庵に駆け込んできた。

その時だった。レイサがシグーネに初めて会ったのは。あの時のシグーネの姿、顔、何もかもをはつきりと今でも覚えている。

.....

「ニイメのばばあよう、こそ泥が忍び込んだんだって？」

「おやおや、団長自らお出ましとは、よっほど暇なんだね」

柱に縛り付けられたまま、向こうで何かを話し込む二人を視線だけで見る。

ニイメはシグーネにレイサの事を話しているようだった。

シグーネの食われるかと思うほどの目線が時折こちらを鋭く見つめる。レイサにとって、睨まれこんなに戦慄を覚えるのは初めてだった。

暫くすると、彼女は縛り付けられている自分のほうへ向かってきた。

「あんたの親も……イリア騎士だったのかい」

「知らないね。親が何しているようが関係ない」

「あんたはどうなったら、盗賊から足を洗う？」

つつけんどんな反応ばかりをするレイサに、シグーネは唐突に質問

を投げかけた。

いきなりそんな事を聞かれてレイサも面を食らう。

相手は騎士だ。今まで散々殺して生きてきた自分を、きつと処罰するに違いない。そう思った。

「もちろん！ 盗みなんかしなくても生きていけるように、イリアがなったらさー！」

そう怒鳴ったレイサの頬を、シグーネは力強くひっぱたいた。

「誰かが何とかしてくれるなんて思うんじゃないよ。変えたきや自分で変えな」

「それが出来たら苦労しない！」

「しようとして無いだけだね」

シグーネに簡単に否定されて悔しさに口元が歪む。

一体この騎士が自分の何を知っているというのか。どんな惨めな生活を送っているか知っているのか。

縛られていなければ掴みかかっていたに違いない。たとえ敵わない相手だったとしても。

「あんたは多くの罪も無いものを殺した。でも、それはあたし達騎士も同じなんだよ。よそに戦争に行って、全然知らない人を殺しまくる。そうしなければ金が手に入らないから。陰気な商売だよ。でもさ、あんたは自分のために人を殺してる。あたし達は民を養う為に殺してる。フン、カツコイイだろ？ どーせ人殺しするんなら、自分のためじゃなくて人の為に力を使わないか？」

.....

「最初は笑ったよ。人殺しが自分のやってることを棚に上げて何を人殺しに説教するんだってね。姉貴は頭おかしいかと思った。でも、私は思ったんだ。コイツについていけば、最低限の生活は保障されるんじゃないかってね」

彼女はシグーネの妹分として天馬騎士団に籍を置くことになった。

持ち前の身軽さを生かして情報を探ったり、時には独学した暗殺術を用いて暗殺依頼も受けた。

情報を騎士団に運ぶ者として、様々な情報が流れ込んでくる。貧し



い者、自分と同じように盗みを働く者……。

騎士団に入つてイリアの情勢を知る度、彼女は自分の為に生きていた自分を恥じ、きつといつか自分みたいな人間が出ないよう出来たらと願った。

しかし、時は無情だった。戦いの中に置かれることによつて、戦いこそが日常になつてしまった。

——戦死さえしなければ、少なくとも明日はあるしねえ

シグーネもそう言つていた。夢や希望……そんなものを考えている余裕はなかった。

民を養う為に戦いに赴き、心も体もずたぼろになつて帰つてくる。繰り返すうち、それが普通になつた。それを變えてやろうとは思わなくなつていった。それが普通……帰る場所なのだから。

夢や希望に現を抜かせば、故郷で待つ民が苦しむ。

それでもなんとか、レイサは彼女なりに自分の力を人の為に使おうと努めてきた。

強欲な商人を狙つて盗みを働いては、貧しい生活を送る人間にばら撒いた。

盗みには変わらない。人殺しには変わらない。でも、これは民を養う為にやつてるんだ。正しいんだ。そう言い聞かせて。

「生きるためなら何でもやる。それがイリアさ。だから、姉貴がベルン側についたのも、私は止めなかつたよ。民の為には仕方なかつたからね」

ベルン動乱時にイリアを占領したベルン三竜将の筆頭マードックは、イリア民に危害を加える事はなかつた。

彼が徹底的に潰したのは力を持った騎士団のみ。だから、ヘタに反乱を起こすより従つていた方が安全で、歪な平和がそこにはあつた。

シャニーは真実を知つて息をのむ。シグーネは独立国の尊厳より、民の安全を考えてやむを得ずベルンについていた。

見習いの時はどうしてベルンについたのか分からなかつたが、憧れの人の一人だっただけに裏切られたような気分になつた事は今でも忘れられない。

だが……違ったのだ。彼女はイリア騎士として最期まで誓いを守っていたのだった。

(……あたしは、何も知らないんだ。民を守るということも、その為にどうすればいいのかも)

今のイリアで民を養うということが、何を意味指すか。シャニーもずっと話を聞き入っていた。

やっと剣を振る目的を、自分だけの騎士の誓いを明確にしようとしたところだったのに無知を思い知らされた。

その目的を達成する為に陰で何が起こっているのか、そして何を見つめなければならぬのかを。

誰も失いたくない……そう言いながら、今の自分はそれしか手段がない。答えは本当にあるのだろうか。

「おい、その坊主」

しわがれたような声に、シャニーは我に返る。よく見ると、また二イメが自分の頭を杖でこつこつ叩いていた。

「坊主って！ あたしは女の子なの！」

「あんたみたいなガキに、男も女もあるものかい」

きついことをさらつと言ってくるあたりはレイサとそっくりだ。

自分はもう成人した一人前の女性だと思っていた。

だが、目の前の女性は自分の4、5倍は生きている。その人から見れば、きつと自分は子供なのだ。体も、心も。そして……イリアの守り手としても。

「十を志すものほど、一を大切にしなきゃいけないんだよ。一を粗末にして忘れてしまったら、あんたは九で終わるよ。九と十じゃ決定的に違うものがあるんだよ。わかるかい？」

当然分らなかった。十は一の積み重ね。それは分かっている。

それでも、目先の目標に囚われて先走りしてばかり。それではダメだった。

少なくともイリアでは。一を忘れ十をとりにいく。

目的を考えずに民の為と言って戦い、功績を挙げることを考える。

本人は十と考えていても、それは九でしかなかった。一を明確にし

ていれば、簡単に気付くはずなのに。

黙り込むシャニーに、いや、新人全員にニイメは語りかける。

「十に辿り着いた人間は、九で止まっている人間とは下手をしたら真逆のことをするだろうね。十一を探して悩むかもしれない。満足するってことがないのさ」

長々とした話にレイサは飽き飽きして両手を広げている。この人に掴まると5分で済むことが1時間くらいかかってしまう。

「ま、そのお陰で婆さんはボケないのかもね」

「ほう、お前にしてはいい事言うね」

半分嫌味で言ってみたのだがさらっと流されてしまった。

少女盗賊を捕まえたあの日から、毎日のようにレイサからは汚い言葉をぶつけられてきたから、その時に比べれば大分大人になったものだと言っただけだ。

彼女はニイメにとって可愛い女の孫同然だった

「満足したらそこで終わりさ。考えることを止めるって事だからね。ま、簡単な話だったじゃろ？ お前さん達もよく考えることじゃない」

ニイメは杖を突いてまた散歩に出かけていった。

新人達は分かったよう分らないような……。全然簡単な話ではないと皆は感じていた。

シャニーにも、はつきりとした事は頭に浮かび上がってこなかった。

難しい話は頭痛がする。しかし、一つだけ分かったことだけはあった。

今までの自分の十は、まさに民を養う為に、戦場で活躍することだった。

だがきつと、これは八か九なのだ。自分はまだ一を明確にしていな。い。そもそも一つでなんだろうか……。それすらもよく分からない。ならこれは一ではなく二なのか……。？

彼女は、いかに自分が何も知らないかを思い知っていた。

ベルン動乱を生き抜き、功績を残した。それですべてを知ったつも

りになっていた。

——今他国に行つて売れるものは恥だけ

姉は自分の事をよく見ていた。

でも、十が分からない以上、今は十だと思つて精一杯努力しようとも思つた。

考える事を止めてはいけない。だが、考えるばかりに黙してしまうことも、決して良い事とは思えない。

まずは、自分の信じる十をしよう。その気持ちがレンの手を引いてミリアと共に駆け出していた。

「ニイメのおばあちゃん！」

ゆつくり、ゆつくりと歩く老婆に若者たちはあつという間に追いついて、何事かとニイメが見上げることが待てない勢いで喋りだす。

「ねえ、このくらいの体格の子でも扱える武器を見たことは無い？」

「なんじゃない、いきなり。あたしの専門が魔法なのは知ってるだろう？」

60年以上生きている人だ。イリアをずっと見てきた賢者なら何か知っているかもしれない。

いきなり連れてこられて何事かと思つていたレンの無表情も意図が分かつて雪が解けたように口元が緩んだ。

「大事な仲間なの。無理な武器を持ってたら命に係わる。ちよつとの情報でもいいんだ」

——そうは言つても

ニイメの顔が口を開く前にすでにそう言っている。それでもかじりついてくるものだからため息交じりにあしらつた。

「騎士なんか殺し合いが仕事だろ？ そんなこと心配しなくつたつて死ぬときや死ぬよ」

一瞬言葉が詰まる。綺麗ごとをどれだけ並べても、やっている事はニイメの言つたとおりだ。

それでもシャニーは首を横に振つた。結果はそうかもしれないが結果が同じだからとプロセスをすべて否定されたくなかつた。

「見て見ぬ振りをして何もしないのは嫌だから」

「無駄なことをしていてもか？」

面白いことを言う娘だ。イリアはこんな国だから、昔からこうしてきたから……生きてさえいれば明日は来るから……そんな雪に押しつぶされて身動きが取れなくなったかのように思考の止まった連中が多い。

この冷めた考えが、他の国が生まれ変わろうとしている中でも動けない理由だと誰もが気づいているはずなのに。

それをこうして口にする人間は珍しく、面白く映る。

「騎士だってイリアの民のひとりだよ。イリアの民を守ることがあたし達の誓いだから、無駄だとは思わない」

毎日暇を持って余している身。たまには刺激に触れてみると面白いことが思い浮かぶかもしれない。

改めてシャニーを見上げ、そしてその後ろで見つめてくる銀色の瞳を見つめるや否や、ニイメはただでさえシワの深い眉間を一層細めた。

「なんだって武器にこだわる？　なんで魔導書を使わないんだい？」

「へ??」

頭はニイメの言葉の意味を理解しているはずなのに思わず変な声が出た。

「そう言えばレンのお父さんって魔法の先生だったっけ」

ミリアが横でポンと手を打っている。思わず彼女たちへぼやきが漏れる。

「なんでそれ早く言わないの……」

「え……聞かれなかったから……」

二人とも同じことを言うものだから本当の姉妹かと思った。ぽつきりと首が折れる。

魔法は才能がなければ願っても扱えるものではない。その才があるならそれを活かせば良かっただけなのに。

ここ数日駆け回っていたのは一体……そんな気持ちが湧いたが、それ以上に希望が湧いてきた。

「良かったね、レン！　自分の相棒が見つかった！」

だいぶ遠回りしたが、彼女に合う戦闘スタイルを見つけることがで

きてシャニーは思わずレンの手を取って飛び跳ねた。

だが、レンの顔は相変わらず表情は乏しく、どこか浮かない顔をしている。

「せっかく天馬に乗れるようになったのに」

未経験者の中ではかなり早いタイミングで天馬に乗れるようになった。

これから天馬騎士として生きていく最初の難関を突破したと思っただけなのに魔導士にコンバートすれば、部隊が変わりミリアとも一緒ではなくなってしまう。

「よく分からないツスけど、天馬騎士って剣か槍じゃないとダメなんですか？」

「あたしはそれ以外は見たことないかな……」

何でレンが迷っているのか分からずにミリアが髪をかき上げながら問うてきたが、シャニーはよく考えずに返事をしてしまった。

その時ふと自分の腰に下がっているものが目に入った。自分も変わり者と言われてきたこのスタイルで、槍を使えないのかとバカにされることもある。

「だけど……」

なぜ、武器にこだわっていたのだろうか。確かにニイメの言う通りだ。いつの間にか考えることを止めていたことに気づく。

「レンが使いやすいなら何使っても大丈夫じゃないかなあ。レンだけにしかできない力にすればいいんじゃないかなって思うよ」

剣を天馬騎士として唯一無二の、自分を自分たらしめるものだと思っただけで磨いてきた。

レンだってそうすればいい。魔法を扱う天馬騎士なんて前代未聞だろうが、その最初の一人になったっていいじゃないか。

それを聞くとレンの顔が明るくなるのがはつきり分かった。

「ありがとう。ようやく私……みんなに認めてもらえるかな」

今までずっと苦しかったのか、吐き出すように零した言葉は不安げだ。

シャニーも心配だった。人が通ったことのない未知を歩むことは

苦しきのほうが多い。周りを見ても自分が正しいか分からないのだから。

自分だってデイークがいなければ同じだった。背中を押しした手前、レンに一人で歩かせるわけにはいかない。

「ニイメさん、お願いがあります。城に立ち寄った時だけでも、レンの魔法を見てあげてもらえませんか？」

相手は世界的に有名な闇魔法の大家だ。無礼だとは分かっているがこれ以上の先生はいない。

「ほえ？ あたしがかい？」

まともに取り合う様子も無いことが口調から分かるが、何度も頭を下げるシャニーにレンも一緒になって頭を下げ続けた。

「私、みんなの役に立ちたい。その為なら、なんだつてします。お願いします」

「それは私からもお願いするよ、ばーさん」

いつも平坦な口調のレンが必死になる姿にミリアも頭を下げた時だった。ふいにこの場にはいないはずの声が聞こえてきて、その声が届いた途端にニイメの目つきが変わった。

「なんだ……おまえ、自分の部下の面倒を人に押し付けようつてのかい？ 部外者のあたしにさ」

「うちの大事な部下だからお願いしてるんだよ。ばーさんに任せて芽が出ないならこの子はその程度だつて諦めもつく」

三人は目を疑った。いつもニイメに叱られてへらへらしているレイサが、バンダナを外して深々頭を下げ緑の髪を垂らしているのだ。

それでも、ニイメはそつと背を向けると歩き出してしまい、シャニーが追いかけようとした時だ。すつと前をレイサの腕が遮つてきた。

「ばーさん、引き受けてもらえたと思えばいいんだよね？」

「ああ……孫が頭下げてんだ。ただし、泣いても知らないからね」

思わずレンやミリアとハイタッチして喜ぶシャニーたちを横目に見て、レイサは改めてニイメに頭を下げた。

「早速今日の18時、ちゃんと庵に来るんだよ」

振り向くこともなく去っていく賢者に、三人も静かに頭を下げるのであった。



## 第4話 同郷の夢

ニイメが来てから一週間後。

昼食を終え、自部隊の管理地まで戻ってきてきよろきよろしていたシャニーはいつもの場所まで来ると、木の上を見上げてぱつと笑顔を浮かべる。

「ねえ、レイサさん」

彼女は木の上で短剣を使って果物の皮を剥いている。手馴れたものだ。

「なに?」

「あたし達のやってることって、正しいのかなあ」

いきなりな質問に上体を起こす。ニイメが説教をしに来てからずっと、彼女の振る剣に曇りが生じていたことがレイサは分かっていた。

切った実を一切れシャニーに放ると彼女はナイフをしまい、木から飛び降りる。

「正しいことって?」

「ニイメさんに言われたこと、あれからずっと考えてたんだ。でも、考えれば考えるほど、何か怖くなってる」

シャニーの瞳にいつもの輝きが無い。

よく食べて、よく笑って、よく寝るを信条とする彼女が、こんな風になるのは珍しいことだった。

「だってさ、あたし達はイリアの人たちを養う為に戦う。でも、他の国の人から見たら、あたし達って、よそから来た殺人鬼じゃないのかな」  
「何が言いたいのか?」

見習い修行中もずっと考えてきた事だった。その都度、イリアの為には仕方ないのだと自身に言い聞かせてきた。

けども叙任騎士となって現実と向き合わなければならなくなると、仕方ないと言って逃げてはいられない。

飲み込めないこの気持ちこそがニイメの言う “ ” だとしたら、このまま剣を振っていて良いのか。

「あたし達が民の為にって言っているのは、しなくちゃいけないけど、正しいというわけではないんじゃないかなって」

傭兵として他国の戦争へ参加する。そのことが他国の人間にとってどう映るか。それは言うに及ばない。

シャニーは何となく気付いていた。民を養う為に。それはイリアにとつては動機ではあつても、自らを正当化する事は出来ないのではないかと。

「シャニー。イリアは他国に行つて仕事をしなければ、皆飢えて凍え死んでしまふんだよ？ 分かつてる？」

「分かつてるよ……。でも、結局あたし達は誰かを犠牲にして生きながらえているつてことだよ。それじゃ、盗賊と変わらないよ」

シグーネも言つていた言葉を、こんなヒヨッコが言う。

しかし、レイサは今回は首を縦に振らない。本当は振りたい。だが、その前に考えさせることがある。

「それがどうした？ 多かれ少なかれ、どこでもそうでしょ。手段が違ふだけさ」

明らかにシャニーの眼差しが変わる。もつと美しいことを言つて欲しかったのだろうか。動揺している。

「いいかい、シャニー。他所から持つてきた正義やら正当性などに、力はないんだよ。私たちには、私たちの正義がある。それを守ればいいだけさ。その国の事を何も知らない人間が、どの面引っさげて他国を非難できるのさ？」

何も言い返してこないがとても納得できた顔ではない。他国とイリアでは考え方もルールも違う。他国の正義が、イリアの正義とは決していかない。

でも、シャニーはベルン動乱で様々な国を回つて彼女なりに色々勉強してきた。

イリアだけが、何かおかしいようにも感じてしまう。国の存亡をかけて、他国に良い様に使われる、そんなイリアが。

「……ま、でも考えることも大事かもしれないね。イリアは他国に行つて戦争をしなければ、皆飢えて凍え死んでしまう。他国から見れ

ば、戦争を、死を運んでくる傭兵団でもある。……誰が悪い？ 何が正義？」

レイサの質問にシャニーは答えられなかった。どんなに考えても、答えが出てこなかった。……何か悔しい。

そんな妹分の肩をポンと叩きながら、レイサはその場を立ち去っていく。

「あなたはイリア騎士さ。でも、それ以前にイリア民だ。戦うことだけがすべてじゃないよ。それだけじゃ……無責任かもね」

“一”の重みが、そして見えにくさが、レイサの言葉から嫌というほど伝わってきた。

言われたことを鵜呑みにして従っているだけでは、今のイリアの二の舞。

こいつがここで考えるのをやめるなら、その程度の人間だとレイサは差し出した手をここで引くことにした。

(それにしても、あなたはいい姉貴を持ったもんだよ。こんなに、考える時間をくれたんだからね)

レイサは中庭を歩きながら団長室の窓を見つめる。

彼女はテイトが哀れに思っていた。あんなにイリアの事を想って、何とか良い方に向かおうとしているのに。

それなのに、今の国は手段を選んでいられないほど貧しく、騎士団も再建された方が少ないという有様。

イリアの民の貧しさを救える数少ない騎士団の長として、彼女には大きな期待を寄せられている。

変えたいと思っていることでは、民を救えない。きっと彼女は悩んでいるだろう。

そしてあんな性格だ。誰にも悩みを告げずにいるのだろう。この頃部屋に籠りつきりなことが多い。

姉貴が団長をしていた頃に見せていた慎ましい笑顔が、今のテイトには無い。

いつも堅い彼女だから、その笑顔は力だった。それは、妹シャニーの笑顔とはまた違う力を持っている。

何とか彼女の力になってやりたい。溜め込んでいたら、いつか……。

◆ その日、シャニー達は初めての夜勤だった。いつ賊が暴れだすか分からない今の荒廃したイリアでは、騎士団は二十四時間体制を強いられていた。

「ふああああ……」

不謹慎にも声をあげて大きなあくびをする。

こんなときにもし敵が襲ってきたら危険だとは分かっている、ベルン動乱で夜通しの番を経験していても、眠いものは、やはり眠い。なんとかして目を覚ますべく剣を振る。

「216……217……218……219……22……」

近くにいたレイサは嫌な予感がして、シャニーを見るとやはり寝ていた。立ったままで。

傍にいたミリアに視線で命じ、彼女は目を輝かせてポケットからヘアゴムを取り出すと、シャニーの額で思い切り弾いた。

「あいたあー」

目を白黒させて飛び起きる彼女に、他の隊員たちは笑いを隠せずにあちこちで口を押えている。

「まったく、どうしてイリアには剣を振りながら寝られる奴が多いんだろうね。しっかりあなたの姉さんに言っというてやるからね」

「うわあ！ お姉ちゃんには言わないでよお。後でくどくど言われちゃう」

「ダメだよ！ あなたには夜の良さが全く分かって無い！」

シャニーも他の面子も、レイサの様子がいつもと違うことに首をかしげた。

きよとんとする彼女たちを置き去りにしてレイサはシャニーの首根っこをひっ捕まえると、どこか分からないが指をさし始めた。

「あんたさく、考えてもみなよ。深夜はみんなが寝てる。真つ暗な闇でお宝が一人輝いてるんだよ？ あー、こういう月がきれいな日は盗

賊魂が騒ぐ！」

目を爛々とさせているのはレイサだけ。なんだ、そんな事かと周り  
は散っていく。

未だに盗賊稼業から足を洗っていないのか、そんな事がテイトに知  
れたらそれこそ大目玉だ。

賊討伐をする騎士団の部隊長が盗賊だなんて。

毎夜毎夜、寒さに、賊に震えながら人々は暮らしている。

他の国では賊の討伐部隊などが定期的に出ているが、イリアの騎士  
団はとにかく復興資金を稼ぐ為にひたすら傭兵に出向いていた。

民を養う為と言って外へ出て行って、結果民を守ることが出来ずに  
彼らは震えている。

矛盾しているとシャニーは思った。

戦うだけでは無責任……そういう意味もあるのかもしれない。

シャニーは自分でも、この頃良く考えるようになったものだと感心  
していた。



ようやく夜勤が終わり、シャニーはふらふらと部屋に戻る。

暖かい暖炉の前で冷え切った体を癒す。そして、さつき振っていた  
剣を磨こうと……青くなった。

どうやら持ち場に置いてきてしまったようだ。渋々と寒い外に戻  
る。すると、皆がいなくなった場所に一人の人影があるのを見つけ  
た。

「あれ、アルマじゃん。どーしたのさ」

シャニーは剣を見つけるとアルマと一緒に休憩室まで帰ることに  
した。

「ねえ、イリアの傭兵ってさ、他の国から見たらどう思われているのか  
な」

シャニーはアルマに悩んでいることを打ち明けてみる。

独自の考えを持っているアルマなら、きつとこの質問に答えてくれ  
ると思ったのだ。

「簡単な話じゃないか。良く思われて無いよ。死肉を喰らうハイエナってね」

「……。やっぱりそうだよ。あたしは、お姉ちゃんに憧れて天馬騎士になったんだ。そんでき、イリアを守るんだーって、漠然としたこと考えてたけど……。こんな他国に憎まれる仕事だったなんて」

「……。それがどうした？」

アルマの一言に、下を向いて歩いていたシャニーは目を大きく見開いて彼女を見つめた。

レイサもアルマと同じような反応。やっぱり、自分がおかしいのだろうか。

「だって、憎まれるって事は……。正しいことをしているわけじゃないってことじゃない。自分の国を守るために、他の国を犠牲にするなんておかしいよ」

「だから、それがどうしたと聞いているんだが」

——正しいことをしているわけじゃない……。それがどうした？

アルマの目が真っ直ぐ自分を睨んでいて、シャニーは何も言えなくなってしまう。

そんな彼女にアルマはあっさりと言い切って見せた。

「正しいこと？　いつも正しく居る必要なんて無いじゃないか。私達は、しなくてはいけないことをしているだけ。それが正しかろうと悪かろうと関係ないだろ。必要なのだから」

「それは……。そうだけだよ」

「お前はベルン動乱で、正義正義の流れの中で修行していたから仕方ないかもしれない。だけど、私は正義なんて無いと思ってる。第一、正義って何なんだ？」

シャニーはその質問にも答えられなかった。アルマも答えられまいたという顔をし、唐突に質問を変えてきた。

「……。お前は、エトルリアが何故こんな弱い国を征服しないのだと思う？　あれだけイリアを見下した貴族が多いのに」

「え？　そりゃ……。戦争をすれば世界の強弱バランスが崩れるから

……？」

「違うね。こんな国を占領したところで、何も旨みが無いからさ。それどころか、戦争になったとき自国の叙任騎士より安く戦力を調達できるんだから、奴らは重宝してる。必要があれば、自国の軍には被害が出ないよう、イリア騎士を最前線に立たせて囷にするってことだつてあるらしい」

シャニーには身に覚えのある話だった。

事実、姉もエトルリアに雇われ、アルマの言うような形で使われて自分達と西方三島で対峙するに至ったのだから。

あの時は幸い、こちらの将も、現地での姉の将も優れた人間だったのでそれは回避できたが。

「恵まれた国の言うことなんか、放っておけばいい。皆自己中心なんだ。ありもしない正義に……騙されるな。そして、振り回されるな」  
自分は騙されているのか？ シャニーは自問してみるがすぐに首は横に振られた。

アルマの言葉は何となく分かる。皆自分こそ正義。そんなものに信憑性など無いのかもしれない。

それでも、イリアを評価するのは他国だ。

「でも……やっぱりあたしは、憎まれるより、凄惨な国だなんて言われたいよ」

「なら、自分が信じる正義とやらを進めばいい。他人にとやかく言われるものではないだろ」

常識など都合よく他人が作ったものだ。

他人に何と言われようが、自分の正義は自分で決める。

決めなければ、他人の作った正義など抛り所にはなりえない。でもその為は何をすればいい？

何も言えないで居るシャニーに、珍しくアルマは更に喋りだした。いつも無愛想な彼女が、まさかこんなに話すなんて。

「私は、こんな腐った国は変えたいと思ってる。こんな、他国の脛をかじらなくては生きていけないような国」

「あたしも、それは思ってるよ」

遠くを見ていたアルマの目が揺れてシャニーを見つめる。

同意してくれるとは思っていなかった。今まで、自分の考えに賛同してくれたものなど殆ど居なかった。

「イリアを他国に負けない強国に育てて、今まで見下していたやつらに吠え面をかかせてやるんだ。そのための傭兵稼業なら、私は他人に何と言われようが知ったことじゃない」

やはり彼女の考えている事はスケールが大きいと思った。

思っているても、他の人なら無理と諦めることを平気で言うし、誰も考えもしないようなことも、人目を気にせず涼しい顔でやつてみせる。

ちよつと危険で同意できないところもある。けれど、

——イリアを強い国に

シャニーはアルマの夢に賛同していた。

「あたしは、皆が戦わなくても良いようになって欲しい」

その言葉に、アルマは返してこないどころか鋭い目付きで睨んできたが、すぐにシャニーは頷いた。

その目が何を意味しているかすぐ分かったから。

——なつて欲しいではない、そうするんだ。自らの手で

「……夢見てるだけじゃダメだよね！ あたしも頑張らなくちゃ」

同じ夢を抱く者同士、心を開くまで時間はかかることはなく、彼らは空が色を取り戻す時間まで話し続けた。

この正反対の二人が交じり合うこと。これが後の天馬騎士団に、そしてイリアに大きな意味を持ち、新たな色を残していく始まりであった。



## 第5話 交差する意志

——エレブ新暦1000年 5月

やっと他の新人隊員たちも天馬の扱いに慣れてきたようで、稽古の最中に落馬する事も稀になってきた。

それでも相変わらず基本的な反復が続く毎日。初陣を踏む事は、まだずつと先なのか。

いい加減シャニーも退屈な毎日に限界を感じており、そろそろ実践的な稽古をしないと体が鈍ってしまいそうだった。

「ねえ、レイサさん！ そろそろ訓練のレベルを上げようよ」

今までも何度もそう提案してきた。だが、帰ってくる台詞は決まっていた。

「そんなにやりたかったら、アルマみたいに一人でやってきな」

そんな事、出来るわけがなかった。他の隊員が一生懸命やっている場所と離れて、自分ひとりだけ違う稽古をするなんて。

彼女たちを見ているとついつい、おせっかいをしてしまう。

「シャニー、無理に私たちに合わせなくてもいいじゃない。あんたはもう実戦を経験しているんだし」

何度かルシヤナは自分にそう進言してくれた。他の仲間たちもそれに賛成してくれる。

仲間達からしても、無理に自分達に合わせさせるのも悪いし、何より一人だけ突出した者が居るとやり辛いのだ。

皆シャニーにとつては大切な親友だし、関係は悪くない。

しかし、実力差は実戦経験者と未経験者では火を見るより明らかだった。

必然的に、未経験者は経験者の技を盗もうとする。相手の稽古の邪魔をしてはいけないと思いつつも、群がってしまう。

シャニーも頼られているのだからと精一杯教えてしまい、結果何もできずに一日が終ってしまう。

なぜ、部隊長が教えないのか……不満を出来るだけ見せないように振舞っていた。

最初は互いに妙な気遣いが働いていた4月。

しかし、成長は目に見えて現われていた。精鋭部隊の人間達を眺めているより、目の前で稽古し教えてくれるほうがやはり吸収は早い。そうなれば、更にシャニーの周りには人が集まった。

「ねえ、こんなときはどう動いてるんスか？」

前から稽古を頼んでいたミリアがシャニーとくつついているのを見て、他の隊員たちからも次々声がかかる。

「オツケー、任せて任せて！」

シャニーにも生き生きした笑顔が映える。

ミリアの稽古に付き合ったあの夜がきっかけとなり、人に教える楽しさや難しさ、人に頼られることの嬉しさを知り、1か月が過ぎてそれが当たり前になっていた。

レイサは木の上に寝転がり、顔に被せたバンダナの下から眺めては笑みをこぼしてみていた。

水さえやれば簡単に芽を出してくれるのだから、こんな簡単な事はない。

だが、こういう草は放っておけば野生化して思わぬ群生へと発展することもある。

◆ そうならないようにきっちり世話しなくてはいけなかった。

夜番との交代時刻までの任務が終ると、シャニーはいつものように城から少し離れた小高い丘に向かった。

いつもここで自分だけの稽古をしてきた。

いくから見習い時代に多くの戦場を経験したとは言え、今は新人として基礎的な訓練に明け暮れる日々。

実戦から離れることで、少しずつ腕が鈍ってくるのが嫌というほど分かる。それを食い止める為に、彼女は彼女なりに鍛錬していた。

「あれ？ あれは……？」

だが、今日はいつもと違った。いつも誰もいない特等席のはずが誰かいる。

走って寄っていくと、そこには槍を持ったアルマが居た。

いつも部隊とは別行動ばかりして皆に心開こうとしないが、夢を語り合ったあの日からよく声を掛け合う仲。

それでも、このように自分を待っているのは初めてだったのでシャニーは最初目を疑った。

「なんでアルマがここに？」

「一緒に稽古をしようと思ってさ。邪魔になるか？」

「まさか！ アルマぐらいの腕の持ち主なら、存分に稽古できるよー」  
思っても居ない相手から願っても無いような提案をされて、シャニーははしゃいでしまった。

アルマもそんな無邪気なシャニーを見て口元が緩む。

二人は暮れ行く春の夕日を浴びて思う存分、互いの技を相手に見せ付ける。

最初は稽古のつもりのはずが次第に熱が入っていき、終いにはとうとう本気でやりだしてしまった。

暮れ行き闇に包まれていく中、電光石火の剣と、闇夜を切り裂かんとばかりの強力な槍。それら二つが空中を華麗に舞う。

卓越された武は、踊りにも似たような綺麗な打ちあいを見せては互いの声が響き、武器同士がぶつかり合う音が暫く続いた後、ようやく二人は武器を下した。

「やっぱり、アルマ強いね」

「ふ、そういうお前もたいした実力だな」

互いの実力を認め合う。稽古の途中から分かっていたかもしれない。それでもなければ、全力で相手の稽古に挑んだりできない。

暫く二人は丘に寝そべって空を眺めていた。

イリアに到来した短い春。それが紅に燃え、闇と溶け合うその様子は美しいの一言では片付けられない。

「お前さ、姉に憧れて天馬騎士になつたって言ってたよね？」

突然口火を切るアルマの声で、半分寝かかっていたシャニーははつと我に返る。

こういう気持ちのいい風が吹く丘で寝そべると、勝手に目が閉じてしまう。

「え……ああ、そうだよ」

「じゃあ、もう目的は達成されたのか？」

「うーん……。いや、今のあたしには、天馬騎士としてしたいことがあるよ」

アルマはシャニーの言葉を聞いてもつと知りたくなつたのか、体を上半身だけ起こすと未だに寝そべるシャニーのほうへ顔を向けた。

「そのために、稽古もしっかりしている、と？」

「うん。困っているイリアの人を救ってあげたいから。賊がいつ襲つて来ても大丈夫なようにしておかないとね」

シャニーが騎士として今誓いに行っていることは、困っている人を見かけたら、きつと助けてあげること。

もし荒くれ者に襲われていたら助けてあげたいし、いざ傭兵に出て行ったら少しでも名声を得て、報酬を多く貰わなければならない。

イリア傭兵はある程度ランク付けがあり、そのランクに応じて報酬の額が決まってくる。

稽古を必死にするのも、全ては民を救うため。それは自分の両親が、命を賭してでも生涯誓い続けたものでもあった。

「そうか……。ふ、お前は純情でいいね」

アルマは軽く笑った。彼女は羨ましいのだが、シャニーはバカにされたと思つたようで膨れている。

「だから、ド素人の新人部隊の連中にも武技を教えってるわけか。同じイリア民として、助けていから。それでこうして時間外に。お人よしなヤツ」

「そんな大層なことして無いよ。あたしも見習いの時に色々な人に教えてもらつて、ここまで生きてこれたから。自分も何か出来るなら、してあげたいと思うよ。アルマは違うの？」

シャニーの言葉に、アルマは即首を縦に振った。

全然違う。生い立ちも、稽古に精を出す理由も、そして誓いも。

「私が稽古する理由は単純だよ。力さ。力が欲しいのよ」

「ちから？」

「私はね、人を従えて歩きたいの。欲しいのは、人を動かす力。権力だ」

よ」

シャニーは、いきなり出た権力という言葉に一瞬表情が固まった。面食らった様子の彼女の反応を楽しむかのように、アルマは更に続ける。

「権力を得るには、それ相応の力が必要だ。だから、まず実力で他が認めざるを得ない状況を作らなくちゃいけない。私が新人部隊を抜けて出しているのは、あんなお遊びの稽古では、いつまでたっても上達しないから」

——力が欲しい。お前もそうだろうか？

アルマの目がそう問うてくるが、シャニーはよく分からなくて困った顔をしていた。

人を従えて歩くというよりは皆と仲良くやりたいし、力を求めるあまり、皆から浮いて仲間はずれになるなんて嫌だった。

それならまだ、人の上に立たなくてもいいから、姉達のように皆から慕われる人間になりたかった。

「あたしには難しいかも……。だって、権力なんか要らないし」  
シャニーは手で髪をボサボサと弄りだす。

難しい話をされると、ついついこういった不必要なことをあえてして、気を紛らわそうとするクセがある。

そんな彼女を見つめるアルマの眼差しは今も槍のごとく鋭い。

「……私は最初に、イリアを強国に変えるといったよね？」  
「うん」

「そのとき、皆はどう反応した？」  
「驚いたような……馬鹿にしたようなそんな顔してたね」

アルマが叙任式の日には新人の代表としてテイトに騎士宣誓をしたあの時。

彼女は本来のイリア騎士の誓いを、信条と異なる為に一部口にできなかった。

その代わりに、彼女は宣誓した。自分だけの誓いを。——腐ったこのイリアを強国へ変える

そのときの一同の顔は十人十色だった。

新人達はとにかくあつけにとられていたし、先輩騎士や幹部達は驚いたような顔をしたあと、多くは蔑んだような苦笑いをしていた。

若気の至りか、と。誰も本気にしていなかった。

「そう、力がなければそんなものさ。でも、もし同じ言葉を、団長が言ったらどうなると思う？ 皆ぺこぺこ頭下げて同意するよ。考えの違う人間を動かすことが出来るのは、権力しかない」

例えその同意が心からのものでなくとも、相手が目上の人間ともなれば否定するものはまず居ない。

組織の幹部なんて、皆地位や名声、そして権力の欲しい人間ばかりだ。

ましてイリアでは、自分の価値は、名声や実力からなるランク付けで決まる。

名声を得るには、それなりの力を持った人間の集まる上位の部隊に配属されなければならない。そうなれば、自然と団長に顔を覚えてもらわなければならないかった。

団長として権力を、指揮を振るえば騎士団単位でイリアを動かせる。

今や天馬騎士団はイリアでも三本の指に入る大きな騎士団だ。それが動けば、当然他の騎士団も何かしら反応をとらざるを得ない状況を作ることが出来る。

「力の無い奴がいくら吼えても、戯言程度の認識。力を持てば、権力を持てば、人は動かせる。でも、権力を得るには、実力だけじゃダメなんだ」

今まで考えもしなかったことの連続に、シャニーは頭がこんがらがっていた。

ただ漠然と、困った人を助けたい、もつと剣や槍の扱い方をうまくなりたいと稽古に励むばかりで、名声とか権力とか、そんな事は頭にはなかった。

もつとも、入団したての新人が、そんな事まで頭の回ることのほうに珍しいのだが。

アルマの話の続きを知りたい瞳が一度は彼女を見つめるが、ふいに

弱弱しく逸れていく。

「人を動かせるのって権力だけなのかな……。だって、あたしは別に権力なんか無いけど、部隊のみんな、あたしの言うこと色々聞いてくれるよ?」

今の十八部隊の半分はシャニーが稽古を仕切っているようなものだった。そして、その中で色々指示を仲間にするが、皆嫌と言った事は無い。

そんな嫌がるような要求をした覚えも無いが、権力も無い自分が人を動かしているのは事実だった。

権力を持ち、本来指示をするべきレイサは、それを木の上から黙って見ているだけ。

「それは、お前が皆と敵対していないからだろう? 権力があれば、敵対している人間だろうと何だろうと従えることが出来る。そのためにも実力と……金が要る」

ごくりと固唾を飲み込んだ。金……これまたとんでもないものが出てきたと彼女は思った。

イリアの者は、いや、どの国でも金ほど人々から重要視されるものは無い。

特にイリアは貧しい国柄から、やむを得ず金を得る為に傭兵をしているのだ。命を危険に晒して。

どんなに敵対する者でも、金を積めば大抵は首を縦に振る。振らざるを得なくなる。

イリアで金を貰うという事は、それは即ち金を渡す側の命を貰うということでもあるのだから。

もし金で動かない堅物が居たとしても、周りの動く者達を味方につけて潰してしまえばよかった。

大抵の人間なら、金と名誉さえ与えておけば自分の言いなりになる。アルマは既に知っていた。

それはイリア内だけでなく、見習い修行をした地、ベルンでも同じことがなされていたから。

金で買えないものは無い。人の心など金で買えるし、力でどうにで

も動かせる。

汚い表現かもしれないが、否定は出来まい。

もし、自分を汚い女というならば、そんな汚い手に引つかかる者が悪いのだ。アルマはそう考えていた。

どうも納得のできなくてシャニーの眉は歪んだまま。

やり方が強引過ぎると思った。もつと、皆が納得する方法があるのではないか。シャニーはそう考えていた。

そういった考えを持ち、実践する者を見習い時代にずっと見てきたし、その者に傭兵とは言え仕えていたのだから。

その人は、今や世界の英雄として名を馳せている。

今でもたまに騎士団経由で手紙が来るし、マメな彼は見習わなくてはと思った一人だった。

「あたしは、やっぱりそういうのは分からないかなあ。きつとどこかで無理が生じるし」

アルマはシャニーが納得しないことを別段苦にもしてないようだった。

シャニーは人に愛されたい、人を愛したいこんな性格だ。自分の考えがシャニーに分かってもらえるはずは無い。国を変えたいと願うなら、覚悟を持って欲しいだけ。

せつかく同じ夢を持つ者同士。細部まで共感してもらえればそれ以上は無いが、ここまで自分と正反対な人間に、そこまで求める事は不可能だ。

「なら、お前はお前なりのやり方で頑張ればいい。私は私の考えを貫くし、理想を追求し続けるだけさ」

アルマはそう言って立ち上がると、天馬に乗って宙に舞い上がった。

「でも、夢が同じなんだから、出来る事は皆で一緒に頑張ろうよ！」

下から聞こえるシャニーの声に彼女は口元で笑みを作って答え、その場を後にした。いい稽古仲間が出来た、その嬉しさを胸に秘めて。

「そうだね。あたしもあたしの理想を追求し続ける！……って言えるものを掴まないとな」



未だ固まり切っていない、自分だけの誓い。十のための一。まだまだ考える時間が必要のようだ。

しばらく坐して心を落ち着かせた後、薄明りの中で再び剣を振るい自問を繰り返した。



「ええー!? もう初陣経験したの?!」

カルラエ城にある食堂の昼間。賑わう中にもかかわらず響き渡る若い声に周りはギョツとしている。

テイトはその声が誰だかすぐ分かり、穴があつたら入りたい気分だった。

「団長の妹さんはホント元氣ですね」

イドウヴァの言葉から蔑みを感じ、それに拍車をかける。顔が真っ赤になるのが分かった。

自分のことで無いにしても、妹がこういうことで有名人である事は恥ずかしい。

(もう少し淑やかにしてよね……!)

当の本人はイリアの家庭料理である肉入りの唐辛子スープに舌を焼きつつ、幼馴染の連中と話していた。

そこで、第二部隊に配属されたセラが先日配属後の初陣を踏んだことを聞かされたのである。

「シャニー……声デカイよ」

ウツデイが周りの視線を気にしながら彼女の口に手をやる。

彼女も言ってから気づいたらしい。あ、という表情をして、回りをきよろきよろする。

周りの視線が矢の嵐のように降り注いで肩をすぼませた。

「……で、ホントなの?」

シャニーは確認するように、シチューをほおぼるセラのほうを見つめなおす。

「うん、賊討伐任務だったよ。それがさ、うちの部隊長がいい人です」

同期の親友はもう戦場へ出ていてシャニーは愕然とした。それなのに、自分はいまだ初陣どころか、実戦的な話すら程遠いところに居る。

どんどん仲間から置いていかれている。そんな気持ちだが、彼女の心の中を駆け巡っていた。

「セラのところの部隊長って誰だっけ？」

「イドウヴァアって言う超ベテランの人。最初で心細いかもしれないけど貴女達は私の後ろで援護をしてくれればいい。危ないから隊列を乱さずに私について来い」 ってさ。結構統率取れててカツコよかったな。あれ、シャニー？」

セラがウツデイと話し込んでいる隙に、シャニーはいつの間にか居なくなってしまうていた。

昼休みの終るギリギリまで食堂で話し込むのが彼女らの日課であるのに。

「どうしたんだろ、アイツ。食べすぎで腹でも痛くなったのかな」

「シャニー……」

セラは茶化したのが、ウツデイにはその理由が何となく分かっていた。

## 第6話 誰もいない木立

食事を終えたイドウヴァ達古参騎士は昼休みが終ると食堂を出て中庭を歩いていく。

ぞろぞろと部下を引き連れて歩く様はまるで女王か何かのようだ。「イドウヴァさん、今年の新人はどんな感じですか？ 結構な数が入隊されたようで」

イドウヴァの周りを他の古参騎士達が取り巻いている。

団長ではないにしろ彼女は力を持った天馬騎士だった。騎士としての腕はもちろん、騎士団外にも顔が広く周りに影響を及ぼすことの出来る力を持っている。

その影響力は、団長であるテイトすらも無視できないほど。

「あまり質は良くないですね。この前の初陣でも死者を出さないのに骨が折れましたよ。あのレベルでは、いつ使い物になるまで成長するやら」

戦力になる新人なら歓迎できるが、今年はそんな新人が居ない。

戦力になりそうな二人も、何を考えているのかよく分からないヒヨッコ団長があらうことかあのレイサに任せた新人部隊へ送り込んでしまった。

新人が弱いのは当たり前だが、だからと言って戦死者を出せば自分の手腕を問われることになる。

勢力拡大を目論む彼女にとっては、今自分の将としての評判を下げること、何が何でも避けたいことだった。

その為もあってか、彼女はテイトに再三、シャニーやアルマを自分の部隊へ昇格させるように言い寄った。

だが、団長の首が縦に振られる事はなく、彼女はやきもきしていた。とにかく、戦力になる新人が欲しかった。特にあのアルマとか言うのは、新人のクセに権力が欲しいとかなかなか侮れないが、不安以上に利用し甲斐のある人間に映る。

彼女は絶対に権力の階段を登る。どんな手段に打って出ても。

それを配下につけておけば、自分もまた、更なる高みを目指すこと

ができる。

イドウヴァは度々アルマの元を訪れては、彼女の気を惹こうと色々画策していた。

今回も他の古参騎士と別れ、向かう先はアルマの許。

そのとき、彼女の目に必死になってレイサに何かを訴える青髪の新人が飛び込んできた。

(あれは……団長の妹……シャニーではないですか)

「ねえ！ レイサさん、どうして分かってくれないのさ！ 皆もう基礎は大分覚えてきてるじゃない。もう少し実戦的な訓練をしないと、いつまで経っても強くなれないじゃん！」

いつも穏やかなシャニーが部隊長に詰め寄って訓練レベルの向上を訴える姿に、周りの新人達もあつけにとられて休憩どころではない。

その様子を、アルマは稽古に行かず黙って見ていた。

「何度も同じこと言わせないで。私にその事をあーだこーだ言っても分かんないんだよ。団長に聞いてみたけど、そんな高度な話は新人には無理だつて言ってたよ？」

(お姉ちゃんめ……)

シャニーは姉の事を少々腹立たしく思いながら、レイサに反論する。

「お姉ちゃんはあたし達を見くびりすぎなの！ それに第一、個人練習ばかりじゃ、互いの信頼関係とか築けないし……！」

そこまで言った口を、レイサは手で覆って無理矢理黙らせた。

そして、シャニーへ顔を近づけると視線を合わせるように静かに彼女へ語りかけた。

「シャニー、下手な仲間意識は捨てた方がいいよ？ いくら同胞とか、仲間でも、戦場で敵になる事はあるんだからね」

それを聞いたシャニーは力任せにレイサの手を口から跳ね除け怒鳴った。

いつもの優しい性格からは想像もつかない形相に、周りのはたじろい

てしまう。

「見損なつたよ！ レイサさんだつて、仲間同士で争うことがないよ  
うなイリアを創りたいって言つてたじゃない！ なのに、なんでなの  
さ！ そんな理由でこんな訓練ばかりさせてたの?! あんまりだよ  
！」

怒鳴られて、言い寄られても、レイサは表情を変える事はなかった。  
レイサにはシャニーの性格が大体分かつていたから、先程の台詞を  
振ればどんな反応が返ってくるかぐらひは想像がついていた。

ここまで怒るとは予想外だったが。

「あんた、何焦つてるんだい？」

「え？」

怒りに任せて感情を思い切りレイサにぶつけたのに、相手から冷静  
に自分を分析されてしまう。

焦っていることは自分にだつて分かっている。自分だけ取り残さ  
れてしまう事に、焦り以上に恐怖を感じていた。

「正直ね、私がこの部隊であんた達に学んで欲しい事は、武術じゃない  
んだよ。団長もそう言つていた。武術以外で、騎士として、傭兵とし  
て、そしてイリア人として大切なことを学んで欲しいんだよ」

「じゃあ！ 早くそれを教えてよ！」

今まで我慢していたせいもあつてか、怒りが収まりきらない。

親友の初陣や、レイサの言い草も重なつてとうとう爆発してしまつ  
たようだった。

「教えてあげるなんて誰が言つた？ 誰かがやつてくれるなんて、そ  
んな事考えるのはよしな。自分で学ぶんだよ、そんなものは。前にも  
言つたよね？ 新人部隊は考える期間だつて。自分で考えて、答えを  
出さなさいよ。あんた、十を目指すための“一”は何か分かつたのか  
い？」

「それは……」

言葉に詰まるシャニーへ、レイサは頭に手をやって諭してやる。

「武術なんかは、正式な部隊へ配属されてから学んでも遅くない。で  
もね、こういつた考えるつて事は、実戦に出だしたらなかなか出来な

いことなんだよ。時間は貴重だよ？」

レイサの言っている事は分かっている。でも、どうしても納得できなかった。

頭では分かっているけど、どうしても早く上の部隊に配属されたい気持ちで先行してしまう。

レイサの言うとおり、まだ、十の為の「一」も完全には理解できていなかった。

「一」の含んでいるものがあまりにも多すぎて、考えれば考えるほど悩んでしまった。

なぜ、同胞同士が殺しあわなくてはならないのか。なぜ、誰も失いたくないと言いながら自分達は民の為に戦わなければならないのか。

なぜ、正しくないと思っていることを、正義と言い聞かせてまでやらなければならぬのか……。

「なぜ」が多すぎて、考えているとどんどん深みにはまって、出られなくなってしまう。

納得の行く答えを見出せない「なぜ」と戦っていた。

こうやって考えている間にも、民は震え、飢えている。ならば、早く傭兵に出て金を稼いだ方がどれだけ国に貢献できる事か。

その気持ちは他ならぬ「なぜ」から出た、答えにならぬ答えによって打ち消されてきた。

自分が変えたいと思っている手段で国に貢献しても、結局は自分や民に嘘をついていることになる。それでは、騎士の誓いを破るようになる。

イリアの民を助けたい。傭兵によつて金を稼ぐ事は、本当の意味でイリアの民を助けることにはならない。これだけは、色々考える中で自分の確固とした意識に変わっていた。

それでも、自分の置かれた立場や、仲間の初陣などによる焦りから生じる葛藤に、彼女は苦しんでいた。

「でも……い！ やっぱり分かんないよ！ 頭では分かっている……。でも！」

頭の中がぐちゃぐちゃになって、自分でも何を言っているのか分か

らなくなってきた。

その頭に突然飛んできたレイサの怒鳴り声が彼女を凍り付かせた。「そんなにやりたけりや、好きにしな！ その代わり、何があってもあんた自身で責任は取るんだよ。あんたは私や団長が何を期待しているか、何を想っているか、全く分かっていない。もう少し人の心が分かるヤツだと思っていたけど、見損なっちゃったね！」

頭を抱えて悩むシャニーへ、レイサは一言言い放つと向こうへ行つてしまった。

部隊長の居なくなった新人部隊はどうすればいいのか分からなくて、動揺する新人達がシャニーの周りに集まりだしている。

レイサを怒らせてしまった。その罪悪感がシャニーを押しつぶしそうになるが、それを周りの仲間達が励ましてくれる。それに加えてアルマも寄ってきた。

「お前があそこまで言うとは思わなかった。でも、これで稽古ができるじゃないか」

シャニーは下を向いていた。分かっている。レイサや姉が、自分に何を期待しているかぐらいは。

実戦に出る前にもっと色々学んで、人間として大きくなって欲しい……そうに決まっている。それでもなければ、人手不足なのにわざわざ新人部隊へ配属して、稼げる金を溝へ捨てるような真似はしないだろう。それは分かっている。

だが、彼女の心はまだ未熟だった。人の期待に応えるより、自分の焦りや葛藤が表に出てしまっていた。

そして、レイサに突き放されて、うすうす気付いていたそれが嫌と言うほど自分を苦しめる。

いつも、やっつてから後悔する。どうしても自分はこうなのだろう。未熟な自分に嫌気が差した。

そんなシャニーを横目に、アルマは他の新人達に向かって話し始めている。

「邪魔者は居なくなつたんだ。さ、早く稽古を始めようじゃないか。強くなる為だね。強くなって、早く上の部隊に行きたいヤツは……私

と一緒に特訓しようじゃないか。もつとも、私の稽古についてくることが出来るならばの話だけだ」

どういう自信過剰なヤツだと思ったが、一方で皆も早く上達したかったし、何よりアルマの実力については一人で稽古をする様子を見ても明らかだった。

皆は新たな部隊長の指示に疑念を抱きながらも、力を求めついでく。

「シャニー、行こうよ。シャニーは悪くないツスよ」

シャニーもミリアや他の隊員に連れられ、アルマの後を追った。追えば追うほど遠のいていく答えを追い、自らの心の中で死に絶えた何かに気付かぬまま。

そのあと、レイサが部隊を見に来る事はなかった。

稽古中、誰もいない木の上を眺め、シャニーはポツリと独り言を漏らした。

「あたしは……なんてバカなんだろ。皆あたしの事を気にかけて、期待してくれているのに……。レイサさん、お姉ちゃん、ごめんね」

彼女は悔いていた。親友が初陣を踏んだから、という短絡的な理由で早く初陣を踏みたいと考えた自分を。今頃になってレイサの言葉を思い出していた。

—— 剣を振らなければならなくなったときは、それが民の為なのか良く考えろ

民の為に剣を振るう……シャニーにとっては、傭兵すらも民の為に振る剣ではないようにも思えてくる。

だが、これを否定すれば今のイリアはたちまち凍り付いてしまう。再び、彼女は考えることの深みにはまっていた。

その苦しみを払うかのようにひたすらに剣を振る。いつか、民の為に剣を振るうときが来た時のために。

ただこの手から滑り落ちていく、そんな気持ちを振り払いながら。





数日後、その日も朝から稽古を続けていたシャニーは一息入れようと石段に腰掛けて剣を磨き始めた。

入団からずっと大切に使ってきた相棒だ。幾度か改造を施したので騎士団支給の剣でも見た目はだいぶ違って見える。

静かに剣を磨いていると自分の心にへばりついたものが落ちていく。そんな気がする。

レイサは今何をしているのだろうか……。思いにふけているとふいに背後の気配に気づいた。

「お前はシャニーか？」

明らかに見下した敵意すら感じる口調。

この足音は一人ではない。振り向くと数名の騎士がいた。見ない顔、おそらく他の部隊の騎士だ。感じ、自分と近い年。

彼らは近づいてくるとそのリーダーと思しき騎士が覗き込むようにして正面に立った。

「給料泥棒の十八部隊さん、サボってちやダメですよ」

いきなり投げつけられた言葉に一瞬何が起きたのか頭がついてこなかったが、目の前で嘲り笑う連中にみるみる眉が吊り上がっていくのが自分でも分かる。

「給料泥棒?!」

「違うの？ 一度も出陣したことないんだろ？」

クスクス笑う声が神経を逆なでる。面識などない連中だ。反論しようにも相手の言うことは本当のことで言葉が詰まった。

自分だって気にしているというのに。その様子に相手は笑いながらシャニーの持っていた剣を見下ろして指さした。

「部隊長を追い出したって聞いたからどんな奴かと思って見に来たら、やっぱりおかしなヤツだよ。天馬騎士なのになんで刀なんか持っているの？ こいつ」

天馬騎士でも剣を扱うことはあるが極めて稀だ。

空と言う攻撃を受けないアドバンテージと、槍のリーチで相手を支配する天馬騎士にあって、リーチの短い剣を扱うメリツトは余り無い。

まして、シャニーの持っているような刺突に向かない斬撃を主とする剣は、天馬騎士のメリットを消すくらい相性が悪いはずだ。

だが、それはあくまでも一般論。誰も通らない道は通らないの理由があるにせよ、乗り越えたらそれは唯一無二となる。

デイクが認めてくれたのだ。もう教えることは無いと。

「余計なお世話だ！ 剣は自分を自分たらしめるもの。侮辱は許さない！」

思わず怒鳴る。剣をバカにされることはデイクをバカにされるような気がして許せなかった。

実際、教育に赴いてきた何人もの他部隊の部隊長から剣士へのコンバートを提案されてきた。

メンバー構成上、周りが天馬乗りの槍使いばかりなので、地上で剣を振るう事ができるスキルは戦術上大きいからだ。

もちろん、その都度拒否してきた。作戦で地上に降りようとも、誰に何と言われようとも、自分は天馬騎士であり、この剣こそが自分の道と。

「へえ、そこまで言うなら見せてくれよ。その最強の剣をさ。ふふふ……」

ようやくピンときた。この連中は自分が問題を起こしたことを知って、さらに騒ぎを大きくしてやろうと乗り込んできたに違いなかった。

何故そのような事をするのかは分からないが、ここで剣を抜くわけにはいかない。

ぐつと堪えていると彼らの視線が他所に移る。途端、さらに悪意で口角が上向いたのが見えた。

「あいつ、魔導書なんか持つてるぞ。おいおい、この部隊へんなヤツしかいないじゃん！」

魔導書……そう聞こえてシャニーがはっと彼らの視線を追うと、案の定そこにはレンがいてあつという間に連中に囲まれている。

「魔導書って高いんだろ？ 給料泥棒な上に経費まで持つてくのかよ」

「……理解不能です」

突然やってきて謂れのないことを口にする彼らにレンは困惑している。その言葉が彼らを刺激したのか、ついに一人が持っていた槍を振り上げた。

「魔導書でこの槍、どうやって弾くのかな！」

もうこれ以上は見えていられない。飛び出したシャニーは振り回された槍を剣の根元で受け流すと、そのまま柄の先で相手のみぞおちを突いて吹き飛ばした。

「おーおー、剣抜いちやったよ」

吹き飛ばされた仲間を見て嘲笑が聞こえてくる。

「シャニー……」

「話は後にしよ。こいつら……絶対許せない」

「許せなかったらどうしてくれるのかな？ 給料泥棒さん」

剣を相手には向けられない。思った以上に問題になってしまっている。さらに私闘で負傷させたとなれば処分されてしまうかもしれない。

レイサに申し訳なかった。こんな時にあの人がいってくれたらどう解決しただろう。

踏み込んでこないと察した連中が襲ってくる。レンを守ってやらなければ。剣を握る手に力を込めた時だった。

「ぐはっ?!」

突然吹き飛ばす騎士たち。飛んできたのは稽古用の手槍だ。矢継ぎ早に放たれた手槍が騎士たちを捉えていた。

「失礼、いい的だったものでな」

飛んできた方向にいたのはアルマだった。彼女は天馬から降りてくると持っていた槍を相手の首に突き付けた。

「この場に雑魚は相応しくない。消えろ、次はおもちゃでは済まないぞ」

真槍を突き付けられて真っ青になって逃げだしていく。すっかり姿が見えなくなるとアルマは槍を下ろして両手を広げた。

「ま、実際給料泥棒だから仕方ない」

「でも、あそこまで言ってくるって何なの、あいつら」

「あいつらはお前を妬んでるんだよ」

アルマに言われたことにまるで心当たりがなくてきよんととしてしまう。

どうやら第二部隊に今年配属された新人のようだが、何度も実戦に出ているのに、部隊長のイドウヴァがシャニーやアルマを第二部隊に配属しろとテイトに言い寄っているのが気に入らないらしかった。

「そんなの知らないよ。それに、だからって人の剣をバカにするなんてさ」

知らないとは口で言ったものの、内心は不安だった。

周りにこんな評価をされているとは思っていなかったし、レイサともケンカをしてしまった。一体この先どうすればいいのだろう……。

「剣こそ自分たり……か。貫けるものを持っている者は尊敬するよ」

意外な言葉をアルマにかけられて最初こそ驚いたが、やはり自分を貫くしかないのだと察して、俯きながらも手にした剣を見つめる。

今でも、間違ったことを言ったとは思っていない。ただ、周りからの期待と外れているというだけで。

それでも間違いなく現状は望んだものではない。一体どうすればいい？ 俯いた剣の輝きはくすんでいた。

### 第3章 血盟のリペントランス

#### 第1話 一人前の騎士(1)

5月も半ば。部隊長不在のまま新人部隊は稽古を続けていた。

実戦経験者のアルマを中心に展開しているのは、レイサが指揮していた時には決して実施することのなかった実戦的な訓練。

皆は最初こそレベルの違いについていけるか不安だったが必死にかじりついた

ついていけなければ落ちこぼれてしまう。アルマは実力のない者へ手を差し伸べたりは決してしなかった。

誰もが、部隊内の空気が全く別のものになったことに気付いていた。

何とも口では言い表せないような、鋭くて、それでいて何か冷たい空気が流れている。

でも苦にならなかった。今までの淀んだ生暖かい空気よりはマシ。焦っていた。いつまでも新人だからといって騎士団のお荷物では

居られない。

早く正式な部隊へ配属されて、国の為に戦っているという実感が欲しかった。

喋る暇も惜しんでアルマの指揮に従い、彼女もまた初めて手にするささやかな権力に興奮を覚え、そして確信していた。

力のあるものだけが、権力もまた手に入れることが出来るという事を。

レイサの事を部隊長とは皆が認めていなかったということ。

それでもレイサに従っていたのは更に上が存在したからだ。

例えレイサを認めていなくとも、その更に上……団長の権力の前に皆はひれ伏していたのである。

どんな低級な権力を手に入れても、所詮それは仮初のものにすぎない。

アルマの目指しているものはただ一つだった。

「違う！ そんな生半可な突撃では逆に懐に入られる！ 死にたいのか！」

「はいー！」

今ここで自分に付き従っている新人達は、必ず後の自分の部下になる存在。

うまく導いておけば、きつと有利にことを進めることが出来る。

選抜と集中。彼女は新人でも特に自分の実力を慕っている人間に力を注ぐことにした。

だが、彼女にも不満はあった。一番自分の部下になつて欲しい存在が、何か稽古に集中していない。

彼女は自分が半ば見捨てた、もの覚えの悪い新人達に混じつて黙々と剣を振るっている。

せつかく色々と実戦的な稽古を出来るようになったというのに、それをレイサに吹っ掛けた彼女自身があんな基礎的なことばかりしていることに、アルマは疑問を抱くと同時に腹が立った。

「ねえ、シャニー。こういう時つてどうしたほうがいいんすか？ アルマ、全然話し聞いてくれなくてさー。シャニー？」

何度もミリアに呼ばれて、シャニーはようやくその声に気付く。

一度集中すると周りの音が聞こえなくなることは良くあるが、ミリアは首をかしげている。今回はそんな感じではなかったからだ。

「え？ 何、もう一回言つて」

「シャニー、変です。病気ですか？」

レンの心配にも返つてくる言葉は無かった。

ずっと悩んでいた。あの時、自分はどうすればよかったのか。

今でも早く正式な部隊へ昇格したいという気持ちが強くなる。しかし、周りの期待はそうではない。

実力が問題視されているわけではない。それなのに、自分は実力を求めようとしている。

実力は身につければ自分でそれを実感することが出来るが、人間的な大きさをどうやって鍛えればいいのかだろう。

経過を確かめることの出来ないことには、なかなか取っ掛かり難

い。

まして考える事より動くことが得意な人間にとっては苦痛だ。

終わりの見えない修行のその横では、同期が初陣を経験し、国へ貢献している。

有限の千歩より、見えない一步のほうがどれだけ辛くて、絶望する事だろうか。

シャニーは部隊の雰囲気が変わったことにもいち早く気付いていた。

その雰囲気自分が求めたものではないことも。

この刺す様な冷たい雰囲気。皆の心が離れ離れになっていくような気がしてならない。

その原因を作ったのは、他でも無い自分。そう考えると、とてつもない罪悪感が襲ってきた。

こんなことを望んでいた訳ではないのに。描いた希望、浮き出た末路。湧き上がる後悔。

(あの時、自分があんなことでレイサさんと言い合わなければ……)

過ぎた事はどう悔やんでもどうする事も出来ないから、これからをどうするか。

シャニーはこの周りにいる大切な仲間たちを助けることを最優先とすることに決めた。

レイサは下手な仲間意識を捨てろと言っていたが、やはり仲間は大切な仲間に変わりないし、天馬騎士団の騎士と言う前に自分達は同じイリアの民ではないのか。

手を取り合ってイリアを良くしていこうと考える事が間違っているとは思えない。

間違っている事は素直に間違っていると認め、自分が認められないものには妥協せず、自分がこうと考えたらそれを追求する。

だから悩むことなんて今まであまりなかった。今迄は、自分のことだけを考えていれば良かったから。

経験したことのない悩みに答えを求めて彷徨う眼差しからは、朗らかさが失われて霧の湖のごとくぼやけていた。

仲間から聞かれた事を教えながら、自分も稽古を続ける。

「シャニーの周りにはアルマの言う“足手まとい”達が集まっていた。ルシヤナにミリアそしてレンもいる。」

「ここには、アルマの周りにいる“精鋭”たちにはない雰囲気があった。」

周りの仲間とその後他愛もない世間話で盛り上がる。

悩みがあっても、仲間と一緒に居ると自然と笑顔になれる。その笑顔に仲間たちはまた集まってくる。何か、一緒にいたいと思わせるものがある。

しかし、そんなシャニーに腹を立てている人物もいた。

稽古をしているのか遊んでいるのか分からない、笑っている連中の許へ影が忍び寄りシャニーの背後へとまわる。

「!?」

ガキンという鋭い金属音が響き、皆は目を白黒させてそちらの方に注目してさらに目をむいた。

親友同士であるはずの二人が……アルマがシャニーに向けて真槍を突き向けていたのだ。

突きつけられたシャニーのほうは、顔を真っ青にしながらも槍で相手の槍の柄を捉え、何とか被弾を免れていた。

「なっ……何するんだよ!」

「ほう、お前も槍を使うことがあるんだな。手に持って遊んでいるだけかと思っただぞ」

「アルマッ、あたしを殺す気なの!?!」

不意打ちで殺されかけて激怒するシャニーを冷ややかな目付きでアルマは睨みつける。

「ふん、それで死ぬなら、お前はその程度の器だという事じゃないか。それではどの道、戦場で死ぬ」

狂気に取り付かれたのかとシャニーは思った。親友に突然武器を振りかざし、それでいてなんの悪びれもない。

周りにいた連中も血の気が退いていた。こいつに目を付けられた



ら、自分達も命が危うい。誰もがアルマに向かって警戒心を抱く。

「そうじゃないでしょ?! 一体何のつもりよ」

シャニーはアルマの槍を自らの槍で弾くと、そのまま彼女に言い寄る。

一緒に稽古しようとか言う話なら、真槍で攻撃してくる道理がない。

先程まで和やかな雰囲気だったその場所が、一気に修羅場に変わる。

「お前こそ、一体何のつもりだ」

「は? 何言ってるのよ。あたしは何もしてないじゃない!」

不意打ちを喰らった拳句、攻撃を仕掛けてきた相手に追及までされてシャニーは頭に血が昇っている。

信頼していた親友にいきなり命を狙われて冷静でいられるはずもなかった。

アルマはそんなシャニーを、そのままずっと表情を変えずに睨み続ける。

そんなこう着状態が暫く続いた。周りは固唾を呑んで見守るしかなく、今までに経験した事のないような重い雰囲気は新人部隊を包んでいた。

どれくらいそうしていただろうか。

その誰もが破って欲しかった重い均衡を破ったのは、他でもなく騒ぎを起こした張本人だった。

「何もしていない……? 良くそんな事を口に出せるな!」

「なんだ?!」

自分は何も悪くない、相手が一方的に悪い。シャニーはそう考えていたし、周りもいきなり斬りかかったアルマに非があると思っていた。

「何もしないとはどういうことだ?」

再度、アルマがシャニーに問う。その目は怒りに満ちていることが誰からも分かる。

問われた当のシャニーは、質問の意図を汲み取れずただ同じ答えを繰り返すだけ。

「何もしてないのに、なんであたしが責められるのよ」

その言葉を発した瞬間、アルマは右手に持っていた槍に渾身をこめてシャニーに向けて突き放った。

間一髪で避ける。シャニーを捕らえ損ねた槍は、そのすぐ後ろにあった木に深々と突き刺さっている。

その高さは……こめかみ付近。目の前を青い髪が舞う。捕らえられていれば、今頃自分はこの世に確実にいなかった。生きた心地がない。

アルマの目は真っ直ぐ槍の突き刺さった部分を睨んでおり、シャニーが槍を握りなおしたことを確認するとその目はすぐさま彼女へと戻された。

「アルマこそ、どういうつもりなの?! いくら親友でも、こんな事するなんて許せない!」

とうとうシャニーもキレてしまった。

いつも穏やかなだけに、一旦こうなってしまうと、仲間たちは何か鬼神でも見るかのような恐怖感に陥ってしまう。

どう見ても危険な雰囲気。このままでは部隊員同士の私闘へと発展する。

部隊長がいない今、彼女らを止められるものはいない。

以前から正反対の性格だから危ないとは思っていた隊員たちだが、ここまで最悪のタイミングとは。

しかし、アルマは槍をすつと退くとシャニーと距離を開けた。

「お前は、そんな無責任な奴だったのか。その程度だったのか」

「どういふことよ!」

「誰が最初に煽ったのか、良く考えてみる」

シャニーの怒りを軽く流して、アルマは自分に教えを請う者達の許へ帰っていくが、言いたい放題言われた方は腑に落ちるわけがない。

そのままアルマの背へ斬りかかろうと一歩踏み出した、そのときだった。

「シャニー、ダメツス！ あいつの思うつぼツスよ！」

「落ち着いて。シャニー」

ミリアやレンに、槍を握って震える手を押さえつけられ、止む無く穂先を下ろして振り向いた彼女は、周りが動揺した表情を見せる事に気づいて、ばつが悪くなり視線を逸らす。

未だ腹の虫がおさまらない様子の彼女にルシヤナが歩み寄ってきて肩に手を置いた。

「リーダーが動揺してどうすんのよ」

「リーダーって……」

「何言ってるの。私たちにとってはあんたがリーダーみたいなものだよ」

そのとき彼女はとっさに、見習いの頃、軍師が言っていた言葉を思い出した。

……将が動揺しては、軍全体にそれが広がる……

将でないにしろ、部隊長がいらない今はそれに近い立場におかれているといっても過言ではなかった。

これ以上皆に迷惑をかけないためにも、シャニーは怒りをぐつと腹の中に押し込めた。

「ごめん、みんな。あんなの放っておいて稽古を続けよう？」

笑顔で皆に話しかける。やはり思ったとおりだった。

自分が笑顔を見せた途端、周りの顔からも少しずつこわばりが消えていく。

再び剣を振るい始めるが、シャニーは頭の中で何か引つかかったまま。

皆に迷惑をかけた……アルマは無責任という……煽った……。

考え込んで彼女は稽古の手も休み休みになっていく。また考えなければいけないことが増えてしまった。



翌日、シャニーはまた幼馴染連中と昼食をとっていた。

館入り揚げパンと辛味スープ。貧しいイリアでは体を温めてくれるこれらは結構な昼食メニューだ。

気を許せる仲間とお喋りが、心までも温めてくれる。

この昼の1時間の為に午前は頑張れるし、午後からの気力も湧いてくる。何にも変えがたい楽しい時間。

今日もいつもどおり、他愛もない会話を続けていた四人だが、ウツデイの一言で雰囲気が一変する。

「シャニー、部隊長追い出したんだって？」

「えー、誰からそんな話を聞いたのさ！」

いつも軍医として城の中で事務的な仕事ばかりのウツデイが事件を知っていた事に酷く驚いた。

——— 妙なことを聞く

メガネをずり上げる彼の顔にはそう書いてあり、彼女の疑問に悪気もなく答える。

「誰からって、皆知ってるよ。今年の新人は変わり者が多くなって皆噂してるよ。特に長老組は、『世間知らずが多すぎて困る』と、あまり良い目で見えていないようだよ。気をつけなよ？ シャニーはこうと考えると周り見えなくなっちゃうから」

どういう意味よ！ と反論したかったが、言い返したくても返せる状況ではないことは分かっている。

あの時も、頭に血が昇って後先考えずの行動に出してしまった。反省するしかなくて、しずしずとスープを口に運ぶ。

「ねえ、部隊長いないんだったら、あんたがボス格なの？」

追い討ちをかけるようにのしかかるセラの言葉。

しかし、同時に何か胸に痞えていたものがポンツと飛び出たような、そんな気分にも陥った。

自分の悩んでいた事や分からなかった事の辻褄がぴったり合った気がする。

(アルマが怒った理由も……そうか、そういうことだったんだ)

シャニーはセラたちの声が聞こえないほどに、自分の世界に入り込んでしまっていた。

——部隊長を追い出したのはお前のクセに、何もしない  
何もしていないのだから責められる道理がない……のではなかつた。

何もしないからこそ、責められるのだった。

いや、何もしていないわけではない。火種だけ熾しておきながら、後は知らぬ顔でいた。

部隊長を追い出してしまったことへの後悔の念でそれどころではなかった……それは単なる言い訳。

自分が行動を起こしたせいで、他の新人も妙な色眼鏡で見られる事になったし、部隊の空気も一変してしまった。

自分の起こした行動の影響力の大きさは、予想以上だと思ひ知る。

——無責任な奴

アルマが怒っても仕方ないと彼女は思った。

(中途半端は周りに迷惑をかけるだけだ)

そう悟ると急いで揚げパンを口に詰め込み、食器を片付けもせず走り去っていった。その後をルシヤナも追う。

「ちよつと！ どうしたのさ！」

「食べてすぐ激しい運動をすると体に悪いんだぞ！」

残されたウツデイたちの制止も食堂の雑踏に掻き消されていた。

伸ばされた手は後を追うこともできず、何とか彼女を助けてやれないものかと黙ってしまった。

「どうしたのさ、ウツデイまで」

セラが一人だけ、事情が飲み込めずきよとんとしていた。

## 第2話 一人前の騎士（2）

シャニーはそのまま部隊へは戻らなかった。

カルラエ城中を走り回る。廊下も室内も所構わず駆け抜ける。周りからは何事かという好奇の視線を浴びるが、本人は気付いていないのか気にしていないのか。

「あら……？ あれはシャニーじゃない。何をしているのかしら」

とうとうその鉄砲玉は姉に見つかってしまった。

妹の腕を掴んであっさり暴走を止めるあたりはさすがに手馴れている。

「ごらっシャニーさん、廊下は走ってはダメと何度言わせたら分かるの！ もう少し落ち着きなさい！」

「うるさいなあ、今忙し……げっ、お姉ちゃん?！」

腕を急に捕まれて体だけ飛んで行きそうになった。

おまけに説教までされ、ついついいつも姉にしていたような反応をとってしまう。

その相手が本当に姉だと気付いたのは、相手の顔を見てからだっただ。

「お姉ちゃんと呼んではダメと何度言ったら分かるの！ 大体貴女はねえ！」

くどくどくど……姉の説教をうんざりしながら聴く。

耳を動かせるなら、こういうときに耳を自分で塞いでしまいたいとすらシャニーは思った。

「もう！ 分かってるよ！ そんな大きな声で言わなくても分かっているよ」

「分かっているなら直しなさい！ 直らないなら分かっているのと同じよ！」

「そんなすぐ直るわけないじゃん！」

「何年前から言っているのよ！ 口答えするのもいい加減にしなさい、シャニー！」

暫くの間、廊下を静寂が包んだ。妹が黙するのを見て、テイトも少

し怒りすぎたと反省する。

だが、自分は間違ったことを言ったわけではないと謝るに謝れず  
いた。

「へへへ、だーんちよ！ ごめんなさい！」

タイトが妹へどう繰り出そうと頭を悩ませていると、シャニーから  
いつもの人懐っこい顔を見せられてしまった。

彼女にとっては手痛い先制攻撃であった。

「……少しも反省していないようね」

「反省したよ、すつごく。でもね、あたし嬉しかったよ」

いつも叱られれば少しはしよ氣る妹が今回はもう笑っている。

それどころか、自分を茶化してくる。その上、今回は叱られて嬉し  
いと言った。

(……何か変なものでも食べたのかしら)

妹の食い意地を知っているからタイトは本気で疑っている。

「だって、お姉ちゃんが久しぶりにあたしの事をさん付けしないで呼  
んでくれたんだもん」

「あ……」

言われてからタイトは氣付く。口答えばかりする妹に腹が立って  
いたとは言え、部下である人間に妹として接してしまった。

「だってさ、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ。そりや天馬騎士団の団長  
ではあるけどさ。お姉ちゃんはいつでも、あたしにとってはお姉ちゃ  
んだよ。さん付けとか、なんか遠い人になっちゃったみたいでヤダ  
よ」

妹は本当に素直だった。素直というか、子供というか……。無垢と  
いうか。

肩肘張って生きていることが自分でも分かっているタイトは、時々  
妹の天真爛漫さが羨ましく思えた。

「……何を言っているの。私にとっても貴女は大切な妹よ。前にも貴  
女はそう私に言わせたじゃない。でもね、今は仕事中的なの。礼儀をわ  
きまえなさい。貴女はもう少し……」

「あ、そうそう！ 今レイサさんは何処にいるの？」

「え？ 武器庫にいるはずよ。って、人の話を聞きなさい！」  
テイトが追いかける間もなく、シャニーは走り去っていた。

(……やっぱり反省してないわ……)  
追いかける気力も抜けていく。

シャニーは姉に教えてもらった場所を目指して一目散に駆けて行く。

廊下を走るなど姉に注意された事など、もはや頭の片隅にもなかった。

彼女が向かう倉庫ではテイトが言っていたとおり、レイサが倉庫の片づけをしている最中だ。

「ったく、ホント天馬騎士団は貧乏騎士団だね。ロクに売れそうな武器を置いてないじゃないか」

その職業柄、目利きに優れている。いくらイリアが貧しいとは言っても、右を見ても左を見ても鉄製の武器しか置いていない。

たまに見つけるよさそうな武器も、銀製かと思つて手に取つてみれば鋼製。

天馬はスピードでは竜騎士を凌駕するが、パワーが圧倒的に劣る。このような重い槍は悪戯に機動性を低下させるだけ。

仕方なく、比較的軽量で扱いやすい鉄製の武器を集めて整頓する。質の良い武器が欲しい。それは誰もが願う事であったが、今のイリアの情勢では叶わない話。

騎士団が多く点在し、小国乱立とも言える状態は一つの騎士団による全土の支配を防ぐ反面、財力が分散して国として強力な基盤を形成する事の妨げとなっていた。

イリアの統一。それはイリアの民の夢である。

イリアの中でも特に人望の熱い聖騎士ゼロットも、なかなか各騎士団を一つにまとめるということに手を焼いていた。

それは人間の性、欲から来るもの。人は、一度手にした力をそう簡単には手放したがない。

表面上ではゼロットの事を慕っていても、やはり内心では、自分こ



そがと短剣を忍ばせている。

それが権力人の性だ。レイサはそれを嫌と言うほど知っていた。姉がその中心にいたのだから。

姉の傍にいた部下の殆ども、結局は権力を求めて力を持っていた姉に集っていただけ。

姉はよくイリアの村々を訪ねては、皆の無事を確認していた。その傍らに、いつも部下を従えながら。

その連中は後に皆幹部になっていた。彼らは何とか団長に顔を覚えてもらい、気に入ってもらおうと必死であったに違いない。

その中には、あのイドウヴァもいた。常にシグーネの傍で愛想笑いを振りまいていたのを覚えている。そして姉の死後、彼女はそれを悲しむ事もなく、次期人事のことに躍起になっていた。

(人間って何でこう汚いんだろうね。私が言えた立場じゃないか。……ん?)

レイサはふと、後ろから聞こえてくる何の警戒もない足音に気付く。

ばたばたと音を立て、全力で走りこんでくるその足音に、彼女は振り向いて身構えてしまった。

「あー！ いたいた、レイサさん！」

身構えて損をした。そんな気持ちを顔に表さないように、レイサは元気の塊に対峙する。

「何、私に何の用？」

鬱陶しそうに答えてやったが、シャニーも分かっているらしい。いつものような笑顔では話してこなかった。

「あのね、レイサさん。あたし、レイサさんに謝りに来たの」

そう言うや否や、彼女はレイサに向かって頭を深々と下げた。

レイサはそれをすぐに止めさせようとするが、彼女は止めなかった。

「あの時はごめんなさい！ あたし、無責任な事言っ。お願い戻ってきてー！」

「何で戻らなきゃいけないの？ 好きなようにすればいいじゃない」

「だって、レイサさんがいなくなってから、部隊の雰囲気さがらりと変わってしまつて……」

そこまで言つたシャニーの口を、レイサは手で塞いで睨みつけた。「それは違うね。あんた達が変わったんだよ」

シャニーも今回は退かない。自分の口を塞ぐ手を跳ね除けて、頭をきつと持ち上げて言い返す。

「だから！ レイサさんに戻ってきてもらえば……！」

何か、頬が熱い。シャニーは今までに感じたことのない感覚に戸惑つてしまう。

頬をレイサの手に打たれていた。彼女は腰に手をあて、威嚇するよくな格好で呆然と立ち尽くすシャニーを叱つた。

「邪魔だからつて追い出しておいて、收拾がつかなくなったから戻つて来いって？ あんたは何て言つて謝つたつけ？ 無責任で悪かつた？ 何処まで無責任なんだい、あんたつて子は……！」

「そ、それは……」

「第一、あんたは私の稽古の内容で良かったと思つているのかい？」  
なんて勝手な事を言つていたのだろうか。悔しかった。レイサにここまで言われないと分からない自分が。

しかし、だからと言つてここでしょげる彼女でもなかった。

「……いえ、あんな内容では、いつまで経つても上達しないと思つてる」

思つたとおりの答えが返つてきた。

「なら、そう簡単に謝るんじゃないね。あんたが私を追い出した理由は、稽古がぬるいからじゃないか。自分の言つた事には責任を持ちな。あんたはイチニンマエの天馬騎士なんだから？」

「でも……あたしが悪い事は……」

「言つたことを即撤回するような奴は誰にも信用されないよ。一度決めた事は、自分で何とかするんだね。誰かにやつてもらおうなんて甘い考えは捨てな。叙勲を受けたイチニンマエの天馬騎士ならでできるだろ、そのぐらい」

レイサは再び倉庫の整理に取り掛かつた。

それ以降はどれだけ話しかけても反応してくれない。それでもしつこく話しかけてくる彼女の首に、レイサはどうとう短剣を突きつけた。

「鬱陶しいねー。一つの事もきちんと出来ないくせにウダウダ言ってるんじゃない！ まあ、私は知らないから精々頑張るんだね。イチニンマエのシャニーさん」

シャニーから短剣を離し、そのまま体も突き飛ばした。

その顔は彼女を嘲り笑っていた。出来るものならやってみろと言わんばかりに。

突き放されたシャニーはしよ気るところか、その反応に逆切れしてしまう。

自分が悪いからとは言え、こんなに謝っているのに、ここまで馬鹿にされるなんて。

「分かったよー。もう頼まないもん！ レイサさんがいなくなっちゃって、いい部隊にしていくんだから見ていなさいよ!!」

シャニーは来た時より更に大きな足音を立てながら、倉庫を後にしていく。

怒っている事をアピールするように、壁に立てかけてある槍を思い切り蹴飛ばしていった。

その後姿は決意と言うより、意地。肩を張って歩いているのがよく分かる。

レイサはほつとしていた。これはある種の賭けだった。

ここでもし彼女が思惑通りに動かず、しよ気てしまっていたら彼女は間違いなく潰れていた。

人によって叱り方は変わって来る。間違った叱り方をすれば、間違った方向へその人は進んでいく。

褒めることより遥かに難しさに頭を悩ますのは叱る事であり、叱り方。

その人を本当によく見て、よく知っていなければならぬ。

「やれやれ、とりあえずはうまく行ったね。まあこれであの子には嫌われちゃったかもしれないけど。……せつかく私の事を好きだと

言ってくれる人ができたって言うのに、私って本当にバカだねえ」  
整理したのにシャニーに蹴られてばらばらになった槍を、一本一本  
片付けながらぼやいた。

### 第3話 独善の末路（1）

——エレブ新暦1000年 6月

「ちよ、ねえ……何これ、重……っ」

翌日から、シャニーのやり方は一変していた。

ミリアは朝一番にシャニーから手渡された槍の重さに顔を真っ赤にしている。

彼女たちの手に握らされたのは、使い慣れた修練用の槍ではなかった。

「鋼の槍！ 天馬騎士ならそのぐらい誰でも扱えるでしょ」

「そうじゃなくて……重いツスよこれ！ これじゃ天馬の上で扱えないツス」

「シャニー、あんただってこんなに使ってるの見たことないよ？」

ミリアやルシャナを皮切りに周りから口々に飛んでくるブーイング。

それを彼女は剣の鞘で城の壁を思い切り叩き、大きな音を立てて鎮めた。

「実戦ではそういう槍を使うの！ いやなら天馬騎士辞めれば?! ほら、行くよ！」

ミリアとルシャナは顔を見合わせた。

周りもシャニーのまるで人が変わったかのような態度に当然のように疑問を感じて背を追う足取りがぎこちない。

こんな事は初めてだった。疑問に抵抗感も加わった妙な気分で見えていく。

「こんな稽古……厳しすぎてついていけないよ」

シャニーが指示した稽古は、ほぼ実戦と同じようなものであった。それを真槍でやっているのだから危険極まりない。

実戦と稽古では話が違う。皆、仲間同士へ真槍を突き向けることに抵抗を隠し切れない。

「何言ってるの！ このぐらいこなせなきゃ実戦では生きていけない

よ。強くなりたくないわけ？ もしそうなら稽古から抜けていいよ。こつちだつて真剣なんだから！」

皆はまた顔を見合わせ始めた。一体何があったと言うのだろうか。昨日の午後の稽古に顔を出さなかったと思つたら、今日のこの振る舞い。

今まであんなに優しくかつた彼女がまるでアルマと同じ、いやそれ以上いきつい剣幕で強硬な稽古を強要してくる。

やめたくても、皆はやめるわけには行かなかつた。

アルマに見捨てられ、もう彼女しか自分達に槍を教えてくれる人物はいないのだ。

今までも十分真剣だつた。だが、それは当たり前。仕事なのだから。

今要求されている真剣は今までのものとは違う。それが実際に何であるのか。具体的には分からなくても皆は肌で感じ取っていた。

「ねえ、シャニー。どうしちやつたのよ！」

「そうツスよ。そんなイライラしてるなんてシャニーらしくないツス！」

やはりおかしい。そう感じた二人は顔を見合わせてシャニーに駆け寄つた。

ルシヤナ達は稽古を強行するシャニーを止めようとする。

「あたしは、自分の責任を全うしてるだけだよ！」

彼女は剣を取り、再び向こうで槍をぶつけ合う同僚の下へ天馬に乗って駆けて行つてしまった。

残された仲間も仕方なくそれを追う。何か不安だつた。部隊の空気がまた一段とささくれ立っていく。皮肉にも、それを最も嫌っていたシャニーの手によつて。

感情豊かな彼女が何か焦っている事は、誰にでもすぐに分かつた。だが、それが何なのか分からないのはどうしようも出来ない。

「ふ、アイツもようやくその気になつたか。これで面白くなつてくるな」

その様子を見て喜んでるのはアルマただ一人。

現状を壊す事を手伝ってくれる、ある程度実力のある人間がようやく動き出した。

(これで私も思う存分志へ突き進む事が出来る)

シャニーたちの様子にアルマが安堵するように再び自分の部隊へ戻っていく。

それを木陰からレイサがずっと見つめていたが、アルマは気付いていないようであった。



今日はいよいよの季節外れな吹雪。流石の上位部隊も吹雪の中では訓練は出来ない。

皆は仕方なく、各地の騎士団や貴族と締結した契約書などの整理をしていた。

非情なまでの単純作業。第二部隊のイドウヴァたちは整理も程ほどにして、井戸端会議を開いていた。

「よく降る雪ですね」

「まったく。降ってくる物が金なら誰も文句は言いませんけど、雪ではね……」

外で降りしきる雪は、自分達を苦しめる事にしか能がない。

雪がなければ、そう考えた夜が幾夜あっただろうか。しかし、それが叶う事は未来永劫ないだろう。

イリアが夢に対してストイックな考えが先行するのも、この自分達の間ではどうしようも出来ない雪の重みがあるからかも知れなかった。

夢を語る暇があるなら、現実と向き合え。それが一般的な考えになっってしまった。

そして傭兵という厳しい世界に身を置くことで、いよいよ現実しか見えなくなっていく。命を守るために。

「ん？」

ふと窓辺に移したイドウヴァの視界に雪の中で動くものが入り、彼女は目を疑った。

新人部隊がいつも自分たちが訓練をしている場所で稽古をしてい

たのである。

「ねえ……、寒いよ。無茶しないで今日は休もうよ……」

「止めたければ止めればいい！ やる気がないなら降りて！」

その光景は異常であった。こんな吹雪の中、天馬を駆って槍を振る。実戦でもまずありえないほど過酷な事を、新人部隊がやっている。

そして、それを指揮しているのはあの生意気な女盗賊ではなく、団長の妹。

一体何が起きているのか、イドウヴァは理解できなかった。

「あの子、この頃人が変わったように特訓してらって噂になってる子ですよ。部隊長を追い出してまで」

部下から聞かされ、イドウヴァは更に違和感を覚える。

彼女は真っ先に独り黙々と作業をしているであろう団長の部屋へ入っていく。

「団長、よろしいのですか？」

「あら、イドウヴァさん、どうしたのですか？」

「やはり、あの盗賊では皆の信頼を得るには荷が勝ちすぎたようです。団長の妹さんが、レイサを追い出して部隊を指揮しているようですよ」

それを聞いてティトは持っていた契約書類をばさりと落とした。

自分の目の届かないところで、妹がとんでもないことをしていると聞かされて頭が真っ白になる。

望んでいることと全く正反対の事を妹がしているなんて。

「な、なんですって?! 本当ですか?!」

「本当です。現に今、この吹雪の中で部隊を引き連れて外で訓練しますよ」

ティトは慌てて窓にしがみつく。そこには、にわかには信じがたい光景が広がって頭がぐわんぐわんとしてくる。

騎士団を統括する立場の中、なかなか彼女らまで目が行き届かなかったとは言え、ここまで深刻な事態が引き起こされているとは思っても見なかった。



「レイサさんは?!」

「あの盗賊なら、倉庫じゃないですか? この頃ずっと何かしてますよ。仕事が無くなったことを良いことにサボっているか、何か企んでいるのでしょうか。早急に彼女も何か対策を立てないと……」  
イドウヴァが言い終わらないうちに、タイトの足は倉庫へ向けて駆け出していた。

一方倉庫では、相変わらずレイサがごそごそしていた。

彼女は手に何か本らしきものを取り、それをずっと眺めている。

その彼女の高い耳が、倉庫へ走りこんでくる足音にいち早く気付いく。

「おや、団長さんじゃないか。廊下は走るな」  
「じゃなかったのかい?」

彼女は本から目を離すと、走りこんできた空色の髪の女性に声をかける。

珍しく息を弾ませて廊下を走ってきたことに違和感を覚えたが、どうしても茶化してしまう。

「レイサさん、どういうことですか?!」

「んー? 何が?」

「シャニーが……うちの妹が、レイサさんを部隊から追い出して好き勝手やっていると聞きましたが」

「へえ、あいつ頑張ってたんだ。さすがあんたの妹だね」

あまりにも他人事な返答に、タイトは調子を狂わされてしまう。

部下が上官を追い出して部隊を指揮するなど前代未聞だった。

——何をそんな暢気なことを言っているんですか

そう言おうとしたタイトへ、レイサが先に繰り出した。

「そんなことよりさ、見なよ、これ」

言われるままに、タイトはレイサが持つ本に目を下ろした。それは古いアルバムだった。

寒いイリアではカビも生えずに、キレイな状態で残っていたようだ。

中をよく見ると、何十期か前の新人部隊の集合写真のページだった。

「これこれ、一番前の列の一番真ん中、これ姉貴だよ」

レイサが指差す場所に座っているのは、若い頃のシグーネだった。団長のときに見た厳格さにはそこにはない。優しそうな笑顔が写真の中で映える、美しい女性。

ティトは、自分の知らない元団長に思わず息を飲んでしまう。

(この瞳……ユーノ姉さんと同じような……優しそうな顔……)

「はあ、いつからあんな風になっちまったんだろうね。姉貴の優しさは、いつの間にか打算に変わってた。滅多に笑わなくなった。団長になるってのはそういうことなんかな?」

レイサの目は本当に悲しそうだった。悲しいと言うより寂しそうでもある。

ティトは元からそこまで感情を表に出すタイプではないが、自分にもそれが当てはまっている事に気づいた。

この頃笑っていない。

「私はシグーネさんのように優しいとは言えないですが、やはり笑わなくなっています……」

「いや、あんたは気疲れしてるだけさ。姉貴が笑えなくなった理由とは違う。あんたは、姉貴とは正反対だよ。今のところは、ね」

慰められているのかどうかよく分からない。

だが、シグーネが笑えなくなった理由。それが知りたくて仕方がなかった。

シグーネの事は騎士としては憧れていたが、笑えなくなりたくはなかった。

「なぜシグーネさんは笑えなくなったのですか?」

「あんたは知らなくていいよ。少なくとも、あんたが目指してるものを達成できれば、そんな人は出なくなる」

教えてくれなかった。この人はいつもそうだ。自分で考えろという事なのだろうか。

しかし、彼女ははっとした。また、彼女のペースに持って行かれ、本

題を忘れかけていた。

レイサといい、シャニーといい、どうしてこうも自分のペースを崩す人間がまわりに多いのかと少し萎える。

「ところで、シャニーが好き勝手やっていると言うのは本当なのですね？」

「ああ。現状に不満なら自分で何とかしろとは言ったよ？」

「しかしそれでは、レイサさんの立場がないじゃないですか」

すでに末端ではあちこちで噂になっているらしい。

追い出した側も、追い出された側も、黒い噂の種となって嘲笑されていた。

レイサはそんな事お構いなしと言った感じだ。現状の価値観などどうでも良いといった構えである。

「あいつはね、国を好転させる為のいいモノを持つてる。でも、今のままじゃダメだね。壊したのが自分なら、新しく創るのも自分の仕事さ。それは教えた。だから今それを実践してんだよ、あいつは。あいつなりの方法でね」

「でも！　いくらなんでもやり方が強硬すぎます。団長命令として止めてきます」

テイトが小走りに倉庫を出て行くこうとする。

だがそれが、何か威圧されるような、黒い瞳によって封じられた。

足がすくんで動かない。その瞳の持ち主は、どう考えても後ろにいる第十八部隊長だった。

「ダメだよ、特別扱いはしないんだろ？」

「しかし！」

「確かに、あのままじゃ姉貴と同じ道を辿るね。でも、そこで私たちが助けたら何もならない。自分で自分の間違いに気付かない限り、同じ失敗を繰り返すよ」

団長として、危険な事をする者を放って置くわけには行かない

。だが、レイサの言う事も一理ある。間違いは指摘して、正してやるのが親切なのだろうか。

何か、実の姉である自分よりもシャニーの扱いに慣れているようで

不思議な感じだ。

「……わかりました。暫く様子を見ることにします」

「なあに、あいつならきつと上から教えられなくても、周りから教えてもらえるさ。命令と仲間からの指摘じゃ、重さが全然違うからね。だから仲間は大切にしなきゃいけないんだよ。それを忘れかけてる。姉貴のようにね」

レイサはアルバムを勢いよく閉じるとキャビネットの中にしまい、思い切り伸びをしながら倉庫を出ていく。テイトもそれに着いていく。

「ま、何もしない部隊長じゃ、部下が不満に思うのも仕方ないことさ」「とんでもない。貴女は新人達の事をよく見て、正しい方向へ伸ばそうとしてくれています。でも……それなのにあの子達に理解されなくて、何か不憫です」

テイトはまるで自分のことのように残念がる。

こんな気遣ってくれているのに、彼女らにはレイサはただ部隊を引つ掻き回して出て行ったとしか映っていないだろう。

「いーんだよ！ 悪者を倒して団結すりゃ、いい雰囲気じゃない」

レイサの言葉に、テイトはやるせなさを感じずにはおられない。

彼女は、わざと悪者を演じているようだった。彼女らに花を持たせるために。

「今はね、将来皆を引つ張っていけるような奴がいるかどうか探してんのサ。で、一応見つけたは見つけたけど、どっちも今んとこ大切なものが欠けてるし、光るモノも磨き方が足りないし」

困ったものだど両手を広げる眼差しは優しい。まるで妹を語るかのようなだ。

だが、その眼が急に厳しくなる。腐るか伸びるか、勝負に出たのだから今は見守るのみと。

「自分で見つけなければ意味がない。私はそれを後押しするだけサ。だから、もう少しだけ待ってあげなよ。お姉ちゃん」

テイトの肩をポンポン叩くと、そのまま廊下の角を曲がって行った。

彼女には自分の心を見透かされているようだった。

特別扱いはしないと云いつつも、どうしても気にかけてしまう自分。

皆に厳しいくせに、自分には甘く感じて、テイトは恥ずかしかった。「あー、言い忘れた。あんたも少し休みなよ？ 気疲れは病の元だよ！」

向こうから再びレイサの声がした。心に沁みわたる労いの言葉。テイトにとっては、もう一人の姉であった。

◆ それから暫くして、新人部隊は別部隊かと見間違えるほどになっていた。

シャニーとアルマが中心となって精鋭部隊に勝るとも劣らない鍛錬法を採用し、朝から晩まで稽古に励んだ。

隊員たちはどんどん腕を上げてきている。数ヶ月前まで天馬に乗った事もなかった少女達には思えないほどに。

早く昇格するために、皆必死になっていた。

稽古についていけない者は定時後に居残りで特訓し、皆との差を出る限り埋める。

その何か殺気立った様子に他の部隊も何か感化させられたようで、いつも適当に済ませる稽古を、修練用の槍から鉄の槍に持ち変えて励む。

今日もその様子を、ニイメがゆっくり歩きながら眺めていた。

カルラエ城は、彼女の日課である散歩のコースの一つ。

最近の変貌はレンから聞いて知っている。

彼女は騎士達が稽古をする様子を眺め、槍と槍が激しくぶつかり合う音を足元の落ち葉をかき回すことで掻き消しながら歩く。

「イリアは変わりつつある……。ここも昔とは雰囲気が違うね。だが……この雰囲気は好きにはなれないね。騎士共は動機と手段を履き間違えているよ」

彼女はブツブツと老人特有の愚痴を漏らしつつ、城壁の周りに沿ってそのままゆったり歩む。

いつもは城に立ち寄って一服してから帰る彼女だが、今日はそのまま城門を素通りして山へ帰っていった。

確かに天馬騎士団は生まれ変わった。だが、生まれ変わって早々に道を踏み外しそうになっている。

しかもそれが、こともあろうに新人達の手によって引き起こされているのだ。

まだ何も知らないヒヨッコたちの行動で騎士団が揺らいでしまうとは、どんな軟弱なのだろうか。

ニイメには騎士団の上層部が何とも言えぬ墮落した日常と暗黙の了解のみで出来ているような気がしてならなかった。

ちよつとした雪崩で決壊してしまうような、そんな脆弱な基盤。

これでは変わったとは言えない。騎士達の心はまとまっていけない。

ニイメはそう感じていた。

墮ちた騎士達の、馴れ合いとも言える生ぬるい日常。

戦場で統率の取れた行動が出来ず、戦死者が多いというのもうなずける話だ。

天馬騎士団が騎士団として真の意味で生まれ変わるには、まだ時間がかかりそうである。

「きっかけがないとダメだね。きっかけなんて何処にでも転がっている。転がっているきっかけを、石ころとしてみるか、宝石としてみるかの違いだよ」

山の何処からか、仙人の声が聞こえてくる。

彼女は不安でならなかった。このままではいずれイリアは分裂してしまう。

今は騎士団同士が表面上は手を取り合い、イリアの開拓に血心を注いでいる。

だが、その表面上の馴れ合いすらも無くなるときが、このままでは来る。

新人達に期待はしているが、彼女らがあまりにも過激な道へと進んでいる事にニイメはある種の危機感を覚えていた。

墮落した現状を壊す事は大切かもしれない。だが、その壊した先を

しつかり考えて居なければならぬ。

無理を通していれば、それによつて生じた歪が大きな災いとなつて目に見える形で現われる。そして、人は事が起つてから後悔し、反省する。

それが取り返しのつくことであるならば。

## 第4話 独善の末路（2）

厳しい訓練が終わり、どの顔も疲労に沈んで会話もろくにないまま帰路に就く。

そんな重い空気を跳ねのけるような気が室内稽古場から伝わってくる。

その中では物陰からじつと部屋の中央を見つめる銀色の瞳。

レンの視界の先では物足らないと言わんばかりにシャニーが一人で黙々剣を振っていた。

その横顔は一緒に武器を探していたつい1か月前とは全く別人。

しまいには怒りを吐き出すような掛け声を上げながら、鬼気迫る様子で振り始めるものだから、一度は手をぎゅつと握って柱にしがみついた。

だがそれではここに来た意味がない。レンは一つぐくりと息を飲み込むと稽古場に足を踏み入れる。

「シャニー」

びっくりして顔だけ振り返るシャニーは紅潮し息が上がっている。

だが、それ以上にレンが気になったのは瞳だった。まるで睨むような眼。

「何？」

そう返してくるだけでこちらを振り返ることもない。

「シャニー、最近……ヘンだよ」

背中から槍で突かれたような感覚。感情の起伏があまりなく物静かなレンが、このようにストレートな物言いをしてきたのは初めてだった。

思わず剣を下ろして彼女の方を向く。親友の目は震えていた。

「ど、どうしたの？ ヘンってどういうこと？」

「う、ううん。何か……シャニーじゃないみたいって思っただけ」

最近の猛特訓のことを言っているのだろうか。

話を聞こうとしたが、「あつ、ちよつと！」レンは言い終わるや否や駆け出して部屋を出て行ってしまった。



一人残されたシャニーはしばらく俯いていたが、再び構えるとまた大きく叫びながら剣をひたすら振り始めた。

その日も、新人部隊はいつもどおり休む間もなく激しい特訓を続けていた。

他の部隊の大半は傭兵に出てしまっていない為、中庭すべてが激戦の場となっている。

「ね、シャニー。皆で総当たり戦やってみようよ！」

今では大分厳しい稽古についていけるようになり、自信がついてきた。力がついてくれば、それを使ってみたいくなる。

「よし、そうだね。やってみようか！」

普通ならここで釘を刺されるのだが、この未熟な部隊長ではそれは出来なかった。

向こうで稽古をするアルマたちのグループにも呼びかけて、闘技場形式の模擬戦を行うことになった。

今日は邪魔な他の部隊も出払ってしていない。実戦形式の稽古をするにはもってこいのコンディション。

皆くじ引きで対戦相手を決め、一対一の模擬戦を行う。これも天命か、シャニーはアルマと戦うことになった。

早速彼女らは天馬に乗り、準備を整える。彼女らの一騎打ちが開幕戦だ。

「どうとう、アルマと本気で戦うときが来たね。勝つのがあつたよ！」

「ふん、精々今のうちに虚勢を張っておくんだな」

お互いに相手を挑発し終わらないうちに空中に舞い上がる。

演武かと見間違えるほどの、華麗で熾烈な真剣と真槍のぶつかりあい。皆は見とれていた。

実力をつけてきたとは言え、まだまだ実戦経験者とは比べ物にならない。早くあのようになりたい。彼女らは羨望の的であった。

しかし皆はまだ気付いていない。いや、忘れてしまっていた。彼女らもまだまだ未熟な、自分達と同じ新人であるという事を。

結局、彼女らの演武は数十分に亘り、お互い天馬から降りてのぶつかり合いでも決着はつかず時間切れで引き分けとなった。

互いに久しぶりだった。こんな息が切れるほどに戦ったのは。相応の相手と武器を交えたのは。

もう満足。相手の実力を認め、自分の足りないところを模擬戦で見つけることが出来た。

やはり実戦形式の模擬戦は得るものが多い。理論だけでは絶対に強くはなれない。

だが、この考えが通用するのはある程度実戦を経験してきた者だけであった。

——自分なら出来るし大丈夫。皆にも言わないでも分かる一般的なレベル

それが大きな間違いに発展するとは、このとき誰も思っても見ない。

次々に始まる一騎打ちは内容のあるものばかりで、最近の特訓で取り入れた実戦的な要素をそれなりに戦闘に生かそうとする行動があちこちで見られる。

仲間の目に見えるほどの成長に、シャニーは人にものを教える喜びを存分に味わう。

この方法で間違っていない。皆は自分の指導でどんどん成長している。そのことで、彼女は自信を確信へと変えつつあった。

また二人の天馬騎士が相棒にまたがり宙へと舞って行く。

あの若草色の髪は誰だかすぐ分かる。ミリアはシャニーのほうに手を振った。

今までずっと稽古に付き合ってもらった。今日はいいところを見せて成長をアピールするつもりだ。

それを皆が見上げ、槍と槍が交差する。次の瞬間だった。

「うあ……」

片方の天馬騎士が、空中に赤い華を撒き散らしながら落馬していく。

時が止まる。誰もが息を呑み、目を見開いて声さえ出てこない。修練の武器ならばそんな致命傷を与えられないと高をくくっていた。「ど、どうしようシャニー!」

皆は落馬してきた仲間を取り囲む。シャニーも気が動転してしまっていた。

(な、なんで?! 穂先には布を巻いてあったはずなのに!)

穂先を覆っていた分厚い布が無い。槍の打ち合いをしている間に外れてしまったのか。

まさかこんなことが起こるとは。急所に攻撃が入るとは予想もしてないなかった。

彼女は動揺しながらも、とっさにある人物が頭に浮かんだ。

「ちよつと待ってて!」

シャニーはミリアの応急処置をアルマに任せ、城へと駆けて行った。

「……何をそんなに慌てる必要がある? このぐらいは想定できるだろうに」

アルマは独り言を漏らしながら、手馴れた様子で止血処置を施していく。

誰かがこのような怪我を負う事は分かっていた。だが、彼女は模擬戦を止めなかった。

「うう……。痛いよ……」

「痛いのが嫌ならば、相手の攻撃を喰らわないうで済む術を身につけることだな」

そんな簡単に言うなと苦痛の表情を浮かべるミリアへ、出来ないなら死ぬ前に騎士など辞めてしまえとアルマは睨み返した。

傭兵はそんなに甘くはない。怪我をしても助けてもらえる状況は天馬騎士団ではまずありえない。

自分の命は自分で守る。例えば部隊内でも仲間の助けを頼りにしてはならない。これは、傭兵騎士として当然のルールだった。

仲間を助ける余裕があるなら、一人でも多く敵を倒し祖国へ1ゴールドでもたくさんの金を送れ。

それが古くからのイリアの慣わしであり、騎士同士の関係を形作る基盤。

昔からのしきたりなど壊してしまえと考えるアルマも、自分の考えに適合するこの慣わしだけは従っていた。

下手な仲間意識で足元をすくわれては本末転倒。それでも、彼女が仲間に稽古をつけている理由は一つでしかない。

「あいつは……やっと分かったかと思っただが、やはりその程度なのか？」

このような応急処置で止まるほどの怪我ではない。

アルマは止血処置も程ほどに済ませ、シャニーの駆けて行った方を睨みつけると、再び槍をとった。

「お前達、何をしている。止血はした。後は専門の人間に任せておけばいい」

皆はアルマの言うことが理解できなかったようだ。

彼女は槍を突き立てて静かに、しかし威圧感を覚えるような物腰で皆に迫る。

「分からないのか？ 時間の無駄だ。早く模擬戦を続けるぞ」

アルマは肩で群がる仲間達を割いていく。倒れた仲間を心配しつつも、皆は無言のまま戻っていくしかなかった。

「ミリア、しっかりと」

相棒のレンだけがその場に残り、ニイメから教えてもらったばかりのライブの杖をかざすが、まだようやく下級の攻撃魔法を扱えるようになったばかり。まるで効果はない。

この異様な光景をも、レイサはただずっと物陰から見ていた。助けるでも、突き放すでもなく。

この部隊のリーダー達が足りないものを見つけ、失いかけたものを取り戻すまで。

誰にも理解されず、誰からも評価されない。それでも、彼女は見つめていた。自分が今まで最愛の人にしてきてもらったように。

## 第5話 喪失と創出

城の中に駆け込む。そのままの勢いで角を曲がり、勢いに任せて目の前にあるドアを思い切り押し開けた。

中の様子など気にかけていられる余裕はない。部屋中を見渡す。

隅であたふたする軍医がいた。マウスに研究中の試薬を投与していた彼は、驚いてマウスごとピペットを床に落としたようだった。

「ねえ、ウツデイ!!」

慌ててガラスをかき集めつつ、逃げるネズミにあたふたするのをお構いなしに、シャニーはウツデイを立ち上がらせて自分のほうを向かせる。

三重のアクシデントに体がびくつとなつて、彼の頭は目が回りそうになっている。

「うわ、な、何？ うわ、シャニーか!」

「何よ、人を化け物みたいに!」

「城の中を移動するときは、静かに行動しろと団長にも言われたじゃないか。少し落ち着けよ」

「別に焦ってなんかないもん!」

ウツデイの静止にも彼女の動揺は収まらない。顔が蒼褪めているようにも見える。

彼女に限って病気という事はあるにせよ、ここまですんなりこの事に配慮を利かせないというのはおかしい。

「シャニー、何があつたんだ。ゆっくりでいいから話してよ」

ウツデイはシャニーの背に手をやり、そしてゆっくりさすってやる。

それをされると何か喉に詰まっているものがとれるような気がして、今まで出てこなかった言葉が一気に口から噴出す。

「あのね! 大変なの! 仲間が大怪我して、出血が酷いの。お願い助けて!」

そんな事だろうと思つた。治療の準備をしながら、彼はシャニーからこの経緯を詳しく聞く。

彼女の口からはウツデイでも想像していなかった事件が飛び出して仰天した。

「なんだって?! なんで仲間同士でそんな危険なことをするんだよ!」

彼は思わず準備をする手を止めてシャニーに向かって怒鳴りつけた。

彼女が部隊長を追い出し、事実上の指揮官であった事はウツデイも医務室を訪れる騎士たちが口にする噂で知っていた。

だが、そんな彼女がまさか真剣で切り結ぶことにゴーサインを出すとは思っても居なかった。

医者であるウツデイにとっては、仲間同士で武器を振りあうと言う事だけでもやめて欲しいことなのに。

「だって!」

「だってじゃない! ……言い合っている場合じゃない。早く患者を連れてきて。ベッドの用意をするから」

シャニーは泣きながら部屋を出て行く。何か焦っている。ウツデイはそう感じていた。

そんなに患者が重症なのか。いや……それだけではない。彼女の焦りはそのことによるものだけではない。

むしろそのことのほうが大きなウエイトを占めているかもしれない。

幼馴染の勘とも言うべきウツデイの第六感が、そうささやいて止まなかった。

暫くして、十八部隊のメンバーがシャニーと共に怪我をしたミアアを運んできた。

皆でベッドに寝かせ、ウツデイの治療に全てを任せる。彼は止血している手拭を解くと目を疑った。

「……急所だな。幸いそこまで傷が深くないから命には別状はなさそうだ」

彼は丁寧に消毒と止血をし、容態が落ち着いたら縫合すると皆に説明する。

皆は命に別状がないことを知ると、安堵のため息に潰れそうになった。

しかし、ウツデイには疑問だった。それは周りにいる騎士達の数。十八部隊は、もつと多くの人間が所属しているはずである。

「他の皆は？」

「稽古してる」

シャニーのさも当たり前かのような返答にウツデイは腰が抜ける。

仲間がこんな目に遭っているのに、まだ同じことをしている者達がいるのだ。

「大丈夫そうだし、あたし達も稽古に戻ろう？ さっきの続きから行くよ」

「えっ」と周りが一度シャニーを見つめるが足取りは変わらず出口を目指す。

そのシャニーの言葉に、とうとうキレてしまったのはウツデイだった。

「なんだと!?! またお前は仲間に剣を振ろうというのか！ 何を考えているんだ！ 天魔に取り付かれたか！」

「だって！ だって……皆が強くなる為には実戦形式での稽古を積まない……」

「ふざけるな！ 仲間同士で殺しあつてまで強くなりたいのかお前は！ 見損なつたぞ！」

ウツデイのいつもと違う様子に、シャニーも動揺してしまう。

彼の言うとおりに、自分のやり方が強引過ぎる事は彼女にも分かっている。

しかし、それでもその方法を強行するしか道はない。

部隊として皆に、レイサに認められるために。初めて置かれた状況にどうしていいか分からなくなっていた。

「あたしはあたしの責任を果たしているだけだよ！」

隊員たちは当初からこの言葉に疑問を持っていた。

前にも聞いたこの言葉。危険な稽古を強行しようとした彼女を皆が止めようとした時に放たれたものだ。

「ふざける！ 何が責任だ！ 何が強くなるだ！ お前の責任は、仲間を犬死させることなのか！ 部隊長を追い出してまでしたかったことはそんなことか！」

穏やかというより抜けた感じのあるウツデイは、いつもシャニーの尻に敷かれている状態だった。

その彼が今、声を荒げてシャニーを睨みつけている。

周りもぱつと見の印象と違う軍医の様子に、ただ状況を見守るしかない。

「あたしは部隊長に誓ったんだ。部隊を立派にしてみせるってね。そのためには、強くなって皆を見返してやらなきゃいけない。強くなる事は、あたし達にとって大事なことなんだよ！」

—— 給料泥棒さん

今でも頭にこびりついて離れない言葉。あんな屈辱を受けるのはもうたくさんだ。

早く強くなって、正式な部隊に配属されたい。その気持ちがあんな口調を激しくさせる。

「強くなれば皆にも認められる。戦場でも戦死しなくて済む。戦わないウツデイには、あたしの気持ちなんて分かるわけがない！」

「分かるわけないだろ！ そんな歪んだ考え！」

机を拳が叩きつける音が医務室に響く。シャニーの怒りをウツデイが一閃していた。

「たとえお前が世界中から認められようとも、そんなやり方をしてい  
る間は、僕はお前を認めない。それ以前に、そんな狂氣的なやり方  
じゃ、誰も認めてはくれないと思うがな！」

とうとうシャニーも頭に血が昇ってきた。こうなってしまうと、周  
りの意見など全く耳に入らなくなってしまう。

「知ったような口利くんじやないわよ！」

「知った風な口を利いているのはどっちだ！ 今はお前しか頼れる者が  
いないから、皆は従っている。僕はそう読んだけどね。違うのかい  
？」

皆はお互いの顔を見合わせるが、誰一人としてその考えを否定する



ものはいない。

今のシャニーは、シャニーではない。皆そう感じていた。常に何かに背中を蹴り出されているような感じで、自分を攻め立てて行動しているように見える。

自分のペースを崩さず、自分なりのやり方に自信を持っていたはずの彼女が、何かに怯えている。

今までは分からなかったその何かは今では何となく分かるから、ウツデイの言葉は否定できなかった。

その場の雰囲気はシャニーにとっては過酷。誰からも自分の味方をするような発言は無く、孤独をひしひしと感じる。

今まで孤独であった事はなかった。常に誰かが傍にいて助けられた。今はそんな人間はいない。初めての孤独が、彼女の体を串刺しにする。

耐えられなかった。

「何よ……みんな。みんな、あたしの事悪く言ってき。こんなに、こんなにあたしは頑張っているのに！あたしは自分の責任を果たしているだけなのに！」

「シャニー、待て！」

彼女は突然駆け出し、ドアを勢いよく開けて出て行った。

その瞳に、悔しさの塊を浮かべて。悟られまいとしていたが、それはウツデイには叶わなかった。



その夜、シャニーは城の中庭で夜空を眺めていた。

漆黒の夜空に映える満点の星たち。その中でもひとときわ輝くまん丸の月が眩しい。

その美しさに惹かれ、その大きき、広大きにめまいがしそうになる。

それに比べて、自分は何とちっぽけな存在なのだろう。

妙な意地を張り、その場の感情に惑わされて。

常に輝いて、何があるうと変わらない。そんなものへとても強い憧れを抱く。

師匠もそうだった。何があるうと、どんな不利な戦況だろうと、決

して己を崩さない。

自分のように、すぐ感化されて周りが見えなくなるような事はなかった。

「あーあ……あたし、一体何やってんのかなあ……」

石段に腰かけた背は丸まり。突いた手にあごが乗っている。

上目使いで空を眺めてみると星は輝き、月はそれらをまとめるかのごとく一層明るく輝いた。

自分も輝いていたい。でも……今の自分はみすぼらしい。

「何のためにあんなことしてんのかなあ……。強くなりたから……？ 違うよなあ……」

彼女も分かっていた。何か自分がおかしいことをしているという事は。

あの大人しいレンに面と向かって言われなくなつて、そんな事は分かっていた……。はずだった。

しかし、それでも自分は間違っているとは思えなかった。

あちこちで十八部隊は酷評されている。見返してやりたい。自分は、ダメな部隊長の代わりに部隊を立派にしようと頑張っているだけ。

少々強引なやり方だが、レイサに誓つたのだ。今更彼女の許へ行つて頭を下げるなんて事は出来ない。後戻りできなくなっていた。

何の為に……それは……部隊を強くする為……。本当にそうなのか……。

彼女は自分の心が分からなくなっていた。

いつも自分の気持ちに忠実な彼女が、自分の気持ちを分からなくなっている。

ウツデイの言っていた事も、反論はしたが頭の中では同意していた。仲間同士で殺しあつてまで、強くなつてなりたくはない。

皆が苦しまずに、仲良く暮らせたらどんなに幸せだろうか。

だが、極寒の国イリアではその願いは叶わない。それを変えようと誓つたはず。

今の自分は自らの誓いに反した行動をとっている。なぜそんな事

をしているのか……。

部隊を強くするため。何のために強くしようとしているのか……。戦場で活躍できるようになる為。

結局、イリアを変えようと思っっているくせに、戦場での活躍を考えてしまっている自分に腹が立った。

それしか道がない自分が悔しかった。もっと、もっといい方法があるはず。なのに思いつけない。

どれだけ高らかに誓いを掲げても、結局守れないで世間に流されていては意味がない。

むしろでかい口を叩いておいて何一つ出来ないなら、最初から従っているほうがマシにすら思えた。

——イチニンマエなら出来るだろ

レイサの言葉が蘇り、シャニーは唇を強くかみ締めた。

不意に背後に人の気配を感じ、シャニーは驚いて後ろを向き、身構えた。

(あたしは……何をこんなに追い詰められているんだろう)

シャニーは背後に現われた人物の顔を確認するや否や、自分の手が思わず剣にかかっていることに気付く。

全く警戒する必要のない相手にまで、身構えて武器を取ろうとしている。

心に余裕が全くなくなってるのが、自分でも嫌というほど分かった。

「シャニー、探したよ」

白衣を着た幼馴染が、分厚い本を手に自分の横にあぐらをかいて座り込んだ。

彼女は剣から手を離れたものの、今最も会いたくない相手が横に座ってしまった、何ともしがたい雰囲気になってしまう。

そんな彼女の様子に気付いたのか、ウツデイは本を置いて立ち上がり、彼女の手をとった。

「シャニー、昼間はごめん。みんなの前で怒鳴りつけたりして」

手の温もりを感じる。この温もりに、シャニーの凍りかけた心がいとも簡単に解けていった。

「謝らなくていいよ」

「いや、あんなみんなの前で怒鳴ったら、お前の居場所がなくなることぐらい少し考えれば分かることだった」

ウツデイは何でも自分のせいだと思い込む悪癖がある。

シャニーはそれが分かっていたから、今回もきつとそんなことだろうと最初は思った。

だが、いつも以上に真摯な態度に何かを感じて気づいたら謝っていた。

「あたしが悪いんだよ。あんなやり方がおかしいのは……あたしだって分かってるよ……」

「なら！ ……ごめん。なら何で……止めないんだよ」

彼はシャニーの目を真っ直ぐに見つめる。彼女が悩んでいる事はずっと知っていた。

いつも眩しいぐらいに輝いて真っ直ぐこちらを見つめてくる彼女の瞳が、暗く沈んでこちらを見ようとしないからだ。

感情を隠す事は難しいことだが、特にシャニーは苦手としている事を知っている。

「それは……あたしにも分からないんだ。ねえ、ウツデイ、あたしは……あたしはどうすればいいんだろう。皆に嫌われちゃってるのかな……」

瞳を潤ませる彼女にウツデイも焦ってしまった。

滅多に泣かない彼女が、自分の前で不安に心を押しつぶしそうになっっている。

シャニーの肩を引き寄せ慰めてやる。いつも自分を尻に敷いている彼女だが、こういうところはまだまだ未熟だった。

そのまま肩を持って座らせる。しばらくそうしていると、やっと泣き止んだ。

「シャニー、お前が一生懸命なのは分かるよ。苦しいくらいにね」

「……ホント？」

ウツデイの言葉に、シャニーは救われた気持ちになった。誰からも認められない、理解されない苦しみに心のやり場を失っていた。

周りの目、幼馴染に置いて行かれる不安、レイサに見放された喪失感……。

愛されたい、認められたいという気持ちが一層強い心は焦り、仲間から認められなくても、この方法しかないと自分自身を追い詰めては、また孤独を稽古で埋める。

悪循環だった。人は愛されたくて壊れていくものなのか。

「ああ。そうだ。この本を見てみなよ」

ウツデイは思い出したように、先程地面に置いた本を手取る。どう見ても学術系の分厚い本だ。

シャニーはウツとしてまう。勉強は嫌いだった。騎士になれば勉強しなくて済むと、心の片隅で思っていたことすらあるほど。

「なによ、これ」

「そんな顔しないでさ、ちよつと見てみてよ」

ウツデイはその分厚い本をぱらぱらと手馴れた手つきでめくる。

彼は何か挿絵のあるページを見つけ、そのページを彼女に見せた。

「うっ?! な、何なのよ、これ……」

見せられた挿絵に、思わず口を手で覆った。それは医学用の人体解剖図だったのだ。

全く知識のない彼女には、人の体がバラバラになっている絵など衝撃がきつすぎる。

例え戦場で首が飛ぶ瞬間を見ている彼女でも、それとは違う戦慄が走る。

ウツデイは驚くシャニーに色々と説明していく。人の体のつくりや、仕組みを。

難しい事は分からないにしても、彼の分かりやすい説明に何となくではあるが話についていく。

「へえ……人間の体ってうまくできてるんだね」

「そうだよ。人の体こそが、一番の魔法だよ。これほど不思議で神秘

的なものもない」

「シャニーは、ウツデイの瞳が輝いていることに気付く。

やはり自分の知識を人に広める事は、学者精神旺盛な彼女にとっては至福のときのようなものである。

「あたしもこんな風になっていると思うと、すこしゾクつとするけどね……」

「当然そうだよ。お前が生きている限り、心臓はずっと動き続けるし、脳は働き続ける。腸だって……」

「いやあ、あんまし聞きたくないかなあ」

「シャニーはウツデイの語りを必死で止める。彼女にとっては気味が悪いだけ。」

「言われたとおりの話を止めたが、彼は真面目な顔で彼女を見つめた。「なにによ？」

困惑の眼差しを向けるシャニーに、ウツデイは再び顔を彼女から離し、夜空を仰ぐ。

「でもね、これだけ精巧でも、ちよつとした事ですぐ機能しなくなってしまうんだ。病気になったり、年老いたり……。昨日まで元気だった人が、今自分がどうする事も出来ずに、神の許へ旅立っていく。……。儂いとは思わないか？」

ウツデイは研修生時代から、多くの人の死を見つめてきた。

「どれだけ自分が勉強し知識を積んでも、どうする事も出来ない、人の死。」

「医者であるウツデイにはそれは認めることが出来ないものだった。「僕が戦を嫌うのは、そんな儂く、大切な命の炎を簡単に吹き消してしまうからだ」

彼の真顔にシャニーは返す言葉がなかった。今日、その大切な命の炎を吹き消しかけた張本人なのだから。

「死んでしまうこと。それは人が生き物である以上、未来永劫不可避免だ。でも、人が私欲の為に、他の人の命を握り潰すなんてことは絶対に許せないよ。だって、どんな偉い人でも、どんな悪人でも、命の大切は変わらないよ。たった一つの命だもの。皆エリミーヌ様に祝福

された。この世でたった一つの輝きなんだから」

何を言われているかはつきりと分かる。

彼が話している間から既に瞳は揺れていたが、最後まで聞き終わるともう辛抱できずにシャニーは下を向いて泣き出してしまった。

「ごめんなさい……」

顔を手で覆い泣き崩れるシャニーを、ウツデイはその背をさすって宥める。

そして顔を上げさせると、指で涙を拭き取りながら静かな笑みを浮かべた。分かってももらえればそれだけでいい。

「謝る相手は、僕じゃないだろう？」

シャニーは泣くのを止め、彼の笑顔に真つ赤な目のまま頷く。

自分の悩みが幼馴染の言葉で吹っ切れ、誤った道を歩んでいることを再度認識させられた。

今しなければならぬことがボンヤリではあるが分かったような気がする。

それは、これからもずっと根底に置かなければならないことだと、幼馴染に気付かされた。

もう泣いてはいられない。涙を払った顔にはいつもの笑顔が戻ってきた。

「ありがとう、ウツデイ。やっぱりあんたはイイヤツだね」

「よせやい。お前のしよ気た顔なんか気味が悪いからな」

「何よ！ 前にも行ったけどねー、あたしは悩み多き乙女なんだから！」

ウツデイは聞いていませんと言わんばかりに目線を横に逸らす。

彼女は当然の如く顔を膨らませて、こつちを向けようと彼の耳を引く張った。

いつもが戻ってきた気がして、耳に伝わる感触を、指先に触れる感覚をお互いに感謝する。

どのくらいそうしていただろうか。しばらくして、二人は城の方へと歩みだしていた。

「正直さ……ウツデイに嫌われちゃったかな、って思ってたんだ」

シャニーは照れながらも安どの表情を浮かべつつ幼馴染を見上げた。

今まで大切にしてきた仲間突き放されたあの瞬間。あのときの気持ちは言葉には表せない。

——本当に、仲間が突き放したのか？ 先に突き放したのは……自分ではないのか？

自分が悪いと分かっておきながら、意地を張って謝る事も出来なかった。

そんな自分とは対照的に、彼は自分の気持ちを読み取って優しく諭しに来てくれた。

同じ年のウツデイが、自分よりはるかに年上を感じてしまう。

いつまでも幼い自分が情けなかった。一人前と豪語していた自分が。

「嫌うわけないだろ？ お前と僕はずっと、友達じゃないか」

「皆は……」

「皆が従っていたのは、君しか頼れる人がいないからだと言ったけど、ホントは違うと思うよ」

ウツデイはシャニーの背中をさすってやる。彼の手は魔法の手だ。何か気持ちが和らいでいくのが分かる。

「シャニー。人を従えるのは力じゃないと僕は思うよ。確かに、力は人を表面上は動かせる。けど、もっと大切なものがあると思うんだ。以前のお前はそれを持っていた。でも、今のお前は失いかけてる。特別何かをする必要はないよ。焦りを捨てて、今までどおりのマイペースなシャニーで居ればいいんだよ」

「今までどおりの……あたし？」

「そうさ。大切なのは力じゃないよ。心さ。目に見えない強さだよ。心の強さってさ」

随分くさいことを言う。シャニーは心の中でそう思った。

だが、次の瞬間、自分の心の中で何かがはじけるような気がした。

目には見えないけど、皆が持っている心。皆が持っているけど、何を考えているか分からない心。



自分は、自分の心の赴くままに、周りに形振り構わず振舞っていた。相手の心を、自分の心で踏み躪っていた。

—— 戦は、命を握りつぶす

命の象徴とも言える他の人の心を握りつぶしていた。しかもことあるうに指揮官という立場を使って。

(今のあたしは……最悪だ)

他人の心に敏感であったはずの彼女が、いつの間にかそれを忘れかけていた。

動機を正当性と履き違い、仲間を自分の目的的手段として用いようとしてた。

心の奥でうごめいていたものが何か見えた途端、自分自身が怖くなる。今まで知らなかった、自分の悪い一面。

しかし、それでしょげている時ではないと己を戒めた。

自分の悪い一面を幼馴染が教えてくれたのだから。もう二度と、同じ過ちは繰り返すまい。彼女はそう心に強く命じる。

自分の、いや騎士の目的は戦うことではない。精鋭部隊で活躍することでもない。

部隊長や団長が望み、また自分も目指したい何かが、彼女には輪郭だけではあるが分かったような気がした。

「……あたし間違ってた。皆は許してくれないかもしれないけど、きつと頑張って見せるよ」

「いや、皆許してくれるよ。それどころか、きつと早く帰ってきて欲しいと思っているよ。前みたいな笑顔でね」

ウツデイの励ましに、彼女はニカッと笑って見せて彼の手を掴むと、振り切れんばかりにぶんぶん振って城へと戻っていった。

—— 力さえあれば、簡単に人など動かせる

—— 人を動かすのは力じゃない、心だ

今までずっと、アルマの言葉に疑問を持ちながらもそれを否定できず歩いてきて、ついには自分も同じ道を歩みかけていた。

それを防いで、自分の疑問を吹き飛ばしてくれた幼馴染の言葉をかみ締めながら。

## 第6話 憧れの人

長く眠れない夜を越えて、翌日登城したシャニーは皆を集めた。やはり皆不安げな顔をしている。今までなぜ、こんな顔をしている仲間たちに声をかけてあげられなかったのだろうか。

己の愚かしさを噛みしめ、自然と膝が地に着く。

「皆、今までごめん！ あたしは、大切なモノを見失っていたよ。いくら強くなりたいたからって、皆に認められたいからって、仲間同士で本気で殺し合いをするなんて……。バカだった。ホントに……。ごめんなさい」

皆は朝一番でシャニーに集められ一体何事かと不安がっていたが、彼女の言葉を聞いてほっとしたようだった。

シャニーの顔からは昨日までの殺気立った気配が消えていることが分かり、重く喉に痞えていたものが剥がれ落ちるように、ルシヤナが声をかけシャニーに歩み寄る。

「私たちもあなたに頼りすぎてたよ。同期で仲間同士だったはずなのに、いつの間にか上下関係みたいになってさ」

こんな惨めな幼馴染の姿は見たくなかった。膝について頭を下げるシャニーの手を取り立ち上がらせた。

「あんたはいつでも元気で優しく、足を引っ張ってた私たちにも色々教えてくれたから、つつい頼っちゃった。でも、何もかもあなたに任せつきりになっちゃって。私たちこそごめんなさい」

心が解けるような言葉をかけながらさつと差し出された手。

顔を上げるとそこにはルシヤナの微笑みがあった。その奥では仲間たちが涙を浮かべて安堵の表情を浮かべている。

「でもよかった。あんたが帰ってきてくれてさ」

「みんな……」

ウツデイの言ったとおり、仲間を受け入れてくれた。ひどい仕打ちをした自分を温かい言葉と眼差しで。

凍てついた心が動き出す。もう涙を堪え切れない彼女を仲間たちが皆集まって肩を支える。

彼女達も昨日シャニーが部隊から消えてから、皆で集まって話し合  
いをしていた。

あいつに聞けば分かるから……最初は軽い気持ちだった。それが  
日常化していくうちに当然になってしまった。

自分で考えるということをすっかり忘れて。彼女達の心の中で、レ  
イサの言葉が何度も響いていた。

——新人は、考えることが仕事

「あたしはようやく分かったよ。今までみたいな事をしてても、絶対  
あたし達は真の意味で成長できない。あたしはバカだった。散々忠  
告してくれたレイサさんまで失望させて……。もう一度、レイサさん  
に謝ってくる」

レイサが居るであろう倉庫へ一步を踏み出そうとした手に伝わる  
温かい感触。

仲間が彼女の手を掴んで、振り向いた彼女の目を皆で見つめてい  
た。

「あんたが行くなら、私たちも行く。もう、あんただけに責任を負わせ  
ないよ」

何もかも被せて、自分たちは従っていればいいだけ。

幼馴染を追い詰めた責任は自分たちにもある。ルシャナが彼女の  
手を握り、もう片方の手をレンがそつととる。

「ん、仲間」

嬉しかった。嫌われたかもしれないと、登城するまでずっと不安で  
胸が潰れそうだった。

でも、仲間は自分の事を頼りにしてくれていた。帰ってきてくれて  
嬉しいと言ってくれた。仲間だと言ってくれた。

またしても崩れ落ちる。一方通行な頼る、頼られるの関係には決し  
てないものに初めて気付く。

いや、昨日の自分達にはない何かが、きつと新たに生まれたのかも  
知れない。

彼女たちは新たな誓いを胸に、新たなスタートを切るために城の中  
へと消えていく。

アルマやその一派がじつとその光景を眺めていると、イドウヴァが彼女らの様子を見に来た。

「おや、アルマ、おはよう」

「これはイドウヴァ部隊長、おはようございます」

アルマはイドウヴァに頭を下げ、それをイドウヴァは目を細めて笑みを浮かべる。

「どうしたのです？ 貴女に珍しく城の方など眺めて」

「いえ、部隊長の御気を煩わせるほどでもありません。無責任な人間がいたので少し残念に思うだけです」

「シャニーですか……、まあ彼女もそのうち気付くでしょう。それより、団長にはうまく説明しておきましたよ。これからも十八部隊を……そして例の件、頼みますよ」

「はい、お任せください」

再び頭を下げるアルマを見下ろし、イドウヴァはまた笑みを浮かべて自らの部隊へと踵を返す。

頭を下げながら、アルマもまたイドウヴァの後姿を見て不敵な笑みをこぼしていた。



シャニー達は真っ直ぐ倉庫を目指す。集団で廊下を駆け抜けていく様子に誰もが何事かと振り向くがお構いなし。

地下へと続く階段を駆け下り、角を曲がる。中から音がする……一層足取りは早くなる。

「レイサさん！」

倉庫を整理する盗賊へ最初に声をかけたのはシャニーだった。彼女の声に、呼ばれた方はゆっくり声の主のほうを向いた。

「どうしたの、あんた達。朝っぱらから深刻そうな顔してさ。誰か死んだの？」

軽く冗談を飛ばしてくるが、今日はそんな冗談に乗るような気分ではない。

シャニーは仲間たちの一歩前に出るとすぐに頭を下げた。

「レイサさん、好き勝手にごめんなさい！」

「何で謝るのよ？ あんたに部隊を任せたのは私じゃない。好き勝手にやって良いんだよ？」

レイサが再び整理に戻ろうとするのを、シャニーは彼女の目線の方へ回りこんで止め、彼女の目をしっかりと見つめて再び話しかけた。「あたし、間違ってた。皆に言われてようやく分かったよ。あたし達の役目は戦うことじゃないって。戦は民を握り潰す。戦以外で、民を守る方法を探さなくちゃいけないんだ」

レイサはシャニーを制止せずに黙って彼女の言葉を聞いていた。

他の隊員たちも、どうやら同じ事を考えている。シャニーが紡ぎ出す言葉に、コクコクと小さく首を傾けているのが良くわかる。

前も分かったと言っていたこと。今度こそ本当に分かってくれたのだろうか。

「あたしは……動機と手段を混同してた。戦うことが、民を守ることだと錯覚してたんだ。いつの間にか、戦ってお金を稼ぐ事が、国に貢献することだと思って。そのために、早く戦に出られるように、皆に評価されるために、仲間を、大切な故郷を同じにする家族を道具みたいに……」

頭は分かっていたのかもしれない。けれど、心はそれを理解しようとしていなかった。

自身で咀嚼せず投げり所となっていないままでは、ちよつとした周りの言葉で簡単に揺らいでしまう。

その行きつく先でとんでもない過ちを犯した罪悪感。

泣きそうになるシャニーへレイサが一声かけようとしたとき、後ろで見ていた仲間達がレイサに向かって話しかけてきた。

この前まで天馬の乗り方すら知らなかったヒヨッコ。だがその目は入隊した時とは明らかに違った。

「私たちも、今のイリアはおかしい気がします。民を守るために戦う……。そのために、同胞同士が殺しあう。騎士だってイリアの民には変わらないはずなのに、民を守るために民を殺してる。なんか、変です」

「へえ……あんた達。ヒヨッコのクセに一人前な事言うじゃない」

皆の考えの変わり方にレイサが思わず声を漏らした。

今なら話を聞いてくれそうだ。シャニーはレイサの手を取るともう一度ばつと頭を下げた。

「あたし達の今出来る仕事は、考えることだと思っただ。だから、もつといろいろ知りたい。今までのことは、あたしが間違っていた。でも、もう同じ過ちを繰り返したくない。だから……レイサさん、戻ってきて、お願い！」

レイサはシャニーが頭を下げるのを止めさせる。よく見ると、周りに隊員も同じように頭を下げていた。

その場の気から、それは単に頭を下げているわけではないことが伝わってくる。

「……分かったよ。たいした事は出来ないけど、あんた達がそう言うならとりあえず部隊には戻るよ。でもね、私は見てるだけだよ。教えたら意味ないからね。部隊はあんた達で切り盛りしなさいよ」

皆の顔に笑顔が戻った。ようやく、歪んでねじれた時間が淀みを払って動き出した気がする。

生まれ変わった部隊の最初の仕事と、皆はシャニーのほうを見た。

「じゃ、今までどおりあんたがリーダーね」

「え？」

「うん、シャニー今まで私たちをまとめてくれた」

ルシャナとレンが先頭に立って、皆でシャニーの背中を押して稽古場に戻る。

最初は頼れる人間がひとりしかいなかったから。いつからだろう、それはいつしか消去法からの選択ではなくなっていた。

誤った道に進みそうにはなったが、彼女は頼れる仲間。彼女を暴走させたのは、自分達にも原因がある。

自分達も二度と、同じ過ちは繰り返さない。彼女らは誓っていた。頼るだけでは、ダメなのだ。

「私たち仲間同士じゃない、困ったら何でも言っただよ！」

仲間たちの声にシャニーは涙を拭いた。絶対にもうこの家族を裏切ったりしないと。

「……うん！ よーし、じゃあ早速特訓メニューを！」

「それじゃ今までと変わらないじゃん！」

彼女らの笑い声を聞き、レイサも笑みをこぼしながらその後を追う。

民を守るために戦うことも大切ではあるが、それは一つの手段に過ぎない。

必要なものはそれではない。何の為に。今はそれを一番に考える時。

「家族を愛せ、愛される……あんたはそれを失くしちゃいけないよ。上層部のバカ共のようにね……」

信は全てにおける礎。

十の為の一の、ほんの一部を手に入れた彼女らへ、レイサは小さなエールを送った。



部隊が少し落ち着くと、シャニーは一人で城の中へと再び入っていく。

本当は朝一番で行かなければと思っていた場所だ。

事務所のゾーンを抜け、食堂からの良い匂いも払い、たどり着いたのは城の一番奥。ここを目指さなければ普段では辿り着かない場所。

「おはよー……？」

そつとドアを開ける。冷たく薬品臭い空気が鼻を刺す。声に気づいてウツデイが小さく手を挙げて、普段通りの微笑みにシャニーも自然と笑みが浮かぶ。

「ウツデイ、ミリアは大丈夫？」

レイサに仲間と共に誓いを見せたあの場面は一人欠けていた。

自分と同じくらい元気な部隊のムードメーカーが。昨日、模擬戦で大怪我をした本人。

一番に謝らなければならぬ相手。部隊の大事な「家族だ」。全てを話す必要があった。

「今寝てると思うよ」

小声で窓辺のカーテンに仕切られたスペースを指さされ静かに向

かう。

ウツデイの言う通りミリアは寝息を立てていた。

その横にそつと座り、起きるまで待つことにする。

秒針と実験用のマウスが回し車で走る音だけが部屋の時を進めていく。

静かな時の中でミリアの顔を見つめていると罪悪感ばかりが浮かんできた。人を道具のように扱えてしまう自分の心が恐ろしい。

「あ……？ あ、先輩、おはよーございますツス……」

どれだけ時間が過ぎたか分からないが、ようやくミリアが目を開けた。

まるで死人が生き返ったかのように顔中に笑顔が咲く。

いきなり目の前にそんな顔のシャニーがいて驚いた様子だったが、ミリアは手を挙げて笑顔を返してきた。救われた気がする。

「ミリア、本当にごめん。あたしバカだったよ。もう絶対あんなことしない。あなた達を自分の欲の道具に使ったり……しない」

「先輩、謝らないで欲しいツス。ウチが実力不足なだけっスよ」

頭を下げてくるシャニーにミリアは笑って見せた。

入団した時から良く稽古をつけてもらったのにちつとも上達しない自分が不甲斐なかった。こんなにも頭を下げさせてしまっている。

「いや、あたしは間違ってた。こんなあたしだけど、これからは皆を大事にするって誓う」

騎士団に入って初めてできた友達。それをこんな包帯だらけにした事実が消えない。

だからこそミリアに直接会って、その目を見て伝えたかった。過ちとこれからの。

朝から部隊で起きたことを説明するとミリアは何度も頷いた。

「みんなも同じ思いだったんスね。良かった良かった。解決したなら、それでいいじゃないツスカ。ウチも同じ思いツスよ」

体はまだ痛いはずなのにニコニコして嬉しそうにするミリアに救われた気がするし、だからこそ使命感が湧く。

自分を愛してくれる人を、絶対に裏切れないと。こんな気持ちは見



習いの時には気づかなかった。

「そうだったんスね。あー、ウチもその場面居たかったな」

レイサに詫びて誓いを皆で口にした場面を説明するとミリアは残念そうにした。

自分たちのリーダーが戻ってきて、それをみんなで支えてみんなの場所に帰る。大事なシーンだと思った。

その支える手に自分が加われなかったことが悔しい。

「本当にごめん。あたしはもう少しで大事な家族を失うところだったよ」

再びシャニーが頭を下げた。大事な人にこんなことをさせてしまっている。

もつと自分に実力があれば……いや。ミリアは自分でそれを否定した。そつと置かれる手。

大事な人が打ちひしがれているなら、無力な自分でも出来ることは一つしかない。

「先輩、ウチはケガして良かったと思ってるツスよ」

「え……？」

「だって、大事な人がウチらのところに帰ってきてくれたんですから。安いもんツスよ」

どうやって返せばいいか分からない。だけど、お互い溢れだすものはもう止められなかった。

—— おかえりなさい

それを互いに伝えるように気づけば抱擁していた。

「ウチから見習い未経験組にとつて、いや、皆にとつて先輩は憧れ、誇りツス。強くて、明るくて、優しくて。そんな憧れを頼りっぱなしで潰しかけたウチらを許して欲しいっス」

初日に受けた衝撃は今も忘れられない。

槍の使い方も、天馬の乗り方もまるで知らない自分たちの横を颯爽と駆け抜けていく同世代の横顔。

とても同じ目線で歩けないと思っていたら声をかけられ、ヘトヘトに倒れこむまで稽古に付き合ってくれた。

その憧れの存在の輝きを消しかけたのは誰だ？ ケガで動けなくなつてじつくり考えた。

「ウチも謝るから、先輩ももう謝らないで。いつもの憧れの先輩で戻ってきて欲しいツス」

「ありがとう。ごめんなさい……」

ふうつとため息が出た。謝るなど言っているのに。

仕方なく、ミリアはポンポンとシャニーの肩に手を置いてこちらを向かせ、ハンカチで涙を拭わせると笑った。

「先輩が自分を許せないなら、お願いを2つ聞いて欲しいツス。そしてたら許すツス」

思いがけない提案にシャニーが驚いていることが真つ赤に腫れた目から伝わってくる。

もったいぶつて一度目を閉じる。この部隊に入ることができて良かったと思える。

レンしかいなかった。心から話ができる相手は。それが一気に広がった気がする。

「これからはシャニーって、名前で呼ばせてもらうツス」

「え、それは構わないというか、そっちの方が嬉しいよ?」

お願いと言うからどんな内容かと思っていたのに、逆に驚いた。

でも、シャニーにとっては普通でも、ミリアには勇気のいるものだった。

明らかに立場も周りの評価も違う相手。年は1つしか離れていなくても、ずつとずつと遠くにいるように思えていた。

もう、そんな距離感を取り払おう。支えるために手を取り合うなら、傍に居たい。

「さっすが。じゃあ2つ目ツスよ。2つ目は次の休み、付き合っ欲しいツス」

これもまた、シャニーにとってはこれで良いのかと思うようなお願いだった。ミリアがこう言うなら喜んで付き合おうと彼女は大きく頷いたのだった。

## 第7話 先駆の狙撃手

非番の日を合わせた二人はエデツサの城下町を歩いていた。

天馬騎士団の制服以外を着た状態のお互いを見たのは初めてかもしれない。適当にぶらぶらするミリアに喋りながらついていく。

「シャニー、お昼にしないスか？」

正午近く。いくらイリアが困窮の地とはいえ、有力者であるゼロツトが治めるエデツサの町には多くの人が往来する。

混みだす前にと早めの昼食を取ろうと店を探し始めた。

「オゴってくださいいよく、先輩なんだし」

店に入るなり猫のようにごろごろと甘えた声を出し始めたミリアにぎよつとする。

ついこの前、もう名前で呼ぶと言った割にこれだ。

「いいよ。好きな食べなよ」

今日は彼女への贖罪でもある手前、何も言い返すことなどできない。

「やрийい！ じゃあ何を大盛りにしようかな」

子供のようにはしゃいだミリアはメニューをばらばらとめくっていく。

半分冗談だったのだが、何だかあつきり行き過ぎてつまらない気がする。

お互い新人でお金がないことは分かっているから、支払は元から割り勘にするつもりだったのに。

その分、しっかりとこの後本題で働いてもらうことにしようと、ミリアは出てきた山盛りのパスタに目を輝かせた。

お互いに満腹になってお腹をさすりながら店を出た。

次はどこに行くのかとミリアの背を追って歩いていく足取りに迷いはない。この道はシャニーも良く通る道だからだ。

この先は職人街でいろいろなお店がある通り。ここの武器屋はい鍛冶師を擁していて愛用している。

「あれ、やっぱり武器を見に来たの？」

思わず自分の用事の時と同じように武器屋の前で止まってしまったが、ミリアも止まって中の様子を見ている。

だが、中に入る様子が無いのでシャニーはミリアの視線の先を追ってみた。色々な武器が並んでいる。

「シャニー、ウチに合う武器、一緒に探してもらえないツスカ？」

自分に合う槍を探して欲しいと言っているのかと思ったが、どうにも彼女の視線は槍を向いていない。

「ウチはレンと違って魔法は使えないし」

そう続けてきたのでようやく分かった。槍以外の何かを探しているのだ。

「あれだけ稽古をつけてもらって申し訳ないって思ってるツス。でも、この前の模擬戦で思い知ったツス。ウチには槍を扱えていないて」

「そういうことなら任せてよ。満足するまで探そうよ」

武器は自分を守る大事な相棒。その選択を誤れば命に係わる。

この前は稽古用の木の槍だったからケガで済んだが、真槍だったら間違いなく死んでいた。

親友を守るためにも絶対に見つけてやると意気込んで武器屋へと入る。

「よう、また来たのか。シャニー。今度はどんな風にするんだ？」

お得意様がやって来たので奥の方にいた鍛冶師は煙草をくわえながら手を振った。

「今日はあたしじゃないんだ」

そう言いながら友達を連れて店の中をウロウロ。どうやら連れの子は「犠牲者」にはならず済むらしい。

色々な種類の武器を手にとっては、連れの子が手に取り、構え、軽く振っては首を横に振る。それをずっと繰り返している。もう煙草を何本替えただろうか。

「うーん……やっぱりしつくり来ないツス」

剣を試し、槍もいくつか見て、斧にまで手を出したがさすがにこれは二人がかりで元の場所に戻す。

「射的なら得意なんすけどねえ」

向こうに立ってかけてあつた弓を手に取って弦を引いてみるがとても扱えそうにはない。

「お前ら、さつきから何してるんだ？」

「この子に合う武器がないかなって探してるんだ。ここにあるので全部？」

気になった鍛冶師がついに机に上げていた足を下すと二人のところに寄つて来た。

救世主を見上げてくるかのようなシャニーの質問に全部と答えかけて、ポンと手を打つ。

「ああ、そういや二階にもう少しあるぞ。他大陸からの輸入品だけだな」

言い終わりもしないうちに二人は階段を昇り始めている。

仕方なく鍛冶師も後追い、予想通り見たことがない武器を前にきよろきよろしている二人が視界に入つて来た。

特にシャニーは貴重な魔法剣を前にして目が輝いている。剣のこどになるところなるから今までは黙っておいたのだが、壊さないか心配である。

「ん、なんすか？ これ」

十字架に弦が張つてある。持つてみると軽い。

「ああ、そりゃクロスボウだ」

鍛冶師が歩いてきてミリアを試射場へと案内する。軽くレクチャーを受け、ミリアは奥に設置された的に照準を絞つた。

「わつ、すごい、ミリア。真ん中！」

雷でも迸つたかのような音がしたかと思うと、ボルトが的の真ん中を貫いていてシャニーが目を真ん丸にして拍手し始めた。

クロスボウを持った手を下ろさないまま撃ち続けるが、どれもが真ん中付近を通過していく。

「へえ、お前さんなかなかやるじゃないか」

鍛冶師に褒められてもミリアの腕が下りることは無く、不思議になつてシャニーは彼女に近づいてみて驚いた。ミリアは震えていた

のだ。

「ミリア……？ だいじょ……」

「これ！ これッスよ！ これならウチでも使える！ すごいしくりくるッス!!」

「あ、危ないって！ わあ?! こっち向いてる！」

クロスボウを持ったまま抱き着いてきたのでシャニーもさすがに焦ってがく。

向こうに見える穴だらけになったのが、何だかゆらゆら揺れて誘ってきているように見えた。

あんな風になるのはごめんと、何とかミリアの手からクロスボウを取り上げる。

「はあ……死ぬかと思った」

「ごめんごめん、でもありがとう、ようやく見つけた、ウチの武器！」  
胸を撫で下ろしてその場に座り込んだシャニーだったが、嬉しそうにするミリアを見上げていると、何だか自分のことのように嬉しくなってきた自然と顔が綻ぶ。

槍を持っている時とその目つきがまるで違う。よほど自分に合ったのだろうか。

「でも、また変わり者集団って言われちゃうッスカね」

シャニーやレンをからかいに来た第二部隊の連中の顔が浮かぶ。

天馬騎士を名乗りながら戦闘ではあまり騎乗しない剣使いを筆頭に、天馬騎士なのに剣も槍も扱えずに、魔法を使う者がいれば今度はクロスボウである。

天馬騎士団中探したって二人といたんだろう。部隊長が放任主義なレイサでなければ今頃皆槍を握っていたに違いない。

「言いたい人には言わせておけばいいよ。ミリアだけにしかできない力にすればいいだけじゃん」

レンの時と同じことを言って背中を押してくれる仲間もいる。

ミリアは恐れることなく自分だけの道を歩む決心をし、新たな相棒を手に一階へと降りていく。

きつとこの手で仲間を、横で一緒に笑ってくれる親友を守ろうと

誓って。

「ちよ、ちよつとこれは……マズいでしょ！」

ところが数分後、一階からはシャニーの焦った声が響いていた。

会計をするために受付に行った彼女たちが告げられた値段は、剣や槍とは桁が一個違う。悪い汗がドバドバ出てくる気がする。

「シャニー、お願い！ この通りッス！ 先輩く可愛い後輩を助けると思って！」

予算担当なので分かっている。こんな高い武器を買う予算など無いことを。

この規模で予算をオーバーすれば始末書は免れない。相手が輸入武器だということをつっかり忘れていた。

だが、親友がようやく相棒を見つけたのに諦めるわけにはいかない。ごくりと息をのんで命には代えられないと肚を括った。

「よ、よおし始末書でもお説教でも何でも来いってんだ」

「あー、今日は先輩が輝いて見えるッス！」

数日後、事務方に呼び出されてレイサと合わせて三人こっぴどく絞られたことは言うまでもない。

## 第4章 決裂と絆のフェイトフル・ナイト（前編）

### 第1話 団長選出戦

——エレブ新暦1000年7月

部隊に起きた大事件も結果的に結末を深めて終息した翌日。

再び穏やかな時間が戻ると思われた十八部隊だが、その予想は簡単に裏切られることとなる。

「んー、みんな揃ったね。……なんか足りない気がするけど」

久々の朝礼にレイサは皆の顔をじっくりと眺めた。

気のせいだとは分かっているけど、皆の顔がいくらかも凛々しく見える。何枚ぐらい皮を破ったのか。

自分の居なかつた僅か数週間の話だ。そんなに変わるはずもないと思いつつも、やはり何か嬉しい。

しかし、その中に何か足りないものがあるような気がする。

——アルマだ

彼女と、いつも彼女と行動を共にしている者達は今日も独自に稽古しているらしい。

「シャニー。ちよつくら行つて呼んどいでよ」

「はーい」

言われるままに、シャニーはいつもアルマたちが稽古をしている場所へ向かった。

そこにはいつもどおり厳しい稽古を積むアルマ達がいる。

空気も動きもまるで違う。これが部隊として動いても戦えそうなくらい。

「ねえ、アルマ、レイサさんが戻ってきたからさ、早くこつちに来てよ」

友の呼ぶ声に、アルマはそちらを振り向いた。だが、彼女から返ってきた言葉はシャニーの望んでいたそれではなかった。

「シャニーか。なぜ戻る必要がある?」

「何でって。部隊長が呼んでるからに決まってるじゃん」

「私にとっては、もう部隊長ではないよ」



慣れてはいてもここまでつつけんどんでは意味が分からなくて困惑に首を傾げる。

新人部隊の部隊長レイサと新人部隊所属のアルマ。その他には何も無いはずなのに。

「アルマがレイサさんの事をどう思ってるかは知らないけどさ、認める認めないの話じゃないじゃん」

見当違いなことでも言ったのか、指を立てて違うとジェスチャーが返って来た。

アルマの周りにいる者たちも、どこか鬱陶しそうな眼差しを向けてきている気がする。何だか、とても居づらい空気。

「私はね、もう所属は十八部隊じゃないのよ」

「は？」

余計に言っていることが分からなくて眉間に困惑がありあり浮かぶ。

反応に困るシャニーへ、アルマはその答えを教えてやる。

「私達は第二部隊所属の見習い部隊。私はその部隊の隊長というわけ。だから、私の上司はイドウヴァ第二隊長と言うことになる」

驚きが声にもならないくらいシャニーの口はぽかんと空いたまま。

自分の知らない間に彼女は十八部隊から籍を外し、一気に第二部隊に所属していたのだ。

第二部隊と言えば団長直下の第一部隊の次に大きな部隊だ。

「そ、そんな事誰に??」

「もちろん、イドウヴァ第二隊長の命令だし、タイト団長の承認も受けている正式なもの。もう、呼び捨てて呼ぶのもやめてもらいたいくらいよ、お前は別に良いよ」

親友が自分とは全然違うところに行ってしまった気がした。

(なぜイドウヴァ部隊長が……なぜタイトお姉ちゃんが?)

アルマはそれっきり、稽古に戻ってしまっただけに素振りもない。

仕方なく部隊へ戻り、状況を報告しようと踵を返す。その背中へ、アルマは何かを思い出したかのように突然声をかけた。

「……ま、でもレイサ部隊長にもいろいろ世話をかけたし、今回は大人しく従っておくでしょうか」

今や部下となったほかの新人達を引き連れて、アルマはイマイチ状況を飲み込めないで立ち尽くすシャニーの横を通過して新人部隊の方へ歩いていった。



数日後、今日の朝礼も特に部隊長からの指示はない。

もう慣れたが、この指示がない事こそ十八部隊にとつては指示そのもので、隊員たちは今日も自らの意志で動き出す。

稽古を始める者もいたし、精鋭部隊の稽古を見学に行く者もいた。そして、天馬に乗って城の外へ飛び立っていく者も……。

「シャニー！どこ行くのー！」

「さんぽー」

そのまま手馴れた様子で天馬を駆り、彼女はすぐさま見えなくなつた。

「いくら自由だからって……。ねえ部隊長」

「んー？」

呆れるルシヤナたちだが、部隊長の姿を見て何となく納得してしまふ。

彼女は今までどおり、木の上に登り昼寝を始めていた。

何をするのも自由。だが自分で考えて、すべてを部隊の責任で行う。

誰かに依存するのではなく、自らの意志を持つ。それがレイサの目指すものだった。

彼女は散っていく隊員達を眺めながら暫く寝転がった後、すぐさま起き上がり突然姿を消した。

「少し知らない間に随分偉くなっちゃったねえ」

背後からの突然の声に、驚いて振り向いたのはアルマだ。

背後からの気配に気づけなかったことに、焦りと苛立ちを隠せない。その相手が、特別警戒する必要のある相手だと分かると尚更だ。

「ふふ、これもレイサ部隊長のおかげですよ」

「感謝されると気持ちいいね」

アルマは軽く笑ってレイサにお辞儀をし、レイサもアルマに笑って返してやる。

返って来た笑みにアルマは笑いながらも彼女から目線を逸らした。それを逃がすつもりはなく、レイサはさっそく本題を単刀直入に突っ込んだ。

「ところでさ、イドウヴァはどうやって団長を言いくるめたんだい？」  
「言いくるめたなんて人間きの悪い事を。第二部隊長は私の事を思つて」

「ホントにそうかな？」

アルマはまたレイサから目線を逸らしたが、再び彼女をしつかりと見つめるときっぱり言い放った。

「そうです。私は第二部隊長を信じていますから」

そうかと言わんばかりにレイサはアルマの視線を外して歩き始め、真横に立つと彼女の肩をポンポンと叩いた。

「あんまし外道な事考えてるとそのうち痛い目見るよ。うまくやつてると思つてもね」

反論しようとした時には、もうレイサの姿はそこにはなかった。

むしろはじめからそこには居なかったように。

レイサの手を振り払おうとして伸ばした手をじっと見つめながらアルマは暫く動かず、やっとその手を下ろすとふっと目を閉じて笑つてみせた。



新人達が入団してから早3ヶ月が過ぎ、イリアの短い夏も折り返しに近づこうしていた。

この先は、炎さえ凍てつかせる冬將軍がイリアの全てを沈黙させる時期に近づいていく。

「シャニー、あんた今日も“さんぽ”かい?？」

「うん、それじゃ行って来まーす」

今日もふらふらとシャニーが天馬に乗り、“さんぽ”に出かけて

いった。

「昼までには帰るんだよー!」

まるでやんちゃ娘に声をかける母親か何かのよう。

レイサの言葉に応えるように、シャニーは前を見ながら後ろへ向かって手を振った。

もつとも、昼の時間になれば腹を空かせて帰ってくるから、別段注意することでもないが。

他の隊員たちも自分で一日の行動を決めて動くことが普通になっており、皆で役割分担を決めて部隊を自治している。

レイサはそれを見ているだけ。聞かれればアドバイスはするが、彼女から指示する事は殆どなかった。

「ねえ、予算申請って誰が担当だっけ?」

そこへ、不意に男性の声が聞こえてくる。ウツデイだった。彼は医務だけに留まらず騎士団の事務もある程度引き受けていた。

「あ、ウツデイさん!」

女しか居ない天馬騎士団では、否応にも男に女は群がった。まして相手が優しい軍医と来れば、狙う者も少なくない。仮病を使って医務室へ転がり込む者すらいる。

今日もさつそくミリアがキラキラした目でウツデイに絡みだし、後から来たルシャナが彼女のお尻を叩きながらウツデイの質問に答える。

「シャニーじゃないの? 確か足が出ても団長に話しかけやすいからって、そんな流れだったと思うけど」

「担当替えたほうがいいんじゃない……? 何これ」

ミリアの首根っこを捕まえたルシャナは、ウツデイの差し出した十部隊作製の予算申請用紙を受け取って他の隊員たちと覗き込む。

すぐさま彼女らは眉間にしわを寄せた。

——何だ? この計算……

「鉄の槍を10本購入で、何で100000ゴールドなの?」

ウツデイの質問に、皆は手を広げてジェスチャーする。

「さあ……。レイサさんも盗賊で金には目がないはずなのに、なんで

桁間違いに気付かないのかな」

「あいつも部隊長も、いつも指を折って計算してるよ」

一応、部隊長であるレイサの承認が必要であるものの、予算申請など部隊の事はすべて隊員たちが行っていた。

言われたからではなく、自分達の部隊の事は、自分達で考える。その意識が、着実に彼女らに養われてきている。

シャニーもレイサが望んだとおり、武技だけでなくイリアの様々なことを見て知ろうとあちこち飛び回っている。

“さんぽ”先で見聞きしたことをよくレイサに報告しに来るし、目的を持って相談にも来る。

何とかイリアを変えたい。民の為になりたい。その気持ちが言動を変え、つい最近も天馬騎士団と聞いただけで追い返されたと泣いて帰って来たばかり。

敵国についた代償は大きいですが、今日も彼女は笑顔で空に消えていった。

いつかきつと芽が出る。そう信じてレイサは青の騎士を送り出した。

隊員達のお喋りにウツデイは絶句するしかないが、これが十八部隊のルール。

もう少し数字に強くなれば言うことは無い。ウツデイのため息がまた一つ増えた。



一方、会議室では全部隊の部隊長が集結して会議が催されていた。皆の手元にある資料の題目は……。

——上期終了における、正式な団長の選出について

団長作成のその資料は几帳面なテイトの性格を反映してか美しく、見やすく作製されている。

そのおかげもあってなのだろうか、会議は途中までスムーズに進み、重要項目の案が色々出されていた。

「今までは暫定として、私テイトが団長を務めていましたが、そろそろ正式な団長を選出したいと思います。選出方法ですが、以前までは前

団長の指名という形をとっていましたが、異議はありますか？」  
テイトが採決を取るとすぐさま挙がる手。イドウヴァとその仲間達だった。

発言を許されたイドウヴァはすくつと立ち上がる。

他の部隊長達の興味は発言の内容ではなかった。

イドウヴァの言う事など大方予想がつく。それよりも、どうやってテイトを言いくるめるのかに注目していた。

テイトはともかくとして、イドウヴァが居るうちは、団長候補にはなれない。

団長という地位より、今のある程度安定した地位の方がよっぽどありがたいものだった。

「新団長選出は、今後の天馬騎士団にとって明暗を分ける最重要事項。いかにテイト団長の功績が素晴らしいとは言え、団長一人の独断に天馬騎士団の将来を託すというのは、いささか危険だと思います」

部隊長達は場に慣れた張りのある声になるほどとつい納得してしまふ。

団長一人の腕に、天馬騎士団……もつと言えばイリアの将来はあまりにも大きすぎて抱えるには荷が重過ぎる。

「そうですね。では具体的に、何か良い選出方法がありますか？」

テイトも前々から、団長の選出の仕方には疑問を抱いていた。だからこそこの会議を開き、新たな選出方法を模索しようと考えた。

——来た

テイトの質問にやや食い気味にイドウヴァが喋り出す。

「はい、私はエトルリアの議会を倣って立候補者への選挙制にするのが良いかと思えます」

どよめく室内。選挙だなんて今までやったことも無い新しい試みだ。

面白い者もいれば煩雑さに拒絶の色を見せる者もいる。

「ただ、全団員に選挙権を与えると何かと手間がかかるので、分隊長以上の身分者のみ選挙権を付与しては如何でしょうか？」

イドウヴァの案はかなり具体化されたものだった。

イリアを皆で創っていくという観点から考えると、一人ひとりの意識が反映されやすいそれは名案だ。

「イドウヴァアさん、ありがとう。他の方も何でも良いのでまず発案してください。その後絞込みをして最適な案を選定する時間を設けますので」

テイトの音頭に、皆からは実に様々な意見が出された。

クジといった冗談案や、年功序列案、傭兵ランクの高い者を団長とする案、更には闘技場形式によるトーナメント戦の優勝者を団長にするといった過激な案も飛び出した。

だが結局、その後の絞込みによってイドウヴァアが起案した選挙案が妥当という結論に至った。

「では、次回の団長選出は、イドウヴァア第二部隊長の案を採用しましょう」

イドウヴァアやその仲間達の口元が緩むかに思われたが、それとは真逆だった。

彼女らはテイトから続けて出た言葉に、一層口元をきつくする。

「しかし、一人ひとりがイリアを創っていく大事な構成員である以上、いくら手間がかかるとは言え、選挙権に制限をかけることには個人的には同意できません。皆さんはどのようにお考えですか？ 異論のある方は挙手してください」

それもそうだと、他の部隊長はすぐさまテイトの考えに納得する。

手間がかかるとは言いが、どの道面倒な事は暇な事務方や十八部隊に任せるつもりだったので苦にならない。

結局誰も異論を述べる事はなく、選挙権は団員全員が持つこととなり、会議が終ると皆はさっさと会議室を後にしていく。

「やれやれ、皆結構他人事だね」

レイサは部屋に残って、テイトと会場の後片付けをする。こういう雑仕事は殆ど手伝っていた。むしろ十八部隊は庶務が仕事なのだという雰囲気さえ漂っている。

「ええ、皆進んで団長になろうという人はいないのでしょいか」

「……まあ、なったら色々面倒なことがあるしね。仕事以外で」

レイサの言う事が何を指しているか、テイトには分かっていたが言わなかった。

イリアを創っていく上で、最も排除しなければならぬことの一つ。

しかし、テイトには僅かながらにも安堵の気持ちがあった。

これで……自分に課せられた重大な使命を終えられる。団長の任は……自分には荷が重過ぎる。

逃げてはいけないと自分に言い聞かせても、何処からともなく湧き出る甘さに、彼女は腹が立った。

その頃、イドウヴァは部屋に戻って色々画策をしていた。その顔には苛立ちがはつきり表れて机を指先でトントンと何度も叩く。

途中まではいい流れだったのに、少し厄介なことになった。あのヒヨッコ団長は何処までも邪魔をしてくれる。

「まあいいでしょう。あの部隊の票をいただければ、勝ちが決まったも同然。問題は団長に味方するあの二人をどうするか……。ここはあなたにひと頑張りしてもらいましようかね」

机に座り次の作戦を考える彼女の傍らでは、イドウヴァの問いかけに任せると頭を下げるアルマの姿があった。



## 第2話 剣の在り処

カルラエ城で部隊長会議が行われていたころ、シャニーは城から少し離れたところにある村の上空から眼下を見下ろしていた。

見習い天馬騎士としてまわった世界。その経験は彼女の視野を広めた。イリアの外のことは。

おかげで肝心なイリア内のことは全然分らない。

イリア民としているいろいろ知っているように頭では思っている、いざ何か仕事をするとなったとき、つくづく思い知らされるイリアへの無知。

そこで彼女は団長から与えられた時間を活かして、イリア内を回っては勉強の最中。

さんぽに行くと同様な問題が見えてくる。

騎士団が把握している事とはまるで違う話を、地域の村人から聞かされた。毎日が発見であり、毎日が問題提議の連続。

最初は天馬騎士団と聞いただけで青筋を立てて追い出されることもあったが、足しげく通って声をかけ続けたら、最近になってようやく話を聞いてくれるようになった村も多かった。

そうやって少しずつ村人から話を聞かされたたびに取ったメモは10冊を超えた。

メモを取ればとるほど自分は何も知らなくて、一人前を名乗れるような状況ではないことを思い知らされる。

「強くなっていつかきつと、このメモすべてを解決できるようになってやる」

シャニーのこの頃の口癖だった。剣だけでない様々な強さを身に着け、イリアを良い国に発展させたい。

見習いの頃はそこまで強く感じなかったこの気持ちだが、叙任を経て村人の話を聞くうちにどんどん強くなっている。

それでも、今はどれをとっても半人前だ。知識も、騎士としての経験も、人を動かす力も。

気持ちが先走る彼女にとって、これほど歯がゆい事はなかった。

今はそれをぐつと抑え、自分に欠けているものを少しずつ吸収しようと思意する。来るべき将来に備えて。焦つてもろくなことは無いと学んだのだから。

「今日は何処へさんぽに行こうかな。……ん？」

下のほうをきよろきよろと見まわしていると、何かがピンと来た。

この気持ちは……あまり良い知らせではない。

天馬を旋回させ、もう一度同じ場所を眺めてみる。あまり高度を下げると誰から狙われるか分からないのでそうは下げられないけれど、この高さからでも何が起こっているか想像がついた。

「大変だ！ 賊が村を襲ってる!!」

そこまで大人数ではないが、大男達が村落を襲い、家に火を放っている。

上空から見下ろす白銀の大地にはつきり見える、まるで生きているかのように躍動する炎。

戦が終わりに、ただでさえ貧しいイリアでは賊に墮ちる者が続出した。

騎士団は復興資金を稼ぐ為にあらかた傭兵に出払ってしまった。

賊で荒れるイリア。騎士が守るべきイリアが、騎士に守られることなく蹂躪されている。

何かおかしいとシャニーは感じていたが、今まさにそれが目の前で現実となっていた。

「どうしよう！ このままじゃ皆殺されちゃう……」

考える頃には、もう体が天馬に指示を与えていた。

仲間を呼びに戻っている時間の猶予はない。幸い相手はそこまで大人数ではなく、賊討伐は見習いの頃に嫌と言うほど経験している。

「へ、この頃は同業者が増えていけねえ。騎士共が金、金、金つてせつせと人殺しをしに行つてんだから、俺達と同じことをしちやあいけねえわけがない。野郎共、さっさと巻き上げちまえ。抵抗するなら容赦するなよ！」

首領が改めて言わずとも男達は好き放題だ。久しぶりだ。

こんなに隙だらけの村は。血に飢えた獣達が、我先にとうまい肉に喰らいついている。

「良い女だぜー。俺もアニキの食い残しを……!?」

他の男達が、後ろで響いた突然の物音に焦ってそちらを向く。

何が起きたか分からないが、そこには仲間が倒れて動かなくなっている。

悲鳴を上げる間もなかったのか、首筋に残されていたのは鋭い一太刀。

「な!? なんだ?」

「あ、アニキー。あいつですー!」

首領はその声に、仲間を殺した相手を確認するや否や持っていた手斧をそちらへ凄まじい力で投げつけた。

その巨体からは想像も出来ない手際のよさなのに、見切ったようにいとも簡単に避ける天馬が蒼穹に駆け、回避が移動の一部であるかのようにそのまま白い騎士がこちらへ突っ込んでくる。

「!?」

目にも留まらぬスピードで自分達の横を突き抜ける一陣の風。

背後に振り返ると、もうあんな上空まで達している。

「おい!。しつかりしろー!」

首領が声を追うと、また仲間が倒れていた。

「なんだ?! 白い悪魔は前の戦争で死んだんじゃないのかよ!」

旋回する隙も見せずに、相手は再びこちらに向かって襲い掛かってくる。その様子はまさに、地上で這い蹲る小動物を狙う隼。

「くそっ、女に負けるのは気に障るぜー!」

首領は舌打ちをしながらも撤退を始め、村から出ると騎士の姿がどんどん小さくなる。

どうやらこれ以上は追いかけては来ないと分かると途端に湧き上がる怒り。

「何が違うってんだよ。自分らだって殺して奪ってるクセによ。あー無性に腹が立つぜ。女に負けるのはぜってー許せねえ」

彼は苛立ち紛れに、そばにあった石を村の方へ投げた。

何か、自分達の獲物を横取りされたように気分。

このままでは腹の虫が収まらないが、白い悪魔が生きていたとなつては流石に太刀打ちできない。

怒りを我慢しなければならぬ事ほど、腹が立つこともなかった。騎士団などどうせ傭兵に出て守備兵など来ないだろうと高をくくっていた事は確かにあるが、それにしてもたつた一人に散り散りにされるとは。

「ちくしょう！ 覚えていやがれ……」



一方村では、山賊が逃げたことを見届けてシャニーが安堵の表情を浮かべていた。

山賊が居なくなつたからだけではなく、暫く実戦に出ない間に腕が鈍っていないか心配だった。

空と言うアドバンテージを利用し、宙から襲い掛かつて戦場を支配する。これぞ天馬騎士。

仲間がいるときは天馬から降りて剣術で天敵の弓兵を狙つたりもするが、無勢を無視できるこのスタイルこそが天馬騎士の生命線だ。

村人の安否を確認するため天馬に高度を下げさせて飛び降り、甘える天馬を宥めながら村を見渡す。

生き残っている村人達が一斉に寄ってきた。

「ありがとうございますー！」

口々にかけられる感謝の言葉。シャニーの顔にも笑顔が戻る。

自分の誓いを守ることが出来て嬉しい気持ちを抑え、怪我人を城へ運ばなければならぬと始めた準備の最中だった。

後ろから突然襟を掴まれて視界が宙を飛ぶ。思わず護身術を使おうとしてしまうぐらいに酷く驚いた。

目の前には村人。ひどく怒っている。何故だか分からなくて抵抗もできない。

「な、何か？」

「……なぜだ？」

重い怒りにシヤニーは縮こまってしまう。

「え？」

「なぜもつと早く来なかった？ 何でこんなに守備が甘いんだ?!」

村人からの予想外の叱咤。喜ばれると思っただのに、逆に責められてしまう事になるなんて。つつい飛び出した反論。正しい事をしたはずだった。

「だって、今騎士団はイリアの復興資金を稼ぐ為に皆傭兵に出払って  
いて……」

何か心苦しい。次第に相手の目を見て話を出来なくなってくる。  
反論すればするほど、矛盾が鮮明になっていく。

「そんな事は理由にならないだろ！ 何の為に騎士団だ！ イリアの  
復興の為にイリア内を蔑ろにするのか。そんな言い訳が通用するも  
のか！」

村人の言葉によって決定的となった矛盾。もはやシヤニーは何も  
言えなくなってしまった。

良いことをした、ではない。当然の事をしたに過ぎない。本来な  
ら、もつと村々を巡回し平和維持に努めなければならぬ。

元々は傭兵に出していない部隊が交代で務めていた警備任務。

人手不足の今では尚更その頻度は減って物騒になっていた。戦後  
で賊が増えているというのに。

「……申し訳……ありません」

「本当に申し訳ないと思ってるのか!？」

「あなた、やめて。この人が来なければ、私たちだつて殺されていたか  
もしれないのよ」

村人の妻と思しき人が走り寄ってきて怒りを静める。

どうやら先程の襲撃で、夫妻の子供が怪我をしたらしかった。

「助けていただいてありがとうございます。まだ私たちは幸せな方  
です。最近では騎士団の方々もイリアの為に忙しいようです。ね。  
どうか無理をなさらずに」

温厚な夫人は、シヤニーを気遣ってくれた。だが、その気遣いが逆  
に矛盾と責任として彼女に重くのしかかる。

(本当は、あたしたちが守って当然なのに……)

騎士団の到着が遅れ、全滅してしまった村もあるらしい。

夫人の言う幸せは、それに比べればまだ幸せ、という意味だろう。それが異常であることはシャニーにも分かること。

自分達は、イリアを守る騎士団であり、自分の誓いは、イリアの民を救うこと。

それが、こんなレベルで幸せと言われていて良いのだろうか。何か悔しさを隠しきれない。

悔しさだけではなく、怒りもこみ上げてくる。誓いだけ一人前で、何も出来ない自分に。



騎士団に帰ると、アルマが珍しく十八部隊に顔を出している事に気付く。

しかも何を思ったのか、彼女が嫌っているはずのレイサに頭を下げているではないか。

目をごしごしとこすってみるが、これは夢でも幻影でもなんでもないようだ。

「よろしくお願いします」

「あんた、完全にあのクソ小母の手下になっちまったね」

アルマはレイサの言葉に軽く笑っていたが、きっと彼女を見据えなおすと力強く言い放った。

「私はあの人を尊敬しているのです。いくら十八部隊長と言えど、侮辱は許しません」

「ふーん」

「……それより、今の件、よろしくお願いします」

再び赤い短髪を下へ垂らす。

それにふうつとため息をつきながらレイサが首を縦に振ったことを見届けると、用事は済んだとありあり分かるくらいアルマは足早に去っていく。

その足で今度は第五部隊へ向かうらしい。彼女にはいつもの落ち着きがなかった。

「……そこまでして団長になりたいのか、あのお局様は」

レイサが見せる沈んだような、厳しい顔。

シャニーはその理由が分からなかったが、そんな顔をして欲しくなかったのですぐに声をかける。

「たっだいまー!」

その声を見切っていたかのように、レイサはシャニーのほうに目をやる。

予想通り昼前に帰ってきたので何も驚く必要もなかった。彼女の腹時計は実に正確である。

「おかえり、どうだった。今日は何か得るものはあったかい?」

「あのね、村が賊に襲われていたから、それを退治してきたんだ」

自分の成果を上司に報告する。その言葉に何かいつもどおりの力強さ、誇らしきがないことに違和感があるが、レイサは褒めてやった。

「そうか、それはよくやったじゃないか。村人も感謝してたろう?」

「それがね……」

ことの経緯を話すシャニーに口を挟むことなく、最後まで黙って聞いていた。

報告は次第に疑問をレイサにぶつける時間変わった。

今の騎士団は民を守る騎士団とは言えないのではないかと。

「そうか、そんなことがあったのかい。……確かに、一理あるね」

「でしょ? 今皆は、民の為と必死にお金を稼いでる。それに執着しすぎて、一番大切な民を置き去りにして、不安な気持ちにさせちゃってる。……あたしも誓いを守ってるつもりになってた。でも、実際はこれっぽっちも守れてない。何か悔しいよ」

唇を強く噛むシャニーは今にも泣きそうだ。思い出されるあの光景。村人に怒鳴られ、何も言えない悔しさと無力な自分への怒りに拳を震わせたあの時。

また一つ、妹分が皮を破ろうとしている。

問題を見つけて注視することが出来た。見つけた問題を彼女はどうやって解決するだろう。

仕方ないと諦めたり、愚痴を言ったりだけでは、何の進展も得られ

はしない。

現状を客観的に見つめ、慣習に流されることなく事態を打開することが出来るか。少しだけ、助け船を出してみる。

「シヤニー、今がおかしいって分かったのなら、あんたはどうすればいいと思う？ お金も大切なんだよ？」

「それは分かるよ。でももつと……イリアの中の事を大切にしないでちやうって思うんだ。皆嫌がってやらないけど……絶対おかしいよ」

皆、国内案件は嫌がってやらない。たらいまわしの案件は今でもいくつかある。

その理由は、今日の前にいる若い心には言っても飲み込めまい。

レイサはしっかりと自分の意見を言う妹分を撫でてやった。こうしてやると彼女が喜ぶという情報は、団長から収集済みだ。

「よく言ったね。その通りだよ。私たちは民の騎士だ。民を置き去りにして自分達だけ突っ走っても意味がない。でも……批判だけなら誰でも出来るよ。そこまで言ったんだから、きつと頑張りなよ」

うんうんとうなずいて見せる笑顔はきつと分かってくれたに違いない。

彼女が解れば、その考えは部隊内に一気に広がっていく。仲間への駆けていくその背中を眺めながら、レイサは聞こえないようにささやいた。

「シヤニー。ちゃんと民の為に剣を振るつたね」

少しずつ成長する妹分を心の中でもう一度撫でてやる。

だからこそ足りない。守るだけでは足りない。守られることも必要だ。

これからの成長でそのうち気づいてくれることを願うレイサの顔には厳しさが浮かんでいた。

「さて……首領をしとめてないとなると……これはちよつと厄介なことになったね」



### 第3話 咽び泣く剣

イリアの漆黒を切り裂く白銀の翼が一段とスピードを上げ、流星のごとき天の騎士はそのまま明かりの灯る城下町へと吸い込まれていった。

ここはエデツサの城下町は某所。貴族街と呼ばれる、貧しいイリアの中では珍しい高級店が並ぶ通り。落ち着いた構えのレストランの個室に消える赤髪の天馬騎士。

「イドウヴァ第二部隊長、遅くなって申し訳ありません」

腰に差していた剣を壁に立てかけたアルマは、既に集まる他の先輩騎士達に挨拶をして回る。

ここは天馬騎士団の接待でも良く使われる老舗で、彼女らも良く作戦会議に利用していた。

「ご苦労様、どうでしたか、各部隊の反応は」

イドウヴァが労いの言葉をかけつつ、アルマからの良い知らせを待つ。

まさかこんな形で、諦めていた座を手に入れることが出来る機会が訪れるとは。

今までは団長の独断が多かっただけに、選挙とは願ってもないチャンスだ。

「はい、残念ながら思わしくありません」

だがアルマは、現実がそう簡単ではないことをハッキリとした口調で報告してきた。

「現団長を慕っている者が多く、なかなかまとまった票を獲得できる隙がありません」

「……やはりそうですか」

思っていた通り、いや、思った以上に現団長は手強い。

真面目一筋の人間は敵を作りにくく、隙が無い。こちらについてくれる強力な浮動票を探し出す事はかなり難しいようである。

「しかし、死力は尽くしています。現在殆どの部隊を回りましたが、現団長を強烈に支持しているのは4割程度。我々イドウヴァ派も同程

度、残り2割弱の浮動票をどう得るかです」

イドウヴァはアルマを見据えながら静かにうなづく。「残る2割の中でも、最大の浮動票は……」そこまでアルマが説明するとイドウヴァは手を顔の前で組んで、顔を前にもたげながら静かに口を開いた。

「部隊コード8820、第十八部隊でしょう？ あそこが10%強を占めていますから、あそこを抑えれば……。目鼻がつくと言うわけですね」

「はい。しかし……」

アルマから明瞭な言葉が返ってこない理由はイドウヴァには分かっていた。

最も重要な場所に、最も邪魔な存在がいる。自分に敵意すら持つていそうな者と、現団長に特別な好意を抱く者。

それらが中心人物である十八部隊の票を手中に収める事が、困難を極める事は言うまでもない。

「シャニーとか言いしましたか。アルマ、貴女は確か交友がありましたね。そちらはあなたに任せます。他の隊員は私から働きかけてみましょう。貴女達も、よろしくお願いしますよ」

イドウヴァの静かだが重みのある声に、アルマも、他の騎士達も黙ってうなずいた。その反応を確かめ、イドウヴァはポンと手を叩いて忠誠へ笑みで返す。

「さあ、今日は楽しませましょう。せっかくのご馳走ですからね」



それから暫く、騎士団内は慌しい状態が続いた。

団長候補として名前が挙がっているのは、現団長であるテイト以外にはイドウヴァただ一人。むしろ皆、団長になることを躊躇っていた。

イリアでは皆が協力すると言う考え方が浸透している。それだけならば何も問題はないが、それが行過ぎてか、長いものに巻かれていれば良いという考えが少なからずまかり通っていた。

「……そんな事しなくていいわよ。今更そんな事をしなくても、私が本当に団長として相応しい人間なら周りが評価してくれるわ」

テイトが他部隊に投票のお願いをしに行く部下を引き止めるが部下も退かない。

いくら団長が品行方正であつても、相手はイドウヴァだ。どんな手を使ってくるか分からないのに、手を尽くさないわけにはいかない。「ダメですよ。相手だつて相当念入りにしてるんですから。私達は団長に続投してもらいたいんです」

制止を振り切って廊下へ出ていく部下の背中にテイトはやり切れない思いを大きく吐き出した。

立候補者による選挙制を採用したのは、こんなことをする為ではなかった。皆の意見を騎士団に反映させるためなのに。

テイトは何とか皆に正しく理解してもらおうと精神をすり減らす想いで部下にも苦言を呈してきたが、その努力もむなしくただの票取り合戦になりそうな感じである。

団長のくせに何と無力なのだろうと、テイトは自分を責めていた。

そんな騎士団内の勢力争いとは無関係かのごとく、十八部隊では今日ものんびりとした稽古が続けられており、さんぽに出ていたシャニーが帰ってきた。

彼女は再びあの村を訪れて、その後の確認のために村人たちに声をかけて回っていた。

「何かあつたら、きつと守るよ」

村人達は、まるで神でも見るかのように讃えてくれた。

ベルン動乱が始まって以来、いやそれ以前からか、イリア騎士達の大半はイリアを守る為と言つて民を守ることを忘れていた。

自衛を余儀なくされてきた村々。そこに現れた、将来の騎士団を創つていくであろう若い騎士。

彼女は約束した。何かあつたら、必ず助けると。

暖かい風のように何かを期待させる瞳。村人は何か今までの天馬騎士団にないものを感じていた。

シャニーが帰ってきたと気づき、自然と仲間が集まってきて始まる稽古。

最初に比べれば、大分皆も力をつけてきた。すっかり打ち解けて笑い声が絶えなくなっていることがそれ以上に嬉しい。

レイサを追い出したあの事件以来、大きく変わった部隊の空気。

皆と居ることそのものが楽しかった。仕事仲間以上に大切な仲間。家族と言ってもいいくらい、夢を語れる雰囲気。

シャニーたちの思いは一点に集まっていた。

騎士と民と言う区分けは、不必要に互いの意識的な溝を深めることになる。

この部隊のように、皆が仲間以上に大切な存在としてイリア全体が結ばれたら。村々を回ることでの思いは強くなってくる。

夢を語るシャニーが笑い、それに連れられてみなも笑い出す。幸せだった。この幸せをイリア全体に広げたい。その思いが乗る槍は、自然と熱が入った。



今日は珍しく十八部隊の姿が無い。鍛錬ではなく詰所でイリア内の問題について議論していた。

それをレイサはずっと、一応準備されている部隊長席の上で寝転がって眺めている。

若い騎士たちは難しい顔をして互いに顔を突き合わせているが、なかなか名案が浮かんで来ないらしく、口がへの字に曲がっている。

それはいかに、イリアに横たわる問題が深刻であるかを一層明確にする。

強引なやり方をとらなければ根底から変えられないような、そんな問題ばかり。

「今のイリアが不安定なのは、どの騎士団も絶対的な力が無いからだよね」

「うん。小国乱立状態になってる」

彼らはイリアがなぜ他国とこんなに環境が違い、どうしたら解決できるのかを議論していた。

頭の後ろで手を組んで椅子を揺らしていたシャニーは、思い付きをぽろっと口にした。

真っ先に、親戚の有力者であり、イリア最大の騎士団を統べるゼロットが頭に浮かぶ。

「どうせなら一個にまとまっちゃえばいいのにね」

誰もが同じことを考え、同時にかなり難しい話だと感じる結論。

イリアが貧しいのは、極寒の為に作物が取れないと言ったどうしようもない理由が大半を占めるが、権力が小さく細分化されてまとまらないから、と言う理由も大きい。

権力の細分化は財力も分散化するということで、どの騎士団にも国を纏め上げるだけの資力が欠如している。

絶対的な権力者、どの騎士団にも顔が通用する人間が少なすぎるのだった。

レイサはそんな議論をあくびをしながら聞いていたのだが、ふいにざわつく何かが脳裏をかすめた。

「嫌な予感に限って、当るんだよね……」

アサシンの第六感。黒い風が、純白の野を切り裂いていつてしばらくしてから「あれ、レイサさんは？」ふと机に視線をやったシャニーが、レイサが居ないことに気づく。

「おろ……。またどっか行っちゃったのかな」

ルシヤナ達も辺りを見回すがやはり、レイサは何処にもいなかった。

そろそろ議論が煮詰まってきたので、レイサにも考えをぶつけてみようと思っていたところだったのに。

締めを欠いた議論はそのまま井戸端会議へと形を変えた。

その頃、未だにぼやく大男も山を越えて純白の野を仲間と共に歩いていた。シャニーに散り散りにされた、あの山賊団の首領である。

「あの村……くそ、やたら腹が立つぜ」

真っ直ぐあの村へと向けられる彼らの足。シャニーへの怒りは、いつの間にかあの村へ転嫁されていた。

あの村さえもつと簡単に自分達の言いなりになっていけば……。力と制圧でしか問題を考えることの出来ない彼らにとつては許せないことであった。

力は、弱いものへ、弱いものへと向けられた。



「うーん、結構話し合ったね」

シャニーが嬉しそうに背伸びとあくびをする。

難しい話は嫌いな彼女だったが、今日はそんな事を感じなかった。

「半分は雑談だったけどねー」

シャニーを見るルシャナの横目はもの言いたげ。

「あはは……。じゃ、今日もさんぽ行ってくるー」

いつもどおりの会話。いつもどおりのリアクション。日常がそこには流れていた。

異常がいつの間にか日常となり、人々を偽りの平和へと誘う。一度日常となってしまうものを、異常であると否定する事は並大抵のことではない。

シャニーは矢に届かない目のまわるような高さから、墜落するかどうかとき急角度で高度を下げていく。

昔から虜になっっているこの何にも例えがたい感覚。それを味わいながら目指す先は、再びあの村に設定されていた。

この頃は各村の見回りが日課。よく散歩途中のニイメにも会うし、村人から色々な情報を聞くことが出来るこの「さんぽ」の時間は、他の部隊では決して得ることの出来ないものをもたらししてくれる。

「さて、今日はどんなお話が聞けるのかな。……ん?! えっ!」

急降下してきた彼女は思わず声をあげてしまった。

姉から散々、天馬に騎乗している時は敵に気付かれないよう声をあげてはいけない。そう言われていたが、今の彼女にはそんな注意は頭にはなかった。

山賊が再び村に襲撃を仕掛けており、応戦しているのは部屋から消えたはずのレイサ。天馬の降下を待たずにシャニーは飛び降りた。

「はあはあ……後から後から沸いてくる……」

「レイサさん！　つてうわあ！」

背後からやってきた何の警戒心もない相手に、レイサは容赦なく喉元へ短剣を押し付けた。

持ち前の身のこなしで何とか牙を弾いたシャニーだが、目の前の鬼気迫る眼光に睨まれ背筋に寒気が走った。

「後ろに立つなって言ってるだろ！」

いつもの部隊長とまるで別人のような雰囲気。知っている彼女とは纏っているオーラが違う。

目の前から消えたレイサが、少し先にいた山賊の喉元をその鋭い牙で食いちぎっていく。

「くそっ……ひとりじゃラチが開かない……」

「何があつたの！」

シャニーもレイサを手伝って山賊を討伐しながら状況を見渡すが、火の手が上がる民家以外何も見えない。

その間にも、彼女は部隊長の闇の剣の正確さと破壊力に息をのむ。彼らの半分ぐらいの太さしかない腕で、迫り来る荒くれどもをあっ

という間に倒していく。今のレイサはアサシンという悪魔だった。

「襲われたんだよ。あんた、この前首領の首を取り漏らしたろ？」

「あ……。み、みんな、村の皆は!?」

「……」

その瞬間、とてつもない罪悪感が彼女を襲った。あの時、あの瞬間、自分が首領を追いかけて息の根を止めておけば……。

「そんな顔するんじゃないよ」

呆然と立ち尽くすシャニーの意識を引っ張り戻す。

「あんたはその時最良の方法を執った。村人の安否を最優先にしたあんたは立派だ。それとこれとは全くの別問題なんだよ。今はこれ以上の被害を出さない為に、目の前のことに集中しな！」

自らを押し潰しそうになる感情を押しさえて必死に戦った。

村にはもう、荒くれ以外の姿がない。信じたくない現実を前に、懸命に騎士として自分を律する。

そう時間を待たずして、見覚えのある顔と遭遇することとなった。  
「あ、あんたは！」

「ん、この前の小娘！」

相手もやはり顔を覚えていた。互いに相手への怒りが沸騰し、言葉も交わさず武器を握りしめて突撃する。

しかし、歴戦の騎士と山賊では、やはり力量に違いがありすぎた。

「よくも皆を苦しめて！ よくも！」

「ぐ……ふざけるな！ 何が皆を苦しめてだと？ てめえのやってること棚に上げてほざくんじゃねえ！」

「何?！」

あつという間につく勝敗。それでも収まる事のない互いへの怒り。それどころかどんどんヒートアップしていく。

「貴様らこそ、民を守るとか大義を掲げて何をしていやがる！ 俺らは放っぽりっぱなし。人様のものは奪ってはいけないだど？ 他人の国へ人殺しに行つて金を稼いでいるお前達が言える台詞なのかよ！ 俺らがこんなことしなくても済むようにちゃんと国を守れよ！」

「あたしは……違う。……違うっ！」

「何が違うんだ！」

苦しかった。自分が変えたいと思つていふことで責められている。

相手だつて元は普通のイリア民。それが戦争を経て、奪わなければ自分が死ぬ立場にならざるを得なくなった。

誰が悪いのか。それは誰にも分からないこと。唯一つ言える事は、他所からあらゆる意味で奪わなければ生きていけない国、それがイリアであるということだ。

「あたしは……違う。そうしなくても済むような国に変えたい……そう思つてる」

「なめてんのか！ そう思うんならさっさと変えろよ！ 騎士だろお前、国を守る騎士だろうが！」

そこまで放たれてびたりと止んでしまう威勢の良かった声。その後ろにはレイサがいた。何か大男でもギョツとするような形相だ。

「シャニーは頑張つてるよ。誰かがやってくれるだなんて思つてる大



馬鹿とは比べるのもおこがましいほどにね」

レイサは短剣を鞘にしまうと、戦いの終わりを告げるように髪を手で梳かす。

ゆつくり歩いてきてシャニーの肩をポンポンと叩きながら向けた眼差しは、いつものレイサに戻っていた。

「後悔しても仕方ないよ。あんたは変えるんだろ？　こんな人たちが出ないようにするために」

今迄は戦場の中で必死に騎士として凜と感情を抑えてきたが、もう堪えきれなくなってしまうた。

レイサに声をかけられた途端、ぽろぽろと感情が溢れてくる。

自身の不甲斐なさへの怒り、悔しさ、守れなかった切なさに悲しみ、……何より、喪失への虚しさ。

「確かに、あんたがこの村に干渉しなければ、ここまで大きな被害は出なかったかもしれない。でもね、善意が必ず良い結果を生むとは限らないんだよ」

悔しさに俯き咽び泣く若い騎士の左手には、未だに剣が握られていた。

その剣をそつと鞘に納めさせて前を向かせる。見つめてきた瞳は真っ赤になりながら震えて助けを求めてくるかのようだ。

「レイサさんは……この人たちを見捨てろって言いたいなの？」

涙を堪えきれないシャニーの頬を手でぬぐってやりながら、レイサは屈みこんで濡つ青い瞳を見つめてすっかり彼女の肩を持つ。

「違うね。教訓にしなつて言いたいんだよ。こいつら含め皆……被害者だ。被害者を出さない国を作らなければならない理由……それを肝に銘じろつて言ってるのサ」

シャニーは俯いたまま言葉を返さなかった。

放つておけば、殺されずに済んだかもしれない。こんなことを望んだわけではないのに。求めつつも、失い行く。そんな事を納得出来るわけがない。

頭では理解できても、それを是として受け入れることが出来なかった。これは、単なる自分のワガママなのだろうか。その答えが出せな

い。

——民を守るために戦う

誓いを実践しようという勇気を出したその結果、守るところか滅ぼしてしまう。

どんなに善意を主張し、結果に繋がらない事もあると言い訳しても、被害者に残るものは失望だけ。

誰が悪いのか、誰が正しいのか……、何をするのが、どんな結果を生むのか。

他の国ではある程度明確になるはずが、イリアでは最も不鮮明だった。それは降り積もる雪の層の如く、分厚く真理を覆い隠していた。「ほら、そいつ天馬の後ろ乗っけて。報告しに帰らなきゃならないだろう?」

「え……うん」

「しよ気るんじゃないよ。あんたは誓いを守った。結果はついてこなかったけど、最良の方法を執ったんだ。受け止めて前を向きな。それが生きるってことだよ」

納得できなかった。大男を天馬の後ろに乗せ、シャニーは唇を強く噛みながら城へと帰還していく。

悔しかった。情けなかった。誓いを立てても、それを実践できない自分に腹が立った。そして平和を乱す者へ、その怒りをぶつけることが出来ないもどかしさがあった。

いつの世にも、平和を乱す者は必ずいる。だがイリアの場合、その者だけを責める事が出来ない。彼もまた被害者で同じ怒りを抱いていた者達。

そういった「被害者」を出さないようすることが、最も大切なこと。にもかかわらず、多くの騎士は、戦いの中でそれを忘れていく。自分達の仕事は戦うことで、戦った結果、民を守ることが出来る。そう信じている。

その結果と動機のとりに間違いが、イリアを歪んだ理が覆う原因のひとつと成っている事に気付いても正そうと動けない。

その矛盾を前に、若い騎士は苦悶していた。

## 第4話 挫折の残照

こんなに重い足取りでカルラエ城の中を歩くのは初めてかもしれない。

笑っていれば人間愉しく生きていけると自分で言っていたくせに、今は笑う気になんてなれない。

どうすればいい？ どう受け止めればいい？ 城に帰ったシャニーの重い足取りは、無意識のうちに団長室へと向かっていた。

「団長」

ノックも無くすうつと開いたドア。聞きなれているはずなのに、テイトは何かゾクつとする思いだった。

落ち着かない様子で声を追うと沈んだ蒼がそこにはあった。

「シャニー……シャニーさんじゃない、どうしたの？」

「うう……お姉ちゃん！」

何とか平素を装おうと努めていたが、やはり十何年もの付き合い。そう簡単に相手へ気持ちを隠し通す事は出来なかった。

姉の顔を見た途端、もう騎士である事を忘れてしまうぐらいの感情がこみ上げてきて泣きじやくった。

妹の泣き顔を見ると流星に小言は出来ない。それどころかどう声をかけていいか分からない。

妹が生まれてからずっと一緒に暮らしてきたのに、シャニーを頭の中でイメージするといつも笑顔が浮かんできた。

それほどに朗らかな妹が、今自分の前で泣き崩れている。とにかく、この場所では受け止めてあげられない。

彼女は妹の顔を拭いてやるとそのまま団長室から出て、更に城も出て……城下町に彼女を連れて行った。

カフェテリアに一緒に入る。昔は良く二人で喫茶しに来ていたが、シャニーが騎士になってからはそんな機会など今まで全くなかった。

「さ、ここなら思う存分話せるわ。ここでは私とあなたは上司と部下ではなく、姉と妹……家族よ」

シャニーは嬉しそうな顔をしたがすぐに先程の沈んだ顔に戻り、昼

にあつたことを一つ一つ、惨事を思い出しながら話す。

「まあ……なんて事。私の力が、至らないせいね……」

「そんなことないよ！ お姉ちゃんは騎士団全体をまとめなきゃいけないんだ。もっと末端のあたし達がしっかりしていれば」

「……それでは通用しないことが、貴女にも分かっているはずでしょう？」

団長の身からすれば、各部隊からの報告から状況を把握、確認するしかない。

イリア内のことが疎かにされている現在、イリア内の事を詳しく把握する事は困難だ。

それでも民や他騎士団がそんな言い訳じみたことを聞いて何を思うか。伏していく空色の瞳。

「私も、もっとイリア内のことに力を注ぎたいと思っているわ。でも、そのためにはやらなければならないことが多すぎて……」

こんな愚痴紛いのことを言ったところで、言い訳は聞き苦しいと他騎士団から言われるだけだろう。

イリアの中でも特に天馬騎士団の管轄地は復興が遅れているのだから。

「ねえ、貴女はどう思っているの？」

ちようどいい機会だ。普段報告から吸い上げられない末端の想いに触れてみることにした。

「もっと、イリア内のことに重点を置かないとダメだよ。民の為に戦っているって言える状態なのか解らないじゃない」

思った以上に強い言葉を放つ妹。面食らった以上に嬉しかった。自分の意図通り、妹がレイサの下で成長してきてきている。

今までは難しい話をしても分からなかったし、いきなり難題を提示してもきつと頭がパンクするだけだろうと思いを避けていた。

今の妹の目は真っ直ぐ問題点へと注がれている。もう今なら、きつと応えてくれるかもしれない。一人の天馬騎士として、議論することが出来るかもしれない。

いつまでも新人部隊に置いておくつもりはないし、いつまでも新人

気分で居てもらっては困る。

それはシャニー以外にも言えることだったが、無性に妹と議論したくなつた。

一昔前まで、何を言ってもすぐ口答えをしてきた、でも可愛くて常に気にかけていた妹。それが今、自分の前に一人の天馬騎士として座っている。

昔がとても懐かしく感じるが、いつまでも時は止まってはいない。テイトは思い切つて、シャニーに向かって考えをぶつけてみることにする。

「じゃあ聞いわ。貴女はどうすればいいと思う?」

そう問われてシャニーが目を真ん丸にする。姉が自分の意見に聞く耳を持つてくれるなんて。

今までまともに取り合つてくれなかった姉が、騎士として初めて自分を認めてくれた。

この機会を逃すわけには行かない。いくら姉妹とは言え、部隊長を経ずに団長に直接意見できる機会など滅多に無い。

「もちろん! もっとイリア内のことに重点を置かなきゃって思つてるよ!」

「……具体案は?」

テイトは慎重に言葉を選びながら純色な騎士の意見を聞いていく。彼女はレイサに感謝していた。彼女の持つ色は、今も変わらず澄んでいる。

「具体案……。そんなの、イリアの守備に多く配置すればいいだけじゃん」

「今はイリアの復興資金を調達しなければならぬのよ? 破壊されたイリアを復活させる事が民の為になる。そうは考えないの?」

「でもさ、目の前で苦しんでる人も救えなくてイリアの復興つてできるのかな」

テイトから問われた話は十八部隊内でも良く議論してきたもの。なかなか答えは出てこないが、遅れます、出来ませんと言ってはいけないもの。

民のために——それを誓いとするなら、行動で示さなければならぬ。それなのに……。瓦礫と化した村を思い出して拳に力が籠りスカートを握りしめる。

「あたし……救えなかった。誓いを守れなかった。悔しいんだ。出来てるつもりで、出来てないんだもん。亡くなった人たちと正面向いて、イリアのために頑張ってるなんて……今の状態じゃ言えないよ」  
思った以上にシャニーが色々考えている事に内心ギョツとするほどだった。

（これはとことんまで、この子の気持ちも聞いてみてもよさそうだが）  
テイトは一旦席を立つと、妹に紅茶を持ってきて、ついでに軽い焼き菓子も付けてやる。妹も色々考えて疲れていることは顔に残る涙の跡を見れば分かる。

「さ、ゆっくり話しましょう。ホラ、食べて」

言われるままに焼き菓子をほおぼる。テイトには先程より表情が緩んでくるのがすぐに分かった。

「目の前の民も救えなくて、イリアの復興なんて出来ない……。なるほど、言い返す言葉もないわ」

「なんか本末転倒になってると思うんだ。戦ったおまけで民を守れているのか、民を守るために戦っているのか。騎士の仕事は、イリアの為に、人々の為に戦うことじゃないの？」

何も言い返せなかった。妹の言っていることはまさに今の天馬騎士団の縮図。

自分でもうんざりしているほどに、騎士団の中は自分たちのために戦っている状態だ。

望まずともそれを助長してしまうことになって心が黒々と沈んでくる。

「……確かに。今の騎士団の雰囲気は異常なものがある。皆必死に名声を得て、ランクを上げようとしている。最初は私も、報酬を多く得て、民の為に頑張っているのだと思ったわ」

持っていたティーカップをそっと受け皿に下ろす。

何も知らなかった新人時代、姉ユ一ノに色々教わっていた。そのと

き、自分も似たような質問を姉にぶつけたことがテイトにはあった。「团长、どうして皆はあんなに名声を得ることに必死なの？」

そのときの姉は、一瞬黙した。あの理由も今となっては分かる。「皆ね、傭兵としてのランクを上げて、少しでも多く報酬をイリアの為に送ろうと頑張っているのよ」

そうは思えないから、テイトは聞いたのに。その言葉の裏にある真の意味は違った。

——それは、自分で見つけなさい。そして、それに対してどう思うか、自分自身の考えをしっかりと持ちなさい。

「じゃあ、何で変えようってならないの？」

シャニーの言葉は、今のテイトにとってはあまりにも厳しい言葉だった。

「変えようと思っっているわ！ 私だって、どれだけ毎日そのことを考えているか！」

肩をすぼませる妹を見て、彼女ははっと我に返る。こんなに自分を出して話したのは本当に久しぶりだった。

「……ごめんなさい、大きな声を出して」

大人気ないと思いつつも、妹が相手ならもう少し気を緩めてもいいのではないかとも思う。自分のことながら不器用な性格が時々嫌になる。

「でも、私は私なりに考えているつもりよ。どうしたら、騎士団が民の為に動けるのか。今の騎士達は、自分のために動いているわ。それはイリア騎士としてタブーとされているはずなのに」

シャニーにも思い当たる節がいくつかあった。

イリアのために戦っていると言いつつも、イリア内の守備より外へ傭兵に出ることを好しとする風潮。民の為の騎士団なのに、民に相談する事もなく展開される事業……。他にも色々ある。

だが新人の自分には、それを変える力もなければ、おかしいと主張して振り向いてくれる者も殆どいない。

「私が貴女を新人部隊に配属したのも、それを考えてのこと。貴女は私の思惑通り、色々吸収して、色々考えて、こうして議論が出来るよ

うになつてくれたわ」

「お姉ちゃん……」

ティトには分かっていた。もし、シャニーを普通の部隊にいきなり配属したら、今の慣習を是とする古参騎士達と衝突することが。

話を聞いて受け止めてくれる。そんな部隊に新人部隊をしたかった。

他の新人も同じだ。新人の間に、歪んだ価値観を植えつけて欲しくない。

これからの騎士団を形作っていく者達に必要なのは、しっかりした自分の考えを持つこと。

騎士団と言う縦の関係の中で、ただ上から言われた事をこなし、気に入られようと必死になる。そんな風にはなって欲しくなかった。

——新人を、傭兵のまままで終わらせてはいけない……

「さ、4か月弱、新人部隊で培った事を色々聞かせて。どうすれば、イリア内のことを重視できると思う？」

「シャニーは何か自分が情けなくなつた。」

姉は自分の実力を見くびって、新人部隊に入れたわけではなかった。自分の事を良く知っていたからこそその選択だった。それを自分は……。

騎士団に入ってからこんな気持ちになることばかりだ。この4か月弱、色々知ることがあつたし、考え方が変わったと自身でも驚くこともある。

普通の部隊で過ごしていたら、一体どんな風になっていたかとすら思うほど。

「人手不足なら、騎士を増員すれば……」

「増員する騎士がいらないから見習い修行を免除しているのだし、仮に増員したとして、騎士の労務費はどうするの？ 今でも騎士の労務費はかなり負担になっているのよ。ただ削減するだけでは士気が下がる危険もあるし」

色々意見を出し合ってみるが、なかなか名案は浮かんでこない。

イリアの抱える問題が矛盾に矛盾を重ねた多次元的な問題である



事を改めて立証することになった。

「ああ、いつそ一つの騎士団にまとまって国として動けるようになればいいのに！」

シャニーがとうとう頭を沸騰させて髪の毛をくしゃくしゃにし始めた。伸び始めている髪を止めていたピンが飛んでいく。

「……そうね。私もそれが最善だと思う。各地方の騎士団がまとまれば、人員不足も資金不足もある程度補えるわ。でも、それはなかなか難しいわね……。私もそこまで顔が広いわけでも、発言力があるわけでもないし」

結局結論はいつも同じだった。イリアのこの小国乱立状態をまとめることが出来れば……。

テイトもシャニーも改めて自分の無力さを思い知る。どれだけ剣捌きに、槍の扱いに長けていても、それとこれとは全くの別問題。ことのほかシャニーはまだ新人。動乱でどれだけ功績を残そうが、イリア内の騎士としては全くの無名。

「無理……なのかな。目の前の民も救えないあたしじゃ、やっぱりイリアを変えることなんて……無理なのかな」

無理、そんな言葉を口にしたくはなかった。

見習い修行に出てから、絶対に諦めないを信条にどんな事にも全力をぶつけてきたつもりだ。

だが、今日の前にあるものは、山より高い気がして光が見えない。「そんな顔をしないの。レイサさんも言ったと思うけど貴女は貴方なりの最善を尽くしたんでしょ？　なら、もういつまでも悔いていてはいけないわ」

そう簡単に立ち直れと言って切り替えられる話ではないことは分かる。それを仕方がないと言ってしまえる時点で、もはや思考は停止しているのだから。

「うん……」

案の定、シャニーの返事には魂が籠っていない。

「シャニー。過去は引き摺る為にあるものじゃないわよ。そこを良く考えなさい」

「分かってるよ！ でも、そう簡単に忘れられないよ」

過去をいつまでも引き摺って苦しむ事は良くないこと。テイト自身が一番よく分かっていた。

かつて戦場で主を違え、妹と槍を向き合ったあの時、あの瞬間。今でもそれが脳裏をよぎることがある。

騎士としての誓いを全うしただけ……そう割り切ろうとどれだけ頑張ったことか。

だが、割り切る事など出来ない。忘れる事など一生出来ないだろう。

「……分かってないわね。過去を忘れなさいって言っているわけじゃないわ。いえ、決して忘れてはいけない。どうすればいいかは自分で考えなさい。考えることが、貴女の仕事よ」

——新人は考えることが仕事

あまりに重い宿題。テイトとカフェを後にするこの瞬間でさえ、失敗を引きずって歩いていることは自分でもよく分かっている。

無力な自分に一体何ができるのか。テイトの背を追いカルラエ城に戻る間、答えを求める青い瞳はずっとイリアの沈みゆく残照を見つめていた。

## 第5話 果てしなき野望（1）

テイトと城に帰ると、もう夜になっていた。

帰宅したらまず何をしようか。夕飯の支度か、先にゆっくり風呂に入って考えを整理するか……。自分の性格を考えたら、掃除を先に済ませておきたい気もする……。

一気に生活感が戻ってきてとにかく時間が欲しい。そんな考えを巡らせながら帰る支度をしているシャニーの許へゆっくり歩み寄ってくる影。

「どーだった？ 団長との久々のお喋りは」

レイサだった。彼女は手に持っていた資料をシャニーへ手渡す。中の内容は案の定、あの村と山賊団の調査に関するものだった。作製部隊は……。

「2600……」

シャニーは紙面右上にあつた部隊コードを無意識のうちに読み上げていた。

「そう、第二部隊だね」

「イドウヴァさんがここに仕事を回してくるなんて、珍しいね」

イドウヴァは普段、自分の仕事を他部隊に依頼する事は滅多になかった。どんなに多忙でも他部隊には依頼せず休出などで切り抜ける。

各地方から依頼された仕事を自分の部隊で独占してしまう為、他の部隊の手が空くといったことすらあつた。

だが、彼女を取り巻くいわゆる“イドウヴァ派”の層は厚い。なぜなら、派閥内の者が属する部隊には仕事を回してくれるからだ。

テイトも再三、彼女にそういつたことを止める様に警告したが、彼女を上層部から下ろす事は流石に出来なかつた。

人のいない今、各地に顔の広い彼女は騎士団にとって貴重だ。

団長になつたとは言え、それまでは無名だった天馬騎士。今でこそ、余裕があれば名前を覚えてもらおうと各地に顔を出しているが、流石にベテラン騎士の年季には敵わない。

イドウヴァも団長の内心が分かって来てから、好き放題と言って過言でない振る舞いを見せていた。

「まあ、大体理由は見当がつくけどね」

そんな彼女の魂胆が読めているのか、レイサは鼻を軽く笑った。

その予想は、驚くほどに的中する事となった。

次の日、顔を洗ったシャニーは朝日に向かって背伸びしていた。

きりつと肌突き刺さるような寒気の中、伝わってくる陽の温もり。背伸びをして精一杯広げた体にそれを浴びせると、何処からとも無く元気が湧いてくる。

「あー！ つと、今日も一日頑張るかな！ 今日の朝ごはんのおかずはなんだろうな」

その肩にふいに乗せられるタオル。振り向くとそこには珍しい顔。いつも時間の無駄と言つてろくに顔を見せないアルマがいた。

「よ、おはよう」

「アルマじゃん、おはよー」

暫く他愛も無い世間話で盛り上がる。

どうやらアルマは十八部隊から離脱して以来、イドウヴァ達とよく遠征するようになったようだ。

世界の色々な情報をシャニーへもたらす。この頃イリア内の事しかやっていなかったシャニーにとっては新鮮な話だった。

「へえ、すごいね、色々世界を回ってるんだ」

「そうだ。お前も国内のことばかりやってると、井の中の蛙になってしまうぞ」

この頃気にしていたことをグサリと。

イリア内の事をもっと重視して、民と助け合って行きたいと考えているけれど、外へ遠征しないと何も情報が入ってこないし知る事も出来ない。

もっといい方法が世の中にはあるかもしれない。それを思えばイリア内だけで仕事をしている事は、あまりいいことではない。

「うー……それを言わないでよ」

井の中の蛙……これ以上無いほどに今の自分にぴったり合う言葉を喰らって思わず口を尖らせる。

その心を確かめたかのように、アルマが思いがけないようなことを口にした。

「お前は、外へ仕事をしに行きたいとは思わないか？」

「え？」

あまりにも唐突な仕事の誘い。一体何があったのかすら考える事も出来なかった。

「第二部隊のイドウヴァ部隊長は、お前の実力を認めてくださっていて早く自分の部隊に欲しいと仰っているんだ」

「えへへ、それはどうも」

「一人負傷者が出て、今度の遠征に参加できなくなてな。是非お前の実力を見てみたいと言っているんだ。どうだ、来ないか？」

夢かと思うような話だった。自分は全く知らないイドウヴァ第二部隊長が、自分の事を認めてくれていたとは。

昨日の仕事依頼とも関係があるかもしれないと詮索してしまう。

「そっか……。行きたいけど、レイサさんの許可をとってからじゃないと返事は出来ないよ」

「別に返事を急ぐつもりはない。一週間程度先の話だからな。ゆっくり考えて、そっちの部隊長と相談すれば良い。それより……」

アルマはシャニーとの距離を一步詰める。シャニーも急に相手が顔を自分の顔に近づけてきたので何かあるのだと思い、更に近づける。

「今度の団長選出選挙、どう考えている？」

「え？」

遊びの誘いか。アルマに限ってそれは無くとも稽古にでも誘ってくるのかと思ったが、予想は簡単に外れた。

「どうって、何が？」

どんな答えを期待されているのかよく分からなくて眉をひそめると、アルマの目じりが少しだけ吊ったように見えた。

「どちらに投票するか決めているのかと言う事だよ」

「ああ。うーん、どうしようか決めてないよ。だってどっちが団長に向いてるかなんて、新人のあたしに分かるわけないじゃん」

彼女の意思は固まっていない。間髪入れずに働きかけようとするが、それより先にシャニーが独り言のように続けだした。

「でもなあ、やっぱりあたしはお姉ちゃんが好きだし、お姉ちゃんに入れようかな」

十八部隊のリーダー格である彼女の動向が、他の者へ与える影響は明白だ。

何としてもこちらに引き寄せなければならぬ。人手不足の今年には、この何も染まっていない新人たちが結果を大きく左右する。

「そんな理由で入れるのか？ 今後の天馬騎士団を左右する大切な一票を」

「そ、そんな大げさな……でも、そうだね。うーん……」

「イドウヴァ部隊長は、お前の事を認めてくださっている。仕事の依頼が来ただろう？ あれもお前の将来を考えて、早く仕事をさせたいと言うあの方の意向だ。人を見る目は、現団長よりあると思うがな」  
ここぞとばかりに畳み掛ける。相手は現団長の妹。普通に考えれば、親しい姉に投票するのが道理だ。

だが、その道理を無理にでも引つ込ませる必要があった。

（今、こいつに考える隙を与えるわけには行かないな）

悩むシャニーへとどめを刺すべく更に続ける。

「お前ほどの実力者が、イリア内だけでくすぶっているいいのか？

イドウヴァ部隊長は、それを絶対にさせない。悔しいが、私以上に期待されているようだからな」

「そうなの？」

シャニーもどう考えて良いか分からなくなってきていた。

イリア内のことを重視したいが、今イリアの復興や自分の今後を考えれば国内だけで仕事をするのは良くない。

それに、親友のアルマはイドウヴァ部隊長を非常に良い人だという。

「現団長はイリアを変えると公約しているが、この半年、何か変わった

と思うか？ イドゥヴァ部隊長は具体的な案を持っている。それは……」

そこまでアルマが言ったところで、彼女の肩に後ろから乗った手が止めた。

「部隊長！」

イドゥヴァだった。シャニーは初めて見るはずの彼女を見て驚いた。見覚えがあつたからだ。この人は、そうだ。いつもシグーネの後ろにいた人。

「はじめまして、イドゥヴァ部隊長」

「はじめまして。予てから貴女の事は良く知っていましたよ」

「え、どこかでお会いしましたっけ？」

会うことすら初めてなのに、相手は自分の事をずっと前から知っていたと言う。改めて、狭い世界で仕事をしていたのだと実感する。

「会うのは初めてですが、ベルン動乱では史実に残る活躍を見せたそうですね。同じ天馬騎士として光栄ですよ」

会うのは初めてだが、以前から知っていた。知らないはずがないだろう……「あの女」の娘なのだから。

会ってみると、嫌でもあの顔を思い出す。そっくりだとは聞いていたが、まさかここまでとは。

何か、あの女に頭を下げている気がして癪に障るが、今はそうも言っていられない。

それに、あの女と違って無垢な新人はぺこりと頭を下げてにこやかだ。

「何かあたしの事を色々気に留めてもらっているみたいでありがとうございます」

目の前にいるのは騎士団の幹部の中でも副団長だ。

新人部隊でずっと内的な仕事や稽古ばかりをしている自分が、上層部に名前を知られていることにシャニーは驚いた。

姉は身内だからと言って、妹を周りに紹介するような人でもない。アルマが喋つたのだろうか……。

色々詮索しようとするが、そんな時間を前に居る二人はくれそうに

ない。

「ところで、私が今回部隊長選挙に立候補した事はご存知ですよ？」  
イドウヴァが目を細めて笑みを浮かべる。質問へ即首を縦に振る  
シャニーへ、更に声を高くした眼差しは優しげ。

「私はイリアの騎士団を統一させたいと思っています」

シャニーの反応はイドウヴァたちにとって見れば予想通りであった。思っていた通り、操りやすそうな人間。

「聞いたところによると、貴女もイリアを変えたいと願っているそうですね。私も、この子も同じです。私はテイト団長とは違う観点から、計画を進めたいと思っています」

シャニーの心は揺れていた。親友のアルマも絶対の信頼を置いている人物のようだ。

この人がどういった人物なのかは、第二部隊隊長と言う事と以前セラから聞いた、面倒見のいい部隊長であると言う事だけ。

「貴女は十八部隊のリーダー格と聞きました。それほどに信頼されている貴女がもし私に票を投じる方向に十八部隊を持つていつてもらえば、きっと私はイリアを良い方向へ持つていくためのスタートラインに立てるのです。どうかここは一つ、お力添えをいただけませんかね？」

驚きの連続で沸騰したのか思うほどくらくなる頭を、シャニーは何とか見つめてくる視線へと戻す。

副団長という騎士団ナンバー2の人物が、新人に向かって頭を下げているのだ。

「今はまだ詳しくは言えないが、イドウヴァ部隊長は騎士団統一の具  
体案を持つていらっしやる。イリア連合のゼロット団長などと話を  
進めるようだ。イリアの騎士団中へ顔の広い部隊長なら、きつとやつ  
てもらえる。私はそう信じている。お前もそうは思わないか？」

——この人なら、変えてくれるかもしれない

何か違和感がある。本当に自分が求めているのはこんなものなのか？

だが、親友達からは信頼されているようだし、自分の事をかなり気



に入ってくれている。

何か妙な、姉への罪悪感が腹の中に湧き上がりながらも、彼女の首は縦に振られていた。

「分かりました。考えてみます」

その返事にイドウヴァは下げていた頭を上げて笑みを作った。

「良い返事を期待していますよ。もし、私が団長になったら、勿論貴女にもイリアを変える最先端でアルマと共に私の右腕となって働いてもらいます。その時はよろしくお願いしますね」

再び一礼すると、彼女は二人の許を後にした。アルマも彼女の手伝いがあるのか、手でシャニーへ合図すると足早に去っていく。

「アルマ、忙しそうだなあ」

自分もイドウヴァが団長になれば、アルマと同じように仕事は世界レベルになる。そう考えると、先程の違和感も期待に掻き消されていった。

## 第6話 果てしなき野望（2）

団長選出戦が三日後に迫った日の昼下がりに。シャニーはいつもどおり食堂で話しこんでいた。

「あー、あたし達が入団してからもう4か月経つんだね」

あと数日で7月も終わり、8月になると夏の終わりが見えてきて寒さが本格的に厳しくなってくる。

彼女はまるで昔でも思い出すようにぼーっと上を見上げる。騎士団にも慣れ、失敗をしながらも着々と成長してきていた。

今思えば他の新人達も、まだ初対面で大人しかったことが嘘のようである。

「僕も騎士団に入ってから色々な仕事を任されてやり甲斐があるよ」

医学の研究に経理、庶務……実に様々な仕事に多忙を極めながらもウツデイは天馬騎士団の中でも希少な男性スタッフとして重宝されていた。

「私もこの頃クタクタだよ。一昨日もエトルリアに遠征してきたばかり。イドウヴァ部隊長はなかなか前線に出してくれないし。私達は荷物持ちみたいな感じ。あーあ、なんだかなあ」

セラだけは何か不満のようだ。思い描いていた部隊ではなかったのだろうか。

もう何度も出陣しているが一度も前線を任されたことがなく、酷い時には野営時の給仕などの雑用だけで終わったことすらあるらしい。

「新人なんだから仕方ないんじゃないのか？ それに、イドウヴァさんはかなり焼畑的で新人があまり育たないって有名な人だよ。特に実力が無いとかなり冷たい態度をとるんだってさ。それを苦にやめた人もいるらしい」

「ちよつと！ あんたそれって私を間接的にザコ呼ばわりしてない?!」

噂を噂のまま口にしてしまっただけからウツデイははっとするがもう遅い。

怒るセラを慌てて宥める。だが、その途中で更に追い討ちをかける

ような発言をしてしまう。

「あ、でも実力のある新人とか、目になつた人物へのラブコールは凄まじいらしいよ。今年もあのアルマって子がいたろ？ ラブコールを受けて今じやすつかりイドウヴァ派の一員、彼女の右腕になつてるよ」

情報通のウツデイの言葉に、セラは上目で口をへの字に曲げた。

ウツデイがまるでその目で見たかのように語っていることを毎日セラは見てきた。

どこに行くにもアルマは呼ばれて、その期待に応えてそれ以上を見せる彼女には勝てる気はしない。それでもあんまりだと思つた。

仕事はバリバリこなすイドウヴァであつたが、新人の育成に関してあまり良い噂を聞かない。ティトが彼女を敬遠した最も大きな理由の一つであるほどだ。

「あ、そうそう、今度の団長選出選挙、どつちに投票する？」

今の会話で思い出してシャニーが突然声をあげる。

自分はあまり考えたことは無かつたが、仲間いきちんと考えているのかもしれない。

案の定、ウツデイの答えはとても早かつた。

「僕は、きつとティトさんに入れるよ。昔からティトさんにはかなりお世話になつたし。僕にとってはお姉さんだつた」

「そうだよね、お姉ちゃん、あたしよりウツデイに優しくかつたもん。やっぱさ、あたしよりウツデイのほうがお姉ちゃんにとつたら可愛いのかなあ」

早速脱線していく話。いつものことだがウツデイは即否定した。彼女ほど妹を大切にしている姉も居ない。

心からそう思うのに、当の本人はまた姉に叱られたと愚痴っている。

「ところでさ、セラはどーするの？」

そのまま脱線したままで居て欲しかつたのだが、シャニーの問いかけにセラは一瞬目を逸らす。

セラにとってこの興味津々が今回に限っては迷惑だつた。その好

奇心に応えられるだけの話が出来ない。

「私は……イドウヴァ部隊長に入れるよ。一応自分の部隊の部隊長でお世話になってるしさ。それに……」

「うん」

好奇心を丸出しにしてセラに迫る。セラはいよいよ迷惑そうに、語りたくなさそうな面持ちで仕方なくその好奇心に応える。

言い渋る理由が何かウツデイには分かっているのか、同情の眼差しが逆に辛い。

「何かうちの部隊、皆イドウヴァさんの味方みたい。イドウヴァさんに入れなかったら、何か白い目で見られそうな雰囲気なんだよね」

彼女の部隊、第二部隊は一枚岩の如くイドウヴァ支持に回っており、それは新人達にも伝播した。それに留まらず、彼女らは他の部隊へ支持依頼に奔走していた。

何が彼女らをそこまで駆り立てるのか、第二部隊へ配属された新人達には知る術はない。

だが、自分達もその波に飲まれなければ、取り残されるどころか敵視されそうで。

セラも例外ではなかった。彼女は幼馴染の姉で、自分も良く世話をしてもらったテイトへ尊敬の念もこめて投票しようとしていた。そのことを部隊の先輩に話した途端、打たれたと言う。

「新人のクセに、部隊の風紀を乱すような真似をするとは何事だ！」

自分の意思を騎士団の未来に反映させるための投票であるのに、なぜ同じ部隊だからと団結しなければならぬのか。それを疑問に思ったセラだったが、これ以上食い下がると先輩達をみな敵に回す。そう直感的に察し、仕方なくイドウヴァに投票することに決めたのだと言う。

俯きながら語るセラにシャニーは首をかしげた。

「おかしな話だね。なんでそんな事するんだろ」

それを実際に面と向かい口に出す者が果たしてどれだけいるだろうか。

「イドウヴァさんについていけば、将来ポストにありつける。そう

思ってるんだよ」

ウツデイが彼女の首を手で起こす。首がすくつと立つと、顔も分かったと言わんばかりにシャツキリとする彼女に、それまで元気のなかったセラの顔にようやく少しだけ笑顔が戻る。

「まあ、そんなところだね」

「でもおかしいよねえ、他人に頼ってき、自分がやってやろうとは思わないかな？」

重い話題でも仲間となら楽しい。今日も昼の時間は、あつという間に過ぎていった。

シャニーは皆と別れると、天馬の手入れをしようと馬屋へと向かった。鼻歌を歌いながらブラッシングを丁寧にかけてやる。

「いつもお世話になってるからね。これからも頼むよ」

天馬は気持ちよさそうで、主人に頬を近づけては甘える素振りを見せる。

隅々までブラッシングをかけ、最後にマッサージをして一緒に外へ飛び出す。城を出て、森を経て、小川を跳び越し、自宅のある村も通過した。

小一時間かけて着いた場所で降りると、天馬の背に乗せてあつた花束を手取る。それを十字架の上にかけてとその前で祈った。

ここは、両親の墓のある花一面の小高い丘。今はもう盛夏も過ぎ、花達は早くも皆枯れて草原となっている。

短い春に精一杯咲き誇り、そしてあつと言う間に朽ちていく。人も、それに似ているのかもしれない。

人竜戦役よりもはるか昔から続く長い歴史の中で考えれば、自分達の行動によって引き起こされる出来事、そしてその影響。それは花の一生よりも小さく、そして儂いかもしれない。

「……でも、あたしは諦めたくないよ。諦めて何も行動を起こさなかったら、何も変わらない。どんなに影響が小さくても、ずっと頑張ればいつかきつと変わる。ロイ様みたいな凄い事はできないかもしれないけど、あたしなりの方法でイリアをもつと良い国へ変えられる

ように頑張るよ。それが、あたしのイリア騎士としての誓いだから」  
雪崩による事故で非業の死を遂げた両親。天馬騎士団の団長だった母にそっくりだと皆は言ってくれる。

顔だけでなく母のように慕われる人となり、果たせなかった志を自分が諦めずに果たすと自らに言い聞かせるように、暫く手入れをしていなくて黒ずんだ墓標へ祈りを捧げる。

ベルン動乱を平定し、人竜戦役の再来を阻止したロイは英雄と呼ばれている。

年は1つしか変わらない憧れの存在だが、自分はロイではない。ロイのように人をひきつける魅力や、世界を動かすようなカリスマ性はないただの無名の騎士。

それでも、彼女には夢があった。

天馬騎士になると言う夢は目標へと変わり、今は一段高いステップを求めている。

イリアを変えるという夢も、少しずつでも近づいて目標としていかなければならない。

現状に満足して思考を停止させた時点で、もはや進展も発展もなくなってしまう。シャニーには、かつてニイメに言われた言葉がようやく理解できていた。

——ひとつの“なぜ”は、十の“なぜ”を生み出す

「あー……そういえば十の為の“一”って……結局何なんだろうな。うーん……」

ニイメはよく、一と十を使う。それに含まれている意味の深さに、シャニーはいつも考えさせられていた。

まだ足りない部分はいくらでもあるだろう。むしろ全てを吸収する事は出来ないのかもしれない。

だが、老人の一言がイリアを変えると言う壮大な夢を志す若い騎士に十の力を与えて、若者は得た一つ一つを、更に自分の力で十へ発展させていく。

「よーし！ 村々の見回りをして帰ろうか！」

相棒の頭を撫でると、その背にまたがり元気いっぱい大空へと飛

び出す。その胸に大きな夢と使命感を抱いて。



時は止まる事はなく、そのときを迎えようとしている。

団長選出選挙を明日に控えた第二部隊では、迫り来る決戦の日に備えて余念がない。

皆朝からせわしく動き回り、各部隊への最後のお願いに終始していた。

イドウヴァが当初予定していた通り、全体の四割程度の得票は堅そうだ。

あの手この手で引き入れた浮動票もあわせれば、あともうひと越えと見積もられていた。

「いよいよですね、部隊長」

第二部隊の詰所で椅子に座って仕事をやるイドウヴァの許に、アルマが寄ってきて報告を行う。

今やアルマは部隊長の右腕となって様々な仕事に携わっていた。

「おお、アルマですか。十八部隊はどうなりましたか？」

「はい。そのことで参りました。どうやらシャニーは我々に手を貸してくれそうです。昨日改めて聞いたときには、こちら側に投票すると言うようなことを言っていましたから」

アルマの返答に、イドウヴァは無言で笑みを漏らす。

「明言を貰ってはいないのですね？」

しかし、すぐにいつもの顔に戻すと、席を立った。

「念には念を入れておいたほうが良いでしょう。私自らもう一度行きます。あなたもついて来なさい」

「はっ」

廊下の真ん中を、さももう団長になったかのごとく堂々と歩く。

その威圧感に、廊下を反対側から歩いてきた者達は思わず隅へ避けしてしまう。

その後ろには、恐ろしいほどに眼力強く真っ直ぐ前を見据え、力強く歩むアルマがついている。

新人とは到底思えない立ち振る舞い。そして人目も憚らぬ強引と

も取れる大胆な行動。

イリアを変えていくような力を持った二人が今、理想郷の扉を開けるために真つ直ぐ見据えて向かって行く。

「シャニーさん、こんにちは」

一人黙々と剣を振りながら、どうしたらイリア内の荒れを防ぐことが出来るかをシャニーは考えていた。

彼女は後ろからの突然の声に剣を下すと静かに振り向く。

「これは……イドウヴァ部隊長。あたしに何かご用ですか？」

彼女は未だに自分の悩みを振り切れていなかった。

自分の理想が、この人に投票する事で達成されるのだろうか。何か、自分を決断のつかない状態へと追いやっている。

それが一体何かを考えていたのに、目の前で笑う顔を見ると、見えていたものがまたばやけてしまうよううで表情が曇る。

「あなたの意思を確認しておきたかったですよ。どうですか、明日の選挙では、是非私に入れてくださいませんか？ 貴女の考える理想も、きっと私が実現できるように尽力して見せますので、どうか」

シャニーは暫く黙っていた。何かしらの返事を貰わなくては、相手も帰りそうにない様子。

長い間合いの後、シャニーが声をあげようと彼女らの方を見直した、そのときだった。

「うちの部隊の子に、無理強いするようなマネは止して欲しいね。そこまでしてなりたくないもんなのかね、団長って言う奴は。何の為の選挙だか分かりやしない」

後ろから黒い風と共に現われたのは、十八部隊の部隊長レイサ。いきなり現われた邪魔な存在に、イドウヴァは眉間にしわを寄せた。

「妙な言いがかりは止して欲しいですね、十八部隊長」

「イドウヴァ部隊長は、シャニーと目指すものが同じだから、力を貸して欲しいとお願いしているだけです。無理強いなんて全くそんな気はありませんよ」

アルマも軽く笑いながら、レイサを何とか追い払おうとする。

どこか、彼女に自分の考えを見透かされているような、そんな感じ



がして止まない。

いつか必ず自分にとって邪魔な存在になる、そう予測はしていた。だが、まさかこんな早く。第一歩目から邪魔されるとは。

案の定、レイサは退かなかった。シャニーの肩を持つと、そのまま彼女を引つ張っていく。

「こっちの部隊で今からミーティングがあるんでね、この場で失礼させてもらおうよ。行くよ、ホラ」

「貴女は、イリアを変えたいとは思わないのですか？」

後ろからイドウヴァの声がする。一旦レイサの足は止まったが、イドウヴァ達の方は見なかった。

「……あなたが本当にイリアを変える気であるとは、私には映らない。それにさ、もしあなたが本当に団長として相応しい人間なら、こんなセコイ真似しなくても、過半数取れるじゃない」

「レイサ部隊長、それはいくらあなたでもイドウヴァ部隊長に対して失礼ではないですか？」

むっとして反論しようとしないうるイドウヴァを見かねてアルマが反撃に出る。

レイサ自体は敵に回したところで大した影響はないだろうが、今後の事がある。なんとしてもシャニーとだけは接点を持つておこうと思っていたが、そのシャニーをレイサが引き離そうとしている。

「失礼……ね。それを言うなら、まずうちの姉貴に謝って貰いたいのんだね」

それだけ言うと、レイサはシャニーを連れ去った。

(……どこまでも手強い人だ。これ以上私の邪魔をされないよう、手を打っておかねば……)

アルマは悔しさに拳を振るわせるイドウヴァを心配する素振りを見せながらも、もはやその目は団長選出戦にはなかった。

## 第5章 決裂と絆のフェイトフル・ナイト（後編） 第1話 羨望と孤独（1）

なぜここまで、動かずにいられるのだろうか。

第一部隊の副将ソランはテイトに再三同じことを進言してきた。そして今日もまた、録音のように繰り返すその口調は今までよりさらに厳しい。

「団長、このままだと再選できるかどうかは五分五分といったところです。相手も相当な準備をしていますし、どんな手段を使っているかも分かりません。今日ぐらいは他の部隊に挨拶して回ったほうが良いのではないですか？」

エトルリアの将軍に宛てた報告書を書く手を休めないテイト。

そんな生真面目な団長を慕い支えてきた第一部隊の隊員達は、ソランの言葉に頷きながら、選挙に興味がないのかとすら思える団長の行動にやきもきしていた。

「本当に私が団長に相応しい人間かは周りが評価すること。それに、私にはするべきことが山とある。団長であるうちは、私は自分の使命に尽力しなければならぬ」

手を休めないままいつも通りの答えが返ってきた。

出来上がった報告書に団長印を捺すと、伝書係の騎士に封書して渡す。その足ですぐにマントを羽織り、剣を腰に差した。

一瞬、隊員達は考え直してくれたのかと思ったが、どうもそんな様子でもない。

「今から傭兵契約の関係でオスティアへ行つて来るわ。帰るのは遅ければ明日の昼。私の居ない間、しっかり頼むわよ」

「だ、団長！ 選挙を明日に控えているのに、今からオスティアへ向かわれるのですか?!」

隊員たちが焦ってテイトの進路を塞ぐ。

仕事熱心な事は見ても分かるし、責任感が人一倍強いことも嫌と言うほど伝わってくる。だが今だけは、今だけはそんなことよりも

目の前の戦いに集中して欲しかった。

どうして、どうして分かってくれないのだろうか。焦りの眼差しを注がれても、テイトの表情は鉄仮面でも被っているかのように変わらない。

「開票は明日の夜でしよう？ それまでには戻るわ」

それでは間に合わないと言いかけるソランに被せるようにテイトは一步踏み出した。

「イリアには時間がないの。冬になるまでに、少しでも多くの貯えを作っておかなければ。今年の冬は例年以上に余裕をもつて迎えないと、復興資金も必要なのだから。団長であっても、そうでなくても、やることに変わりはないわ」

テイトの言っていることは正論だ。民の事を考えれば、本来すべきことは城に籠っている事ではない。

もうすでに隊員達の防衛ラインを越えて、ドアに手をかけているテイトにソランは一度唇を噛むが、とうとう折れて肚を括った。

「……分かりました。そこまで団長が仰るなら、私たちも団長の仰せのままに行きます」

団長のガンコさは昔から知っていた。

彼女は地位より国を取った。そこまで懸命な姿を見せられては、もはや止める言葉は浮かんでは来なかった。

「ありがとう。じゃあ、後は頼むわね」

テイトは一人、廊下を歩いていく。その背には苦労が滲み出ている。言葉では言い表せないような不安が肩にのしかかって、気を抜けばその場に膝を突いてしまいそうな不安。

第一部隊の隊員達は彼女の背を見て虚しさを感じずにはおれない。一人で背負って、一人で苦しんでいるようで。

テイトは目を固く瞑って、自分に敬礼をする他部隊の隊員にも気づかないほどに急ぎ足で廊下を歩いた。

自らの革靴が床を叩く音を聞きながら。その音が、更に自分を急かすように聞こえる。

そのまま城を出て厩舎から天馬を連れ出し、宙へ舞った。

羽と共に、彼女の悔しさの塊が、やっと光をまともを得た瞳から零れ落ちる。

「私が選挙を実施するのは……こんな事をする為じゃない。なぜ、皆分かってくれないの？」



まんまとアルマたちの口車に乗りかけたシャニーを部隊に連れ戻したレイサがふと空を見上げると、水色の髪が宙を舞っていた。どうしてこうも両極端なのか。傍から見ているとどうにももどかしい。

「……。ちよつと！ 皆集まりな！」

レイサが珍しく大きな声をあげている。突然召集され、新人達は何が起きたのかと顔を見合わせた。

「あんた達、今回の選挙、どう思う？」

突然振られた質問。しかも、その質問はあまりに漠然過ぎて、どう答えればよいか戸惑うもの。

その質問へ真っ先に答えたのは、先程レイサに言葉を止められたシャニーだった。

「何の為の選挙なのか、あたしには良く分からなくなってきたよ」

団長を選ぶ為の選挙。それは確かにそうなのだが、雰囲気が何か違う。

何の為に団長を選出するのか。候補者本人だけでなく、その配下や取り巻きまでもが必死になり、本分を忘れた行動に出ている。

団長になることそのものへ、血心を注いでいるように見えた。

「権力って言うのは……人をあかも変えるのかね」

ポツリと漏らすレイサの顔に浮かぶのは怒り。キリキリと凍り付いた刃のような、触れられそうにない怒りが滲む。

彼女には分かっていた。なぜ、イドウヴァがあそこまで団長の座に拘るのかを。

だからこそ、彼女の言葉に中身があるかどうか何か聞かずとも知れたことだ。

言葉巧みに他の者を操り、思うが俣を手に入れる。

野心から出た言葉は、見た目は柔らかく暖かい。だがその化けの皮を剥くと、そこには実に冷酷で毒を湛え牙を研ぐ蛇が潜んでいる。

真の姿を知らない者はその見た目に近寄り、痛い目を見る。

「今回の選挙は、団長が意図した選挙じゃない。自分の一票をどうイリアの将来に反映させるか。それは各自で考えて欲しい」

何やらレイサが真面目な話をし始めるものだから、隊員たちはぎよつとして注目し始める。こんなこと、今まで覚えがない。

「でも、これだけは言っておく」

鋭い眼差しがそんな面食らう隊員達を見据える。

「甘言を鵜呑みにするような真似だけは、絶対にするんじゃないよ。考えるんだ。何が真実で、何を信じればいいのか。一人で悩む必要はないさ。迷ったら、誰かに相談すればいい」

甘言の裏には、必ず何かが牙を剥いている。

毒を迸らせながら、それでいて絶対にそれを見せず、ただ獲物が寄って来るのをひたすら待つ。

騎士団内にも、良くない流れが未だに蔓延っていた。

イリアを変える上で最も排除しなくてはならないものの一つ。にもかかわらず、最も必要とされるもの。それが権力への執着。

一歩間違えればイリアを暗転させるその力を、正しく行使できる能力がイドウヴァにあるとはレイサには到底思えなかった。

そもそも、正しく行使しようとする意志があるのかすら疑問符が付く。

イドウヴァの考えている事は大方予想がつく。目的ははつきりしているから、その目標の為にどんな手段に出るか分からない。

それでも、ここは敢えて隊員たちの意志に任せることにした。未来を創っていく新人達。彼女らが自らの意志で歩み、責任を持って行動することを教えるために。

たとえ、天馬騎士団が減んでも、新人達には未来がある。天馬騎士団に執着するより、彼女はそれを優先した。

尊敬する姉が大事に守ってきた騎士団より、新人達の未来をとった彼女の心は、まさにブリザードの如く激しく渦巻いていた。



7月31日 AM6:50 カルラエ城――

一番鳥が、イリアに運命の光を伝えてきた。

窓から入るうつつすらとした光を、鋭い瞳がしっかりと捉える。

アルマは光を遮るカーテンを開け放つと、暁に燃える雪原の向こうをじっと見つめた。

「……」

マントを羽織ると、意志を固めたような更に厳しい目付きで部屋を出る。

午前7時。早くもイドウヴァ陣営は第二部隊の詰所に集まり、結束を固めていた。

アルマは部屋に入るや早速イドウヴァの許へ行き最敬礼。相手も笑顔で答えた。無言のやり取りに、周りにいた第二部隊の隊員たちも息を呑む。

とても新人とは思えない。先輩である自分達ですら、何か威圧されるような感覚。

イドウヴァも彼女を認め、新人ではなく実力者として扱い右腕とすら呼ぶほど。

当然長年従ってきた自分達をあつさり抜き去った新人に悔しさが無いわけではない。

だが、その実力と厳しさに、皆畏怖の念すら覚えている。

彼女の黒には、全ての色を退ける力がある、何か人を凌駕する力があつた。

「いよいよですね。皆さんには今までついてきてもらつて本当に感謝しています。団長は敗北を察してか昨日から遠征のご様子。ここはどつしり構えようではありませんか」

イドウヴァの挨拶が部屋に響く。静寂に包まれながらも、そこには何か異様な空気が流れている。

どの騎士も、戦場を前にするよりも高まる気持ちを抑えることに精一杯だった。

今までイドウヴァに従つてきて、ようやくここで慕つてきた人物が

団長となる。その瞬間を一分一年の気持ちで待ち侘びていた。



投票は予定通り昼前、午前10時から始められた。

部隊ごとに、皆が大会議室へ投票をしに集まってくる。順調に行っても開票はまだ10時間ほど先だ。

尽くせる手はすべて尽くした今は、ただ待つのみ。そう肚を括ったはずだが、まるで違う現実が待ち受けていようとは。

「た、大変です！」

詰所で静かに進捗を窺うイドウヴァやアルマの許へ、投票を終えた配下の隊員たちが駆け込んできた。

どうにも様子がおかしい。まだ投票は始まったばかりだというのに。

「どうしたのですか。落ち着きなさい」

イドウヴァが嗜めるが、彼女らの動揺は止まらなかつた。

「第一部隊が……選挙進行を務めています！」

イドウヴァは判断に困つたような表情を見せる。

数字が若い部隊から順に投票していくルール。第一部隊は当然先頭を切るはずだった。それが、選挙進行役として投票を先延ばししたのだ。

アルマはそれを聞いて鼻で笑ってしまった。イドウヴァも事態を飲み込んだのか、静かな笑みを浮かべた。

「まあ……団長不在で統率が取れないのでしょうか。きっと団長が帰城してから投票するつもりなのです。気にする必要はありませんよ」

「はい……。しかし、もう一つ気になることが」

落ち着きを取り戻したイドウヴァに放たれたもう一つの事実は、にわかには詰所を騒然とさせることとなつた。

「十八部隊が、どうやら詰所に姿を見せていないようです」

投票が済むまでは、各部隊に充てられた部屋で待機しているはず。

流石にイドウヴァも、そしてアルマですらも、驚きの表情を隠せなかつた。彼らの票がなくては、勝ちを確定させることが最後まで難し

くなってしまう。

イドウヴァは目でアルマに合図をしようとしたが、そのときにはもう彼女はいなかった。

肩で空気を切って、そしていつしか小走りに十八部隊の詰所へ彼女は向かっていた。ノックもなしに扉を開ける。そこには事務業務をしている隊員が数名残っているだけで、目ぼしい面子はいない。

「部隊長やシャニーは何処へ行つたか知らないか？」

「え？ いつもどおり中庭で稽古をしているはずだよ」

礼を言うのも忘れ、階段を降りて中庭へと向うと、いつもどおり十八部隊の温い稽古が展開されていた。

早足で部隊をまわり、目当ての人物を探す。人数が多いこともあつてなかなか捕まえることが出来ない。

選挙はとうに開始されている。それにも係わらずここには主要人物がいない。

時間の経過に我慢できなくなったアルマは、傍で槍の稽古をしていた隊員の許へ歩み寄ると、隊員が振る槍を自分の持っていたショートランスで弾く。

突然の障害物にびっくりして目を丸くする隊員にも、アルマはお構い無し。

「部隊長やシャニーは何処へ行つた？」

「え?! あ、アルマじゃない」

「部隊長やシャニーは何処へ行つた?!」

話には全く聞く耳がないようである。隊員は腹が立つよりむしろ恐ろしくなつて、早く傍から離れたいと答えを急ぐ。

「シャニーは、団長を迎えに南方の砦に向かった。レイサさんはいつものとこだよ」

隊員に指差された方角を見て、アルマは無性に腹が立った。

軽く挨拶をすると、すぐさまその場を後にする。何か拷問から解放されたような、そんな安堵の気分が隊員を取り巻いて持っていた槍がだらんとする。

肩で風を、そして十八部隊の隊員を押し分けながら、アルマは真つ



直ぐ歩んでいく。城壁の近くまで辿り着くと大きな落葉高木をギツときつく見上げた。

ずっしりとし太く力強く見えながらもどこか頼り気のない、雪国特有の高木のやや太い枝の上で昼寝をするレイサに向けるかのように、渾身を込めて幹に突き刺さるショートランス。

その衝撃音は十八部隊の隊員たちをも振り向かせるほど。当然、その衝撃に最も近いところにいたレイサはすぐさま降りてきた。

「なんだい、珍しく挨拶しに来たかと思えば、いきなりな態度だね」

「これは失礼しました。私が叙任を受けてからの初めての恩師が、イリアの将来を左右する選挙を前にここまでどっしり構えられているので、少しばかり驚いてしまいました」

「……で、何しにきたわけ」

「かつての部下にそのような冷たい態度とはあんまりです。私はただ、もう選挙が始まっていることをご存知か確認しに推して参っただけです」

アルマは軽くお辞儀をしてレイサに笑顔を見せる。

その様子を十八部隊の者達はじっと見ていた。二人を暫くの沈黙が包む。互いに決定的な言葉を欠いていた。

(こいつが新人部隊に現れるなんて……今度は何しに来たんだ)

何か打算的な目的がある時以外にはないはずだ。レイサも警戒するが、今回は退けることが出来るような理由はなく、相手もなかなか尻尾を出さない。

二人は互いを手強い相手だと警戒していた。

アルマの心を包む漆黒が、レイサにその心中を覗かせない。だが、周りの事を考えると早く部隊へ戻ってもらわなければいけなかった。「どうせ私たちの部隊の投票は最後だからね。焦る必要なんてないのさ。それより、大切な部隊長をほっぽり出してきて良いのかい？ 今のあるたにとっちゃ、何処の誰よりも大事なんだろう？」

アルマは目線を逸らしながらフツつと一瞬笑い、背を向けながらレイサの問いに答えた。

「私にとって一番大切な人は……。……フツ、まあそういうことです

ね。イドウヴァ部隊長は貴女達の票をとても心配していましたが」とりあえず、ここに居てもこれ以上の収穫はない事だけは分かった。一番その気持ちを知りたい人物がここにはいないのだから。おまけに……その真意を量りかねる行動に出ている。

一つ礼をして踵を返したアルマだったが、すぐに振り返った。

「あ、それとシャニーに一つ伝言をお願いできますか？」

「なんだい？」

アルマは再びレイサのほうを向くと、皆にも聞こえるようなはつきりとした声で言い放った。

「付き従う師は、よく選んだほうが良い、とお願いします」

静まり返る十八部隊。その只中をアルマが石詰め道に沿って歩いていく。皆はしばらく、ただ彼女の小さくなっていく背を見ているしか出来なかった。

## 第2話 羨望と孤独（2）

イリアの南方、サカとの国境であるシュベル山脈。

ここには砦としての機能と共に、その国境の関所として機能しているダッドファイ城がある。

険しい雪国への入り口、南方からの唯一の窓として機能するこの城を多くの行商人が通過していく。

空を移動する天馬騎士たちは例外的に、出国する際は騎士団の承認を得て、それを認めた書状を予め提出する事で、関所の通過を免れている。

だが、帰国の際にはいくらか天馬騎士といえど、関所を通らずに入国すれば領空侵犯として罪に問われることになる。

シャニーはこのダッドファイ城を訪れていた。

ここで待つていれば、リキアへ仕事をしに行った姉と必ず会える。どうしても姉に確認しておきたいことがあった。

昼を過ぎた午後1時、関所にテイトが現われ、入国手続きを始めた。彼女の表情はいつもどおり、いやそれ以上に硬かった。

「おーいー！ おねえちゃあーん!! おかえりいー!」

その表情を打ち砕くような、そんな元気の良い声。

テイトは驚いて持つていたペンを落とすようになった。そちらを向けば、青の瞳を爛と輝かせる元気の塊が自分を迎えに来ていた。その顔を見ると、何か心が軽くなる。まるで凍り付いた体を湯船に浸けたような気持ち。

なのに、口から出る言葉はそんな気持ちとは真逆のものだった。

「……良くこんな人が大勢いるところで、そんな大声を出せるわね」

「うん、だってお姉ちゃんのことを心配だったもん」

自分のガードを完膚なきまでに砕かれたような、何か頭に突き刺さり目元が熱くなるのを感じる。

自分の事を心配して迎えに来てくれる者がいたなんて。

この頃は騎士団内でも古株との対立が絶えず、心をすり減らす毎日。シャニーの真っ直ぐで素直な優しさが、傷付いたテイトの心を癒

す。

テイトは、もう彼女からは逃げられないと思った。羞恥心より、今回は嬉しさが勝った。大切な人が、傍にいる。

「……ただいま、シャニー」

シャニーを抱きしめた。こんな事をするのは、妹がまだ小さい頃だけだった。

久しぶりに抱く妹。その大切さを再確認する。数少ない、心を奥深くまで見せることの出来る相手。

「えへへ。……ねえ、忙しいのは分かってるけどさ、たまにはお姉ちゃんと一緒にお茶したいな」

妹の話口調が急に変わった。嬉しさに身を任せていたテイトも、この突然の変化にはつと我に返る。

何か、きつとある。姉としての直感が仕事を押し退ける。

「いいわ。その代わり、夕方までには帰らないとダメだから、長居は出来ないわよ」

「ありがとう！」

今度はシャニーがテイトに抱きつく。もう、テイトにも恥ずかしいも何もなかった。

帰国の途上考えていた悩みすらも吹っ切れるぐらいに、凍てついた心が融ける。

改めてシャニーのニコニコとする瞳を見て確信していた。妹を十八部隊に配属して間違いはなかったと。

「じゃ、行きましようか。この砦のテラスでいいわね？」

「うん」

久しぶりの姉妹としてのひと時を大切にするかのように、ゆっくりと城の廊下を歩いていく。

高い高いシュベル山脈の頂上付近に位置するダッドファイ城。今日は天気がよく、イリアを何処までも見渡せそうな、そんな澄んだ空気がそこにはある。

「うわー、やっぱりイリアって広いねー！」

外に出たところで、柵に手をかけながら叫ぶ妹の後姿を見て、最初

は目袋を緩ませていたテイトだったが、妹の更に向こうに見える景色に視線を移すと、その眼差しはふっと悲し気に揺らいだ。

もうこのまま、あの山々に吸い込まれてしまいたくなりそうなほどの悲しみだった。

「……こんな広いイリアを、一つにまとめるなんて、やはり無理なのかしら……。リキアやエトルリアのように、あんな大きくて高い城に、王が国を治める……。イリアには無理なのかしら……」

「どうしたの？ お姉ちゃん」

再び空いた心の隙間。それをすかさず妹が埋めてくれる。

テイトはこの頃の自分がいつも考え込んでしまっている事に、自分でも気付いていた。時には悩みすぎて寝られないこともある。

「なんでもないわ。ほら、行きましよう」

団長が弱音を吐いてはいられないと、いつも我慢している自分がいる。

団長である自分が頑張れば……。そう自分に言い聞かせ、心の隙間を埋めようとしていた。



二人はダットファイ城の高層階にあるテラスでお茶を楽しむ。

極寒の地イリアの頂。冬になればそこは地獄と化す場所。こうしてゆったりと空を眺めながら暖かいお茶でのお喋りも、もう9月も半ばになったら出来ないことだ。

「うーん、空気も美味しいしやっぱいいね」

椅子に座ったままうんと体を反らして、気持ちよさそうに顔をくしゃくしゃにして見せる妹を見ていると何かほっとする。

「そうね……。何か身体の疲れが一気に解けていくような気がするわ」  
なかなか仕事上の都合で一緒になれない姉妹。こういう機会には、自然と今まで溜まっていたものが開放され、ついつい長話をしてしまう。

もつと話をしたい。けど、話さなければならぬことがある。いつもお喋りする側のシャニーのほうが今回は自重した。

「ねえ、お姉ちゃん。教えて欲しいことがあるんだ」

「何かしら？」

シヤニーは持っていたティーカップを受け皿に置く。

その温もりが手から逃げないうちに、彼女はすぐに質問を団長へぶつけた。こんなことは、いくら姉とて団長である相手へ直には聞きづらい。

「なんで、選挙なんかしたの？ あんなの意味ないじゃん」

小言に対して反発する事は茶飯事であったが、ここまでダイレクトに不満を口にする事は珍しい。

テイトも流石に面を食らったか。彼女は暫く黙していた後、視線を注いでいたティーカップの湖面から目を離すと、広大なイリアの大地を眺めた。

「……そうね、全く意味がないものになってしまったわね……」

「え？」

「私が望んだ事と、全くの正反対になってしまったわ。どうして、皆は分かってくれないのかしら……。あれでは、今までと全く変わらないと言う事を……」

テイトが団長による指名を避けた理由。その最も大きな理由の一つは、派閥と言うものを打ち壊したいからだだった。

皆一人ひとりが、イリアを創っていく構成員として自覚を持って、自らの意志を持った行動をとって欲しかった。

しかし、皆の意識はなかなか変わる事はない。自分の損得ばかりに目が行き、それを中心に捉えた行動をする。

「皆は、イリア騎士の誓いを忘れてしまっているわ。決して自分のために戦ってはいけない。私利私欲のためではなく、イリアの発展を主軸において物事を考えなさいと言う意味のはず。私はそのために選挙制を導入したの。でも、イドウヴァさんはそうではなかったよね」

イドウヴァが選挙制を推した理由は、言葉にしなくとも明白であった。

野心は留まる事を知らず、権力は人を狂わす。人が手に入れること

の出来る最強の力。

「私は、団長になる為に頑張ってきたんじゃない。団長であろうと、そうでなかりうと、私の目指すものは同じ。イリアを素晴らしい国へ……それだけだわ」

広大なイリアの高く澄んだ空を見つめて語る姉の凜とした横顔。普段妹としてばかり見てきた姉の、団長としての誓いを目の当たりにして心が動く。何とか、団長の力になりたい。

「やっぱお姉ちゃんは凄いや。さすがあたしのお姉ちゃんだけはあるね」

妙な褒められ方をして何か恥ずかしくなった。

イリア騎士としての誓いを忠実に守り、実践しているだけ。テイトはそう思ってきた。

別段褒められるべきことでもないし、逆に出来ないことのほうが問題。それが彼女の認識。

だからこそ、現状を変えようと必死になってきたのに、その願いや意志とは裏腹に現状はなかなか変わってはくれなかった。

自らが動かなければ変わらない。それは分かっている。

毎日あちこちを回っては、イリアを一つにまとめていくことの重要性を説いていた。

なかなか理解されない毎日。理解できても、自分に不都合な部分が多いので認めたがらない。

人間は、一度手にした力をなかなか手放さそうとはしない。例えばそれが、国のためだと分かっている。

己の目先の損得が必ず脳裏に浮かんでしまうものなのだ。人間は。

「あたしには分からないよ。どうして、皆がお姉ちゃんの考えに理解を示さないのか。だってさ、平和が一番に決まってるし。他の国へ依存しなくても生きていけるほうが良いに決まってるじゃん」

「良かったわ。あなたがそう言った考えを持っていてくれて」

シャニーは姉の顔を見るのが辛かった。大好きな姉であるはずなのに、その顔を見るのが辛かった。

テイトの顔は疲労に沈んでいる。肉体的な疲れだけではない。精

神的な疲れ。

責任感が強すぎるゆえに、すべてを自らの力で解決しなくてはと意気込んでしまう。

結果、悩みをすべて内に溜め込んでしまう。我慢強い彼女も、最近の重責続きでさすがに疲労困憊していた。

「早くお姉ちゃんの役に立てるようにになりたい。なりたいんだ。でも、あたしは知らないことが多すぎて、このままで本当にお姉ちゃんの役に立てるかどうか不安なんだ……」

入団当初は自信に満ち溢れていたシャニーも、十八部隊でさまざまな経験をしていくにつれ、いかに何も知らないかを思い知った。

何をやっても失敗ばかり。傷ついて泣いてばかりだったが、それと同時に掴んだものも多かった。

イリア騎士として何をすべきか、何を目標にしなくてはならないのか。そして、何のために血を流し、涙を呑むのか……。

実にいろいろな、“なぜ”に対して、自分なりの考えを持つことができるようになってきた。

考える時間を与えてくれた姉が目の前で疲れ果てている。助けたい、その一心が今、この城に自分を誘った。

「あなたは大分成長したわ。もう、一人前の騎士としてやっていけるほかに」

その姉から褒められてシャニーは目を真ん丸にしていた。

あの厳しい姉が、恥しか売れないと突き放したあの姉が自分を褒めるだなんて。

「嬉しいなあ」

思わず笑みが零れたのはわずかな時間だった。

「あたしにイリアの民を守ることができかな……」

「出来るように努力すること、それがあなたの仕事でしょう？」

失敗続きで何も成果何て出せていない。それでも姉は前を向けと言ってくれた。

彼女の言葉に、暫くの沈黙の後シャニーは静かにうなずいた。そのために天馬騎士になったのだ。やれるだけ、とにかくやってみる。そ



れがモットーだ。

「夢は叶えるものつてユーノ姉さんも言っていたわ。叶える……そう、自分で叶えるのよ。他人頼みな目標なんて目標じゃないわ」  
妹を一人の天馬騎士として認めた上で、ティトは力強く言い切った。だからこそ、イリアを変えていける強い意志を持つて欲しかった。

ティトの思惑通り、恵まれた性格は他の新人からも慕われ、頼られる存在になってきた。

多くのものから影響を受け、さまざまなことを吸収し日に日に力をつけていく妹。

その妹が動くことで、新人たちもまた成長している。ティトはそれだけで、自分の仕事の多くは果たしたと思えるほどだった。

「どうすれば良いか、自分で考えて、自分で実践して。私は、他人に流されず自分の考えを貫く人間でありたいわ。あなたも自分の人生は、自分の意志で、自分の力で歩みなさい。流されるのではなく、自らの足で」

姉の瞳から何か自分を突き刺すようなオーラが出ていることに気づく。その瞬間、今度は頭でぱちんと何かが弾けるような強い衝撃を受けた。

——他人の剣は己の剣ではない

——己が剣を持たずして、それで民を守ると言えるのか？

（自分の力で現実に変えていく努力をしなくちゃ、後ろについて、理想に共感してるだけじゃいけないんだ）

無責任に感じた。イドウヴァに投票すれば、自分が夢見る世界を彼女が現実のものとしてくれる……。ほんの一瞬。彼女の話術に嵌ったその一瞬だけとはいえ、そう考えてしまった自分が情けなかった。信頼し、信任したのではない。自分の意志を放棄したのだ。

そんなのが自分の道か？ そんな事の為に天馬騎士になったのか？ そんな気持ちで……約束したのか？ 必ず守ると。問うてみたら答えはすぐに返ってきた。

すっかり冷え切った紅茶で喉を潤すと、シャニーは団長を見つめ

た。

「あたし、きつと自分の誓いを守って見せるよ。その為にはどうしなくちやいけないか。それを考えて、絶対夢を現実のものに変えられるように……。エラソーな事は言えないけどさ」

シャニーはぐつと左手をテイトの方へ突き出すと、己の意志を力強く握って見せた。これが団長への誓い。入団初日、ライバルも自分も宣言しなかった。だがライバルは代わりにした己だけの誓い。それを半年近く遅れてようやく。

「あたしなりのやり方で、この手で切り拓いて見せる」

青き瞳が湛える決意の焰を受け止め、テイトは無言でシャニーの頭を撫でた。

いつもは絶対にしないこの行動。だが、今回は無意識のうちに妹の頭に手が添えられていた。

(シャニーは、もうすっかり大人になった。まだまだ脆いし幼いところもあるけど、これならきつとやっていける)

テイトの願いは確信へ変わった。妹を新人部隊へ配属してはや4か月。レイサは本当に、自分の予想以上に頑張ってくれた。それなのに自分は……。

自分への糾弾が先行するものの、純粹にうれしかった。次世代の天馬騎士団を支え、イリアを形創っていくであろう存在の大きな成長が。

他の新人たちにも、個人差はあれど自分の、レイサの意志が伝わっているだろう。

もうこれなら、きつとやっていける……。

「ねえ、お姉ちゃん。話は変わるんだけどさ、何かすごい悩んでない？」

突然の妹の声に、テイトは一気に現実に戻される。

いつもの眼差しに戻った妹が自分の顔を覗き込むようにして、こちらを見つめていた。

彼女の瞳には嘘はつけない。自分自身にすら嘘をつけても、彼女には通用しないことは今までもずっとそうだ。

何でもないと言っても、それでそうと済ませてくれる相手ではない。

まだ帰らなければならぬ時刻までには時間もある。ティトは思い切つてシャニーへ悩みを打ち明けてみた。

妹の悩みを聞いてあげるとは茶飯事であるが、その逆は意外にも初めての気がする。

「私がリキアへ行った事は知っているわね？ 正直、愕然としたわ。リキアは今、ロイ様の下に皆が集つて復興の為に一致団結している。そのおかげでしょうね。もうリキアにはかつての輝きを垣間見せるものが多くあつたわ」

戦後半年ということもあつて、かつてロイと共に戦つた各国の要人が、その後の報告も兼ねて一度オステイアに集まろうという話があつた。

イリア連合騎士団の筆頭ゼロット將軍が参加することが決まつていたので、ティトは参加を強制されていたわけではなかったが、他国の状況を広く知る良い機会と参加した。

「何より目を惹いたのが、オステイアの街並みと新オステイア城の美しさかしら……」

そのオステイアで見た光景に、ティトは思わず絶句してしまった。リキアを復興させ、かつてのように諸侯同士が手を取り合う豊かなリキアを目指すロイの許へ皆が集結。その意志に共感し、各々も復興に尽力していた。

ロイは強力なリーダーシップを発揮し、反発しあう諸侯をもなだめ、皆を同じ方向へ向けることに成功している。

皆が同じものへ向かつて目標を明確にし、己の意志で行動している結果は目に見えて現れた。

早くもリキア同盟は復活し、戦乱で少なくなった貴族達による領地統合が相次いだ。さすがにそこはいざこぎなく進むことはなかったそうだが、それでも着実に計画は進捗している。

「はやくもオステイア家を中心とした公国制への移行案すら出ているそうよ」

その知らせに、シャニーもただ驚くしか出来なかった。

イリアはまだ騎士団が何とか旧来のように傭兵活動を出来るようになったに過ぎない。

国家統合どころか、騎士団同士の守備範囲の条約の整備など、基盤となる部分すら未整備のところが多く、国というにはあまりにも粗末な状態であった。

そんな状況下から脱出するには、兎にも角にも必要な金。それゆえ騎士達は、こぞつて傭兵として他国へ遠征している。

ただでさえ戦後少なくなった騎士達が皆外国へ出て行ってしまうのだから、イリア内を守れるはずがなかった。

賊が溢れ、常に皆空腹と極寒に体を震わせている。

「リキアとイリアでは……国の根本が違うから比べても無駄かもしれないけど……」

テイトはそこまで言つて一旦言葉を濁そうとする。だが、自分から振った話を、途中で曖昧にするのも相手に失礼と思った。

「やつぱり、人を惹き付ける力を持った人がいるのといかないのでは、ここまで差が出るものなのね。自分の無能さに嫌気がさすわ……」

「そんなことないー」

姉の言葉をすぐさま否定するシャニーの声がテイトの腹まで響く。

いつも朗らかなその目が明らかに怒つていて、テイトは思わず二度見してしまった。

こんな顔を見たのはいつぶりだろう。いや、こんな顔もできるのかと思うくらい。

「お姉ちゃんはこんなに苦労してんだ。そのお姉ちゃんにそんな事を言える人なんていないよ!」

テイトの言葉には力が籠っていない。

「……結果が全てよ」

肩肘張って生きていた彼女。その彼女でさえ、もう身内の前で同様な態度をとることができなくなっていた。

「私がリキアへ行つて、最も多く訊ねられた事はなんだったと思う?」

……シャニーは一緒じゃないのかつて。すれ違う皆から聞かれた

わ。少しだけ、あなたを羨んだわ」

「へ？」

シャニーはロイの数少ない同世代の親友だった。戦後会った事はないが、時折騎士団経由で手紙も来るし、イリアの状況をその中で訊ねられることもあった。

でも、それだけのはず。何だか怒りが急にどこかへ吹き飛んでしまうような話。だが、テイトにはその理由が分かっていた。

戦中、彼女はロイの周りを固める八英雄として最後まで共に戦った。

明るく誰とでもすぐに打ち解けてしまうシャニーは、軍の中でもムードメーカーとして有名で、当時見習いの身だったとは言え、各国の要人達はその将来を戦中から気にかけていた。

特にロイやエルフィンといった者達は、イリアの発展を他国ながら切に願っていたからその存在は目に焼きつき、印象に残っていたらしい。

色々な場所に出向いては名前を覚えてもらおうとしている自分に対し、ロイに認められた親友というだけで、自分より騎士としての経験がないシャニーの名が知れている事がテイトには羨ましかった。

「『シャニーには、人に心を開いてもらえない不思議な力がある』そう、ロイ様が仰っていたわ。私もその通りだと思う。そんな力は、滅多に授かるような力じゃないわ。だから、あなたにはその力を精一杯活かして欲しいの。イリアのために」

「お姉ちゃん……」

シャニーは一緒ではないと伝えた時のロイの残念そうな顔は今も忘れられない。

テイトは椅子を立ち上がると、テラスの柵に手をかけて遠くを見渡す。

「……今のイリアが一致団結できない理由……私には分かる気がするわ」

シャニーもテイトの声に椅子を立ち、姉の横まで歩いていく。眼下に広がる白銀の大地を、姉が慈しむような眼差しで眺めている事に気

付く。

「ずつと他に従わざるを得なかつたイリアだからこそ……。皆、榮譽を、名声を異常に欲しがっている。傭兵に出て行くのも、復興資金の為というのは目的の半分に満たないのではないかしら」

任務中には決して漏らす事の出来ない本音。それを彼女には珍しく口にしました。

思わず息を呑む。決して他人の悪口を言わない姉が、ここまで明確に他人を非難する言葉を放つとは。

「皆、向いている方向がバラバラなのよ。今回の団長選出選挙にも現われているわ。これでは、スムーズに事を運べるわけがない。結局は、皆に考えを理解してもらって同じ方向へ歩ませることが出来ない管理側に問題があるということなのよ」

人をまとめるという事は、予想以上に難しいもの。

自分の考えを理解してもらう為には、まず相手の考えを理解してあげなければならぬ。

だが、相手の考えを理解する為には、相手に心を開いてもらう必要がある。そうでもなければ、相手は警戒して自分の本心を語ろうとはしない。本心同士で語り合わなければ、真の理解は生まれない。

テイトは生真面目な反面、他人に対する警戒心のハードルが高かった。それ故なかなか自分を全面に出して話をする事が出来ない。

話す側が警戒していれば、当然相手も警戒心を抱く。分かっているも、仕事だと割り切っても、自分を変える事の困難さは何にも例えがたい。

シャニーは何か姉の言葉を否定しようとした。こんなに頑張っている姉。理解されなくても、諦めずに頑張る姉。

四面楚歌な姉の力に、一日も早くになりたい目の前で、姉が重責に押し潰れそうになっている。

なんとか姉が自分を責めることを否定したい。姉が納得してくれそうな言葉が思い当たらなくて、気持ちを言葉に換えられなくてもどかしい。

姉は的確に現状を分析していた。その分析した現実を変えられな

いことを、自分の無能さとして自身を罵り、片付けようとしている。姉らしくない態度からも、姉が追い詰められていることがひしひしと伝わってくる。

「シャニーが何とか言葉を繋ごうと口を開いたその瞬間だった。

「まあ！ もうこんな時間。この頃つい話し込んでしまうわ。シャニー、急いで帰るわよ！」

時間を見ると二時間以上経過していて開票開始まで5時間も無い。十八部隊の投票もそのぐらいの時間だ。

もうゆつくり話し込んでいる時間はない。二人とも急いで城を出て、天馬を駆る。

「でも嬉しいわ。あなたと、イリアの将来をこんなに真剣に語り合える日が来るなんて」

「あたしも、お姉ちゃんと同んなに真面目に話したの初めてだよ。もつともつと、知りたい事は一杯あるからさ、また今度一緒にどこかへ行こうよ！」

テイトが笑顔でうなずくと、シャニーははしやいで天馬のスピードを上げた。その後姿を、テイトは半ば羨望の眼差しで見つめる。

「本当に……心が温くなる子ね。あなたのその力を、他の騎士相手だけじゃなく、イリアの民へ向けて使って欲しいわ。最も今のリキアと違う場所、それは騎士と民の関係……。私はそう思っているわ……」

前方から妹の声がする。こちらに振り向いて手を振る姿が見える。その笑顔に、テイトの顔も不思議と緩んでいった。

「コラ、シャニー！ 何処に山賊の弓兵が隠れているか分からないのよ。気を緩めないの！」

リキアで見た、あの高く美しいオステイア城。純白に平和を象徴するような、これからを力強く感じるあの城を、イリアにも……。

テイトの頭には、あるべきイリアの姿がはつきりと映し出されていた。

### 第3話 『疾風』の覚悟

夜が極限の緊張を漆黒と共に運んでくる。

開票まで残り2時間を切ったカルラエ城は、戦場にも似た戦慄が周囲を包んでいた。

息も凍てつく極寒の夜風。それすらも凍り付いてしまいそうな冷たい焰がゆらゆらと城の周りを渦巻いていた。

「もうこんな時間ですか……。レイサの奴、何を考えているのだから」  
イドウヴァの声にも返さず、城のテラスからアルマは何処までも続く闇の彼方をずっと睨みつけている。

まだ、何も兆しは見えてこない。一体いつまで待たせると言うのだ、あいつは。

部屋の中でも、第二部隊の面々は一日千秋の思いでその時を待っていた。

「……、……」

ちらちらと机と腕時計とを振り子のように動く視線。イドウヴァが時計に視線を移す間隔も、陽があつた頃より格段に短くなっている。他の皆も、じっとしている事すらままならない状態になっていた。

殆どの部隊の投票は終わった。残るは数字の一番若い部隊と大きい部隊……。テイト団長率いる第一部隊と、シャニーの所属する第十八部隊。

両陣営共にもつとも重要な票田が、互いに投票を済ませていなかった。

何度催促しても、互いに詰所から出てこようとはしない。

中間報告では、イドウヴァが若干数テイトを下回っているのとのこと。

彼女の焦りは最高潮に達し、平素を装うもいつもの冷静さがなかった。

イドウヴァの目が一点へ集中していないことに、アルマはずっと前から気付いていた。



壁に持たれかかり、腕組みをしながら目を伏せてひたすらその時を待つ。

聞こえ始める指が机を叩く音。それでも足らず、イドウヴァは机の上に飾ってあった宝玉を二つ手に取り転がし始めた。

この連中さえ……この連中さえ邪魔をしなければ……。

あの女がまたしても娘を使って立ちほだかるとは……。

アルマには、転がす宝玉をじつと睨みながらガチャガチャと鳴らすイドウヴァの落ち着きのなさがどうしても目に付いていた。

「部隊長、きつと良い結果が出ます。どうか気を楽にしてお待ちください」

アルマの突然上げた声に驚くほど、イドウヴァの気は高ぶっている。

無理もない。長年夢見た団長の座が、今日の前にぶら下がっているのだ。

暫くは落ち着いていたように見えたが、彼女は突然立ち上がるとそのまま急ぎ足で部屋を出て行った。

「……。所詮繋ぎだ」

アルマは軽くため息を鼻へ流すとその後を追う。彼女には部隊長が何を思ったかすぐに予想がついていた。

(そんなに自信がないのか。これほどに部下を集めておきながら)

アルマは募る不満をポーカーフェイスの中に溶かし込み、部隊長を追う。

深々と冷え始めた城の廊下を赤のハイサイブーツで叩いて早足に抜けて、彼女がイドウヴァの背を追い着いた先は、予想通り投票会場。

「全ての投票は終わりましたか？」

イドウヴァは笑顔を作ることもなく机に手を突き、投票箱の前で受付をする隊員を覗き込むように声をかける。

もう何度同じ質問をされたらどうか。隊員は今までと同じ答えを返す。

「いえ、まだ当部隊と、第十八部隊の投票が済んでいません」

答えなど分かっていた。それでも、それを聞いてしまうと抑えられ

ない。

「何をしているのですか？ もう投票終了まで2時間もないのに」

イドウヴァは受付に向かってついつい目を尖らせてしまった。

彼女に言ってもどうしようもない事に言ってから気づく。気付いた事をまるでオウム返しのように答えられ、更に苛立ちが募る。

「団長が帰ってきてから、我々は投票をします。それまでは申し訳ありませんがお待ちください。もう帰城なされるはずですから」

何も言えず、仕方なく投票会場の外で彼らの動向を監視する。

アルマは再び空を見上げると腕を組みながら親友の帰城を待った。

性格は正反対だが、騎士団で唯一心を許した友。語り合った夢を、今まで彼女が見せてきた軌跡を思い出しながら、ひたすらに闇の向こうを睨む。

（あいつは、投票から逃げ出してふらふらするような奴ではない。……きつと何かある）

彼女の睨むその先に、漆黒を照らす満月があった。

光と闇のその絶妙なコントラストが、カルラエの夜を更に戦々恐々とさせる。

恐ろしいほどに透き通り、研ぎ澄まされた闇夜に獣の遠吠えが響き、ざわつく風に心が戦ぐ。



目を瞑ってひたすら時を潰すアルマの耳に、突然の騒がしい声が飛び込んできた。

ばった開かれた赤の瞳。彼女は壁に立てかけていたショートランズを手にとると、赤のウルフショートを揺らして投票会場へ戻っていく。

「団長、お勤めご苦労様でした！」

第一部隊の隊員たちがタイトの周りを取り囲む。劳いの声に応えることもなく、タイトは部下たちをぐるりと見渡す。

少なくとも、彼女達だけにでも分かってもらわねばなるまい。今回の勝敗だけで終わらない、己の覚悟を。

テイトは冷厳な眼差しのまま部下達に目配せをすると、彼女らと共に団長室へ入っていった。

しばらくしてから、団長帰城の知らせを聞いてイドウヴァも急いで駆けつける。見えてきた赤髪の乙女。彼女は今も動きを見せずに会場を見つめている。

「アルマ、第一部隊の様子は如何ですか？」

会場の外にいたアルマに声をかける。だが、彼女から返事は返ってこない。だんまりを決め込んでいると言う様子でもない。

イドウヴァは何が起こったのかと会場の扉を押し開いた。

「……っ！」

中で起きていた出来事を、一体誰が予想できただろうか。

ナイフで刺されたかのように目を見開いたイドウヴァは、急いで中にいた第一部隊の隊員のところへ駆け寄って行く。

「ちよっと、貴女達は何をしているの！」

下に散らばった紙を蹴り分けながら、イドウヴァは隊員たちの行動を止めようとする。

だが、彼女は選挙進行役の隊員たちによって動きを封じられた。

「私達は団長の意向どおり、選挙権を放棄します。私達は、最後まで信頼した団長に付き従うまでです。他に信頼できる人がいないのであれば権利も放棄せざるを得ません」

—— 30分前

帰城後、第一部隊を団長室へ集めたテイトから発せられた命令に、誰もが一瞬絶句した。

「今回の選挙は、選択肢に私を入れなくて考えて欲しい」

事实上、イドウヴァに団長の座を譲ったことになるこの発言。

当然皆は反発した。皆テイトに再選して欲しくて、必死になって様々な画策を講じてきた。それなのに当の本人がどうしてわざと敗北を選ぶような指示を出すのか。

普段は団長の命令に快い復唱を返す者たちも、今回ばかりは驚きと、困惑と、そして憤りに顔を紅潮させている。

「なぜですか！ そんな命令はいくら団長といえど納得できません！ 私達は、テイト団長以外、団長として認められません。テイト団長が適任者だと信じています！」

懇願にも似た叫びを浴びせる副将に、周りの隊員たちも呼応するかのように口々に考え直すように団長に迫る。

しかし、もう肚を括ったことだ。彼女たちが信じてくれるからこそ、この選択をするのだ。

自分が目指したものとまるで違う形で当選したとしても、それでは望んだ変化を騎士団に残すことが出来ない。

妹に覚悟を口にした手前、それを貫くまでだ。

「……だから、私以外を選択肢にしなさいと言っているでしょう？」

イドウヴァさんを団長として認めたくないのであれば、他にも選択肢はあるでしょう」

こんな緊迫した状況で、どうしてこんなに落ち着いていられるのか。そして、なぜこのような狂気にも似た命令を下すのか。

副将ソランの叫びを筆頭に隊員達はなんとか団長を思いとどませようと必死になる。

「選挙権を与えられているなら、私達は誰に投票しても自由なはずです！」

ズバツと言い切った隊員を、テイトはキツと見つめる。見つめられた隊員は、今まで見たことのない団長の鋭い目付きに目をそばめた。

「そう、それなのよ。選挙は、本人の意志が忠実に反映されなければ意味がない……」

「私達は、団長の意思を正しく理解できていなかった。団長を信頼していないながら、団長の信頼に応えることが出来なかった。これは……その罪滅ぼしです。私達は、テイト団長以外を団長と認める事は出来ません」

音を立てて、投票用紙が床に落ちていく。

イドウヴァは破り捨てられた投票用紙を見て、ニヤリと不気味に笑

みをこぼした。

興奮……湧きあがるのは興奮。心の中が燃え上がり、一気に広がって湧きあがる興奮が身を包んで声が漏れ出す。

「ふふふ……あのバカ団長め……。自分で自分の首を絞めるとはなんて愚かなのでしよう」

「ふ、これで勝利は確定でしょうね」

アルマも、選挙会場の外で高笑いするイドウヴァの横で安堵の笑みをこぼす。

テイト派最大の票田、第一部隊の投票権放棄……。それはすなわちこれ以上のテイトへの投票がないことを意味していた。

彼女の笑い声は、団長室に籠っていたテイトにも聞こえていた。

「シャニー……。私は、これで良かったのよね。貴女と話をしていた、私はようやく決心がついたわ。今それを実践してみたの。これがどんな結果を生むのか……。私は、これで良かったのよね」

十八部隊の詰所を窓から見つめる。妹に色々教えてきた。そして、今度は妹に教えられた。揺るがぬ思い。不思議にも清清しかった。

今の瞬間が一番団長としての仕事を果たしたように思えるのはなぜだろうか。

求めるもの、理解されぬ想い。世間の目。それらに板ばさみにされていたテイトが、一瞬だけ開放された瞬間だった。



第一部隊の権利放棄を見届けたイドウヴァは、軽い足取りで詰所へ戻る。

明日の朝には、自分は今団長のいるあの部屋に座っている。そう考えただけで、今にも飛び跳ねそうだ。

あの女が団長になった時から、ずっとこの瞬間の為に心血を注いできた。

嫌な事でも、危険な事でも、そして腹が立つことでも。屈辱に耐えながら歴代団長のの命令は何でも聞いたし、少しでも評価を稼ごうと夜や、休日の登城……とにかく何でもした。

そんな自分が団長に選出されなかった。

テイトとか言う、イリア騎士の誓いを破つたも同然の行動を起こしたあの小娘。彼女に団長の座を奪われたときのあの悔しさは、思い出すたびに虫唾が走った。

あの女に搔つ攫われたあの瞬間と重なって今でさえギリギリ歯が軋る。親子共々……。そんな思いも、今日で終るのだ。

(散々コケにしたあの小娘など左遷してやる。これでやっつと、念願を達成できる)

明日の昼には、もうテイトはイリア内にはいないだろう。

不気味に笑う部隊長のいつにないご機嫌な様子に、アルマは黙って彼女の後をついていく。その赤い眼は、今も変わらず鋭いまま。

ご満悦のイドウヴァとは逆に、アルマは不安で仕方なかった。部長の勝利は決まった。なのに妙に心に引つかかるものがある。

それが何か分からないが、それが強烈に、不安として自分へアピールしている。

二人が第二部隊の詰所のある並びまで廊下を歩いてきた、そのときだった。

一番奥の、階段に近い部屋から大勢人が出てきた。彼らは真っ直ぐこちらへ向かってくる。一言も喋らず、何か慄くほどの雰囲気を持って歩いてくる。

その先頭を歩いている二人を見た途端、アルマは先程の不安が一気に爆発した。

表皮が裂け、中から噴き出した熱く、絡むような不安が溶岩の如く心を覆い、それは不安から焦りへと変わり燃え広がっていく。

(これは……まさか！)

その集団はイドウヴァたちの横をそのまま素通りしていった。

アルマはその先頭にいる見慣れた青髪の女性の目を見つめたが、ショートレイヤーを揺らす彼女の視線がこちらに向けられる事はなかった。

「部隊長、私は急用を思い出しましたので一時失礼します」

彼女は直感していた。この時間に、彼らが重い腰を上げた。これは

即ち、第一部隊の動向を窺っていたと推測して間違いない。もしそうならば、彼らのもとの行動は大方予想がつく。

「シャニー……。団長と会って何を話してきたんだ」

アルマは部隊長から離れ、すぐに親友の後を追った。

## 第4話 切り拓く手

今日は一段と冷え込んでいる。窓には既に霜がつき、イリアの未来の如く外は全く見通せない。

シャニー達の足音が、燭台の明かりだけを頼りにした廊下の凍てつき刺さるほどの空気に響き渡る。各部隊の詰所の中では、誰もがこの足音に耳を凝らす。運命を運んでくる足音。それがどンドン投票会場に向かっている。

皆は部屋の窓に付いた霜をこすり落とすし、離れへ向かう通路を覗き込んだ。投票有効時間の終了まで残り30分……。そこには、レイサを先頭にして隊列を全く崩さず移動する第十八部隊の姿があった。テイト派最後の頼みの綱、第一部隊の突然の権利放棄。そして、いよいよ運命を決定付ける最後の票田。誰もが彼女らの投票を固唾を呑んで見守っていた。

「それにしても、なぜこんな時間まで投票を遅らせていたんだろう」  
第十八部隊が通過して行った事を確認したかのようなタイミングで、そんな声が第三部隊の詰所から聞こえてきた。

(第三部隊か……。確か、最初はテイト派だった部隊だな)

その内緒話を聞いている人物がいた。アルマだ。十八部隊の後をつけていた彼女は、部屋から聞こえるひそひそと紙をなぞるような声に耳をそばだてた。第三部隊は戦前からテイトと関りのあった人が部隊長を勤める部隊。もちろん、選挙の時もテイト派に回り、彼女を支援するはずだった。

ところがいざ選挙へ向けた活動が始まると、イドウヴァ派の勢いが強いことで部隊内でも意見が流動化して、部隊長も部下達の意見対立に歯止めを利かせることが出来ず、混乱は長い間続いた。

「私の力になっていただければ、素晴らしい未来を必ず約束して差上げますよ――

激化する部隊内対立に加え、イドウヴァから直接の勧誘。その甘い言葉に、部隊長は堕ちてしまった。自分の今後を考えたとき、あまりにも強烈なその言葉。いくらテイトと昔から知り合いだったとして



も、天秤は明らかに自分の今後に傾いた。

他のいくつかの部隊でも、そう言ったやり取りがあつた事は側近であるアルマが知らないはずは無かつた。そのことは別段非難されるべきことではないと考えてきたし、これからもそうだろう。いかなる手段であつたとしても、結果が全てだから。

プロセスを語る必要性など全く無く、世の中を動かす事ができるのは、歴史に残る文面は、その者が為し得た結果のみ。彼女はそう考えていた。言い訳など必要ない。求めるものは、結果を出すことのできる能力。

—手段を選んでいられるほど余裕があるなら、それは必死とは言わないんだよ—

「第一部隊が棄権したもんだから、勝機が薄いつてんで相談してたんじゃないの?」

「だろうね。先の短い団長に忠義だの何だの見せてたって、バカなだけだし」

部屋の中から聞こえてくる声に、アルマは反吐が出る思いだった。いつも人前では頭をぺこぺこ下げている連中が、裏では何を言っているか分からない。

「いくらレイサが盗賊上がりのおつむでも、そのくらいの計算はできるでしょ」

「違いないね、あはは」

アルマは部屋の前を去つた。甘言でたやすく動く者達の考えることなど、そこまで深く考えなくても分かつていたが、ここまで露骨であると彼らの愚かしさで笑いを抑えられなかつた。

「ふふふ……。人間って言うのは、なんでこう汚いんだろう。自分のためなら他人のことなんかお構いなし。拳句陥れようとまでする。こんな奴らが……。こんな意志のかけらも無いような屑共が天馬騎士団を支えている……。? こんな可笑しい事が事実として存在するなんてね」

アルマは急ぎ足で一足先に進んでいくシャニー達を追う。見たかつた。自分の親友が、本当に自分の思っているような人間であるの

かを。確かめたかった。彼女が、果たして自分と夢を共有するに足りる人物なのかを。

きびきびとして、それでいてゆっくり重たい一歩一歩を踏みしめて。レイサ率いる第十八部隊は、ようやく投票会場の前まで到着してここで止まった。

レイサは一旦後ろを向き、部下達の顔を一人ひとり見つめる。皆は、その合図に黙って答える。

——全員一致

確認を終えたレイサは再び前を向き、会場の扉を押し開けた。中には、自分達の到着を待っていた受付が……いや第一部隊の面子全員が待っていた。皆何を語るでもなく、だが視線は痛いほどに第十八部隊に向けられて、それを全身に浴びながら投票箱のところまで辿り着く。

この部隊の投票が終れば、運命がいよいよ時を刻み始めるのである。ところが、投票箱の前まで来たレイサは何を考えたか、また隊員たちのいる後ろを向いてしまった。

「さて、私はあんた達の意見を聞いていただけ。起案者として最後まであんた達が責任を持って票の処理をしなさいな」

それを待っていたかのように、レイサの前にシャニーがゆっくり歩み出てきた。その手には、彼女の意思表示の証明、投票用紙がしっかりと握られている。

どれほどに、この一枚の為に苦悶し、時間を費やしただろうか。しかし、今の彼女は、いや多かれ少なかれ第十八部隊の隊員達は心の悩みを解き放ち、更にはまた一つ、ニイメの言っていた“十”のための“一”を会得し、心に焼き付けていた。

「みんな、いくよ」

第十八部隊が目の前で執った行動を第一部隊は黙って見ている。

「!!」

そこへ遅れて到着したアルマの表情は、第一部隊とは対照的だった。第十八部隊の行動が想定範囲内だったにもかかわらず、彼女は瞳目するばかり。だが、目は見開きながらもその口元はほとんど笑み

を湛えていく。やりやがった……あいつは本当にやりやがったのだ。何度も二人の候補を書いては消し、消しては書きを繰り返した投票用紙。それをシャニー達はビリビリと引き裂いていた。足元に散らばる、イリアの将来。

「我々十八部隊一同は、今回の団長選出選挙の投票を、この場で棄権します」

◆ 「た、大変です！ イドウヴァ部隊長！」

首が吹き飛ばかと思うほどの勢いで部隊の詰所に駆け戻ったアルマはイドウヴァに十八部隊の棄権を単刀直入に知らせた。勝利を確信し、祝勝会の準備に取り掛かっていた部屋の中でイドウヴァが驚かないわけがない。その自信も、テイト派の第一部隊が棄権し、彼女の得票が予想を大幅に下回ったところに、イドウヴァ派の陣営に取り込んだ十八部隊の票が上乘せされる算段だったからだ。

「ど、どういうことなのです！」

「詳しい話は分かりません。とにかく会場へ！」

アルマに言われるまでもなく、イドウヴァの足は投票会場に向かっていた。

◆ 「貴部隊の投票権放棄、事務局側として認めます」

事務局によって十八部隊の棄権は正式に受理された。だが、何としても受理されては困るイドウヴァたちがそこへ駆け込んでくる。

「待ってください。第一部隊棄権の後の十八部隊の棄権。そして、十八部隊のリーダーダ格シャニーは、事前に姉であるテイト団長と密会をしていたとも聞きます。何か団長による思想強制があったと考えざるを得ません。今一度、十八部隊の棄権受理をご深慮願います！」

アルマの声が静まり返った投票会場に響き渡った。棄権に対する受理処理。それに対する突然の異議申し立てに事務局側も驚いた。

「第一部隊もそうですが、権利放棄には正当な理由があるはず。何で

も権利だからと放棄して良い問題ではありません。この選挙は、イリアの将来を巡る非常に重要なもの。正当な根拠なくして放棄を受理する事は、イリア騎士の誓いに反すると思われれます」

―イリア騎士の誓い―イドウヴァの口からその言葉が放たれた。

イリア騎士は、その全てをイリアの為に捧げなくてはならない。イリアの将来を創っていく大切な選挙。それを正当な根拠も無しに放棄するのは誓いに反する事になる……。そういう理屈である。「ふつ……」だが、その言葉をレイサは鼻で笑った。

「何がおかしいのですか、レイサ」

言われて黙っていられる性格ではないイドウヴァは即反応し、レイサを睨みつけた。

「だってねえ。そりや笑うしかないでしょ。一番騎士の誓いとは縁遠い人間が、エラソーに騎士の誓いを盾に理屈こねてるんだからさ。根拠？ 当然あるから、それに従った行動をとってるんだろ？」

レイサの目配せに、シャニーたちがレイサとイドウヴァの間に立った。彼女らはその位置から選挙進行役の方へ体を向け、綺麗に隊列を整える。

「十八部隊長レイサに代わって、私たちが、権利放棄の根拠を申し上げます」

イドウヴァの視線は、シャニーへ向けられていた。これほどの実力があり、現団長のやり方に不服を漏らしていた彼女に対し、出世の道を開いてやると誘った。その代わり力を貸せと。なのに、彼女のとつた道は棄権。何が不満なのか分からなかった。

「今回の選挙はただの票取り合戦になっています。支持派以外の者に、うまい話を持ちかけてまで。昼に団長と会ったのは、選挙を実施した真意を聞く為です。何の為の選挙なのか」

やはり密会をしていたの事実のようだ。イドウヴァの口元がぎりつと歪む。それでもシャニーはまっすぐに前だけを向いて説明を続けた。

「その問いに、団長はこう仰いました。『今回の選挙は、騎士の一人ひとり、イリアを創っている構成員であること自覚してもらう為に

行ったもの。自分で考えて、悩んで、そして自分の意志でイリアの将来を決めて欲しい」と。あたしはそこで確信しました。今回の選挙は、間違っている」と

そこまで言い切ったシャニーに横やりを入れようとイドウヴァが口を開こうとした時だ。被せるようにレイサの声が飛んできた。

「職業柄、結構徘徊してるから色々聞いてんだよね。投票しなければ、部隊の経費を減らすという脅しがあったという話もあるってもんだよ」

隊員たちの後ろから彼女らを助ける。その視線は、明らかにイドウヴァへと向けられていた。視線にめつた刺しにされ、飛び出しかけていた言葉を飲み込みながら思わず視線を逸らす。

「そんな団長の意志を知らず、造られた意志で投票するところでした。あたし達十八部隊は、団長の意志を考えて、この結論を出しました」  
シャニー達は事務局側にお辞儀をすると、部隊長の後ろに下がった。納得できるはずがないイドウヴァが即切り返してくる。

「自分の正当性を主張することが、捻じ曲がった意志を作るとか言う事になるのですか?」

激昂するイドウヴァを前に動じることもなく、売られた喧嘩に上等とレイサが乗って来た。もつともつと吐かせてやればいい。自ら吐いた毒こそが自身を沈める最も危険な毒だと毒使いは知っている。

「意志を主張するって言うのは、他人に不安や恐怖を植え付けることなのかい?」

「なんですって?! 無礼にもほどがある!」

「そんな事言えるのかい? なんならあんたがしてきたこと全部ここで喋っちゃってもいいんだよ?」

またしてもこの二人は口論を始めてしまった。だがこの口論、イドウヴァが勝ったためしは一度もなかった。そしてそのジnkスは、今回も同じ結果を招くことになる。

「知られたくないから秘密裏に行動してたんだろ? 皆弱みを握られたら何も喋れないし作戦は完璧だったかもね。でも、残念だったね。」

こっちはそういうのを仕事にしてるんでね、ゼーんぶお見通しなんだよね」

騎士団内では評価など無いに等しい人物だが、レイサにはいつもこうしてどこからか嗅ぎつけられて邪魔をされて来た。今回も、彼女は一つの帳簿を取り出す。それは高級レストランの来客者リスト。

「セイレーンでのお食事は楽しかったかい？ 私も一度でいいからああいう高級レストランで会食してみたいよ」

セイレーンとは、イドウヴァが良く会合で利用する高級レストランの名前。団長選出選挙実施が決まった後、その関係でよく彼女はそこへ訪れていた。密会にする為に、わざわざ場所をそこに選んでいた。

どこでその話を聞きつけたのか、レイサはその場所を突き止めて盗み聞きしていた。それゆえに、彼女にはイドウヴァ派が十八部隊の票を当てにしている事も筒抜け。それまではポーカーフェイスを装っていたアルマもレイサに自分達の考えている事、やっていることが全て筒抜けであったことには驚いたようだ。眉間にしわを寄せ、明らかに不機嫌な顔をしている。

彼女以上に興奮したイドウヴァだが、これ以上のレイサとの口論は自分で自分の首を絞めるだけということが明らかである。悔しさに目を見開いてレイサを睨みつけるも吐き捨てる言葉が見当たらず、無駄に勢いをつけて体の向きを変え、そのままへ地を踏み砕くように会場を後にした。

アルマも彼女を一度は追いかけて止まった。その視線はシャニールのほうを向いている。二人の間だけで時が止まり、暫く互いの瞳をずっと見つめ続けていた。

「で、権利放棄は正式に受理されたんだね？」

「はい。十八部隊の権利放棄により、全ての部隊の投票が終了しました」

レイサは確認を終えると、出入り口のほうを向いて隊員へ合図をする。

「ほら、権利は行使したし、私たちも部屋に帰るよ」

レイサは一人隊列から取り残されて未だにアルマのほうを見る

シヤニーの肩をポンと叩き、彼女は慌てて隊列の最後尾に戻る。そして再び振り向くと、もうそこにアルマの姿はなかった。

自分の正しいと思ったことを貫いた。自分の心に素直な気持ちで、投票権を放棄した。だが、ここにきて何かアルマに対して悪い気も起きている。結果的に、親友の顔を潰す結果になってしまったのだから。

(正しい事をするのが……本当に、皆に喜ばれる事なのかな)

“ ”をまた一つ知った彼女の心に、新たな難題がひとつ生まれていた。



十八部隊の投票権放棄。それは各部隊に多大な衝撃を与えた。その反応は部隊によつてさまざまだったが、良い反応を示す部隊は少なかった。

——勝ち目が薄いと知つてテイト団長を見捨てた

——直前に団長や第一部隊からの圧力があつたのではないかと  
棄権という行為を、両陣営ともどつちつかずの裏切り者として捉えていた。それは、両陣営が十八部隊を重要票田と位置づけていたから。

戦前なら新人の人数など大勢に影響はなかつた。だが戦後の生き残りで再建した騎士団では彼女たちの占める割合は無視できないものとなつていた。重要視していただけに、予想の斜め前に行くレイサたちの行動は各部隊の心理に大きな影響を与えたのであつた。

だが、一つだけ確かなことがある。十八部隊の投票が終つた事、それはすなわち、全部隊の投票が終つた事を指す。いよいよ、運命の扉を開く時が来た。

開票は、事務局側である第一部隊が中心に行う。開票室である第一会議室には、第一部隊と第二部隊以外の各部隊の部隊長が集まつた。想定外の出来事に満ちたこの団長選出戦の行方。天馬騎士団は、そのことに目を釘付けにされていた。深夜を回り、日付が変わつたにもかかわらず。

極限の緊張が皆を包み、静まり返る会議室。白狼の遠吠えが聞こえ

る。焦る気持ちに夜風は更に煽る様に色々仕掛けて、少しの物音にも皆は敏感に反応する。

それを楽しむかのように、夜風は相変わらず色々な音を彼女らの耳に叩きつけ、また一つ、澄んだ空気が音を運んできた。その音は近寄っては離れていく風の音ではない。ゆっくり、しかし確実に、この第一会議室に向かっている。

その音が複数人の足音であると正確に分かった時、その足音は止まり部屋のドアが大きく開かれる。そこに現われた存在に、一同は目を疑った。

「闇の隠者……。なぜあなたがここに」

「団長に頼まれたんじやよ。わしは断ったんじやが、どうもああいいう瞳は、自分の若い頃を見ているようで敵わんわい」

第一部隊の隊員に囲まれて現われたのは、雪のように真っ白な髪に、曲がった腰、縮んだ背、曲がった鼻……。いかにも老魔女といった言葉が相応しい山の隠者、ニイメだった。

天馬騎士団の部外者が監査役を勤める……異例の事態だ。事務局側も同じ天馬騎士団内の人間。そして更に現団長配下の部隊となれば、どちらかの陣営にとって恣意的な開票になる可能性も否定は出来ない。公正な見地からの開票をお願いしたいと、テイトは事前にニイメに頭を下げていた。

ある者は、本当に団長が公正な選挙を望んでいたのだと再確認し、更にある者は部外者を用いるほど騎士団内に誰も信用が無いのかと団長を心中罵った。

「では、開票を開始します。これより読み上げていきます」

第一部隊の隊員が、投票箱を開けた。中から最初の一票を取り出し、二つ折りになっている紙を開く。次のイリアを作る最初の1枚が読み上げられようとしていた。



## 第5話 戦友同士

あたし達がしたことは本当に……本当にこれで良かったのかな？

ホントは、ホントはもつとしくなくちゃいけないことがあったんじゃないかな……。

あの人の顔に泥を塗ったし……親友を裏切ってしまった。

彼女に謝らないと……でも、あたし達は最善を尽くしたんだ。尽くした……はずなんだ。

あたし達が信じた道だ。ほら、前を向いて先に進もう。ただひたすらに、前へ。

開票が始まった。部隊長未満の身分のものは各部隊の詰所で結果を待つ。シャニー達十八部隊もレイサ以外の面子は詰所で皆寝ずに様子を見守っていた。

何も音は聞こえてこない。先程まであれだけ色々な雑音が心を掻き立てていたと言うのに。無音になると、今度は色々な不安がどくどくと襲ってきた。

自らの手で引き裂いた、イリアの未来。だがその未来は、歪んだ誓いによって創られる未来。

この手で、未来を切り拓いたつもりだ。本当にこれで良かったのか、本当はまるで恐ろしい過ちを犯したのではないか。それに……浮かぶ友の顔。

勇気ある決断だったのか、ただの曲解だったのか……。それは今でも分からない。十八部隊の棄権は、確実に大きな影響を与えていることだけは事実だった。

自分達の起こした行動の影響の大きさに、皆は開票の様子が知りたくてたまらないのに、待機しか許されていない。その歯がゆさと緊張感が、部屋にこれ以上無い静寂を与え、各々の心をざわつかせ続けていた。

物事はいつもいきなり目の前に現れる。突然の物音に皆は一斉に主の方に視線を集める。開票結果が来た。どっちだ、どうなったんだ？ 注目が万と集まるその知らせに、皆は扉へ駆け寄った。

「レイサさん、どうでした?! ……って?」

皆は扉の前に居た者を見てがっかりと肩を落とす。そこにいたのはレイサではなくアルマ。廊下があわただしさに包まれていないことから、結果が出たわけではなさそうである。

「シャニー、今時間はあるか?」

アルマが指名したのは予想通りシャニーだった。親友同士の内緒話。そんなものは天馬も食わぬといった感じで皆は散り散りになっていく。

指名された当人はビクツと肩が跳ねていた。

(やつぱり来た……)

アルマが来ることはある程度覚悟していたし、待機と命じられていなければ自分から訪ねに行かねばと考えていたくらい。ぎゅつと胸元で手を握って震える瞳に凜と言い聞かせ、アルマの背中について城の中庭に歩いていく。

今日の夜は一段と冷え込み、防寒具を貫通して足を突き刺してくる。

だが、そんな寒さも空を見上げたらすつと薄れるから不思議だ。澄んだ星空には満天の星絨毯。二人は暫くそれを瞳に映しながら中庭を散歩した。何もかも忘れられるような美しさに心が洗われる。

その後、城門へと続く中央通路に聳え立つバリガンの像の足元に二人は座り込んだ。座り込んでからも、互いに言葉をなかなか掛け合えない。

どうやって切り出そうか、なかなかそれを見出せなかった。近いのに、重い間合い。

だけど、渦巻く長いモヤモヤはどんどん心に深く絡みついてきて気持ち悪く締め上げてくる。

黙ってちやいけな……第一会議室の明かりを見上げながら、口火

を切ったのはシャニーだった。

「ねえ、今回の選挙のこと……」

「私もそのことでお前を呼んだのさ」

やはりそうか。シャニーの腹の中でわっと緊張が膨れ上がってくる。きつと、イドウヴァに責任追及をされたに違いない。

十八部隊の票を手に入れようと必死になって、幾度となく足を運んでいた。イドウヴァは十八部隊の事はアルマに任せていたようだから、アルマは票の獲得を結果的に失敗した。一番のキーポイントを取りそこね、恐らくイドウヴァは焦っているだろう。

なんだか落ち着かない。冷たく張り詰めた夜風が沈黙の中で責めてくるようで、じつとできずに気づけばアルマに問うていた。

「ねえ、イドウヴァさんに怒られた？」

「いや」

アルマはシャニーの質問へ軽く否定を返してきた。少しだけほっとする。

イドウヴァが団長になると言う事は、その右腕であるアルマも騎士団の中で位が上がることを意味する。

力を手に入れて、騎士団の長になること。それがアルマにとっての第一目標。シャニーは以前に聞かされて知っていた。だから今回の権利放棄は、間接的に彼女の目標を妨害したことになる。非難を浴びせられても受け止めるしかない。

ぎゅつとスカートを握り、もじもじと左右する視線。再びの沈黙が心を締め上げる。

もう、我慢できなかった。ぱつと振り向いてアルマの顔を見つめ勢いのままに言い切った。

「あのね、アルマ。アルマの顔を潰すようなことしちゃってごめんね」  
詫びた先にあるアルマの顔は明らかに眉が歪み、困惑とも怒りとも思える鋭い視線が返ってきた。

「なぜ謝る必要があるんだ？」

アルマは笑いを鼻から通し、首を傾けて困惑を表す。どうもアルマの考えている事は読めなかった。大抵の人なら、表情や話し方で分か

るのに。

「お前は自分の考えに従って行動を起こした。別に誰かに唆されて権利を放棄したわけじゃないだろ。それとも面倒になって団長の言いなりになったのか？」

あれだけ考えて悩んだのに言いなりなんて、面倒なんて、そんな風に親友に思われたくない。しよげていた懇願の眼差しは見る見る力を取り戻していく。

「まさか！ あたしは、あたし達は自分たちの意志で道を切り拓くために考えて、考え抜いたんだ」

息を吹き返した様子を眼を開いてアルマを強く見つめ否定する。その目は投票会場で見せていたものと同じ。穏やかな中にも強い意志を湛えるまつすぐな瞳。

「だったら謝る必要なんかあるのか？ お前には、お前の考えがある。お前の中にまで分け入って、考えを捻じ曲げる権利なんか誰にもない。まあもつとも……」

「それすら出来てしまうのが、権力だーって？」

追及されている訳では無いと分かったシャニーはいつもの調子でアルマを茶化すが、彼女は表情を変えず、第一会議室から聞こえてくる舌すべりの良い声を聞く。

澄みきった空気の中に読み上げられる開票内容。一体どちらになるのか自然と耳をそばだてて不安と緊張に心臓がどくどく言い出す。

造られた意志たちが読み上げられるなか、シャニーはタイトとイドウヴァ、二人がいるのだろう各部隊の詰所を見上げていた。このときこの瞬間を、二人はどのような心境で待っているのかと考えていた。ようやくやくアルマから返ってきた。

「その通りだ。たいていの騎士は、イドウヴァ部隊長の意見は鶴の一声と仰ぐ。それも全ては、あの人の顔が広く、権力を持っているからだ。傭兵としてのレベルも高いし、騎士団の殆どを知り尽くしている」

これだけ聞いていると、団長はイドウヴァなのかと思えるほどに揃っていた。

だが、彼女が胸に付ける勲章はずっと銀色のまま。かれこれ十何年も、だ。その間に何人も団長は代わつてきたと言ふのに。

どうして……頭に浮かんだ疑問を簡単に吹き飛ばしたのはアルマの一言。

「団長は確かに人徳がある。だがな……。お前の姉と知つて言う。正直あの人は、人の上に立つような性格じゃない」

じわじわ湧き上がってくる否定の気持ち。それはすぐにはつきりとした怒りに変わつて柳眉が吊り上がる。

世界で一番大好きな姉がどれだけ苦労しているか知つているから、前置きがあつたつてアルマの言葉は受け入れられなかった。

「そんな言い方つて！」

いくら相手が親友でもシヤニーも黙つてはいられない。悪口をやめて欲しい一心で 思わず声をあげるが、アルマは目線を逸らし、テイトのいる部屋を見上げる。

彼女は知つていた。いつも日付が変わつても、団長室の明かりが消えない事を。

団長が毎日、縦割りになつてしまつている騎士団の内部構造を変えようと苦悶していることを。

「怒るなよ。テイト団長は、平和な時代の団長なら聖人だったのかもしれない。だが、あの人の本来は保守的で世間体を重視する傾向になる事は否定できないだろう？」

「それは……。お姉ちゃんは優しいから。みんなの気持ちを大事にするから、だから！」

「分かつたよ。悪かつたよ。ムキになるなつて」

恥ずかしがつて口にはなかなか出してくれないが、姉が大事にしてくれていることは知つている。

何とか力になつてあげたい気持ちが熱くなつて、ついついこうなつてしまう。

同時にアルマにも不思議と怒れなかった。それよりも湧きあがるのは驚き。

アルマはテイトとそこまで面識はないはずなのに、姉の性格を大ま

かではあるが分析していた。よく人を見ている。そのあたりはさすがだと思つた。

(あたしのことはどう見ているのかな……)

そう興味を抱きつつ、彼女は星を見つめながら第一会議室で読み上げられる名前を聞いていた。



会議室ではただただ、名前を読み上げ石板にかかっている彼女らの名前の下に書記係が一本一本槍を描いていく作業が続く。

イリアでは数を数える時、槍を束ねるように線を引いて数える。4本の槍を縦に並べ、その上に、もう一本の槍を横に書く。これで五。

二人の名前の下には、同じくらしいの槍が並べられていた。一本ずつ、意志が槍に変わり、槍がイリアの未来を決めていく。

シャニー達が外から眺める第一会議室。その中の空気は今までにないほどに緊張の熱気で包まれていく。ニイメは部隊長達の視線が一点に集まるその先を見ながら、じつと座っていた。

(騎士共のこの顔つき……。本当に真剣だわい。いつもは意志のない、従うだけの連中がこうも熱心になれるとは。 “そっちのほう”にだけは異様に執着心があるんだねえ。よーわからんわい)



「ところでさ」

「なんだ？」

暫く静かに開票状況を見守っていたシャニーたち。

だが、周りは刻一刻と冷えてくる。その寒さは防寒具越しでも体を刺すようになっていた。

カタカタと体に腕に巻きつけながらチラチラとアルマを見るが、彼女は遠くを見つめたまま。

(もうそろそろ温かいミルクでも飲みたいよう……)

足先が凍り付きそうにシャニーはアルマに声をかけた。

「どんな用事であたしを呼んだの？」

「いや、別に用事はないよ」

「ええー??」

シャニーの気が抜けたような声に、アルマの口元が思わず緩む。

アルマにとって数少ない気を許せる友。自分と性格も価値観も正反対だが、一緒にいると不思議と心が安らぐ。

何より今日確信できたのだ。夢を共にし、背中を任せられる人間ができた。いつも気を張って生きていかななくてはならない自分にとっては、掛替えのない存在だった。

「でも、本当によかったよ。お前が、私の思っていた通りの人間でさ。流石はこの私のライバルなだけはある」

「ははは、そりやどうも」

シャニーは半ば呆れ顔で相槌だけは打っておく。だが、アルマは反応に困っているシャニーを見つめなおした。

「本当にそう思っているんだ」

赤い瞳はまっすぐにシャニーの青い瞳を見つめ、その口元は珍しく優しい。こんな顔もできるのか。

「他の奴らの大半は、従ってるだけ。言われたことをこなすだけ。傭兵としては、それでいいのかもしれない。主人に忠実な犬であるほうが」

「犬……」

あまりの酷い言い草にシャニーの口元が歪んで眉が困っているが、アルマはお構いなしに続ける。

「そう、犬さ。犬より酷いかもな。自分の意志なんて持っていないし持つ気もないんだから。それだから、イドウヴァ部隊長にちよつとうまい話を持ちかけられると、なりふり構わずついていってしまうのさ」

自分が支持をした方が団長になれば、それはすなわち自分達の格も上がるのに、なぜ自分が団長になろうとはしないのか。簡単だ。団長になれば、騎士団外にも公表できるような結果を残さなければならぬいから。

戦うことが自分達騎士の役割。そして、戦うことがイリアの生き延

びる術。そう考えている騎士達は、戦闘以外の無駄な責任は被りたくなかった。

向いている方向が、皆バラバラだった。それを一つにまとめているのは何てことはない、ただの甘言。それを親友は跳ね除けたのだ。

普段朗らかにして元気だけが取り柄かと思っていた彼女の信念を見て、アルマは確信したのだった。

「だけど、お前はそうじゃなかった。あれだけ私やイドウヴァ部隊長が揺らしても、自分を崩さなかった。私は、そういう人間が好きだ。確固とした自分を持たない人間など、人間じゃない。お前は、私の人間の友達だよ。大切な親友さ」

わっと心の中に広がるこの気持ちは何だろう。驚き……アルマは確かに言った、好きだと。あのアルマが。

心いっぱい湧き上がってくるものが、気持ちをこれでもかと飛び跳ねさせた。

怒っていると思った、憎まれても仕方ないと恐かった。それが、認めてくれたのだ。

ほっとした以上に、決断して良かったと何か解放された気さえする。

気づけばアルマは立ち上がってシャニーを見つめていて、シャニーも自然と腰を上げて二人は向かい合った。

「イリアの生活水準を上げ、他に負けない強国に変える。その想いは、入団の時も今も変わってはいない。自分で動かなければ」

熱心に語るアルマへシャニーは手を差し出した。新人部隊に一緒にいた頃は槍を突き向けられてどうという人間かと思っただし、やり方は強引で自分とは食い違ふ事もある。

それでも、見つめる先を共に理解し合える大切な親友同志だと思えた。

「あたしも、アルマと同じ考えだよ。イリアを他国に頼らなくてもいい国にしたい。もう、寒さや賊に震えて、ひたすら春を待つなんて嫌だよ。自分の力で春を呼び寄せたい」

志を共にする者同志が、がっちり握手を交わす。その握手は友情



の印だけではない。契りを結んだ戦友同士の、意志確認の証でもあった。

二人は互いの顔を見つめあう。ここまで意気投合する知り合いも初めてだった。

「そろそろ寒いし帰ろうか。開票ももうじき終るはずだし」

アルマへ部屋に戻ろうと声をかけ、第一会議室のほうを見上げようとした、そのときだった。シャニーの視界の端に捉えた、何か違和感を覚えさせる影。影は動物などではない、うっとするようなもの。狂気も混じるほどの殺意に満ちた目線。

その視線の先には標的に狙いを定め番われた弓矢。早く放てと真っ直ぐ向く先を追い、仰天の直感が彼女へとっさりの大声を出させた。

「アルマ伏せて！ 危ない！」

反応良く身を翻すアルマ。殺意の主は勘付かれたことに焦った。電光石火の手際で弓を引き絞り、即座に矢を射る。

だが、標的はすでにバリガンの像の陰に隠れてしまい、矢は乾いた音を残してバリガンの足元に落ちた。

「ちっ」

「待て！」

舌打ちを残してまだ下に緑の残る森の中へ消えていく影。

シャニーが剣を抜いて後を追いかけるが、その肩をアルマがしっかりと握って止めた。

「こんな夜に独りで深追いは危険だ」

「でも！」

「落ち着け、一度団長に話をしてくる」

アルマは小走りで城へと入っていった。

そこへ、声を聞いて駆けつけてきたレイサがやってきて、彼女は何かを見つける。

一瞬間にしわを寄せた後、布を当てて拾ったものをシャニーに見せてやった。

「これは？」

「そこに落ちてた奴さ。恐らくアルマを狙った矢だね」

シャニーは手渡された矢を見て息を呑んだ。それは、銀製の矢。ただそれだけではない。殺傷能力を向上させるために矢じりの形を複雑な造りにしてあった。

その破壊力はバリガンの像の土台である硬い岩盤に穴を開けるほど。穴は大きく抉れ、傷口はかなり広がっている。

もう一度矢じりを良く見てみると返しが何箇所も付いており、一旦刺さったらなかなか抜く事は出来ないようにしてあるようだ。それに、放たれる微かだが鼻につくこの臭い……毒か。

驚異的な破壊力、そしてターゲットが慌てれば慌てるほど、ターゲットのダメージを増す造り。更には猛毒で内からも体力を奪っていく。

ターゲットを殺すために極悪なまでに強化されたその矢からは、裂空しなくなった今でもゾツとするほどの重く、鋭い殺意を感じる。

「そんなおっかないモンを使う夜賊が何処にいる?」

「……こんなの見たことない」

ベルン動乱でよく弓兵は見たが、彼らの装備していた弓矢にこんな造りは無かった。こんな、殺したくてたまらないと吐き気が来そうなほどの憎悪の矢なんて。

絶句するシャニーにレイサは当たり前と返した。

「そいつはプロの作業さ。手馴れてるし、かなりの念を入れた仕事をするヤツのようだね」

レイサから辛く放たれたその言葉。シャニーにとっては理解できても納得の出来ない話だった。

「ちよ、ちよつと待ってよ! 何でこんな暗殺者みたいなことをする奴がこんなところに?」

「簡単な話さ。……誰かを殺そうとアサシンが狙っている。それだけのことさ」

誰かを殺そうとしている……。その誰かとは、この矢で狙われている人間……すなわちアルマであることは間違いない。

「でも、アルマは夜賊だって言ってたよ? それに、狙われてるって知

らなかつたならあんな冷静でいられるわけないし、知ってるなら夜にふらふら歩いたりしないんじゃないかな」

早口にあれこれと否定材料を探す。

「こんなの嘘だ、嘘に決まってる。アルマが命をなんで狙われなくちやいけないの?!」

その様子にレイサはため息をついた。それは彼女の狼狽具合だけではなく、アルマの行動に対してもだ。未だに信じられない。

「あいつはあんたを試したんだと思うよ。自分が背を向けていても、あんたが助けてくれるかってね。一匹狼のすることとは思えないけど」

「……じゃ、じゃあなんでそんな危険な奴に狙われたりするの?!」

シャニーは何としても、アルマが狙われているということを事実として受け止めたくなかった。自分の親友が、命を狙われて毎夜怯えているなんて信じたくなかった。

「そいつは本人に聞かなきや分かんないよ。あんなだけ周到な仕事を仕掛けてくるとなると、よっぽどの事をしたんだろうね」

あの毒を見れば分かる。毒使用ポイズンマスターから見ても使用者にもリスクがあるようなあんな毒はそうそう使わない。

突き付けられる現実にシャニーは力なく俯いた。自分の仲間が命を狙われている、それだけでも胸を突き刺されるような気持になる。「まあ、あいつはあんな性格だし、どこでどんな恨みを買ってるも知れないって言うのは何となく納得できる話だけだ」

どうして皆アルマに冷たい事を言うのだろう。口は悪いけれど、誰よりもイリアの事を考えている彼女を悪く言われると、何故か許せなかった。たとえ相手がレイサでも。

「レイサさんっ！ そんな風に言わなくてもいいじゃない!」

珍しく目の色を変えて食ってかかって来たシャニーの頭をレイサは軽く押し下げた。

彼女だって分からないで話ではないだろうに。アルマの事を疎ましがっている上位幹部が少なくないことは。

それでも、シャニーは親友が殺意に駆られるほどの何かをする人と

は思いたくなかった。自分と同じくらい、もしかしたら自分以上にイリアのことを思っているアルマが、まさかそんな。

だが、現実を正面から受け止められない心にレイサは釘を刺した。「シャニー、あなたの今後の為にこれだけは言っておくよ。他人を疑わないで誰にでも朗らかにできるその性格は、本当に恵まれたものだ。でもね、度が過ぎれば単なる甘い人間ってだけだ。自分のひと時の感情で事実認識を誤るような事は、これから部下を持つていく人間として最もしてはいけないことだよ」

「甘い人間……」

ただ甘い人間なのか？ 友を信じて背中を守ろうとするこの気持ちはずただ甘いだけなのか？ 困惑に揺れる青い瞳をじっと見つめて、レイサはシャニーの頭を撫でた。

「信じ貫く強い心は必要さ。でもね、事実が事実として受け入れる強さも必要なのさ。……さて、そろそろ選挙結果が出るし、私たちが城に戻るよ」

レイサに肩を抱かれ、シャニーは城へと戻っていく。その心に映るのは、親友を信じたい思いと、目の前に横たわる事実との葛藤か。それとも、仲間の無事を喜ぶ反面、いつまた再び狙われるかもしれない恐怖が交じり合う不安か。

どちらにしても、彼女は一つを強く願っていた。理不尽な理由で、命を狙われたり狙ったりしななければいけないような国でイリアはあつて欲しくはない。

他の国と同じように、そしてそれ以上に住みよく豊かな国になつて欲しかった。

そのために自分に何をできるのか？ ようやく外殻が見え始めた気がする。

その夢を共にする仲間達や平和を望むイリアの民達。彼らに向かって自分は何を誓うのか。

同時に毎日のように感じるようになってきた自分の無知さ無力さ。当初なぜ新人部隊に配属されたのか分からなくて、タイトに突っかって行つた。それを思い出すたびに恥ずかしくなる。

しかし、もう恥ずかしいでは済まされない。入団して早くも半年近くが過ぎた。早く姉や部隊長を安心させたい。その気持ちがあんどん強くなってくる。

今回、経緯はどうであれ、権利放棄という形でイリアの未来を放棄した。

早く真の意味で一人前になって、今迄の失敗ばかりの自分や今回貢献できなかった分を取り返したい。

空の向こうは、暁にうつすらと染まりつつあった。

あるべきイリアの姿をレイサと話しながらシャニーは詰所へと戻っていく。昨日より少し成長した手で新たな一ページを刻むべく。

## 第6話 新たなる出発

城に帰ると、アルマと外へ出て行ったときのような静寂はそこにはなかった。あわただしく廊下を駆けて行くのは……部隊長達だ。彼女らの駆けて行く先は詰所の方向。ぞくぞくしてくる。結局寝ずの決戦となった選挙も、どうやら終わりを迎えたようだ。結果を知りたい気持ちが飛んでいきそうだ。

「おっと、私は部隊長だからホントは皆に知らせを持って行ってやらないといけない役なんだった。あんたと一緒に居ると時間がなくなつて困るよ」

ポンポンと背中を叩かれて、シャニーは忘れていたのは誰だと口を尖らせる。

「何でもあたしのせいにしてきー」

「じゃあ結果を見てくるわ。部屋に戻って待機しといて」

レイサは膨れるシャニーの額を指先で軽く弾いてやる。尚更膨れるシャニーを軽く笑い、彼女は第一会議室へと向かつて歩いていった。一体どんな結果になったのだろう。胸がバクバクして詰所に向かう足が震えてくる。

他の部隊の詰所には各部隊長が駆け込んで暫くした後、どよめきとも取れるような声があちこちで上がっている。盗み聞きしたい気持ちと、皆と一緒に聞きたい気持ちと。逸る気を抑えて、シャニーは耳を塞ぎながら自分の部隊の部屋へ駆け戻った。

「結果どうでしたか！ って、なんだシャニーか」

さつき部屋を出る前に自分が口にしたことを今度は浴びせられる側になって、シャニーは苦笑いするしかない。部屋を見渡すと、十八部隊でも寝ているものは一人としていなかった。缶に詰めた緊張を開けたようにシャニーを重い雰囲気襲い、代わりに外の新たな風が入ってくる。

「結果が出たみたいだよ。今レイサさんが確認に行っているから、もう少し辛抱してろってさ」

みんなで結果を受け止めよう。シャニーは自ら閉めたドアをじつ

と見つめて、大きく深呼吸した。

副将ソランが部屋に飛び込むなり、第一部隊の詰所の中では大きな歓声で沸いた。

「テイト団長、再選おめでとうございます！」

テイトの再選を心から喜ぶ第一部隊の面子に満面の笑みが広がっていく。彼女は僅差でイドウヴァを下し再任を果たしていた。もうこの時ばかりは騎士としての本分よりただ喜びが勝って、一人部屋で結果を待っていたテイトの許に、皆で流れ込む。

「……そう。私が。皆、ありがとう。でも、私はこれからもやる事は変わらないわ。まだ結果を出せていないもの。イリアが本当の意味で平和になるように勤めるつもり。だから貴女達も私に協力して欲しい。同じイリア騎士として」

この時をどれほど待ちわびたか。皆は沈黙の中はきと敬礼し、固い忠誠を団長に誓う。彼女が団長として然るべきと、多くの者が認めていたということ。一つの目標の為に、不平も愚痴も漏らさず。それに向かつて黙々と、そして確実に努力を積み重ねる姿は滲み出るものがあった。

だが、清々しい勝利とはいかないことも事実。得票の内訳の中でも、騎士団の上位部隊の票があまりない。それは管理者側、すなわち若い数字の部隊長クラスの間は、皆イドウヴァ側に回っているという事である。

大きな仕事をしようとするれば、他の部隊の長に協力をお願いしないといけない。この選挙結果は明らかに、他部隊の長達との間に溝があることを示していた。いくら一人が優れていても、大きな仕事は大勢で知恵を出し合わなければ成就することはない。

今回も最初から重いハンデを背負ったのスタートとなった。再選という、皆から認められた喜びと、騎士団の中核で四面楚歌の現状。複雑な喜と哀の狭間で、テイトは昨日までと同じように仕事を始めようとマントを羽織る。まずは……ゼロット率いるイリア連合騎士団やフェリーズ伯爵が率いる聖天騎士団など、大きな騎士団にあいさつ

し報告せねばなるまい。

その彼女の前に、一人の女性がフラツと現われる。

「再選なすったか」

白髪をローブに隠す腰の曲がった老婆。ニイメだった。彼女は開票の一部始終をずっと見ていた。闇の向こうの更に奥、闇を追求し、闇の奥にある普遍なものを追及するドルイド。その彼女の瞳は、真理に近づくべく新たな経験を吸収していた。随分と無理をお願いしてしまつて申し訳ない気持ちで一杯のテイトは深々と頭を下げる。

「ニイメさん。朝になつてしまいました。が本当にありがとうございました」

「礼なんか要らないよ。半分はこつちが見物したいっていう気持ちで引き受けたんだからね」

心労は大きいだろうに、それを見せずに凜として微笑む団長をニイメがじつと見つめていると、テイトは再び頭を下げはじめ。先ほどの一礼はこれまでに對して。今度は、これからに向けてだ。

「ありがとうございます。これからも若輩者の私たちに色々アドバイスをお願いします」

深々と頭を下げる若き団長へ向けるニイメの眼差しは、目袋をこれでもかと綻ばせて優しい。

「おやおや、いいのかね？　騎士団外のものにそう簡単に頭を下げて」  
「はい。イリアを創つていく者として、騎士団の内外は関係ないと思つています」

ニイメは暫くテイトをじつと見ていた。

（この娘が、シグーネの言つていた“私のあとを継ぐもの”……）

テイト自身昔は、主の言われるままに動いて言われるままに戦うこと。これがイリア騎士としての最善だと考えていた。だが、先のベルン動乱はその考え方に一石を投じた。もうあんな思ひは、妹に槍を突き向けるなんて二度としたくない。同族を殺しあつてまで金を手に入れることが、果たしてイリアの将来にとって良い事なのか。その問いに對する彼女なりの答えは否。嫌に決まつている。だけど、その否を是としなければ、今のイリアはやつていけない。



なぜかと問うていくと見えてきた、騎士に定着してしまった戦うことを是とする風潮、分散している力。そして、リキアへ赴いたときに直面した最大の理由。イリアもリキアを模して、国づくりの根幹を変えていかなければならない、彼女はそう結論付けていた。

本来のイリア騎士としてあるべき姿を体現しようとする姿が、テイトからは溢れているようにニイメには映っていた。バリガンの再来かと思わせるほどに、礼儀正しく、凜然で、そして強い意志を持った若い騎士。久しぶりに骨のある騎士が出てきたものだ。これから面白くなるかもしれないとニイメは静かに頷いた。

「そうかい。やっぱりあんた再任するほどの人間だね。汚い手を使つてまで権力を追求する人間が逆上せ上がってる世の中じゃ、あんたみたいなのは貴重だよ」

テイトはその賛辞にいつもどおりの感謝の台詞を言えず、その目は悲しげに逸れた。本当に望んだのはこんな結果ではなかったのに。就任直後からずっと排除を目指していたものが、今でも根強く蔓延っている。しかもそれは、天馬騎士団の中ですら解決できていない。

国づくりの根幹を変えるには、まず騎士達の心のあり方を正す必要がある。間違っているわけではない。民のために戦う事はある。

だが、国のために戦うことが是であって、戦うことが騎士の仕事ではない。それどころか、こともあろうに傭兵としてのランクを競い、そのランクによって派閥を形成するなどもつてのほか。今の騎士は、自分のために戦っている。

——— 本心に民のために“戦って”いるか？

「いいえ、私も、派閥作りの一端を担ってしまっているのが現実です。騎士は、いえイリアの皆は横一線になって将来を考えていくべきなのに……。でも、皆をまとめる長はどうしても必要になりますし、どう

すればよいのでしょうか……」

再任を果たした。認めてもらえたはずなのに、湧きあがる不安で一杯。望んだ結果を出すためにもがいて、まるで違う結果になる。団長だからしつかりしなければ……その気持ちに不安を攻め立てる。

「二人ひとりが、イリアを創っているという自覚と自信を持つこと。それしかないね。必ずしも横一線になる必要はないんだよ?」

テイトは、老人の語る一言一言へ熱心に耳を傾ける。自分が何をすべきなのか、何が足りないのか、それを老人から学び取ろうと必死だった。再び団長を任された。それは皆に認められたと同時に、重い責任を再び背負うこと。その期待と責任に応えられるように、これからも精進しなければならぬ。その気持ちで一杯の心が迷い、手を伸ばす。

「教えてください。横一線である必要が無いとはどういうことでしょうか?」

テイトの若き目がニイメをじつと見つめる。今の自分にはないものを手に入れるんだ。求める空色の瞳は真っ直ぐ澄んでいる。

「守る存在、守ってくれる存在、それは互いに必要だという事だよ。時には守られる側になったっていい。互いの存在が当たり前になったらお終いだけど。まあ今のイリアがそうだね」

完全な平等。それは一般に求められやすいもの。何でも平等に、皆と同じことを、同じように出来ることこそ良いことである、と。全てにおいて皆一直線でなければならないという事は、力のないものにとっては最悪のルール。平等ゆえの不平等。これほどの皮肉な副作用もない。守ってもらえることへの感謝と、守る側の感謝。互恵の精神であってはじめて、円滑な関係を築くことができる。誰もが知っているはずなのに何故かできない。いつの間にか忘れてしまう“一”。

それでいて、中途半端な追求では皆の向く方向を一方へ変える事はなかなか難しい。バランスの舵取りが不可能なのかと思えるくらいに、今のイリアは不安定。へたに動かせば、今まで溜まっていた矛盾が一気に山肌を滑り落ちイリアを押し潰してしまうかもしれない。その危機感が常にある。シグーネやユーノをはじめとする歴代の団

長たちも、その危機感になかなか思い切ったことができずにいた。

テイトも当然に、その事は意識している。危機感に萎縮する自分がいた。

「どうすれば良いのでしょうか……。何をすべきなのか、見えなくなる事が時々あるのです。もし、自分の一つの命令が原因で、イリアの崩壊に繋がるようなことがあったら……正直怖いのです。こんなことを考えても、どうしようもない事は分かっていますし、そう自分に言い聞かせています。でも……」

就任当時から抱いてきた不安。慣れれば消えてくるだろうと思っただが、消えるどころかどんどん膨らんできた。怖い、怖いけれど、团长が弱音を吐くわけにはいかない。そうやって今までやってきた。どれだけ周りからしつかり者と評価されても、怖いものは怖い。助けて欲しいと言えない苦しみが顔に、言葉に滲む。

「あんたは独りじゃないんだ。困った時は仲間に相談すればいい。さつきも言ったろ？ 支える側は、いつでも支える側である必要はないと」

「はい……」

どこまで生真面目な娘なのだろうか。こう気を張っていて疲れなのかと思うほど。これ以上根詰めさせるのも毒か。もう長話も切り上げようと思った。そろそろ、孫娘に話が長いと言われそうだ。

「あんたは私の若い頃に似てホントに淑女じゃな。他の女子も見習うべきだわい」

「え？ いえ、そんな」

テイトはいきなり振られた話に酷く狼狽する。ニイメにはその顔と反応が楽しくて仕方なかった。もつと感情を前面に出せばよいのにとと思うほどに恥ずかしがっている。

「あんたのその常識人過ぎるところが、今は裏目に出てるね。もう少し自分を抑えずにやりたいようにやってみたらどうだい？ 皆が不満そうなら、あんたが信頼を置いている人間に聞いてみればいいことだ。私の若い頃はね、相手が大男だろうとなんだらうと言いたい事はガツーンと！ なんじゃー！」

長話を断ち切るようにその二人の間に突然割って入ってきたのはレイサだった。彼女はニイメの手を握ると、テイトから引き離していく。

「ほら、ばーさん。団長は忙しいんだから、年寄りの長話につき合わせたらダメだつて何回言ったら分かるのさ」

「何を言うか！」

孫に説教されて目を吊り上げ、レイサへ返したのは先程までと全然違う威勢のいい声。テイトに向けるような優しい声をかけてもらった事など一度も無くて、レイサは少しだけテイトが羨ましかった。

「お前みたいな左巻きのあんぼんと違って、この娘はエライぞ！」

わしの若い頃そっくりじゃー！」

(左巻き、あんたが言うかよ……)

レイサは顔を引きつらせる事を何とか堪え、そのまま引き離していく。テイトには二人の様子が微笑ましく見えて仕方がなかった。血が繋がっているわけでもないのに、あの二人はどうしてあんなに互いに心を許しあえるのだろうか。

テイトにはそれが不思議で、そしてそれ以上に羨ましかった。どうしても相手と自分の間にガードを設けてしまう自分は、友人はいてもあそこまで心を許す相手は少ない。

だが……その数少ない、自分の心を許せる大切な人たちを失いたくはない。その大切な人の命を自らの手で奪うようなマネなど、何が何でも避けたい。いや、避けなければならない。

(大切な人々を守るために、私は、私の理想を貫くわ……。もう二度と、あんな思いはしたくない。他の人にも味わって欲しくはない。負けはしないわ。この手で奪った、大切な仲間の命にかけて)

決意を新たにして、テイトは髪縛りをきつく結びなおすとそのまま天馬に乗り、紺碧の空に一筋残してエデツサのある東の空へと消えていった。



「何故。私が負けるなどありえない……」

一方、第二部隊の詰所に流れていたのは何とも言いがたい険悪な空

気。結果報告の隊員が駆け込み、かなりの長い沈黙が部屋を包む。その後漏らした部隊長の言葉にその場にいた誰もが声をかけられず、居心地の悪くなった皆は一人、また一人と部屋から去っていく。

最後に残ったのはアルマただ一人だった。

「部隊長。お疲れ様でした」

慰めるでも悔しがるでもなく淡々とした労いだけ。アルマにとっては選挙の結果などもはやどうでも良かった。刎頸ふんけいの友を見つけた心は清々しく、そして広々と晴れ渡る。

「あれだけやって、何故。あの小娘の何処に、アレを覆せるほどの票を得る場所が」

「分かりません。ですが、やはり僅差と言う事ですので、十八部隊の影響が大きかったと言わざるを得ません」

イドウヴァは下を向いて頭を抱えることをやめると、何かを閃いたかのように目を見開いてアルマのほうを見つめた。

「……そうか、やはり。レイサめ、何を吹き込んだのだ……！」

この一番大切なときに、一番蔑視していた相手に邪魔をされた。その怒りは机に向けられ、机上に飾ってあった宝玉が転がり落ちていく。それを蹴飛ばしても悔しさを抑えきれない。

無理もない。入団してから十五年余り、このためだけに頭を下げ、このためだけに危険な任務をこなし、この為だけに邪魔なものを踏み台にしてきた。ここまで努力している自分が、ひよっと出の小娘に負ける。しかも下賤な盗賊に邪魔までされて。

あんな……成人して数か月の何も知らない副将に頭を下げてまでここまで来たのに。許せない、あの盗賊が、あの青髪が、十八部隊全てが許せない。「部隊長、落ち着いてください」アルマはイドウヴァを落ち着かせようと声をかけた。何も、全てが終わったわけではない。

「いくらこの選挙で敗北を喫したからといって、部隊長の騎士団内でお力に何ら影響するものではありません。聞くところによると、幹部クラスの者達の多くは部隊長へ投票したとのこと。騎士団の中樞を牛耳っておられる部隊長の鶴の一声に、いくら団長といえど耳を貸さずにはおれないはずではないでしょうか？」

アルマの説得にいったんは席に座ったイドウヴァだったが、すぐにまた席を立って窓のほうへ歩き出してしまった。未だに現実を受け入れられずにいる。

「そうは言いますが、アルマ。団外的に見れば、やはり団長こそが騎士団の代表、象徴なのです。団長とそれ以外では、相手の態度も雲泥の差で違ってきます。意見の通り方は言うまでもありませんよ」

イドウヴァは、テイトとは正反対の考え方をしていた。皆横一線に並ぶより、唯一絶対の権力の下に統率の取れた集団の方が、はるかに機能的であると。

上が考え、下は実行する。騎士団の管理側と実行側のラインを明確にしようとしていた。

——実行側に頭は必要ない。体が動けば十分だ

彼女の口癖であった。当然、その頂点に立つべくは自分であり、そのために今までやってきた。

アルマもそれに似た考えを持っていた。権力こそが、敵を含む多数を従える絶対的な力であると。彼女は窓際へ歩み寄り、再度イドウヴァへ話しかけた。

「お気持ちは心得ているつもりです。しかし、既に結果が出てしまった以上、もう今回の結果に固執するより先を見据えるべきではないでしょうか？」

あくまで正論で話を先へ進めようとするアルマは血が通っていないのかと思うほど冷然に映る。しかし、引きずっても何も始まらない。もう団長たちは新たな出発を切っているのだ。後れを取るわけにはいかない。

「分かっています。これからどのような施策を講じるか。今それに悩んでいるのです。あんな小娘に騎士団を任せておいたら、いずれ崩壊してしまいます」

イドウヴァは窓のガラスが割れるのではないかと思うほどに強く拳を叩きつけた。無能な人間まで、有能な人間と同じラインに立たせたら足手まといになる事は自明の理。 “無能な” 人間は、有能な人間の指示通りに動く能力さえあればそれで十分。それも分ならず平等

平等と麗句を並べるだけの団長に、誰が信頼を置けるものだろうか。

アルマはイドウヴァの咆哮へ素直に頷いた。戦いには負けた。だが、あくまでこの時点で負けただけだ。この古狐はともかく、自分の場合は次は勝てばいいだけ。勝つまでは、負けるつもりはない。その為にも早く次の舞台へ移りたかった。

「その通りです。私も予てからそう感じておりました。そこで私に一つ愚策があるのですが、お耳に通していただけないでしょうか？」

窓の外を見ていたイドウヴァは、副将の声に静かに振り向いてアルマの口へ耳を寄せた。彼女の口が再び動き出して暫くすると、曇っていたイドウヴァの顔に、再びあの不敵な笑みが戻る。

「貴女はなかなかの策士ですね。しかし、もし失敗すれば、貴女は勿論のこと、私にも飛び火する可能性があるわけですがそこは大丈夫なのですか？」

毎度毎度、よくもまあそんな事を思いつくものだどアルマには感心してしまふ。今もポーカーフェイスに計略を溶かし込みじつと見据える赤の瞳は、責任をちらつかされてもまるでびくともしない。

「ご安心ください。部隊長とは師弟の関係を絶つたということにしておきます。部隊長も私を破門したと言う事にしていただければ、部隊長へ影響する事はないでしょう」

新たな一步を踏み出したのは、団長だけではないようである。

「では貴女にこの案件は任せます。私は幸せですよ。あなたのような有能で働き者の部下を持ってね」

二人はがっちり握手を交わす。天馬騎士団を、そしてイリアの騎士団を統べるべく。

## 第6章 理想と孤独

### 第1話 暗躍の太刀

—エレブ新暦1000年 8月

日の沈んだエデッサの城下町。店先には蠟燭の明かりが灯り、その灯に呼び寄せられるように人々が中へと消えていく。酒に酔うもの、袋をいくつも抱える者、様々な者が北へ南へ自由に歩き回って賑やかなのはイリアも夏だからか。城下町らしい夜が始まった。極寒のイリアも、ここだけは人々の活気に寒気が吹き飛んでいく。

繁華街と言える唯一の街の中を、インバネスコートを着込んだ黒づくめの紳士が、そんな明かりを嫌うかのように歩いていく。手にした刀を大事そうにコートの中に潜めながら、深く被った帽子から見えない視線は何も映していないかのように表情がない。無言、ただ無言に歩き、立派なバルボは一切動かない。

彼は繁華街とは少し離れたところまでやってきた。着こんだ黒が灯を失った暗闇に溶ける。誰かと待ち合わせをしているのか、傍にあったベンチに腰掛けた彼は、外套のポケットから静かに葉巻を取り出した。葉巻は彼が口にくわえた瞬間、火花が飛んで一筋の煙が上がる。たまには落ち着いて一服したいものだが、いつもこうして着火するのではいくら好意とは言え趣に欠ける。

煙が螺旋を描き、座っている彼の前に渦巻いていく。何でもショーとして扱って欲しくないのだが「遅かったな、ウエスカー」声を掛けても姿を現さない。紳士が葉巻を口から離し、出来た螺旋の形を一息吹いて壊したその瞬間だった。突如螺旋の輪の中に男が現われ、紳士の前に膝を突く。

その男、ウエスカーも頭に帽子を被り黒いスーツに身を包んでいる。人々の前から気配を消さんとばかりの二人。ただ違うのは、彼は帽子を浅く被って顔を隠していないというだけ。紳士の顔は帽子の下に隠れて全く見えなかった。

「先程からお待ちしておりましたが、周囲への警戒には念を入れてお



こうと思ひまして」

そこまでレベルの高い者は居ないようだが、万が一が許されない仕事なので自然と警戒は厳しくなる。見つかったら見つかったで、適当に始末すればいいだけなのだが、あまりやるとマスターが怒るので仕方がない。

「ふっ、お前の念の入れようは周到を通り越して殺意すら感じるな」

氷のように動かない紳士とは対照的に、ウエスカーは柔和な笑みを浮かべながら高めの声ですつと頭を下げる。

「お褒めいただき光栄です」

その仕草はとても丁寧だが、その丁寧さが逆に挑発的とすら映る。その細い目を紳士はじつと帽子の下から見上げていた。何も切り出してこないあたり、今日はどうやらいい話を聞けそうにない。

葉巻の先の赤だけが闇夜の中に揺れ、赤にはすぐ蛾が集まってきた。ウエスカーは紳士が葉巻を吸い終わるのを、魔道書を見ながらじつと待つ。しばらく静かな時間が二人の間を流れていたが、葉巻を手に取り大きく吐き出した紳士の口元が不意に緩む。

「ところでウエスカー。毎度思うことだが、葉巻に火をつけてくれるのはありがたいが、魔法でやるのは止してくれ。いつお前を敵と勘違いして斬り殺すか分からんぞ」

葉巻を吸いつつ、紳士は口元を再び無に固めて立ち上がる。深くお辞儀するウエスカーの体は笑いに揺れていた。ペルソナでもつけているかのように彼は笑顔を絶やささない。人々へ死を運ぶ笑顔を。

「例の件はどうなった」

郊外へ向けて歩き出した紳士は、見事な顎髭に手をやるとウエスカーを呼び寄せた本題を振った。この先の歴史を歪ませていく、あの者を消せと命じてあったはずだ。だが、すぐにご機嫌な声が返ってこないとは珍しく、その場に生まれた無音が全てを悟らせた。紳士の視線を帽子越しに感じたか、ウエスカーは切り出しにくそうに被っていた帽子を更に深く被りなおす。

「その件についてなのですが、残念な報告をしなくてはなりません」

聞かずともある程度は理解していた。こちらから問わずとも饒舌

に語るだろう柔らかな笑みが今日は妙に大人しかったと思つたら、案の定だ。

「……失敗したのか？」

紳士の左目の眼帯から、鋭い視線をウエスカーは感じとつた。失敗が許されない仕事における失敗……それは死。死して屍残すまじ……あのアサシンはこの指先で消してきたばかりだ。

「はい。射手によれば仲間がいたらしく、その者に気付かれたようです」

紳士はその報告に声を荒げるわけでも、狼狽する様子も見せない。それどころか軽く口元で笑うと、そのまま黙つて歩いていく。

「あの闇夜で勘付かれるとは、私としても迂闊でした」

他でもないウエスカーの口から出る迂闊などという言葉を耳にしたのは初めてであつた。ただ事ではないことが起きたという事か。少しだけ興味がある。紳士は自分より長身のウエスカーを、帽子越しに見上げた。

「お前にしては珍しい。流石は国を守る騎士団……いや、金目当てに慣れている戦闘集団というだけはあるか？」

皮肉も混じつた口調で敵へ賛辞を送り、ウエスカーも一層の笑みを顔中に貼り付けた。そんな言い訳ができるような作戦を執つたつもりはない。入念に練り上げた作戦の更の上に上を行つたという事だ。

面白い、実に面白いではないか。そう来なくては面白くない。あつさり片付いてしまつては、自分が出る幕が無い。この手で興すシヨウの時間くらいあつても悪くない。失敗したにもかかわらず、ウエスカーの口調は嬉しげだ。

「いえ、いくら戦闘慣れしているとは言え指折りの射手を送り込みましたから、その存在に気付くとなればよほど鍛練された人間でしょう。我が組織に欲しいくらいの腕前です」

紳士はふつと笑いを声に出す。彼はコートの懐に隠していた刀を体の前にかざすと、親指で柄を押し、刀身を睨みつけた。その眼からは、何とも言えぬ威圧の気を部下であるウエスカーですら感じる。この目に、この刀に触れられたら、さすがに自分でも“死ぬ”かもしれ

ない。

刀は月明かりの前で妖艶な輝きを放ち、主人に請う。

——早く誰かを斬らせてくれ

剣が血を求めている。凍てつく蒼白の刀身が透き通るほど月光を映す。果たしてこの剣が抜かれるほどの使い手がこの世界にいるだろうか。あの者を斬る剣を握るほどまで階を登って来る者が。

「悠長な事は言っておれんぞ。あいつは必ず消さねばならん。奴を消すことが災厄の芽を摘むことになる」

言い終わるや否や、周りを飛び交う蛾へ浴びせられた剣。まるで時が止まったかのように、その場で刻まれて落ちていく。これでは足りぬと言わんばかりに怪しく光を放る刀は蒼白い。刀には申し訳ないが、自分では求めるものは斬らせてやれない。それが組織の掟だ。

「殺せ。時を計り、一瞬でな」

「はい、是非そうさせていただきます」

ウエスカーは紳士に向かって再度頭を下げたが、彼はウエスカーの頭を笑って上げさせ、不満そうな剣を鞘に収めると再び懐へ忍ばせた。どうにも血の気が多いものばかりが周りにいて困る。この仕事は、この世界の者には気づかれてはまずいと言うのに。

「まあいい。楽しみは後に取っておけ」

ウエスカーは無言で肩を揺らす。その顔は、いつもどおりの優しそうな笑顔だ。またショーを興す気を満々に湛えるその狂気を、呆れ交じりに再びふつと声に出して笑って見せた紳士は、新しい葉巻を取り出すと口にくわえて夜空を見上げた。その先にあるのは、天馬騎士団の本拠地、カルラエ城。

ウエスカー相手に偶然などない。この閃電の魔術師の作戦を見事退けた者……興味が湧く。一度会ってみるのも悪くはない。どの道、この妖刀をこの世界で振るう事は許されていない。

この世界の歴史は、この世界の者が刻むもの。許されるのは、その背中を押す事だけ。見つけなければならぬのだ。あの歴史へと誘う暗黒の血を手にした者を斬り、また別の歴史へと未来を切り拓く黎明なる剣を握る者を。

「ウエスカー、マッチは持っておらんのか。やはり魔法、おまけに雷撃の火花では葉巻には合わん。お前の魔法は人を打ってこそだろう」

再び跳ねた火花に紳士は呆れるが、ウエスカーは今日一番の笑みを返してきた。ようやく、ようやく認めてくれるというのか？ この世界で、この閃電を迸らせることを許可してくれるのだろうか。不敵に吊り上がる口元からは喜びが零れる。人を打ち、焼き焦がす快感に酔いしれる狂喜を。

「おお、何と恐ろしい事を仰るのですか。マスター」

闇夜の中で、紅に光る黒い眼差しが揺れた。確実にターゲットを追い詰め、死へ至らしめる。その魔の眼差しは、葉巻の火も、月のおぼろ明かりをも飲み込んで、郊外の闇の中に溶けて見えなくなってしまう。いつかまた、必ず出会う……その含みをしっかりと口元に残して。

## 第2話 来訪者

団長選出戦から一週間経ったある日、今日もテイトは忙しそうに部下に指示を出していた。色々な案件の承認処理に、第一部隊の営業に、そして部下の育成に。団長に再選してからますます踏み出す足に力を込めているからか、朝からフル回転しないとあれもこれも追いつかない。

ようやく一通りの指示を終えてふうつと大きく息を吐きながら額を拭っていると、張り詰めた気を崩してくるような緩い声が聞こえてきた。郵便関係を担当している子だ。

「だんちよー。いつもどおり机の上に置いておきますねえ〜」

やや抜けた感じのある声で、テイトに郵便が届いたことを知らせる。今日は一体どこからだろう。部下への指示を終わらせるとテイトはすぐに部屋に戻って行った。向こうではまた抜けた感じの声が聞こえている。

「あれ、団長この頃どうしたんだろ。前は郵便なんか後回しだったのに」

団長宛の手紙は誰から……よりも、どれだけあるかとうんざりするくらい毎日届く。その大半は仕事上の形式的なものなのでたいてい後回しにされがちなのに、すっ飛んでいった団長の後姿を部下達は不思議そうに見ていた。

部屋に戻ったテイトは整理もされずに積まれた大量の郵便群を漁り始めた。届いたものの大半は雇用先からの手紙で、やっぱりどれも読むに足らない形式だけのもの。いくらテイトでもいちいち目を通してはいられない。

机の上がぐちゃぐちゃになっていくのも気にせず、彼女はどんどん手紙の山を掘っていく。今日は無いのか？ これだけ掘ってないなら、もう今日はダメなのかもしれない……そんな不安な顔がある差出人の名前を見つけたとき、凜とした団長の顔に嬉しそうな笑顔が咲く。

封筒を開封し、中身を持って窓際へ歩いていく。内容を小さく笑い

ながら読んだあと、彼女は窓の外から見える西の山々を見渡した。

「あの方も苦労しているんだわ。私も頑張らなくちゃ。でも、やつぱりお会いしたいわ……。お会いして直接声を聞きたい。今頃どうしているのかしら」

手紙を握り締めたまま、彼女は山々の更に向こうを思い描いていた。いつでも冷静だが大きく包んでくれるような優しきは信頼を越えて敬愛を抱き、羨望の眼差しを送っていたあの頃。会えるならば、今すぐにでも会いたい相手だった。



同時刻、十八部隊にウツデイが訪れていた。今日こそはとつちめてやると彼には珍しく、わなわなした様子だ。早歩きで十八部隊に近づき、目的の人物の姿を探す……。探すまでも無かった。あの明るい声が隠れようとしたってそうはいかない。

「シャニーー！ 見つけたぞー！」

彼はターゲットを見つけるとや否や早歩きから小走りに変えて、仲間と井戸端会議を開くシャニーの許へ駆け寄っていく。何かが迫ってくることを感じ取ったシャニーは、反射的に体が走り出すが、仲間との雑談に集中していた体では時既に遅し。彼女はウツデイの腕に首を挟まれてバタバタと足掻き始めた。

「いたたたっ。もう！ 何すんのよー！」

シャニーはとっさに体を翻し、縄抜けでもするかのようにウツデイの腕から体を抜く。再度捕まえようとするウツデイに、彼女は必殺の一撃を加えた。

「!! ……うお……」

全身に電撃でも走ったのような一撃はすぐにジンジンと股間からせり上がってきて、痛みを越えた衝撃が脳天を貫いて崩れた。目の前には思い切り舌を出す悪魔が映る。

「へーんだ。急所ぐらい知ってるもんね」

その場にへたり込むウツデイからは苦悶の唸り声が聞こえる。周りの仲間達も、そのあまりにえげつない攻撃に苦笑いをするほかな

い。暫くの緊張状態が続いた後、ウツデイは再び立ち上がった。

「ふう……死ぬかと。シャニーいきなり攻撃は酷いよ」

「仕掛けてきたのはウツデイじゃん！ ものすごい形相で追っかけてきてさ、あたしが何をしたって言うの？」

「何もしてないよー」

ウツデイは言うてから、シャニーが悪いことをしたのでここに来た事を思い出した。あれだけわなわなしていたはずなのに、今の一撃で全部脳天から飛び出して行ってしまったかのようだ。

「じゃあ何で追っかけてくるのよー」

「逃げるからだろ！ ああ、お前と話していると調子が狂う。本題に入るぞ」

ウツデイはやや強引にシャニーへ傾きかけた流れを引き戻す。彼は手に持っていたたくさんの資料の中から一枚の紙を取り出すと、シャニーに向けて突きつけた。

やつつけ仕事をしました候の汚い字で数字が色々書いてあるわ、紅茶のシミらしきものが紙の下半分を覆っているわ、扱いが雑な紙はしわしわ。シャニーは最初こそこの紙が何なのか分からなかったが、そのシミが頭の回路を繋げた。その紙は、シャニーが担当している部隊の予算管理用紙。憂鬱だったあの時の記憶が蘇る。

——数日前

「さあて、今日の任務も終わった終わった！ 帰りに皆と街に繰り出さうかな」

シャニーが一日の任務を終え、帰る支度に取り掛かっていたそのとき、何者かにいきなり後ろから肩を叩かれた。そのまま走って逃げ帰ろうとかと思っただが、後ろからの視線に串刺しにされ、身動きが取れなくなってしまう。「あのさあ、これやっといういて」レイサから渡された紙を黙って手に取り、そのまま机に座った。

「せっかくの自由時間があ……とほほ」

渋々紙を表に向ける。その中身を見て更に幻滅した。嫌いな数字を扱う紙だったからだ。団長が姉という事で、少々経費に足が出ても

何とか丸め込めるだろうと短絡的な理由で任せられたこの業務。

だが姉はそんな性格ではなく、以前ミリアのクロスボウを買ってとんでもない予算オーバーをした時には山と始末書を書かされた。実際に金の管理は予想以上に難しく、ただでさえこういう頭を使う事は嫌いなシャニーにとっては地獄だった。

それなのにレイサはいつもこうして帰りがけに、おまけに締め切りギリギリに持ってくる。口を尖らせ鬼だ悪魔だと罵りながら、指を折って計算していく。提出期限に目をやると、……やっぱり今回も今日中。

「レイサさんめ……また机の中にしまいこんで忘れてたな」

泣く泣く皆からの遊びの誘いを断り、一人机に向かう。

計算を間違えた。急いで訂正しようと消しゴムに手を伸ばす、その瞬間だった。「あ!! やばっ!」手が愛用のマグカップに当り、カップが音を立てて倒れた。机一面に広がっていく茶色い液体。とつさに拾い上げようとするよりも早く、机に広がる魔の手は紙を包んでしまった。

「だー!!」

急いで拾い上げるも、もはや下半分は無情にも紅茶色に染まってしまっている。どうしてこうもツイていない時は不幸が重なるのか。廃雑紙を使い、焦って表面に残った紅茶を拭き取ると、自分は不幸な少女だと嘆きながら暖炉の前にかざす。

「あーあ、もうサイアク〜」

「思い出した? シャニーがやったヤツだよこれ」

ウツデイの声に、自分の世界に入っていたシャニーははつと我に返る。彼に紙を突きつけられても、どうして良いか分からない。

「うん、思い出した。でさ、これがどうかしたの?」

シャニーの反応に呆れながらも、ウツデイは紙面の数字にペンを向けた。部隊の他の面子も寄って来て中身を覗くと、誰もが渋い顔をし始める。

「うわ、なにこれ。数字メツチャクチャツスよ」



ミリアがあげた声で、ようやくシャニーはウツデイが申請用紙の記入ミスで自分を咎めに来たのだということが分かったようだが、舌を出しながら苦笑いするだけでまるで反省している様子はない。

「まあ……いつものことじゃない？」

紙に紅茶をこぼしてそれを字が書けるほどまで乾かし終わると、時間はかなり遅くなってしまっていた。嫌いな仕事ということもあつてかなりのやつつけ仕事で済ませた覚えがある。

「そういつものこと……。ってそれで済まさないですよ！」

「ウツデイさん、シャニーに期待するの、無駄」

いつもはたいてい、ウツデイが計算しなおしてくれるのだが今回はとうとうダメらしい。彼の怒りにレンがフォローしてくれるがまるでフォローになっていない。それどころか後ろから刺されたような気分だ。

「どう計算したらこんな数字になるんだよ」

「え?? ちょっと待ってよ。えーと……四百が5本だから……えーと」

指を折って計算を始める。前にも噂では聞いた事があつたが、それを目の当たりにしてウツデイは呆然とするばかり。十八部隊の面々は見慣れた光景なのかシャニーが再び間違える様子を指さして笑っている。

「もう、何やってんだよ。460G<sup>ゴールド</sup>の槍が5本だから2300Gだろ? ほら」

ウツデイは懐から何やら珍しい品を取り出すと、すぐに再計算して見せた。面白そうなおもちやが目の前でシャカシャカ音を立てるの  
で、シャニーの目が爛々としている。

「わー、それすごいじゃん。なにそれ」

「これはサカ伝来の計算機、この珠を弾いて計算するんだ。この下の  
が一、上の奴が十を表しているんだ」

目の前で動く珠にシャニーも、周りの連中も興味津々。もう叱られている事など頭から忘れられていた。

「シャニーもこれを使って計算しなよ。シャニーの計算はまるで暗号

だよ」

「シャニーは何も言い返せず、頭の裏を搔いて苦笑いをして誤魔化そうとする。周りの面子も、彼女の計算の凄まじさは自他共に認めるところだったので笑うしかない。」

「もう、笑い事じゃないだろ？」

「騎士になるから勉強なんて出来なかつたっていいんだー」とか言つて、寺子屋で居眠りばつかしてるからこうなつちやうんだぞ？」

「あはは……ほら、寺子屋のセンサーが言つてたじゃん？ 寝る子は育つて！」

「シャニーはとつきに出た諺で回避しようとするが、こういった分野でウツデイに敵うはずはなかった。」

「先生はこうも言つてたよ？ 過ぎたるは及ばざるが如し」  
「ぐ……」

「重い一撃を受けて、シャニーは反撃が出来なくて口がへの字に曲がった。黙り込む彼女へウツデイは彼らしくない得意げな笑顔を彼女に送る。その笑顔が、シャニーの反撃の気力を一層奪った。  
(くっそー、こんなときだけ得意顔しちゃつてさー！)」

「口に出せば二言も三言も、自分が言い返せないような言葉で反撃されるのが目に見えるので反論も出来ない。悔しいが今回はこれぐらいにしておいてやろうと思う。」

「うー。用はそれだけ？」

「うん、これだけ。今度からはしつかりやつてよ？」

「はい」

「シャニーは聞いているのかいないのか。ウツデイからもらつた計算機を上下に振つて、珠でジャラジャラと音を立てて遊んでいる。」

「あ、そうだ」それを見たウツデイは何かを閃いた。

「へ？」

「時間のあるときに計算ぐらいは教えてあげるよ」

「ウツデイの口から出た台詞に、シャニーは猛反発して首をブルンブルン振り出した。やっと勉強という地獄の苦しみから解放されたのだ。その悪夢へ再び引きずり込もうとする親友を、凄まじい形相で睨

みつける。

「勉強だつてえ!? 冗談じゃない!」

「でも、君はもつと知らないといけないことがあるって言ってたじゃないか。国を支える為には、こういった基礎的なことができないとダメだと思うんだ」

ぐうの音も出ないことをさらつと言われて眉が歪む。勉強は別だと言いたいところだが、ウツデイには何を言っても勝てない気もする。何とか反撃しようと視線をきよろきよろさせていたら止めの一撃をもらつた。

「どーせ暇だろ? 昼寝をする暇があつたら教養を身につけたほうがいいと思うよ」

ウツと顔が歪む。凶星を突かれているような気がしてならなかった。大きな夢ばかりに目が行つて、その基礎となる部分を今まで疎かにしてきた。それを姉に見破られたから自分は新人部隊にいる。そして、親友も同じことを言う。

「暇だろつて言うのが何か癪に障るけど……。はあ……。勉強かあ」

「まあそう言わずにさ。どーせシャニーなんか帰つたら寝るだけなんだし、仕事終つたら迎えに行くからさ」

「暇だ暇だつて言うな!」

一体ウツデイは人の仕事を何だと思つているのか。シャニーがとうとう怒りを爆発させるが、爆発してもちつとも怖くなかった。ウツデイにとっては、彼女の性格など分かりきつたもの。膨れて下から睨みつけるポーズをとるシャニーの頬を突く。

「ごめんつて。お詫びに幼馴染の好で、レッスン料はタダにしてあげるからさ」

「ちよつと! あたしからお金を取るつもりだつたわけ?」

「冗談だよ。久々にゆつくり話もしたいし、早速今日の夜迎えに行くよ」

資料をしまい、その足で研究室へと戻つて行くウツデイの背中に手を振る。彼は本当に優しい奴だ。本職の医師としての仕事以外に、天馬騎士団の経理などの事務仕事も彼はある程度引き受けているから、

彼のほうが明らかに激務に追われているはずだ。

ただでさえ、医学の発展の為の研究も貴族からの援助を基に行っているから、結果を出さなければ肩身の狭い思いをすることになる立場で時間がいくらあっても足りないはず。

(あいつ、イイ奴だなあ)

シャニーは向こうで転んで、資料を慌てふためいて拾い上げるウツデイを心配そうに眺める。そこに手が伸びてきたかと思ったら、突然頬を強く引っ張りだした。

「あ、いたたた……！」

シャニーは抵抗する術もなく、その力のほうへ顔を向ける。視線の先にいたのは仲間達。しかし、いつもと何か様子が違う。

「……どしたの？」

「幼馴染の好で特別に、だつてさ！」

状況が良く飲み込めなくてぼかんとする。何でみんな敵を見るみたいに目がこんなに据わっているのだろうか？　なんだか嫌な予感があるが、とりあえず質問に答えてみる。

「あつたり前じゃん。あたしがいなきやごはんだつてろくに作れないくせにお金をせびろうなんてさ」

開放されるかと思つたのに、何だかさつきよりさらに周りの視線が鋭く突き刺さってくるようで、この場にはいけない気さえしてきた。それが気のせいではないらしく、ミリアが胸ぐらを掴む勢いで突っ込んできた。

「えー!?　ウツデイさんのご飯作つてあげてるんスか?!」

「だつて、あいつ一人じゃなーんも出来ないんだもん。一人分作るのも二人分作るのも変わんないし」

道理で頭が上がらないわけだ。しかしシャニーも少し疲れたとか、体の具合がちよつとでも悪くなるとすぐさま「名医」に優先して診てもらえるため、まんざら悪い話でもなかった。

なにより、昔からずっと一緒にいた気心の知れた相手なので、ご飯も一緒に食べた方が楽しかった。夜遅く家に帰っても、誰もおかえりと言ってくれる人がいないのは寂しいし、どこか虚しい。

「へー……」

これで分かったかと周りを見たシャニーだったが口元が引きつる。周りの空気が更に変わったことを敏感に感じ取った。その変化は残念ながら、彼女にとっていい雰囲気ではないようである。よく見れば、明らかにもの言いたげな横目で皆が視線を送ってくる。

「な、なによ……今度は……」

「ラブラブなんだねー!」

はき捨てるようなその台詞に、頭に血が昇って倒れそうになった。

(ウツデイとあたしが……ラブラブ……!?)

とんでもない誤解を受けていることをようやく理解する。そういえば、他の面子が天馬騎士団では希少価値の高い、男であるウツデイを狙っている事は予てから知っていた。

「ちよ、ちよっと待ってよ。なんでそうなるのよ!」

これはさっさと誤解を解いておかないと大変なことになりそうだ。ミリアという大の噂好きがいるから、下手をしたら騎士団中に広がってしまう。もしそうなったら今度は騎士団中が敵だらけだ。何故か分からないがウツデイは男と言うだけでアイドルなのだ。でもやはり、多勢に無勢だった。砲門の数が明らかに違いすぎる。

「幼馴染で、あれだけ仲が良くて、おまけに夜一緒にご飯食べてるとか。そこまでやって何の関係もないって言うわけ? そんなものが通用するもんか!」

じわじわと追い詰められる。なんで、善意でご飯を作ってあげていたことを非難されるのか理解できない。自分たち幼馴染の関係を知っているルシヤナに救いの眼差しを送ってみるが、案の定彼女はこの状況を楽しむように外から笑っている。

(くそー、ルシヤナのヤツ!)

昼休憩の時にどんな文句を言ってやろうかと睨もうにも、周りからの攻撃でそれどころではない。

「分かったよー! そんなに(ご)飯を作りたきやみんなが作ればいいじゃん! あたしだってそうすりゃもつと寝る時間が増えるんだし……」  
「そんな簡単に手放しちやっついていいのかな?」

皆から散々おもちゃにされる。シャニーもムキになるので、どうしても相手の思う壺だった。

「別にあたしは、ウツデイのことなんかタダで診てもらえるお医者さんとしか考えてないもん」

「……結構酷い事言うね……」

唾然とする隊員たちのもとへ、レイサが木から降りてきた。彼女はずっと様子を聞いていたようで向こうを見て指を差す。「あ！ ウツデイが転んだ！」部隊長の声にシャニーは慌ててそちらを向くが、ウツデイどころか誰もいない。良く考えてみればもうウツデイが去ってから10分ぐらい経っているのだから、そこら辺をうろついているわけはなかった。

再び視線を戻すと、そこにはニヤつく仲間や部隊長。

「やっぱり心配なんじゃない。可愛いねー！」

レイサが指を差してシャニーを笑う。ここでようやく、シャニーはからかわれた事に気づき、顔を膨らせた。

「別に心配なんかしてないよ！ バカなヤツだなんて思っただけで……！」

必死に弁解するシャニーを皆が一層面白おかしく囃し立てた。意地悪そうな笑みを浮かべる仲間達の間を割って、レイサがシャニーに近寄り耳に口を近づけた。

「あいつは結構人気だからねえ……」

「だから何よ」

「うかうかしているととられちゃうよ？ 幼馴染の関係をフルに使っていかないかね」

それにすかさず反論しようとするシャニーの口を押さえ、レイサが再び向こうを指差す。「あ、団長だ」今度は騙されまいと、レイサの手を口から払いのけると、大声で怒鳴った。

「お姉ちゃんなんかどうでもいいよ！ あたしで遊ぶのもいい加減にしてよ！ あたしとウツデイは……！」

「……どうでもいい姉で悪かったわね」

その聞き慣れた声に、シャニーは背筋の凍るような感覚に陥った。

後ろから感じるのは、明らかに怒りの炎で燃える感情。なのに背筋は凍り、足元はすくんで動けなかった。

「あ、あはは……お姉ちゃん、ホントにいたんだ。そ、その……てつきりまたレイサさんが冗談で言ったのかと思ってさ」

しどろもどろな弁解に、テイトは上目で空を仰いだ。彼女の言葉に悪意がない事は分かっているが、それでも妹にどうでも良いと言われると悲しいものだ。信頼できる人間の中でも、ひととき貴重な存在の一人であるだけに。

「もういいわ。どうせあなたのことだから、お昼ご飯のことで頭が一杯だったんでしょう?」

「ち、違うもん! ねえ! あたしとウツデイは別に幼馴染以外の何でも無いよね!」

テイトはシャニーが何を焦っているのか大方理解したようだ。彼女には珍しく、軽く声を上げて笑っている。その笑顔がレイサには何か嬉しかった。久々に見る団長の笑顔。理由は何であれ、シャニーはやはり人の心を明るくできる力があることをレイサは改めて知る。

「お姉ちゃんまで!」

「あなたがそう思っているなら別にそれでいいじゃない。何をそんなに焦っているの?」

どうとでも取れる答えを返してきて、何か姉まで周りの連中のグルに見えてくる。早くこの流れから脱出したいのだが、また煽るヤツが現れた。

「そうそう、大丈夫ツス。ウツデイさんにとってシャニー以上に相應しい女の子なんて山のようにいるツス。たとえばウチとか!」

「な!」

「怒る事ないじゃないツスカ? あの人のことなんか眼中にないんスよね?」

テイトに加勢してミリアもシャニーをからかう。面白いようにシャニーが引つかかるので、いつまでもそうしてしまいたいようだ。

「ミリアよりは私が」

「なにを! レンには渡さないからな!」

すでに別の争いが起き始めようとしている。テイトもここでもうまでも温かくて楽しい雰囲気になまされていた。他の部隊にはない、この独特の和やかな空気の中で。だが、使命感が彼女にそれを許さなかった。彼女は笑顔を無理矢理いつもの顔に戻すと、シャニーの肩に手を置いた。

「ちよつと話があるの。一緒に来てもらえないかしら」

そもそもの火をつけたレイサにはちきれんばかりの膨れ面で詰め寄っていたシャニーは姉の突然変わった口調にはつと後ろを向いた。姉の目付きを見て、即座に何かあると悟る。いつも硬い表情の姉だが、その硬さにも色々感情があることをシャニーは知っていた。未だにからかう仲間達に顔をしかめ、思い切り舌を出しながら姉についていく。

てつきり団長室に連れて行かれるのかと思っていたら、テイトは城内への入り口を通過し、厩舎から天馬を飛ばして城外に出て行く。

「ねえ、何処へ行くの？」

「ついてくれば分かるわ」

「もしかして、町でケーキでもおごってくれるの？ よつ、ふとつぱら！」

シャニーの願いを軽い笑顔で流すと、テイトはそのまま行き先を告げないまま先を急ぐ。話しかけようとするが、何か言葉が浮かんでこない。姉と一緒にいてこんなに間が持たないのは久しぶりだった。



### 第3話 守る者 支える者 (1)

姉の操る天馬の後ろからシャニーもついて行くこと10分あまり。一体どこに行くのだろうと興味半分、不安半分で姉の背を追っていると、ようやくテイトがスピードを緩めて高度を下ろし始めた。

どうやら目的地に到着したようだが、姉は来るところを間違えたのかと思った。もしかしたら忘れ物を取りに来たのだろうか。姉が降り立った場所が意外でシャニーはポカーンと口を空けて立ち尽くしている。

「どうしたの？ 寒いから早く中に入るわよ」

「う、うん……」

どうも忘れ物と言うわけではなさそうだ。いつもどおりの光景のはずなのだが、妙に緊張する。建屋の中に入ったシャニーは借りてきたネコののように、座らされた椅子で肩をすくめて喋りもせずじっといた。こんなところで、こんなことをしていて良いのだろうか？ 姉に対してそれはエリミーヌに説法か。

向こうでは鎧やマントを外した姉が暖炉に火を起こして湯を沸かしている。連れて来られた先は、朝に戸締りをして出てきた家。洗ったままの皿、干した時そのままの洗濯物、くしゃくしゃにまるめて椅子に放り出された寝間着……間違いなく家だ。

(任務時間中にこんなこととしていいのかな……。お姉ちゃん……。実はサボり魔だった?)

そんなことは姉に限ってないかとは思いつつ席を立つ。姉の動きはどのようにもお茶の入った缶を探している。

「お姉ちゃん、手伝うよ。あんまし整理してないし場所分かんないでしょっ。」

戸棚からさつと茶葉の入った缶を取り出したら、姉はそれと指さしてきた。子供のころからこの缶は変えていないから、二人にとってはお茶と言ったらこれだ。

「いいわ、たまには私もこういうことしなくちゃね」

シャニーは毎日帰宅してここで生活をしていても、多忙すぎてテイ

トは城に寝泊りしているから彼女にとっては久しぶりの帰宅であり、何もかもが懐かしかった。こんな毎日お世話になっていた物の置き場まで忘れていることに少しショックさえ覚える。

「……それにしても、ホント汚いわね」

懐かしさにあちこちを眺めていると思いついたかのように目につく室内の乱雑さ。シャニーは全身の毛が逆立ちそうになった。嫌な予感を爆発させるフレーズ。だからあれこれ触って欲しくなかったのに。すでに姉は椅子の上の丸められた寝間着を手にとって畳み始めている。

「私の居ない間、ちゃんと掃除してたの？ 収納に無理矢理押し込んだりしてないわよね？ まさかその年になってまでそんなことはしてないと思うけど」

ぎくつと肩が跳ね上がりそうになるが何とか堪える。姉と比較されては堪らないが、自分だって時間内の任務にそこから自主稽古をしたりして帰宅が22時を過ぎることは珍しくない。そこから炊事にバスタイムに洗濯をしていたら掃除なんてする時間はない。

「あはは……まさかあたしでもそこまでは……って、待って待って！」  
何とか誤魔化そうとしたが勘付かれた。テイトは居間へドシドシと早足で突入すると、わき目も振らずに収納の戸に手をかける。

追いついたときにはもはや手遅れ。シャニーはその光景を見ることが出来なくて目を瞑った。しかし健康な彼女の体は、いくら目を瞑っても耳から惨状を伝えてくる。聞こえる雪崩の音と、姉の悲鳴。とんでもないことになった。

「あはは……戦場では気を抜いちゃダメだよ、お姉ちゃん……」  
「……！」

雪崩の中に見える姉の頭からは、明らかな怒りのオーラが滲み出ている。何とか姉を掘り起こし部屋の外へ引つ張り出してふっと一息。

テイトにとつては何故、実家の中を移動することですら緊張感を持たなければいけないのか理解が出来なかった。シャニーの大雑把は昔から変わらない。剣の事になるとあれだけ熱心になれるのに、どうして身の回りのことがこれだけ雑なのかテイトにはさっぱりだ。

「もう！ あなたという人は！ どうせ帰ってきて掃除もせずに寝ているんでしよう！」

予想通り、姉からの説教を受ける。久々の説教なので、シャニーも反論せずに大人しく聞いていた。自分としてはどこに物が置いてあるか分かっているから、別にそんなキチツとしていなくていいと思うのだが、今姉にそれを言ったところで生える角が増えるだけだ。

「まったく。こんなことじゃ任せられそうにないわ……」

姉は一体、家に呼び寄せて何をさせようというのだろうか。説教を別の話題にすり替えるついでに訊いてみた。

「ところでさ、今日は何の用があったの？」

また結構な時間説教をしていたことにテイトは気付き、慌てふためいて台所へ戻っていった。どうやらヤカンを火にかけてっぱなしでこちらに来たようだ

(はー、助かった)

今晚居候にでも片づけを任せるつもりで、シャニーは再び雪崩を収納に押し込む。説教はされたが家族のいる実家が楽しくて仕方なかった。少し前まで当たり前だったし、家に帰ればいつでも姉二人からおかえりと返してもらえた。今は家に帰っても誰もおかえりと返してくれなくて切なくなる事も多く、同じ独り暮らしのミリアと互いの家に泊まることも少なくなる。時間が止まってくれればと願いながら、彼女は姉の後を追った。

何か手伝おうと思ったシャニーだが、やはり姉は自分でやらないと気が済まないらしい。こういう頑固なところも昔から変わっていない。何か心が安らぐ。この頃仕事ばかりで、ろくに家族と話したことなどない。任務時間中ではあるところがひっかかるが、今日は久々にゆっくり出来そうだ。姉は紅茶を入れると、焼き菓子添えて持ってきた。

「さ、どうぞ」

「わー、クレープ。さすがお姉ちゃん」

姉が焼いてくれるクレープの味を忘れるわけがない。目を爛々とさせるシャニーにテイトの顔が綻ぶ。

「ふふ、さて、紅茶を飲みながらまたゆっくりお話ししましょうか」

ユーノと話した時のようにならないよう、テイトは時間に気をつけて雑談を楽しむはずだった。注意はしていたのだが、それでもやはり日ごろ溜まっているせいか、そのうち時間を忘れて楽しすぎる時間を過ごしてしまう。

数年前なら、当たり前前のようにあった家族との団らん。だが、姉はすでに嫁ぎ、自分も団長として家に帰れない日が続く。そして、妹もこれから本格的に天馬騎士としての仕事をこなしてもらわなければならない……。

ここまで回想をして慌てて時計に目をやると、既に3時間も経過していた。どうして、楽しい時間はこうも過ぎるのが早いのだろうか。

「でさー、ルシヤナつたらさー」

元気よく話す妹。この顔をいつまでも見ていたい。だが、もう時間がそれを許してくれそうになかった。早く騎士団を安定させて、また一緒に生活できるようにしたい。テイトはいつまでも楽しい時間に浸っていたい、そんな甘い心を戒めた。

「シヤニー。話は変わるけど、ちよつと相談があるの。いいかしら?」  
「うん、何?」

シヤニーは興味津々と言ったようでこちらを見ている。きつと、雑談の延長で何か面白い話を始めるのだろうかと思っているに違いない。そうテイトは不安がったが、素から人の考えていることに敏感なシヤニーには姉の考えている事は大抵分かる。もう何年と一緒に生活してきた。そして、幾度となく戦場で背中をお願いしてきた。わざわざプライベートルームに呼び寄せられた時点で、今回もきつと何か重要な話があることは察していた。団長室より、もっと二人きりになれる場所。そう考えれば、ここは最も適当な場所だ。

「……もう、イリアも夏が終わったわね。そろそろ厳しい冬を越す準備をしなくちゃね」

振られた話題に、シヤニーは予想が外れたと思った。冬支度についてとは、随分個人的な話。何か肩の力が抜ける気がする。その様子に気付いていないのか、テイトはそのまま話を続けている。

「この半年、あつという間だったわ。色々やってみたけど、どれもうまく効果が挙がらなくてやきもきして……」

ティトは疲れている。そうシャニーは思った。精神的に疲労が蓄積していることが、その顔から伝わってくる。以前にも感じたことがあるが、そのときより更に色濃い。ケセラセラな自分とは違い、姉は何でもやりきらないと済まない人である事はシャニーも知っている。他人からは、努力家なところが姉妹で似ているとよく言われるが、シャニーには全然似ているとは思えなかった。

姉は周りの期待に何とかして応えようと、自分の限界を超えてしまう。周りには勤勉に見えるかもしれないが、彼女自身をボロボロに疲れさせる原因でもあった。

「でも、弱音は吐いていられないわ。皆が、私の事を認めてくれたのだから。期待に応えられるように頑張らないとね」

姉らしい言葉だと思った。いつも人の心配ばかりして自分の事を疎かにしがち。今回もどうやらそのようだ。

「ねえ、お姉ちゃん。悩み事があるなら何でも言つてよ」

昔からそう言ってきた。何とか姉の力になつてあげたい。そう願つて声を掛けてきたが、その都度姉からは同じような言葉が返ってきてしよんぼりしてきた。それでもやっぱりこんな顔を見たら見て見ぬ振りはできない。

「えっ？」

「あたし達、姉妹でしょ？ 上司と部下つて言う前に家族でしょ？」

妹の言葉に心が震える。自分さえ頑張れば……そんな考えが通用しない相手だった。いつも、妹には自分の心の内を読まれている。隠しているつもりだし、他人にはまずばれないのに、どうしてか妹だけには見破られる。今回もやはり、妹からは逃げられないと思った。

「……正直ね、何を言つても理解を示してくれないし、何をしても何も変わらないからちよつとだけ疲れちゃったのよ。行動を起こさずぐ変わるものではないという事は分かっているのだけどね」

思っていたことが的中してシャニーの眉が下を向く。姉が素直にこんな事を口にするのだ。その度合いは相当なものなのだろう。今

の疲れきった姉を救えるのは自分だけだと、勝手とは分かっているも自分に言い聞かせた。

「あたしき、お姉ちゃんを助けてあげたい。おかしいよ。イリアを良くするって目標は、イリアの共通の目標のはずでしょ？」

妹の素直な気遣いに、思わず熱くなる目頭。しかし、団長たる者がそう簡単に涙を、弱いところを見せるわけには行かない。テイトは凜然とした口調で、シャニーの質問に答える。

「そうよ。イリアを創っているのは騎士だけではない。イリアに生きるすべての者達が、手と手を取り合わなければ成功は難しい話。でも、リキアではそれを成し遂げている。リキアに出来て、イリアに出来ないなんて、そんな話はないわ。少なくとも私はそう信じてる」

ちよつとは成長できたのだろうか。自分の考えが姉の考えている事と同じ方を向いていて安心した。入団する前は、皆が戦わずに済む様に、自身が戦うのが役目だと思っていた。何か違和感を覚えながらも、それが騎士なのだと。だけど最近それは違うのではないかと考えることも少なくなかった。

「じゃあやつぱりおかしいよ。お姉ちゃんばかり疲れてき。お姉ちゃんの疲れた顔見て、もつとあたし達に出来る事、一杯あるんじゃないかなってこの頃良く考えるんだ」

疑問や想いを姉に、団長に聞いてもらいたかった。イリアの構成員の一人として。こんな時間は滅多にない。

ここまで自分が考えをしつかり持って、それを他の人に自信を持つて言えるようになるなんて。彼女自身が一番驚いていた。半年前の自分には、恐らく出来なかった事。それを可能にしたのも、姉が自分の事を考えて十八部隊に配属してくれたおかげ。十八部隊で色々な経験をして、豊富な時間を「考える事」へフルに活用できたからこそ、団長相手でもはつきりと自分の考えを口に出来るようになった。

これは姉への恩返しでもある。姉を、どうしても助けたい。「そんなことないわ。疲れているのは私だけじゃない」

相変わらず、疲れたところを見せようとしてくれない。もつと自分が頑張らないと。そう姉の顔は言っている。昔からいつもこうだ。

その都度しよんぼりしてきた。それを言って欲しくないから、助けたいからこう言っているのに。何か、本音を話してもらえないことが悔しい。これだけ長く互いを見せてきた間柄なのに、まだ姉は頼ってくれない。無力さが悔しくて、ふいに悲しみがせり上がる。

「お姉ちゃん……そんなにあたし達が信用できないの?」

妹の突然の泣声に、テイトは思わず狼狽してしまう。いつも元気一杯な彼女が泣いている。余程何か酷いことを言ってしまったのだろうとテイトは自分の言った事を思い出そうと必死になるが、やっぱり何も無いはずだった。

「え?! 何をいきなり言い出すのよ」

喧嘩をしても口を尖らせることはあれ、泣くような子ではなかった。なぜ泣いているのかすら分からなくて、どう慰めようにも困っていたらシャニーから溢れ出してきたのは怒りだった。

「……だってお姉ちゃんはあたし達にいつも隠し事をするんだもん! 今だって! ……あたし知ってるんだぞ。お姉ちゃんのスケジュール。毎日毎日やることで埋まって息つく暇もなさそう。なのに、なのにそれでも他人の心配ばかりでき。自分がやらなきや……納得できないの?」

「シャニー……」

自分を慕ってくれている第一部隊の面子に、今回団長の重責を託してくれた他部隊の皆。そういった人たちを信じなくては、仕事は出来るはずもない。だが、シャニーの言っている『信じる』は少しニュアンスが違うことがテイトには分かった。

「お姉ちゃん、自分さえ頑張ればいつでも言ってるでしょ? それがあたしや皆の負担を減らそうって考えなのは、前から分かってた。でも、少なくともあたしはそれじゃ嫌だよ」

妹に、自分の心の内を読まれているようだ。テイトのありすぎるほどの責任感。団長という最重責職への就任が更にそれを感化させた。願わずも、幹部クラスと四面楚歌の関係になってしまった彼女。その敵意を、自分の部下達には及ばせまいとなかなか仕事を回せずにした。

「私の管理のしかたのまずさで、貴女達にまで迷惑をかけるわけには行かないわ。当然のことよ。自分の失敗は、自らで処理をする。私はそれを実践しているだけ。あなたの望む、望まないではないと思うけど」

分かっていても、口から出るのは厳しい言葉であった。妹が何を嫌がっているのか、何となくは分かる。それを否定しなくてはならない自分が、なんとも不甲斐なかった。

だけどやっぱり、シャニーには受け入れられなかった。大好きな姉だから、心から信じられる人だから、支えたいし頼って欲しかった。それなのに、突き放された気がして真っ赤な気持ちが溢れだしてくる。

「あたしと、お姉ちゃんの絆ってこんな程度だったの？ もっとお姉ちゃんを支えたいのに。もっとイリアの為に動きたいのに。それなのにお姉ちゃんは……もう知らない！ お姉ちゃんのバカっ！」

言いたいことだけ怒鳴ると顔を背けてしまった。いつもこうだ。喧嘩になると、いつも最後は捨て台詞を吐いた。自分でも良くないと分かっているし、後からいつも幼かったと後悔する。けれど、やるせない気持ちがどうにも溢れ出してしまう。

甘えなのかもしれない。こうやってしまうと姉はいつもそれ以上を止めてしまう。その理由こそが、自分が救いたい姉の気持ちなのに、何をやっているんだろう……。

いつも通り、テイトは妹の我侷を前に焦ってしまっていた。

(少し言い過ぎたかしら)

今回も一瞬、これが頭をよぎった。だが、今回はなぜかそのまま妹の頭に手が行かない。妹がこんななっているのだ。少しくらい……甘えだろうか。でも、言い出したのは妹だ。いつも抑えてばかりだからちよつとくらい、相手が妹と言うこともあり感情に感情で返してみたくなかった。

「あなたに私の気持ちが分かるわけないわ！ いつもいつもそうやって黙々こねて。一人前の騎士のクセに恥ずかしいとは思わないの!？」  
いつもと違う姉の態度に、シャニーも少しドキツとした。だが、そ



れ以上にドキツとしたのはむしろタイトのほうだった。シャニーが折れるかと思つたら、さらに柳眉を吊り上げテーブルに手をついて身を乗り出してきた。突き向けられたのは真つ直ぐな怒り。悔しさに裂かれた心から炎の如く噴き出してくる怒りだった。

「分かるわけないよ！ 何が、イリア民一人ひとりが自覚しなきゃいけないよ！ あたし達もイリア民の一人として頑張ろうとしているのに、お姉ちゃんを助けようと思つているのに、それを拒絶してるのはお姉ちゃんじゃない！ 何で？ 何でさ！ どうしてそんなにあたし達の事を信じてくれないのさ！」

洪水のようにあふれ出してきた怒りがタイトを飲み込んで頭が真つ白になる。いつも朗らかな妹とは思えない顔が目の前にあって、懇願して叫ぶ目は真つ赤。妹がこんなになつて怒つているのを見るのは初めてな気がする。

「お姉ちゃんの言うイリアを一人ひとりが創るって言うのは、団長の命令を黙つて聞けつて言う事なの?!」

自分の感情に対して跳ね返つてきたシャニーの本音。今まで受けたこともないような鋭い衝撃。しかもそれが、まだまだ騎士として経験も浅く自分側の人間であると思つていた妹の口から出た言葉であつたから尚更だった。

何かパチンと弾けた気がして、気づけばタイトもテーブルを叩いていた。

「違うわ！ なんでそんな曲解するのよ！ いい加減にしなさい！」

こんなにも、感情と感情をぶつけ合つたのは姉妹の間柄でさえ初めての事だった。やってしまった気持ちと、どこか不思議な心地よさと。

戦い終わった部屋は、秒針が時を刻む音だけが鋭く部屋の中に響いていた。

## 第4話 守る者 支える者（2）

激しく感情同士をぶつけて戦い終わった部屋を包む沈黙。それから暫く、秒針が時を刻む音だけが鋭く部屋の中に響く。

こんな事は、長い姉妹喧嘩の歴史のなかでも初めての事。自分を主張して譲らず、周りの事を気にせず、外に聞こえるほどの怒鳴りあいをするほどに本音をぶつけ合った事は。

二人とも意見をぶつけた方がいいが、初めてのことでその後どうやって相手に話しかけようか困ってしまう。

お互いに下を向いて、ただ時間が過ぎるのに身を任せた。何とも気まずい。どうやって切り出そうかシャニーは俯いたまま唇を噛んで視線を左右させていた。何か、何か喋らないと。黙ったままでは何も動かない。

「ねえ……その」

ようやくに絞り出して先に声を上げた。その第一声を待ち望んでいたかのように、ティトが沈んでいた視線を妹へ向ける。「その……ごめんなさい」妹の申し訳なさそうな顔。ティトはそんな悲しそうな妹の顔を見たくなかった。

「……謝らないで。あなたは悪くないわ。本当の事を言っているだけだもの」

どうしてこれをもっと早く言ってやれなかったのだろう。そうしたら、目の前にある悲しそうな顔をさせなくて済んだはずなのに。

だけど、声を掛けたらシャニーの顔からこわばりが消えてきた気がする。

「でも、あたしはお姉ちゃんの気持ちも知らないで。あたしって、いつもこうだね。言ってから後悔するんだもん。あーあ、ホント進歩ないよなあ、あたしって。こんなんじゃないやお姉ちゃんの足手まといになるだけだよ」

喧嘩をして、暫くするとシャニーが謝る、いつものパターン。今回も、シャニーは言ってから後悔していた。

実質、姉がイリアの発展を阻害する存在だという意味になってし

まった。

誰よりもイリアの発展を願って、行動して心をすり減らしている姉に対してその言葉はあまりにも冷血。

自分が言われたら立ち直れるだろうか。疲れ果てた姉を支えるために、声をかけたはずなのに。

知らないうち、気付かないうちに、自分の言葉が何にも耐えがたい暴力になっている。しかもそれが一時の感情によるものであって、普段思いもしないこと。

いつもシャニーは後悔していた。普段は人の心を読む彼女だから、言葉を相手がどのように受け止めたかには敏感だ。それ故、喧嘩の後の対応にはいつも胸を痛めていた。

だが、テイトは体を妹の方へ乗り出してシャニーの自責を否定した。

「そんなことない！　あなたはイリアの為に本当に頑張ってくれているわ。確かに……私の信頼は、上辺だけの信頼で、真にその人を理解しているわけではないのかもしれない。だって、最も身近で、最も頼りにしているあなたのことですら、認識間違いをしていたのだから」

今、姉は何と言った？　最も頼りにしていると云わなかったか？

あの姉が……？

にわかには信じられなかった。今までずっと、叱られっぱなしだった。騎士団に入ってからさえも、あれこれ叱られ迷惑をかけてきた。そんな自分を姉は頼りにしていると云ったのだ。『最も』なんて飛び切りの言葉を添えて。

「え？」

「あなたはもう、私が思っているような、自信だけ一流の半人前天馬騎士じゃないってこと。第一部隊にも負けないぐらい立派な騎士だわ。これだけ、自分の考えを持って行動できているならね」

シャニーはテレを隠さなかった。姉が認めるという事は、他の誰からも認められたと同然に思えるほどテイトは他人に厳しい人だ。

それでも、認められた喜びより今はなぜか不安が先に立ってしまった。不思議だった。

「もつと人の心を大切に出来る人になりたい。それにもつと、イリアのことを知りたい。きつと、もつと人として成長して、お姉ちゃんの右腕になるんだ」

こんな事を妹が口にするとは思ってもいかなかった。妹の成長を身近で感じ、嬉しくてたまらない。自分の目標の一つである、これから創っていく新人の育成が目の前で結果となって現われているのだから。

今はどれだけ敵視されようとも、新人達が創っていく未来ではそれが当然になる。

人の認識は、長い時を経て初めて変わるもの。結果の見えない努力、それがどれだけ忍耐力の要るものか。

「その気持ちをも、いつでも忘れないでね」

テイトは満足げだった。疲れた顔の中に咲く心からの笑顔。

普段見る事の出来ない姉の笑顔に、シャニーも自然と心が軽くなり、いつもどおりの笑顔が彼女から零れると、テイトも元気が湧いてきた。妹の笑顔にいつも元氣付けられているような気がする。

「ところで、あなたは第一部隊に所属したいと言っていたわね」

急に出た第一部隊の名。もしかしてついに第一部隊へ配属してもらえるのだろうか。だが、何か心の中でそれに背を向ける自分があった。

「うーん、そうだったんだけど……」

「今のままじゃ不安？」

明朗な答えを口にしない妹だが、テイトにはすぐ理由が分かる。感情を隠せないシャニーの顔にははつきりと不安が浮かんでいる。

「うん。まだまだ、知らなきゃいけないこと一杯あると思うんだ。イリア内のことですらろくに知らないのに、第一部隊なんてお呼びじゃないよね。今考えると恥ずかしくって……」

髪の毛を手でくしゃくしゃにしなから視線を逸らす。

——今他国に行って売れるのは、イリアの恥だけ

この言葉を聞いた時、シャニーは相手が姉と言うことを忘れて飛び掛りそうになったが、あの時の自分に言いたい。その通り、当然だと。

イリア内のことすらろくに知らない。それ以前に、イリア騎士としての自覚すら無に等しいのに、最も騎士団の中でも重責を担う精鋭部隊に所属しても、出来る事は明白。

それも分からず、ベルン動乱で言われたとおりに動いた結果、ちよつとばかり功績を残したというだけでイリアを担つていくことが出来るなんて考えていた自分が情けなく思っていた。

「そうね。でも、今あなたはそうやって考えるようになったのでしょうか？ 成長した証拠じゃない。私は嬉しいわ。あなたがそうやって成長してくれて」

「そ、そう?」

今日の姉は一体どうしてしまったのだろうか。こんなに褒められたことは今まで無い気がする。妙に優しい気がして、何か変なものでも食べたのだろうか。

でも、今も見つめてくる眼差しは真剣で、そして優しい。

「いつまでも、初心を忘れずに常に考える気持ち、現状に疑問を抱く気持ちを忘れないで欲しい。でも、絶対に自信を忘れないで。あなたは新人とは言つても、叙任を受けたプロなのよ。これだけは絶対に他人に負けない、この任務のことなら私に任せろって程の気持ちを持って欲しいわ」

たくさん教えてもらった気がする。しばらくシヤニーは目を瞑つてひとつひとつ心の中で復唱していた。

「分かったよ。一生懸命に頑張ればいいんだよね?」

再び開いた瞳から返ってきた言葉はたったそれだけ。分からなければすぐ顔に出る彼女の瞳はまっすぐタイトを見つめている。

「……あなた風によえばそうなのかもしれないわね。でも、貴女は私が期待した以上に成長してくれているわ。流石に寝ることで吸収する事は早いわね」

「それほど!」

妹のいつもどおりの返事を期待していたが、いざ期待通りの言葉で返されると少しばかり呆れてしまう。

しかし、彼女は伝えておきたかった、自らの真意を。そのために、今

日は忙しい時間を割いて、妹を呼び出したのだから。

「ねえ、シャニー。貴女が半年で何を学んできたか、少し試させてもらうわ」

「え?? ……うん、任せて。どーんと来いつてんだ!」

妹の笑顔を見ると、自然と口元が優しくなれるのはなぜだろう。こうして笑顔を見せられるだけで、大丈夫なのだろうと思う。

だが、テイトはすぐに笑顔をいつもの引き締まった顔に戻すと、シャニーを見つめる。

「じゃあ聞いわ。イリア騎士が最もしなくてはならないことって……なんだと思う?」

難しい問題。答えは無数にある。

イリア騎士として最も何を考えて行動するべきなのか。テイトはこれを学んで欲しかった。

どんな事でも、ただやればいいというものは決していない。何か目的があつて初めて、仕事というものは発生する。その目的も知らずにただやるだけでは、仮に間違つた方向へ進んでも修正が出来ない。

シャニーはその質問に、暫く下を向いてずっと考えていた。半年学んできた事を頭の中で再現し、一つ一つ整理しなおしていく。そして、その結果編み出された答えは、すぐさま口から出て行つた。

「常に、イリアの事、イリアの人々の為に動く事」

「じゃあ、その為にはどうすればいいのかしら」

シャニーは唸りながら今度は上を向いて考え始めた。でも、既に一度整理しなおしたから今度は先程より考える時間は短かつた。

「どうすれば、イリアの人々が幸せに暮らせるかどんな時でも考える事、かな。うーん、なんて言えればいいんだろ」

こういう時、アルマみたいに簡潔にスパッとカッコよく言える人が羨ましい。言いたいことは頭の中に浮かんでいるのに、なかなかそれがうまく言葉に表現できなくてもどかしい。もう喋りながら整理することにした。

「レイサさんも言つてたことの受け売りになつちやうなだけどき、何かするときには、それがイリアの人々の為の行動なのか、自分の為の

行動なのか……ええと……そう！ イリアの礎となる為の行動なのか考え続ける事。それが大切なんじゃないかなあってこの頃は思うよ」

突然伸びてきた姉の手。とっさに身構える。何か自分は妙な事でも言ったのだろうか。人が言ったことをそのまま自分の考えとしていったことに問題があつたのだろうか。

そんな心配をよそに、団長の手はそのまま真っ直ぐシャニーの頭に乗り、そして優しく撫でた。

「あー、びつくりした」

「なんで？ 私が貴女を撫でることがそんなに驚く事？」

「そうじゃないけどさ……。お姉ちゃんが撫でてくれるなんて珍しいなあって」

テイトは妹の頭の上に載せていた手を軽く握って、頭に押し付けてやる。

「それは貴女が悪戯ばかりして、私に叱られてばかりだったからでしょう？ 人間きの悪い事を言わないの」

口では怒っているが顔は笑っていた。妹の成長に嬉しさを隠せない。剣術や槍術の成長だけに留まらない。それ以上に大切な、妹の中にあるイリア騎士としての心の成長を。

イリア騎士としてその根幹に最も求められるものは武術でも、戦場での勇敢さでもない。イリアの為に熟考し、イリアの為に死力を尽くすその姿勢であり、精神。

——イリア騎士は、自らの為ではなく、国のために戦わなくてはならない

世界中で有名になった、イリア騎士の誓い。一般には、国を支える為にイリア騎士は傭兵に出なくてならない。そう解釈されるこの誓い。

テイトも最初はそう捉えていたが、誓いの真意と比べてみると全くの正反対の解釈である事がベルン動乱を経て分かるようになった。

戦うということを経験場での名誉や報酬だけと捉える事は、イリア騎士として最もしてはならないこと。そうテイトは至った。

——イリア騎士は、イリアの礎たれ  
半年をかけて妹に継承された意志。確かめた姉の手はまた優しく  
頭を撫で始めた。



## 第5話 名誉の数字

シャニーへ家の片づけを命じたティトは、懐かしい場所に再び別れを告げた。

今までは全てが暫定だった。これからは違う。

基盤を回復し、ようやく従来通りの天馬騎士団の体制へと戻った。ならば次に真っ先に思い当たるものは、その基盤の上に城を築いていく人材の選任。

基本的には変わらないはずだ。変更する場所など、リキアや西方三島への派遣駐在者の変更ぐらい……普段ならそうなるが今回はそうもいかない。

ティトは団長室へ戻ると、真っ先に二つの部隊名簿を机から取り出した。それはどう見ても駐在者名簿ではなく、たくさんの名前が連なっている。名前の横にある数字はどれも一桁ばかり。

俗にいう“ランキング”だ。事務の人間達が作製した、戦場での功績や雇い手の評価を用いたチェックシートをベースとするその数字。

数字自体はティトが依頼したものだが、それを眺めた瞬間にもうティトはため息を落胆と共に吐き出す。

なぜこんな評価の仕方になっているんだろうか。見れば見るほど、求める評価基準と真逆ではないか。いや、もつと酷い。この子は本当に誓いの意味を理解しているのか……？　なぜこの人にそんな高い評価が??

目で追えば追うほど、厳しくなる目元。何も変わらない体質。自らが依頼したその数字を暫くずっと睨んでいた。

(こんなのは……何の参考にもならない。槍の腕がいくら立とうと、いくら雇い主へ忠実になれたとしても、それだけでは……)

はつと我に返る。また、どうしようもない事にじつと考え込んでしまった。この頃こんなことばかり。

要領が悪いことは理解してはいるが、やはり納得がいかない。“国を愛する心”などという項目があるが、一体どうやってそれを測るのだろうか。

国を愛する心があれば、戦場でも積極的な行動に出るだろう。ならば、戦場での功績を評価基準として選んでも差し支えはない。それが事務側の認識なのか。

騎士は戦ってこそ、その意識が事務側にはあるようで戦場以外での行動は過小評価されがちだ。レイサのような陰の仕事人たちや、なかなか国外へ出撃することのないカルラエ城の守備隊は大きな数字を名前の横に抱えている。

……ここまで考えて、テイトはふと机の上に名簿がないことに気付く。

ボーっとしてるうちに下に落としてしまったのかと辺りを見渡すが、綺麗に掃除され、整然とする部屋に紙など落ちてはいない。複写はしてあるものの、原紙あつての複写だからテイトは焦って探す。

あちこち探しても見つからず、彼女は視線を床から机の高さまで戻した。灯台下暗しか、ようやく姿を現す名簿。だが、宙に浮いている……？

いや、浮いているのではない。何者かが名簿を手にとって眺めていた。

「……レイサさん、気配を消して部屋に忍び込むのは止めてくださいと何度言ったら……」

「ごめんよ。仕事柄もうこっちのほうが普通でさ」

レイサは視線を名簿から外すと、舌をペロツと出してテイトのほうを向く。悪気がない事は分かるが、やはり騎士という職業上、背後に突然立たれるのはいい気分ではなかった。

「で、この数字何？ この名前の横にある数字。私は……29か。シャニーが40……。なにこれ、居眠り回数かい？」

こんな重要な資料に、そんな事が記載されているわけではない。レイサもそれは分かっているだろうに。

「レイサさん……シャニーはそんなに仕事をサボっているんですか？」

真顔で返して来るテイトに、レイサは息が詰まった。いくらシャニーがマイペースと言っても、空の上で居眠りはしていない……はず

だ。

「冗談に決まってるだろ？ まったく、アンタは生真面目すぎるよ」

「分かっています、そんなことは」

呆れるレイサにテイトは笑ってみせる。冗談が分かっているのか……それとも生真面目すぎて肩が凝ると言う事が分かっているのか……。

整然とした机の上でせわしく仕事を始めたテイトだったが「それにしても……へえ……」レイサの独り言が、集中しかけていた神経をくすぐった。

「これが頭でつかち共の言ってたランキングってヤツか」

「そうですね。傭兵としての……」

テイトがそこまで言うのと、被せるようにレイサが口にした内容にテイトは絶句した。

「イリアを滅ぼす度ランキングだろ？」

「え……!?!? ……」

暫くの沈黙が部屋に広がる、聞こえるのはレイサが手先で振る名簿同士が擦れあう音だけ。

「レイサさん、それはいくらなんでも……」

時々、レイサは人がびっくりするような物言いを平気でする。誰もが人目を気にして言えないような事も、サツパリと言い切ってしまう。「ホントの事だろ？」お決まりの言葉と共に。そう言われると、テイトはいつも言い返せなくなってしまう。

レイサはもう一度数字が一桁の人間の名前を見る。どの名前も、騎士団内で上位を占める管理側の人間ばかりだ。もちろんそこには、団長選出戦で敗れたイドウヴァの名前もある。その彼女の名前の横にある数字は……1だった。

テイトより若いその数字。事務側はなんとか団長の数字を上にしようと画策したようだが、ベースにされているモノがモノであるだけに、完全に条件として不利がある。

(これだけの実績と外の評価を得ながら団長になれないなんて……所詮上辺って証拠だよ)

上辺の信頼は要らない。上辺の忠誠も要らない、上辺の愛などもつと要らない。表皮を貫いて出、中より込み上げるものがこのランキングには加味されているのだろうか。

「それに、アンタもそれは感じていないはずだ。こんな数字に何の信憑性も無い事を。アンタ、私を否定する時に一瞬迷っただろ？」

一瞬の間で、自分を全て読み取られてしまう。扱いかたを誤れば一発で形勢をひっくり返される究極の勝負手。間というものは恐ろしいものだ。ティトは返事に窮した。

「それは……でも、最初から敵視すれば相手も心を許してはくれません。理解してもらおうには、相手を理解することからはじめなさいと私は姉から学んできました」

「まあそれは理想つてやつだね。……世の中そんなにうまく行かないのは……アンタが一番知ってるはずだろ？」

レイサはどこまでも現実をティトに突きつける。ティトの古傷に触れることが分かっている。でもまあ、それを止めようとはしない。

どんなに自分を抑えても、どれだけ相手と歩み寄ろうとしても。自分が不利になるような恐れのある考えに、決して首を縦に振ろうとは皆しないもの。

「どうして皆は……国の事を考えられないのかしら……」

ティトの漏らす言葉に、レイサへの答えが凝縮して詰まっていた。慰めは逆に毒となる。

「それは簡単だよ。……国なんて、忠誠なんて、所詮上辺。自分を良く見せるための道具に過ぎないのさ。結局イリアは傭兵国家だからね。国があらうとなかろうと戦うことが生きることにつながる。その思想が何かしらの理由で変わらない限り、なーんにも変わらないよ、きつと」

国なんて飾り……。その言葉をティトは否定できなかつた。騎士達の考えが変わらない限り、騎士を基盤とする現在の国家も変わる事はない。それを換えようと必死になっても、理解されないどころか針の筵に座るかのような悲しい毎日。

(私は……もしかすると私が間違っているのかもしれない……)

テイトもそろそろ、自分の信条の拠り所を失いかけて始めていた。イリア騎士とは、一体何が使命だったか……テイトの脳裏に、3人の人の声が響いてきた。

——この腐った国を、他国に負けない強国にする、それが私の誓いです！

——昔のイリアはもうない。天馬騎士団もまた、生まれ変わらなければならぬのよ。

——イリアの礎となる為の行動なのか考え続ける事。それが大切なんじゃないかなあつて思うよ。

目をゆつくりと閉じてその言葉達を何度も復唱した。皆全然違う性格の人間達。だが、先輩も後輩も言う事は同じだった。特に、シャニーの言葉は今でも鮮明に残っている。何せまだ2時間も経たないうちに聞いた言葉なのだから。

テイトは静かに目を開けた。やはり、自分は間違つてはいない。自分の信じた道は自分だけしか歩けない。

「天馬騎士団は……やはり生まれ変わらなければいけない。上辺だけの変化じゃない根底から」

零れだしたテイトの言葉にレイサはふっと軽く笑みをこぼした。そして手に持っていた名簿を再び机の上に置くと、数字に羅列に指を置く。

「何の役にも立たないかと思っただけど、ここだけは正しいね」

レイサの指の置かれた場所に視線を落とす。そこには大きい数字がやたら並んでいる。部隊別に層別されたその資料、部隊名を見ていると……十八部隊だった。40がずらりと並んでいる。

「数字のでかい順に、大切に育てなきゃいけない奴リストだね、これ」  
「はい……」

テイトは撒いた種をしつかりと見守ろうと改めて腹を据えた。

時には激しい風雨に晒される若葉たちの蓑笠代わりになってやることだって苦には思わない。それが、新生天馬騎士団復興という重責を任された自分の使命であるならば。

「民の為に、私は負けない……」

覚悟を決めるテイトの仕事をこれ以上邪魔しない為にレイサは再び影と消え、城の屋根に寝転んだ。視界の先に見えた眩しい光を手で遮りながらポツリと独り言漏らす。

「立派だよ、団長。諦めないことだね。でも……一つだけ間違えているよ。言われて出来るようになるなら苦労しないものだけどサ」

空を飛ぶ鳥達。その下では自分の部隊の者達が何やら特訓をしている。

目を追うごとに遅しくなっていく彼女らを見て、レイサは遠くない未来に何かが起こることを予測していた。

「神様って言うのは、どうしてもこうも意地悪なんだろう。あれだけ揃っているのに、最も肝心なところを与えないなんて」

エリミーヌの教えが、それへ完全なる答えをもたらしている。

——人と交わりなさい。人と交わってこそ、人はより高い階（きざはし）を目指すことが出来るのです

聖典にも載っている有名な言葉。レイサもそれを知らないわけではない。だが……納得しろと言われても出来ない部分もある。

「……テイト団長、哀れな人だ。どうして神はアンタばかりに苦しい思いをさせるんだろうね。でも……あんたはいい種を撒いていて育てているよ」

苦勞が報われるかは、新人たちがどれだけ人と交わって養分を吸収していくか次第だ。

幸い、彼らはすくすく育っている。はやく団長を助けてやれるくらいまで早く伸びて欲しいものだ。あまりに一人で戦うには相手が大きすぎる。

一方のテイトは再び名簿を手に取り、ペンで色々名前の横に書き始めた。

人事は余程のことでもない限り、期中に変更はしてこなかった。だが、今回はそうも行かない。外からの圧力もなかなか強いものがある。その代表例が、十八部隊の扱い方だった。

「半年が過ぎようというのに参戦回数が0とはどういうことだ」

騎士団の代表が集まる報告会議でよく突っつかれること。

イリアは今復興の為に膨大な額のお金を必要としている。その稼ぎ手を遊ばせておくとは何事だ。と言うのである。

復興の為に金が必要なのはテイトも重々承知している。

毎月の実行計画ともそこまで差異なく報酬を納め、管轄地の復興に充てている。それでは足りないと言おうのだ。

誰もが理解をしている。復興が着実に進んでいる事も、他の国と比べるとかなりの遅れがある事も。特にリキアとの差は比べることも辛いぐらい。

遅れている原因を、誰もが見出したくなる。

性質が悪いことに、決して自分達のせいだとは言わない。何とか自分達は悪者にならないように原因を作り出す。

今回は天馬騎士団がその矛先。あまり矛先を集中されれば、騎士団同士の中で孤立しかねない。国としてまとまらなければならぬ中で、孤立する事は何が何でも防がなければならない。

親族となったゼロットが最大規模の騎士団を統べているから、いざとなれば彼に話をするという選択肢もあるかもしれない。だが、それは選んではならない選択肢。

イリア全体に係わる問題だから、テイトも外の意見に耳は塞ぎきれない。けども、新人には戦闘以外の事を中心に学んでほしいという考えに変わりもない。

一方で、そろそろ天馬騎士団員として実戦を経験しても悪くはないとも思う。

彼女らの人事をどうするかで迷っていた。やはりまだまだ学んで欲しいことがあって、戦いの中に出すには酷である者が多い。

例年通り、一年以上の見習い修行をしたものばかりが入隊していればここまで気を遣うこともないのかもしれない。

だが、今年入団した新人の大半はそうではない。実戦経験どころか、天馬に乗ることすらおぼつかない、村娘を卒業したばかりの少女達だ。

ようやく天馬の乗り方を、武器の扱い方を覚えて慣れてきたところ。騎士としての心の持ち方も、少しずつ勉強している。見習い修行

をした者とは、見えない部分で雲泥の差が生じていた。

そんな者達を実戦に出しても、結果は目に見えている。

大切な芽を、実どころかまだ葉も生え始めたばかりの状態で摘み取るようなマネはできない。外圧と現状の板ばさみに、テイトは暫く唸っていた。

暫くして出した結論、それは名簿に現れていた。

テイトの机の上には、3枚の名簿が置かれている。その一枚は十八部隊のもの。そこに連なる名前の殆どには、何も印はついていない。

ただ一人だけ、赤字で名前の横に丸が打ってある。その状態の名簿を、テイトはペンを持ったまま硬直して眺めていた。

「この子は……。でも、将来を考えると同じように異動させたい」

筆先が右に、左にとふれる。その振り子が時を流しているかのよう  
に、部屋の中の空気は重々しく、ゆっくりと流れている。そして時  
もまた、ゆっくり、だが確実に刻まれ、彼女の孤独を一層際立てる。

彼女の視線の先にあるのは、12という数字。十八部隊に所属して  
いながら、他の新人と別次元にいる人物の所属場所で先程からずっと  
悩んでいる。

だが、いつまでも悩んでいるわけにも行かない。新人達の今後と、  
外側との調和。それを両立させなければならぬ。

(この子を利用するわけじゃないけど……)

その難しい舵取りに決着をつけるべく、ペンを動かそうとしたその  
時だった。

「団長、月例報告会議の時間まで1時間ありません。今回の議題資料  
を作成しておいたので、登城までに決済をお願いします」

部下の突然の声には手は止まり、意識もそちらに向かってしまう。時  
計を見ればあつという間に時は過ぎ、日は傾きかけていた。

外を見れば騎士達が任務終了後に行う指差し呼称をしていた。イ  
リア騎士の誓いを復唱して、結束力を高めようとする伝統。その様子  
を、テイトは無言で眺めだす。

「我々の槍は常に人々のために！」

新人達の元気な声が聞こえてくる。その元気な声はテイトの胸に



突き刺さるように響く。皮肉にも、その元気が逆にテイトを苦しめる。

暫く彼女達を無言で眺めていたテイトは視線を向こうの部隊へと移す。そちらでも同じように騎士の誓いを呼び合っている。

「……国のため、ね」

「団長？ なにかあったのですか？」

その独り言に答える声があり、テイトは思わずそちらを向く。先程資料を持ってきてくれた隊員だ。

「なんでもないわ。資料ならそこに置いておいてもらえる？ 目を通すから」

隊員は資料を机の上に置くと、そのまま部屋の出口へ向かう。だが、彼女はすぐさま出口へは向かわず、「あの、団長」途中で立ち止まった。再びの声に、窓の方に振り向きかけたテイトは隊員の方へ顔を戻す。

「どうしたの？」

「あの……。差し出がましい事を申すようですけど……」

どうにも言いにくそうにしている彼女に、ふっと笑いかけてやったらこわばった顔に少しだけ笑みが浮かんだ。一度緊張が解けると、水を流すように祈りが溢れる。

「何かお悩みなら私たちにも話してください。私達は団長のお力になりたいんです。この頃ずっと部屋に籠りきりのことが多いので、皆も心配しているんです」

隊員の目はテイトをか細そうに見つめていて、その気持ちは痛いほど伝わってくる。その言葉が、その気持ちは、見えない敵の多い今のテイトにとってどれだけ傷を癒すだろうか。心にぽっかり空いた隙間にすつと入って行つては塞いでくれそうな、そんな感覚がテイトの心を包む。

だが、彼女の口から出る言葉はそれとは正反対であった。

「ありがとう、その気持ちだけありがとうがたくいただいておくわ。でも、これは団長としての問題よ。私が処理しなければならぬ問題なの」

相変わらず。相手の気持ちがあがたいのはもちろんだが、口をつ

いて出るのは手厳しい言葉ばかり。

団長である自分が弱音を吐けば、その動搖は騎士団全体へと広がる。強い気持ちを維持し、荒廃した国を蘇らせなければならぬ。そんな時に皆の心をバラバラにする要因を、団長が作ってはいけない。いつも自分を戒めてきた。

昔より更に肩肘を張る団長を、昔から行動を共にしてきた部下が心配しないわけはなかった。

テイトから放たれる言葉は、相手を突き放すような厳しいものが多い。知らない者が聞いたら、どんな冷たい人だと思いかもしれない。

しかし、長い間付き合っているからこそ分かる、その人の本心の部分は非常に多い。隊員はテイトの言葉に黙ってうなずくと、一礼して部屋を出て行った。

テイトは隊員を気遣うあまり、厳しい言葉ばかりになってしまったことをいつも後から気づき、誤解されてはいないかといつも余計な重荷を背負っていた。

そんな心配は無用である事を知れば、彼女の表情ももつと違ってきたに違いない。

ツーカーの間柄である上司と部下。そんな関係にある部下にも唯一つだけ不満があった。テイトの生真面目すぎるものが崇つてのこと。

テイトが無意識のうちに作り出してしまっているものへ、部下達は何となくしさを隠せなかった。

(どうして団長はそこまで私たちが心配してくれるのに、自分の事を大切にしないのだろうか……)

昔からそうだ。だから尚更もどかしい。

隊員はしばらく廊下で立ち止まっていたが、持っていた資料入れをぎゅつと握ると再び歩きだし角を曲がっていった。

一方テイトも、隊員の思わぬ声に少しくすぐったくなったが、月例報告会議の方が頭に優先して残っていた。

先ほど眺めていた名簿を何も書き込まぬまましまう。せつかく付いた決心にまた疑問が湧いて、どうしても記入出来なくなってしまう

ただ。

（また明日ゆっくり考えるところでしょう……。焦ってはいけない事だわ）

紋章入りのマントを羽織り、剣を腰に差す。凜とした若い団長は、資料を片手に部屋を出て行った。

## 第7章 妖精と魔剣

### 第1話 旅の傭兵

なんてことだ。任務を終えて気持ちよく帰れるはずが今日は墓穴を掘った。口を尖らせながら両手で何本も槍を抱えてシャニーは一人で倉庫へと片付ける。

「じゃあ任せたまよ、シャニー！」

元気な声が恨めしい。皆は片付けに庭と倉庫を行き来するシャニーへ手を振っている。ムスツとしながら同じようにシャニーも応えてまた槍を数本抱えて歩き出す。ちよつとくらい手を貸してくれたっていいのに……。皆シャニーを助けようともせず、笑い声に包まれそのまま天馬で空へ消えていく。

「ちえー、どうしてこう肝心な時に」

空の向こうへ消えていく天馬を羨みながら、よいしょと掛け声を上げて重い槍を数本束ねて倉庫へと運ぶ。

彼女はじゃんけんに負けて、片付けを一人でやる羽目になっていた。しかも言い出したのはシャニー自身のクセに。完全な自滅でぐうの音も出ない。ありがとうと皮肉を言っただけで帰って行く背中に大きく舌を出して顔をくしゃくしゃにする。

最後まで残っていた重い槍をあらかた片付け終えて、大きく息を吐き出して額を拭う。陽は既に半分以上沈み、あたりは藍色が覆おうとしている。たまには早く帰ってゆつくりバスタイムも悪くない。

最後に自分の剣を磨いて帰ろうと、急いで研磨紙を取り出した時だ。背後に捉えた気配。たちまち彼女の目にスイッチが入る。とつさに動く左腕。鞘と剣が擦れる鋭い音と共に彼女の振るう細身の剣が、背後の首元を正確に捉える。

「動かないで。動いたら、容赦しない」

この前、アルマが夜賊に襲撃を受けたことがまだ頭に残っていたシャニーはやや敏感になっていた。「あわわ……。何するのよシャニー

……」今回は早とちりだったか。聞き慣れた声が震えている。

慌てて振り向くとそこにいたのは蒼い顔をしたルシヤナ。シヤニーは仰天して剣を放り出してしまった。

「ぐ、ごめん！」

「あー……。怖かった」

ルシヤナは剣の当たっていた部分を手でさすりながら、ふうつと力なくその場にへたれこむ。

「ホントごめん。あたし、夜賊かと思って……」

「あんたみたいなオツカないヤツを襲う夜賊なんていないって……」

「どういう意味よ！」

あつという間にいつもどおりの会話に戻る二人。シヤニーの早とちりも、ルシヤナの毒舌も、昔から変わらない。しばらく頭を下げていたシヤニーも、相手が許してくれると元のように元気になる。

「ところでさ、てつきり帰ったと思ったよ。どーしたのさ」

シヤニーは暗くなった空を眺めたかと思うと不意にルシヤナへ訊ねる。もうみんな自分を置き去りにして帰ってしまったと思っていたのに、さすが幼馴染は優しいと感動していると「あ、そうだった」ルシヤナも親友の疑問に、ポンと手を打った。

「ウツデイも待ってるんだ、早く行こう！」

そう言いながらルシヤナがぐいぐいと手を引つ張り始めた。

(剣片付けたかったけど、ま、いつか。明日忘れないようにすれば)

彼女は剣を腰に差すとルシヤナに理由も行き先も問うことができないまま手を引かれ走り出す。

着いたのは厩舎。ウツデイが天馬の鬣を撫でていた。

「あ、ウツデイ危ないよ！」

びつくりしてシヤニーはすぐ声をかけるが、天馬が大人しく受け入れていて首を傾げた。天馬は相棒以外にはすごい警戒心が強いはずなのに。ウツデイは何でもないように天馬に話しかけながら、ゆつくり彼をさすっている。

「よーし、いい子だ。あれ、シヤニー遅かったね」

彼は天馬の翼へ綺麗にブラツシングをかけながらシャニーのほうへ視線を移し、天馬も自分の相方の姿を見つけて首をもたげた。当のシャニーだけが天馬の様子にぼかーんとしている。

「どうしたのさ？ シャニー」

ルシヤナの声に我に返ったシャニーは、天馬のそばへ行つて彼を撫でた。男には容赦ないはずが、ウツデイに何もせずにはいた彼をしつかり褒めてやる。

「ウツデイ、男なものによく無事だったね」

「あー、きつとウツデイは男だと思われてないんだよ。なよなよしてるし」

女二人が意見一致と顔を見合わせて笑い始め、やれやれとウツデイが頭を抱えた。彼は頭をボサボサと掻きながら、二人の笑いが収まるのを待つ。

しかし、そんな彼の淡い期待はあっけなく裏切られる。日ごろなかなか時間がないためか、一度ヒートアップすると話題のネタが後から後から湧いてきて一向に収まりそうにない。気の長いウツデイもこれには流石に堪りかねて二人の間に割って入る。

「ねえ、盛り上がってるところ悪いんだけどさ、早く行こうよ」

「行こうって……どこへ？」

シャニーの予想外の返事に、ウツデイはガクツと拍子抜けした。「ルシヤナ。シャニーに伝えてないの？」パスを出した相手へシャニーも視線を向けると、ルシヤナは手を軽く握って口のところへ持っていく、クイツと首を傾けた。

「聞かなくても分かるじゃん、これよ、これ」

シャニーも親友のジェスチャーに顔をニヤ付かせる。元々友達と遊びに繰り出すことが好きだった彼女が、これを拒む道理はなかった。



夜の城下町。夜の警備で良く来るこの賑やかな場所だが、今日は何か違う場所に来ているかのような気分だ。賑やかさがひとときわ際立っているような気がする。

彼女らは行きつけの店の明かりに誘われ、笑いながら中へ入った。

「おや、讓ちゃん達、今日は夜に登場かい」

店のマスターが入ってきた若い顔を見るなり迎えてくれた。ここは彼女達がよく昼食をとりに通っている店で、夜は酒場に姿を変え、店は既に大勢の荒くれたちが酒を飲み交わし非常に騒々しい。

荒くれなど任務で幾度も相手をしているからへつちやら。シャニー達は恐れることもなく、ずんずん店の中を進みカウンターへ辿り着く。ウツデイだけが、山賊風の男にガンをつけられた気がして小さくなっていた。

「讓ちゃんって言い方そろそろやめてよ。あたし達、もう一人前の天馬騎士なんだよ?」

「がっはっは、そんなひよろっこいなら職業が騎士でも賊でもお讓ちゃんさ」

シャニーが口を尖らせても、マスターはいつもの調子で笑い飛ばす。成人する前からこの店にはお世話になっていて、この年でも彼らは顔の知れた常連。もちろん彼らが天馬騎士になったことはマスターも知っているし、大戦を生き抜いた彼らの瞳に同世代にはない強さがあることも分かっている。それでも、昔から見えてきた子供のような存在には変わらない。

彼は三人にとりあえずつまみと軽い酒を出すと、皿を拭きながらパイプを銜える。

「それにしてもホントに騎士になっちまったんだなあ。つい最近まで手に負えないガキンチョだったお前達がねえ」

「もつちろん、そのために修行してたんだからね」

得意げになって白い歯を見せるシャニーの横で、もうルシヤナが一杯目を終えていた。一気に飲み干し、カウンターに叩きつけてお替りを要求する。この若さでこんなに酒が様になるとは、リキアで何を修行してきたのやら。そのまま独り酒宴に突入したルシヤナから避難するように、シャニーたちはつまみで雑談を楽しむ。

三人の様子を眺めながらマスターが新しい煙草をパイプにセットしようとしたそのときだった。突然響く荒くれの挑発する声。向こ

うで喧嘩でもあったのか。

「何だテメーは！」

傭兵風のガタイのいい男が、黒いソフトに黒い外套で全身を覆ったバルボ髭の紳士に難癖をつけていた。深くまで帽子を被った紳士は、反論する事もなくただ黙って荒くれの怒声を聞いている。シャニー達から見えるのは、への字に固く結ばれた口元だけだ。

「なんかあのおじさん、かわいいそうだね」

シャニーが仲間にとつとつぶやいた。傭兵というより山賊風の大男。それが酒で気まで大きくなっているのだから手に負えない。酒場では良くある事なので、周りはイベントくらい感覚で眺めており、中にはやし立てる者までいる始末。

「聞いてんのか！ こらー！」

黙り込む紳士に浴びせられる恫喝。微動だにしない紳士に荒くれは胸倉を掴みにかかる。そうやって初めて、紳士は荒くれを突き放してようやく口を開いた。

「言いたい事はそれだけか？」

「ああん？」

「言いたい事はそれだけかと聞いている。私はお前の戯言にいつまで付き合えば良いのかね？」

血走った目が見開く。聞くや否や、頭に血の昇った荒くれは背に差していた大剣を引き抜くと、そのまま紳士に向かって振りかぶった。これには周りも流星に危機感を覚えて退く。

「危ない！」

シャニーは荒くれが目を見開いた瞬間に剣を握り飛び出していた。治安を守る事も騎士の仕事。任務時間中ではないにしろ、こんな騒ぎを黙って見ていられるはずが無い。

(なっ、何?! この感覚……)

だが、剣に手をかけたシャニーはゾツとする恐ろしい視線に身がすくんでしまった。その視線は間違いなく、帽子に隠れて見えるはずも無い紳士の目から放たれて自分のところまで突き刺さってくる



それはあつという間であつた。気付いた時には荒くれが宙を舞い、向こうに置いてある空の酒樽に突っ込んでいた。皆も何が起きたか理解できずにただ啞然としている。

時と時が連続していかないかのような妙な感覚。紳士が刀で居合い斬りをして見せた事はシャニーも分かった。だが、その剣捌きを目で追えなかった。気が付いたら、もう剣は荒くれを吹き飛ばした後だった。

この人が暴れる側で無くて良かったと心底ホツとする。あんな剣、とても相手にできそうにはない。

(なんだっただらう……。さっきの何とも言えない嫌な感じ)

シャニーは紳士の方を眺めながら先ほどの恐ろしい視線を思い出していた。紳士は剣を払い、鞘にしまうと再び帽子を深く被り直す。すつかり元のように深く被りなおすと、どうやらシャニーの視線に氣付いたらしい。彼女は仰天して髪の毛が逆立った。

(あわわ……っ、ヤバい、目が合った……!! どうしよう?)

無言のままこちらを向いた紳士は、固い口元のままそのまま向かって歩いてくる。見えぬ眼光が鋭く光ったようで戦慄すら覚える三人は、為す術も無くただ彼が距離を縮めて迫る姿を前に背筋を伸ばすしかできない。

だが、紳士はそのまま三人を通り過ぎると、マスターへそつと右手を差し出した。何かと思つて彼が紳士の手を注視すると、突然その手に葉巻が現れ、目を見開いて仰天するマスターを紳士は口元だけで笑っている。

「旦那、パイプもいいが一服の醍醐味は葉巻つてもものじゃないか？」

「お、おう。だが葉巻は高えからよ。一服するのにそれ以上に働かなきゃいけないんじゃないよ」

紳士はふつと口元で笑うと、そのまま葉巻をマスターに差し出す。

「こいつは私のおごりだ」

マスターが嬉しそうに葉巻を吹かすのを見ると、紳士はカウンターへ目を向ける。そちらには様子をじつと見ていた三人がいた。

「おつと、驚かせて申し訳ない。酒場とは言えやはりマナーは弁えな

いとな」

彼はシャニーたちのすぐ横に腰掛けてマスターにつまみを注文し、剣を鞘から抜くと丁寧に入力を始めた。

「おじさん、すごい強いんだね」

すぐ横に座られ、無言でいるのも間が悪くなったシャニーが苦し紛れに話しかけてみると、紳士は動かす手を止め、彼女へ顔を向けた。

「大した話ではないさ。相手は酔っ払いだったのだからな」

意外にも気さくに返ってきた。こうなるとシャニーも人懐っこい笑顔で声のトーンが上がる。

「でも、あたし、剣の動きが全然分からなかったよ」

「いや、君もかなり腕の立つ騎士と見る。あの状況判断の速さはかなり実戦を積んだのであろう。まだ若いのに、さすがイリア騎士はレベルが違う。……聞いていた通りだ」

紳士は口元に笑みを浮かべると、調理されたばかりの腸詰に酒を味わいながら再び剣を眺める。シャニーはその剣の美しさに何か引寄せられる気がしてならなかった。妖艶さすら漂わせるその片刃剣からは、ゾツとするほどの力を感じる。

「その剣、きれいだね」

「ほう、ミュートの美しさが分かる者がいるとは。君は剣士か？」

「どうやら紳士はその刀にミュートと名づけているらしい。」

剣の事が分かる相手だと知ってか、紳士は親しみをこめて話しかけているのが声のトーンから伝わってくる。

「剣士じゃないけど、剣が自分を示す武器だとは思ってるよ」

「ふむ……。面白いな。持ってみるか？」

すつと渡された剣を握り、刀身を眺めてみる。「キレイ……」その一言しか出てこない。こんな剣を扱えたらどんなに良いだろう。そう思えたのは最初だけだった。

あまりに妖艶な刀身を見つめているとそのまま吸い寄せられそうではない。彼女はすぐに剣を返す。今の自分では、まだ扱えるようなレベルではない。剣に嫌われている気がした。

「ちよつと君が腰に差している剣を見せてくれないか？」

置いてくる暇がなく仕方なく持ってきてしまった剣。鞘ごと紳士に渡すと、彼は目線の高さで鞘からいい音を立てて引き抜いた。素材は何の変哲もない鉄製の剣だが、随所にこだわりが見え改造が施されているそれは興味をそそる。使い込まれた剣をじっと見つめる紳士。「ほう、なかなか手入れのしてある剣だな。剣が嬉しそうだ」「へへっ、ありがとう」

彼は嬉しそうにするシャニーへ剣を返すと、お湯で割られ香り立つ琥珀色の酒を優雅に飲む。その立ち振る舞いはとても傭兵として剣を振るついているとも、剣士として道を究めんと欲しているとも見えなかった。

「そんな若いのに国を背負う立場とはな。イリアでも1、2位を争う女のエリート集団に所属するともなれば、そうも言っていられないといったところか」

しばしの沈黙のあと、紳士は突然に独り言かとも取れるような声を漏らした。

「おじさんはあたし達が天馬騎士だって言うのが分かるんだ」

シャニーは言ってから気づく。他の二人はともかくとして、自分は着替えず軍服のまま来ていたことを。袖には天馬をあしらった騎士団の紋章がくつきり刻まれている。

「無論だ。イリアと言えば天馬と美女と、美酒の国だからな」

「それってあたし達を口説いてるの?」

「さあな」

軽くシャニーからの突っ込みを酒でかわすと、紳士はつまみの腸詰にフォークを突き刺し食べ始めた。彼女もようやくオーダーしていた揚げパンがカウンターに置かれると、目を輝かせながらかぶりついて満面の笑みを浮かべている。

「女のエリート集団かあ。ま、私達がそうとは言い難いよね」

ルシャナはお湯割をスプーンでかき回しながら天井を見上げる。まるで他人ごとかのような言いつぶりに、ウツデイはいつい突っ込んでしまう。

「何言ってるんだよ。つい最近まで、もう一人前なんだから見習いの半

人前と一緒にするなって言ってたくせにさ」

「そんな事私は言っていないよ？ 言ってたのはシャニーじゃん」

酔いが回ってきたのか、ルシヤナは隣に座るウツデイの背後から手を伸ばし、シャニーの横っ腹を突っついた。突然の攻撃に身をよじったシャニーが思わずカウンターに肘をつく姿を笑っている。

「すっかりライバルのアルマと差が開いちやったよね。イドウヴァさんに気に入られると昇進が早いってみんなが言ってたけど、すごいよホント」

横目で刺してくるルシヤナに、意地が悪いとシャニーは膨れている。互いにライバル視した者同士というのは彼女も認めている。その相手が活躍するところを見るのは悔しいし、焦る気持ちもあるのは事実だった。

「アルマ……？」

「私達と同期なだけでさ。いつの間にかナンバー2の部隊に配属されててね」

紳士がポツリと漏らした言葉にルシヤナが即反応した。日ごろの鬱憤が溜まっているのか、酔っぱらった彼女は更にテンションが上がっていた。

「性格はイカれてるけど、凄腕だしね。ねー、シャニー」

話を振られて、シャニーはムスツと口を尖らせるとまた揚げパンにかじりついた。

「ふん、あたしは別にアルマに負けたわけじゃないもん」

「アンタってホント負けず嫌いだよな。そろそろ認めちゃいなよ」

シャニーを弄りながら酒がすっかり混ざったのを確認すると、ルシヤナはコップの端でチンつとスプーンこすりあてる。そしてそのまま雫の落ちたスプーンをなめると、実に幸せそうな顔をした。

「あー、これがあるから厳しい任務をやりぬけるのよー」

そのままコップを手に取り見事な飲みっぷりを披露する。毎度、二人はしばしあっけにとられてしまう。仮にも成人したばかりの15歳である。ウツデイは、彼女が見習い修行の間、リキアで一体どういう生活をし、何を学んできたのか本気で気になってしまった。

「何を年寄り臭い事言ってるんだよ。老けるの早すぎだぞ」

「うっさいうっさい！ アンタに私の苦労が分かってたまるか！」

ぐいぐい酒を飲み干すと、マスターの前に豪快にコップを叩きつけお代わりを要求する。マスターも呆れたようで、何も言わずにコップに酒を注いでやる。

「ほらシャニー、あんたの飲みが悪いから私だけ変だと思われてんじゃない。早くグラス空けなよ！」

（うわあ、始まった……）

今回も飛んできた無茶ぶりにシャニーは苦笑いしながらグラスを空ける。マスターにウインクして、一番弱い酒をなみなみと注いでもらった。とりあえずグラスを満たしておかないとルシャナが何を突っ込んでくるか分からない。

「はっはっは、君達は本当に仲が良いのだな」

落ち着いた感じの紳士には似合わない大きな声で笑う。それまでずっと厳しかった口元が、氷が解けたように笑って固かった空気が動き出した気がする。

「ははは……。僕達は、幼い頃から同じ村に住んでた腐れ縁なんですよ」

「なによ、その嫌そーな言い方は」

空きっ腹で飲んだからか、ウツデイにルシャナが絡みだした。いつも威勢のいい声だが、今聞こえてくる声はまるでブレーキが利いていない。

「別に嫌そうに言っていないだろ？ ルシャナ、酔っ払ってるんじゃないのか？」

ルシャナの隣に座ったことを彼は後悔した。少しでも被害を免れる為にシャニーのほうへ体を寄せる。

「まだ酔ってないよ！ リキアに修行に行ってた時は葡萄酒の大飲み大会で結構上位に食い込んだんだから。その勇士をとくと見るといいよー」

「一体どんな修行よ」

自分が経験した修行と全く次元の違う修行内容にシャニーは唾然

としてしまう。彼女の頭の中には、修行と言えば生きるか死ぬかの修羅場の連続しか思い当たらなかった。

ベルン動乱で戦った軍の中には各国の英傑達も多くいたから、社交辞令や各国のトップ層の構造やら、とにかく勉強が出来て凄く良い修行になった。それしか修行という言葉のイメージはないから、親友の話は別の世界にしか映らない。

そんな三人の凸凹したやりとりを、紳士はしばらくずっと眺めていた。彼は酒を一口すると、木管楽器のような深い声で語りだす。

「そうか、幼馴染か。仲がいいのは良いことだな。窮地に陥ったとき、背中を向け合える仲間がいる事は何にも変えがたい武器だからな」

「うん、仲間は家族だと思ってる」

もう絶対に信じてくれる仲間を裏切らないと誓った。道具のように仲間を使つた事を許し、リーダーと呼んで迎え入れてくれた時のことは今も忘れられない。何があっても仲間を守って見せる。そんなシャニーの意志を瞳に見て、紳士は口元で笑ってうなずく。

「そうか、ならばそれを大切にすることさ」

紳士の言葉を重く感じるのは、失いかけた覚えがあるからこそか。深く頷いたシャニーは胸に手を置いてぐつと握りしめた。自分は誓いを守れているだろうか自問していると、横から紳士の声が聞こえてくる。

「それにしてもここは恐ろしい国だ。ほんの少女が身も心もすり減らして生きているとは。他の国の同世代なら、まだまだ遊んでいた年頃だろうに。イリアという国ほど聖典にある地獄に近い国もないな」

他の国では、女は麦を踏み、編み物をしその歌声で疲れた男たちを癒している。だがイリアの女はそんな平穏の中では暮らしてはいけない。編み棒を武器に持ち替え、癒しの歌は戦場にこだまする軍歌となつて獲物を追う。

自分の生きる証は、軍人としての名声だけ。屍の上に立ち、国の為とただひたすらに戦うその姿を人々は哀情と蔑視で見つめる。もはや生ける屍とすら呼ばれるものであった。

「イリアの悪口をいうな！」

紳士の声に真つ先に反応したのはルシャナだった。あまりにも反応が早かったので他の二人も驚いて彼女へ視線を送る。だが、どうも酔った勢いであつたらしくそれっきり。コップをぐい飲みしてつまみを汚らしく食い漁る。

「確かに、イリアは厳しい状況に置かれています。僕もどうして女神はイリアを救われないのか。皆が傷付くたびに思っています。でも……それでも国への愛着は捨てることが出来ません」

普段あまり語らないウツデイだが、このときは何故か口が勝手に動いた。医者として、わざわざ傷付きに行く彼女らを止められない事が悲しかった。せめてできることは、神に彼女らの無事を祈ることと、もし傷付いた時に治してあげること。

「あたしもイリアは好きだよ。自分が国を創ってるんだって実感があ  
るもん」

イリアの中を飛び回って人々の悩みを聞く仕事だが、シャニーには何だか性に合っているように最近は感じるが増えていた。イリアにはイリアのいいところがある。皆、思いやりを持った良い人ばかりだ。村々を回って人々の話を聞くようになって、その思いは強くなった。

もつともつと良くしたい、皆に喜んでもらいたい気持ちには日に日に大きくなる。何か少しでも行動を起こせば、目に見えて変わっていく黎明の大地。シャニーにとっては自分の成長そのものに映っていた。「他の国がイリアをバカにするなら、それに負けないくらいの良い国へ、あたし達を変えていけばいいんだ。最初はお姉ちゃんに憧れて騎士になったけど、今はそれだけじゃない。きつと良い国に変えてやる。この手で道を切り拓くんだ」

シャニーは決意を露にするとういっと酒を飲み干した。

———  
まだまだだなりたての新人騎士が、何をでかい口を  
そう言つて蔑むベテラン達もいる。

だが、仲間を見つけた彼女はそれくらいでへこたれるほど弱くはなかつた。仲間の大切さは嫌というほどベルン動乱の中で学んできたし、それ以上に天馬騎士団に入ってから眠れない夜を経験するほど味

わった。

「今までは守ってもらおう立場だったけど、もう今は違う。一人前の騎士に早くならないと」

「シャニーの意気に満ちた明るい声を、紳士は帽子を深く被りなおしながら無言で聞いていた。そこに飛んでくるやたらテンションの高い壊れた声。

「そうだそうだ！一人前じゃ足りないよ、三人前ぐらい持ってきてマスター！」

「……ルシヤナ」

呆れてウツデイが声をかけるが彼女はへらへらしたまま。かっこよく決めたつもりだったのに、またルシヤナのずれた相槌で台無しにされてシャニーも彼女の背中を叩いた。

「もう！今せっかくなところだったのに！」

「えへへへ……。シャニー輝いてるよ！」

ルシヤナの連れ二人は親友の新たな一面を見てしまい何とも言えなくなつた。当の本人は気分がいいものだからわめき散らしてご満悦。ウツデイはこのときだけ、他人の振りをしたくてたまらなかつた。

「見てるこつちが恥ずかしいよ……。なんだよ三人前って」

頭を手で押さえてウツデイが騒ぐルシヤナをなだめる。マスターももう相手をしきれなくなつたようだ。シャニーのコップを満たすと、他の荒くれ共の酒宴の中に入って一緒に酒を飲んで騒ぎだした。

「やっと席に座つたルシヤナを確認すると、シャニーはもう一回酒に口をつけた。

「おじさん、ごめんね。この子が酒飲むとここまで性格が変わるなんて知らなかつたから」

「三人前か」

「……へ？」

「いや、三人前は必要というのもあながち間違つてはいないのかもしれない」

大酔いして理性を失いかけているルシヤナに同意するこの紳士も、



酔っ払ってしまっているのかもしれない。シャニーはそう思い口元が引きつった。酔っ払いに両端を固められたことになる。だが、紳士の眼は帽子越しにハッキリとシャニーを見下ろしていた。その眼差しは、喋りはじめた最初よりも鋭い。

「君はもう叙任を受けた天馬騎士と言ったな？」

「え、うん」

「と言う事は言い換えれば、君は国を支えるプロフェツショナルと言う事だ。国から認められたプロが、自分の世話を出来るだけで満足していいのかね？」

意外な説教に言葉を失う。何と返せばいいか分からなくて沈黙がカウンターを包む。

(なんか、皆同じこと言うなあ)

シャニーにとってはタイトが言っている事と同じに映った。

「自分の世話をすることが出来るのは、戦場に出るものとして当然だ。だが、君達はそれでは済まないだろう？ 一人前ではプロとは呼べない。一人で三人分はこなせないとな」

今までの穏やかそうな口元が、厳しい傭兵のそれへと変わった。その風貌や振る舞いからして、ただの剣使いではない事はうすうす気付いていた。それが、今の言葉で確信に変わった。「おじさん、どこかの国に仕えてたの？」シャニーの質問に、紳士は酒を飲む手を止める。「いや、ただの雑学さ。あちこち放浪していればそのぐらいの情報は吟遊詩人から手に入れることが出来る」

紳士は再びグラスを手にとると、ソーセージをかじりながら酒を味わう。シャニーは改めて、姉の言った言葉が間違っていないか確認した。そして今、自分は一人前から二人前になろうとしているのだろうかと考えてみた。自分が間違った方向に歩んでいないか。彼女にとって、それが一番の不安。何だか、一人前にすらなれていない気さえしてくる。

「おじさん、あたしはもっと強くなりたいんだ。このままじゃダメなのは分かっている。おじさんに言われてその気持ちももっと強くなった。でも、何処から手をつけて良いのか全然分からなくて、今結構悩

「んでる」

酔いが少々あつたからなのだろうか。まだ会つたばかりの見ず知らずの相手に、自分の悩み事を素直にぶつけていた。

紳士はしばらくソーセージを頬張っていた。ゆっくりかみ締めるようにそれを食い、酒で一気にそれを流し込み、ゆっくり語りだす。「聞く事だ。何を皆が国に求めているのかを。そして考える事だ。何を皆が自分に求めているのかを。聞いて、考えて、そうしたら今度は見る事だ。何が皆の叫びを妨げているのかを」

シャニーは紳士の言っている事が、一本の線で繋がっているように感じて止まなかつた。でも、よくよく考えてみれば言われた事は既にイリアを飛び回って実践していた。

「でも、あたしは聞いているし、考えてるし……」

「それでも答えが見えてこないのだろうか？」

自分の言うことを読んでいるかのようだ。途中まで言つたところで、言おうとした言葉が紳士の口から出てきた。

「うん……。色々考えてると頭がこんがらがってきちやう」

「君は多くの事を一度にしようとし過ぎるようだ。まずは自分の實力を知ることだ。ここまで言つてしまつては失礼かもしれないが……君はまだ一人前にすらなっていないようだ」

凶星と分かっているし、自分でもそう思う事はある。だが、いざ他人に同じ言葉を放たれると自信を砕かれて心苦しい。流石のシャニーも少しばかり沈黙してしまう。

——金を貰っている以上は、見習いと言えどプロとして自覚を持って

ベルン動乱の間、デイクから口を酸っぱくして言われた言葉をシャニーは思い出していた。今はもはや見習いとしてではなく、一正騎士として給金を貰っている。今まで以上の努力が必要な事は分かっているし、自分なりに努めてきたつもりだ。

だが、結果が出ていないと言う事が自分でも痛いほど分かっているから、紳士の言葉を否定する事が出来なかつた。

(悔しい……こんな見ず知らずの人にここまで否定されてるのに、

何も言えないなんて……)

その思いをぐつと腹に押し込めた。

(……前にもこんなことがあった……)

同じように自分を否定され、何度姉や師匠に食って掛かっただろう。その度に叱られて、ぷいっとその人たちから顔を背けて……。独りぼっちになってからいつも後悔していた。

「でも… シャニーだって……!?!」

シャニーは、ようやく反論ネタが見つかったウツデイの口を押さええる。

「二人前ですらない。それは分かったよ。でも、あたしはさつきおじさんが言ってた事はやってるし、考えてもいる。でも結果がついてこないからあたし自身も悩んでいるところなんだ。どうしたらいいんだろう……」

紳士はソーセージを食い終わり、酒を飲み干すとそのグラスをドンと音を立ててカウンターに置き、帯刀用のベルトを締めなおすとシャニーを睨んだ。

そのとき、はじめて彼の眼光を見たシャニーは思わず退いてしまう。恐ろしいほどに厳しく、威圧感のある眼だった。

「君は手を引いてもらわなければ、天馬にも乗れないのか?」

何を言われたのか最初は理解できなかつた。今までフレンドリーだった紳士が、いきなりの形相で自分を責めたのだ。

「考え、答えを出すには知識が必要だが、一人の知識を活かすには十人の知恵が必要だ。もつともつと、多くの者から聞き、多くを見る。その積み重ねではないのかね?」

努力しているのは当然で、その努力が足りないとはつきり言われてしまった。

(結構頑張っているのに……)

それが顔に出たのか、紳士は厳しい眼光のまま突き放すように続けた。

「称号を持つ者は自分の百倍、千倍の努力をしていると思え」

悔しくても、何も言い返せない。今の不安の原因が努力不足なら、

自身を納得させられるまで努力するしかない。向かっている方向が間違っていないと納得できただけでも成果だ。ならばまっすぐ前を向いて、やってやるとシャニーは紳士の顔を見上げた。

「あたし頑張るよ。だってあたしは誓ったんだもん。イリアをもっと住みよい国に変えるって」

行く先々の村で約束したのだ。教えてもらった困りごとをきつと解決して、イリアを良い国にすると。半人前と言われても、あの人たちの顔を思い出したら投げ出せるわけもない。悔しさを乗せて、シャニーは瞳にぐつと力を込めてハッキリ言いきった。

「確かにあたしはまだ全然知らないし、考えも足りない。周りだってそこまで見えてるわけじゃない。でも、こんなのは嫌だ。絶対におじさんだってあつと言わせる騎士になつてやるもん！」

シャニーは威圧感を跳ね除けて紳士に向かって宣言した。三人前になってやると。紳士は帽子を深く被りなおし、口元だけで笑って見せる。

「ふ、悔しかったか？」

「うん！」

「ははは、実に素直だ。私は君みたいな性格が好きだ」

紳士は笑いながら財布から札を取り出す。その札は居酒屋で使うにはどうも似つかわしくない、エミリーヌの画が入ったものだ。マスターもそれに焦る。釣りが足りるか急いで金庫を確認しに行こうとする背に待ったがかかった。

「旦那、釣りはいらねえよ。少しばかり手荒な事もしてしまったし、その3人の勘定も合わせてそれで勘弁してくれ」

金庫に手のかかりかけていたマスターは、紳士の予想外の言葉に一度目を見開いた。だが、すぐにいつもはしないような商売スマイルを見せてその場を取り繕う。

やりなれていないのがまるわかりのその笑顔から視線を出入り口へ向ける紳士。シャニーは思わず席から飛び出すと、紳士の前に立ちはだかった。

「あの一！」

「うん？」

「色々ありがとうございしました。すつごく為になりました」

頭を下げるシャニーに顔を上げさせ、紳士は軽くウインクしてみせる。

「なあに、誰だつて最初はそんなもんさ」

紳士は懐から葉巻を取り出してマツチを壁にこすり付け、葉巻からは一筋の至福が立ち上る。その一服を味わいながら、彼はシャニーへ再び視線を落とした。

「君は自分で言つたな、この手で切り拓くと。いい言葉だ。これからもそれを忘れるなよ」

彼はそう残すと革靴で床を叩き、いい音を出しながら酒場を出て行った。先ほど彼にボコボコにされた荒くれが、彼が出て行ったことを確認して出口の方に骨を投げつける。

「ふう、なんかすごい威圧感のある人だったなあ」

ウツデイが渴ききつた喉を水で潤す。シャニーはまだ出口の方を見ていた。まさかこんなところで、勉強が出来るとは思つてもいなかった。

（全然努力が足りないんだ。確かに、お姉ちゃんに比べればあたしなんてずつと楽しんでる）

熟睡してしまつたルシャナを放っておき、ウツデイと自分達が何をすればいいのか整理を始める顔には普段の朗らかさは無かつた。

## 第2話 背中を押す者

酒場から出た紳士はまっすぐ郊外の方へ歩いていく。行き先は自宅か、それとも雇われ先か。

どンドン喧騒から離れ、明かりも途切れ途切れになる中を、口元を一切変えずに向かう先に広がるのは暗闇一色。

街の外れまで来た紳士は、ベンチも無いのに立ち止まってしまった。

また新しい葉巻を取り出して口にくわえ、間髪いれずに火花散り着く炎。

「本当にお前は、私を驚かすことが好きなようだな」

誰かに話しかける紳士の視線は、間違いなく彼の足元にあつた。眼下を睨むとあの男がいる。月光が浮かび上がらせる紳士の影の中心にうごめく黒。

「マスター、随分お楽しみのようにでしたね。私もご一緒差し上げられなくて残念です」

紳士の前にその影の中から現われ、深く頭を下げて見せたのは彼の忠実な部下、ウエスカーであった。

彼はずつと紳士の影に隠れて一緒に行動していたから、話は全部聞いている。正確には、途中から酒場に入ってきて影に紛れていたのだが誰も気づくはずもない。

「ふつ、そちらはついでのことだ。たまには人間の若者達と話をするのも悪くない。彼らからはいい情報を得ることが出来た。やはり、あいつは騎士団に与している」

紳士の事実を語る口調は、相変わらず固く重い。

だが、久しぶりに組織の者以外と話ができて口元は満足そうだ。思ったより長居をしてしまったことを月の高さが教えてくれる。

「ええ、具体的な所属部隊まで聞くことが出来るとは思いませんでしたが。しかも身内からとはなんと皮肉が効いて。面白くなってきそうです」

肩を揺らすウエスカーはなかなかの喜劇に口元を道化師のように

吊り上げた。

「どれだけ本人が気を張ろうとも、所詮は人間。崩すなら、周りから言うのは定石だ。ただでさえ、本人から背を向けて、こちらを向いているのだから利用しない手はない。」

「今日の3人は変わった連中だった。話していて楽しかったよ」

「ふふふ……私も聞いておりました。今のイリアには珍しい連中でしたね」

「前の戦争は今もなお確実に各国へ変化をもたらしている。二人はその光の世界に隠れてうごめく暗躍の阻止を急がねばならない立場。」

「花のように一気に咲き、短く散る者たちが放つ輝き。その中でも特に光るモノを探して、その背中を押す仕事。」

「直接手を下せない歯がゆさはあるが、蚊帳の外から変化を眺めているのも一興だ。」

「マスターはあの青髪とかなり話し込んでおられましたね、お気に入りだったのですか？」

「主があれだけ話し込み、アドバイスを送る光景などウエスカーは見ることがなかった。せいぜい、背中を押すために一言二言することはあっても、酒を全部飲み干すまで留まるなど記憶にない。おまけに、あんなに楽し気に口元を緩ませて。」

「普段は顔を見られるなど顔を合わせる度に指示する紳士も、あれだけ話せば少なからず顔を見られたはずだ。もしやもう、見定めたと云うのか。ウエスカーの眼がぎろりと紳士を見つめる。」

「盛んにもがく者は助けたくなくなる。何より……エーギルの流れが気になった」

「最初は口元が笑っていた紳士だが、あの娘に流れていたエーギルを思い出して厳しくなった。」

「エーギルとは、その者の命そのもの。ある者はマナと呼び、ある者は波動と呼ぶ、誰一人、同じ色や広がりを持たない命の『流れ』。」

「他人のエーギルの流れを見ることができず者はたいいてい魔法の才があり、使い果たせば死を意味するその扱いは注意するものだ。」

「主があれだけ話を聞き、大分そのエーギルを探っていたから何かあ

るとは思ったが、「なんと。あいつももしや」ウエスカーは主の言葉にピンときた。

——風の契約者セチ

「おそろく、な。ミュートに勘づいたあたり、間違い無いだろう」

そのエーギルの流れが紳士には気になった。人間でありながら、人間では無い流れを宿す者。異能を操り、人間の理の外に身を置く者。

彼女はミュートを手にした途端、目つきが変わった。何も持つていなければあんな反応にはならない。真つ青な顔をしてすぐ手放したあたり、中の住人が跳ね除けたと思つて間違いない。

「きっかけは必要だろうが、これは将来が楽しみだ」

ようやく見つけた。消えて久しい流れを見つけて期待を口にしながらも、紳士の声は冷然としたまま。

紳士の言葉を聞き、ウエスカーは肩を小さく揺らして笑った。

紳士は人の成長を見ることが好きだが、ウエスカーはそうではない。むしろ逆。彼の目には、3人は紳士と同じようには映っていない。

「あの青髪、シャニーと呼ばれていましたね。……これは面白い」

面白い……ウエスカーにとつてのその言葉の意味を知る紳士の口元が一層に硬くなる。

「どうした？　またショーでも興すつもりか？」

彼が惹かれる興味など一つしかない。まだ気づいてすらない彼女にそれを向けるのは、どうにも刺激が強すぎる。

紳士の予感は的中していた。ウエスカーは魔道書を取り出し、中を眺める顔は実に嬉しそうだ。

もう今から、ショーの結末をはっきりと描いて紫電走る手先を興奮に震わせている。

「マスターもご存知でしょう。シャニーと言えば、先の大戦でロイと最後まで戦った一人。それが契約者とはね。私めがきっかけを与えておきましょう」

仕事は的確なウエスカーだが、困ったことに彼にとって仕事のモチベーションは破壊と殺戮。



彼らは組織のトップからの命令で要人の暗殺を主な仕事としている身。それでさえも彼にとつては仕事などではなくシヨードだ。

暗殺にもかかわらず、たいてい人の目のあるところで披露するから大騒ぎになる。決してこの世界に残ってはならない存在なのに。

「未来へ希望を持った人間ほど、灰にし甲斐があります。その希望が絶望に変わったときの顔を想像すると……これはヨダレが垂れそうです」

またしても、焼き尽くそうというのか。今回ばかりは代わりがないのだから大切に扱って欲しいのだが、彼に言っても無駄なことは紳士も知っている。

何より、紳士も理解していた。気づいていない今のままでは、使い物にならないことを。

「止めはしない。以前我らの作戦を妨害したのも彼女であろう。確かに今のうちに仕掛けておく策は悪くない」

『滅蝕』ウロボロスが夜に自らの背を見せることが出来る相手など限られている。

気づいていない状態で、一体どれくらい楽しませてくれるのか楽しみだ。仕事と楽しみを両立できる相手に遭えてウエスカーは嬉しそうに肩を揺らす。

「ご安心ください。人は絶望に向き合うことで輝く。私はその輝きを見ただけですから。すっかり燃え尽きて灰に成り果てるまで、ね。その前に気づくことが出来るといいですね、ふふふ……」

どうしてそこまで楽しそうに振舞えるのか。大蛇の如く裂けて吊り上がる、部下の狂気に満ちた笑みを紳士はただ見ていた。

彼をもつてしても、ウエスカーの心の内はどうしても分からない。彼は殺人を好きでやっている。いつも忠告しているのだが、彼の心にそれが届いたことはない。

「ウエスカー。彼女はともかく他の二人は我々と何の関りもない。無意味な殺生は許さんぞ？　接触はできる限り最小限にせよとの長の命を忘れたか」

紳士を見つめるウエスカーの眼は酷く残念そうだ。

しかし、妙案が浮かんですぐに彼は元の笑顔に戻った。彼は本当に、シヨ一の為なら何でもする男だと改めて思わされる。

「マスター。きっかけを与えることが主目的のはず。ならば何の関わりもない、とは行かないでしょう?」

「だがな……」

「強いイーギルを眩く輝かせて灰にすることこそ意味があると言うものです。そのためには無くしてはならないモノがあります。着火剤ですよ」

これはどう話を持って行こうと、全てを消さないと気が済まないよ  
うだ。

いつでもそうだ。この男は情けなどと言う言葉をまるで持ち合わせていない。自身のシヨ一を完璧なものへと整えることだけを常に考えている。

「周りの枯れ木共も一緒に燃やしてやる必要があるのですよ。決して無意味などではありません。どうせ灰になるなら有意義に使わなければ。そうは思いませんか?」

ウエスカーを見上げる紳士の口元には、はつきりと呆れが浮かんでいる。

この男は何を言おうがやりたいように話を持っていく。当の本人は紳士に自分の気持ちや伝わった事が嬉しいのか、いつもどおりの微笑を浮かべ、渋い顔をする紳士に一礼して見せた。

「まったく、お前と言うヤツは。好きにしろ。ただし、顔は見られるなよ。全ては歴史に残らぬまま済ませなければならぬ。……それだけは忘れなよ」

舌なめずりをするウエスカーにきつく忠告をする。

組織を知られず、かつ邪魔者を始末するには闇に紛れた隠密行動のみしか選択肢はない。紛れるには彼の雷撃シヨ一はどうにも派手過ぎる。

「しかし皮肉なものですな。闇を葬るのに闇のうちに行動するというのも。ま、仕事ですから仕方ないですかね」

ウエスカーは承知したと言わんばかりに、闇夜に溶け込んで見えな

くなつてしまった。彼の気配が消えた事を悟ると紳士は再び葉巻を吹かし始めた。

しばらくその場に立ち止まり下を向いて考えを巡らせる。ウエスカーの荒療治でどこまで気づくだろうか。どこまで背を押せばよいだろうか。

どこまで行つても、この葉巻の煙の様に自由になびく様は変えられない。それが、この仕事だ。

葉巻が灰になり、足元にそれが落ちかけたその時、彼は顔をあげた。「……お前では無理だ。お前の閃電で焼き尽くすには過ぎた相手だ。まあ……今のうちにきつかけを与えておく事自体は懸命な判断、か」彼は再び歩みだした。カルラエの町から出て、山道からも外れて森の中へと抜けていく。そして、人里から離れた白銀の荒野まで辿り着いた時、彼もまた、闇夜を吹きぬける風の如く忽然と姿を消してしまった。

「あの者を潰すには利用できるだろうからな。精々見守つてやろうではないか。焦らず、確実に仕留めればよいのだ」

違和感の本物か、それとも思い過ごしか……。まずはこれから始まるショーをどのようにして切り抜けるだろうか。

彼女はハッキリと言い切った。未来をこの手で切り開くと。そのための剣を握る資格があるのか、紳士は一観客として観測する事にした。

### 第3話 閃電の魔術師

他の地方ではむしろ暑い8月も冬が間近なイリアの夜は、「寒い」の一言では言い表せないほどに冷える。

暖かな酒場を後にした三人は、吹きすさぶ極寒の槍の前に体を縮こませていた。

「うー、寒い寒い寒いー！」

「シャニー、叫ぶなよ」

「だって、寒いものは寒いもん！」

シャニーは外套を体にギュツと撒きつけながら足をジタバタさせている。じつとしていたらそのまま氷のオブジェにでもなってしまうそう。

幼い頃から付き合ってきた寒さではあるが、だからと言って慣れるわけがない。寒いものは寒い。

一人はあんなな性格だし、酔いつぶれて自分の背中でごつすり寝込むヤツもいる。ウツテイはため息をつきながら嘆いた。

「……ああ、僕の幼馴染には、どうしてお淑やかなヤツがいなんだろうか」

「なによ、十分淑やかじゃない」

シャニーへ返事もせず、とぼとぼと帰宅の路を歩む。

無言ほどダメージを与えてくるものもなく、シャニーは色々話しかけて誘導するものの彼には通用しない。

「お前が淑やかなら、世界中の女性が皆淑やかかってことじゃないか」

終いにはキツイ一撃をお見舞いされてしまった。当然シャニーも顔を膨らせてぶーぶー文句を言う。

「どういう意味よ!? ぐっあいさつねー！」

「怒鳴るなよ。お前さ、顔は可愛いんだから、もっと淑やかにしてればモテるのに」

思わずドキツとして、視線が泳いだシャニーは口から出かけていた文句を飲み込んでそっぽを向いた。

幼馴染とは言え、異性に可愛いと言われたのは初めてのこと。それ

もウツデイのような真面目な人に言われたのだから尚更だ。

月明かりに照らされながら、良い気分で帰り道を歩く。

「ホントだよ。別にイヤミで言った訳じゃないよ」

「ふーんだ。そんなありきたりの言葉で取り繕おうと思ってもダメだもんね。あー、傷付いた!」

わざと駄々をこねてウツデイを困らせるが、もう10年以上の付き合い。軽くあしらわれた。

「お前は一日寝れば直るから大丈夫だよ」

「ちえ、もうちよつとひつかかってくれてもいいじゃん」

ほろ酔いの楽しい帰路。その時だった。何か気配を感じる。殺気に満ちた何かがちらをじっと見ている。焦って周りを見渡すも、周りには誰もいない。

「どうしたんだ?」

「しっ」

立ち止まってあたりを見渡しながら後ろをついてくるウツデイに合図する。

(何……? この刺されてる様な……嫌な感じ)

この感じは間違いない。前アルマを狙った夜賊と同じ、殺意に満ちた視線。

しかも今回は前回とは比べ物にならないほど鋭く、今にも串刺しにされてしまいそうなほど。

(剣……置いてこなくて良かった。あたしが何とかしなきゃ)

思わず手が腰の剣にかかる。ルシヤナを急いでたたき起こすも、彼女は丸腰。守れるのは自分しかないなかった。

「!!」

シャニーはとっさに、千鳥足でふらふらするルシヤナを体当たりで吹き飛ばした。

不意打ちを食らって地面に叩きつけられるルシヤナもようやく目が覚めたようだ。

だが、彼女の目が覚めたのは地面に叩きつけられたからではない。彼女には見えたのだ。今さっきまで自分がふらふらしていた場所を、

無数のナイフが通過していくのを。

もしあのまま酔いに任せてふらついていたら、今頃蜂の巣になっていた。

シャニーにも追撃のスローイングナイフが飛んでいくのが見える。軽快な足取りでナイフを避け、避けられない分は剣で弾く。

ルシャナはシャニーが実戦で戦うところを初めて見た。何せ十八部隊に出撃命令など出た事は無い。

目の前にいるのは本当に親友なのだろうかと目を見張る。実戦に実戦を重ねた修行をしてきたその動きは、騎士団の誰にも見たことが無い素早さ。

彼女も応戦しようと腰に手を伸ばす……だが、遊び出るために着替えた普段着に、帯剣用のベルトはあるはずもない。しかたなく飛んできたナイフを拾い集めて装備する。

最も狼狽したのは非戦闘員であるウツデイだ。何が起こったのか理解できず、その場であたふたしてしまふ。

「バカー！ そんなところでふらふらしてたら死ぬわよ！」

シャニーとルシャナが二人がかりで、パニックに陥ったウツデイを後ろの方へつまみ出す。

しばらく目に見えない敵からの一方的な攻撃をかわし続けた。

(どこだッ、どこにいる?!)

やっとのことでスローイングナイフの雨が止む。タマ切れか、突然の静寂は焦りばかりを掻きむしる。

左右を鋭く目だけで牽制しながら相手の位置を探る。まるで気配を感じ取れない。嫌な汗がジワツと湧いてくる。

(一体何なの?! 夜賊にしては、ちょっと技術がオカシくない??)

二人は互いに背中を任せて相手の出方をうかがう。

(なっ……?! う、ウソでしょ?)

その二人を弄ぶかのように現れる人影。今まで何もなかった空間に水が湧くかのように漆黒が揺らぎ、人が突然現れた。

強国の王や、古代竜と対峙してきたシャニーもこれには瞠目して慌て、思わず後ろに引きながらも剣を握り直して目に力を籠める。

こんな奴は初めてだ。全く気配も感じさせずに、こんな至近距離まで近づいてくるとは。

(……こいつ、賊じゃない)

直感が彼女に危険をひっきりなしに伝えてくる。改めて相手確かめずとも、やはり賊と言うような体格ではない。

スラツとして背も高い。まるでどこかの貴族かと思わせるような整った漆黒の服装。

そして顔は……鋼鉄のペルソナ。

ペルソナに開く二つの穴からは、自分達を貫かんとするほどに鋭い殺意。

(理由は分からないけど、どうやらとんでもない相手を敵に回してしまったみたい……)

シャニーもルシャナも、手汗に滑る武器を握りなおす。瞬きすら恐ろしくて出来ないくらいの緊張感に喉が張り付きそうだ。

そんな二人を嘲笑うように、黒ずくめの男は明朗な口調で一礼してきた。

「夜分遅くに失礼します。アナタが、かの有名な八英雄の一人ですね？ お名前は？」

「え、シャニーってそんなに有名だったっけ？」  
知っていて聞いているに決まっている。標的の名前も調べない暗殺者がどこにいる。

横から幼馴染の未だ酔っているのかと思うようなツツコミが飛んでくるが、今それに応える余裕はない。

視線を逸らせば、殺られる。

「……別に。それより、人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るものじゃないの？」

とてつもなく危険な臭いがする。相手からは血の臭いがぶんぶんする。まるで体から血が滴り落ちているかのようだ。

「これは失礼しました」

彼は再び頭を下げてきたが、その肩は明らかに笑いに揺れている。「歴戦の騎士様を相手にとんだ失礼を。ですが、私は名乗る名前をあ

いにく持ち合わせておりません。実に残念です。アナタがシャニー様。イヤア、是非お会いしたいと切に願っていたのですヨ」  
やたらと饒舌でベラベラ軽い口調が、警戒心で尖る神経を逆なでる。

剣を霞に構えて守りを固めながら、少しずつ、じりじり距離を詰める。

「あたしはあんたなんか知らないよ。何が目的なの？ あの歓迎の仕方だし、会いたい理由は分かりきってるけど」

前髪の影の下から、鋒の向こうを見据える青の瞳が月光に煌めく。こういう奴は危険だと今までの経験で分かっていた。

少しでも相手に余裕を与えない為に、こちらが気を弱くしてはいけない。そんな虚勢が通用する相手ではないと分かっている。師の教えは常に心にある。

師が見せ続けてくれた背中に少しでも恩を返すために鋒の向こうを鋭く睨む。

だが仮面の男には、シャニーが焦っていることが手に取るようになっていた。何故焦っているのかすらも。

逆にシャニーも察していた。自分の心が読まれている事が。余裕が相手の振る舞いに現れている。

「アナタは以前、夜賊から赤髪の親友を助けましたね？」

赤髪……夜賊……忘れるわけもない。電撃が走ったかのように、驚きと怒りでまたシャニーの目じりが吊り上がる。

「！　そうか。アルマを襲ったのはお前だったのか！」

何度も響く舌打ち。彼女の怒りを掌で転がすように弄んで男は立てた指を振ってきた。

「勘違いしないでください。私は彼女に何も危害を加えていませんヨ。指示はしましたがネ。アナタは親友のために実に良い行いをした。そう思っているだけです」

仮面の男はわざとらしい拍手をして見せ、そして口角を釣り上げる。彼の挑発に乗らないようにグツと自身を律しながら霞を向け続けるが、男がお構いなしに喋りかけてきた。



「……そうですね、やはりあの赤髪はアルマなのですね。これだけでもアナタにお会いできた甲斐がありました」

(しまった……!)

思わず舌打ちしてしまった。まんまと相手に乗せられて情報を渡してしまおうとは。

細心の注意を払いながら、仮面の男ににじり寄る。相手がどんな話術を使おうと、敵であることに間違いはない。

「何が目的?」

「ん?」

「あたし達を襲った目的は何? アルマを襲った理由は何なの?」

いつでも斬りかかれる距離まで間合いを詰めると、正眼に構えて鋒に男を捉えた。ルシヤナもいつでもナイフを投げられるように両手に構える。

二人に攻撃的な構えを取られても男は動じることもなく、後ろで組んでいた手を解くと手をゆっくりと体の前に突き出して、彼女たちを宥めるようにヘラヘラしている。

「アルマはですね、熱狂的なファンがいるんですヨ。その人が過激に出してしまった、と言う所でしょうか。いえ、私は別に良いんですけどネ。たかが子供一人に何が出来るという訳でも無いですから」

十中八九、嘘だと三人は思った。アルマが確実に、周りに敵を作っているという以外は。哀れに思いつつも、納得してしまうのは何故だろうか。

彼女は別に、間違ったことをしているわけでも、悪事を働いているわけでもないのに。

「じゃあ、私達は? 私達は恨まれる様な事何もしてないよ?!」

突然振って湧いた災難に、興奮気味のルシヤナが叫ぶ声が荒野に響く。

面識なんて無いし、自分達のような騎士団に入ったばかりのいわゆる「ペーパー」が、人に恨みを買うようなことを出来るはずもない。

不安と怒りが煮える視線を前に、彼は敵を前にしているとは到底思えないような軽い口調であっさりと答えてきた。

「別に、何も」

思いもよらない理由を聞かされ絶句する三人。  
シヨーに理由など要るまい。表情の固まる三人の様子を楽しむかのようには男は続ける。

「まあ、それでは納得しないでしょう。じゃあ理由を作りましょうか。そうですね……よし、名案ですよこれは。……ではこうしましょうか」

真つ直ぐに腕を伸ばし、指先で一点を指す。その彼の指先にいるのはシャニー。

次の瞬間、耳が壊れそうな重く嫌な音と共に青白い閃光が一直線に迸り、見開いた瞳に吸い込まれるように突っ込んでくる。

(なっ、ま、魔法?!)

横に飛び退けて雪原に身を転がしながら何とか避けたが、髪の毛の焼ける臭いがシャニーの鼻を刺した。

後ろを見てごくりと息を飲む。針葉樹には穴が開いていて、穴の周辺は真つ赤になって向こうを覗く窓となっていた。

(あんなの当たったら、黒焦げじゃ済まないぞ……)

穴を開けるだけでは足らず、その奥では木が音を立てて倒れているではないか。

「へえ、今のを避けるなんてスゴイですね。いやあ、さすが八英雄サマですネ」

体勢を取り戻し、男のほうを睨む。彼は余裕を見せつけるように拍手をしていた。その口元はまるで曲芸でも見たかのようにぽかんと開いて笑っている。

油断があった。大量のナイフの雨に意識させられ、相手は盗賊かアサシンかと思っていた。だが、実際は強力な魔力をおわせる雷使いのようだ。

彼は手先で嫌な音を立てながら青白い電撃を走らせ、シャニーを悦の表情で眺める。

「アナタは私の邪魔をした。だから攻撃されて仕方ない。そう言う事にしておきましょうかね」

耳に障る電撃の爆ぜる音と含み笑いを漏らす声にハツとする。

いつの間にか、見せつけられた魔力に士気を折られかけていた事に気づいて己を戒めると、シャニーはもう一度霞を構え直す。

「大丈夫、私は全く根に持つていませんから。安心してください。だから、早く気づいていただけると嬉しいですネ。……死ぬ前にお願ひしますよ」

相手の真意を読めないまま、脅威と向き合うこととなってしまった。逃げる事も出来ないし、仮に逃げられたとしてもまた騎士団へ襲ってくるだろう。自分のした事で騎士団——テイトに迷惑をかけるわけにはいかない。

魔法使い相手に天馬は居らず、投槍も無い白兵戦では完全に分が悪い。

（今二人を守れるのは、あたししかないんだ。イリア騎士の誓い、守ってみせる！）

それでも、彼女は戦いから逃げなかった。剣を握り直し、雪原を駆け距離を詰める機会をうかがう。

魔術師の両手から繰り出される蒼の雷撃があたり一面を焦がし、白銀は真つ白の空間へと変貌していく。

輝きのある白は、それを失った万物の成れの果てへと変わってしまった。あんなものが当たたらひとたまりも無い。

（破魔の陣……もう少し練習しておくんだ……）

かつてデイクから対魔法用の防御技を教えてもらったが、天馬乗りである自分では使いこなせなかった。なにしろデイクは歩兵。歩兵だからこそその自由性が騎士には無いからだ。

だが、今は天馬はいない。防御技を使いこなせたらどんなに楽だったろう。

天馬騎士団に入ってからむしろ天馬を降りて戦う機会も増えたのだから、もう少し練習しておくのだったと後悔するが、今更ではどうしようもない。

こんな強力な魔法の前でそんな慣れない技など使い物にならないだろう。

必死に間合いを詰めては連続剣を浴びせようとするが、相手も魔道の使い手。近づいたかと思えばすぐさま転移の術で逃げてしまう。

「ハハハ、流石にお強いですね。でも、一太刀も当りませんか?」

剣を脇に構えながら突っ込み、隙小さく斬り上げても嘲笑うかのようには転移したかと思えば、即座に指先から迸る蒼の雷撃。回避の身振りから流れるように駆け出して再び脇から斬り上げる。

「アインスの風!・イクシード・アクセルの青嵐!!」

天馬で滑空するかのように風に乗った一撃で一気に距離を詰め、すれ違いざまに下から斬り上げの一閃を浴びせる。

(捉えたか?! ……いや、掠っただけかッ)

「ハハッ、鬼ごっこか何かですかネ? お遊びなら砂場でやってもらえます?」

相手との距離を刹那の内に火花の如く縮める、自身の中でも一番に出の早い剣技でさえまともに触れられなくて、背後から雷撃だけでなく嘲笑まで飛んできて牙をむき出しにする。

「うるさい! そっちだつて空振りばかりで魔力を消耗しすぎなんじゃないの?!」

しばらく膠着状態が続く。戦っている側はともかく、見ていることしか出来ないウツデイにとっては、いつまでもこの状態が続いても不安が募るだけだ。

(助けを呼んでこよう。このままじゃ二人が危ない)

ウツデイは二人が激闘を見せる隙を見て、騎士団に事を知らせようと走った。

だが、一流のアサシンがそれを見逃すわけは無い。「これで終わりです!」とつさに向きを変え、彼の背面に電撃を浴びせる。

「ウツデイー!」

ルシヤナの悲鳴が聞こえる。ウツデイも背中から殺意が近づいてきて、嫌な音と共に周りが明るく照らされだすのが分かったが、どうすることも出来ない。剣術も何も知らないのだ。この時、彼は自分に武の才が無い事を恨んだ。

人に直撃する蒼の雷。あつという間に包み、それを灰と化す。

悦楽の時……仮面の男は次の瞬間、笑顔を一瞬曇らせた。

「つつ……。ちよつと、ウツデイ！ 大丈夫?!」

ウツデイは間一髪のところまでシャニーに助けられていた。

「た、助かった……」

「何が助かったよ、このドアホ！ 死んじゃったらどうするのよ。一体何考えてるのさ！」

ウツデイは謝って頭を下げ、再び頭を上げてみて驚いた。幼馴染の瞳に浮かぶ涙。泣いている所を初めて見てしまった。

「ご、ごめん。皆に知らせてこようと思ったんだ。ごめん、泣くなよ」先のベルン動乱で、シャニーは知り合いが倒れていく姿を嫌と言うほど見てきた。そして、祖国で自分を大切にしてくれた人達すら倒れたとき、何かが彼女の中で変わっていた。

——もう、戦で大切な人を失いたくない！

その想いは彼女にとって、他の天馬騎士よりも人一倍強い感情だった。

「……無理しないでよ」

「本当にゴメン、お前こそ大丈夫なのか？」

彼は鞆から手製の傷薬を取り出すと彼女に手渡した。手製とは言え、市販の傷薬よりはるかに効くと評判の一品。

シャニーはウツデイに言われてから頭の激痛に気付く。額のあたりを触ってみると手は真っ赤。

どうやら先ほどウツデイを庇った際に出来た怪我のようだ。白い髪留めも真っ赤に染まって痛々しい。

自分のせいで仲間を怪我を負わせてしまった後悔の念を押しつぶし、ウツデイは一路カルラエ城へ走った。

「へえ、破魔の陣ですか。いやはや、良い技をお知りのようで。もつとも、貴女の技量では私の魔法を封じきれないようですがネ。おやおや、お美しい顔が血で台無しだ」

口が達者な相手に乗る余裕もなく、傷に薬を塗りこみながら彼の注意をひきつける。

顔まで垂れてきた血腥い感触が、閃電の魔術師が放つ青の雷撃の威

力を脳髓に伝えてきて震えが走る。

次、あれを食らえば、どうなるか分からない。

後がない恐怖を噛み砕き、霞に構えて距離を縮めるところからやり直す。

(……それにしても、運がよかった)

教えてもらったと言っても、やっているところを見ていただけ。

見よう見まねの生半可な護陣だが、直撃を免れただけでも十分挑んだ価値があった。

たまたま成功したからこれで済んだが、もし失敗していればウツデイのみならず自分もやられていたかもしれない。

——後先考えずに、その時の感情で動く事は止めなさいと何度言ったら分かるの！

頭の中で姉の言葉が蘇る。根拠のない行動はまた叱られてしまうだろう。姉の言葉が正しい事は、ズキズキ疼く頭が教えてくれる。

でも、そんな事を考えている余裕はない。こちらを眺めている目の前の敵は、未だ余裕綽々。

正しくないかもしれない。でも、雷撃を払った自分の剣を彼女は信じて、鋒で魔術師の額を捉えて相手の動きに全てを傾ける。

「何でウツデイまで攻撃するの?! あんたの狙いは作戦を妨害したあたしのはず。他の人には手を出さないでよ。卑怯だよ!」

月が山に隠れて見えなくなってきた。  
ウツデイの姿が見えなくなったことを確認すると剣を握りなおす。

ここからなら、走ればカルラエ城まで10分もかからない。一人では抑えるだけで精一杯でも、応援があれば容易く撃破できるはずだ。「卑怯って何ですかア? アナタ……騎士のクセに随分と平和ボケしてるんですネエ?」

八英雄と言うのは所詮飾りか。魔術師は絡みつく様な声で侮蔑をシャニーの顔に吐きかける。

酒場で見ていた時は戦場に出れば変わるのかと期待したが、相変わらず隙だらけで、どこから突いたらいい声を上げるか悩んでしまうくらいだ。

「私は任務をこなしているだけ。アナタに気づいてもらうには枯草に火を点けるのが一番ですから。ふふふ……」

背筋の凍るような台詞。目的の為なら、手段を問わない。

それは狂気。命をチェスの駒の様に扱ひ、トマトを潰すかの様に握りしめ、叩きつけて飛び散る様に悦を叫ぶ狂気。

まさかその狂気を力を持たない者に振るうとは。

柳眉吊り上がる青の瞳の鋭さが、握る剣の如く切れ上がる。

(コイツ……いもう、許せないッ)

ウツデイが帰ってくるまでは持ちこたえなければならぬが少し荷が下りた気がした。

相手がその気なら、彼はこの場にはならない絶好的的。

正直、自分の身を守るだけ、生き残ることで精一杯だが、その中で民を守るといふ騎士としての務めを果たした。この安堵感が、シャニーの心を少しだけ楽にする。

危険の中でも、彼女はイリア騎士としての心を忘れてはいなかった。そうでもなければ、今頃とつくに逃げ出している。

その中に少しづつ燃え上がる怒り。青い焰がゴツと音を立てて少しづつ、心の中に燃え広がって強大な敵を前にした恐怖を焦がして行く。

「ルシヤナ！ 援軍が来るまで何とか凌ぐよ！」

「あいよー！」

彼女は大切な人達の為に、親友と共に狂気へと向かっていった。

相変わらず、威力は低下を見せない電撃の矢。

もはや周りには灰になるものが何もなく、森の真つ只中であつたはずが平原かと思うくらい、傾きかけた月の明かりが降り注ぐ荒野と化していた。

ひしやげた白の荒野に、若い騎士達が生き延びようと必死に喰らいついく。

「ふふ、良いエーグルですね。これは予想以上だ。もうそろそろ、灰にするのも悪くない。では、本気を出させてもらいますよ！」

楽しいシヨールはフィナーレへ向けてより一層に青い電撃が輝きを

増し、出演者の顔をスポットライトのごとくくつきり浮かび上がらせ始めるのだった。



## 第4話 追憶の誓い

——立てなくなってもいい！ どうかもつと早く走れ！  
体を斬るような寒さの中をウツデイは必死で走った。

騎士として体を鍛えているシャニーたちと違って、毎日研究室か事務室での仕事をしている彼に体力なんて無い。

すぐに息が切れ脈が上がってくる。足元がもたつき、木の根に躓いて宙を滑った。

足に走る鋭痛。それでも泥を蹴り上げすぐに立ち上がる。

こんな痛みと別次元の世界に親友を置いてきてしまった。少しでも早く援軍を呼ぶことが一番の助けになる。

足に鞭を打ってひたすらに走って、走って、ようやく見えてくる見慣れた城。

時計を見れば昼勤の騎士達が登城する時刻までもう少しだ。

熱でもうろうとする頭を何とか抑えながら、カルラエ城の外城門を突破する。庭に見える人影。

(助かった！)

彼はすがりつく思いで、その人の許へ転がり込んだ。

「……なんだい、シャニーの幼馴染じゃないか。こんな時間にジヨギングかい？」

その声を聞き、彼は救われたような気持ちになった。

なんとか彼女にすがりついたものの、闇夜で女性相手にする行動ではなかった。

ただでさえ上がっていた息は首にダガーを突きつけられて声を出す事も出来ない。

しばらく背中をレイサにさすってもらい、ようやく口がきけるようになる。と今まで喉に詰まっていた声が一気に飛び出した。

「レイサさん!!」

「んな大声出さなくても聞こえてるよ。それに名前言わなくなっちゃって周りに誰もいないんだし……」

「シャニー達を助けてください!」

目付きが変わった。ある程度悟っていたが上層部に確認を取っているような余裕はない。

ダガーを鞘にしまい、バンドナをきつく締めなおす。

「ウツデイ、団長はまだ登城してないから、夜勤の副団長に事を知らせておいで」

彼女はウツデイから場所を聞くと、あつという間に風に溶けて闇夜へと飛び去っていった。

ウツデイにとってはレイサが頼り。親友達を託し城へ走りこむ。

騎士たちの詰所のある東棟はあまり馴染みがないが、明かりのついている部屋を探して中に飛び込んだ。

居眠りしかけていた騎士がびつくりして飛び起きて、何事かと集中する視線。その中でもウツデイの目に付いたのは目立つ赤髪……アルマだった。

動じる様子もなく、横目で慌てる様子を嘲笑する仕草すら見せる。

元から彼女はウツデイの事をあまり良く思っていないらしく、普段からツンとした態度だったから彼は気にはならなかった。

だが、肝心の副団長がいない。止む無く面識のあるアルマに話しかける。

「アルマさん、すいません」

「何の用ですか？」

あからさまな態度に少し腹が立つが、今は感情に身を任せて良い時ではない。幼馴染たちの笑顔を思い浮かべてぐっと堪え、副団長の行方を問う。

「イドウヴァ副団長はどちらに？」

「部隊長ならエデツサ城へ向かわれました。部隊長はお忙しい方ですから。あなた達のようないくらでも時間のある人達が、来てすぐ対応してもらおうなんて難しいと思いますよ」

どうやら、医者やら研究職といったものを毛嫌いしている様子だ。それが何故かは分からないし、武人が官吏を嫌うと言う話も良く聞く事。

普段ならそれで流すが今回ばかりは話が別だ。とうとう爆発する。

「お前……ッ。誰のせいでシャニーたちが危険な目に遭っていると思っっているんだ！」

「何ですか？ いきなり声を荒げて、落ち着いてくださいよ」

相変わらずのポーカーフェイスで冷たい口調のまま返してくるアルマに、食い気味に感情のままをぶつける。

「黙れ！ お前を助けさえしなければ、シャニー達は夜賊に襲われるなんて事も無かった。それなのにお前は……！」

そこまでウツデイが怒鳴ったところで、アルマは突然立ち上がった。

殴りかかってくるのかと思ったらそのまま風を切って素通りし、立てかけてあった槍を掴むと踵を返し、ウツデイに顔を押し付け咆哮を止めさせる。

「私が悪かった。シャニーは何処にいる？」

押され気味にシャニーの居場所をアルマに伝えると、彼女は退けと言わんばかりにウツデイの横を抜けて、いつもの仏頂面を保ったままツカツカと早足で廊下の角を曲がっていた。

その場に残されたウツデイはぐっと悔しさを胸に押し込め、周り様子うかがっていた騎士達を呼ぶ。

幸い、彼女たちは事情を話すとすぐに出撃の準備を始め、蜂の巣を突いたような騒ぎは一瞬のことだった。

皆が出撃してがらんとした事務室。

彼はようやく大きく一息吐くと思いきり拳を壁に叩きつけ、その先を睨む目が震える。

アルマの態度に腹が立っただけではない。彼は自分自身に腹が立っていた。悔しくて堪らない。祈ることしかできない、己の無力さ。

彼は悔しさを引き摺りながら医務室へ急ぐ。医療道具を持って急いで親友のところへ戻らなければ。

親友の危機を、これ以上ただ見ているだけであることなど出来はしなかった。



肩が大きく揺れ、荒い息遣いにもうもう白く湧きあがる。顎から伝う汗を拭う余裕すら、あの男は与えてくれない。

(一体……どうすれば良いって言うの？ こんなに斬っているのに……なんでこの男はピンピンしてるワケ?!)

最初に比べたら大分、剣が相手に通るようになっていた。直撃までは行かずとも、それなりの感触があった事だって何回かあったはずだ。

「……ふふふ、さすがですネ。楽しい時間をどうも。しかし、そろそろ飽きてきましたネエ」

狂気の根源は相変わらず。互いに致命傷を与えられないまま、時間だけが過ぎていく。

掛けられる見下した言葉は、肩で息をするシャニーに焦りばかりを募らせた。

一撃でも食らったら終わりのプレッシャーと、汗すら凍りつきそうな極寒の風。

体力だけを奪われていくが、何度もデイークの言葉を頭の中で繰り返す。

——自分の命は自分で守れ

そう彼女は見習いの頃師匠に教え込まれた。

己の士気さえ絶やさなければどうにだってなる、一定以上の戦場は己との闘いだ。

(絶対にッ、絶対に退かないぞ！ もう少し、もう少しで援軍が来る。頑張れ、あたし！)

彼女は果敢に鉄の剣一本で身を守り、仲間を助け、攻めの太刀を振るっていた。

あの仮面の男も余裕を見せてはいるが、何かに焦っているのだろうか。精彩を欠き始めている。

仮面で表情は見えないが、被弾する回数が最初に比べると明らかに増えていた。

親友だけに戦わせるわけにはいかない。このチャンスにルシヤナ

が男の隙をじつと見つめ時を絞る。

「これでも食らえ！」

シャニーへ魔法を放つ男ヘルシャナがとっさに短剣を投げつけ、「なっ?!」刺さりはしなかったが短剣の重さがそのまま衝撃となって襲う。

(今しかない!!)

その一瞬の隙をシャニーは見逃さなかった。脇に剣を構え、つま先に力を籠めた刹那、灰白の大地に白煙を巻き上げて飛び出し、風に乘って滑るように駆ける。

電光石火に懐に入り込むと、守りを許さない颯が男を包んだ。

ツッパアイ  
「二の颯！・万華の流星!!」

颯の中から現れては消える、瞬きすら許さない四方八方からの無数の斬撃が降り注ぐ。

為す術なく斬撃の舞を浴びて斬り上げにのけぞった瞬間、夜空に飛んだ視界に映ったのは、両手を剣にかけ、飛び上がって渾身を叩きつけてくる騎士の姿。

「受ける！・終の太刀、黎明の月光!!」

確かな感触。確実に相手の肩を切裂いた。間髪入れず絶叫する男の背後へ回り、背中へ鋭く描くバルサミックムーン。

短剣が光つてわずか30秒の出来事。

持てる剣技の中でもこれ以上ない大技が最後まで決まると、今まで猛威を振るっていた男が目の前でうずくまって膝をつく。

シャニーの許ヘルシャナが駆け寄り、二人で男に近寄る。何故アルマを襲ったのか、その理由を聞くために。

「あたし達を見くびりすぎていたようだね」

剣についた血を振り払うと、うずくまる男の目の前に立った。

彼女が男の目線を合わせようとした、その時だ。

(!! コ、コイツ……?!)

先に男が目線を合わせてきた。貫かんばかりの恐ろしい視線が鋼鉄の仮面を貫いて伝わってくる。

その狂気に取り付かれた殺意の死線に気付いたシャニーは、焦って

左手に持った剣を力強く握り締めるが、この距離ではどうする事が出来るというのか。

(し、しまっ！)

男の放った螺旋描く電撃魔法の波動の前に為す術なくあつけなく吹き飛ばされる二人。

一瞬の出来事で受け身も取れないまま太い幹に叩きつけられて飛ぶ視界。

ようやく落ち着いても視界は動かせず、広がるのは赤が点々と浮き上がる白の世界。

(た……立たないと……。このままじゃ……マズい)

土気だけで何とか体を起こそうとするが、頭を打った為か全身が痺れて思うようにいかない。

頭から温かいものが伝ってきている事だけが分かる。

「くっ……」

相手が鮮血を腕から垂らしながら、こちらへゆっくり歩んでくる。

何とか剣を突き立て寄りかかりながら膝を突くシャニーだったが、どう頑張ってもここまですでに精一杯で足が動かない。

(ルシャナは?! ルシャナはどこ??)

ルシャナの姿を目線だけで探す。姿を確認は出来たが、うつ伏せに倒れていてピクリともしない。

頭から流れてきたものが顎を伝って雫となり、下腹部をすぐに真っ赤に染めていく。

仮面の男も一撃を喰らった場所を中心に、月光が鮮血をどす黒く照らし、明らかに斬れ込んでいるのが分かる。

(今ここで立ち上がる事が出来れば……まだ勝負は分からない)

奥義を叩き込んでまだ立っている相手に絶望感が湧くが、師の言葉を胸に悲鳴をあげる体に鞭を打って何とか立ち上がろうとする。

男がある程度シャニーに近づき、ようやく彼女の膝が少しだけ浮いた時だった。

「あ……っ!?!」

シャニーは声にならない声をあげ、表情が凍り付くように固まって

いく。

(そ、そんな……そんなコトって……)

「この私をここまで追い詰めたのは、アナタが初めてです。でも、私を倒すなんて、人間のアナタにはできっこない話ですよ。気づくことができないアナタではね……」

大きく引き裂かれ、今もどくどくと血が流れ出す肩へ男が手をかざすや、見る見るうちに塞がっていく傷。

これが魔法の力なのか？ いや、こんなものは見たことも無い。

(杖もなく回復魔法を使う何て……ありえるの?!)

「私、不死身なんですヨ。聞いてないって？ だって言ったら……その顔、見れないじゃないですか？」

シャニーが目を見開いて驚いているほんの間に、与えた傷はすっかりなくなつて元通りになつてしまった。

その顔を見下ろす男の口元は、これでもかと言うほどに快樂に吊り、白い歯が見えている。

まるであの二度と無いようなチャンスも、最初からわざと見せてきたのかと思うくらいに憎い顔を見せつけてくる。

(捉えたはずだ。あれだけ全部で打ち込んだのに！ 不死身……??)

何なのよツ、コイツ！)

「あはは、そんな驚いた顔をしないでください。でも……いいですネエ。焦りと絶望に塗れたその顔ツ！」

「う、うるさいツ……」

垂れてくる血で半開きしかしない目を必死にこじ開けて闘志だけは渡さない。

だが絶望はもう、体を蝕んでいた。何とか突いた膝は力なく崩れ、再び座り込んでしまっている。

垂れてきた血の赤が混じり、どんどん前のめりに崩れていく視界を止められない。

(どうすればいい……あの技で仕留められないんじや……)

焦りや絶望を、何とかして相手に見せないように努めているつもりだった。その甲斐なく、男にそれが伝わってしまっていると思うと悔

しい。

今、この両手を支える剣を蹴飛ばされたら、もう身を起こす自信はなかった。

崩れた虚ろな視界に映らない男の姿。食いしばって顔だけでもたげると、心を直接逆撫でるような絡みつく声を浴びる。

「ですが……惜しい、本当に惜しい。ホンキでアナタを殺したくなってきましたよ。大丈夫、今度は痛みも伴わずに、血すら灰にして差し上げますから。では……行きますよ！」

男が血に濡れた右手に、耳を劈く不快な音を立てながら青い電撃を宿す。

たちまち血は燃え上がって黒くなり、そして白くなって宙へ散って行った。

(こいつは……本当に不死身なのかッ。あたしじゃ……ムリなの!?)  
逆る稲妻がゆっくり歩み寄ってくる。

今までなかった恐怖を、ここに来てどうとう覚え始めてしまった。騎士として、最も覚えてはいけない感情。

(あたし……死んじやうの……)

頭では分かっている。だが、もうどうしても抑え切れなかった。死を前にした絶望を、初めて覚える。

彼女は断罪の雷から目を背けて、下を向いてしまった。

(お姉ちゃん……ごめん……)

もう立ち上がれない。もうこの突き刺さった剣を引き抜いてあの男に立ち向かえない。

激痛が呼んでいる、早くおいでと。目の奥にスツと意識を預ければ楽になれると。

もはやこれまで……、俯いた視界で稲妻に照らされて輝く何かがある。ぶ。

(これ……。……ロイ様。そうだ、ロイ様との約束も……。破っちゃうね……)

それは自分の首からかかっているロケットだった。ベルン動乱の時、仲の良かったロイからプレゼントしてもらったもの。



嬉しくて、嬉しくて、それからずっと肌身離さず身に付けてきた。あの時、つい流れで交わってしまった約束などすっかり忘れていたのに、何も考えられないはずの頭に浮かんだ彼の優しい顔。

「えー！ あたしなんか、そんなことしてくれなくていいよ！ それに、ロイ様から物をもらったなんてデイクさんに知られたら、あたしゲンコツされちゃうよ！」

何でそう言う流れになったのかはあまり覚えていないが、ベルンへ攻め込む直前にエデッサでの休息日を使って、一緒に買い物へと出かけた。

そう言えば地元だから町を案内すると言ったか……。

その道中で立ち寄った店で、ロイがシャニーにロケットを差し出していた。

「いいって、デイクには僕から伝えておく。君は僕の部下というだけじゃなくて、大切な同世代の親友なんだから。このぐらいしかしてあげられないけど、受け取って欲しい」

そのときは、大切な親友と言われて嬉しくなって言葉に甘えた。

ロイがデイクに説明をしても結局ゲンコツを浴びたが、貰って良かったと思った。

「中に何を入れるの？」

「うーん、やっぱりこれかな」

そのとき、シャニーから渡された写真を見て、ロイはしばし言葉を失った。

男性と女性の写真。女性はかなりシャニーと似ている。

「それね、あたしのお父さんとお母さんの写真なんだ。もう死んじゃったけどね」

説明を受けなくても、ロイには分かっていた。

そして改めて思い知る現実。動乱に終止符が打たれたとき、彼女は帰る。命を危険に晒す日常へ。彼女の母と同じように。

動乱と言う異常が収まれば平穏へと戻る、自分たちとは違う世界へ行ってしまおう。

「シャニー」

「うん？」

「死んじやだめだよ。死んだら、皆が悲しむ。もちろん、僕だって」  
両肩に手を置かれて、真剣な眼差しで迫られるものだからシャニーは視線が泳ぐ。

いつもの気さくな青年の顔ではない。ただただ、まっすぐ見つめられて、どこに視線を逸らしたって彼の顔が世界に映りこんでくる。

(え……どうしたんだろ、ロイ様)

「生きて……、生きて、生きて。生きて絶対に、フェレへ遊びに来てくれ」

突然のことで深く考えずに返事をした記憶は今でも鮮明だ。

何故かすぐく焦ってしまっていたことを今でも覚えている。

「へ、へーきだよ、へーき！ そう簡単に死ぬわけないじゃん。ロ、ロイ様だって無茶しちやダメだよ」

……………

「これで終わりです！ お死になさい！」

仮面の男が思い切り振りかぶり、彼には珍しい怒声と共に掲げた手に轟く稲妻をぐったりとうな垂れるシャニーへと投げつける。

そんな絶体絶命を前にしてもシャニーにはもうどこか他人事のように、あの時のやり取りを思い出していた。

ぼんやり映る世界の真ん中を、青白い光が突き破ってくる……。

ロイとした、死んではいけないと言う約束。

そして、ペンダントの中で笑う在りし日の母親から、常に言い聞かされていた言葉。

—— 死ぬな！ イリアの礎たれ！

彼女の頭の中で、親と友どちらも掛け替えのない二人の言葉が融合して頭に響き渡った。

—— 絶対に諦めるな。絶対に死ぬな。約束したじゃないか！

(でも、もう無理だよ……こんな体じゃ……)  
諦めるな！

生きて、生きて、生きてここへ帰ってこい！

(あの声が、あの人が呼んでる……。帰りた、あたしだって、帰りた  
いよ!!)

ずっと燻っていた青い焰が千切れた鎖の間から噴き出して、生を渴望して爆発するように燃え上がる。帰りたいとひたすら慟哭して荒れ狂う。

その命の焰を掻き消そうと迸る蒼白の閃電が極寒を貫き引き裂いていく。

渾身の魔力を用いて放たれた蒼電の螺旋が、シャニーの打ち付けられた大木もろとも消し炭すら残さず飲み込んだ。

「はあ……はあ……ふふふ……」

流石の彼も少々息が上がったようだ。

煙が収まり、目の前に荒野が広がるのを見届けると、彼はふっと一息ついた。

「ふふ……ははは……あははははー!」

破壊と言う最高の悦に浸り、欲望を満たした彼は快哉を叫ぶ。

だが、勝利に終わった次の瞬間にはもう、彼の顔から笑顔は消えていた。

とつさに身を翻したが、首筋を再び染め上げる赤に不愉快そうに口元が歪む。

「甲高い声で笑うな。耳障りだ」

「ぐっ、アナタ……流石にしぶといですね」

すぐに止血をした彼は、自分の背後から騎士剣を喉に突きつけるシャニーを睥睨する。

背後で見開かれる翠の眼を見て、男は喜んだ。

「いやあ、流石ですネ。あれだけの怪我を負っていて、まだこのような行動が取れるなんてね」

首にかけて剣を更に食い込ませる。彼女の目は血走っていて、いつこのまま剣を振り回しだすか分からない。

そんな一触即発の重い静寂の中でルシャナがようやく意識を取り戻す。

大事な時に気を失い、事態がどうなっているのか慌てて周りを見渡

そうとするが、その必要もなかった。

目の前で親友が敵の背後から剣を突きつけているのだから。

飛び出そうとするルシヤナは友の眼を見て息を呑んだ。親友の姿をした悪魔でもいるのか？

いつも知っている瞳と似て非なる碧き目に満ちているのは殺気。

「これ以上好き勝手はさせない。……この場で斬る！」

「おお……これは恐ろしい……」

冬空さえ凍てつかせる殺気を前にしても、仮面の男の口元はただ笑うだけだった。

## 第5話 剣折れて

——絶対にツ、絶対に許せない!!

仲間を傷つけ、無力な者を巻き込んだこの男を絶対に許せない！  
憎い、憎い憎い……この仮面の男が憎くて堪らないツツ。

何か痛い……堪えきれないほどに痛い……。

だけど今は……そんなことはどうだっていい！

気持ちイイ程に体がキレてる今は……壊れても、狂っても……、この  
剣が描く軌跡のままに……! ——

「これ以上好き勝手はさせない。……この場で斬る！」

「おお……これは恐ろしい……」

燃え上がる殺気に身を任せた剣を、背後から首に押し付けられて  
も、仮面の男の口元は嬉しそうにニヤニヤと口角を上げるばかり。

(なるほど、これが風の契約者セキというものですか)

男は仮面越しに舐めるようにシャニーを観察する。

うつすらと全身を包む、青い焰のごときエーギルが体を焦がしてく  
るようで、血走る双眸が剣の様にぎらつく。

あまりに荒々しい殺意を見るに、制御できていないかも知れない。  
気づいたわけでは無さそうだが、きつかけとしては十分か。

冬空さえ凍てつかせる殺気を前にしても、仮面の男の口元はただ笑  
うだけだった。

それを止めさせるかの様に、シャニーは歯をむき出しにして首へ斬  
りこむ。

「これは騎士のする事とは思えませんネ。背後から狙うなんて、騎士  
の道から外れてるんじゃないんですか？」

煽る様な高いトーンの声で舐め回してくるが、血走ったシャニーの  
目は据わったまま。静かに燃え始めた口調は爆ぜるように激しくな  
る。

「騎士道？ それを通じるのは人間相手だけ。人間じゃない化け物な

ら関係ない話だよ。……終わりにしてやる！」

ルシヤナはその状況を注視できなかった。自分の知っている親友とは、まどつている空気が全く違う。

何なのか。彼女から湧き出て髪を揺らめかせる青い焔は。親友の姿を蜃気楼のように歪める、禍々しく揺らぐ焔は。

「いたたた、何度やっても無駄ですってば！」

風となったかのかの様にかまいたちを浴びせる動きは、まるで妖精が閃光に躍るかの如く、青焔を軌跡だけ残していく。

それでも男は悲鳴を上げるだけ。不死身だと説明したのに、どうやら彼女は理解できていないらしい。

「それにしても、英雄ロイの周りを固めていた部下が、こーんな殺意に狂った悪魔なんてね。彼もとんだ殺戮者なのでしょうね。それに比べれば私なんて、カワイイものですよね。ケヒヒッ」

憧れであり、親友であるロイを貶されて、開ききった目を限界まで見開いて怒鳴る。

もう体全体に返り血を浴び血みどろ。

「うるさいッ、黙れ！ 殺してやるッ、殺してやるぞ！」

狂ったかのような、背後からの執拗なメッタ斬り。

親友の悪魔のような振る舞いに、ルシヤナはその戦慄に身を震わせるしかできないでいるが、シャニーの視界には友の姿など入っていない。

（許さない！ 許さないッ、許さない!! あたしのッ、あたしの……!!）

美しい青髪が真っ赤に染まり、明らかに普段と違う眼光はもはや死神か。

——もう、このくらい引き出すことができれば十分

更なる一撃を加えようとしたその時だった。

不意に彼女の顔の前に、男の手のひらが向けられ、そして……。

「!？」

凄まじい鋭音がして剣の刃が弾けとんだ。

（なっ、何ッ……この距離じゃー！）

瞠目するシャニーを間髪いれずに豪魔道が襲い掛かる。

この近距離では為す術は何もなく、再び直撃を受けて吹き飛ばされた。

「うがつ」

体を強打し、思うように動けない。それでも、闘争本能はまだ崩れることを許しはしなかった。

折れた剣を杖代わりに辛うじて立ち上がり、男を睨みつける。

(……絶対に……殺してやる……)。あたしの大事なものを……よくも、よくもツ)

血みどろの眼光。揺らぐ青焰に焼け焦げた黒が混じり、前髪の下から翠緑に輝いて見据える眼が貫いてきて、男の口角が更に吊る。

「ふふふ、イイ目をしてきましたね。その殺気立った眼！ 私はそれが大好きなんですよ！ さあ、早く眼を醒ましてくださいよ！」

相手に感化され、シャニーの動きが一層に激しくなっていく。

知っている親友からはこんな殺意に駆られた顔が想像できずに、ルシャナは表情が凍り付いたまま震えていた。

風に溶けるようにルシャナの視界から次第に消えていく親友の姿。殺戮兵器と化した悪魔の具現を簡単に捌く仮面の男。

もう何がどうなつてこうなつてしまったのか、全く分からなくて頭が真っ白だった。

「かはっ?!」

もう、あれから木に叩きつけられること早五回目。

もはや根元しかない剣だけはしっかりと握っているものの、どう気力を絞っても、もう足が動かなかった。

何度も頭を強打した為、意識が遠い。

「あなたには随分楽しませてもらいました。そのままでも相当良いイーギルをお持ちのようで。その輝き、とくと見せてもらいましたよ」

先ほどまで湧き上がっていた青いイーギルの流れは消えた。目も霞がかかったかのように青く戻り濁っている。すっかり使い果たし

たか。

こうなってしまったては、もう楽しみは一つだけ。

「では、そろそろ燃え尽きて灰になっていただきましようかね。その最後の輝きが、これまた格別に美しいのですよ」

男の甲高い笑い声が響き渡る。この耳に障る笑いを止めたくても、もう体が動かない。

返す言葉も出てこない。口の中が鉄の味で粘り、息苦しい。覚悟を決めるしかなかった。

(……ロイ様………ごめん。……ダメみたい)

今まで戦闘で傷付く事は数え切れないほど経験したが、ここまで完膚なきまでに打ちのめされたことは初めてで、そして最後。

しかし、最も彼女に恐怖の念を押し付けたことはその事ではなかった。

動けなくなるまで戦っても、それでも体が敵を殺そうと立ち上がるうとしていたことだった。

頭では負けてしまったと分かっているのに、体は認めようとせずひたすら突っ込んでいこうとする。

その体にも思い知らせてやろうとでも言うのか、半開きの目で睨みつけるシャニーとの距離を、男がゆっくり歩み縮めてくる。

その時だった。急に止まる男の足。驚いて後ろを振り向くあたり、彼の意味で止まったわけではない。

男の背後にいたのは緑髪の女性……あれはレイサだ。

「おやおや、援軍がご到着ですか？」

ふうつとため息をつく男。乱入は歓迎だが、シヨーの一番の見せ所でのそれは無粋というものだろう。

「援軍なんて代物じゃ無いけどね。どうだい、本場の影縫いの術は。敵を背後に回して動けないって言うのも、なかなかイイ気分だろう？」

レイサは男が身動きの取れないことを確認して軽く笑みを漏らと、視線を移してシャニー達を探す。

一人は確認。ルシヤナがうつぶせに倒れているが、即座にまだ息は



ある事を見抜く。

「大丈夫かい、あんた」

闇に溶けるように消えたレイサが次に姿を見せたのはルシヤナの隣。

仰天してアサシンから逃げようとする彼女の手を取って傷薬を握らせる。

「私は……なんとか大丈夫です。それよりシャニーを診てあげてください」

ルシヤナの指差した方向を見ると、血まみれで木にもたれかかっているシャニーがいた。

ぽかんと半開きのままの口。糸が切れたように上を向き、青い瞳がとろんと濁っている。

男が何者かは気になる。だが、レイサは近寄った時から不吉なオーラを感じていた為、部下達がやられていてもそこまで驚きはしない。

(……)までボコる必要があったかはともかく。……(……)だけど)

それ以上に彼女を驚かせたのは、瀕死まで追い込まれているのに剣を離さないシャニーだった。

「やれやれ、派手にやられたねえ。ほら、立てるか?」

肩を貸してなんとか立ち上がらせ、シャニーの手から剣を離させた。この状態でも向かって行こうとするなんて。

途端、縛っていたものが解けたかのように、彼女から飛び出した悲鳴にも似た叫び声。

「あいつ、魔法使い!」

壊れた体ではそれしか絞り出せず、その短い言葉でさえ、もう遅かった。男はこちらに向かつて手のひらを広げている。

とっさにレイサが投げたダガーに弾かれた男の手先から迸った雷撃は、獲物を失って地面を穿つ。

「うちの可愛い下っ端をこんなにしてくれて、たっぷり礼はさせてもらうよ」

再び木の幹にシャニーを預けると、レイサは新たなダガーを対で取り出してしっかりと手に装備する。

(あんなの……見たことない)

シャニーにはつきりと見えた。以前賊と一緒に討伐した時に見せたものとも違う顔。

レイサの顔に映えるのは、鋭くてどこか冷たい獲物を目の前にした狼。

「久しぶりだねえ！ 私の得意技を披露できるのはさ。今の団長になってからは暗殺なんて、絶対許してくれなかったもんね。ふふふ、何処から喰いついてぐちやぐちやにしてやろうか！」

明らかに籠る怒り。鋭い表情の中で、冷たく燃え上がる怒り。

熱く燃え滾らせた怒りより数倍恐ろしく感じる凍てつく怒りを、身動きの取れない相手に容赦なく浴びせ続け、まるでかまいたちに触れたかのように男から血しぶきが上がっている。

霞みがかかる動かない視線の中に浮かぶその光景を、シャニーがぼんやり見つめていた時だった。

(あ、あれが……レイサさんの本当の顔?)

不意に見えてしまった。レイサの顔が、牙をむき出しにしたような恐ろしい形相に変わっていたことが。

冷たい怒りはそのまま極寒の鍵爪と化して散々切り刻んだ拳句、彼女はやつと止めを刺すべく、短剣を握りなおした。

「さあ、一生に一度しか味わえない、とびきりの技をご馳走してやるよ！」

シャニー達の視界からレイサが消えた。

男も見失ったアサシンを追って周りを見渡すが時は既に遅かった。シャニーも男も、ほぼ同タイミングでレイサを見つけることになる。

それは、男の真上。跳躍による落下速度を余すことなく使い、相手の急所である脳天から首にかけて、えぐるようにして斬り殺す瞬殺の技術。

大分前にやり方だけは教えてもらっていたシャニーだったが、それを実際にプロが使って見せるところを見て、呆然とする意識の中でも再び寒気が走った。

(あたしの……デイクさんから教えてもらった剣とは全然違う

……)

だが、瞬殺をかける寸前、横から飛んできた大きな気配にレイサははっとした。

とつきに空中で体を曲げて辛うじてそれを避け、バランスを崩して地面に叩きつけられながらも、転がって受身を取る。

レイサを狙って飛んできたものは、そのまま獲物を失い地面に落ちて甲高い音を立てた。投槍だ。

完璧とも言える技術がまさか失敗するとは誰が思っただろう。

仮面の男の仕業ではないことは、被弾を覚悟して弾く準備をしていたことからうかがえる。

新たな敵かと、その場にいた者は皆、暗闇の向こうを覗く。

しばらくの沈黙の後、今度は男に投槍が飛んでいく。

影縫いで身動きを取れないでいる男にそれを避ける術はなく、直撃を受けるものの仰け反る事もままならない。

直後にかなり遠くの上空から、羽音と共に現れた騎士。

騎士は男の許まで天馬で素早く寄り付けると、男に刺さった投槍を引き抜き、更にもう一度渾身の力で槍を男に突き刺す。

顔を見なくても、シャニーには大体誰か想像がついた。

あんなに遠距離から、正確に相手を投槍で捉える技術。

いつも一緒に稽古をしている、あの騎士ぐらいしか持ち合わせていない唯一無二の力。

投槍の技術だけは敵わないと、的当て稽古の時に地団太を踏んだ覚えがあった。

「アルマ、あんた一体何のつもり？」

レイサが肩を抑えながらアルマに詰め寄る。

二回目以降はともかく、一回目は明らかにレイサを狙ったものだった。アルマがあんな失投をするとは考えられない。

「シャニーが賊と戦闘中だと聞いて駆けつけて来ました。賊が闇夜に紛れて襲っていると錯覚したんです。まさか部隊長だったとは。申し訳ありません」

白々しい。レイサは肩のため息をついて見せた。

(……間違える訳が無い。全く、避けると分かかっていて面白半分に……。当っていたらどうするつもりだったんだか。いや……。もしや……)

そこまで考えてレイサは止めた。いくら野心家の彼女でも、まさかそこまでほしないうらと。

アルマは槍をもう一度引き抜くと、男の前に立って睨みつけた。

「お前が、シャニーを狙った賊か？」

アルマをペルソナの下から見上げる眼が、明らかに笑っているのが見えなくとも分かる。彼は白い歯を見せながら、軽い口調でアルマに答える。

「狙ったとは人聞きの悪い。私は単に彼女が有名であったから、どの程度の腕を持った方か興味があつただけです」

男に言い草に、アルマは鼻で笑った。

(有名……。か。ふ、英雄ロイに気に入られただけであるのに)

笑顔の裏に秘かな妬みを隠しつつ、シャニーのほうを見る。親友は、ぐったりとして木にもたれかかっていた。

一応実力では認めている親友が、あそこまでやられて無様な姿を晒している。

単なる夜賊ではないことぐらいアルマには分かっていたが、まさか自分ではなく親友を狙ったことが腹立たしかった。

「ところで、失礼ですがお名前を頂戴できませんか？ アナタも相当な腕前のように、惚れてしまいそうです」

男の質問で、アルマはピンと来た。親友を狙った理由はこれか。

あそこまで酷くやる必要があつたかのかは微妙な気もするが、やり口としては常套手段か。

畏に素直に引つかかってしまった自分を、アルマは笑った。

「私のアルマと申す者。シャニーと違って全く無名の田舎騎士だ。それでもよければ名刺でもやろうか？」

アルマは懐から営業用の名刺を取り出すと、男に手渡してやる。

それを受け取った男は名前を確認すると、人差し指と中指で名刺を挟んで高くかざし、手首を返して裏をアルマに見せる。

まるで手品師がタネなど無いと証明する仕草のようだ。

彼はしっかりとただの紙切れであることを証明すると、その手をゆつくりとアルマのほうへ伸ばし、顔の前まで名刺を持っていく。

その途端だった。アルマも一瞬目を疑った。

「あつという間ですね『滅蝕』さん？」

目の前で真つ白なチリとなって風に消えていく名刺。

それがすっかり彼の手からなくなっても、アルマは無言で男を睨みつけていた。

「いつかアナタもこうして差し上げますよ。私のできる最高のおもてなしだね」

男は今なお影縫いで拘束されている。

なのに何故ここまで余裕でいられるのか、後ろで見ていたレイサには不思議だった。

だが良く見れば、先ほど与えた傷が殆どなくなっていることに気付いて疑問は驚きへ、そして焦りへと変わっていく。

「あんた……何処に雇われてる？ 今言えば命ぐらいは助けてやるよ」

短剣に猛毒を塗りこみながらレイサが男に詰め寄る。

自己再生能力を持っていたとしても、内側から来るダメージには対応できないはず。

それは短剣をも腐食させるほどの、ボイズンマスター毒使いでもめつたに使わない劇薬

「あいにく命には困っていないんですよ。押し売りはご遠慮願いたい」

あまりに余裕ぶるので、レイサは一思いに手にしている短剣を男の額に押し込んでやろうと、両手に気を集中しながら狙いを定める。

だが、そのレイサの顔の前に、さつと腕が伸びてきた。

横目で視界を遮る腕の根元を見ると、そこにはいたのはアルマ。

「わざわざ部隊長のお手を煩わせては申し訳ありません。そいつは、私が殺します。相手もきつと私を狙っているはず。親友を傷つけた罪はしっかり贖ってもらいます」

「……へえ、あんたも少しは人間染みた口を利くじゃないか」

アルマから仲間を思いやる言葉は出るとは意外だが、それはあくまでおまけなのだ、彼女の口から出てきた言葉で理解する。

「騎士として当然のことです。それに、邪魔者は消せるうちに消しておきたいですからね。機会は逃せません」

他人には任せられないという事か。

アルマの妙な笑顔がレイサの警戒心を刺激するが、今は部下の方が大事。そのまま後ろへ退き、シャニーの手当てにあたる。

役目を任されたアルマは男に再度近づき、彼の喉元へ矛先を突きつけた。

その眼光はいつも以上に鋭く、とても15、6の乙女の顔つきとは思えない。

怒りよりもっと強い他の感情が体全体から溢れていて「……死ね！」一言放たれる殺意。その威圧感たるや尋常ではない。

「ほお……これは恐ろしい」

——できるものならやってみろ

男も嬉しそうに受け入れる。ペルソナで素顔を隠していても、余裕の笑みを浮かべていることが、顔の筋肉の動きや口調からイヤと言うほど伝わってくる。

だが、その笑顔もほんの一瞬の話であった。

男は笑みを消し、視線を背後に回して空を見上げる。よく聞けば、天馬の羽ばたく音が曙の陽と共に大きくなってくるのではないか。

天馬が朝日に希望を乗せて、向こうの空からたくさんやってくる。もう少しだったというのに。男は慌てるように動けないまま頭だけを下げた。

「せっかくメインショーに移れると思ったのに……。非常に残念です。ですが、楽しみは後にとっておけると言いますしね。今回はこれぐらいでショーは終了とします」

どんなに優秀でも、多勢に無勢では不利に違いない。

逃げようとする男へ、アルマはありったけの力で槍を振り向ける。

だが、男を貫いた槍に手ごたえはなく、そのまま男の中で空気を裂

いていく。

それは男の残影。彼は消え行く闇の中に溶け込み、残像のみを残して消え去ってしまったのだ。

「随分楽しませてもらいましたよ。私は朝に弱いので失礼します。  
『滅蝕』様、またお会いできる日を楽しみにしております」

逃がしたか。アルマはあたりを見渡して気配を探るが、もうあの禍々しい魔力のにおいはどこにもない。

ただただ、舐め回すような声が聞こえてくるだけ。

「シャニーさん。いやあ素晴らしい。ヘンな正義感など捨てて心の赴くまま、早く気づいて身を任せれば楽しい人生を送れますよ」

全てを焼き払われた真っ白の空間に不気味に響く脅威は、突然にその場から去る。

仕留め損ねた……アルマは舌打ちをしつつ、背後にある木の根元へ視線をやる。

そこにはレイサや、やっと到着したウツデイから手当てを受けて、激痛に喘ぎながらも立ち上がろうとするシャニーの姿があった。

アルマは親友の許へ寄り、膝をかがめて視線を合わせる。

「シャニー」

「アルマ……無事で良かった。あいつ、アルマを狙ってたみたいだったから」

親友が苦痛の中で見せる笑顔に、アルマは表情を崩しそうになった。

無事で良かったなどという言葉をかけられたのは、何年ぶりだろうか。

「こちらこそ申し訳ない。無事で良かった。まあ、あの程度の賊に打ちのめされるとは、私のライバルにしては少々力量不足だが」

アルマの不敵な笑みから放たれる言葉を、ウツデイは許せなかった。詰めよって拳を突き上げた。

「お前、まだそんな事言うのか！ 誰のせいで二人がこんな目に遭って、誰のせいでこんなに大勢の仲間迷惑をかけたと思ってるんだ！」

まだこの男はこんな口を叩けるのか。彼女は一呼吸置くと、シャニーからウツデイへ視線を移した。

そして、突き上げられた拳を手で払いのけて、顔を近づける。

「申し訳ないことをしたと言っている。だが、賊討伐も立派な騎士としての仕事だ。どの道実力がなければ戦場で死ぬだけのこと」

とても申し訳ないと思っっているような顔ではないし、シャニーへ侘びの一つがあつたって良いはずだ。

ますますアルマのことが許せなくなっって言返そうとしたが、彼女に先手を取られた。

「シャニーは自分の力で自分の身を守った。誰のせいで余計な負担がかかったと思っっている？ ろくに自分の身も守れない人間が、でかい口を叩くな！」

ウツデイには、自分を棚に上げて責任転嫁する彼女が許せなかった。

体を乗り出して言い返そうとするウツデイだったが、何かが服に引っかかり動けない。

よく見ると、シャニーがウツデイの白衣を下から引っ張っていたのだ。

——やめて

その力ない主張に、ウツデイは止む得ず感情を抑えるしかなかった。

援軍に到着した者達は、騒動が既に鎮圧している事を知りほっとした表情を見せた。

周りが安堵に包まれると、ふいに服を引っ張る力が無くなって、シャニーのほうを振り向いたウツデイは心臓がはじけそうになる。

緊張がぷつんと途切れた途端、体中を走り抜ける鋭痛でシャニーは気を失ってしまった。

再び緊張感が走り、皆はシャニーを運んで城へ急いで戻っていく。

今までの騒がしさがまるで嘘のように、普段見慣れた静寂のなかで寒く清しい朝に戻る。

アルマは焼け焦げ、灰になった木々を見ながら、しばらくその場で



独りになっていた。

「それでも、私の為すべきは変わらない」

奴らに気付かれている以上、余裕はない。だが今は確実に、ただまっすぐ進むだけ。

自身に言い聞かせるように一つ零したアルマは天馬にまたがり、朝陽を銀翼に掲げて山の彼方へと消えていった。

## 第8章 ヴァルキューレの休息

### 第1話 反目の槍

あんな怪我人を出すほどの大事件だったのに、ちよつと扱いが雑過ぎないか？

いくら賊の出没が茶飯事だからって危機感はないのか？

本当にこの騎士団は有事ボケしている。ああ……戦わなかった連中には分らないか。

戦後のイリアでは賊が活発に行動しており、その討伐が毎日のように行われている。

昨夜の話もその一環として片付けられてしまった。街道から外れた人目のつかない場所で良かったと言うところか。

団長は騎士団間会議に出すつもりだったらしいが、今回ばかりはイドウヴァ副団長が正解だ。

あんな連中の事を会議で出したとしても何の意味もない。ただ犠牲者が増えるだけ。

奴らがどう動こうとも、私のやるべき事は変わらない。

まずは……団長のところに頭を下げに行くとするか。



事件から二日後の早朝、騒然となる第一部隊。

そこには見慣れた第一部隊の面子と兼任部隊長のティト、そしてアルマ。

彼女は笑顔でティトに頭を下げていた。

ティトは、いや、その場にいた者は皆、それと同時に放たれたアルマの言葉に絶句していた。

朝から問題児が部隊を訪れ、何をしに来たかと思えば……。

「団長、是非、私をあなたの弟子にしてください。お願いします」  
(コイツ……寝ぼけているのか)

副将ソランのただでさえ厳しい目つきがまるで槍のように尖る。

何の前置きもなく、突然朝のミーティング中に現れてこんなことを言うのだ。

他の人間が言った言葉なら、朝から飛び出たハードな冗談……の程度で済むかもしれない。

だが、それを言った人物がアルマだけに、冗談はまずない。

一同は緊張と言うより、何か得体の知れない感情で不安になった。

「……朝から一体どうしたの？ あなたにはイドウヴァさんがいるでしょう」

ことのほか、話をひっかけられたティトは慎重にならざるを得ない。

彼女はいつも以上に言葉を選び、事態の收拾を図ろうとする。

昨日、妹が大怪我を負って意識が戻らないと知らせを聞いてから、今は大分落ち着いたものの、食事も喉を通らないほど気持ちが不安定なのに。

やっとまとまりかけてきた各部隊に混乱を招きたくはないし、これ以上、悩みの種を増やしたくはなかった。

隊員達もそれが分かっていたから、何とかアルマを第二部隊へ戻そうと、あれこれ理由を考えては撤退を促す。

「イドウヴァ部隊長から、私は破門を受けました。賊一人倒せず逃がしてしまうような者を副将にした覚えは無いと」

誰もが顔を見合わせて首をすくめた。

確かに数日前、第二部隊の詰所から、アルマを名指しして怒鳴るイドウヴァの声が聞こえていたが、だからと言って第一部隊に寝返るとはとても信用ならない。

ソランがさっそく引つ張り出そうと動き出したが、アルマは構わず頭を下げている。

「私は団長と同じく、イリアを素晴らしい国に変えたいと切に願っております。団長の右腕となって働けるように努めますので、どうか私を配下としてお加えください。よろしくお願いします」

随分ムシのよい話。今まで直接言ったことは無いにしろ、散々団長のやり方を非難してきた人間が、今となって考えに共感していると

言って握手を求めてくるなんて。

ここまで露骨なやり方であれば、誰でも何か裏があるのでは無いかなと思うのは当然かもしれない。

ソランはテイトの横へ寄り耳打ちを始めた。

「団長、これは明らかに罠です。きつとイドウヴァ部隊長と意を通じて、何か良からぬことを企んでいるに決まっています」

テイトはアルマを一瞥する。彼女は笑顔で、大人しくこちらの反応を待っている。

今まで彼女は、イドウヴァ部隊長の右腕として、新人ながらその働きは目を見張るものがあつた。

ところが今回、そのイドウヴァに破門されたと言うのである。

ありえない。絶対に何かある。有能な部下を、そう簡単にこちらへ引き渡すはずがない。

「めつたなことを言うものでは無いわ。証拠は無いし」  
「ですが……」

しばらく耳打ちが続く。しかし第一部隊は業務が立て込んでいて、あまり時間を割く事が出来ないのもまた事実。

今日も例に漏れず、ミーティングが終つたら即、エトルリアに飛んで行かなければならない。

エトルリア貴族との間で傭兵受け入れの打ち合わせがあるのだ。

テイトは隊員たちの意見も最大限尊重したかかったが、今回は自らの判断を通した。

「……いいわ。貴女の実力を認めて、第一部隊所属の騎士として今日から任務についてください」

「ありがとうございます」

「だ、団長！」

その場にいた誰もが、テイトはこの生意気な新人を突っぱねると思っていた。

それなのに、現実とは全く逆で、アルマを受け入れると団長は回答したのだ。

しかもあろうことか、彼女の実力を認めた上で、だ。

もちろん周りからは、思い留まって欲しいという気持ちが言葉になつてテイトを囲んでくる。

「ただし」

その仲間の言葉を遮って放たれた団長の警告。部下達はすぐに言葉を喉元に留めた。

団長のことだ。きつと何か考えているに違いない。部下達はその後によく言葉を信じた。

「入団して半年になるとは言っても、私から見れば、貴女はまだまだ経験不足の新人よ。イドウヴァさんの部隊ではどういう扱いだったか知らないけれど、単独で行動する事は基本的に無いと考えて。正当な理由が無い限り、今までのような勝手な行動は謹んでちょうだい」

妹の奔放さにも手を焼いたが、このアルマもなかなか手強い事を今まで見せられてきた。

部隊の中をかき乱そうとする事だけには、ハッキリと釘を刺しておかなければなるまい。

恐らく、イドウヴァが何か手を回しているとすれば、それだ。

「何かするときは周りに相談するか、私の許可をとつて。これを守らなかつたら、即十八部隊へ配属を命じるわよ。理解できるなら、これからエトルリアに行くから用意をして」

アルマは無言で笑みをこぼすと、再びテイトや先輩に頭を下げる。「これからは心を入れ替え、先輩方に従って行きたいと思えます。どうか正しい判断で私を導いてください。よろしく願います。では準備してきます」

厩舎のほうへ走っていく赤髪。何かすごい嬉しそうだったが、本当に破門されたのだろうか？

今までに見たことのないような彼女の振る舞いだったので、ある者は改心したのかと思ひ、ある者は更に警戒心を強めた。

むろんどちらの感情を抱く者が多かったかは明白であるが。

その一人が、テイトの傍に寄って心配そうに声をかけた。

「団長、いくら団長と言ってもあんなのを傍に置くなんて信じられませんか」

「ソラン、そう言わないで。彼女のひたむきに任務へ当たっている姿は知っているわ。しばらく様子を見ましよう。そろそろ異動辞令も近いし、その頃でも遅くないわ」

団長がそう言うなら、今回はそれで止めた。団長には団長の考えがあるのだろう、と。

だが、それでもどうしても拭いきれない危機感。あの野心家であるイドウヴァの腹心だったのだ。

アルマ自身もかなりの野心家であることを皆は知っていたから、そうそう簡単に改心するとは思えるはずもない。

むしろ、権力取りに失敗したイドウヴァを見捨てて、団長を利用しようとするより、今更言い寄ってきたのではないかと思えてしまう。

邪推とはとても言い切れない材料ばかりで、納得できない思いが自然と顔に表れていた。

「どうしたの?」

テイトも副将の曇った顔の理由が分かっている。

全部を理解してもらえないことは無いだろう。尚更、今のうちに不満を聞いておきたくなる。

ところが、ソランからは逆に質問が飛んできた。

「本心をお聞かせください」

「え?」

「団長も、彼女の企ての疑いが少なからず頭にあると思います。それでも、彼女を第一部隊で面倒を見ることにした本当の理由をお聞かせください。いくら団長の意向とは言え、今回の決定は今後の天馬騎士団にも係わるかもしれない。納得できるお答えをいただきたいのです」

今までは信頼する団長の考えなら、疑問を投げかけても従ってきたし、今回だつて一度は飲み込んだ。

だが、やはり今回ばかりは団長の真意が読み取れない。

テイトはお人よしだから、イドウヴァに見捨てられたアルマを哀れに思つて拾つてやったとしたら、まんまと罠にはまっているのではないか。

少しばかり捻くれているかも知れないと思うくらい、副将は心配だった。

珍しい部下の態度にティトは一瞬目を丸くしたが、ふうつと深く息を吸う。

彼女も独断で決定したので反感があることが分かっていたし、考えを分かって欲しいと言う気持ちが強かったので、包み隠さず話すことにした。

「そうね、なんて言えばいいのかしら。……暴れ馬を手綱で繋いでおくには絶好の機会とでも言っておこうかしら」

ティトもアルマの型破りな行動には警戒していた。

だが、特に規律を犯しているわけでもなく、所属部隊があらうことかイドウヴァの部隊という事から、今までは手を出すことが出来なかった。

それが今回、こうして自分から鳥かごに入りに来た。

彼女の実力を測ると同時に、その行動を監視できると思えば、むしろチャンスだ。

「団長はすぐ厄介事を引き受けてしまうのですね」

団長が覚悟を決めていると分かると、ソランはふうつとため息をつきながらも口元は笑っていた。

そのつもりなら、自分たちも肚を括って彼女を迎え入れなければならぬ。

「厄介事だなんて。やり方は違うけど、私もあの子もイリアを変えたいと切に願っている。きつと話し合えば分かり合えると思っっているわ」

そう上手く行けばいいが……そう言いたげなソランの視線は向こうから歩いてくるアルマへと向けられている。

(ティトは相変わらず優しい人だ。その分、我々が支えてやらねば) ソランがアルマに歩み寄り、エトルリアへの航路を説明し始めたのを見て、皆出発の準備を整えだした。

出発の三十分前、ティトは何かを思い出したかの様にぼんと手を打つ。

「準備をしてちよつと待っててもらえる？」

テイトが走って城へ戻って行つた。部下達は大方予想のつくその行き先を見守る。

朝からずつとそわそわしては、城の同じ場所をちらちらしていたから分りやすかつた。

「よつぽど心配なんだね」

「そりやそうでしょう。口に出した事はないけど、団長は彼女を相当大切にしているみたいだし」

口々に出る世間話をアルマはずつと聞いていた。どうやらシャニーのこころらしい。

テイトが心配しても無理はない。全身血まみれの状態で意識を失い、あれから2日間寝たままなのだから。

「でも、たかが夜賊ごときにボロボロにされるなんてね」

ぴくつと眉が動く。しかし、団長に釘を刺されて了解を伝えたばかり。

「あの子ってベルン動乱で活躍して勲章貰つてたよね？ 剣の腕は騎士団でも随一って聞いてたのに」

「どーせ、たまたまうまく行つた話が大きくなつただけでしょ」

ここまで黙って聞いていたアルマだったが、親友が貶されているのを聞いて黙っていられなくなった。

先輩達の輪に入っていく。警戒する相手が寄つてきたので先輩達は笑いが止まつた。

「もし、シャニーを襲つたのが夜賊ではなかつたとしたら？」

突然輪を突き破るように入ってきたと思つたら、不躰な態度で妙なことを聞いてくる。

先輩たちは顔を見合わせた後、アルマに怪訝な目を向ける。

「どういふこと？」

「単刀直入に言えば、貴女達なら怪我では済まなかつたと言う事です。あいつは夜賊なんかじゃない。誤情報にまかれて親友を貶すのは止めていただけませんか？」

先輩達がむつとしたのは言うまでもない。お前らは雑魚だと言わ



れたようなもの。

「賊じゃなかったら、一体なんなのさ」

「それは、先輩方は知る必要のない情報ですよ」

言ったところでこの人たちが理解できるはずなど無い。

エレブと繋がるあの世界から来た連中だなどと言ったところで。

「……へえ、他人に興味無さそうに見えるけど、案外仲間思いなんだね。相手があんたを仲間だと思ってくれてると良いね」

皮肉の混じった言葉がアルマに返ってくる。

こいつに仲間など居るはずがない。先輩たちの顔がそう言っている。アルマはそれへ笑みを浮かべて楽しげに話した。

「私は自分の認めた人には誠意を尽くしますよ」

ますます先輩達の剣幕が厳しくなった。団長やソランは部隊に溶け込めるようにしてやれと言ったが、相手がその気では気が削がれる。

「団長だって、もちろん同じ夢を持った人として敬愛すらしています。少なくとも実力の伴わない人は階級が何であろうと認められなくて当然だと思いますが」

皮肉には倍の皮肉で返す。ここまであからさまだと返す言葉もなかった。

これはとんでもなく厄介な存在を、第一部隊で面倒を見ることになってしまったと、誰もが眉間にしわを寄せている。

暴れ馬は早く手綱で繋がなければならぬだろう。

今はまだ厩舎に放り込んだだけ。このままでは厩舎が滅茶苦茶にされるだけだ。

「そこまで言うならあんたの実力、とくと見せてもらおうじゃないの  
さ」

槍を構える先輩。その目線で、アルマにも槍を取れと指図する。

「どうなっても知りませんよ?」

アルマは仕方なく、売られた喧嘩を買う事にした。

(第一部隊のお手並み、拝見させてもらおうか)

他の隊員の制止も振り切って、二人は空中に舞った。

## 第2話 誓いと矛盾

テイトは小走りに城の廊下を歩いていく。

エントランスまで来ると、団長室を含めた部隊別の詰所がある東棟ではなく、西棟へと彼女は舵を切った。

西棟は非戦闘員である本当の事務員達が働く場所で、近況報告以外では普段はあまり訪れない。

向かう先は、その中ではある程度お世話になっている部屋。

予想はしていたものの、その部屋の戸を開けた瞬間に特有のにおいが鼻についた。

「テイト団長、おはようございます」

いつもどおり聞こえてくる礼儀正しい男性の声。見れば左手でウツデイが会釈をしている。

彼は実験室の中で試験管に囲まれていた。いつ来ても同じようなシチュエーションだ。

「毎日大変ね。本当は実験室と医務室を分けてあげられると良いのだけれど」

劳いの言葉を彼女は忘れない。まだ見習いであると言うのに、傷付いた騎士の治療を一手に引き受けてもらっている。

戦争は命だけではなく、経験や技術と言った無形なるものをも奪っていった。

「とんでもないですよ。こちらこそ感謝しています。勉強をさせていただけながら、給金まで支給していただけているのですから」

部屋は殆どが医療道具や薬品、寝台で占められている。

その隅っこに蚊帳でお情け程度に仕切られた場所があり、そこが実験室となっているものの、彼はそこで殆ど実験できずにいた。

同じ部屋に怪我人がいるのに、細菌やらなんやらの研究など出来はしなかった。

彼がそこで実験している時は大抵、研究結果をまとめる時や治療用の薬品を調査する時、そして試験薬を作製するときぐらいだった。

「そう言ってもらえると助かるわ。もう少しだけでも、お金に余裕が

出来れば援助してあげられるのだけど、今は我慢してね」

「僕もいつか恩返しが出来るように研究に励みます」

真つ直ぐで真面目な彼の様子を優しい眼差しで見守っていると、不思議とある人物を思い起こさせる。

今でも文通をして親しくさせてもらっている間柄。疲れていても、文通相手も激務をこなしていると思うと自然とやる気が起きてくる。

政治体制が大きく崩れた中、武器を置き、政治を進めるため昼夜なく動いて貴族ノブレス・オブリージュの義務を貫く文官の鏡。

「どうかしました？」

はつと我に返れば、ウツデイが不思議そうにこちらを見ていた。

こんな大変な時期に、男に現を抜かすとは。そう思うと情けなくなってくる。テイトは頭の中で自分を叩いた。

「何でも無いわよ。今は何の研究をしているの？」

「イリア風邪の研究です。あれの特効薬を開発できれば、命を落とす人も少なくなります。糸口は見出せたので、今は試験に試験を重ねている所なんです」

まさにコツコツやってきた努力も佳境に入ったところ。

イリア風邪……長く厳しい冬を越えて、春を迎える時に一緒に来る招かれざる客。

毎年抵抗力の低い子供や老人を中心に、多くが命を落とす病。

今までは特効薬と言うものが無かったのに、薬そのものが望まれてこなかった最凶の病。

需要が無かった訳ではない。貧困に苦しむイリア民に、薬を買う金など無かった。

彼らが出来る事は精々、村のシャーマンにお願いして祈祷をしてもらう事ぐらい。

ウツデイはそんな惨状を見ておられず、シャニー達が見習い修行に出ている時期からずっと研究をしていた。

結果が出ず、認められず、理解されずとも。いつかきつと、役に立つて見せると誓って。

「国の復興も大切ですが、それを行っていくのはイリア民一人ひとり

です。ですから、皆には健康であつて欲しい。国として、それを構成する民の健康へ目を向けるのは大切なことだと思つています」

テイトはウツデイが本当に立派に見えた。これが本当に、妹と同じ15，6には到底見えない。

「よく言つてくれたわね。幼馴染なのだから、シャニーにも少しは見習つて欲しいわ……」

ベッドの方に目を移せば、見慣れた顔の少女が寝かされている。

テイトも登城してすぐ知らせを聞いたときは顔が蒼褪めた。

妹が夜賊に襲われて大怪我を負い、意識を失つていると報告を受けたあの時は。

命に別状が無いと知つた今でも、意識が戻らない妹が心配でならぬい。

だがその心配を断ち切つて、テイトは団長としての態度を貫き苦言を零していた。

「とんでもない！ あいつは僕を守つてくれたんです。僕が何も出来ない男ですから、余計な負担をかけてしまつて」

とつきに、幼馴染を庇つていた。あの魔法使いが放つてきた破壊魔法の前に立ちはだかつて、シャニーは守つてくれた。彼女自身も頭からはつきり流血するくらいダメージを負いながら。

あのダメージが無ければ、魔術師に負けなかつたかも知れないと思うと申し訳なかつた。

「彼女の治療だつて、大方は魔法の杖によるものですし。僕に出来る事など微々たるものです。彼女には本当に感謝しています」

彼は自分の無力さを思い知つていた。

特に、アルマに言われた言葉は否定できない、とてもショックの大きいものだった。

魔法に出来る限界と、医学に出来る限界。これには明確な境界があると彼は信じていた。

そして今、目の前で親友に起きている苦しみは、魔法の領域でのみ取り除くことが出来る。

自分の力では恩返しが出来ない。その無力さが齒がゆかつた。ア

ルマもきつと笑っているだろう。——口ほどにもない

悔しさをばねに、彼は更に研究に勤しんでいた。

魔法では到底解決できないような、医学にしか出来ない部分で親友と同じように国へ貢献しようとする。

それが、親友への一番の恩返しになる。

「あなたがそう言うつてくれると、きつとシヤニーも喜ぶわ」

もう一度、シヤニーの方へ視線をやる。やはり、変わらず寝ている。おまけに、先程と体位も変わっていない。

本当に生きてくれているのか心配になってくるが、呼吸に上下するブランケットがそれを教えてくれる。

「……本当に、無茶ばかりして……」

彼女はシヤニーの許まで歩いて行くと、じつと寝顔を見下ろす。

どこに触れて良いか分からないくらい、包帯があちこちに巻かれている。

彼女の手はしばらく宙で触れる場所に困っていたが、そのうち静かに眠る妹の前髪を整えて頭を撫で始めた。

その眼差しは泉のように静かで、そのうち屈むと妹に頬ずりを始めた。

「本当に……本当に困った子なんだから」

「僕はシヤニーが羨ましいです。テイトさんのような自分の事を心から想ってくれるお姉さんがいて」

なんだか恥ずかしくなって返す言葉に困った。視線を妹に戻しても、相変わらず目を覚まさない。余程体への無理が大きかったのだろうか。

彼女達も入団してから半年が経つ。

個人差はあれど何がイリアに必要なのかを考え、知って、理解し、どうすれば良いのかを考えるとところまでは来ている。

そろそろ次のステップに進まなければならない。

「……この子も随分成長したわ。責任感は見せてもらった。褒めるとすぐ調子に乗るから、滅多に褒めないでいるのだけだね。別に認めていない訳じゃ無いのよ。ただ……無茶はして欲しくないの」

愛情表現に対しては不器用なテイトだが、ウツデイには彼女がシャニーを大切にしていることぐらい、言われなくても分かっていた。好きな相手だからこそ厳しくなる。それを地で行く人だ。

彼女は出撃前にもかかわらず、両手にはめたグローブをおもむろにす。

中から現れたイリアの女性特有の白く美しい手。

(こんなきれいな手をしているのに、血で濡らさないといけないなんて……)

ウツデイがそんな事を考えていると、テイトはその手で妹の額に乗っているタオルを取り、寝台から腰を上げると、汲み置きの水のある方へ歩いていく。

「あ、テイトさん。そういう仕事は僕がやりますよ」

「私にやらせて。この子、滅多に風邪も引かない子だったから、こういう事をなかなかしてあげられなかったのよ」

ウツデイはそれ以上は何も言わずに任せて眺めていると、テイトの後姿を見守るその顔は自然と笑顔になっていた。

タオルを冷たい水で硬く引き締めたテイトは、きれいに畳んでシャニーの額にそれを戻してやる。

静かに眠る妹の顔をしばらく見つめ、妹の頭をそつと撫で始める。

シャニーはこうしてやると喜ぶという事をテイトはずつと昔から知っていたが、なかなかそれを行動に移せなかった。

これ以上に無いと言う程に親しい間柄なのに。それが今回、なんの躊躇いもなく自然と彼女の頭に手が伸びた。

いつ会えなくなってしまうかも知れない、恐怖にも似た感情。

妹が修行に出るまでは言うに及ばず、ベルン動乱時ですら二人は一緒だった。そして今度は、同じ騎士団で毎日顔を合わせる。その日常で、分かりきっている常がそうでは無いように思えてくる。

それが、こうして妹が瀕死の重傷を負い、目の前で横になっている姿を目の当たりにすると、今まで隠れていた常が自分の心をその棘で痛めつけてくる。

(今だけは、せめてこの子の傍に居よう)

時間の許す限り、妹の頭を撫でる。

何か姉と言うよりは母に見える。その姿から溢れる妹への愛情に、ウツデイは話しかける言葉が見当たらなかった。

「いつもは壊れた蓄音機みたいで、本当に喧しいぐらい元気な子が、こうして寝ていると何か不気味ね……」

しばらくそうした時間が続いた後、ポツリと漏らされた不安。

「壊れた蓄音機ですか。ははは、シャニーにはお似合いですね」

「そうなのよ。うるさいからってガツンとやっていると、しばらくは静かになるのだけだね。またすぐ元のようなになっちゃう困り者だったのよ。……」

ウツデイはびつくりして返そうとしていた言葉を喉で擦し留めた。

何せテイトの目から流れる光るものを見てしまったのだから。

「本当に無茶ばかりして……困った子なんだから……」

無言で差し出されたハンカチ。恥ずかしさと相まってテイトは感謝の気持ちを無言で伝えた。

気を落ち着けた彼女は、ウツデイにハンカチを返して大きく息を吐く。

「騎士ともあろうものが無様な姿を見せて恥ずかしいわ」

「別にいいじゃないですか。泣きたい時に泣けば。我慢したって体に毒ですよ」

何かと我慢の多いこの仕事。自分をさらけ出す事ができる相手は数える程もない。

その中で、テイトはその相手が一人増えたような気がした。

彼女はベッドから腰を上げると、妹の胸に耳を押し当ててみる。

確かに聞こえる心音。これを聞いて安心した。

「ありがとう。じゃあそろそろ私は任務があるから失礼するわ。妹の面倒、もう少しの間お願いしますね。ドクター・ウツデイ」

「お任せください。僕が付きっ切りで面倒見ますから」

テイトは頼もしい言葉に笑顔で返し、部屋を出て行った。

珍しい来客も退室し、再び静寂に包まれる医務室。

聞こえてくるのは実験用のマウスが車を回す音と、シャニーの寝息

だけ。

「ごめんな。僕が君にしてあげられるのはこれぐらいしかないんだ」  
彼はティトが換えてくれたタオルで、彼女の顔や体を拭いてやる。  
顔を隠す髪をたくし上げ、もう一度洗ったタオルを額に乗せた。

一通り終つても、彼はずっとベッドの横から離れない。シャニーが目を覚ますのを待つたために。

再びあの元気な顔を、誰よりも早く見たかった。

「どうもー」

そこに聞こえてくる新たな来客。ルシヤナだった。どうも今日は来客が多い。

「なんだ、ルシヤナか。何か用？」

「何か用って、それが患者に対する台詞？」

あまりに対応が適当なので、ルシヤナはウツデイの脇腹を突いた。  
これだけ動けるなら軽傷だと、自分で言っているようなものだ。

「患者って言ったって、お前は言うほど重症じゃなかったじゃん」

一応消毒剤と包帯を用意して持つてくる。ルシヤナは痛そうに腕の包帯を慎重に取つて見せている。

あまりにわざとらしいその芝居に、ウツデイはため息をついた。

「どーせ自分で出来るだろ？ ほら、包帯ここにあるから」

「あー冷たい！ 私がこんなに痛がつてるのに。シャニーの時と随分扱い方が違うじゃない。やっぱりあんた……ははーん」

ルシヤナが得意げにウツデイを見つめる。

あまり彼女のペースにしたくはないので速攻で否定する。

「彼女は重症だったから、特に厚い看護をしてるだけ。君は魔法を使わなくても完治する程度の軽症患者。扱いを異にするのは当然だと思っただけ」

「まーたそんな人が聞いたら本当かと思うような言い訳して。まあ良いわ。私は影から応援してあげるからサ」

どうもルシヤナには敵わなかった。どんなにうまく言っても、必ず相手のペースに持っていかれてしまう。

彼は半分聞き流しながら、さっさとルシヤナの怪我の治療を済ま



せ、話題を摩り替える。

壊れた蓄音機は、シャニーだけではなかったか。

「お前にも苦勞をかけてすまなかった。君達がいなかったら、どうなっていたことか」

「とんでもない。私だって酔っ払っててどれだけ役に立てたか」

「そうだね」

思わず本音が出てしまったが、これに懲りて深酒を止めてくれればしめたもの。

「ぐ……。あんたねえ、そういう時はそんな事ないって言うもんでしょ?」

「自分で言うかよ……」

やはり期待できそうにはない。ウツデイは半ば呆れながら、血で汚れた包帯を片付ける。

軽症とは言っても、彼女も頭を切ったりして流血していたから、今でもヘアースタイルを思うように出来ない状態だ。

医者としてできる最大限のフォローで、彼女の全快を願う。

「なあ、ルシヤナ」

「うん?」

治療が終ってももう用事はないはずのルシヤナだが、一向に部屋を出て行こうとしない。

ウツデイは蚊帳の中に戻り試薬の調合を始めたものの、研究者と言う者はかがいると気が散るのだろうか。

どうも波に乗れない様子で、ルシヤナに声をかけた。

「お前も心配で様子を見に来たんだろ?」

後ろからの声に、ルシヤナはしばらく外の様子を見てごまかす。

だが、この静寂の中で、ごまかしは通用しない事はすぐに分かる。

「ん……。そりゃね。でも、今はちよつと違うことを考えてた。シャニーのことには違いないんだけど」

「何かあったのか?」

何か言いかけてルシヤナはそれを飲み込むようにして止めてしまった。

だが、もうウツデイの視線はずっとこちらに向いてしまっている。どうやって説明しようか整理できないまま、意を決してありのままを伝えてみることにする。

「うん。あんたを逃がしてからね、こいつ人が変わったみたいに恐ろしくなってる。殺してやるぞーって目を見開いて何度も怒鳴ってた。私怖くて見ていられなかったもん」

親友の全く知らない一面を知り、ウツデイは息を呑んだ。

あのシャニーが、殺意をむき出しにして襲い掛かる姿……とても想像できない。

だが、歴戦を戦い抜けてきた人間だ。一度タガが外れれば戦士としての血が滾って来るのかもしれない。

「でも、私も大怪我をして幻聴を聞いていたのかもしれない。だって、こいつがそんな事言うわけが……」

思い出される地獄の光景。血走る眼光が獲物だけを捉えて剣を振り回す。だんだん鮮明になってくる記憶。

「でも……」

その光景の中でこちらをギリりと睥睨してくる親友の輪郭がくつきりしたとき、ルシヤナは震えていた。

「私、見ちゃったのよ。あいつの体から、なんかぼうつと青い炎が噴き出て包んでいたのが。触れたら灰にされそう……」

「……そうか。人には必ず眠っている性向があるって言うよ。彼女も人竜戦役以来続く騎士の家系だし、そういう気質があってもおかしくは無いのかもしれない。いつもがいつもなだけに、にわかには信じがたいけど」

何とか理由を見つけて、ウツデイは驚きを自身の中で抑え込もうとした。

しかし、その隠れた性向も何かのきっかけがなければ眠りから覚めることなど無い。

先日の襲撃は、彼女にとって極限を要求していたから、きっかけとしては相応しいものであった。

そうでなくとも、襲ってきた相手は殺意に満ちた顔を見たいと言っ

ていたぐらいなのだから。

「あの仮面の男……一体何者なんだ」

「結局、アルマをおびき寄せる為に私達を襲ってきたんでしょ？ あんなヤツの為に私達が巻添えになったって考えると、何か腹が立つわ」

ルシヤナの考えに同意であつたが、彼女と違ってウツデイには何も言えなかった。

自身すら守ることが出来ず、守ってもらうだけの自分が何を言えるだろうか。

アルマの不敵な笑顔が脳裏に浮かぶ。悔しいが、無力な自分では反論が出来ない。

「なあ、ルシヤナ。僕でも必死になれば剣を扱えるようになるんだろうか」

「え?!」

窓の外の風景をゆっくり眺めていたルシヤナは、思わず声をあげて蚊帳の方を覗く。

見ればウツデイが製薬を止めて、こちらの答えが返ってくるのを待っていた。

正直、どう答えればよいかに迷った。いきなり剣を振って上達するようなものではない。

ウツデイの口調から察するに、彼の意図は何となくは分かる。どう言えば、納得してもらえるか。何とか言葉を搾り出し、答えよ

うと口を空けたその時だった。

「あー、ルシヤナ先輩ズルいッス！ ウツデイ様を独り占めにしてたッスね！」

突然の声と共に部屋に入ってきたのは壊れた蓄音機三号だった。

ルシヤナに詰め寄ってホンキで睨みつける。

彼女は違うと手と表情で弁解するが、なかなか信じてもらえない。

「まったく、怪我の治療とか言って帰ってこないと思ったら！ レイサさんがお怒りッスよ！ 後は任せて早く部隊に戻るッス！」

「後は任せろって……」

「シャニーは任せるツス！ 早く行ツス！」

半ば強引にミリアに部屋を押し出され、ルシャナは仕方なく部隊へと戻っていく。

それを確認すると、ミリアはウツデイに何とも苦しげな顔で助けを求めだした。

「ウツデイ様ー、ウチ怪我をしちゃったんです。すごい疼くんです」

聞きたい事を聞けぬまま、今度はミリアの相手をする羽目になるウツデイであった。



早足で部隊へ帰るティト。もう皆支度を終え、自分の帰りを待っている頃だ。

出発後の航路と天気を考えながら城の外へ出て、部隊と別れた場所に急ぐ。

隊員達の姿を見つけ、お待たせ、と声をかけようとして目を疑った。

部下達が皆、一点を見つめて瞬きもしない。その先を見れば、何と部下同士が私闘を行っているではないか。

「何をやっているの！ 降りて来なさい！」

戦っている二人を大声で呼び止めて引き摺り下ろす。

近くで改めて見てみると、アルマと対峙していた隊員は相当酷くやられていたようだ。

周りの隊員にも数名、同じような者がいる。

どうやらアルマ一人に何人もがコテンパンにされたらしい。

「これから出撃と言う時に何をやっているの！」

様子を見ていることしか出来なかつた隊員達から事情を聞く。

それに連れ、これが単なる私闘などではなく、喧嘩であった事が明らかになっていく。

アルマの加入によって、何かしらの波紋が生じる事は予想していたものの、まさかこんなに早くそれが訪れるとは。

「アルマ！ さつき言っただけでしょう。何故勝手なことをするの」

「私は先輩の指示で槍をとったんです。あの状況で嫌ですとは、後輩

としては言えなかったんですよ。決して自ら進んで行ったわけではありません」

戦った先輩達も、アルマの実力を認めざるを得なかった。

一人だけならまだしも、誰もアルマに参ったと言わせる事が出来なかったどころか、こちらが参ったと言わされたのだから。

その悔しさと言ったら、言葉で言い表せるものではなかった。

皆アルマから視線を切って下を向いてしまっている。

「まったく。騎士としての強さは槍術だけじゃないと、あれほど言っているのに。もう叙任何年目だと思っているの？ もう少し騎士としての心を磨いてちょうだい。槍術なんかより余程重要よ」

テイトに叱られ、皆は下を向くしかできない。アルマただ一人が、まるで他人事のように槍を磨いていた。

叱るに叱れない。何せ先輩の指示に従えと命令したのが、他でも無い自分であったのだから。

(……流石に手強いわね。でも……)

テイトは確かな手ごたえを感じていた。アルマが加入した事により、他の隊員たちの雰囲気が変わったのがもう分かったからだ。

———こんなヤツには負けられない

この闘争心が良い方向へ向かってくれるように、今は見守り、願うしかない。

「さあ、気持ちを切り替えて出発するわよ。ほら、服を着替えていらっしやい」



エトルリアへの空路は、本格的な冬を前にした、高く青い空が何処までも続いている。

何度も行き来するルートだし、事前に普段と変わり無い事を調べてあったから、何のトラブルもなく着々と目的地へと近づいていく。

「それにしてもあんた強いね。ベルンでも結構上位の部隊にいたの？」

険悪なムードになるかと思われたが、部隊の中にはアルマの実力を認め、仲間として受け入れようとする者も少なからずいた。

これから同じ部隊で仕事をしていくのだから、親しくなっておくことに越した事はない。

そつけない奴という噂が広がっていたので懐くか不安だったが、そんな先輩の思惑とは裏腹にいろいろと口を開いてくる。

「いえ、特には。ベルンがイリアの見習い騎士を軍の中枢に置く訳が無いですから」

「じゃあベルン軍でどんな任務をこなしてたの？」

「雑用ですよ。別に騎士じゃなくても出来るような雑用です」

先輩達は首をかしげた。

団長の妹の腕が立つのは、エトルリア軍で転戦に転戦を重ねた激戦を戦い抜いてきたからだとして理解はできる。

だが、アルマは別に戦場に多く立つたと言う訳でも無いとはどういうことだ？

自分達より遥かに実力があるというのが理解できなかった。

「ただ、所属自体はマードックと言う將軍の直下部隊でしたから、戦略とかそう言う事は色々盗み聞き出来て収穫になりましたけどね」

「はあ?! マードック?!」

マードックといえば、前ベルン王国にて三竜将と呼ばれた軍事幹部の中でも筆頭に当る人物。

彼は外様と言えど、実力のある者なら対等に扱う人間だった。

そんな人物に仕えていたとは、やはり何か人物として光る部分があったと言うのか。

だが、イリア人にとって彼はそんな映り方はしない。

マードックといえば、イリアを占領した憎きベルン軍の將軍に過ぎなかった。

「あ、あんたさ、敵国の將に仕えて何も思わなかったわけ？」

「別に。むしろ母国に腹が立ちましたよ」

想定外の返事に、先輩はどう言葉を返せば良いか分からない。

もし自分が同じ境遇であったのなら、まず見習い修行先を変えていただろう。

母国を苦しめるような立場で修行など出来る訳がない。

「だってそうでしょう？ あんな腐った国に侵略されても、抵抗と言えるような抵抗もろくに出来ずに占領されてしまうなんて。……それ以上に腐っていると云う事ですよ」

イリアは戦わねば生きてはいけない国。

侵略を受けた当時も、多くの騎士はエトルリアやベルンに雇われ、戦争に参加していた。

当然、ベルンに雇われた騎士の中には、イリア侵略に加担する形となった者だっている。

イリアの国を守るべき騎士が、イリアの外で戦いに参加している。国内に戻って来たかと思えば、あろうことか母国を滅ぼす側について戦いに参加する。国を支える金を得る為に。

この矛盾が、アルマには許せなかった。

「敵国に雇われれば、母国を攻撃することが正当化されているんですよ。同志を殺すことが正とされているんですよ。イリア騎士の誓いとか言うヤツは。そんなおかしい事がありますか？」

「まあ……そうなんだけど……」

今までは騎士の誓いこそが自分達の抛り所と考えてきたが、具体例を出して矛盾を付かれるとおかしい気もしてくる。

思わず納得してからはっとする先輩達。目の前でツンとした顔しているこの後輩は、自分たちと違って叙任式で誓いを口にしなかったことで波紋を呼んだ人物だ。

自分たちは宣誓しているのだから、破天荒な後輩と一緒にするのはおれない。

今まで先頭を飛び、航路を導いてきたテイトが話に加わった。

「確かに、それは今私達が抱えている一番の問題だわ。でも、信賴が無くては私達には仕事がない。イリアと敵対する国からの仕事を断っていたら、私達は食べていけない。そこはどう考えているのかしら」裏切りはタブーで、雇い主のいかなる命令にも従うその長年の姿が、今のイリア騎士への高い信賴を与えている。

皆は、この若い騎士が難題へどう解答するのか興味津々だ。

「だから私は最初に宣誓したはずです。今の国をぶっ壊して、新たな

国の基盤を作ると。今のイリアは国とは呼べませんから。修行に出る前からそう思っていました。ベルンを見てそれは確信に変わりました」

先代が築き上げてきたイリアを否定して、新たなイリアを作ると今言ったのか？

あまりにも壮大で周りは苦笑いを浮かべるばかり。

「へえ、すごい事考えてるね。これはすごい大物新人が入ってきてくれたよ」

言葉とは裏腹に、誰もこの新人がそれを実現できるなどと思っただけはなかった。

アルマ自身も周りの気持ちは分かっていた。だから、誰にも自分の心内を見せてこなかった。

今でも自らの考えの核心は見せてはいない。そこまで話すのは、自らが認めた相手だけ。

それに該当する人物は少なくとも、第一部隊の中にはいなかった。

「……新たなイリアを作る……ね」

再び雑談に皆が戻る中、テイトだけが再び先頭に戻って独り言を漏らしていた。



### 第3話 銀の貴公子

一回の外回りで一つでも多くの顧客に顔を出しておきたい。

まずはエトルリアに行つて、その足でオステイアへ行つて……所要時間は3時間くらい。

ああ、でもオステイアでのアポはエトルリアでの謁見から5時間後だわ……。

2時間どうしようか……。

でもその前に……あの人に何と報告すれば良いのだろう。

とても言い繕うことが出来るような状態ではない。けど、皆の頑張りもアピールしないと……。

—— 8月12日 AM 9:15 エトルリア王国 王都アクレイア

丸一日かけてイリアから目的地の地エトルリアの王都、アクレイアへと降り立つ。

大陸の繁栄の象徴である王都は、見るもの聞くものすべてがイリアとは比較にもならない。

洗練された人、建築様式、整備された道や公園には多くの人が行きかい、商売が起きる。

まるでどこか異次元にでも来てしまったのかと錯覚すら覚え、誰もが最初に訪れたときにはその栄華に圧倒されて、そして惚れ込んでしまふ。

人を魅了する不思議な力が、この国からは溢れている。

「おい、新入り。列を乱すな」

例に漏れず、白と黒の世界から来たアルマも立ち止まり、丘のふもとに広がる絢爛なるさまざまな色のコラボレートを無言で見つめていた。

それに気付いた副将のソランが早速目をつけ、やむなく足を再び動かすアルマの後ろにびたりとつくように歩く。

「噂に聞いていたとおり、エトルリアは立派な国ですね」

気配に気付いたのか、アルマがに声をかけてた。

まだ完全に仲間と認めた相手ではない。むしろ警戒している人間からあつさり声をかけられ一瞬言葉が喉を痞えた。

彼女はテイトの最も頼れる部下であり、テイトが団長としての業務をこなすときの第一部隊最後の護り手。

それを彼女自身も自覚しているから、どうしてもアルマに気を許せなかった。

「ああ、大陸一と言われる国の王都だ。悔しいことだが、どれをとつても我々では勝ち目が無い」

「でも、イリアもここを指さないとダメですよ？ 団長？」

今度は話をテイトに振ったアルマだが、その声に答える声がない。

テイトも町並みを眺めながら歩いていった。

「団長？」

「え、ええ……。いつかはイリアもこうなつて欲しいわ」

再度話しかけてようやく気付いたテイトから返ってきたが、どこか生返事。

笑顔でその答えを受け取ったアルマ。彼女にはテイトが何を考えているか大方見当がついた。

「うっはーっ、副将、あれ見てくださいよ！ あっちも！ うまそーな果物が並んでますよ！」

「エダ！ お前という奴は！ 後輩も入ってきたのだから少しは成長しろ！」

直属の部下にソランが手を焼いている間に、アルマは街並みのさらに向こう、裕福な者達が住む貴族街を睨み付けた。

そこは、生返事をしたテイトが見ていた場所でもある。

（なつて欲しいじゃないんですよ。そうするんですよ、我々の手で。そして、その舞台にあなたはいない）



エダの懇願は副将に通じることは無く、騎士達は繁華街を素通りし貴族街へと入る。

イリア騎士でもなかったら、田舎者はこんなところには決して足を

踏み入れることはできない。

イリア天馬騎士団の紋章を見れば、貴族街門を護る衛兵も文句は言わない。

長年培ってきた信頼が、彼らの槍を下げさせる。

先ほどまで騒がしかったエダも、さすがにここでは大人しい。

ここで下手な行動をとることは、仕事を溝に捨てようなものだと分かっているからだ。

しばらく貴族街を歩き、街の中でも一番王宮に近い屋敷に到着する。

ここは、エトルリア軍事を司る軍将の一人、魔道軍将セシリアが当主を務める屋敷である。

テイトの代になってからエトルリアで営業をするときは、まずセシリアとコンタクトを取り、契約を取り付けることが通例となっていた。

「久しぶりね、テイト団長」

セシリアは快くテイトたちを屋敷に迎え入れた。

彼女はテイトが天馬騎士団の団長になったことを、エトルリア中の誰より喜んだと言われている。

彼女の堅実で実直な性格に加え、今ではエトルリアの上級文官を務めるクレインを窮地の中でも助けた腕と騎士道精神を認めただからだ。

いつもどおり、セシリアから仕事を紹介してもらい、契約書にサインを済ませます。

天馬騎士団の団長と言うネームバリューは、この大陸のどこでも通用する強力なもの。

それも手伝って、エトルリアに限らず第一部隊の営業はスムーズである。

「ようやくエトルリアも、表面的には動乱前の水準にまで戻ってきたというところね」

仕事の話をひと段落させ、互いに国の近況を報告しあう。

セシリアはこれが楽しみであり、実はテイトにとっては逆であつ

た。

「エトルリアは何う度に感動するばかりです。国の中枢幹部があれだけ捕らわれたのに、もうここまで復興が進んでいるなんて」

テイトには驚くほか無かった。周りの国はどんどん復興していく。

そして、その驚き以上に募る不安と焦り。

決してテイト一人でイリアを動かしているわけではないが、イリアでも3本の指に入る大手の騎士団の長である以上、国の復興への責任を感じずにはいられない。

「皆がひとつの目標に向けて頑張っているから、予想以上の早さで進んでいるわ。大陸一の国として、リキアのフェレ候にも負けてもらえないもの」

エトルリアだけではなく、ベルンもリキアも順調に復興は進んでいると偵察班は伝えてきていたが、それは事実であるようだ。

特にリキアは英雄ロイという絶対的な主導者の下、その基盤は以前より固くなったとさえ言われる。

「ところで、イリアのほうは順調かしら？」

テイトが最も恐れていた質問がとうとう飛んできた。

近隣の状況を聞けば聞くほど、どうやって説明すればいいのか詰まってしまう。

他国とイリアでは事情が違いすぎる。とは言え、それを理由に遅れをとっているなどと言える筈も無い。

だが、部隊の皆にも、そして自分にも自分達の置かれている状況を再確認させるため、彼女は敢えて選べない方へ舵を切った。

「イリアは……残念ながら他の国に比べるまでも無く復興が遅れています」

「……そう」

「皆の向いている方向が……バラバラなんです」

他の国には、絶対的な指導者がおり、彼らが強力なリーダーシップを發揮している。

その為、皆は敷かれたレールに沿って、一直線に目標へと駆け抜ける。

エトルリアはミルデイン王、ベルンはギネヴィア女王、そしてリキアは英雄ロイ候とリキア同盟主リリーナ女候。

彼らは確実に光へ向かって道を作り、その光に剣をかざして民の道しるべを作っている。

だが、イリアはそもそもが諸騎士団の集まりであり、厳密に言えば国とも言えない。

各騎士団の独自性が尊重される一方で、ベクトルは常にばらばら。長達が引くルールも交わりこそすれ、一本には決してなりえない。伝統やしがらみがイリアをまとめる妨げになっている。だが、ティトはそれを言い訳にはしたくなかった。

各騎士団はやり方こそ違えど、復興に向けて精一杯努力しているのだ。

イリアには、イリアのやり方がある。必要以上に他国を模す事はイリアの独自性を損なう。

そうは言うものの、目に見えて遅れをとるイリアの復興状況を目の当たりにしては、そうも言ってはいられない。

この現実をどうやってセシリアに話をすれば良いか、道中ずっとそればかり考えていた。

「勢力がいくつもあると、まとめることはなかなか難しいでしょうね」「はい。しかし、他の国ではそれを克服して今があるのです。イリアだけできないなんて言いたくありません。我々騎士団長の力不足の致す所で、無様な姿を晒して恥じています」

ティトは力なく言い切った。人をうまく動かせていないことは、彼女自身が一番身にしみて理解している。

いかに、人の信頼を得ることが貴重なことか。対立する人間に理解を求めることがどれだけ難しいことか。

理想と現実の狭間で、彼女はもがいていた。

「そう気を落とさないで。まだまだこれからよ」

「そうですよ、団長はイリアを生まれ変わらせると私達に誓ってくださいました。私はそのお力になりたくて、直訴したんですから」

慰めたセシリアに続く声。聞きなれない声に、セシリアは声のほう

を見る。

焦ったのはテイトとソランだ。残りの面子はただただ驚くのみ。何せ何度もセシリア邸には仕事で来ているが、平隊員が直接セシリアと会話をするなど今まで無かった。

いつもテイトやソランが話をし、その間じつとしているだけ。

他の子ならいい。二人が驚いたのは声の主がアルマだからだ。

世間知らずな新人が得意先、それも大国の軍事ナンバー3に易々と声をかけて良い訳は無い。

二人はセシリアが気を損ねない事だけを祈った。

「あら、見慣れない子ね」

どうやら表情からするに最悪の事態は避けられそうだ。

ソランは先手を打つべくアルマの前に立った。

「申し訳ございません。当部隊へ入隊してまだ1週間も経たない新人です。教育不足による大変な失礼をお許しくください」

「まあ、そんな若いのに団長直下部隊に配属だなんて、よほど優秀なのでしょうね」

せっかかくうまい方向へ進んだと思ったのだが、セシリアが彼女に興味を持ってしまった。

嫌な予感がよぎり、そしてそれは現実へ。

アルマはソランの横をすり抜けてセシリアの前まで歩いていったのだ。

「私はアルマと申します。団長とともにイリアを生まれ変わらせたいと願い、今こうして働いています。どうか以後お見知りおきください」

先輩達に目の前で、会話だけに留まらず名刺まで手渡ししてしまっ

た。戦慄が走る。例えば相手が興味を持ったとしても無礼では到底済まない。

「も、申し訳ありません！ この者には後で言っ

て聞かせますので、なにとぞご無礼をお許しくください」

切れるということ。

大得意のエトルリアで営業ができなくなれば、それは天馬騎士団の、イリアの存亡に関わる。

二人は深く深く頭を下げたが、セシリアは笑ってやめさせた。

「無礼だなんて。アグレッツシブな若者が現状を変えるキーとも言えるのよ。守れば現状維持、攻めれば現状打破。共に国の繁栄のためにがんばっていきましょう」



セシリア邸を出てきたティトとソランはいつも以上にぐったりした表情。

「こんなに肝をつぶす思いをして営業をしたのは久しぶりだ。」

「アルマ。お前はやって良い事と悪いことの区別もつかないのか？」

貴族街を抜けたあたりで、ソランはアルマに話しかけた。

怒鳴るわけでもなく、ただ追求する冷たい怒りがひしひしと他の隊員にも伝わる。

鬼將軍の異名を持つ程の人物だ。

第一部隊の隊員なら、誰でも一回はこの人の怒りに触れた事があるからその怖さは知っている。

それを知らないのかアルマは即言い返した。

「私は間違ったことを言ったとは思っていません。団長の言葉を信じて私はこの部隊にいます。それに、これから仕事をするに当たって、得意先に名前と顔を覚えてもらうことの何がいけないのか分かりません」

「やり方が問題なんだ。団長との会話に割り込んで話を折った。失礼だとは思わないのか？」

「思いません。セシリア様は団長とだけ話をしていただけではないと私は思います。それに、セシリア様も仰っていたではないですか。攻める事は現状打破に重要なことだと。私は現状維持をするために騎士団に入ったわけじゃないんです」

新人のあまりに強気な態度に驚く彼女だが、理由は何であれ無礼で

あることに違い無い。

セシリアに対してだけではなく、テイトに対しても。

それを教えようとしたそのとき、そのテイトから呼ばれた。

「……。困った奴だ」

大方内容は次の営業へのタイムスケジュールなので、これ以上アルマを追求せず、そちらを優先してテイトの許へと向かう。

ソランがその場を離れると、待っていたかのように先輩が一人アルマに寄ってきた。

「あんた新人なのにすげーな！」

それはセシリア邸に来る前、市場できよろきよろしてソランに叱られていた先輩だ。

人懐っこい性格なのですぐにアルマにも興味を抱く。

「別に、私は特別なことをしたとは思っていませんが」

「クールな奴だね。カッコイイじゃん」

その後もいろいろ話しかけるが、アルマはそれに相槌を返すだけ。

どうも話に巻き込まれたら抜け出せない。

これだけお喋りが好きな人間がシャニー以外にもいたのかとはあっけにとられた。

アルマにとっては、ソランよりもこのエダのようなタイプのほうが苦手だ。

「ほら、私が面白いこと教えてあげるから少し協力しなさいって！」

「ちよ、待ってください先輩！」

エダはアルマの手を引っ張って、ソランと話をするテイトの許へ駆けっていく。

そんな弾丸が飛んでくるとは思ってもいないテイトは、ソランの予想通り今日これからのタイムスケジュールを相談していた。

「次はオステイアだけど、ずいぶん時間が空くわね」

「早めに到着することは悪いことではないし、すぐに発つてもいいと思います」

エトルリアからの帰国の途にオステイアへも寄ることは茶飯事だ。

今回はオステイア重騎士団のスケジュールが合わない為、普段より



後ろにずらすことになっている。

その為、オスティアでの営業までの時間がかなり空いてしまった。「団長、少しお疲れではないですか？」

意見をしてもなかなかテイトから返事が返ってこず、目がうつろなようにソランには見えた。

やはり、先進国の復興具合を見てショックと責任感を覚えたのだろうか。

子供のころからテイトを知る彼女は、すぐにぴんと来た。

そして、その質問に返ってくる言葉さえも予想ができてしまう。

「そんなことないわよ。そうね先に行ってそちらで情報収集でも……」

「あんまり自分ばかり責めないでくださいよ。これはイリア全体の問題なんですから、自分ばかり責めてストレスを溜め込まないでください」

「ソラン……。ごめんね」

嘘はつけない。観念したようにソランに謝る。

ソランもいつもの事と言わんばかりに、瞳を閉じて無言でうなずいた。

こうすることで相手の気持ちを知ることができるし、自分の気持ちもすつきりする。

この二人がいてこそその第一部隊だった。

「副将！ ふくしよー！」

そこに聞こえてくる元気のいい声。

顔を見なくても誰だか分かる為、ソランはため息をして身構えた。

案の定、振り向けば自分の直属の部下であるエダが、新入りを引っぱりながらこちらへ走ってくるのが見える。

かける声も見当たらず、思わず手のひらを額に当ててうつむいた。

「ふーくしよー！」

ダッシュしてきたエダは、うつむくソランを下から覗き込むようにもう一度彼女を呼んだ。

「……どうしてお前みたいなのが第一部隊にいるのか今でも不思議

だ」

「あーっ、ひどいですよ。いつも散々こき使っては怒鳴るくせに」  
言うや否や、ソランは額に当てていた手をすっと固めてエダの頭を小突いた。

「人が聞いたら誤解するようなことを言うな。お前は言われて当然のことをしているんだ」

膨れっ面を作るエダの顔を見て、再びため息をつく。

後ろではその様子を鬱陶しそうに眺めるアルマがいた。

「どうやら彼女はエダに引っ張りまわされていたらしことが容易に想像できる。」

「で、今度は何なんだ」

「次の出発までまだ時間ありますよ?!」

エダの言いたいことをソランは大方理解して「だめだ」次の言葉が飛び出すまでのわずかな隙を突いてエダの口を手で塞いだ。

「えー、なんでですか。たまには羽伸ばさせてくださいよ」

「ふざけたことを言うな。我々は遊びに来たのではないんだぞ。それに、いつもその羽がダラっとしてお前が羽を伸ばさせるとなど、片腹痛い」

「どうしたの?」

二人のやり取りにテイトも入ってきた。

待っていましたと言わんばかりにエダがテイトにすがり付こうとするのを、ソランは腕で彼女の首をがっちりつかんで押さえ込んだ。

「このバカがエトルリアの街に来たから遊びたいと言っているんです」

「まあ……」

イリアの天馬騎士団精鋭部隊とはいえ、年頃の少女ばかりだ。

貧しい田舎暮らしの彼女達にとって、エトルリアのような繁栄の地は憧れであった。

その地に今足を踏み入れているのだから、少しは観光もしてみたい。

実に素直な意見。テイトもその気持ちが分からないわけではない。

だが、今はあくまでイリア傭兵として、仕事でエトルリアに来て  
いる。

国では今でも民が苦しい思いをしていることを考えれば、否定せざ  
るを得なかった。

「エダ、気持ちは分かるけど……」

テイトが部下をなだめようと声をかけた、その時だった。

「テイト……う？ 君はテイトじゃないか！」

懐かしく、ドキツとするような声が後ろから近づいてくる。無意識  
のうちにテイトは声のほうを向いてた。

決して聞こえるはずの無い、今最も聞きたい声に名前を呼ばれて。  
間違いなかった。目の前に立っているのは、一番会いたい相手。

「やっぱりテイトか！ 久しぶりだな！」

「クレ……イン様？」

きつと疲れているのだろうと思い、目を何度もこすってみる。

目を開けた次の瞬間には、貴族らしいすつと整った白を基調とした  
服が目の前にあり、上を見上げればそこには懐かしい顔があった。

金髪に透き通った紫の目。久々に胸が熱くなるのを感じる。

「クレイン様?!」

「テイト、まさかこんなところで会えるなんて。久しぶりだな、元気  
だったかい？」

「ええ、本当に……お久しぶりです。クレイン様こそお変わりありま  
せんか？」

久々の再開がうれしくて仕方ない。文通は欠かしていなかったが、  
やはり目の前にその人がいてくれる事とは別次元。

周りの部下達を忘れそうなほど、彼女の心は喜びに包まれていく。

「君たちは先に上がってくれ」

配下の者たちを先に引き揚げさせると、クレインはテイトの手を  
取った。

「久々に話もしたいし、時間があるならお茶でもどうかな？」

願っても無い誘い。だが、彼女の責任感は嬉しさの波に飲まれ行く  
心を戒めた。

「申し訳ありません……。今は任務中で……」

(あれは……前テイトが話していたボーイフレンドかな)

ソランはこの様子にぴんときて、腕の中に押さえ込んでいた部下を解放する。

すぐに逃げ出そうとする彼女を睨みつけ、鬼に睨まれた彼女は小さく小さくなくなった。

「な、なんですか?」

「たまには情報収集をするのも悪くないわね」

「へ? もしかして?」

「いいこと? あくまで仕事だ。他の皆も行くわよ!」

皆は歓喜の声を上げて街に散っていく。

その様子を見て驚いたテイトは急いでこれを止めようとしたが、そこへソランが立ちはだかる。

「ソラン! どうしたのよ」

「たまには羽伸ばしておいでよ。あいつらは私が面倒見しておくから」

「ソラン……でも、私は……」

ためらうテイトをクレインのほうへ突き飛ばし、ソランは部下の後を追って喧騒へと消えていく。

親友の気遣いに感謝しながら、クレインの腕の中に包まれてテイトもまた街の中へ消えていった。

## 第4話 一刻の相聞歌

ああ……幸せ。もうこのままどこかに連れ去ってもらえたなら……。

駄目だと頭が心を引つ張つても、帰らなければいけないと何度も突いても、あの背中を今すぐにでも追いかけてたい。

私だって、今すぐ返事をして一緒に帰りたい。

でも、ダメなのよ、テイト。あなたは天馬騎士団の団長なのだから。早くその手を下ろして帰らないと……



クレインは店に案内する道中も、色々と話しかけてくれる。

スマートなエスコートはそれだけで至福の時。テイトは彼の歩いていくままについていく。

(本当に、夢みたい……)

夢なら覚めないで欲しい。そう願いながら肩を包んでくれるクレインの香りに身を預ける。

そのうち、行きつけの店が見えてきたようで、クレインの指さす方に目をやると白い立派な建物が見えてきた。

店が近くなつていくにつれて、テイトの顔には自然と笑顔が浮かぶ。こんな立派な店はイリアにはない。

「素敵……」

「はは、気に入ってもらえたなら、ぼくも嬉しいよ」

白を基調とした立派なレンガ造りの店は良いコーヒートの香りに包まれていて、清潔感溢れる高潔な雰囲気。

店の中の調度品のどれを見ても素晴らしいものばかりで、店の格式をこれ以上無いほどに引き上げる。

(こんな素晴らしい場所がこの世にあるなんて……)

テイトにとってはどれも見たことがない天国のような場所。

エトルリアを何度も訪れているが、貴族街の店に入ったことは初めてだった。

(本当に素敵……。だって、今は……)

だが彼女にとって何よりも膨らむ幸福感は、今もクレインが自分をしっかりと腕の中に包んでくれている事。こうして彼にしてもらえたのなら、どんな店でも良かった。

ベルン動乱の時は雇い主と傭兵と言う立場。

帰国の際にクレインからラブコールを受け、飛んでいきたい気持ちを抑えてイリアに戻り、天馬騎士団の復興に着手してきた。

「ケガもなく無事で何よりだ。ぼくの心配は君の事だけだよ」

「ありがとうございます。クレイン様。おかげさまで」

包んでくれる手先が軽く肩を突いてきた。

「名前で呼んでくれと言っただろう？」

「あつ、はい！ クレイン……さま」

やれやれとクレインは額に手をやっている。テイトの生真面目は相変わらず。

戦中から、テイトには名前で呼ぶように頼んできた。

言っつてすぐは良いのだが、少し経つとこうして畏まってしまふ。

(そんな事を言われても、なかなかそうは行かないわよ……)

クレインの好意には申し訳ないと思いつつも、毎回テイトは内心で困惑していた。

彼がなんと言おうと、相手はエトルリアでも五本指に入る有力貴族、リグレ侯爵家の人間。

自分はただの傭兵だ。おまけに仕事着でエトルリアの貴族を呼び捨てなど、どこにどんな目があるか分からないのにできるはずがない。

「テイト、ぼくは君を愛している。もし君に妙なことを言う者がいれば、ぼくから話をしよう」

ストレートな言葉に心臓が飛び出しそうになる。彼が気持ちを伝えてくれて半年が経った。

その気持ちに彼女も返したかったが、どうしても立場の違いがそれを阻み、故郷の復興のために返事を待ってもらった。

「すみません……」

今もそれしか出てこない。

もう少し気の利いた事を言えば良いのだが、考えている内に、沈黙に焦ってしまふ。

「……分かった、場所を変えよう」

せつかくの良い香りのコーヒーにほとんど口もつけないうまま、クレインはテイトの手を取って店を出た。

高潔な白き貴族街を抜け、多くの人が行き交う市場も通り過ぎた。手を引かれるまま、ひたすら歩く街並みはいくらでも歩ける気がするが、周りの景気にそわそわし始める。

耳が壊れそうなくらい騒ぐ者たちで溢れる狭い通りでは、二人は際立って目立つ。

「えっ……?! ク、クレイン様? このような場所……」

新たにクレインが連れてきてくれた店の前で狼狽するテイトはクレインにストップをかけた。

だが、彼はひとつウインクするとそのまま店に入っていくてしまふ。

(ええっ……。クレイン様、どうしたのかしら)

クレインがテイトを連れてきたのは、夜は荒くれも集まるような小汚く、男臭い、喫茶を楽しむというより騒いで楽しむ酒場のような所だったのだ。

「ここなら、ぼくを知る者はいない。テイト、ぼくは君と対等に話したいんだ」

こんな場所にクレインを連れてきたと知れたら、彼を溺愛する妹君になんと言われるか分かったものではない。

最初は何とか店の外に出ようとしたのだが、何せ店は大繁盛で飛び出せる状況ではない。

それどころか人の波にもみくちゃにされ、店の一番奥の席に流れつく。

それでも未だに決心がつかない様子のテイトに、クレインはついに奥の手を使った。

(嘘……?! 夢? でも……)

不意に抱き寄せられて、真ん丸に見開いた世界の全てにクレインが

映る。

ティトはついに観念して目を閉じると、クレインにされるまましばらくそのままにしていた。

賑やかな店の隅にいれば、誰も気には留めない。

愛している、言葉だけではないことをしつかり伝えたクレインがそつと離れ、名残惜しそうに伸ばされたティトの手を取った。

「さあ、これでもういいだろう？ 名前でちゃんと呼んでくれ」

ここまで彼にされたら、もう覚悟を決めるしか無い。恥ずかしさをふうつと大きく吐き出した。

「……分かりました。クレイン」

ようやく生真面目な彼女からオツケがもらえて、クレインの顔に安堵の笑みが浮かんだ。

(あのクレイン様が……こんな事をしてくれるなんて……)

クールな彼の意外に情熱的な一面を知り、ティトは今も顔をトマトのようにしている。

あの感触が忘れられなくなりそうだ。

「あの動乱以来だな。まさか本当にその服を着ていたとは……」

改めてティトを見つめてみると、天馬騎士団の純白の士官服姿だ。紺のマントを止めるブローチは金色。

もうすっかり着こなしてはいるが、クレインには心配が膨らんだ。

彼女の意志であるとはいえ、今も戦場に立つ彼女をどうしたら救えるのだろうか。

「ええ、少し前に選挙で正式に団長となりました」

「え……ああ、そうなのかい。みんな君を選んだんだね。さすがティトだ」

クレインの反応が少し鈍かった理由はティトも察している。

彼の愛の言葉に対しての答えとしては、あまり良い方向ではない事は分かっている。

自分だって、彼の腕の中にいる事が出来たなら……毎日そう考えては頭の中から消してきた。

「そういえば、君はどうしてエトルリアに？」



「営業です。セシリア魔道軍将のところへ。クレイン様もお忙しそうでしたね」

「ああ、ちょうど議会が終わって帰路に就くところだね」

無理やり話題を変えるようにクレインは近況を問うが、問わずともテイトがエトルリアにいる理由など知れている。

イリアとエトルリアは距離がある為、そう何度もある機会ではない。そこに重なった偶然にお互い神に感謝していた。

「エトルリアは本当にすごいスピードで復興が進んでいるようですね」

「そうだね。動乱前と同水準とまでは行かないが、政治の根幹部分の修復は完了している」

エトルリアは市街戦を回避したこともあり、街が以前の姿を取り戻すことに時間はかからなかった。

だが、宰相をはじめ政治にかかわる多くが逮捕、あるいは戦死した中、基盤の復活と整備には多くのエネルギーを注いできた。

動乱後は弓を置き文官となったクレインも毎日奔走し、今日もまだ多くのスケジュールを残す。

どんな凛々しい姿で仕事をこなしているのだろうか……テイトは頭の中でクレインの仕事姿をイメージしていた。

「羨ましいです。イリアはようやく騎士団が動き出した程度。復興と言える復興はまだまだ先になりそうです。私のやり方で、この先どうなっていくのか本当に不安で……」

クレインに悩みをぶつけてみた。彼になら悩みを打ち明けられる。助けてくれる。彼女にとって無くてはならない存在。

手紙の中でも何度か弱音を吐いた時に励ましたり、アドバイスをくれたりもしてきた。

彼も忙しいと分かっているながら、甘えられる数少ない相手。

「君の大変な立場は理解しているつもりだよ。騎士団をまとめて、国のことも考えて」

イリア三大騎士団の一つを預かるだけでも大変な上に、国防も復興も一手にその双肩に責任を負う天馬騎士団の団長。

その重責を立派に果たす彼女の事を、もつと周りが認めてあげて欲しいのだが、国内はなかなかそうもいかないらしい。

手紙の中で悩むテイトを何度、側で励ましたいと思っただか。

「ぼくは君のしていることが、間違っているとは思えない。頑張っているのは手紙の内容からでも分かる。結果がなかなか見えなくて、ぼくも歯がゆい思いだよ」

（ああ……クレイン様にこう言って貰えたら、もう十分だわ……）

どれだけ勇気付けられる言葉だろう。

自分を理解してくれる人がいる事が、どんなに心強いことだろう。互いに国の頂に近い場所にいるから、相手の気持ちや苦労はよく分かる。

「だけど……怖いんです。もし、私のやっている事が間違っていて、私の判断のせいで国の状況が好転しないのではないかと思うと……。最近……どうしてしまったのかしら。私なんて国を背負うようなそんな器では無いんじゃないかって。誰か他に適任者がいるんじゃないかって」

テイトの言葉を、茶を飲む手を休めて黙って聴く。落ち着かない瞳をじつと見つめて。

最後まで聞き終わると彼はグラスを静かに置き、華奢なテイトの双肩にそつと手を置いてこちらを振り向かせた。

「それが、国を動かす者の葛藤さ。ぼくも、皆も。ロイ様だって同じ事を仰っていた」

愛する人が苦悩に押し潰されそうになっている。

どうやって声をかけてあげれば、一番に彼女を癒してあげることができるだろう。

短い時間では最良の結果を選ぶことは難しいかもしれない。最善を尽くす。それは政治でも同じだ。

「クレインさ……クレインでもそう思われるのですか？」

言ってからのはつとして言葉を飲み込んでも遅い。苦笑いと共に伸びる背筋を摩られてしまった。

「ほら、もつと肩の力を抜いて。もつと自分を出して話をしてくれ」

どうしても気が退ける。侯爵家の人間相手に。だが、じつと見つめてくるクレインはこのままでは許してくれそうにない。

(ううう……もう、どうなっても知らない！)

もう、いつ次に会えるか分からないのだ。今、彼の気持ちに応えなくてどうする。そう自分に言い聞かせ、意を決して口を開く。

「クレインでもそんな風に悩んでいるの？」

「ああ。ぼくよりもっと優れた施策を考え付いてくれる人がいるんじゃないかってね」

ふつと優しくクレインの顔が微笑んでくれた。これを見せられると何も言えなくなつて、どきつとして視線を逸らしてしまう。

いつもこうだ、本当はもつとこうしていたいのに。

「でも、評価はどんな結果であれ後からついてくるものだ。だから今は、ぼくが最善と思うことを、自分を信じて行うだけだよ」

自分に自信を持っている人間の言葉は強い。羨ましく思える。

団長として毅然とした態度をいつも心掛けているが、不安は隠しきれずに零れ落ちている。

「君には既に結果が出ているじゃないか。みんな、団長に選んでくれたのだから？」

「はい……でも、それは」

「それは？」

言えなかった。派閥争いの末の票取り合戦となつてしまったなんて。

——自信を持って

クレインの顔がそう告げて来る。彼に言われると不思議と勇気が湧く。

どんな結果であれ、自分は騎士団員に選ばれた。再び問うてくるクレインへ静かに首を横に振る。

「いえ、そうね。私ももつと頑張らないと」

「ひたすら、前に進むだけだよ。まずは自分を信じてあげないと」

自分が19、クレインは21。年は2つしか離れていないのに、まるで大人と子供くらいの差があるように思えてしまう。

だが、クレインは逆を想っていた。

「君の場合は特に、ね」

こんな細い双肩に、あの広大なイリアの未来がかかっている。

有力な騎士団が国を切り拓くイリアでは、幹部一人一人にかかる重圧は計り知れない。

まして三本指に入る天馬騎士団とあっては。

それでも凜と咲くこの乙女を、クレインはリスペクトしていた。

「君は部下を従える人間だ。将が自分を信じなければ、部下は抛り所を失うことになる」

「そうね……。でも、だからこそ怖い。信じてくれる部下を誤った方向へ導いているとしたら、と」

どこまでも生真面目で、仲間想いの団長だ。だからこそ、クレインは彼女に惹かれた。

慎ましく、驕らず、それでいて凜と前を見据える。そう簡単にできることではない。

「もしそうになったら、皆が教えてくれるさ」

街に消えて行った彼女の部下たちの様子を見ればクレインには分かった。

「部下たちは君についてきてくれないのかい？」

何度も首を横に振る。皆良く指示を聞いてくれるし、指示以上の事をしてくれる。

この前の団長選出選挙でも、自分を信じて最後まで戦ってくれた。

いつも彼女達は、感謝してもしきれないくらい、動いてくれる。

「いえ、みんな一生懸命に頑張ってくれて感謝しています」

「なら、それが答えじゃないか。君が周りを大事にするように、周りも君を大事にしてくれる。君を信じる仲間を信じて、ただひたすら前へ歩こうよ」

テイトははっとした。心の余裕が無くなって、部下の気持ちを聞くことを忘れがちになっていた。

口から出る言葉だけがすべてではない。身振り手振りすべてが、自分へのメッセージ。

部下を勇気付けるのは、自分の諦めず力強く前へ進む姿。間違っているならば、部下がきつと正してくれる。

「その仲間にはもちろん、ぼくも入れて欲しい」

その時、肩に乗っていたクレインの手がそつと頭へ伸びてきた。

びっくりして一瞬だけ肩が跳ねる。彼に撫でられていた。

よくやっていると言われ、将として逃れようのない孤独を癒すかのよう。

普段は姉にされると恥ずかしくて拒否するが、今だけはこのままで居たい。

「早速仲間からひとつ言わせてもらおうよ」

その気持ちをクレインは知ってか、そのまま抱き寄せられた。彼のいい匂いが全身を包む。

「もつと自分を労わって欲しい。君の仲間も顔がそう言っていたし、少なくともぼくはそう思っているよ」

「ありがとう……クレイン。私、気持ちが楽になったわ」

ずっとこうしていたい。いつの間にか彼女もクレインの体に手を回していた。

見下ろしてクレインはふつと笑う。愛する女性のある苦悩に沈む顔を放っておくなどできるわけがない。

少しでも彼女の為になれたなら、それだけで生きている意味を感じる。

「それは良かった。うん、君にはそんな笑顔が似合うよ」

国境を越えた最愛の人の優しい想いが、凍り付いて動けなくなっていく心を溶かしていく。

「私の求めていた答えが見つかった気がする。あなたに会えて、本当に良かった……」

それ以上は二人に言葉は要らなかつた。喧騒に紛れるように、店の隅で互いを抱き寄せあつた二人は、今しか楽しめない時間を過ごす。

楽しい時間。妹や騎士団の親友と話していることも楽しいが、この体が浮かんでいるかのような幸福感は何物にも代えがたい。

限られた時間の中で二人ともこの時を、互いを求め合うように結ば

れた視線が切れることは無かった。

◆ 楽しい時間はあっという間に過ぎ、ついに来てしまった別れの時。名残惜しい。次に会えるのはいつだろう。どうしてもクレインの顔をじっと見つめてしまう。

「今日はありがとう」

「ごちそうさ、また何かあったら手紙をしてくれ」

それは彼も同じ。そつと口づけを交わすと無理やりに歩き出す。

「タイト」

再び立ち止まってタイトを呼ぶと、クレインは振り返った彼女の所に戻ってきた。

「ぼくはいつまでも君だけを見ている。返事を待っているよ」

それだけ言うとかレインは再び歩き出し、もう振り返ることは無かった。

残された乙女は小さくなる背に手を伸ばし、街角に彼の姿が消えてしまうまでずっと見つめていた。

本当なら今すぐあの背中に抱き着きたい。

「果たすべきを果たしたら……必ず」

その気持ちをぐつと飲みこみ、伸ばされた右手を左手で抑えて下すと、彼女もまた町の中へと消えて行った。

その瞳に、愛に満ちた希望と、立ちはだかる大きな壁に立ち向かう勇気を湛えて。

◆ 「はぁー、やっぱエトルリアのメシは最高！」

「まったく、お前は遊ぶことになるかと研究に余念が無いな」

お腹をさすりながら歩くエダに、ソランは呆れ顔だ。

どうやらエダはここに来るにあたり、事前に本を読み漁って色々と店を調べていたようで、タイト達と別れた後の行動の手際の良さにはソランも舌を巻いた。

結局、部隊を率いたのはソランではなくエダという始末。

テイトと集合の約束をした場所に行くと、もうそこには団長が待っていた。

「おかえり、楽しめた？」

「そりやあもう！　これでまたバリバリ働けますー！」

ソランより先に答えたエダの顔を見て、テイトはほっとした。

自分が引っ張っていかねければならない大切な者達だ。

なぜかテイトも、エダの元気に押されてか、いつも出ないような言葉が出た。

「よーし、じゃあ頑張って今度はオスティアでも仕事を取るわよ！」

「がってんですー！」

隊員たちは団長とは思えない掛け声に顔を見合わせている。

エダがまたアルマにちよっかいをかけに走って言った後、今度はソランがテイトに歩みを合わせてきた。

「どうだった？」

「ええ、とても楽しかったわ。ありがとう」

テイトの顔には笑顔が戻ってきている。たった2時間ぐらいの間に何があったかと思議になるぐらい。

「なんか顔が違って見えるよ。さっきものすごく疲れてるみたいだったもの」

「自分の中で吹っ切れたところがあるみたい」

二人は久々の笑顔を顔に湛えながら空へと羽ばたく。

名残惜しそうに見降ろしていた白の街並みに別れを告げるその顔は、活気に溢れていた。

## 第9章 対立の予兆

### 第1話 戦虎の教え

今日もマウスの転がす車の音が医務室の石壁を叩いている。部屋の主が、井戸から汲んできた水を小瓶に移し研究室へと持つていく。

静寂が包む部屋。平和な空気が時を動かす。

しばらくして、彼は手に持っていた試験管を置くと、再び井戸水を汲みに席を立った。

身を切るような冷たい水に手をつ突っ込んでタオルを絞り、それをベッドで眠る親友の頭に持って行って丁寧に額を拭いてやる。もう何回これを繰り返しているだろう。

顔を拭くタオルが額から目元を伝って頬をかすめた時だった。

「う……ん」

静寂を破るにはあまりに弱い声が聞こえた。

ウツデイがはつとする間もなく、次の瞬間親友の硬く閉じていた瞳が開く。

その瞳はいつもどおりの開かれた目ではなく虚ろな蒼色ではあるが、医者を一安心させるには十分なものだった。

「シャニーー！ 大丈夫か？」

ふいに部屋に響いた声に驚いてマウスが穴に逃げ込んでいく。

ウツデイはタオルを放り出してシャニーーの様子を覗き込むようにうかがった。

シャニーーのほうは、自分の置かれた様子がまだ把握できないらしい。

じつと天井を見つめていて、ウツデイの声は聞こえていても心がそちらに反応しなかった。

(なぜ、あたしはここにいるんだろう。そもそもここはどこ?)

剣を握り戦場に立っていたはず。周りは白い雪と灰。色があるのは自分と敵の血だけ。



不気味な静寂が包む空間。そんな状況であったはずだ。

しかし今自分を包む静寂は、そんな静寂とは真逆の位置にあるもの。

できればこのまま。このままずっとこうしていたいと思わせるような、安らぎに満ちた暖かな清閑。

同時に、静寂は安らぎと共に記憶も自分へもたらしてくれた。

砂漠が水を飲みこむ様に、激戦の記憶が一気に頭の中に流れ込んでくる。

今まで虚ろだった瞳に力がみなぎりどんどん見開かれる。だが、

(そうか。あたし負けて……)

その目はまたすぐに弱弱しく萎れてしまった。

「よかった。気がついて。だいぶ目を覚まさなかったから、すごい心配したんだよ」

目を覚ましたし、怪我による後遺症も無さそう。ウツデイはひとまず安心して胸をなでおろした。

しかし、前までの笑顔はまだ無い。彼女の顔は太陽のような一杯の元気さではなく、湛えているのは霧のような静けさ。

しばらく白いシーツを眺めていたシャニーは、ようやくウツデイのほうを向いた。

「よかった。ウツデイも無事だったんだね」

「ああ。シャニーのおかげだよ」

何か、それ以上会話が続かない。いつもなら一言えば十は話が飛び出す間柄のはずなのに。

せつかくの静寂が、今度はとても耐えられないものに変わっていた。

「あいつ、一体何者だったんだろう」

この静寂を嫌ってウツデイは無理矢理話を振ってみたが、その話題を出したことに彼は言ってから後悔した。

シャニーはさらに俯いて、手はシーツを強く握り締めている。

ウツデイはその瞳を見てすぐに目を逸らした。

霧の中に揺らめく怒りとも悲しみとも、そして恐れとも取れるよう

なもの。

ともかくいつもの彼女の表情ではない気持ちにじみ出ていた。体以上に、心へのダメージが大きそうで、どうすればいいか分からない。こんな彼女を見たことは今まで無かったから。

(そつとしておいたほうがよさそうだ)

今は何もしてあげられないことを察してベッドの端を立つ。

研究室へと向かい、中で実験器具を取り出して試験材料を作ろうとしたその時だった。

「ねえ、ウツデイ」

向こうから聞こえたか細い声。

手に取った試験材と分厚い本を台の上に置いて彼女に目を向けてみて一瞬驚く。彼女は萎れたままの瞳でこちらをじっと見ていた。

「何？」

「今日はどこも行かないよね」

予想もしていない質問に驚いたが、特に考えることもなくすぐに返した。

「ああ。今日はずっとここで研究に没頭するつもりだ。重症患者もいることだしな」

「えへへ、ありがと。でも、もうあたしは大丈夫だよ、ほら」

腕をかざして元気を見せ付けてくるが、もし彼女が本当に元気ならいつまでもベッドの上にいる訳は無い。

彼女の体には、未だ痛々しさを残す包帯が、肌を覆い隠して見えないうちに巻かれている。

何より、ウツデイには分かっていた。シャニーは嘘がつけないことを。

明らかに空元気であり、心も体もぼろぼろであることが彼女の表情と素振りから痛いほど伝わってきて辛い。

彼は無言の笑顔で彼女に了解を伝えると、再び試験材を取り出し実験を始め出す。

未だに思い浮かばない。こういう時、どうやって声をかけたら良いのだろうか。

部屋にはいつもどおりの日差しが注ぎ込み、二人を包む。

外を見れば、どこの部隊だろう。天馬隊が空へ向けて羽ばたいていき、シャニーはその様子をじっと見つめている。

そこへ今度はウツデイからシャニーへ話しかけた。

「でも、どうしてそんなこと聞くんだけ？」

「え。……ちよつと寂しくってさ」

「大丈夫。今日は付きっ切りで看病するから安心しなよ」

シャニーはウツデイの言葉に安心したのか、ずっと彼の様子を見ている。

彼はひとつ試験材を作り終えて足元から色々実験器具を取り出し、分厚い本の上に乗せて研究室の蚊帳をくぐって出てくると、そのままの足でシャニーのいるベッドへ向かい、淵へ腰掛けた。

「ここなら不安じゃないだろ？」

その場で乳鉢を取り出すと試験材を砕き始め、シャニーはその様子に嬉しそうな顔を見ると、手を後ろに突いて楽な姿勢をとる。

乳鉢を見ているのだと思ったのだが、彼女の様子を見ると、どうやらそうでもないらしい。

彼女は手を後ろに突いたまま、天井を見上げていた。

一見するとぼうつと見上げているのだが、その様子をじっと見つめても気づかないその瞳の中には鋭い何かを感じる。

何か考え事をしている。考え事というより何か思い煩っている。

いつもの彼女からはとても想像ができない、自分の知らなかったシャニーの一面に戸惑った。

霞の中で不気味に光る剣は、一体どこへ彷徨う。

尚更、どう声をかけて良いかウツデイには分からなくなっていく。

「シャニーは黒が似合うね」

苦し紛れにシャニーへ言葉をかけてみる。今の彼女は、肌着の上に黒のタンクトップを着ただけのラフな格好だ。

普段白の制服ばかりだが、黒に、ぼさぼさと無造作に伸びた青髪が戦いでところどころ焦げた姿からは、また違った戦士っぽさが出ている。

「え、そうっ？」

彼女の反応はそれっきり。

「そう言えば母さんも黒の制服着てたなあ」

少し自分の格好をきよろきよろと見渡すと、独り言のように漏らしてまた上を向き、先ほどの視線に戻ってしまった。

そつとしておいたほうが良いと分かりながら、ウツデイはシャニーの様子に耐え切れず、今度は核心を突く質問をストレートに投げつけた。

「シャニー、何をさつきから考え込んでいるんだ？」

シャニーは不意の質問に少し言葉が出てこないようだった。

しばらく考え込んだ後、彼女は天井を眺めていた顔を今度は下へ向けると、ようやく口を開いた。

「この前戦った魔道士のこと。あたしの力なんて、あんなちつぽけなものだったんだなって。もっと、もっと強くならなきゃいけない。けど、がむしやらにやっただって強くなかなれない。だから、どうしたら良いのかなって。こんなんじや、一人前ですら……ね」

——プロならば一人前は当たり前。三人分できて初めて合格だ

あの日、襲撃を受ける直前まで一緒にいた黒の紳士から贈られた言葉。

それを思うと、今の自分がどうにも情けなく見えて惨めだった。

自分の腕では敵わない相手がいる。それを知ったとき、自分の小ささに気付く。

情けない、その一言がずっと彼女を責め続けている。

自分への情けなさ、そして恐ろしさが頭の中を駆け巡っていた。

「そんなことない。お前は僕達を守ってくれたじゃないか」

心の底から感謝していたから、必死に彼女の自責を否定した。

彼女が戦ってくれなければ自分も、そしてルシヤナも生きてはいなかった。

「いいんだよ、ウツデイ。あれはあたしが守ったんじゃない。騎士団の人たちが応援に駆けつけてくれたから、あいつは撤退したんだも

の。自分の力で倒したんじゃない。あたしは、自分が許せない」  
ウツデイは否定したかったが、なんと声をかけてあげれば良いか分からない。

確かに、あの仮面の魔道士は全く劣勢を感じさせなかった。

血みどろで立てなくなる程にやられた彼女の、騎士としてのプライドがどう言う状況か、想像は難しくくない。

「で、でもお前があれだけ戦ってくれたからー」

シャニーには目覚めたときから分かっていた。自分の中に、何かは分からないが矛盾が生じていることを。

その矛盾を認めることは騎士として許せなくて、その気持ちが彼女の雰囲気を変えていた。

(こんな冷たくて鋭い顔を見るのは……初めてだ)

自分の知らない彼女の一面に固唾を呑むが、声をかけたことは間違いではなかったようだ。

彼女は上を見上げることを止め、ウツデイが扱う乳棒の動きをじつと見るようになっていた。

しばらくしてその様子に気付いたウツデイは、気が紛れるならと彼女に乳棒を差し出してみる。

「やってみたい?」

今の彼女にとってこの静寂は毒だ。

「面白そうだね」

「よし、自分で痛み止めを作ってみなよ」

彼女はうれしそうに差し出された乳棒を手にとると、ウツデイのやっていたことを真似てやってみる。

均一に粉碎していくことは予想以上に難しく、シャニーの顔は先程とは違う熱中した顔になっていく。

「ヘタクソだなあ」

「うー、うるさい」

彼女が乳鉢に夢中になっている間に、ウツデイは調合に要する薬草を分厚い本から調べだす。

使い慣れた本であるために、これだけ分厚くても目当ての薬草が

あつという間にページから飛び出してくる。

「すごいね、もう覚えてるの?」

「まあね」

馴れた手つきで作業を進めるウツデイを見て、シャニーは持っていた乳鉢を置くと天を仰いでぽつりと一言漏らした。

「あーあ、あたしって騎士に向いてないのかもしれないなあ」

先ほどとは明らかに違う口調で出た、ため息交じりの弱音。

今まで弱音なんて吐くのを見たことが無かった彼女が、こんなことを言うなんて、ウツデイには信じられなかった。

「どうしたんだよ。急に」

「なんかさ、自信無くなっちゃって。最初はイリアの為に戦ってたけど、そのうちそれはどうでも良くなっちゃってた。相手を倒したい。それしか考えられなくなって。おまけにぼろ負けしたし。結局、あたしは昔から全然進歩してないんだなって」

イリア騎士は、イリアの為に戦う。自分のために戦うことはタブーとされること。

今までも多少暴走することはあっても、イリアの為に戦う気持ちを忘れたことは無かったのに、今回は明らかに自分の欲望を満たすために剣を取っていた。

何よりもこれが彼女には許せなかった。誓いを破った自分を嫌いになってしまいうさだ。

どうすれば強くなれるのか。力や技術はもちろん、騎士として精神的に強くなるためには。

何か、自分の誓いは上辺だけであって本物ではないのではないか。ずっと静寂の中で答えを探していた。

彼女の憂いの眼差しずっと見ていたウツデイは、ふと外を見て独り言のような言葉を漏らした。

「あ、そう言えば賊が村を襲撃してて大変とか誰かが言ってたな。でも十八部隊はあそこにいるし、大丈夫なのかな」

シャニーは目の色が変わった。村を賊が襲っているのに、ウツデイはまるで他人事の様さらっと流したのだ。

「な、何で今まで黙ってたのよ！　こうしちゃいられない……つつ」  
何とかベッドを立ち上がり、傍に立て掛けてあった剣を杖に、出口まで歩いていく。

どう見てもその様子は戦える体ではなく、歩くだけで精一杯だ。

ウツデイはシャニーの様子をしばらく見つめてから彼女の許へ歩み寄ると、抵抗がろくに出来ないことを良い事に、膝の後ろに手を回して持ち上げた。

「ちよつと！　何考えてるのよ！」

彼はシャニーの怒鳴り声を無視してベッドに連れ戻してしまった。

「自分が何をやっているか分かってるの？　時は一刻を争うんだよ?!」

村の人が殺されてしまっただけでは遅い！」

シャニーの目は今にも食いついてやるぞと言わんばかり。これ以上は可哀相か。

「そんな大事を、僕がレイサさんに伝えないわけないだろう？」

「!!　いくら親友でも、言っただけの良い事と悪い事があるでしょ！　見損なつたよ！」

シャニーの怒り様は予測していたウツデイでも驚く程だったが、彼は落ち着いてシャニーに聞こえる様にはつきりとした口調で伝えた。

「そこまでイリアの人の事を思っているなら、十分なんじゃないかな。

お前は十分、イリア騎士の誓いを守って働いているよ。自分を責める必要なんて無いと思うよ」

ここまでされて、ようやく試されていた事に気付く。

試されていた事には良い気持ちはしないが、親友が何とか自分を励まそうとしてくれていると思うと、感謝するしかなかった。

何より、自分の体がイリアの民を守ろうと素直に動いた事に安心していた。

静寂の中に見つからなかった答えが、ずっと目の前にあったのかもしれない気がする。

「へへ……ウツデイ、ありがとね」

シャニーは再び乳棒を回しだした。考え事をしながらの粉碎はまったく力が入らず、塊が丸残り。

しばらくその様子を眺めていたウツデイは、ふとベッドの淵を立ち、横に立てかけてあったシャニーの剣を手にとった。

彼女はわざわざエデッサの城下町にある騎士団御用達の鍛冶屋にお願いして、特注の剣を作ってもらっている。

突きよりも斬撃に重点を置いた、通常の騎士剣よりも軽い細身の剣。

その細身の剣でさえも、非戦闘員のウツデイにとっては結構な重量感がある。

刀身を鞘から抜いてみる。他の人には決して手入れをさせないから、あの激戦の時のままの姿を現した刀身は、半分以上が折れて無くなっており、素人から見てももうぼろぼろの状態。

「あ、何やってるのよ。そんなもの持ったら怪我するよ!」

それに気付いたシャニーは、慌ててウツデイに警告するが彼は剣を離さない。

彼はそのまま剣を持ってシャニーのほうへ戻ってきた。

「こんな重いものをいつも振っているのか?」

「まあね。めっちゃめっちゃ軽いほうだよ、それ」

「そっか、お前は体鍛えてるからな」

女性である彼女がこんな重い武器を手にして戦場に立たなければならぬ。

イリアでは普通であっても、それは世界の中で見れば普通ではない。

大変な世界に身を置いて、十分彼女は努力しているように見られるのだが、本人にとってはそうではない。

ウツデイも分かるから、何とか励まそうと彼女の腕を触る。

「やっぱ鍛えてるだけあって、腕が太いな」

小柄だし、体の線も細いが毎日の鍛錬の賜物か左腕はがっちりしている。

だが、それは絶対的な禁句だった。

ウツデイ自身は鍛えられた体を褒めたつもりだったのだが、そのとおりに相手が解釈をしてくれるわけではない。



「ウツデイがひ弱なだけでしょ!? 大きなお世話だよ! このバカ!

彼の褒めた、その鍛えられた腕から放たれるフックはパンチ力も十分。

鉄拳を喰らってその場でうずくまってしまい、彼のリアクションに自分の拳を慌てて見てから、シャニーは余計に膨れ面を作った。

しばらくウツデイは静かだったが、ようやくに体を動かしたので打ったほうも胸を撫で下ろす。

まだ足元がふらつく様子に、怪我人のシャニーのほうが心配になってきた。

「ああ……死ぬかと」

「大丈夫? ホント、デリカシーのない奴なんだから」

ベッドの上からウツデイの手を取って立たせてやった。

ウツデイはようやく鼻から手を離すと、足元に落ちた剣を拾い上げてしばらく見つめた後、再び乳鉢に夢中になるシャニーを見る。

頭にも腕にも、足にも白い包帯が巻かれて痛々しそうだ。

自分が何もできない間に、彼女はどれだけ恐ろしい状況に置かれていたのだろう。

どれ程の痛みを堪えて剣を振るっていたのだろう。

——何もできないくせに、でかい口を叩くな

今でも脳裏に焼きついて離れない、アルマの台詞が親友の体を見て蘇る。

ぎこちない乳鉢の動きが、乳鉢の中の薬草を外へ弾き出した。

シャニーがそれを拾って、再び乳鉢の中へ放り込もうとした時だった。

「なあ、元気になったら僕に剣を教えてくださいよ」

ウツデイの声に、シャニーは手に摘まんでいた薬草を、再び試料台の上に落としてしまった。

聞き間違えたのかと、薬草を拾わずにウツデイの顔を見上げた。

「へ?」

「僕に剣を教えてくださいよ。それとも、僕じゃダメかな」

「どうしたのさ、急に。ウツデイが剣なんて」

シャニーはとりあえず彼の手から剣を離させて、刃を布で拭くと鞘にしまった。

医者であるウツデイが剣を覚えたいなど、よほどの理由があるに違いない。

だが、ウツデイに剣を教えることなど、彼女には承諾できるわけがなかった。

シャニーは最初、槍を専門に扱っていた。

今でも騎兵である以上主力の武器である事には変わりはないが、仕事の中には意外と天馬を降りて行う内容も多い。

小柄な天馬騎士たちでは、天馬を降りて槍を振り回す力はない。

ベルン動乱では歩兵がかなりいたので、自分は天馬騎士としての仕事だけを果たしていればよかった。

しかし、天馬騎士団では天馬乗りしか基本的に在籍していない。

天馬を降りて剣を扱えることは、自分の希少価値を何倍にも高めてくれる。

だから彼女は、動乱中に剣を覚えてくれた師匠に感謝してもしきれない。

今でこそ騎士団随一の剣の使い手と言われるほどまで成長したが、剣を扱い始めた当初は実にひどいものだった。

シャニーは、当時のことを思い出していた。



師匠、デイークは何度彼女の頭を小突いただろう。

一つできるようになれば二つ叱られ、負けじと弱点を克服出来るようになる為に、どれだけの汗と涙と時を費やしただろう。

どうやっても叱られ、泣いた夜も数え切れないほどある。

彼はシャニーが少女だからと言って特別扱いはせず、失敗すれば叱ったし、反抗すれば手加減しなかった。それは、彼が彼女のことをよく理解していたから。

叩けば火花を散らす熱い鉄。じっくり冷やすより、水に叩き込んで

また熱してやった方がより頑丈な鋼へと成長する。

それが分かっていたから、部下であるシャニーへは容赦しなかった。

結局、西方のレジスタンスベースでディークから初めて剣を教わったから、ベルン動乱が収束して彼と別れるまで、ずっと叱られっぱなしだった。

動乱が終わってもディークの指導を受けられると思っていた。

まだ自分には足りないところが多いことは、彼女自身が一番分かっていたから。

だから、この先もしばらくは故郷に帰らずディークの下で自分を磨こうと考えていたのだが、彼は動乱が終わると傭兵団の解散を皆に告げた。

「待ってよ！ あたしはディークさんに教えてもらいたい事が、まだ山ほどあるんだよ！」

解散後、ディークが当ての無い旅へ出発してからも、シャニーは彼の許を離れなかった。

それが彼女にとって良くない事だとディークには分かっていた為、彼女を天馬から降ろしてきっぱりと言いつつ切った。

「お前に剣の事で教える事は、もうねーよ。さっさと行きたい所へ行っちゃいな」

「で、でも！ まだ剣技とかも教えてもらってないし、基本的なところだっ……」

泣き出すシャニーにディークは困った顔をした。

せつかくロイが誘っていたのに、まさか自分についてくるとは思ってもいかなかった。

かわいい弟子を手放すのは彼にとっても辛い。彼は敢えて彼女を突き放した。彼女の今後のために。

「目の前で人が困ってても、お前は雇い主が命令しなければ動かねーのか？」

「うう……。そんな……」

「てめえは、人に指図されなきゃ何も出来ねーのかって聞いてんだ。」

泣いてないで答えろ！」

「そんな事……無い」

泣きながらも、全力で首を横に振った。見て見ぬ振りが一番嫌いなこと。

デイクは腰をかがめてシャニーと目線を合わせると、涙を拭いてやった。

「おう、俺はそんな部下を持った覚えはないぜ。俺はお前に基本的な事は全て教えた。今度は、お前がそれを生かして自分で考えていく番だ。いつもまでも俺の部下、見習い気分にいるんじゃないよ。自分で考えろ。他人に依存するな。俺が最後にお前に教えることは、これだけだ」

シャニーはうなずき、イリアへ還る決心をした。

それでも親心というべきか、デイクは最後の最後に一つの剣技を教えた。

彼はシャニーの持つ裏の面にすら気付いていたのだろうか。

伝授した技は、相手を殺めるものではなく、かつて未熟な彼女を守る為に使った剣技。

そして、シャニーもまた大切な仲間を守る為に使った、あの護陣だった。

「いいか、お前はこれで卒業だ。次会う時は……戦場だ。敵としてな」

これが一番シャニーにとっては堪えた言葉だった。

デイクと剣を交わすなんて事は考えたくもないのに、傭兵としてこれから生きる自分にとっては逃れられない運命。

彼女は黙って敬礼をすると、デイクの許を後にした。

「大丈夫だ、お前ならやっていける。お前は他の奴が持っていないモノをいくつも持っている。他の奴が願っても手に入れられないものかな」

「ホント？ あたし、一人前かな？」

「だが、磨き方が足りねえ。これからは自分で自分を磨くんだ。何があっても、自分の感覚を信じて最後まで諦めるな」

それが、手負いの虎、デイクからもらった最後の言葉だった。



デイクは免許皆伝を授けてくれたが、今でも彼の考えを完全に受け継いだ気が全くしない。

特に剣は、初心者でも扱いやすい反面、極めるには相当の技量と年月を必要とする。

だが今では、むしろ全てを受け継いではいけないかったし、デイクの気持ちも少しずつつ分かって来たような気がしていた。

彼の剣は、彼が使うからこそであつて、自分が使ったところでそれはあくまで“他人の剣”だ。

己の心の奥底から湧き上がってくる、魂の力で会得する剣技でなければ使いこなすことはできない。

自分と同レベル、またはそれ以下の相手なら“他人の剣”を借りて戦つてもなんとかなる。

だが、本当の強敵と相対した時にはそれでは通用しないことが、この前の仮面の魔道士との戦いで確信へと変わった。

叙任騎士として道を歩み始めたばかりなのと同じように、デイクから教えてもらえたのは心構えだけで、ようやく剣の道のスタートラインに立ったばかり。

自分でさえもそんな状態なのに、ウツデイに剣を教えるなんて気になれなかった。

「どうして、そんな風に思ったの？」

「僕は、見てのとおり何もできない男だ。そのせいで、お前たちに余計な負担をかけてしまった。僕はそれが耐えられない。僕も大切な人を守るようになりたいんだ」

シャニーは何か頭を貫かれたような気分になった。

非戦闘員であるウツデイの言葉に、自分の矛盾を突くような言葉が含まれていたからだ。

それと同時に、非戦闘員を不安にさせてしまう自分が不甲斐なかった。

「いーんだよ。戦いはあたし達の仕事だから」

「でも、出来ないよりは何か出来た方が良いと思うんだ。せめて、お前達の足手まといにならないくらい」

彼の気持ちは本物のようだ。だからこそ、シャニーはウツデイの考えを思い留めさせようとする。

「あたし達が命がけで会得してきた技術を、そう簡単に覚えられるわけないでしょ？ 生半可な剣は怪我の元だよ。素人に手を出されちゃ、あたし達プロがやりにくいってね」

「そうか……」

彼は力なく剣を下してうつむいた。

強く言い過ぎたかもしれないと思ったが、シャニーはウツデイに剣を握って欲しくなかった。

「ウツデイ、あたしね、ベルン動乱でエリミーヌ教のすごい偉い司祭様の従者さんとお話をする機会があったんだ。その人の話でさ、すごい納得した話があるんだよ。知ってる？ フクロウとオオワシのお話」  
ウツデイはその説法名を聞いてはつとした。

敬虔なエリミーヌ教の信者である彼には、その説法は名前を聞いただけで内容が頭に浮かんでくる。

それを、シャニーの口から説明され、その意味を理解する。

「夜空を見渡せるけど高く飛べないフクロウと、高くまで飛べるけど夜空を見渡せないオオワシ。一人じゃ高くて夜空を越えたところにある神の国に行けないけど、エリミーヌ様が力を合わせて行きなさいって教えた話。あたし、すごい納得したんだよ」

「……」

「あたしだって、横で怪我をしている人がいてどう頑張っても自分の力では治せないとき、どんなに神の奇跡が使えたら、とか、ウツデイみたいに医学を操れたらって思ったもん。出来るに越したことは無いけど、出来ないなら、自分の出来る事を精一杯やって、出来ない所は助けてもらえばいいんだって」

依存するのではなく、助けてもらう。多くの人と交わりなさい。エリミーヌの教えのひとつだ。

ウツデイには、シャニーが言いたい事がもう十分伝わっていた。

「ウツデイがいるから、あたし達は怪我を恐れずに戦えるんだよ。それに、ウツデイの仕事は命の炎を守るスゴイ仕事なんだ。自信持てよ！」

背中をパシッと叩かれて勇気が湧き、彼は自分の仕事に再度誇りを持つことができた。

自分が剣を扱えないなら、彼女らの士気を保ち、病気や怪我を少しでも早く癒せるように研究を進める。

それが、自分に課せられた使命であり、自分に最もできる彼女らへの支援。

「分かった。じゃあばっちり治してやるから、頑張って怪我して来いよ」

「何言ってるの！ この白い柔肌に向かって！」

「……ああ、そう」

ウツデイは口では軽く流したものの、嬉しかった。

一週間ずつと目を覚まさなかつた親友が、今こうして冗談を言い合えるまで回復したのだ。

彼女はすでに乳棒を剣に持ち替えて、折れてもなお、その手入れをしながら軽く構えを取ったりしている。

動きたくて仕方がないという気持ちが見て取れるが、それでも彼女の体は一度限界を超えている。

彼は医者として、彼女の行動を止めさせた。

「シャニー、今は寝てろよ。いくら動けるようになったからと言って、体のダメージは見えない所で現れるんだ」

「いつまでも寝ていられないよ。こうしている間にも、あたしはみんなが作ってくれた小麦を食べてるんだから。それに、してもらった以上にしてあげたいしね。みんなに迷惑をかけた分も頑張らないと！」

彼女は、見習いの頃から師匠に口酸っぱく言われていた事が、死ぬ思いをしてようやく分かってきた気がした。

——戦いは一人でするもんじゃねえぜ

「お前らしいな。でも、今は絶対安静だ。医者の言うことは聞けよ」

「……はあ」

心だけいつも先に飛んで行ってしまおう彼女は、今回も剣を磨き終わるとやっぱりそのまま眠ってしまった。

ウツディは彼女が作りかけた痛み止めを完成させると、寝ているシャニーの体を拭きながら、それを塗りこんでやった。

一日も早く元気になることを祈りつつ。



シャニーがすーすと寝息を立てているころ、テイトはオステイアを越えてフェレまで足を伸ばしていた。

オステイアでの傭兵契約をまとめ、イリアに帰還するにも東進してダッドファイの関所を越えなければならぬ。

せつかく近くまで行くのならば、ロイに挨拶をしていくことになったのだ。

「ではロイ様、我々はこれで」

リキアは第一部隊だけではなく第二部隊も仕事を取りに来る場所。

イドウヴァが顔を出しているはずなので、テイトはここでは契約を取ることはせずに挨拶だけで済ますつもりだった。

「うん。道中気を付けてくれ」

いつもロイはこうして気にかけてくれる。世界が英雄と呼ぶ彼はとても優しい男性だ。

慎重しく頭を下げ、背を向けた時だった。

「ところで……」

まただ。テイトはこの後聞かれる事が分かっていたので振り向いた。

「シャニーは一緒じゃないのかい？」

「ええ。彼女は別の部隊ですから、私と共に来ることはありません」

とても残念そうな顔。これもいつも同じだ。よっぽど動乱時に仲良くしていたのだろうか。

シャニーには聞いても、良くお喋りした、楽しかったと言った漠然とした答えしか返ってきたことは無い。

後ろにいるアルマも違和感を覚えて眉をひそめている。



「君たちは第一部隊だったよね？ シャニーは？」

「彼女は第十八部隊。いわゆる新人教育部隊なので、外回り営業はさせていません」

思わぬ事実を聞いてロイも驚いたのか、返ってくる言葉が無かった。

正直、シャニーをロイに会わせることは怖かった。

動乱中も、彼女があるうことかロイにため口で喋っていたことを知った時は血の気が退いた。

妹に注意しても、「ロイ様が良いって言うんだからイイじゃん」としか返ってこなくて困ったものだ。

「ロイ様、動乱中の妹の無礼、何卒お許しください」

「無礼？」

「ロイ様への口の利き方があまりにも失礼だったと聞いています」

ロイは英雄と呼ばれていても気さくな人間なので、気にするなと言うに決まっている。

「僕は嬉しかったよ」

案の定、妹を庇ってくれるのだが、騎士団の長としてはそれでは済ませられない。もう一度深く頭を下げる。

「彼女は元気にしてる？」

だが、次に飛んできた問いにテイトは思わず言葉に詰まった。

大怪我をして寝ている……なんて言ったら心配するに決まっている。「

はい、いつも通りです」

願望にも似たそれだけを口にすることで精いっぱいだった。

「彼女に手紙を出したいんだけど、どこ宛に出せば届くかな」

今日のロイはやたらと妹のことを聞いてくる。

何かあったのかと不思議に思うが、テイトはまず彼の質問に答える事にした。

天馬騎士団に妹が入団してから一度だって国外で仕事はさせていないから、彼女が無礼を働く機会は無いはずだ。

「それなら、私が預かりましょうか？ この後帰国して彼女にも会い

ますし」

「いや、まだこれから書くところなんだ。郵便配達をする天馬騎士がいると聞いたのだけど」

イリアは傭兵契約関係のものを含めて、手紙は天馬騎士が運ぶ。

国の入口ダッドファイ城に集められ、そこから地方ごとに分けられて天馬騎士に運ばれる。

大口の場合は差出人の所までダッドファイを越えて天馬騎士が直接取りに来るが、フェレにはその便はなかった。

「なら、妹を宛名にしてダッドファイ城へ出していただけは届くと思います」

「そうか、ありがとう。シャニーによろしく言っておいてくれ」

妙に引つかかる。傭兵契約のあいさつ回りできたはずなのに、ほとんどシャニーの話で終わってしまった気がする。

帰ったらきつとシャニーに聞こうとティトは部下たちを引き連れて帰路に就いた。

(成程な、これならリアではシャニーは仕事に困ることはあるまい)

アルマは意外なところに持つシャニーの人脈に少々妬きながらも、隅に置けない奴だと笑っていた。

## 第2話 魔剣の囁き

数日後、レイサはいつもどおり木の上で寝転がっていた。

夜の仕事がメインである彼女にとって、陽の光は昼寝のために存在するようなもの。

上位部隊はいつも外へ出払っていて、内部治安を守るために残っている十八部隊をはじめ下位部隊しかいないから実に羽が伸びる時間帯だ。

だが今日は運が悪いことに、午後からの部隊長会議の為に多くの部隊が城に残っており、昼寝をするには騒がしい。

そこへ、ウツデイがいつもどおり部隊の予算表を回収しに来た。

「レイサさん、予算表はできてますか？」

顔をもたげて覗いてみると、他の部隊の予算表を抱えた白衣の男性が自分を見上げている。

予算の催促が来るということは、もう月も終りが近づいているということか。

「何言ってるんだい。予算表ならあなたの部屋にいる奴が担当じゃないか」

「え、でも彼女は怪我で」

「怪我が聞いて呆れるよ。どうせ元気なんだろう？ あいつ。ベッドでじっとしているとは思えないんだけどねえ。腹減ったとかうるさいんじゃないの？」

「ははは……正解です」

「それみ。そんなんだったら事務仕事ぐらいベッドに座ってでもできるだろ」

酷い事を言う人だと思いつつ、彼女のことをよく理解している人だとも感心して、仕方ないので部屋に戻ろうと背中を向けたときだった。

ゾクつとする感覚。急に背中へ気配を感じて振り向いたときには遅かった。もう、レイサは自分の背後に立っている。

「あの……それ止めてください」

「え？ 別に何もしてないけど。まあいいや。あんた、シャニーを逃がすんじゃないよ。そろそろ脱走するから、きつと」

苦笑いするウツデイが部隊を去り、さあもう一眠りと木の上へ跳躍してバンダナを顔の上に乗せ、寝息を立てようとした、そのときだった。

「たいちよー、手紙ツスよー！」

今度はミリアに叩き起こされてしまった。仕方なく起き上がって天馬に乗るミリアから直接手紙を受け取る。

その内容を読んでいると、今度は正門付近がやたらと騒がしくなってきたことに気付く。

「あれは……ユーノ様じゃないか」

紫色の髪を揺す前天馬騎士団団長のユーノの姿が見えた。

彼女には珍しく、お付も連れずに中央通路を通って城へ駆け込んでいく。

「もしや……誰かユーノ様にシャニーのことを喋ったな」

レイサも前団長が城に来たとすると寝てはられない。

彼女はするすると木の幹を降りてきて、前団長の走り去っていった方向をうかがいながらポツリと漏らす。

その独り言に、それまできよとんとしていたミリアが口元を抑えた。

「あれ、言っちゃいけなかったんスか？」

「あんたかー！」

「うわあ、ごめんなさいツス！ だって、シャニーは最近元気でやっているかって聞かれたものだから。前団長だし、別に隠す必要もないかと思って」

レイサは頭にかぶせかけたバンダナを額に押し付けた。

現団長であるテイトは、ユーノが心配することを避ける為に、敢えてシャニーのことを報告していなかった。

ユーノは今の混沌としたイリアの中心人物であるゼロットの妻。

多忙な彼を支えつつ、自らもイリアの為にいろいろ動き回り、さらに育児もしなければならぬ彼女の役割は大きい。

今でさえ負担が大きいのに、これ以上負担をかけさせたくないテイトの想い。

だが今日の郵便業務の担当だったミリアは、朝一番でエデツサ城を訪れたとき、ユーノにシャニーの話が聞かれて喋ってしまったようだ。

先ほどのユーノの慌てぶりからするに、シャニーのところへ飛んでいったことは間違いない。

「まったく、あんまり騎士団外の者に団内の情報を流すんじゃないよ」  
反省しているのかいないのか、ミリアがペロツと舌を出して愛嬌を見せている間に、ようやくユーノのお付と思しき人物が2、3名、中央通路に姿を見せて城へ駆けていく。

「それにしても、よほど心配なんスね。あんなに走るなんて」

「まあねえ。ユーノ様とシャニーは母子みたいなもんだからね」

ミリアは事情を知らないからあまり意味を理解できてはいなさそうな顔をした。

しかし、すぐに何かを思い出したのか再びレイサの名前を呼んだ。

「そういえば隊長、ニイメさんが心配してたツスよ」

「へえ、あの鬼婆がなんだって?」

レイサは久々にニイメの名前を聞いた気がした。

あのニイメが心配していると聞いて、どんな言い草をしていたのか気になった。

「あの左巻きのあんぽんたんはまた居眠りしているのかって」

彼女にとっては何かくすぐったい。実にニイメらしく、憎たらしい言い方。

最近あまり散歩に騎士団へ来る事が無かったからレイサも少し気にはしていたのだが、相変わらずの憎まれ口を叩けるところからすると元気なのだろう。

家族のいなかった彼女にとって、ニイメは肉親同然の大切な家族。姿を見せれば説教ばかりだが、それが何か嬉しかった。久々に庵に行って、肩揉みでもしてやろうか。

だが、ふと彼女の頭に不安がよぎる。ミリアがニイメの庵にも寄っ

て話をしている。はっとした。

「ちよつとあんだ！ あの鬼婆に変なこと吹き込んでないだろうね！」

こういうときはどうしてこうも素早いのだろう。

ミリアはレイサが振り向いた時にはもうすでに向こうへ駆け抜けていた。

彼女が視線から遠くなっっていくに連れて、レイサは血の気が退いていくのが分かった。

「……まあ、庵に行くのはまた今度にしようかな」



一方、医務室では元気な怪我人のせいで、ウツデイは仕事が進まずにいた。

ベッドの上でシーツを叩きながら、しきりに医者へアピールをする。

「ねーねー、もう大丈夫だからさ。いい加減部屋から出してよ」

もう何回こうやってウツデイに懇願しているだろうか。

そのたびにウツデイからは同じ言葉が返ってくる。何かを見てそのとおりに喋っているのかと思うほどに。

「ダメだよ。君は頭を何度も強打しているんだから。見た目は治つてるように見えても、頭のダメージは後に響くからね。もう少し辛抱しなよ」

ウツデイが首を縦に振ってくれないので再び膨れ面を作る。もう、体が動きたくてうずうずしているのだ。

しかも今日は忙しいらしく、全然相手をしてくれないので暇で、暇で仕方がない。

ツンとウツデイから視線を外し、気を紛らわそうとしばらく外の様子を眺めていると、向こうでは同僚が槍の稽古をしている。

いても立ってもいられない。彼女は立てかけてあった剣をウツデイに気付かれないように手に取る。

その途端、部屋に響き渡った鈴の音。猫のように全身の毛が逆立

つ。

よく見れば、鞆に鈴がくくりつけてあった。

「ダメだつてば、シャニー。寝てろつて」

自分の行動が読まれてしまっている。

仕方なく彼女は頭までかけ布団をかぶると、ベッドの中にもぐりこんだ。

ウツデイはそれを見て安心したのか、ようやく机のほうへ椅子を向けて、医務室らしい静けさが戻ってくる。

そう思えたのも一瞬の事。ようやく訪れた静寂も、あっけなく破られた。

「ねえ」

「今度は何」

「お腹すいた。なんかかない？」

「……」

なるほど、壊れた蓄音機とはよく言ったものだ。

ウツデイは、周りを見渡してみる。何とかあの言葉の発射口を塞がなければならぬ。

ちようど、机の上に時間がなくて食べられなかった朝食のパンが置いてある。

彼は席を立つとまっすぐシャニーの方へ向かい、彼女が何か言おうと口をあけた瞬間を見計らってその口へパンを丸ごと押し込んだ。

やつこのことで静寂を勝ち取り、向こうではシャニーが幸せそうにパンをくわえている。

パンをくわえたまま外を見ると、何やらどこかで見覚えのあるはげ頭が光って見える。

「あひゃー、あいあひふひのひよーぢはん」

パンをくわえたままもぐもぐ。シャニーが何を言っているのかぜんぜん分からない。

だが、シャニーがもぐもぐ言っている間に、今度は廊下も騒がしくなってきた。

その騒がしきはどんどんこの部屋に近づいてきて、そちらへ身構え

る前に開け放たれた扉の向こうから現れた女性の姿を一目見て、シャニーはくわえていたパンを落とした。

「ユーノお姉ちゃん?! どうしてこんなところに?」

目を真ん丸にするシャニーの姿を見つけるや否や、ユーノはベッドに向かって走りこんできた。

驚くシャニーの顔をユーノは確認するかのように抱きしめ、そして撫でる。

だいぶ長い時間そうした後、ようやくユーノは妹に声をかけた。

「大丈夫だった? もう傷は疼かない?」

「もしかして、心配してエデツサからわざわざ来てくれたの? 嬉し  
いなあ!」

ここカルラエからエデツサまでは、天馬を使ってもそれなりの距離がある。

姉の格好から察するに天馬で来た訳ではなさそうだ。

「大事なあなたがずっと意識がないって聞いたんだもの。でも、良かったわ。元気そうで」

姉は本当に大事そうに頭を撫でてくれるので、シャニーも久々の長姉との再会に何のためらいもなく甘えて満面の笑みを浮かべている。

ウツデイは、二人に気付かれないようにこっそり部屋を抜け出す。

外を出て廊下を中庭方向へ歩いていくと、どうもユーノのお付と思われる老紳士が医務室へ向けて走っていく。

その後ろを、空色の髪を揺らして走っているのはティトだ。

「あ、ウツデイ。ユーノ姉さんが来ているって本当なの?」

「ええ」

彼女はとても焦った顔で問いかけてきて、事実を告げたら彼女の顔に不安が広がるように見えた。

疾風のように駆けていった彼女と別れた後、ウツデイは事務棟から中庭へ出てみる。

そこから連絡通路を見てみると、今度は事務方が医務室のほうへ向かっていくのが見える。

医務室を離れて正解だ。あれだけ多くの人間が駆けつけて騒がし



くなつては、研究どころではない。

「それにしても、ユーノ様の人望はすごいな。騎士団を離れても、あんなに人が動くんだ」

彼は寝転んで陽の光を浴びながら、向こうに小さく見える十八部隊の様子を眺めていた。

医務室では、ユーノが未だに頭を撫でていて、シャニーは姉に起こった事を説明していた。

ユーノはここに来る前、事件のあった現場を確認してきた。白以外には何も色がない。生を感じさせない世界を。

その世界で戦っていた妹に意識が戻らないと聞いた時は覚悟を決めた。

だから、目の前で元気に話す妹が、今まで以上に尊く見えて仕方がない。

「まあ。そんなこと」

「うん。恐ろしい奴だった。あたし、もうダメかと何度も思ったもん」「よく守りきったわね。さすが十八部隊の副将さんってところかしら」

ユーノは妹の成長を心から喜んだ。

怪我をすることは心配ではあるが、それは騎士として避けて通れない道。

それを恐れず仲間を守りきった妹が、ユーノには頼もしく見えた。「ううん。あたし、全然ダメだなんて思ってるよ」

だが、妹から帰ってきた言葉は悲観的なものだった。いつも褒めてあげると喜んで自画自賛する彼女が。

「どうしたの?」

「だって、結局騎士団の仲間が来てくれたからアイツは撤退しただけで、あたしが倒したわけじゃないもん。あたしが負けたことに変わりはないよ。全然歯が立ってなかったし。なんか、凄い自信失くしちゃってさ。戦場でああいうのが出てきたら、どうすればいいのかわらなくてさ」と考えてた

妹が壁にぶつかっている。今まで同じ状況がシャニーに無かった

わけではないはずだ。

単に、昔のシャニーは今回のようには感じなかっただけのこと。動乱のときの彼女はあくまでも見習いであり、そして傭兵団の一番下っ端でデイークという頼れる人間がいた。

彼らがフォローしてくれていたおかげで、彼女にとつては何事もうまくいっていたように思えてしまっていた。

だが、今は違う。彼女は叙任騎士となり、チームプレイの中でも自分の身は自分で守らなければならなくなった。

おのずと自分の弱点が見えてきて、何をすべきなのかが明確になっっていく。

今まで挫折なんていう挫折は経験してこなかった。

だから余計に、自分の力では太刀打ちできないものが現れたとき、どうすれば良いかが分からない。

「今の状態じゃ、イリアの人たちを守り切る事なんて出来ないよ。でも、どこをどうすれば良いかが全然分からないんだ。またアイツが襲ってきたらと思うと寝られない。あたしには、無理なのかな」

シャニーには珍しい不安げな瞳はユーノも経験した瞳だ。

彼女も幼い二人の妹を養う為に死ぬ気で己を磨いた。

どう磨いても、ぶつかっても倒れない敵が現れたとき、堪らずに团长へ質問をぶつけた。今のシャニーがしているように。

「どうしたの？ あなたはいつも言っていたじゃない。無理とか、不可能とか、そんなのは口にしちやいけない悪魔の呪文だって」

見習い修行に出る前から、口癖のようにシャニーが周りに言っていた言葉だ。

その言葉のとおり彼女は諦めることなく努力して、今がある。

「シャニー。結果を急いではいけないわ。焦っても自分を苦しめるだけよ。自分を信じて、できることを一個一個確実にこなしていくことが、遠く見えて実は近道なのよ」

言われていることは理解できているようだが、シャニーはどうも納得できているような顔ではない。

「それにね、力でなぎ倒す事は騎士として相手を倒そうと考えるとき、

その方法としてはほんの一部にしか過ぎないのよ。それどころかあまり良い方法ではないわね」

「え……」

「今回も貴女は仲間と協力して敵を追い払ったのでしょ？ それで良いんじゃないかしら。戦いは何も一人でするものではないわよ」

どこかで聞いた覚えのある言葉。かつてデイクに指摘された事と同じ内容だった。

戦いは一人でやるものではない。例え天才が一人いたとしても、人の輪に勝るものは決してない。

これもかつてエトルリア軍の軍師が伝えた詩であった。

「まだ貴女は分からないかも知れない。でも、覚えておいて。一人ひとりの戦闘能力が高い事に越した事は無い。でも、もし貴女が部隊の長に立った時、何でも自分ひとりで収めようとしなない事。皆の力を上手く引き出してあげる力こそが、騎士として本当に要求される力であるとと言う事を。その為には、戦うことだけが全てでは無い事を知るべきね」

シヤニーははつとした。姉の目が、いつもの優しい目とは少し違うことに気付いたからだ。

今の姉は、姉としてではなく、騎士団の大先輩として自分を叱ってくれている。

大先輩の言うことを黙って聞く。自分の気持ちがお見通しであるに違いない。

「貴女は確かに強い。それは貴女の今までの努力の賜物。これからも自分の感覚を信じて鍛えていけば、もつと強くなれるわ。でも、今の貴女に欲しいのはイリア騎士としての今以上の精神。いつも心に言い聞かせなさい。一人で戦ってはいけないと」

「なんで……そこまであたしの考えてる事が分かるんだろう。不思議だよ」

先ほどから分かってはいたが、ここまでぴしゃりと自分の思っていることと同じ事をちよつと話を聞いただけで分かってしまうなんて、なんて凄い事だろう。

もう目が丸くなって収まらない妹の顔を見て、ユーノは笑って質問へ答えてやった。

「簡単なことよ。私も同じことで悩んだのだから」

『伝説』の二つ名を持つほどに有名で、強く、聡明で包容力もある。

未だに人望厚い彼女が、自分と同じ事で悩んだというのだ。シャニーにとっては意外だった。

だが、やはり姉なら、前団長なら自分の悩みを全て聞いてくれるだろう。

そして、その悩みに何かしらの答えを出してくれるだろう。

彼女は怖くて先ほどウツデイには言えなかった事を、ユーノに打ち明けることにした。

「あのね、お姉ちゃん。聞いてもらいたいことがあるんだ」

「どうしたの？」

シャニーの手が震えている。何かよっぽどの事があるのだろうか、なかなか声が出てこないシャニーを優しく撫でる。

「あたしね、この前の戦いの時、イリア騎士の誓いに従って、剣を抜く前にこれがイリアの民の為なのか考えてから抜いたんだよ。その気持ちを確認しながら戦ってた。……途中までは。でも……」

「でも？」

「でも、途中からそんな事、どうでも良くなった。相手を殺す事しか考えられなくて、相手が動けなくなるまでぐしゃぐしゃにしてやりたかって手が剣を離せなくなって……」

シャニーは当時のことを思い出したらしく目が落ち着かない。手だけではなく体が震えて冷や汗も見取れる。

自分の制御ができなくなって自身に怯えていた。

もちろん、あそこで制御できない部分が表に現れなければ、殺されていた事は間違いない。

それでも、まるで自分の意識とは別に指揮権を持つかのごとく振舞う体に覚えた恐怖が、脳裏に焼き付いて離れない。

その事実には、ユーノはすぐには返す言葉を見出せなかった。

「聞こえてきたんだ。あたしの声が、あたしの中から。イリアの民を

助けたければ、私の力を使って目の前にいる魔道士を殺せ、殺せつて。そのうち、その声だけしか頭に入らなくなつてた」

「……」

「あたし、イリア騎士失格だよね。……もう、どうして良いか……分からないよ……」

とうとう、ここまで我慢してきた悔しさの塊が堰を切つたように溢れ出してきた。

自分の中にいたものの恐ろしさ、その自分を制御できない悔しさ、イリア騎士として情けない振る舞いをして、今こうして無様な姿を晒す虚しさ。

自分のイリアへの気持ちは所詮この程度のものか。

イリアの為と取つた剣が、ただ欲望のまま血を求め魔剣だった事が、シャニーにとつて最も情けなくそして自身を許せなかつた。

だから、ルシャナにもウツデイにも、誰にも話せなかつた。

何とかして、この感情を押しえ込む方法を見つけなければ、いつか自分の刃は仲間へ向く。

何があつても防がなければならぬのに、どうしたらいいかまるで分からない。

そのままシャニーはすすり泣き続け、ユーノはずつと妹の背中をさすっていた。

### 第3話 97人目の業

静かな時間にただ響く少女のすすり泣く声。シャニーはずっと姉の胸の中で泣き続けていた。

初めて覚える己の剣への挫折感。自身の誓いに反して欲望のまま、囁かれるままに振るった剣への怒りと恐怖感。

悔しくて悲しくて、そして恐ろしくて、ただ泣き続ける妹の背をしばらくさすつていた姉ユーノは、ついに静寂を破った。

「シャニー、それもあなたの一部よ。抑え込むより、うまく付き合う方法を探さない」

「え?!」

思わず目を見開いた。こんな恐ろしい自分を受け入れろだなんて、そんなことできるはずがない。

そう彼女の瞳が訴え、彼女は彼女自身を拒絶していることがありありとうかがえる。

「貴女なら分かるはず。どんな剣でも、使い手、使い方次第で神剣、聖剣となることを。貴女の力は確かに危険だけど、抑え込むことは貴女自身を抑え込むことと一緒に。いつか無理が生じるわ」

「これは……あたしの力なの？ 制御できなくても?」

にわかには信じられない。まるで何か悪いものにもとりつかれたのではないかと思うほどに、自分の知っている自分とは違う異物。

(じゃあ……そんな異物があたしの中に居るっていうの??)

余計に寒気がする。信じたくない、そんなの、あるはずない。そう……思いたい。

今までこんな事考えたことも無かったのに、これからも一緒だと思うと、肩から背骨から寒気がざわざわ脳天の髪の毛の先まで伝って震えてくる。

「そうよ。貴女の力を最大限に引き出してくれる事に違いはないわ。なら、うまく付き合っていくべきよ。血を求める剣ではなく、イリアを救う剣として抜けるように試行錯誤なさい」

どうやって……そう返そうとしたのが分かっていったかのように、

ユーノは言葉を挟む余裕も与えず続けてくる。

「そればかりは、貴女にしかできないわ。言わばもう一人の貴女自身なのだから。うまく自身を説得しなさい」

「はい……」

自分の考えていた事とは真逆の答えが先輩から帰ってきた。

抑え込むぐらいなら活かせ。言いたいことは分かる。でも、こんな恐ろしい気性と付き合っていく自信などなかった。

こんな自分は、自分ではない……どうすればいいか考え込んで下を向く。

考えれば考えるほど、もう一人の自分の剥く牙が恐ろしくて。余計に俯いた。

ユーノには妹の言っている事を聞いているうちに、ある人物が浮かぶようになっていた。

聞けば聞くほどにその輪郭ははつきりして、シルエットには色が浮かび上がってくる。

その人と同じように、いつも裏に隠れている一面が極限を要求される場面で表に現れたという事か。

あの話はただの伝承だと思ってきたが、目の前で妹に起きている事は恐らく事実だ。

きつかけを与えられ自覚している以上、これから先ずつと裏に潜んでいることはありえない。

「シャニー。良い事を教えてあげるわ。私も聞いただけだから確かな事は知らないけど、初代団長も、貴女みたいな一面があったそうよ」

それを聞いて、俯いていたシャニーはぼつと顔を上げた。

人竜戦役の時、女ながらに槍を取って、騎士の中の騎士バリガンを助けたのが、後の初代天馬騎士団長だ。

「初代も、同じように苦しみ、そして長い時間をかけて自らの力としてものにしたそうよ。その力のおかげで、今のイリアがある。力を持つ者は、正しくその力を使う義務があるの。言いたい事は分かるわね？」

シャニーはこくこくとユーノの顔を見つめたままうなずく。

初代団長にできたならば必ず何か方法があるはずだし、それを見つけ  
る事ができるのは自分だけ。

自分自身とじっくり時間をかけて付き合い、見つめて、辿り着くし  
かない。

——お前は、他の奴が願っても手に入れられない光るものをい  
くつも持っている

ふと、デイークの言葉が脳裏をよぎった。

これが、デイークの言う光るもののひとつなのだろうか。

「分かったよ。あたし、逃げないで頑張ってみる。でも、怖いから話は  
聞いてね？」

シャニーの瞳を見て少し安心した。先ほどに比べたら元気が戻っ  
てきている。

妹は姉を信じ、姉もまた妹の頭に手を置いてその成長を確信し、  
ユーノは頭から手を下ろすと今度は両手をシャニーの肩に置いた。

「良い子ね。じゃあ、私からも宿題を出すわよ」

彼女は一呼吸置いてから、自分の言葉を無言で聞き入るシャニーへ  
アドバイスを出した。

「貴女は、力を得て何をしたいの？」

「そりゃ、イリアのために……！」

即答しようとしたシャニーの口をユーノは優しく塞ぎ、驚くシャ  
ニーの目を見て首を横に振った。

「本当にそうなのかしら。すぐ答えを出してしまうのはもったいない  
わよ」

何故？ 妹の瞳はそう問うてくる。入団したその時からイリアの  
為にと剣を振るってきた。

今だって同じだしきつとこれからも同じはずなのに。

だけど姉の、『伝説』の天馬騎士、大先輩にして95代目団長の言葉。  
素直に今は聞いて、絶対に宿題に答えを出そうと決めた。

「もっともつと経験を積んで、確固とした自分を見つけてからでも、答  
えを出すのは遅くないわ。力を得て一体自分は何をしたいのかを考  
えて、その為は何をすべきで、どこへ向かおうとしているのか。いつ



でも考えなさい」

「はいっ、分かりました！」

シャニーは白い歯を見せてユーノへ敬礼をし、ユーノもその敬礼に返した後、二人は声を上げて笑った。



一方外では、ユーノが外へ出てくるのをテイトが不安げな眼差しでじっと待っていた。

彼女はユーノのお付である老紳士ジョージから、ユーノが来城したと聞いて、誰にも告げずここまで駆けて来た。

彼女は姉が心配すると思つて告げなかったのだが、どうして情報が漏れたのだろうか。

（こうなってしまうのなら、最初から自分が説明しておけばよかつたわ……）

後悔しても仕方ないが、テイトから話をしておけば要らぬ心配をかけることはなかつただろう。

良かれと思つてした事が裏目に出るほど、後悔することもない。

おまけに、誰にも告げていないはずなのに、どこからともなく事務方が集まりだしている。

「テイト団長、ユーノ名誉団長がお越しになられているというのは本当なのですか？」

ふくよかな総務部長が焦つてテイトの許へ駆けつける。

テイトが事実を伝えると、彼女は手際よく部下に指示をして歓迎の用意を始めだした。

周りの事務方も、いつもののんびりした様子とは全然違う。

（ユーノ姉さんが来たとか分かつた途端にこうなるなんて……）

テイトは自分への対応との違いに少々不満を覚えつつも、今もなお根強い『伝説』の天馬騎士、95代目団長ユーノへの人望に憧れた。

「団長、ユーノさんが来ていると聞きましたが」

走りこんできたのはイドウヴァだ。彼女はユーノの代からずっと天馬騎士団に在籍している騎士。

95代の時も、彼女はなんとか団長に取り入ろうと色々努力をした。

難しい任務をいくつもこなしたし、休みの日にも城に来て団長の雑務を手伝った。

だがそれでも、ユーノは彼女の精鋭部隊入りを認めず、ずっと第三部隊の部隊長止まり。

何とか認めさせようと努力したが、結局ユーノから声がかかることは、ユーノが騎士団にいる間はおろか、彼女が騎士団から身を退いてから今でも無い。

今日こそは、その気持ちがイドゥヴァの顔を普段以上に険しくする。

主力が欠けた天馬騎士団の中では、今でもユーノの影響力は無視できない。その力はおそらく現団長をも凌ぐだろう。今日こそは……。「ええ、今は医務室で怪我人と面会しています。だから出てくるのを待っているんです」

医務室のドアを開けようとするイドゥヴァの背中に、釘をさすように声をかける。

イドゥヴァはそのまま開けそうな勢いだったが今は抑え、総務部長の横まで歩いていき、そこで世間話を始めた。

（皆、姉さんを目当てに集まってくる。どうしたら、姉さんの様に人の気持ちを動かせるようになるのかしら）

続々と集まってくる者達が、まるで自分などどうでもいいような振る舞いをしているようにタイトには映る。

これ程までに、『伝説』の天馬騎士の力は絶大なのか。

何か心細い。ここまでに部下を惹きつける力が、果たして自分にはあるだろうか。そう自分に問いかけていると、後ろから声がした。

「団長、野次馬共の整理は私達がしましょう。団長はどうか名誉団長をお連れしてここを抜けてください」

そこには、ソランをはじめとする第一部隊の隊員達がいた。

ソラン達に自分の行方を知らせてはいなかったはずなのに、彼女達は来てくれた。

恥ずかしくて自分を笑いながら自問を撤回する。何て馬鹿な事を考えていたのだろう。

自分には素晴らしい部下がたくさんいるのに、一体何を見ていたのだろう。

「ありがとう」

感謝の気持ちを伝えずにはいられなかった。



外の騒がしきは、次第に中にいる二人の耳もくすぐり始めた。

ユーノが皮を剥いてくれた果物を、シャニーはうれしそうに食べる。

ちよつと前までは、この光景は日常茶飯事だった。

ユーノがエデツサ城へ嫁ぎ、テイトが見習い修行に出て……その日常はあつという間になくなってしまった。

そして今ある日常も、明日にはどうなるか分からない。騎士である以上、明日が来るかどうかなんて分からない。

今までは周りに覚悟を要求されてもどこか他人事だったが、今回の件でそれを思い知り、心にはつきり焼き付いた。

今この時をととても大事にしようと思う様になると、ユーノと一緒に過ごせるこの時間は至福の時。

それを遮るかの様に外から、ドア越しに響いてくる声。

「なんか、騒がしいね。どうしたんだろう。こんなところ、めったに人は来ないのに」

シャニーは果物を頬張りながらドアの方を見る。

数人ではなく、かなりの人数がいるだろう気配がそこからは伝わってくる。

「ジョージが皆に伝えてしまったのね……。こうなるから、誰にも告げないでっってお願ひしたのに」

ジョージとは、ユーノのお付の執事のことである。

彼女自身はあまり騒ぎを起こしたくなかった為、騎士団の誰も告げずにここまで来たのだが、執事である彼にとってはそうは行かない。

彼は団長をはじめとする騎士団幹部や、総務部長達にユーノの来城を知らせていた。

シャニーもジョージとは城に行くによく話すので知っていた。丸い顔につるつるの頭なのに、口ひげは立派なおじさんだ。

「でもさ、引退してもこんなにお姉ちゃんのことを聞きつけて人が集まってくるなんてびっくりだよ。動乱中もそうだったけど、やっぱお姉ちゃんってスゴいんだね。『伝説』の天馬騎士だもんね。スゴいなー！」

シャニーの顔を見て微笑むユーノは果物の皮をすべて剥ききり、妹の食べやすい大きさに切り分けるとナイフを置いた。

姉の手から直接果物を受け取ってそのまま口に運ぼうとした時、シャニーは姉の顔が笑っていない事に気付く。

「皆、団長の力を求めているだけよ。貴女も知っているでしょ？代々の団長が承継してきた、バリガンの加護の話」

バリガンの加護、それは昔からずっとイリアに伝えられてきた話だ。

団長の座を手にした者は、初代団長が英雄バリガンから受けた加護の力を得ると言われ、その力は代々の団長から団長へ承継されて、人竜戦役後およそ千年もの間、承継は途切れる事がなかったという。

バリガンの加護による天馬騎士団長の力は非常に強力で、この力が貧国イリアをずっと守ってきた、とすら著した書物さえある。

シャニーも、話自体は母親やユーノから寝る前に何度も何度も聞かされたので知っている。

その時いつも、具体的にどういう力なのか聞いたのだが、一回も教えてはもらえなかった。

だから、郷土の民族話で単なる迷信だと、いつの間にか信じなくなっていた。

「えー、あれってただのお話じゃなかったの？」

「ただのお話……であって欲しいわね」

ユーノの口調は、実在すると言う様な思わせぶりだ。

そして、部屋の外に集まる人ばかり。これは、もしかしてただの作

り話ではないのか。

今まで、周りもユーノは凄い、さすが『伝説』の天馬騎士と噂をしてきたが、バリガンの加護が話に上がる事などなかった。

だからその時はユーノの人望はスゴイと思っただし、今でも同じだ。皆がユーノではなく、ユーノの承継した力に集まってきている。そんなワケは無いと思った。

「でも、みんながお姉ちゃんを慕うのは、やっぱりお姉ちゃんが、お姉ちゃんだからだよ」

何だか自分でも何を言っているのか、よく分からなくなりそうだ。うまく言葉では表現できないことが悔しい。

「ありがとう。でもね、実在するのよ」

「ふーん。じゃあ、お姉ちゃんはと言う力を前の団長さんから承継したの？」

実在するとユーノが明言した。シャニーは興味津々だ。

目を爛々とさせるシャニーの頭に手を置くと、ユーノはその場を立って窓際へ身を移す。

「あれから、変わってないわね……」

窓から見えるイリアの山々を眺めながらぼつりと漏らしたのは独り言か。

後ろから妹の声がする。その声に、ユーノは振り向いて質問に答えてやった。

「シャニー。それは貴女でも教えられないわよ。もし、貴女が団長になれば分かるわよ」

やはり、ここでもユーノは教えてはくれなかった。

前は騎士団関係者では無い者に情報を流す事はないのだと、自分の中で解釈していたが、同じ天馬騎士団の叙任騎士となった今でも教える事は出来ないという。

よほど、強力な力なのだろう。見た事も無い強大な力に惹きこまれる人たち。

そんな凄まじい力であるにも係わらず、その強大さを見た者がいないと言うのも何だかヘンな話だ。

「ねえ、じゃあタイトお姉ちゃんも承継しているの？」

「シャニーはふと、姉のことを思い出した。」

ユーノは2代前の団長であり、シグーネを経て今はタイトが97代目の天馬騎士団の団長だ。

なのに、騎士団内で日常を送っていても、タイトがユーノのように扱われている様には見えなかった。

それは96代目シグーネの代で、一度天馬騎士団は途絶えているからだ。

シグーネは次期団長を選任する前に、ベルン動乱でエトルリア軍に討伐され、96代目から97代目へは全く何も引継ぎがなされていない。

だから周囲は、96代目でバリガンの加護も途絶えてしまったと思っているのだ。

この考えが、皮肉にもユーノの周りへ、更に人を集める結果となった。

彼女自身は騎士団から身を退き、97代目としてではなく、初代としてタイトを団長に推したにもかかわらず。

「ええ、もちろん彼女も団長だもの。しっかりと受け継いでいるわよ」「誰から？」だってシグーネさんはタイトお姉ちゃんに……。もしかしてユーノお姉ちゃんか？」

96代目を討つたのは、他でもない97代目のタイトだ。

この事自体は、イリア騎士の誓いを忠実に守った結果であり誰も非難してこなかった。

騎士団の事を考えて、考えて……。その後の彼女の行動からも、想いは背中から滲んでいたから、団長の座を奪い取ったなんて言う話も聞かない。

だが確実に周りへ広まった。天馬騎士団は生まれ変わったと同時に、バリガンの加護からも外れてしまったと。

初代団長の力を承継してきた団長は、96代目で終わったのだと。だが、ユーノはそうは感じてはいなかった。

「いいえ、96代目はしっかりと自分の仕事を果たした。97代目は9

6代目からバリガンの加護を承継しているわ。シグーネは、ティトを97代目にする為に自らを討たせたのよ。不器用だけど、彼女らしいわ……」

ライバルは最期の最期まで、自分の思っていた人であった。

彼女の遺志を行動から汲み取り、それもあつてユーノは騎士団に戻る事を拒んだ。

だが、周りにはそれは通じない。この状況を打破するには、現団長が自力でどうにかするしかない。

「へー、スゴいなあ。ユーノお姉ちゃんも、ティトお姉ちゃんも、そんなスゴイ力を持っているなんて。スゴいなあ。いいなあ。よし、あたしも団長を目指して頑張るぞ」

先程までの悲観に暮れた顔はどこへやら。

初代団長の話で気持ちが少し楽になったらしく、体中包帯を巻いている痛々しい姿の割に元気なものである。

姉二人が、団長を経験してイリアを守っている。ならば自分も。そう考える事は自然な流れであり、そうして天馬騎士団は受け継がれてきた。

ユーノはその力強い宣言に頼もしさを感じる一方で、今なお残る悪しき轍の連鎖を何とか断ち切りたかった。

「シャニー」

「なあに？」

ユーノは窓際を後にすると、再びシャニーの座るベッドの淵まで来たが、彼女は今度は淵に座る事はなく、真直ぐシャニーの瞳を見つめた。

（今までの顔と違う……）

姉の表情に、シャニーは思わず背筋を伸ばした。

ユーノが姉から妹としてではなく、第十八部隊副将シャニーへ、95代目団長として話しかけているのだとすぐに分かった。

「団長を承継する事、それは過去を背負うという事でもあるのよ」

「過去を背負う？」

「そう。ティトは97代目。彼女は、96人分の罪と業を背負って、天

馬騎士団の舵取りをしているの。団長は、過去の罪と業を引き摺らずに背負って、あるべき方向へ皆を、イリアを導いていく義務があるのよ」

長い歴史と、それを代々の団長が承継していくことで得られる加護。

代々の団長が執ってきた行いは、後世に業として長く影響し続ける。傭兵としての人の罪も、同じように長い歴史の中で忘れ去られる事なく残っていく。

騎士団を継ぐと言う事は、それらの全てを背負い次へ繋げて行く事を意味する。

それが、団長足る者の宿命であり、掟。

シヤニーはきよとんとしてしまった。言われている事はなんとなく分かるような気もするが、それが実際にいかに大変な事で、どれだけ苦しい事なのか。彼女にはとても想像ができなかった。

それは仕方ない事。この苦しみは、承継した者でなければ決して理解できない。

信じてくれた者たちの想いの重さは、背負ってみなければ分からない。

「シヤニー。今は分からなくてもいいのよ。でも、これだけは今のうちにしっかりと考えておいてちょうだい。一つ目は、自分はイリアをどうして行きたいのか。二つ目は、貴女がもし力を得たら、その力で何をしたいのか。これは、団長になる、ならないに関係なく重要な事よ」

——己の確固とした覚悟を、今のうちに自分の心に刻み込め。若き副将へ95代目はしっかりとした口調で指示した。

瞳を閉じて何度も復唱し、しっかりと心へ焼付け、再び開いた青い瞳は力強く答える。

「はー」

腕を突き上げてがってんを見せ付けるが、彼女は自分が怪我人だと忘れていたようだ。突き上げてから、わき腹の激痛で悶絶にうずくまる。



朗らかで凛と咲く少女達が築いていく生まれ変わった天馬騎士団に、95代目はイリアの未来を託した。

「ふふ、でもまずはゆっくり体を癒しなさい」

「はあい」

再び姉の顔に戻ったユーノに、シャニーも妹らしい笑みを見せて笑いあった。

シャニーは何かは分からないが、ユーノが凄いとされる理由がなんとなく分かった気がした。

「ユーノお姉ちゃん、ありがとう。あたし、お姉ちゃんのこと大好きだよ！」

今まで身近だったから気付かなかっただけなのか。

戦闘能力だけではない。話をするだけで分かるその人の気。

その気が、ユーノからは溢れているように彼女には思えた。

今まで以上に、シャニーはユーノの事が大好きとなり、そして憧れの的となった。

## 第4話 軋轢と轍

シャニーの様子に安心して部屋を出てきたユーノを待っていたのは、予想通り事務方やかつての部下の顔。

波に抗って思うように進めずにいるユーノ達をしつかり視界に捉えながら、人ごみを押し分けてイドウヴァが最前線に立ち、絶好の位置を陣取る。

第一部隊の隊員の誘導に従ってユーノは少しずつ進み、かつて部下だったイドウヴァの前に差し掛かり、そしてそのまま通過した。

彼女の視線は、最初からイドウヴァには無く、ずっと探している相手がいた。

「団長、少しお話ししましょうか。行きましょう」

ユーノはテイトと並んで歩いて人波の脱出を図る。そこへ立ちただかる人物がいた。

「名誉団長、せっかくお越しになられたのに、お声がけいただけないなんてあんまりです」

イドウヴァだった。彼女は堪らずに自ら声をかけたのだが、その声にすらユーノはなかなか反応せず、彼女の横を通り過ぎてからようやくに声がかかった。

「イドウヴァ。もう私は騎士団の者では無いのだから、気を遣ってくれなくて良いわよ」

「そうは行きません。名誉団長は今でも我らの誇りなのですから」

「ほら、貴女達も出迎えてくれてありがたいけれど、送迎は結構よ。騎士がこんな所に居る位なら、村々を回って近況を聞いた方が良いでしょう」

イドウヴァの言葉を聞いているのかいないのか、周りの騎士達にも解散を促す。

多くの騎士達はその言葉に大人しくその場を離れて行くが、やはり昔からいる騎士や、こう言う事が仕事の事務方は離れようとはしない。

テイトが先頭を切ってユーノを案内し、そのまま人ごみを抜けた。

その後を事務方達が追いかけてしようとするのを、テイトの部下が体を張ってうまく止める。それでも追いかけてしようとするイドウヴァを、何者かが彼女の肩を掴んで実力行使に出た。

「貴女はソラン。離さない！」

「そうは行きません。名誉団長のお相手は団長が一人でなされる。部隊長は公務の妨害をしないでいただきたい」

「妨害ですって？ 貴女、副団長に向かって自分が何を言っているか分かっている？」

大事な場面でまたしても邪魔をされて朱が差す。しかも相手はテイトより数段厄介と警戒するソラン。

彼女は厳しい事で有名であり、相手が誰であろうと容赦しない人物だ。

「妨害です。名誉団長も団長を直々にお呼びされていたではないですか。団長を差し置いて部隊長が先に出るなど、何を考えていらっしゃるのですか」

イドウヴァが反論しようとする前に、再びソランが一発を浴びせた。

浴びせられた方は、自分の肩を掴む手に力が入った事を感じ、言葉が喉から腹に引っ込んでいく。

「私は団長から名誉団長と二人きりで話したいと、野次馬の相手を任せられていますので、いくらイドウヴァ部隊長とお通しするわけには行きません」

今回は残念ながら団長に先手を打たれていたようである。

彼女は仕方なく追跡を止め、まっすぐな廊下を抜けて曲がっていく二人を見送った。

「もう騎士団の者ではない、ですって……？ これだけ影響力を残しておきながらよくそんな事を」

そう簡単に諦めるものか。

ソランの手を払い退けると、彼女は肩で風を切って次の行動へ移るのであった。



部下達のおかげで難を逃れたティトは、ユーノを連れて中庭へ続く連絡通路を歩いていく。

後ろからの追撃が無い事を確認すると、歩くスピードを緩めた。

(ソラン達、うまくやってくれたようね)

ところが、ユーノはそのままの速度でどんどん歩いて行ってしまうので、ティトも焦って背中を追う。

この先の分岐を右に曲がれば、そこはすぐ中庭。

ティトがそこまでさつさと歩いていこうとすると、急にユーノは止まってティトの体を柱の裏へと引き込んで隠した。

「どうしたの?」

「良いから、良いから。私についてきて、ね?」

よく見れば先回りしていたのであるうか、事務方の人間がちらほらと中庭に見え、彼女らは明らかにこちらの様子をうかがっている。

ユーノは事務方の視線がわずかにこちらから離れた事を確認すると、ドレスを着ているとは思えない軽やかな足元で柱と柱の間をすり抜けて、分岐路を右ではなく左へ曲がって行った。

「姉さん? そっちは行き止まりよ」

「良いの良いの」

ユーノは先ほどより更に軽い足取りで、行き止まりに向かって歩いていく。

不思議に思いながらも、あまりに姉が自信満々に突き進んで行くので、ティトはそのままついて行く。

予想どおり、道の終わりを示すテラスが見えてきた。

テラスは山々が見える景色の良い場所に作られているが、その先は絶壁と言っても良いほどの急斜面。城の正門へは辿り着く事ができないはずだ。

ユーノは行き止まり相手に止まろうともせず、テラスに入って行くとそのままティトの視界から姿を消してしまった。

「あれ? 姉さん?」

ティトは小走りにテラスへ入って辺りを見渡す。姿は見当たらず、

声だけがどこからか聞こえてくる。

「テイト、足元よ、足元」

その声に導かれるように下をきよろきよろ。だが、やはり何も無いように見える。

三週周りを見渡しても、テラスの壁が壊れて小さな穴になっている事に気付いたくらい。

「テイト、こつちよ」

その穴から現れた姉の顔に、テイトは思わず足元が後ろへ退いた。人一人が這つてようやく通れるような小さな穴。

テイトは姉に言われてそこをくぐり、まだ見た事の無い景色を眺めてあつけに取られた。

そこには当然道はなく、野草が生え放題。

「こつちよ」

道なき道をユーノはずんずんと先へ進んでいく。

「こんな所があったなんて」

「ふふ、まだあの穴が開いていて良かったわ。ここは私だけの秘密の抜け道なの」

多忙を極める事が多かった騎士団長としての仕事。それでも何か個人的にしたい時、良くここを使って抜け出していたらしい。

その都度、今では総務部長の人を真っ青にさせていたそうだ。

昔を語る姉が、とても楽しそうにテイトには映る。

強く、清いだけでは無く、こう言う無邪気な所もまだまだ健在のようである。

「姉さんがそんな事をしていたなんて……意外」

「あら、息抜きも大事よ。いつも気を張っていたら疲れちゃうじゃない」

「もう……シヤニーみたいな事を言わないでよ」

そうは言いながらも、彼女の顔には笑みがある。

しばらく姉の後をついていくうちに、テイトにはある疑問が浮かんだ。

「そういえば、この道は姉さんだけの秘密の道にしては……草が踏み

倒されているわね」

足元の草は誰かに踏み倒されて、人が通っている事が分かる。

しかもこの感じからするに、誰かが通ってまだそんなに時は経過していない。

「ホントね。やっぱここは良い抜け道なのね。テイトも困ったら使おうと良いわよ。私一度もバレた事無いから」

苦笑いをしながらテイトは姉の背を追い、しばらくするとユーノは茂みから再び石段の通路に戻った。

そこはめつたに人が通る事のない西側の旧通路。

ユーノは通路に設置された柵に両腕を乗せて向こうに見える山々を臨み、彼女の横にテイトも並んで、同じように山々を眺めてみる。

これから冬を迎える最後の輝きか、山々が陽に照らされて美しい。ゆつたりとした時間が流れている。

「ここだけ見ていると、平和なのよね。何もかも、うまく行っているように見える」

ぽつりと漏らす姉と同じ事をテイトも考えていた。どうして、こうもうまく行かないのだろうか。

姉も同じことを感じている。どこも、復興状況は芳しくないのだ。

「どうテイト。最近はどううまく行ってる？」

「いいえ。何をやっても空回りな気がして。それに、なかなか古参の騎士たちは協力してくれないわ。何かやろうとしても、必ず彼女らが待ったをかけるのよ。彼女らの鶴の一声に傾く事もしょっちゅう」

「イドウヴァアね？」

「え?! ……ええ」

どうして何も言っていないのに分かるのか、テイトには不思議だった。

敢えて名前を出さなかったのだが、一瞬の間で全てを読み取られ、姉に当てられて大人しく白状することにした。

「テイト、貴女は97代目なのよ。もう少し、自分の意見を貫いても良いと思うわよ。皆貴女の部下で、団長が決定者なのだから」

意見を無視する事は良くない事だが、言った者勝ちになっ

統率が取れないし、慕う者へ不安と疑心を抱かせる事となる。

彼女自身もそれは分かっている。第一部隊の部下達は、団長の言う事ならと従ってくれるし、ソランからもユーノと同じような事をよく言われる。

でも最近では、テイトの中では心を鬼にして押し通すようにしているつもりだ。

クレインと話をしてどこか吹っ切れてから、言い返す事も多くなっていた。

「ええ。私も自覚を持って話し合いを進めているわ。でも、やっぱり相手の話も聞きたいの。他人の声に耳を塞ぐ事はしたくないから。私は団長としての責任を果たさないといけないもの。それに、部下に余計な負担はかけたくないし」

テイトの気持ちを聞きながら、ユーノは自分が団長を承継したばかりの頃を思い出していた。テイトと同じような悩みを抱いて、もがいていた。

妹は不器用ながらに、着実に自分なりの方法を見出そうと歩いている。

改めて、ユーノは騎士団を退いて良かったと思った。

新しい時代は、新しい陣容で一から作っていかなければならない。

全ての人間と融和していく事は難しい。ならば、どう対立する人間と穏便に保ちつつ改革を進めるか、これも団長には要求される。

「そうね、その心構えは大切ね。そうだ、私が昔から壁に当たって困った時に唱える魔法の呪文を教えてあげるわ」

ユーノは人差し指をテイトのほうへ向ける。どんな凄い言葉が飛び出すのかと、テイトは興味津々だ。

もったいぶるようにユーノは目を閉じて間を持った後、ようやく呪文を唱えた。

「無理とか、不可能とかそんな言葉は自分をダメにする悪魔の呪文だってね」

どこかで聞いたような覚えのある言葉。テイトは思い出そうと空を見上げ、すぐ頭に顔が浮かんできた。

「それって……シャニーが一つ覚えに言ってた言葉じゃない」

「ええ。でも、私は正しいと思うわよ。何事も無理と諦めたところで、本当に無理になってしまおうと思うの。だから、貴女も諦めないで。貴女のやろうとしている事は、すぐに結果が見えてこない。けど、とても大事な事よ。諦めずにがんばって」

姉のエールにテイトは笑みを零す。自分のやっている事は間違っているのではない。尊敬する人間が、エールを送ってくれる。それは何にも変えがたい勇気となる。

「もうひとつ、貴女はもう少し部下を信じてみるといいわよ」

「私……部下を信じてないのかしら」

部下の事を大切にしているつもりだった。

だが、外から見た意見だ。何か自分に足りないところがあるに違いない。

クレインにも似たようなことを最近言われたばかり。その何かを、ユーノは気付かせてくれた。

「貴女は優しい子だから部下に心配をかけたくないって、なんでも一人でやってしまおうとする癖があるわ。でも、部下はきつと、もつと頼って欲しいと貴女へ思っているわよ。貴女のことを慕っているなら、きつとね」

前から、それっぽいことを言われているのを思い出した。

この前の遠征の時にも、副将のソランからあまり自分を責めるなど言われたし、第一部隊の他の面子からも言われていたのだ。団長の力になりたい、と。

その時は自身を磨く事が手助けになると突っぱねてしまった。

あれも、自分の不安を部下に見せる事で、部隊全体へ不安を広げない為の行動だった。

「貴女は確かにリーダーではあるけれど、イリアを守る騎士には変わらないわ。悩みや考えは騎士同士で共有しなければ、本当の意味での協力はできないわ。一人で戦ってはいけないのよ」

もし、自分の考えに反対する古参派に、自分の部下が目をつけられたら。そう思うとなかなか任せられないところがあった。だが、それ



は間違つた思いやりだつたのかも知れない。

部下達が自分の思想に同意してついてきてくれるならば、その者達に自分の考えをぶつけ、同じように道を作っていく事も大事だ。

自身が先頭を突き進んで皆を導くのもリーダー。

皆と横一線で暗闇を模索し、進むべき道を考えるのも、リーダーの一つの形。

(必ずしも、私一人だけで引つ張っていく必要は……ないのかもしれない)

もつともつと、みんなの力を借りる事が、今の自分には大切なのかもしれない。

部下もそれを望んでいる。彼女は部下もつと信じてみようと思つた。

「貴女のやってきた事は、間違っていないわ。ほら貴女の撒いた種が芽吹いているじゃない」

ユーノの指差す先には、村の巡回に出かける十八部隊の姿が見える。

そろそろ叙任より半年。彼女らは個人差はあれど、イリア騎士として大切なものを掴み始めている。

傭兵としてだけでは終わらせない。タイトの想いを受け継ぐ者達。その姿を見て、勇気が湧いて来た。自分のやっている事は間違つて

はいない。これからも自分を信じていこう。そして、もつと部下の気持ちを汲み取って大切にして行こう、と。

「さ、行こうかしらね」

ユーノは腕を壁から離すと再び石段を歩き出した。その道は、明らかに正門とは反対方向へ進む旧西側通路。

二人は次の分岐路を左に曲がって行つたが、その直後、この誰も来ないはずの道を通る人間が現れる。

慣れた足取りは分岐を右へ曲がり、彼女の前に広がってくる視界には、ちやうど帰城した第五部隊が見えてくる。

しめたと言わんばかりに旧通路から外れて茂みから顔を出した乙女は、そこで天馬の馬具を外すセラへ声をかけた。

「おーい、セラ」

手招きしながらニヤニヤする顔を見て、セラは目が飛び出した。



旧通路を抜けた新旧二人の団長は城の裏口へ出た。

鋼鉄製のドアを抜け、ユーノの進む方向を見てテイトはびっくりして走り出し、姉の前に立ちはだかった。

「ね、姉さん！もしかしてこれで帰るの?!」

「え、そのつもりだけど。だってあんなに騒がしいのはゴメンよ」

そこいたのは、木に繋がられた一頭の天馬。

誰に連絡して用意してもらったかは分からないが、ありえない選択肢だ。

何せ、ユーノはドレス姿。防具をしていなければ履物だって天馬に乗るようなものではない。危険すぎる。

「大丈夫よ、高いところを飛んでいくから」

まるで妹のような事を言う。承諾できるわけがなかった。それでも、姉がどうしても言うので鎧を着けるといふ条件付で許す事に。

「私が鎧を取りに行く間に飛んでいかないでね！」

もしかすると妹よりやんちゃかもしれない。

早くしないと本当にそのまま飛んで行ってしまうかも知れないと不安になって、もと来た道を走る。

おまけに空は雲行きが怪しくなってきた。先ほどまで穏やかで本当に良い天気だったのに、真っ白に濁った太陽が今にも崩れて落ちてきそうだ。

曇天特有の湿った風を切って、鳥も低いところを飛んでいる。

間違いなく、もう直に雨が降ってくる。降り出す前に、何とか姉を帰さなければならぬ。

姉が忙しい中、自分達を心配してわざわざエデッサから来てくれたのだ。

今更ながらにテイトはユーノに感謝の念を心の中で唱え、彼女の大きさに改めて団長としても、妹としても憧れる。

「ありがとう、姉さん。私も、きつと姉さんの様な団長になって見せるわ」

ユーノに団長就任をお願いしに行ったあの時。彼女から騎士団長の証であるブローチを渡された時にも、同じ事をユーノに向かって言った覚えがある。

その時の強い気持ちを思い出しながら、彼女はブローチを強く握り締め、確かめるように誓うのだった。

## 第5話 『閃電』の怒り

曇天は我慢の限界を超えた。太陽が吹き飛び、風は彼のもたらした温もりを全て飲み込んで押し流す。

やがて風は、万本の鋭槍をまとった冷たいカーテンとなつてイリアを包み込んだ。

その中を歩く二人の男が、傘を忘れたのか槍の全てを受けて歩いている。

ところが、槍は彼らに突き刺さることなく、全てその目の前でかき消された。

「やれやれ、理の魔法は便利なものだな」

「このくらい朝飯前ですよ。ツマラないですけどね」

彼らは例の黒ずくめの二人であった。

葉巻を啜える紳士はいつもどおり黒の外套とソフトに身を包み、刀が雨に濡れないように外套の中へ包んで大事そうに運ぶ。

「おいおい、ミュートが濡れたら彼女が可哀相だろう。ツマラないな」と言わずによろしく頼むよ」

「マスターのお望みなら、仕方ありませんね」

もう一人は、もちろんこの前シャニーたちを襲った仮面の男、ウエスカーだ。

いつもどおりの笑顔で彼は頭上へ魔力を適当に集め、自分と主人の上に作った炎の壁で槍をかき消していた。

雨は止むどころかどんどん激しくなつてきて、槍は掻き消えるだけでなく悲鳴を残していくようになる。

「で、その傷は？」

ソフトの端から斬り上げる視線は、ウエスカーの顔にできた傷を見逃さなかった。

その傷の辺りを手で触るウエスカーの眼光は鋭く、いつもの笑顔が偽りかのようだ。

「いいえ、特に気にするほどではございません」

この男なら、饒舌に話し始めるはずだ。ショーが上手く行ったのな

らば。それをこうしてはぐらかそうとするのは、決まって失敗した時だ。

「私は怪我の具合を聞いているのではない。不死身のお前に心配などせんよ」

紳士の視線は移ることなく、まっすぐ彼の目を睨み付けている。

ウエスカーは観念したのか、いつもどおりの笑顔に戻った。

「いえ、メインショーに移る前に少々遊びすぎましてね。人も集まってきて、ようやく楽しくなって来た所でしたのね。残念な事に邪魔な奴が現れてしまったので。この傷は、そいつがつけた傷ですよ」

ウエスカーが笑って何でも無い様に見えるが、紳士の視線は相変わらず鋭く、部下を睨み付けて離さない。

しばらくそのままの状態に進み、彼らは道を外れて針葉樹林帯へ入り込んでいく。

この鬱蒼とした樹林帯の中では槍も届かない。

「移らなかったのではなく、移れなかったのではないか？」

いつまでも過ちを認めないとはずいぶんと彼らしくない。

ついに核心を突く紳士の言葉にも、ウエスカーは表情を崩さなかった。

「いえいえ、なかなか気づいてくれなかったもので。あれで随分時間を割いてしまいました」

「ふっ、その傷をつけたのはそいつだろう。お前が思っている程簡単に倒せる相手では無かったと言う事だ。お前が撤退を余儀なくされる程に、周りが見えなくなってしまうとはな」

紳士は、顔の傷を見ただけでウエスカーが相手を殺し損ねたという事が分かったようだ。

予想通り、彼女はなかなか良く戦ったらしい。気づいていない状態でも、ウエスカーを前に死者を出さなかっただけでも十分称賛に値する。

おまけに、彼に傷まで残したとなれば、やはり握らせてみたくなる。この魔剣を。

尤も、ウエスカーは認めたくないようで、もう一度顔の傷を手でな

ぞると、その傷めがけて火炎魔法を打ち込み炭とした。

「まあまあ、次やる時は手加減しませんので」

彼の目元は笑っているが、そこには沸々と燃える怒りが燻っているのが分かる。

不死身の体はどんどん再生していき、どんな傷もまるで無かったかの様に元に戻っていく。

先ほどまで火傷を通り越して炭になっていた口元は、あつという間に肌色に戻って不気味に笑い出した。

「もう止めておけ。素顔を見られ無かっただけでも奇跡的なことだ。騎士団にはなかなか手練れがいるようだ。お前と戦った人間もそうだが、暗殺者もいるな」

彼は、自分よりウエスカーの背が高いとは言え、その首筋に残る深い傷跡を見逃してはいない。

これは、アサシンの使う暗殺剣特有の傷だ。例えその場で即死させることが出来なくとも、甚大な失血を伴い後遺症も大きい危険な闇の剣。

「下手な事をしてこちらの足元を嗅ぎ回れては困る。事は慎重に運べ。お前らしくないぞ」

とうとう、上司からストップがかかった。こうなっては、ウエスカーも従う他は無い。

もう少し楽しみたかったのに。彼は残念そうな顔を見ると、軽く礼をした。

自分の魔力を余すことなく使う事がなかなか出来ないのも、たまには爆発させてみたいのだ。

それを紳士は戒める。ただでさえウエスカーは失態を犯しているのだ。あの『滅蝕』<sup>ウロボロス</sup>に血を呑まれるという想定外の失態を。

「いいか、分かったか？」

これ以上の失態は計画に影響しかねない。復唱を命じて、爆発しそうな溶岩をあつさり冷気で封じ込んでしまった。

(こいつをここまで追い詰めるとはな。なかなかやるではないか)

賛辞を贈りながら新たな葉巻をくわえると、ウエスカーが今日は魔

法ではなくちやんとマッチを使ってくれた。

だが、未だ気付かぬ者に花を持たせてそのままにいる訳には行くまい。

彼は一服し、煙を吐き出すとその煙の行方きつと見据えた。

「いいかウエスカー。我々は、この世界の史実に残ってはいかんのだ」  
闇のうちに仕事を終えて、闇に消えなければならぬ。

この世界の者しか、この世界の歴史に触れてはならない。それが組織の掟。

その仕事を果たすには、ウエスカーのあまりに純粋な魔力は目立ちすぎてしまう。

雷の精霊トオルの加護を受けたこの『閃電』の魔人の放つ螺旋トルハシマの稲妻は。

「お前がその雷撃を使つて良いのは、あくまで任務に対して必要性がある時だけだ。それ以外で使う事は許さん。それが理解出来ないのであれば、お前とて私は容赦できないのだ。分かってくれ」

主の言葉をソフトをかぶり直してうなづく。彼を怒らせると、いくら不死身でもどうなってしまうか分からない事は経験済み。

笑顔から、彼は狡猾そうな細い目を光らせる。

「おお……恐ろしい。それだけはご勘弁を。ですがマスターのお話から察するに、私を戦わせたのは作戦上必要であつたという事ですね」「そういうことだ」

「ふふ、じゃあ私は十分勤めを果たせたわけですね。……相手の戦力を確認できましたし、何よりも、アイツが騎士団に在籍しているという事を確認できましたから」

むやみに雷撃を浴びせる事は、絶対に紳士から許可が降りない。その紳士が渋々ながらも、雷を操る事を許したのだ。

最初から理由があることに気付いていたし、使命は果たしたつもりだ。

「それだけ聞ければ十分だ。よくやった。？まれたことは想定外だったかな」

この情報が、紳士は欲しくてたまらなかつた。

戦闘自体は無駄ではあったがターゲットをおびき寄せ、標的を斬る剣までも目途がつくとは。

とにかく、これで次の行動へ移ることができる。

「ウエスカー。そろそろ次のステップに移ろう。だが、再度忠告しておく。我々は表に出てはいけないのだ。それだけは気をつけてくれ」  
「具体的にはどうすれば？」

いつの間にか、ウエスカーの顔に笑顔はなくなっていた。

背筋に寒気が走る、まるで妖弧のような細い眼つきで主からの指示を待つ。

そんな寒気すらも凍り付かせてしまう様な、斬れそうな程に冷たく光る瞳が下からウエスカーを見上げた。

何もかもを経験し、全てを悟ったかの様に落ち着き払う眼は、熱く煮えるウエスカーの赤い眼光をも凍らせる。

「最終目的は、あいつの息の根を止める事だ」

ゴールは当初から変更はない。ターゲットを亡き者とする事。

しばらく妖弧のような目を更に細めて笑顔を保っていたが、その眼から再び紅蓮の炎がギラギラと姿を現す。

「で、その方法は？」

ウエスカーから催促をした。いつもはないことだ。

どうしても、自分の雷で焼殺したいようである。殺意が彼の眼から轟々と滾っている。

もちろん、紳士としてはそれを許すわけには行かない。

自分達は、史実に残ってはいけない。これも使命のうちのひとつ。

「我々は、直接斬らずとも良い。ただ、その背中を押してやれば良いのだ」

「それはつまり……」

「我々が直接手を下す事は無いと思え。そう言う事だ」

ウエスカーが残念そうな顔をしたことは言うまでも無いだろう。

紳士の命令は絶対であり、それが自らに課せられた任務を果たす為に必要な事であるならば致し方がない。

「御意」



彼は主に向かって頭を深々と下げる。その眼つきはいつもどおりの笑顔に戻っていて紳士を安心させたが、それでも、ウエスカーは諦めていなかった。

任務に対してはマスターに従うつもりである。とは言え、傷をつけた者には相応の罰が必要だ。

「……それでは収まりません。燃え尽きる最後の輝きこそが最高に美しいショーとなるのです」

今は、目的のため動くことになろう。だが、時が来れば必ず……。

復讐の魔人はその赤く煮える細く蛇のような眼で遠くに見える城を睥むのだった。

## 第6話 聖天騎士団

「テイト、本当にありがとうね。あなたも忙しいはずなのに」  
エデッサ城に到着してテイトの操る天馬から降りたユーノは、後から降りてきた妹を労う。

テイトはユーノに皮鎧を渡したものの、出発する直前になって再び姉を止めた。

それで結局、自分が姉を連れて行く事にしたのだった。

「だって姉さんは騎士を辞めてだいぶ経つし、そんな格好ではキケンよ」

「あら、今でもたまに天馬は乗っているわよ。だって、お城から抜け出すのにはちようどいいじゃない？」

冗談で言っているのだと信じたところだが、先ほどのカルラエ城での抜け出し方を見ると、そうだと言いつつ切れない所が怖い。

当のユーノはテイトが困惑する表情を見て笑っている。いたずら好きなどころは、やはり姉妹で似ているとテイトは思った。

ある時は真面目に、ある時はくだけて。そう言う切り替えがこんなふうまいと、これを苦手とするテイトにとっては羨ましい以外の確かな言葉が見当たらない。

手を振り城へと消えていく姉への憧れがまた一つ強くなった気がする。

曇天の中、なんとか雨が降り出す前に姉を城まで送り届ける事が出来た。

後ろに人を乗せてこんな天馬を飛ばしたのは久しぶりで、彼に悪い事をしたと思いつつ撫でてやる。

今度は早く雨が降る前に帰って、ジョージに主の居場所を伝えてやらねばならない。

きつと今頃、カルラエ城の中を必死になって探し回っている事だろう。

天馬に乗って帰ろうとしたテイトだったが、あぶみ鎧にかけた足を再び地に下ろす。

彼女は急いで天馬を見えないように茂みへ隠すと、自らも身を潜めてエデッサ城の正門辺りをじっと見つめる。

視界の先から現れる二人の人影。その一人を見てテイトは思わず声が出そうになった。

間違えるはずもない。イドウヴァだ。なぜ、彼女がこんな所にいるのか疑問に思ったが、とりあえずもう一人の人物も眼を凝らして良く見てみる。

「あれは……フェリーズ卿だわ」

美しい金髪と立派な口ひげの優雅な聖職者がそこには見える。

彼女はすぐにぴんと来た。聖天騎士団のフェリーズ枢機卿だ。

エトルリアに本拠地を置くエリミーヌ教の聖職者として、世界にその教えを説く司祭の位にあった人物。

その彼がイリアへ信仰布教の旅に出た際に、現地の貧しさを放っておけずそのまま住み着いた経緯を持つ。

彼は毎日のように人々に教えを説き、苦しんでいる者を看病し、聖職者の身であるにも係わらず斧を取り開拓に参加した。

更にエトルリアの神官伝いで、葉やら文化やらをどんどんイリアへ取り込んだことで、民の心を掴むまで時間を要する事はなく、イリア西方の民はエトルリアから聖者が来たとしてフェリーズを歓迎した。

その彼によって創立された騎士団こそが聖天騎士団であり、エトルリアとの国境であるイリア西方のレーミーから、東のエデッサ寄りの場所までを管轄としている。

聖天騎士団は光魔法使いの司祭に、弓兵や理魔道士とエトルリア的な陣容に加えて、イリア伝統の暗黒魔法使いであるシャーマンを備えた「光と闇の騎士団」の異名を持つ、高い戦闘能力を誇る遠距離軍団だ。

今ではゼロット率いるイリア連合騎士団や天馬騎士団と共に三本指に入る大所帯となっており、その発言力はイリア内でもかなりのもの。

だがその反面、騎士団の異名どおり色々と黒い噂が絶えない人物でもある。

エトルリアからの回し者でイリアを征服しようとしているんだとか、今でもエリミーヌ教と通じていて、イリア内の情報をそちらに流しているんだとか。

つい最近も大掛かりな開拓事業を決行し、駆り出された多くのイリア民が犠牲になった事件は記憶に新しく、危険を最初から承知していたのではないかと騎士団間会議で物議を醸すこととなった。

その議案提議をしたティトであったが、うまい具合にかわされてそれ以上が語られる事はなく、良い印象は残っていない。

頼みのゼロットは遠征に出て不在であり、他の騎士団長もなぜかこの事に言及しなかった。

腹の虫が収まらず、会議後に彼女はフェリーズへ直接問いただしていた。今でも苦い場面が思い出される。



「これは、ティト団長。今日もお元気な事で何よりです」

「事業内容を拝見させていただきましたが、犠牲が出る事が明らかです。どうしてこんな事業にゴーサインを出したのか、ご説明願います。あんな説明では到底納得ができません」

フェリーズは表情を変えないでティトの話へじっと耳を傾け、最後まで聞き終わると、いつもどおりの穏やかな笑顔から信じられないような言葉を放った。

「詳細にお答え出来れば一番良いのですが、私もそこまで細かくまでは把握出来ていないのですよ」

一体何を言っているのか。ティトは理解するまで少し時間がかった。

「あの作戦は、うちの執行隊長が行った事です」

フェリーズが続けて放ったさらに信じられない言い草は、ティトの目に火を点けて口から怒りのこもった台詞が飛び出した。

「それはどう言う事ですか？ 騎士団長ともあろうお方が内容を把握されていないなんて言い訳になりませんよ」

部下が勝手にやった事で、自分の感知する所では無いと言う趣旨に

取れる。

そんな言い方で生真面目なテイトが納得する訳がない。

それどころか、そうした責任転嫁が大嫌いなテイトを怒らせる事になる。

「騎士団長足る者、全ての作戦に目を通し、執行隊長と話をして吟味する事が勤めではないのですか？」

フェリーズはテイトの怒り様に両掌を向けながら「落ち着いてください」とジェスチャーしてみるものの、事実は事実である以上、どんな説明をしても彼女は納得などしないだろう。

彼はしばらくテイトの怒りをなだめ、ようやく反撃に出た。

「私は部下を信頼していますからね。そんな、一から十まで部下の言う事為す事を監視する事などできませんよ」

「そう言う事では」

テイトが反論しようとするのを、フェリーズはその言葉に割って入って止めさせた。

途中で強く言えば、黙ってしまいう事が分かっているようだ。

さすがに、人に説法をする事が仕事だったフェリーズならではの話術か。

「そう言う事でしょう。部下のやる事が信じられないから、結局全部自分で見なければ気が済まなくなる。それは監視している事と同じです。我々騎士団の長は、騎士達の歩むレールを引いてやる事が仕事のはず。貴女はレールを敷くだけでなく、敷いた場所に戻り、騎士達の後ろに立って監視しているのです」

テイトは額にしわを寄せる思いでフェリーズの説法を聞く。

彼は言葉だけでなく、ボディランゲージも巧みに使いこなす為、つい話を聞いてしまう。

「それが証拠に、天馬騎士団殿の管轄地域は余り復興が進んでいないように見えます。そちらの計画に関してはどうされたのですか？」

先ほどの会議でも進捗内容が不明確だったのでお伺いしたいのですが」

いつの間にか、立場が逆転していた。

確かに天馬騎士団が管轄するカルラエ付近は、聖天騎士団の管轄するレーミー北東部に比べると復興具合が芳しくない事は明らかだ。

とは言うものの、聖天騎士団は布施という名目の臨時収入があるうえに、エトルリアとも縁深いフェリーズが筆頭である為に仕事の量も質も豊かなのだ。

ゆえに聖天騎士団の稼ぎ高は常にトップであり、騎士団間会議では彼はいつも自慢の口ひげを見せ付けている。

だが、それは言い訳にはならない。稼ぎ高は天馬騎士団だって退けを取らない。

問題は管轄地域の復興状況だ。危険が伴う事も多くてなかなかゴーサインを出せない事もあるし、何より先の戦争で天馬騎士団が敵国に着いて事実上母国を裏切った事が禍根として残り、住人達との繋がりが希薄になってしまっているのだ。

それに加えてタイトの面倒見のよさが裏目に出て、ルールが敷かれずに前に進めないでいる。

分かっている、フェリーズは聞いたのだ。案の定、タイトは言葉を慎重に選んでいる事が間と表情から伝わってくる。

「私は部下を信じていますから。どんどん先を考えていかないと、他国に遅れを取ってはいけませんからね。イリア騎士団の長として、足を引つ張るような事は出来ません」

ようやく言葉を見つけたタイトに覆い被せるように言葉を投げつける。

もう何も言えなくなってしまった。悔しいが、フェリーズの言葉に反論ができない。

「今回の件は、部下に詳細を調査させています。ですから、タイト団長がご心配される必要はありませんよ」

フェリーズの報告に、タイトは俯きかけた視線を再び彼の眼に集中させた。

調査すると言っても、その結果を報告するつもりなど無いに決まっている。

そんな疑心を感じ取ったか、フェリーズは追い討ちをかけるように

今度はテイトの手腕自体に攻め込んできた。

「ご心配ありがとうございます。しかし、私も天馬騎士団が心配なのですよ。前代は強引過ぎて手に負えませんでしたが、貴女は大人しすぎる。そうだ、ちよつと計画を見直されると良いのではないですか？　そうですね、まず、部下の管理スパンの見直しから始めてみてはいかがですか？」



今思い出しても悔しい。立ち去るフェリーズに声をかける事すらも出来なかった自分が。

失敗はしているが、明らかに相手のほうが功績を残している。

それに、事前説明をした時には不思議と住民から何の批判的意見も出なかったというのだ。

住民も承諾して決行している以上、あまり追求ができない。

うまくかわされた。あの時の印象が強烈に残っていて、どこことなく黒い噂が絶えないという話も真つ向からは否定できない。

それに、今そのフェリーズの横には、これまた反団長勢力のトップ、色々と画策しているイドウヴァがいる。

どうしても良くない予感が先行する。

居ても立つてもいられず、テイトは茂みから飛び出して彼らの許へ歩いていく。

「ふふ、さすがフェリーズ様。お話の分かるお方ですね」

「いえいえ、知り合つて長いのです。貴女のお考えになる事は大体分かりますよ。ふふふ」

二人は何か相談事でもしているのだろうか。

なにやら不穏な雰囲気の流れているような気がして、テイトの歩みを更に速める。

その存在に真つ先に気付いたのはフェリーズだった。

「おや、これはこれはテイト団長。団長お一人で巡回任務ですか？　遠方までご苦労な事です」

「いえ、名誉団長がカルラエ城へお越しになられていたので、その帰

路のお供をしていたのです」

その答えにイドウヴァがわずかながらに額へしわを寄せる。

ユーノに限らず、定例では来賓を送迎するのは事務方の仕事となっているからだ。

そう言う事をするところが事務方であり、雑用一般をこなす騎士として働けない人間達という認識。

それが、今回は団長直々にエデッサまで送迎したという。しかも、こんな短時間に。

「それはごく苦勞な事です。彼女はイリアにとって宝ですからね。彼女ほどの人が団長を退いてしまった事が、今でも残念でならないのですよ。とてもお話の分かるお方だった」

「ええ、姉はとても立派な団長でした」

フェリーズはユーノの団長時代を思い出したかのように、笑顔で彼女を称える。

(話の通じない人間で悪かったわね……)

テイトにとつてはそれは全く違う意味合いとなっていたが、表情には出さずに軽く流す。

「ところで、お二人はここで何を？ 特にイドウヴァさん、貴女は先程までカルラエに居ましたよね。どうしてこんなところにな？」

イドウヴァが答えるより先に、フェリーズがその質問に対して返してきた。

「私はユーノ様に用事があつたのです。まあ貴女もご存知のとおり、ユーノ様は外出中でお会い出来なかつたのですけどね。イドウヴァさんとは予てよりお会いするお約束をしていたのです」

テイトにとつては、なんとも合点行かぬ答えであった。

騎士団の長であるフェリーズ卿ともあろう人物が、何の約束も無しにエデッサ城に登城するとは考えづらい。

何よりも疑問に感じたのは、フェリーズが直接イドウヴァを呼びつけた事だ。

両騎士団の部隊長レベルが互いに連絡を取り合うことはしばしばある話だが、団長が他の騎士団の部隊長を直接呼びつけるなど、何か



よっぽどの事でもない限りありえない。

連絡書のひとつでも寄越すのが礼儀。司祭であるフェリーズはマナーにも厳しい人間なので、そんな事をする筈が無い。

そうなれば、それは密会であり天馬騎士団にあまり知られたく無い様な事。

先入観も手伝って、テイトには密会が良くないものであると思えなかった。

「騎士団としての話なら、私にも一声かけてください。他騎士団との話し合いを部隊長とだけで進められてしまうのは、騎士団長として見過ごせません」

トップを抜きにして騎士団間の話し合いをする事自体がおかしい話ではあるのだが、テイトはその事よりも、その当事者がこの二人である事へ非常な警戒心を抱いていた。

その気持ちの籠った言葉をフェリーズは紳士的な笑い方であつさりとし、それでいてしっかりと反撃してきた。

「テイト団長、何を勘違いされているかは分かりませんが、仕事の話をする為に私はイドウヴァさんをお呼びした訳では無いのですよ」

「では……？」

「はい、私は彼女をお茶に誘ったのです。昔からのお付き合いですからね。色々お喋りしたいと思っていたのです」

「こういう言い方をされると、これ以上に追求が出来なくなってしまう。」

例え嘘だとしても、それを証明出来るものが何もなくてただ詮索するだけでは、相手に不信感を募らせるだけ。

とは言うものの、彼女の心は警告し続けている。もう少し探りを入れてみることにした。

「今は任務時間中です。彼女にはこなすべき仕事が多い。その様な事で騎士団の者を連れ出すのはご遠慮願います」

ようやくフェリーズはテイトに頭を下げた。彼も観念したのか……そう考えたのは甘かった。

それで終るような相手では決してなかった。

「そうですね、私も少し気が緩んでいたのかもしれませんが。謝ります。しかし、騎士団間の話をトップ同士でしななければならないと言うのも不便な話ですね。部下同士でやってももらえるなら、それで良いと私は思うのですが」

「聖天騎士団では良くても、天馬騎士団ではそれがルールですので」フェリーズの提案を、テイトは簡単に切って捨ててみせる。

この二人の密会を許すような事をしては何をするか分からない。

第一、騎士団の全てを知っていなければならぬ団長が話に参加しないなど考えられない話のはずだ。

「そうですね。ではそのルールを尊重しましょう。イドウヴァさん、お茶はまた今度と言う事にしましょう。ですが、私からも少しお聞きしたい事があります。テイト団長、お答え願えますか？」

分かってくれたかと思ったその矢先の質問。

テイトは彼の質問が自分を責めるものであることをなんとなく予想する。

「任務時間中に他所事をさせるなど仰いますが、貴騎士団には仕事をしていない騎士が居ますよね？」

「何のことでしょうか。そんな騎士は居ない筈ですが」

「居るでしょう。今年の新人達ですよ。まだ一度も国外へ出していないじゃないですか。お茶の時間も許さない程にお忙しい貴騎士団において、そんな仕事をさせない騎士が居るのはおかしい話ではないですか」

十八部隊の処遇については、他の騎士団からも言及を受けている。何故、部隊を遊ばせておいて稼げる金を稼ごうとしないのか、と。

だが、その都度テイトは同じ回答をしてきた。今回も同様の答えを繰り返す。

「新人達には、戦場に出るよりも今はもつと基本を学んで欲しいからです。確かに、大きな戦力を求められる雇用先でなければ彼女達だって十分に報酬を稼ぐ事が出来ます。でも、今はもつとイリア騎士としての基本を学んで欲しいのです。それ無くしては、真にイリアを守れ

る騎士にはなれないと思うのです。これは、団長としての私の方針です。批判を受ける謂れはありません」

「テイト団長、そう言う事は管轄地域の復興状況を見てから言っていた方がいい。……まあ、これ以上他騎士団の運営に首を突っ込むのは失礼ですね。十八部隊がイリアを守るようになるのを楽しみにしていますよ」

フェリーズはテイトに一礼をすると、エデツサ城に向かってゆっくりと歩き出した。

なんとも一筋縄では行かない彼への警戒心を強めた彼女は、その彼の言葉を噛み締めて、イドウヴァと共にカルラエ城に向かって天馬を駆るのであった。

## 第10章 空知らぬ雨を越えて 第1話 瓦礫の勇者

今にも雲が落ちてきそうな低い空がカルラエの城下町を包む。こんな天気ではいくら昼間の市場と言えど人通りは少ない。

「おばちゃん！ おかわり！」

そんな重い雲ですら吹き飛んでしまいそうに元気な声が向こうから響いてくる。そこには、店の軒先で顔中に笑顔を浮かべて揚げパンを頬張るシャニーが居た。

「はいはい、ホント好きだね。でもあんまり食べると太るよ。天馬乗りは体重制限あるんだろ？」

昔からこの市場で惣菜屋を開いているおばさんは、うろうろと歩き回りながらパンに食いつくシャニーへ、今揚がったばかりでパチパチと表面が爆ぜるうまそうなパンを紙に包んで渡してやる。

警告を聞き流すかのように彼女は食べながらパンを受け取ってふらふら。もう片方の手に持ったかじりかけのパンを口へと運びだした。

この味は、幼い頃から慣れ親しんだ味。おばさんがお姉さんの頃から知り合いだ。

「いいのいいの！ 何週間も食べてないんだもの。ちよつとぐらい食べ過ぎたってバチ当たらないよ」

いつもの元気の塊が帰ってきて、静かな店がふいに騒がしい。

包帯だらけの体を見た時は肝っ玉のおばちゃんも流石に心配して見せたが、ここまで元気な顔を見せられては、彼女でなくとも心配して損をしたと思うだろう。

そんな穏やかな時の中、ずっとそわそわして落ち着かない人物が居た。

「ねえ、あんたヤバいって！ こんな所見つかったら大目玉じゃ済まないって！」

シャニーがうろうろと歩き回る度に、セラは空や周りをきよろきよ

ろと見渡す。

彼女が気が気ではないのも無理はない。脱走先でうまくセラを捕まえたシャニーは、任務時間中にも係わらず彼女を町まで連れてきていた。

何せ動けるようにはなつたものの、天馬を扱えるような健全体ではないから、悪友の操る天馬に乗って城下町まで来たのだった。

「大丈夫だって！　こんな時間には十八部隊以外に来る部隊なんていないよ。あたし、いつもここに来てるから知ってるもん」

「そう言う問題じゃないじゃん！　あんた、剣を修理したいつて言うからわざわざエデツサまで連れて行ってやったのに、何やってんのさ！」

セラはシャニーにとって悪友とは言っても、仕事中にさぼるなんてした事はない。

今回だって、前の戦いでぼろぼろになった愛用の剣を修理したいと言うから、シャニーのお気に入りがあるエデツサまで連れていったのに。

「あんた……いつつもここに来てサボってるの？　部隊長があれじゃ副将もこんなんか」

それを口にした途端だった。今までご機嫌だったシャニーの顔が変わったのがセラには分かった。

彼女はセラに近寄ると、その口にもらったパンを突っ込んだ。

「あぢぢぢぢっ！」

「レイサさんの悪口を言うところだぞ。あの人はサボってるわけじゃない」

シャニーの言葉に一瞬ドキツとしたが、セラはなんとかパンを口から離すとシャニーの口に突っ込んでやった。

ちよつとだけ目を白黒させたかと思うと、嬉しそうにパンを頬張ります。悪友。この顔を見ると、何か怒る気が失せてくる。

「はあ。じゃあ、あんたは何やってんのさ。怪我をしてようが副将は副将でしように」

「剣を修理に来たついでじゃない。ここに来たらコレを食べないと来

た意味が無いもん。セラだつて好きでしょ？ そんな所できよろきよろしないで食べれば良いじゃない。息抜きも大事だつて！」  
いつも息抜きしているのではないか……と言う疑問は口に出さな  
いでおく事にする。

シャニーの言う通り、この店には自分達が子供の頃からずっとお世  
話になってきた。

安くて早くて、そしてウマイ。あの頃の、そして今の自分達にとつ  
て、下町ならではの素朴な贅沢だ。

少し位良いか……。第二部隊から第五部隊に異動した途端、忙しい  
毎日を送るようになったセラも、親友が旨そうに好物を食べる姿には  
勝てなかった。

「つたく。それ食べたらもう帰るよ。あんたの所の部隊長は油売つて  
ても許してくれるかも知れないけど、私のとこの部隊長はそうは行か  
ないからね。ホント自由で良いよね、十八部隊はさ」

愚痴を垂れながら、おばさんからパンをもらう。昔から本当に変わ  
らない二人だ。

違う事と言えば、着ている服が一般着から騎士団の紋章の入った軍  
服へ、そしてシャニーが腰に差しているのが木の棒から真剣に変わっ  
たぐらい。

二人が悪さをすれば叱つたし、泣けば慰めてやった。

「おばちゃん、コイツが油売つたら叱つてやってよ？ 　　いっつもコ  
コに来てんでしょ？」

「はいはい、そうだねえ、いっつも来てるね。アンタ、ここだけじゃな  
くて、ちゃんと隅々まで回ってんだらうね？」

「もっちゃん！ ちゃんとやってるよ！ 　　それが仕事だもん」

突然おばちゃんに怖い顔をされるが、即答するシャニーの顔はいっ  
も通りの笑顔。

おばちゃんを怒らせると怖いのは、今までの経験から嫌というほど  
知っている。

「ああ、ちゃんと自治任務で来てるんだ」

意外だと言わんばかりの悪友の顔に、シャニーは威張つて見せた。

「あつたりまえよ。あたしがそうサボつてばかりの人間に見える？」  
親友から返ってきたのは、もの言いたげな無言の返事。そんな風に見られているなんて残念でならないと言わんばかりに額に手をやる。  
「ははは、ここらでこの子を知らない人は居ないんじゃない？ それぐらい、いつつもぶらついてるよ。よっぽど暇なんだね」  
「全くだよ。十八部隊は羨ましいよ」

二人の言い草に、シャニーが怒ったのは言うまでもない。



イドウヴァを連れ、急いで騎士団へ向かう。

向こうの空は暗い。雨も少しぱらつき始めている。急がなければ  
ずぶ濡れだ。

だが、テイトにとっては、そんな事よりも心が重くなるようなこと  
ばかりであった。

特に最近の良い情報がどんどん消えていく。

もとより壊滅状態からの復活である為に資金繰りは苦しく、復興は  
遅れ他騎士団の視線は厳しくなる一方。

そして頼みの内部からも不協和音が広まる。

その代表が横を飛ぶ人物。彼女の影響力を団長ですら無視できな  
い。

彼女の派閥に反対される事で、どれだけの案が日の目を見ることな  
く、机へ封印される事となつたろう。

例え国の為であろうと、自分に痛みを伴うものについては、なかな  
か首を縦に振らない。資金繰りよりも、それこそが復興を遅らせる大  
きな要因だった。

案はあつても決定事項とならないまま時間ばかりが過ぎていく。  
その間に騎士たちは国内の復興よりも国外への遠征ばかりに気を取  
られる。悪循環だ。

「団長、我々第二部隊は午後、デルダムにて街道復興事業を警備する予  
定でしたが、得意先の呼び出しがあり急遽外征する事となりましたの  
で、その任については別部隊の配置をお願いします」

早速これだ。イドウヴァは復興関係の内部任務があると、必ずと言って良い程このような理由で外へ出てしまう。

もちろん得意先の命とあれば断るわけには行かない為、テイトも承諾せざるを得ない。

こうなると他の部隊との調整に追われる事となり、余計なミーティングに時間を費やし、一向に本来やるべき事が進んで行かない。

「ええ、得意先の依頼なら仕方ないわね。でも、もう少し国の中の事にも積極的に部隊を向けてください」

「仕方ないじゃないですか。それに、外で仕事を取れる部隊は外で仕事をするべきだと思います。国の中の事まではやってもらえません。それこそ、先ほどフェリーズ卿も仰っていた様に、十八部隊の様な下位部隊を差し向ければ良いと思うのです。警備の任務であれば、経験も何も必要ないのですし」

稼ぎにならない仕事、傭兵ランクを下げるような仕事は一切しない。明言せずとも行動がはつきりそう言っている。

国外の仕事は国内のそれより優れた者がすること。こんな風潮を垂れ流す重鎮に思わず口調もきつくなる。

「それは違うわ。国内案件だからこそ、私達が率先してやらなければいけないのよ。人々を置き去りにしては意味がないわ」

意見は平行線を辿るばかり。いつもの事なのだが、どうしてこうなってしまうのだろう。

テイトにとっては、外で仕事を取ることよりもまず国内の情勢。ことのほか失ってしまった信頼関係を取り戻す事を優先したかった。

だが、イドウヴァにとっての肝要は、まず仕事を取って資金を蓄え、復興を押し進める事にある。

「団長、もつと現実を見てください。月々の収支を団長だっでご存知でない訳が無いでしょう。我々稼ぎ頭が稼がないでどうするのですか」

「分かっているわ。でも、たまには顔を出して住民とコミュニケーションを取る事だっただけだと思っただけ。何の為に、私達が外へ出てお金を稼ぎに回るのかを考えれば、それは執って然るべき行動であるは



「ずよ」

だからそんな事は下位部隊にさせておけば良い。喉まで出掛かっている言葉をイドウヴァは飲み込んだ。言ったところで納得する相手ではない。

団長がなんと言おうと、自分のやり方を変えるつもりは無いので、言い争った所でイライラするだけ。

「とにかく、今回はムリです。それより、先ほどのフェリーズ卿のお話に戻りますが、騎士団間の話を団長へ全て通さなければ進められないのでは、実務的に考えて不便すぎます。規程を改訂されてはいかがです?」

「ダメよ。そんな事を許したら何がどうなっているのか分からないじゃない。そんな管理できない状態を許すような規程は設けられないわ。あまり顔が利くからと言って、勝手に色々取り決めをされては困ります。天馬騎士団としての決裁者は、団長である私だけです」

これが、テイトにできる最大限の警告。それはこの事だけに限らず、さまざまな事であまり勝手な行動をとるなという事。

(団長……力も継承していないのに何が団長か)

面白くない事この上ない。勝手な事をするなど注意された挙句、年下の小娘に自分よりも強い権限がある事を主張され、否定できないのだから。

「そんな効率の悪い事をしているから、復興が遅れるのですよ。何故分かってただけないのですか」

それつきり、城へ向かう二人には会話がない。

テイトはイドウヴァが自分に対抗心を持っていることを悟っていた為、何か企んでいると疑っていた。

実際にそうかもしれないのだが、その疑心から彼女の意見に対してことごとく心を塞いでしまっている。

いけない事とは分かっている、認めてしまえば何が起こるか分からない不安。それがイドウヴァの対抗心を更に増長させて、悪循環を引き起こしている。

今のテイトの周りには、こう言った悪い事だらけだ。

そしてつい最近では、イドウヴァの右腕だったアルマが第一部隊に入隊してきた。頭が痛い限りである。

副将のソランをはじめとして、第一部隊は信頼の置ける者ばかりだ。

だが、もつと信用の置ける人物を増やしたかった。自分の直属の配下にすら、その心が余り分らない人物が入ってきた以上、一枚岩といえるか疑問な状況。

自然と頭の中は再び人事を思い巡らす。

(やつぱり……)

あの時、人選を悩んで悩んで判断を急ぐべきでないと決定しなかった事を再び迷いだした。

不安な状況で、彼女にあの時の様な選択肢は無くなっていた。もつと……自分の周りを固める部下が欲しい。

そんな時、タイトの目に何か映ってはいけないものが映った気がして天馬を止めた。

「団長、いかがされたのですか」

「いえ……。先に帰城してください。すぐ追いかけますから」

タイトはそう言い残すと、天馬をどんだん降下させていく。

イドウヴァは追いかける事もなく、そのまま城を目指して再び天馬を駆る。

「団長の成り損ない……。しかし、住民にはあれを慕う者も多いし、ユーノ様もどうやら実の妹がかわいいようだし。どうしたものか……」

午後からの出撃内容を確認しながらも、イドウヴァの頭を巡るのは目の上のこぶをいかにして排除するかに終始していた。

自分の考えと事あるごとに対抗する、あの生意気な団長が一番の障害。次はあの青髪。

姉妹揃って、いや……親子ともども、どこまで邪魔をしてくれれば気が済むのか。

今回のフェリーズとの密会の件で一層その気持ちは強まる。

せつかく彼と親しい仲にあつて協力的な状況でも、団長の存在がそ

れを台無しにしてしまった。

取れる仕事も取れなくなってしまうかもしれない。

その苛立ちが、握る手綱をさらに強く握らせ天馬に伝わっていた。



シャニーはその場にいる時間を惜しむかの様に、ゆつくりと揚げパンを口へと運ぶ。

ゆつくりと周りを見渡す。もう随分長い間ここへ来ていない気分になる。

自分の来なかった間に、何も無かつただろうか。今一度、さつきよりゆつくり周りを見渡すが、いつもどおりの風景しか映らない。

どうやら何も起きていないらしく、ニコニコと口に運ぶパンが一層美味しく感じる。

一方のセラは、ポシェットから時計を取り出した。

ここに着てからもう30分にはなる。自分だって無断で部隊から抜け出してきたのに、もうこれ以上はここに居られない。

「ちよつと！ シャニーもう帰るよ！」

セラがいつまでも油を売るシャニーの腕を掴み、シャニーが焦って残り半分のパンをかじりかけた、その時だった。

向こうから突然に男の叫び声が響く。シャニーはパンを頬張ると、残ったパンをおぼちゃんに渡した。

「帰ってきたら食べるから置いといて！」

「あ、シャニー！」

セラは走り出す悪友を追いかけるが、途中まで走って天馬の所まで戻った。

彼女は槍を彼から取ると、シャニーの走って行ったほうまで天馬を飛ばしてすぐに急ブレーキをかける。

眼下ではシャニーが男と対峙していた。

(大丈夫なのか……あいつ、剣は確か今……)

「ゲベル！ その人から離れろ！」

商人と思しき男を押し倒して襲おうとしていた青年は、聞き慣れた

嫌な声にびつくりして声の主を探す。

その間に、商人は荷物を拾い上げると急いで逃げていった。

「げ……、またてめえかよ。しばらく見ないからくたばったと思つたのに」

ベルン動乱は、貧しい者から家や食べるものを奪つた。

もとより貧しいイリアでは、親を失つた子供はこうして街の隅に不良街を形成する。

悪態をついている青年は、シャニーより二つぐらい年上のカルラエに巣くう不良の一人。

今やっているように、シャニーにちよつかいを出そうとして痛い目を見て以来、運が悪い事に何かする度に彼女に見つかつて追い回されている。

今回もこうして、悪さをしようとしている所に見つかつてしまった。

「おあいにく様。また盗み？ いい加減にやめないと容赦しないぞ！」

「うるせえ！ やんのか！」

ケンカ文句を吹っかけてきたゲベルが今日は短剣を持っている事に気付いてから、シャニーは腰が軽いことを思い出す。

今は剣を修理に預けている。もし、相手が短剣を抜いてきたら危険だ。

だが、相変わらずと言うか、今回もと言うべきか、彼は拳で襲い掛かつてきた。

シャニーは腰の後ろに忍ばせていた短剣を引く抜くと、殴りかかつてきた彼を軽い身ごなしで避け、短剣の柄で思い切り背中を突いてやった。

勢い余つて壁へ突つ込み、顔を抑えて悶絶するゲベルを見て、呆れ気味にシャニーは短剣の先を彼に向ける。

何度やったって負ける気がしない。

「もう今回は容赦なしだよ。今から城に連行するからね」

シャニーが彼に縄をかけようとした、その時だった。

足に何か当たった気がした。一度目は気のせいだと思ったが、すぐに痛みを伴うものへと変わる。

後ろを見ると、小さな子供達が自分に石を投げつけている。

「アニキにひどいめするなー!」

どうやら、子供達はゲベルと一緒に暮らす孤児のようだ。

そちらにシャニーが気を取られているまさに一瞬だった。ゲベルは隙を逃すかと、シャニーへ足払いを食らわせて子供達の所まで駆け戻る。

「よくもシャニーを! 覚悟しろ!」

そこへセラが応援に駆け付けた。彼女は使い慣れた槍の穂先をゲベル達へと向ける。

ゲベルはすぐむ子供達の前に立ちはだかつて叫んだ。

「お前ら! 早くアジトへ戻れ! 連れてかれて殺されるぞ!」

子供達は彼の言う事を素直に聞き入れ、走って家々の路地の奥へと消えていく。

シャニーが体を起こそうとすると、彼はとうとう腰の短剣を引き抜いた。

「う、動くな! 動いたら命はないぞ!」

これではセラも手を出せない。シャニーとゲベルは至近距離。

槍が届く前に彼の短剣がシャニーをえぐってしまうと言うのに、突きつけられている本人は全く驚かなかった。

その短剣はまるで手入れされておらず、刃は錆び、先が欠けてしまっている。これなら手刀でだって負けるつもりはない。

立ち上がろうとした、その時だった。

「つつ……」

どうやらまだ体は完全に癒えきっていないかったらしい。

先ほどの足払いが完治していない体には相当効いたらしく、激痛が走り思わず声を上げる。

ここは言われたとおり、大人しくしていたほうが良さそうだ。

それにしても、いつも歯牙にもかけなかつた盗賊の成り損ないの様な男に負けるとはとても気分が悪い。

ただでさえ気分が悪いのに、ゲベルの言葉がなおさらそれに拍車をかけた。

「お、おい、大丈夫かよ」

その行動にはセラも驚いた。が、最も驚いたのはゲベル本人。

そんな怪我をさせるほどに強く蹴ったわけではない。逃げる時間を稼ぐ為のものだったのだから。

彼がシャニーに近づこうとした、その時だった。この狭い路地を、凄まじいスピードで駆け抜ける白い風。

その疾風に轢かれたゲベルは、風にもてあそばれる帽子かのように宙を舞い向こうに倒れた。

「だ、団長?!」

セラの叫び声に、シャニーは背筋が凍りついた。

最も今、遭遇してはいけない相手の呼び名がセラの口から放たれたのだから。

テイトは天馬を降りると、ゲベルが気を失ったことを確認する。

「セラ、第五部隊長には私からうまく言っておくから、彼を城に投獄しておいて」

どうやらテイトには、セラが何故ここにいるのか大方見当がついているようだ。

セラは心の中で団長への感謝と、悪友への申し訳なさを漏らしながら、ゲベルを連れて空へと消えて行った。

「団長……あの……」

「言い訳は要らないわ。まったく、予想はしてたけど、まさか本当にこんな事をするなんて」

「剣だよ、剣を修理に出してたんだよー!」

必死になって姉に許してもらおうと取繕うシャニーだが、そう易々と許してもらえない訳が無い。

こうなる事は分かっていた。でも、どうしても彼女は街に来たかった。

「言い訳は要らないと言っているでしょう? 貴女はもう入団から半年経とうと言うのに、騎士としての自覚が無さ過ぎるわ。いつもまで

「そうやって見習い気分でいるの？」

ティトから叱られても、姉の目を直視することも出来ずに俯くばかり。そんな情けない姿を晒していたら、ティトの怒りが爆発してしまった。

「もうっ、情けなくて涙が出る。いつまでもそんな事をしているなら、事務に転籍させるわよ！」

恐ろしい宣告を受けてしまった。騎士としての身分を剥奪するかどうかのうのだ。

無理もない。外からの攻撃を全身に受け止めて十八部隊を育てているのに、その副将ともあろう者がこんな認識不足では泣きたくもなる。

「ごめんなさい……。でも、でも……。どうしてもここに来たかったんだよ……」

泣き出す部下に、ティトは叱咤する言葉を飲み込んだ。

何故、部下がこんな行動を取ったのか、彼女には分かっていたからだ。

シャニーが毎日のようにこのカルラエの城下町へ来ていた事は、住民達から聞かされていた。

「……。本当に困った子。今日は自宅で謹慎しなさい。それだけ元気があれば家に帰れるでしょ？ しつかり反省なさい」

一人残されたシャニーは、自分の浅はかさを悔やむしかなかった。大きく外れた事をしていたつもりもない。でも、結果団長にはとんでもない所を見られてしまった。

結果は見えていたはずなのに……。ただそう悔やむ事しかない。

再び泣きそうになって俯いたシャニーは、ふと気配に気付く。よく見れば自分は先ほどの子供達に囲まれていた。

「ねえ、アニキは殺されちゃうの？ ねえ！」

「そんなことは……」

最悪の結果を否定したら子供達は周りで飛んで跳ねて喜ぶ。

あんな悪党でも、子供達にとっては大切なアニキであり、自分達を守ってくれる頼りになる人物なのか。

今の自分と重ね合わせる。

(あたしは何も守れていないのに……あいつは子供たちを守ってる……)

……悔しいがとても勝てた気がしない。どう考えても、自分の負けだ。情けない。

悔しくて悔しくて。体の痛みも忘れて、シャニーは情けない自分の姿をこれ以上晒したくない一身で走り出した。



## 第2話 譲れぬ瞳

あたし、一体何やってんのかなあ……。

みんなを守りたいって気持ちは変わらないはずなのに、いつつも何か空回りしてき。

昨日だって、何だかあたしが悪者みたいだし。

あーあ、あの時何をするのが正しかったのかなあ。あたし間違ってた……のかな。



翌日も曇天は続き、いつ雨が再び降り出してもおかしくない天気だ。

もう明日から9月。この時期はみぞれ混じりの雨が降る。

「はあ……。もう朝かあ」

そんな重苦しい天気がシャニーの心を一層憂鬱にする。

悔しくて床に入ってもなかなか寝付けず、いつ眠りに入ったのかわからない。

おかげで目醒めは最悪だし、昨日暴れたせいか体が疼く。ウツデイの言う通り安静にしていれば良かった。

今日は安静にしていいたいがそう言う訳にも行かない。昨日任務から帰ってきたセラから、気を重くさせる報告を受けていたからだ。

「団長、お怒りだったぞ。明日は這ってでも騎士団に顔を出せって言ってたよ」

のそのそとベッドから出て着替えを始める。いつもならもうとっくに出発する時間なのだが、とてもではないが今日はそんな元気はなかった。

(熱でも無いかなあ……)

体温計にお祈りしてみるが、風邪なんか引いたことも無い癖にと舌を出された。

怪我人が脱走して盗賊相手に追い詰められたなんて騎士団へ出す顔がない。

姉が何があっても来いと言うのも、その事で叱る為に決まっている。ぽつきり首が折れる。どんな風に謝ればいいのかだろう。

だが、自分のしたことだ。ケジメはつけなければならぬ。それに、彼女は昨日の事件で新たな決意が湧いていた。

「あんな盗賊に負けたくない。今まで以上に頑張つて、みんなに頼られるようにならなくちゃ」

なんとタイミンクの悪いことだろう。

そう決意し、思い切つて家を飛び出して天馬で宙に風を切つた直後、待つていたかのように雨粒が落ちてきた。

雨粒は見る見る大粒になって、天馬のスピードも加わつて痛いほどだ。

「だーっ！ なんなのよもう！ ああもうツ、ツイてないよ、まったく！」

空に向かって怒鳴る。せつかく火のついた気持ちに水を差されてしまった。

結局雨は前が見えない程のスコールとなつて荒れまくり、ちょうどシヤニーがカルラエ城へ到着する頃にピークを迎えることとなる。

十八部隊の控え室では、恒例の朝一番のミーティングが開かれていた。

グループごとに分かれて、今日一日のスケジュールを報告しあう。

副将不在のミーティングもはや三週間。最初はそれすらまともに仕切れなくて無駄な時間を割いていた。

トップである部隊長のレイサが、それを見ても特に隊員たちを仕切らなかつたので余計だ。

未だにしつくり来ないそのミーティングを、ある時は木の上で、ある時は屋根の上で、そして今日のような雨の日は机で居眠りをしながら聞いてきた。

ミーティングも半ば終りかけ、皆がそれぞれ任務の準備を意識し始めたころ、部屋の戸の蝶番が軋んで音を立てる。

その音に振り返つた皆の目に映つたのは久しい者の姿。

「みんな、おはよう」

そこに立っていたのは、副将シャニーだった。体からは雨が滴り落ち、下には池ができています。顔には髪が張り付いてどうにも格好が悪い。

「うわ、どうしたのよ、それ！」

口々に声をかけられる。自分の帰りを皆歓迎してくれている事が声のトーンや眼差しから伝わってきて嬉しい。

皆待つていてくれたのだと思うと、濡れて沈んだ気持ちが一気に晴れ上がる。

「ほら、あんた達はさっさと仕事しに行け」

ムダ話を始めだした隊員たちを部屋の外へ追い出すと、レイサは一人残ったシャニーへ改めて視線を送る。

「さっさと着替えてきな。そんな格好で団長の前に出たら、生える角が増えるよ」

「やれやれ、さっそく何かやらかしたんだって？ 団長に見つかる前にさっさと着替えてきな。そんな格好で団長の前に出たら、生える角が増えるよ」

シャニーは投げつけられたタオルで髪や体を拭くと、急いで外をさっそく見渡し始めた。

誰もいないことを確認し、着替えをとりに行こうと廊下へ足を踏み出した。その途端だった。

「シャニーー！」

びくつと目に見えて驚いたシャニーはすぐに声の主のほうを向く。向いた先には厳しい眼つきのレイサが立っていて、まっすぐに自分を見据えていた。

その顔はすぐにもいつものどおりの飄々とした顔に戻って笑顔へと変わり、待つていたかのように向こうの廊下の角から次々顔を出す同僚たち。

「おかえり」

この言葉が、どれだけ彼女の心に染み渡っただろう。

地獄を経験して戻ってきた者にとって、大切な人から掛けられたこの言葉は何ものにも代えがたい喜びだった。

彼女はあらん限り精一杯の笑顔でみんなの笑顔に応えた。

「ただいまー」

「いい返事だ。それだけ声が出れば十分元気だね。よし、じゃあその調子でばーんと団長に叱られてらっしゃいな」

せつかく映えた笑顔も、レイサのその言葉に一瞬で引きつる事に。その反応を見て皆は笑っている。帰って来るなりおもちゃにされ、もう苦笑いするしかなかった。



緊張はほぐれ、少しだけ心の準備が出来たシャニーは団長室へと続く暗い廊下を歩いていく。

（お姉ちゃん、怒ってるだろうな。とりあえず部屋に入ったら謝ろう）  
自分が悪い事は明白である。言い訳をすればその分だけ自分の首を絞める。

今まで姉に何度も言い訳してきたが、それが通用した試しなど一度だっていない。

そしてそれは、相手が「姉」だったから許されていた行為。もはや今の自分が許されることではない。

（はああああ……来ちゃったよう。トイレ行つところかな……）

団長室の前まで来た。何か、すごい重苦しい雰囲気がある。できれば逃げ出したいような、そんな気持ちになる。

（昨日脱走何てしなければ……でも、街には行きたかったし、やっぱり揚げパンはおいしかったし……）

どれだけこの期に及んで考えを巡らせても、選択の余地などない。彼女は意を決しドアをノックした。

「第十八部隊所属、シャニーです」

「入って良いわよ」

名乗ってからしばらく経って、中から声がした。

ドアノブを回す。口が渴いてきた。叱られる自分を想像すると惨めだが、もうここまで来たら逃げ場はない。

思い切つてドアを開き、部屋へと入った。中は薄暗い。外ではまた雨が酷くなってきたようで、その音がとても近く聞こえる。

部屋にいるのは、団長と自分の二人だけ。いや、二人もいるのに何だろうか、この静けさは。

(何で? 何でお姉ちゃん、何も言ってくれないの?)

その静けさが、シャニーの緊張感を更に締め上げ、責め立てているようだ。

団長は資料に目を通してはサインする、その繰り返し。なのに、とても威圧感がある。

もうこれ以上は我慢ができなかった。

「あの、申し訳ありませんでした!」

頭を下げ、相手に詫びを入れる。声はあつという間に雨に吸い込まれて、再び何も無かったように沈黙が押し寄せてきた。

団長は聴いているのかいないのか、先ほどと変わらずペンを動かしている。

しばらく頭を下げたままにしていたが、あまりに相手からの反応が返ってこなくて、目だけでそちらを向いてみる。

「何のこと?」

その途端だった。まるでそちらを見たことがバレたかのように、タイトから答えが返ってきた。

おまけに、まるで期待したような返事をしてくれないからシャニーは肩透かしを食らってしどろもどろ。

「え……、その、勝手に城を抜け出して城下町に行ったこと……!」

資料へ流れるようにサインし、机の右隅に積み上げる。そして次の資料を机の左隅から取りながら、またタイトは口を開いた。完全に片手間で済まされている。

「剣を修理に出しに行ったんでしょ?」

「それはそうだけど……。でも……油売ってたのもホントのことだし……」

それからまた、しばらくの間沈黙が続いた。

シャニーにはタイトが何を自分へ要求しているのか分からないまま、腹に重いものが溜まっていくばかり。

どうも城を抜け出した事を怒っているようではない。

だが、それ以外にシャニーには叱られる理由が分からなかった。謝るに謝れず、時だけが過ぎていく。

(ううう……これなら怒鳴られたほうがマシだよ)

沈黙が、シャニーを無言で攻め続ける。

ようやく大量の決済待ち資料から解き放たれたティトは、沈黙に縛られるシャニーを横目に席を立つ。

外を見ても美しい青は見えず、黒ずんだ曇天が向こうの山々をも飲み込んで視界に入らず。

その闇の向こうを腕組みして見据えるティトの瞳には、一体何が映ったのだろう。ふいに口を開いた。

「分かるわよ。貴女の気持ちも」

俯いてこの沈黙を破る言葉を探していたシャニーは、ティトが立ち上がった事にも気付いていなかった。

団長が破ったこの均衡も、これはこれでシャニーにとっては居心地の悪い感覚だ。

何のためにここへ自分を呼びつけ、自分の何を怒っているのか余計に分からなくなってしまうたのだから。

「へ？」

「死ぬ思いをしたんですもの。好きなものを食べなくなる気持ちも分かるわ」

思ってもいなかった言葉だった。

どうやってその言葉に返して良いか、すぐには浮かんでこない。何せ、昨日からずっとそのことで怒っていると思っていたのに。

用意してきた侘びの言葉全てを使えなくなって困惑が顔に広がる。「私も一度あったのよ。敗戦が決まったような仕事が。あの時一歩間違えれば命がなかったわ」

覚悟を決めた戦いだった。その時、戦況を好転させる為、ティトは遊撃部隊を率いて突撃して行った。

相手は百騎を超える騎馬隊で弓持ちだつて相当数居た。たった五人の部隊で何ができるかなど知れていても、それが傭兵と言うもの。

だが、まもなく本体が全滅し、協定により傭兵だった彼女は無条件

に捕虜となり命拾いしたのだった。

故郷に帰った彼女が真つ先に向かったのが、あの店だった。

生きた心地のしなかった彼女の気持ちを故郷へと呼び戻したのはあの味。

「え、じゃあ……」

「確かに良くないわ。でも、貴女は任務を放棄していた訳ではないし、街に行った事を咎めるつもりは無いわよ」

それでも、強い口調や固い目尻からして、怒っている事に変わりはないさそうだ。

一体、姉は何に対して怒っているのだろう。早く謝ってすっきりしたい。

でも、釈然としない気持ちに沸々湧き上がってくる。

(待ってよ。悪くないのに何であたしは謝ろうとしているのさ?)

自分が悪いと思っていた事を咎めるつもりが無いと言うなら、不安は疑問へと変わって行った。

「じゃあ団長、一体何をそんなに」

その言葉は、怒りを堪えている団長の機嫌を更に損ねるには十分過ぎるものだった。

彼女は組んでいた腕を解いて窓辺から部屋の中へと向きを変えるのと、机に両手を突いて部下を睨みつける。

「分からないの? 昔から本当に進歩の無い子ね」

貶されて良い気分はしないが、それよりも何故怒られているのかが知りたくて仕方なかった。

反論することなく、ただ真つすぐに姉の目を見つめて姿勢を崩さない。

「どうしていつも考えも無しに行動をするの?」

シャニーにとつて、その言葉はあまりにも聞き慣れた言葉であった。

姉から耳にたこができるほどにいつも注意される事柄。

それが分かっているから、彼女は彼女なりに考えて行動するように気をつけるようにしてきた。

どれだけ頑張っても、姉は認めてくれない。その気持ちは、すぐに言葉となつてタイトに向けられてしまう。

「あたしだって最近はその気をつけているよ！」

「気をつけている人間が、仲間と居るにも係わらず動けない体のまま一人で向かつて行くとは考えられないわね」

「でも！ 街の人が困つてるのに待つてなんて！」

シャニーの口答えにカチンときたのか、タイトは机を掌で叩き付けた。ドンと重い音が響いてシャニーの腹を揺さぶる。

口うるさいのはいつもの事だが、こうやって怒りを顕にする事は稀でシャニーも黙つてしまった。

「もしあの時私が来ていなかったら、貴女はどうするつもりだったの？ 貴女が考え無しの行動を執つて怪我をするのは仕方ないわ。でも、そのフォローを誰がするの？ 仲間の命に係わるかもしれないのよ、貴女の行動が。それを考えていたら、あんな行動は取れなかったはずでしょう！」

ここまで怒鳴らせて、ようやく部下は気付いてくれたようだ。反論する素振を見せなくなった。

本当は、ここまで言わなくても分かつて欲しかったのだが。

やはりこの気質では、きついくらいに言わないとダメなようである。

「もういい加減言わせないでちょうだい。貴女ももう新人ではなくなるのよ」

確かに、そんな風に考えてはいなかった。知らず知らずのうちに、自分の行動が仲間の命を危険に晒しているかも知れない。そう思うと腹にズンと罪悪感が膨らむ。

仲間の心配や迷惑を考えなければならぬ事はシャニーも言われて納得していた。

「でも……やっぱあたしは納得できないよ」

シャニーの口から出てきた言葉はそれでも了解ではなかった。

タイトが驚いた事は言うまでもなく、妹が相変わらず子供である事に酷く落胆した。



なんとか一人前の考え方を身に付けてもらおうべく叱ろうとしたが、シャニーが先手を打った。

「仲間の迷惑を考えなかつた事は、あたしの注意不足だったと思う。反省もしてる。けど、目の前で助けを求めている人がいるのに、それを見て見ぬ振りをするなんてやつぱり出来ないよ」

「貴女ねえ！ 場合を弁えなさいと言ってているの！」

「そんなの関係ないよ！ イリアの為に剣を抜くなら場合も何もないじゃない。あたしはヤダよ。自分の都合で助かるものが助からなくなるなんて。例えば団長や……騎士団の誰に反対されてもこれは譲れないッ、譲りたくない！」

ティトは困ってしまった。こうなってはここでも動かない。

普段は朗らかで執着の無い性格なのに、こうと思つた事には妙に頑固なのだ。残念な事にこう言う所は母親やユーノに似ている。

急に怒りが退いてしまった。それどころか、胸をグサツと刺されたような感覚に陥り頭が一瞬真っ白になった。

それでも、ここは部下の面前。情けない所は見せられない。

「……。掛ける言葉も無いわ。助ける為ならどんな事しても良いと思つていたら大間違いよ。貴女には責任があるの。昼ごろまたいらっしやい。それまで医務室かどこかで頭を冷やしなさい」

部下の顔は今も不撓な瞳をより強くして睨むように自分を見つめている。

——誓いは絶対に譲らない！

そんな気持ち溢れる瞳を、ティトも視線を逸らさず強く見つめて受けて立つ。

「部隊に戻つて任務に参加する事は許さないわよ。今の貴女が出て行ったら足手まとい。周りの気持ちを少しは理解しなさい。言われなければ理解できないのでは、いつまで経つても見習い同然よ。後から入ってきた者に笑われてしまうわ」

——出ていけ

目でそう指図され、シャニーは一礼する事も忘れて部屋を出ていき、ティトは崩れるように椅子に座ると額に手を当てて髪の毛を握り

しめた。

せつかく最後のピースになってくれると思っていたのに……何か裏切られた気がして頭を抱えるばかりだった。

### 第3話 誓いの一閃

結局、わだかまりの解けないまま部屋を後にする事となった。

しかも、任務へ復帰する事は許されてはいない。一体どうしろと言  
うのだろうか。

あの時つい口走ってしまったが、今更後悔の念が湧き上がって  
くる。

(ああ……またお姉ちゃんを怒らせちゃったな)

また姉の期待に応えられなかった。いつもいつも、失敗して後悔し  
て、悔しくて……こればかりだ。

重い気持ちを引きずってあてもなく廊下を歩いていると、誰かが小  
走りでやってくる……セラだ。

自分に会いに来た訳では無いらしく、そのまま素通りしようとする。  
る。

「ねえ、セラどこ行くの?」

「牢屋だよ、昨日とっ捕まえたヤツの関係をなんか私が担当する事にな  
っちゃってさ」

「……邪魔じゃなきゃいいっても良い? 今あたし仕事しちやダメ  
だつて団長に言われててさ」

快く了解してくれる親友の後ろについて、例の賊に会いに行く。

暗く肌寒い半地下牢の中で、ゲベルは上部にある採光用の窓をずつ  
と見上げていた。

彼に話しかけようとしたセラは既に先客がいる事に気づき、その姿  
を見てシャニーはセラの後ろに隠れる。

「何やってんだい? シャニー。こんなところで油売ってたらまた団  
長に叱れるだろ?」

レイサ相手にはやはり無駄な抵抗だったか。暇人のようで新しい  
投獄者が来たら途端に見物らしい。

とんだ先客と思ったか、取調べをし辛そうにするセラに気づいてす  
ぐに席を立つ。だが、それをゲベルは止めた。

「お、おい。ホントなのか? 今の話は」

「ああ、嘘は言わないさ。シーフは嘘をついてもアサシンは嘘をつかないモンだよ」

なんだか理屈の知れない話。セラとシャニーは互いに顔を向け合い首をひねりあう。

ゲベルも流れに任せて視線を外そうとするのだが、レイサはそのまま逃がしてくれず、腰の短剣を半分だけ鞘から抜くと青白い刃を光らせた。

「もつとも、あんたに覚悟があればの話だけどね。失う覚悟があれば、ね」

「ちよつと待てよ！ 失うって何をだよ！」

短剣を鞘にしまって地下から抜けようとするレイサへ、ゲベルは鉄格子を掴んで今にも飛び出そうかという勢いだ。

「全部だよ。ゼーんぶ」

その焦燥感に満ちた声に、レイサは振り向くこともなかった。



レイサがいなくなつてようやくに仕事が始まった。セラは決められた手順に従つてゲベルから調書をとる。

「なんで盗みを働いたの？」

「聞かなくても分かつてんだろ？」

「答えなさい」

いつも聞いてきた親友とは違う、どこか威嚇するような声。年上の体格の良い男相手に物怖じしない態度は、だいぶ場慣れしている様子が伝わってくる。

「……ああでもしなきゃ俺が死んじまうからな。他人の事なんか構つてられるかよ」

こういう理由の者は多い。戦争の後遺症とも言うべきものだ。

その後もスムーズに、いつも通りの問答が繰り返され、何かを見て喋っているかのような取調べはあつという間に終る。

この手の調書はもう作り過ぎて、次に相手が何を言うかすら大抵分かつてしまうほど。

他の仕事をさっさと済ませたいので、予想外の仕事にセラはさっさとピリオドを打つ。

「シャニー、残るならちゃんと鍵かけて総務に返しといてよ」

セラはシャニーに鍵を投げつけると、早足に階段を上って行ってしまった。

第二部隊から降格しているとはいえ、やはり一年目から第五部隊という上位部隊に配属されていると仕事量が違うらしい。いつも彼女は忙しそうだった。

(それに比べてあたしは……)

「てめえ、シャニーって言うのか」

空しさに俯いていると牢の中から声がした。見上げたらゲベルがこちらを睨んでいる。

相手は牢屋の中だし、今の自分は時間をもてあましている。少しぐらい話をしてみようと思った。

「あんた、調書取る時に嘘言っただでしょ。嘘言うと後で困るよ」

「へ、何のことだ」

「盗みをしたのは、子供達の為なんじゃないの？」

何がおかしいのだろうか。シャニーの言葉を、ゲベルは大声で笑って見せた。

怪訝な目を向けているとその笑いは次第に怒りを伴ったものへと変わり、ふっと声が消えた目がぎっと睨みつけてきて思わず退きかけた。

「知った風な口を利くな。お前みたいな奴に何が分かる。盗みはイケナイだと？ 盗みでもしなきゃ生きていけないような状態にしたのはてめえらだろうが！」

動乱を終わらせる為に戦った……喉元までその言葉が出かけた。

だが、今自分は天馬騎士団に所属する騎士だ。ベルンに付き、エトリリア軍を迎え撃った天馬騎士団に所属する騎士だ。

いくら個人では違ってても、彼がそう見てくれる訳も無い。

「それで戦争が終ったら今度はどうだ！ 全然復興は進まねえ。聖天騎士団の方と見比べても反吐が出るくらいのとろさじやねーかてめ

えらはよ！　そういう口を利くなら、もつと地元の状態を知ってからにしゃがれ！」

思わぬ反撃だった。反論のしようもない。

いくら自分が頑張っている、実際復興が思ったように進んでいない事は嫌と言うほど知っている。その街並みを毎日ずっと見つめ続けてきたのだから。

イリアの民は、自分達の行動に不満を抱いている。その末端がこうした怒号なのであろう。

悔しい……悔しい悔しい……。これだけ好き放題言われて、罵声を浴びせられて、何一つ言い返せない。

今迄も村々を回って声を聞いてきたつもりだ。そう、つもりだ……。聞いただけで何もできない。

力も権限も何もない自分では、話を聞いてあげるだけしかできない。

悔しくて、悲しくて虚しくて。血が出そうなほどに唇を噛むが、堪えきれない。

「ごめん……なさい」

悔しい。みんな必死に頑張っているはずなのに、結果が出てこない悔しさ。自分の努力なんて本当にちっぽけに過ぎない悔しさ。誰も守ってあげられない悔しさ。仕事さえさせてもらえない悔しさ……。色々な悔しさが一気に溢れ出てきた。

自分がやらなければならぬことは、一体何なのだろうか。分からなくなってしまう。

シャニーの様子を見て困ったのはゲベルだ。

ついカツとなって胸のうちの怒りに任せて相手にぶちまけたが、こんな事になるとは。

「お、おい……。泣くなよ」

「あたしは分からなくなってきたよ。あんたみたいな盗人を取り締まって意味があるのか。一体何をする事が、あたしのできる一番の貢献なのか……。イリアの礎に……。どうやったらなれるのか」

分かっている。盗みが悪い事で、被害者の立場に立ってみれば許さ

れない悪行である事は。

しかし、加害者の身に立って見たらどうなのだろうか。盗まなければ自分が死ぬ。加害者も戦争の被害者なのだ。

そしてその戦争から民を守れなかった騎士団。その後の復興も満足とは言えず、被害者は増え続けている。

その状況で自分なりにイリアの為と行動してきた。それが他ならぬイリアの民に否定された。悔しくてしょうがない。

「……俺が盗みをしていた理由は、お前の言う通りだよ」

「え……」

「悪い。つい癖が出ちゃった。さつきレイサさんに注意されたばかりだったのにな」

ゲベルは頭をかきながら恥ずかしそうに謝った。

やはりレイサと何か話をしていたようだ。何故レイサが自分の部隊の管轄外の投獄者と話をしていたのかは分からないが、どうもゲベルはレイサのことを悪く思っていないさそうだ。

「盗みをしたのは、もちろん自分の為でもある。でも、あいつらは俺を信じてくれるんだ。こいつは、自分達を助けてくれるって。自分で言うのも何だけどな」

「でも、だからって何してもいいって訳じゃないじゃない」

どこかで聞いたことのある言葉だった。そう、自分が言われて閉口したあの言葉だ。

だが、目の前の青年は違った。

「信じてくれる奴がいるから、俺は心を鬼にできる。信じてくれるから、俺もあいつらを信じている。見向きもしねえ大勢より、少なくとも信じてくれる奴がいるなら、俺はそいつの為に自分を貫くだけだ」

シャニーに口を挟むことはできなかった。それどころか、盗人の白状の先をもっと知りたくて知りたくて、聞き入ってしまったている。

「仲間のピンチは俺が守ると誓っている。俺のピンチは仲間が守ってくれると信じている。今回だってそうだ。あいつらは俺がお前にやられそうなとき、勇気を振り絞ってお前に石を投げつけてくれた」

あまりにクサイ言葉。それを真顔で口にするこの青年を笑う事なんて出来なかった。

その決意が子供たちの勇気であり笑顔を守っている。

笑うどころか、この気持ちこそが今の自分にとっても必要なことのように聞こえてくる。

そして、自分の取った行動がその考えに対してどうだったのかを改めて問うて見た。

——信じてくれる人がたった一人でもいるなら、その人の為に戦えば良いじゃないか

「ありがとう、ゲベル」

「あ？」

「あたし、イリアの人に信じてもらえるような騎士になるよ。誓う」

ゲベルへの感謝の言葉の中に、問いへの答えが含まれていた。

戦いは一人でするものではない。デイークの教えの意味が少しわかった気がした。

仲間を信じ、自分に出来る事を精一杯にこなす事、それが騎士としての仲間への、イリアの民への責任。

デイークは同時に過信するなど傭兵の心構えも教えてくれたが、自分の周りにはそんな人はいない。もちろん、それを説いたデイークを含めて誰もが信じられる人ばかりだ。

「へ、何を言い出すかと思えば。お前みたいな奴に誓われても嬉しくも何ともねーよ。勘違いするな。いいか、俺は騎士なんて大っ嫌いなんだよ。保身と自己満足で生きてる勘違い共なんてな！」

先の戦争がよっぽど騎士への悪い印象を植え付けたのか、相変わらずシャニーのことを突き放し牙をむき出しにしている。

彼にとつてシャニーは仕事を邪魔する存在だったことが後押ししているだろうし、彼の言うように騎士としての本分を踏み外している者がいることも事実だ。

憎んでいる相手が言う事なんて、例えそれがどんな美しい話でもただの戯言にしか聞こえない。

シャニーは彼に冷たく突き放され、どうすれば良いか分からなく



なった。

自分の生き方、戦い方にひとつの指標を見出すことが出来たが、相手は自分を「シャニー」とは見えてくれない。あくまで天馬騎士団員。攻められても民を守ることができない腰抜け騎士団の一員でしかない。

「やれやれ。どんな理由があろうと男が自分より年下の女を怒鳴って威嚇するなんて見れたもんじゃないね」

きつい上り階段に光が差して、ブーツが石段を叩く音がどんどん大きくなってくる。

その音と光は確実に二人に近づいて、そしてまもなく声の主が姿を現した。

「レイサさん！」

シャニーよりも先にゲベルが声を上げた。

レイサの手にはいっぱい荷物が抱えられており、自然と興味が行ってシャニーは驚いた。

持たされたものは潜入服だったからだ。

「ほら、こういう服着てやんだよ。カッコいいだろ？」

「や、やめろよ。俺にそんなのは似合わねえよ」

「なんだい、まだそんな事言ってるのかい？ 男のくせに踏ん切りのつかないヤツだねえ」

シャニーにはやり取りがイマイチ飲みこめない。

レイサは男物の潜入服を鉄格子越しにゲベルを見せつけ、その顔はご機嫌だ。

だが見せられている相手はとても迷惑そうな顔をしている。

「ちくしょう、勝手に話を進めやがって。だいたい、あんたもどんな格好してんだよ。それがあんたの潜入服なのか？」

どうも迷惑がっている理由のひとつには、彼女の格好もあるようだ。

何しろ、彼女の服はかなり上半身の露出度が高いのだ。

黒の薄いタンクトップで胸を隠しているだけと言っても過言ではなく、肩口や腹部の露出が逆に覆われている部分へ注視させる。

ゲベルにとっては迷惑な話である。ただでさえ年頃なのだ。嫌が応にもそちらへ目線が行く。

「そうだよ。これでも冬バージョンに衣替えしたんだよ？ ……何？ 見たければ見ればイイだろ？ なんならコレめくってやろうか？ ほれほれ」

レイサはただでさえぎりぎりまでしか隠していない服の端を前へ引っ張ってみせる。

もちろんゲベルの狼狽加減はハンパではなく、後ろ手について全速力で後ろへ下がる。

青臭い反応を見て大笑いをするレイサが、このときばかりはシャニーも悪魔に見えた。

「あははは、面白いヤツだ。で、どうなの？ 入ったら私が色々教えてやるよ？ 夜に二人でさ、こんな事やあんな事をさ」

ゲベルは絶句してしまった。明らかに顔は紅潮している。

「レイサさん！ やめてよ。聞いているこっちが恥ずかしいよ」

とうとうシャニーがストップをかけた。どう見てもレイサは分かっただけで誤解を招くような言い方をしている。

時たま部隊内でもこんな感じの事は言うが、女だけでの会話だからそれは許されているのだ。

「シャニー、ノリの悪いヤツだね。せっかく面白いトコなのに」

レイサの呼ぶ名前をどこかで聞いた事があるような気が先ほどからずっとしていたのだが、ゲベルにはどこだったか全然思い出せなかった。

この隙に思い出そうとするものの、レイサがそれを許してくれない。

「で、入るの？ 入るんだろ？」

「入らねえよ！」

力いっぱい怒鳴るゲベルに、レイサは立ち上がる。

何の話なのかイマイチ分からないがゲベルの言動にレイサの反応。

諦めたかに思えたレイサだったのだが、事もあろうに視線はシャニーへ向いて嫌な予感がわつと広がる。

「ちよつと、こいつを十八部隊の密偵に雇おうと思っただけ。副将のあんたもなんか言いなよ」

「ええ?!」

ようやく話の内容が分かったかと思えば、とんでもない内容だった。

思わずシャニーも声を上げてしまう。捕らえた者を自分の部下として使おうというのだ。

ここは叙任を受けた者のみが在籍する騎士団。レイサは特殊なだけだ。

「はあ?! こんな奴に使われるってのか? 冗談じゃねえ!」

だが、シャニーが意見する必要はなかった。それより先にゲベルが声を上げたからだ。

「レイサさんよ、あんたも何でこんな奴らと一緒にいるんだよ。同じ境遇とは言え信じられねえよ!」

ゲベルの怒りを受け、レイサはシャニーへ預けていた潜入服をまた手に取った。そしてまたゲベルの座り込む牢獄に向かって、鉄格子越しに話しかける。

「何でだと思っ?」

「分からねえから聞いてるんだよ」

レイサは笑顔でゲベルの前に再びしゃがみこみ、彼に近寄るように手招きをする。何かシャニーは嫌な予感がした。

その笑顔は、いつも自分に見せているものとは違う気がしたからだ。

「うっ……」

案の定というべきか。素直に近寄ってきた彼の喉元にはいつのまにか短剣が光っていた。

「何でも誰かがしてくれると思うな」

彼が固まって動けなくなったところで、レイサは短剣を離れた。

そして、すくつと立ち上がるとまっすぐ階段の手前まで歩き、そこで止まった。

「ま、今のが答えかな? なあに、あんたなら深く考える必要なんてな

「いだらろ？」

彼女はまた歩き出すかと思いきや、すぐにまた止まって今度はシャニーへ何かを投げつけた。

突然の出来事に慌てたシャニーだが、見覚えのある形だったので、ぐに反応して両手でそれを受け取る。

「あんたも団長に仕事を取上げられたからっていつまで丸腰でいるんだい」

剣だった。自分の剣は今エデッサにある。渡されたのは何の調整もされていない修練用の安価な剣。

だが、帯剣しているとそれだけで気持ちは変わってくる。騎士なのに剣も持っていないなんて、確かに気が緩んでいたのかもしれない。

「ああ、そいつの処分はあんたに任せるよ」

二度目の驚きは、驚愕と言った方が正しいものだった。

何せゲベルは第五部隊管轄の囚人であるので、勝手に十八部隊が処理して良い訳はないからだ。

だが、シャニーの気持ちをレイサは簡単に読み取って、シャニーの反論を潰す。

「良いんじゃない？ 第五部隊の部隊長も怒ってたからねえ。十八部隊の不始末を何でウチが負担しなきゃいけないのかって」

ドキツとした。第五部隊長にも、自分の上司である十八部隊長にも行動が筒抜けだ。

その行動とはもちろん、城下町で油を売っていたこと。

シャニーが唇を噛んで下を向いてしまったので、レイサはため息を鼻から抜いた。

「第五部隊の部隊長はどうか知らないけど、私は別にどうとも思っていないよ。あんたは普段どおりの町の治安維持を行った。そうだらろ？」

「でも、仲間がいるのに満身創痍で突っ込んで……」

「あんた、ホントに間違った事したと思ってるの？」

「……いえ」

どうしてこうも、レイサは自分の事がよく分かっているのだろう。

シャニーはいつも不思議に思っているが、今回もまたこうして心を

見透かされているような気持ちにさせられた。

「じゃあ良いじゃない。あんたは信じて戦ったんだから」

「うん」

「人の言う事を素直に聞く事は大事さ。自分を変えるって言うのは勇氣がいるからね。でもね、何も変わらないって言う強さも失くしちゃいけないと思うよ。そう、自分を信じるってことだね」

姉の言う事には反発してしまうのに、どうしてレイサの言う事は聞けてしまうのだろうか。

彼女はシャニーのした事が他の部隊へ波及した事実は知っているし、そのことで恐らく第五部隊から非難を受けているはずなのに、気持ちを汲み取ってくれた。

上官の優しさがたまらなく嬉しかった。何をすべきか少しだけ見失っていたから。

「ま、団長の言う事も尤もだから反省はしなくちゃいけないけどね。どうすりゃいいか、ちよつとは見えたんじゃないの？」

うんうんと、シャニーは部隊長へ首を縦に振る。

実力はある。間違いなく実力だけならそれはイリアの中にとどまらず大陸中でも指折りのもの。

だがそれを、若さゆえの心の弱さや、絡みつくしがらみが押さえつけている。

レイサが課せられた使命は、このような若い者の精神を鍛える事。

「じゃあ、そういうことで」

「ちよつと！ それとコレとは話が別！」

「なんだい、自分の不始末は自分で処理しなつてことよ。そろそろ影分身が切れるから呼び止めないで」

シャニーに後始末を押し付けて、レイサは急いで階段を駆け上っていく。

早く部隊に戻らないと、今頃木の上にいる自分の影分身へ隊員達が必死に話しかけているはずだ。

アサシンとしての幻術は、こうやってあちこちぶらぶらするには実に使い勝手の良いものだ。

残された方はどうして良いか途方にくれる。処分と言っても、一体彼をどうすれば良いというのか。

自分を見渡してみると、手にはこの部屋の鍵と先ほどレイサから手渡された剣が握られている。

その時、彼女の脳裏には昨日のあの子供達の顔が浮かんだ。

彼らはゲベルの帰りを心待ちにしている。盗みが悪であることは否定できない。

だが、彼らには何の罪もない。どうすれば良いのか。

「おい、てめえ、殺すならさっさと殺せよ！」

考える余裕を与えてくれないのは、処分される側のゲベルだ。

彼は鉄格子を掴むと、シャニーに向かって怒鳴りつけた。

「いきなり何なのよ。誰もあんたを殺すなんて言っていないでしょ？」

「騙そうだったってそうはいかねーぞ。てめえらは自分達に都合の悪いヤツを理由を作っては捕まえては葬ってるじゃねーか！」

シャニーにとっては寝耳に水の話だ。いくら噂でもそんな事が市民の間で流れているなんて。

だが、身に覚えの無い事を言われて黙っていることができるわけもない。

「バカ言わないでよ！ そんな事する訳がないじゃない。だいたい都合の悪い事って何よ！ そんな事をするヤツはいないよ。だってそんな事、騎士のすることじゃないもん！」

「じゃあお前らは騎士じゃないんだな。俺の知り合いのおっさんも、騎士団にしょつ引かれて二度と帰ってこなかったぜ？ あれは忘れもしねえ。この前の北東部開拓失敗のすぐあとだ。その事で話があると云って怪我を負って帰ってきたおっさんを、てめえら……！」

シャニーには一体何の事だがさっぱり分からなかった。

北東部開拓事業と言えば、それは聖天騎士団が行ったもの。多くの犠牲者が出たとシャニーも人伝いに知っている。

天馬騎士団と聖天騎士団の違いは、先ほどからの会話の流れからしてもゲベルは知っている。

となれば、聖天騎士団の行った開拓事業のことで天馬騎士団が動い

た事になる。そんなことあるのだろうか。

「ねえ、それホントに天馬騎士団の人間だった？」

「ああ。てめえの腕についてるその紋章と同じだったぜ？　まだ白を切るのか？」

どうにも腑に落ちないところがある。

騎士団間の話には団長であるテイトが必ず入っているはずだ。テイトがそんな事を許すはずがない。

シャニーは牢獄の鍵を開けると、縄で後ろ手に縛られているゲベルの背後に立つ。

鞘から剣を抜く音がした。ゲベルは覚悟を決める。頭に浮かぶのは悔しき、怒り、そして残してきた子供達。

再び後ろで金属の高い音が聞こえ、その途端、腕が自分の前に弾けるように飛んできた。

背後を見てみれば、そこには切れた縄があった。

「少なくとも、あたしが知ってる天馬騎士団はそんな事はしない。ほら、早く立ちなよ。城の外まで案内するから」

ゲベルは信じられないと言った顔から、すぐに苛立ちを滲ませた表情へ変わる。

「てめえみたいなヤツに情けをかけられるなんてな」

「違うよ。あたしは一緒にいた子供達に約束したから。あんたは殺さないって。さっきの話は、少し調べてみるよ。あたしだってその話が本当なら納得できないし」

それを聞いた途端、ゲベルの顔からこわばりは消える。無言だったが、シャニーには彼が分かってくれた事が伝わってきた。

彼女は城の外に出るまでに、ゲベルが城に連行された後、腹を空かせた子供達に揚げパンを食わせてアジトまで送り届けた事を知らせた。

彼の顔には口元に笑みがあった。待つ者がいる。早く帰って無事を確認したい。

「てめえ、思ってたよりまともなヤツだったんだな」

城の外まで出たとき、ゲベルはようやくシャニーへ言葉をかけた。

「ごあいさつね。ま、分かってもらえたなら良いけどさ」

「……ガキ共が世話になったことには礼を言う。俺も男だ。これから一切盗みはしない。ガキとの約束を守ったお前との約束だ」

こんな流れになるとは思っても見なかった。

でも嬉しい。自分のやった事が間違いでは無かった。それが目の前に結果として現れて。

騎士団として見れば、それは些細な事かもしれない。だが、誰かを救ったのならば、それは大きな事のはずだ。

「でも、あんたこれからどうやって食べていくのよ？」

「……それはてめえが心配する事じゃねえよ。約束は守る。だからてめえもさつき俺に誓った事は守れ。俺らが動く為には、てめえらがちゃんと働かないと回らないんだからよ」

シャニーは遠くになっていくゲベルへずつと手を振った。一握りの希望と決意を、新たなライバルに見せ付けるかのように。



## 第4話 交わした約束

ゲベルの姿が見えなくなった後、シャニーはまっすぐに元来た廊下を歩き出した。

任務に参加することは叶わない。反省しろと言われたが、もう自分なりに結論は出した。

昼まで時間はもう少しある。この時間を使って、どうしてもやっておきたい事があった。

十八部隊の詰所、さらに団長室の前をも通過して、西棟へと続く渡り廊下を青髪を揺らしながら駆け抜ける。こんな風に騎士団の中でうろうろするのは久しぶりだ。

たまに予算表を提出しに行くだけの西棟。周りを時々すれ違う人は皆事務方の者。軍服を着ている自分が何か浮いて見えてくるし、相手も珍しそうに見てくるから恥ずかしい。

同じ騎士団なのに、とてもそんな風には思えない。違う騎士団にいるかのような不思議な感覚だ。

自分を知る者、また自分が知る者が一人しかいないところも心細いものか。

「あら、シャニーさん。もうお怪我は大丈夫ですか？」

いきなり声をかけられてビクツと肩が動いたのが分かった。

自分を知るはずのない相手から、突然に名前を呼ばれて彼女は考える余裕もなく右を向く。

そこにはふくよかな女性がいて、こちらを優しそうな笑顔で見ている。

彼女が誰だか全く分からないが、とりあえず相手は自分を知っており、心配をしてくれているようだ。

「え、うん。もうぴんぴんしてます。こんな感じで」

「それは良い事です。これから管轄領の治安維持に勤めてくださいね」

「はい。心配してくれてありがとうございます」

いつも通り返事をしてしまったが、一体何なのだろうか。思わず首

を傾げてしまった。

(悪く思われている訳でもないし、ま、いつか)

その場で詮索をやめる。そんなことより、今はやりたい事がある。ずんずんと歩いていくのは良いのだが、目当ての部屋がどこかイマイチ自信がない。

いつの間にか、彼女はふらふら、きよろきよろ。周りから妙な視線で見られても仕方ない。

ようやく目的の部屋につき、ほっと一安心。ドアの横には看板がかかっている。

——人事部入出管理室

「ここだ、ここだ。ふいふ、何でこう迷路みたいなのかなあ。もつとデツかく書いとけばいいのに」

ぶつぶつと独り言を漏らしながら部屋へと入っていく。中には中年の男女が座っており、どうももったりとした雰囲気か漂っていた。

だが、その雰囲気も来訪者によって破られた。軍服を着た人間がやってきたのだ。

「すいませーん、ちょっと投獄者リストを見たいんですけど」

「所属と名前を教えてくださいますか？」

シャニーの対応に当たった男性は、名乗って団員証を見せるとおもむろに紙を取り出した。

その紙には聞き慣れた名前がずらりと並んでいて、題目を見てシャニーはなるほどと心の中で納得する。それは職制表だった。

第一部隊にテイトの名前があり、第二部隊はイドウヴァで……最後まで眺めて驚いた。なんとその中に自分の名前があるからだ。

部隊長レイサの名前に横に、副将として自分の名前が職制表へ小さく載っている。何か不思議な気がした。

先ほどのふくよかな女性といい、意外と騎士団の中で名前が知られているのかもしれない。

「はい、シャニーさんにお見せできる一覧はこれですね」

男性が手渡したものは一冊のファイル。ファイルとは言っても紙は一枚しかファイリングされていない。

その事が不自然に思えた。中を確認してみても、それは疑問へと変わる。

「あの、これだけしかないんですか？ 昨日投獄されたゲベルという男の名も無いんだけど……」

「その投獄者は第五部隊の管轄ですからね。各部の機密情報ですから、他部隊にお見せする訳にはいかないですよ」

ここまで来て、シャニーはがっかりしてしまう。

彼女は先ほどゲベルが言っていた、聖天騎士団の開拓事業へ関わったおじさんが本当にここに捕らわれていたか確かめに来たのだ。

だが、肩書が有ると言っても所詮副将では自部隊のものしか見るこ  
とができない。通りでリストが貧相なわけである。

「おや、これはこれは重症患者のシャニーじゃないか。こんな所をうろついているなんて、暇で暇でリハビリでもしているのか？」

相変わらずなあいさつ。こんな事を言うのは一人しかないのでシャニーはすぐそちらを向く。

案の定、振り向いた先にはアルマがいた。久しぶりの再会なのに、  
どうしてこうも憎まれ口を叩けるのか。

「大きなお世話よ。別に暇でうろついているわけじゃないもん。仕事だよ仕事」

「へえ、また賊でも捕まえたのか？ 金にもならん仕事をご苦労な  
とだ」

シャニーはライバルの言い草が気に食わなくて、すぐに今何をやる  
うとしているのか話した。

最初こそ面白半分で聞いていたアルマだったが、その表情は見る見  
るうちに鋭く変わっていく。

最後まで聞き終わったとき、彼女はおちよくなってこなかった。

また憎まれ口の一つでも叩くかと思っただが何も反応が返ってこ  
なくて、これはこれではつまらない。

「シャニー」

「なに？」

ようやく反応がアルマから返ってきて、待っていたようにすぐに返

事をする。

だが、アルマの答えはシャニーが想像していたものとは全く違うものであった。

「そう言う上のやっつてることにへ々に首を突っ込まない方がいい」

「何よ。アルマは何か知ってるの？」

「知らんさ。ただ、そうやって嗅ぎまわると良く思われないうつてだけだよ」

アルマなりに、かなり優しくシャニーへ警告したつもりだった。

ただでさえ、十八部隊は前回の団長選出戦の事で良くないイメージがついている。

だが、今はあくまで部隊に対しての評価だ。これ以上は彼女自身に係わってくる。

「すつごい知ってそうなんだけど。でも不思議に思わない？ 聖天騎士団の事に何で天馬騎士団が絡んでんのさ」

アルマは少し考えた後、やはり分からないと顔で答えた。

「その盗人が見間違えたか、聖天騎士団と何かやり取りがあつたかだろ？ どちらにしても私達では分かるものじゃない」

シャニーはもう少しアルマと話をしたかったが、それを遮るようにまた別の騎士が入ってきた。

その騎士は先ほどのふくよかな女性と共に話をしている。

その声を聞いてアルマは向こうにいる騎士に向けて軽く頭を下げた。相手も軽く手を振ると、ふくよかな女性と共に部屋の奥へと歩いていく。

「さて、リハビリ患者のように私も暇じゃないし、これで失礼させてもらうよ」

シャニーの隙を見て、アルマはさっさとその場から立ち去ってしまった。

嫌味を言われて黙ってはいられなかったが、周りの視線には勝てずにすごすごとその場を後にする。

どうしても腑に落ちない。アルマは首を突っ込むなと言うが、そんな事を言われては余計に気になってしまう。

だが、時計を見た途端に髪の毛が逆立つ。収穫もないまま随分長居をしてしまった。

彼女は思い出したかのように事務の人間達をかいくぐりながら西棟の廊下を走り去っていった。



一方シャニーが去った部屋では、先程から部屋の奥に座ったあのふくよかな女性とずっとイドウヴァアが話をしている。

それは他愛もない雑談から始まり、そしてその内に人事の話になった。

「あなたがこの時期に人事の話の話を聞かないなんて珍しいわね」

新人部隊は長くて半年ほどの在籍で、遅くても10月には配属先が決まり本格的な傭兵部隊へと送り込まれるのが例年の動き。

この時期になると、毎年イドウヴァアは自分の部隊に入って来る予定の名前を聞きに来るのだ。

「毎年送って教えてくれないくせに」

「それが私達の仕事ですからね」

ふくよかな女性は事務方を取りまとめる総務部長。

彼女の頭には、各部隊の人員やら給金やらが全て網羅されている。

そして部隊長から転籍した身である為、騎士側の事についてもかなり詳しいし人脈も広い。

だからイドウヴァアも、彼女だけは事務方でも信頼を置いて対等に接していた。

「今年の新人は変わり者が多いですからね。あまり我が強い子は部隊の輪を乱すし」

ちよつと前までは何とか副将を自分の部隊に引き込みたいと思っていたが、どうやら考え間違いだったようだ。

団長選出戦で顔に泥を塗られた上に今も謹慎中だという。

これから先、あれこれ動いて行かねばならない時に、平気で盾突くような者は遠ざけておきたかった。

ただでさえ、あの小娘は……。

「変わり者……ね。ふふ、確かに変わり者ばかりですね、上位部隊でも戦力になりそうな子は」

総務部長は周りに誰も目の届く者がいないことを確認すると、机から一枚の紙を取り出した。

それは極秘中の極秘。十八部隊の戦力を分析した資料。

様々な観点から各隊員を分析した後、最後にSとGのランクが付けられている。

むろん、こんな配属直前まで来てGなんてつく者はまずおらず、最低でもDまでだ。

その中でもSが一人、Aが三人いる。ここまでがボーダーだ。

「……まともに槍を扱えない者ばかりではないですか」

そのリストにイドウヴァはひどく落胆した。副将からして槍を使っているところを見たことが無いし、ミアアとレンにいたっては使用戦術がクロスボウに魔法と、ふざけているのかと思うくらい。

この分析には希少価値も含まれるからこのランクになっているのだろうが、オーソドックスな騎士で役に立ちそうなのはルシヤナくらいだった。

「どの子も今の騎士団には無いタイプばかりだから戦力になると思うけどね。特に地上戦をこなせるだけで欲しがる顧客は多いわ」

一体いつ、彼女たちのことを見ていたのかと思うくらい、総務部長は彼女たちの特長を物売りかのように伝えてくる。

一般の天馬騎士は天馬に騎乗した状態でしか戦えないので、場内の守備や森林帯での戦いなどの地上戦ではあまり戦力にならない。

ベルン動乱のような大規模戦闘の時とはともかく、通常は地上部隊のほうに圧倒的な需要がある。

飛行部隊の需要は絶対に無くなりはずともニツチなものなので、客のニーズへより応えることが出来れば報酬を決める傭兵としてのランクはそれだけで上がる。

「天馬騎士団の売りは空中戦よ。地上戦は聖天騎士団に任せておけばいいの。まったく、盗賊を教育係にするからこうなるのよ」

アウトローな人間が教育した結果、真つ新だった新人達も不良品ば

かりになってしまった。

イドウヴァにとつては、内心このままずっと十八部隊のままでいてくれた方が恥さらしを外に出さなくて済むとすら考えていた。

そうすれば、団長への糾弾は避けられまい。どんどん破壊されていく騎士団にイドウヴァは焦りを感じていた。



一方、拘束を解かれてシャニーとカルラエ城の城門で別れたゲベルの前には、暖かい日差しがあった。

拘留されていたのはわずか一日であるのに、その陽がとても久しくありがたいものに思えた。

だが、その感情以上に今彼の心にあるものは子供達の安否だ。

あの騎士は食料を与えてアジトへ送り届けたと言うが、本当に彼らは無事だろうか。

今は大人でも自分が生きる事に必死で、他を省みない者も多い。子供を見てくれる人など居ないのだ。

その原因である戦争を始めた騎士達はその責任を果たさず、相変わらず他所の国へヘコヘコと頭を下げに行くばかり。

出稼ぎに行かなければ国が行き詰る事は彼だつて頭では分かっている。

しかし、彼にはどうしても納得できなかつた。自分達を見殺しにしてまで金を稼ぎにいくその姿を。

国と、国を構成する者達の命を天秤にかけた挙句、国を取るような連中にしか思えない。

「もつと信頼される騎士になる、か。……うぜえヤツだ」

ゲベルは自分より若い騎士がさつき口にした言葉を思い出し、行き場のない苛立ちを足元の小石に籠める。

騎士は憎い。だが彼女はその騎士のイメージとは違うように彼には映った。

なのに、その事が逆に彼の中に苛立ちを覚えさせていた。自分でも何に対しての苛立ちか分からない。

イライラする……その時だった。彼は急に背後からの殺気を帯びた気配に気づき、びっくりしてそちらを向くも誰もいない。

次に気配を真横から感じ取った彼は、迷いもなく拳闘をそちらへ突き向けたのだが、その拳は相手に突き刺さる前に、手で受け止められてしまった。

急に視界に現れた人物を横目に確認し、彼は慌てて拳を戻そうとしたが相手はそれを離さない。

「レイサさん！」

「いきなり女に拳を向けるとはね。でも、こんな拳……」

突然襲う鈍痛。よく見ると相手の手刀が自分の喉に食い込んでいる。

「子供だましってね」

痛くても声も出ない。喉を完全に押さえられていた。

「やっぱり暗の内に俺を始末しに来たのか?！」

しばらく呻いていたあと、顔を真っ赤にして怒鳴ったはずなのが、まるで動じるそぶりも見せないどころか腹から笑われた。

「あはは、本当に可愛い子だねえ。それならさっさとあんたの喉を掻っ切ってるよ。どっからでも狙えそうだしさ」

そう言われてしまうと、ゲベルは反論が出来なくなった。

なぜか付いてくるレイサとはしばらく会話もなく、なんとなく気まぐずい雰囲気だ。

「それにしても、あんたはホント騎士嫌いなんだねえ」

しばらくしてやっとレイサが話しかけてきた。

「……騎士が嫌いなんじゃないやねえ。騎士共がやってることが嫌いなんだ」

レイサはその言葉を聞いてふっと笑った。それは自分だって同じだからだ。

騎士たちは自分達がイリアを導いていかなければと豪語している。だが、実際はどうだ。民を置き去りにして国の為と外へ出て行く。

「確かに私もあんまり好けないヤツが多いね」

「だろ? でも知らなかったぜ。レイサさんみたいに元盗賊も騎士団



にいたなんて」

元というか、今もそうだけど——その言葉が喉まで出かかったがなんとか腹に押し戻す。

だが、彼女は何か懐かしかった。自分にもこんな時代があった。シグーネと出会うまでは、ゲベルよりももつと惨めな生活をしていった。

盗んで殺して、生き存える。自分のしていることは必要悪で、これを引き起こしているのは国のせいだと罵った。

「まあね。人のせいにして生きなるなら、自分の手で変えてやれば良いと思ったからね」

「なんかカッコいいな。でも、俺はあんな欲の塊達と一緒にいるなんてゴメンだぜ」

「はは、さすがの八英雄もあなたにはたじたじだったねえ」

レイサの口から出たいきなりの言葉にゲベルは頭がついていかない。

腕組みをして口をへの字に曲げてみるものの、やっぱり理解ができなかった。

「さっき喋ってたじゃないか。シャニーのことだよ」

彼の目の色が変わった事がレイサにはすぐ分かった。

ゲベルにとっては、予てからの疑問がようやく吹き飛んだ思いだ。他の騎士が彼女の名前を呼んでいた時から、どこかで聞いたことのある名前だと思っていた。

「とは言っても、あん中じやヒヨつこの下つ端騎士だけどね」

彼は黙ってしまった。何が自分をこうもイラつかせているのか分かった気がしたからだ。

それでも精一杯強がって見せた。弱さを見せる訳には行かない生活を送ってきた彼の癖だ。

「へ……。ハチエイユウ様ね。国の中の事を何も知らなくせに、何が英雄だよ」

「それね、あいつ自身もそう言ってたよ。だからこうやって呼ぶと怒るんだよ」

「……」

「あいつは今でも修行中だよ。毎日ふらふらどつかをうろついて色々知ろうとしてる。イリアを知って、変えたいと思ってるからね」

自分のしている事が、情けなくて仕方なかった。今までは、自分や子供の為と自分の行動を正当化してきた。

同じ盗賊が、イリアを変える為に働いている。同じ盗賊なのに、どうしてこうも相手のほうが輝いて見えるのか。そして、今まで軽蔑してきた騎士にすら。自分に納得がいかない。

「レイサさん、さっきの話。少し考えさせてくれ」

「へえ、どうしたんだい？ あんなに嫌がってたじゃないか。騎士と一緒にいるのは嫌なんだろう？」

ゲベルは体の向きを変え、レイサと正面で向き合った。

どうしても胸元へ目が行ってしまうのを抑え、彼はその上を見据える。そこには自信たっぷり顔。

「だから、だ。俺はあいつにだけは負けたくない」

彼はレイサの返事を待たずに再び体の向きを変え、街へと向かう。ヤツに負けたくはない。しかし、今はその時ではない。そんな事よりも、今の自分にはやるべき事がある。



街に帰ってきた彼の足はいつの間にか走り出し、町外れを目指していた。

貧民街にたどり着く。そこは極寒の中で戦争の後遺症を引きずる者達が生きていた。

ここに温もりなど無い。他人を省みる余裕などどこにも無い。

夢、希望、そして未来。今を生き抜くことに精一杯の者達に、そんなものはそこらを風に舞うゴミ同然だ。

目前に迫った死と毎日を戦っている。そんな混沌とした場所へ、ゲベルは戻ってきた。

「よう、騎士に連れてかれてくれたばったかと思っただのに、戻ってきやがったのか」

街に入るなり、街人から声をかけられる。

そちらを睨むと、同世代の青年達が屯してこちらを眺めていた。

いつもはその仲に加わっているのだが、今日はそんな気分にはなれない。急ぐ足を進める。

「おい、昨日ここにガキ共を連れてきたねーちゃん。お前のカノジョか？」

仲間の言葉が、彼の足を百八十度反転させた。ゲベルは仲間の前で足を止め、彼の胸倉を掴み上げた。

「ここに騎士が子供達を連れて来たのか？」

「おお、青髪のおねーちゃんが来たぜ？ 最初はお前の手下共を連れて行こうとしたのかと思っただぜ」

更に胸倉を高く掴みあげる彼に、仲間がストップをかける。

彼は血の気が多く、拳闘は右に出るものがないため誰も向かっていこうとしない。

「お前ら、あいつに攻撃したのか?！」

「ば、ばか言えよ。相手は騎士だろ。お前でもあるまいし丸腰でどうやって挑むんだよ。それに、ガキ共みんなパンくわえてねーちゃんになつてたからよ。触らぬ騎士に祟り無しってな」

ゲベルは仲間を高く掴み上げていた腕を少し下した。

あの騎士が言った事が本当だった事を知り、彼女の顔を思い出して新たな決意を胸に焼付ける。

相手は少しだけ、約束を守った。自分が約束を破っては、自分に、アネキに嘘については男が廢る。

ヤツには絶対に負けないと誓った。自分に、そして小さいころよく世話してくれたアネキに。

「で、あいつはお前のカノジョなのか？ 飽きたら俺にも回してくれよ。結構な上玉じゃん」

「ぎげんじゃねえー！」

仲間を拳で黙らせた彼は、再び走って子供達の許へ向かう。子供達は相変わらず元気そうに遊んでいた。とてつもない安堵感。

「お前ら！ 無事だったか！」

「あ！ アニキだ！」

ゲベルが走り寄り、子供達も彼に向かってダツシュ。彼は子供達の顔を一人ずつ見渡す。皆元気そうで怪我もない。

「あの騎士に変な事されなかったか？」

「ううん。わあ、お姉ちゃん約束守ってくれたんだ！」

子供達も安堵したようで顔中に笑顔が広がる。

彼らも知っていたからだ。ゲベルと仲の良かった同じ貧民街に住んでいた男が、騎士たちに連れて行かれて以来帰ってこなかったことを。幼いながらにその意味を。

自分達が敬愛する兄貴分が、同じような運命を辿ってしまうのではないかと不安な一日だった。

「約束……？」

「うん、あのお姉ちゃん、ぼく達と指切りしたんだ。絶対アニキにひどい目にしないって！」

「そうか……」

ゲベルは彼女に対して行った暴言を思い出し、自分に対し笑って見せた。

自分の周りに群がる子供達の顔には、笑顔だけが広がっている。この顔を、再び不安に陥れる様な事はしたくはない。

「なあ、お前ら。盗みをする事はどう思ってたんだ？」

いきなりな質問に子供達は目を合わせて驚いたが、やはり純粋な子供。何のしがらみにも捕らわれない素直な答えが返ってくる。

「良くない事だよ。でも、しないとぼく達が死んじゃうんだ」

ゲベル自身もそう考えてきた。生き残るにはこれしかない、と。

だが、同じこのスラム出身のレイサが、国を変える為に盗みを止めてその身を国へ捧げている。

そのレイサの言葉に、彼の心は揺らいでいた。

——誰かがやってくれるなんて思うな

「そんな事は無いぜ。俺達は、盗みなんて情けない事をしなくたって生きていける。いいか、お前ら。盗みなんて、最低なヤロウのする事だ。つまり……今までの俺達は最低なヤロウって事だ」

子供達はとても不安そうな顔をする。いつも男としてのプライドを大事にしろと口癖のように言い聞かされてきた。

アニキのする事が男らしい事で、アニキのすることを真似れば、漢となる事が出来ると思ってきた。

それが今、こともあろうにそのアニキによって否定されてしまったのだ。

「だけどよ、これからは違う。このままじゃ俺のプライドが許さねえ。だから、俺はこれから国の為に働くぜ。心配すんな。俺達みたいな孤児上がり、騎士達を手玉に取つてるとこを俺は見てきたからな！」

アニキの力強い言葉に、子供達の顔にぱつと笑顔が戻る。

殺されるかもしれない盗賊家業。盗人として討伐されるなど男として、いやイリア人としての誇りに傷をつける。

同じ命を懸けるならそんなちっぽけなことによりも、もつと大きなことに対して懸けて、自らの名を歴史に刻みたい。それが、漢というもの。

まずはどうしようか。きっと町の外で待っているアネキの許へ行くことにしようか。

彼は子供たちに手を振って、カルラエの街を後にした。

## 第5話 決断の時

早足にブーツが廊下を叩き、シャニーはまっすぐ前を見据えて団長の許へと向かう。その顔には朝見せた不安そうな硬さは無く、ずんずん進む足取りははつきりしている。

いよいよ部屋の前にとどり着くと、彼女は大きな深呼吸をした後ドアをノックした。

「十八部隊所属、シャニーです」

「いいわよ、そのまま入って」

何かおかしい。耳は確かに、後ろから声を拾った。団長は部屋の中のはず。はっとして後ろへ振り向いた目がまん丸になった。

そのまま後ずさりしようとして、開けるはずだったドアにゴスつと後頭部を打ち付けてシャニーは顔を歪めている。

「何もそこまで驚かなくてもいいのに」

あまりのオーバリアクションにタイトはため息混じり。相変わらずの性格は気持ちを和らげてくれるものの、そろそろ落ち着いて欲しい所だ。

そんな姉の気持ちなど欠片も知らない顔は、今も非常事態から逃げ出そうと頭を扉へ押し付ける。

「げ、なんで外にいるの?」

「何、それ。私が休憩してちやいけないうって言うの?」

姉の眉間にしわが寄ったのがはつきり分かった。このままだと、第二ラウンドへ入る前からますます姉に生えた角が増えてしまう。

何とかあれこれ考えを巡らす、やっぱり気の利いた言葉なんて簡単に出てくるはずも無い。

「いや、そう言う訳じゃ」

そこから先が出て来ない。思い付きを口にしたって角が飛び出すだけだ。

(うー……奇襲攻撃なんてズルいよお)

バッチリ準備して来たはずだったのに思わぬ先制パンチを受けて、逸れる視線が降参を訴える。

「いいから中に入って」

テイトもシャニーと同じように食堂からこの部屋へと戻って来ていたのだが、どうやらシャニーは背後に団長がいる事をずっと気付かずに来たらしい。

この場で小言が始まりそうな程の呆れ顔をテイトから浴びせられ、ドアを開けられて半ば押し込まれるように部屋へと入る。何か出鼻をくじかれた気分。

「……で、ここに来たという事はちゃんと考えてきたんでしょね」

余計な雑談を挟んでくれるような相手ではない。シャニーの気持ちはまだ切り替わらないうちに、テイトが先手を仕掛けた。

「え?! えーとね、えーつと!」

「……座ったら?」

急に振られたシャニーは今まで考えてきた事を次から次へと口にしてみるのだが、頭がまとまらず何を言っているのか自分でも分からない。

テイトは口をへの字に曲げるとシャニーへ座るように命じ、言われるままのシャニーは姉が武具を装備する姿を眺めていた。

どこか自分の知っている姉とは違う雰囲気。つつけんどんできつい眼つきをしている事は今までもしばしばあったが、その中に優しさもあった。今の彼女には、それが無いような気がしてならなかった。

すっかりマントまで羽織ったテイトが装備を終えてこちらへ向けた顔はやはり固い。疲れているのだろうか。自分もその重荷の一つになっていと思うと気持ちが悪くなるが、今は姉へ誓いを見せる為に来たのだ。姉の力になりたくて。

「待たせたわね。それで? 頭は冷やしたの?」

真っ先に結論を要求された。しかし、今度はシャニーだって落ち着いてみせる。一度目を瞑って大きく深呼吸する。……姉は怒るかもしれない。だけど、これが自分の出した答えであり誓い。相手が誰であろうが、信じたものはそう簡単には覆せない。

たった一人でも信じてくれるなら……今の自分にはそんな人がたくさんいる。

「はい。あの場は仲間にも任せても良かったかもしれないと思います」  
「ようやく言わんとしている事を分かってくれたと、ティトの眼差しが少しだけ優しくなる。分かってくれば良い……そう思った次の瞬間、ティトの目元と口元が歪むことになる。」

「でも、あたしがした事が間違った事だとは思っていません」

妹は一体どこまで失望させれば気が済むのか。あの場は明らか失敗だった。未熟な賊が相手だったからあれで済んだが、斧でも持ち出した荒くれ相手なら死んでいたかもしれないというのに。

当然、ティトは反論しようとするものの今度はシャニーが先手を取った。

「だって、あたし仲間を信じてたんだなって気づいたから」

—— 考え無しの行動じゃない！ 信じて、前に出たんだ！

落胆はますますティトの目元を厳しくさせるばかり。一体見習い修行時代に何を学んできたと言うのか。

イリア騎士団は矛盾の塊のようなもの。その代表が騎士同士の信頼関係。騎士団として動き、軍として行動する以上チームワークは大切だ。

でも、傭兵として生き残り、祖国へ金を送るには時として仲間へ刃を向けなければならぬ事もある。

妹の言っている信じるは明らかに過信だ。

「前にも言ったはず。過度の仲間意識は任務に支障をきたすわ」

一つのミスで命を落とし、イリア騎士の信用すら落とす世界。過酷な虚空の戦場では、きつとなど通用しない。それでもシャニーの瞳が俯く事は無かった。彼女にとってそれは、きつとでは無いから。

「任務にも大切な事だと思う。あたしは仲間を信じてる。だから、ちよつとぐらいムチャをしても前に進む。いつも仲間がフォローしてくれるから。そうした方が、余計な犠牲も出ないよ。十八部隊はそうしてきたもん」

結局、口では悪かったと最初に詫びたが、朝と考えはまるで違ってないらしい。フォローしてもらえる。そう考える時点で彼女を他の部隊で戦わせることは難しい。



「あなたねえ……」

苛立ちを露にするテイトをシャニーが遮った。誓ったのだ、イリアの人に信頼される騎士になると。

「もし、仲間を信じる事を否定されても、あたしが信じた皆が信じてくれるなら構わない。騎士同士ですら仲間と心から信じあうことを拒むなら、人々とはもつと分かり合えないよ。そんなのがルールなら……戦ってぶっ壊してやりたいよ」

——現状をぶっ壊してやる。戦ってやる！

テイトはその言葉をどこかで聞いた事があるような気がした。いや、他でもない自らが団長に就任した時に誓った思いだ。

苦勞しているからこそ、その難しさが分かる。理想と現実の間にあるしがらみは、どんな光さえも遮ってしまいそうだ。

そのしがらみこそが、天馬騎士団の地位を揺るぎないものにしていく原動力でもある。それを代々継承する事で、天馬騎士団は地位と業を護って来た。

「……貴女の言う事は、理想を超えて詭弁に近いわね」

テイトも呆れているのだろうか。先程迄の怒りがまるで萎んでいくことが分かる。

だがもう少し聞いてみたかった。彼女がここまで言うということ、少なくとも彼女の周りには信じてくれる人と、信じられる人がいるということだ。この天馬騎士団の中に。

「イリアの人々との約束を守る。それが騎士の役目だと思うから。みんなを信じて動かないと、変えられないことばかりだと思うんだ」

守ると約束したのに守れなかった者たちがいる。希薄になった信頼関係の中、足しげく通ってようやく信じてくれた顔が不意に弱って悩みを語ってくれたのに、何もしてあげられずにいる自分がいる。信頼に応えられなかった悔しき。そして突きつけられた怒り。

——お前に何が分かる！ もっと地元を知りやがれ！

そんな怒りを向けてきた彼は、最後に少しだけ信じてくれた。自分も彼に、イリアの民に姿勢を見せていかなければならない。彼らとの約束を果たし、失われた信頼を取り戻す為なら戦うつもりだ。

「それと、無茶をする事は何も関係無いでしょ？」

「うん。だから、それは反省してる。でも、目の前で困っている人がいるのに、それを見捨てる事は出来ない。あたしの……誓いに反するか」

やはり今回も梶子でも動く気はないらしい。いつもならガツンと言うところだが、今日はそんな気分にならない。見習い時代には決して聞けなかった事をシャニーが口にしたからだ。朝も見せてきたこの眼差しは決して半年前の妹にはなかったもの。

「あなたの誓い？」

聞きたかった。この半年間で彼女が掴んだものを。蒔いた種が芽を出し咲かせようとしているものを。それさえしつかりと咲かせて、無茶を控えてくれるのなら他に何があっても目を瞑ろう。傘となつて戦ってきた事も報われる。

じつとシャニーの目を見つめるティトの眼差しは、戦場で敵を突くかの様に力が籠る。

「イリアの礎になって、みんなと戦い続けること」

それを口にした騎士の瞳は、半年前の自信と幼さに輝くものではなかった。

一人の叙任騎士として心に刻んで来た多くのものを湛え、幾多の空知らぬ雨を越えて自身に決断させた意志をはっきり感じさせるもの。

「貴女……、半年前とだいぶ変わったわね」

思わず漏れた言葉はティト自身にも不思議だった。人はこうも変わるものなのか。

一番隊で活躍することだけを願い、叶わなくて怒りに身を任せてきたあの時の顔とまるで違う顔が目の前で決意を口に出している。

守るべきものはつきりとさせて、彼らを見つめているかのような鋭気に満ちる瞳。姉にこの半年の内に積み上げてきた誓いと言う名の剣を見せるように、シャニーは最後まで言い切った。

「国の外で戦う事が自分の使命で名誉だと最初は思ってた。戦うって言葉の意味を間違えてたんだ。人々に寄り添って、彼らの声を聞いて訴え続ける事。彼らの為に振る剣をどれだけ非難されても、自分を信

じてくれる人がいるなら彼らの為に誓いを貫く事。それが戦うって事なんだと思う」

辛い事や悲しい事、悔しい事、この半年いろいろ経験した。何もできない自分が悔しくて、大事な人たちを道具のように使える自分が恐ろしくて、自分がどうありたいのか自身の言葉で言えなかった自分が情けなくて……。

今までの人生の中で一番泣いたし、眠れない夜を過ごした気がする。その涙すべてが今自身の誓いとなって心に湛えられている。

「分かったわ」

あの人たちの力になってあげたい。あの人たちに信頼されたい。民をじつと見つめる青の瞳が語った誓いに、それまで怖い顔をしていたテイトが不意に見せたのは優しい顔。

「貴女の誓いを私は尊重する。イリアの人々の事、頼むわよ」

どきつとした。あの姉が、自分を認めると言ってくれたのだ。頼むなんて言われた事は初めてかもしれない。

(お姉ちゃんが……あたしの事、信じてくれた……！)

嬉しくて言葉が出ず頷くしか出来なかった。何だか、入団から半年経ってようやく一人前の叙任騎士になれた気がする。

テイトにとっても、ようやく妹が決断させてくれてほっとしていた。時間はかかったが十八部隊はようやく形になってきた。

「ただし」

それでも、褒めただけではやはり終わらなかった。

「あなたの傍にいる人々の言葉に、非難に、耳を塞がないで。戦うと言うのは意見する人と対立する事ではない。それだけは肝に銘じて」

周りの意見を聞かずに突っ走るだけならそれは独善でしかない。あらゆる意見を聞き、想いを融合させること。屈しない強さと同じくらい、過ちは認め、正していく事も大切な強さ。

姉の言葉にシャニーは何度も首を縦に振った。

「なら、一番傍にいる人の声を早速聞いてちょうだい」

もう、少し前までの口答えばかりの妹ではない。自分もまた、彼女の誓いの中にいて最も傍にいるイリア民。それをはつきりと彼女に

伝え、そしてそつとシャニーの手を取った。姉としてではなく、戦友として。周りは敵だらけだが、背中を任せられると信じた、失われた天馬騎士団の名を取り戻すために戦う仲間として。

「自分が無茶をすればって言う考えは絶対に止めて。お願いだから」  
姉がこんな顔をしてお願いなんて言葉を使うのは初めてだ。いつも表情が乏しい姉だから、こんな悲しげな顔をされてシャニーは思わず息をのんだ。

今にもタイトは泣きそうで、あまりに驚いて何も返すことが出来ないでいると、ふいに姉のいい匂いがした。抱きしめる姉の優しい感触に目を真ん丸にして驚く。

「貴女にもしもの事があつたら、貴女を信じている人がどんな気持ちになるか……少しは考えてちょうだい」

もうあんな思いはしたくない。意識を失い、真つ白な顔でずっと眠り続ける妹に何もしてあげることが出来なかった。傍にいてあげたくても、成すべきことに背中を押され続け食事も喉を通らない。もう、あんな静かな顔は見たくない。

ようやく目覚めたと思つたら賊の前で膝を突き、短剣を向けられて……それをどんな気持ちで見っていたのか。少しでも妹に知って欲しかった。

「……分かったよ。無茶しないって約束する。心配かけてごめんなさい」

そつと乗っている姉の手をしつかりと両手で包むようにして握り、シャニーは小さく頭を下げた。

(お姉ちゃんの力になりたい。絶対になるんだ！)

いつも感謝している。十八部隊が周りに何を言われているか。自分が周りからどんな評価を受けているか。その全てを姉が傘になつて守ってくれてきた事を。

なかなか素直になれずに口答えばかりしてきた自覚はある。だが、もう姉にも心配をかけたくない。

誓いを掲げ、彼女にその姿を見せたかった。タイトが一人で戦ってきた相手へ、共に対峙して剣を握る覚悟を。

「信じているわよ、シャニー。私と一緒に、戦って欲しい」

姉がようやく認めてくれた。その喜びは体をふわっと浮せるかのようだが、自分の手を両手でしっかりと握ってきた姉の眼差しに背筋が伸びた。

10月には配属が待っている。もう明日から9月というこのタイミングでかけられた言葉の意味を、シャニーは強く頷いて受け止めるのだった。

## 第11章 恋慕のシルフィードダンス 第1話 『赫竜』のソルバーン

——エレブ新暦1000年 9月

短い夏も終わりがかけているイリアの朝。

高く澄んだ空からは何も遮ることのない眩い光が、弓のように張り詰めた冷たい蒼にまっすぐに降り注いで、天馬騎士団の本拠地であるカルラエの白き巨城を明るく浮かび上がらせる。

その日差しを浴びて飛び立つ天馬隊は、その人数規模からしてティト団長率いる第一部隊だろうか。

その一角では身を引き締めるように鋭く空を斬る音が今日も響いている。

「よしっ、今日もなかなかキレがいいぞ」

ふうっと大きく息を吐いて剣を下したシャニーは、青髪を分けて額に浮かんだ汗を拭いながら、体の中から湧き上がってくる気持ちを弾けさせるように小さく何度もジャンプして見せる。

「今日も気合入ってるね」

閃電の魔術師との戦いで受けた傷もすっかり癒えて、特に後遺症もなく体にキレが戻ってきたのがはつきり分かる。

部隊の集合場所にやってきたレイサは、今日も聞こえてくる剣の音で彼女の調子を察したが、「ま、でも今日はそれを使う機会はないだろうけどサ」意地悪く付け加えた。

「なんで？」

「なんでって、今日はあんたの大好きな予算書の締め切り日じゃないか」

ずいっと顔の前に突き出されたものを見た途端、発作でも起きたかのようにわっと体中の皮が引きつったような気がした。

何度見ても嫌な気分になせられる紙も世界中探してもそうそうないだろう。

(うげーっ、またこれかあ！ 体痛いフリしちやおつかな)

この紙は最強だ。この紙の前ではいくら指があっても足りない。どれだけ早い時間から取り掛かったって書き終わるのは決まって22時過ぎ。これ以上机にかじりついていると剣の稽古が出来なくなるギリギリの時間。

あからさまに顔に出たシャニーは口を尖らせる。

「部隊長なんだからこれくらいやってくださいよー。あたしの専門分野じゃないしさー」

何でもかんでも振ってくる気がする。副将と言うより何でも屋と  
言うか、部隊長のお守り役と言うか。

もう早くも半年この関係なので、今更言ったところで変わらない事は分かっているが、憎まれ口がついて出る。

「私のもっと専門分野じゃないよ」

まるでシャニーの反応が分かっていたかのように食い気味にレイサは笑っている。

「どこの部隊も副将が案作って部隊長は承認するだけだよ」

無理無理とでも言いたげに手を振ってくる部隊長を恨めしそうに見ながら、しぶしぶ予算書を受け取る。

(絶対違うし……)

喉まで出かけた言葉を飲み込んだ。そんな事を言っても、うちはおちと言われるだけ。

何より、レイサが自分ではなく自分の後方を見つめていることに気づいたのだ。

「どうしたんですか?」

「あいつは……ソルバーンじゃないか。なんだってこんな所に」

レイサの見つめる先では、サングラスをかけた長身の男がカルラエ城の中に入っていく。

よく知るが、こんなところに来ることはまず無いはずのあの男。見間違えるはずがない。

つい先ほどテイトが出撃したばかりのこのタイミングを狙ったかのような出沒に、レイサの眼差しが厳しくなった。

こちらの気配に気づいていないかのように男を凝視しているから、

シャニーはそつとレイサのズボンに予算表を引っかけてトンズラしようとしたのだが、あつさり首根つこを掴まれた。

(トホホ……これはもう、ルシャナに泣きを入れるしかないか……)



カルラエ城の第七会議室。城でも端にあるこの小規模の会議室はめったに使われる事は無く、他の会議室が埋まっている時に下っ端が仕方なく使う程度だ。

今ここに集まっている面子を、そんな若手が入って来て目の当りにしたら腰を抜かすだろう。

副団長のイドウヴァに、その右腕アルマ、そして先ほど登城して来たサングラスの男ソルバーン。

彼は椅子にもたれ足を机に引っかけながら、気だるそうにイドウヴァからの報告を聞いている。

「……つつーことはだ、失敗したって事か？ あんた」

部屋を包む独特のイントネーションをした、どこか絡みつくような声。

その視線は天馬騎士団副団長イドウヴァへ向けられていることが、サングラス越しでもはつきりと分かる。

失敗したとは言いたくない彼女は男から視線を外すが、目は口程に物を言うようで、怒りに震える眼を見て男は鼻で笑っている。

サングラス越しの表情は怒っている訳でも焦っている訳でもなく飄々としたもの。

「次の案をすでに検討中です」

だが、回答を期待していた声とまるで違う、落ち着き払った声が聞こえてくると眉間にしわを寄せた。

「ああん……？ 誰だテメエ」

低い声はあからさまに興味が無いと言いたげに気だるそうだ。

だが、声はそうでも視線は違った。それまでイドウヴァに向けていたものとは明らかに違う、サングラス越しでも分かる突き刺すような鋭い眼差し。それを向けられても、まだ少女と言ったほうが良い顔つ



きの騎士は小さく頭を下げるだけ。

「貴方にはまだ会わせていませんでしたね。彼女はアルマ、私の部下です」

息を吹き返した様に、いつもの絡みつく感じの声がこの小娘の正体を教えてくれた。

第一部隊に所属しているはずのアルマだが、今日はこうして重要な密会があった為、理由をつけて出撃を回避していた。

「ほお、ずいぶんと若い右腕だな。そんなに人材がいねえのか？」

ベルン動乱でこのイリアも主力部隊の大半を失ったことは、イリアに根を下ろしている以上この男も知っている。

それでも、ここまで若い騎士が副団長の右腕と聞かされては、口調にも口元にも驚きより呆れが滲む。

「彼女は特別優秀なのです」

この欲深いイドウヴァがフォローしたとしても男の口元は変わらなかったが、サングラス越しにまじまじアルマを見る眼差しは、次第に興味に光り出し口角が吊り上がりだした。

(こいつは……持つてやがるな……。しかも……だいぶ濃い)

なるほど、確かにイドウヴァが言う通り優秀なのかもしれない。尤も、彼女がアルマのそれに気づいてそう言っているとは思えないが。

「その優秀な右腕がおつても取れんとは、天馬騎士団の団長つっーのはよほど競争が激しいんだな」

そういう面倒くさい世界は御免。ポリポリと真っ赤な怒髪をかく男の口元が歪んでおり、ぴくつと一瞬イドウヴァが眉をひそめる。

どれだけ嫌味を言われても返すことはできない。今も胸に輝く勲章は銀色のまま。自身が副団長であるのは事実なのだ。

あの時、あの団長選出戦の時……あの青髪が自分に投票さえしていれば……沸々と怒りが湧き上がってくる。

あの顔を見ていると、その母親をどうしても思い出してしまう。顔も、氣勢もそっくりの人生を狂わせてくれた憎い相手。

まるで生まれ変わって邪魔をしているようで拳が震えだす。

「先ほどアルマがお伝えした通り、必ず取ります。機が満ちたらその

時は……お願いしますよ」

「おう、こっちは任せろ。そつちこそ機が満ちる前に婆さんになるなよ」

十八部隊の棄権は今思い出しても忌々しいが、今は腹に押し込めてただ頭を下げるしかない。

聞き終わりもしないうちに部屋を出ていこうと背を向けた男は、笑いながら後ろに手を振った。

そのままお行儀良く廊下を抜けて行くなどせず、窓から飛び降りてそのまま城壁を越えて行こうとした男へ、待っていたかのように声がかかった。

「こんな所で油売るとは、ずいぶん暇そうじゃないか」

馴れ馴れしく話しかけてくる人間など知れている。

声のするほうをサングラスの端に捉えた男は、見降ろした先に親しい顔を見つけて立ち止まった。

「よく、レイサ」

蛇の道は蛇と言ったところか。建前など要らない相手は話しやすい。

気だるそうな口調は相変わらずだが、その声には親しみが込められている事が高くなったトーンから分かる。

「それはこっちのセリフだ。部隊長とか柄にも無い事してるつーのは本当だったんだな」

昔からの付き合いだ。それこそ、レイサがただの盗賊だった時からお互いの情報を買収するような仲。

それも最近はレイサが騎士団の関係者になったので繋がりは薄れていたが、相変わらず元気のように久しぶりに見る顔はどこか角が取れたようにさえ見える。

こうなってしまうと、喰つても面白くない。

久しぶりの再会を喜ぼうとしたのも束の間、サングラスの端に何やら若さ溢れる姿が見えて、男はシャニーを視界に捉える。

「レイサさん、予算書作ってきたよ。へへー、早いでしょ！ はやくサインちよーだい！」

闇の世界の住人同士の会話の中に、そんな世界とは無縁の元気な声が走りこんできた。どうやらこちらの右腕も随分と若いようである。

だが、男の反応はアルマの時とは違った。

「んんん？ お前……どつかで見た顔だな、どこだったかな」

細い顎に手を添えて、気だるそうな声を漏らしながら口を尖らせる男にシャニーはにこっとして頭を下げた。

「初めまして。あたしはシャニーと言います。第十八部隊の副将をしています」

「おー、思い出したわ。あの八英雄のシャニーは嬢ちゃんのことか」

戦時新聞に載っていた顔を忘れていた訳では無いが、噂好きが作ったフェイクだと思っていた。

こうして本人に会ってからでさえ、この隙だらけの娘が八英雄と呼ばれる活躍を見せたとは到底思えない。

だが、だからこそ興味が湧く。腰に差す剣の状態を見れば下っ端騎士と片付けるレベルでは無い事は分かるし、レイサが傍に置いているのだ。

改めてまじまじと舐めるように頭の前からつま先まで見てみる……。

（ほう……？ こっちにも持つてる奴がいるのか。しかも……こりやあ持つてるどころじゃねえ。ほぼまんまじゃねえか）

改めてシャニーの顔を見下ろすと、彼女はにこっとして返してきた。どうやら何も気づいていないらしい。

「ソルバーン、うちの部下に手出したら承知しないからね」

それを察したのかレイサから即警告が飛んできた。

彼女が右腕の持っているものに気づいているかは定かではないが、なるほどさすがに見る眼はある。

もう少し物色してみたのだが、レイサの眼差しがどんどん黒く厳しくなってきたので舌打ちすると一歩退いた。

せっかくの情報屋同士でケンカするものもつたいない。

「ちっ、減るもんじゃねえだろうよ。ツマらん奴だぜ」

しかし、彼女の言うとおりで。このままここに居たら喰ってしま

う。

あいさつ代わりに憎まれ口を叩いた彼は、とんとんと木を伝って城壁に飛び乗りそのまま姿を消した。

「レイサさん、お知り合い？」

また、自分は知らないのに自分を知っている人が来た、くらいにしかシャニーは思っていないらしく、早くサインをくれとまた予算書を突き出してきた。

知らないと言うのは実に恐ろしい事だ。ここが天馬騎士団の本拠地でも無かったら、今頃襲い掛かれていたなんてこの朗らかな笑顔は夢にも思っていないだろう。

「シャニー、あいつには係わるんじゃないよ。銀狼の旅団……そう言えば分かるだろ？」

こう言う疑う事を知らない人間は釘を刺しておかないと間違いくあの男……ソルバーンに喰われてしまう。あの男はそう言う人間だ。

「銀狼の旅団……」

その名前を聞き、自身で口にしてようやくにシャニーも事の重大さが分かったらしく、ごくりと驚きを飲み込んでいる。

（あんなトコの人に付き合ったらいくら命があつたって足りないじゃん！）

「あいつはその頭領だ。『赫竜』<sup>かくりゆう</sup>のソルバーンって呼ばれてるイカれたヤツだよ」

銀狼の旅団、それは比較的イリアの中では新興の部類に入る傭兵団で、他と違い騎士団とは名乗っていない。

リーダーからして強い者を見ると戦わずにはいられない戦闘狂で、出身が大陸南西の砂漠地帯ナバタにも係わらずイリアに根を下ろしているのも、戦いが許された地域だからと言うだけ。

他の騎士団が拒否する仕事でも殺しなら何でも引き受ける好戦的な性格と、赫の怒髪から『赫竜』の二つ名を持っている。

「かわいそーに。あんた多分あいつに目をつけられたよ」

直接口にしなくなつたつてあの男の眼で分かる。

レイサはため息交じりだ。あの男に目をつけられたら、戦いの場に立つまでも追いかけて回ってくるし、挑まれた戦いに乗ったが最後、圧倒的な剛腕で全てを粉碎されてしまう。

こんな同世代の中でも華奢な部類の娘では骨折で済めばマシな方だ。

「えええ?! レイサさん、何とかしてよ。あたし何もしてないよ?!」

どうやら焦り方からして、シャニーはまだ事の重大さに余り気づいていないようだ。

だが、どれだけお願いされても、いくら親しいレイサと言ってもソルバーンの食欲を抑える事なんて誰にも出来ない話。

——諦めな

そんな返事が聞こえたような気がして、シャニーの顔がげつと歪む。

適当にサインした予算書をシャニーに持たせると、もうレイサは背を向けて彼女へ手を振りながら去り始めていた。

## 第2話 親友からの手紙Ⅰ

日差しが一段と明るく感じて、思わず始まる伸びに声が零れる。

重大イベントをクリアしたシャニーの足取りは軽く、つま先に力を込めてスイスイ歩くその顔はニコニコと鼻歌を歌いだした。

「ふふ、今日は出し直し四回で済んだからちよつと時間ができたぞ」  
計算間違いやら申請内容の指摘で、普段なら六回も七回もダメ出しをもらう予算申請書は、彼女にとって毎月のラスボスだった。

それが今回は四回で済んで、全身が解放感に包まれて翼でも生えたかのように軽い。

「あたしつてばやればできるじゃんー！」

自画自賛を誰に伝えようかと周りを見渡していると、それを言えば鼻で笑われるだけであろう赤髪の同期が視界に映る。

「じゃあこれを今回も頼む」

彼女は郵便配達係の騎士に何かを手渡すと、こちらへ向かって歩き出した。すぐに視線が合う二人は、互いに手を挙げて挨拶をかわす。

出会って最初こそ付き合っていていけるか心配になったほど対極な性格だが、今では友であり、良い刺激を与えてくれるライバルでもある。

「アルマ、誰かにお手紙？　もしかしてラブレターだったり？」

いつもの調子より更にトーンが高い。ニコニコを前に取り澄ました顔をするアルマから返ってきたのはドライな返事。

「だったら良いのだがな。暇な十八部隊と一緒にしないでくれよ」

相変わらず口が悪い。こうやっていちいち嫌味を言うものだからなかなか誰も寄って来なくなるのに。

いつも通り、シャニーは頬を膨らせている。

「母に仕送りをしていたんだ」

親友のいつも通りの顔にアルマはふっと笑って見せて質問に答え  
てやった。

「ふーん……エライじゃん」

「普通だと思うが」

それをとても珍しい事のように、口をおつと開けてシャニーが驚くも

のだから最初は反応に困った。貧しいイリアでは、一人前の騎士になつたら育ててくれた親に仕送りをする事は至って普通の光景だ。

「ああ……そうか、お前は」

だが、目の前にいるシャニーはその普通が通用しない相手だと思いついて、ばつが悪そうにアルマは視線を逸らした。

「申し訳ないことを言ったな」

両親が騎士だったシャニーは幼い頃に彼らを失っている。恩返しをしたくてもする事が出来ない彼女に普通なんて言葉をかけたら、傷に塩を塗るようなものだ。

だが、シャニーはいつも通りにこつとすると軽く首を横に振った。

「ううん、いいの。でも大変でしょ？ あたしたちの給金から仕送りって」

騎士の給金は傭兵による契約金から支払われ、各々への支払額は傭兵としての稼ぎの大小から決められるランクに従って決まる。

入団したばかりの新人騎士への支払など、騎士団の中で最低レベルであることは言うまでもなく、まして外国へ傭兵に出て行く事が無い十八部隊のそれは、武器を修理したら後は食べるだけで精一杯だ。

「ああ……だからはやく給金が増えるように。もつともつと上の高い椅子に座りたい」

何をするにも、とりあえず金が必要。今の地位に満足などできはしなかった。

自分より仕事をしない先輩のほうが、在籍が長いと言うだけで多くの給金をもらえる事に納得など出来なかった。

しかし、それを要するには力がある。今座っている椅子よりも遙かに高く、大きな椅子に座る必要がある。

するすると出世の道を登り、副団長の部隊で副将を担う実力派のアルマが放つギラギラした向上心は、シャニーには毎回別の世界の人と話している感覚になってぽかんとする。

「シャニー、あなたにも手紙が来ているわよ」

先ほどアルマから荷物を受け取った騎士が、シャニーの姿を見つけてくるつと宙をとんぼ返りしてきた。

「マメね、あなたのボーイフレンド」

誰からだろう、そうシャニーが言うよりも先に、その騎士はからかうようにして肩を突いてくるからシャニーもピンときた。

「ボーイフレンドってわけじゃ」

「ヨッ、憎いね。早く読んでお返事書かないと今日の便には間に合わないよ」

意地悪く言う騎士に向かって大きめに手を振って追い払う。いつもどこかでおもちゃにされては堪らない。

「またお手紙くれたんだ。大変だろうなあ」

つい数日前に返事を出したばかりなのに。

早く読みたい所だがそろそろ見回りの時間になる。彼女はアルマと別れ、手紙をしっかりと鞆にしまつて帯剣ベルトを締め直すと、天馬にまたがって空の彼方へと消えて行った。



見回りから帰つてくるとそれだけでもう午前は終わっていた。

どうしても各地の人々に近況を聞いたり会話に花が咲いてしまうと、ちよつとの時間で済ますと言う訳には行かなくなる。

今日もしつかり彼らから困り事をメモしてきたシャニーは、食堂でいつも通り幼馴染の同期と休憩に入ることにする。

「シャニー、誰からの手紙なの？ ずいぶんしつかりした紙だね」

ルシヤナの視線はシャニーが持っている手紙に釘付け。

普段なら昼食後は壊れた蓄音機のように喋るシャニーが静かだと思つたら、彼女は手紙に目を落としていた。

その手紙に使われている紙はどう見ても貴族が使うような上質のもので、貧乏騎士がひしめくカルラエ城の食堂には不釣り合いな代物だった。

「これ？ ロイ様だよ」

親友の口から何の畏れもなく出てきた名前に、ルシヤナは目をぱちくりさせた。

「ロ、ロイって、あの英雄ロイ様のこと言ってる?!」



「うん、だって知り合いだし。きつと一緒に戦った人みんなに出して  
るんだよ」

横で医学書を覗きならスープをすすっていたウツデイも咽って目  
が血走っているものだから、シヤニーは首をかしげた。

ロイとはベルン動乱を鎮めた英雄の名。彼にその動乱で雇われて  
いたのだから顔見知りでも不思議では無いとシヤニーは思っている  
のだが、周りにとっては違うらしい。

ルシヤナからすつと伸びてきた手の上に手紙を乗せてやる。

「シ、シヤニーさ。これ……皆に出してる訳じゃないと思うけど」

中を読んだルシヤナは顔をこわばらせながら、どうしたの？ とで  
も言いたげにニコニコこちらを見ているシヤニーに手紙を返す。

「ロイ様呼んでるじゃん」

どこを読んで彼女はこれを関係者全員に出したと思ったのだろう  
か。

「知ってるよ。そういう挨拶なんですよ？ しやこーじれーつてや  
っ」

得意げに指を立てて口にした言葉にルシヤナは呆れてしまった。

遠回しな表現をするこのロイと言う人は、全くシヤニーを分かって  
いない。

シヤニーから再び手紙を取り上げてウツデイに回すと、彼も眉間に  
しわを寄せて彼女を見上げ始め、ルシヤナは呆れを含んだ焦ったよう  
な口調で忠告した。

「いや……絶対違うって、これは。絶対返事書きなよ」

警告を警告とまともに受け取っていないことは、両手が空いてもぐ  
もぐと元気良く昼食を食べ始めた嬉しそうな顔から伝わってくる。

「えー、そうかなあ。あたしみたいな傭兵呼んだってどうしようもな  
いじゃん」

「あんたってロマンチストの割に妙な所は現実主義者だね……」

手紙の中では確かにロイはいつ遊びに来ることができているのかを聞  
いているが、動乱を戦った関係者を呼んでパーティーをする話を、面白  
おかしくまた仲間がからかってきている。シヤニーにはそう映って

いた。

(ルシヤナの言う事だし一応見とこつかな)

だが、親友がここまで言うとなると彼女も気になってきてしまい、食堂の喧騒から離れると、誰もいない静かな城の屋上に行つて読むことにした。



——元気にしているか心配だ。声を聴きたいし今度お茶でもしないか？ いつなら来れそうかい？

「いつって言われてもなあ。そんな長い休み取れないし」

やはりロイは呼んでいる。おまけに具体的な日取り迄確認していた。

傭兵の自分まで故郷に誘つてくれる事は嬉しいし、ありがたい事なのだが、鞆から勤務カレンダーを取り出して、はあっと大きくため息をついた。

ロイのいるリキアのフェレまで往復してパーティにも出てとなると、一週間は必要になる。

「でも、あたしも会いたいなあ。話したい事いっぱいあるし」

その場で鞆から便箋と筆記具を取り出すと、そこから止まらなくなつた。

動乱中も年が近いという事もあつて、よく隙間の時間を使ってお喋りを楽しんだもの。その延長線でついついあれやこれやと書いてしまう。

——また雇つてくれたら行けるんだけどなく

「あたしつてば天才じゃん！」

我ながら仕事も取れて完ぺきな返事だとニカつと笑う。

「お土産どうしようかな」

もうすつかり、昼休憩の時間が終わっていることさえも忘れていた。



その日、シャニーは非番で朝から家の仕事に追われていた。

長女のユーノは結婚して家を出、次女のテイトは団長になってから多忙を極め、実家に戻ってきていない。

相変わらずシャニーだけがこの家に住んでいる。

「あーもう、休みの日くらいゆつくりしたいよ、まったく!」

おかげで非番の日は、積みあがった洗濯物を片付けるように次々処理しないと追いつかない。

騎士と言っても他の地方と違って貴族でも何でも無い為、職場から離れば普通の生活が待っている。

自分が夜勤の時は居候のウツデイがやってくれるが、彼も先週は忙しかったのか何も出来ていないらしく、シンクに白い筋が浮かんでいる。

「この後台所掃除してトイレ掃除して……ああ、リビングも掃除しろってお姉ちゃん言ってたっけ……」

下手をしたら職場にいる時のほうが気楽かもしれない。もうそろそろ解放されたいと叫ぶ頭の中からどんどん出てくる新しいタスク。まるで中にレイサでもいるかのようにどんどん仕事を振ってくる。

時計に目をやると、もう朝の時間が終わりにかけていた。思わず大きなため息が漏れるが、家事の後でおやつを食べる自分を想像して頑張る事にする。

鼻歌を歌いながら風呂掃除を始めて暫く経った頃だった。天馬の羽音が聞こえたかと思うとドアをノックする音に呼び止められた。

「はいはい、今いきまーす」

手を拭いて急いで玄関まで向かおうと一歩踏み出した途端、何か床とは違うものを踏んで視界が宙に一回転。

「うわあ?!」

どうやら洗い残しの石鹸に滑ったらしく、ドア越しで待つ郵便配達員の騎士は、外にまで聞こえてきた音と悲鳴に天馬と苦笑いしていた。

「またなんかドジってたの? 大丈夫?」

「大丈夫、大丈夫……あはは……どうもありがとう」

今はもうすぐにドアを閉めたい気分だ。配達員も心配はしてくれているものの、いつもの事なのでその顔は苦笑いが抜けていない。

服がびしょ濡れなので手紙を受け取るとすぐに家の中へと戻り、受け取ったものをテーブルに滑らせて寝室へと消える。

「うへえ、痕残らないと良いなあ、これ以上増やしたくないよ」

思い切り膝から着地したので、膝の内側の骨が出っ張った部分がアザになっていた。

ただでさえ幼少の頃、野獣に襲われた時にできた傷の痕が背中から消えなくて気にしているのに、もつと見えやすい場所にこんなアザが残ったらと思うと摩る手はなかなか止まらない。

ふうふうと息を吹きかけていた彼女が、テーブルに滑らせたものに気づいた時には、時計の針同士がまた少しくつつこうとしていた。

「またロイ様からだ。一昨日くらいに出したばっかりなのに」

すっかりとした紙質の手紙は、差出人を見ずとも誰が出してきたかすぐ分かった。

生乾きの髪をヘアバンドで搔き上げると中から出てきた数枚の手紙に目を下す。

——仕事大変そうだね。手紙を読んでいると君の笑顔が思い出されるようだよ

思わず笑みが漏れる。暖炉の鍋から湯を汲み、棚からお菓子を引っ張り出してテーブルに座るともう一度初めから読み始めた。

優しいロイのあの声が今にも聞こえてくるかのように自然な書き口の手紙。そこには貴族らしい厳かさはない。

——契約の話、是非そうしたいのだけど、天馬騎士団からのリストには君の名前が無いんだ。どうしてかな

「へっ?！」

思わず目が点になった。

「半分ジョーダンだったのに……」

あの時は我ながら天才かと思ったが、まさかこんなド真面目な答えが返ってくるとは。

どうしてかなと言われても、当たり前としか返しようが無かった。もはや稼ぎとまらない国内案件の処理部隊くらいに思われている節がある十八部隊に所属しているのだから。

「これってやつぱり、ホンキなのかな」

色々な意味でガツカリ来た。分かっていた事とは言え、今のままで外からお呼びがかかることは絶対にならないことが分かったし、何よりせっかくロイが呼んでくれているのに行く術がないのだ。

ルシャナ達には軽く返したが、ロイの残念そうな書き口にシャニーはごくりと息をのんだ。

「ちゃんとお返事しなきゃ」

親友に言われた通り真面目に答えておけば良かったと後悔しても遅い。

どうやって返そうかと、髪を弄りクツキーをひとつポンと口に放り込んだ時、ふと時計が視界に入った。

まだ掃除の後に、次の非番の日までの夕食づくりが待っているのに、それを考えながら書きたくなかった。

「後でやろーっと」

きれいに畳んだ手紙を封筒に入れ直し、引き出しへと納めて彼女は戦場へと戻っていった。



シャニーが家で奮闘している頃、天馬騎士団の本拠地カルラエ城では、テイトとイドウヴァが食堂から出てきて、早足にそれぞれの部隊の詰所へと急いでいた。

お互いに昼からの外出予定に向けて早めの昼食をとった帰り。

「では、私は傭兵契約締結のためリキアへ向かい、今日はそのまま失礼します」

先に部屋に着いたイドウヴァは、奥にある第一部隊の部屋に向かうとするテイトに声をかけた。

いつもならよろしくと声をかけるところだったが、「そのまま?」思わずテイトは振り返った。

「夕方から部隊長会議があるのは知っていますよね？」

「ええ。しかし、複数の契約主を回りますので戻れそうにないので」

———またか

テイトの顔にはそう書いてある。イドウヴァは最近、二回に一回は部隊長会議を欠席するようなスケジュールをしている。

副団長として影響が大きい彼女抜きで何かを取り決めても、後で仕切り直しとなる事も少なくないのに。

それでも契約主第一のイリア騎士団においては茶飯事だし仕方ない事と昔から流されてきた。いくら国の中で会議をしていても金にならないのだ。

「では、これにて」

それ以上の制止を拒むかのように部屋の中へ向かう彼女に再び声が飛ぶ。

「待ってください。今日は十八部隊の配属先について協議する場だと言う事は以前から伝えてあったはずです」

他の案件ならまだ欠席裁判でも良い。しかし、新人の配属はそうは行かない。彼女の気に入らない決定になっていたら、後出しじやんけんとなるに決まっている。

ただでさえ、今までずっと新人の配属先はどこかと、耳にタコができるほどに問うて来ていたのだから。

「私は団長の決定を信じておりますから」

それなのに、イドウヴァはさらっとそう言って頭を下げると、部屋で待機する部下達に一声かけ、ぞろぞろ出てきた彼女たちを盾にするようにずんずんと城を出て行ってしまった。

「団長、怪しいと思いませんか？」

物陰から会話をずっと聞いていたのだろうか。後ろから聞こえてきた声に振り向くと、第一部隊の副将ソランがイドウヴァの消えた廊下の角を、じつと睨むように見つめて警戒感を滲ませていた。

無理もない反応かもしれない。団長選出戦後、会議をキャンセルして席を外す機会が増えた。おまけにテイトに対する態度もどこか柔らかく、気味が悪かった。

「確かに……違和感はあるわね」

いつもは部下を窘めるテイトも、配下を引き連れ天馬に乗って消えていく副団長の姿が、陽に入り消えていく様子を見上げながら隠し切れない思いが漏れた。

「少し調べたほうが良いと思うけど」

分かっているなら話は早い。そう言いたげに窓辺に並んで、消えた副団長を睨む視線は明確な警告を発してくる。

「諜報部に連絡する？」

だが、副将が具体的に動こうとしている事を察したテイトは、首を縦には振らなかつた。

「止めましょう、憶測だけで動くのは良くないわ。ただでさえ混乱が収束していない今、結束しないといけないのに」

万が一イドウヴァが何かを計画しているとしても、事態が表に出ることは避けなければならない。

未だ復興の最中であり基盤が確立していない今、これ以上派閥間で溝が深まれば騎士団自体が崩壊してしまう。

そうなれば騎士団間のバランスが崩れ、要らぬ争いに発展しかねない。

「でも、新人の配属先に意見しないなんてどう考えてもおかしいですよ」

大方の腹は分かる。アルマを引き抜いた今、もはや十八部隊には残りものしかおらず、あれだけ頭を下げてラブコールを送っていた副将にも、団長選出戦ではそっぽを向かれた。

だが、だからこそ口を出して来ない事が不気味だった。今や十八部隊は顔に泥を塗った敵としか映っていないはずなのだから。

「とにかく、証拠もなく仲間を怪しむのは止めましょ。少し、様子見しましょう」

ゴーサインは無く、これ以上言う事は無いと、歩き出したテイトの背中が沈黙の中に伝えてきた。

仲間……どこまで本心なのか。団長は動けなくなってしまうてる。ソランは胸騒ぎを抑えられず、独自に調査を始める事にした。

### 第3話 唯一無二の名

何とか家事を終わらせたシャニーは、着替えてコートを羽織ると鼻歌を歌いながら天馬に乗って飛び出した。

彼女の元気に応えるように、日差しはポカポカ穏やかに蒼穹を包む。

これから休みを使って、仲間たちと遊びに行く約束をしていたのだ。天馬で切る風が心なしか軽く感じる。

あつという間に山を越え着いた先は、イリアでも最大級の城下町エデツサだ。

カルラエもまずまずの規模の城下町だが、さすがにエデツサには敵わない。買物ならエデツサ。イリアの若者にとつては常識だ。

「あー、久しぶりの買物だー！ 何買おうかなつと」

最近の仕事が立て込み、おまけにしばらく立ち上がれないほどの重傷を負っていたので、街に出るなんて久しぶりの事。

それもあつてか、やたら気合が入った拳を握って今にも突撃しそうなシャニーへ、呆れるウツデイが両手を広げて見せた。

「僕らの給金じゃそう買えないけどな」

「はあ、夢が無いなあウツデイ君は！」

入団して一年にも満たない騎士への給金など知れている。食べていくことで精いっぱいなので、オシャレに現を抜かすなんて夢の話だ。

それでも、たまには現実逃避したい頭にズシッと雪でも乗せられた気持ちになったシャニーは、払いのけるようにしてウツデイを罵って不機嫌あらわ。

「私はアクセサリを見ていこうかな」

「お、行く行く」

そんな凸凹な会話を聞いていたセラが、目当ての店を見つけて方向を変える。それに釣られて、シャニーも元気に親友の後について宝飾店へと入って行ってしまった。

ウインドウショッピングで済まそうとしていたウツデイだが、二人



を迎え入れた店員と目が合ってしまった仕方なくドアをくぐる。

(女の子ってなんでああ面白い物が好きなのかな)

誘われた時から嫌な予感はしていた。

間違いなく、現地に着いたら自分は蚊帳の外になる。次に呼ばれる時は会計が済んでから。

彼は本を読みながら適当な距離を取りつつ、向こうで物色する二人についていく。

「どれがいいかなあ……」

どうやらセラはピアスを探しているようだ。先ほどから売り場を行ったり来たり、建物の中に入っている店をハシゴしては色とりどりのピアスを眺めて試着している。

その真剣さにシャニーの勘がピンとくる。

「もしかしてセラ、恋してる?!」

思わず持っていたピアスを落とすところだ。親友の確信に満ちた顔の後ろから、ウツデイまでもが興味ありそうにこちらを覗いている。

途端に顔がかあつと熱くなってくるのが分かり、周りの視線が一気に突き刺さったような気がした。

「なっ、ち、違うよ!」

「ねえねえ、相手は誰? やっぱリアルク先輩なの? ねえ!」

狼狽しながら首が飛ぶ勢いで否定するが、白い歯を見せて笑うシャニーには聞こえていないかのよう。

セラが手にしていた赤いピアスをまじまじ覗き込むと、イタズラ好きいな笑顔が見上げてくる。

「結構いいお値段してるじゃん、勝負かけるのかな」

「もうシャニー、からかわないで!」

吐かせるまで言うつもりかもしれない。さすがに哀れに見えたのかウツデイが一人盛り上がるシャニーの前に割って入ってきた。

「やっぱり上位部隊にいて外に出てると大分手当が付くんだろ?」

セラは見習い修行を経験していた為、早い時期から第二部隊に配属されていた。

八月あたりに異動辞令が出て第五部隊に移ったが、この部隊の部隊長マリツサもイドウヴァの息がかかった人物で、仕事はたくさん振られてくるのでセラ自身も既に傭兵契約に何度も出撃していた。

気まづくなるので今まで給金の話はしてこなかったが、ここはチャンスとばかりにウツデイに合わせる。

「そんなところね。外回りには身だしなみも大事だし！」

ようやくにシャニーからの追及が止まった。

外回りに出られないことをシャニーも気にしているとは知っているが、今回ばかりはお互い様。

面白いネタを取り上げられたような感じで残念がるシャニーだが、頭の後ろで手を組む彼女の笑顔は相変わらずだ。

「勝負アクセ買ったらランチ行こうよ、ランチ！」

「はは……シャニーはやっぱりそっちなんだね」

この時のために、朝ご飯を減らしてお菓子をちよつと摘まむだけで我慢してきた。

意気込む彼女に、ウツデイは苦笑いするしかなかった。

彼女から食欲を取り上げたら、本当にそのまま死ぬのではないかと思うほどによく食べる。

とりあえずケガをしても、食べていたら放っておいても大丈夫。これがウツデイのシャニーに対する診察基準だ。

「そりゃそうさ。百万ゴールド当たったら世界一周食べ歩きしたいな」

今にもじゅるりとヨダレが垂れそうな顔で願望を叫ぶ。

買いたくない宝くじが当たったらの話など、今までどれだけ聞かされて来た事か。そのたび同じことを言っているから、そのブレの無さは感心する。

セラが赤いピアスを買って店から出てくると、元気印を先頭に三人は飲食街へと消えていった。



カフェ風の明るい店の窓辺の席には、柔らかい日差しが注いで会話

が弾む。

いつもの面子だが、騎士団の食堂で喋るよりも、こうした街で食べながら喋るほうが断然に楽しい。もちろん量で稼ぐ食堂と違って味は格別だ。

「ふう〜。おいしかったあ」

「本当に、あんたの食べっぷり見てるとこっちのお腹がいっぱいになるよ」

もう食べられないと言った感じにお腹をさすり、満足そうな声を上げるシャニーがセラには羨ましかった。

天馬乗りは体重をどうしても気にしないといけないから、食べる量にも気を遣うのだ。

彼女に合わせて食べていたら、自分だけ太ってしまう。

食べても食べても変わらないこの体質が羨ましい。とことん幸せなやつだと改めて感じる。

「だっていつも作ってばかりだからたまには楽したいしき」

食べる側は楽なもの。今日だって次の非番までの夕食のおかずを作って出てきている。

「ね、ウツデイ?」

その不満をはつきり向けられて小さくなるしかなかった。料理は苦手なのでついつい彼女に頼ってしまう。先週は忙しくその他の家事もできなかったから猶更だ。

「デザートをプレゼントしてくれてもばち当たらないと思うんだけどなあ?」

どうやらまだ食べるらしく、その視線の串刺しを受けたウツデイは苦笑いしながら自分の分を彼女に渡してやった。

「さてと、この後はどうしようかな」

幸せそうにケーキを頬張る彼女の横で、セラが案内板を眺めだしている。

すると、後ろからポンポンと肩を叩かれ、振り向くとシャニーがまだもぐもぐしていた。

「行くアテないならちよつと付き合っつてよ」

噛みしめていた幸せを名残惜しそうに飲みこんだシャニーの口から出た言葉に、セラは思わずウツデイと顔を見合わせた。

彼も渋い顔をしており、考えは二人とも同じようだ。嫌な予感しかない。



「ああ……やっぱり」

それはすぐに現実となった。シャニーの後についてきた彼らは、見えてきた看板を見上げて漏らさずにはおれなかった。

そこは武器屋で、シャニーは正面から入らずに建物の側面へ回っていく。こちらから入れば腕の良い鍛冶師がいる工房に繋がっている。

だが、彼女が曲がり角で急に止まるものだから後ろの二人は鼻を前の背にぶつけた。

「あれ、アルマじゃない。こんなところで会うなんて」

「何だ、お前か。どうしたんだこんなところで」

シャニーが呼んだ名前に驚いて、彼女の両脇から顔を出してみると槍を持ったアルマが不思議そうにこちらを見ている。

また抜け出してサボっているのかとでも言いたげな顔だ。

「剣が折れちゃったから新調しに来たんだ」

一度は修理に出したものの、酷い折れ方で修理不可と返ってきてしまった今は丸腰。疑われたままでは癪なので、工房の入口を指さすが返ってきたのは鼻で笑う声。

「ふん、下手くそはよく武器を折るもんだ」

「なにおう！ 折ったのは入団してから初めてだもん！」

どうにも顔を合わせると言わずにはおれないのか、挑発に乗ったシャニーが地団太を踏んでいる。

こうして言い合っている間、アルマの他の団員に対する態度とシャニーへのそれは明らかに違い、仲が悪い訳では無さそうなのだが、ウツデイはいつケンカに発展するかと毎度ヒヤヒヤしてきた。

「そういうアルマは何しに来たのさ？」

どうせお前も槍を折ったんだろう？ そう言いたげな目でアルマ

を見つめ、手にした槍を指さすシャニーだが、「槍の修理だ」そんなわけがあるまいと鼻で笑ったアルマはすつと槍を見せてきた。「仕事の度にメンテしないと。第一部隊はあちこち出るから大変だよ」

おまけにニコツとしたかと思うと強烈な嫌味を喰らってしまい、ギリギリ歯ぎしりし始めそうなほど悔しがるシャニーをなだめながら、セラたちはアルマを追うようにして工房へと入っていった。



それからどれくらい経ったことだろう。槍の調整を終えて戻ってきたアルマは、シヨーウインドウのあるエントランスに、別れた時そのままの場所でランプに興じるセラとウツデイを見つけ、眉間にしわを寄せた。

「お前たち、そこで何をしているんだ？」

「私たちは用事がないからね。シャニーを待つてるのさ」

こうなるからシャニーと工房を訪れるのは覚悟がいる。

今回は今までの経験が生きたおかげで暇つぶしが出来るが、前回は何も無い所で何もすることが無く困ったものだ。

「待つてるって……剣一本買うだけだろ？ 何をしてるんだ、あいつは」

自分も槍の調整になかなか時間がかかったはずと、アルマは腕時計に視線を落としてみる。やはり別れてから一時間以上は経っている。

おまけに十八部隊の給金で買える武器など精々鋼製が関の山だが、シャニーがそんな長所を殺すようなものを買うとは思えない。

選択肢などないのだから三十分……いや十分程度で終わるはずだ。

「見に行けば分かるよ」

セラも仰る通りと言わんばかりに、両手を広げてため息をついて見せた。

以前は迎えに行った事もあるが、自分たちを待たせていると分かる。と真剣な親友に悪いので、帰ってくるまで待つようにしていた。

「あんたでもビツクリするかもね」

そう付け加えると、興味は無いと言って去るかと思ったアルマが踵を返して工房のほうを向く。

「よし、行くよウツデイ!!」

セラの掛け声とともにバタバタと荷物を片付ける音がしたかと思うと、ドアチャイムがガラランガラんと一回転するくらい勢いよく出口のドアが開け放たれる。「ん？ おい！」アルマが気づいて振り返った時には、二人はすでに工房を脱出していた。

「シャニーをよろしく！ じゃあねえ！」

自分たちの親友を人に押し付けて逃げて行った。

電光石火の逃走劇にアルマは追いかける気にもならず、仕方なくシャニーがいる部屋を直指すことにする。

しばらくすると静かな工房に鋭く空を割く音が聞こえてくるようになり、部屋から漏れる光に誘われ、隙間から中を覗き見る。そこではシャニーが青髪を激しく揺らしながら、一心不乱に切先で案山子を捉える姿があった。

しばらくすると動きは止まり、場に静寂が戻ってくる。

「どうだ、シャニー。満足したか？」

剣を構えて目を瞑るシャニーの様子を、奥の作業台で暇そうに眺めながら、紙たばこをふかす鍛冶師が声をかけた。

「ふう……」

しばらくして大きく息を吐いた彼女は剣を下ろして静かに鞘にしまう。これだけ見たら騎士と言うより剣士だ。

「おじさん、もう少しポイントにバランス持っていけない？」

すたすた歩いてきて、鞘にしまった剣を鍛冶師にずいっと突き出した。

買う剣など決まっていたが、その調整がいつまで経っても終わらない。すぐに刀身を調整しては、またシャニーが剣を振りだす。その鋭い音をアルマは目を閉じて聞いていた。

「シャニー、相変わらずだな」

また別の注文と共に剣を返してきた彼女に、すつと水の入ったコップを手渡した鍛冶師が呆れたような感心したような口調で笑う。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「まったくだぜ。利幅のないお客さんだよ、お前はよ」

彼女に捕まると他の仕事が半日止まってしまう。それでも、額に滲む汗を拭いながら詫びてくるニコツとした顔は憎めない。静かにボヤきながら、また剣を静かに鍛え始めた。

小気味よく響く金槌の音を聞き、シャニーは椅子にもたれて天井を見つめながら大きく息を吐く。

「いざって時に調整不足で戦えないなんて事になりたくないからね」  
準備を怠って死にかけた事はベルン動乱でいくらかもあつた。

当時傭兵団にいた戦士に口を酸っぱくして言われ続けた事が、ようやくに今分かる気がしてシャニーは両手を見つめる。

「あたし、失敗ばかりだからさ」

ついこの前戦つたあの閃電の魔術師も、援軍が来ていなければ殺されていた。もっともっと強くならなければ……先ほどの笑顔とは違う眼差しがそこにある。

「いんや、自分の武器にそこまでこだわられるつてのはそうそういないぜ。昔は武器を見ればそいつの人柄が分かるつてくらい大事に考えたまんだが、今どきじゃ珍しい」

既製品をしつくり手になじむようになるまで改造する。昔は当たり前だった。

武器は自分を守る相棒であり、己の姿勢を映す鏡だ。

使い手の人となりを知ることができるこの楽しい仕事も最近はめつきり減った。

「師匠にそこらへんは叩きこまれたからね」

最初は自分もうんざりだった。師匠のディークや、彼といつも行動を共にしていた剣士ルトガーに連れられて、二人が調整する様子を見ている側。

いつもは優しいディークも、剣の事になるとにかく厳しかった。二人の様子をあくびをしながら眺めていたあの頃の自分が恥ずかしい。

「あ、あと、ブレードをもう少し細くして、ポイントをもうちよつと広

げて欲しいな」

いつしかこうして武器を調整することが当たり前になっていた。最初はデイークを見よう見まねで鍛冶屋に指示を出していたので、注文を受けた側が困った顔をすることも多かったが。

今ではどうしたらもつと良い武器になるか、考える事が一つの楽しみだ。

「しっかし、これを更に細くか？ どっちかって言うとな刀だぜ？ これ以上やると」

だいぶ慣れた感じのシャニーではあるが、今回ばかりは鍛冶屋の主人も待ったをかけた。

軽量化を図り、反りを入れ刀身の先から鋒での斬撃に長けた剣は、騎士剣と言うにはあまりにも脆い。

「ま、お前が使いやすいのが一番だがな」

正確な金槌が細身の剣を更に鍛え上げ、輝く刀身をさらに磨くと彼女に手渡した。しばらく重みを確かめてから刀身を見上げ、じっくりと様々な型で振ってみる。

「うん！ よしっ。ありがとう、おじさん。ようやくしっくりきたよ」

ようやく顔から鋭さが消えて、小さくガッツポーズをしながらニコツと笑って見せた。

「改造代はいくら？」

かなり付き合ってもらったので答えが怖いけど、ここまで満足できる一振りを仕上げてもらえた喜びには代えられない。

「ん？ ああ、そっちはいらねえよ」

仕事かひと段落ついて紙たばこをふかし始めた鍛冶師が、のんびりとした口調で告げてゆらゆらと手を振った。

「え?! ホントッ」

感激が瞳に現れるシャニーの飛び跳ねる姿に目袋が緩む。

「ああ、剣が喜んでるぜ。俺もこれだけあれこれできたら鍛冶師冥利に尽きるってもんだ」

久しぶりに満足がいくほど刀を打った。それだけで十分だし、仕事後の至福を中断してまでわざわざレジまで歩いて行きたくない。



ありがとうと嬉しそうに剣を腰に差して出ていくシャニーの背中を見送り、鍛冶師はうんと満足そうに大きく背伸びした。



ふんふんと鼻歌を歌いながら戻ってきたシャニーは、意外な人物と最初に顔が合って辺りをきよきよと見渡し始めた。

だが、そこにはアルマ以外には知り合いどころか他の客の姿さえなく、窓の外はすでに紅に染まり始めている。

「あれ？ アルマ、ほかの二人は？」

「待っている訳無いだろう？ どれだけ時間が経っていると思ってる？」

時計のほうにツンと視線を向け、見てみると友に無言で促す。

本当に時間を忘れて剣の調整をしていたらしく、やってしまったと目と口元が言っている。

「ごめん、アルマも待たせちゃったね」

「いや、私は勝手に残っていただけだ」

すぐに駆け寄ってきて謝るシャニーを軽く笑って止めさせると、彼女が腰に差した剣をすつと鞘から抜いて眺めてみる。

「それより、この剣はどこで学んだんだ？」

騎士が扱うような剣さばきではない。普通の騎士ならば槍を主に用い、剣は補助的な立場だがシャニーは完全に真逆となっている。せいぜい、投槍を使っている所しか見た事が無い。

「見習いの時に入った傭兵団の隊長が師匠なんだ。あたしの師匠すつごく剣の扱いが上手かったんだ」

どこに行っても自慢ができる大好きな師匠だった。言葉はきついし、稽古はもつと厳しかったが、よく目をかけてもらった。

悲しくて悲しくて涙がぼろぼろ溢れた別れの時が、まるでつい先日のようだ。

今頃どこの戦場で名を轟かせているのだろうか、ディークは。

「お前の振りをすつと見て弱点を探っていた。刺突剣というより刀を扱うような構えだな、相変わらず」

傭兵の力強い振りと剣を使った防護術に、剣士の鋭い一閃が融合したそれは、そのどちらにも属さない独特な剣技となっている。

本来天馬乗りなのであまり活用の際は無いはずなのだが、周りも天馬乗りばかりなので、騎士団の中では珍しく地上作戦を執れる貴重な人材とアルマには映っていた。

「いっつも師匠がライバルの剣士さんと斬り結んでたのを見てたからかな」

ライバルに褒められて気分よく話すシャニーには、そんなつもりは余り無いようだ。

自由さは歩兵時に比べたら制限されるが、天馬に乗りながらも剣のほうが得意だった。

傭兵団に槍を扱う者がいなかったし、何より剣の達人が二人も傍にいて実技を毎日のように見ていたのだから。

「すごかったよ、ホントー！」

自分のことより師匠を誉めて欲しいのか、あれこれ武勇伝を壊れた蓄音機のように喋りだした。

もうお腹いっぱいだとアルマが視線を外し、ようやくマシンガントークが終わったかと思っただが、まだ終わらせない様子。

「あ、そうだ！ それよりさ、弱点を教えてよ、弱点を」

ポンと手を打ったシャニーはアルマの視線のほうに回り込む。弱点なんて人に見てもらわないと絶対に分からない。アルマほどの実力者に見てもらえるなら大助かりだ。

「企業秘密だ」

でも、取り付く島もなくあっさりと返されてしまった。

「いっつお前が敵になるか分からんからな」

傭兵同士だから当たり前のことだ。

だが、アルマにはライバルがこの先、思わぬ障害になる可能性を察していた。長いものに巻かれていれば良いと言う性格では無い事は、イドウヴァアへの態度で分かる。

敵……その言葉を聞いたシャニーの表情を軽く鼻で笑うと、アルマはそのままだの暮れた街の闇夜へと消えていった。

## 第4話 総べて薙ぐ銀翼

太陽が山々の下に半分以上隠れ、薄暗くなつて来たエデツサ城下町の街灯にはもう明かりが灯り始めている。

その中を、青髪を揺らして白い息を風に棚引かせながらシャニーは駆けていた。剣の事になるとついつい時間を忘れてしまうが、今回はさすがにやってしまった。

焦る足が天馬くらい早く駆けられたらと願つてもどうしようもない。腕時計を何度も見下ろしながら、アルマから聞いた親友との集合場所に向かう。

ようやく見えてきた目印のバリガン像。そこにはウツデイの他にもう一人紫髪の女子がこちらに手を振っている。あれは間違いない。幼馴染のルシヤナだ。どうやら勤務を終えて合流して来たらしい。

安心した途端に足へどつと疲れが来て、仲間たちの許にたどり着くと膝へ手を突いてせえせえと肩で息を整える。

「ようやく来たね、シャニー」

「ごめんごめん、ようやく終わったよ。セラは？」

あちこち見渡すがセラの姿がない。また一人で買い物に行ったのかと周りの店を覗き込んでいると、ルシヤナから憐れむ声が聞こえてきた。

「あいつなら呼び出し喰らつて戻っていったよ」

（あちやー……、ごめんっ、セラ！）

休みの日のはずなのにこんな時間から呼び出したなんて。そんな貴重な時間を待ち時間で潰してしまつてシャニーは思わず顔をしかめた。今度菓子でも焼いて差し入れてやれば許してくれるだろうか。

その気持ちを察したのか、ルシヤナがウツデイの肩をポンと叩きながらシャニーの手を引く。これからがようやくに本番と言わんばかりの元気な声は、任務中よりもさらに威勢がいい。

「散々付き合つたんだし、今度は付き合ってもらうってウツデイが言つてたよ」

苦笑いからして、彼の言葉では無い事はすぐに分かる。

ルシヤナが仕事終わりに飛んできたのも、この後バーで酒をひっかけながら歓談する予定だったからに違いなかった。

酒は飲めない訳では無いが、ルシヤナがいるなら話は別だ。胃薬を持ってくるべきだったかと鞆を漁ったシャニーは、救いを求めるように薬屋へと飛び込んでいった。

ルシヤナの酒に付き合うには相当の覚悟が要るし、丸腰で挑んで勝てる相手ではない。



「ルシヤナ、今日はほどほどにしてくれよ」

意気揚々とバーの扉に手をかけるルシヤナへウツデイは先に釘を刺したつもりだが、酒飲みにはそれはまるで意味のない警告だ。

通い慣れた足取りについていく二人はそのままカウンターに座り、適当に頼んだホットドリンクで冷えた体を温める。

彼らの視線は横でさっそく始まった独り酒宴へおろおろと向けられていた。いつ無茶ぶりが飛んで来ないかと焦る心が二人に雑談を始めさせ、早くも守りの態勢。

「かあく、この一杯のために今日一日働いたようなものよ」

彼らが酒を頼むよりも先に、既にルシヤナは乾杯の練習で活きの良い飲みっぷりを披露している。

あまりにも慣れていてどこかおっさん臭い。呆れる二人の事などお構いなしに、彼女はもうお代わりを要求し始めた。

「あたしも何か飲もうかな。何にしようかな……」

何だか見ているだけで酔っぱらう気がしてシャニーはメニューを手を取った。とりあえずグラスを空けたままにしておくのは危険だ。

荒くれも多いこのバーへ女一人で入る気にはならないし、まして普段なら酒を飲む事なんて無い。今日は仲間がいるし、とりあえず優しいものでグラスを満たしておこうと品書きを眺める。

それを待っていたかのようにだった。すっと何かが滑ってきて思わず受け止めた。冷たい感触と透き通った心地の良い音。

「あ、あなたは！」

「シャニーを驚かせたのは、グラスに入っていた琥珀色の蒸留酒では無かった。」

「一流の戦士は一流の酒を知らねばならない……そいつはおごりだ」  
コート姿に帽子を深く被る黒づくめの男。顎は黒い髭がバルボに整えられ、濃い口元のしわをより一層深く見せている。眼差しは帽子に隠れて見えないが、こちらを向いて微笑んでいる事が分かる彼は、親し気にその深い声で小宴へと誘う。

それは以前、このバーで偶然居合わせて、剣の事や心構えを色々教えてくれた男だった。

「おつ、おじさん分かってるね。シャニー、その通りだよ。お酒知らない仕事できないぞ」

横からルシャナが囁し立ててくる。同じ十八部隊に所属して営業などした事の無い彼女が、一体どんな仕事をさせようと言うのか。間違ひなく飲みたいだけに決まっている。

でも、せっかくもらった酒を断ることもない。まだまだ初心者のシャニーはグラスから香る芳醇な香りにつられ、何も知らずにぐいつと行つて目をぱちくり。その濃さに思わず咽こんだ。

喉や腹が焼けるようで、いきなり強烈な酒を浴びせられて腹が驚いているのが伝わってくる。

一流はこんなものを普段から飲んでいると思うと、なかなかハードルが高く感じた。

「相棒を変えたのか？」

どつしりとシャニーの隣に座った男は、彼女の素人さうろうの様子を見て笑っていたが、その視線はすぐに立てかけてある剣に向かった。

会話もしない内から彼が見せた反応に、シャニーは未だ焼けついて噎れた声のまま驚きを口にする。

「え、何で分かるの？ 抜いてもいないのに」

「鞘が細くなっているのだからすぐ分かる」

今日鍛えてきたばかりの新しい相棒だ。すつと男に手渡すと、彼は静かに鞘から引き抜いた。バーの美しい琥珀色の光を湛える刀身に

じつと帽子の下の視線を映し、しばらくして良い音を立てて鞘にしま  
う。

「試行錯誤中と言う訳か」

前の剣も苦心の跡が見られたが、今回の剣は更に尖っている。敵を  
攻め倒すには良い型。

これを使いこなすには相当な技量と覚悟が必要だろうが、今の彼女  
にそれがあるとは思えない。

まだまだ、視界が狭い。いや、むしろ以前よりさらに狭まっている。  
壁にぶつかっている事がはつきり分かる剣だ。

「変えたつていうより、折れちゃったから新調したんだ」

恥ずかしくてあまり言いたくは無かったが、やはりこの男はかなり  
腕の立つ人なのか、見透かされているような気がして先に白状してお  
いた。

あの屈辱は今でも思い出すと悔しさと恐怖が蘇ってくる。最高の  
剣技を受けてもびくともしなかつたあの魔術師。しまいには剣を折  
られて為す術なく、無力を味わわせる為かと思うほどに木の幹へ打ち  
付けられ続けた。

無力感仲間たちも同じでルシヤナの声が沈む。

「あたり一面灰にするほどの魔術師と戦ってね。今でも生きた心地が  
しないよ」

槍もなく仮面の魔術師が落としたナイフだけで戦うにはあまりに  
も強大すぎた。

良く生き残れたものだトルシヤナが本当に言葉通りに思っている  
かは、つまみをガツガツ食べる姿からはあまり想像できない。

「思い出すよな。あの日もこうして飲んだ帰りだった」

楽しく飲んだ帰り道にあんな恐怖が待っていたなんて。しかも  
狙ってきたあの魔術師はどうにも要領を得ないことを言っていた。

アルマを狙っている事は間違いなさそうだが、自分たちへ向けてき  
た殺意は純粹な狂気だった。

「お前が酔いっぶれてて大変だったよ」

おまけに最初はそんな危機の中でもルシヤナは寝ていたわけで、だ

からほどほどにしろと言っているのに今日もペースが速い。警告を兼ねてウツデイが肘で小突く。

「本当に、みんな無事で良かったよ、本当に」

仲間たちに目をやりシャニーは安堵を漏らす。

あの時以上にエリミーヌに感謝したことは無かった。傷つく中でようやく与えた大技での一撃。全力で戦ったはずだった。渾身を打ち付けたはずなのに。

「でも……倒せなかった」

それを目の前でいとも簡単に回復された時には絶望せずにはおれなかった。

自分に倒す力がなかったから、仲間たちまで殺されかけた。

八英雄と称された武勲、騎士団一と言われた剣術。そんなものは見せかけで、仲間を守れない事実を叩きつけられた。……無力さと屈辱にシャニーは無意識に唇を噛んでスカートを握りしめていた。

皆を守れない剣など……一体何の価値があると言うのか。

——無価値

木っ端みじんにされた剣と同じように、剣使いとしての矜持まで打ち砕かれた。

彼女の気持ちを含んだのか、男はシャニーを俯かせたままグラスで小さく弧を描く。しばらく氷で奏でながら少しずつ蒸留酒を飲んでいたが、ふと思いついたように彼女に問いかけた。

「君は……使ったようだな。持っているものを」

「え……？」

一体何の事かと男を見上げたら視線がぶつかった。彼はじつとシャニーを覗いていた。帽子の奥から青い瞳をじつと捉え、その向こうにある何かを見つめるように。

シャニーは見つめられてなぜか動けないまま紳士を見上げる。

(なんか……怖い……)

湧きあがるのは恐怖。そのままこの冷たい眼差しに吸い寄せられ、一閃されてしまうのではないかと思うほど鋭い視線に串刺しにされている。

「感じる。前に会った時はかすかに感じただけだったが、今日はあの時より強く感じる」

以前会った時にも感じたシャニーの特異なエーギルの流れ。人間のものの中に、明らかに違う波形の強いものがある。

今日は含む程度ではなく明らかに流れており、間違いなく使つてまだそう時間が経っていないことを示していた。

なるほど、ウエスカーは確かにこの戦乙女の剣にきつかけを与えたようだ。

「その様子だと、使つたと言うより、溢れ出した感じか」

しかし、期待できるものでも無さそうだ。自在に操っている訳では無く、むしろ操られただけである事は驚きと困惑をありあり顔に映す表情から分かる。

どうやら存在自体には気づいているらしく、居ても立つても居られない感じで彼女の方から問うてきた。

「おじさん、何で分かるの？ 分かるなら教えて欲しい、あれは何だったのか」

あの仮面の魔術師に殺されかけた時、体の奥から湧き上がってきた得体の知れないもの。

内側から火でも着いたかのように熱く、だが何故か心地良ささえ覚えた。あの感覚が全身へ燃え広がるように行き渡ると、そこからは体が勝手に魔術師に突っ込んで剣を振り回していたのだ。

自分のものであって、どこか外から自分を眺めているような意識。自分なのに自分を止められない恐怖。体は激痛に悲鳴を上げているのに、それすら心地よく思えてくる破壊衝動。

「ああなっちゃうと止められないんだ。体が動かなくなるまで」

口にするだけでおぞましい。今でも思い出すと体が震えてくる。

拒絶がはつきりと声にも滲むが、男の答えはユーノと同じだった。

「君の持つ力であり……誰でもない君自身だ。上手く付き合つて行くしか無いだろう」

意志を持たない力ほど危険なものはない。それが分かっているのか、男から返ってきた答えにシャニーはまた下を向いてしまった。魔



術師の魔法かと思ったたらまさか自分が要因だなんて。姉の言った事は本当だったのだろうか。初代団長も使ったという、このよく分からないモノ。

「……抑え込む方法を知りたい」

恐怖以外の何物でもなかった。もし、あの状態が親友に向かってしまったら……胸に当てる手はぎりぎり握り締められていく。ところが、紳士は思わぬことを口にした。

「だが、一方で君はこうも考えている。あの力を最初から使えていれば、負けはしなかったと」

胸を貫かれた気がして思わず顔を上げる。何故この男は自分の心の中を知っているのか。

魔術師に倒され、目覚めてからずっと心の中に抱いていた事だ。あの力さえ我がものと出来れば、誰にでも勝てる気がした。それこそ、師匠のデイークにだって。

だけど小さく首を振った。強い剣だが、あんな恐ろしい剣は自分ではない。自分が自分でなくなってしまう恐怖は忘れられない。

「……って、何であたしがやられた事を知ってるの?!」

そこまで考えた時、シャニーは目を点にした。あの戦いは極秘事項として天馬騎士団内で処理されたはずだ。

外部に漏れだすことが無いはずの事を知り、そして自分の敗北まで知っているこの男が何者なのか。それに男は明確な回答は残さなかった。

「大地が灰白に変わる程の閃電……情報が命の傭兵が知らなければ飯を食えないだろう」

グラスに残った蒸留酒をグイッと一気に飲み干すと、カウンターにまたシャニーたちの分を支払っても釣りが出るくらいの金貨を放ってバーを出て行った。

その背を追う気持ちにはなれず、シャニーはまた自分の胸に手を置いていた。

「あの感じ……あの時と同じだった」

彼女はあの時を思い出していた。忘れもしない、死が隣で囁いたあ

の時を。

幼いころ、山でウツデイと遊んでいるときに訪れた危機。あの時も全身が燃え上がり、気づいたら目の前には死体が転がっていた。血まみれの自分と、血まみれの死体と……。

(一体あたしの中に何がいるっていうの……?)

知ってはいけない事を、思い出せばならない事を思い出した気がして、その後何も喉を通らなかつた。

## 第5話 親友からの手紙Ⅱ

初心者にはあまりに強烈だった蒸留酒も、数日経ってようやく体から抜けてきたらしい。

翌日の午前中は世界が回っていてこの世の終わりかと天を仰いだら、そのまま頭が地面にくっついて動けなくなった。それでもレイサには心配なんてしてもらえず、静かで良いぐらいに思われていたようにさえ感じる。

しばらく真っ蒼で死にそうな顔をしていた彼女も、今日は朝陽に向かって大きく背伸びしていつもの明るさが戻ってきていた。

ふいに羽音が聞こえ、その音だけでパッとシャニーの顔には笑顔が咲いた。

「シャニー、手紙だよ」

音を追って見上げてみれば、やっぱりそこには朝から忙しそうに天馬にまたがって飛んできた郵便配達係の姿が見えてくる。

ここ最近、毎朝顔を合わせる間柄となり、何だか姉妹にでもなったかのようなのだ。

「ほぼ毎日だね、最近」

相手もシャニーを探すことは日課となっているから、大分スムーズに彼女の出没パターンを読めるようになっていた。

手紙を渡すと満面の笑みを浮かべるあたり、手紙の内容が何なのかはだいたい分かる。

「またロイ様だ、うふふ、今日は何かかな」

いつも面倒ごとを持ってくるレイサと違って、あの騎士は幸せを運んでくる。朝から彼女に会えるとはなんて幸せなのだろう。

受け取った手紙はその紙質からすぐにロイからのものと分かって、風に唄いスキップが始まる。

今日も手に伝わる封筒の感触はなかなか厚く、思わず頬ずりしてしまう。

一体何が書いてあるのか、朝が始まる前から昼休みが楽しみ……。そんな気持ちに横槍を入れるかの様に、頭に何か固い感覚がぶつかっ

た。

「よそ事は家に帰ってから考えな」

また飛んできた。何か、硬くて軽いものがコツコツと頭に当たって眉をひそめながら頭を手で隠す。

あざ笑うようにまた一個飛んできてそちらを見上げてみた。レイサが木の上から見下ろしており、何かを投げつけてきたかと思うと今度は顔に当たって飛んでいく。

地面に転がった物へ視線を下ろすとどんぐりだった。思わず拾い上げてレイサに投げ返し、口を尖らせ歩き出す。

「なにさ、いっつも寝てるくせに。ちよつとくらい……」

また朝からおもちゃにされそうな流れ。ぶつぶつと捨て台詞を吐きながらそそくさとその場を後にしようとしたシャニーだったが、次の瞬間周りも、そして彼女も顔を真っ青にしていた。

レイサが彼女の首に短剣を突き付けていたからだ。初めて覚える感触はシャニーを戦慄させるには十分すぎて固まっている。

「普段のあんたなら、こんな事にならないよね？」

入団してきた当日からできたことだ。城の外ではどうだか知らないが、少なくとも天馬騎士団の騎士として動いている時は、シャニーの首に短剣が通った事は無い。毎回剣で弾かれてきた。

それが今日はどうだ。剣に手がかかる事も無く、今も大事に持っているのは手紙だ。それどころか、帯剣すらしていない。

「死ぬよ。あんた」

冷たい口調が更に首へ剣を押し付けるので、思わず背筋がピンとして亀のように首が伸びる。

蒼褪めた顔でうんうんと頷いたシャニーは、半ば強制的だがようやくにスイッチを入れる。鞆へ大事そうに手紙をしまい、軽く体を動かして剣を取ると見回りへと出かけて行った。



幸いその日は見回り中に賊と遭遇する事は無く、心に余裕がある午前となった。たまにはこういう日があってもいい。

十八部隊の仲間たちに声をかけて異常が無いことを確かめ、普段で  
きない稽古や剣技開発の時間に充てているとあつという間に昼休憩  
の時間。

同じ十八部隊所属の幼馴染ルシャナと一緒に食堂へ向かい、窓辺の  
明るい席をいつも通り陣取ると、しばらくしてセラやウツディもやつ  
てきた。

彼は相変わらず騎士団内ではアイドルらしく、あちこちから黄色い  
声が飛んでいる。

「ねえねえ、この前の勝負アクセの効果はどうだった？」

四人揃って昼食を取り始めるや否や、主役が来たと言わんばかりに  
シャニーが振ってきた話に思わずセラが咽る。

こんな皆がいるところで堂々と。彼女の高い声はご機嫌でさらに  
トーンが高く、騒がしい食堂でも声が良く通るのに。

「だから違うって」

明らかにからかいに来ている彼女の頭を軽く小突くと、その手が何  
か触れた。

「それよりシャニー、あんたがヘアピン使うなんて珍しいね」

見るとそこにはヘアピンがあり、どこか違和感を覚える。

無理もない。シャニーは幼い頃からずっとシヨートヘアで、ヘアピ  
ンをしている所など見た事が無かった。

ちよつとでも伸びると髪を乾かすのが面倒なのか、すぐにいつもの  
長さに切り揃えていた。まじまじ見るとやっぱり自分の知る輪郭と  
ぴったり来なくて、どうにも落ち着かない。

団長選出戦あたりからドタバタし始めて、8月は半分寝ていたから  
髪を切る暇が無かったのだろうか。

そんなセラの予想に反してシャニーの口から返ってきた答えは周  
りの目を点にさせた。

「うん、ちよつと髪を伸ばしてみようかなって思ってたさ」

三人が思わず顔を見合わせる。どの顔もお互いに自分の驚きと疑  
念を確かめ合うようにして頷き、改めてシャニーへ視線を移す。

今までずつとあの髪型だったのに、彼女から髪を伸ばすなんてセリ

フを聞くことになろうとは。

「ねえウツデイ」

そんな三人に彼女が続けた質問は更に彼らを困惑させる。

「あたしってどんな髪型がいいかな」

手鏡を取り出して髪に手をやる様子は満更冗談とは違うようだ。

話を振られたほうは困ってしまう。ショートヘア以外見たことがないので何が似合うかと言われてもイメージできない。

いくら毎日いろいろな女性騎士と顔を合わせているとは言え、そんな目で見えた事は無かったから、ウツデイにとつてのボキヤブラリーは周りの三人ぐらい。

とつさにルシヤナが彼の服を引っ張って周りを見るように視線で指示する。たくさんいる騎士たちの髪型は皆バラバラだ。

「うーん。ポニーテールとか？ あんまロングは雰囲気合わない気がする」

よく頑張ったとルシヤナに足をポンポンとタッチされた。

割と無難な答えだったからか、シヤニーもヘアピンをとって髪を結おうとしてみるがまだ短くて全然だ。この時ばかりは何も考えずにいつも通り髪を切ってきた事を後悔した。

「オトナじゃないとぱつとしないよね、ロングはさ」

「どういう意味よー」

おまけにルシヤナからきつい一言をもらい、頬を膨らませながらジト目で幼馴染を睨む。

つつい笑いってしまったウツデイにも視線が突っ込んできた。それ以上を思わず飲み込んで首を横に振ると、不思議にも今日はお咎めなし。

ヘアピンを付け直した彼女は、さつきと食器を片付けると食堂を後にする。

最近ずっと続いているので女二人は彼女の行く先は分かっていた。「髪型の好みを聞いてくるなんて、あいつあんたの気を引こうとしてるんじゃないの？」

面白おかしくルシヤナがウツデイの肩をバンバン叩いてちよつか

いをかけ、ウツデイも満更でもない表情をするものだからセラも笑ってしまった。

内心は二人とも彼への同情を注いでいたのだが。

「……」

そんな明るい笑い声に包まれるテーブル席のすぐ近くでは、シャニーが消えた出口のほうを今も睨むように見つめるアルマの姿があった。



夏の終わりにかけた9月初旬。

今日も空は高く、そしてどこまでも青くて手紙を読むには絶好の天気だ。

城の屋上まで青髪を揺らしながら駆け上がったシャニーは、日当たりの良い場所に座って壁にもたれかかると、早速ポーチに入れていた手紙を取り出して封を切る。

彼の顔が浮かぶようで、この瞬間が毎日最高に興奮する瞬間だ。

——最近諸侯との会合で衝突する事も少なくなくて、悩んだり疲れる事も多いんだ。でも、こうやって君から来る手紙を読んでいると自然と元気が出てくるよ

思わず手紙に顔を突っ込んでもう一度同じ場所を読み返す。

すっかり文通相手となったロイからの手紙には、珍しく弱音とも取れるような言葉が紡がれている。いつもまつすぐ前を見据えて凛々しいあの彼が、である。

その後ろへ添えられていた言葉に思わず口元が優しくなる。

「うんうん、あたしも元気出る。落ち込まずにいられるのはロイ様のおかげだよ」

まるで目の前に相手がいるかのように感謝を口にする。

手紙で彼を元気づけられるならいくらでも書いてあげたい。自然と湧き上がる気持ちは彼も同じなのだろうか？

最近シャニーにとっても辛い事が続いていたので、ロイからの手紙はいつでも励みになった。

最初は一枚だけだったが、お互いに聞きたい事を聞き、聞かれた事に返すうち便箋は十枚くらい入っている。

「ロイ様も疲れてるんだなあ。何かしてあげられると好いんだけどな」

それを半分まで読み終わると、シャニーは南の空を見つめてぽつりと漏らした。

自分はただの傭兵、相手は世界の英雄。置かれている立場も、背負っているものもまるで違う、雲の上にいるような別世界の人。

だけど、彼が手紙でこうして自分だけに教えてくれる弱音を知ってしまうと、何も出来ない事をもどかしく感じる。

イリアから遙か南のリキアにいる彼の為に、一体何をしてあげられるだろう……想いを巡らせながら言葉を視線でそつとなぞっていく。

——僕もパスタは好きだ。特に魚介を使ったものは最高だね。休み、取れそうかい？ 美味しい行きつけがあるから招待するよ

彼と好きなものが一緒。何か嬉しい。おまけに招待してくれると言うのだから、もはや夢心地に手紙をぎゅつと抱き寄せて満面の笑みを浮かべた。

だが、そこまで来ても、手紙の中にもある言葉が彼女を現実へと引き戻す。

「はあ……会いたいなあ、ロイ様」

カレンダーを取り出して祈るように見つめてぽつきり首を折った。手紙の封を切る事が幸せの日課なら、カレンダーを見下ろす瞬間は憂鬱な日課だ。

でも、もう我慢できない。彼女は立ち上がると階段を駆け下りて行った。

◆◆  
「レイサさん。これ、どう言う事ですか？」

翌日、テイトが十八部隊を訪れていた。団長直々の視察かと新人たちはざわざわし始める。

稽古を普段以上に励む者、わざとレイサの近くで声を張り上げる



者、見回りに出発する者。とにかく慌たましい。

だが、テイトは彼らの様子をゆっくり眺める事は無く、今日も木の上で居眠りを決め込むレイサの許へ行って手にした紙を突き出した。「どう言う事って」

団長が来たからにはレイサもタヌキを決め込む訳にも行かず飛び降りてきた。

「あいつが休みたいって言うから好きにしたらって」

明らかに、団長の頭に角が生えたのが分かった。眉が吊った顔がレイサの答えへ食い気味に妹を呼ぶ。

「あの子を呼んでください」

こういうところを部隊長として止めて欲しいのだが、どうにも放任主義が過ぎる。本当は団長と新人という立場なのだから、部隊を飛び越えて直接指導はしたくない。

だがテイトの顔には呆れがありあり滲んでおり、我慢を超えている事はレイサもすぐ察した。どうやら庇ってはやれそうにない。

「何をバカなことを言っているの」

数分後、テイトの叱り声が木陰から響いてきた。その声は稽古をしていた十八部隊の仲間たちの許にもはつきりと聞こえて、振り向いてそちらを見ている。

叱られ慣れているのかシャニーは小さくなる事も無く、頭に手をやって苦笑いしながら何とか宥めようとしている様に見える。

「貴女新人でしょ？ 一週間の長期休暇って一体どう言うつもりなの？」

ベテランに対して功労を称えて休みを与えたり、家族に不幸があったりとかやむを得ない時は誰もが長期で休むが、シャニーにそんな事が無いのは分かっている。

「そこをなんとか！」

それでも頭を下げ、手を合わせて食い下がってくる妹に彼女はため息をつくとも最初と同じことを繰り返した。

違うのは、先ほどより眉の角度が明らかにきつくなっている事だ

け。

「貴女ね、正当な理由も無く認められる訳ないでしょ？ 理由を言いなさい、理由を」

妹にだつて色々とあるから、ちゃんとした理由があれば否認することはない。筋の通つた理由があれば、こちらから聞かずとも妹は主張してくるはずだ。

だが、やつぱりシャニーからは「それは……」とだけしか返つてこず、逸らした目線が下を向いているところからしても、ロクな理由では無い事が伝わってくる。

「大方、遊びに行きたいって言うんでしょ？」

ドキツとして髪の毛が逆立つ。その反応で確信を得たテイトは一段と大きなため息をついて見せた。

彼女にとつては、妹の性格で半年よく頑張つたと思いたいくらい予想通りで、城壁に申請用紙を押し当ててペンを取り出し、その場でさらさら短く記すと妹の頭に押し付ける。

「今年の新人は変わり者が多いって専らなのだからしつかりしてちようだい」

キツと向きを変えるとすたすたと歩いて行つてしまう姉に、シャニーはがっかりしながら頭上の申請用紙を手に取り中を開く。

——否認

でかでかと書かれた赤文字が怒りを伝えてくるようで、逃げ場の無い現実にはつきりと首を折つた。

「はは……やつぱりそうだよね。でも、今もイリアのみんなは苦しんでるんだ。遊んでる時間なんてないよね」

姉に否認される事は分かっていた。姉がこの十八部隊に自分をわざわざ置いている理由は自分なりに飲み込んでいるつもりだ。

姉に憧れて飛び込んだこの天馬騎士団の世界。外回り営業は出来ないままだが、自分なりにイリアの発展に尽くそうとやってきた矢先。

ちよつと浮かれて小躍りし過ぎていたと自戒し、見回りに出かけようとした時だ。

「ふん、団長も自分を柵に上げて良く言うもんだ」

意外な人物が肩を持つてくれて驚いた。そこにいたのはアルマ。

一体いつからいてどこから話を聞いていたのかは分からないが、「だよねー」とシャニーは相槌を打って姉の去ったほうに舌を出してやった。

だが、相手はやっぱりアルマ。

「男に現を抜かしてるんなら、お前も一緒に辞めてしまえよ」

直後に飛んできた言葉で頭がぐわんぐわんと殴られたようになってた。

ロイのことはルシヤナたちに少し喋っただけで、彼女たちだっそれ以上は知らないはずだし、アルマに話した事など一度も無いのに。

なぜバレたのかと一瞬表情が固まっていたシャニーだったが、すぐに目を三角にして切り返した。

「なーにさー！好きな相手がいらないからってさ」

何故同期のしかもライバルに説教じみたことを言われなければならないのか。おまけに一度肩を持ちかけたくせに、

売られたケンカに黙っていられずについツンとしてしまうが、

「……って、コラー」直後に紅潮していた。

今更取り繕っても遅い。アルマはふつと鼻であしらうと、切り返して踏み込む事も無く言いた事だけ言っただけのまま去って行った。

「……あれ？柵に上げてって……お姉ちゃんか?！」

一人取り残されたシャニーは、持っていた休暇申請書にでかでか押してある否認の文字を見て、アルマの言い草を思い出して違和感を覚えた。

テイトも誰かに会いに行こうとしているのだろうか。

生真面目な姉に限ってそんな事は無いと、彼女はそれ以上の詮索はせずにもいつも通り見回りに出ることにした。

## 第6話 フェリーズからの依頼

——9月17日 AM7:30 カルラエ城 団長室

本当は朝を色々と考える時間にしたいの、びっしり埋まったスケジュールはそれを許してはくれない。

仕方ない、今日は自分でこの時間を埋めてしまったのだから。

机で承認処理を進めていたテイトはふと腕時計に目を落とす。後三十分。結局、前回の部隊長会議はイドウヴァ不在のまままで進めてしまったが、毎回それで通す訳にはいかない。

今回は朝一番の時間を押さえ、事前に声もかけておいた。

ペンを置くと、念には念を入れてイドウヴァに再度声を掛けようと部屋を出た。左右を見渡すと、副将のソランがツカツカ向こうからやって来る。丁度良い。肩を並べて歩き出す。

「ソラン、今日はイドウヴァさんも出席するのよね」

彼女はよく働いてくれる腹心だ。副将らしくとても気が利いて、指示していない部分までしつかりこなしてくれる。

だが、時にはやりすぎている事もしばしば。あまり波風を立てたくないテイトとは対照的に、ソランは白黒はつきりつけないと気が済まない。

「ええ。結局、尻尾を掴めずじまいだわ」

今回も彼女の答えにテイトは思わずぎょつとした。

「あなた、本当にあの人に諜報部員をつけているの?!」

——声が大きいい!

ソランに口へ指を立てられ、テイトは周りを見渡しながら言葉を飲み込んだ。止めろと指示したはずなのに、ソランはどうやら進めてしまっているらしい。

確固たる証拠も無くそんな事していると知れたら、それこそ問題が大きくなって相手のカードを増やしてしまうのに。

ソランはそう考えてはいなかった。地表に顔を出す前にその根を切るべき。足取りが一層早くなる。

「そのことで一つ、耳に入れて貰わないといけない事があるのよ、団

長」

小声で耳打ちするように語りかけたソランは、周りの目を嫌ってテイトを角の空き部屋へと連れ込む。

呆然とするテイトをよそにしつかりと鍵をかけると、カーテン越しに窓の外をのぞき、机を駆け上がって天井裏まで覗き込んでいる。

誰もいない事をようやく確認し終わると、窓側までテイトを連れて行き耳打ちを始めた。

「……つけさせていた諜報部員がやられたのよ」

まるで金縛りにでも遭ったかの様に部屋中の時が凍り付く。

彼女の言葉を理解さえ出来ないくらい、テイトの顔から表情を吹き飛ばす。ソランの目を見つめていなければ、そのまま卒倒してしまいそうな程の衝撃をその驚きは浴びせてきた。

「やられたって?!」

しばらく言葉が出て来なかったが、やっと出た言葉は痞えを突き抜けるかの様な驚愕だった。

「一体、誰に?」

諜報部と言えばかなりの手練れを擁している集団で、レイサもかつて所属した部隊だ。そんな闇の仕事人が葬られたとなれば、相手はその更の上にいくとんでもない化け物と言う事になる。

大手の騎士団である天馬騎士団の諜報部を軽く凌駕する人物……テイトが考えを巡らせていると、ソランは更に声を絞ってテイトの耳に囁く。

『赫竜』らしい」

「ソルバーンが?! 誰が雇ったって言うのよ」

『赫竜』、それは銀狼の旅団を率いる団長ソルバーンの通り名。

殺しが許される地と言うだけでイリアに根を下ろしているナバタ出身の狂人。その手の話なら何でも引き受けて、赫灼なる怒髪を業火の如く揺らめかせながら荒々しく標的を喰らい尽くすのでそう呼ばれている。

依頼が無くとも強い相手なら誰それ構わず襲う男だが、彼ならば自発的に諜報部員を襲ったりはしないだろう。彼にとってはそのレベ

ルでは喰い足りない相手のはずだからだ。

となれば、誰かから受けた仕事を果たしたとしか考えられない。

「あれが言う訳ない。あの人が直接雇ってるのか、夜な夜な会いに行ってる相手が雇ってるのか。……気まぐれに喰ったのか、全然分らないよ『赫竜』のする事はさ」

妙な方言で飄々と喋っていたかと思うと、突然鬼の様な形相で剛腕を振り回しては魔導書も無く炎を召喚し、戦神の如く標的を叩き潰す。……まるで行動が読めない男だ。

諜報部は、イドウヴァが最近頻繁にエデツサへ向かい、夜の貴族街で誰かと密会していると報告してきたが、その先を調べようとしたらこれだ。

もしイドウヴァが用心棒に雇っているとなれば……二人の間には良くない重い緊張が膨らんだが、やはり確証はない。

情報としてだけ受け取ったテイトは部屋を出て、第一会議室へ続く直線廊下を歩き出す。彼女の登場を待っていたかの様に、後ろにどんどんと他部隊の部隊長が追従し、団長を先頭にした集団が歩いていく様は荘厳だ。

「イドウヴァさん、今日は部隊長会議に出席してもらえますよね？」

この前の十八部隊配属の件も少しご意見を聞いておきたいですし」

その一団の中にはイドウヴァの姿も見え、安心したテイトは彼女に声をかけた。もちろんと頷いたイドウヴァの顔にはどこか笑みがあり、テイトは内心首を傾げた。朝は不機嫌な事も多い彼女にしては珍しい。

だが、これなら会議はスムーズに進んでくれるかもしれない。そう期待したテイトに冷や水を浴びせるかの様にイドウヴァが返してきた。

「ええ。今日は私も議題に挙げたいものがありますから」

その集団にアルマとシャニーが出くわした。

アルマは仕送りを、シャニーはロイへの返事を郵便に出してきた帰り。彼女たちはごく自然に廊下の隅に寄って静かに頭を下げる。

天馬騎士団の幹部たち、新人にとっては雲の上の存在が廊下の真ん

中を足並を揃えて歩いていく。

「……」

頭を下げながらもアルマは前髪越しに団長の姿を見つめていた。これが団長の力。全てを従え、全てを決める力を持つ者。

最も高く立派な椅子に座っている女性の胸に輝く金の勲章をじつと見つめる。あれを手に入れるには、一体どれだけのハードルを越える必要があるのだろうか。

その後ろを歩く銀の勲章に甘んじる女は、その役職と十何年付き合っているのだ。この、隣で一緒に頭を下げる青髪の母親と団長の座を争って以来、ずっと。

「ふう。行っちゃった、行っちゃった。かつこいいねー、あれ」

団長たちが会議室へと消えて行くと、シャニーは窮屈に丸められた翼を広げる様にうんと背伸びをして気持ちよさそうな声を上げだした。

「まるで他人事だな……」

その様子へアルマは呆れたような、残念そうな眼差しを向ける。この女もその気になれば狙えるだけの實力は持っているはずなのに。

ライバルが少ない事は都合だが、實力を認めているからこそ自分と同じ場所に立って欲しかった。

最近は何を言われたのか、より一層に目を向ける先が変わって来たし、ここにきて男にまで現を抜かしているのは手紙の頻度や髪を見ても瞭然だ。

暢気に鼻歌を歌う姿には憤りすら覚えた。



一方、会議室では早速イドウヴァが円卓を囲む部隊長達へ説明を始めようと立ち上がり、部下に資料を配らせていた。

快く会議に参加すると思っただらこれだ。おかげで十八部隊の所属先についての確認が後回しにされてしまった。

「皆さんに資料は行き届いたでしょうか？ 記載の通り、フェリーズ伯爵より依頼が来ております」

——イリア開拓事業の強化とエミリーヌ教団との連携について  
小綺麗にまとめられた資料の表紙にはそう記されている。

フェリーズ・ヴアイス・ノールレツジは聖職者であり、大陸で多くの信者を擁するエリミーヌ教において枢機卿の地位にある、ノールレツジ伯爵家の当主だ。

彼はイリア内で聖天騎士団という騎士団を率いる筆頭司祭でもあり、開拓事業を推し進めている事で有名であった。

フェリーズ……その名前を聞いてテイトは苦い記憶が蘇って一瞬苦虫を噛み潰した様に口元が歪んだ。

「フェリーズ卿からはいつこの話があったのですか？」

資料には開拓事業への応援要請が記されていた。

騎士団間会議でうまく言いくるめられた記憶が蘇る。あの場で事故の真相を追及し切れなかった開拓事業の支援をまさか要求してくるとは。

資料を読む限り、開拓区での警備らしい。

なぜ、フェリーズが、なぜ国内案件をイドウヴァが……テイトははっと思いだした。以前、イドウヴァとフェリーズの密会に遭遇したあの時を。

あの時は何をしているのか問うても濁されたが、この話だったのだろうか。

「ええ、大分前から話はいただいていました。昔からあの方とはよくお話をするのでね」

彼女の言っている事とも整合性は取れている。

知らないうちに疑い、矛盾を探している自分を戒めていると、部長の一人が資料を放り投げ、吐き捨てるような言葉を口にした。テイト派の第三部隊の部長だ。

「国内案件では金の場所が動くだけだ。聖天騎士団の使い走りとは、卿も随分な事を依頼なさる」

要は、自分の所だけでは手に負えないから援助してくれと言っているのだ。無償では無いにしろ、国内の騎士団間で金を動かしたところで何の意味もない。



慈善活動は宗教の中だけでやれと早々に話から降り、手で払って視界を議場から外す。

外国との契約をみすみす逃してまで、他騎士団の仕事に付き合うなどお人好しを超えている。それをあろうことか、外征至上主義のイドウヴァが言っているから余計に胡散臭い。

「彼らとの協力態勢を強化する事で、エトルリアとの関係をより強固に出来ると考えます」

だが、イドウヴァの狙いはこちらだった。

エトルリアはエミリーヌ教の総本山がある場所。宗教でエトルリアと結ばれた聖天騎士団に恩を売っておけば後々まで有利に働く。

ある意味先行投資である。エトルリアはベルンと並ぶ大国であり、イリアの騎士団にとっては最大の顧客だ。

「エトルリアは第一部隊が主幹と思われませんが団長、いかがお考えでしょうか？」

部隊長会議にわざわざかけたのはこれが理由だ。

それぞれの部隊は担当地域が決まっている。テイト率いる第一部隊はエトルリア、イドウヴァ率いる第二部隊はリキアと言った具合。

いくらエトルリアとの関係が大事であっても、白と黒の騎士団と揶揄される聖天騎士団の開拓事業は、信者を送り込んで奴隷のように働かせていると言った妙な噂も多い。

渦中のイドウヴァが持ってきた案件なので、テイトも本心は断りたかった。

「良い考えだと思えます。イリア内の発展にも繋がるし、エトルリアとの関係もありますし」

頷くしかなかった。どれもこれも噂の域だ。それに対して、実行の妨げとなるようなデメリットはまるで無い。

何よりも、外征至上・国内蔑視の風潮はこの短い間でも議場に滲み出ているから、それを団長自ら払いたかった。

「ありがとうございます。イドウヴァさん」

イリアの為、テイトはぐつと疑心を飲み込んでイドウヴァに手を差し出した。

「いえいえ、エトルリアは我々の大きな契約相手。第一部隊だけに押し付けて良い案件とは私も思っていないですよ」

—— お前たちだけに任せてなどおれない

それが本心だろうと、イドウヴァ派の部隊長たちは彼女のおべんちやらに内心拍手していた。

テイトが団長に就任する前は先代の団長シグーネが担当していたから、イドウヴァにとってエトルリアは未開拓の地。何が何でも顔を広げておきたいに違いない。

「しかし、仮に依頼を受けるとしてどの部隊で対処するのですか、団長？」

先程さっさとさじを投げた第三部隊の部隊長が、眉間にしわを寄せながらありあり不満を含んだ声を団長に投げつけた。

依頼の開始時期は十一月と記されているが、この辺りから年末までは正規兵も休みに入る者が増える関係で傭兵にとっては書き入れ時だ。

「私の部隊もすでに契約があり、これだけの期間を割く余裕は無いのですが」

誰かが口火を切るのを待っていたかの様だ。協力自体は決定したが、どの部隊も本心では動きたくはなかった。協力した事実さえ作ることができれば良い、金にも評価にもならない仕事でしかないからだ。

あちこちの部隊長から、うちは外してくれと言わんばかりの陳情が飛び交う。

「ええ……。どの部隊もリソースに余裕が無いのですよね。もう少し検討を進めたほうが良いですね」

それはテイトも分かっており、できれば断りたい彼女にとって彼らの反応は好都合だった。どうにも、イドウヴァとフェリーズの関係が気になる。

ここで言う検討とは、あまりポジティブな内容ではない。次回までの間でうやむやにしておこうと言う側面を持つ言葉。

「それにはご心配に及びません」

しかし、この機を逃すものかとイドウヴァは用意してきたカードを切る。

「この案件は十八部隊で対応していただければ良いかと」

(その手で来たか)

思わずテイトの顔が渋くなる。彼女たちにとってはまさに、丁度良い押し付け先と映ったのに違いない。

「そうですね、国内案件だし他騎士団へのあいさつ代わりにもなる。団長、この意見賛成です」

以前から外回りをさせていない彼女たちを早く配属して稼がせろと言う意見が強かった。

警備なら経験も必要はない。自分たちが忙しく世界を回っているときに遊んでいる連中がいるなら宛がおうという意見は自然だ。

イドウヴァに追従して手を挙げる第五部隊長マリツサの賛成票に、次々他の部隊長達も続く。

功績にならない国内向けの仕事は出来るだけ放り出したい。そんな思惑が透けて見える。

「レイサさん、この件お願いしても良いですか？」

正論を切って捨てるほどの強権を振るえる場面でもなく、思わずレイサに話を振ってしまった。

彼女なら断ってくれるかもしれない。そんな一縷の望みをかけたテイトだったが、頭の後ろで手を組んでだらつと座っていたレイサからは、あっさりゴーサインが出てしまった。

「ああ、良いんじゃないの。うちの副将も回復してないしね、色々」と民を守り、支援を率先する事こそ十八部隊が、副将たちが自分たちで選んだ道。その考えに合致するイリアの開拓ならば、彼らも喜んで引き受けるだろうとレイサは思った。

「ありがとうございます。では……」

最難関と思われた箇所が拍子抜けなほど楽にクリアできた安堵がイドウヴァの顔に現れるが、レイサの眼光が鋭くその顔を捉える。

「ただし、受けるのはあくまで警備だよ。開拓事業には手を出させないからそのつもりで」

噂なんかではない。レイサは暇さえあれば飛び回って情報を仕入れているから、それが事実であることを知っていた。

フェリーズに宗教と言う鎖で繋がれ呼び込まれた者は皆、開拓区や鉱山に駆り出され劣悪な環境で働かされる。自分の部下をそんな場所に送り込む訳には行かなかった。

大方、他の部隊長だつてある程度の事は知っているはずだろうに。

「しかしですね、フェリーズ伯爵が主に求めてきているのは——」

「あの子達は別に遊ばせている訳じゃない。騎士の研修に強制労働は必要無いだろ」

食い下がるイドウヴァに被せるように反論したレイサは、それ以上語ることは無いと言いたげに席を立つと窓のほうへ歩いていき、再びイドウヴァを睥睨する。

「警備だけだ。単なる人手不足の労働力補充つて言うなら十八部隊の回答は断固、拒否だよ」

—— バカにするな

しばらく睨みあつていたが、レイサは目線を切ると窓から飛び降りて消えた。

とりあえず仕事自体は十八部隊の担当に決まった事で部隊長たちの興味は次の議題へと移つていくが、イドウヴァだけは腹の虫が収まらない。

展開された資料の後ろに小さく書いてある事、レイサが言い当てたそれこそが本題だった。



新月の夜。ぞつとする程に静まり返ったイリアの夜でも、ここエデッサの城下町はそれに抗う様に大小様々な明かりを灯して店たちが営みを続けている。

その中にある一つのレストランの中で、静かに、そして深々と頭を下げる者がいた。

「申し訳ない。フェリーズ枢機卿。お約束をお守りする事叶わず」

長い紺の髪を垂らして何度も侘びの言葉を繰り返しているのはイ

ドウヴァだった。

聖天騎士団への増援自体は約束通り進める事が出来たが、肝心な目玉はレイサによって土壇場でひっくり返されてしまった。

あの女がすんなり頷くとは思っていなかったが、まさか勘づくとは。

「いえいえ。とんでもない」

頭を下げられていた男性は白金色の法衣の中から柔和な笑みを浮かべて、それを止めさせようと手を差し伸べる。

やや白髪の間違った金髪を清潔なアップバンで七三に整え、口髭が立派なこの人こそが、ノールレッツ家現当主、フェリーズ伯爵である。

「派遣していただけるだけでも十分ですよ、イドウヴァ副団長」

聖職者らしい柔らかい仕草と口調はすつと心に入り込んできて、救われたと思ったかイドウヴァはおもむろに頭を上げた。

さすが『聖者』と呼ばれるだけはある、包容力が満ちる声は自然と心を開かせて、上げたはずの頭は優しい微笑みについての間にかまた下がっている。

元はエトルリア出身のフェリーズはイリアの状況に心を痛めて移住し、この地で信仰を広めつつ開拓を進めており、急速に騎士団の規模を拡大させてきた。

「この事業の成功はイリアを困窮から救い、発展に繋がる重要事項。何とか成功させなければ」

——イリアを困窮から救う

フェリーズの口癖を織り込んで彼への理解を示すイドウヴァだが、内心はこの男には自分でも勝てないと思っていた。

イリアを救う『聖者』。あくまでそれは、表面の綺麗な部分だけを見ればと言う話。

どこまでも清廉潔白と言うならば近づいたりはしない。尤も、フェリーズからすれば表も裏もない。ただ救済のために動いているに過ぎない彼にとっては全てが表であり、全てが白なのだが。

「そうですね。準備を短期で済まし先手を取る事は定石……。イリア

救済の為に、よろしくお願いします」

静かに祈るその整った顔立ちからは一切の悪意を感じない。

枢機卿の地位を持つ者らしい厳かな顔立ちであり、慈愛があり、そして聡明であり。

裏も闇もない眩いばかりの光が語る清楚なる狂気ほど恐ろしいものもない。

この男の考えている事はまるで読めなかった。心が黒で塗りつぶされて覗き込んでも見えない闇ではない。それとは真逆にいるこの男の白は、眩しすぎて見つめるだけで目を潰されてしまいそうな程。

そんな二人の社交辞令に塗れた生ぬるい会話を、威勢の良い、建前など一切ない豪胆な声が一蹴する。

「ま、管轄地に引き入れちまえばこつちのもんくらい考えてるんだろ？ イドゥヴァの姉さんよ」

どうやらここに来る前に喰ってきたらしい。

喰った後はあの気だるさが嘘の様になるのはいつもの事。声の主ソルバーンの顔を見上げてイドゥヴァの口角が上向く。

独特の正義感を持ったフェリーズよりこの男のほうがやり易い。この欲望に忠実な男のほうが。

「しつかしまあ、えらいやりにくそうじゃねえか？」

何代も前の団長の時代から副団長として天馬騎士団の中枢を支えてきた彼女なら、もっとスムーズに動けるはずだろうに。最近はどうにも動きが遅く、成果も芳しくない。辣腕の名を欲しいままとし、団長に最も近いと言われた彼女が、だ。

同情と言うよりも哀れみを含んだ言葉が作戦の遅れを責めてくる。

「ええ……まあ」

ここまでは準備期間、ここから先は具体的に、更にスピードを上げていく必要がある。

準備は整い、その時を待つ段階まで来たのだから。だからこそ、邪魔となる芽は早めに摘んでおくに限る。

「そこであなたにもう一つ頼まれごとを受けてもらいたいところなのです」

イドウヴァの眼は血を求め、その血にソルバーンは興味を示す。ベルン動乱は食いごたえのある連中も根こそぎ奪ってしまい、ソルバーンは毎日飢えていた。

多少喰い足りない相手でも頭からかじってしゃぶればそれなり味もするだろうと、目の前にちらつかされた餌に目をぎらつかせている。

「任せろ。一人だろうが二人だろうが、喰える相手ならいくらでも喰らいたいくらいだ」

イドウヴァは席を立つと、ソルバーンの許へと歩いていき耳打ちを始めた。サングラスの奥で不敵に笑う彼はイドウヴァの囁きに耳を立て、「へえ……、狙いはそこか？」珍しく眉が動いた。

「ま、喰うには悪くない相手だが」

次の瞬間には口元が吊り上がっていた。今回指示されたターゲツトはなかなかの大物だ。確かにイドウヴァでは敵う相手ではないのも頷ける。

「頼みます。彼女は侮れない力を持っています」

彼女はすでに仕留めたつもりでいるのか、そうだろうと目元口元全てが嘲笑を浮かべている。

これであの女も終わりだ。この『赫竜』に目をつけられて生きていた者はいない。

ところが、確信して計算を次に移そうとしていたイドウヴァの眉はすぐに歪むことになる。

「そうだな、ま、考えとくわ」

相当燃費が悪いのか、元の気だるそうな声に戻ってしまったて、面倒くさそうな歯切れの悪い答えが返ってきた。

彼は背を向けると部屋から出て行ってしまい、嫌な予感がしてイドウヴァの口元がきゅつと歪む。

本当に興味を持ったら、あの飢え具合なら今からすぐ喰うくらいの反応が返ってきたはずだ。

餌を前にして食欲を失うのは、気が無いという事。

彼女の予想通り、ソルバーンは喰らうつもりはなかった。貴重な情

報源をみすみす手放すことはイドウヴァを敵に回す以上の打撃となる。

「ぶっちゃけ……そう上手く行くとは思えんけどな」

あの二人も、彼らの計画に賛同する貴族連中も、簡単に考え過ぎている。戦場を見ずに戦を進めようとする姿にため息をつきながら天井を見上げた。

———テメエもそう思うだろ？

天井裏にいる人物にそう問うかのように。



## 第7話 脆き剣

豪雪の冬が来るまでは比較的穏やかな気候が続くイリア地方。今日もキンと空気は冷たく、朝日が寒さに縮こまる背中を伸ばしてくれる。

ピンと顔が上向くと、遙か高く澄んだ紺碧の空が視界に広がって、白く映えるカルラエ城の美しさに希望を抱く。極寒に静まる厳かなイリアの朝は、いつもそうして始まる。

朝食を終えたシャニー達も食堂から出てきて、浴びる朝陽に大きく背伸びして仕事へ向かう。今日は見回り先でどんな話を聞けるだろう。始まる一日にワクワクの笑顔が陽光に映える。

「よおし、今日も元気にいくぞっ」

「あんた本当に朝からよく食べるよね、こっちが気持ち悪くなりそ」

伸びをしてからお腹を両手でポンと叩いて自分へ気合を入れたシャニーにルシャナは苦笑い。これだけ食べても昼になったらきつちり時間通りに「お腹空いた」とうるさいから感心してしまう。

同じように行動しているはずなのに一体どこで消費しているのかまるで分らないが、この全然違うテンションの高さが理由だろうか。

朝は静かに始めようなんて気はさらさら無く、いきなりスイツチオンのシャニーについて行くにはなかなか体力がいる。

「それ、酒場でのルシャナにそっくりそのまま返すよ」

だが、言われた側もジト目でルシャナを突つついた。あれだけ飲んで翌日けろっつとしていた彼女に付き合ったら病院送りになつてしまう。

お互い様と部隊の集合場所まで談笑しながら向かう二人の許へ、バタバタと足音が近づいてくる。

「お、おい！ 聞いたか？」

後ろからやって来たのが誰かなんて足音でだいたい分かる。あんな下手な走り方で飛んでくるのは彼しかいない。

背後まで来たかと思うと、彼はシャニーの肩に手をかけて乱れた息を整えだした。振り向いた先にいたのは予想通りウツディだ。

「おはよー！ ウツデイ」

手を挙げてニカつと白い歯を見せ、シャニーは興味津々の目を向ける。

「どうしたの？ また諜報部ウツデイが炸裂したの？」

いつもウツデイは新鮮な情報を運んできてくれる。別に彼自身があちこち嗅ぎまわっている訳では無いのだが、女性騎士に人気のある彼の許にはちよつとの怪我でもやってくる者が多く、結果色々な情報が集まってくるのだ。

理由はともあれ便利なので、シャニーたちは諜報部ウツデイと言って重宝している。

ただ、所詮噂なので内容は宝くじのようなもの。天馬も食わないしようもない時もあれば、爆弾を持ってくる時もある。さて、今日はどっちだろうか。

「私たちの配属先のこと？」

入団から半年が経過したこの時期なら話題は絞られる。一番聞きたい事でもあるし、ルシヤナはすぐにピンと来て聞いてみた。

「いや、それも仕入れてきたけど」

ウツデイの反応から見るに、どうやらブルではなかったようだ。

「いつになったの？」

どこへ、もそうだがまず、いつ配属されるのかを知りたい。

配属されてしまえば、今のメンバーとはバラバラになってしまう。そう思うと急に切なくなってきた、シャニーはウツデイの白衣を引っ張ってらしくないか細い声で聞いてみる。

「来週だって。部隊長会議でも正式に決まったらしい」

十八部隊にとっては他のどんなイベントよりも気になる重大事項だ。

ウツデイは軍医なので配属という概念が無いからさらつと言ってくれるが、緊張の瞬間はもはや目の前にまで迫っていた。そんな事をいきなり知らされて、シャニーは思わずゴクリと息をのんだ。姉は一緒に戦ってくれと言った。

（やつぱり……お姉ちゃんの直属だし、第一部隊かな。……そうだ、目

の前に諜報部がいるじゃん)

「ねえねえ、あたしたち、どこに配属されるの?」

さすがにそこまでは。ウツデイの苦笑いが全てを語っている。

肝心なところを調べていないなんてとシャニーはウツデイを小突くが、ルシヤナは呆れたように団長室を指さした。

本人は随分と心配しているようだが、周りからしたら九分九厘決まっているような奴だ。

「あんたはどうせ第一部隊でしょ? イドウヴァさんにケンカ売ったんだしそこしかないじゃん」

前の団長選出戦であれだけイドウヴァに頭を下げられたのに、棄権と言う形で蹴って顔に泥を塗った以上、彼女の息のかかった部隊からお呼びがかかることはまずありえない。

十八部隊でも実力は群を抜いているし、彼女の場合は行き先は決まっているも同然だった。

もちろん、イドウヴァの怒りを買ったのは残りの面々も同じだが、下位部隊にはテイト派が多く選択肢はいくらかもある。

どちらかと言うと、残りのメンバーがどこへ行くのか気になる。

「それより、私たちの情報はないの?」

シャニーに右の脇腹を小突かれたと思ったら、今度はルシヤナに左を小突かれてウツデイの体が左右に悶える。

「分からないな。というか、さすがに僕に期待しすぎだろ?」

特に槍使い筆頭のルシヤナに、天馬乗りながら魔法や弓を扱うレンとミリアと言った変わり者。この三名はどこの部隊長も興味を示しているらしい。部隊長のレイサを含めた四名の行き先を聞きたかったのだが、ウツデイは両手を広げている。

ルシヤナは悔しそうに指を弾き、もつと頑張れと彼の尻に喝を入れた。

「それで、もつとすごい情報があるんでしょ? どんなの?」

一番知りたい情報で肩透かしを食らったので、お尻を擦るウツデイに構うこと無くルシヤナは早く次と彼を急かす。

医務室に来る他の騎士達と比べてどうにも自分への扱いがぞんざ

いな気がする。物言いたげに見返してみるが、何だかルシヤナには勝てない気がしてウツデイはメガネをずり上げた。

「もう団長選出戦に向かって動きがあるらしい」

ようやく持つてきたとっておきの情報を喋らせてくれて、彼は二人の肩を掴むと陣を組む様に顔を突き合せ、やや噛み気味に興奮を一気に吐き出した。

でも、二人の反応は薄く、明らかに配属先の話に比べたら拍子抜けと言った気持ちで顔に出ている。

今年入団したばかりの下っ端にとつては、団長が誰だろうと正直あまりピンとこない。給金を増やすとか、食堂をもっと素敵に改装するとか公約にしていれば話は別だが。

誰が団長になるか、よりも今は、またか？　と言う気持ちの方が大きい。

「へ？　どう言う事？　お姉ちゃん、この前再任されたばかりじゃない？」

シヤニーも自分が聞き間違えたのかと思った。

団長選出戦から一か月くらいしか経っていないのに、またあんな大事をやるなんてどうしてだろう。

団長選出戦は普通は年に一回しか無いらしいから、今回は臨時とは言えあと半年はないと思っていたのに。エライ人の考えることは分からないもんだと、口元に指を当てて一応考えるフリはしてみる。

だが、その明らかに頭は空っぽですと言っている素振を見て、ウツデイはカックリと首が折れた。

これだけ朝から走って来たと言うのに徒労だったとは。

「それをお前に聞こうと思ったんだけど、その反応だとお前も知らないのか」

実の妹だからと言って、テイトが騎士団の極秘情報を簡単に口にする訳が無い。今思えばむしろ、テイトが口外するイメージが湧かなくてウツデイは自分を納得させるが、シヤニーのほうは口を尖らせた。いきなり人の顔を見て「何だよ、つまらない」と顔で言うとはずいぶんな奴だ。

「知るわけないよ。寝耳に水ってやつだよ」

「あんたじゃ水かけられても起きそうにないけど」

おまけにルシヤナが待つていましたと言わんばかりに突っ込んでくるものだから、地団太を踏みながら幼馴染のお尻を叩く。それでもルシヤナのジト目は変わらない。一度寝息を立てたら、横で騒ごうが灯を点けようが何をしても起きなくせによく言うものだ。

いつも通りじゃれあいを始めた彼女たちの視界にはもうウツデイは入っていない。

だが、この話には続きがあつて、むしろこつちがメインなのだ。序盤だけ語らせて話を脱線させられては堪らないので、ウツデイはそのままお構いなしに続けた。

「噂話のレベルだけど、テイトさんどこかに嫁ぐかもしれないって」

（今、ウツデイ何て言ったの？ お姉ちゃんが……嫁ぐって言ったの？ 嫁ぐ……？ お姉ちゃん??）

「え……」

シヤニーはルシヤナに頬を摘ままれたまま、ウツデイへ表情を作れないままの顔を向ける。彼の口から出てきた言葉は何かシヨックだった。

姉が居なくなつてしまう。そんな話、それこそ寝耳に水で頭が真っ白になつた。まだまだ、色々教えてもらえろと思つていたのに。もつともつと、これから姉の力になりたいと思つていたのに。

ある日突然、大事な人と道が別れてしまう。またなのか、これではデイークの時と同じじゃないか……。

「それはおめでたい話じゃない」

隣からルシヤナの声が聞こえてきてはつと我に返る。

（そうだよ。お姉ちゃんがようやくやく幸せになるなら嬉しい話じゃん。あたし……何を考えてんだろ）

「あんた、相手に心当たり無いの?」

気づくと自分にルシヤナの指先が向いていた。

何事かと一度は自分へ向けて指をさして確かめるも、ルシヤナだけでなくウツデイからも当たり前前だろうと見つめられてしまう。

そんなこと言われても—— 一度はそう言いかけたが、姉のイイ人……どんな人なら姉を幸せにしてくれるのだろう。

「お姉ちゃんと一緒にいた男の人……」

そうやって考えていくと無性に気になってきて、シャニーは上を向いて色々な顔を浮かべだした。

あの堅物の姉の相手。誰とも同じように接していたような光景しか思い出されてこない気がする……。

「あっ!!」

やたら輝きを放っていた貴公子の姿が、電撃が走ったかのように脳裏に浮かび上がって思わず声を上げた。

「クレイン様だ。リグレ侯爵家の」

シャニーが口にしたまさかの名前にウツデイは眼鏡越しに目を点にし、ルシヤナも肝が潰れたかのような顔をしてへらへらと変な笑いが漏れた。

「団長もまたすごい人ひっかけてくるもんだねえ……」

天馬騎士団の仕事は諸国の有力者との縁づくりなんて事を言う人もいるくらいではあるが、相手の名前にルシヤナも感嘆を漏らすしかなかった。

リグレ侯爵家と言えはかつて魔道軍将を輩出した程で、エトルリアの名門中の名門だ。

人は見かけによらないと言うか、姉はエトルリアの名門、妹はリキアの英雄。姉妹揃って英傑のお気に入りになっているとは。

「なるほどな。それでちょっと繋がってきた気がするぞ」

「なになに、また何かゴタゴタがある感じなの？」

その隣ではウツデイが顎に手を添えて口を尖らせている。

シャニーには今の情報で何が分かるのか見えないが、情報通のウツデイが今度は何を言い出すのか不安げだ。

いつも苦労ばかりの姉をクレインなら幸せにしてくれそうなのに、また良くないことが起きようとしているとは可哀そうだと思った。

もうあんなに姉は疲れた顔をしているのに、これ以上はもし何とか出来るなら防ぎたいくらいだ。

「団長選出戦の後、イドウヴァさんの団長に対する態度がかなり変わったって」

真つ向から強硬な態度をとることは無かったとは言え、団長選出戦までは露骨な反団長的な態度をとっていたイドウヴァが、ここ最近はいトに歩み寄りの姿勢を見せているというのだ。

部隊長会議では独断しないでいトを立てるし、団長を信じているなんて周りにも口にしてるらしい。

何だか嫌な予感しかシャニーにはしなかった。イドウヴァの性格からして選出戦が機会になって仲良くなったとは到底思えない。

「いトさんが将来自分たちの雇用先になるかもしれないからってこと?」

「ベンゴ」

さすがにルシャナは呑み込みが早い。彼女の答えを待っていたかのように気持ち良い位良い音を立ててウツデイは指を弾いて見せ、ルシャナはあからさまに嫌そうな顔をした。

利用できると踏めばそれまでどんな陰口を叩いていたかも忘れて。直接喋ったことが無くとも、一緒に酒を飲みたくない相手だと彼女は思った。

「それだけじゃない。フェリーズ卿と協力してエリミーヌ教を動かして、イリア開拓の獲得資金でエトルリアとの関係を強化するって話もある」

一体どこからこんな情報を仕入れてくるのかとシャニーは一瞬驚いたが、それ以上に何か憤りが湧き上がってきた。

開拓事業はイリアを豊かにするためと聞いていたのに、資金が民に回されずに外国に出て行ってしまふなんて。

(何でそんなことを……)

「なんでも、お前たちが護衛か何かで派遣されるって話だぜ」

シャニーが意図を巡らせているとウツデイの視線がこちらを向いていることに気づく。大丈夫かと顔が問うて来ていた。

「そんな話、何も聞いてないけど」

自然と眉が下がる。いきなり出撃しろと言われても、準備なんて何

もしていない。

レイサは出撃したつてすぐ単独行動でいなくなってしまうのは今までの賊討伐任務でも分かっているから、副将の自分が分隊長兼任で指揮を執らないといけないのに。

「そつちはすぐ連絡が行くんじやないか？ 昨日かなんかに決まった話らしいし」

曲がりなりにも一つの部隊の副将を務めている身。部隊の行動に係わる情報については、会議に出たりレイサから伝えられたりで把握しているはず。

ところがウツデイが持ってきた情報など一切シャニーの耳には入っていないかった。

「問題はこの先だ」

もつとその先を聞いたかったのだが、再びウツデイの声が小さくなり、彼女たちは周りの視線を気にしながら肩を寄せ合う。

「もしイドウヴァさんが団長になったら、あのアルマが副団長になるかもしれない」

前回では投票と言う形での選出となったが、今までは前団長の指名で団長が選出され、慣行的に団長の右腕が副団長になってきた。

戦後の混乱から立て直したばかりの騎士団で、テイトが抜けた後に団長を務められる人材など限られる。

「はあ?! だってまだ一年じゃん? それが副団長?」

自分たちはまだ正式な配属にさえ辿り着いていないというのに、同期が騎士団のナンバー2にのし上がるうとしているなんて。

だいたい、まだ入団して半年だ。年上の経験豊富な騎士なんて百名以上居るといふのに、何でよりにもよって。

認めない、そう言わんばかりの顔でルシャナがウツデイの胸倉を掴んでいる。

アルマは十八部隊から仲間を引き抜き、イドウヴァに取り入って散々嫌味を浴びせてきた奴なのだ。そんなのが副団長なんて何か許せない。

シャニーも呆然としてしまった。何か、脳天から槍が振ってきて突



き刺さったかのように動けない。

(あのアルマが……副団長?)

自分はまだ配属さえ決まっていないうし、本当に今のままで通用するのかわからなくなっているのに。イリアの人々を守ると誓った。だけど、今の自分の剣は数人の仲間さえ救えなかったのに。

それなのに、もうアルマは副団長になると言うのか?

(あたしはスタートラインにすら立っていないのに……アルマはもう、ずっとずっと遠くに……)

突然シャニーがぼうつとし始めたので、不思議に思ったウツデイが彼女の顔の前で手を振りだした時だった。

「シャニー、ちよつと話」

いつの間にかレイサが背後に立っていて、三人は思わず両手を挙げて悲鳴を漏らす。こんな話を仲間内以外に聞かれたら何を言われるかわかったものではない。

仰天してバタバタしながら距離を取ってやり過ぎそうとするウツデイとルシャナは、お望みのシャニーの背中をトンと押し出した。

もつと話を聞いたかかった彼女は一旦後ろを振り返るが、二人から怖い顔をして行けと視線でジェスチャーされてしまう。

「何? レイサさん。フェリーズ伯爵のところのお仕事の話?」

「あんだ……何で知ってるんだい?」

これから話をしようと思っていた事を先にシャニーから問われて目を点にしていると、向こうにいる情報通を指差されてレイサはため息をついた。機密情報が聞いて呆れる。

「まあ、今からの話は違うけどね」

その話は後でじっくり話をすることにしていたので、本題を振ろうとするがシャニーが先に仕掛けてくる。

「それよりさ、アルマが副団長になるかもしれないって本当なの?」

思わず言葉が詰まり、しまったと思っても遅い。こうした一瞬の間で全てを悟られてしまうのだ。驚きが顔中に広がるシャニーの髪からヘアピンを取り上げると背を向けた。

「バカ言っていないでほら、行くよ」

後ろから慌てて駆けてくるシャニーがヘアピンを取り戻そうと手を伸ばしてくるが、そのまま頭を押し下げてやる。

一体、何を焦っているのだから。己が何を成すべきか確固としないまま求めても仕方ないというのに。

彼女はまだ回復しきっていない。怪我は癒えても、剣を折られて道を見失ったままなのは腰に差した剣を見れば一目瞭然だ。

このまま彼女を戦場に出せばまた痛い目を見る。どうしたものか……配属まであと半月も無い中で、このまま痛い目を見させるか、何とか騙し騙し配属まではこぎつけるか。

痛い目を見て目を醒ましてくれれば良いが、そのまま潰れるかもしれない。テイトの期待からしたら、潰してしまうのは何が何でも避けたい。さてはて……。

## 第8話 業火の魔人（1）

レイサからもたらされた騎士団の決定は二つあった。一つはウツデイが持ってきた情報通り、イリア開拓地区内の警備。そしてもう一つは賊討伐だった。

開拓地区の警備はどうやらもう少し先の話で、十一月らしい。

よりにもよって寒い時期にイリアでも特に寒い北部の警備なんて……そんな事を考えている暇はない。賊討伐は今すぐにも出撃せよという指令だ。

最近強盗を繰り返す賊のアジトが見つかった為、強襲し制圧までがミッション。いずれも国内任務だからという理由で第十八部隊——

——シャニーたちに指令が下りてきたものだった。

賊討伐任務ならこれまで何回も経験して来たから慣れたもの。アジトを変えられる前にさっさと抑えようと、シャニー達はその日のうちに作戦を開始する事にした。

カルラエ城から出撃し、トップスピードで飛ばすとあつという間に見えてくる敵の根城。このスピードこそが天馬騎士団最大の武器だ。

「我らの剣は全て人々の為に！ 目標、敵本拠地！」

本来、部隊長のレイサが指示を出すはずだが、戦闘指示を出して部隊を引っ張るのは副将のシャニーだった。

最初からずっとこう。天馬の乗り方を教えたのも部隊長ではなく副将だ。他の部隊では異常でも、十八部隊にとっては普通。隊員たちもデルタ編隊を崩さず副将を先頭に飛んでいく。

目標は廃墟となっていた砦。てっぺんに見張らしき人が見える。

背後からついてくる仲間たちを後ろ目に確認する。ルシャナが親指を立てて合図したのが見えると、シャニーはさらに加速して号令をかけた。

「第十八部隊、作戦を開始する！ 行くぞ！」

「イエス、リーダー！」

副将からのオーダーに戦乙女達の咆哮が響く。

狭い間隔で飛んでいた天馬隊は、まるで翼を広げるように少しずつ

互いの距離を空けていき、敵の拠点を包囲するように編隊を変えていく。

ベルン動乱ではついて行く側だったが、騎士団に入ってからはずっとこう。何せ部隊長が天馬乗りではないから、必然的に副将が指揮するしかない。

かれこれ半年近く、戦場では部隊長同然の動きを要求されてきた。

最初は何をすれば良いか分からなかったが、今では慣れたもの。掛ける号令も様になってきた。でも、あまり慣れたくないこともある。

天馬隊の十八番は電撃戦だ。空中からの奇襲と速攻で相手が態勢を整える前に一気にケリをつける短期決戦。

「んじゃ、私はちよつと偵察に行ってくるから任せたよ」

ポイントまで到達し、地上隊を指揮すべく天馬からシャニーが下りた途端だ。

一緒に飛び降りてきたレイサが背中を守ってくれるかと思いきや、さっさと戦線を離脱して行ってしまった。

天馬隊は機動力が高く一撃離脱を得意とする反面、攻撃と離脱を繰り返すため戦闘効率は非常に悪い。それを補い、弓兵を優先的に殲滅する為にシャニーとレイサは地上で戦う……そう決めていたはずなのに。

「ええ?! いきなり行っちゃうのお?!」

仰天してレイサに声をかけるが、シャニーだってもう余裕はない。目の前には敵の本拠地。彼らは突然の襲撃に蜂の巣を突いたかのよう色めきだつて襲ってくる。

突き向けられたダガーを見切り、後の先に一閃を浴びせて崩れた所へ鋭い剣技を見舞う。

この前、苦心して調整した剣はなかなか良い具合に馴染んでいて、電光石火に切り崩していく。

「方位三十。エルファイアー、掃射します」

地上で剣を振るうシャニーをフォローするように、レンの火炎魔法がシャニーの背後で炎の壁のように聳え立って賊の攻撃を阻む。

毎日ニイメの下で修業してきた成果で、魔法の威力がみるみる上

がってきた。火炎の螺旋柱が雪の大地を引裂いて賊を吹き飛ばし、元から得意だった精密機械のようなコントロールでの的確に相手の動きを潰していく。

隣で活躍する友にミリアも黙っていない。疾駆する天馬の上から距離を測り、ゴーグル越しに照準を絞って引き金へ手を添える。

「シャニー！ 援護するツスよ！」

馬上からクロスボウの連続射撃で遠くから狙う射手を射抜いていく。その精度と射撃速度は敵の弓兵を遥かに凌駕して矢を番える事すら許さない。

天空を光速に翔けながら降り注ぐボルトを地上にいる者が避ける術はなく、気づいたら銀翼は駆け抜けていった。

旋風のように部下たちが戦場を駆ける様子に、レイサは手を振った。

「こちらの賊討伐ぐらいあんただけで十分だろ？ 別働隊がいないか見てくるからその間部隊を任せたまよ」

もう半年前の天馬の乗り方すら分からなかった部隊ではない。それぞれが自分の成すべき事、できる事を考えて自ら動く集団が出来上がりつつある。

半年間、よその部隊からの雑音を遮り続けてきた甲斐があつたと部隊長からしたら成長に感動するかもしれないが、場を任せられたほうは堪ったものではない。

独りでは捌ける量など知れているし、囲まれたら一卷の終わり。慌ててホイッスルを吹いて天馬を呼ぶ。

「はあ、いつもこうなっちゃうんだよなあ」

結局、シャニーも再び天馬に乗り、投槍に持ち替えた。もう少し長く居てくれると思っていたのに、まさか降り立ってそのまま相方を置き去りにして行くなんて。毎度無茶振りが過ぎる。

それを本人に言つたつて、”もう慣れっこだろ”とか言うに決まっている。

(まったく人使いが荒いよ！ 慣れるワケないし！)

思わず漏れ出す愚痴とは裏腹に、投槍を放ったかと思えば騎士剣を引き抜いて急降下。隼が獲物を狙うかの如く、倍以上の体格差の連中

を蹂躪し、離脱と共に追撃の槍を放って数人まとめて吹き飛ばす。

再びの急降下で今度はルシャナと螺旋を描いて幻惑しながら賊共をなぎ倒していく。

「ま、昼寝しないで仕事してくれてる分マシじゃない。私たちはやることやろう」

離脱して上空に戻るとルシャナが励ましてくれた。入団から苦楽を共にしてきた分、結束には自信がある。戦友の声に親指を立てて応え、また二人で敵を幻惑しながら突っ込んでいく。

だが、いつもと違う、他の部隊と同じような戦法に早くも後衛からじれったいと声が飛んできた。

「そーそー。シャニー、早く降りて囨になるツス。全部射抜いてやるツスから！」

地上から離脱してくると背後からミリアの威勢のいい声が聞こえてきた。若草色の髪をかき分けてゴーグルを被りなおし、クロスボウを振って白い歯を見せてくる。

(ミリアめく。あたしの事、絶対に副将だと思っただけでしょ！)

最初は天馬にも乗れなかったのに、笑いながら随分と恐ろしい事を言うようになったものだ。彼女に付き合っていたら命がいくらあっても足りる気がしない。

「囨とか、もうちょっとカッコイイの無いの??」

地上にシャニーがいてくれると、そろそろと彼女を狙って賊が寄って行くので狙撃手としては狙いやすく、実際彼女の空中からの弾幕は少数精鋭を可能にする貴重な戦術。

地上側にとつてはうまく誘導しないとイケないし出来ればパスしたいところだが、残念ながら十八部隊では通常戦術だ。いくら身のこなしに自信があったって、最初から囨呼ばわりは虚しい。

「生贄でもいいツスよ！」

分かかって言っているだろうミリアの追撃にシャニーの口元が歪む。

「副将、リブローセット完了。敵短剣の命中確率……0〜3%。準備としては十分と思われます」

ミリアの悪ふざけだけで済まず、平坦な口調で分析を報告するレンが非情に背中を押してくる。

いつもの確に相手を分析して被害を抑えてくれる守りの要。それゆえ本人にその気は無いのだろうが、最適解と分かれば容赦ない無茶振りをする。

「レンまで……」

今回もどうやら囿がリーダーの仕事のようだ。

彼女の分析力の高さは今までの作戦でも証明済みなので採用してきたが、こう毎回、さあ行けと囿を任せられると生きた心地がしない。そのまま天馬にしがみつく。

「よしっ、このくらいの数なら一気に制圧できそうだ」

盗賊たちを殲滅しながらどんどんと本拠地との距離を詰めていく。

予想していたより戦力としては未熟な者たちが相手で、シヤニーは一気に勝負へ出る事にした。ルシヤナに指示を出しながら少しずつ高度を下げていく。

「ルシヤナ、天馬隊を頼むよ。あたしは地上から一気に攻める」

本拠地の入口まで来ると、上空からの攻撃を仲間に任せて再び天馬から飛び降りた。腰に差していた剣を引き抜き、挟み撃ちにするべく一気に突撃しようと踏み出す。

ところが、つま先に力を込めて疾風迅雷に駆け出そうとした足が急に踏ん張ってその場に止まり、あたりをきよろきよろ見渡し始めた。

(何……この気配?)

突然に背後に現れる強烈な殺気。

「ほお、随分とキレのいい動きがいると思えば……、レイサのこの嬢ちゃんか」

振り向いた先にいたのはサングラスをした長身の男。赤の怒髪に、筋骨隆々の軀は焼け焦げて炭のような濃い肌を晒している。

戦闘服を着こんではいるが、武器は持つておらず丸腰だ。魔法使いなのだろうか？

それでも、その身のこなしはまるで隙が無く近寄る術が見当たらない。そんな威圧感とは裏腹に、その口調は何とも気だるそうで警戒心

ばかりを煽る。

「あなたはたしか銀狼の旅団の……」

この存在感を忘れるわけがない。以前、レイサと話し込んでいた男だ。あの時レイサは言った。この男と関わってはいけなないと。

でもこの視線、どうやら男とは無関係ではいられそうにはない。

「覚えてたか。そりゃ、ありがとな」

ようやくレイサがイカれてるから関わるなど言った理由が分かった気がする。刃を交えなくても肌にジンジン突き刺さってくるようなでもない威圧感だ。こんなのを相手にしていたら間違いない体がもたない。

「なら、話は早いな」

だが、彼はすでにこちらに野獣の如き殺気を向けてきている。

「あいつらは俺の獲物だ。手、出さないでくれるか？」

独りなら逃げ出したくなるようなオーラ。

(何……この妙な感覚。どこかで感じたことがあるような……)

そこまで考えてシャニーははつとした。そうだ、あの閃電の魔術師を相手にした時にも感じた妙なオーラだ。何か人ではないような、強烈な力が体から迸っているように感じる。

あの時は魔法か何かだと思ったが、この男が湛えているものは殺気以上の何かだ。それが何か分からないが、確かに直感がそう叫んでくる。

それでも、騎士団の代表としてこの場にいる以上は毅然とした態度をとらなければ士気に係わる。

「あたし達が受けた仕事なんですけど」

そう一度は言い返す。でも、全ては人々の為。考えてみれば彼の申し出は悪い話ではない事に気づいた。これだけ強そうな人が仲間になつてくれれば、もっと賊討伐が早く終わるはずだ。

「でも、少しでも早く賊を追い払いたい。手を貸してもらえませんか？」

苦しむ人達を一刻も早く救う事が出来るのなら別にどこの手柄になっても良い。



だが、男にとってはそうではないらしく、みるみる眉間にしわが寄って行くのがサングラス越しにでも分かる。

「面倒くせえこと言うなよ。楽しみを半分寄越せって事か？ 嬢ちゃん」

絡みつくような低い声は、まるで獅子が唸っているかのように威圧してくる。

報酬で食っている傭兵ならこの答えは自然なのかもしれないと思ったが、この口ぶりだと、むしろ報酬が目的ではない気がする。

「とは言うものの……こんな雑魚じゃあ知れてるか……」

周りに倒れている盗賊たちを見渡して、ソルバーンはつまらなさそうにボヤいた。

どいつもこいつも、武装はしているものただそれだけだ。こんなひよっこ部隊に制圧されるレベルなら当然か。

赫の怒髪をぼさぼさと掻きながら更に辺りを見渡す……レイサはこの場にはいない。いるのは空中を飛び回る連中と……そしてこのまんまの青髪だけ。

ここならちよつとばかり摘まむ程度であればレイサも何も言わないだろう。ニツと口元が吊り上がった。

「いいぜ、あいつらは嬢ちゃん達に譲ってやる」

困惑がシャニーの顔を染める。どうやら協力はしてくれないらしい。このままだと村への被害が出てしまう。

さっさと本拠地に戻り込もうと根城の方に身を振り向けようとした時だった。背後からの焼けつくようなオーラに串刺しにされ、再び正面へ向いて相對する。

さらに彼女を困惑させたのは、続けて男が口にした言葉であった。

「その代わり、喰わせる嬢ちゃん」

「ど、どう言う事？」

立て続けに意味の分からない事を浴びせられて聞き返すが答えは無い。

彼は既にこちらに睨みを利かせ、何やら重い赤……と言うより黒いオーラをまとい髪が揺らめく。

(やっぱりそうだ、このオーラ、この周りがざわつくこの波動……。間  
違いない！ この人はあの魔術師と同じ……)

シャニーが嫌な予感を確認へと変える前に、ソルバーンの咆哮が静  
寂を引き裂いていた。

「どうもこうも……こう言う事だ！」

直感が危険を叫んでシャニーが剣を握り直した刹那、男の握り締め  
られた拳に真っ赤な炎が走る。鋭く振り抜かれてギユンと飛び出し  
た業火が、獲物を喰らうかのように唸りをあげてシャニー目がけて  
突っ込んできた。

## 第9話 業火の魔人（2）

「どうもこうも……こう言う事だ！」

直感が危険を叫び、シャニーが剣を握り直した次の瞬間、ソルバーンの握り締められた拳に真つ赤な炎が走り、鋭く振り抜かれて飛び出した業火が獲物を喰らうかのように唸りをあげてシャニー目がけて突っ込んできた。

轟音が耳を劈き、刺すような熱波が頭を貫通して意識が飛びそうになった。かろうじて避けたが、髪が焦げる臭いが鼻をつく。

思わず宙を引裂いて行った業火の軌跡を追っていくと、火球は後方の壁にぶつかり、轟音を上げたかと思うと体が熔けてしまいそうな熱波が跳ね返ってくる。

「いきなり何をする!!」

立ち上がり、彼を睨み返そうとして思わず言葉を失い足がすくんだ。

—— コイツ、人間じゃない……

直感が危険を叫んでくる。元から赤かった怒髪は燃え上がるように天を向き、炭が焼けるかの如く赤々と煌めく様は悪魔か戦神か。

全身から炎が吹き上がるような赫灼のエネルギーに包まれており、その烈火は紅蓮すら焦がし足りないと言わんばかり。黒色の重い波動を迸らせてあたりを押しつけ、地面が熔けたかのように抉られている。

この距離でももう、体が焦げてしまいそうなくらいにヒリヒリして、震える足元を律して腰が抜けないように立っているだけで精一杯だ。

（な、何が起きたの?! さっきの攻撃！ 魔導書も無いいきなり炎を飛ばすなんて見た事ないよ！ それに……何なのよ、あの波動?!）

体の中から真つ赤な怒りを噴き出しているかのような、赫灼の波動に触れただけで消し炭にされそう。

今もバクバクする心臓が収まらずにシャニーの顔は青褪めたまま。

「さすがだな、今の一撃をとっさに避けるとは。誉めてやる」

すつと取ったサングラスの奥に潜んでいた眼に睨まれ、それだけで座り込んでしまいそうだ。

何者なんだ……この男は。さつきまでの気だるそうな男と同一人物とはまるで思えないくらい、黄金の邪眼が獲物に飢えて紅蓮に燃え上がる中でギラついている。

(この感じ……ベルン動乱でも遭遇した気だ。マムクート<sup>竜族</sup>……か？ いや、それよりももつと純粹な……炎みたいな……何なの？ 何なのよツコイツ！)

燃え上がる男の眼は魔力が溢れ黄金に輝く。獲物を見下ろす姿は、もはや魔人としが言葉が浮かんでこない。

「シャニーー！ 大丈夫?!」

副将を心配してルシヤナたちが寄ってくるが、彼らも高度を落とせずにいた。これ以上降りれば、火球を飛ばされなくとも熱波で天馬がやられてしまう。

威勢の良かったミリアも口をぽかんと開けて、自分たちを真っ赤に染め上げる圧倒的な力量差に呆然とするだけ。下手にあそこへボルトを打ち込めば、何百倍もの業火が跳ね返ってきそうの手先が震える。

頼みのレンの分析も聞こえてこない。燃え盛る轟音にかき消されているのか……いや、理解不能な領域に計算が追い付いていなかった。

今まで集めた情報の中に、あのような高純度の焰そのものなんていない。人ではない、マムクートのイーギルの流れでもない……完璧に研ぎ澄まされた純粹な焰そのもの。

「オイ、そこのお前ら、さつきと賊を制圧しに行けよ。出来ることは無いつて分かっただろ?」

そんな彼女たちをソルバーンは面倒くさそうに手で払う。せつかくの料理に雑味は不要だ。

「ルシヤナ、賊をお願い!」

こうするしかない。このままでは賊たちが態勢を整えて反撃に出てくる。

近場の村に被害が出る前に何とかしなければ。その想いでシャニーはルシヤナにありつたけ叫ぶが、耳を疑うオーダーにルシヤナは復唱しなかった。

「そんな事できる訳!」

「あたし達の剣は常に人々の為にツ、忘れたの?!」

しばらく躊躇っていたルシヤナだが、ようやくに部隊を率いて離脱し、そのまま賊の根城の頂へ飛んでいった。あれだけ高度を上げて距離を開けても、この男の業火に対しては安全とはとても言えないが、魔人の視線は最初からひとつを凝視し続けている。

どうしてもやるつもりなのか……狙われる理由もよく分からないまま、剣を霞に構えてソルバーンの黄金の邪眼をしっかりと見据える。

「どういうつもりなの?! 賊の前にこんなことして!」

一刻も早く賊を討伐し、人々に安心してもらいたい。それだけの願いで協力を要請したのにこんな仕打ちをされる覚えはない。

——あの男には関わるな

今更ながらにレイサの言葉が脳裏をよぎってその真意を知るが、とにかくこの場を何とかしないとイケない。

こんな炎の魔人を引き連れてあちこち逃げ回ったら、イリア中が消し炭になってしまう。

「賊? ああ……」

面倒くさそうに口を開いたソルバーンだが、その眼はすぐに見開かれ、拳を握るだけでごうつと音を立てて爆ぜた。

その炎を見て、シャニーはごくりと息を呑む。

(やっぱりこの人……魔導書なんか持つてない。なのに、今拳から火が噴きだしたぞ……どうなってるの……?!)

頭の中の何故が一つも飲み込めないシャニーを、今も好戦的な眼光はどこから喰うかと舌舐めずりする様に見下ろしている。

「メントいこと言うな。俺は強い相手と戦いたい。それだけだ」

みるみる見開かれる瞳。青の瞳はすぐ赤に飲まれるが、宿した怒りが紅蓮を跳ね除けてシャニーの口から咆哮が飛び出した。

「そんなのっ理由に」

「イリアは殺しが許される国。俺がここにいるのはそれだけが理由だ」

小娘の怒りなど、業火の前ではただのそよ風か。

押し寄せるエーギルの波動だけで押し潰されそうなのに、御託は無用と振りぬいた拳から放たれる火球が熱波となつて襲い掛かつてくる。

業火の走つた後は全てが黒くねじ伏せられ、そして耐え切れず何もかも失つて白くなつた。

もうこれ以上は剣を下ろしている事はできない。シャニーは剣を握り直し、一度顔の前に掲げて誓いを心の中で唱えると、雪煙を上げて魔人目がけて駆け出した。

「アインスの風、イクシード・アクセルの青嵐!!」

天馬が滑空するかのような電光石火の疾風。一瞬で距離を詰め、脇に構えた剣ですれ違いざまに一閃を浴びせて背後を取つた。勢いそのまま踵で反転すると、流れるように踏み込んで上段から叩き落とす。捉えているはずだ。でも、どうしても腰が引ける。

——熱ッ！ 近寄れないよ！

男から噴き出す烈火を避けながらでは力が入らない。近付くだけで体が焼けてしまいそうだ。この炎は魔法なのか？ 熱で意識がもうろうとする。

「いい太刀筋してんな」

明らかに見下されている。攻撃を与えて確実に捉えているはずなのに。

（何で?! 何でコイツはこんなに余裕なの?? 今のところ完璧じゃん?!）

剣で打つた場所を見ても、かすり傷一つ付いていなかった。再度距離を詰めて斬り上げる。まるで鎧を剣で打ちつけたかのように硬い音が響いた。間髪入れずに振りぬかれる剛腕を機敏な身ごなしで避け、再び一閃を浴びせたが結果は同じ。

（剣を浴びせて、繰り出してくる炎の拳を全部避けて……それなのに、

口元一つ歪まないなんてどうなってる?!」

剣だつてこれ以上無いほどに攻め込める型に仕上げてきた。

あの魔術師との戦いが防御一辺倒に追い込まれた反省から、今回はとにかく前に出て自身の特長を生かすために勇気を振り絞っているのに。

———これだけ攻めているのに……何でだツ?!

焦りをどんだん顔に浮かべながらも、正確に斬撃を繰り出してくる必死の形相を見つめてソルバーンは楽しそうだ。

若いの随分と良い剣を振るうものだとしつくり見ていたら、やはり覚えのある筋だった。

「……デイクだな?」

渾身で振り下ろした斬撃を小手で払われた際、彼が口にした名前にシャニーの目が見開く。

「師匠の名を何で知ってる!」

「あいつとは良く戦場で喰いあつたからな。良い剣だぜ……今からすぐにも戦いたいくらい、ぞくぞくするぜ」

こんな男と師匠は渡り合つて生き抜いて来たというのか。今ここに彼がいてくれたなら……その弱気を自らの剣で払った。彼の剣を自分は継承したはずだ。もう教える事は無いと言つて貰えたこの剣は、絶対に負けないはずだ。

止まることのない連撃。一度でも止めてしまえば、この溶岩のような男が一気に爆発して手を付けられなくなりそうだった。持ち前のスピードに任せて斬りまくり、相手の行動を封じていく。

だが、見えてしまった。魔人の口元が笑っていることが。思わずウツとして空いた間に、はつとして一回身を退く。

ここまで斬りつけているのに、全く効いていないと言うのか。本当に魔人だというのか、このソルバーンと言う男は。

「サカの剣も少し入っているか」

デイクの剣であつて、あの男の剣ではない。それで良い。コピーではつまらない。

「何より……さすが持つてやがるな」

これは面白いと彼の口元がさらに笑う。気づいている訳では無さそうだが、拳動のあちこちに滲み出ている。

一体いつ、それを見せてくれるのだ、いつまでウォーミングアップのつもりなんだ？ ソルバーンはもう少し相手の太刀筋を見ていくことにした。

——早く、早く見せてみろっ……お前が持つ風の力を……！  
動きは確かにいい。使わずともこれなら、きつと楽しいことになる。

疾風迅雷の猛撃をソルバーンはその身で受けながら、じつとその太刀筋をひたすら追っていく。

「<sup>はやて</sup>颯に任せた手数で相手を封じ、崩して大技を叩きこむ……そんなところか？」

先手を取り続け相手の思考を妨害し、行動を遅らせていく。

並大抵の相手なら圧倒できるだけのスピードを見せてくれているが、未熟。彼にとってはその一言だった。

攻めている内は成り立つ型だが、求めているものはこの程度ではない。

やれるはずだ。持っているならば、出来るはずだ。これがちゃんと目を醒ませば、どんな風となって踊るだろうか。

しかし……気づく素振りも見せないのではさすがに飽きる。少々、きっかけがいるのか？

「戦いはスピードだけじゃないんだぜー！」

渾身を叩きつけた剣を跳ねのけられ、体勢が崩れたところへ拳が襲う。反応で剣を出すか、このまま受けたら自分の体重では跳ね飛ばされてしまう。

シャニーはとっさに剣に足をかけ、弾かれた衝撃を使って距離を取る。それを逃がさず、ソルバーンの開かれた拳から炎の螺旋が唸りをあげた。

「くそっ、なんてタフなやつ!!」

「その体術はレイサから仕込まれたのか？ いい動きだぜ？ 褒美をやる」



豪の波動が横を通っただけで体の中から焼けてしまいそうに熱い。熱にやられて肌を露出している部分が真っ赤になっている事さえ分からないくらい、男の傍は煌々と赤く滾っていて一瞬も隙を見せられない。

おまけに、これだけ攻撃を叩きこんでいるのに崩れてくる気配さえ見せないのでは心が折れてくる。

(どうなってる?! 剣で体を打っているのに、斬れるどころかアザすら出来ないなんて……)

剣は確実に、当てたいポイントで、打ちたい箇所へ正確に打ち込んでいる。

持てる全てを男に浴びせても、剣から返ってくるのはまるで金属に打ちつけたかの様な硬い音。

サツパリ効いていないのは、拍手してくる余裕からも明らかだ

—— やっぱりコイツ……人間じゃないのか……?!

そんな事を考えているうちにも、ソルバーンはすつと拳を天へと突き上げていく。

「ほれ、こいつはエグいぞー!」

突き上げられた拳を垂直に地面へ叩きつけ、轟音があたりを揺さぶり立っているだけで精一杯。

すでに吐き出された業火で周りは放射線状に真っ白の世界が広がる中、背後で起きる地響き。視界の端で真っ赤になった地面が盛り上がったかと思うと、槍のように溶けた岩盤が突き出てきた。

「そんなもの当たるか!!」

危険を察知して飛び出したシャニーがいた場所からも灼熱の槍が吹き上がり、まるで火竜が首をもたげるようにうねる。

スピードに乗ったシャニーは、左右前後から迫りくる火柱を避けながら、ソルバーンとの距離を詰めて颯のごとく一閃を与えて崩しかかる。だが、不敵に笑う炎の魔人に刃が通った途端、妙な感覚に囚われる。

「そいつはどうかなの?」

気づいた時には遅かった。あまりの熱に鋒が灼熱し溶けていたの

だ。攻撃にできた隙を突いて投げつけられた火球をバックステップで避け、距離が空いた瞬間だった。

「なっ?!」

背後から火柱が意志を持っているかのように食いついてきていた。風のごとき身のこなしで避けるも、一瞬でも切った視界をソルバーンが逃すはずがない。目の前に詰められ、黒き業火を握りしめた拳が迫る。

「へえ、いい動きだ」

今のは捉えたと思ったのだが。業火の拳が焦がしたのは砕いた城壁だけ。めり込んだ拳を開き、城壁を砕き取って灰に変える。距離の空いた相手をもう一度正面に見据えて嬉しそうに笑った。

「これなら、もう少し本気出しても楽しめるかもしれないな」

「もうやめろ! こんな事をして何の意味がある! 人々が困っている前で、こんな無駄なことを!」

不死身の化け物か……シャニーの顔には疲労が浮かんでいた。これだけ攻めていて自分はアップアップだというのに。

肩で息をしながら私闘を止めようとありったけ声を張り上げる。

「無駄なこと?」

そんな怒りの咆哮も魔人の熱波に跳ね返され、鼻で笑って見せるその顔には、破壊の宴を楽しむ高揚だけが火影に濃く浮かび上がっている。

「わりいな嬢ちゃん、お前らと違って騎士道精神なんて俺には興味無いんでな。強い相手を食えればそれが俺の意味よ!」

咆哮と共にあたりへ迸る強烈な炎圧。天さえ焦がそうかと言う炎のエネルギーが立ち上り、シャニーの青髪さえも真っ赤に照らす。

お遊びはここまで、地面を踏み抜きすべてを熔かしながら迫る魔人の拳が、士気を失いかけているシャニーの胸元めがけて突っ込んでくる。

「さあ、見せてくれや! 嬢ちゃんが持つてるもんをよ!」

防戦一方。猛烈な左右からのラッシュをひたすら避けるしかできず、どんどん後ろへ後ろへと追い込まれていく。何とか隙を見つけて

カウンターの一闪を浴びせても、剣が炎圧に負けてソルバーンに届かない。

そんな状態を周りの竜炎が口を開けて見ている訳がなく、背後から容赦なく襲い掛かった。

——二度目はない

背後の一撃を避けるため視線を切った瞬間だった。

「しまっ」

目の前で不敵な笑みを浮かべていたのは、いるはずのない魔人。

「これでも浴びてさっさと目エ醒ませや！ デイズスターボルケーノ 暴君の狂宴！！」

ゼロ距離で胸に吸い込まれてくる渾身の拳。とつさに剣を出したが、拳が剣にぶち当たった途端、拳の衝撃と共に爆風が炸裂してブレード部分が木っ端みじんに吹き飛ぶ。

「ぎはっ」

シャニーの潰れた声も、剣が碎けた音もすべて灼熱の轟音の前に飲み込まれて為す術なく宙に放り出されていく。宙を錐もみし、地面に叩きつけられて跳ね飛んだ彼女は岩壁にぶつかってようやくよくに止まった。

「あそこから直撃させられんか。さすがにしぶといな」

まだ全然だ。生きている。あの避け方であれば技自体による負傷はほとんど無いはずだ。

ソルバーンが近づこうと一步を踏み出すと、やはり膝を突いて起き上がった。上がった。

向けてくる目や剣を握る左手にまだ闘志が見えこそするが、頭から流血し、真つ赤に染まった左腕を抑える姿からは、もう先ほどまでの威勢は感じない。

「そこまで攻撃特化にしといて最後は剣で受けようとは、剣がいくらあっても足りない戦い方だな」

一步一步、地面を溶かして魔人が命を奪いに近づいてくる。

身を起こしたとは言え、もう体は言う事を聞かない。一体どうすれば……剣折れ士気潰えた今、この状況で一体何ができる？

ベルン動乱でも絶体絶命は何度かあった。だが、その都度ティーク

やロイが助けてくれた。今彼らがここに居てくれたならば。

(……何回、みんなに助けを呼べば気が済むの……あたし。こんな姿……デイークさんに、どう……謝ればいいのよ)

敗北し、魔人が迫る。シャニーは動けないまま悔しさに身を震わせることもできずに、ただ左腕から流れ伝い赤く染まる視界を茫然と見つめていた。

(あたし……一人前の剣術騎士じゃなかったの？ 配属を前にした

一人前の……天馬騎士じゃなかったの？ あたし……八英雄じゃ……無かったの?)

——あたしの剣は、誓いは、何も……何も通用してないよ……

そこに響いてきた仲間の声。背後に気配を感じ、視線を移して焦燥に目を見開いた。

「シャニーー！ 今助けるツス！」

吹き上がる業火に中が何も見えず、ずっと彼女たちは近づけずにいた。

ようやく炎が収まって視野が開けてきたら、灰色の大地にシャニーがうずくまっついていて彼女たちは仰天して急降下し始めた。

「来ないで！ 逃げて！」

あの頃は守られる側だったが、今は副将。守る立場だ。近づけば間違ひなく殺される。

あの時も……あの時も、閃電の魔術師と戦ったあの時も仲間を守れなかった。

何故なのか、何度頭の中で自身に問うても答えなんて浮かんでこない。デイークが教えてくれたのは人を守る剣だったはずなのに。四月の頃にもレイサに言われた。お前ではモノにならないと。

(まだ……まだ届かないの？ 何も、何も成長していないのか……あたし。半年かけて何も……守れないのか)

——今回はそんな事にはなりたくない！

激痛に喘ぎながら、必死に叫ぶ。

「ミリアー！ みんなッ、お願い逃げて!!」

「そんな事、出来る訳ないツス！」

クロスボウを連射するミリアに止めるよう指示し退避を命じたが、彼女たちはそのまま降りてくるとシャニーを介抱しようと駆け寄ってくる。

それでもソルバーンは止まることは無く、彼女達より先にシャニーの目の前まで迫った。

目が合うだけで殺されそうな黄金の眼光に睨まれ彼女たちの足が止まる。筋骨隆々とした男が膝を突く華奢な乙女の顎を掴み上げて、今にも食いつかんとする程の怒りを湛える眼で睨み付ける。

リーダーが殺されかけているのに、足がすくんで彼女たちは微動だにする事が出来ずにいた。

「持つてんのに何で使わねえんだ？俺じゃ不足か？」

触れられているだけで熱い。内側から燃えてしまいそうなほどに熱く、ただでさえ飛びそうな意識がもうろうとする。

「くっ……何のことよ……」

いきなり投げつけられた怒りが何を意味しているのかなど、考える余裕は欠片もなかった。途端、炎のイーギルを収めたソルバーンは掴んでいた顎を乱暴に地面に放り捨てた。

「宝の持ち腐れ……か。ちっ、つまねえ奴だ」

心配そうに倒れた副将に声をかける者たちの隙間から、青の瞳が今もまつすぐに睨みつけてきている。

——仲間に出すな!!

剣を離さない血まみれの左手を見下ろしたソルバーンは、面倒くさそうに頭をかくと舌打ちした。

「さっさと持つてるもんを使えるようになれ。じゃねえと……守れねえぜ?」

どきつとシャニーの瞳が震えたのが分かる。

「分かりや良い。安い授業料だったろ」

これ以上ここに居ても腹が減るだけと次の獲物を喰らいに背を向けようとした時だ。体が動かないことに気づく。

「ソルバーン!! 手出したら容赦しないって言ってあったよね!」

影縫い。ようやくレイサが戻ってきたのだ。彼女はダガーを抜

いて逆鱗をその目に宿して怒鳴るが、ソルバーンはごうつと炎を全身にまとわせて影縫いを全て焼き切つて見せる。

炎の中から再び現れた彼は普段の気だるそうな顔に戻っていて、ポケットから取り出したサングラスをかけ直した。

「なんだ……帰つて来たのかレイサ。まあ固い事言うなよ。もう終わったし、殺してないし良いだろ？」

「良くない！　うちの副将をよくも！」

飄々とした口調で何の悪びれる様子もない彼にミアアが反論するが、ギツとサングラスの端で睨まれて硬直してしまう。

思わず槍を取つてミアアの前に出たルシヤナも、さっと出てきたレイサの手に止められた。

「シャニーだったな、今度は万全にしとけ。喰い甲斐がないわ、今のお前」

今も立ち上がれずにいるシャニーの正面に立つと、まっすぐに見下ろして落胆を吐き捨てた。せっかく同類同士で楽しめるかと思つたのに。

静かに背を向けた彼は思い出したかのように睥睨してきた。

「レイサ。気をつけろよ。思つてるより嫌われ者みたいだぜ、お前」

彼はぼうつと燃え上がった火影の中にその姿を溶かすようにその場から消えてしまった。

危機が去つたと見るや十八部隊は副将を担いで天馬に乗せ、カルラエ城目指してあつという間に東の空へと吸い込まれていく。

残されたレイサは落ちていた折れた剣を拾い上げ、じつとソルバーンが消えた場所を睨んでいた。

紺碧のコントレイルⅠ 終章 それでも、前を向いて  
第1話 八英雄

——エレブ新暦1000年 10月

静かな朝。まるで誰もいないかのように静まり返る家の中。

その沈黙は、ずっとベッドの上でシャニーを責め続けていた。

無音は何の妨げもなく、昨日の激戦を彼女に思い出させては映像を鮮明に映し出す。

(あたしの握ってきた剣は……何を守れたって言うんだろう)

真っ赤に燃える体、振り抜かれる剛腕。噴き出す豪炎……。為す術なく吹き飛ばされた。

どれだけ稽古をしても、どれだけ屈辱に立ち上がったっても、何も見えてこない。何も、守れない。

(未来を切り拓く……一体何を……切り拓けるって言うのさ)

姉に誓った。自分なりのやり方で、この手で、未来を切り開いて見せると。

無力……あまりにも無力で情けない記憶は彼女の心を、今も千の刃となつて刻んでいく。

この無力が、大好きな人の顔を歪ませ、頭を下げさせたと思うと、シーツを握る拳がギリギリ音を立てる。

……………

「シャニー、明日から休んでいいよ。ただ、配属式までには戻るんだよ」

昨日の別れ際、レイサはシャニーにそう声を掛けた。

怪我自体は、以前に戦った仮面の魔術師にやられた時と比べたら浅かったし、ニイメの弟子となつて半年みっちり鍛えられたレンがかけしてくれたライブで一気に回復している。

だが、レイサはシャニーの負った怪我を見抜いていた。

表情から色を失い、固まった口元はレイサの言葉に何も返そうとせず、俯いたまま。

「その、ごめん。まさかソルバーンが本気であんたを喰らいに来るとは思わなかった」

.....

レイサに頭を下げさせてしまう事になるなんて。それが何よりも悔しかった。

自分の剣は部隊を守る事が出来なかった。民を守る剣となると誓い、かつてベルン動乱を鎮めた八英雄と称されたはずの剣が、実は何も守れなかったのだ。

（この剣が何も守れないのなら、一体あたしに何の価値があるの？

答えてよ……ねえ）

ベッドの上で上体を起こしたまま、シャニーは無力な自分の両手を無表情に見下ろしていた。

応える声は何も無くて、それが答えのような気がしてくる。

「あたし、また失敗したのか……」

剣を砕かれて、叩きつけられたところまで映像が彼女を痛めつけ終わると、ようやくに独り言が漏れ出す。

また、まただった。こうして敗北を喫し、ベッドの上で己の無力さに涙するのは。

以前もあの仮面の男に瀕死まで追いやられ、今回だってソルバーンが興味を失ったから生き存えただけ。

（あたしはもう、二度も死んでる。二度も……仲間を殺してる）

ベッドからようやく降りた彼女だったが、その足は朝食を作り在台所へ行くわけではなく、立てかけてあった剣の方へ向かっていた。

鞘から剣を抜くと敗北を示すように砕けて、刀身が半分以上無くなっている。

剣を折られる事は、剣使いにとって最大の屈辱だった。それが……立て続けに二回も折られては、彼女にとっては剣使いのプライドも、騎士としての誇りも、全てが否定されて砕かれたも同然だった。

「くそっ！ くそっ!! くそっ!!!」

珍しく咆哮し、拳を壁に打ち付けて自身への怒りを吐き続ける。

騎士としての屈辱、副将としての無力感、剣こそ我が道と言いなが



ら、仲間を守る事が出来なかった自己嫌悪。

ライバルがどんどん出世していく姿に対して、失敗ばかりの自分。散々怒りを吐き散らし、千切れるような声を漏らしながら、彼女は壁にも負けたようにその場で崩れて暫く泣いていた。

悔しい……。悔しくて、悔しくて、悲しくて……。一体どこへ持って行けば良いのか分からない。天馬騎士団に入ってから一番増えたこの気持ち。

「……まずは剣を新調しに行かなくちゃ」

だから少しだけ、この感情との付き合い方にも慣れた。

泣き終わった彼女は立ち上がると、深呼吸して鏡の前に立つ。そこには目が真っ赤に腫れる、朝から無様な顔がある。これではいけないといつも通りの笑顔を作った。……。笑顔を作るなんて今まで考えたことも無かったのに。

そんな自分に何度も首を振ると、しつかり朝食をとって家を出た。

(一体あたしは……。何をしてあげられるんだろう)

天馬で風を切る間も、ずっと頭を巡るのは自分の存在意義。

見習いの時は誰かに守ってもらえば良かった。それが今叙任を受け、十八部隊の中でも前衛に立って、あらゆる全てを守らなければならない立場となった。

それなのに、一体今まで何を守ることが出来ただろうか？ 村人が賊に襲われても救えず、自身は仮面の魔術師に弄ばれ、『赫竜』にも蹂躪された。

「何が……。八英雄だよ」

守れない剣に何の価値がある？ 全てを折られて漏らす絶望は、視界から全てを奪っていった。



彼女が天馬に乗って向かった先はエデツサの城下町だった。

絶望を引きずりながら喧騒の中を歩いて、何も耳に入っては来ない。一体どうすればいい……。そればかりが頭を巡る。

それでも足は正確に行き先を指し、彼女は剣を修理するべくいつ

も通う武器工房を訪れていた。

「こりやまた酷くやられたなあ。このザマでそんだけの傷で済んだのか」

シャニーから剣を預かった鍛冶師は目をぱちくりさせる。

いくらシャニーの剣が軽量化を図ってブレイドを細く、斬撃を重視してカッティングエッジを長く取った耐久に難のある作りとは言え、まるでウエハースか何かのように粉々になっている剣は初めて見た。

剣からシャニーへ視線を移すと、怪我と言える怪我に見えるのは、今も包帯が巻いてある左腕だけ。

「そんだけって……結構重症なんだけどね……」

これほどの衝撃をこの華奢な乙女が受けたにしては、奇跡とも言えるくらいの軽症だ。本人は口元を歪めて、さも痛そうにしているが。

「そうか？ 元気そうじゃねえか」

「乙女は常に痛みと戦ってるのー！」

いつも通りの元気な顔に見えるのだが、もちろん本人は苦笑いしている。見えないだけであばらを数本持つていかれているのだから。

魔法で治療してもらったとは言え、まだ神経が過敏なのか疼く。

何より自分の道自体が重症に思えて仕方なかった。このままではいけない。何かを変え、この無価値な剣を守る剣としなければ。

「すまねえな。俺の技が至らなくて客にケガさせちゃうとは」

予想通り、鍛冶師からは修理不可と返ってきた。また初めから一振りこしらえなければならぬ。

「とんでもないよ、おじさんが謝ることなんてない」

鍛冶師にまで謝られてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

（レイサさんも、みんなも、おじさんも……謝らないでよ。慰められる資格なんて無いよ……）

こんなに皆に謝られるなら、まだ責められた方がマシだった。お前の剣は間違っていると、誰かにはつきり言って欲しかった。

「自分の未熟が悔しいよ。最高の一振りを扱える技量があたしに無かったんだ」

今回の敗北も自分の無力さが招いたこと。他の誰も悪くないことだった。

なのに何故、皆がこんなに謝ってくれるのか、その答えは分かっている。だからこそ悔しい。信じてくれた人たちに応えられない自分が。

あの時、鍛冶師は警告していた。これ以上に改造すると騎士剣と言うより刀だと。脆い剣だと承知で使ったはずなのに。

(どんな剣なら、守れる剣になるんだろう……。分からない、分からないよ……………)

次に一体どんな剣を鍛えてもらえば良いのか、まるで浮かんでこなかった。

今までの自分では何も守れないのに、それと同じ剣を作ったところで同じ結果が待っているだけだ。

「ま、お前さんはお前さんのスタイルを伸ばすことを考えたほうがいい」

そんなシャニーの悩みを見抜いたのか、鍛冶師は虚ろな目にすぐ声をかけた。

あれだけこだわって作った剣を簡単に折られた気持ちはよく分かるつもりだ。剣は己の姿勢を映す鏡。姿勢を全否定されたと同然なのだから。

だが、変えない勇気も大事だと、彼は道を外れて行こうとする若き騎士に警鐘を鳴らす。

「どのみち、そんなナリで相手の剣を受けて戦うなんて持たないだろう」  
鍛冶師はシャニーが防御に重きを置いた刃幅の太い、これぞ騎士剣と言う構えの剣を見つめている事に気づいていた。

彼女がこんな重い剣を持ったら、良さがまるで消えてしまう。

「まあ……………ね」

シャニーだってそれは分かっている。自分の剣にとって最大の防御は、とにかく前に出て、電光石火にひたすら攻めて、相手の思考を妨害しながら行動をどんどん潰していくことなのだ。

「でも、さすがに落ち込むよ。二本目だもん、剣折ったの」

それが通用しない相手にはめっぽう弱かった。昨日のソルバーン  
といい、この前の仮面の魔術師といい……。

彼らには自分の剣技がまるで通用しただけでなく、敗北を刻み付  
けるかのように剣を砕かれた。ただ敗北しただけとは訳が違う。

「失敗は成功の母ってな」

余程悔しかったのか、拳を握り締めて震わせている彼女の許まで歩  
いてきた鍛冶師は、ポンと彼女の肩に手を置く。

「失敗しまくれば良いんじゃないかねえか？　引き出しは多いに越した事は  
ねえよ」

鍛冶師の手が伝えた衝撃があばらに響く。だが、少しだけ救われた  
気がする。失敗を失敗だと言ってもらえ、そして前を向けと励まして  
もらえた。

朝からずっと独りでいた時間は、自分しか自身の声を聞く者がおら  
ず、責め続けられていたのでちよつとだけ気が楽になった。

「俺もこの前の失敗を糧に、次はもっといい剣を鍛える。付き合っ  
てくれよな」

「もちろん！　お願いします！」

剣使いと鍛冶師は一蓮托生。彼女は鍛冶師と剣の作りを相談し、試  
作品を打っては振るい、修正を繰り返す。

無心に振ろうと努めるが、彼女の中にいる騎士としての心はそれを  
許してはくれなかった。

今までと同じで良いのか？　今の無力なままで良いのか？　これ  
からもこんな誰も守れない無価値な剣を振るい続けて良いのか……  
？

何かを変えなければ、襲い来る全ての敵を倒せなければ……。

——さっさと持つてるもんを使えるようになれ。じゃねえと  
……守れねえぜ？

毎日毎日、欠かさず振ってきた。昨日の自分より少しでも上達した  
と今日の終わりに言えるように。

だが、ソルバーンは足りないと言った。一体何を言っていたのか、  
今でも分からない。心当たり……無いわけではない。

——その様子だと、使ったというより、溢れだしたという感じか

酒場であの黒ずくめの紳士にかけられた言葉。

鍛冶師に剣を鍛えてもらっている時、シャニーは無意識のうちに自身の胸を握っていた。

仮面の魔術師と戦った時に覚えた、あの自分が自分で無くなってしまったような感覚。胸から湧き上がってきた何か。

恐ろしかった。今でもそうだ。自分ではない自分が、青い焔の如く溢れて自身を支配する。

決して握ってはいけない剣だと拒絶してきた魔剣の存在が、心の中に浮かび上がってきて囁いてくる。

その背を押すように聞こえてくる、あの紳士の声。

——君はこうも考えている。あの力を最初から使えていれば、負けはしなかったと

忘れようとした。だが、今のままの自分ではいずれ仲間に犠牲を出してしまう。ユーノも言った。それも自分だから、抑え込むよりうまく付き合えと。今のままではいけない、今のままの何も守れない剣では存在価値が無い。

(あたしは……八英雄なんだ)

歴史に名を刻んだ。姉にもようやく認めてもらえた。民の傍で全てを守る剣と誓ったその剣が、こんな無様のままでは到底皆の前に出ていけない。

(あたしの剣は、みんなを守れなくちゃいけないんだ。全部倒せなきゃ意味が無いんだ)

その気持ちだが、剣を受け取り、笑顔で鍛冶師に礼を言って店を出た彼女から仮面をはぎ取り、据わった目をあの場所へと向かわせていた。

## 第2話 故郷と恋心と

昼休みの時間、団長室を静かで穏やかな時間が包む。

団長として、ある日は朝から晩まで営業に出て、ある日は会議室で缶詰となり。神経をすり減らす毎日にあつて、短くともこれがテイトに許された羽を伸ばすことのできるひと時だ。

彼女はティーカップから立ち上る紅茶の香りを一つ楽しみ、机の引き出しを嬉しそうに開けた。

その中に隠しておいた手紙を大事そうに取り出すとそつと封を切り、中身を両手に抱きしめるようにして窓際へと向かう。

「ふふっ、クレイン様ったら」

文通相手のクレインから届いた手紙は、鉄の女とさえ言われるテイトの顔を容易く笑顔に変えていた。聡明で包容力のあるクレインの顔が思い浮かぶ。彼といると他の事などどうでも良くなってしまう。

この前、エトルリアで楽しんだ初めてのデートと言つても過言ではない時間は今でも宝物だった。

何もかもから解放されて、一日あの人の傍にいる事が出来たなら……。

「失礼します」

昼休憩はとづくに終わっているのに、忘れているのだろうか。副将ソランが部屋に入った時もテイトは窓辺にいた。

「おや、いつも仏頂面の団長が部屋に入るなり笑つてるとは珍しいね」ソランとは幼馴染で、見習い修行でも同じ釜の飯を食った仲。厳しい彼女は、いつも仲間へは最後に甘くなってしまうテイトの右腕だ。

本題をすぐ振るつもりだったが、団長の様子がいつもと違うことに気づいて窓辺まで歩いていく。

テイトは背後から副将が近づいても気づかずに、声をかけられて肩を跳ね上げながら持っていた紙を慌てて隠す。目の前にいる意地悪な笑顔は全てを目撃されたことをありあり伝えてきて、彼女は思わず口を尖らせた。

「……仏頂面で悪かったわね」

「やだね、これも洒落よ。気にしないで」

親友のあまりの言い草に、テイトも硬い表情で固めるいつもの鉄の女へ戻ってしまった。

(もう、シャニーみたいな事をするなんて油断も隙も無いわ)

ゆっくり手紙を読む暇もないではないかと振り返った時、ふと時計が視界に入っとうっとした。とつくに昼休憩の時間は終わっていた。ソランが現れた時点で気づくべきだったのにどれだけ気が抜けていたのかと自身を叱る。

せつかく良い顔をしていたのに申し訳なかったとソランは笑って見せると、後ろ手になっているテイトの腰付近を指さした。

「おおかた、クレイン様から来た手紙を読んでいたんでしょ？」

何でバレたんだ。顔にはそう書いてあって、見る見る顔が真っ赤になるテイトは何も答えないが、それが答えだ。

朝一番で郵便配達員がどきっと置いていった団長宛の手紙の中に、明らかに違うものが混ざっていた事をソランは知っていた。

二人の関係を第一部隊の連中……いや、騎士団中の皆がもう知っているのだから隠す必要も無いだろうに。

今も頑なで、部隊の者が進捗を聞いても一度も返してくれた事は無い。

「で、どうするの？」

今回もいろいろ聞き出してやろうと身を乗り出し、俯いてしまったテイトを下から見上げてやる。

「どうするって？」

テイトは全く心当たりがないような顔をして眉をひそめているが、演技に決まっている。あれだけ緩んだ顔をしていたのに、何も思うところが無いなんて言っただけ誰が信じるというのか。

手紙を隠すテイトの手を突つきながら単刀直入に投げつけた。

「とぼけないの。クレイン様のところに行くの？」

ソランは許さなかった。エトルリアで見せられた二人の姿は、とてもただの友なんて関係には見えなかったし、クレインからこれだけ手紙が来るのはただ事ではない。何よりこの手紙の隠し方はあからさ

まだ。

これだけ愛し合っているのに、いつまでもこんな遠距離は良くない。二人で手を取り街へと消えていく時の幸せそうな顔を見たら、テイトが何処に居るべきかなんてはつきりしていた。

「なっ、な！ 何言ってるのよソラン、冗談はやめて」

ところが話を振られたテイトは真っ赤になって、破裂しそうなほど狼狽し始める。

相変わらず往生際の悪い彼女の目は口以上に真実を語ってくれているというのに、この期に及んでまだバレていないとでも思っているのだろうか。

いい加減に諦めろと、ずいっと顔を近づけて意地悪く笑ってやった。

「白を切ろうったって無駄よ。どこにでも噂好きは居るんだから。エダとかね」

第一部隊のムードメーカーはとにかく顔が広いので、あちこちで噂を拾ってきては話を広めてしまう。お膝元の第一部隊の話を彼女が拾わない訳が無く、テイトがクレインと恋仲だと噂好きから噂好きへとリレーされ、今や騎士団中に広がっていた。

(最近何か皆の視線が気になると思っていたら……そう言う事なのね……)

そこまで考えると、ますます顔から火が出そうで今にも破裂してしまいそうだ。

妹にも似たエダの悪気のない笑顔が浮かんで、テイトは思わず額に手をやる。ここまでされてしまったら、もう観念するしかない。

「正直なところ、行きたい気持ちもあるわ。でも、団長として再任されたからには——」

何も自分に課せられた使命が無いのなら、今すぐにも飛んで行きたかったし、エトルリアであるまま彼に抱かれてついて行ってしまいたかった。

それを今ここに立たせているものは団長としての使命。天馬騎士団の再建という重責と、多くからの信任が彼女をエトルリアから発た



せた。

多くの想いを背負って正式に団長と選ばれたのだから、私情で立ち止まるわけにはいかない。

「それとこれとは話が別だと思うよ」

だが、ソランはテイトが言い終わらないうちに首を横に振ってきた。

「もう少し、自分の気持ちに正直になっても良いと思う。本当に貴女、笑わなくなった」

もつと自分の幸せも考えろと親友がその目で伝えてくる。

色々な人に言われてきた。もつと自分を出せばいいのにと。それが出来たら苦勞しない性分なのだから仕方ないと、その都度思ってたけれど、自分でも分かっている。最近全然笑えなくなっていることが。

何もかもから解放されて笑顔を見せる事が出来るのは、優しいあの人の中だけだ。

その中に行く事を考えろと親友は言ってくれるが、やはり自らが選んだ道だ。はじめもつけずに途中で降りるのはあまりにも無責任に思えてしまう。

「……分かった。考えてみる。でも、私にもこれだけは果たさないと、思うところもあるの」

彼女だつて分かっている。いつまでもクレインの気持ちに答えを出さないで居るのは失礼だと。

彼は動乱終結の日からずっと、真つ直ぐな言葉で自分に愛を捧げてくれて来た。それなのに、天馬騎士団の再建を果たすまで彼には答えを待ってもらうことにして、もう動乱の終結から半年以上経っている。

自分のような傭兵の事など、その間に忘れてくれるかもしれない。そう思った時期すらあった。それほどにクレインは輝いて見えた。

しかし、エトルリアで会った時に彼がしてくれた全てが、その考えが間違いだつたと気づかせてくれた。

「私だつて、クレイン様の事は……愛しているもの」

もし、もしクレインが自分以外の誰かと結ばれるのだとしたら……  
そう考えたら途端に心が悲鳴を上げた。

それでようやく分かった。自分はクレインの事を愛しているのだと。それはもう、他人に対しても口外できるほどに深く鮮明だ。誠意には誠意で返さなければならぬ。

「私たちも手伝うから。クレイン様の好意、しつかり受け止めてあげなさいよ」

テイトの手を取ってウインクしてくるソランが天使のように映る。

騎士団を放り出してしまおうという話なのに、自分を応援してくれる仲間がいる事が本当に嬉しくて、戦い続けて凍り付きそうな心を溶かしてくれる。

自分は孤独に戦っている、ユーノのような人望も無い。そんな風に考えていたことが愚かしく思えるほどに。

「ありがとう。私も決意が固まった気がする。そうね……後半年……期末までには必ず」

天馬騎士団の団長選出は基本一年に一回。三月中に固められて四月から新体制となる。

前回の七月の選挙は騎士団再建中で団長代理だったため、期中での選出戦は例外中の例外だった。

もうあと数日で、この半年間に築いてきたものを手放すことが出来る。それを見届け、これから三月までの期間では、イリア内の関係を強化することに手を尽くすつもりだ。

ようやく決意した団長にふつと笑ったソランは、部屋に來た本題を振る。

「そうだ、そう言えば貴女の妹さん、昨日『赫竜』におもちやにされたって知ってるわよね？」

持つていた手紙がするつと落ちて宙を舞う。

妹が……あの時が蘇る。おまけに今回は『赫竜』だ。あの男に目をつけられて喰われなかった者は未だかつていない。

妹が……またしても。もう何回目だろうか。八月に夜賊から襲われて意識を失って、回復したらまた賊に短剣を向けられ。やっと完治

したかと思つたらまさかのソルバーンだなんて。

なぜあの男が妹を狙つたのだろうか……。そんな疑問を押しやつて余りあるのは、早く妹の顔を見たいと言う焦り。

「な、なんでそれを早く言ってくれないのよー！」

「あー、まあ別に大した怪我は無imiみただし。レイサさん、昨日のところは帰したみたいだけどね」

医学的治療が必要で絶対安静と言うわけでなければ、騎士団では重傷者扱いはされない。

だが、テイトにとつては気が気ではなかった。二週間眠り続け、そこから回復してまだ一か月も経っていないのに。

ソランは大したことは無いと言っているが、この人が大変だと言つた時には瀕死だ。

テイトは城中探し、それでも足らずに天馬に乗つて実家に飛んで帰つた。

「どうしてあの子ばかり……」

実家には生活感が残されているものの、そこにあつたのは静寂だけだった。

おかえりと、いつもなら朗らかな笑顔が飛んでくるのに、部屋を包む静寂は不安ばかりをどんと膨らませる。

台所の水切りラックに置かれた食器の下にはまだ水気があり、くしゃくしゃのベッドが生活感を醸し出しているが、当の妹はいなかった。

静かな空間は自分の幸せに現を抜かしていた事を責めるようで、テイトは自身に腹が立って仕方なかった。

### 第3話 彷徨う太陽

イリアは十月に入り、いよいよ冬に突入していた。それを知らせるように、今日はこの季節で初めての雪が降っている。

しんしんと降る雪のエデツサを、一人で傘も差さずに歩く乙女の足取りは、彷徨うかの様に左右へふらつき、すれ違った人とぶつかって跳ね出されても謝る余裕さえなかった。

それでも目的地にたどり着いた彼女は、ドアを開けて賑やかな場所へと入っていく。

「何だシャニー、今日も来たのか。ひとりか？」

頭に雪が積もったままのシャニーの顔を見て、バーのマスターは驚いた様子でカウンターへと手招きしては、寄って来た彼女の頭を叩いて雪を落としてやる。

普段は幼馴染や部隊の連中と一緒に来てバカ騒ぎをしていく彼女の顔に浮かんでいるものは、まるで霧の湖のような静けさ。

「うん、ひとりだよ」

今日もだ。こんな雰囲気的女性が一人で飲み屋に入って来たら、荒くれが黙っていないものだが誰も手を出さない。昨日ちよつかいを出して酷い目に遭ったばかりだ。

「昨日と同じものをちょうだい」

外套を背もたれに掛け、剣を横に立てかけるとシャニーはカウンターに腰掛ける。

だが、彼女が当たり前のように口にした注文内容に、マスターはますます違和感を覚える。

「ほごほごにしておけよ」

まだ成人になって半年の人間が口にするには、あまりに強烈な琥珀色の蒸留酒。

浮かぶ氷がいい音を立てて万華鏡のように輝く琥珀色の酒を、シャニーは色の消えた顔でじっと見つめている。

「お前はルシヤナほど飲めるクチじゃねえ。今日は寝るんじゃねえ

ぞ」

昨日も同じものを頼んで、それを一回お替りしたくらいで彼女は寝てしまった。

いくら荒くれどもを黙らせた後とはいえ、こんな若い女が一人で酒に寝ていたら何が起こるか分からない。

マスターは仕方なく二階に連れて行つたのだが、今日も懲りずにチビチビとやっている。

「マスター、昨日はあの人は来なかった？」

—— 一流の戦士は一流の酒を知らねばならない

あの紳士が来るその時をじっと待ちながら、形からでも入ろうと彼の言葉、彼の選択の通りに飲む蒸留酒は苦いだけだった。

「ああ。お前が寝ちまつてからも一応見ていたが、それっぽいのは来なかったな。ま、一週間に一度来るか来ないかだからな」

もっと彼に話を聞きたかった。叱られるかもしれないが、それでも。

また一口、酒を飲んで鉛のような気持ちを腹に押し込める。胸が焼け、腹に溜まった重いものが鈍く燃えるような感覚。

(こころって……こんな静かだったんだっけ)

周りは騒がしいはずなのに、何も音が耳に入ってこない。空きつ腹で五十度を超える酒を飲んで酔いが回つたのだろうか。

「独り酒なんて……あたしには合わないな」

分かつていた事を改めて口にして、シャニーは自分に笑った。美味しくくないし、楽しくもない。独りでいると、浮かぶのは思い出したくない事ばかり。

(天馬騎士になるって……こんな事だったの……?)

霧の湖のような眼差しで見つめる琥珀色の湖面に、色々な人の顔が浮かんでくる。みんな自分に色々アドバイスしてくれた。だが、それを一体どれだけ吸収することができただろうか。

今もこうして、得体の知れない力を求めて彷徨っている。ユーノは自分の強さより、仲間の力を引き出す力こそ必要だと教えてくれたのに。

「デイークさん……あたしの進もうとしている道は……正しいのかな……」

イリアの礎となり民と共に戦い続ける。そう誓った矢先からこうして折れている自分を見たら、師匠は何を言うだろうか。もう、来週には配属式があり新人は卒業だと言うのに。

琥珀色の鏡に映る師匠は答えぬまま遠ざかり、視界がどんどんぼやけてくる。

(……ごめんなさい。せつかく、守れる剣を教えてください……  
デイークさん……)

溢れる気持ちを押しこむ様に酒を腑に落とす彼女にマスターは敢えて声をかけず、しばらくしないうちに今日もシャニーは寝てしまった。



翌朝、十八部隊では今日もルシャナが誰よりも早く来て槍の稽古をしていた。

この時間なら、自分が一番という事は普通なら無い事。ひっそりとする稽古場が部隊の異常を伝えてくるようで、槍を構えていても違和感ばかりが浮かんでまるで集中できない。

ふうつと降参する様にため息をついていると、ミリアとレンの二人組が登城して、副将代理に手を挙げて挨拶しながら声をかけてきた。

「ルシャナー、シャニーは今日も休み？」

同じ村に住んでいて、いつも一緒に登城するルシャナに聞くのが手っ取り早い。

この前ようやく帰ってきたと思ったら、またこんなことになるなんて。

いつも絡むミリアにとっては、シャニーがいないと十八部隊らしくなくてつまらなかつた。

「うん。命に別状は無いつて言ったってあんな戦闘した後だしね」

返ってきた言葉にしよんぼりとミリアは俯いた。あの時、どうすれば良かったのだろうか。

恐ろしい光景だった。業火が吹き上がり、その中に炎の魔人とシャニーだけがいた。助けたくても、吹き上がる炎に天馬が怖れて降りることが出来なかった。

上から見ていただけただけの自分たちでも、これだけ残像が残っているのだ。戦った本人に焼き付いた記憶がどんなものかは想像すらできない。

「あー、ちくしょう！ やっぱあの時、皆で突っ込めば良かったんじゃないツスカ?!」

あの場にいた者は皆そう思った。結局、シャニーだけが戦ってケガをした形になってしまった。

「ミリア、あの時睨まれて固まってる」

あの時自分たちが助けていたならば……地団太を踏んで悔しがるミリアだが、横から冷や水を浴びせられた。いつもレンがこうして冷たいツツコミを浴びせてくるので、毎回ミリアの目が吊り上がる。

「う、うっさいな。ウチのバラージショットなら」

「命中率、10〜15%。仮に命中したとしてもダメージゼロです」

レンの分析能力にはキレが増してきている。元からそうした観察をすることは好きだったが、それを戦場で活かせると知ってからはデータ集めにも余念がない。

魔法を主戦武器とすることで、後ろから戦場を見渡させる事も助けになった。

「それあの時言ってくれよ……」

だが、相変わらずワンテンポ遅いというか。虚勢を張ってあのまま突っ込んでいなくて良かったと、ミリアは内心胸を撫で下ろしていた。

「あの男はエラーが多く、補正と修正に時間がかかりました。あの男は人ではないと思います」

このデータ人間がエラーなんて言葉を使うなんて。どうせ計算ミスだろうとミリアがレンの額を突つつく。

「その通りだよ」

木の上で相変わらず寝転がっていたレイサの声が聞こえてきた。

誰もが朝から寝ているものだと思っていたので、上体を起こして見下ろしてくるレイサに驚きの視線を向けている。

「あいつは明らかに人外の力を操ってる。魔導書無しにあれだけ炎を召喚するんだ、タダモノじゃないよ」

レイサには正直自分では勝てる気はしなかった。あの炎の前では短剣は届かない。

だが、そもそも彼と戦う機会などなかった。彼にとっては、喰いごたえの無い、つまらない戦闘力だと見抜かれているからだ。

それどころか、彼が持っているものを露にして戦っているところ自体、本当に久しぶりに見た気がする。

「炎の精霊フアラの力を取り込んでいる可能性があります」

レンが唐突に口にした精霊という言葉に、ミリアはすぐ苦笑い。精霊なんてお伽噺の本でしか見たこともない。

「そんな神話みたいな話あるわけないだろ？」

色々な角度から検証しても、魔導書無しで炎を召喚するなんて火竜くらいしか当てはまらないが、彼のエーギルの流れは竜族——マムクートではない。同時に、人の流れでもない。

「いや、可能性としてはなくはないよ」

レンが出した結論にミリアが手を払いながら苦笑いしているが、また木の上から声がした。表情の薄いレンの顔でさえ、どうだと言っているのがはつきり分かり、ミリアは困惑している。

「取り込んでると言うより、生まれた時から宿しているもんなんだと」今日のレイサはよく喋る。しかも面白おかしく茶化してくる訳でも無いので妙な気分になってくる。彼女はオンのスイツチがあるのかと思うほどいつも緩いので、冗談なのかさっぱり読み取れない。

「じゃあ、あのソルバーンは火の精霊そのものってこと？」

「私のところのばーさんが言ってた話だけだね」

精霊の化身なんてものがそこら辺をうろついている訳が無い。そう言いたげなルシヤナだったが、今迄レイサの言っていた事が全てニイメからもたらされた情報だったと分かると一気に表情が固まった。

ニイメは闇魔法の大家。魔法の根源である精霊についても、かなり



造詣が深い彼女の言葉とあらば、レイサのそれとはまるで意味が違ってくる。

「だからあいつには関わるなって言ってたあつたのに……あのバカ」

こうなる事はレイサには予想がついていた。ソルバーンが初めてシャニーを見た眼は、間違いなく獲物を見つめる眼だった。

自分がない時を狙ってくるとは迂闊ではあつたが、わざわざ逃げずにあの場で挑まれた戦いに乗ってしまうなんて。

彼女だつて気づかなかつた訳では無いはずだ。勝てる相手では無い事くらい。

「あいつは賊討伐をする私たちを守るためにあの場に残つたんです」

即ちルシャナがフォローする。少しでも早く賊を討伐し、住民を安心させたい。部隊の皆はその一心だった。

守られた側にとつても辛かつた。彼女を犠牲にすることで、自分たちが今こうして生きる事が出来ているのだから。

「シャニーには、後で謝りに行かないといけないと思つてます」

ルシャナに続いてミリアやレンも頷いているが、二人は困つた顔をしている。

「それがさー、あれから毎日仕事が終わつた後、シャニーの家に見舞いに行つてんすけど、いつ行つてもいないんすよ」

「昨日もパンケーキを持っていききました」

負けたとはいえ、ミリアにとつてはシャニーは憧れのままだつた。流星のように駆けて業火をかいくぐり、魔人相手に剣技を嵐のように繰り返す姿は自分には真似できない。

その憧れの人が敗れて傷ついているのだから、他の誰よりも先に行つて癒してあげたかつたのに、いつ行つてもシャニーはいなかつた。

「バカツ言うなよー」

おまけにレンが何の考えもなくぽんつと口にしたセリフは、いくら彼女の口に栓をしてもレイサに聞こえていないはずが無かつた。

「昨日の領収書……それか。金、返しときなよ」

見舞いと称して毎日遊びに行つていたに決まつている。おまけに

シャニーがいなかったとなれば見舞いに持っていたケーキは自分たちで片付けたと言う事になる。

バレてはしようがないとミリアが舌を出して笑っている事からしても、どう考えても分かっている部隊の経費から出したのは間違いない。

「でも、あいつが遅くまで家にいないのは本当です。私も家が近いから毎日見えますし」

一体どこに行っているのか。ここ数日、日付が変わってから、何処からか天馬に乗って帰ってくるころを自室からルシャナは見ている。

昨日はついに、その時間でさえも帰ってくることは無かったので心配だった。

よく食べ、よく寝るを信条にする彼女が、そんな夜更かしをしているところを見たのは初めての事。

「シャニー……どこにいるのかな。大丈夫かな」

落ち込んだ声のため息とともに漏れて、ミリアは空を見上げた。

部隊の中を明るくしてきた二人。プライベートでも家族がいない者同士、よく互いの家に泊まって親しくしてきた。

何より、自分の未来を切り開いてくれた人なのだ。落ちこぼれだった自分に声をかけて、この弓銃の道を一緒に探してくれた憧れの人。

心配で、心配で仕方なくて、居ても立っても居られないのに、どこに居るのか分からなくて声も掛けてあげられない。

もどかしくて、息も出来なくなりそうだった。

「ミリア、元氣出して」

レンは珍しく萎れるミリアを励ますが、気持ちは同じだった。何とかしなければ……部隊の空気が重くなっていく。

彼らの元気の無さも手伝って、レイサは焦りを覚えていた。

シャニーが夜な夜などこをうろついているのか、天馬で飛んで行ってしまうのではレイサにもまるで心当たりが無い。良くない事を考えている事だけは想像がつく。

休めと言ったのは、彼女に対してだけは間違いだったのかもしれない

い。彼女の家には家族はいないのだ。

「やれやれ……あと四日で配属式だって時に。ソルバーンのヤツ……！」

何もこのタイミングで無くてもいいのに……。

大きな変化はただでさえ負担が大きいのに、こんな余計な事まで背負っていたら、せつかくテイトが育てて来たものが壊れてしまうかもしれない。

だが、こうなった以上はチャンスと捉えるしかない。部隊にとっての試練が、少し早く来たのだと自身に言い聞かせ、ここは彼女たちに任せてみることにした。

ここで躓いていては、この部隊には先はないのだから。

## 第4話 最重要任務

昼の休憩時間。多くの騎士でごった返す食堂は本当に騒がしい。この時間ばかりは冷たい鉄の仮面を被る者も、普段の優しい顔に戻って楽しみに笑う。

その中でもひとときわ、窓辺の一角は毎日騒がしいはずのだが、最近火を失った暖炉のように静かだった。

「はあ……」

机の上には、ほとんど手が付けられずに残ったままの昼食が広がっている。

その前に座っているのがレンならいつもの事なのだが、今日はそれがミリアだから、一緒に昼食をとっていたルシヤナやレンも心配そうに彼女を見ていた。

おまけに、ミリアは腹の奥から全部出てきそうなほど深いため息を何度も、何度も吐くものだから、余計に場の空気が沈む。

「ミリア、さつきからため息ばっか」

目線で突つつくようにレンがミリアに横目を向けるが、彼女からはいつものような反応が返ってこない。

（やっぱりか……）

ルシヤナは彼女の視線を追ってみて、しばらく誰も座っていない席をミリアと一緒にじっと見つめていた。

普段なら一番に明るい声が咲き、朗らかな笑みで場を包んでいた人が座っていた場所。

周りにはこんなに騒がしいのに、まるで夜に灯を奪われたかの様この場所だけ沈んでいる。

（あいつが一人いないだけで、こんなになっちゃうものか）

如何に一人が引つ張ってきたかを思い知らされるようで、ルシヤナは唇を噛んだ。

これではあの時と変わらない。五月の、シャニーが暴走した時と、何も。

「ルシヤナ、相談があるツス」

ぼんやりとそう考えていた時だった。ふいに名前を呼ばれるままにミリアへ視線を移す。思わず目の前に座っているのがミリアかと疑ってしまった。

こんな据わった目をしているのを初めて見た気がする。いつものいたずら好きとは別人のような顔だ。

でも、こんな若草色の髪に桃色の瞳なんて、イリアではかなり珍しいから見間違えるはずもない。

「何？ 酒の事なら任せてよ」

溜息を吐いていたと思ったら、今度はこんな据わった目をして。

沈んだ場がさらに重く沈み込んでいきそうで、とつさにルシヤナはリーダーを真似て冗談を口にしてみたのだが、ミリアの顔は緩むどころか眉が吊り上がった。

「違うッス！ シヤニーの事ッス！」

強い言葉で返されてルシヤナはすぐには言い返せずに、思わずレンに視線を送ってしまった。

彼女も驚いたようで、小さな口をぽかんと開けてただミリアを見上げている。

だが、二人ともその心は同じだった。たまたま、ミリアが最初に話を切り出しただけで、どうにかしたい気持ちは一緒。

「ウチ、シヤニーを助けてあげたいッス」

ミリアは立ち上がると机に上体を乗り出し、両拳を握って懇願するようになりとルシヤナの目を見つめた。

周りは背の高いミリアがいきなり立ち上がったので何事かと見上げています。

(やっぱり、そう言う事か)

ミリアにとって、シヤニーが憧れの人だと言うのはルシヤナも知っている。

どうにかしたい気持ちは彼女も同じだったから、頷いているとレンの視線も二人に加わってきた。

「ん。いつもしてもらってばかり。助けてい」

このまま帰ってくるのを待っていては駄目なのは分かっている。

ルシヤナの目にも、最近のシャニーの行動は異常に映っていた。絶対に、何か変な事を考えている。

普段あまり落ち込まない彼女だからと最初は放っていたが、日に日に遅くなる帰宅が、底なしの沼に沈んでいく姿に見えて仕方なかった。

今思えば、もっと早く声をかけてやれば、こんな事にならなかったのかもしれない。

「あいつがずっと引つ張ってきてくれたからね。何とかしないと思っててるよ、私もさ」

ルシヤナはふと窓から外を見上げた。今頃、どこで何をしているのだろうか。リーダーは。

——なら！

そんなミリアの眼差しがまっすぐに突き刺さってくるようだ。

彼女は今も立ち上がったまま、机に手を突いて更に身を乗り出してきた。普段はそうも感じないが、やはり上背がある分、迫られると結構な迫力がある。

「ウチは前の時はケガでシャニーを支えられなかったから、今度は守ってあげたい」

あの時、部隊が崩壊しかけた五月の事件の時、皆は帰ってきたシャニーを迎えて、許した。そしてその背中や肩に手を添えて、一緒に前を向いて新しい十八部隊をスタートさせた。

その大事なシーンの中心で、憧れの人の背中を一番に支えて、一緒に未来を切り開く一步を踏み出したかったのに、それが出来なかった。

今度は、自分があの人を救いたい。ミリアの瞳が今まで見たこともないくらいに強くて、ルシヤナも席を立った。

「よし、じゃあ今日はあいつがどこに行ってるのか探そう」

今はこれが一番重要な任務だ。ルシヤナは午後からの予定をすべてキャンセルする事にして、本格的に部隊としてシャニーの行方を追うことにした。

(でもな……闇雲に探しても捕まるわけないし)

この広大なイリアで、どこにいるかも分からない人を一人探すのはあまりにも難しい事。

まして、シャニーは天馬でどこへでも飛んで行ってしまおう。あの性格だから普通なんて通用しない。

少なくとも、カルラエの町にはいないとゲベルから話が上がってきている。さっぱり手掛かりがない。

配属式に間に合うだろうか。間に合わないにしても、何とか一週間以内には見つけ出さないと……。何か良い案が無いか……。辺りをぐるつと一周見渡してみる。……何もあるはずが無い。

でも、一周してみてもレンが視界に映った途端、ルシヤナはポンと手を打った。

「レン、エーギルの流れでうまく捕まらないかな？」

「ん、頑張る」

こうなったら魔法使いのスキルに頼るしかない。自分しかできない事とレンも銀の瞳に力を籠める。

「シャニーのエーギルの流れ、他の人と少し違うから、もしかしたら分かるかもしれない」

今まではあまり気にしてこなかったが、あれだけ分かりやすいくらい変わっているなら、近づけばきつと分かるはず。

この魔法の道も、シャニーがいなければ開花することは無かった。自分の未来を切り開いてくれたリーダーを必ず救い出すと、レンは小さな口元にきゅつと気合が入った。

「あいつに全部背負わせちゃいけないんだ。十八部隊として、あいつを守ろう」

厩舎のところまで戻ってきて、残りの仲間も呼ぶとルシヤナは槍をすつと掲げた。

普段はリーダーが行う事。大事な任務の前に行う十八部隊のルーティン。

一人足りないが、今日の最重要オーダーを前に、ミリアとレンもそれぞれ弓銃と杖をルシヤナの槍に添えて掲げた。

「第十八部隊 作戦を開始する！ ウチ達のリーダーを守れ！」

武器を強く掲げて高らかに叫ぶ。ところが、ルシヤナが腹に力を込めていると先にミリアが叫ぶものだから二人の目が点になる。

「それは副将代理の私のセリフでしょ？」

「言ってみたかったツス。これ」

あれだけ真剣な眼差しをしていたのはやっぱり見間違いだっただか。

照れ笑いしながら頭の後ろに手やるミリアに若干調子を狂わされながらも、彼らは天馬に乗って高いイリアの蒼穹へと消えていく。

どこかにいる、底なしの沼に飲み込まれてその輝きが遠ざかる、大事な人を求めて。



陽はとうに沈んだ。詰所には続々と十八部隊のメンバーが戻ってくる。

視界が命の天馬騎士にとって、夜空を飛び続ける事はかなりの危険を伴う。結局昼の時間を全て費やしても、シャニーには辿り着けなかった。

ルシヤナは開けっ放しの詰所の入口をじっと見つめていたが、姿を見せるどの顔も俯いていて、報告など聞くまでも無い。

「ほとんど戻って来たね。……成果無しか」

彼女の言葉がますますメンバーの心に疲労を膨らませる。皆で地図の周りに集まり、訪問先へ次々印を入れていく。イリアの中心にあるカルラエ城から放射線状に伸びる線は余すことなく地図を赤色に染めた。

「これだけ探して居ないって、洞窟かどっかに籠って修行でもしてるのかな」

そう口にしてみて、ルシヤナは即自分で首を振って否定した。狭い所を嫌う彼女がわざわざそんな事をするはずが無い。もし一人で修業するなら、小高い丘のような開けた場所のはずだ。

念のためエデッサ城にも顔を出してみたが、ユーノを心配させるだけになってしまった。もうあらかた、行ったことのある場所は潰した



はず。

腕組みをして渋い顔をしていたルシヤナは、頼みのレンが部屋の外に見えて身を乗り出した。

「レン、どうだった？」

「ううん。捕まらない」

ガツカリと肩を落とすルシヤナにレンもしょんぼりと俯いた。手元の地図にはびっしりと経路と計算が書きこまれている。

シャニーのイーグルは掴んでいる。だが、彼女の飛んで行くスピードがあまりに早くて追いつけないのだ。同じ天馬なのにどうしてこんなに移動能力に差が出るのか……。

いつもは気にしなかった馬術の差がこんな所で足を引っ張るとは。実技試験でも自分は下から数えた方が早いほう。相手は騎士団でぶつちぎりにトップの成績。

「レンでダメじゃな……。皆、今日はもう危ないしここまでにするしかないか」

副将代理として、これ以上無理な搜索にメンバーを駆り出す事は出来ない。止む無くルシヤナは皆に作戦終了を伝えて解散を促したが、途端にミリアが立ちほだかった。

「ウチはまだ探すツス！ ルシヤナも付き合って欲しいツス！」

—— 見つけるまで諦めたくない！

ミリアの目にそう言われて、ルシヤナの足が止まる。諦めたくないのは同じだ。ミリアに合わせるように他のメンバーも再び出撃の準備を始めている。

「ルシヤナ、まだ私、魔力残ってる」

くいくいと服を引っ張るレンが下からぶくつと頬を膨らせて見上げてくる。だいぶ範囲は絞られてきているのだ。もう一息なのに、ここで諦めたら今までが全部無駄になってしまう。どんどんと引っ張る力が強くなってきて、とうとうルシヤナは命令を撤回した。

「よし……。腹を括ろうか！ ただし、日付をまたぐまで。そこがデッドラインだ」

皆、手に灯を持って二人一組で天馬の許へと戻って行く。

「レン、ウチらで絶対にシャニーを見つけるツスよ！」

「ん、絶対」

ミリア達は昼間とは反対に西の空へ向かって飛び出していく。

もう眼下には何も見えない。けれど、この黎の空のどこかに必ずいるはずなのだ。二人にとつての帰る場所が。

嘎れても、それでも彼女の名前を叫び続け、その声は月が薄れ始めても途切れる事は無かった。

## 第5話 真白の門出

あれだけ必死に探したのに。部隊の者たちは夜通しシャニーを探したが、結局捕まえることが出来ないまま週末を越えて迎えた月曜日の朝。

普段と変わらず高く澄んだ空は突き刺すように冷えて、緊張する背中が更に伸ばされるような気持になる。毎日通う場所なのに、今日は何か落ち着かない。

「おはよう！ みんな」

そわそわするミリアやレン達の許に聞こえてきた声は懐かしく、そして緊張を吹き飛ばす元気をくれる、皆が今一番聞きたい声。

皆が振り向くと、ルシヤナと共に登城したシャニーが、こちらに手を振りながらいつも通り白い歯を見せていた。

「チーツスー」

「副将、おかえりなさい」

さっそく駆け寄っていく二人。すぐに明るい声が咲いて朝のカルラエに活力を与えてくれる。

どこから見ても普段通りの光景。だが、こうしてこの場で集まることが出来るのは、もうこれが最後かもしれない。

配属式当日。辞令が下ればそれぞれが各部隊に散って、任務のためにバラバラの場所へ旅立つことになる。

「みんな集まってるねえ。最初のころと比べたらみんないい顔してるよ」

天馬にも乗れず、武器の扱い方を教えてくれと言いに来ていた、何もできない村娘たちばかりだった半年前が昨日のことのようだ。皆、自分の誓いをしっかりと手に入れて一人前の顔をしている。

レイサには感慨深かった。これで少しは、姉に恩返しできただろうか。あの団長の期待に、少しは応えられただろうか。

「ルシヤナ、シャニーを連れて来てくれてありがとうね」

輪に入らずにシャニー達の様子を見つめるルシヤナに声をかけてみるが、彼女の顔は渋い。

「いえ。でもあいつ、やっぱり無理をしてるみたいです」

本当は全てを片付けてから十八部隊の解散と行きかけたが、ソルバーンがそれを狂わせてくれた。

「だろうね」

笑顔が本物ではなかった。ルシヤナから返ってきた言葉でそれは確信に変わった。

ルシヤナから話を聞くと、土日にはいたってはシャニーは一日中家を空けていて、月曜に日付が変わった頃ようやく帰ってきた彼女に仕方なく突撃し、明日必ず迎えに行くと伝えて、こうして連れてきたらしい。

その時に親友が見せた、別人のように疲れ果てた顔。ルシヤナにとっては、今でも思い出すと辛い。

「……あいつ、引き受けてくれるかな」

ルシヤナからの報告に、仲間たちに囲まれてショートレイヤーを揺らしながら笑うシャニーの横顔をレイサは一瞥した。

テイトは嬉しそうだった。妹が自分だけの誓いをはつきり宣言して、イリアのために戦う意志をしっかりと見せてくれたと。

だからこそ、彼女は反対が少なくなかった中でも部隊長会議で配属案を確定させ、こうして辞令の日にこぎつけたのに。

受ける側のあの傷心具合では、期待は逆効果だと優に想像できる。

事の行く末を見守るしかできない歯がゆさに、レイサも落ち着かなかった。



「副団長、第十八部隊の配属式の時間ですが、出席されなくて良いのですか？」

定刻の十時が近づいてきた。時計に目をやるがイドウヴァは部屋から動く気配を見せない。

ライバルがどのような表情で辞令を受け取るのか楽しみだったアルマだが、自分だけが式に参加する訳には行かないので上官に声をかけても、「我々には関係がありませんからね」彼女の反応は何とも薄っ

ぺらなものだった。

「おそらく、どの部隊の長も出席しないと思いますよ。団長がお決めになった事ですから、我々は従っておきましょう」

心にも無い事を。あれだけ団長に盾突いておいて良くこんな事を言えるものだと、アルマでさえも内心笑ってしまう。

イドウヴァにとっては胸がすく思いだった。目の前にぶら下がった団長の椅子を蹴飛ばした十八部隊が、こんな形で終了する事になるうとは。

（ふふふ……団長も血迷ったか。これであの部隊の傭兵ランクは永遠に最下位だ）



「いよいよだね……」

視線を右腕の時計へ下ろすと九時四十分。そろそろ移動しなければならぬ時間で、シャニーはごくりと息を呑んだ。

「みんな、今までありがとう」

皆と手を取り、その顔を見ながらシャニーは笑って挨拶していく。

この半年ずっと一緒に過ごしてきた仲間たちだ。それが十時を境に会えなくなると思うと感謝を伝えずにはいられなかった。

（みんなのお陰でここまで来れた。ホントは……皆に恩返しして別れたかったのにな）

今の自分はこの場にいる皆と過ごした半年が無ければ存在しなかったし、誓いだって手に入れられていない。

そんな彼らに何をしてあげられただろうか。そんな気持ちを今は払った。最後くらい、笑って別れたい。そう思っていると、不意に背後から肩を組まれた。見上げればミリアの笑顔が弾けている。何だか、とても眩しく感じた。

「なーに言ってるんすか！ 別にどっか行っちゃうわけでもあるまいし」

騎士団に入って出来た、幼馴染以外の初めての友達。そして自分の過ちで大怪我を負わせてしまった相手。それでもこうして慕ってく

れるミリアは掛けがえのない存在だった。

お互い元気な性格だから、どちらかが弱った時に励ましてきた。

自分を育ててくれた師にも似た人と離れ離れになる事は、ミリアにだって辛いこと。

「またメシ食べに行こうッス！」

彼女の顔にも涙が浮かんでいる。部隊は違っても仲間には変わらない。そう自分に言い聞かせ、シャニーの手を強く握り返してニツと笑ってみせる。

「おごりは勘弁してよー？」

シャニーも両手をミリアの手に重ねて明るい声で返した。笑って別れよう、二人はしっかりと抱擁する。

「天馬の乗り方に武器の扱い方に色々教わりました。ご恩は一生忘れません」

そこにレンも加わって三人で泣いた。

天馬の乗り方はもちろん、自分に魔法と言う道を歩むきっかけを与えた暖かい風のような笑顔は、歩む道を共にする者がいないミリアやレンにとっては帰る場所だった。

——自分だけの力にすればいい

その言葉を自らも剣をひたすら振るって貫く姿を見て、弓銃や魔法を鍛錬してきた。

彼らに感謝の言葉をかけられて、シャニーは少しだけ心が軽くなる。

(少しくらいは……皆に何かしてあげられたのかな)

「第一部隊に行っても、私たちはずっと親友だよ。困ったら、いつでも話しに来てよ」

そこへすつと差し出された手。この中でも一番付き合いの長いルシヤナだ。

彼女とは住んでいる家も隣同士だし、今日の朝でさえ世話をかけた。親友の温かさにシャニーは涙を抑えられず、彼女の胸に飛び込んだ。

(何だか、あたしだけ取り残されてる気がするな……。みんな……い

い顔してる)

何か、天馬騎士団に入ってから泣き虫になってしまった気がする。もうこれからはこうしている事もできない世界に出ていくのに。

今も自分の剣が何をできるのか、見失ったまま。でも、今だけは……。



ついにやって来てしまった。感傷に浸る者たちの許へ、レイサが歩いて来てその時を告げる。

(さよなら、十八部隊のみんな……)

ぎゅっと胸元のロケットを握りしめたシャニーは、仲間たちの顔を見つめて頷きあう。

意を決し、副将を先頭に歩き出す。目的地は大講堂。重い緊張と、配属先への不安と。さまざまな思いを打ち消すように皆で一歩ずつ進む。

大講堂までの道のりなど十分もかからないはずなのに、あまりにも遠く感じる。

(もしこのまま着かないまままでいられるなら……)

仲間との別れがこんなにも辛いものだとは。シャニーだけでなく、誰もがそう感じていた。

「ねえ、なんか様子が変じゃない?」

無情にも目の前に見えてきた運命の扉。ところが、新たな世界の方こうへ踏み込んだ途端、ルシャナが困惑の眼差しを部屋中に向ける。

「ね。部隊長が誰もいない」

シャニーもきよろきよろとしてみるが、あまりにもガランとしている。入団式の時と比べると、アルマについて行った者たちがこの場にいらないとしても、待ち構える側の人間が異様に少ない。

(どういう事? お姉ちゃんと総務部長さんだけ?)

何度見直しても、やはりこの広い講堂にいるのは壇上にいる二人だけだ。

広大な空間を包む静寂という圧に心細くなってくるが、このままで

は居られないので壇の方へ歩いていき、指定された場所へ向かう。席には白い布が掛けられていて、一応主役である事が伝わってくる。

「第十八部隊の副将さん、代表で辞令を受け取ってください」

心が落ち着きもしないうちに呼ばれて、確認するように思わず自分を指さしてしまう。

ルシヤナやミリアが彼女の腰を押し立てたせると、困惑したままシヤニーがしずしず壇上へと上がっていく。

「代表つて。もしかしてみんな第一部隊っスか？」

「ミリア、静かに」

「あ、はい、すいません」

てつきり、入団式の時と同じように一人一人呼ばれて辞令を手渡されるものだと思っていたのに。

誰かに答えを求めるようにミリアがきよろきよろして周りに問うていると、横からレンにわき腹を突っつかれた。

くすつと漏れる笑いには、彼女と同じ希望が湧いた喜びが混じる。

だが、誰もが分かっていた。この部隊の者が第一部隊という精鋭部隊に配属されるなど、ありえないという事を。

(こうしてお姉ちゃんから辞令をもらうの、四月ぶりかあ)

いよいよシヤニーが壇の前に着き、団長と対面する。

「辞令 第十八部隊所属の諸姉へ告ぐ」

団長の読み上げが始まった。ある者は隣の者と手を繋ぎ、ある者はスカートを握りしめ、ある者は直視できずに下を向いた。

席の先頭の列にいるルシヤナやミリア、レンは自分達のリーダーの背中をじつと見つめている。

どんな辞令が下りたとしても、この部隊の経験は忘れないし、この先もずっと一緒だ。

「第十八部隊を新人教育より解任する。同時に、第十八部隊は本日付けで公式部隊として、国内における国力向上および治安維持の任を命じる」



頭が真っ白で体がぐらぐらする。

(え……? 十八部隊、存続するの? これからも、みんな……一緒……?! 一緒なの!?)

今にも後ろに倒れてしまいそうなシャニーは、背後から飛んできた歓喜の声に押し出されるようにして一步前に出て、気づくと辞令書を受け取っていた。

「聞こえなかったのかしら? 復唱しなさい」

まっすぐにテイトがこちらを見つめている。

—— 一緒に戦って欲しい

姉のあの時の言葉の意味が、ようやくに分かった気がする。

「はっ、はい! 我々第十八部隊は、これより、国力向上活動および国内治安維持の任務に就きます!」

背筋をしつかりと伸ばし、敬礼して見せた。姉に、団長に自分達の決意を見せつける為に。

(これで良かったんだ、これで)

心の底から思った。外国へ金を稼ぎに出向くより、民の傍で声を聞き、剣を振り、叫びを届け続けたかったから。

十八部隊の誓いを姉は認めてくれたのだ。悩みもがいていた気持ちだが、少しだけ救われた気がする。

信じてもらえている。その期待に応える為に戦い続ける、それが誓いだ。

久々に澄んだ笑顔を見せた彼女は、一礼して仲間の許へ帰ろうと背を向けたが、「待ちなさい、シャニーさん」姉に呼び止められた。

「あなたにはもう一つ辞令があるわよ」

後ろからざわざわと声が聞こえてくる。彼女達とも、またこれから一緒に仕事ができると思うと団長の方を振り向く足も軽い。

総務部長から受け取った辞令書をじっと見降ろすテイト。この辞令を、自分が団長の内に読み上げる事になるとは、当初想定していなかった。

想定外の喜びと、辞令を受け取る妹がどんな想いを抱くか、その不

安と。

しかし、もう決断した事。ただひたすら、進むしかない。

「辞令、貴女を本日付けで上級天馬騎士に任命し、第十八部隊 部隊長を命ずる」

何か、頭を後ろに引つ張られるかのような感覚。

(ぶ…………ぶたいちよう……………つて、え?!)

これは夢なのか…………音が遠く感じる…………。

時が止まったかのような静寂の後、背後から拍手が沸き起こってはつと我に返ると、横にいた総務部長から何か白いものを手渡される。

純白の服に空色のマント、それにマントを止める騎士団の紋章入りのブローチ…………士官用の軍服一式だった。

「頼んだわよ。あなた達の誓い、しっかりと貫いてください」

差し出されるまま、テイトの手を握る。

(あ、あたしが…………？ 部隊長……………つて……………そんな……………そんなの……………)

この時のシャニーの顔を見て、隅から見守っていたレイサは嫌な予感が当たった気がして唇を噛んでいた。

シャニーの顔は先ほどの笑顔が消えて、蒼白になっていたからだ。

普段の状態の彼女なら向日葵のような笑顔を見せただろうが、剣を折られたまま彷徨っている彼女には荷が重すぎたか。

「はい…………。部隊長への任命……………謹んでお受けいたします……………」

部隊長、それは部隊の方針の決定者であり、配下の運命を預かる責任者。

(みんなの命を、あたしに預かかって言うの……………？ この剣で？ そんなの……………そんな事……………)

仲間たちの拍手に迎えられながら壇を降りて彼女たちの許へ戻る足取りは、新たな門出を迎えたとは思えないほど鈍く、引きずるように重かった。

輪の中に戻ってもみくちやにして祝福する声が遠く、ぼやけて聞こ

えていた。

## 第6話 幻の栄光

辞令を受け取り、大講堂から出たシャニー以外の十八部隊メンバーは、新たに副将となったルシヤナを先頭にして自分たちの管理区へと戻ってきた。

一度足が止まると、それまで必死になってこらえてきた喜びが一気に爆発して、誰もが飛び跳ねて歓喜を叫びだす。

「驚いた……まさか私たちに部隊を用意してもらえるなんて」

まだ入団して半年しか経たない者たちが、独自に部隊を運営することなど前代未聞だった。今でも夢ではないかと思うくらいだが、周りを見渡すルシヤナの視界には、どの顔にも喜びが満ちている。

「でもこれで、これからも一緒ってことツスよね？ いやー、嬉しいツス！」

体いっぱい喜びを表していたミアは、レンと抱き合って今にも踊りだしそうだ。

これからも同じ部隊で同じ任務。大事な家族同然の人たちを守ることも誓いの一つであるミアにとっては、昇進よりもこの辞令そのものが嬉しくてたまらない。

どの顔も数十分前まで泣いていたと言うのに。彼女たちの喜ぶ姿を見つめていたレイサは、視界の端へ映る気配に気づいて振り向いた。

「部隊長就任、おめでとう、シャニー」

彼女が呼んだ名前に皆が振り向く。

最初は知らない人が歩いてきたのかと思って、口元を手で覆ったり、指を差したりと皆興奮した視線を向け始めた。

（おめでたくなんか……ぜんぜん無いよ……）

そこには士官服に着替えてきたシャニーの姿がある。

純白の上着と空色のマント、肩口から手首までを覆う白いアームスリーブに身を包む姿は雪中花のよう。

かわいいスカート的一般隊員用の服と違い、小さくサイドスリットの入ったタイトなミニワンピース風となっていて、かなり大人の雰囲気

気を醸し出す装い。

これだけ見ても、この年齢での昇進は異例だということをおかかせる。

「あ……。はい、ありがとうございます」

彼女の周りに隊員たちが駆け寄ってきてまじまじ見る。

今まで部隊長だったレイサが着ていたことなど一度も無いから、他の部隊の部隊長の服装を通りすぎりに見てきたただけだ。

皆にとって士官服は憧れであり、立派な鎧や白の服に映える空色のマント、それを留めるブローチに刻まれた天馬騎士団の紋章……。どれを見ても大きく盛り上がる。

「よっ！ 部隊長！ その服似合ってるツスよ！」

「うん。異議なし」

指笛を吹いてミリアが囁し立てる。憧れの人が昇進する様はまるで自分のことのように嬉しい。いつもは彼女の突っ込み役となっているレンも今回は拍手している。

だが、彼女たちはすぐに顔を見合わせた。普段なら冗談の一つや二つ返してくるはずのシャニーが下を向いているからだ。

（みんな、何で……。そんなに嬉しそうなの？）

今も自分を見つめて口々に祝福の声を掛け、念願だった士官着姿を喜んでくれる。

分からなかった。一体何を皆がそんなに期待してくれているのか。彼女達だって見てきたはずだ。自分の剣が木っ端みじんにされ、為す術なく地に転げるところを。

（今のあたしにはとても……。誰か着たいなら着てよ……）

何も守れない自分が部隊の長に立って、皆の命を背負う。

考えただけでも震えが来た。姉が認めてくれたことは素直に嬉しい。けれど、今の自分には周りで一杯に喜ぶ者たちの笑顔を全て守り切る自信は無かった。

おまけに、今までずっと悩みを聞いてくれた人が、どこかに行ってしまう気がして仕方なくて。

闇夜に放り出されて、掴んだ手さえ振り払われた気がして、もう辛

抱ならなくなった。

「レイサさん、どこか行ってしまうの？」

渡された職制表には、どこにもレイサの名前が無かった。

周りが祝賀ムードの中、もうどうにも我慢できなくなっただけにシャニーが口を開く。

その手はしっかりとレイサの手を握って、懇願するような眼差しで見つめてくるものだからレイサも驚いてしまう。

「いや、役職から外れただけで籍は十八部隊だよ」

安心したのか、へなへなと崩れて座り込んでしまった。大事な相談役が今いなくなってしまうたら、とても立ち上がれそうにない。

「なんで……」

半開きの口から零れるように声が漏れた。

何一つ飲み込めない。どうして自分が部隊長なのか、どうしてレイサは降りてしまったのか、どうして……。

「何で教えてくれなかったの？」

心配して屈みこんできたレイサに、シャニーは今にも泣きそうな顔を向ける。

辛い思いをさせることは分かっていたが、この顔を間近で見せられるとレイサも胸が締め付けられる。

「あたし、いきなり部隊長だなんて……そんなこと言われても」

部隊長だったレイサなら事前に知っていたはずだ。自分が役職から外れ、誰が代わりに部隊長になるのかを。

なぜそれを言ってくれなかったのか。事前に知らされていれば、心の準備もできたし、断るといふ選択肢だってあったのに。

「しようがないじゃん。私だって知らなかったんだし」

さらっと返してみるものの、シャニーの眼差しはとても許してくれそうにはない。

（そんなワケ、絶対に無い。知っちゃいけないことまで知ってるレイサさんが知らないはずが無い！）

あちこち暇さえあれば情報収集の為に飛び回っている人だ。その人が、この事だけ知らないなんて。

——ホントの事を言つてよ!!

怒りすら滲むシャニーの瞳に貫かれて、レイサはふっと視線を切つた。

「……仮に知つてたとしても、機密情報をそう簡単には喋れないしね」何も言い返すことはできない。職業柄予てより、情報の扱いには気をつけろと口酸っぱく言われてきたレイサにこう言われては。

自分達が思っていた事と全く違う事をシャニーは考えていた。それに気づかずに喜んでいた事が分かった隊員達も、居たたまれなくてその場に沈黙が広がる。

「だーいじょうぶツスよ、シャニー。困ったことがあつたらレイサさんに押し付けちゃえば」

「うん、異議なし」

それを嫌つてミアアが元気な声で励ましながら肩を抱いて笑いかけた。それにレンも呼応してこくこくと頷き、周りも口々に元気づける。

(みんな、怖くないの? あたしの剣じゃ、みんなを守れないんだよ?)

皆の励ましが、今はとてつもなく重く、恐ろしく感じる。

とても守り切れないくらい大きく見えて、皆の笑顔を見つめる瞳はずっと湖面のように揺れている。

(もう、戦いで誰も失いたくないのに……。このままじゃダメだ、何とかしないと……)

手にした剣で、仲間の脅威を総て払う。それができると信じていた剣は幻だった。

剣を失つて丸腰の自分が、上級天馬騎士として仲間の全てを背負う。守り切れるはずが無い。剣を……。総てを薙ぐ剣を手に入れなければ。

地面の芝をぎゅつと握りしめっていると、前方から笑い声が聞こえてきた。

「そこは異議大ありでしょうが」

一手に仕事が飛んできそうな気がして、レイサがレンに突っ込みを

入れ笑いに包まれていた。

その様子をシャニーはじつと外から見つめる。

(この人たちを……守ってあげなくちゃいけない。部隊長なんだ、探さなきゃ)

ミリアが輪の中にシャニーを誘うが、その手を退けて、静かに立ち上がるシャニーの横顔には笑顔はなかった。

「ありがとう、ミリア」

そこから先が続かない。いつもなら一体どれだけ喋るんだと言う程に後から後から会話が続いて、レイサに少しは仕事をしろと叱られるくらいなのに。

普段、燦々と輝いて周りに笑顔を広げる太陽が、今日はまるで光を飲み込むくらいに沈んでいる。

「ちよつと今日はまだ怪我が治ってないから、これであがるね。初日からごめん」

マントを翻して立ち去る足取りは逃げ出す様に早足で、あつという間に城の中へと消えていった。

いつになく追い詰められた雰囲気の彼女に、誰もその場で声をかけることが出来ず、新部隊始動の初日なのに重たい空気が部隊を包む。

「やれやれ、さすがのあいつでも重かったか」

予想通りになってしまい、レイサは額に手を当ててため息をついた。

朗らかな性格で、めったなことでは落ち込まない彼女でさえ飲み込まれた底無しの沼。ただでさえもがいている時に、最悪のタイムミングが重なってしまった。

彼女が悩んでいる事が何かなど、今迄もよく相談を受けてきたから知っている。だからこそ、彼女にとっては裏切られたような気持ちになったのかもしれない。

「レイサさん、私たちに任せてください」

いつも明るく笑っている、爽やかな彼女の顔に差した影。今まであの朗らかさにどれだけ勇気づけられ、引っ張ってきてもらっただろうか。



今度は自分たちが助ける番と、ルシヤナ達はシャニーが消えた城のほうをじつと見つめている。

親友だけに、リーダーだけに抱え込ませるようなことはしない。

絶対にあの朗らかな暖かい風を取り戻すと決意する瞳たちを、レイサは静かに何度も頷いていた。



城の廊下をブーツが叩く音がどんどん近づいてくる。

士官服に身を包んだシャニーが、空色のマントを揺らしながら真っすぐに十八部隊の詰所へと向かっていた。

「先を越されてしまったな」

突然の声にシャニーの足が止まる。視線の先には、柱の裏から出てきたアルマの姿があった。

彼女は柱にもたれかかって横目でシャニーをじっくり見つめる。

親友が着ている服は間違いなく、部隊長クラスの上級天馬騎士が着用する制服だ。

部隊長初任命の最年少記録を更新しただけあり、服だけが大人びてどうにも着こなせていない。

「あ、アルマ。知ってたんだ」

「ああ。私は事前にイドウヴァさんから聞いていたし、さつき団報が出ていたよ、ほら」

渡された団報の二ページ目には騎士団全体の職制表が載っていた。

第十八部隊と記された下には大きく自分の名前があり、その横には副将として小さくルシヤナの名前がある。

ここまで、部隊長と副将では扱いが違うものなのかと改めて思い知らされて、シャニーの口元はますます厳しくなる。

「部隊長就任おめでとう。ライバルの昇進、嬉しいし、悔しいよ」

アルマにかけられた祝辞は、今のシャニーにとっては毒でしかなかった。

「ありがとう」

口ではそう答え、顔は自然と笑っている。

不思議だった。まるで心と体がバラバラになっているかのようだが、心の強さもとつくに限界を超えているようだった。

「不安しかないけどね。今のあたしに部隊の皆を守る自信ないよ」  
ストレートに放られた不安。ぴくつとアルマの眉が歪む。

こんなことを言う人間ではないはずだ。謙遜も高慢もなく、いつも自然体でより良い方法を探そうと前向きだった。

世界で十八人しか居ない上級天馬騎士の一人とはとても思えない弱気が、それとは一番無縁な人間から毒の様に漏れ出す様は自然と口調を厳しくする。

「何を言っている？ 守る必要など無いじゃないか。皆正規部隊の隊員なんだ、自分の身は自分で守ればいい」

戦場では仲間意識は命取りとなる。これは傭兵騎士としては常識だ。自分の身は自分しか守れない。

「あたしはそうは思わないよ」  
(ふっ、らしいな)

だが、シャニーは頷かなかった。こうして自分をちゃんと出す者が部隊長になるべきだとアルマは思っていたから、一瞬彼女の顔に笑みが浮かんだ。

これこそ、自分が認めたライバルのはずだ。

「仲間だつてイリアの民だ。あたしの剣は彼らも守れなくちゃいけない。守れなくちゃ……いけないんだ」

だが、その後について絞り出されるように口にした言葉は、アルマの口元をきつときつくさせる。

何をこんなに変えているのか分からなかった。部隊長になったからと言って、そんなに狼狽するような人間ではないはずなのに。

足早に立ち去ろうとする親友を呼び止める。

「お前の武器は、いつから大剣になったんだ？」

しばらく立ち止まったまま黙っていたシャニーだったが、最後まで振り向くことは無く、またツカツカと歩き出して詰所へと消えていった。

## 第7話 第十八部隊Ⅱ

冬のイリアに容赦など無い。立てぬ者は凍て付くまま、永遠に氷雪の棺に沈む。

辞令式のあつた日も午前中は晴れていたものの、すぐに曇天が垂れ込んできた。

気づくといつも通りの吹雪に声を、姿を、心さえも閉ざす。喧騒の中を今日もシャニーは歩いていった。目的地も、昨日と同じ。中に入つてまず店の中をぐるっと眺める。ふうっと大きく息を吐きだした。

「マスター、今日もあれちようだい」

外套を背もたれにかけて、剣を横に置き……この流れも大分、様になつてきた気がする。

(今日も……会えないのかな。そろそろ会いたい……)

かれこれ一週間ほど通っているが、未だにあの黒ずくめの紳士とは出会えずにいた。

どうせ今日も軽くひっかけただけで寝てしまふに決まっている。そう思ったマスターは最初からストップをかける事になっていた。こんな毎日、成人となつたばかりの女が五十度超の強烈な酒を煽っていたら体を壊してしまう。

「お前やめとけつて……つて、どうしたんだい、その服」

普段とまるで雰囲気が違うのでマスターは面食らった。

周りの荒くれ共もサイドスリットから覗く白い肌に涎を垂らしかけ、はつとして酒に戻る。あれにちよつかいをかけたら、今度は本気で首を飛ばされるかもしれない。

「あたし、部隊長に任命されたんだ。自分でも……受け入れられて無いんだけど」

不満そうに零すと、出されたちよつと優しめの酒を口にしてじつと正面を見つめている。

(今のあたしに部隊長なんて……重すぎるよ)

いつの間にか、グラスを一气飲みにしていった。足りない、この程度ではまるで足りない。両唇を噛みながら、じつと前を見据える眼差し

は厳しい。

姉は認めてくれた。仲間だってあんなに祝福してくれた。なのに、なのに……。

(早くみんなを守れるようにならないと、このままじゃ……)

今日もループする底無しの沼に飲み込まれそうになっていた。そこから引き戻すようにマスターの声が聞こえてくる。

「ほう、そりやめでてえじゃねえか」

「めでたくなんかないよ!」

計らずも周りの視線を集めてしまった。無意識のうちにグラスをカウンターへ叩きつけてマスターに怒鳴ってしまったのだ。

「……ごめんなさい」

視線でくし刺しにされ、マスターのギョツとした目とかち合った。

自分でも驚いて、シャニーは俯きながら消え入りそうな声を絞る。どンドン自分が壊れていくのを嫌と言うほど感じているのに、もう抜け出せない。

「目の前の仲間ひとり守れないのに、国内の治安維持だなんて。つい最近も失敗したばかりのあたしが部隊みんなの命を預かるなんて……重すぎるよ」

自分でも分かっている。いつもの自分では無い事くらい。こんなにも落ち込んで、前を向けずに恐れる何てかつて無かった。何とかなる、とにかく頑張ろうと常に前を向いて来たはずなのに。

だが、それは自分だけの事を考えていれば良かったからだ。

自分の剣がまるで強敵に通用しない今、部下となり自分へ命を預けてくれる親友達をどうやって守れば良いのか。途方に暮れてまたグラスを傾ける。

その時、ぞろぞろと団体客が店に入ってきて、席を案内しようとしたマスターが入口へ振り向いて目をむく。

——見つけた……!!

その無数の瞳達は互いに見つめ合い、一つ頷くと覚悟を決めた。今

もグラスを独りで傾ける青の背中へ向けて静かに、だが強い足取りで進み、ついに手を伸ばす。

黒く、重く濁って見通せない底無しの沼にすっぱり飲まれて消えていた背中へ。

「おつ、独り酒とはオトナツスね！」

この場にはいないはずの音が聞こえてはつとずる。

「ウチも混ぜてくださいよ、部隊長！」

さつと横の席へ滑り込むようにして座ったミアアが肩を揉んできた。振り向けば、そこにはルシャナやレン。後ろには……部隊の皆がいる。

彼女たちはカウンター席からシャニーを立たせると、店の奥に空いているテーブル席へと連れて行く。

「みんな、どうしてここに?！」

誰にも行先は告げていなかったはずだ。驚くシャニーを囲んで、彼女達はいつも通りに食事を注文してテーブルの上へ広げ始めている。途端に、それまでぼやけていた世界が鮮明に流れ込んで来るようになった。

独りでいた時にはまるで気づかなかった色や音、視線や声をはつきりと感じる。

「レンがずつとストーカーしてたんすよ」

「ミアア、人聞き悪すぎ」

注文した揚げパンに食らいつきながらミアアが指さすものだからレンが怒っている。

(なんか……あつたかいや)

二人のいつも通りの凸凹なやり取りに、それまで凍り付いていたシャニーの口元がほんの少しだけ緩む。そこからテーブルには朗らかな笑い声が響くようになり、少し前まで日常だった騒がしさが戻ってきた。

やはり皆と喋っていると楽しい。シャニーが白い歯を見せて笑う様子に皆は頷くと、ルシャナがシャニーの手を取った。

「私達はあるが部隊長なら異論は無いし、背中任せられるって信じ

てるよ」

いきなり振られた真面目な話にシャニーの表情がこわばった。

「みんなそう思ってますって!」

周りを陣取るミリアやレンからもじっと見つめられたと思ったら、ミリアがニカッと笑いながら身を乗り出して手を挙げてきた。

「だって、今迄だってずっとウチらを引っ張って来てくれたじゃないッスか」

「ん。落ちこぼれだった私たちを育ててくれた。部隊長の笑顔、好き」  
十八部隊は落ちこぼれの巣窟だった。アルマが戦力となりそうな者たちを引き抜いて残った搾りかす。ミリアやレンなんて特にそうだった。初日から稽古をつけてもらったのにさっぱり槍術は上達せず。

それでも機嫌を悪くする事も無く、常に前向きだった。遅くまで付き合ってくれたし、今では相棒となった自動弓や魔法を一緒になって見つけてくれた人でもある。

彼女たちにとってシャニーはリーダーであり帰る場所だった。

(わざわざ探して慰めに来てくれたのか……。良い仲間に恵まれたなあ、あたし)

シャニーは心の底から彼女たちに感謝して笑って見せつつも、それ以上を止めさせた。

「みんなあたしを慰めに来てくれたの? えへへっ、ありがと。でも、これはあたしの問題だよ」

剣の腕も、部隊長としての心構えも、どちらも自身で何とかしないといけない心と技の部分。仲間に心配まで掛けさせてしまい、ますます申し訳ない気持ちで一杯になる。

やっぱり、部隊長なんて……。そう思った時だった。

「ウチはそうは思っていないッス」

さっきまでニコニコしていたミリアの目が真剣になって見つめてきた。

「これは部隊みんなの問題ッス。ね、ルシヤナ先輩」

大事な人が悩まなくてもいい事で悩み、流さなくていい涙を流して

いる。そんな状態を放っておける訳が無かった。

そして、そんな状態になるまで追い詰めてしまった仲間としての罪滅ぼしでもある。

前にもあった。だが今度はレイサの手を借りずに自分たちだけで朗らかな風を取り戻したい。

「勘違いしてるみたいだけど、あんたは失敗してないし、仲間をしっかりと守ってくれたよ。あんたが戦ってくれたから、皆生きてここに居るんだ」

——また失敗しちゃった

昔から良く聞くシャニーの口癖みたいなもの。以前なら舌を出して笑うくらいですぐ前を向いていた。

今回だって、誰も死んでいないし、賊討伐任務にしくじりが生じた訳でも無い。それどころか、あの時シャニーが刃へ勇気を乗せて魔人の前に立ったからこそ、今この場にいる全員の顔がある。

それを伝えたいルシャナは仲間を見渡すと、彼女らは静かに頷いて見せた。

「でも、あたしはソルバーンに勝てなかった。みんなを守るところか、みんなが来なかつたらあたしは今頃……」

——あなたは悪くない

そう言ってもらえることが、どれだけ心を救ってくれるか。

だが、シャニーにとっては今回の失敗をただの一回の失敗と片付ける訳には行かなかった。

己を己たらしめるもの。それが全く通用しない相手がいる。皆の命を守る役目を担う者としてそれでは実力不足だ。

過去二回は何とか生き延びたし、誰も死ななかつた。次もしそんな強敵と相まみえることとなったら……

——もう、誰も失いたくないんだ……

氷がだいぶ解けてグラスの周りに湖が広がる蒸留酒を見つめ、そこまで考えを巡らせているとルシャナが手をそっと取ってきた。

「皆を守ろうって勇気を見せてくれただけで十分なんだよ。お願いだから無茶しないで」

無茶をしないで——まだ一か月も経たない間にテイトにも言われた言葉だ。

——貴女にもしもの事があつたら、貴女を信じている人がどんな気持ちになるか……少しは考えてちょうだい

「でもー」

あの時は分かったと返した。それでも、この部隊の事を考えたら、自分は敵を倒す役目でなければならなかった。

他の隊員のスキルや、ミアアやレンの戦闘スタイルから考えても、前衛を担う事が出来るのは自分とルシヤナくらいしか居ないのだから。

何の成長も無いと姉には叱られるかもしれない。でも、部隊長として、前衛として力が無ければ仲間を危険に晒す事になる。それが何より耐えられなかった。

また腹から上がってくる重いものを酒で流し込もうとした手はルシヤナに止められた。

「あんたが誰も犠牲を出したくないって思う気持ちは分かる」

グラスを取り上げてテーブルの端まで滑らせるとシヤニーの顔をぐっと引き寄せる。

「でもそれは私らだって同じだよ。あんたが自分を犠牲にしたら、私たちはあんたを犠牲にしたことになる」

——そうになったら、あんたを信じてる私たちの気持ちは、誓いはどうなる？

ルシヤナの青い瞳がまっすぐにシヤニーを捉えて離さない。思わず視線を逸らそうとするが、どちらを向いても真っすぐ見つめる瞳がある。やり場を失って俯く眼差し。

こんなにも、信じてくれる人がいる。だから、守らなければ、守る力を持たなければ……。

「ん。十八部隊は私達の部隊なのだから、私達みんなを守ればいいんだと思う」

そのループする世界を雫で穿ち、終止符を打ったのは静かな声。口数の少ない喋り下手なレンの声がすつと耳に入ってくる。



「あ……」

驚嘆に掠れた声が長い闇夜を風に流すように漏れた。

十八部隊は自分の部隊ではなく、皆の部隊。頷く皆が伝えてくる。一人が必死になって引つ張る部隊を、誰も望んではないと。

「そうそう、シャニーのそんな顔見たくないッスよ。ウチらをもっと信じて欲しいッス」

——お姉ちゃんは、あたし達を信じてくれないの?!

自分の声が聞こえてきた。

姉にぶつけた不満。それと同じことを今仲間たちにしようとしていて、同じような不満をぶつけられている。

絆をいつしか枷と勝手に思い込んでいた事に気づく。姉もこんな気持ちだったのだろうか。

信じてくれる人達の気持ちをまるで汲んでいなかったと、仲間これだけ言われてようやく思い知っていた。人の気持ちも聞かないで、寄り添うなど、イリアの礎になるなど、出来る訳が無いのに。

ルシャナは皆を代弁するように、震える親友の俯いた肩を抱いた。シャニーが去ってから部隊の皆で話し合っって辿り着いた総意だ。

「守ってくれたよ、あんたはさ。今までずっと」

俯きかけるシャニーの目をじっと見つめ、ルシャナは手を取った。

これ以上、リーダーが底無しの沼へ沈んで行くのを見ている事など出来ない。取った手をぐっと引き寄せる。

(あたし……守ってたの? でも、ずっとずっと負けっぱなしだった)

シャニーの顔にはありあり困惑が浮かんでいる。

剣を砕かれ、地面を這いつくばった思い出しかないこの三か月。その間に一体何を守れたんだ? 頭の中は再びこの問いでループが始まる。

「私たちは、いつでも前向いて、笑って先頭を歩いてくれる。そんなあんたが大好きだった」

「ん。ついて行けば大丈夫って思えた」

もちろん失敗だっであつたが、この背中について行って後悔などしたことは無かった。誓いを基に、いつでも動いてきたリーダーだった

から。

立ちはだかった敵を前にしても、それは決してブレなかった。それだけで十分だった。

「でも、皆を引っ張って行った先で、あたしは皆を守れなかったんだよ？　それが許せないんだ、あたしは……」

シャニーの視線は、誰も守れなかった剣を握ってきた左手を見つめている。

未だ凍り付き佇む姿に、ミリアは彼女の左手を取った。手なんかではなく、自分達を見つめて欲しくて。

「シャニー、ウチを守ってきてくれたのは、シャニーの剣じゃないッス」

「え……？」

思わず俯いた視線が上を向く。必死になつて仲間を守ろうともがいてきて、今もどんな剣を握れば良いか、そればかり渦巻いていたのに。

（じゃあ……、じゃあ何なの？　あたしに何が出来たつて言うの？）

答えを求める青の瞳が震える。こんな顔、いつまでもして欲しくなかった。自分達が求めるものは、総てを薙ぐ剣なんかではない。

「シャニーが一緒に前を向いて、笑いかけてくれたから、ウチら落ちこぼれでも一緒に頑張れるつて、勇気出してここまで来れたッス」

ミリアは掴んだリーダーの手を自身の方へと引っ張った。

「だから憧れたんスよ。八英雄とか、剣の腕とか、そんなんじゃないッス！」

いつでも朗らかに笑って励ましてくれた。前を向く背中はいつも、イリアの人々の為と誓いを貫いて。

その太陽の如き明るさに照らされて、前を向いて歩いてきた。早く太陽に帰って来て欲しいと、ルシヤナが更にシャニーの手を引く。

「あんたが先頭に居てくれなかったら、私たちは何を支えにすればいいの？」

「ん、シャニーは私たちの誓いの拠り所」

レンも震える心を癒すように肩に手を置いて、寄り添いながら想い

を口にする。

ずっとずっと、信じてついてきた。どれだけ膝を突いて涙に暮れても、立ち上がって前を向いて歩いてきた背中を。

その背中が疲れ果てているなら、守るだけ。大事な帰る場所を。

(抛り所? ……あたしが?)

レンに視線を向けると、まるで気持ちが分かるかの様に、こくこくと頷いてくる。

「剣じゃないって事? 強さじゃないって事なの……?」

ようやくに聞こえてきた声。もう一息、ミリアはそう確信して、はつきりとした声でリーダーを呼んだ。

「強さっスよ。ウチらが求めているのは、ウチら信じてる人の気持ちを背負って、いつも前を向いてくれる強さっス。そんなの、シャニーしか持つてない強さっス」

その場にいた十数名は互いの瞳を見つめ合い、ひとつ大きく頷いた。皆の答えは、とうの前から決まっている。

ルシヤナとミリアは一度席を立つ。そしてテーブルの反対に回り、レンと共にシャニーを囲む様に両隣に座りなおして、その手をしっかりと握った。

悩みは一緒に、十八部隊として考えよう。ルシヤナはリーダーの手を引き込みながらその肩をしっかりと抱きこむ。

「私達は十八部隊が出来た初日から、あんたについてきた。アルマが部隊を出て行った日に覚悟は決まって、辞令式で確信に変わったんだよ。私達のリーダーは、あんたなんだってね」

出た答えは、リーダー無くしては十八部隊では無いと言う事。

いつでも清々しく笑って、困難な事でも自然体で常に前を向く、暖かくて朗らかな風。その風は覇気溢れる強力なリーダーシップでは無くとも、常に前を向く勇気をくれた。

自分達だって、この笑顔を守りたい。それを分かかって欲しかった。(みんな……、みんなこんなにあたしの事、大事にしてくれていたなんて)

何を迷っていたのか、分からなくなっていました。

自分だけの声を聞き、自分だけで答えを出そうとして、どんどん嵌って行った底無しの沼。

そんな自分を、仲間たちは引き上げてくれた。お前が必要だと言っ  
て抱き寄せてくれた。ずっと、彼らの信に背を向けて逃げだしてきた  
自分を。崩れた心が叫んでいる。

——信じてくれる者を、裏切ったままで良いのか？

剣なんて必要ない。彼らの信に応える為に必要なものは、もう心の  
中にあった。

(あたしは……信じてくれている人にずっと……背を向けていたん  
だ)

何が為の剣かを見失い、自身と言う名の剣を掲げもせず、信に背を  
向けていた。思い知って、彼女は唇を噛んだ。震える瞳が止まらな  
い。そんな自分を、仲間たちは必死に探し回って、こうして包んでく  
れていると思うと。

彼らの温もりが直に心を温めてくれる気がして、静かに目を閉じ  
る。

(あたしが皆にしてあげられることは……一つしかなかったよ)

——折れても、折れても……それでも、前を向くこと！

「シャニー、私達にも守らせて。独りで抱え込まないで」

はっとしたその視界に、レンの静かで優しい微笑みが映っていた。  
守りたい、守らなければならぬ……それしか考えていなかった心  
に響く声。ようやく沼から顔を出したりーダーの手を、三人で一氣に  
引っ張り上げる。

「私達はあるたを信じてこれからもついていく。だからあんたも私た  
ちを信じて欲しい。皆、あんたの為、みんなの為、そう思っただけここ  
に居るんだよ」

ルシャナの声に引っ張り上げられるように、真っ赤に腫れた目で見  
上げて周りを映してみる。どこを見ても、自分を見つめる無数の瞳に  
囲まれていた。

(あたしは……こんなにたくさんの仲間、守られていたんだ)

この瞳を全て守らなければ。そう考えていたが、この瞳全てから守

られている事にも気づく。

皆で皆を守る——握った剣の後ろで、たくさん仲間が共に守ってくれる。そう思うと、空に浮かんだみたいに気持ちが悪くなった。

(全てを倒せる剣……ただの……エゴだったのかも)

等身大の自分で、持てる限りの力で精いっぱい部隊を支える。それが皆の求めるものなのだと分かった途端、心の中で何かが砕けてもう抑えきれなくなった。

——みんなの想いだけは、もう絶対に裏切らない！

「ありがとう……ありがとう……あたし……あたしは……」

ルシヤナの胸に飛び込んで、声の限り叫び泣いた。

八英雄やら、部隊長やら、そんな独り歩きした名前に気負ってきたもの。全てを倒せなければ意味が無いと自身を否定し続けて心に巣食ったもの。酒で無理やり飲み込んで抱え込んできたものが一気に噴き出すように涙が止まらない。

本当に、天馬騎士団に入って泣き虫になった。受け止めてくれる人が、信じられる人がたくさんいるから。

長かった曇天は嵐のように叫び続けるが、それはいつか終わるもの。そのうち声は小さくなり、しばらく嗚咽を漏らして涙を拭いた後、ぼつと顔を上げた。

「ごめんね、みんな！もう大丈夫！」

嵐の後に現れたのは、穏やかに吹く風と朗らかな蒼穹の如き紺碧の瞳だった。

ようやく、自分たちの知る大好きな笑顔が戻ってきた。自分たちの手で彼女を守ったのだ。その喜びが皆の顔にも安堵の笑みが浮かばせる。

十八部隊は他の部隊とは違う。部隊長に只ついて行く部隊ではない。皆で決め、皆で支え、皆で守りながら進む。それを確固とした瞬間だった。

「よおし、新生十八部隊を祝して今日はあたしのオゴリだ！」

随分と湿っぽい新生部隊の門出となってしまった。その重苦しさ

を払うように、シャニーは手をぱつと掲げて笑って見せた。

想いを背負う重さと、そして強さを知った彼女の顔には、朗らかな笑みの中に新たな強さがはつきり浮かんで、仲間たちの顔を明るく照らす。

「待ってました！　じゃあシチュー大盛りで！　トッピング全部盛り！」

「ケーキ全種類で……」

一番にミリアが声をあげ、便乗するようにレンが続く。席から飛び出して続々始まるオーダーの手際の良さには、言いだしつぺのシャニーもぽかんとするばかり。

二か月くらい前まで当たり前だった光景が戻ってきて、マスターの口元にも笑みが浮かぶ。

彼はシャニーへ一杯の水を静かに渡してやった。

（あだし、何バカな事で悩んでたんだろ。でも、これもみんな……）

グラスの水を一口しながら、向こうで騒ぐ仲間たちを眺める。

前を向いたら、一気に視界へたくさんの笑顔が映ってきた。ずっと今まで、自分の手しか見つめて来なかった狭い世界が、一気に開けた。そこには求めた答えがいっぱいにある。

（前向かなきや、何も見つかるワケが無いじゃんか）

そんな事、当たり前のはずなのに、何で気づけなかったのだろう。この手を取って、底無しの沼から引き揚げてくれた仲間達を見つめる顔は自然と朗らかに揺れて、もう一口グラスを傾ける。

泣き叫んだ後の水はとても沁みるが、今まで経験したどんな飲み物よりも美味しい。喉を潤し、もう一度静かに目を閉じて考えてみる。

（あたしの剣の意味は……）

——託された信を刃に掲げて、折れても、折れても、立ち上がった戦う姿を見せる事だ！

あつさり出てきた。自分でも、これで良いのかと思うくらいに。

八英雄だろうが、部隊長だろうが、等身大の自分はこんなもんなんだと認めたら、何だか気が楽になった。

実力はこれから皆と高めて行けば良い。だけど、俯いて立ち止まっ

て、未来に背を向けていたら何も変わる訳が無い。

(今のあたしに出来る事は、泥だらけで苦しもうが、信じてくれた人に戦う姿を見せる事……)

——それが、信を背負うって事なんだ

静かに頷き、自身を納得させた。これからも剣は折られるだろう。でも、同じ失敗はもう繰り返したくない。

(皆が信じてくれるなら、折られても、砕かれても、それでも、前を向くよ)

信じてくれる者たちの為に、彼らの想いを背負って戦い続ける。それこそが、自身の騎士としての道。

吹っ切れた横顔に湛える青の瞳が輝きを取り戻した事をマスターは見逃さなかった。

「良かったな」

彼の顔が伝える労いの言葉にシャニーが頷くと、マスターは彼女の背を押して仲間たちを追わせた。向こうではルシャナが酒のボトルに手を伸ばしている。

「私はボトルを入れようかな。あ、樽ごとにしようか」

「ちよっとそれは無し!!」

オゴリと聞いて樽を引っ張り出そうとする彼女へシャニーが待ったをかける。

吹っ切れた笑顔は向日葵のようで、その笑顔は日付をまたいでも途切れることは無かった。

## 第8話 『三誓』——フルール・オブリージュ

翌朝はすっかり吹雪も晴れて、清々しい青と消えゆく星々が混ざった空が広がっている。その曙をまだ迎えていない空へ、一騎の白い天馬が一直線に駆けてカルラエ城へと降りていく。

「あー……頭痛い……」

室内稽古場に入ったシャニーは頭を押さえながらも剣を抜き、一人で稽古を始めた。

結局昨日の宴は日付が過ぎてもしばらく続き、大分アルコールも入っていたのでまだ完全に抜けていないかもしれない。

皆と別れてからも興奮と嬉しさと眠る事が出来ず、シャワーだけ浴びて登城した形になっている。ただでさえ痛い頭が、剣を振り始めたら一段とジンジンしてこめかみから血が噴き出してきそうだ。

「オゴリとは言ったけどあいっらー、容赦なさすぎだし」

注文書は長く、長くなつて、会計でマスターが弾くレジスターの数字を祈るように見ていたあの時間が本当に長く感じた。特にウワバミのルシヤナとミリアの食欲にはまたしてもやられた感があり、結局財布はすっからかんになってしまった。

それでも、ぼやく口元は自然と柔らかい。

(ま、いっか。こんな幸せな気持ち、初めてだよ)

底知れぬ迷いの沼から引き揚げてくれた仲間たちには感謝してもしきれない。だからこそ、自分のできる精いっぱいは何か。剣を静かに振り、もう一度頭を整理する。

守るとは、背負うとは、戦うとは……。

(何度膝を突いても、立ち上がって、前向いて、叫んでやるさー！)

大分長い間、鋭く清らかな音が稽古場へ響き、差し込んで来た朝日によりやく剣を下した。

笑みを浮かべた清々しい横顔は、悩みを払った真澄の瞳が陽に映えてしつかり前を見据えている。今こそ、新たな一步を踏み出す時。彼女は大きく息を吐き出すと鞆に収めて外に出た。

「おはよう、リーダー。もう大丈夫なの？」



気を遣ってくれたのか、ルシヤナが外で槍の稽古をしていた。顔を見つけるなり、彼女は槍を下ろして腰に手を当てると、けろつとした様子で手を挙げてきた。

（大丈夫かなんて、あたしが聞きたいよ）

昨日浴びるほど樽酒を飲んでいたのに、ピンピンしているルシヤナは人間ではないのかもしれない。あれだけべろべろになるまで飲んで、その状態で天馬に乗って家に帰ったと言うのだから。

「おはよっ！　まだあばらが痛いけど、そう休んでもいられないしね」  
ウツデイにもそれだけ酒が飲めるなら大丈夫と、医務室を追い出された何て言えない。

ただでさえ一週間近く部隊を空けていたのだ。溜まった仕事を片付けて先に進みたい。前を向いたらやりたい事がたくさん湧き上がってくるから、もうじつとしている暇などない。

（部隊長になったんだし、ある程度指示は出さないとな）

自主性を尊重する雰囲気とは言え、前任者を見てきているだけにどうしようかと考えを巡らせる。

自身を見下ろすと、昨日はただ気分を重くさせるだけだった士官服が映って気が引き締まる。ようやくに、上級天馬騎士になったのだと実感が湧いて来て、彼女はさっそく動き出した。

「ミリアとレンは？」

いつもの凸凹コンビの姿が無いので問うてみる。ルシヤナからは呆れ交じりの返事が返ってきた。

「あいつらなら南方の見回りに行ったよ。遊んでなきや良いんだけど」

いつもつるんで行動し、たまにロクでもないことをしでかすのでルシヤナも気をもんでいる。つい最近だって経費でケーキを買ったりして油断も隙も無い。

今日も七時半には戻って来いと言ってあったのにとつくに過ぎている。帰ってきたらどうやってとちめてやろうかと、頭にギンと角が生えた。

「よーし、戻ったら一度集まろうよ」

ほきほきと手を鳴らすルシヤナに苦笑いしながら、シャニーはその場を任せて詰所へと向かう。部隊長としての引継ぎをレイサから受ける為だ。

（レイサさん、いつも寝てたし、へーきでしょ、きつと）

何もせずにいつも木の上で寝ているだけだったので、部隊長の仕事と言われてもピンと来ない。

きつと大したことは無い。むしろ、部隊長になったらあの大嫌いな予算表もルシヤナに渡すことが出来ると思うと羽でも生えたような気分。

朝日に鼻歌をうたい、スキップ交じりの軽やかな足音が廊下を進んでいく。

「へ?! へ、こんなに……?」

数分後、用意された部隊長席に座ってご満悦だった所へ、どきつと帳票の束を目の前に置かれてシャニーは素っ頓狂な声をあげていた。

十冊はあるだろうか。いや、向こうから追加でレイサが運んできている。もう結構と手で拒否しようとするも、バランスを崩した束が頭の上に降ってきた。

「そっだよ。部隊長たるもの、こういう報告も仕事のうちさ」

宙を舞っていた資料が頭の上に乗った。押し寄せる資料の群れを見渡すシャニーの目は点になっている。

（うへえ……事務仕事なんて嫌いだああ!）

同じ押し潰されるなら、屋根から落ちてきた雪のほうがマシに思えるほど。レイサはいつこんな大量の資料を作成していたというのか。

一体何が記されているのか、一冊取って中をぱらぱらめくってみた彼女は口をへの字に曲げた。

「いや、でも、ほとんど真っ白なんですけど……」

「そりゃそうさ。だって私ら出撃経験ほとんど無いんだし? ま、これからも無いだろうけどね」

よく見ると出撃報告書と書いてあり、行き先だけでも細分化されていて何冊もある。

ところが、十八部隊は国外への出撃実績が無いからどれもこれも中

身は真つ白だ。

案外何もしなくても済むかもしれないと安心すると、つい気になっていた事が口から飛び出した。

「レイサさん、昨日の辞令、本当に知らなかったの？」

あの時は知らなかったと言っていたが、やっぱりおかしい。何せ配属案は部隊長会議で承認されているはずなのだから。

机の上を支配する資料の整理に苦戦しながらレイサへ視線を向けるが、彼女はせつせとファイルを手に取りこちらを見てくれない。

「知らないと言えば嘘になるかな」

今回もなんとも言えない答えを返してきた。

(何で言ってくれないんだろう……)

その気持ちだけは今も拭えないままだが、あの状態の自分にはとても言えなかったのかもしれない。そう自身に言い聞かせていると、レイサがふいに笑いかけてきた。

「でも良いじゃないか、私たちの部隊になったんだよ、十八部隊は」

今迄は十八部隊があり、そこに新人として所属していた。

十八部隊はいわば借り物だった。だが、今の自分たちには任務があり、自分たちが十八部隊に名前を授け、命を吹き込む番。

これからはどこへ羽ばたいて行くのか、自分たちで決めなければならぬ。

「そうだね。あたし達の誓いを形に出来るようになったんだよね。ワクワクするよ！」

国力の向上活動——今まで無かった任務の新設は何をしても自由の反面、前例に倣うことも出来ない。

敷かれたレールに沿って走るのではなく、レールを敷く仕事。職制表でも団長から直接指揮系統が伸びる特殊部隊枠に設置されているから責任は大きい。

それでも、プレッシャー以上に大きく湧きあがるのは、天馬で翔け上がるような眩しい希望。

「外へ資金を稼ぎに行かない部隊なんて、他の部隊からどう思われるんだろう」

周りの部隊がそうは見えてくれない事は優に想像できる。

イリアの傭兵は稼いだ報酬や雇い主への貢献度で自身のランクが決まる。十八部隊にとつては評価される仕組みすらなく、傭兵ランク最下位という事実だけが掲示される。

「それをどう受け止めるかは、あんたたち次第じゃないの？ 言つたら？ 十八部隊は私たちの部隊なんだ」

こんな部隊の新設をよくティトは通したものだと思ふ反面、反対を押し切つて戦つてくれた姉に恩返ししたかつた。

——たとえ周りから非難されようとも、信じてくれる者の為に戦う

己の誓いを心の中で復唱し、シャニーはしっかりと頷いて見せた。  
(あたしの剣が示せる道は、戦い続ける姿を見せる事だもん。諦めないさ)

信じてくれる人がたくさんいる。彼らの信を背負う重さと強さを知つた今、刃に想いを掲げて振るい、勝つまで戦い続けるだけだ。

その先頭を部隊長として任せられた今、もう迷う事なんて無かつた。

「リーダー、ミリアとレン帰つたよ」

そこヘルシャナが入つて来た。後から続いて入つて来たミリアはシャニーの顔を見るなり手を挙げて白い歯を見せてくる。

「ただいま帰還したツス！ 部隊長おはようございますツス！ またメシ喰いに行きましょうね！」

「部隊長、昨日はごちそうさまでした。レンただいま帰還しました。」  
何と返せば良いだろう。とりあえず挨拶だけは返すものの、シャ

ニーの口元は明らかに引きつっている。  
(もう、絶対ツツ対にオゴらないぞ……)

彼女たちがいる時は絶対にオゴリなんて言葉を使つてはいけな  
と思ひ知らされたのに、二人はもう次を期待している。

そんな二人の首根つこをルシャナが引つ捕まえた。

「あんたら、ゴチになりました！ だけじゃなくて、ちゃんと報告しなさいよ」

相変わらずルシヤナは厳しく、どっちが部隊長か分からない。ミリアが頭の後ろをかく様子を見ていたシャニーの口元がふつと緩む。  
(戻ってきたんだ。いつも通りの十八部隊が帰ってきたんだね)

だが、この部隊は昨日までの部隊とは違う。

仲間を全員詰所に集め、事務用机を皆で移動させて会議用のスペースを作った。そこへ全員が着席した事を確かめると、シャニーは部長として最初の仕事へ踏み出した。

「じゃあ早速だけど、十八部隊の『三誓』を決めたいと思う」

『三誓』——フルール・オブリージュとは部隊の方針のことだ。どの部隊も騎士団としての誓いとは別に三つの誓いを立て、それに基づいて行動する。

たいていの部隊は部隊長が設定して部下に展開するのだが、シャニーは皆を集めて意見を聞く事にした。この十八部隊を皆で創り、守っていきたかったから。

皆が頷く事を確認すると、彼女は慣れないながら議事を進行していく。

「この部隊は他の部隊と違って、外国での資金獲得が任務じゃない」

「いわゆる特殊部隊ってヤツツスね！ カッコイイ響き……」

聞こえの良い言葉を口にしてミリアがうっとりしていると、横から物言いたげな視線が飛んでくる。

「ミリア、話は最後まで聞く」

またしてもレンに突っ込まれて口を尖らせだした。毎度の流れだが今回はシャニーも内心レンに手を合わせる。

今は話が脱線する訳には行かない。この『三誓』が、十八部隊へ吹き込む命の礎になるのだ。

「だから、あたし達には他の部隊とは違う『誓い』が必要だと思うんだ。イリアの為に、それは同じだけど、あたし達の部隊にはあたし達だけの使命があるはずなんだ」

国内任務を専門に扱う部隊は唯一無二。行動の指針さえ無く、他部隊も参考と出来ないので完全に一から生み出す必要があった。

テイトがわざわざ部隊を設けてくれた理由は分かっている。この

部隊の存在価値を決める大事な『三誓』はしっかりと固めたい。

けれど不安だった。誰も経験した事が無い道。意見が出るかどうか。

(やっぱり、いきなり振っても出ないよね)

ぎゅつと胸元のロケットを握りしめながら、自身の士官服を見下ろす。先頭に立つ事を任せられた身なのだとして自身を奮い立てた。

「あたしは、治安維持だけじゃなくて常に人々の為に動きたいと思ってる。他の部隊は国外に出る分、傍にいるあたし達が任務外でも寄り添わないと、小さな声は拾えないし」

とりあえずシャニーは自ら先陣を切ってみた。

今までも姉と何度か話を交わして来て、いつも考えて来たから特に考える事も無く思ったままが口から出る。

ただそれは、今までやってきた事が口から出ただけ。『三誓』に対する手段に過ぎないもの。

「常に民の傍にあれ……か。そういう声が国を作る礎になると思うしね」

—— ナイス！

思わずシャニーはルシャナに親指を立てた。自分の気持ちを目的へと変換してくれるあたりは伊達に付き合っても長くはない。

これで皆緊張が解けたのか、少しずつ意見が出始めるようになる。

「イリアの礎。うん、発展には土台づくりが大事だと思う」

あの口数の少ないレンが、うんうんと頷きながら口にした言葉にシャニーははつとする。

(みんな同じ事考えてたんだ。良かったあ！)

イリアの礎たれ。それは自分だけの誓いとして握りしめてきたもの。いつか話したことがあっただろうか。

同じ答えに辿り着いたのか、自分の誓いが部隊に浸透したのかは分からないが、同じ志を持つ者が仲間について心強い。心の底から喜びが湧き上がる。

「ウチはイリアの為！ だけじゃなくて、ここに居る皆も大事にしたいッス。ウチにとっては家族も同然だから」

ミリアにとって家族はレンとその両親だけだった。それも半年前まで。天馬騎士になった事でレンの家を出て、今は一人暮らしをしている。家に帰っても、おかえりと誰も言ってくれない寂しさは心を刺した。

この部隊にいるとまるで家族の中にいるようで、今一番心が落ち着く場所となっていた。

「それはあたしにとっても同じ」

似た境遇のシャニーも頷く。孤児同士、家での孤独感はよく分かっているから互いの家へ遊びに行く仲。

独りでいると、昨日までの様にどうしてもロクでも無い事を考えてしまう。この大事な場所を、自分の帰る場所を、大事な家族を愛して守りたい。

「良かったよ、みんなもしっかり意見してくれて」

時計を見てみるとまだ十分も経っていない。その短い時間であったという間に『三誓』の原石は出来上がっていた。

もつと難航するかと思っていたからシャニーはほっとした。

「今更何水くさい事言ってるのさ。家族だろ？ 私たち。あんただけで背負いこむ必要はないよ」

家族——そう言ってもらえて自然と表情が柔らかくなる。

ルシャナが仲間たちを見渡すと誰もが頷いた。部隊長だからと言って全てを任せるつもりはない。肩書は違えど家族の一員。そう皆の瞳が伝えてくる。

「みんな……」

思わず零れる。仲間の、家族の存在を改めてありがたく感じる。

独りではない。愛してくれる、信じてくれる人がいることは何物にも代えがたい幸福と知る。

「そうそう。家族を愛せ、愛されろってね。良いんじゃないかな」

その声に皆がびっくりして振り向いた。視線を集めた側は、何か変な事でも言ったかと眉をひそめている。

「レイサ、起きてた」

あまりにも意外そうにレンが言うものだから、そんな事かとぼつき

り首が折れる。

「仕方ないだろう？ 部隊長から寝るなって言われてんだし」

言われなかったら寝ていたのかと、思わず苦笑いが広がった。寝ないでちゃんと話し合いには参加して欲しい。シャニーからお願ひされたのはこれだけ。

「私もこの部隊への所属を許されるならしつかりやるだけさ」

シャニーには役職を外れたただけだと説明したが、実際はそのまま部隊から消えるつもりだった。

民の信頼を得ていけないといけない部隊の中に、アサシンのような存在が見えたらそれだけで良くない噂が立つ。

もう独り立ちした彼女達を見てテイトから託された使命は果たしたと、ようやく荷が下りたつもりだったが、部隊長は団長に似てやはり逃がしてはくれなかった。

「許すも何も、レイサさんは十八部隊の家族、そして師匠だよ。今までずっと矢面に立ってきてくれて、感謝してる」

思わずバンダナで目元を隠す。家族——その言葉は自分には無縁だと思ってきた。孤児として長く過ごし、シグーネに拾われた後も闇の世界で知られてはいけない仕事ばかりをこなす為、誰とも接点を持たなかった。

そつと背中から姉の形見を引き抜いて、銀の刀身に自身の顔を映ししてみる。

（姉貴……。姉貴は本当に良い種を蒔いた。こいつなら、手伝ってやろうと思うよ。でも、何かと危なっかしい性格みたいだね。そつちの方がワクワクするけどさ）

闇に生きてきた自分の手を引き上げてくれた部隊長と目が合う。朗らかな笑顔がそこにはあった。

これから何が起きるかワクワクする。こんな気持ちは初めてだ。「じゃあ、あたし達の『三誓』は、民の傍にあれ、イリアの礎たれ、家族を愛せ……。これでいい？」

まともに入り、家族全員の顔を見渡す。全ての瞳はシャニーを見つめており、誰もが無言で頷いた。



皆の意志を聞き、そつとシャニーがテーブルの真ん中に手を差し出すと、皆その手に手を重ねて『三誓』を声にしてはつきりと宣言して見せる。

「ここが帰る場所であり、そして始まりの場所。」

「ありがとう、みんな。良い仲間に出会えて本当に嬉しいよ」

自然と口から出た感謝の言葉。半年前の自分に見せてやりたかった。第一部隊に入る事だけを考えて、何も考えようとしていなかった自分に。

今の自分はその頃には無い素晴らしい家族と、譲れない誓いと、そして大きな使命を手に入れた。

イリアの未来に向けて戦う為の自分だけのやり方、自分だけの武器を見つけたのだ。

（お姉ちゃん、あたし達なりのやり方で、未来を切り拓いて見せるよ、この手で！）

じつと左手を見下ろす。魔剣を握り締めようとしていた手。その手は新たな剣を掴み取り、仲間と共にその刃に誓いを掲げた。

紙に書き起こした『三誓』を改めて見れば、今まで自分たちがやって来たことの延長で、進もうとしている道はブレていないと確信させてくれる。

後はこの『三誓』を団長に提出して内容を説明すれば、いよいよ部隊としての活動に入ることが出来る。半年遠回りしたけど、これで良かった。

「あ、レンが提案があるって言ってたツス」

ミーティングを終えて早速タイトの許へ行こうと立ち上がった時だ。ミリアがレンを指さし、指さされた方は狼狽しながら怒ったような顔をミリアに向けた。

だが、シャニーの眼差しがじつと見つめてくるものだから、観念したかのように小さい口が動き出す。

「今まで通り名前と呼んでいい？」

「そうそう。なんかもう、肩凝っちゃって」

自分で言えとレンから脇腹に肘うちを喰らうが、ミリアは頭の後ろ

を掻きながら笑っている。

他の部隊ではリーダーを部隊長と呼んでいるから倣ってみたが、やっぱり何かしつくり来ないのだ。

それを聞いたシャニーは一瞬きよとんとしたが、すぐに笑った。

「あたしもずつと言おうと思ってたんだ。今まで通りにしよーよ、何かむず痒くつてき」

「了解ッスー！ 行つてらっしやい、シャニーー！」

平隊員の時は、部隊長と呼ばれる事に一種の憧れを抱いたが、いざ呼ばれてみると家族なのに何かよそよそしくて。

変わるの自分着ている服だけでいい。その気持ちを汲む様にミリアからかけられた声に手を振ると詰所を出た。団長へ自分たちの想いを宣言する為に。

## 第I部 最終話 イリアの礎たれ

ゆつくりと、それでいて力強く、まっすぐと前を向く眼差しが一步、一步と団長室へと近づく。

半年前、怒りに身を任せて走り抜けたこの廊下。その廊下を、仲間と共に手に入れた誓いを握りしめてしつかりと歩いていく。靴底が廊下を叩く音がどんどん近づいて、十八部隊の始まりの時を迎えようとしている。

色々あったこの半年を思い出しながら歩く道のりは、星の軌跡のごとくあつという間に運命の扉の前まで辿り着いた。

(部隊長として……十八部隊としての最初の報告だ)

今まで重く、押し掛かるように見えてきた団長室の扉。だけど今日はどこか今までより明るく、迎え入れてくれるかのよう。

「第十八部隊、部隊長シャニーです」

自分のことを部隊長と呼ぶのは今でもむず痒い。おまけに、この扉の向こうには一番近い姉がいるのに。

「どうぞ」

今迄よりも声が優しい気がする。部屋に入ると姉はこちらを見ていた。いつもは書類を処理していて視線は下を向いているのに。

早く姉に十八部隊の想いを聞かせてあげたい。シャニーは吸い込まれるように団長の座る机の許まで歩いて行った。

「シャニーさん、部隊長就任おめでとう。これからもよろしく頼むわよ」

あくまで部下としての扱い。当然か。でも嬉しい。姉から労いの声と共に頼りにしているとayingてもらえたのだから。自分たちがやってきた事、悩んできた事、そして導き出したもの。それらを認めてもらえた気がして。

(いや、まだだ。これから、認めてもらおうんだ)

手にしてきたものをぎゅっと握る。

「はい。まだどういいう事をしようって具体案は無いけど、あたし達の進む道はあたし達なりに答えを出してきたつもりです」

一年前はお互いに平の制服だった。それが今、姉は団長の、そして自分は士官の服を着て、共に幹部として騎士団の中にいる。自分なんか、去年は見習いだったのに。

その自分を信じて大抜擢してくれた姉の期待に応えたい。まっすぐに姉の目を見つめ、しっかりとした所作で自分たちの『三誓』を手渡す。

イリアの礎となって戦っていく覚悟を記したつもりだ。きっと姉は頷いてくれるはず。

「そちらに座って、少しお話ししましょう」

中に記されていた誓いをじっと見つめていたティトは何も言う事はせず、手でソファを指してシャニーを誘った。

今まではテーブルを挟んで対面していたが、今日の彼女はシャニーの隣に腰掛けて、心配そうに体を摩り始めるからシャニーもびっくりして背筋が伸びびた。

「体は大丈夫なの？ 賊討伐で怪我をしたって聞いたけど」

あつと口が開く。姉の顔が、机に座っていた時に見せていた厳しい団長の顔ではなく、ちよつと前までいつも見ていた姉の顔に戻っていた。

ずっと、ずっと、自分たちが成長する姿を見つめながら傘になってくれた姉は疲れ果てていた。

(お姉ちゃんを早く安心させてあげたいな)

甘えたいけれど、自分を見下ろしてそれをぐつと堪えた。もう新人では無いし、ただの正騎士でもない。姉が喜ぶのは、きつと士官として凜とする姿だ。

「う、うん！ まだ少し痛むけどへーき。部隊長だしね、泣き言言ってもらえないよ」

「ふふっ、あなたも半年で大分成長したみたいね」

本当に成長してくれて、ティトは報われた気持ちに包まれていた。

入団式の日には怒鳴り込んで来た時は上手く行くか心配だった。部隊長を追い出したと聞いた時は卒倒しそうになったし、正体不明の敵に襲撃されて意識が戻らないと聞かされた時は地獄へ突き落とされ

たようだった。

それでも、団長選出戦で十八部隊を引き連れて現れた妹の姿はどこか凛々しく見え、誓いを口にした先月はもう一人前の顔だった。

少しずつ、確実に成長してきた妹が誇らしく見える。だが、普段なら誉めれば調子に乗るシャニーの顔には困惑が浮かんでいる。

「どうしたの？」

「あ、ううん、団長に褒められるなんて思ってなかったから」

そんなに彼女のことを叱ってばかりだっただろうか。互いの顔に苦笑いが浮かぶ。

だが笑い声はすぐに消え、部屋には静寂が戻ってきた。嫌な静寂ではない。心を落ち着かせてくれる静寂。テーブルを見つめるシャニーの口元は柔らかく笑みを湛えている。

「失敗ばかりの半年だった」

今までを思い出すように漏らす。何も知らない自分がする事はいつも空回りで、仲間を傷つける事だった。何度戦っても剣を折られ、自分は無価値なんだと道を見失って……。

「失敗ばかりのあたしだけど、みんなあたしを信じてくれた。だから、やってみようと思う」

悩んで、もがいて、一人では抜け出せずに酒にも手を出して。それを引き上げて助けてくれた仲間は、信じてついて行くと言ってくれた。

半年と言う長い時間を考えることに費やし、信じてくれる者の為に戦う事を気づかせてくれた家族。彼らの想いを皆に伝える事こそが、部隊長として為すべき事なのだと決めていた。

（あたしがすべき事は、信じて託してくれる人の想いを訴える懸け橋になることだ。絶対にやって見せる！）

その決意の瞳は、半年前の自信だけ一人前の騎士には無いものだった。

「良かったわ。これは貴女にしか任せられない仕事だったから」

「え？」

「どの色にも染まっていないイリアを美しく染める仕事よ。既に染

まっってしまった人では、それは出来ない」

戦後のイリアは、未だ整備が行き届いていない部分も多く、旧騎士団勢力は大きく変貌した。

まだ新しいイリアは色を持っておらず、白と言う混沌が未だ雪のごとく覆いかぶさっている。そこに新しい色を付けていくものが必要だった。

民は傭兵に出て守りが手薄な中、心の拠り所を求めている。十八部隊には彼らの色になって欲しい。ティトはそう願っていた。

「これedyouやく、私も安心できるわ」

妹はしっかりと彼らの誓いを認めて持ってきた。受け取った『三誓』には、彼らの決意がしっかりと刻まれていて、ティトを安心させるには十分なものだった。

そしてシャニーは、自身の理想を心の真ん中にしっかりと立てて自分の口で語った。これなら、後は行動し結果が見えて来るまで待てば良い。

これからしてやるべき事は、彼らがレールを敷こうとするのを、後ろから支えてやる事。ほっとして思わず零してしまった言葉を飲み込もうとしても遅かった。

(やっぱりお姉ちゃん、決まったのかな。エトルリアの……クレイン様との話)

聞かずにはおれなくなって、シャニーは顔を近づける。

「あの……これは妹の言葉として聞いて欲しいんだけどさ……お姉ちゃん、結婚するの?」

再び部屋を包む静寂。今度の静寂はちよつと重い。これでもまずまず遠慮を込めて聞いたつもりだったが、いけない所を突っついてしまったかとシャニーは内心後悔した。

「……誰から聞いたの?」

おまけに追求するような静かな口調で姉が問うてくるものだから、どうやってうまく返そうか頭がフル回転する。

「そ、それは……。ウツデイだけど、ウツデイが誰から聞いたかまでは知らない」

明らかにウツデイを庇おうとしていることは分かる。相変わらず嘘をついたり誤魔化すことがヘタだ。

妹とこうして二人きりで話ができる機会はそうない。ましてこれからシヤニーは城を空ける時間が増えるだろう。

もう、今更隠せる相手でもない。テイトは大きく深呼吸するとシヤニーの手を取った。

「絶対言わないって約束できる？　天井にいる人も」

天井の人……言われるまでシヤニーは気づいていなかったようで、観念するように天井の板が外れて下りてきたレイサの姿に、目を真ん丸とさせて驚いている。

この二人にならもう教えてもいい。テイトは妙に緊張しながら静かに口開いた。

「私は来春、退団するわ。クレイン様の……リグレ侯爵家に嫁ぐために」

「ホント?!　やったあ!!」

噂として知っていたはずなのに、それを本人の口から教えてもらえると何か体の中からわつと嬉しさが湧き上がって、自然に両手が頭上に突き上がって歓喜が漏れた。

ずっと苦勞してきた事を知っているから、姉の幸せを聞くとしても心が清々しくなってくる。ぱつと明るく笑ったシヤニーは、思わずテイトの手を取ってはしゃいでしまった。

「おめでとう！　良かった、本当に本当なんだね！　ああ、嬉しいなあ」

まるで自分の事の様に喜び祝ってくれる妹に、テイトの顔にも自然と笑みが零れた。本当に、人を笑顔にする事が上手い。今までも何度救われてきた事か。今も満面の笑みを浮かべながら、抱き着いて来て涙まで浮かべている。

心が雪のように溶けていくような温かさ……。だが、だからこそ後ろめたさもあった。

「ごめんなさい、シヤニー。貴女達に仕事を押し付けてしまつて」

志半ばで団長を降り、イリアを去る。それがどれだけ無責任な事か

といつも悩んできた。愛する人の許へ行きたい気持ちと、故郷の再建を託してくれた人々の期待と。そして、騎士団の中でもなかなか上手く行かない統制と。幾重にも板挟みにされて来た。

その状態で妹たちに後を任せることへ罪悪感が重く押し掛かる。だが、それから救ってくれたのは今回も妹だった。

「ううん、あたしも分かるよ。会いたくても遠くにいて声を聞けない辛さ」

苦しみを理解して声をかけてくれる事がどんな慰めよりも癒しになる。だが、テイトは困惑の眼差しをシャニーへ向けた。

「貴女が……？　もしかしてこの前の休暇って」

（あつ、ヤバッ！）

シャニーをそんな気持ちにさせる相手がいるとは初耳だった。もしそうなら、あの時は可哀相な事をしてしまったと思ったのだが、シャニーは首をぶんぶん振って否定してきた。

「あつ、いえ、その何でもなしよ。自分がお姉ちゃんの立場だったらって思っただけ。それより、もう具体的にいつって話は決まってるの？

結婚式いつ？」

無理やり話題を変える。テイトはまんまと話題を変えられたことにしておいた。妹だって年頃だから、そういう相手がいたっておかしくはない。一体誰なのかは気になるところだが、言いたくなさそうなのでこれ以上の詮索は止めた。

うまくバレずに済んだと胸を撫で下ろしている妹の仕草は可愛く見えた。

「そこら辺の話はまだ決めてないの。まずはクレイン様の気持ちにお答えしないと」

正式にクレインへは回答していない。だが、そろそろ答えないと……その繰り返しでここまで来てしまった。

応えたいのだが、多忙を極める毎日ではとてもエトルリアに向かう時間の都合をつけられない。手紙ではなく、しっかりと相手の顔を見て伝えねばなるまいと心に決めていた。

「へへっそうなんだ。じゃあ邪魔しちゃ悪いね。仕事はあたしたちに



任せて、頑張つてよ！」

着ている服は変わっても、シャニーはやはりシャニーだった。朗らかな笑顔で人を幸せにしてくれる。

自分がいなくなった後、彼女が大丈夫かティトは心配していた。十八部隊の部隊長として、直接矢面に立つことになる。

この笑顔は誰をも笑顔にして彼女を守る力にしてしまうが、明確な悪意を持った相手にはそれは通用しない。彼女を守る様々な力が悪意を払ってくれることを祈った。

「シャニー。ありがとう。これからもお願いね」

『三誓』を受け取り、ティトはさつと手を差し出した。さん付けではなく、いつも通りに名前を呼んで。

——もう、何もあなたに注文を付けることは無い

そう言われた気がしてシャニーの瞳が揺れる。

——任せて！

独り立ちの喜びと不安。決意を見せつけるようにしっかりとティトの手を握り返し、親指を立てながらニカつと笑って彼女は部屋を出て行く。その背中をティトはレイサと共に見つめていた。

「ふふっ……あの子の士官服姿を見る事になるなんて」

「自分で任命したんだろ？ 良かったじゃないか。元氣みたいで」

ティトには伝えないで置いた。ここに辿り着くまでにシャニーがどれだけ毎日悩んで、もがいて、嘆いては紅涙を絞っていたのか。その彼女を仲間たちがどれだけ支えて励まし続けてきたのか。

今が元氣なら、ティトに知らせるのはそれだけでいい。あつという間に終わるイリアの夏のように、一人の新人の成長をずっと傍で見守ることが出来た喜びは、自然とアサシンにも笑みを浮かばせ陽が顔に差す。

「これで私もひとつ肩の荷が下りました」

心から安堵したかのような静かだが澄んだ声。それは本来のティトの声。シグーネの配下であった時の、本当の声。

団長としての威厳、騎士団としての使命感。それらに縛られて作る声ではないものが、隙間から飛び出してきたかのように漏れた。

——新人を傭兵で終わらせない

少し当初描いていた事とは違うが、むしろ最善となった気さえする。

シャニー達が自分たちで見つけ、選んだ道。その軌跡を見つめ、自分がいるうちにはできる限り守ろうと思った。イリアの冬に咲いた新しい健やかなる花々を。

「何だい、まだ若いのに」

テイトの声に驚きながらもその言い草にレイサは笑った。テイトは団長と言つてもまだ十九歳だ。自分より七つも下だと言うのに。

「叩かれたり、批判されたりする事を力に変えて跳ね返してやろうつてやってきましたけど、最近は少し……耐えられなくなつてきちゃつて」

団長と言う鎧を脱いだテイトから漏れ出した言葉は、顔こそ笑つていても弱弱しかった。笑顔の中にも滲んだ苦勞。笑つて口にするからこそ、その苦しみがどれ程だったかと想像させる心をより重くさせる。

変革に対して抵抗する者がいる事は仕方ないことだ。だが、テイトの場合は相手が悪すぎた。おそらく、これから同じ事を十八部隊長も思い知る。

「あと少しだけど、支えてもらいなよ。自分が蒔いた種から咲いた花たちにさ」

凜としてすくつと咲いた花から出でた種たちが、彼女の周りで花を咲かせた。

もう彼女は独りではない。困ったときに相談できる同士ができたのだ。まだまだ、彼らを想つて自身は萎れるなんて時ではない。花が咲いたからこそ、一層に力強く咲いてもらわなければ。

静かに頷いたテイトが再び瞳を開いた時、そこには普段の団長がいた。

「レイサさんも彼女たちをお願いします」

さつと差し出された手。シグーネも何かを頼む時、よくこうして差し出してきた。姉に信賴されている、そう感じさせる手を。

彼らが勝手に育っただけ。そう言いたかったが、この団長にはそう言つてやるよりも頷いてやる方がいい。

「ああ、やれる所迄はやってみるよ。あいつが背負ってるものは人と違う気がする。常に自分だけじゃない何かを背負ってる気がしてさ、あいつ」

あの若い部隊には、一人くらいは苦言を呈する嫌われ者がいないと、間違つた方向へ進んだ時に修正が利かないだろう。多くを背負おうとする所は姉妹でそっくりだ。

部隊長は言つた、あなたは家族だと。ならば、家族を守る為に出来るその一切を引き受けよう。

覚悟はタイトに改めて手を差し出されずとも決めていた。それが今、しっかりと握られたことで覚悟は誓いへと変わった。

——愛された分、自分もまた愛そう



廊下を叩くブーツの音が大きくなってくる。あの出口から差し込む光の先に何かがあるのか、楽しみにするかのように足取りはどんどん早くなる。

それを待っていたように、柱の陰から出てきた存在がシャニーの足を止めた。

「顔つきが戻つたな。いや、変わったと言うべきかな？」

何かにとりつかれたように重かった表情はそこにはなかった。真つすぐ見据える顔には陽が差して、道をひとつ見つけて影を切り払つた瞳が活き活きと見つめてくる。

自分の知るライバルがそこに居て、アルマは嬉しそうに声をかけた。

「だが、他の部隊の眼は冷たいぞ？ 彼らから見たらお前たちは給料泥棒のままだしな」

——第一部隊に來い

アルマの瞳はそう伝えてくる。十八部隊にいる間は永遠に評価されることは無い。ライバルがそんな場所にいる事がアルマには許せ

なかった。

でも、シャニーは静かに瞳を閉じてふつと笑った。それは半年前の自分へ向けてのもの。そしてそのまま、ゆっくりと首を横に振った。「最初は上の部隊に行くことばかり考えてた。色々陰口を言われているのも知ってたから。だけど結局、それは自分の事しか考えてなかった。何のために第一部隊を目指すのか、ろくに考えもしないでさ」昇任だけを考えてめちやくちやを通したこともあった。その結果得られたものはなんだ？

十八部隊がくれた考える時間は、半年前の自分が抱いた道と全く反対の事を行くべき道と示してきた。そして、その道を共に行くと誓いを立てて背を守ってくれる仲間もできた。

目の前に心から進みたいと思える道ができた今、もう団長の一番隊への未練など欠片も無い。自分達の手でイリアに未来を切り拓く、その舞台を掴み取ったのだから。

「あたしはアルマとは違う。あたし達の誓いはみんなとは違う。だけど、それでいいと思ってるよ」

戦場での名誉でも、剣の腕でも、騎士団の中での序列でもない。求めているものはひとつだけ。

決して騎士団の中では評価されないかもしれない。だが、自分たちで見つけ、自分たちで拓く道。『護りたいもの』が喜んでくれるその道を行くことをためらう理由にはならなかった。彼女の瞳は剣に映る光のように決意を湛えている。

「行く道は違うかもしれない。けどさ、一緒に頑張ろうよ。あたしだけじゃ、きつと出来ない事もあるだろうしさ」

さつと差し出された手。同じ夢を抱く者同士、背を向けていても、居る場所が違ってても、見つめる先はきつと一つ。そう伝えて来る様な青い瞳にしつかりと見つめられて、アルマは柱から身を起こして親友の手を取った。

「ふっ、一緒にか。そんな時が来るといいな。私は同じ道を共に歩いて欲しかったがな」

十八部隊に明確な任務ができた以上、これから顔を合わせる機会は

更に減るだろう。ライバルとは毎日顔を合わせて切磋琢磨したかった。

それでも、シャニーは静かに首を振ると握っていた手を解く。自身の居るべき場所を確かとした目は柔らかくも強く、鮮やかに澄んでいた。

「イリアの礎たれ。あたしは、前だけ向いて信じる道を進むよ。大事な家族が支えてくれるから」

『三誓』でライバルにはつきりと己の道を示すと、シャニーは仲間の待つ光の先を目指して歩き出す。力強く歩いて小さくなっていくライバルの背中を、見えなくなるまでアルマはじつと見つめていた。

(私も、彼女に示さなければならぬ)

少々、後れを取ったが負けるわけにはいかない。そう誓う彼女もまた新たな一步を踏み出す。

違う道歩みだし遠くなる背中へ、己の理想を追求し続ける決意を互いに示すかのように力強かった。

紺碧のコントレイルⅡ 第1章 エンジェルヘイロー

第1話 黎き剣（前編）

——— どれだけ剣を折られようとも、信を託してくれた者の為に戦い続ける。

そう『イリア騎士の誓い』を立て、新しい道を歩み始めた十八部隊。道なき道を理解されずとも、認められずとも、ただひたすらに、前へ。隊の先陣を切るシャニーの横顔には半年前の幼さはなく、部隊長として今日も青髪で風を切っていた。

「あゝッ、今日も頑張ったねー！」

夕日を背に天馬をカルラエ城へと駆るシャニーは、うんと伸びをすると振り向いて仲間たちに声をかける。もう一日が終わろうと言うのに、その声はまだまだ爽やかで飛び足りないと言わんばかり。

（もーちよつとでも陽が長ければなあ）

もう帰らないといけないなんて。一番良い所で切り上げないといけないのはイリアの冬のせいだ。陽が落ちる時間が早いおかげで仕事をできる時間が短くて困る。

シャニー達は十月から新任務に就いていた。テイト団長が揮った人事の目玉——— 国力向上活動だ。それに決まった仕事など無い。常にイリアの空を飛び回って想いを拾い集め、積み上げ、形にする。イリアの未来ヘールを敷く仕事。

今日もたくさんの声を集めて帰って来た天馬隊が夕焼けに燃えて赤くなる。寒空を朝からあちこち飛び回っていたのでバテバテだ。今も鼻歌をうたうリーダーを除いて。

「あー……腹減ったッス……」

ふらふらしながらミリアがお腹を押さえて暗くなった天を仰ぐ。

行った先の名物料理をアテにして、朝を軽く済ませたのが間違이었다。今日は時間が無さすぎて昼食も適当に済ませるしかなく、おやつを食べる時間だって無かった。今ここで倒れてしまったら起き

上がれそうにない。

「ミリア、そればかり」

だが、銀色の瞳が今日もかと言わんばかりの呆れで後ろから突いてきたかと思うと、まるで同情することも無くすたすたと歩いて行ってしまう。

レンの後姿を恨めしそうに見つめていると、今度はルシヤナからも早く歩けとお尻をひっぱたかれた。相変わらず副将は厳しい。

「あ〜！ おなかぺっこぺこ。ねっ、今日はみんな何を食べるの〜？」  
背後から駆けてくる音。振り向こうとしたルシヤナとミリアの後ろからゆつと顔が出てきて、二人の肩を抱き込みながらシヤニーがニコニコ声をかけてきた。二人が返すより先に手を挙げる笑みははち切れんばかり。

「今日はガッツリ行こうかなー！ お肉にけつてーい！」

普段でも超人級の食い気なのに。ぎよつとする二人をよそに、これから一日が始まるかのような相変わらずの朗らかな笑顔が部隊を包み、疲れが少しだけ癒される気がする。

朝から晩までこの太陽のような明るさであれだけの村人たちと喋り続けて、まだこれだ。とても真似出来そうに無いとルシヤナの苦笑いが始まった。部隊長になってもスタイルが変わらないと言うか、相変わらずと言うべきか。

「あんたら……生き別れた姉妹なんじゃないの？」

今ではたった五名の部隊だというのに、どうにも壊れた蓄音機が二つもあると騒がしくて困る。

最後まで十名程度残っていた十八部隊だったが、国力向上の任へそのまま残る事になったのは部隊長シヤニーと副将ルシヤナ、そしてミリアにレン。皮肉なことに総務部長が持っていた戦力分析票の上位四名だけが残る事になった。

さらにレイサも入れて五名が第十八部隊の第一分隊名簿に記載されたメンバーだが、レイサは天馬に乗れないから最近では別行動が目立つ。

「だってさ、動き回ってお腹空いたじゃん！ 早く行こーよ、死んじや

うって！」

「そうッスよ！ 腹が減っては仕事も出来ないッス！」

シャニーにミリアまでつるんでルシヤナを引つ張っていく。四人は朝から晩まで行動を共にし、この後も一緒の予定だ。カルラエ城に戻ったらシャワーを浴びて皆で行く夕飯が日課。今日もたくさん集めた人々の想いをまとめる時間でもあるから、食卓は大事な仕事場だ。



日報へ適当に字を書いて、身支度を整えるとカルラエ城を飛び出した。今日も天馬を駆って目指すのはエデツサにあるバーだ。

底無しの苦悩に沈んだシャニーを皆で救い出し、十八部隊が一つになった場所。そこは今でもアジトのような存在となっている。

「言つとくけど、今日はおごってくださいよは言わないだからね」  
バーのドアをくぐる寸前でシャニーが止まって振り向くや、ミリアに警戒の眼差しを送る。

「え、そんな殺生な」

返ってきた言葉に彼女の口元が歪んだことは言うまでもない。猫なで声をあげられてもぶんぶんと首を横に振った。

(絶ツツツ対にオゴらないぞ……)

一か月の内に二度も財布を空っぽにされては堪らない。しばらくするとミリアも諦めたらしく、ほっとしたらぐうっとお腹が鳴った。

いつもの様に奥のテーブル席を陣取る。ハンバーガーやら酒やらピザやら……各々好きなものを頼んでは適当に広げ、他愛もない話で盛り上がりだした。店中が荒くれの声で騒がしくても、彼女たちの笑い声はひと際よく通る。

自分たちで選んだ道を歩む仕事は大変だがやりがい満ちて、家族同然の仲間と過ごす仕事終わりの時間は楽しくて仕方ない。

追加注文のハンバーガーがドンと来て、食器同士が邪魔そうに押し合う。テーブルの上は好き勝手に食い散らかしたものでごった返して、豪華なんて綺麗な言葉で片づけるにはあまりにも乱雑だ。



泡が垂れるほどジョッキに継いだビールをぐいっと豪快に傾けたルシヤナは、隣に座るシャニーへ視線を送る。彼女の前に当然のように三つ置かれたハンバーガーは串で刺していないと崩れてしまう程巨大だ。シャニーは顔程あるそれを両手で掴むと、むしゃむしゃかぶりついて至福に喜色満面。

「シャニー、最初の企画、何で行く事にしたの？」

任務としては十月から正式に与えられた国力向上活動だが、シャニー自身は六月ごろから既にその原型を始動させていた。

村々に話を聞きに行っても、天馬騎士団の紋章を見るや、ベルンに付いた騎士団だと最初は青筋を立てて怒鳴られた事もあった。

それでも最近はどうやく耳を傾けてくれるようになって、部隊長会議で報告したい事は山ほどある。その中で、第十八部隊の初陣をどれにするかずっと悩んできたのだ。

「ふおれー」

声をかけると、今もリスのように頬を膨らせてもぐもぐするシャニーが、鞆から一枚の紙を取り出してすつと突き出してきた。目を落としてみると、カルラエ城下町への病院建設の企画書だ。

「やっぱりこれで行くんだね。デカいもんね」

ルシヤナはニヤツとするとまたジョッキを大きく傾けた。最初はやっぱり大きな花火をドカンと一発ぶち上げたい。

栓になっていたハンバーガーをようやく飲み込んだシャニーの口からは、どこからその自信が湧くのか不思議な程の元気な声が飛び出した。

「きつと上手く行くって！　ウツデイも必要なら説明に参加してくれらるって言ってたし！」

随分樂觀的なもので、もう一個目をぺろつと平らげた彼女は口の周りに着いたケチャップを拭った指を口に突っ込み、迷うことなく二つ目に手を伸ばす。

皆から困りごとを吸い上げ、部隊長会議で説明して資金と人を動かす仕事。誰とでもすぐに打ち解けてしまうシャニーには天職と言えそうなものだが、ジョッキをドンと置いたルシヤナはジト目を向け

た。

「頼むよ、ちゃんと私たちが計算した内容、頭に入れといてよね」

問題は資金だ。議長のイドウヴァはとにかく資金の事となると小煩いらしい。

ルシヤナが心配なのは彼女の事だけではない。とにかく数字に弱いのだ、リーダーは。部隊長会議は部隊長しか出られないから援護もできない。

「オツケー！ 任せといてよ、へーきだよ、へーき！」

シャニーの「へーき」は危険ワードの上位に入る。二つ目のハンバーガーもあつという間に攻略してまだ喰い足りないと言いたげな横顔には不安しか覚ええない。やはり明日、会議の前に一から説明しないと心配になってきた。

「提案できるのが一個つてのもツライツスねえ」

本当はたくさん報告したいのだが、最初だから勝手が分からないし、部隊長会議の一部を使つての報告では時間がまるで足りない。シチューを頬張るミリアの顔は不満げだ。

「ん。今日の村も可哀相だった」

まだ二時間くらい前の事だから、レンが改めて口にせずとも皆同じ事を考えていた。

街道からも外れた場所にある村は常に物資が不足していて、雪に閉ざされる冬場は枯渇しようとも助けを求める事すら出来ない状態なのだ。そんな村がイリアにはあちこちにある。

「しばらくはあたし達が輸送するにしてもさー」

もぐもぐするシャニーの眉が下がる。たつた四人では出来る事は限られる。いくら天馬騎士が地形を無視してあちこちを短時間で飛び回れるとしても、全ての村に物資を届けるなんて厳しい。

三個目もいとも簡単に腑に落とした彼女は、付け合わせのフライドポテトを啜えながら鞆に手をつ込む。中から地図を取り出し、皿をガチャガチャ退けてテーブルに広げた。

「何とか輸送路を確保したい所なんだけどね……」

広大なイリアの大地。それを一気に繋ぐ輸送路を築きたい。だい

ぶ前から考えとしては頭に置いてきた事だ。

でも、未だに良い案は浮かんでこないし何より問題が……やはり資金だった。きつと、想像もつかないほどに膨大な資金が要る。皆が傭兵に出て血と汗を流して稼いでくるお金だ。そう易々と使える訳でも無い。

(あたしが少しでも稼ぐことが出来ればな……)

十八部隊は国内専門の特殊部隊。傭兵として出ていく事は任務では無いし、何よりそんな時間はない。

毎日のように浮かんでは消す想いを今日も払った時だった。視界の端に黒いものが入り、ピンと走った感覚にそちらを振り向いて目を見開いた。

「あ、あれは……」

黒の帽子に黒の外套、そして大事そうに刀剣を握る男。

(待ってたよ……。今日こそ……知って帰るぞ)

間違いない。月の頭からずっと待ち続けていた紳士がようやく表れたのだ。

それまでの朗らかな眼差しが一瞬にして隼のように鋭くなる。最初は少しだけ躊躇った。あの時ならともかく、選んだ自分の道にはもう必要ないかもしれない。

(だけど……)

彼女は腰に差した剣をしっかりと握りしめて改めて自答する。

——この剣を何のために握るのか……力を得て、何をしたいのか

改めて問わずとも、もう答えは出ている。その為に、十八部隊の部隊長として前を向いているのだから。自然と黒き男を決意の瞳で見つめる。

「ごめん、食べてて。あたしちよつと、知り合いに声をかけてくるからさ」

突然に席を立つと繁盛極まる店の中を慌てた様子で縫うようにして歩いていく。シャニーの様子に仲間たちは顔を見合わせた後、誰もが首を横に振った。

## 第2話 黎き剣（後編）

「ごめん、食べてて。あたしちよつと、知り合いに声をかけてくるからさ」

突然に席を立つと、シャニーは繁盛極まる店の中を慌てた様子で縫うようにして歩いていく。彼女の様子に仲間たちは顔を見合わせた後、誰もが首を横に振った。

「どうしたんスカね、急に」

こういう時に背が高いと役に立つ。ミアは立ち上がり、額に庇を作って何があったのかとシャニーを追い始める。その背中はするする荒くれ共を掻き分けて、カウンターに座る真つ黒な男の横へと吸い込まれていった。

「あの人、前に一緒に酒飲んだな。今度はあんな年上に惚れたのか、あいつ」

ミアに指された先にいた男をふと思い出し、ルシャナはほかんとし始めた。何回か酒の場に居合わせてシャニーと仲良く話していた人だ。

彼女が口にする男と言えば幼馴染のウツデイか、名前を出すだけでデレデレし始めるロイぐらいだったのに。随分とブルズアイが広いものだと、すぐにあれこれ噂話に花が咲く。

「こんにちは、おじさん。お久しぶりだね」

蒸留酒を飲んでいた紳士は、突然の声に傾けかけていたグラスを止めて睥に見下ろす。そこに座っていたのはニコツと愛嬌のある青髪の乙女。

「お隣座っちゃって良い？」

答えを待つまでもなく、すでに彼女はマスターに手馴れた様子で棚を指さして注文していた。

しばらくして出てきたのは紳士と同じ琥珀色の蒸留酒。一口するだけで眉間にしわを寄せていた以前とは別人のような仕振りはだいぶ呑み慣れている。

「君か。久しいな。何か顔つきが変わったように見える。別人かと

思ったぞ」

木管楽器の様な深い声でシャニーへ話しかける男の目元は今日も帽子で隠れて見えない。けれど口元は親し気でトーンも優しい。

「えへへ、そりゃあもう、毎日何かしらあるからね」

そう言つて笑う彼女の顔は、以前会った時とはまるで輝き方が違う。どうやら一皮むけたことを伝えてくるし、それは彼女が着る服ひとつ見ても分かった。

白を基調にした小さくサイドスリットの入ったミニワンピース風の士官服はこの年で着こなすには難しそうだが、それなりにものとしている。酒の飲み方と言い、やはり面白い。

「それは良い事だ。刺激のない人生は退屈で仕方ない」

紳士の言葉にうんうんと頷きながらグラスを傾ける。部隊長へ昇任して国内専門部隊を率いるようになってから仕事が楽しくて仕方なかった。

今日の酒は嬉しい。この紳士を待つ為に独りで飲んでいた時はただ苦く、胃を焼き付けるだけの毒かと思うほどだったが、初めてこの酒を美味しいと感じたかもしれない。

しばらくは他愛のない話をして機会を窺う事してみる。

「シャニーって、年上のダンディが好みなんスカねえ」

その様子を、仲間たちは食い入るように見つめては、あれこれ本人がいたら怒るような事までネタにして盛り上がる。

「まあ、ついに行きそうな性格ではあるよね」

随分とシャニーの横顔はご機嫌だ。ルシヤナはぐいつとジョッキを傾けながら幼馴染の惚れっぼさを笑っていた。

見習い修行先でも二周りくらい年上の傭兵団のリーダーに憧れていたらしい。彼の事を師と呼び、妙な事を言くと本気で怒るくらい真剣だった。

それがロイに何度も手紙で誘われてからというものの髪を伸ばすわ、休暇を取って飛んでいこうとするわ……。好き好きオーラ全開のくせに、仲間にはバレていないとまだ本気で考えている節がある。そして今度はあの良く分からない男。

「最近はどこに稼ぎに行ってたの？」

他愛のない話の一環としてシャニーは聞いたつもりだったのだが、グラスに伸びた手が止まった。

どこに焦点があるのか定まらない視線。酒をひと含みした紳士が、カウンターの奥にある酒の棚を見つめたまま黙ってしまったのだ。

(ありや……もしかして地雷踏んじやった?)

気に障る事を聞いてしまったのだろうか。何とも間の持たない沈黙がカウンターへ広がってしまい、シャニーの顔から少しずつ笑みが消えていく。

「行動を気にするのは愛する相手だけにしておけ。男が妬くぞ」

そこにかけられた言葉はシャニーの顔を真っ赤にさせるには十分なものだった。明らかに動揺した瞳が行き場を失って泳いでいる。

愛するなんて言葉を聞くと、どうしてもあの人の顔が思い浮かんでしまう。天馬であれば一日で飛んで行けるというのに、あまりにも遠くて会いに行けないあの人の顔が。

「あ、愛するって……そんな人あたしには……居ないし」

それでも、誰にもその事を言ったことは無い。言えるわけがない。

(あたしみたいな傭兵なんかじゃなあ……)

相手は世界の英雄。自分はただの無名な傭兵騎士。とても叶わぬ恋だ。

憧れの人が変わりはない。だけど、そこまでしか踏み込めなかった。手紙で彼の支えになってあげられれば良い……くらい。

あまりに雲の上の存在で、天馬で飛んで行っただって届くなんて思えない。身分や立場の差さえなければ……。そこまで考えを巡らせてはつとする。

「つてー！ 何を言わせてるのさー！」

「純朴だな、君は」

これだけの反応をしておきながら居ないと言って誰が信じるものか。紳士は腹から木管楽器のような深みのある渋い声で笑って見せた。

何も言い返せずに真っ赤になった顔を下へ向け、シャニーは場の空

気が時が解決してくれるのを待った。そこへすつと差し出される皿。上には焼きたてのソーセージが乗っており、紳士はフォークでそれを突き刺すと皿を更にシャニーへ向けてきた。一本もらつて口に運ぶ。ようやく動き出した時。ついにシャニーは本題を振ることにした。「二か月前からずつとおじさんがここに来るのを待ってたんだ。悩みがあつてさ」

毎日ここを訪れては酒を飲み、そのまま寝落ちて閉店と共に追い出される日々。

本当に惨めだが、今思えばあの時間も必要だったのかもしれないと、最近はやく思えるようになってきた。

仲間たちが手を引いてくれなければきつと今日も同じことをしていただろう。指を差してくるのが見える。有る事無い事を言つて盛り上がっているに違いないが、そうして弄られるのも何か嬉しい。

「今はそれを抜けたようにも見えるな」

何かを迷っていたらしい。紳士はすぐに分かったが、これだけ前を向いて瞳を輝かせている姿からは窺い知れない。すでに吹っ切れた顔からは充実感が溢れている。

「うん……うん……」

それなのに、紳士の言葉を聞いたシャニーは目を閉じ、一度は頷いたもののすぐに今度は横に振った。

「最近はやりたいことが忙しくて顔を出せなかっただけ」

悩みを解決出来た訳ではない。それを隅に追いやつて余りある程のやり甲斐ある仕事を手に入れたから、朝から晩まで考える暇が無かつただけだ。

今までもそうだ。悩みがあるとその度に剣を振つて気持ちを整理してきた。それが今は、あちこちの村を回つて話を聞く時間に代わつただけ。

一人でいるとやっぱ隅に押し込まれていたものが浮かび上がってくる。剣の道を志す以上は捨てきれない。

「ならそちらに気を向ければいい。今の君には不要だろう、『全てを倒す剣』など」

「おじさん……どうしてそれを……」

民の声を聞くことに、何故剣が必要なのか。そう問われた気がして、心は整理したはずなのにすぐに良い言葉が浮かんでこなかった。それ以上に、自分が何を求めているのかを瞬時に見抜かれたことに驚きを隠せず確信した。

(やつぱり……この人は何か知ってる)

ところが、紳士はグラスに半分以上残っていた酒を一気に腑に落とすと立ち上がり、会計をして出ていこうとしているではないか。

この機会を逃したら二度と会えないかもしれない。無意識のうちにシャニーも店を飛び出していた。

「待って！ おじさん、教えて！ あたしのこの力、どうしたら引き出せるか」

雪道を足早に去ろうとしていた紳士の背中へまっすぐ叫ぶ。彼は背中を見せたまま帽子の下から睥睨してきて、鋭い威圧感がシャニーの喉を締め付けた。だけど退くわけにはいかなかった。イリアの礎となり、民の傍で戦い続けるには、行動を起こしていくしかない。

何も知らないままでは絶対に後悔する。何もせず後悔するなら、行動を起こして後悔しようと思った。今までも、これからも。

「……その心は？」

「皆を守る剣として身に着けたい」

その願いはずっと変わっていない。ただ違うのは、あの時に握ろうとしたものは全てを薙ぐ魔剣だったという事。

「精一杯の天井をもっともつと高くしたいんだ。今までよりも、もつとたくさんの人を守る剣にしたいから」

敵を倒す為に手に入れる訳では無い。いざという時に民を守る引き出しとして手に入れたい。きつと少し前の自分ならソルバーンのような魔人を倒す為と答えていた事だろう。全ての敵を倒したいエゴに駆られて。

——付いてこい

静かに歩き出した紳士の背中を、シャニーは胸元のロケットをぎゅつと握ってついていった。



### 第3話 黎き悪夢の目醒め

頬を切る風音がどんどん強くなる気がする。一体どこまで行くつもりなのだろうか。とつくにエデツサの城下町から出て、街道さえも外れて山の中を歩き出している。

何か話しかける気さえ起きない程の近寄りがない霧囲気を醸し出しながら紳士は先へ、先へと歩き、新雪を踏み抜く音と風が寒空を駆る声だけが聞こえてくる。

(大丈夫だよね……何か心配になって来たよ……)

よくよく考えてみれば、この紳士の素性なんて全然知らないのに独りでついてきてしまった。少しずつ不安が腹の中にじわじわと湧きあつて、堪らず胸元のロケットをぎゅつと握る。

「……」

ようやく紳士が立ち止まったのは、辺りを覆っていた木々が不意に晴れ、月光が美しく照らす雪原。

ここまで来て、やっとシャニーはどこまで歩いてきたのかを知る。

以前、あの仮面の魔術師と戦った場所だった。

「……なら思い切り刀を振っても大丈夫だろう」

インバネスコートをばつと音を立てて翻し、紳士は振り向いた。

帽子を今一度深く被り直すと、それまでずっと大切に持っていた剣を鞘から引き抜く。あまりにも美しい刀。白銀の刃が月光を溶かしこむ様にして映す。

(あれがミュート……)

その刃を見ただけでシャニーはごくりと息をのんだ。この感覚は、以前あの刀を握らされた時も襲って来たもの。寒気がして足が震えてくる。彼の井手立ちと鬨気がそうさせるのだろうか。その威圧感 は全身をヒリヒリさせ喉が締め付けられる。

「さあ、どこからでも来たまえ。まずは君の腕を見せてもらおう」

帽子に隠れていても眼光が貫いてくるよう。斬り結ばなくても分かる。この人はとんでもない人なのだ。自分では束になつてかかって一太刀も浴びせられそうにない程、その構えには隙が無い。

小細工など通用しない。今持てる全てを尽くしてぶつける以外に、先を拓く道は無さそうだ。静かに剣を引き抜き、顔の前に構えて目を瞑ると誓いを心で唱える。

(チャンスをもたらったんだ……やるしかない！)

再び開いた明眸に宿る隼の如き鋭い眦。震える足元に力込めて、シヤニーは脇構えで一気に紳士との距離を詰める。

未だ勝利を知らぬ剣。それでも、今まで培ってきたものすべてを紳士にぶつけた。連撃を浴びせ、受け止められたと見るや疾風の勢いそのままに横を抜けて背後から切り上げる。

(くそっ、これもダメか！)

刀身同士がぶつかる鋭い音が山へと響く。紳士の鋭い眼光は瞬きすらしていないかのようで、繰り返す剣の全てを無駄の一切ない小さな動きで確実に止めてくる。まるで隙が無くて上段から振るチャンスが無いまま、ひたすら攻めて相手の動きを抑え込む。

また斬り上げた一閃を弾かれて火花が散り、跳ねられた剣を握りなおして懐に飛び込んだ。

「これならどう!!」<sup>ツヴァイ</sup> <sup>ジリオン・ミーティア</sup>「万華の流星!!」

疾風怒濤の連撃は新しく編み出した剣技。颯に現れ颯に消える一閃をあらゆる角度から流星の如く浴びせる。

(強い……ッ。これでも通らないのか！)

瞬く暇も与えない無数の斬撃。避けられるはずも無いその全てをミュートに飲み込まれていく。電光石火の連撃も、苦心して編み出した剣技も、全てがああ青白い刀に弾かれる。それでも、以前の様に焦りが浮かぶ事は無かった。

(いいんだ！ これでいい！ 動きさえ止められれば、ミリアが仕留めてくれる！)

とにかく勇気を握って剣を振った。倒せなくてもいい。自分が攻めて隙をこじ開けている間に仲間がフォローしてくれる。ミリアのクロスボウが照準を絞る事さえ出来れば勝ちだ。ひたすらに、ただひたすらに颯の剣を繰り返して隙を探す。

「ぬっ?」

微かだがミュートが揺れた。キツと切れ上がる眦が月光に走る。

「これでどうだっ！ 終の太刀ツ、黎明の月光!!」  
イクシードアーツ クレツセントムーン

切り返しまでの僅かな隙を逃さず、シャニーは持てる一番の技を惜しむ事無く叩き込む。飛翔し、ありつたけを込めた弧月の光が紳士を襲った。

(やっぱり……、強すぎる——ツ)

ドシンと響いて紳士を揺らす、やはりミュートに受け止められていた。流れるように背後へ回って追撃のバルサミックムーンを浴びせたが、それさえも斬り返されて距離があく。

(あたし独りじゃ、やっぱ……これが精いっぱい)

全て……全て出したはずなのに。肩を大きく上下させてもうもうと白い息をあげても、紳士はかすり傷どころか息の上がる様子さえ見せない。

それでも、悔しさより何か満足した。これだけ動きを止められれば、仲間がきつと仕留めてくれるはずだ。

「……なるほど、君の師匠は良い刀を君に教えたようだ」

——もう、十分

そう言わんばかりに紳士から迸る鬨気は消え、そつと鞘へ納めた口元は満足げ。それを確かめて大きく息を吐きだしながら剣を下すシャニーの顔からも、隼のような厳しさが消える。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。剣を使っているだけでヘンなヤツ認定する人もいるからさ」

ここらで満足してもらえて良かった。上がりにながった息がもうそろそろ続かないところ。肩で息をしながら感謝を伝えるシャニーの顔にも喜色が浮かぶ。こんなに凄い人に師匠を誉められて嬉しかったのだ。

今でも腰に差した剣へ浴びる事がある好奇の視線。自分の道と決めた。それでも、そんな視線を浴びると不安な時もある。

理解してくれる人がいると、今まで振り続けてきた数えきれないほどの剣が報われた気がした。

「最近は大馬に乗りながら魔法を撃つたり、弓を持ち出す奴までいる。

君のように天馬乗りが刀を扱うのだって唯一無二の価値さ」

紳士が出してきた連中の話にシャニーは苦笑いするしかなかった。どう考えてもあの二人のことだ。

天馬騎士団以外にも噂になっているとは思ってもいなかった。無理もないか、毎日騎士団の管轄地のどこかに顔を出しているのだから。

自分だけの価値——その言葉がシャニーには至上の喜びだった。無価値な剣などでは決してない。紳士にも認めてもらえた自身の剣の意味を確かめていると、彼が不意に問うてきた。

「君は刀の稽古をするとき、何を考えている？」

唐突な質問にそつと瞳を閉じてみる。今までの稽古の光景が浮かんでくる。陽が昇る前、落ちた後。一人で、仲間と……。色々な場面で剣を振って来た。苦しい時も悔しい時も、悲しくて寂しくて、どうにも心が収まりそうにない時も。

そして今だってそうだ。再び瞳が紳士を映すまで、さほど時間はかからなかった。

「師匠の教えを、考え方をしっかり継承出来たのかなっていつも考えてる。まだまだ、全然あの人のような剣を振るえていないんじゃないかって」

剣技の型は自身を映す鏡だから、デイークと違ってても良いと今では思えるようになった。

だが、剣に対する考え方は、たとえ外見が違ったとしても通じるものがあるはずだ。

あの時、デイークが自分に何を伝えようとして、それを自分がどれだけ理解して剣を振っているのか。自身の剣の軌跡をずっと見つめ続けてきた。

二周以上違う相手だ。肩を並べることが出来ないかもしれない。それでも、少しでもあの大きな背中に追いつきたい。紳士はその道に領いてくれた。

「他の持つ剣が素晴らしく見えるのは仕方ない事だ。己の剣は、鏡を見なければ決して全ては見えない。そして、そんな自分を客観視でき

る便利な鏡など、誰も持ち合わせてはいないのだ」

紳士の言葉をもっと早く聞きたかった。己を客観視できずに、八英雄だの部隊長だの、そんな言葉に惑わされて底無しの沼に嵌った一か月。

彼の言葉を先に聞いていればもっと違う今があったかもしれない。

……そんな想いをシャニーは断ち切った。無駄な事など何もない——それは今ここに立っている事が証明している。

「私から見れば、君の刀は淀みを払った清流そのものだ。色々苦労してきたのだろう。ここまで清流なる軌跡を描く刀なら、もう後はきつかけただけだ」

剣は、その者の心を映す鏡。太刀筋を見ればだいたい分かる。怒っているのか、悲観に暮れているのか。今まで何を乗り越えてきて、今何と戦っているのか。迷いのない太刀筋には、やはり彼女の求めるものは必要無い様にも思える。

だが、それを決めるのはあくまで本人だ。この清流へ求めるものを融合させ、更なる真澄を目指そうとするのであれば、それに待ったをかけるのは野暮のする事。

「きつかけ?」

今もこうして、道を求める青い眼差しが力強く見つめてくるのに、拒否する道理は無い。

「そうだ。君の中に眠るものを起こすきつかけだ」

何か心当たりがあつて聞きに来たものだと思つたのだが、この反応からするに彼女は本当に何も知らないのだろう。

そうなれば、きつとあいつは怒っているに違いなかつた。そうとは知らずに、シャニーは剣を収めてしまった紳士の許へ駆けていくと怖気ることもなく問うた。

「あの、そのきつかけて言うのは、教えてもらえないの?」

「当然だ。鍵を開けるには君が自身で見つけるしかない。剣なら替えはいくらも利く、だが君の人生という剣は一本しか無いのだ。手入れし、磨かなくてどうする」

言われたことは至極真つ当で何も反論できなかつた。口をきゆつ

と閉じて黙ってしまっただが、俯いた彼女の眼差しにはどうしたら良いかと必死さが滲んでいる。

「ただ……」

その言葉に彼女はぼつと顔を上げた。そこには紳士の厳しい眼差しがあり今にも貫かれそうだった。

「固く閉じた扉をノックするくらいなら、手伝う事は出来る」

——— どうする？

紳士の眼はそう問うてくる。

今更迷う事など何も無かった。一度息を大きく吸い込み、瞳を閉じてもう一度だけ考えてみる。自分が欲しいものは何なのか。すぐに自身の心が返してきた答えをしっかりと受け取って、彼女は青い瞳をまっすぐに紳士へと向けた。

「お願いします」

「力を手に入れる事は悩みを解決する事にはならない。新たな悩みを背負いこむ事になる。それでもいいか？」

新しく問う心構え。天馬騎士団の部隊長と言っても、彼女はまだ十五歳。成人となつて1年経たない新米。その彼女が通る道にしてはあまりにも苛酷に映る。

止めることは野暮だと分かっている、踏み入れたら二度と帰れないその選択に最後の警告を与えた。

月高くなり深々と冷える雪原で風の音だけが時を刻む。

「皆を守る剣を身に着けるためなら。目の前にチャンスがあるのに、飛び込まずに後悔はしたくないよ」

答えはあっさりと出た。自分に迷いながら生きていきたくはないし、自身が誓ったイリア騎士の誓いに嘘をつかずに生きていきたい。

「……承知した」

一度動き出したら止まらない歯車を自ら押した乙女。鋭く見下ろした紳士は、一歩引いて彼女から距離を取った。

「ならば目を閉じるがいい」

言われたままに瞳を閉じる。もう今まで開けていた視界は永遠に帰ってこないかもしれない。その恐怖が少しずつ真つ暗になった視

界の中で広がって、聞こえてくる風の音が拍車をかける。

ふいに、刀を抜く音がした。目を閉じていても分かる。紳士は構えを取り、自分に向かって刃を向けている。

——怖い!!

それでも彼女は歯を食いしばり、拳を握りしめて紳士を信じた。

次の瞬間、放り出されたような感覚に陥っていた。体は今もすっかり立っているのに、縛っていたものが解かれて弾き出されたような。そのうち、体に力が入らなくなつてその場へ糸が切れたように倒れこむ。

「シャニー!!」

向こうから声が聞こえてくる。いつの間にかいなくなった彼女を仲間が探しに来ている。

そして彼女たちは見てしまった。目の前で、一緒に酒を飲んでいた男に親友が斬られたところを。

悲鳴をあげながら駆けてくる彼女達へ一瞥する事も無く、紳士の視線はずっと倒れたシャニーへと注がれている。

「ゆ、許さないッス！ よくもウチらの家族を!!」

無意識のうちにミリアの手にはクロスボウが握られて、桃色の目が涙に血走る。

だが、その手にふいに乗った手が武器を放り出させた。シャニーは意識があり、座り込んだままミリアの手を掴んでいたのだ。

すぐに仲間たちは無事か確認するが、太刀痕はどこにもない。その最中ですでに立ち上がったシャニーは体をあちこち触っている。

「……鎖は斬った。あとは君自身がどうするかだ」

彼女の様子を確認すると紳士は剣を納め、背を向けて歩き出した。困惑した表情を浮かべたのはシャニーだ。

「何も変わったようには……見えないんだけど」

あれだけ警告されたし、実際に鎖を切つたと言われてもまるで実感などなかった。

映る視界も今まで通りだし、何か奥底から力が湧き上がって来る訳でもない。ただただ、恐怖に耐えた疲労感だけが振り子のように背中

へずんとぶら下がっている。

「そのうち分かる。だが、今は使ってはならない」

「ええ……？ どういうこと？」

まるで意味が分からない。使うも何も、何を使えば良いと言うのか。おまけに使ってはいけないのでは何が変わったのかさえ分からない。

「使って良いのは制御の仕方を自分で見つけてからだ」

答えになっっていない気がする。それなのに紳士は歩き出してしまっている。

慌てて彼の背中を追いかけようとした時、ふいに吹き込んできた強い風に雪が舞いあげられ、ホワイトアウトの中に紳士の姿は飲み込まれてしまった。

「磨くだけでは無く、手入れして労わることも必要だ。自分の剣はまず自分で労われ」

雪のカーテンが晴れた時にはもうどこにもあの黒い背中はなく、声だけが新たな目醒めを迎えた乙女を激励するのだった。



山を抜けて旧街道を一人歩く紳士はおもむろに葉巻を取り出して口にくわえる。

あれだけ長い時間煙草を我慢したのは久しぶりかもしれない。純白に煙草の黄色いシミをつけるのは失礼だろうと思ったが、やはりなかなか堪えるものだ。

「ウエスカーか。戻っていたのか」

マツチを探す時間さえ許してはくれない。瞬時に葉巻の先端では爆発のような火炎が吹き上がって煙を上げる。

影から這い出るようにして現れた部下が頭を下げる姿に、紳士は帽子を深く被り直してため息をついた。どうにもこの男は止めろと言っても聞かない。

「ええ。調査がちょうど終わりましたもので。状況に動きはありません」



報告を受けた紳士は葉巻を大きく吸うと口から離して一服を味わう。申し訳ないと言うべきか、主に面白い報告が出来なくてウエスカーは残念そうだ。

「あちら側が動き出すのは三、四年後くらいだろう」

何かとシヨールを興したいウエスカーとは違って、紳士は落ち着いた佇まいを崩すことはしなかった。こちら側でもまだ何も起きていないというのに、煙より先に火が起きることはあり得ない。

火よりも先に、煙そのものが起きないようにすることが肝要であり、それこそが課せられた使命。

「ところでマスター。あの者を解放したようでは」

しかし、表面上では見えなくともあちこちで燻り始めている。それは、決して手を下すなど言い続けてきた主が自ら行動を起こしたことからも覗えるではないか。

その結果をさも楽しみと言わんばかりに、ウエスカーの口元は吊り上がり肩が揺れている。

「うむ。だが、まだ鎖を切っただけだ。何かきつかけが無ければ目が醒める事は無いだろう」

望み通り、扉にかかった鎖は外してやった。後は扉の鍵を自分で見つけて開くだけだ。

何の痛みもなく手に入れた力に果たせることは知れている。その程度の力なら知らないほうが良い。中途半端に力を持てば死ぬだけだ。

「それは吉報ですね」

それを知ってか、ウエスカーは嬉しそうに口元を釣り上げた。

「私めに再戦の機会をお与えいただけるということですか？」

次は本気で戦う事が出来ると考えるだけでゾクゾクする。強い輝きを持つ者であればあるほど燃やしてしまいたくなる。今度こそ、あの青髪が真っ白になるまでシヨールを満喫したい。

やめろ———そんな期待は主の短い言葉によって否定されてしまった。

「お前は激しすぎる。認める訳にはいかんな」

「おお、これは残念ですね」

さもがっかりした口調だがおそらく分かってはいない。

前回はアルマが騎士団に所属しているのかを調べるためという大義があったが今回はそうではない。彼が盛大なショーを興すステージはもはやこのイリアには無かった。

「自身で鞘から引き抜かねば意味がない。鞘への戻し方も、だ」

「ええ……強力な剣には、それ相応の対価が求められる……」

抜刀し、納刀するまでが一連の動きだ。抜刀したままではいつまでも周りを傷つけ続ける。

守る剣を欲しいと彼女は言った。もし納刀する術を知らないままの黎き刀を抜けば、おそらく彼女は自分のする事に絶望するだろう。

だが、それも必要な事。自分で見つけるとは、そういう事だ。

「いいかウエスカー。我々が為すべきはただ、彼らの背中を押すだけだ」

きつかけを掴むための機会を与えた今、もうこれ以上の干渉は許されない。この世界の歴史はこの世界の者で創っていく必要がある。改めて明確な警告をウエスカーに与え、彼を睨むようにして見上げた。今回の件も、あくまでターゲットを斬る剣を作っただけのこと。

「ならば、私めは最終チェッカーを担うことにしますよ」

物は言いようか。どうしても戦いたいらしい。また葉巻が真っ赤になるほどに一服を楽しむと、紳士の口元が珍しく上向いた。

「ふっ、その時が早く訪れると良いのだがな」

紳士はウエスカーの飽くなき欲望を一つ鼻で笑うと、そつとミュートを引き抜く。目線の高さでその刀身を月光で照らしてじつと見詰め、ぼつりと漏らした。

——君は……彼女と同じ道を辿ってはいけない

黒ずくめの男たちは黎き剣の覚醒を待ちながら、次の任務に進むべく白銀の世界へと溶け込んで、あたりには静寂だけを残して夜が更けていった。

## 第4話 いざ部隊長会議へ！

カチカチと足が震えてくる。こんな事ならトイレに行っておけばよかった。

周りは今まで雲の上の存在と思ってきた人たちばかり。誰もがどこか厳しくも仕事の出来そうな凛々しい顔で、それだけで部屋の空気がギンと張りつめている気がする。

(うわあ……あたし、なんか浮いてない??)

シャニーはこの日、部隊長に就任して初めての部隊長会議へ参加していた。

円卓に座った十八人の部隊長。右を見ても左を見てもエライ人。年上のお姉さんしかいなくて息が詰まる。

きよろきよろしていたら、メガネが鋭い人と視線がかち合った。ギクツと背筋が伸びる。あれは第四部隊の部隊長だったか……。一瞬眼鏡が光った気がしたが、とっさに頭を下げたらふつと笑いかけられた。

「では、部隊長会議を開始します」

議長を務める副団長イドウヴァの一言が第一会議室に響くと、厳しかった面々の横顔がさらに鋭くなる。でも、シャニーは全く別の事を考えていてまるで話が頭に入って来なかった。

(どうやって報告しよ……あわわ、キンチョーしてきたあ……)

下を向いてもじもじしていたら、横から突っつかれた。はつとして顔を上げると議場の顔が全て自分へ向いている。

(げっ……。何、何、なんかあたしの顔についてる?!)

真っ白な顔でぽつんとしていると、イドウヴァが咳払いをして目を三角に吊り上げてきた。

「新任の挨拶をしてください。緊張し過ぎですよ」

周りからクスクス笑い声が聞こえる。彼らも興味津々だった。入団して半年。自分の部隊なら一番下っ端の十五の娘が部隊長なんて珍しい。

頭を掻きながら立ち上がる朗らかな顔に注目が集まる。今日の会

議は特に重大議事も無く、この新任挨拶が終わればスムーズに解散へと流れるものだと思っていた。

「第十八部隊の部隊長に任命されたシャニーです。よろしくお願いしまつす！」

それだけ言つてペこりと頭を下げる。部隊長を追い出したり、イドウヴァにケンカを売ったりと色々噂が立っていた割に大人しい……。皆がそう思っていた時だった。

「あ、あの！ このままお時間貰つて良いですか？」

怪訝そうな眼差しを送るイドウヴァの前で、シャニーはもうさつさと動き出して資料を円卓へ滑らせ始めている。

会議室が今まで無かった新風に興味津々。それはカルラエ城下町への病院建設に関する企画書だった。

「……以上です。病院建設へ向けて資金と人員の配分をお願いします！」

説明が終わつて頭を下げる。我ながら完璧な報告内容で内心ガツツポーズしていた。これならきつと驚いてもらえる。もしかしたら拍手喝采か——……。何も聞こえてこない。恐る恐る目だけで議場へ視線を移すと、誰もがぼかんとしていた。

（あ、あれ……。もしかして……スベった?!）

一発でツルつと行くとは思つていなかったが、もつといろいろと意見してもらえるものだと思つていたのに。頭をそろそろと上げて周りを見渡したら、啞然とした視線を一身に浴びて心細くなってきた。

「言っている意味が分からないのですが」

おまけに、イドウヴァから冷たい口調で議論にすら上がるつもりが無いような一声を浴びせられる。

「何のつもりですか？ この場は部隊長会議ですよ」

事前にこのような提案をすることも聞いていなかったからか、明らかに不機嫌な声。周りの部隊長達はあちやーと顔をしかめている。イドウヴァを怒らせると厄介な事になるのは、この場に居る者なら誰でも知っている事だ。この、新任部隊長以外は。

「え、でも、発言の場はここしかないし」

部隊長の一人が口元をおつと吊り上げた。縮こまるかと思つたら、怖いもの知らずにイドウヴァへ反論し始めたではないか。やはり、イドウヴァにケンカを売つたと言う噂は本当か。なかなか面白いヤツが入つて来たらしい。

案の定、イドウヴァは長い濃藍の髪を手で梳きながら眉間にしわを寄せている。いつも平和なので多少イベントがあつても悪くない。

「そのまま続けてください」

ところが、鶴の一声がそれ以上を遮つた。団長のテイトがシャニーに発言を許したのだ。

「第十八部隊の国力向上活動報告、今後もこの場でお願ひします」

団長にこう言われてしまつては、議長としては議事進行しなければならぬ。イドウヴァは口元を尖らせながら、開口一番にダメ出しを突き付ける。

「シャニーさん、貴女は我が騎士団の資金状況が分かつていないようですね？ そんな資金を計画外に支出する余裕はありませんよ？」

(わつ……やつぱり、お金の話かあ……)

用意してきた鞆の中からがさがさと慌てて資料を引っ張り出す。ルシヤナ達が計算してくれた資金状況と今年の予算計画。

——ココを説明しろ！

赤字で丸く囲つて、でかか書いてあるルシヤナの字。

「しかし、予備費だつてある筈です。今年の支出状況と今後六か月の収益予測からすれば、十分捻出可能かと。むしろ、建設によるカルラエへの人流増加を考えれば、増収を見込める話だと思われませう」

棒読みにならないように必死に喋つたら、おおつと部隊長達の顔に驚きが広がつた。……正直、説明した自分だつて資料に書いてある数字の事はよく分からないから、彼らと同じように驚きたいくらいだ。

数字何かより、訴えたい事があつた。ルシヤナ達にこじ開けてもらつたチャンス逃さず声を張り上げる。

「カルラエの規模で病院が無いのはおかしいです！ 他の地域はどこも在るのに。みんな苦しい思いをしてるんですよ！ お願いします！」

小さな町医者も居ても、入院患者を引き受けられるような規模ではない。そんな動かせないような人達を、雪の峠道を越えてエデツサまで運ぶなんて出来なかった。そうしているうちに亡くなる人たちを、街の見回りの度に見てきたから説明にも熱が入る。

「またも静まり返る会議室。なぜ分かってくれないのかジリジリし始めた彼女はとんでもない事を口にした。」

「現場で説明しますから、来てください！」

「何を言ってるんですか。そんな時間はありませんよ」

興味を持った部隊長達が腰を席から浮かしかけた時だ。イドウヴアが投げつける様な口調で時計を指差してきた。

「どうにも彼女は乗り気ではない。資金に厳しいとは聞いていたが、まさかこれ程とは。」

「天馬なら五分じゃないですか。ここで十分説明するより早いです」

平然と言い返してくるシャニーにぴくっと眉をひそめる。だが、部隊長達が動き出した。テイトがすっと席を立って会議室の外へ出て行ったからだ。彼女は目線でシャニーを呼んでいる。ぱつと顔が明るくなって、青髪を揺らして颯爽と駆けて行く若い部隊長を他の面々も追う。



静かな医務室にガツガツとブーツで廊下を叩く音が聞こえてくる。どンドン大きくなる音に軍医ウツデイが身構えていると、ドアを蹴破る勢いで幼馴染が突っ込んできた。

「ウツデイー！ ス克蘭ブルだよ!!」

「おっ、おい！ 何だっ、いきなり！」

予想はしていたものの、竜巻の様に押し入ったシャニーに半ば拉致されるように医務室から引つ張り出された。

「カルラエの病院の話！ 援護して!!」

「まともに説明もしないまま、シャニーはウツデイの腕をひっ捕まえて元来た道に戻る。空には十七騎の天馬がすでに待機しており、厩舎に飛び込んだシャニーはウツデイを後ろに乗せ、相棒を撫でると弾丸

の如く空へと飛び出した。

宣言通り、数分でカルラエ城下町の外れに到着した彼女は改めて企画を説明し、天馬を横に向けると後ろにいるウツデイの足をぼんぼん叩く。

「お前なあ、準備時間くらいくれよ」

「しよーがないじゃん！ 事の成り行きでこうなったんだし！」

ひそひそにもなっていない作戦会議をすぐに終えて、シャニーは改めてウツデイを手で指して精一杯に叫ぶ。

「医療現場の声を聞いてください！ あたし達騎士団は、人々の為に動かないとダメだと思うんです！」

——頼んだ！

ほんとスポットライトを渡されて、ウツデイは集まる視線を前に一つ咳払いすると声を張り上げた。

「今イリアは圧倒的に医療設備が不足しています。復興は民あつてのもの。民が望むものに目を向けて頂けると、医者としてはありがたいです。これは医療に従事する者の総意と言つても過言ではありませんん」

渋い顔をしていたイドウヴァもウツデイが出てくると威勢が少し弱くなった。

彼はイリア風邪の特効薬開発で、最近急速に名前を知られるようになってきた人物。彼を敵に回せば、医療関係の団体まで敵に回す可能性だってある。

必要資金は莫大だが、回収予測まできちんと計算されているは否定材料としては貧弱だ。問題は……必要な時にキャッシュとして存在しているかどうかだが、そんな事はここでは言えるはずも無い。

「……団長、いかがしますか？」

最終決裁者は団長だ。さっさと話を振つてしまう事にする。

「必要資金が大きいわね……」

テイトも同じことで頭を悩ませていた。そうだろう……イドウヴァの口元に不敵な笑みが浮かぶ。いくら予備費があつたとしても、まだ半年もあるのに大半を使つてしまう度胸は無いだろう——

「分かりました。団長直下案件とします。シャニーさん、後でもう少し話を聞かせてください」

その算段は見事に外れる事となる。

タイトにしても腹を括るしかなかった。自らが特殊部隊として国  
力向上活動を任せた部隊。それが最初に持つてきた案件だ。彼らの  
存在をアピールする為にも、何とか通してやりたかった。願わくば  
……最初はもう少し軽い案件にしてもらいたい気持ちもあるが、シャ  
ニー達の本気を見た気がして帰路に就くタイトの顔は爽やかだった。  
(シャニー……。あれが、あの女の娘達か……。ッ)

団長の横へ並び、快活な笑みを浮かべて企画を説明する横顔を、イ  
ドウヴァは紫紺の眼光でギツと睨みつけていた。



## 第5話 悪夢の古傷（前編）

週末を迎える金曜日の午後。普段なら一日中城を空けている十八部隊のメンバーが珍しく自分たちの詰所にいた。今日も村々を巡りたいところだが、飛び回って集めた情報をまとめる時間はどうしても必要だ。

人々の困っている事を解決してあげることと騎士団としては大事な任務のはずなのに、この十八部隊配下の四人しかそれを企画する人間が何故いないのか本当に謎だった。

「あー。なあレン、魔法でさ、頭のイメージをポンツと企画書に出来たりしないの？」

おかげで資料作りまでやらないといけないので時間がいくらあっても足りない。

ペンを握りすぎて手に力が入らなくなったミアは冗談のつもりで振ったのだが、レンはムスツとしてしている。

「じゃあミアが魔法を使えるようになればいいと思う」

「拗ねるなよー。冗談だろ？」

凸凹な会話をしながら資料作りに戻る。大変でも、本人たちにとっては俄然やりがいがある仕事。ミアの中が変われば、それはすべて自分たちの残した軌跡となる。

とはいえ、動いていないと死んでしまうような人間にとって、ずっと座つての作業は拷問に等しい。シャニーの口元はどんどんへの字に曲がっていく。

「はあああ……」

それでも今日は金曜日だ。週末を前に明るい話題が出てもいいはずなのだが、いつも頼まずともその話題を振る役回りのシャニーが今日は湿っていた。もう嫌だと言いたげに机へ顎を乗せてぶう垂れながら、いかにも声をかけて欲しそうなため息を漏らす。

「シャニー分かるっすよ、ウチもお腹空いたから焼き菓子を入れてきたっす」

ぴくつと視線だけがミアを捉え、彼女が持っている焼き菓子を追

いかけていく。手にしていた焼き菓子を机にとろけたまま動かない  
シャニーの口に放り込んでやる。嬉しそうに頬張りだして元気が戻  
るかと思つたのも束の間、飲み込んだら彼女はまた萎びたように背中  
を丸めてしまった。

「そつちも譲る気ない？」

目は再びミリアが持つている焼き菓子を追い始めるが、もう無いと  
言わんばかりに口に放り込んでミリアはそのまま村の巡回に飛び出  
して行つた。

再び机に潰れたシャニーが物言いたげに見上げて来て、ルシヤナは  
仕方なく声をかけてやる。

「どうしたの、シャニー。また剣の振りすぎ？」

悩みがあるとすぐに剣を振つて心を落ち着かせようとするので、よ  
く腕が張つて唸っていることがある。茶飯事なのでわざわざ聞くこ  
とも最近はなくなってきた程で、今回もいつもの事だろうと思つたの  
だが、シャニーは首を横に振っている。

「じゃあ何、おなかすいたの？ 眠いの？ それとも男？」

こんなだらけた姿をタイトが見たらなんと云つて怒るだろうか。

これだけ言えばどれかは当たるだろうと呆れをありあり含んだ口  
調で聞いてみると、彼女はうんざりと周りに広がる資料を指さした。

「違うよお、これだよ、これ」

積み上げられているファイルはどれも騎士団へ提出が義務付けら  
れている報告資料だ。

今日の彼女のふやけっぷりには着ている服が泣いていた。今でも  
彼女の士官服姿は見慣れないのに、資料の山に囲まれ、机に顎を乗せ  
て情けない姿を晒す彼女を自分の部隊長だとはとても周りに紹介で  
きない。

別に記載する内容は大したことは無いのだが、それを妨げるものを  
指さして今にも泣きそうな眼差しで助けを求める姿は、どちらが部隊  
長なのか分からないくらいだ。

「レイサさんに、ここに書いてあるコレ、中身何ですか？ 〃 って聞  
いてもまるで覚えてないんだもん」

「ああ……あのやつつけ感満載の報告資料ね」

——白紙はマズいからとりあえず何か書いてあればいい  
引継ぎの時ですら、レイサはそんな適当なことを言っていた。

他の部隊ならともかく、新人部隊の週報に書かれていることなど誰も気にしないから大丈夫だと。

でも、正式な部隊になった以上はそれでは済まないし、引継ぎ前後で書いてあることが逆転しても困るからレイサにいちいち内容を確認していた。

六割くらい出来ていれば良いかと提出したら、事務方にあれやこれやと聞かれて往生して以来、きちんとやるようにしている。

「結局一から調べないと中身が分からないから週報一つ書くのも大変で。昨日何か家に着いたら日付変わってたよ」

帰ったらもう寝るだけしかできないと彼女はブー怒っているが、別に日付が変わるまで詰所にいた訳では無い事はルシヤナも知っていた。二十二時過ぎに終わって、そこから剣の稽古をして帰るからますます遅くなっているだけ。稽古を少し我慢すれば良いと言いかけてやめる。そこに関しては聞く相手ではない。

まるで骨など無いかのように机にとろけていたシャニーは、ピンと何かに閃いて席を立つ。

「はっ、そういえばルシヤナって副将じゃん！ 予算書を……」

十八部隊ではずっと副将が予算書を作ってきた。

どこの部隊も副将が案を作って部隊長は承認するだけ——レイサにそう言われていたし、団長の妹だから多少は許してくれるだろうという不純な動機で。

数字の扱いは大の苦手で今まで散々ウツデイに叱られて来たから、いつか担当を変えてやろうと意気込んできた。まさに今がその時と予算書を手にしてルシヤナへ突き出す。部隊長になったのだから今度は自分が渡す番……そう考えたのは甘かった。

「予算書なんて部下から話を吸い上げて部隊長が作るもんでしょ？  
どこの部隊もそうだよ」

レイサが言っていた事と真逆の事をあつさりと言われて突っ返さ

れてしまった。

そんな筈はないと反論しようとしたが、回覧待ち資料の箱からルシヤナが引つ張り出してきた資料を突き付けられて口元が歪む。それは部隊長会議の資料にくっついていて他の部隊の予算書だ。どれもサインは部隊長だけ。

「はっ、ははは……やっぱりそうだよね、そうだよね……」

まんまとレイサに騙されてきたことを知っても怒りすら湧かず、目の前に積まれた仕事が減らずに苦笑いしか浮かべられるものが無くなった。ふらふら椅子のほうまで歩いて行くとそのまま尻をぶつけるように座った。

予算書も指を折って計算していたような奴だ。これだけの報告書を作成していたら日付が変わるでは済まない。剣を握っている時とあまりにも違う情けない姿に、ルシヤナは仕方なく積んであったファイルの一つを取ってみる。

「まあ、あんたが部屋の中に居ても何の価値も生まないし、分担できるところは分担しようよ」

外で飛び回り人の話を聞いてこそ、この笑顔は活きる。皆国外への派遣状況ばかりを気にしているから国内の報告など誰も目に留めない。確認済——事務方が右下に押したデカイハンコをもらうだけなら適当になっても仕方ない。

今日だって貴重な晴れ。冬に突入したイリアは吹雪くことも多く、こんな晴れの日に城の中に閉じこもっているなんて辟易するのだが、何事にも締め切りと言うものがある。

「さすが心の友！」

助け舟を出してくれた幼馴染に、シャニーは両手を合わせて女神でも崇めるかのようだ。

ルシヤナに任せるとときばき片付いて行くのは入団する前から知っているから目の輝き方も違う。

「だけど、仕事の丸投げは信頼を無くすよ」

「わ、分かっていますよ。ちゃんと整理してから渡しますよ」

まるまる頼る気になっっている部隊長にきつく釘をさす。相変わら

ず厳しい女神だった。丸投げされたらどんな気持ちになるかは当事者として思い知っているから、シャニーは何も言い返せない。

「それでよし」

ニコニコしながら報告資料の半分を自分の机に持っていくルシヤナの後姿を、もの言いたげな目で見送る。どちらが上官か分かったものではない。ミリア達だってルシヤナにはビビっている。

「それにしても天馬騎士団に入ってこんなにとくさん事務仕事することになるとは思ってたよ」

仲間を手伝ってもらっていると思うだけで少しペンがスムーズに動く気がする。

入団する前は一年ほぼ外国を飛び回っているイメージだった。実際他の部隊はそのはずなのだが、まさかこんな特殊な部隊に配属されるなんて。

平隊員のうちから夜に予算書と睨めっこしては、これが天馬騎士かと嘆いたが、あの頃が懐かしく思えるくらい机に拘束される時間が増えてしまった。

報告資料が終わったら、今度は承認待ち資料にサインする作業が待っている。

「ま、そんだけあんたがエラくなっただってことですよ？」

隣で一緒に作業をするルシヤナに服を突つつかれた。最近ようやく体になじんできた感じがする純白の士官服。半年前の自分にこの格好を見せたら何と云うだろうか。まさか入団一年目から部隊長に任命されるとは思ってもいなかった。

部隊長と言っても部下はたった三人で同い年と一個下しかいない部隊だから、権限だの威厳だのそんな話とは無縁で、団員証に肩書があるか無いかぐらいの差しかないのだが。

それでも、私と一緒に戦って欲しい——そう期待の言葉をかけて姉が騎士団の幹部と認めてくれたと思うと、この服に袖を通すと身が引き締まる。

そんな自分が今何をしているのかを思うと複雑だ。

「でさ、部隊長になるとどのくらい給金増えるの？」

辺りに広げていた資料を退けてルシヤナの顔が近づいてきたと思つたら、あまりにも生々しい質問を飛ばしてきた。

「へっへっへ、そんなに知りたければ教えてやろう！」

腐れ縁で何をするにも一緒だったルシヤナだから隠し事何てできるわけの無い間柄。シヤニーは昇任時に総務からもらった待遇明細を机の奥から引つ張り出してルシヤナに見せてやった。

「苦勞に見合つて——」

「ふふ、イイものを見せてもらつたよ」

ちよつとばかり給金が増えても、こんなに事務仕事如山積みになるなんて聞いていない。愚痴を言いかけたシヤニーだったが、その前には不敵に笑う顔があった。嫌な予感がする。

「手伝つてんだし、弾んでよね」

案の定のセリフが返ってきてぼつきりと首を折る。まだミリアがいなくてマシだと思ふしかないと諦めが漏れた。

「何、だったら部隊長、私が代わつてあげようか？」

意地の悪い笑みを浮かべてくるルシヤナにぶんぶんと顔を横に振る。この部隊を結成する時に皆誓つてくれたのだ。お前の背中について行くと。エラくなりたいと思つたことは無いが、リーダーとして部隊を引つ張つていくのも何だか悪くないと、部隊長になつてから思うようになっていた。

だったら早く手を動かせとルシヤナに手先を突つつかれ、口を尖らせながら渋々資料を仕上げていく。やっぱりどっちが部隊長か分からない。



しばらく事務作業の時間が続き、机にかじりついては背伸びが繰り返される。

二時間くらい経つただろうか。カリカリと机に向かう静かな部屋のドアが開き、元気な声の帰還報告が聞こえてくる。

「お疲れッスねえ。今度の休みに温泉でも行かないッスか？」

見回りから帰ってきたミリアがみんなに差し入れを渡しながら

シャニーのところに来て肩を揉みだした。

甘いドーナツを一口して幸福を顔いっぱいに広げていたところに聞こえてきた天国への入口。温泉——それを聞いてシャニーの瞳が輝き、机の上にミリアが広げたパンフレットに目を釘付けされる。見回り中に見つけてきた秘湯らしい。

「行く行く！ あー、久しぶりにゆっくりしよつと」

何か、団長選出戦あたりからずっとトタバタとして息つく間もなく十月まで走ってきたような気がする。部隊を預かるようになって朝から晩までずっと飛び回る生活に変わり、ゆっくり休む時間なんてなかった。

たまには癒しを得たくなって、もう頭は温泉に浸かる自分しかない。想像するだけで癒される気がして、目の前に積まれた資料などもう見えていない。

「みんなも行くようよー」

それまでの重苦しかった表情はどこへやら。椅子を跳ね飛ばし、拳を突き上げて音頭を取りだす。早速周りにいる連中を誘い、次の非番の日に遊びに行くことにした。一体どんな温泉なのだろうか。席に戻っても皆と想像を膨らませるばかりで、ペンの動きが完全に止まっている。

リーダーのご機嫌が元に戻って嬉しそうにするミリアだが、ふいに首根っこを捕まえられて部屋の真ん中へと引き戻された。

「どころでさ、あんたその温泉、どこで見つけてきたの？」

振り返って髪の毛が逆立った。ルシヤナの怖い顔が目の前にあって、聞いて欲しくない所を突っついてくるものだからミリアは蛇に睨まれたように小さくなる。

「いや……通り道に……」

ますます角の生えた顔が近づいてきて、眉間にしわを寄せ始める。「温泉探しにぶらついて、焼き菓子買って来ただけとかじゃ……ないよね？」

何度も首を横に振るが信じてもらえないはずも無く、ミリアも資料との戦いの場へと駆り出されていくのであった。

## 第6話 悪夢の古傷（後編）

約束の日。冬を迎えたイリアに広がる蒼穹は高く澄み渡って雲一つない。天馬で風を切るとこの時期は頬が切れそうな程冷たいが、今日は出来るだけ冷やしておきたい気分。この先の温もりを目いっぱい味わおうと思ったらガマンだつて必要だ。

「こういう時に天馬騎士って便利だよねー」

各々私服で天馬にまたがる姿は違和感がある。

歩兵なら何時間もかかる道のりが天馬なら山を翔け川を越え、十分くらいで済んでしまう。今日の温泉だつて徒歩では到底行ける距離ではない。

不純な話だが、これも天馬騎士の特権。シャニーは相棒の背を撫でて朗らかに笑う。

「あんた、移動の時くらいしか天馬使つてなくない？」

ルシヤナはシャニーにジト目を送る。賊討伐だつて、シャニーが天馬に乗って槍を扱っている光景何てあまり見たことが無い。いつも決まって、彼女は眼下にいて剣を振るっていた。最近ではソルバーンに襲撃された時だつてそうだった。

——あんた本当に天馬騎士？

幼馴染にそう聞かれた気がしてムキになって返す。誰が人を囀呼ばわりして、毎度地上に降りろと言っているのか。

「し、仕方ないじゃん？ タクティクスを考えたら、あたしとレイサさんは地上にいたほうが戦力偏らないんだし」

天馬騎士団は天馬乗りの集団。ゆえに地上戦をこなせる者は殆ど居ない。おかげで入団してから天馬に乗る機会が減ったし、十八部隊を任されるようになってからはますます少なくなっていた。

メンバーのフォローをしようとする、どうしても地上にいる弓兵や魔導士のような天馬騎士のアドバンテージを否定する相手を処理する人間が必要だ。……と、レイサの受け売りを身振り手振り説明すると、ルシヤナのジト目が更に細くなって返つて来た。

「へえ、意外とちゃんと考えてたんだ。意外だね」



「意外、意外って言わないでよお！」

まるで信用してもらえなくてぶーぶーと文句を言う。彼らが本当に部隊長だと思ってくれているのか心配になって来る。

「どーせレイサさんにそう言われたんでしょ？」

ドキツつと髪の毛が逆立つ。それだけでルシャナにはもうバレているのだが、シャニーは必死になって首を横に振る。

「ち、違うもん。あたしのオリジナルだもんね。レイサさんのアドバイスは参考にしたただけだよ！」

「どれくらい？」

「ええと……。半分？ あつ、いや、四割くらいかなあ……。ははは」

「それ……。オリジナルって言わないから」

もういいと、ルシャナに視線を切られてしまった。

天馬に乗れないからレイサは本来の単独行動に戻っているが、将としては素人そのものなので今でも彼女に相談へ乗ってもらう。もちろん、レイサも分かる訳が無いので団長室に忍び込んでアドバイスをもらっているわけだが。分からなくても相談に乗ってくれるだけで嬉しいもの。

「ま、何でもイイじゃないツスカ。リーダーの仕事は囿って自分で納得したって事だし！」

ようやく覚悟を決めたかと、ミリアのふんふんご機嫌な声が聞こえてきた。これで仕事もしやすいというもの。狙撃手にとってはシャニーが地上で囿になってくれると、まとめて掃射出来て効率が良いのだ。

「いや、納得してないし！ て言うか、それ仕事って言わないじゃん！

あたしの扱い、間違えてない?！」

どうにも、ミリアには部隊長だと思われていない気がする。彼女がしおらしくなるのは、食事をおごって欲しい時だけだ。

「え？ 天馬にも乗れる頼りになるリーダーっすよ！ みんなの総意ツス！」

「勝手に総意にしない！」

いつの間にか、天馬に乗れることがオマケの様に言われている。一

応これでも、騎士団内の馬術実技はトップの成績なのに。拳を怒らせて反論するが、背後からいきなりグサつとやられた。

「ミアに同意……」

「ほら、総意ツス」

背後からぼそつとレンが口にするからミアのしたり顔が刺さる。

(くう……。部隊長ってツライお仕事だなあ……)

心の中でウルウルする。しばらく戦場で何があっても天馬から降りない事に決めた。毎回、毎回、困として放り出されては堪らない。いつその事、当番制にしてみようか……。

「あつ、あそこツス！」

氷雪の大地にぽっかりと空いた秘境。まるでそこだけ別世界かと思っうほどにしつかりとした木造の建屋が作られていて、真つ白な湯気がもうもうと立ち上っている。

わくわくする気持ちのままに天馬を急降下させた彼女たちは、目の前に広がるいい香りと雄大な自然を適当に味わう。五分と持たず、寒さには勝てぬと建屋に駆け込んで、脱衣を適当にロッカーへ放り込むとそのまま温泉に飛び込んだ。

「はあああ、癒されるう」

身体から疲れが溶けだしていく様。シャニーは心地よさに任せて天を仰ぎ、幸福感をぎゅつと絞ったような歓喜を上げた。もうこのまま温泉に浮かんで寝てしまいたいくらいだ。夢心地に全てを預け、口をぽかんと開けて目を閉じていたら何もかもから解放される気がする。

「いやあ、やっぱりミアの冬は温泉ツスね！」

「ん。冬の温泉は格別」

吹き出し口あたりで熱い湯に入るミアやレンのぼしやばしやはしやく声が聞こえてくる。

ミアは山が多く、あちこちで湧き出る温泉は数少ない観光資源。動乱直後で利用者数が激減している為か貸し切り状態だ。

そのうち泳ぎだしたミアはふと、目を瞑って異様に静かなシャニーが視界に映って近寄ってみる。彼女が静かにしている時と言っ

たら、剣のイメージトレーニングをしている時くらいだが、緩んだ顔はとても鍛錬をしている様子ではない。

「どうしたんスか、シャニー」

「寝てんじゃないの？ 沈めてみたら？」

夜勤では放っておいたら立つてでも寝るような人間だ。どうせいつもの事とルシャナが笑うものだからミアアのイタズラ心が疼く。普段は仕事だからなかなか仕掛けられないが、今日ならちよつとくらい。起こさないようにそつと近づき、肩に手をかけようとした途端だった。ふいにシャニーの眉間にしわが寄った。

「違うよ！ 今まで色々あったなって思い出してたの」

イタズラ好きな顔を撃退すべく両手で湯面を叩き、大波に慌てて飛び退いたミアアはバランスを崩して飛沫が上がる。油断も隙も無いとシャニーは頬を膨らせているが、周りからは笑いが漏れた。

「半年前のあたしが今のあたしを見たら、何て言うかなと思つてさ」

大事な家族が出来て、自分がその長となって国内を飛び回る。あれだけタイトの一番隊に入り、世界中をまたにかけて活躍するんだと意気込んでいたあの頃。何かもうずつと遠い昔のようにさえ感じる。

描いていた道と全く違う、それこそ真逆とも思える道を歩む心はこの高い紺碧のように晴れ渡る。

（お母さん、あたし、頑張ってるよ）

まるで自分が飛ぶべき空を見つけた天馬のように、この空ならどんなに遠くても飛んで行きたいと思えるし、いくら荒れていても耐えられる気がする。

ふと思いつ出したニイメの言葉。十を知ったものは、九までで止まった者とはまるで正反対の行動をとる。……ならば十をしっかりと掴む事が出来たのだろうか。

今の自分なら、亡くなった母にも褒めてもらえるかもしれない。思わず皆も空を見上げたり、揺れる湯面を見つめたり。

「ウチはウチに自慢したいツス！ 家族が出来て、天馬にも乗れるようになって、自分だけの武器も手に入れて。すごい充実してるツスよ」

まさに別人になった気分。見習い修行に出ていないミリアの半年前はただの村娘だ。それが今、一端の騎士になって天馬を自在に操り、誰も使った事の無いクロスボウで戦場を駆けるなんてまるで想像できない世界だった。

その間に、取り残される不安に駆られたことも、大怪我をして半月寝ていた時期もあった。

でも、その時々には悲観に暮れても、どれも今思えば必要な事だったとさえ思えてくるから不思議だった。

「そうだね、天馬に乗れるようになって遊びに行ける範囲も広がったもんね」

「人聞き悪いぞー」

変わらないのは、幼馴染のチクリとした口撃くらいか。

———またどこかに遊びに行っていたな?!

ルシャナの厳しい視線を浴び、ミリアが仰天してレンの頭を温泉に押し込む。それを笑っていたら、今度はシャニーヘルシャナの視線が移る。悪い癖の元凶は、お前の脱走癖……ルシャナの目にそう突き刺されて全身ビリビリ来た。

しずしずと彼女から視線を逸らそうとシャニーが背を向けた時だった。温泉から顔だけ出していたレンの視界にふと違和が映る。

「シャニー、背中のアザ、どうしたの?」

その格好のまま温泉の中を歩いていき、シャニーの背中をタッチする。びっくりしてシャニーが背中を見ると、しつかり巻いていたつもりだったタオルが緩んで背中が見えている事に気づく。

(あちやく、見られちゃったら仕方ないな)

レンの指さす場所へ振り向けば、やっぱりあまり見たくないものが背中に走っている。

「ああ……見つかっちゃった。これね、小さい時の傷が残ってるんだ」  
レンの差す先には大きなアザがある。何かに引き裂かれたのか、放射線状に伸びる傷跡にシャニーは観念したかのように笑った。あまり人に見せていい気分にはさせるものではないから隠してきたが、家族相手なら別にいいかと空を見上げる。

「何歳くらい頃かなあ。ウツデイと山で遊んでたらおつきな熊か何かに襲われてさ。その時の傷みたい」

あの時の絶望感は今思い出しても二度と経験したくないと身震いを呼ぶ。子供にとつて野獣はただただ、恐怖の対象でしかない。ましてそれが、冬眠から醒め、飢えて這い出てきた肉食獣なら尚更に。

襲い掛かって来た野獣に二人とも為す術なく蹂躪されて体が宙を飛んだ事は覚えている。

「みたいってあんた、他人事みたいに」

蚊帳の外から見えていたかのような口ぶりにルシヤナは不思議そうにするが、シヤニーも困った顔をしている。

「だって、気を失っちゃって覚えてないんだもん」

宙に放り出された後の事は覚えていない。次に目が覚めた時には野獣は倒れていて、周りには駆け付けた大人達がいた。

ただただ、引き裂かれた背中がずきずき痛んで泣いていた記憶しか浮かんでこない。ところが、ルシヤナは首を傾げると妙な事を口にした。

「ウツデイはあんたが棒切れ持って凄まじいスピードで熊に反撃して倒したって言ってたよ？」

幼馴染だから当然ルシヤナも聞いた事のある話。だが、彼女が聞いた事があるのはウツデイからだ。あの時のアイツは凄かったと、自分の事のように彼が自慢してきたことは今も覚えていた。

「ええ？ ウツデイの見間違いじゃない？」

ところがシヤニーは苦笑いしながら無い無いと手を振ってくる。

「あたしホントに覚えてないし、子供に熊なんか倒せるワケ無いじゃん？」

棒切れで、しかも子供が。身の丈が優に二メートルを超える野獣を相手に何ができる。笑うシヤニーの顔にはそう書いてある。成人になった今だって、熊なんか見つけたらすぐ天馬に乗って逃げるに決まっている。

「じゃあ、どうやって二人は助かったの？」

「それは……分かんない」

レンの質問に閉口する。助かったのだからそれ以上は別に考えなくても良いかと記憶の奥に放り込んで生きてきたが、いざ問われると返答に窮した。

「てつきり獵師さんが倒してくれたんだと思ってたけど」

周りにたくさん弓矢を持った大人がいたから、きつとそうだと笑う。

——まあ、別にいいじゃん？

彼女の顔からは明らかに話を終わらせたい気持ちが伝わってくる。

あの時の記憶自体あまり思い出したくないのに、このアザは見つかる度に突き付けてくる。普段は見えない背中という事だけが救いだ。すぐにタオルの下に隠す。

「そんなことよりさ、あんたも呑みなよ」

何か重苦しい話になってしまい、ルシヤナは酒の入った瓶をシャニーへポンと放り投げた。困惑するシャニーの事などお構い無しにルシヤナは豪快にラツパ飲みを始めている。

「その二人はダメだよ」

一応未成年には振らないあたりはまだマシか。でも、未成年の連中のほうがよっぽど冷静だった。

「ルシヤナ、酒飲んじゃうんスか?? 帰りどうするんスか?」

呑める、呑めないの話ではないような気がする。

縁に片手をかけて今も気持ちよさそうに瓶を傾ける副将へ、ミリアは苦笑いを浮かべながら遠回しに警告するがルシヤナは心任せに呑みまくる。べろべろに酔ってしまったら帰る手段がない。

「帰り?? 天馬に乗って帰るに決まってるじゃん」

何をおかしな事を聞くのかと言う面持ちだ。周りの連中は顔を見合わせるばかり。飲酒して天馬に乗るなんて、いつ落馬するかと思うと恐ろしくてできない。馬から落ちるだけでも危険なのに、自分たちの場合は空から真つ逆さま。考えるだけで震えが来る。

この人とは絶対に出先では呑めない。誰もが危機感を覚える中、本人は上機嫌。

「あんた達も酒は飲めるようになっておきなよ。飲めるといろいろ便

利だぞー」

よく分らないアドバイスを受けたミア達はただへこへこ頷くしかできないでいる。

「ほら、シャニー、あんたも言っただけやいなよ？」

「ええ?! なんてあたしが？」

「髭のカッコイイおじさまを捕まえるには酒がいるって言っただけで特訓してたってマスターから聞いたよ」

皆面白がって有る事無い事を広げ過ぎだ。確かに一週間近く、五十度を超す酒を毎日飲んでた時期もあった。だけどそれは自身の剣の道をハッキリさせる為。ムキになって温泉で赤くなった顔を更に紅潮させる。

「そんなんじゃないし! あたし、飲まないんだからね!」

結局、温泉に口まで浸かり絶対飲まないアピールをする彼女からぶん捕った分までルシャナは飲み干したのだった。



酒豪に心配は無用だった。あれだけ飲んで顔は真っ赤だと言うのに、温泉から出たルシャナの足取りは何ともしっかりしたもの。浴場で遊び過ぎたミア達のほうがよほど赤い顔をしているくらいだ。

シャニーも温泉で火照った体を真冬の風に晒して頭をシャキッとさせると脱衣場へと戻っていく。

(それにしても……やっぱり目立つよなあ)

着替えをしながら巻いていたタオルを取り、鏡に背中を映してみてもうと息をついた。普段背中なんて見ないから気にもしていなかったが、いざ存在を家族に突かれるとどうしても気になってしまった。

小さいとはとても言えないサイズの傷が、肩甲骨の高さから左右に伸びている。いつか消えてくれると思っただけだが、まるで存在感を示すように小さい時より目立つ気さえする。

「もう、わざわざこんな真ん中に傷を作ってくれちゃってさあ……」  
思わずボヤキが漏れた。これがまだ脇腹とか、お尻当たりとか見え

にくい場所だったら幾分かマシだったのに。背中のだ真ん中から放射線状に伸びる傷のせいで、見えたらどうしようと思うとオーブンバックのトップスは一着も買えなかった。

この傷の事を知っているのはこの連中の他には姉たちとデイークだけだ。

(こんな傷見たらロイ様嫌がるかなあ……)

ふと思ひ浮かんだ顔に、口元が悲しげに歪んだ。向こうにはミリアのきれいな背中が見える。あんな風な背中のままだったらどんな服でも着られるのに。ロイだってこんな背中を見たら驚くに決まっている。はあつと大きなため息が漏れた。

(ん……あれ?)

ところが、がっかりするロイの姿を想像したとき、彼女は妙な事に気づいてしまった。

(あれ……。ロイ様がここの傷を……見る……??)

どういうシチュエーションなのだろうか。こんな背中のだ真ん中をロイに晒すとなれば、何も着ていなければそうそう見えることは無いはず。そこまで考えると頭が急に沸騰してきた。

「え、えへへへ……ダメだよお、それは。ロイ様、ダメダメ……」

隣で髪を乾かしていたルシヤナは、横から聞こえてきた妙にヘラヘラする声に気づいて振り向き、幼馴染の様子にぎよつと身を退いた。

そこにはタオル一枚のまま顔を真っ赤にし、首を何度も振ってはぶつぶつ、へらへらとよく分からない事を呟く姿。口元の微笑みには明らかにいつもとは違う邪なものが浮かんでいて、ルシヤナは背筋に寒気が走ってそそくさとミリア達の方へと避難していく。

「あいつ……何だか気持ち悪いな。湯あたりでもしたのかな」

ロツカー越しに遠くから様子を窺う。今も肩が小さく揺れて妄想の世界の住人になってしまった幼馴染を置き去りにして、足音を立てずに三人は脱衣所を後にするのだった。



## 第7話 先輩の警告

昼休憩の時間、医務室から出て食堂へと続く廊下をのんびり歩いて行く。

この時間はまだ騎士たちでごった返しているから、普段は少し時間を空けて一人でゆっくり昼食をとるウツデイだが、今日は目当ての人物と会うために敢えて戦場を選んだ。

右を見ても左を見ても女性で埋め尽くされたこの部屋。おまけにその一番奥に彼女は居るから辿り着くだけでも一苦労。あちこちから黄色い声を飛ばされて軽い挨拶で躲しながら、ようやくに到着して一息。

だが、そこまで来てウツデイは怪訝そうに幼馴染を見下ろした。

「あー、今リーダーダメだよ」

「ん。ダウン中」

釘で打ちつけられた様に上体がテーブルに張り付いたシャニーは身じろぎもしない。顔だけがこちらを向いてきゅつと口は固まり、目は猫のように真ん丸になって完全に機能停止していた。

ルシヤナやレンに止められても、ウツデイは心配するそぶりも見せない。懐から袋を取り出して中からクツキーを摘まむと、顔の前をちらちらと動かしてやる。途端に目だけがきよろきよろそれを捉え、しまいにはカプつと口が追い出した。

「もう！ お菓子であたしを釣ろうなんて、そんな手が通用するワケないでしょ！」

「食ってから言うなよな」

今もテーブルにへばりついたままだが、ようやくに返事が返って来てウツデイも安心した。とりあえず食べてさえいれば彼女は大丈夫。もつとくれと手まで伸ばしてくるから健全そのものだ。仕方なく袋ごと渡してやる。

「んでさ、どうしたの？ また諜報部ウツデイが炸裂したの？」

最近では部隊ですつとイリア中の空を飛んでいるからウツデイと会う機会がガクつと減った。九月まではよく一緒に昼食をとっていた

のだが、それが何だか懐かしく感じる。

「いや。今日はお礼を言いに来たんだよ」

何かまた妙な噂話を持ってきたのかとシャニーは思ったのだが、ウツデイが意外な事を言うから青の瞳が興味にくりつと動いた。

「お礼？」

「ほら、病院建設の企画、テイトさん通してくれたんだろ？」

以前の部隊長会議で、十八部隊の初陣として勝負に出したカルラエ城下町への病院建設の企画。渋るイドウヴァの隣でテイトが団長直下案件として取り上げ、そのまま承認したのだった。

その話を聞いた途端、それまで乾いていたシャニーの顔にぱつと笑顔が咲く。

「ね！ ホント頑張った甲斐があつたよね！」

初めての提案で体中がビリビリと緊張したが、承認が降りた時はそれまでの疲れが一気に吹き飛んでしまう様な喜びが吹き抜けた。

街に飛んで行って報告した時の住人らの顔は今でも忘れられなくて、シャニーの顔はニコニコ。

「皆が計算してくれた予測、イドウヴァさん黙っちゃってさー」

自慢げに話す、シャニーは会議室で棒読みしただけだ。やった事と言えば、数字に煩いイドウヴァ対策で、他の部隊長へ何を問われるか事前に聞きに行つたくらい。皆、年下だからか妹のように可愛がつてくれる。

「銀行の人に感謝だね」

「ん。勉強になった」

実際に計算したルシャナやレンも満足げ。初めての事で自分達だけでは手に負えず、カルラエの銀行員に頼んで計算してもらった部分もある。それもリーダーが思い付きで飛び込んでいったので最初は驚いた。

新人部隊の頃からシャニーは街の為にあちこち駆け回っていたから、突飛な依頼でも銀行員は快く引き受けてくれた。

「ありがとう、ウツデイ。ウツデイのおかげだよ」

何よりイドウヴァの反対を崩したのは現場の声だ。どれだけ説明

したってあの人は納得してくれなかったが、ウツデイが一声上げただけでそれ以上を彼女は飲み込んだ。

いつもなよなよしていても、いざと言う時はしつかりやってくれる。シャニーは感謝を笑顔に込めて手を差し出し、しつかりと握手をかわす。

「そうだな。肝が冷えたぜ。たっぷり奢ってもらうからな、部隊長さん」

いきなり医務室に飛び込んで来て人を竜巻へさらうかのように連れ出したかと思うと、前置き無しに皆の前で現場の声を聞かせろ……。相変わらず無茶苦茶な奴だが、想いは二人ですつと温めてきたものだったから援護に躊躇いは無かった。

「何でお礼に来た人がオゴリを要求するワケ?!」

目を三角にしたシャニーは、横で部隊の連中がニコニコしていきよつとする。ミリアに至っては揉み手までしているではないか。なぜ彼ら迄おごってもらう気満々なのかまるで分からないがこのままでは危険だ。以前財布をすつからかんにされて以来、連中には警戒している。

「んで? 何でそんなカッコウしてんだ?」

まだ回復中なのか、シャニーは未だにテーブルに張り付いたまま。ウツデイは不思議そうに見下ろす。立派な士官服もマントがヘナつと垂れて泣いている。

「お金の使いすぎだつてすつごい叱られてさ」

週に二回ある部隊長会議で毎回企画を提案しては、その直後は全てを使い切つてこうなっているらしい。おまけに今日の午前にあつた会議では、イドウヴァからいつになく厳しい剣幕で叱責されていた。

……………

——部隊長としての資質を疑いますよ

はつきり目を見てそう言われてしまった。

あんな言い方をされたのは初めてだったから、心にぐさつと槍を突き付けられたようになって、腹に煮えた油でも放り込まれた気分だった。

「貴女は資金獲得がどれだけ大変か分かっていないようですね？ 聞いていますか？」

目じりを釣り上げ、激しい口調で責められてはさすがに何も言い返せない。棒立ちしてどうして良いか分からず、ただ叱責を浴びていたら横やりまで飛んできた。

「そうそう、自分で稼いでくるならともかく」

心に突き刺さった槍を更に押し込まれるような気持ち。

追い討ちをかけてきたのは、第五部隊の部隊長マリツサ。彼女はイドウヴァの腰巾着とは聞いていたが、それを部隊長会議で思い知らされる形になった。

（稼げるんなら、あたしだって稼ぎに行くんだよ……）

ぎゅつと唇を噛んで反論を押し込んでいた時だった。

「十八部隊は国内専門部隊です。それを考慮して発言してください」

団長のテイトが二人に冷静ながら厳しい言葉で忠告した。

マリツサは慌てて頭を下げたが、イドウヴァにとっては面白くなかった。自分で設置した部隊だからか、事ある毎にテイトは十八部隊を擁護する。

今回シャニーが提案した街道の雪崩防止策も結局団長直下と言う強権を発動して通ってしまったのだ。その不快感頭の視線がギロつと飛んできて、シャニーは思わず視線を逸らした。

（何でイドウヴァさんはこんなに反対ばかりするんだろう……）

……………

「ひつでえな。個人攻撃なんて今どき世間じゃ煩いものにな」

ウツデイは自分の事の様に顔へ苛立ちを浮かべて語気を強める。

病院の建設も、雪崩の死亡事故も重大な案件のはずだ。雪崩はシャニーの両親の命を奪った事故でもあるから、減らしたいと思う彼女の気持ちは痛い程分かる。

「それはへーきだけど……」

別にイドウヴァから資質を疑われても、間違った事をしたつもりは無いからシャニーは気にしない事になっていた。イドウヴァに抱くのは怒りより、疑念だった。

「でもさ、皆苦しんでるのに、何でお金あるのに溜め込もうとするのかなあ。あたしにはよく分かんないよ」

予備費だけでは無い。色々な口実をつけてそれぞれの予算をあまり使わせてくれないのだ。

事ある毎に騎士団の資金状況は——と口にするが、民の為に資金獲得へ動いているはずなのに、それを使えない意味が分からなくて不満げに口を尖らせる。それでも、優先順位をつけているのに。それをハッキリ会議で言えない自分にも何だか腹が立つ。

「それは確かにそうね」

その時、ふいに輪の外から声が聞こえてきて、シャニーは慌ててぱっと上体をテーブルから起こした。

「あ。第四部隊長のキリネさん！」

メガネの鋭い視線は相変わらず。初めての部隊長会議で最初に目が合って首がすくんだ相手だ。だけど、どうやら根は優しい人らしく、目が合ったらふっと笑いかけてくれた。

「貴女、なかなか見応えがあつたわよ。みんな噂してるよ、面白い子が入ってきたって」

いきなり褒められて面食らったシャニーだったが、すぐにいつもの人懐こい笑みを浮かべた。

「えへへ……ありがとうございます」

内心はびっくりしていた。このキリネと言う人は確かイドウヴァ派の人のはずだ。

第三部隊はタイト派の人だから、実質イドウヴァ派でナンバー2の部隊のリーダーになる。イドウヴァに睨まれている事は分かっていたから、その下からも同様の視線を浴びるものだと思っていた。……あの腰巾着のように。

「私達が獲得した資金が民を救ってるって実感が湧くわ。これからも頑張ってるね」

「はいー。へへっ、嬉しいなあ」

それがこんな勇気を湧き上がらせる言葉を掛けてもらえるなんて夢にも思わず、シャニーは喜色満面に手を挙げて歓喜してしまった。

その朗らかな顔をメガネの奥から柔らかく笑ったキリネだったが、その眼差しがふつと厳しくなった。

「だけど、あんまりイドウヴァさんを怒らせないようにね。そっちのスキルも磨いた方が良いわよ」

それだけ言い残すと、長身の彼女は長いアイリスのストレートヘアを風になびかせて去って行った。褒められたのか警告されたのか……。よく分からなくなってシャニーは部隊の皆と顔を見合わせるばかりだった。

## 第8話 思わぬ刺客

10月も半ばになると吹雪く日も多くなってくる。荒れた日は家に籠る人が増えるが、天馬騎士団はむしろ出動の機会が増える。殊の外、国内専門部隊である十八部隊にとつては救助の依頼が急増するし、家に皆が籠っている時こそ彼らの声を聞ける絶好の機会。

最近の吹雪はそんな彼女たちの意気さえも拒否するような猛烈さだった。それがようやくひと段落し、太陽が久しぶりに顔を出した早朝。朝食を終えた騎士たちがぞろぞろと食堂から雪に埋もれた通路へと出てきた。

「うーん！ 今日もおなかいっぱい」

いつも最後の最後までテーブルにかじりつき、朝のお喋りに花を咲かせている十八部隊も最後尾につけてようやく出てきた。

お腹を擦りながら満足そうに声を上げて気合を入れる部隊長を先頭に厩舎へと向かう。

「これだけ天気が良かったらどこでも飛んでいけるね！」

額に手で庇を作りながら遙か西部の空を臨むシャニーは、朝陽を背に嬉々とした声を上げた。

新人部隊時代の辛抱を晴らすかのように、ほぼ毎日どこかの空を飛んでいる。吹雪の中で天馬を駆っていると、どれだけ防寒をしっかりしていても髪は凍り、体が固まって帰城する頃にはふらふら。今日はそんな心配をせずに空を飛べると思うと心は軽く、陽に照らされる背中にはじんわり温かくて翼でも生えたかのよう。

「シャニーは羨ましいッス。あんなだけ食べても太らないなんて」

腹が減っては戦ができぬと、横でいつも気持ちよく食べているシャニーを恨めしそうにミリアが見つめる。これが痩せの大食いと言う奴なのか。

天馬騎士は体重制限が厳しく、ちよつとした事ですぐ絞らなくてはいけないので大食いはできない。ミリアは背が高く余計に気を遣っている分、目の前で気持ちよさそうに伸びをする姿が羨ましく映る。あれだけ毎日もぐもぐやっていると言うのに、骨格からして細身

の躰は伸びをするとまるで彼女が持っている剣のように華奢でしなやか。

「そりゃあもう毎日ストレスばっかりだし、しつかり食べて補わなくちゃね」

よく食べて、よく寝て、よく笑うがモットーな当の本人は、何も気を付けている事はなさそうな反応を笑顔で返してくるだけ。

「ストレスが聞いて呆れるよ」

人が聞いたら本当かと思うような事をもっともらしく言うシャニーに、ルシヤナは両手を広げて茶化してやった。彼女のことだ。どうせ報告資料や予算書の事を言っているに決まっている。

「今日は……西部の村に行く予定だったね」

厩舎から天馬を連れ出すと、シャニーは腰鞆から小さなスケジュール帳を開いて行き先を確認する。でも、すぐにその視線はレンの方に向いた。いつも詳細な航路は彼女が引いてくれているので、スケジュール帳にも『西の一番遠い村』としか書いていなかったからだ。

あまりに大雑把な書き方に、横から覗き込んだルシヤナはもの言いたげな眼差しをシャニーへ注ぎ、彼女を苦笑いさせている。

「はい、目標地はレネス。ここから二時間の距離です」

「ひゃー、またここッスか。急がないとおやつの時間にさえ帰ってこないッスよ」

天馬を使って二時間とはかなりの距離。地図を広げてレンが指さす先はもはやエトルリアとの国境付近だった。

エトルリアに近いから温暖かと言うとそうでもなく、関が置かれる場所は標高の高い山々が連なるシュティアホルン連峰にある。遅くなれば吹雪は苛烈を極めて帰還が困難になる場所で、連峰の麓にあるレネスはそれゆえに騎士団の支援も薄くなりがち。前回顔を出した時も支援物資が尽きかけていて事なきを得ていた村だ。

「おや、これはこれは。新進気鋭の第十八部隊じゃないか」

航路を確認するシャニーたちの背後から聞き覚えのある声が近づいてくる。

振り向いた皆は一樣に身構えてしまった。そこにいたのは赤い短



髪の騎士。自分たちを見捨て、その後も散々に小馬鹿にするような態度を見せてきた同期。彼女に良い印象を持つ者は、この十八部隊にはいなかった。

「アルマ、どうしたの？」

その例外のシャニーが親友の突然の来訪に声をかけながら歩いて行こうとするのを、前に飛び出して来たミアリアが遮った。

「何しに来たんスカ！」

「フン、ちよつとは君が戦力になっているか確かめに来た……とでも言えば良いのかな？」

カチンときた。まただ、こいつは顔を合わせたらいつもこうだ。いくらリーダーが何と言おうとアルマは敵としか映らない。

新人部隊時代にも散々に足手まといと人を見下してきた人間。今回も顔を合わせるなり鼻につく嫌な言い方をしてくるものだから、怒りを噛み砕くほどにミアリアは歯ぎしりしている。どうしてこんな鼻持ちならない嫌な奴とリーダーが仲良くしているのか未だに信じられなかった。

「アルマ、うちの部隊の子をからかわないでよ。みんな大事な戦力に決まってるじゃん」

背後からかけられた声によく剥き出しの牙が大人しくなった。

肩に置かれたシャニーの手がミアリアに自信をくれる。嫌味を言われていた時からずっと一緒だった憧れの人に戦力と言ってもらえるだけで嬉しい。おまけに、先を急いで部隊を出て行ったアルマより早く先輩は部隊長に昇進したのだ。誇らしく思えてならない。

「うちの部隊……か。私も早くそう言ってみたいものだよ」

シャニーが先に昇進するとは思っていなかった。まだ部隊長になって半月なのに発言は板についているし、部隊長会議でも一番喋っていると聞く。

(だいぶ先を行かれている気がするな……)

ちよつと前まで自分のことで精いっぱいに見えたのに、見つめてくる青の瞳は朗らかさの中にも鋭気を湛えている様で純粋に羨ましかった。

だが、アルマが漏らした言葉にシャニーは困惑するばかり。こんな所で油を売るような人物では無い事は親友だからよく知っている。

「で、どうしたの？ こんなところに。散歩？」

「まさか、お前でもあるまいし」

いちいちむかつく。目がそう言ってまたミリアが飛び出していうとする。自分のことを馬鹿にされるなら百歩譲って堪えても、敬愛する人のことを小馬鹿にされては黙ってはおれない。

今回もシャニーに肩を掴んで止められてしまい、何故かと問うた視線にリーダーは振り向いてくれなかった。

威勢の良い眼差しを見下ろして冷笑を投げつけたアルマは、今度はじつと見つめてくるシャニーの視線を捉えてからかうように笑って見せた。

「タイト団長の命令で推して参ったつてところだ。十八部隊がちやんと仕事をしているのか見て来いってね」

そう言えばアルマはタイト直下の第一部隊の所属になっていた事を忘れていたが、シャニーの目が点になったのはそんな事ではない。

(……お姉ちゃんが——?!)

まさか姉が監視役をつけるなんて思ってもいなかった。

部隊長になってからは特に叱られた事も無いし、毎日時間が足りないくらい働いてきたというのに。一体なぜ……困惑と驚きがシャニーの顔にはつきり出て、それはすぐに口から飛び出した。

「えー！ あたしたち、ちゃんと仕事してるじゃん。ねえ？」

まだタイトは認めてくれていないのだろうか。

周りに聞いても皆何度も頷く。毎日あちこち飛び回って一生懸命動いている自信はあった。イリア内のあちこちを回って手に入れてきた内情や嘆願を部隊長会議で時間の許す限り報告してきた。

(うーん……この前の報告がダメだったのかなあ。せつかく、みんなが託してくれたのに……)

イドウヴァはもちろん、どこか他の部隊長達の反応もイマイチだった。報告の仕方が悪かったのだろうか。色々頭を巡ってしまう。

特殊部隊としてタイトから直々に任されているのだ。どんなに批

判を浴びても戦う覚悟はできている。とは言うものの、肝心のテイトから監視をつけられるとなるとどうしても不安が募る。

「お前たちは騎士団の『規格外』の仕事をしているから、週報では掴めないんだとさ」

——言っている意味が分からないのですが

会議でもイドウヴァから突き刺された言葉が蘇る。自分たちの仕事が否定された気がしてがっくり来た。

やむを得ないのかもしれない。既定の報告書は国外への傭兵契約をベースに書式が作られているから、要求事項がまるで自分たちの仕事と合っていないことは分かっている。

でも、これでは納得いかないし、何よりメンバーの士気に係わる。どうすれば……——その時、シャニーは閃いてアルマの手を取った。

「そうだ、じゃあアルマ、これからあたし達についてきてよ」

唐突な誘いに部隊のメンバーも含めてその場の全員が驚く。本気？——ミリアの顔がそう問うてくるが、シャニーはアルマにニコニコした顔を向けて答えを待っている。

苦手な顔を向けられて一瞬は面食らったアルマだったが、すぐに普段の見高な顔に戻ってシャニーが取る手を引き戻し、バカバカしいと払って見せた。

「何で私が暇な君たちの散歩に付き合わないといけないんだ？」

ミリアが突っ込んでいこうとするのを今度はルシャナとレンが必死に止める。

「まあまあ、たまにはいいじゃん？ あたし達の監視だと思つてさ」

また仲間に誘うかのようにシャニーが手を取って来た。

テイトには様子を見てこいと言われたが、アルマはあまり乗り気ではなかった。城を出たら数時間帰つてこず、どこで何をしているかも不明な部隊だ。親友に限って油を売っているとは思わない。だからと言って彼女が何をしているかなんてそこまで興味は湧かない。

それでも、親友にこれも仕事と暗に言われ、彼女も仕方ないと視線を切った。

「分かった。準備をしてくる。何時に出発だ？」

「え、アルマが戻ってきたら？」

時間を区切らせようかと思っただが、一応ここは親友のテリトリー。

「……緩い部隊長だな」

最後まで憎まれ口を叩いて去っていくその背中に、ミリアはこれでもかと舌を出す。その横ではシャニーがアルマの背中へニコニコしながら手を振っているものだから、どうにも怒る気が失せてくる。

「シャニー、いいんすか？ あんなヤツ連れて行って」

納得いかないと顔がはつきり訴えてくる。ミリアだけでなく、ルシヤナやレンも困惑した表情を浮かべていた。

今までどれだけアルマが辛辣な態度をとってきた事か。そんな目で監視されながら仕事をするなんてどうにもやりにくいし面白くない。大丈夫！——そう言いたげにシャニーはミリアの背中をポンと触れると白い歯を見せてきた。

「あたし達の仕事を見てもらう良い機会だと思って」

シャニーはそれを逆に機会として捉えていた。誰も知らないのだ、自分たちの一生懸命を。

見えないなら見せつけるだけ。分からないなら、分かるまで伝えるだけだ。自分を信じてくれる者たちが語った苦しみや、その存在を、彼らに否定させる訳には行かない。人々の為に戦う事こそが十八部隊の誓い。

「バカにされたくないじゃん？ あたしたちの『三誓』をさ」

たった三行の短い言葉。この誓いを手に入れる為にどれだけ悩んで苦しんで、涙に枕を濡らし続けてきたことか。

長く明けない夜を越えてようやく掴んだ道だ。それを、よく分からないだとか、見えないだとか、お偉いさんから好き放題に言われているのは堪らない。

自分たちの信じるものを見下すというのなら相手は誰でも容赦はしない。勝つまで戦い続けると、ぐっと拳を握ったリーダーに皆は頷いた。

「そうだね。荷物持ちは多いに越した事は無いし」

同意を求めるようにルシヤナの視線がミリアに向く。二人でニヤニヤしている、槍を取って来たアルマの姿が見えてくる。今まで散々好き放題された分、少しくらいは仕返ししたってバチは当たらない。

「悪い、待たせたな」

「来たね。じゃあほら、これ持って」

声をかけてきたアルマにルシヤナはポンと大きな麻袋を押し付けた。かなりずっしり来る袋だ。しっかり口が絞ってあり中に何が入っているか分からない。

言われるままにするしかないアルマは天馬に荷物を乗せ、不安な気持ちいっぱいに十八部隊の後ろについて行った。

「おい、シャニー。これは一体何なんだ？」

「へへっ、着いてからのお楽しみ〜と言う事で！」

シャニーを先頭にして編隊を組んで西の空を目指す。

最後尾にいたアルマはすぐにシャニーの横につけて後ろの麻袋を指さすが、彼女はニコニコするだけで教えてくれない。

そのこと自体は不安を一掃深めたが不思議な感覚だった。目指すものは同じなのに、ずっと互いに背を向けて別々の道を歩んできた親友と同じ方向を見て飛んでいる。

この感覚も……悪くない。親友と共に見つめる西の空。広がる蒼穹から吹く心地よい風に少しだけ口元が緩んだ。

## 第9話 とっておきの企画

カルラエを発ってからどのくらい経っただろうか。レンの修正指示に従い、また少し方角を南東へと修正して天馬隊が蒼穹を駆け抜けていく。未だ到着が近づくような空気ではなく、アルマにはただ疑心ばかりが湧き上がる。

「リーダー、誤差修正マイナス五度」

「オッケー！ 何ならオマケで七度くらい修正しとくー？ あつちも見ておきたいしさー」

その疑心を煽るかのようなシャニーの声が先頭から聞こえてくる。横では指示を出したレンが小さな頬をぷくつと膨らせていた。

「ランチタイム無くなる」

「げっ、じゃあ五度で！」

またレンから指示が飛び、シャニーが元気な声で応えて少しだけ方が修正される。どこかを目指している事は確かのようにだが、あまりに時間が経ちすぎている。どうにも緩い雰囲気も手伝って、アルマの辛抱は限界を超えた。

「お前達はいつもこんな遠くまで来ているのか？」

少しスピードを上げてシャニーに追いつくと、気持ちよさそうに風を受けて鼻歌をうたう彼女へ問いかけた。もうすぐエトルリアとの国境付近だ。

「今日はたまたまかなー。騎士団の管轄地をあちこち廻ってる感じ」

そのたまたまにわざわざ連れてきたと言うのか。ご機嫌な眼差しは指を立ててアルマに笑いかける。

「アルマはラッキーだよ！ こんな平和な航路はめったに無いんだから！」

なかなか目的地に到着できないことも多い。目的地へ一直線に飛んでいても、眼下で何かあれば急行して事件の收拾を優先するからだ。

青髪を風になびかせてシャニーが気持ち良さそうに鼻歌をうたう時は良好な旅路の証拠。ここまでトラブルのないスムーズな航路は

稀なこと。

「本当は管轄外地にも行きたいんだけどなあ」

鼻歌が不意に止まったかと思うと、彼女は航路から視線を逸らして北の方角を見つめだした。聖天騎士団の管轄領が広がっている方角だ。

「騎士団が違うっただけでイリアには変わらないしき。困っている人を一人でも助けてあげたいんだ」

よく飛ぶ航路も決まってきたので、地図を広げなくても地理が頭に浮かぶ場所も増えてきた。

でも、いつも境界線付近で引き返さなくてはいけない事が心苦しい。地図上に引かれたたった一本の線を境にして、救う者とそうでない者を分ける違和感。

(あの先には何が広がっているのかな。いつか……行ってみたいなあ)

空から見下ろすイリアは自然とそう思わせる。

天馬騎士団に所属している以上、境界線を簡単には越えられない。でもきつと、困っている人は一杯いるはず。翼を鎖に繋がれたかのようなもどかしさが、晴れ空の向こうを見つめる瞳を強くする。

「よーし！ 今日目標クリアを頑張っちゃおう！」

再び視線を西へと戻して手を突き上げる。今日はこの先でどんな話を聞けるだろうか。ワクワクが笑顔に映えて、天馬を駆るスピードを一段上げた。

「困っている者を救いたい……か。ま、それは同意だな」

まっすぐ前を見据えて夢を語るリーダーの瞳を見つめ、アルマはこの旅路をもう少しだけ信じてみることにする。

それから三十分くらい飛び続けただろうか。前方には高く連なるシュティアホルン連峰の山々。これ以上行けば国境に突き返される場所まで来て、ようやくに天馬隊が少しずつ高度を下げ始めた。

(……は……！)

シャニー達が目指している村を見てアルマは思わず目を見開いた。まさかこんな所まで彼女たちの行動範囲だったとは。忘れる訳も無

い場所に降り立ったアルマは村の様子を遠くから見渡していた。

「ふう〜！ やつと着いたツス！ あー……お腹空いた」

呆然とするアルマの横では、ささっと十八部隊が活動を始めようとしている。

天馬から降りてうんと背伸びしたミリアの視線は、さつそく降ろした麻袋へ向かう。お腹を擦りながら袋を開けた彼女は、中を物欲しそうに見つめだした。

「ミリア、それはダメ」

後ろからお尻を叩かれた。振り向けばレンが小さな口を膨らせている。何だかいつも監視されているみたいで、邪なことを考えると即レンの声が飛んでくる。普段シャニーがテイトに叱られていた光景を思い出してしまった。

「分かってるって！ いくらウチでもシャニーみたいなのはしないよ」

「あたしがいつ物資をつまみ食いしたのよ！ もー、監視役が本気にしたらどうするのさー」

「そうっスね。シャニーだったらつまみ食いどころか全部無くなるツス」

「ん、同意」

向こうからブーブーと反論する声が聞こえてくる。

予想はしていたものの、部隊の様子にアルマは軽いため息をついた。部隊長に昇進したからどんな指揮を揮っているかと思っただが、やはり威厳はなさそうでガツカリと安心が入り混じる。なんとなく、テイトが様子を見て来いと言った意味が分かった気がした。

「バカなこと言っていないでほら、決めたように出発、出発！ 十四時集合だからね！」

じやれる部隊長と平隊員共はルシヤナにお尻を叩かれて散り散りになった。どうやらこの部隊も第一部隊と同じで副将が厳しい人のようだ。

準備を先に終えたミリアとレンが東西に分かれ、物資を小さな荷車に乗せて出発していった。残されたシャニーとルシヤナが資料を見



下ろして何かを話している。

「私は何かすることはあるか?」

アルマは手持ち無沙汰になって、二人が顔を上げたタイミングで声をかけてみた。すると、ルシヤナが驚きに満ちた顔をした後、ニツと笑ってきた。

「おや、仕事熱心だね。さすが第一部隊所属の騎士はマインドが違うね」

「当たり前だろ? これだけ時間を使つて荷物を運んだだけでは日報に書くことが無い。お前たちとて同じだろう?」

ルシヤナは褒めたつもりだったが、アルマからは怪訝そうな目で問われてしまった。

毎日どんな仕事をしたのか、日報に記載して提出する義務がある。十八部隊と違い、傭兵に出ても全員が共同で行動することは少ないためだ。文化の違いに唾然とする二人。

「へえ、スゴイ! うちの報告書一枚だけだよ。へへっ、ラクチンでしょ?」

相手がある仕事で日の出ている内が勝負。日報に時間を使いたくなかったから、夕飯の時間で情報共有して最後にシヤニーが部隊報告書を一枚書いて済ませていた。

別に事務方が何か言ってきた事も無く、多少手直しを要求されてもシヤニーお得意の「ま、いっか!」で今まで通している。

「じゃあアルマ、あたしと一緒に行くかうよ」

ルシヤナにアルマを任せるのは酷だし久しぶりに話もしたい。シヤニーはアルマの手を取って荷車を引き始める。特に会話もなく、肩を並べて歩く二人。

「……? 何が楽しい?」

しばらくしてアルマは違和感を覚え、見つめてくるシヤニーに眉をひそめた。彼女は今もこちらを見てニコニコしている。

「えー? いやあ、アルマと一緒に仕事するのは、久しぶりだなと思ってや」

一体いつぶりだろうか。こうして一緒の道を歩むのは。おそらく

新人部隊で共に仲間へ稽古をつけていた時以来。苦い経験をしている間にアルマはイドウヴァの許へ行き、二人の歩む道は分れた。

あれ以来、道が交わる事さえも少なくなっていたから何度も第一部隊の詰所に足を運んだ。でも、傭兵に出ていると不在だったり、部隊自体は詰所においてもアルマだけいなかったりで、今迄まるで会えずに来た。

「ねえねえー！ 第一部隊ではどんなトコ行つてたの？」

ひと時とはいえ、親友と同じ方向を向いていることがシャニーには嬉しいらしい。

ここまで人の事に興味津々となれるのはある意味才能か。最初は鼻で笑っていたが、親友の爛々とした瞳に負けた。アルマは適当な外征先の逸話を持ち出して盛り上がる。それは本当に僅かな時間だった。

「よっし、アルマ。ちょっと待っててよ」

民家の前に辿り着いたシャニーはアルマに手を振ると荷車を引いて軒先へ向かう。

「こんにちはー。おばきーん、差し入れ持ってきたよー！」

民家の玄関先に着いたシャニーが元気な声で挨拶したと思ったら、持ってきた麻袋へ手をつ突っ込んで何かを取り出す。両手に持っているのは食料だ。

最近、十八部隊の予算申請が異常に多いと愚痴っては調べるとイドウヴァが指示してきたが、おそらくはこれが答えだ。

「おやシャニーちゃんじゃない。また来てくれたの？ 怪我はもう治った？」

顔を出す住民の顔に不安はなく、それどころか聞こえてきた声を待っていたかのように飛び出してきて暖かい言葉をかけている。

(あそこの婦人は気難しくてなかなか気を許さない人だったはずだ) それがあんな笑顔を浮かべているなんて。アルマはその変化にあっけにとられていた。

ただでさえ、この村は天馬騎士団の管轄領でも辺境にあつて物資供給は心許ない。ベルン動乱時には見捨てられたようになっていたか

ら反発も強かったはずだ。特に村長は天馬騎士団と聞いただけで目を吊り上げるくらいに。

「うん、元氣元氣！ 寒くなったからおばさんも気を付けてね」

固く凍り付いたものを溶かす暖かい風が吹き込んで夫人に笑顔が浮かぶ。シャニーらしいとアルマは思った。あの飛び込み方は自分では性格的に出来そうにはない。嫌味無くすんなりと人の懐へ入り込む姿は羨ましかった。

あれをもっと別のことに使えば、今頃イドウヴァの右腕は彼女だったかもしれない。そう思わせるほどに厄介な力を親友は持っている。「そうなのよね。この村には病院が無いから気を付けているよ。井戸もよく氷るし、子供のいる家は大変よ」

自然な会話の中から出てくる困り事。ささつとメモする間も談笑してさらに続きを聞き出していく。手馴れたものだ。

「病院……欲しいよね」

一通り書けたメモを上から見直してシャニーはぼつりと漏らした。彼女が住む村にも病院は無かった。ウツデイが医学の道に進むまでは知識さえ村には無く、祈祷してもらうことが関の山だったから、厳しい山々に囲まれるこの村の不安は痛いほど分かる。

（何も出来ないまま待つなんて嫌だよ。何か出来る事があるはず！）  
この状況を何とかしてあげられるのは自分達しかいない。民を守り、彼らに笑顔を取り戻す事。国力向上を任せられた十八部隊の誓いだ。

「お薬とか物資の輸送ラインが出来れば少しは解決するかなあ」

思いつく限りを住民に提案して反応を見る。漠然と聞いても返っては来ないが、こちらから何か提案すれば困っている人からは必ず反応がある。今回も堰を切ったように婦人からはあれこれと想いが飛び出してきた。それを全てメモして、大事な部分を丸で囲っておく。この情報の全てが、手ごわい上層部と戦うための武器となる。

「よしっ、今度お城の会議で提案してみる。上手く行くように頑張るから応援してね」

——頼むよ

その想いをしっかりと受け取って、シャニー達は夫人の許を後にして次へと向かう。

たくさんお喋りが出来たからか、シャニーの顔には温かい笑顔が浮かんでいる。何と楽しそうな顔で仕事をしているのだろう。剣を握っている時とはまるで別人だ。

「毎日こんな感じなのか？」

初めて親友が仕事をする姿を見た。こんな事をしているなどおそらく誰も知らないはずだ。騎士団既定の週報の様式にはこういった活動を書く枠はない。彼らの仕事で評価されるとしたら賊討伐くらいだろうか。

「そーだよ。みんなの声を拾って、それを部隊長会議にかけてみんなに動いてもらう。これの繰り返し」

本当に毎日地道で小さな目標の積み重ねだ。

何も成果が無い日だって当然あって、皆が作った小麦を食べるのに罪悪感を覚える事もある。それでも、部隊の仕事を語るシャニーの顔には充実した笑みがある。

「あの会議に出られるのは部隊長のあたしだけだから、責任重大ってね」

テイトがわざわざレイサと部隊長を交代させたのはこれが理由。シャニーはそう思っていた。自分の誓いを信じて発言の機会をくれたに違いない。

皆のかいた汗を一身に背負う。だから負けられないし、限られた時間での提案は無数の声に順位付けする必要がある。どうやって提案しようか皆で作戦を練る時間は楽しくも苦しい時間だった。

「……さっきの話、却下されるだろうな」

——イリア中に物資輸送を行うための天馬部隊を配置する

——病院と関係者の教育のための施設を増設する

婦人との会話の中でシャニーがメモして丸で囲った部分にはそう記されている。

アルマには到底幹部たちが首を縦に振るとは思えなかった。これ以上、国内で金を稼がない人間を増やす話など。

「承知の上だよ」

夢を碎かれるような言葉を浴びせられても、シャニーは怒ったり悲観したりする素振は見せなかった。

それどころか、見つめてくる眼差しは剣のように鋭くなる。

「やってみてダメだと分かるのと、やらずにダメと思うのは違うじゃない。アルマだって同じでしょ？」

下手をすれば、現状が分かっていると叱責されるかもしれない。考察が甘く効率が悪いことはシャニー自身もよく分かっていた。この前の会議でもイドウヴァにこっぴどく指摘を受けたばかりだ。

——やりたい事ばかり言わないで出来る事を提案しなさい。ここは夢を語る場ではありませんよ

それでも民の想いを背負っている以上は、負けると分かっているからと戦わない選択は無かった。膝を突こうと、剣折られようと、彼らの為に勝つまで立ち上がって向かっていく。それが第十八部隊。

「ふっ……その通りだな」

心配は愚問だったとアルマは自身に笑う。そういう人間だからこそ、ライバル同士と認めた仲。

「どれだけ剣を折られても、信じてくれる人のために戦い続ける。それがあたしの誓いだから勝つまでは負けないよ」

イリアの礎たれ。思っていた以上に険しい道。大事なものは剣を折られない事ではなく、剣が折れたとしても負けずに向かっていく事。それをできる環境が今はある。

新人部隊時代に知っていた親友とは違う瞳に、これは俄然面白くなってきたとアルマの口角は自然と上向いていた。

「……まあ、この辺りなら間伐材の輸送用トロツコがあるから、それを使う手はあるかもしれない」

「トロツコ？——ツ！」

独り言のように空を見上げてアルマが零した言葉を聞いた途端だった。頭にビビツと電撃が走って、シャニーはパチンと指を弾いた。

「それだよ！ それ!! よっし」

忘れない内にと、カリカリ音が聞こえてくるくらいにまたメモを取り始めた。

使えるネタだと思ったのだろうか。丸で囲んだ場所から矢印を引つ張り、何かをぐるぐると囲んでいる。

——企画名：エンジェルヘイロー

横に書いてある注釈には、『イリア中を鉄路で結んで物資輸送路を確保する』と書いてある。

「あたしってば天才じゃん！」

これだけ大規模な企画なら、また会議室を驚かせることが出来る。早く帰って企画書をまとめたくてウズウズが止まらない。何を書こうか……効果をあれこれ考えていると、どんどん夢が広がっていく。(これを通せれば物資の移送も、病氣の人を運ぶのも、全部解決するハズじゃん！)

また指を弾いてニコニコ嬉しそうにする親友にアルマは声をあげて笑って見せた。

「おいおい、第一部隊の手柄を取らないでくれよ」

「えー！そこを何とかさく。お願い！」

見上げてきたシャニーが懇願して手をすりすりと合わせてくる。あまりイジメてやるのも可哀そうかもしれない。そう思った矢先だ。先にシャニーに仕掛けられてしまった。

「分かった。じゃあアルマからお姉ちゃんに伝えて。その代わり、絶対通してよ！」

意外な言葉を喰らってアルマは一瞬言葉を失った。この規模を成功させれば金一封どころでは無い。下手をすればイリア連合から勲章をもらったっておかしくない規模の企画だ。

「お前……」

「だって、どこが通したって同じじゃん。皆が喜べばそれでいいよ、あたし」

彼女らしいと思う気持ち半分、怒り半分だった。こんな事を言っているから、十八部隊などと言う、傭兵ランク最下位の永遠に出世できない部隊で満足してしまうのだ。彼女には早く第一部隊に上がって

きて欲しいのに。

「ハハッ、冗談さ。この案件はお前達が掘り出したんだから好きにしたら良い」

どのみち、第一部隊では役職も何もない平隊員。今の状態で何か発言してもそれこそ消えてしまう。

「ありがとう」

アルマにからかわれた事にようやくシャニーは気づいて少しだけムツとしたが、アドバイスをくれた親友とグータッチを交わす顔はニコやかだった。

「アルマ、ここら辺詳しいの?」

「まあ……な」

地元民なのだから知っていて当然、とは言えなかった。何せこのレネスはアルマの故郷だ。それを親友に言うのが何か気恥ずかしかった。

詳しいからこそ、村人たちがシャニーへ見せる態度には驚くばかり。彼女と喋っていると皆不思議と自身の弱みや悩みを語りだすのだ。

一体どれだけこの村に今まで通ったというのか。朗らかな横顔の後ろにどれだけ色々なものを見てきたのかと思うと、彼女の仕事を監視する意味など無いとアルマはもう結論を出す事にした。

## 第10話 ふるさとの母

それからも次々に民家に足を運んでは話を聞いてを繰り返す。

天職を得たかのように、シャニーは休む間もなく朗らかな笑顔で住民と話し続ける。

彼女についていくこと二時間。集合時間まであと一時間程度まで差し掛かった時、シャニーが次に向かう先を指さした途端にアルマの足取りが止まった。

「ここは……」

それだけ口にする、ぼうつと焦点の合わない眼差しで遠くを見つめ出す。

隣にアルマが居ると思つて喋っていたシャニーは、反応が返つてこなくてようやく立ち止まり、あたりをきよろきよろし始めた。

「? どーしたの? お腹痛くなつたの? 大丈夫?」

まるで地面に突き刺さった槍のようにその場から動かなくなつていて、シャニーは荷車から手を放してアルマの許まで戻つて来た。

別に怪我をしたようでもなく顔色も悪くない。おまけに返事もないものだから顔の前に手をかざしてみる。いつも通りすぐに睨まれた。

(相変わらず怖い顔するなあ)

もう少し遊び心のある反応をしてくれないと毎回思うのだが、この堅物相手にそれを求めるのは酷か。

でも、いつもはつきり断定形で返してくるアルマが珍しく要領を得ないことを口にした。

「ああ。どうやらそうかもしれないな」

「そうかもって……そこのおうちで温めさせてもらおう? 時間結構かかるし」

自分の事なのにどこか他人事のような答えを返されてに眉をひそめる。

「いえ、結構。お前だけで行つてくれ」

手を引っ張つてアルマを民家の方へ連れて行こうとしたのだが



あつさり払われてしまった。

「えー！ ホントに大丈夫？ けっこー時間かかるよ。この人、足悪いから」

大丈夫だろうか。残りの一時間はきつとこの民家で終わってしまう。この家の住人は体が悪いので、困りごとを聞く以外にあれこれと生活の手伝いをしているのだ。

もう一度アルマの手を取って引っ張ってみるが、キツイ一言を浴びる。

「私が痛いのは頭だ。部隊長なのに威厳が無くてどうやって団長に報告しようかとな」

「ちえー、まーたそうやってバカにしてさ。じゃあ、もう知らないんだからね！」

その間ずっと寒いところに居たらもつとお腹が痛くなりそうなのに。口を尖らせて首を傾げながらも、シャニーは言われたとおり一人で目の前にある民家へと向かう。

「こんにちはー。天馬騎士団のシャニーです。あつ、おばさん！」  
挨拶している最中から、民家の窓越しに住人の女性の顔が見えてシャニーは大きく手を振った。

厳冬の中に咲く太陽を見つけると女性はゆっくり、ゆっくりと玄関へと近づいてくる。鍵を開けて迎えてくれた顔は嬉しそうだが、それ以上外へ出て来ない。住人の女性は足が悪く、日常から苦労しているのは顔に刻まれた深いしわからも見取れる。

「元氣してた？」

「まあシャニーちゃん。いつもお疲れ様。最近髪伸ばしてるの？」

シャニーはこの女性の特に気にかけていた。冬場は水汲みや雪下ろしと言った日常生活すら、足の悪い彼女には困難になる。

幸い、女性の血色は悪く無く、ほっとして返す声のトーンが高くなる。

「えへへー、ちょっとねー。たまにはポニーテールとかしてみようかなーって」

玄関先での談笑は冷える。女性がシャニーを招き入れようとした

時だった。彼女は視界の端に映ったものに驚いて目をぱちくりさせた。

それに気づいていないのか、シャニーは外套を脱いで剣を壁に立てかけると、ぐるぐると腕を回し始めている。

（さつてと、今日もやっぱり水汲みからサクツと片付けちゃいますか！）

今日はどの家事から順番に片づけようかと色々頭を巡らすすが、やっぱり元気があるうちに重労働は先になんとかしておきたい。

足の悪い女性にとって一番の大敵は水くみだった。共同の井戸から自宅まではまずまずの距離があり、足を引きずる彼女にとっては一杯運ぶだけでも重労働。それを前回の訪問の時に聞いてシャニーは手伝っていた。極寒の地では一度汲んでおけば氷って腐らないので倉庫に汲めるだけ汲んでおくのだ。

（うひゃく……こりゃアルマにも手伝って欲しいくらいだよ。筋卜レだよ、コレ）

この倉庫の空き具合からして、今日はだいたい頑張り甲斐がありそうだ。一度はあんぐり口が開くが、失われた民の信頼を取り戻すには小さな事でもあちこちでちよつとずつこなしていくしかない。

「よつし、じゃあ始めるよー！ 今日は何杯くらい運べばいいかな？」

——イリアの礎となる

自分が立てた誓いを守るべく気合を入れて声を掛けたのだが、女性は意外な答えを返してきた。

「ありがとう。でも、英雄さんにうちの世話をさせるなんてとんでもないわ」

「へ?！」

彼女はシャニーの手を取ると暖かい部屋に行くようにと案内してくれる。

（英雄って……一体何のコト？ 八英雄の話かなあ。……何で知ってるのかな）

いきなり英雄なんて呼ばれて一体何があったのかと困惑するばかり。八英雄の話なんか、こんなイリアの田舎にまでは届くわけはないは

ずなのに。

「へーきだよ！ この為にあたし来たんだし。ちやつちやと頑張っちゃやうからさ！」

女性は家の中に戻る様子も無く、リビングでお茶をしようという雰囲気では無さそうだ。前回と同じように桶を両手に取ってみるが再び女性に止められてしまった。

「あの赤い髪の子にしてもらいうから大丈夫！」

彼女が指さす先を見えますますシャニーの顔が疑問で埋まる。アルマはここに来たのは初めてのはずなのに、何故いきなり指名されているのかまるで分からない。

「え、でもあの子は……」

十八部隊のメンバーでは無いから一応ストップをかけてみるが、女性は食い気味に笑いかけてくる。

「良いの良いの、あの子働いてないみたいだし、あの子を呼んで来てもらえない？」

女性の懇願の仕方は普通ではなく、何か自分に水汲みをさせたくないのかと違和感ばかりが膨らむ。

そんなにアルマの仕草に目のつくものがあつたのだろうか。でもきつと、アルマに話を振つたら文句を言うに決まっている。

それでも女性の面前で断るわけにもいかず、何かよく分からないまま言われた通りアルマの許に帰って来た。

「アルマ、あのおばさんがアルマのこと呼んでるよ。知り合いなの？」

「……………」

どうやらシャニーは拒否できなかつたらしいことが分かり、諦めるしかなさそうだとアルマは大きく息を吐き出す。

（え、何だろコレ？ どういう状況なの??）

問いかけにも返さずにアルマは目を瞑ってしまった。どうすれば良いのか困惑を浮かべ、シャニーは彼女と民家へ交互に視線を送る。民家の方には今も様子を窺う女性の姿が見える。

足が悪いのを忘れていた。これだけ寒い中、あの場所に放つて来たのはまずかつたかもしれない。アルマに回答を急かす。

「大丈夫？ ツライなら断ってくるけど」

アルマも腹痛を訴えているから重労働は避けたいはず。体調が悪いと言えば女性だつて気は悪くしないだろうと思つていたらアルマが先に動き出した。

「いや……、行こう。お前は先に行つててくれよ」

——ついでくるな

そんな背中が民家へと近づいていく。だが、何も答えてくれなくてシャニーは気になって仕方ない。詮索するなど言われたらもつと気になるのが人の性。

(へへへっ、ちよつとくらいならバチ当たらないよね)

アルマは後で怒るかもしれないがこつそり後ろをつけていくことにした。

レイサがやっていた仕事や動きを真似して距離を縮め、玄関先の横にある大木の裏を陣取る。木の幹からそつとアルマを見上げるが、こちらを睨んでくる素振は無い。完ぺきな尾行にガツポーズしながらニシニシ笑う。

アルマがノックすると待つていたようにドアが開き、住人の女性が足を引きずりながらアルマに近づいていく。

「アルマ……もつと顔を良く見せてちょうだい」

呼び捨てにする女性を邪見することもなく、静かに迎え入れるアルマの優しい眼差しは騎士団では見た事など無い。目を見開いたシャニーはようやくやくピンときた。

(そつか……あのおばさん、アルマのお母さんだつたんだ。それでアルマ、照れてたんだね)

よろける足元を預けるようにしてアルマに抱き着き、抱きしめている。

ようやく全部が繋がったように思えて、親友の照れ屋をシャニーは小さく笑った。視界の先では今も、小さくなったように思える母の背にアルマはそつと手を添えている。

「母さん、私は大丈夫。もつともつと稼いで、楽をさせられるようになるから心安らかにして待つていてください」

ここに帰ってきたのは何年ぶりだろうか。見習い修行より前から家を出て修行に明け暮れてきた。家を出る時も同じことを言つて、止める母へ振り返ることもなく飛び出して。

次にここへ帰るのは、志を果たした時。そう決めたはずだった。今はまだ何も成果を出せていない。無念の帰還にアルマの口調には普段の威勢は無かった。

(アルマにも『護りたいもの』があつたんだ。……ちよつぱり誤解してたかも)

その様子にシャニーはようやくアルマがあれだけ頂点に固執する理由の一端を知つた気がした。

あんなに他人に厳しく接して、それ以上に自分へ過酷を課して精鋭部隊の最前線まで務めているのに、あくなき向上心は今も团长しか見つめていない。それは、この弱々しい母の為だったというのか。騎士団で見せる厳しきとのギャップにシャニーは唾然としてしまった。

「貴女は私の自慢の娘。お願いだから無茶なことだけはしないでね。帰ってきてくれることが、私にとっての希望よ」

——分かつています

言葉にせずとも母をより強く抱きしめて想いを伝える。

口にできなかつた。もういくつも無茶を通してきたし、既にその無茶のレールに乗つた以上、引き返すことなど叶わない。抗う術のない二度と帰れぬ道を今歩んでいる。とても母には伝えられないが、これ以上ここにては零してしまいそうだ。

(次会う時は……全ての歪みを正した時だ)

名残惜しさを払うように母から距離を取つたアルマは、何度も何度も見慣れた納屋に水の入った桶を運び込み、別れの挨拶もせぬまま生家へ背を向けて歩き出した。いつまでも手を振る母の優しさを背に受けながら。

家が木々に遮られ見えなくなったころ、まっすぐ前を見据えて歩く視界の端から突然現れた存在にアルマはひどく驚いて立ち止まった。

「えへへ……見ちゃつた、見ちゃつた」

思わず騎士剣にかかつた手を下す。いたずら好きな青い瞳が木陰

から出てきて笑っている。この口ぶりからするに先ほどのやり取りを全て聞いていたらしい。

(全く……このお節介のバカは……)

この性格だから先に行けと言って素直に行くとは思っていないが、まさかここまで首を突っ込んでくるとは。

こういうヤツだからこの仕事が出来ているのだろうとは思いながらも、人の気持ちも知らないで無邪気な顔を見せる親友に口元をへの字に曲げた。

「お前……。盗み聞きとは騎士の風上にも置けないな」

「まあまあ。お腹痛いって言ってたから心配してついて来ただけだよ」

もつともらしい事を言う。こうやって首を突っ込むから要らない苦労を背負い込むと言うのに、目の前の顔はどうしてこんなにもニコニコしていられるのだろう。

アルマは何も返さずツンと視線を切って歩き出し、シャニーもまた彼女と肩を並べて歩き出した。

「アルマって優しいんだね。ちよつと見直したよ。『護りたいもの』があったんだね」

新人部隊にいる時は血も通っていないぐらい冷徹な顔しか見たことが無かった。それが、護りたいものの為に己を殺していたと知った時、シャニーにはアルマがまたひとつ大きく見えていた。

(今のあたしじゃ、アルマには勝てないかもしれないなあ)

自分だつて護りたいものの為には剣を折られようが戦う覚悟を誓いに行っているが、いつも高い壁に跳ね返されて心が折れる事もある。アルマはそれが無いように思えて羨ましかった。

「……母はイリアの縮図のようなものだ。だから、護りたいし、変えた  
い」

全て見られてしまった以上、もう隠している必要はないと集合場所へ向かう道中でアルマは色々身の上を語りだした。傭兵で夫を亡くし、医療や栄養が不十分で体が不自由でも、救いの手を差し出せる余裕のある者は少ない。こんな状態を是として生きるくらいなら、何が

何でも変える。夢は近づくにつれ目標と変わっていった。

「あたしも、出来ることなら何でもするよ。『民の傍にあれ』あたし達の誓いだからさ」

民の困窮を聞き、解決策を訴える仕事を正式に部隊の任務として一か月。六月頃から種蒔きはしてきたもののイドウヴァの壁が高すぎる。

なかなか成果が出ずに挫けそうになるが、アルマの話聞いて俄然使命感が湧いてきた。彼らを救ってあげられるのは、国内専門の特殊部隊である十八部隊しかいない。そう意気込んでいるとアルマが立ち止まり、シャニーと向き合うときつと手を差し出した。

「私もお前たちの事を知れてよかった。団長には良く言っておくから安心してくれ」

——こいつは、これからのイリアに絶対に必要な人間だ

彼女にとつて、シャニー達が仕事として汗をかいているものは同じに映った。ライバルであり、同士であり。進む道は違えど、いつか必ず道は交わる予感はしていたが、今回で確信出来た気がする。

「おーっ、アルマも認めざるを得なかったようだね！　へへへっ、お姉ちゃんからご褒美貰えるかな」

見たこともない優しい顔にシャニーは嬉しそうに手を取ったが、その顔はすぐに逸れてしまった。

「お姉ちゃんより……イドウヴァさんに上手く言ってくれないかな」

いつも会議で報告してもあれこれと意見をつけられて却下されてきた。影響力の大きい人だから、イドウヴァが反対したら彼女になびく者達はどう誰も手を挙げてくれない。

自分ではどうにも出来ない力を前に、誰もいなくなった会議室の机に何度悔しさを叩きつけた事か。

(顔に泥を塗ったから……？　いや……それだけじゃない気がする)

今でもよく分からなかった。なぜかイドウヴァは自分の顔を見るだけで顔を怒らせるようで話がしにくい。

団長選出戦で顔に泥を塗った形になった事は分かっているが、あれだけ明確に敵意を向けられるとやっぱり言葉に詰まってしまう。

仲間の汗と村人たちの想いを無駄にしてしまう自分の無力を思い知らされる瞬間。同じ士官でも、最下級の自分と副団長ではとても敵う気がしない。そんな人とうまくやっているアルマのことが羨ましく映るほどに。

「……善処する」

藁にもすがる思いで絞り出した言葉をアルマは拒絶しなかった。だが、こればかりはやって見せるとは言えず歯切れが悪い。シャニーのように彼女を敵に回すわけにはいかなかった。

「ねえ、アルマ。イドウヴァさんってやっぱり、あたしの事……嫌いって言ってる?」

心細さが自然と上目遣いに現れる。そんな目で見てはいけなさと分かっていても、あれだけ明確な敵意を向けられてはどうしても心は警戒してしまう。

「ああ。良く思っていないようだな」

「……そっか。やっぱり、団長選出戦かな」

「さあな……。さっぱり分からん。すまん」

しょんぼり肩を落とすシャニーを見てやるせない思いに駆られる。嘘を言ったつもりはない。イドウヴァはいつもシャニーへ敵を見る様な暴君的な態度を浴びせているし、会話でも小娘だとか青髪だとか、まともに名前と呼んだことは無い。

(あの人は一体何を考えているのだ)

的確だった。信を背負って強くなる、愛し愛されたい性格の弱点。明確な拒絶に弱い彼女へ確実に毒を流し込んでいる。それが何故なのかアルマには分からなかったし、シャニーにも言わないで置いた。団長選出戦何かよりもっと前……それこそ入団式の時すらイドウヴァがそんな眼光を浴びせていたとは。



## 第2章 斉いし舞台

### 第1話 白と黒の騎士団

——エレブ新暦1000年11月

カルラエ城第一会議室。今日も定例の部隊長会議が開かれていた。だが、円卓に座った者たちは自分のスケジュール帳を覗き込んだり、部下からの報告書へ目を通したり、会議が始まるとは思えない空気が。

「本日の重要案件は、聖天騎士団からの支援要請への対応についてです」

早速に議長のイドウヴァは皆が揃うや定刻を待たずに切り出した。

主題は、今月の中旬から二週間に亘る、イリア北東部の聖天騎士団管轄領における開拓事業の警備契約。

もちろん外国との傭兵契約を主な任務とする部隊がその任に着くことは無く、副団長イドウヴァの視線は第十八部隊長へと向いている。彼女の眼はすでに確定的な回答を待つだけの余裕に満ちたものだ。

「それでは事前の手筈通り……シャニー部隊長、よろしくお願いしますね」

その議案はすでに九割は終わっているも同然だった。他の部隊の長には良く分からないだろう程度の軽い説明で済ませたが、指名されたシャニーはやや唇を噛みながらも立ち上がる。

(これも……みんなの為だ。あの案件は絶対に通したい)

今も納得できたかと言われたら嘘にはなる。だけど、イドウヴァに突き付けられた条件を呑むしか選択肢はなかった。それでしか、今の自分にはあの人たちの笑顔を守ってやれる術がない。

「はい。さっきのお話をお願いします。イドウヴァ副団長」

——まただよ

部隊長達に呆れとも取れる顔が浮かぶ。イドウヴァは大事な案件の時は対象の人間と事前に握っていることが多い。

いつもの朗らかな顔が消えて唇を噛んでいるあの若い部隊長の反応はあからさまだ。イドウヴァのように鉄仮面を被れる人間ばかりではない。あの年で毒牙にかかるとは——そう憐れむ者さえいた。

——1時間前

第二部隊の詰所へ続く廊下をブーツで叩く音が近づいていく。アルマはそのまま迷うこともなくドアをノックして中へと入っていた。

(やれやれ、随分と難題をお願いされたものだ)

恩にはしっかりと報いてやらなければならない。出来る事は限られているが、自分にしか出来ない事を親友は託してきた。善処すると答えた以上は果たさねばならない。

「失礼します」

部屋に入ると刺々しい空気が広がっている。どいつもこいつも、毒牙にやられて中毒を起こしているのか、敵を見るような視線があちこちから突き刺さった。

だが、見慣れた顔だったのか部隊の者たちはすぐに視線を外し、それ以上の威圧を浴びせることもなく事務仕事に戻っていく。

アルマの目的は彼女達ではない。視線の先には、奥で二つの宝玉を掌の上で転がして暇を潰す副団長。まっすぐ歩いて行き頭を下げた。

「副団長、本日の会議でシャニーたちがシユティアホルン連峰の物資輸送について報告するとお聞きしましたが」

資料へ目を通すイドウヴァに、自身へ視線が来る前に用件を切り出す。

「ああ……これですね」

読んでいた資料を手に持って振って見せるイドウヴァの顔は明らかに乗り気ではなく、それどころか明確な敵意をもって資料を蔑む様に見下ろしている。

(何故ここまで、この古狐は執拗なんだ?)

その理由の大方は知っているつもりだが、ここまでの怒り具合はそれだけでは説明がつかない。

十八部隊の案件の時はいつもそうだ。今回もこのままいけば間違

いなく潰されるし、それだけで済めばマシな方だ。この不機嫌具合だと、どれだけの叱責をシャニーへ浴びせるつもりなのかも分からない。最初は叱責でも、そのうち個人攻撃になって倒れていった部隊長は枚挙に暇がないらしい。

「そのお話……ぜひお通しいただけないでしょうか？」

「……何ですって？ アルマ、何を言っているのですか？」

ギリっと目じりを吊り上げ、シャニーへぶつけるつもりだったのであろう尖った声がまっすぐに突き刺さる。

それでも、アルマはひっくり返すべく耳打ちを始めた。テイトが反対するとは思えない案件。副団長が領けば彼女の息がかかった者たちは反論しないはずだ。

聞かされた内容にイドウヴァは一瞬驚きを見せたが、ピンと来てアルマを見上げた。

「確か……あなたの故郷でしたね」

静かに頷く彼女にイドウヴァは内心驚いていた。

（この女にそんな温情があるとは、一応血は通っているようですね）  
戦場では殺戮兵器の様に敵を薙ぎ倒し、騎士団内では仮面ではないかと思うくらい、常にポーカーフェイスへ心情を隠すこのアルマが郷愁に駆られるとは。

しかし、仮面のまま口にした提案は決して故郷の為だけでは無かった。

「はい。それに、この鉄路を木材の輸送だけに使うのは勿体ないかと。

……聖天騎士団との関係上重要ではないでしょうか？」

はつきりと口角が上向くのが見えた。イドウヴァは企画書に再び目を落とし、アルマもライバルたちの苦心が凝縮された一枚をじっと眺めろす。そこには、あの時シャニーのメモ書きの中でぐるぐるに囲まれている名前がはつきり大きく記されていた。

——企画名：エンジェルヘイロー

イリア中を鉄路で結び、支援物資の全土への展開と停滞の防止を目的とする、超がつくほどの大型案件だ。

もちろん必要となる資金も動員数も莫大。国内案件にそこまでつ

ぎ込む必要は無い——外征至上主義者のイドウヴァが却下を喰らわせるだろうとアルマも最初は諦めていた。

「なるほど……それは名案ですね。聖天騎士団とはこれから手を取って行かねばなりませんね」

その逆転の一手は、シャニーたちの提案に出てくる間伐材輸送用のトロツコだった。この鉄路を聖天騎士団の開拓事業で物資輸送に使えば効率は格段に上がる。ゴミ箱へ行くはずだった資料が金脈に変わった。

「良いでしょう。ふふふ……感謝してもらわないとね、シャニーさん……！」

……

「ええ。あなた達が報告してくれた案は必ずいい形に持っていくようにします」

シャニーの不安そうな顔と、イドウヴァのにこやかな笑みが不釣り合いに会議室へ映る。空を飛ぶくらい望み薄だった承認が下りて、ほっと胸を撫で下ろした。

(みんな、承認下りたよ！ やったんだ……良かったあ……)

静かに席に着くシャニーを見下ろすイドウヴァの眼差しはいつまでも笑っていた。

どれだけ反抗の目を向けようとも、あの時とは立場が違う。昔はよくこの会議室で、この小娘の母親と言い争ったものだ。あの女と戦った時はあちらの方が団長で勝ち目はなかった。今はその逆。親の因果が子に報うとはよく言ったものだ。それでも……やはり血は争えないか。

「イドウヴァ副団長！」

会議後、部下を引き連れて詰所へ戻ろうとするイドウヴァを背後から若い声が呼んだ。この場にいるこんな若い者は一人しかおらず、何よりも呼ばれたイドウヴァにとっては忘れるはずも無い声。

振り向けばやはり青髪を揺らしてシャニーが駆けてきており、イドウヴァは怪訝そうに目を細めた。

「どうしましたか、シャニー部隊長」

「あの……本当にあの村に鉄路を延ばしていただけるのですか？」

どうにも心配になってシャニーは確認しに来ていた。聖天騎士団との契約を引き受ける事と企画の承認は交換条件。

だけど、あまりにも不釣り合いな条件に思えた。何か、押し付けるだけ押し付けて何もしてくれないのではないか。そんな不安がどうしても拭えない。

(良くないけど、やっぱ……何か信じられないよ)

普段、人を疑う事なんて考えもしなかったのに。どうにもイドウヴアの言う事は不安をかき乱す。彼女が自分の事をどう評価しているのかなんて、これまでの会議で浴びせられてきた心を突き刺すような言葉の数々で思い知らされているから、今でも信じられなかった。

「お話しした通りですよ。それとも、私を信用できないのですか？」

そうだ——とは言えず、視線を逸らしながら首を横に振る。

だが、目は口程に物を言うもの。イドウヴアに本心があつさり読まれて不機嫌な顔がさらに歪む。

「正直、調査不足のこの企画で通ると思った貴女の資質には首を傾げますが、アルマから詳細については聞いていますからね。心配は無用ですよ」

ツカツカと去っていく副団長の背中に頭を下げながらも、奥歯をギリツと噛みこんで震える拳を抑えることで精いっぱいだった。ここまで好き放題言われて何も言い返せない悔しさをぐっと飲みこむと、シャニーは仲間に報告するべく詰所を目指す。



部隊の詰所に戻って仲間たちに提案結果を報告したシャニーは彼女達から集中砲火を受けていた。

「……で、あんたはまんまと手柄をイドウヴアさんに持っていていかれて、代わりに厄介ごとを押し付けられたってわけ？」

ことさら、副将のルシャナの剣幕は厳しい。

提案したと言っても会議ではほとんど話題に上がらず、イドウヴア

と握っただけになってしまった。十八部隊が足で稼いできたと伝えることだって大事なのに。

「そんなに怒らないですよ」

シャニーが返した声はため息交じり。どれだけ苦勞をしてイドウヴァと裏で握ってまで通したのか仲間たちは知らないし、そんな事言えるはずも無い。

言われていることは尤もだとも分かっているけども、今は守った者たちの笑顔だけを思い浮かべた。

「レネスの人たちもこれで少しは楽になるはずだし、良かったじゃん」

「そりやそうだけど、人が好すぎない？ あんた」

ニコツとして返されてルシャナは一瞬息が詰まったが、すぐにギツとリーダーを睨む。自分だけではない、ミリアやレンの一生懸命さえイドウヴァが涼しい顔でウマイ所だけ持って行ったのだ。

「ごめん、ごめん。今度はもっと上手くやるからさ」

幼馴染の怒りは分かるし気持ちも同じだがシャニーには苦笑いしかできない。

飲むしかない話だった。仮にイドウヴァからの提案を跳ねのけていたら、この案件だって通らなかつたに違いない。村の人たちの顔を思い出すと、頷くしかなかった。

「あんた達の誓いは守ったわけだし、良かったじゃないか」

「良かったけど気に入らないツスよ。あのアルマにも借りを作っちゃったわけだし」

横からレイサがフォローしてくれるが、すかさずミリアが口を尖らせたまま不満を漏らしている。イドウヴァは言っていた。

——アルマから詳しいことは聞いています

彼女がこの案件を通すことに一枚噛んだことは間違いない。仲間には不満そうだが、シャニーは心の中でアルマに手を合わせる。親友は約束を守ってくれた。同時に、団長選出戦の時の自分の行動をどうしても思い出してしまう。

(あの時……イドウヴァさんに投票していたら、こんなに目の敵にさ

れなかったかもしれない……)

「だけど、すぐに首を横に振った。そんな、自分の誓いを折ってまでなびいていたくはない。」

「それより、次の任務の計画を練るのが大事」

取り上げられた手柄はどれだけ不満を漏らしても返ってこない。レンに促されてシャニーは持ち帰った依頼書を会議用のテーブルに広げて見せた。

「聖天騎士団からの依頼で、開拓地の警備任務だつて」

聖天騎士団とはゼロットのイリア連合騎士団やこの天馬騎士団と並ぶイリアの三大騎士団の一つ。エトルリアから移り住んだフェリーズ伯爵を筆頭司祭とする、魔法や弓に騎兵といったエトルリア的戦術を得意とする騎士団だ。

あの騎士団は開拓事業にかなりの資金と人材を注いでいて、警備に回す人員さえ不足するくらいであるのは今回の依頼を見ても分かる。「何で他の騎士団の警備なんかをうちが下請けみたいに引き受けるんだらうね」

首を傾げるルシヤナ。イリア内で傭兵だなんてまるで下に見られているみたいで面白くない。

イリアの中で金が動くだけの仕事だからイドウヴァが回してきたに決まっていたし、そんなに遊んでいるように思われるのはやっぱり癪に障る。

だが、レイサは若い彼女達とはまるで違う見方をしていた。あのイドウヴァが回してきた仕事だ。

「あの騎士団は色々黒い噂があるからね。白と黒の騎士団って呼ばれるくらいにね」

間違いなく、意図がある。レイサは彼女たちに警告するように雇い主の悪口をサツと口にした。

エミリーヌ教による救済を広げつつ開拓事業を急速に拡大するフェリーズの手腕は称賛される一方、司祭たちの法衣の色を揶揄して蔑称が作られるくらい、そちらの話題には枚挙に暇が無かった。

「まあでも、ウチらの誓いからしたら断わる理由もないツスよね」

難しい話は分からないと言わんばかりにミリアが白い歯を見せた。イリアの礎たれ。イリア内の仕事は当然果たすべき任務。むしろ初の傭兵任務で彼女やレンは気合が入っているようにさえ見える。

「警備だから特に前線に出て戦うワケじゃないとは思うけど、補給状況は分からないから武器のメンテは忘れないようにね」

依頼書の中を読む限りはどこかの戦場の最前線に立つような任務では無いようだ。あつて襲撃してくる賊への対処くらいか。

そんなに難しい案件ではなさそうと、シャニーから皆への指示も特に無く打ち合わせは自然に解散しはじめ。彼女も席に戻り依頼書へのサインをしようと机の引き出しに手を掛けた時だ。

「シャニー、これ。いない時に届いた」

静かに近づいて来たレンがミリア達に見つからないようにそつとシャニーの手に何を握らせた。

見なくとも手に伝わる感触だけで何か分かる。ふつと優しい笑みを浮かべるレンにウインクして感謝を伝えると、机の下に隠しながら見下ろした。

（ロイ様からだ！　今回は何が書いてあるんだろうな）

ロイとの文通はずっと続いていた。最近はよく愚痴を聞いてもらう。聞かされても面白くないだろうとは分かりながら、つつい甘えてしまうのだ。今日だってまた書きたい事が中を読む前からいっばいに頭へ湧きあがって来る。

（あ……そうだ。傭兵に出るんだし、しばらくお返事出来ない事、書いておかなきゃ）

依頼書へのサインも忘れて、封書から手紙を取り出して読もうとした時だった。

「シャニー、ちょっと」

良い所だったのにと、ぶうつと頬を膨らせたがレイサの目は笑ってくれなかった。手招きされ、彼女の歩くままについて行く。最初は廊下に出るだけかと思ったが、人目を避けるようにして裏道を抜け、あつという間に周りに誰もいない城外の西側通路まで引っ張り出されていた。



一体何事かと声を掛けようとしたが、振り返ったレイサを見つめてうつとした。そこにあつたのは、いつもの飄々とした眼差しではなかったからだ。

「あのイドウヴァが回してきた仕事だ。何を企んでるか分からんから気をつけな」

「ええ……？ 何それ、どういうこと？」

いきなり厳しい眼差しでレイサから振られた話に困惑するばかり。レイサからすれば、本当はここでピンと来て欲しいのだが、人を疑うことを知らない彼女では無理か。

「言葉のまんまだよ」

突き出した指でシャニーの肩を突く。本当は彼女だって薄々気づいているはずだ。それをどこかで否定して隠そうとする、この甘さをあの毒蛇に狙われていることまでも。

「あんだだつてアイツに自分がどう評価されてるか分かってるだろ？」

何も言い返せずに俯いた。さつきだつてはつきりと言われたのだ。

—— 貴女の資質を疑う

何処に改善点があるかの指摘や問題への叱責なら、いくらでも受けて修正しようと思えるが、あれだけストレートに攻撃されるとさすがに心が疼く。だからこそ、今回の案件だつてアルマに口利きをお願いしたのでから。

「私もちよつと探りは入れてみるけど、あんたも情報を集めといた方が良いよ」

傭兵先ではすべての権限が雇用主に移る。天馬騎士団の保護から外れた状態になるのだ。あの白と黒の騎士団の支配下で。

「特に……開拓事業まわり」

言うだけ言うと、レイサは跳躍してその場から消えてしまった。

## 第2話 眩耀の裏に

誰もいない西側通路を、深い新雪に足を取られながら一人とぼとぼ歩くシャニーは途方に暮れていた。人を疑ってかかれと言うだけでも重いのに、裏を取れだなんて。

こういう時に頭が切れる人が本当に羨ましい。いろいろとアイデアを考えることは好きだが、理詰めであれこれ考えるのがどうにも苦手だ。頭の後ろで手を組んで空を見上げるが何も良い案は浮かんでこない。

「情報を集めるって言ったって……どうしろって言うのさ」

これは毘だとしてもレイサは言いたいのだろうか。イドウヴァの当たり方は確かに辛抱出来ない事もあるが、だからと言って同じ騎士団でそんな事をする理由がシャニーには分からなかった。

「とは言ってもなあ。今更断るなんて出来ないし……」

万が一そうだとしてもエンジンエルヘイローとの交換条件だからもう後戻りは出来ない。レイサと違って情報の脈を知っているわけでもない。答えが見つからずに帰り道がどんどんゆっくりとなって体が悴んできた。

見上げていた視界を戻すと、ふと映った城の一階部分には軍服を着ていない者たちが往来する姿が見える。詰所がある棟とは反対側の西棟には、食堂や医務室の他に事務の者たちの職場がある。

「そうだ……今ならもしかして」

組んでいた手で頭を起こすと鎖が切れたように走り出した。目的地を得た足は速い。中庭を駆け抜けて城のエントランスから普段とは違う方向へ抜ける。騎士では無い人が増えて好奇の視線に苦しくなると早足へ変え、以前迷いに迷った事務棟をするする目的地へと向かっていく。

### ——人事部入出管理室

「すいません、聖天騎士団に関係する資料を見せてもらえませんか？」  
以前も別件で訪れたことがある場所。ここは様々な資料が保管されている。

閲覧制限が厳しく、あの時は何の役職も無かったので渡してもらえたのはたった紙切れ一枚。

「所属と名前をお願いします」

まるで録音されているかのように同じ問われ方だが、今回はきつと違う答えが返ってくるはずだ。

—— 役職：部隊長

自分で書くかどうかにもむず痒い肩書だが、騎士団の中であれこれ動くにはこれが必要になる。何とも面倒くさいが、姉がせっかく権限を与えてくれたのだから使わない手はない。

「第十八部隊の部隊長シャニーさんですね。あなたにお見せできる資料はたくさんありますよ。別室でご覧になりますか？」

やはり部隊長の肩書は思っていた以上に凄まじい。目次だけでファイルが作られるだけの資料を見せてもらえる事になった。

書類を保管している棚を案内され、指差された先を見上げたら目が点になった。向こうの端から反対側の端まで、足元を見降ろしても、天井を見上げたてつぺんも、すべて関連資料だというのだ。

(うっひゃあ……、こんなの全部見てたらおばあちゃんになっちゃうよ！)

とても一人で全部見ることなどできない量。早速目星をつけて引っぱり出しては別室で資料を広げ、情報を頭の中に落とし込みつつメモを取る。

開く資料のどれもが全く知らない情報ばかりで、いかに狭い知識で仕事をしていたのかを思い知らされる。

「ええ……。噂には聞いてたけどこの時こんなに出たの？」

開拓事業は大きな成果を上げる反面、計り知れない犠牲も出していた。自分たちがまだ入団したてのつい数か月前にも大規模な事故があつたばかり。

最近作られたと思われる、まだ紙が白く真新しい報告書が示すものは激甚そのもの。

あの時は自分のことで精いっぱいだった時期。一般知識としては知っていたが、実際に報告書を見て零さずにはいられなかった。

「……ひびく」

それしか言葉にならない。これだけの犠牲を出しても何事もなく今も続けられていると思うと、何か従事者が可哀想に思えてくる。

「あ……これってゲベルの言ってた事と同じだ」

別の資料には開拓事業から帰還した者の消息が絶たれている旨の報告がされている。ただの噂だと思っていたのに、公式の文書となると話は別だ。ゲベルがしきりに訴えていた事が現実と分かるとぐくりと息をのんだ。

「これ、ちゃんと誰か調べたのかなあ……」

何故消息を絶ったかや、誰がいなくなったのか……その一番知りたいたところが記されていないところがなんとも歯がゆい。

(あれ……。ちよつと、待つてよ)

だがここで、シャニーは嫌なことが思い浮かんでしまった。この事業に係わったら、消息を絶つ者がいる……自分たちは今からそこを踏み入れようとしている……。

——何を企んでるか分からんから気をつけな。アイツに自分がどう評価されてるか分かってるだろ？

脳裏をよぎるレイサの言葉。もしかして……。ぶんぶんと首を何度も横に振った。そんな露骨なことをすれば、真っ先に疑われるのは契約の話を持ち込んだイドウヴァだ。

「あああ、見なきゃ良かった！」

もう何だか気味が悪くなって、何枚もページをめくって適当に流す。そもそも何故、イドウヴァはあんな不釣り合いな交換条件を呑んだのだろうか……。半分意識が違ふところへ行きながらペラペラと報告書を何枚かめくったとき、やたら分厚い報告書の束に指が止まった。

「うわっ、すっごい報告書。書くだけで疲れちやいそうだよ」

これだけ紙を使うということはそれだけ大規模な案件だったということ。

一体どんな事業だったのかと覗いてみると鉱山の建設についてのもので、莫大な資材と人員がつき込まれたことが記されている。

表には概要が、裏には実際のモノやカネの動きがあるはず……その時だ、ふいに資料の裏側を見てシャニーの口元が困惑を漏らす。

「あれ……？ 収支報告が無いじゃん、この報告書」

立派に作られた報告書は表だけで、裏にはほとんど何も記されていないなかった。

十八部隊で企画書を作る時だって裏面の必要資金の記載はかなり神経を使うし、部隊長会議でもイドウヴァアが目皿のようにして見るのはこの部分。記載漏れなんて絶対にありえないはずなのに。

何か嫌な予感に引つ張られるようにして、次の報告書の束もひっくり返してみる。

「こっちもだ。この事業、一体どこにお金が支払われたんだろう。この規模なら相当なお金が動いているはずなのに……」

ずっと予算担当だから分かっている。お金を使う案件には、必ず報告がある。本来なら各地からの支援金の使用用途や、事業から獲得した資金の配当先が明記されるはずだ。

(もしかしてこれ関係、全部報告無いの……?)

席を立って資料庫に戻る。ずらりと並んだ資料全てを一人で確認など出来ないが、直感がずつと騒いでいる。部隊の仲間に協力してもらってでも見るべきだろうか……。

「よう、シャニー。珍しいじゃないか、こんなところで」

静かな部屋に突然響く声。別に悪い事をしている訳でもないのにびくつと肩が跳ね上がった。

振り向くとアルマが手を挙げて歩いてくるのが見える。ほつと胸を撫で下ろし、思い出したかのように彼女も手を挙げて白い歯を見せた。

「あつー！ アルマ、ありがとうー！」

謝ろうと思ったのに、先を越されてしまいアルマは言葉に詰まる。

「何がだ？」 苦し紛れに問うてみるがシャニーの嬉々とした顔は変わらない。

「とぼけちゃって。イドウヴァアさんに進言してくれたんでしょ？」

通ったんだよ、あの話ー！」

そんなに提案が通ったことが嬉しかったのだろうか。いや、そんなことは無いはずだ。この朗らかさの裏に隠しているだけ。……そうは思えない満面の笑みで見つめられてアルマは謝るに謝れなくなっ  
てしまった。

(こいつは……本気でこう言っているのだろうか)

親友の笑顔を見ているときさくれ立った心がどこか落ち着くのだが、今回ばかりは罪悪感に直視できなかった。

イドウヴァのあの時の狡猾な微笑みは、いくら自分が入れ知恵をしたとは言え思い出すと虫唾が走るし、その笑みが部隊長会議を使つて大勢の前で親友を辱めていると思うと許せなかった。

それでもなお、シャニーはこんな笑顔を見せてくるのだから心が痛い。

「……お前は悔しくないのか？ 第二部隊に手柄を取られたんだぞ？」

イドウヴァにはああでも言わなければ潰れていた案件かもしれないが、結果は結果。親友が汗をかいて取つて来た手柄を自分が第二部隊に運び込んだようなもの。あの様子だとイドウヴァは自身の部隊の案件として動かすに決まっている。

「そりや……そうかもしれないけど」

それまでの笑みが沈んだ。やはり隠していただけか。そう察してアルマが謝ろうと口を開くより先にシャニーに手を取られ、見せられたのはニコツとした笑顔。

「でも、お母さんたちきつと喜ぶじゃん？ それ見れたらあたしは十分かな」

「……お前は相変わらず純朴だね」

どこまで本心か分からないが、こんな笑顔を見せられたら何も言えなくなつてしまった。彼女への詫びの言葉も、イドウヴァがレネスの為だけにあの案件を飲んだ訳では無い事も。

彼女を慰め、詫びに来たつもりが救われた気分になつていたのは自分。

(だからこそ、お前は私の親友なんだ)

周りが喜んでくれる事が自分の喜びになる。そんな事を笑顔で言う奴が一人くらい居ても悪くない。これ以上悲しませたくない……そんな気持ちにさせてくれる奴が一人くらい居ても……。

ライバルに違いないが、蹴落とそうとは思えない不思議な人間だった。

「で、毎日あちこち飛び回っているお前がどうしてこんなところ？」  
無理やりに話題を変えた。こんな空気の固まった場所にいるのはあまりにも似合わない人間。それが本に囲まれている姿には違和感しかない。おまけにドアが開けっぱなしになっている部屋を一瞥すれば、テーブルの上には元通りにできるのか心配になるほどに資料がぶちまけられていて、何か調べ物をしていることは聞かなくても分かる。

気になるのは、何故シャニーがそんな事をしているのか、だ。おまけに、よりにもよってこの場所だ。

「今度、聖天騎士団の依頼で警備を担当するからさ、事前に情報を仕入れておこうと思って」

何の報告書かと手に取り、タイトルに目をやったと同時にシャニーから答えが返ってきてアルマの顔が曇る。おまけに、ピンポイントに重要書類を引っ張り出してきているではないか。

(偶然なのか？ いや、もしかして、こいつは……)

まさか彼女に先を越されるとは想定外で、アルマの表情が珍しく固まっている。

このままではまずい。早く親友をこの部屋から立ち退かせなければ間違いなくあの人が様子を見に来る。そうなつてからでは彼女を守ってやる術はない。

「あ、そうだ。アルマ知らない？ こころ辺の収支報告って別資料なのかな？」

そんな顔が背後にあると気づいていないのか、シャニーは報告書の真っ白な裏側を指さしてくる。居てもたつてもいられなくなった。こんな決定的な所をあの人に見られでもしたらとんでもない事になる。ただでさえ心証が悪いのだ、これ以上は止めを刺すことになるの

は間違いない。他の人間なら消えてくれて清々するだろうが、親友をそんな目に遭わせるわけにはいかない。

ふいに彼女の肩を掴んで立たせると、びっくりする青い瞳を睨む。

「シャニー、悪い事は言わない。それより先は首を突っ込まないほうがいい」

突然大蛇にでも睨まれたように固まるコバルトブルーの目。いつになく真剣な眼差しは否が応でもシャニーに不安を植え付けた。関係者が消息を絶つという話を見てから聞かされる警告に、じわっと滲む嫌な汗。

「ヤダなあ、そんな怖い顔してどうし——」

「もう一度だけ言うぞ、それ以上詮索するな」

重くてへばりついてくる嫌な空気。それを払おうと笑って見せたその声へ重ねるようにして、アルマは強い言葉と共に親友の肩を揺さぶった。

「今ならまだ引き返せる」

投げつけられた強烈な最終警告。ここまでされてはシャニーも領くしかなかった。

「わ、分かったよ。よく分かんないけど分かったからさ、そんな怖い顔しないでよ」

少しずつ膨らむ恐怖心。仕方なく周りに広げた資料を片付け始めるとアルマも一緒に手伝ってくれた。

一通り片付けが終わるとアルマに誘われ、二人は部屋を出て食堂へ向かった。冷え冷えの書庫でぞつとする話をされたので頭の中は甘くて暖かいもの一色。

「ぶは〜！ うーんっ、仕事の後のホットミルクさいこー！」

温かい飲み物を啜っては幸せそうにするシャニーの横顔をアルマはじつと見つめていた。この顔が、部隊長会議でどれだけ抉られているのかと思うと無性に腹が煮えてくる。

まだ、自分にも人情なんてものが残っていたのかとふっと笑っているとシャニーの声が飛んできた。

「アルマ、何か知ってたら教えてよ」



ホットミルクを片手に、シャニーは取ってきたメモを見返している。やっぱり、最後に尻切れトンボになったあの収支報告が気になって仕方ない。ここまで警告してくるのだから何か知っているだろうとアルマに聞いてみたのだが、彼女は両手を広げるだけ。

「さあな。平隊員には他騎士団のことなんか分かる訳ないだろ?」  
「えー?!」

コーヒーを飲み干すとさっさと行ってしまおう親友。絶対知っているはずの背中。八月に来た時だつてアルマは同じように首を突っ込むなど警告して来たし、あの時確実に彼女は言っていたのだ、上のやる事と。

ツカツカ去っていく背中。焦つてミルクを一気飲みしようとしたが目面白ささせて叫ぶ。舌をへーへーしながらもう一度廊下を見ても、もうアルマの姿はなかった。

「もう、アルマも意地悪なんだからさー」

絶対にあの顔は知っていた。あそこ迄思わせぶりな事をしておいで肝心なところで逃げ出すなんて。今度顔を見かけたら絶対に逃がしてなるものかと、肩を怒らせてズシズシ歩いていると背後から呼ぶ声が聞こえてきた。

「あ、シャニーじゃん。久しぶり!」

駆けてくる音に振り向くと、幼馴染のセラが手を振りながら向かってくるのが見える。彼女は第五部隊と言うかなり上位の部隊に所属していて、同期の中ではアルマ同様に出世頭と思えた一人だ。

「セラ! ほんと、久しぶりだね!」

幼馴染で同じ職場なのに、顔を見たのは二か月ぶりぐらい。シャニーも白い歯を見せながらセラとハイタッチして再会を喜ぶ。その足は出てきたはずの食堂へ逆戻り。

「最近ロイ様とは上手く行ってるの?」

二杯目のホットミルクを手に、セラと雑談を始めていた。ところが、セラが早速聞いて来た話に、ひくつと眉が動く。

「うまく……?」

どんな答えを期待しているのかイマイチ分からない。ロイは遙か

南方リキア地方に住んでいる。ベルン動乱が終わってから一年近く経とうとしているが、あれ以来顔を合わせた事など無かった。

「うん、お手紙はやり取りしてるよ?」

年は一つしか変わらないのに、世界を相手にしている英雄。憧れの人を手紙で支えてあげたい。その気持ちで文通を続けてきた。だが、それだけだ。上手く行くも何も、顔も合わせられないのでは何も無い。

セラはじれったくなつたのか、今度は単刀直入に振った。

「いつかはロイ様のところに行くの?」

「行ける訳無いじゃん。仕事あるんだし、そんなヒマないよ」

即答だった。手で払うようにしてシャニーは無いと笑い飛ばす。一度は会いに行きたいと思つて休暇申請を出したこともあった。だけど、もう今は毎日朝から晩までイリア中を飛び回る日々。仕事が楽しくて仕方なく、非番の日でも暇なら村の様子を見に行くくらいだ。(そりゃ……行けるなら、会いたいけどさ)

何より、無名なただの傭兵騎士がロイの所に行つたつて、一体何が出来ると言うのだろうか。

今更ながらに後悔した。ロイは動乱が終わつた直後、故郷へ遊びに誘つてくれていたのに。あの時一緒に一緒について行つたなら、今頃違う人生を歩んでいたかもしれないと思うと複雑だ。

「いいなあ、最近シャニー忙しそうで」

そんな事を上の空に考えていたら、横からセラのため息が聞こえてきた。

「なんで? セラだつて忙しそうだつたじゃない」

むしろ九月までは逆だつたはずだ。毎日忙しそうにセラを羨ましがっていた側。きよとんとするシャニーをセラはじつと見つめている。彼女の視線はシャニーの纏う士官服に釘付け。

「私は……もうダメかな、あはは」

第二部隊に配属が決まつた時は天にも昇る気持ちだった。だが、第五部隊へ異動が決まつた時点でもう先は決まつたも同然だった。第五部隊……別名『第二の予備』と言われるその部隊は、イドウヴァから失格の烙印を押された者たちが飛ばされる団内の左遷先。一度落

ちたら、相当の功績を上げないと這いあがれない蟻地獄。

彼女は出世頭の手をそつと取ると、耳打ちするように顔を近づけ囁いた。

「シャニー、イドウヴァさんに嫌われないようにね。皆心配してるよ」  
彼女に言われなくとも、他部隊の部隊長からもいつもそう気にかけてもらっていた。

でも、彼女と戦わなければ村々から集めた光を黎の世界に広げる事は出来ない。一体どうしろと言うのか……力なく任務へ戻って行く幼馴染の背中を見つめるシャニーの脳裏にアルマの言葉が響いた。

——それ以上詮索するな。今ならまだ引き返せる

### 第3話 抹殺命令

食堂を出たシャニーは、頭の後ろに手をやってぼうつと天井を見上げながら当てもなく廊下を歩いていった。先ほど釘を刺してきたアルマの言い方が妙に気になる。

(調べろって言ったり、詮索するなって言ったり。もう、みんなどうしろって言うのさ)

アルマは止めろと言ったが、契約主の事はある程度頭に入れておきたい。もう一度書庫に向かおうとした時だ。ふいに赤い髪が視界を横切った気がして走り出す。

「あーっ、見つけたぞアルマ！」

振り返って鼻からため息を抜くアルマの顔には、面倒臭いと心の声がありあり浮かんでいる。それを指差してぷりぷりしながら彼女の許へ寄って行ったシャニーは、何か言いたげに口を尖らせ、アルマの顔をじつと覗き込んだ。

「……何だ、まだ何か用があるのか」

さっさと追い払いたいと言わんばかりの冷たい態度をとられて、ますます目をギンとしてみたが、すぐにシャニーの眉は下がってしまった。

さっさと一人で行ってしまつたから追いかけてみたが、そう言えば何を聞こうとしていたのだろうか。顎に指を添えて唸りだした彼女からは間の抜けた声が零れた。

「うーんと……。無いと思う、たぶん！」

ニコツとしてくる顔に何と浴びせてやればいいだろう。あれだけぷりぷりして寄ってきたのは何だったのかよく分からないが、これ以上彼女をふらふらさせて置きたくなかった。彼女の向いている先には書庫がある。大方、また資料を漁りに行こうとしているに違いなかった。

「仕方ない奴だ。なら、久しぶりに手合わせでもするか？」

「オツケーー！ やろー、やろー！」

彼女と手合わせをするのはいつぶりだろう。まだ十八部隊にいた

頃だから五月くらいが最後だ。あれから実戦を多く積んできたが、シャニーは国内で精々賊討伐くらいしかしていないはずだ。手を挙げてニツとしたシャニーを連れて稽古場へと身を移す。

(腕は錆びついていないようだな)

格の違いを見せて焦らせてやろうと思ったが、やはり腐つても八英雄か。目にバネでも入っているかのような身ごなした。細身の剣と槍が演武の様に鋭く、美しく軌跡を描いて高い音を立てる。

「やっぱアルマ強いね!」

レベルの高い相手との稽古は自然と熱が入る。互いに動きにキレが増して、疾風迅雷の剣とその風を切り裂く苛烈な槍がぶつかり合つて距離が空く。その時だ。あつとシャニーの口が開いて動きが止まった。

(そうだ、ちょうどいいや、聞いちやおつと)

アルマの顔を見かけてからずつと喉に骨が引つかかっていたようになっていた事を思い出した。そう滅多に合えないから、一旦剣を下ろして声を掛けた。

「そー言えばアルマ、副団長になるかもなの?」

明らかに剣には不利な間合い。アルマは返事をする事も無く、シャニーが見せた隙を逃さず突っ込んできた。

(うっ?! この位置じゃ——ツ)

剣を下ろしていたシャニーは仰天して構え直すも、本能が叫んでくる。この距離では直撃を免れないと。左の剣ではどう踏み込んでも右利きの槍の動線に入ってしまう。辛うじて槍を弾くが剣も跳ね飛ばされ、無理な体勢のまま利き腕を掴まれてしまった。

「誰がそんな事を言っていたんだ?」

そこにあつたのは勝ち誇った笑みでは無く、何かぞつとするような睨み上げる眼光。ギリつと腕を握る手が強くなった気がして、シャニーはぞわつと髪が逆立った。このまま槍で突かれてしまいそうなら、アルマの目つきは厳しく切れ上っている。

「え?! い、いや、イドウヴァさんが団長になったら右腕のアルマがそうなるのかなってさ、アハハ……」

ウツデイが持ってきた噂だなんて言ったら、彼が何をされるか分かったものではない。とつさに誤魔化すと、アルマはようやく腕を放して槍を下す。

(ヤツバー……。何か分からないけど、聞いちゃダメな事だったみたい……)

別にただの噂話なのに、何故そんなに怒るのかは全く分からない。とにかくこれ以上触れるのは止めようと思った矢先だった。ふっとアルマの顔に笑みが浮かぶのが見える。

「もしなれば、お前の事も自在に出来るわけだ」

副団長まで行けば人事権もある程度掌握できる。部隊長クラスの幹部だって自由に動かせるようになるのだ。もし副団長になったら真つ先にこの十八部隊長を第一部隊に呼ぶだろう。生殺与奪の権を握られる……。そんな風には全く考えていない瞳がキラキラ輝きだした。

「えー！ お給金上げてくれるの?!」

脅したつもりだったのだが、シャニーは手を結んで歓喜を上げていく。どうしたらここまでポジティブな方向に物事を捉えられるのか、呆れを通り越して羨ましくなってくる。思わずため息をついた。

「第一部隊に来ればな」

「えー、じゃあいいや」

即答だった。ぶーつと頬を膨らせて意地悪とでも言いたげな目を向けてくる。アルマはそれをじっと見つめていた。仕草はふざけていても、言葉は本心に違いない。入団当時はあんなに第一部隊への配属を熱望していたというのに。半年の間に、まるで見つめる向きが正反対になってしまつて残念でならなかった。

「何故だ。お前ほどの腕を持った天馬騎士ならどの契約主でも欲しが  
るぞ」

馬術の実技は騎士団でぶっちぎりのトップ。槍の扱いはもちろん、本気になった彼女の剣は、左右や地の利を合わせなければ先程の様に  
そう簡単には弾けない。おまけに上級天馬騎士の称号持ちと来れば、  
傭兵として最上の商品のはず。今頃傭兵ランクだつて頂点に近い所

に居てもおかしくないのに、実際の彼女の戦績は未だ勝ち無しだ。

「あたしはこの仕事に性に合ってるから、今のままがいいよ」

そんな事はまるで頭がないと、手で払って笑う顔に書いてある。確かに居心地はそんなに悪くないのだろう。もっとイドウヴァ派の部隊長たちが餌に食いつくかと思っただが、実際突っついてるのは第五のマリツサぐらいだ。どの部隊長も彼女の事を聞くと、すぐあれこれ語りだすからよっぽどインパクトがあったに違いない。

「あつー！」

尚更に勿体ない……そうアルマが残念がっていると、ポンと手を叩く音と共に高い声が聞こえてきた。シャニーに視線を移すと、剣を拾いながら指先を向けてくる。

「副団長になったら、食堂をオシヤレに改装してよ！ コレ、十八部隊の総意だから！」

何を言い出すかと思えば。シャニーの目は本気だ。やはり、彼女とは住んでいる世界が別れてしまったのだろうか。こんな人間を権力で脅そうと思う事自体が何かズレている気がしてきた。

「……果てしなく純朴だね、お前はさ」

それしか掛ける言葉が見当たらず、アルマはため息をついてその場を去った。適任なのかもしれない。希薄となった民との懸け橋となる部隊の長と言うならば。どうしたら彼女の剣を本気に出来るのだろうか。

「本気なんだからねー！」

そんな事を親友が考えているなど欠片も思っていないシャニーは、握った手を頭上に掲げてアルマの背中に叫ぶ。さっぱり振り向いてくれず、仕方なく下した手に握っていた剣をふと見降ろした。

「あの間合い……対策しておかないとなあ」

苦手だった。右利きが扱う槍の軌道が。左の剣は存在が希少と言うだけで有利な部分もあるが、やり辛い事も多い。ただでさえ、槍相手に剣では圧倒的に不利だ。右の槍相手には霞も、脇構えも苦しい。槍使い相手にわざわざ天馬から降りて剣で戦う機会など無いだろうが、やっぱり直面してしまうと気になる。

「ルシヤナに付き合ってもらおうと」

もう書庫の事などすっかり頭から吹き飛んで、彼女は小走りに詰所へと戻って行った。



事務棟へ近づいてくる落ち着いた足取り。今日はやたらと来訪する騎士が多い。事務方は不思議そうに眺めていたが、足音の正体を知るや否やスクッと背筋を立てて会釈する。特段相手が返してきたことは無いが、背中から溢れる、そうしなければならぬ雰囲気。

受付は顔パスだ。鍵をサッと受け取ると変わらない足取りで倉庫へと向かう。キャビネットの扉を開け、中へ伸ばしたイドウヴァの手がピタッと止まった。

「……ん?!」

明らかにおかしい。こんな並べ方はしないはずだ。まして、上下逆にして棚に置くなど。先ほど迄の足取りとはまるで違う踏み碎くような音を立て、受付に戻る眼は血走り見開かれている。

「ちよつとあなた、この棚の資料を見に来た人間の履歴を見せなさい」副団長が机にかじりつくように覗き込んできて、ヒステリカルな凄まじい剣幕が迫る。言葉は喉に詰まり、何度も頷いた事務員は閲覧者を記録している帳簿を掴むとイドウヴァに差し出した。

ぱつと音を立てて開き、最終ページを指す眼は焦りに満ち、ページをめくるほどに震えが止まらなくなっていく。

「……あの小娘っ」

犯人を見つけた途端に憤りが迸った。よりもよつてあの青髪だとは想定外だ。

「こうも手が早いとは。レイサかつ」

あの娘にここまで頭が回るとは思えない。まだ十五で本来なら部隊の一番下っ端にいるはずの人間だ。

すぐさま浮かぶアサシンの顔。役職から外れてますます行動が見えなくなった、あの不敵な横顔を思い浮かべるだけで腹が焦燥に沸き上がる。



一体何を見たと言うのか——焦って書庫に戻る足を聞き慣れた声  
が引き留めた。

「あいつには釘を刺しておきましたから、これ以上は詮索しないと思  
います」

振り向いた先にいたアルマの言葉に、差していた朱がふつと和らい  
でいく。先に来て仕事を進めておくように指示しておいて正解だ。

「さすがアルマですね。助かりました」

柔らかな笑みを浮かべて部下の好守を称えたのもつかの間、本棚に  
向けられる鋭い眼光。

「ちよつと今晚、あなたも一緒に来なさい」

今日はエデツサで定例会がある。ここまで荒らされては黙ってい  
る訳には行くまい。ツカツカと受付に戻っていく背中へ静かに頭を  
下げてアルマは様子をうかがう。

「この棚の資料は全て地下書庫へ移動させておいてください」

受付の事務員にこちらを指さして指示している声はつきり聞こ  
えてきた。

地下書庫は騎士団の中でもトップレベルの機密が集まる場所。第  
一、第二の上位部隊の部隊長以上しか入ることが出来ない。もう二度  
と目の目を見ることは無いだろう。

「……古狐め」

こうなってしまうっては親友を庇うことはできない。一步遅かった。  
部屋を出ていく背中に精一杯の罵声を浴びせ、アルマも部屋を出て  
いった。



エデツサ城下町は吹雪の中でも明かりが灯って普段通りの活気が  
広がる。移動の妨げになる吹雪だが、慣れてしまえばこれほど便利な  
ものもない。これ以上のものがあるだろうか。視界を遮り、声をかき  
消すそれは最強の防護壁。

「フェリーズ伯爵。明日からの件、よろしく願います」

イドウヴァが頭を下げる先には、柔和な笑みを浮かべる立派な口ひ

げを持った金髪の男性がいた。白い法衣に身を包み、清楚に整えられた髪や髭から醸し出される余裕。二重の眼差しはとても優しく、これぞ高僧と言えるような佇まい。

「いえいえ、こちらこそ兵を派遣いただいて大変助かりますよ。あなた方に聖女エリミーヌの加護があらんことを」

いつまでも頭を下げる彼女に顔をあげさせ、静かに十字を結んで祈りを捧げる。何かこの空間には似つかわしくない穏やかさ。

「少し小耳に入れておかねばならない話がありました」

彼とは対照的にイドウヴァは焦りがありありと顔に出ていて、祈りが終わりもしないうちに次の話題を始めようとしている。

「どうやら今回派遣する部隊がこの件を嗅ぎ回っているようで」

もつと驚くかと思つたし非難を受ける覚悟は持つてきたのに、首を傾げるフェリーズの反応に戸惑う。

何の事だか——フェリーズの顔に浮かぶ困惑。それに付き合うことなく、イドウヴァの視線はフェリーズからかなり離れて座っているソルバーンに向いた。

「で、『赫竜』、貴殿にこの娘を消してもらいたいです。警備中の事故という形でフェリーズ様にも処理していただきたく」

喰つて良いと言われて黙っている男ではない。それまでの気だるい顔が嘘のように目へ力が籠り、イドウヴァが手渡してきた写真を奪うようにして手に取る。眼を落した途端だ。ギラついていたサングラスの奥が不機嫌そうに歪む。たいそうな前振りの割に、選りにも選つてコイツとは。

「これはこれは……物騒なお話ですね」

雲行きは思わしくない。フェリーズが身震いして見せているではないか。

「まるで我々が悪しき組織のようではありませんか。これは心外ですね」

事故の多い開拓現場。そこで少しくらい違和感のある事故が起きたとて揉消しようはいくらもある。そう考えたのが甘かったか。

「我々は民を救済する立場ですよ？」

柔らかな笑みを浮かべてはいても、フェリーズの声には重い怒りが滲む。彼も嗅ぎ回られるのは困るはずだが、随分と余裕なものだ。とにかく、彼を敵に回しては元も子もなく、こうなっては撤回するしかない。

「わりい、他をあたってくれ。気が乗らねえ」

おまけに、こちらは堅いと踏んでいたソルバーンまで写真を放つて来た。あれだけ興味津々で喰らう気満々だったはずが、既に元の気だるそうな目つきに戻っている。

「気が乗らないとはどういうことですか?」

「青くて渋いと分かってる実をわざわざ喰う趣味はねえってこった」

この前ちよつとかじってどういう味がするかはもう知っている。持つていても気づかない状態では何度やっても結果は同じだ。

いつ喰つてもいいなら、喰い頃を待つのは当然。椅子に体を預けて天井を見上げる視線が戻ってくることは無かった。

「イドウヴァ様、ご心配召されるな。我々は聖女の光をイリアにもたらすため動いている。そうですね?」

諭すような口調は先ほどの怒りを含んだものとは別人のようだ。穏やかだがむしろ彼の言葉に迫られているようにさえ感じる。「ええ……」何も言わないままには出来なくするオーラ。じつと見つめていたフェリーズの顔に再び浮かぶ司祭の微笑み。

「我々は、聖女の光でこの大イリアの地を平定するべく、未来のために身を捧げているのですよ。それとも、あなたは違うのですか?」

本物の狂気を見た気がした。一体どれだけの犠牲が今まで出てくるか知らないはずがない。それを、聖女の光で全て片付けてきた。

己の目的の為なら犠牲など厭わぬ聖女の教えそのものか……人間が作ったどんなルールにも優先されて来た聖女の御言葉。イリアの為——この男は心の底からこの言葉を口にしてている。

「もし貴女が思うような人間ならきつと舞台上に上がります。自ら断罪の場に身を捧げる時を待ちましょう」

イドウヴァが見せた写真の乙女の事など何も分からないのに、どう対処もできるはずが無かった。

断罪とは、裁かれるべき悪が居て初めて行うもの。舞台袖に居る無害なる者へ行えばただの虐殺に過ぎない。そんな聖女の教えに反する事をどうして出来ようか。

「しかし、被害が出てからでは遅いのでは」

どれだけ聖天騎士団の影響力が強くても、外堀を埋められてはイリア最大規模の騎士団を有するゼロットに太刀打ちできない。芽は小さきうちに摘み取るに限る。

「その時は、我らも筆頭騎士ヴァルプルギスを出撃させますから、ご安心を」

フェリーズがずっと表情を変えない理由はコレか。それまで焦った表情が解けなかったイドウヴァにようやく浮かぶ安堵。

いくら剣に自信を持っていたとしてもあの騎士に勝てるはずがない。自分とて考えたくもない。あの『魔女』と槍を交えるなど。

「ヴァルプルギスカ……そいつは楽しみだな」

ニツと釣る口元。せっかくの興味に渋い実を与えられてがっかりしていたが、それ以上の獲物が見つかった。あの女が出てくる場面などそうそうお目にかかれるものではない。

その為なら、青い実でも使い道があるか————写真をテーブルから拾ったソルバーンの視線が、サングラス越しにシャニーを突き刺していた。

## 第4話 白き聖者と黒鉄の魔女

翌日、シャニー率いる十八部隊は陽も登る前から西の空を目指して翔けていた。朝一に聖天騎士団の本拠地——ラインヴァイス城に着しなくてはならない。

シュテティアホルン連峰を北上し、エトルリアとの国境レーミーに近い場所まで三時間。どの馬上からもあくびが聞こえてくる。

「どーしたのさ、みんな元気ないぞ！」

振り向いて仲間たちに声をかけるシャニーは、この時間でももうエンジン全開らしい。黎あおくろい空に流れ星でも翔けるかのような爽やかさは、ついて行くほうが大変だ。

「あんたみたいに元気なのがおかしいんだって」

普段厳しいルシヤナでさえ眠気には勝てず、あくびをしながらリーダーのキジが叫ぶような声にジト目を送る。時計に目を落としてランプで照らしてみればまだ四時だ。

「そーかなあ。ふつーだよ、ふつー」

—— 出た！

ルシヤナ達は顔を引きつらせながら互いに見合わせて口をへの字に曲げだした。シャニーのふつーに付き合ったら命がいくつあっても足りない。

「まったく！ 仕事だぞ！ 気合が——……」

誰も返事をしてくれなくて、仕方なく前を向いたシャニーから腑抜けた声が漏れた。背後から仲間の視線が突き刺さって背中が丸まる。しばらく無言に闇夜を飛び、黎明の空へ光が溶け込んできた頃、ついにレンが始まりを告げた。

「リーダー、目的地付近。一時の方向にラインヴァイス城」

「よーし、一旦降りよ。あの川の付近とか良いんじゃないかな」

普段の空気もここまで。近くの小川で手を拭って気合を入れ、向かうは朝陽が映える真白の城。



案内された部屋は絢爛で、これでもかと敷き詰められる煌びやかな

色が視覚を刺激する。石レンガで覆われたカルラエ城の灰色に慣れ親しんでいると足元が落ち着かない。相手が来たらどうやって挨拶しようか……。座っていられずウロウロ。

ついにノックする音が聞こえ、誰もが槍でも突っ込まれたかのように背筋が伸びる。

「ようこそお出でくださいました。協力感謝いたします。私が筆頭司祭フェリーズです」

部屋を訪れた金髪の男女。清潔なアップバングで七三に整え、口髭が立派な男性がすつと手を差し出してきた。深みのある微笑みに吸い込まれるようにして握手し、シャニーも部隊を代表して頭を下げる。

「お招きいただき光栄です。天馬騎士団 第十八部隊 部隊長のシャニーです。よろしくお願いします」

リーダーの普段見ない姿を仲間達は呆然と見つめていた。士官服に鎧とマントも羽織った外装が描く凛としたシルエット。フェリーズが着こむ煌びやかな法衣を前にしても負けておらず、立振る舞いも慣れたもの。これが動乱で各国の主要人物を見てきた経験か。いつもは茶化す相手だが、今はちゃんと部隊長に見える。

「詳細についてはヴァルプルギスより説明させますので、私はこれにて失礼させていただきます」

軽い顔合わせを済ませると、フェリーズは静かな足取りで部屋を出ていった。厳かで優しそうな司祭。調べた情報やアルマの警告から、どんな恐ろしい人が出てくるかと思っていたシャニーはほつとしていた。

(これがイドウヴァの言っていた要注意人物ですか?)

部屋を出たフェリーズは、ドアの向こうにいる若い部隊長を睥睨していた。

穏やかでも隼を内に飼う様な眼。映す機敏さは、確かに剣を見ずとも天賦の才を感じさせる。年の割に凛としているあたりはさすが『英雄』か。

だが、彼女が言うような雰囲気はまる感じない。多少やんちゃさが

見え隠れするが、あの眼なら今回の仕事で存分に活躍してくれるだろう。小心者の杞憂——いつもの柔和な笑みが戻り、彼は城の奥へと消えていった。

「私は聖天騎士団 筆頭騎士、ヴァルプルギスと申す者。以後、お見知り置きを」

一方部屋の中では、フェリーズに場を任された騎士団のナンバー2、筆頭騎士ヴァルプルギスとシャニーが握手を交わしていた。清楚なブレイズを腰まで垂らす、黒き鋼鉄の女性。

(この人が……イリア最強の——『魔女』……)

全てを見切っているかのような余裕を浮かべる紫紺の眼差しに鳥肌が立つ。戦っているわけでもないのに滲んでくる汗。先ほどの司祭とはまるで違う威圧感。重厚な鎧の軋む音だけでも喉が詰まる。全く隙が無い井手立ちは剣を交えなくとも分かる——とんでもない実力者だと。

事前に仕入れてきた情報以上のものを感じ取った第六感が、ゾクゾクと警告を発してくる。

「貴女らには、現在開拓を進めている最前線基地の警備を担当していただく」

部隊の者たちを円卓に案内したヴァルプルギスは、持ってきた地図を広げて中に書き込んでいく。深い氷のような、静かで聡明な声による手馴れた説明。これだけでも、この騎士の威厳が伝わってきて自然と背筋が伸びる。外部の者と仕事をしている緊張が初陣の十八部隊を引き締める。

「分かりました。警備とは、どこまでを守備範囲として考えれば良いでしょうか?」

頭が真っ白になって何も質問が浮かんでこない。何もかも初めてで固まるミリア達の隣から聞こえてきた緊張を払う声。振り向くとシャニーが守備範囲の外縁をペンでなぞりながらヴァルプルギスと会話していた。士官服を着こむ友がちゃんと部隊長に見える。

最初にすっかり決めておかないと後で責任問題になるので当然の確認なのだが、ここでも先陣を切る憧れの横顔がなんだか嬉しかった

た。

「賊の討伐、そして作業者の脱走も取締っていたらいい」

「作業者の脱走？」

示された内容に一瞬戸惑った。何だか囚人兵を取り扱うような言い方だ。聖天騎士団管轄領の住民たちと聞いていたのに、何故脱走する者が居るのだろうか。

「ああ。我ら騎士団の管轄領の者なのでな」

それだけの返答で取り付く島もない。指示された通りに動くのが傭兵。これ以上は聞いても仕方ないが、直後にヴァルプルギスが念を押すように付け加えた指示は、心の中で更にシャニーの首を傾げさせる。

「ただし、先ほど申しした通り聖天騎士団配下の者達だ。取調は我々に任せ、捕縛までをお願いしたい」

「もちろんです。むやみに武器を取ったりはしないように努めます」

ただの考えすぎか。でも、何も喋るなども取れる。どうにも先行して仕入れてきた情報のせいで、良くない事ばかりを考えてしまう。

あくまで何も知らない。そう自身に言い聞かせ、部屋を出ていく筆頭騎士の背中を見送った。



打ち合わせを終え、部屋へと案内された。二週間滞在する事になる場所。暖さえ取れば十分……そう思っていたが、通された部屋に入って目が真ん丸になる。

(ひゃくッ 何ココ！ 部屋を間違えたのかな?)

傭兵を滞在させるにはあまりに豪華な部屋。広々として明るく高い天井。ベッドはちゃんと五つあるし、ソファにテーブルセット……調度品まで飾られていて、さながら高級ホテルだ。これが聖天騎士団の力だというのか。

部屋が閉ざされると、漏れ出す疲労感に誰もが座り込む。対外任務としては初陣となる彼女達には、いきなりあの厳格な騎士は重すぎた。



「……って事だから、賊はともかく聖天騎士団の人には自衛以外で武器を使わないでね」

休んでなどいられないからすぐに作戦を確認するが、咀嚼しようもない完ぺきな説明だったのでオウム返ししかすることがない。

筆頭騎士やら、『魔女』やら、カツコいい肩書を持っている騎士は違うと舌を巻く。

「シャニーかつこよかったツス！ よつ、さすが部隊長」

「本当?! へへへ……ありがと!」

それでも、必要な情報を聞き出したのはリーダーだ。あの横顔を思い出したミリアが囁し立て、満面の笑みで返すシャニーの顔は先程とはまるで別人。オンオフがはつきりしているとさえ聞こえはいいが、緊張する初陣のはずが、どうにも暢気な二人にルシヤナ達は呆れ顔。

「ま、守備範囲を聞いてくれた事はファインプレーだったね」

「見習いの時に、師匠やお姉ちゃんから耳にタコが出来るくらい言われてたからね」

地形を無視して飛んでいける天馬騎士は越権行為に抵触する危険性が高い。ましてどこでも一人で飛んで行ってしまいうシャニーは、二人から顔を見れば言われていたくらいで、口調まで真似して言える自信があった。

「まさか脱走者の確保まで指示されるなんて、あたしも思ってなかったけどねー」

賊討伐くらいしか頭になかったから、何も聞いていなければ後で追及されるところ。とは言え、領内の開拓でそんな話が出ることで自体が違和感のある話。

一つ前哨戦を終え、大きく息を吐き出しながらマントを外してスタンドにかけるシャニーへ、ルシヤナは暇つぶしがてら声をかけた。

「何か妙な話だね。なんで脱走なんかするのさ」

「それはあたしも引っかけたんだよね」

伸びをしながらの返事は間が抜けているが、隣に座った彼女はあの時を思い出すように天井を見上げだす。

「だけど、詮索するなって空気って言うか、あのヴァルプルギスって人  
すんごい威圧感でさ。はあああ——」

大きく息を吐き出しながら潰れた風船のように机へ頬がくっつく。  
味わった事の無い緊張感だった。常に真正面で向き合って圧倒され  
ないようにするだけで精一杯。

「ああ、あんたでも一応ビビってたんだ」

「あんたでもって……なんか、すんごいバカにされてるよーな」

「いやいや、八英雄だし余裕なのかなと思っただけよ」

平然と筆頭騎士とやりとりする姿を意外に凄いと思ったルシャナ  
だったが、目の前で早くも生気の抜けた顔を晒す様子に、やっぱり  
シャニーはシャニーだったと安堵と呆れが入り混じる。

「ヴァルプルギス……神殿騎士、主戦武器剣。『魔女』の異名を持つ聖  
天騎士団最強と謳われる騎士」

背後からレンの起伏のない声が聞こえてくる。確かに最強かもし  
れない。雰囲気だけでこれだけ疲労するほどの眼光。あんな隙のな  
い騎士と斬り結ぶなんて考えたくない。

この前の黒の紳士も恐ろしい井手立ちだったが、あの全身鋼鉄の女  
性騎士も放つ気はまるで鬼神の様。味方で良かったとシャニーは内  
心胸を撫で下ろしていた。

「いやあレンのデータベースの更新はや」

「事前に相手の情報を取るのには普通だと思う。ミリア、何もしてない  
の？」

メモにびっしり書き込まれた聖天騎士団の情報を覗き込んで感嘆  
を上げるミリアをじっとレンが見つめる。無言で始まったいつもの  
追及。

シャニーも内心どきつとして身を起こす。レイサに言われていな  
ければ今頃ミリアと一緒にレンの視線に串刺しにされているところ  
だ。

「ま、私たちの任務はあくまで警備だし、逃走者の処理は相手さんが  
やってくれるんだから気にする必要ないでしょ」

「そうそうー」

思わずルシヤナに同意して声をあげたら、周りの視線が集まってしまった。平素を装ってまた頬を机につけるが、背後から銀の瞳がじつとこちらを見つめているのが伝わってきて全然休憩など出来なかった。



一時間後に開拓地へ出撃した十八部隊は作戦通りに空中で別れていく。四人で東西南北一名ずつ分かれて空からの哨戒が主な任務。ミアアやレンを一人にするのは心配なので、シャニーとルシヤナはやや広めに行動範囲を取ることになっていた。

「あれ、あんた槍使えたの?」

別れ際、シャニーの手に握られていたものを見つけてさも意外そうにルシヤナは指をさす。彼女が手にしていたのは投槍。

「使えたのって……あたし天馬騎士だよ?!」

「あ、そうだったね。てつきり槍は使えないもんかと思ってたよ」

天馬に乗っているときはいつも槍を使っているはずなのに。主戦は剣でも「槍も使えたのか」はあんまりだ。哨戒任務なのだから空中から威嚇攻撃できる投槍は普通の選択だし、ルシヤナだって同じものを持っているのに。

「これも冗談だよ。緊張ほぐれた? あんたが槍持ってるってこんなて久しぶりでさ」

本当に冗談なのか。笑いながら北の空へ消えていく幼馴染の背に、もの言いたげに視線を送る。

(あたしって、そんなに天馬に乗ってなかったっけ……?)

確かに十八部隊として天馬に乗ったまま戦場を駆けるのはいつぶりだろう。集団での戦闘時はレイサと地上戦ばかり。久しぶりなのだと気を引き締めて天馬を飛ばす。目指すは開拓の最前線、東の空。「へえ……こんな風の開拓って進んでたんだなあ」

上空から開拓地を見渡しては感嘆を漏らし、額に手で庇を作って遠くを臨む姿はまるで観光者。世界規模の戦争を駆け抜けた記憶からすれば精神的に楽な任務だ。ずっと気になってきた境界線の向こう

側に居ると思うと、自然と視界が広がる。

切り拓かれた森のあちこちに物資が積まれ、たくさんの人たちの姿が見える。遠くには鉱山と思いき削られた山も聳えており、事業の広さを物語る。この広さを警備するとなれば、天馬騎士が呼ばれるのも道理か——忘れようとしていた事がふと脳裏をよぎった。

「——やっぱり、この規模で動いているのに収支報告が無いのはおかしくない？」

誰に問うでもなく漏れる疑念。アルマに首を突っ込むなど念押しされた以上、もう調べるつもりは無いが、違和感ばかりが湧き上がる。少なくともあの鉱山で産出されたもの全てを、聖天騎士団内で消費しているとはとても思えない。じゃあ一体どこへ……その時だ。眼下から響く怒声にはつと我に返った。

「あ……あれ……」

天馬を止めて見下ろすと、見えてきたのは中央区から外れて走る人の姿。彼の駆ける先には、開拓地の終わりを示す鉄条網が張り巡らされている。

居るはずが無いと思っていたものに遭遇してしまい、上空からありったけ叫ぶ。

「逃走者です！ 応援を!!」

高い声は極寒の大地に良く響き、遠くから聖天騎士団の騎士たちが馬で駆けつけて来るのが見えてきた。彼女もすぐさま槍を握り直すと天馬を駆って風を切る。

あつという間に上空から迫る白い騎士。慌てた逃走者がよろけながら更に強く雪原を踏み込む——背後から風を切る音が突き抜け、大地に稲妻の如く刺さった槍が行く手を阻んだ。バランスを崩した男は雪原を滑って雪煙が上がっている。

「待ちなさいー!」

それでも逃げようとする男の前に立ちはだかるように、天馬から飛び降り剣を抜く。

「退け!!」

背後から騎兵が迫っている事に気づいた男は、持っていた作業用と

思しき小型の斧を振り上げ渾身の形相で襲い掛かった。

切れ上る眈、空を切る斧。眼についた天性のバネで一步退いたシャニーは振り切られた斧へ一閃して弾き飛ばし、もう切先を男の鼻へ向けていた。

男の背後には馬から降りてきた騎士たちが歩いてくる。こうなつては男も何もできまい。自分の任務はここまで——そう思っていたシャニーは、次に彼らが取った行動に目を見開いた。

「おらっ、大人しくしろー！」

響く鞭打ちの音。目の前で始まった断罪に思わず口元を覆う。まるで奴隷にするかのような仕打ち。

ヴァルプルギスは確かに言っていたはずだ。聖天騎士団の管轄領民だと。絶句している間に男は騎士たちに連行されていった。

「こんな……事って……」

静寂に包まれる雪原でひとり剣を鞘に納め、地面に突き刺さった投槍を引き抜く表情はやるせなさに凍り付いていた。まだ初日。こんなのが二週間続くと思うと胸が塞がる。

その後も何人も逃走者は現れた。その都度、隼が獲物を狙うように捕らえていく。そこまでは仕事だからと割り切った。でも、鞭打ちにする光景を見せられて顔は歪み、もう直視していられず目を背ける。連行されていく作業者をよく見れば、着ている服はボロボロだ。

(何なの……ここ?! ——まるで強制労働所じゃない!)

ベルン動乱時の嫌な思い出が蘇る。似たような光景があった——西方三島だ。エトルリアから派遣された官吏たちが、鉱山で強制労働を強行して私腹を肥やしていた事件。

あれはロイが壊滅させてくれた。だが、傭兵の自分にはそんな事は出来ない。むしろ……彼らに言われるまま片棒を担ぐ側だ。

(ロイ様ならこんな事……絶対許さない——ツ)

それでも、心は正直だった。見習いの時に憧れた横顔。まるで立場は違っても、一度胸に刻んだ正義は簡単には曲がらない。もうどうにも辛抱ならなくなって、鞭打ちの音を引裂くように駆け出した。

「あ、あのー！」

こんなに脱走者がいるのは異常だ。何より、こんな惨い光景を黙って見ているなんて、ぐらぐらする気持ちをこれ以上抑えられなかった。

作業を邪魔するように突っ込んできた若い声へ、騎士達は逃走者に向けていた目つきそのままを向ける。

「なんだ？」

一斉に突き刺さった敵意に身がすくみかけるが、腹へぐつと力を込めた。

「ヴァルプルギス様からは慈悲深い対処をと、お聞きしているのですが」

「だからどうした？」

これでもかなり気を遣って止めたつもりだったが、高圧的な態度しか返ってこない。

「お前たちは傭兵だろう。現場にいる俺たちの言う事を聞いていれば良い」

これを言われてしまうと、もう何も言えなかった。契約で縛られた身。どれだけ胸中に修羅が疼こうとも、手を出してしまえば何もかもお終いなのだ。

（傭兵のあたしでは……。ごめんなさい）

詫びるしか出来ない顔は力なくうな垂れて、潤みだす目に唇を噛んで律する事で精一杯。やはり、ロイの様には出来ないのか――。皮肉にも、成果を上げる度に彼女の顔からは表情が消えていった。

## 第5話 譲れぬ誓い（前編）

「はあ……エミリー又様。本当にこれが貴女の聖堂騎士団なんですか？」

憂鬱な朝が始まって、空の上でシャニーはらしくも無くぼやいていた。

活気あふれる作業場の声や、木を切り倒す斧の音ならいくらでも聞いていられるが、傭兵が聞く事を許されているのは鞭打ちの音だけだ。

（まだ契約、始まったばっかなんだよね。胸が痛いなあ……）

聞きたくない音を自分で探さないといけないなんて心が重い。契約期間は二週間。まだこんな日々が十何日も続くと思うと、思わず天馬にまたがったまま天空を仰いだ。

その姿は三日経っても変わらない。成果が無く叱られても良い。脱走者が視界に入らないように祈りだしていたが、天邪鬼なもので青き隼の眼は次々異常を知らせてくれる。

「サボるな小僧!!」

昨日からもう耳を塞ぎ、目も瞑って視線を切るようになっていた。今日捕まったのはまだ子供。自分とおそらく三、四つしか違わない。子供までこんな労働をさせているなんてやはりおかしい。あの筆頭騎士が言っていた事と、現場のありようは別世界だ。もしや——  
——現場の暴走か？

（こんな子に鞭打ちなんてしないよ……ね——ツ?!）

そんなわずかな希望さえも打ち砕く鞭の音。自分が打たれているかのように、頭がどうにかなくなってしまいたいそうだ。

初日に釘を刺された。傭兵なら言われた通りにしろ——でも、もう抑えようとしても抑えきれなくなった。手にした投槍をぎゅつと握りしめ、飛び出した足はそのまま鞭の軌道に入る。

「待ってください！ さすがに見ていただけません」

突然視界に槍が入ってきて鞭が絡みつく。騎士たちは目を見張り、槍の根元へと視線をやった。そこに居たのはまだ若い天馬騎士で、途

端に目じりが吊り上がった。

待て——血の気の多い部下が弓を向けようとするのを止める手。リーダーと思しき金髪長身の騎士が、視界に入った青き花を不敵な笑みで見下ろしていた。視線がかち合った途端、シャニーの柳眉が吊り上がる。

「子供にまで鞭打ちなんて。領民ではないのですか?!」

人々をこんな迄して働かせるなんて、完全に人道から外れている。領民なら言わずもがな、仮に奴隷だとしたって、イリア最大の騎士連盟——イリア連合の中で扱いは取り決めがなされているはず。目の前で起きているのは明確な掟の無視だ。

「なんだ、反抗するのかわ？」

ところが、騎士はシャニーに向けて騎士剣を突き付けてきた。鞭が槍に絡まっている彼女には為す術なく、首に鋒が触れる。

可愛い顔をしながら凜と睨むように見つめてくる表情は騎士の支配欲を刺激した。見下すようなとろんとした目が嘲笑を浴びせてくる。

「傭兵の分際で。——契約、心得ているだろうか？」

——所詮、契約が全ての操り人形

あまりにも強すぎるカードを切られて思わず歪む口元。騎士の後ろで不安げな眼差しを送ってくる子供と視線が合っても、何よりも強い拘束を前に何もしてあげられない。契約違反ギリギリのグレーに踏み込んでいる自覚はある。しばらく、首筋に剣を当てられたまま騎士と少年を青い瞳が行き来する。

(ごめん……)

目の前の子供一人、自分の剣は救えないのか——無力な自分と受け入れがたい現実を前に、シャニーは思い切り目を瞑って視線を切った。その仕草が騎士の男には堪らなかつた。

「良い心がけだな」

騎士の鼻から抜いた笑い声にはありあり嘲りが含まれていた。まじまじと舐めるように見下ろす。こんなに若いのに士官服を着こむとは随分と優秀なようだ。だが、こうしてオイタをしでかすとは、ま



だまだ世間を知らないらしい。

「サービスだ、教えておいてやる」

剣を収めた騎士は距離を詰め、彼女の頬に指を通しながら耳元で囁く。

「こいつらはエトルリアから連れてきた罪人だ。領民では無いから安心しろ」

何を安心しろと言うのか。キツと睨み上げると、騎士は嬉しそうに笑い返してきた。彼にとってはこの反抗的な顔が堪らなかった。頭の方からつま先まで見下ろして、その笑みはますます顔へ広がっていく。イリア人特有の小顔にサファイアの如き明眸が輝き、弓の様に細くしなやかな髭。天馬騎士らしい容姿端麗な姿は征服欲を掻き立てた。

「なんだ、そいつを助けたいのか？」

睨んでくる瞳が震えたのがありあり伝わってくる。

「なら、お前も少し世の中を勉強するか？」

ぞわつと背筋に寒気が走って、シャニーは脳天から槍が突き刺さったように一瞬固まった。その騎士は躊躇いも無くサイドスリットに手を伸ばしてきたのだ。

「止めてください!!」

反射的に跳ね除け、思わず剣に手がかかる。

——抜いてみる

騎士の目がそう言うってくる。ギリつと奥歯を噛みこみ、睨み付けて拒絶を示すまでしか出来なかった。

「なんだ。そいつも助けられるし、初心なお前も勉強できて一石二鳥だろう」

こんな屈辱を受けたのは初めてで、頭は怒りとパニックで吹き飛んでしまいそうだ。ロイの軍にいた時はこんな事、一度だって無かったのに。これが本当に聖女エミリーヌと通じる騎士団とは信じられなかった。

「ああ……それは契約には無かったか。ははは！」

相変わず侮蔑を吐き捨ててくる騎士から視線を外しても、そちら

には先ほどの少年が映る。彼は不安げな眼差しをこちらに向けている。助けてくれと嘆く目が胸に突き刺さり、心は正義を叫んでいる。それを阻む、契約と言う強大な壁。傭兵には決して突き破れない、破ってはならない壁。

(あたし……一体どうすれば良いの——ツ?!)

鞭打ちされて連行されていく間、ずっとシャニーを見つめてきた少年の目。脳裏に焼き付いて離れず、その後も続く二目も見られない光景を浴び続けた彼女の顔はどんどん陰相を増していった。



その夜は吹雪となった。ルシヤナやミリア、そしてレンの三人が集まって心配そうに窓辺を見つめていた。

今もさつきと変わらない姿勢のシャニーが座っている。両肘をテーブルに突いて、組んだ手先をじっと見つめて動かない。頷きあった三人は彼女の許へ歩いていき、ルシヤナが大きく息を吸い込んで声をかけた。

「お疲れ、シャニー」

「——ッ」

ビクツと肩が跳ね上がった。いつの間にか考えに耽ってしまったのだらう。仲間の声にさえ驚くなんて、自分の余裕の無さに嫌気が差す。

「あ、ルシヤナ。お疲れ様」

改めて仲間たちの顔を見上げたら、彼らは外から戻ってきたように表情が凍り付いていた。普段の談笑する姿が無く、三人は並んでじっと見つめてくる。四人も居るのに静かすぎる部屋。パチパチと暖炉の火が爆ぜる音だけが時を刻む。

「どうしたの？ みんなそんな顔して」

すぐに間が持たなくなってきたよとんと首を傾げる。すると、寄ってきたルシヤナに脇腹を突かれ、それはこっちのセリフと腰に手を当てて顔を覗き込んできた。

「あんたがそんな顔してたら、みんな心配するに決まってるだろ？」

「あ……ぶ……めん」

ルシヤナの後ろでもミリアやレンがこくこく頷いている。リーダーが夕飯も取らずに考え込むなんて、それだけで不安だった。彼らの不安を一身に浴びたシャニーはふと目を閉じて自身を叱った。

（あたし、リーダー失格だよ。しつかりしなきや）

見習い時代。デイークの背中を見て、リーダーになったらきつこの背中の様になると意気込んでいた。なのに、仲間に心配されるのでは世話が無い。一つ息を吐いて目を開けると、今も覗き込んでくる幼馴染へ苦笑いを返す。

「ダメだなく、あたしすぐ顔に出ちやうからさ」

頭をかきながら詫びて茶化そうとしてみるが、彼女たちの表情は変わらない。普段の朗らかさが消えた切歯<sup>せつしやくわん</sup>扼腕の横顔。あんなものを見せられて今の笑顔が本物だ何て、誰が思えると言うのか。

「そんな怖い顔しないで欲しいツス。きつとみんな同じ気持ちっすよ」

「え……う？」

地獄を見てきたのはシャニーだけではない。西でも、北でも南でも、どこでも同じ惨状が広がり、同じ怒りを噛み砕いて過<sup>こ</sup>してきた。それが仕事だから。だけど、この部屋の中だけならお互い気持ちを吐き出したって良い筈だ。

「大方、脱走者のことを考えてたんだろ？」

ルシヤナに問われて、最初はなぜ分かるのかと驚いた眼をしたシャニーだったが、察するとまた俯いてしまった。一体何をしに来たのか分からなくなってくる。

「うん……。領民じゃないって言ってたけどそう言う問題じゃないよなって。あんな奴隷を扱うみたいなのやり方でイリアが拓かれて行くと思うと、何か複雑でさ」

こんなに大規模に開拓が行われるなら発展は間違いない。その手伝いを出来る仕事を与えてもらえて何という名誉か。……そう抱かせた、最初に広がったあの光景を思い出し、持っていき場のない怒りに拳が震える。連行されて行ったあの少年の顔が脳裏に浮かぶと、今

でも腹が煮えくり返る。連中にも、何も出来なかった自分にも。

「領民じゃないって言うのも、どこまで本当か分からないけどね」

いきなり聞こえてきた、その場に居ないはずの声。いや、正しくは居るはずなのにずっと行方をくらましていた声だ。

突然背後に現れた黒い影。もう誰も驚くこともなく振り返り、早速ルシヤナが指をさす。

「あつ、サボリ魔ー」

「しようがないだろ？ 私は天馬に乗れないんだし、元から別行動じゃないか。アサシンが部隊に居たら怪しまれるだろ？」

全然警備任務に顔を出さないから実質四人の十八部隊。その五人目のメンバー。レイサは濡れ衣だと笑って見せるが、元教え子達からの視線は厳しい。

「レイサさん、情報ください」

「ハイハイ」

とても元上官への態度とは思えずにレイサは両手を広げるが、レンの冷たい言葉に止めを刺され、テーブルへ歩いていきシャニーの横に座る。

「情報たって大したものはないよ。警備が厳しくて近づけないし」

こちらの仕事の本業のレイサはこの一週間弱、ずっと開拓地内を探り続けていた。

騎士団で闇の仕事をこなしてきた彼女でさえ跳ねのける堅い守りは、とても開拓地のそれとは思えない。

「ただ、作業してる人間の中に……明らかにエトルリアの顔じゃない奴が混じってる」

びくつとシャニーの目が震えたのが分かった。伝えたらこうなることは分かっていたが、彼女はリーダーだ。強く肩を抱きこむ。

「分かっていると思うけど、契約は守りなよ。あんた達は騎士団の代表として来てるんだからね」

感情だけで動いて良い時とそうでない時がある。たとえ正義がどこにあるうとも。ルシヤナは両脇にいる年下二人の肩をポンと叩き、二人も顔を見合わせながら渋々ながらに頷いた。これが、イリアに生

まれた傭兵の性。

彼らはそのまま飲み物を取りに席を外し、レイサも仕事に戻ろうと立ち上がる。堪らずシャニーは手を掴んだ。

「レイサさん。この開拓事業、——本当に大丈夫なのかな？」

どうにも胸騒ぎが収まらなかった。ここまでして人を集めて、まるで奴隷のように働かせる。これだけでも納得がいかないし、自分だつて一歩間違えていれば酷い屈辱を受ける所だった。それをレイサに話すと、彼女は眉間にしわを寄せた。

「そうかい。そりゃ辛い思いをしたね」

彼女も理解を示してくれた。こんなやり方は意見すべきだ——  
—そう言いかけた時だった。レイサの鋭い視線が返ってきた。

「でも、それが傭兵つて奴だ。あんただって、分かっているはずだ」

「それは……そうだけど」

そう言われては何も言い返せなかった。下唇を噛んで力なく俯く。傭兵は契約が全て。今回は既に決まっていた契約で内容を交渉する余地は無かつたとは言え、対外的には何の言い訳にもならない。

だが、シャニーが不安を覚えていたのはその事だけが理由では無かつた。

「でも、おかしいよ。この事業のお金……どこに行ってるんだろう。収支報告書が無くて済む規模じゃないよ」

事前に騎士団で調べてきたこの事業の概要。事業に関する資料のどれにも金の動きを示す収支報告が無かつた。これだけ動員して、彼らにまるで還元していかないのなら相当な収益となっているはずだ。それを聞いたレイサはふつと笑って見せた。

「ハハッ。半年間、あんたに予算を勉強させた甲斐があつたよ」

反応に困って眉が下がる。何かあつた時、団長に声を掛けやすいから……何て理由で押し付けられた仕事——の、はずだった。まさかそれが勉強の為だとは考えた事も無い。でも、結局今も部隊のお金は自分が管理しているが、半年以上やってもちつとも数字に強くなつたようには思えなかつた。

「そうかな？ あたし、数字が苦手なの、ぜんぜん克服できてないけ

ど」

「ぱつと見てオカシイって思えるってのは隊長として大切な事だよ」

二人とも同じ推測に行きついていた。でも、一体どこへ流れているかは、レイサでも調べようと思うと途方に暮れる。とにかく守りが堅すぎるのだ、この騎士団は。

少なくとも、シャニーがどうにかできる相手で無い事だけは確かだ。彼女にちよつかいを掛けた騎士の話からしても、こちらから手を出したら逃げ場のない状況になるのは間違いない。

「シャニー、妙な気を起こすな。あんたの仕事や正義を決めるのは、今は連中なんだ」

シグーネを傍で見てきたレイサは厳しい。師にこう言われてはシャニーも黙るしか出来なかった。納得など出来ない——ただ、その気持ちだけが握りこむ拳から滲む。彼女は唇を噛んで立ち上がると、何も返すことなく部屋を出ていった。

## 第6話 譲れぬ誓い（後編）

夜が深くなるにつれ、叫ぶ様な吹雪の窓を叩く音が激しくなってきた。

ルシヤナは年下二人と共にトランプで時間を潰していた。ジョーカーを引いて頭を抱えるミリアから視線を外し、窓辺から外を見下ろしてみる。

ストックヤードに今も変わらず見える松明の灯。こうなると暫くは放っておくしかない。

その灯が陰相に差す深い影を一層に濃くする。炎を捉え、ただ一点を見つめて黙々と剣を振るう黎<sup>あおぐろ</sup>い瞳には普段の朗らかさは欠片もない。

「シヤニー、そんな顔するんじゃないよ」

近付き辛いそのオーラに難なく入り込んできた黒い影が後ろから声をかける。

「あ……レイサさん。何でここに？」

「あんたがそういう顔で剣を振ってる時は、ろくでもない事を考える時って決まってるからね」

しばらく動きを止めたシヤニーだったが、何も返す事は無かった。再び揺らめく炎を断ち切るかのように、彼女の剣は鋭く叫び始める。最初は型のチエツクだけのつもりだったが、一の風から四の嵐まで剣技を何度も繋いたら、もうもうと白い息が噴き上がってきた。苦しい

——— だけど、止められない。

ふと爆ぜる肩に置かれた手。背後を一瞥すると、腕を組んで眺めていたはずのレイサが目の前に居た。

「傭兵に出てたら、こんな事いくらでもあるってシグ<sup>姉貴</sup>ーネも昔言ってたよ」

それでも剣を止められない。再び弧を描き始めた刃が炎を浴びて赤く光る。見透かされているの分かっている。だけど、じっとしているとじわつと頭に湧いてくる昼間の光景——— 悪夢を薙ぎ払うにはこうするしかなかった。

「分かってるよ……」

動乱の時だって、傭兵でなければ逃げ出したくなる場面はいくつもあった。だから逃げ出さなくて良い様にと、デイクと自身を鍛えてきたつもりだった。

だけど、そう簡単には強くなつてはくれない。心というヤツは。

「頭では分かってる。でも、——納得は出来ないよ」

今握っている剣に正義はあるのか？ 本当に、イリアの礎となる為の剣を握っているのか——問えば問うほど分からなくなる。

「あんたの気持ちは正しいよ。だけどこれは契約仕事なんだ。分かるだろ？」

「……」

逃げるな。努力しない人間ほど人のせいにして逃げるもんだ——

——デイクに良く叱られた。彼の教えをずっと胸に刻み、今も剣を握っているつもりだ。だから逃げたくない。納得出来ないものを、契約だからと言って目を瞑りたくない。どうすればいい？

振るう剣の間隔がどんどん早くなる。ガリンツ——その剣が無理やり止められ、あたりに響いた耳を劈く鈍い金属音。

「いつもいつも、正しくいられるなんて出来ないよ。もう少し自分を抑える術を身につけないと」

はつとして剣に当たったものを伝っていくと、レイサの鋭い眼光に突き刺されていた。パチパチと松明の爆ぜる音だけが響き、アサシンの眼が赤く染まる。

しかし、今日の彼女はそれで眉が下がったりしなかった。目に鬼火を燃やし、阻む短剣を激情に委ねて高い音と共に跳ね飛ばす。

「——それじゃ、あたしの正義誓いに反する」

イリアの民に、信じてくれる人に嘘はつけない。裏切る訳にはいかない。こんな形で復興を進めているのでは、ロイにも顔向け出来ない。復興を楽しみにしてくれている彼への手紙にどうやって書けばいい？ 自分たちは頑張っていると書けるのか？

再び剣を振り始めると、やれやれとでも言いたげに両手を広げるレイサが視界の端へ映る。



「あんたが一人救ったとして、それで天馬騎士団の騎士全員、いや領民全体に被害報復が行くとしたらどうする？」

瞳が揺れ、剣を止める。契約違反は対外の場合は信頼を落とす絶対タブーだし、イリア内であっても明確な報復対象となる。

——どれだけ強くなるうが、千の敵をお前ひとりで相手に出来るか？

かつて師匠に問われた言葉が蘇る。

「それは……。でも——！」

納得できない気持ちだけが先に口から飛び出てきた。先が続かない。言い返したくても何も無い。

自分の握るこの剣が正義を叫び、結果多くの犠牲を出したら……。今でも忘れてはいない。守ると誓ったのに失われた村の人たちの顔を。

「シャニー、焦るな」

剣が下を向いたところを逃さず、レイサはシャニーの両肩をがっちりと掴んで黎あわぐろい瞳を見つめる。

「今のおあんたが叫んだところで何も変わらない。出来る事から、一個ずつ積み重ねるんだよ」

何も言い返せずにシャニーは剣を下ろしたまま俯いた。イリア騎士の最下層にいる事は分かっている。ただの傭兵である事も。

今まで何度も打ちひしがれてきたこの立場。今回も何も出来ないのか。見て見ぬ振りが一番したくない。動きもせずに諦めたくない。でも——ようやくに剣を振る手が止まった。

「あたしも、ずっと探してる。——自分を抑える術……」

もう一人の自分と対話しているかのようにはぼつりと漏れた渴望。その背中は妙に重く、構えたままの鋒が炎に赤く揺らめく様をじつと青の瞳が見つめている。

「あんたは考えるより先に体が動いちやう子だからねえ」

前からだ。見習い時代からどれだけ周りに叱られても変えられない。よく考えもせずに体だけ、心だけ突っ込んで行ってしまう癖。それ自体は悪いことではないとレイサは笑うのだが、本人にとっては恐

怖だった。

「それもそうなんだけど……もつと別の事」

デイクに口酸っぱく言われてあの頃よりはマシになったと思っていたが、目の前で誰か苦しんでいるのを見ると思考が飛んでしまふ。今回だつてそうだった。おまけに、今はさらに厄介なものが棲んでいる。

「戦つてると我を忘れちゃうから。それをどうやって抑え込もうかって」

「ああ、あの時のヤツか」

ぎゅつと胸元を握る。確かに居るのだ。まるで爆弾が埋め込まれているような衝動が。仮面の魔術師と戦った時の恐怖は今も消えない。

「この場であれをやっちゃったら、それこそ取り返しがつかないからさ」

飛び出して来ない様に自分を抑え込むので毎日必死だった。一度表に出たら制御できない。

——鎖は斬った。だが、制御できるようになるまで使つてはならない

あの紳士の言葉は、相変わらず何が何だか分からないまま。

「そう言う事なら、好きに剣を振つてて良いよ。自信が持てるまで」

「うん。そうするつもり。自分を納得させられないと不安でさ」

自信とは自分を納得させること。不安だから稽古する。稽古して結果を出し、自分を納得させる。それしかない。

しばらく鋭い剣が松明の爆ぜる音を切り裂いていたが、今度はすぐに止まった。

「はあ、心を鍛えるって何なんだろうな。まるで成長してなくて辟易するよ」

考える前に体が動いて事態を切り拓いてきたからか、目の前の課題はどうして良いか分からない。

楽天家で普段めつたに不満を言わない彼女のため息。天を仰ぐその肩にレイサはもう一度手を置いた。振り向いた瞳はさつきより青

さを取り戻している様にも見える。

「——— だったら尚更、皆のところに戻りな」

「え……？」

「この際だから言うけど、あんたは独りで何でも出来る子じゃない。独りで居たらいけない子なんだよ」

負けず嫌いで気が済むまでのめり込む。それが今はあだになつて  
いる。おまけに今回の任務は常に空と言う誰も干渉出来ない場所で行っている。

シャニーには孤独が一番の敵。レイサでなくとも彼女を知る者なら誰でも知っている。

「心つて言うのはいろんな声に揉まれて鍛えられるんだ。自分と会話したつて苦しいだけさ」

前向きな朗らかさが彼女の持ち味のはずが、今はすっかり消えている。消し飛ばしてしまったのは他でも無い彼女自身だ。理想を追い求めるあまり現実とのギャップに幻滅して浸かる孤独の毒。

「あんたは誰かと居る時が一番に輝く子。皆を照らして、自分も支えてもらいな。あんたに孤独は毒だ。今ここに立っているのは、自分一人の力だと言えるかい？」

悩んでいる姿は今までもあった。その都度、周りが声をかけてきた。その刺激に楽天家はすぐに前を向き、今度は周りを明るく照らしてきた。それが今、形になっている。十八部隊のリーダーとして。

レイサからの問いに、シャニーは目を瞑って思い出してみる。

（あたし一人で成し遂げられた事なんて——— ううん、もう独りは嫌だよ）

姉達にデイークにロイ、そして十八部隊の仲間たち。節目節目には必ず傍に誰かがいた。

つい最近だつて思い知つたばかりだ。独りでは解けないものがあるのだと。それを教え、底無しの沼から引き揚げてくれた仲間達の顔を思い浮かべたら、自然と剣は鞘に収まった。

「えへへ、そうだね。戻るよ、みんなのところに。あー、いっぱい考えたらお腹空いちやつたよ」

悩んだって今の自分にはどうにもならない事を、どうしてあんなうじろく考えていたのだろう。早く皆の所に戻ってお喋りがしたい。悩んだら、皆に助けてもらえば良かった。

「はは、食べられりゃ、とりあえず大丈夫だね」

ニカッと笑う顔はいつも知る顔。再び昇った太陽の肩を抱いてレイサは城へと戻っていった。



レイサと別れ、部屋に戻る途中の曲がり角。気配を感じてふと部屋と反対側の通路に目を向けてみる。休憩所があり、ルシヤナがグラスを傾ける姿があった。

こんな仕事先でも呑んでいるのにはびっくりしたが、気づけば自然と彼女の横に座っていた。

「あんたも呑む?」

「んー……じゃあちよつとだけ」

蒸留酒を注いでもらい、お湯で割って冷えた体を温める。やっぱり仲間いるとそれだけで心が落ち着いてくる。

しばらくコップを回して中を覗き込んでいたが、さっきまで悶々と心の中にへばりついていた重い気持ちがすぐに剥がれて飛び出してきた。

「ルシヤナはこの仕事、どう考えてる? あたし達、正しい事してるのかな」

いつもの声とまるで違う乾いた声。それを聞いただけでルシヤナは思った通り、リーダーが思い悩んでいると確信していた。まだ、こうして相談してくれるようになっただけマシだ。

「正しい事をしていと思うよ。そう言う契約だし」

あつさりとそう言うのと慣れた手つきでお湯割りを作つてぐいっと傾けだす。

情に流されず、あくまで契約に従つて動く。傭兵のキホンだ。それでも、視界の端には納得のいつていない顔がある。

「そう言う意味じゃ——」

「そういうもんでしょ？ 仕事って」

シャニーに言い聞かせるように被せて言い切る。彼女だって分かっているはずだ。それでもこんな事を言う気持ちだって察している。

取り付く島もない答えをされて俯いていたシャニーは、一つ酒に口をつけるとううつと大きく息を吐いて天上をぼんやりと見上げた。

「——あたしも、最初はそう思ってたんだ」

言われた通りに動いていけば良い。そう思っていたが、デイークの傭兵団に入ってそれは覆された。

自分で考えて動かなければ仲間を危険に晒すし、雇い主が何を考えているか察しながら身を振らなければ仕事とは言えない。そう口酸っぱく言われては、いつもこう叱られた。——仕事を舐めるな。

「でも、それじゃダメなんだって思うようになってき。ずっと……それを貫いて世界を救った人を見てきたから」

ぎゅつと胸元のロケットを握り締めた。デイークの小言を自分事として咀嚼出来たのは、凜々しい彼のおかげ。

誰も取り残さない。喜びの影で誰かが泣くような事があつてはならない——二人でお喋りする時、彼はいつもそんな悩みを口にしていた。

あの時はただ励まして支えてあげる事しか出来なかったが、聞かされる内に自分の心の中に同じ気持ちが生えていた。

「こんな仕事……ロイ様にとても伝えられないよ」

傭兵に出てくる前の最後の手紙に、書いてしまったのだ。帰ったら、傭兵先の仕事をきつとレポートすると。イリアの発展に貢献できる大事な仕事なのだ。

それが実際はどうだ。ろくな服も着せず、子供にすら鞭を打つ。そんな連中に加担していると考えるだけで胸が絞られる。

「あたしはロイ様みたいなスゴい人じゃないけど……。——想いは同じだよ」

あんなカリスマ性も無いし、心だつて強くない。今だつてこんなに

挫けそうになっている。

「だけど、彼にちゃんと報告できるような仕事をしたかった。このまま自分の正義に嘘をついたまままでいたら、頭がどうにかなってしまいたい。そうだ。」

「もちろん、それを果たせば天馬騎士団に迷惑をかける事になる。それは分かっている。」

（ロイ様……あたし、どうすればいいんだろう）

「そう考えていた時だった。いつの間にか空になっていたグラスにルシヤナが酒を注いできた。」

「はっ、じゃなかったら好きになんかならないでしょ」

「好き——その言葉を聞いた途端に頭がかあつと沸騰してこめかみから血が噴き出しそうになった。」

「べっ、別にそんなんじゃないよ。憧れの人だよ、ロイ様は」

「頑なに否定するシャニーヘルシヤナは怪訝な眼差しを送った。どうしてこう、壁を作ろうとするのか分からない。いつも、傭兵なんか——とか言って一線引くのだ。普段はガンガン行く彼女がこの事になると妙に慎重で違和感があった。それを聞いたところで、はぐらかされるだけ。話題を元に戻す。」

「そりゃさ……人間としてはどうかと思うよ。私だってむかつ腹立つてるし」

「いけ好かない連中だとルシヤナも思っているし、シャニーがぐっと抑えているのも知っている。内心、腸は煮えくり返っているのだろう。それを笑顔と、無心に振る剣で隠しているだけだ。」

「あんだ……迫られたんだろ？」

「……」

「金髪の騎士が得意げに話す様子を偶然聞いてしまったのだ。」

「——あれだけ上玉ならコマし甲斐があるぜ」

「前後の会話からシャニーの事だとすぐ分かったし、視線を逸らして何も返してこない様子からも間違いなさそうだ。」

「ルシヤナはしよ氣るシャニーの背に手を置いて彼女の視線を引き戻した。」

「あんたが部隊長なんだからさ。あんたがブレたらバラバラになるよ」

「ルシヤナ……。ありがとう」

その言葉の意味をしっかりと受け取ったシャニーは、静かに頷くとコップの酒を一気に飲み干して席を立った。

傭兵では出来る事は限られるかもしれない。だけど、何も出来ない訳では無いはずだ。逃げたくないし、誓いを曲げたくない。

イリアの民を守り、いつかあの人達に胸を張って会える様な生き様でありたい。どうすればいい——胸元のロケットを握り、憧れの顔に心の中で何度も問いかけながらシャニーは部屋へと戻って行った。

## 第7話 毒牙の応報

翌日、レイサヤルシャナに諭されてつかの間の笑顔を取り戻したシャニーは、いつもより低く飛んで現場をぐるっと見下ろしていた。是正措置をとってもらう情報<sup>ネタ</sup>を掴む為だ。それはもちろん、より凄惨を瞳に焼き付けてきて、みるみる眉が下がっていく。

「貴様!!…これで何度目だ!」

数日前に捕らえた脱走者がまた起こした企て。騎士たちは顔を真っ赤にして怒鳴り、以前より厳しく打ち付けている。何故ここまでしなければいけないのかまるで分からない。見ていられず、視線を切るしか出来ない。

(ごめん……あたしにもっと大きな力があれば……)

すぐにでも腰に差した剣を引き抜いてあの悪夢を払ってやりたい。夢に出てくるのだ、あの鞭の音が。皆を守る剣を志したのに、今の自分には何もしてあげられない。無力さに打ちひしがれ、捕まえておきながら彼女は心の中で謝っていた。

「はあ……頭がどうにかなりそうだよ」

大抵のことはお喋りしたり面白い本を読んだり、ふとしたきっかけが無くても切り替えて前を向いていられるが、これは度を越していた。

いつも引き返していた境界線。その外で起きていたのがこんな事だなんて。うな垂れながら天馬にまたがって空へと戻る。ふと、胸元のロケットに目が行った。

(ロイ様、あたしどうしたら良いんだろう。ロイ様なら、どうやって守ってあげるの? 教えて……ロイ様……)

こんな非道はとも彼への手紙に書けないし、相談だって気が引ける。親身になって悩みを受け止めて来てくれた彼へ、今回こそきつと飛び切り良い報告を出来る——そう意気込んできたのに。

(あたしみたいな傭兵なんかじゃ、何も出来ないのか——ツ)

下手な真似をすれば騎士団の信頼を落とす事になる。それは分かっている。激情に委ねられたらどれだけ楽だろう。



正義を貫くのは力ある者の特権か……首に鉄球でも吊り下げられているかの様にまわりつく葛藤。堪らず自身の太腿へ拳を打ち付けた。

その時だ、怒りに切れ上がったまなじりの目が歪む。またしても隼の眼が異常を見つけてしまったのだ。出来る事は、契約を守り目の前の仕事に集中する事だけ。

投槍で威嚇し、すくんで動かなくなる脱走者の許へ急降下して傍まで歩いていく。

「手荒な真似はしたくない。大人しくして、お願いだから」

凜とした姿は崩せない。弱さを見せれば隙ができる。例え心が震えていても、これが——仕事なのだ。

(ごめんなさい)

心の中で謝り続けながら男に縄をかける。彼らには悪魔と映っているのだろう。逃げ出してくるには事情があるはずだ。それを聞きたくても、聴取は禁じられている。

白昼の悪夢。それでも情報ネタを探し、ひたすら心を殺して辺りを見渡しながら聖天騎士団の騎士達がやって来るのを待つ。彼らは荒い言葉を投げつけながらヘルメットが吹っ飛ぶほど乱暴に男をひったくっていった。

「あれ……あの顔——?!」

その時、男と視線が合いシャニーははっと口元を手で覆う。

——エトルリアの顔じゃない奴が混じってる

レイサの言葉が蘇る。今までヘルメットに隠されてきた顔。あれは間違いなく……イリア人。



「あ……マジ、しんど。まったく、天馬に乗って仕事出来る連中が羨ましいよ」

その夜、調査から返って来たレイサは見るからにヘトヘトだった。確かに、この広大な開拓地は歩兵にとっては毎日が地獄の鍛錬かもしれない。

寝転がって一休みしようとしているのを起こすのは申し訳ない。そう一瞬よぎったが、もう時間も余り残されていない。シャニーはドタバタ走って行ってレイサの手を取った。

「レイサさん、おかえり！」

「なんだいシャニー。丁度いいや、足揉んで——」

「ちよつと助けて！」

言うや否や、応も否も返すことさえ許さず部屋の外へと引つ張り出した。どこまで行くのかと背後から視線を感じるが、ぐいぐいとお構い無し。ストックヤードで足を止めて振り返ると、腰を叩くレイサから物臭な先制を浴びた。

「剣の稽古なら付き合わないよ。腰痛いし、足もダリーし」

「何よ、ニイメおぼあちゃんさん見たいな事言つて」

まるでやる気のないレイサに口を尖らせたシャニーだったが、次の瞬間真つ青になって両手を上げていた。

「誰が年寄だつて？ あん？ この口か？」

「も、もう言いまひえん……」

真つ赤に光った目に背後へ回られて首に短剣を当てられていた。おまけに頬をこれでもかと抓られ、涙目になりながら許しを請う。

ようやく解放されると、頬と首筋を擦りながらその場にヘタレ込んだ。事ある毎に命を張つた遊びを仕掛けられては堪らない。

「……で？ 何でこんなところ来たの」

「あつ、そーだったよー！」

いつまでも座り込んでいるとレイサから呆れ半分の声が飛んできた。ポンと手を打ち、左右を確認してからシャニーは耳打ちを始める。

見る見るうちに眼光を厳しくしたレイサは、シャニーの目を突き刺すように見つめて真意を問うた。

「あんた……本気なのか？」

「だって、もし本当なら彼らは天馬騎士団あたし達に嘘をついてる事になるじゃない。——確かめないといけないと思う」

出来る事と言ったらこれが精一杯か。彼女なりに考えた限界だと

察してレイサは仕方なく首を縦に振った。問題は裏を取ったとして、それをどう突つきつつけるかだが、まずは掴つかまない事には始はまらない。

ちやうど今日、その場所を特定して来たばかり。ヘトヘトになった甲斐もあるというものだ。

「その格好じゃ目立つ。それに着替えな」

いったんシャニーと共に部屋へ戻ったレイサは、予備の服をぽんとシャニーへ投げつけた。皮鎧にマントにブーツだなんて夜の仕事には不向きだ。

「へへっ、何かプロって感じ!」

「ハッ、あんたがプロねえ」

潜入服に着替え、自身を見下ろして得意げにするシャニーをレイサは笑った。ここまで似合わない人間も珍しい。やはり地を這う黎ではなく、その黎を払う晴明の空が彼女の生きる道か。

このじつとしていられないド素人を連れての潜入はどうにも不安だが、一つ頷くとシャニーも真顔になった。ここから先は戦場——二人は闇夜に溶け込む。



レイサの幻術で景色に溶け込んでいるとは言え、聖天騎士団の連中とすれ違う度にシャニーはごくりと息を呑む。おつかなびつくりやっけていてもレイサは構ってくれない。声を掛ける事も出来ずに、意を決し騎士の正面を横切る。彼女についてするする雪原を抜けた先に小さな建屋が見えてきた。

「あんたはここでじつとしてな。良いか、動いたら蜂の巣だよ」

岩陰に隠れて待つように指示され、振り向いた時にはもうレイサの姿は無い。一体何が起おこる……静寂に包まれた暗黒の中で、建屋の入口を見つめていたその時だった。入り口で見張りをしていた守備兵が、糸が切れたように突然バタバタと立て続けに倒れた。

「やっぱスゴイヤ。さすがポイズンマスター」

「そりゃあ姉貴が生きてた時はこつちが本業だったからね。行くよ」

痕跡を残す訳にはいかない密偵の仕事に欠かせない毒の数々。レ

イサの指先に光る仕込み針の威力にシャニーは舌を巻いた。あんな針の先に数滴たらした液体でこんな事になるなんて。褒めても、レイサは涼しい顔でもう先へ鋭い目を向けている。

(この人が敵じゃなくて本当に良かったよ……)

レイサを見つめっていると、潜服用で口元まで覆いながら同じようにやれと目で指示してきた。

問題はここから。意を決しそのまま施設に入る。道中の警備兵に飛びついては麻酔針を使つて眠らせ、何かを転がしていくレイサの後をついて行く。

「潜入は十五分が限界だ。その間になんとかするよ」

「ねーねー、何コレ？」

「バカッ、早く来るんだよ！」

転がしたものから何か煙が出てきた。様子を眺めるだけで済まず、猫の様に突つっこうとしたらレイサに手を引っ張られた。あんなところで一緒に寝たら大変なことになる——道すがらそう説明を受けて毛が逆立つ。本当にレイサは歩く毒薬庫だ。

「なっ……何、こっ……」

ようやくたどり着いた牢獄。思わず息を呑んだ。これでもかど人が押し込められ、不安げな目を向けてくる。部屋全体に広がる恐怖と嘆きの空気が極寒に凍り付いて四方から槍の様に降り注ぐ。心を押し潰されないようにするだけで精一杯だ。

(これ全部……あたし達が捕まえた人達なの……?)

彼らの絶望を作り出したのが自分達だと思つと、胸が引き裂かれそうでも視線を合わせられない。横からレイサに突かれ、彼女は時計に指先を当ててくる——時間が無い!

(あたしが言い出した事なんだ。しっかりしなきゃ)

しょげる心に鞭を打ち、前を向いて目当ての顔を探す。虚偽報告は重大な契約違反だ。そこを突破口に是正措置を取ってもらえれば、鉄格子の向こうにいる人達を救う事が出来る筈。今やっている事は十分グレーを超えているが、このまま正義を曲げ、ロイに顔向け出来ない仕事は続けられない。

「あの、すみません！」

小走りして早速声をかけた横顔。相手もこちらを覚えていたらしい。一度は振り向いて、目を見開き驚いて見せたが、すぐに視線を切られてしまった。

「なんだ。何を言われても、もう作業をするつもりはないぞ」

ぶつきらばうな態度はどこか捨て鉢気味にさえ聞こえてくる。覚悟はしていた。こんな態度を取られても仕方ない事をしたのは自分だ。イリアの人を幸せにしたい——そう『三誓』を掲げて十八部隊の先頭に立つてきた自分が、彼らを踏みにじった結果が目の前の怒り。

「それとも、処刑しに来たのか？」

きつと死を運ぶ白い騎士としか映っていないのだろう。わつと心に広がる涙を胸元のロケットを握って堪えた。

「いえ、あなたはエトルリアの囚人というのは本当なの？」

「アイツらはそんな風に言っているのか」

時間は無い。相手の言葉に応えてあげられない苦しみを払って質問を投げつける。それを聞いた男が視線を戻してきた。彼の目には怒りとも殺気とも取れる煮えたものが浮かんでいたが、すぐに屠所の羊のように力を失って笑いだした。怒りをぶつけたところで何の意味も無い……そんな諦めが滲んでいる。

「はっ……、白と黒の騎士団ね……」

力なく漏れた渾名。憎しみを浴びせてくると言うより、どこか哀れなものを見る様な目を彼は向けてくる。この渾名、そしてこの目……騙されているとも言いたいのか。

「じゃあやっぱり」

「ああ、俺はイリア人だよ。俺は……というより、皆だな」

乾いた笑いを浮かべながら見渡す男。その周りにいた者たちから一斉に視線を向けられる。助けてくれ——そんな声があちこちから聞こえてくるようでシャニーは呆然と立ち尽くすばかり。ずんと罪悪感が頭の上から肩の上から、あちこちから押し掛かってくる。(あたしは……何の為にここにいるの？ 何を信じれば……良いの—

—?)

突き動かしてきたものが砕け散る様にその場に膝から崩れる。堪えきれなくなつて伝う涙。何もかも許せなくなつてしまった。彼らの嘘も、それを信じた自分も。何より、彼らのやる事を黙って見ているしか出来ない自分が。

「お前さんたちも仕事だろうが悪いことは言わない。さっさと帰った方がいい。洗脳されちまうぞ」

泣いていたら、何も知らずにここに来た事を囚人は察したのでだろうか。最初の刺々しい口調とはまるで違う声で警告してきた。変わらない。いつも会う村の人々の優しい声と何も変わらない。そんな守るべき者たちに、一体自分が何をした？

「洗脳……つて？」

罪悪感に押し潰され、あわぐろ 黎い瞳が揺らいで声の震えを止められない。「俺はフェリーズ卿の説教を聞いてエミリーヌ教に入信したんだ。で、イリアに聖女の慈愛と光をもたらす為だつてこの開拓事業に進められるままに参加して……このザマよ」

囚人の疲れた声が聞こえてくる。時計を気にしながら外を警戒するレイサはちらりと牢獄のほうに目をやる。案の定、あの天真爛漫は涙に暮れていた。

(何が……エミリーヌだよ)

レイサは内心聖女を罵った。あの顔を一体何回涙に濡れさせたら気が済むのか、この宗教は。相手の喜びの中に自身の喜びを見出す彼女には、地獄で焼かれているような気持ちに違いない。その彼女へ囚人たちは絶望と言う現実を突きつけている。

「土地は拓けて、鉱山も出来て……なのになにも潤う兆しも無いしな。聖女の光なんて幻想にしか思えねえよ」

にわかには信じがたい現実を受け止め切れずに、シャニーは降り注ぐ視線を前に罪悪感で何も言葉を絞り出せずにいた。

周りの囚人たちも口々に声をかけてくる。どうやら聞く感じ、どの人も似たような境遇らしい。イリアの極寒に絶望し、聖女の光を求めて立ち上がった者たち。待ち受けていた光はあまりにも眩耀なるも

のだった。

(この人たちに……何もしてあげられないのか、あたしは——ッ  
!!)

聖天騎士団のやり方、そして自分の無力に、胸の奥からぞわつと青い焔が噴き上がって来るのを感じる。契約とは言え、人々に絶望を植え付ける片棒を担いだ自分が許せない。その怒りに止めを刺すように、囚人は力なくうな垂れて乾いた声で笑った。

「……今のが聞かれたら消されちまうな、ハハッ……」

これが宗教か？ 言論統制は厳しく、エミリーヌを疑うような真似をすると速攻処刑だという。

——お前はそんな事しないでくれよ

その場を後にする時に皆が向けてきた眼差しに、シャニーは振り向くことが出来なかった。



「やっぱり、消されてるね、相当数」

城に戻るなりレイサに重い言葉を掛けられた。今回見つけた囚人たちが冰山の一角であることは優に想像できる。死人には口は無いのだから。

「もしかして、開拓事業に関わった人が消息を絶つて言うのは……」

「ああ。この事実を揉消す為に何かしら組織が動いているって事だ」

今でも信じられない。ここがイリアなんて。朝起きて日差しをいっぱい浴び、仲間と楽しくお喋りするイリア。広大な蒼穹に吹く風へ身をいっばいに預けて飛んできたこの世界が——イリアなのか。

(こんなの、許せるワケ無いじゃない！ イリアをこんな国にしたくない——ッ)

たった一本の境界線を越えた先には、紺碧が続くあの先には何がある……その答えが——これなのか？ ギリツと握りしめた拳。革グローブが怒りに唸る。

「まずは……みんなに話をしよう」

二人の秘密にはしておけない。仲間達だつて辛い気持ちを堪えてきたのだ。事実を伝え、今後の動きを図る必要がある。

部屋に戻ると、仲間たちの焦燥とした視線が突っ込んできた。

「シャニー！ どこに行つて——つて何、その格好？」

ふらつと居なくなつた事を怒っているのだろうか。ギンと角を生やして迫つて来たルシャナに一瞬うつとしたが、運が良い事に彼女の興味は潜入服へ移つてくれた。ハーフトップにサバイバルパンツ……レイサと同じ。改めて自身を見下ろし得意げにしてみせる。

「へへっ、似合うでしょ？」

「いや、さすがに無いっスね」

「ん、全然」

期待していた答えと正反対でシャニーは目を点にした。まさかここまで木っ端みじんにされるとは、相変わらずミリアもレンも容赦がない。口をあんぐりさせていたら横からレイサの腹を抱える声が止めを刺してきた。

「——つて、違うよ！ みんな集まつて。話がある」

ふいに真面目な顔になつたシャニーは仲間とテーブルを囲む。事実を伝えると彼女らもシヨックを受けたようで視線が落ち着かない。信じられない気持ちと、どこか予想通りの怒りと。そんな濁つた空気が淀む部屋に広がる沈黙。

「これはとんでもない事に首を突っ込んだよ、あんた。どうする？」

一度鐘を鳴らした者は二度と平穩には帰れない——レイサの眼が答えを問うてくる。

（ロイ様やディークさんは、いつもこんな気持ちだったのかな）

己の目指すイリアはこんな色ではない。嘘や絶望を溶かした混沌を覆いつくす、こんな色では。目指すもの、刻んだ正義、そして憧れの者たちの背中——決断は早かった。

「決まつてる。収容されている人達を何とかして救い出さなきゃ」

知らなかつたとは言え、罪もない人たちに武器を向け、痛めつけられているのに見て見ぬ振りをしてきた。これは彼らへの贖罪だ。イ



リアの礎たれ。己の誓いに反した行いに気づいた今、迷う事など無い

「私は反対だよ、シャニー」

だが、速攻でルシャナから返って来た声は思いがけず期待していなかったものだった。

「ルシャナ……どうして」

困惑の碧眼が幼馴染を捉えるが、周りから注がれている眼差しも自分に味方するようなものではないと知った時、急に心細くなった。

「逆にこつちが聞きたいよ。この人数で一体何が出来るっていうのさ」

レイサを含めても今この場にいるのはたったの五人。相手の戦力規模など計り知れない。この城の絢爛さを見ても、兵数はもちろん武装だつてとんでもないレベルに違いない。

一番に分かっているはずだろ——ルシャナの視線が突き刺さる。

「冷静になりなよ、リーダー」

先走る気持ちをまっすぐな言葉で窘められ、シャニーは思わず言い返そうとしたが、その時ふと師匠の声が聞こえてきた。

——どんなに強くなるうが、千の敵をお前ひとりですぐに相手に行けるか？

冷静に周りを見る……見習い時代からずっと言われて来た事だ。何も変わっていない。先走ってしまう事も、言われるままにしか動けない事も。

「くそっ！ 傭兵のあたしじゃ……何も出来ないのか——ッ」

悔しくて、もどかしくて、何も出来ない無力に思わず拳で机を叩く。ヴァルプルギスにだつてとつくに調査の依頼は出している。だけど、調査すると返答されて以来、彼女からは何の音沙汰も無い。もう執れる手は何も無いのか。

「天馬騎士団に事情を連絡して指示を待つのがいいと思う。その間にデータを集めとく」

震える肩にそっと置かれた手。振り返るとレンが銀色の瞳で静か

に見つめて、小さい口が優しく笑っていた。気持ちは同じ——そう伝えてくる仲間の表情はすぐに前を向かせてくれた。

「ありがとう、みんな。まずはそうしよう」

涙を拭き、仲間たちを見つめる。

あなたは独りで何でもできる子じゃない——レイサに昨日言われたばかりの言葉が蘇る。

頭脳明晰でも、絶対的な実力者でもない。それでもついてきてくれるこの八つの瞳を大事にしよう。そう心に誓って、シャニーは抜きかけた剣を収めたのだった。



二日後——

「ちよ……、どう言う事?!」

書簡を握るシャニーの手が震えていた。それはすぐに怒りへと変わり、握りしめられた手紙が悲鳴を上げ始める。あれだけ何枚にも実情を認めて送ったというのに、天馬騎士団の回答はたった一枚。そのまま任務を続ける——無味乾燥で冷然とした命令だけ。

立てかけてあった剣を手に取り、マントを羽織る。

「こんなの納得行かない。団長お姉ちゃんに直接聞いてくる」

「待ちなよシャニー」

すぐに突っ込んでいこうとする体は、またしても副将にがっしり肩を掴んで止められた。

「下に書いてある事をよく読みなよ」

一度はくしゃくしゃにして放り捨てた手紙を受け取り、指された部分へ目を落とす。

—— 契約の反故は許されない

—— 契約期間中は例外無く、契約主の命を絶対とせよ

—— 他騎士団の運営への意見、及び管轄外地での越権は断固禁止する

「天馬騎士団も手が出せないって事か。ちくしよう!」

契約外の行動は自省せよ。厳守出来ない場合は厳罰に処す——

―脅し文句で締められた命令。これには今まで我慢していたミリアも辛抱ならぬと吼えている。

するりと手先から書簡が滑り落ち、視界に残ったのは無意識に握られ震える手。それをすぐに取ったのはレイサだった。

「シャニー、私達は出来る限り全てをやりきった。あんたは立派に誓いを果たしたんだよ」

ぱつと振り向いて来たシャニーの瞳は黎あおくろく沈んでいる。許せないよ――静かに燃える怒りがその黎を燃やし始め、眦が切れ上っている。それを止めさせるべくレイサは続けた。

「切り替えよう。あの人達の為に精一杯、あんたは力を尽くしたんだ」  
言い聞かせながらシャニーの背に手をやって出撃の準備へと向かう。

結果は見る前から分かっていた。契約は契約。こんな早打ち、サインした天馬騎士団側の連中が団長にあの書状をちゃんと見せて検討したかすら怪しい。

契約満了まで後三日。こうなればもう、この任務と早く離れるくらいしか、レイサに祈れるものは無かった。

## 第8話 雪花旋風の如く

あわぐろ  
黎い空。目の前は蒼くとも、向こうを臨めばどんどん鈍く霞んでいき、雲の下の方は真っ黒だ。いつ吹雪が来てもおかしくない。

「ダメだよ……手を出しちやダメだ……」

胸をギョツと掴みながらシャニーは震える声で自身を抑え込む。

何故、あんな外道が大手を振って歩く姿に何も出来ない、何も言えない——心が抉れて真っ赤なマグマが溢れだしても飲み込むしか出来ず、空色の瞳がどんどん黎く濁っていく。

（あたしの剣は……やっぱり何も守れないのか——ッ）

今日もあちこちへ天馬で飛んで行っては聞こえてくる鞭打ちの音。左手が震える。もう必死に力を込めていないと、すぐ柄へ手が伸びてしまいそうだ。目を瞑っても、耳を塞いでも入ってくるこの音が頭にこびりついて離れない。

「苦勞、君の眼は優秀だな。ハハハッ！」

勞いの声は毒を浴びせられているようなもの。聖天騎士団の騎士に脱走者を引き渡し、天馬に戻る足取りは鉄球を引きずる様に重い。やっと解放されて空へと戻っても、腹に煮えた油でも放り込まれた様にぐらぐらが収まらない。何も遮るはずの無い空さえも、今は黎きあわぐろ独房にさえ思えてくる。

（あと二日……後二日で終わるんだ……——何で終わるの？）

いつの間にか無責任な事を咄く心に嫌気が差す。

目の前に映らなければ良いのか。これは悪夢何かでは無い。今も起き続けている現実——いや、悪夢そのものだ。今まで知らなかっただけの、現実と言う名の悪夢なのだ。その悪夢を自身の剣は払えずにいる。これで良いのか——

悪夢は再び、逃れられない現実を突き付けてきた。目の前に見えてきたのは、もう何度も見た後ろ姿。

（あの子……また逃げ出したんだ）

逃げ出したくなる気持ちは痛いほど分かる。それを捕えなければならぬシャニーの眼差しは弱っていた。特に天馬へ加速を指示す

る事も無く、惰性で滑空していく。このまま……追いつく前に彼があの鉄条網を越えて行ってくれたなら。

「お前、今度と言う今度は許さん!!」

無情にも、追いつく前に騎馬兵が押し寄せて少年を押しさえつけ始めている。青筋を立てて怒鳴りつけ、子供相手にもまるで容赦が無い。シャニーは呆然と馬上から見下ろしていた。あんなに轟々とした怒気を浴びせられているのに、こんな遠巻きに眺めているしか出来ないと思うと視界が霞んでくる。

(あたし……何の為に居るんだろう。……——ツ?!)

金属をこすり上げる音が耳を劈く。はっと視界に色が戻った刹那、乾いた声が飛び出した。騎士が少年に向かって剣を引き抜いていたのだ。

押し込めた心の奥から、燻り続けていた炎が噴き出して体が前傾する。今飛び出さなければ間に合わない。でも、次に彼らの邪魔をするような事があれば——

「助けてお姉さん!!」

「——ッ!」

視線が合ってしまった。叫ぶ少年の頭上では騎士が剣を振り上げている。

今行くッ——気づいたらもう天馬に鞭を入れ、鎖を引き千切る様に突撃していた。

「——やめて!!」

絹を裂くような悲鳴と共に響いた鈍い金属音。振り下ろされた剣を槍で受け止め、そのまま騎士に天馬ごと体当たりして吹き飛ばす。自身も飛び降り、死を前に震える少年を引き寄せた。何度も頭を撫でてやり、震える体を擦りながら抱きしめる。

「子供に武器を振るうなんてどうかしてるよ! エミリーヌ様の教えにそんなことないはず!!」

吹き飛ばされた仲間を介抱する騎士たちの眼光が一斉に突き刺さる。

飛び出してこようとする彼らに槍を投げつけ、響き渡る天馬の嘶いなな

き。少年を乗せて瞬く間に飛び立った。

「貴様あ！ 契約主に向かって槍を振るうとは何事だ！ 追え!!」

下から騎士たちの怒声が聞こえてくる。背後を一瞥すれば六、七人が馬を駆って追いかけて来る。その手には弓が握られて、考える間も与えぬと言わんばかりに威嚇の一矢を放って来た。背後を取られた状態で弓を相手にするのは、天馬騎士にとっては絶望的。

(くそっ、このままじゃマズい。この子だけでも……——ツ?!)

ジュンツ——矢音が頭の横を突き抜けていった。稲妻の如く走った第六感が身を伏せさせ、旋風にも似た人馬一体の裂空で射手に的を絞らせない。

それでも、少年を乗せて動きが制限されたままでは長くは持たない。

後ろ目に牽制して距離を測り、振り向きざまに投槍を放つ——

一人落とした。後……六人。

(多いな……。こうなりや肚括るしか無いか——ツ)

どこかに降ろしてやろうと思ったが、このまま低空飛行しては二人とも危ない。

「いい？ この子が降りるまでしっかり掴まってるんだよ！」

少年に手綱を握らせ、鐙の場所を指さすと相棒を信じて高度を下げる。

バカめ——舌なめずりしながら射手が弦を引き絞る。撃ち落としてくれと言っているようなものだ。

次の瞬間、彼の眼が見開いた。突然天馬から宙へと開いた青き雪中花。自身の走路に被せるように降ってくる天馬騎士の手には剣が握られていた。

「貴様、いい度胸だ。この数を相手に一人で来るとはな」

倒れた射手の横に着地したシャニーは声にはつと振り向いた。追走してきた騎士たちが距離を詰めてくる。

(あいつ、あの時の……!)

あの顔……思い出した。いやらしく頬を擦ってきたあの騎士だ。剣を握る手に力が籠る。

それに反応してか、彼は馬上から射手に命じて距離を空けさせている。剣は届かず、弓を引き絞れる標的との最短距離。

「そつちこそ説明しなさいよ！　ここにいる作業者、皆イリア人じゃない！　騙したの?!」

何故知っている？　——騎士の顔が疑念に歪む。だがそれも

束の間事。彼は鼻でせせら笑うと嘲りの目を向けた。

「それが何か問題なのか？」

遊んでやるには良い相手だと思っていたが、こうなつてはこの女もあいつらと同類だ。いや、むしろ裁かれるべき存在となつた今、剣を捨てたところでもう遅い。この女は一線を越えたのだ。

「何?!」

「ここは我ら聖天騎士団の管轄地だ。貴様ら天馬騎士団の連中が口を挟む余地は無い」

地の利は全てこちらにある。騎士たちに満ちる自信を支えるイリアの掟。

この女は理解していない。この場を裁く全ての権限は聖天騎士団にあり、彼女に許された権利は何も無いと言う事を。知つた者は断罪せねばなるまい。

「貴様は色々知りすぎた。構わん、この場で始末しろ！　天馬に乗らぬ天馬乗りなど怖れるに足らん！」

騎士が槍を構え、周りの射手もゆつくりと弓を掲げて矢を番い始めている。

来るのか——身構えたシャニーだったが、騎士はふいに射手達の前に構えた槍をかざして待ったを掛けたではないか。

「……それとも、その剣を捨てて俺の下に来るか？」

粘着質な虫唾の走る視線を馬上から舐めるように浴びせてくる。柳眉を吊り上げて睨んでいたシャニーの口元が、ギリつと怒りを噛み砕いた。

「もう……許せない——!」

聖天騎士団相手に武器を振るうな——そう部下に指示したはずだが、これ以上は辛抱ならない。イリア騎士にも係わらずイリア民を苦

しめ、挙句葬ろうとした事を見過ごすことなど。

剣を握り直して顔の前に掲げ、誓いを唱えて自身に問う。

振るう剣の総てはイリア民のため。この剣は、守る剣か——

「天馬騎士団 第十八部隊長シャニー、参る!!」

号ぶ剣を陽に構え、鋒が後ろに流れるほどの電光石火で騎兵目掛けで一気に距離を詰める。

それを射手が黙って見ているはずがない。一斉に弓を引き絞り始めた。

「蜂の巣にしてやる!」

陽の構えのまま一点突破に駆け抜け、照準を合わせる間を与えない機敏な身のこなしは流星か。若き隼の貫く様な眼光が射出前の僅かな目の、腕の動きを見切つて飛び込んだ。

「避けただど?!」

渾身が外れて雪原を抉る。その横を飛ぶように駆けて来る白き騎士の鬼火燃える眼が迫る。射手は驚愕を叫び、堪らず防御姿勢をとつた。

「アインスの風、イクシード・アクセルの青嵐!」

すれ違いざまの一閃。既に次を捉えたか、描いた弧を突き破るが如く吹き抜けた青き颯は、もうあんなに遠くにいるではないか。その刹那、時まで斬れた様に遅れて襲う激痛。右腕と足を押さえて射手は倒れて転げまわった。

「くたばれ小娘!!」

怒声と共に射手の照準を察知した第六感が横手へ振り向く。三人が横腹を狙って引き絞っているのが見えた。そちらに意識を残しながら正面を一瞥すれば目の前には林。刹那高く響いた弦の弾ける音。一発では終わらない。三人がかりの一斉掃射が突っ込んでくる。間一髪で木の裏へ滑り込んだ。直後に聞こえる幹へ突き刺さる音からするに、浴びせられた矢は十を下らないか。

(クソツ、アーチャー三人なんて流石にキツイよ。どうする……)

何とか身を隠したが長くは居れない。とは言え、いくら矢躲しを心得ていたとしても三人係りをそう何度も相手など出来ない。



カンツ——頭を預けていた木の幹越しに、鋭い音が衝撃となつて襲つて来た。思わず顔をしかめて目を眇める。

「大人しく出てこい！……そこに居るのは分かっているんだぞ！」

何度も劈く音が耳を崩してくる。音はどんどんキンと響くようになってきて、狙いが絞られてきている事を伝えてくる。

（落ち着け……相手はアーチャーだ。少しでも時間差を作れれば……）

胸元のロケットを握り締めて大きく息を整える。

弓は両手を使う武器。足か、どちらかの手の腱一つ傷つけることが出来れば無力化できる相手。剣技で一気に近づけさえすれば片が付くはず。

コンツ——再び矢が幹へと突き刺さり、頭上から木に積もった雪が落ちてきた。

（——これに賭けるしかないか！）

一か八かだ。アーチャーは距離を詰めながら包囲し始めている。どの道このままでは蜂の巣だ。

今だツ——また一本、威嚇射撃が幹に突き刺さったタイミングを狙ってシャニーは幹へ渾身で突っ込んだ。

「何?!」

噴き上がる雪煙。木の上の雪が崩れ落ち、それが連鎖を呼んで周りの木々の雪が滝の如く雪原へ雪崩れ込む。

完全に標的を見失ってアーチャーたちは焦燥をあたりへ突き刺した。

「くそつたれ、どこに行きやがった?!」

「後ろだ!!」

仲間へ叫んだ時には、霞と構えた剣を一閃せんと渾身を込める紺碧の瞳が目と鼻の先まで迫っていた。いつの間に目の前に——身構えた時には既に颯の如く消えていた。

「<sup>ツヴァイ</sup>の颯、<sup>シリオン・ミーティア</sup>万華の流星!!」

声が遅れて聞こえるほどの疾風迅雷。疾きこと風の如く、三人の射手は現れては一閃し飛び出していく太刀風に為す術なくその場に伏

した。

後はお前だ—— 相対する騎士へシャニーは再び陽の構えを取る。

「小娘が味な真似を。さすが部隊を預かるだけはあるな」

わずか数分の出来事に騎士は焦っていた。もう自分以外に誰もいない。

迂闊だったか。天馬騎士など、地上に居れば丸腰でただの村娘だと思っていた。このような剣を扱う天馬騎士など聞いたことが無い。おまけにレフテイなど相手にした事も無かった。

「無駄な抵抗は止せ。俺の女になれば、今ならヴァルプルギス様に報告しないでおいてやる」

だが、状況的有利は変わらないはずだ。何より、こちらにはカードが何枚もある。既にこの女は契約違反を犯した身。もはや後ろ手に縄で縛ったも同然—— そう考えていたのは彼だけのようだ。

シャニーは鋒を向けると嘗め回すような声を払い除けた。  
「ヴァルプルギス様に会わせろ！ お前じゃ話にならない！」

「ならば分かせてやろう！」

突撃して執拗に馬上から槍を突き向けてくる。

さすがに歩兵と騎兵、剣と槍では攻め込むことはできない。半身になって相手の槍を避けてはいるが、どんどん後ろに押されていく。

（ちっ、槍相手に剣で戦う事になるなんて！）

苦手な右の槍。おまけに騎兵が扱うロングスピア相手とは最悪の条件だ。位置取りに神経を研ぎ澄まし、霞に構えて避けながら隙を窺う。

霞からの後の先を狙っても、浅い位置では馬上の男までは届かない。青髪が宙に舞う。一方的にやられるばかりで騎兵の声にどんどん驕慢が乗る。

「どうした！ 逃げるだけか！ 槍に剣で挑むなど愚かな奴！」

背後には林が迫る。追い詰められてしまえば一卷の終わり。この足が止まった時が決着の時。

眼についた天性のバネで粘着質に襲う槍の尽くを避け、突き向けら

れた槍に剣を打ち付けて一歩前に踏み込んだ。終わりだッ——  
悪あがきの様な反撃に騎士も一歩引き、馬に突撃を命じて渾身を揮う。

(今しかないッ、行くぞー！)

それを柳の葉のように躲したシャニーは、林を前に馬が避けようと横腹を見せた瞬間を逃さなかった。

刹那に馬の左脇——槍の死角に滑り込む。慌てた騎士が覗き込んだ時には反抗の一撃が切り裂いていた。

「三の風ッ——エクリプス・カレイド逢魔の閃光!!」

悪夢を払う一閃。まなじり 眦決した青き隼の眼が、脇構えから騎士の喉めかけて天を衝く。

ザンツ——  
鋒が煌めき、視界に万華鏡の如く星が走った騎士は一撃で馬から転げ落ちた。立ち上がろうとするが、呻く顔へ鋒を突き付けられ、怒声が降り注ぐ。

「まだやるか!」

喉をやられて声が出ない。こんな若い娘を前に一部隊が全滅するなど許されるはずもない。何とか立ち上がろうとする騎士だが槍も手元に無く、もはや為す術がなく俯いた。

ひとまずの戦闘を終え、シャニーは剣を払い鞘に納めた。問題はその後だ。

(この事態をヴァルプルギス様にお伝えして止めてもらわないと)

何かの間違い——きつと現場の暴走に決まっている。歪んだ悪夢の様な光景に早く終止符を打ちたい。まずは飛んで行った相棒を探さなくては——

「いやあ、お見事ですな」

その時だ。どこからともなく響く拍手。久々に聞いた気がする木管楽器のような深みのある声。

はっとして振り向いた先に居た男に、シャニーの眼が見開いたまま固まった。

「さすが天馬騎士団随一の剣の使い手」

煌びやかな法衣をまとった金髪の司祭——フェリーズだった。

## 第9話 紅血の思慕（前編）

少年に剣を振り上げた連中を鎮めたシャニーは剣を収めた。

こんなものは現場の暴走に違いない。筆頭騎士ヴァルプルギスに報告して一刻も早く是正してもらわねば。

まずは少年を乗せて飛んでいった天馬相棒を探すべくホイッスルを吹こうとした時だった。

「いやあ、お見事ですな」

どこからともなく響く拍手。久々に聞いた気がする木管楽器のよ  
うな深みのある声。

はつとして振り向いた先に居た男に、シャニーの眼が見開いたまま固まった。

「さすが天馬騎士団随一の剣の使い手」

煌びやかな法衣をまとった金髪の司祭——フェリーズだった。

突然白の世界に現れた金色の司祭。一体どこから……いや、いくらなんでもタイミングが良すぎる。まるでずつとどこかから見ていたような。

司祭らしい柔和な笑みはどこかわざとらしく、フェリーズは両手を広げて困惑をありありと示してくる。

「しかし少々手荒過ぎませんか？ 我が騎士団へ剣を向けるとは驚いておりますよ」

今更ながら、とんでもない事になってしまった。決定的な場面を見られてしまい、腹の中がギュッと搾り上げられる様な感覚に陥る。明確な契約違反を、あろうことか契約主の前で晒したわけだ。

どうしたら良いか……焦燥に視線が左右していたシャニーだったが、拳を握って一歩前に出た。元から肚を括っていたはずだ。これは同時にチャンスでもある。

「開拓の従事者はエトルリアの囚人と聞いていました。しかし、見るからにイリア人です。それに、彼らへの暴行はイリア連合で取り決めた盟約違反じゃないですか。どう言う事ですか！」

現場が暴走して主の思惑と違う方向に進むのはよくある事。フェ

リーズが指示した訳では無いと信じたい……。もしそうなら、あの牢獄に閉じ込められている人たちを救えるはずだ。彼らの顔一人一人を思い出しながら、ありったけで叫んだ勇氣。

「なんと、それはそれは……大変申し訳ない」

聞くや否や、フェリーズは目を真ん丸に見開いて、さも驚いたと言わんばかりのジェスチャーを見せて頭を下げだした。

締め上げられそうな心が少しだけ救われた気がする。

なら——そう口を開こうとしたところへ被せる様に続けられた彼の言葉は狂気にすら聞こえた。

「そのような誤った情報を提供してしまい申し訳なく思います。ですが、我が騎士団では修行の一環なのですよ」

「修行?」

にわかには受け入れがたかった。まるで想定もしていなかった言葉に眉を顰めて聞き返す。

「貴女も神を信じなさい。この痛みはいずれ、イリアを支えるものを創り上げる」

一体、この司祭は何を言っているのだろうか。シャニーの視線が左右に振れる。

どう考えてみても、質問に対する回答にはなっていない。無理やり紐づけようとすれば——否定なきは肯定。

彼は大きく曇天の空へと両手を広げて静かな、それでいて壮年者の威が備わるような堂々とした深い声で語りかけてきた。

「ここに映っている光景はその為の試練。神はその功徳をずっと見守っておられるのです」

神による救済を求めて集まった者たちが、一体どんな思いをしているのか、この司祭は知っているのだろうか。まるで自分たちの思想に酔っているかの様な満足感溢れる柔和な顔。

このままでは濁されて終わってしまう。また一步距離を詰めながら叫ぶ。核心を突くしかない。

「エリミーヌ様は全てを愛せと説いているはず。こんな……子供に鞭を打ったり剣を振り上げたり、とてもそうは見えない！ お願いしま

す。どうか一度調べてください。ここで行われている事が、フェリーズ様の望んだものなのか！」

敬虔かどうかと言われたら分からないが、小さい頃から教会に行つて説法を良く聞いてきた。でも、この司祭が言うような事を聖女の愛だと説いたものは聞いたことが無い。

(お願い……間違いだつて言つて——)

「貴様、無礼であるぞ」

願いは冷然とした声で切り払われた。

それまで主の後ろで黙っていたヴァルプルギスの鋭い紫紺の眼光が、この距離でも突き刺してきて鳥肌が立つ。

「シャニーさん、罪を重ねる事はお止めなさい。これ以上はテイト団長に報告しなければいけないくなる」

フェリーズはシャニーへ最終警告を発した。彼からすれば、十分な温情を見せているつもりだ。普通であれば、彼らと接触を凶つた時点で問答無用に拘束するところ。

彼女の場合はもう少し様子を見なければならぬ。柔和な、それでいて重い口調で諭すように語りかける。

だが、凜と構えた青髪の騎士は押し付けられた温情を跳ね除ける様に手で払ってきた。

「元より団長には報告するつもりです。これは人道に反しています」

——罪深き者は自ら上がり、舞台は齊うととの

柔和の下に滲む嘲りが口角を吊りあげる。どうやら、今回はイドウヴァの杞憂と言う訳では無かつたようだ。それならそれで都合が良いというもの。

「フェリーズ様、ここはお任せを」

「フェリーズ様、お願いです！ あの人たちを助けてください！」

主の前に出たヴァルプル魔女ギスが剣を抜く。シャニーはフェリーズの目をキツと見つめて懇願を叫ぶが、彼は司祭の笑みを浮かべるだけ。

代わりに返ってきたのはヴァルプルギスの凄まじい闘気。氷のような無表情から突き刺してくる眼光だけで威圧され、堪らず一步退

く。

その時だ。西の空に天馬隊が見えてきた。

騒ぎを聞きつけたルシヤナ達が大慌てで駆けつけて来たのだ。ルシヤナは到着するや瞠目してリーダーを呼んだ。

「シヤニー！ 何してるの?!」

倒れる騎士、対峙する筆頭騎士。どう曲解しても良くない状況であることは誰の目にも分かった。問いかけてもリーダーからの答えは無い。

振り返る事など、シヤニーには出来なかった。ちよつとでも視線を切れれば、この距離では気づいてから抜刀しても手遅れになる。剣を握り突き刺してくる眼光だけでも恐ろしいほどに伝わる闘気。

すつと鋒を向けられてシヤニーがまた一步退く。ヴアルプルギスは静かな、だが重い威圧感を纏った言葉を投げつけてきた。

「貴女らに告ぐ。先ほど逃亡を幫助した我らが領民の返還を要求する」

何が起きたのか。リーダーが何をしたのか、ルシヤナは大方を理解して苦虫を噛み砕いたような顔をした。あれだけ警告したのに……。

だが何故か、リーダーの背へ湧きあがったのは怒りでも落胆でもなく安堵。ずつと嘘をつき続けてきたのは皆同じ。

今まで彼女がやってきたことを傍でずつと見て、共にここまで歩てきた。その彼女が決を下したと言うなら、もう肚を括るしかない。

シヤニーも覚悟を決めていた。フェリーズが筆頭騎士を向けてきた意味は一つしか無い。それでも、己の誓いに嘘について退く事はどう出来ない。

ロイの想いに憧れ、自分なりに誓いを果たして彼との約束を守ってきた。今回も頑張ったと胸を張って手紙に書くには——もう逃げる訳には行かない。胸元のロケットを握り、彼に心の中で呟く。

(ロイ様、約束守って見せるよ。だから……帰ったらいっぱいお話聞いてね)

生きる。生きて生きて、いつかきつとフェレに——その約束を果たすためには目の前の絶体<sup>悪夢</sup>絶命を払わねばならない。

一縷の望みをかけて一步踏み出し、ヴァルプルギスの目を剣の如く鋭い眼差しで睨み返す。

「寛大な処置をしていただけなら」

「勘違いするな。貴女に意見する資格はない。血か死か——いずれかだ」

賽は投げられた。左手が剣を握り、静かに鞘から引き抜かれる。鋭くこすれる金属音が雪原に響き、シャニーは顔の前に剣を掲げた。

剣に彫られた己の誓いを心の中で唱え、その眼は真つ直ぐヴァルプルギスを捉える。

——断固<sup>徹底</sup>、拒否<sup>抗戦</sup>!!

絶対の騎士の眼光を跳ね退ける様に、コバルトブルーの瞳が再び鬼火を燃やして剣を払った。

「みんなごめん。あたし、やっぱり我慢できなかつた」  
「もう遅いよ」

脇に剣を構えてルシヤナ達に声をかけると、彼女からは応と共に呆れ笑いが返ってきた。

「あいつらめっちゃ殺る気の日してるじゃん」

ここでシャニーが剣を退いたところで、あの騎士も一緒に降ろすとはルシヤナには到底思えなかつた。相手が剣を振るう大義はいくらでも揃っている。

こうなれば隙をついてこの場から逃げる事を考えなければ。だが、我慢してきたのは同じ。逃げる前にたつぷりと礼をさせてもらおうかない。

「よかろう。ならばこの場で全員断罪してくれる」

鋒をシャニー達へ向けるヴァルプルギスから放たれた死の宣告。

フェリーズはすでに彼女達へ向けて十字を架け、天への祈りを捧げ始めた。無知とは恐ろしいもの。まさかヴァルプルギスに戦いを挑むとは。十分に時間は与えたが、彼女たちは登った。斉いし舞台へ。知る事になるだろう。罪人へ神の救済は決して訪れないと言う事を。

「貴女もまた罪人であると言う事を知りなさい。貴女にも、進むべき



道を示してあげましょう」

「自分の進む道は自分で決める！」

威勢の良い言葉が返って来た。面白いものだ。いつから自分が敷かれたレールの上を走って来たのか、気づいていないらしい。

「そうですね。観測させてもらいましょうか——資格があるのかをね」

大いなる手の上で彷徨う、若き剣術騎士が必死にもがく様を見下ろすような目で笑い、その手がぱつと彼女を突き刺した。

「ヴァルプルギス、行け！」

「聖天騎士団 筆頭騎士ヴァルプルギス。推して参る！」

主の命を受けて遂に立つ絶対の騎士。彼女は咆哮と共に一歩踏み出し上段から斬りかかってきた。

## 第10話 紅血の思慕 (後編)

「聖天騎士団 筆頭騎士ヴァルプルギス。推して参る！」

主フェリーズの命を受けて遂に立つ絶対の騎士が、一步踏み出し上段から斬りかかった。

「ルシャナ！ ミリア！ 援護お願い！ レンは増援に警戒して！」

「イエス、リーダー！」

仲間に指示を出し、シャニーもぐつと足に力を籠めて突っ込んでいく。

眼にバネでもついているかのような動きで重そうな一撃を躲し、翼で翔けるが如き軽やかな身ごなしで相手の懐に入り込む。

先手必勝と神速に飛び出した下段からの一閃。斬り上げた剣がヴァルプルギスの剣とぶつかり合って火花が散る。一閃で終わらない連撃を叩き込んでも、そのどれもが通らない。

一瞬の隙を突いて連撃の雨から抜け出したヴァルプルギスが後の先が狙うが、シャニーも研ぎ澄まされた直感と抜群の瞬発力で躲し、更なるカウンターを電光石火に浴びせにかかる。

「八英雄と斬り結べるとは、礼を言うぞ！」

激しく剣をぶつけ合い、硬い金属音が瞬きを挟む間も無くひっきりなしに弾ける。まるで演武の様に火花があちこちで散る中でも、ヴァルプルギスは不敵に笑っている。見下したような、全てを見透かしているような目から溢れる余裕と威圧。

真正面から上段同士の激突。剣が悲鳴を上げながら互いの根元まで押し込み鏝迫り合いになっても、それを崩さず喋る余裕さえ見せてくる。

「その名はあたしを示すものじゃない。お願いです、剣を退いて！」  
「先に手を出した分際で言う事か！」

力は圧倒的にこちらが上。ヴァルプルギスはシャニーを押し込み払い退けた。刹那、その紫紺は吃驚して一步退いていた。青の騎士の何と軽い足さばきか。まるで妖精が舞い飛んでいるかのように、雪原を滑る颯がもう距離を縮めて斬り上げてくる。

次の手を常に先手の一閃で潰しにかかる剣技に、彼女は防戦に追い込まれている。

だが、あの剣技に手を焼いているのはヴァルプルギスだけでは無かった。あまりの連撃に、仲間たちは入り込む余地を探していた。シャニーの動線を邪魔する事が怖くて踏み込めない。

「目標捕捉……エルファイア発射します」

魔法であれば瞬時に距離が空いたタイミングを狙うことが出来る。

ニイメの下で修業を積んではや七か月。才能を開花させたレンの高い魔力で錬成された炎。緻密に予測し計算された軌道に乗って、空を焼き焦がす緋色の弾丸はごうつと音を立てて地面に突き刺さった。「随分軽く見られたものだな」

確かに捉え、今も噴きあがる爆炎の中に騎士の影が見えているのに、聞こえてくる冷淡な声。

「そのような低級魔法が私に通用するか！」

マジックシールドで跳ね返されていた。自身の最高の技をいとも簡単に押しつけられ、レンは悔しそうに小さな唇を噛む。

相手は神殿騎士。魔法に対する心得も十分ということか。今の自分にはこれ以上の魔法が無い。一体どうすれば……やむなく杖に持ち替える。

視界には再び焰を吐いて斬り結ぶ二人が見え、視界端から猛烈なスピードで彼らへ突撃する天馬が風を裂いて行った。

「喰らえー！ 必殺のシュワルベ・クラール!!」

シャニーが相手の行動を封じているところを逃すものかと、渾身の槍撃でルシャナが狙う。天馬のスピードと槍の重さで増した破壊力はこのチームでも随一。

だが、歴戦の筆頭騎士と初陣の部隊。天に光る槍を横目に捉えたヴァルプルギスに焦りは無く、寄せ集め集団を鼻で笑った。

「ふん、どれだけ素早く動こうが——無駄だッ」

シャニーを再び払いのけたヴァルプルギスは突撃してくる天馬をきつと見据えておもむろに剣を脇へ。

「危ないルシャナー！」

その構えにシャニーは叫びながら踏み込んだ。いくらなんでもこの距離では相手に剣が届かない。低く構えられた剣が描くだろう軌道へ、咄嗟に自身の剣を無理やり突っ込んだ。

キイーン——耳を劈く高い音が弾けた刹那、正確に斬り上げた燕返しが差し込まれた剣とぶち当たって軌道が変わり、ルシヤナの顔の目の前を掠めていった。

「技を読むとは。なるほどさすが。これは……面白い」  
「あいにく、あたしも使う剣技だからね」

何とか仲間を守ったが、後先考えない行動はダメージが残った。手が痺れる……。剣先で渾身を受けてしまい、剣を跳ね飛ばされ無い様にするので精一杯だった。

再び上段同士の打ち合いからの罅迫り合い。ただでさえ左手に力が入らないのに、十五の自分と二十歳を優に超す相手では力勝負に持ち込まれたらどうにもならない。

さつと身を退き、相手が渾身を振るえない距離、位置を第六感で見抜いてカウンターの一闪を浴びせる。

「すげえ……、あの騎士を押ししてる」

抜群の身体能力が流れるように剣を浴びせる様はまさに疾風迅雷。それを上空からミリアはあつけにとられて見下ろしていた。シャニーが本気の剣を振るっているところを初めて見た気がする。

「早く、攻撃」

「そんな事言っちゃってあんな密着してたら撃てないよ！」

静かでもはつきり怒っていると分かるレンの声に背中を押されるが、別に遊んでいる訳では無いとクロスボウを突き上げた。何度狙いを定めても、照準の中へ一緒にシャニーが入ってしまいどうしても引き金を引けないのだ。

相手は聖天騎士団の筆頭騎士。手の内などすつかり見切られているようだ。剣を打ち合いながらも、どれだけミリアが移動してもシャニーの背を盾にするように彼女も動いている。

「さすがだな。この私の剣を抑え込むとは」

一撃喰らって後ろに退いたヴァルプルギスの口元が不敵に吊り上

がる。

噂には聞いていたが、今のままでもこれ程なら主が興味を持つのも頷ける。今も青の瞳は闘志を全く失っていない。

「その舞飛ぶような動き、称賛に値する。貴女に我が騎士団から『妖精』の称号を贈呈して進ぜよう」

肩で息をしながらシャニーも右手で頬を拭う。一筋の赤い線が滲んだ。

久しぶりだ。ここまで自分の剣が通らない相手は。ようやく一撃与えても効果的な一発には至っていない事であり伝える紫紺の瞳。聖天騎士団最強の名は伊達ではないと言う事か。

「どうして！　なんでこんな奴隷を扱うような事を」

「イリアの発展……その他に何があるッ——」

「くっ?!」  
体力の差が出始めているのか、先手をヴァルプルギスに許す。再び激しい打ち合いを挑まれてギリギリと二人の剣が根元で食いあい始めた。

照準を絞り続けるミリアだが、やはりこの状況ではとても勇気が出ない。

「聖女は犠牲を否定はしていない。フェリーズ様の邪魔をするなら同胞とて容赦せん！」

耳を劈く刃同士の齧り合う音と共に力押しの一閃でシャニーが押し飛ばされ、彼女は仕切り直す為か距離を空けた。今だッ！——  
——一瞬を逃さずミリアは引き金を引く。

「いけええ、マグナムショット！」  
空を裂く灰色の弾丸がヴァルプルギス目掛けて牙をむく。

「なっ」  
避けきれず顔を掠めたか、ヴァルプルギスの顔に苦痛が走り視線が逸れる。こんな千載一遇を逃すものか——電光石火に飛び出したシャニーは飛び上がると上段に構えてヴァルプルギスの脳天を狙った。

「終の太刀ツ、黎明の月光!!」

避ける事はおろか、剣で弾くにも近すぎる。

——決まった！

皆がそう思う間合い。だが、迫る剣を前にヴァルプルギスは狼狽も絶叫も見せてこない。

「アブソルト・シルト——」

おもむろに彼女は指輪を填め<sup>は</sup>、一つ唱えて剣を地面に突き刺した。唱えるやヴァルプルギスが填めた指輪から剣へ白きエーギルの波動が走り、彼女とシャニーの間に突如そり立ったのは巨大な氷の銀盤。渾身で繰り出された斬撃が氷塊を砕くが、シャニーも反動で跳ね飛ばされた。思わぬ出現に態勢を整えないまま宙へ弾き出され、着地に失敗して体を打ち付けている。

誰もが目の前の光景に瞠目し、口から声にもならない乾いた驚嘆が漏れる。

「レン、今の何?!」

「不明。精霊の加護を受けた魔道具と推測」

「精霊?!」

上空からでもはっきり見えた。突然に雪原から氷の盾が飛び出したのだ。

やったと思ったのに。天国から地獄に叩き落されたかのような驚きをレンにぶつけるミアは、返ってきた答えへ眉間にしわを寄せた。精霊……まただ。ソルバーン以外にもいるというのか。

「ここまで私に使わせるか。ならば……」

右肩を押さえながら立ち上がるシャニーを正面に見据え、ヴァルプルギスはどこか嬉しそうに目を細くしている。

彼女は指輪を外すと別の指輪を取り出して静かに、確かに填めた。

「確認しました。あれはセチの祈り。精霊の加護を受けた宝輪です」

レンの分析を吹き飛ばすような怒声があたりに響く。

「いいだろう。ならば敬意をもって我が戦技をお見せしよう！」  
ヴァルプルギスが吼えた途端だ。

ドクン——ツ

「うぐつ?!」

シャニーが思わず悶絶を吐いた。頭を鈍器で殴打されたかのよう  
に突然に揺れる視界。

(一体何が、——何が起きた?!)

パニックに表情が固まる彼女に追い打ちをかけるように襲ってくる。  
ズキン、ズキンツ——!!背中から胸へと突き破られる感覚。

「かはっ……」

何かが脈打つよう思わず胸を抑えたが、内から響く疼痛は膨らむ  
ばかり。今にも体が真つ二つに千切れてしまいそうな痛みが奥から  
ジンジン響いてくる。眼が、こめかみが、胸が——破裂しそうな  
程疼き、胸骨を両手で引き裂いて何かが飛び出そうとする。

「これが……『魔女』の意味か……」

それにまだ気づいていないルシヤナ達空に居る者の視線は、ヴァル  
プルギスに釘付けされていた。

エーギルを指輪に注ぐや否や辺りには烈風が吹き荒れ、迸る風の渦  
にそれだけで空にいる者たちは吹き飛ばされそうになる。必死に耐  
えて目を開けると、そこには風のエーギルを満々と湛えて威風堂々と  
構える騎士。

様々な精霊の加護を用いて魔法剣を操る神殿騎士の姿に、ルシヤナ  
は二つ名の意味を知ってごくりと息をのんだ。まだ、何も始まってい  
なかったのかと。

「さあ行くぞ『妖精』! 貴女に我が剣、破れるか!」

(消えた?!)

シャニーが殺気に気づいた時にはもう目の前へ風の騎士が迫り、上  
段から剣を振り下ろされていた。剣で反応する余裕もなく、頼みは直  
感と瞬発力だけ。青髪がぱつと宙に舞った。

(な、何なのこの胸の——痛み……)

胸が突き破られそうだ。直接剣で中を抉り出されている様に背中  
が引きつる。迫る剣が……ヴァルプルギスが近寄るだけで激痛が走  
る。悶える程の痛みに耐えて斬撃を避けてはいるが、刀身が目の前を  
走る頻度が増えてきた。このままでは——

「怖気づいたか！ 先ほどの動きはどうした?!」  
「ぐあつ」

突きあがる痛みを堪えて受け止めたはず——気づいたら体が宙を舞い、木の幹に打ち付けられていた。頭を打った衝撃と、腕に走る痺れと、胸を貫く激痛と。

立ち上がりを襲う疾風の一撃を再び剣で受けた紺碧が瞠目する。ヴァルプルギスは指輪を介して集めた風のエーギルを刃に乗せていた。その剣圧で吹き飛ばされていたのだ。

だが、二度も同じようにはいれない。受け身を取り反撃に出ようと剣を構えた時だ。

「なっ?!」

またしてもシャニーの眼が驚愕に見開く。完全にヴァルプルギスに読まれていた。

「逃がさん!」

刃に乗るエーギルが一段と波打ち、空を斬ると剣圧がかまいたちとなつて次々シャニーを襲う。

直撃を許し絶叫する姿に、ヴァルプルギスは眉間にしわを寄せていた。悲鳴を上げたのは明らかに被弾する前。

(この娘……まさか……?)

悶絶しながら避ける素振りもなかった。

風の剣をまともに食らい、地に突き刺さる剣。寄り掛かるようにして膝をつく彼女に、ヴァルプルギスは何かを察してセチの祈<sup>指</sup>りを指から外してみた。金縛りが解けたかの様に、真っ赤に染まった顔をもたげてくるシャニーも明らかに困惑している。

再びセチの指輪をはめ、エーギルを連結させた途端だ。また絹を裂くような声を上げて胸を押さえ始めた。

(間違いない、この娘は……)

ある程度は主から聞いていたが、今ので確信した。そう言う事だったのだ。

だから、この娘を欲しかったのか、主は。

「シャニー! どうした!」



空の上に居る者たちも何が起きているのか分からず、ルシヤナが必死に叫んで呼びかけるが、シヤニーはうずくまって腹から絞り出すような声で呻くだけ。

「大丈夫?! レン、ライブできる?」

「不要です。もう最大限治療しました」

レンから返ってきた言葉にますます膨れ上がる困惑。あれだけ苦しんでうずくまっていたのに、もう風の剣のダメージは無いなんて。

(このままじゃ……、——ヤバい………)

剣を地面に突き立て、膝を突いたまま動けない。尋常で無い量の脂汗が、顎から血と混ざってポタポタと滴り落ちていくのが見える。

一体何がどうなっているのかシヤニー自身も分からないまま、胸に腕をねじ込まれて引きずり出されているかのような激痛に、ただただ堪えるだけで精神を削がれていく。

(あの指輪を何とかしなきゃ……)

一つ分かるのは、ヴァルプルギスが装備する指輪が絡んでいる事だけ。だが、立ち上がる事もままならない今、目の前にいる騎士があまりに遠く感じた。

飛びそうな意識の中に敗色がどんどん濃くなってくる。

「そうか、ならば尚更ここから帰すわけにはいかん」

戦況を先に掴んだのはヴァルプルギスだった。これは主への手土産とせねばなるまい。うずくまる敵から敢えて距離を空け、セチの指輪と共鳴して風のエーギルを集める。

剣に掴まっている事も出来ずに、シヤニーは右手も地に着いた。脈打つものがどんどん大きくなって胸が飛び散ってしまいそうだ。敵の剣先に風のマナが轟々と渦を巻いていると言うのに、止めるどころか動けない。

(早く逃げなきゃ……)

——はっとして空を見上げた。自分を守ろうと仲間がかなり低い高さにいる。

「みんなっ……、——上空に逃げて!!」

気力で立ち上がったシヤニーは渾身で叫び、要領を得ないまま仲間

たちが急上昇を始めた。

「遅い!!」

遂に限界まで風を集めたヴァルプルギスが渾身に剣を振り切る。

「我が奥義とくと見よ。ヒュツケバイン!!」

空を裂く風の咆哮。全てを巻き込まんと引き起こされた乱気流が、稲光を伴い天高くまで渦巻く。破碎音を轟かせながら触れるもの全てを跳ね飛ばし、上空に逃げたものをあざ笑うかのように飲み込んで地面へ叩きつけた。

断罪の烈風が過ぎ去り、するりと抜け落ちそうになる剣を掴む左手。

(まだ、負けるわけには……)

咄嗟にディークから習った防護技を構えたものの、風の奥義の前ではまるで歯が立たず、シャニーはかまいたちの餌食となっていた。

もう足は立たず、意識が薄れ膝から崩れていく。何とか剣を突き刺し、奈落を前に意識が引つかかった。今この世界に精神を繋いでいるのは、剣にかかった左手のみ。

だが、その手にももはや感覚は無い。分かるのは、絵の具を溶かした様に世界がみるみる赤くなっていく事だけ。

もう、何も考えられない。何も感じない、何も聞こえない……

——せめて……声、聞きたかったよ……

気づけば、真つ赤な視界へふいに浮かんだ顔にポツリと呼びかけていた。

(ロイ様……ごめん。……あたし、約束……もう……)

こんな事なら、姉の許可が出ずとも会いに行けば良かった。二度と会えなくなるなら、あの時会いに行ったら良かった。会いたい、今すぐ……会いに行きたい。

がつくり糸が切れ、焦点を失うあおくろ濁った瞳。紅血に染まる雪原を呆然と見下ろす視界に浮かんでくるのは、会いたかったあの人の顔ばかり。悟った瞳からぼろぼろ後悔が零れ落ちた。

「どうする?…まだやるか?」

何か声が聞こえた気がする。ヴァルプルギスが近寄ってくる……。

士気折れた半開きの目で見上げた額に剣の鋒が当たる。

「今なら寛大な処置をフェリーズ様をお願いしてやっても良い」

今何と……言った？ 朦朧とする意識の中で、必死に彼女の言葉を繰り返してやつと理解した目が見開く。後ろに目をやると、仲間たちも半壊状態だがミリアがすでにクロスボウをヴァルプルギスへ向けていた。

これ以上は家族の命に係わる——部隊長として決を下す時。

「あたしたちの……負けです」

約束したのだ、あの人と。死ぬな、生きろと。

例えばどんな仕打ちを受けようとも生きて、生きて帰ろう。生きて、生きて、いつかきつとあの人に会いに行こう。生きて——……

ついに繋いでいた左手も剣から滑り落ちて雪に沈んだ。それを見届けたヴァルプルギスは剣を逆さに持ち、神速の剣への敬意を示す。

『妖精』を捕らえろ。残りの者は牢へ放り込んでおけ」

駆け付けた騎士たちに一言命じて彼女は去っていった。次なる場面へと舞台を進めるために。

## 第11話 黎き妖精

遙か彼方まで広がる白の荒野。吹き抜ける風の音が時を刻み、糸が切れてうなだれる乙女の頬を何度も切っては去っていく。

どれだけ風に呼ばれた頃だろうか。ようやくにシャニーの瞼が微かに動いた。

(ここは……?)

ぼんやりと戻ってくる視界。僅かに開いた瞼から差し込む光が眩しい。一体ここはどこなのか。光が脳天を突き刺すようで痛みが走り、少しずつ目を開けようとする頬や目の周りが引きつって動かない。顔に何か凍って張り付いているらしい。この独特の臭い——  
——血だ。ここまで来てようやく意識が追いついてきた。

(そうだ……あたし、ヴァルプルギスに……——ッ!)

一気に記憶が頭の中に流れ込んで、驚愕が痛みを引き裂いて見開かせる。戦場で降伏し、そこからの記憶が無い。

目の前には白の雪原と、自身から垂れ落ちたか点々と赤が滲む光景しか映ってこない。焦燥が意識を叩き起こすと、今まで聞こえてこなかった現実悪夢が一気に耳へ襲い掛かる。

(何か聞こえてくる……何の音? 人の声……?)

威勢の良い号令の直後、耳を劈く音と共に響き渡った声。絶望に引き裂かれた声はシャニーの瞳をビクツと震わせた。

——人の悲鳴?!

耳が引つ切り無しに訴える異常。感覚遠くまるで力の入らなかつた体が、電撃を浴びた様に顔をがばつと持ち上げる。空はいつの間にか晴れていた。

(一体ここはどこ?! あれからどれだけ経ったの?!)

武器棚が視界に入る。槍に靡く紋章からするに、あれは聖天騎士団のものか。自分の剣も立てかけてある——あのまま捕まったという事か。淡い青色の空を見る限り、どうやらまだそれほど経っていないようだが、目覚めた頭は情報を欲して体の事などお構いなしに叫び続けてくる。

(みんなは? こうしちやいられない! ——なんで動けないの?!)

気持ちがどんどん先を、先をと求めて問うが、ボロボロの体は動いてくれない。足が前に進まない、手がどこにあるか分からない。あたりを顔だけで見渡し、頭上を見上げて思わず目が見開いたまま固まった。手を縛り上げられて吊られていたのだ。もがこうとしても足元がうまく踏ん張れない。

(くそっ、こんなキツく縛られてんじゃ……——ッ?!)

再び劈いた悲鳴。正面に視界を戻すと、隣に騎士が立っていることに気が付く。

「目が覚めたか、『妖精』。大事に至らず何よりだ。少し休んでいろ」

金髪の間隙から冷然な紫紺の瞳が見下ろしてくる。まるで仲間に声をかけるかのような態度。彼女が口にした言葉は神経を搔きむしるばかりだった。

(誰のせいでみんな苦しい目に遭っているか——)

「弓兵! 構え!」

彼女が一声叫ぶ先を見て表情が固まった。

「止める!! あの人たちに何の罪が!」

「貴女に発言の権利は無い。あるのは義務だけだ。もう一度言う、休んでいろ」

撃て! ——ヴァルプルギスの一声に放たれる銀の矢。風を引き裂く嫌な音を上げて飛んでいく牙を、縛り付けられた者に避ける術は無い。貫かれ、がつくりとうなだれて動かなくなった。

「嘘……何でこんな……」

「目を逸らすな『妖精』。貴女は見届ける義務がある」

凍り付いた瞳に焼き付く嘆きの世界。引き裂かれた心から、どくどくと絶望が体中に広がって溢れ出してくる。

(何で?! 何でこんな事になってるの? 止めなきや!)

射手が牢獄に捕えていた者達を次々に処刑していく。あまりの惨状を前に困惑と驚愕で真っ白になりかける。それを律して飛び出そうとしても、ギリギリと縄が撓るだけ。そこへ浴びせられた答えが心

を打ち砕く。

「彼らは先日、貴女達へ機密情報を漏洩した。必然の罰だ」

飛び出しそうな程に目をむく。自分達が接触した、あの牢屋に閉じ込められていた者達の顔が浮かぶ。目の前で倒れていくのは、彼らなのか。あんなことをしなければ、彼らは殺されずに済んだと言うのか。

「お願い、もう止めて……」

そう祈るしか出来ない。

列の最後が倒れるとヴァルプルギスの視線が移る。

「今から反逆者共の処刑を執り行う」

彼女の視線を追って仰天した。牢獄に囚われた仲間たちと視線が合う。見る見る目から色が失われ、ギシギシと縛る縄が撓る。

(どうして?? 処刑ってそんなハズが?!)

あの場で交渉を持ちかけてきたのはヴァルプルギスだ。その彼女が今何と言った? すでに彼女の命を受けて騎士たちが動き出している。彼らが持っているのは高い殺傷能力を持つ銀製の弓だ。

(生きて帰るんだ。絶対に……。誰も取り残さない——ロイ様と……約束したんだから!)

生への渴望がなりふり構わない懇願を叫ぶ。

「待ってください! 話が違う! お願い、皆を助けて!」

「何を言っている?」

助けしてくれると言った筈だ。だからあの場で剣を捨てた。自分を信じて武器を下した者たちが目の前で殺されようとしている。涙を振り飛ばし、顔を悲痛で潰して必死に叫ぶが、ヴァルプルギスから返ってきたのは冷たい微笑みだけだった。

「フェリーズ様には報告した。その結果を執行するまでだ。安心したまえ。主は貴女には興味を示された」

不敵な笑みが睥睨してくる。突き落された感覚に色を失った顔が再び仲間たちを見つめる。だが、牢獄から出されようとしている彼女たちは何があったか再び押し込められて固く鍵が閉ざされた。

間を置かずに走って来た騎士がヴァルプルギスの許で膝をつく。

「ヴァルプルギス様、先ほど逃亡者を確保しました」

誰の事を言っているのかすぐにピンと来た。あの子は逃げきれなかったらしい。腕を組みながらヴァルプルギスは顔色一つ変えずにいる。何をしようとしているのかすぐ分かってありっただけで叫ぶ。

「やめて！ その子はあたしが勝手に天馬に乗せただけだ！」

「そいつを処刑台へ乗せろ」

どれだけ泣き叫んでも騎士の氷のような心が動くことは無かった。目の前で絶望と言う名の舞台が進んでいく。この光景を止める力があつたなら……。

少しずつ舞台へ近づき、そして少年はついに上がった。目隠しをされ、射手が静かに弓を構える。

眼下の牢獄からも、鉄格子に手をかけて少年へ視線を送り口々に叫ぶ声が響いてくる。シャニーが横からどれだけ叫んでも、それを無視するように氷の騎士はあざ笑う。

「お前たちも見ていることだ。次はお前たちがこうなる」  
「構え！」

号令に従い構えられる弓、番う矢。銀の矢はまっすぐに少年へと向けられて、ヴァルプルギスが掲げた手は無情にも振り下ろされた。弦が弾ける音と共に飛び出した粛清の一矢。シャニーの悲鳴が響き、その場に倒れる子供。

「あ……ああ……ッ」

声にならない崩れた声が漏れる。倒れた少年。周りに広がる赤。血と死の舞台は後悔を要求し、それは絶望を呼び寄せた。

(この戦いが全部……無駄だったって言うの……)

要らない事をしなければ誰も死なずに済んだかもしれない。抱えきれない正義を振りかざして一体どうなった？ 全てを悪夢へと突き落とし、皆の人生を変えてしまった。罪悪感が一気に押し寄せ、色を失った顔から絶望さえも奪っていく。

その時だった。邪魔なものが払われたかのように、真っ白に燃え尽きた心の奥から声が出た。

——今こそ風を纏い、黎明の剣に魂を委ねなさい

胸を引裂くズキンと脈打つものが再び襲い掛かって来た。その間隔はどんどん早くなつてきて脂汗が噴き出し、今にも破裂しそうに目が血走る。

(…、この声…)

聞き覚えのある声。間違いない。これはあの——仮面の魔術師と戦った時に聞こえてきた声だ。殺せ、殺せと囁きかけてきた悪魔の声。

だが、血走った目は怯える事など無かった。声に呼応する様に胸を脈打ち、突き破つて出て来ようとする何かに呼びかけた。

(この際、何でもいい…ツ。悪魔だろうが魔剣だろうが…この悪夢を払えるって言うなら——何にでも委ねてやるツ)

絶望で真っ白になった心はもう抗うだけの力はなく、内に生まれた激情の鼓動が為すままを受け入れるしかなかった。むしろ受け入れ、そつと目を閉じたら心地良くさえなつてきて意識が遠のいていく。

(この感覚…ツ?!)

幼いころに一度走った感覚。それを思い出した時にはもう戻れなかった。鎖の切れた扉を押し破り、燻るように漏れ出し始めたエーギルの波動。あわくろ 黎く濁った波動が周りの景色を歪め始めたその時だった。

「ウオオオオオオオオオオツ——!!」

まるで爆発でも起きたかのように膨れ上がったエーギル。天を衝くが如く頭上に噴きあがったかと思うと憤怒を吼えて飛び出し、武器棚に置いてあった剣をぶんどった。

強烈なエーギルの流れに足元を取られ、居るはずの姿がなくなり縄が吹き飛んだ様子をヴァルプルギスが見つけた時にはもう遙か遠くにいた。颯は目にも追えない光速で処刑場にいる騎士たちへ突っ込んでいく。

「やめろおおおっ!!」

「何だ?!」

「どわっ?!」

激痛が走り悲鳴を上げる騎士。仲間の絶叫に視線を向けるよりも



先に走る背中への灼熱感。その場に十数人いる騎士たちが次々に背中へ一太刀を浴びせられて倒れていく。

「なっ、何が起こっている?！」

ヴァルプルギスの視界に映るのは青い波動が騎士と騎士を結ぶ軌跡だけ。軌跡が風と消えるわずか数十秒の内に、数十人いた騎士たちは烈風に飲まれ、全で一撃のもとに倒れていた。

それでも、激情の青焰は勢いを留めるどころか旋風の如く引き返してくる。

「くっ……ッ。これが風の……ッ」

三十超を斬つてまだ足らぬ狂乱の地吹雪が、雪煙を吹き上げながら大地に燐火を走らせて真つすぐ突っ込んでくる。ヴァルプルギスはたじろぎながら剣を引き抜いた。

「ヴァルプルギス——ッ!!」

吼え狂う烈風がヴァルプルギスに食らいつく。

見えなかった。かろうじて受け止めた直感。上段から振り下ろされた袈裟斬りがどんだん剣に食い込んでくる。

「ぐおっ、何だこの力は?！」

目の前で牙をむく相手の姿にざわざわと募る焦燥。

噴き上がる烈風で煽られた青焰エーギルを轟々揺らめかせ、自身の青さえも燃やし尽くした白銀の髪に魔力滾る瞳は燎原のごとく煌々と翠緑を滾らせる。

青の騎士とは似て非なる苛烈なブリザードが執拗に剣を打ち付けてきて一歩、また一歩、絶対の騎士の守りが弾かれる。

(このままでは危険だ)

激しく打ち付け、後ろへ弾き飛ばされた。好機にセチの指輪を装着しようとして、仰天したヴァルプルギスは吹き飛ばされて転がった。剣にまとわせてシャニーが飛ばしてきた風のエーギル。それが生み出す剣圧に巻き込まれていた。

(ありえない。——避けたはずだぞ?!)

理由を探している余裕などなかった。煌々とターゲットだけを凝視してくる翠緑。まるで獣かのような声をあげながら上段から渾身

を振り下ろしてきた。間一髪、剣で受け止めて指輪とエーギルを連結する。反撃の時。

「なっ、セチのリングが?!」

エーギルは剣へと走ったかと思うと、相手の剣に渦巻くエーギルへ吸い込まれていった。ますます滾る青焰が剣を弾き飛ばし飛び上がる。

「四の嵐ツ、フレイア 狂咲の風花!!」

止む無くニースの指輪に切り替え絶対障壁を召喚するが、薄氷のごとく碎かれて飛び退ける時間を稼ぐだけで精一杯。

仕留め損ねた背中をがんこうけいけい眼光炯炯の翠緑が牙を剥き出しにして追う。

突然のリーダーの狂乱をルシャナ達は牢獄の中から啞然と見ていた。

一体何が起きたのか頭が追い付かない。突然青い炎が爆発的に膨らんだかと思ったら、後は鬼火が雪原を駆けて触れた騎士たちが倒れていくだけ。

何とかして彼女を連れて逃げないと——その時だった。

「遅くなったね!」

ふいに気配を感じて振り向くと、よく知る顔が手を振っていた。

「レイサさん! 無事だったんすね!」

ミリアが堪らず駆け寄ろうとするのを、レイサの横に居たお揃いの潜入服に身を包む青年が止める。

「お前ら、今助けるぞ」

「あ、あんたはシャニーが捕まえた」

「話は後だ、離れてろ!!」

懐から取り出した透明な液体をレイサが鍵穴に注いでいる。彼女からオーケーをもらうと、青年は腰を低く構えて正拳一発。轟音と共にへし折れた扉を蹴破る姿に女性陣はあっけにとられていた。

十八部隊の手を取って連れ出したレイサたちは、戦場から離脱しつつ向かうは天馬の許。もうこれ以上この場に留まる意味はない。帰っても地獄だが、ここにおいては死が待つだけ。問題は……どう止める? あの狂乱の青焰を。

「な、なんというスピードだ。これが風の……?! ぐあつ」

一方戦場ではヴァルプルギスが一方的に押されていた。先の戦いとは全くの逆。光速に叩きこまれる颯の剣を受け止めることさえできず、風に弄ばれる木の葉のよう。

圧倒する手を休める事無く、むしろシャニーの連撃は更に苛烈を増していく。

「許さないッ、——お前だけは許さないぞ!」

——殺せ。私の力を使い、その騎士を殺せ

あの声が囁いてくる。仮面の魔術師と戦った時と同じ声、そしてさつき風を纏えと言ったあの声。以前の苦い思い出が蘇るが、どこか意識が切り離されているように、体は激情に委ねるままヴァルプルギスの絶対の守りを斬り払っていた。

「みんなを返せッ!!」

「ぬおっ?!」

ガチイン——高い音を立てて騎士剣が弾かれ宙を飛ぶ。守りを失ったヴァルプルギスの鎧へ鋭く走る一閃。かろうじて召還した氷の盾もろとも吹き飛ばされ、再び雪原を転がった視界に映る影。飛び上がる翠緑が標的を捕え、剣にかける両手を握り直していた。

——殺してやる!

「終りだアアアッ」

自身の噴きあがる青焰エーギルを剣にとまとわせ、眼下で未だ立ち上がれずにいるヴァルプルギスに渾身を浴びせようと目いっぱい剣を振り上げた時だった。

ヴァルプルギスの顔の横に、主を失った剣が降って来て突き刺さる。

「かはっ……、な、何これ……」

ズギンと再び響く鼓動。骨にまで響く疼痛が胸を突き刺すや、燃え尽きたかのように翠緑が瞳から失われ、包む青焰が霧散していく。

宙で突然に体に力が入らなくなり、シャニーはそのまま地面に突っ込み転がった。

「エーギルを使い切ったか……。どうやら制御できていないようだな」

ようやく終わった。ヴァルプルギスは静かに身を起こした。燃え尽きて真っ白になった青の騎士を立ち上がって見下ろし、思わず額の汗を拭う。危ないところだった。まさかこれほどまでとは。

『妖精』を捕獲しろ」

これを配下で利用できれば計画の視界は俄然良好となる。フェリーズへの貢物としては十分な戦果だ。

ところが、背後から迫る心臓が焙られそうなほどの圧を察して彼女は振り向いた。

「待てよ『魔女』」

一体どこから、いつから居たというのか。

両手をズボンに突っ込んで勝ち誇ったような驕慢の笑みを浮かべるサングラスの大男。

配下の騎士たちはソルバーンの出現に慌てふためいた。この男の出現にはロクなこととは無い。

「何だ貴様、何用だ」

「んなつれねえこと言うなよ。ずっと待ってたんだぜ、お前が力を見せる時をよ」

聖天騎士団の筆頭騎士。二つ名を持ちイリア最強とさえ噂される神殿騎士をソルバーンはずっと狙ってきた。喰いごたえのある者なのか見極めるために。

ようやくに命を懸けた本気を見せてくれた『魔女』の顔をまつすぐに見つめ、彼の口元が再び好戦的に吊り上がる。

「持っていないなくても使えるとは面白い。さあ、俺にその力を見せてみる！」

この男はいつもこうだ。周りの状況がどうであれ、本能が疼けばその場が舞台となってしまう。

「バカを言うな、お前と戦う理由などない」

すでに業火を噴き上げてあたりを焼き尽くし始めるソルバーンに警告を発するが、一度籠が外れた炎の魔人を止める術は無かった。

「理由なんざ要らねえんだよ！ 動きが無い時まで縛られたつもりはねえからな！」

作戦上は行動を共にしているが、別に仲間だと思ったことなど一度も無い。

噴きあがる炎がヴァルプルギスの行く手を阻み、彼女は怒りに目を見開き拳を握りしめるしかなかった。ソルバーンの背後に天馬が降りてきてシャニーを介抱しているのが見えたからだ。

「ソルバーン！ 『妖精』を捕らえろ！」

「何命令してんの？ テメエ……？ あんな、喰えねえヤツには興味ねーよ」

最後の最後に、舞台が魔人によって滅茶苦茶にされて收拾がつかなくなってしまった。

南の空に飛んでいく天馬を恨めしそうに見上げたヴァルプルギスは、怒りをかみ殺すとソルバーンに背を向けた。

「総員退却だ！ 契約者をまともに相手などするか！」

「つまんねえやつだ。もつと気の赴くまま愉しもうぜ？」

せっかくの舞台から降りていくヴァルプルギス達にソルバーンは舌打ちしながら空を見上げる。持っていないのではどのみち齒ごたえがあるだけか。

「……しかし……」

視線をおもむろに南へと向けた。

「こいつは面白くなってきやがったぜ、——セチ風の妖精さんよ」

見上げた紺碧の先に映る白き影。サングラスを外してギツと見つめる魔人の眼はニンマリと同類の目醒めを見送った。

〈第二章 斉いし舞台 終〉

### 第3章 恋歌千里を翔け

#### 第1話 内憂外患

——エレブ新暦 1000年 12月

真冬のイリア。猛烈な吹雪が凍り付いた窓を叩きつける。すでに固まり切った窓はどれだけ風に吹かれようとも音を立てることもなく、静寂を破るきっかけさえも失った団長室。

広い部屋でテイトは机に座って頭を抱え続けていた。彼女が見つめる先には一通の書簡。刻印された紋は聖天騎士団のものだ。

「あの子は……どうしてこんなことをしてしまったの？」

今すぐにも聞きに行きたい。もう時間が迫っている。だが、妹は今も眠っている。

部隊長会議まで後十分。どうすればいい？ このままでは結果は見えている。あの人は間違はなく攻勢を仕掛けてくるに違いない。今回はさすがに守ってやれる自信が無かった。

—— 12月 1日 AM 1:07 ラインヴァイス城  
「誠に申し訳ございませんでした！」

空と紺の髪が揺れる。テイトとイドウヴァアの正副団長が二人揃って聖天騎士団の本拠地ラインヴァイス城へ謝罪に向いていた。

主眼は十八部隊が引き起こした契約違反問題。契約違反だけではなく、聖天騎士団所属の騎士に大きな被害を出した大事件。すぐに火消しをしなければ、あつという間にイリア中へ噂が広がってしまう。(どんな報復で来るのかしら……)

おかげで何の想定も準備できていない。

選りにも選って妹が喧嘩を売った相手が、聖天騎士団のフェリーズだなんて悪夢だ。この計算高い男は一体何を仕掛けてくるのだろうか。一方的な案件はどれだけ足元を見られるかまるで底が見通せない。テイトは最悪を覚悟して頭を下げていた。

「まあまあ。同じイリア内の事案で良かったじゃないですか。頭をお上げください」

ところが、筆頭司祭フェリーズは相変わらずの柔和な笑みを浮かべた。

司祭特有の落ち着いてソフトな口調で随分と温かく迎えられたと思つたら、事件については意に介さない様な口振りだ。

それでも簡単に厚意に甘えるなど出来ない。

「この度は私ども天馬騎士団の第十八部隊が契約違反を犯し、何とお詫びすればよいか」

聞くところによれば聖天騎士団の開拓区から作業員達を放出し、騎士を負傷させて筆頭騎士にまで攻撃を加えたという。

前代未聞の行いに聖天騎士団からは即日で抗議文が届き、こうして真夜中にもかかわらず正副団長が駆け付ける事態となった。団長に就任して以来、ここまでの大事件は初めての事。普段冷静なテイトも、乾いた喉がヒリヒリして落ち着かない。

「覚悟は出来ております。どのような処罰も受諾いたします」

副団長イドウヴァも再度深く頭を下げて許しを請う。いくらも乗り越えてきたからか、その仕振りは落ち着いている。

そんな二人が持ち込んだ重い空気などどこ吹く風。フェリーズはポットへ茶葉を数さじ入れると、湯を注ぎこんで立ち上る香りに鼻を楽ませている。

「いえ、特に何も貴女方に要求するような話はありませんよ」

彼のあまりにもあつさりした答えに、頭を下げたままテイトは困惑を浮かべていた。莫大な補償金、下手をすれば管轄地の一部譲渡を要求されても呑むしかない程の致命的な案件のはずだ。

その不安を笑い飛ばすようなフェリーズの声が頭上から降ってきた。大罪を犯した者へ称号を授けると言うのもやはり妙に映る。

「同じイリアの民ではありませんか。『妖精』<sup>シャニ</sup>の独断だと理解していませんよ」

現場の暴走は往々にして起こるもの。声をあげて笑うフェリーズは席に着くと静かに紅茶のポットを手に取る。

良い香りの茶を注ぐ音が部屋を包み、その香りを満喫して一口しようとした時、彼は何かを思い出したかのようにカップを口から離し

た。今も頭を下げる二人に目を下す。

「ただ……ひとつ希望があるとすれば、——『妖精』を我が騎士団に頂けないか……と言う位でしようか」

ぴくつとタイトの頭が揺れた。想定していた最悪の中でも一番に恐ろしいカードを切られ、腹にわつと黒く重いものが噴き上がる。

(あの子に何を仕掛けるつもりなの?!)

天馬騎士団に所属するシャニーは、今のままでは直接フェリーズが手を下す事は出来ない。騎士団間に運営の絶対不可侵の掟があるからだ。

移籍させて向こうで拷問するつもりなのか。このカードだけは絶対に切りはさせまい。気づけば上体をぼつと上げていた。

「フェリーズ様、それだけは。何卒寛容な処分をお願いします」

もう一度深く、深く頭を下げる。何度も揺れる空色の髪。妹の過ちは許される事では無いが、今気を張らなければ、もしかしたら二度と会えなくなるかもしれない。

騎士団内で彼女を妹として見る事はしないと決めてきた。だけど今は話が別だ。

「ハツハツハ————タイト団長。よほど妹様が可愛いと見えますな」

その様子が無様にでも映ったか。フェリーズはまた大きく腹から笑って見せてきた。

「勘違い召されるな。私は彼女を買っているのですよ。いやあ、良い騎士をお持ちで羨ましい」

「え……?」

響く拍手。彼は誰にするでもなく大きく手を叩いている。

本心なのだろうか。少なくとも彼の目には皮肉は乗っていない。でも、相手はフェリーズだ。自身も苦い思いをさせられた相手。どうにも疑心ばかり湧き上がる。

(シャニーを……? あの子が何を?)

チェックメイトすら狙える状況でわざわざナイトを取りに行く理由が分からない。



伝え聞いただけでもゾツとする程の大きな被害だ。フェリーズの怒り心頭ばかり予想して来たのに、この態度は意外でどう反応すればいいか困る。

(もう目を覚ましてくれたのかしら……)

一体開拓区で何が起きたというのだろうか。本当はシャニーに聞き込みをしたくても、彼女はずっと目を覚まさなかった。目の前には今も絶体絶命が広がっているが、妹の顔がよぎって不安が膨らむばかり。

そんな事ばかりを考えていたら、頭上から救済を与えるかのようなフェリーズの柔らかな声が降り注いだ。

「我が騎士団の筆頭騎士を退けるその実力、称賛に値しますよ。だからこそ欲しい。いかがですか？」

にこやかなフェリーズの横ではヴァルプルギスが静かに頭を下げている。この騎士に妹は戦いを挑んだというのか。聖天騎士団最強と言われる堅氷の騎士に。

「ヴァルプルギス様。今回の非礼、誠に申し訳ありません」

どのような戦闘となったのかは分からない。それでも、顔も服も赤茶色に染まる程に、妹の負傷は激しかった。目の前にいるヴァルプルギスの様子からして、その時点から既に聖天騎士団が妹へ温情を掛けた事は優に想像できる。それを受けてのフェリーズの言葉。

(この人は……本気なのかしら)

困惑に渦巻くタイトの頭に冷然なる騎士の声が語りかけた。

「いえ。私も久々に全力を出せる相手が見つかって嬉しく思う。さすが八英雄。彼女と共に聖天騎士団を守る事が出来るのは光栄だ」

もう既に譲渡することが決まっているかのような口ぶりに焦りが募る。再び視線を戻すと、フェリーズが回答を待ってこちらをじっと見つめていた。

如何かと聞かれても困る質問に戸惑っていると、頭を上げるイドウヴアが視界の端に映った。

「是非そうして——」

「申し訳ありませんがそれだけは致しかねます。私どもの騎士団でも

大事な戦力なのです」

ようやく喉から飛び出してきた言葉。そのままの勢いでイドウヴアの声をかき消して依頼を退けた。

本来なら契約違反に対する報復措置の提案だから拒否する権利は無い。だが、いくらそうだとしても、騒ぎを起こした騎士の譲渡など聞いたこともない。

ただでさえ良くない噂が見え隠れする相手。そんな場所へ妹を出したくはなかった。いけないと分かっている、団長より姉としての感情が滲む。

「ほお……戦力……ですか」

想定通りの答えに、予想外の理由。フェリーズは口元をうつすら吊った。

「聞く処によると国内案件専門部隊ですよ、第十八部隊は」

十月から新設された部隊と聞いていた。

年の途中からの追加とは珍しいと思っていたが、蓋を開けてみればただの国内治安維持部隊。肩透かしも良い所……いや、それどころか困惑さえした。

「ええ。国力向上の任を与えています」

タイトからはそう返ってくるが、体の良い名前を付けたものだ。

一騎当千と言える働きを出来る程の剣。あの剣の使い道とは到底思えない。

「国内に留めておくには惜しい。第一部隊で稼がせてはいかがですか？ 天馬騎士団の運営のお話なのでお気を悪くされたら申し訳ありませんが、今回の事故に対するコメントだと思っただけならばよろしいかと」

天馬乗りとしての空中からの槍術、遊撃に加えて、それがおまけとすら思える地上で旋風の如く躍る剣。あれを欲しがらない顧客はいないだろう。

少なくとも聖天騎士団は欲していた。絶対零度の守りの剣に疾風怒濤の攻めの剣が加われば駒は揃う。

「厳粛に受け止め、騎士団内で検討いたします」

だが、テイトは変わらず頭を下げ、返してくる言葉はつれない。こ  
こだけは絶対に譲らないということか。

「我々も感謝してきますよ。現場の暴走を知ることが出来、良かった  
と思っっています。『妖精』への処罰は望んでいません。精々、労って  
いただきたい」

フェリーズからのまさかの言葉に、テイトは内心胸を撫で下ろして  
いた。

開拓区での暴行はシャニーの嘆願通り調査し、現場での逸脱した指  
示によるものと結論付けられたらしい。すでに是正措置が取られ運  
営は改められている旨をフェリーズから聞き、ひたすらに平身低頭す  
るしかなかった。

(後は団内をどうするか……ね)

とにかく、最悪は乗り切った。それどころか無風で済みます事が出来  
ると思ってもみなかった。

相手が相手だけに未だに信じられないが、それよりも目の前にまだ  
残っている課題——頭を下げつつ横で同じように垂れる濃藍の  
髪を一瞥するのだった。



—— 12月 2日 AM 10:15

机を叩きつける音が第一会議室に響き渡り、第三以下部隊長たちの  
ギョットする視線が副団長イドウヴァに注がれる。

彼女は青筋を立てて怒鳴り、団長の提案に懇々と反論を続けてい  
る。

「今回の事件は、シャニー部隊長のあまりにも愚昧で常軌を逸した稚  
拙な行動が原因と言わざるを得ません！」

彼女がここまで怒るのも無理はない。フェリーズが穏便に終わら  
せてくれたからいいものの、普通ならどんな報復を受けるか分からな  
かった。

聖天騎士団と今やり合うような事があれば、騎士団間の力関係が崩  
れて内戦に発展しかねない。ベルン動乱前ならともかく、今の天馬騎

士団に聖天騎士団とやりあう力は無い。天馬乗りと言う専門性は、一度崩れた戦力の回復を困難なものとしていた。

「厳罰が相当と思われます！ 降格はもちろん、叙任の取り消しも視野に入れるべきかと」

さすがに度が過ぎている。ざわつく幹部たちにイドウヴアの鋭い眼光が飛ぶ。それ以上は部隊長達も何も言わなかった。代わりに向こうで始まるひそひそ話。

あまりにも酸鼻な嫌われた者の末路。騎士団の中で一番力を持っている者にケンカを売れば、遅かれ早かれこうなることは誰しも予感していた。

「落ち着いてください」

だが、テイトは動じる素振りも見せずに毅然とした態度でイドウヴアに待ったをかける。

「フェリーズ様は仰っていたではないですか、処罰は望んでいないと」「それでは我が騎士団内の示しがつきません！」

すでに騎士団内には噂が広がっている。契約違反を犯し、あろうことか契約主に刃を向けた行いはイリア騎士の誓いに真っ向から反するもの。

最年少の部隊長が犯してしまった若気の至りと同情する声もあるが、大勢のベクトルは言わずもがな。彼らが厳罰を望んでいる訳では無くとも、これを後ろ盾にして邪魔者を排除しようとしているのがありあり伝わってくる。

「規則から考えても謹慎が相当と考えます」

「甘いですよ。せめて西方三島支部への出向が妥当かと思ひます」

出向——それを聞いて部隊長達がまたどよめいた。

天馬騎士団ではリキアと西方三島に連絡所を設けている。そこは本国の傭兵部隊と契約者との連絡役を担うだけの実質の左遷先。特に西方三島の連絡所は、一度辞令が降りたら二度と戻れない流刑の地とも呼ばれている。

叙任剥奪やら出向とは、とにかく近くに置いておきたくない思惑がはつきり見える。

その後もイドウヴァの怒声とテイトの反問が繰り返されるばかりで、部隊長会議はそれだけで終わってしまった。



十一時過ぎ。再び団長室に戻ってきたテイトは、仕事机ではなく来客用のソファにふらふらと倒れこむ様にして腰を下ろした。

ラインヴァアイス城への登城から今まで一睡もできていない。どつと疲労が足から肩へと上がってきて、思わず首を預けて天井を見上げる。

「あの子がめつたな事で武器を振るうとは考えられない……」

運び込まれたときの妹の様子を思い出すと、居てもたつてもいられなかった。

どうしても八月の時の記憶が蘇って心が崩れそうになる。あの時は二週間も目を覚まさなかったのだ。おまけに、今回はあの時には無かったハツキリと分かる異常まで起きている。

本当なら目を醒ますまで傍に居てやりたいが、恐らく目が覚めたら以前の様に穏やかにベッドで寝ている何て出来ない。

なんとか会議は乗り切ったが処分を決められた訳では無く、それも疲れに拍車をかける。イドウヴァは辺りを憚らずかなり強硬な態度だった。決定保留——このままでは流刑を免れない。

「シャニー、私は貴女を信じているわよ」

何としても話を聞きたかった。早く医務室へ行って様子を確認しなければ。そう必死に心がせがんでも、体はもう言うことを聞いてくれない。寝そべったが最後、瞼が閉じるまで時間はかからなかった。

## 第2話 墮天の烙印

いつの間に眠っていたのだろうか。ぼんやりと瞼が開いたはずなのに、何かがおかしい。

起き上がろうと突いた後ろ手が空を掴み、シャニーは思わず目を白黒。手足をバタバタさせてバランスをとり、胸を撫で下ろしながら足元を確かめるように見下ろす。

もう立っていたのだ。立ったまま寝ていたという事か。それだけではない。あたりをゆっくり見渡せば見渡すほどに、違和感ばかりが押し寄せてくる。

(どこだろ、ここ)。真っ暗で何も見えないよ)

暗闇に目が慣れたら見えてくるものだと思っただのに、頭に何か被せられているかのように真っ暗のまま。仕方なく手を前にかざして歩き出す。光どころか、音さえも――

(……声が聞こえてくる。どこからだろ?)

どこからか微かに流れてくる囁きの様に小さな声。見渡してみても視界はやはり利かず、耳を立てても頭の中へ響くようにあちこちから聞こえて定まらない。

(分かんないけど、何かをあたしに言ってるのかな? 何て言ってるだろう。すごく遠くて……)

耳に手を添えながら神経を集中させてみる。まるで水の中から聞いているかのようにぼやけてなかなか聞き取れない。

踏み出したら少し声が大きくなった気がした。怪しさなど忘れてそちらへゆっくり歩いてみる。

(あれ、この声ってひよつとして……)

――あ……………ば……………か……………に

「誰?! この声……あたし??」

ドキンと肩を跳ね上げた。反射的に声が飛び出して、自身を指差すが誰か答えてくれるはずもない。

それでもはつきりした。自分は喋っているのにお構いなしに聞こえてくるから、これは自分が口になっているわけでは無い。なのに聞こ

えてくるこの声は……。

(絶対にコレ……あたしの声。なんで?)

今も途切れ途切れに聞こえてくる声は、間違いなく同じ内容を蓄音機のように繰り返している。おまけに、自分の声で。

薄気味悪くなってきた無意識に身が縮み、守るように自身を抱きしめていた。仲間も、姉も、デイクもロイも……誰も居ない。独りがこんなに心細く感じるのはいつ振りだろう。

(誰もいないの? って言うか、ここはドコ??)

——あの……よ……のに

疑問に答えるように返ってくる声。今はハッキリ声のしたほうが分かって、恐る恐る振り向いてみた。相変わらず昏い世界が広がっているが、その先にふと何かシルエツトが見えてきたではないか。

「あ、ロイ様?」

突然真つ暗な中に現れたロイが手を振ってこちらに向かってくる。

(良かったー! これで安心だよ)

真つ暗な中、このまま一人で妙な声を聞いているのは心細かった。手を振ってロイの許へ走り寄った途端だった。

「うそ?!」

その姿は突然、金髪に紫紺の瞳——ヴァルプルギスへ変わったではないか。

堪らず両足を踏ん張っても、もはやゼロ距離では何が出来ると言うのか。頭上に無言で振り上げられているものに目をむいて絶句するばかり。

振り下ろされる断罪の剣。この距離ではいくら体中のバネを使っても避けきれない。とっさに腰に伸びるも空を掴む手。距離感を量り違えるはずがない——

(——剣が無い?!)

丸腰ではどうすることも出来ない。小手で弾こうと防御態勢を取って後ろに退いた。刹那、ふいに襲う——浮遊感。

「えっ?! しまっ! きゃああ——ッ!!」

そして始まった真つ暗な世界に延々と続く落下。なされるままの

体にしきりに聞こえてくる声は、耳を塞ぐとますます大きくなった。まるで喰らってやろうかという程に頭の中に響き、飲み込まれていく。

——お願いッ、助けて!!

「はっ?!」

トンネルから抜け出すようにようやく真っ暗な世界から飛び出した。

静寂が包む穏やかな部屋。あの声も、ヴァルプルギスの姿もない。びっしりとかいた寝汗を拭いながら浅い吐息を整える。その間も、悪夢と現実の狭間から抜けきらぬ、見開かれた黎あわぐろき瞳が視界のあちこちを焦燥で突き刺す。

「ここは……医務室?」

光が目を通してツンと痛みが走る。意識がはつきりして、視界に明かりが戻って来たらどこだかすぐに分かった。静かで薬臭くて、年輪のように重なるあの天井の茶色いシミだって何度も見てきた景色だ。「ようやく起きたか! 良かったよ、無事で!」

駆けて来る足音に身構え、再び腰に手がいった。——剣が無い。既視感にゾワッと身震いしたのも束の間の事。ウツデイの姿が見えてきて、全身から力が抜けてそのまま倒れそうになった。

彼は本当に嬉しそうな笑顔を見せてくれる。でも、さっきの悪夢も手伝って、未だ戦場ににいるかのように心が尖るシャニーの視線はすぐに彼から外れていた。

(あれからどれだけ経ったんだろう)

じっと見つめているのは、向こうの机の上にかけてあるカレンダー。この部屋のカレンダーは終わった日にはバツ印がついている。既に三つのバツ印が赤字で記され、週の半分を埋めている。

(という事は、今日は…… 12月 4日か……——ッ)

呆然と考えていたら見る見るうちに瞳は見開き、黎くろに青が湧き上がる。

戦場で記憶は途切れた。ヴァルプルギスを前に力尽きて倒れたあ



の瞬間が、今も強烈に脳裏へ焼き付いている。最期を覚悟して、眼下の白が赤く変わる様を呆然と見下ろすしかできなかつたあの時。(ううん、もう少し先があつたはずじゃん。……そうだ、みんな牢獄に入れられて……)

——今から反逆者共の処刑を執り行う

ヴァルプルギスの声が蘇る。激戦で受けた衝撃に埋もれていた記憶がはつきり浮かび上がると、シャニーは見開いたままの目でウツデイを突き刺した。彼の肩を揺さぶって悲鳴にも似た声を上げる。

「ねえ、みんなは?! ——みんなはどうしたの!!」

「ルシヤナ達はもう復帰してるよ。まったく、何回ここに運び込まれたら気が済むんだよ」

ウツデイの肩にかけられた手が滑り落ちていく。最悪を回避出来て、もうそれ以上は何も考えられない。確かめるように彼を見つめる。

「あたし……あたしたち十八部隊は生きてるんだ。生きてるよね?」

「ああ、生きてるさ。怪我也深くなくて何よりだ」

外は相変わらずの吹雪で景色を臨む事は叶わない。それでも湧きあがる、生きているという実感。聞こえる幼馴染の声、目の前に映る彼の笑顔。そして体中が感じる痛み。すべてが、幻想では無いと伝えてくる。

さよならを覚悟していた世界へ戻ってきた喜びが自然と溢れた。

「ああ……嬉しい……。みんな生きて帰って来れたんだね。——良かった……」

自身を抱きしめるように腕を巻き付けて泣く。

ベルン動乱から考えても久しぶりの事だった。死というものを本気で覚悟したのは。動乱でも危機はあつたが、誰かしら助けてくる存在がいた。デイークたち傭兵団の仲間に、姉に、ロイに。騎士団に入ってから仮面の魔術師に殺されかけたが、あの時はまだ援軍が来る希望があつた。

(みんな良かった……。ごめん、本当に)

守る側に立った今、孤立無援の中で初めて味わった恐怖、絶望、そ

して後悔。それらから解放された喜びが滾々と頬を伝う。

絶体絶命だった。それを招いたのは自分。死の舞台へ皆を上げてしまったのは部隊<sup>自分</sup>長だ。あれだけ皆に止められたのに———そこにふっとかけられた声。

「シャニー、おかえり」

幼馴染のかけてくれた言葉はどれだけズタズタになった心に沁みわたったのだろうか。本当に大好きな場所に帰って来たと教えてくれる声。

「うん、ただいまー」

満面の笑みを浮かべて感謝を伝える。みんな生きてくれていた。それだけでもう何も望むことは無い。戻って来たのだ、悪夢から——

——いや、本当は、まだ続いているのかもしれない。

頭では理解している。でも、今は素直に喜ぼうと、ただ湧きあがる安堵に身を任せて笑うことにした。笑っていれば楽しく生きていられる———生きている事、それだけを今は噛み締めたかった。



静寂が戻る部屋。ウツデイはやはり、すぐに立ち上がることを許してくれなかった。

もう記憶が飛んでから四日経っている。色々気になって仕方ない。

開拓区の人々は無事なのか。何故自分たちは助かったのか。聖天騎士団は、ヴァルプルギスやフェリーズはどうなったのか。彼らの報復は、姉達は……。

「ねえ、ウツデイ」

声をかけてみたが一体何から聞いていこうか……。あちこちから噂が集まってくるウツデイなら、団内の声やどんな処罰になりそうか掴んでいるかもしれない。

一度はいつその事と、核心を口にしかけたが腹が震えて声が出なかった。やはり———怖い。

まずは彼が答え易そうなものから始めてみる事にした。

「あたしのこと、治療してくれたんだよね？」

「ああ。それがどうした？」

「へへ、ありがとね。さすがウツデイ。でき、どこを怪我してた？」

妙なことを聞く——ずり上げた眼鏡が光る。自身の体なのだから、どこが痛いかわからない分かるだろうに。ほんのり笑みを見せてきたがシャニーの目はどうやら本気だ。意図を掴めないまま、ウツデイは首を傾げながら治療記録を取りだして何度も頷く。

「主に頭と腕、足かな。大半はレンちゃんがライブで治療してくれたから僕は軽く手伝っただけだけど」

レンの成長速度は本当に早かった。少し前までファイアーを扱えるようになって飛び跳ねていたと思ったら、エルファイアーにニイメ直伝の暗黒魔法ミイル、そして回復の杖まで。

その杖でリーダーを治療する眼差しは、茫洋とする普段とは別人のように真剣そのものだった。風魔法の直撃を受け続けて裂傷だらけだったが、レンの高い魔力は何もなかったようにシャニーの傷を消した。

想定していた答えと違って、シャニーは眉をひそめながら自身の胸元をトントン叩く。

「え？ 背中とか胸とかそこらへんは？」

困惑した眼差しを向けると、また変な質問が飛んできたとしても言いたいのか、彼は両手を広げて見せてきた。

「何も？ だってお前、鎧してたじゃないか」

「ウソ……」

「こんなん嘘ついてどうするんだよ？」

よく分からない様子で返すウツデイから既にシャニーの視線は外れ、下を向いて口元を固くしていた。無意識に胸を握り締める。

(あんな激痛……間違えるワケ無いじゃん)

あれは気のせいなどではない。ヴァルプルギスと戦っている間、何よりも体を締め上げ、悪夢のような苦悶を浴びせ続けてきたのは胸の痛みだった。あれのおかげでロクに体を動かさず、直撃を浴び続けたのだから。もしヴァルプルギスの魔法だったとしても、何かしら痕跡が残るはず。何も無いなんて信じられなかった。

「どうしたんだ？」

「ううん、何でもないよ。えへへ、サンキュー、ウツデイ。いよつ名医さん！」

ウツデイが何も無かったと言うなら、これ以上考えても仕方ない。ぱつと切り替えてお礼を言いながらニツと笑って見せた。彼にもまた心配をかけてしまったから、もう大丈夫をしっかりと伝えたい。

「礼は要らないぜ、たっぷりご馳走してもらおうからな」

「えー?! 前言撤回だよ！ たたく、みんなしてあたしのサイフ狙うんだから！」

ふつと笑う幼馴染の横顔は安心をくれる。生きている……それだけで嬉しい。

でも、途端に落ち着かなくなってきた。不安が安堵を嗅ぎ付けてきたのだ。この不安が今度は恐怖を連れてくる事は今までの経験から分かっている。今回の不安は既に逃れられない分、なおさらに。

今は何も考えたくない。ウツデイに頼んで手芸道具を持ってきてもらおう事にした。



静寂に突っ込んでくる音。ドタバタと聞こえてくるこれは足音か。シャニーもウツデイも手を止めて扉の方に視線をやる。

まっすぐ医務室へ近づいてきた音は扉を跳ね飛ばす勢いで入ってくると、やりかけの編み物を手元に置くシャニーを見つけて声にならない歓喜を漏らす。

「リーダー！ 目が覚めたんだね」

真っ先に叫んだルシヤナはベッド脇まで一直線に駆け寄ってシャニーの手を取った。温かい……見上げてくるのは知っている青い瞳。リーダーが帰ってきた。その実感をしっかりと伝えてくれる彼女の温もり。

シャニーもずっと気になっていた仲間たちの顔が視界に広がって顔中に太陽が咲く。

「ルシヤナ、みんなも！ 良かった、みんな元気そうで。——本当に良

かった……」

ウツデイから知らされていても、本人たちが目の前に来てくれると一気に感情がこみ上げた。湧きあがる、空に舞うかのような感喜。六つの瞳がみんなはつきりと見つめてくる。

部隊長として思い知らされた家族の命を預かる重責。安堵が一気に張り詰めた心を押し崩し、両手で顔を覆っても溢れるものを受け止めきれない。

「自分が一番ヤバかったのに何を人の心配してんのさ。まあ、あんたらしいけどさ」

背中をさすってやりながらルシヤナは半ば呆れたように笑って見せた。

思い出したくもない。敗北を宣言し、そのままりーダーが雪原に伏した時に膨れ上がった絶望感は。

以前からそうだ。誰も失いたくないと言って突っ込んで。今回もヴァルプルギスの奥義を避けようと思えば避けられたはずだ。自分たちに回避を指示していなければ。

「シャニーの元気な顔見たらウチも元気出てきたツス」

安堵と興奮にミリアの声は心なしかトーンが高い。誰もがもう終わったと思った。頼りのリーダーが倒れ、ヴァルプルギスが刑の執行を高らかに宣言したあの時。

生きている、それをはつきり実感させてくれるのは、目の前で目を真っ赤にしながらも喜びに咲く太陽。

「あー生きて帰って来たんスね、ウチたち」

伸びをしながら嬉しそうにするミリアを見上げて、シャニーは柔らかな笑みを浮かべた。大事な仲間たちが生きてくれていた事だけが救いだ。

だが、その笑みも一瞬だけ。同時に重い気持ちたちが湧きあがった。ずっと抱いて来た不安。勝手に戦いだして、彼女たちを巻きこんでしまった。その過ちはあの場だけで済むはずも無く、悪夢のようにこれからも引きずる事になる。

ギリツとシートを握り、ひとつ大きく深呼吸すると一気に切り出し

た。

「生きててくれてありがとう。みんな——」

「はい、それは言わない」

せつかく意を決して飛び出しかけた言葉が、口をルシヤナに塞がれて行き場を失う。

「ウツデイ、面会は五分だったよね？」

すぐに手を退けて言い直そうとしたが、思った以上に力が強い。もごもごしている内にルシヤナに視線を外されてしまった。彼女と共にウツデイへ目を向けると、彼はメガネをずり上げて、困った感じの妙な顔をしたように一瞬見えた。

「あ、ああ」

「そう言うわけだからまた来るよ。しつかり今は体、休めなよ」

すたすたと行ってしまふ仲間たち。焦って追いかけようとした途端、癒え切らぬ身体が悲鳴を上げ、シャニーは手を伸ばすしか出来なかった。

仲間の背中が見えなくなると、ベッドの背にもたれて天井を見上げる。

皆が無事だと分かると急にもやもやと嘔きだす不安。一体これからどうなってしまうのだろうか。契約違反を犯した罪が重いことは知っている。自分だけでなく、彼女たちにまで及ぶと思うと胃がぎりりと締め上げられる思いだった。

（みんな……ごめん——）

ルシヤナは言わせてくれなかった。背中について行くと誓ってくれた彼女たちに何と言って詫びればいいのか。何とか彼女達だけでも助かる様に姉に陳情するしかない。いや——聖天騎士団の報復は天馬騎士団全体に及んでいるはずだ。今どうなっているのか……心が押し潰れられそうだった。

「ルシヤナ、いいんスカ？ 何も伝えなくて」

医務室の外ではミリアが不安そうにルシヤナへ声をかけていた。あの事件から四日経ち、騎士団の中ではある事無い事へ噂が立って事

は大きくなっている。もちろん自分たちへの視線もキツイものがあるが、指示した者と従った者ではまるでその度合いは違う。

「今はあいつにこれ以上負担をかけちゃだめだよ。休ませてあげよう、色々決まるまではさ」

彼女に聞きたい事は一杯あるし、喋りたい事は山とある。

だが、今聞いたところであの性格だ。穏やかなムードを作ろうと何も語らず笑うだけに決まっている。どう転んでも無事には済まないのだ。身の振り方が決まってからでも、色々聞くには遅くない。

リーダーが動けない分まで誓いを果たすため、ルシヤナは年下二人を連れて空へと消えていった。

### 第3話 霜雪のステイグマータ

冬のイリアはどうしてこうもつまらないのだろう。外を出歩くことはできないし、窓を見たって吹雪いていたら凍り付いてろくに景色は見えない。

とにかく外の様子を見たい。そんな気持ちをぐっと抑えながらシャニーは暇つぶしに熱中しようとしていた。手先で小気味よく動く編み棒。何かに没頭してないと、ろくでもないことを考え始めてしまいそうだ。

「ねえねえ、ウツディ」

でもやっぱり駄目だった。何を作ろうかも考えていないのでは、すぐに集中力が切れてしまう。興味を引くものが何も無いこの薬臭い医務室では、幼軍医染に声をかけるしかすることがない。

「何？」

返ってくる優しい声。いろいろ忙しい彼にあまり構ってもらおうとするのも悪い。かと言って、この部屋でこのままじっとしていたら、体が固まってムズムズする。こういう時は、さっさと脱出を図るに限る。

「浴場行きたいな。動いていい？ いいよね、こんな元気なんだし！」

あたしみたいな美人がいつまでも汚くしてちゃ——」

「お前、僕の答えが分かかってそれ言ってるだろ」

「えへへっ、まーねー。じゃあ行つてきまーす！」

「待て待て！ そうはならんだろ、普通！」

そろそろ我慢できなくなる頃だろうと身構えていたウツディだったが、シャニーの元気爆発に慌てて扉の前に立ちふさがった。ここままでせずつとも分かっていたくせに、シャニーは舌を出して笑っている。

怪我のほとんどはレンの魔法で痕もなく消えている。なまじ健康体で元から元気の塊だし、ダメと言っても抜け出すまで時間はかからないかもしれない。前回だって、彼女は僅かな隙を突いて城下町に脱走したのだ。

「えーっ、『ハン、大変だったしな。好きに行つてこい』って流れでしょ



「?ふっ」

「誰だよ、それ。っーかお前、自分が怪我人だって分かってる? 傷が開くだろ?」

「分かっているけどさー、やっぱお風呂入って癒されたいじゃん? 分かるでしょ? この気持ち! 人生癒しって大事だよ!」

「……お前はどこまでが突っ込み待ちなのかマジで分かんねえよ」

懇願の眼差しを向けて手を合わせてくる。それでも今は何としても彼女をこの部屋に閉じ込めておかなければならない。

どんな視線を浴びるかも分からない。ただでさえ、事件を起こした張本人として厳しい目が待っているのは間違いないのに。どうせ浴場に行きたいというのも半分は口実で、そこら辺を探ろうとしているに決まっている。

「ダメだったらダメだ」

「ちえー。ウツデイのいじわる!」

冷たく言い放ちながら席に戻って行く幼馴染に、シャニーは舌を出して精一杯抵抗しておいた。

(相変わらず固いお医者さんだよ。もうう!)

口を尖らせベッドに背を任せて上を向く。何だか体中が張り付くような感触で落ち着かない。はやく汗を流してさっぱりしたかった。逢えないと分かっているけど、やっぱりもし、万が一の時に汚いまま嫌な思いはさせたくない。

だけどウツデイが許可を出してくれないのでは散歩すら出来ない。とりあえず、そっちは諦める事にする。

「ねえ、ウツデイー」

すぐに身を起こして再び彼を呼ぶ。先程の優しい声とは打って変わって面倒くさそうな声が返ってきた。

「今度は何? お腹空いたの?」

「え? すごーい! 何で分かったの? あーっ、もしかして寝てる時お腹鳴ってたりした?」

魔法か何かを使ったのかと、口元を押さえ目を真ん丸にして驚くシャニーに、ウツデイは首をカクツと折った。毎度毎度同じことを同

じ順番で聞いてくるのだから、裏も表もない頭に逆に驚いたくらいだ。

「ええとな、少しは静かにしなきゃとか、思ってもらえると嬉しいんだけどな」

「ムリだよ！ お腹空いたし、お風呂入りたいし、天馬にも乗りたいしー！」

こうガーガーとアヒルのようにやられては堪らない。席を立つと彼女に指を突き向けて止まらない口を封じる。

「食堂で何かもらってくるから待って。いいか？ お前は怪我人なんだ。じつとしてろ。復帰の許可出さないぞ？」

死刑宣告を受けてしまった。口を尖らせながら、シャニーはしおしおと上体を折る。

（いいもん、いいもん。その気になればちよちよいのチョイなんでもんね！）

彼はずるい。いつもこうして復帰の許可をちらつかせてくる。

誰もいなくなつた部屋。こう背中を丸めて座っているだけだと全身の筋肉が縮こまって気持ちが悪い。はやくストレッチをして稽古に戻りたい。

じつとしていられなくて、もう上体を起こすときよろきよろと部屋を見渡し始めた。

（あれえ……この部屋にはアレは無いの？ 前来た時はあつたはずなんだけど）

無理をすれば傷が開く事は分かっている。癒しも情報探しも許可が出ない——そうなるとやれる事など限られる。

「おまたせ」

ウツデイが帰ってくるや、考え事など吹き飛んで思わず手を結んでしまった。彼の手に載つた盆の上にはパンの頭が顔を出していて、山を転げ落ちていくのが見える。

「ほら、しっかりタンパク質と鉄を取れるものを中心に選んできたぞ」「わあ、おいしそう！」

野菜に果物。ハムやチーズとパン。これでもかと乗せられた盆を

見上げ、キラキラ輝く青い瞳が盆をぶんどる。

「ありがとう、ウツデイ。いったただつきまーす！」

音を立てて手を合わせ、パンにかじりついたと思っただらホットミルクに舌を焼く。

嬉しそうに食べる横顔をウツデイはじつと見ていた。いつも通りに見える。そう、その笑顔は。いつもと明らかに違う雰囲気を作り出しているものを見ても、彼には何も切り出せなかった。

「……それだけ食べられれば大丈夫そうだな」

最初は幸せそうな横顔を見て癒されていたウツデイだったが、そのあまりの食いつぷりにやっぱり途中から呆れてしまった。

一体、この細い躰のどこにあれだけ入ると言うのだろうか。仮にも怪我人。これでも決まって、次の食事の時間には腹が減ったと唸りだすのだから随分と燃費が悪い。彼女が食い気を失った時が本当に死ぬ時かもしれない。

「ねえ、足りないよ！ お替り!!」

「はあ?! お前、優に二人前はあつたぞ！ 食べすぎも体に毒だ」

「いっばいケガしたし血が足りないんだよ！ じゃんじゃん持ってきて！ 今度はデザートも！ ホントは今日は街で新作スイーツ買う予定だったんだから！」

「へいへい。十八部隊長様はいろんな意味で壊れてんな……」

結局、あれだけ山盛りにしたはずなのに食堂へもう一往復する羽目になった。四日間何も食べていなかったからか、普段よりさらにガツツいている気がする。

「よく食べて、よく寝て、よく笑う！ あたしのモットーだからね。ケガなんてへーき、へーき！」

天真爛漫に朗らかな笑みを浮かべながら、手を突き上げて主張してくる元氣玉。それでも冷ややかな目しか向けられない。彼女の魂胆など分かりきっていた。

「と言うわけでもう戻る！ ——は、ダメだぞ」

予想的中。それを言った途端、顔をこれでもかと膨らせて睨んできた。

「ぶーっ、そこまで分かつてるなら見逃してくれたって良いじゃん！  
医者には慈悲とか慈愛とか無いの？」

「大人しくしてたら少少くらい慈悲をくれてやっても良いぞ」

「ぐぬぬぬ……患者の声を踏みにじる悪徳軍医めえっ」

「普通に人間き悪いからね？ それ」

何を言っても拘束時間は変わらないとようやく分かつてくれたらしい。ついに壊れた蓄音機も降参したようで、顔をくしゃくしゃにしながら舌を思い切り出して精一杯の悪あがきをしてくる。

両手を頭の後ろに回してベッドに背を預け——そしてまた上体を起こす。甘かった。一時も目が離せない。

そして、じつと出来ない彼女はついに踏み込んで欲しく無いところを突っついてきた。

「ねえウツデイ、この部屋って鏡無いの？」

どきつと心臓が飛び出しそうになった。今もシャニーはきよろきよろと部屋を探し回っている。さすがにこれだけストレートに聞かれたら、はぐらかせそうにない。

「あるわけないだろ？ 何で鏡がいるの？ 剣の型のチェックとかやめてくれよ」

「違うよう。あたしがそんな無作法な女に見える？」

厄介払いするように冷たく言い放ち、すぐに視線を机に戻したが諦めてくれそうにない。甘えた声が返ってきて、いつの間にか彼女の方を振り向いていた。

「見えるっつーか、この前ガラス割ったのどこのどいつだよ？」

「あ、アハハ……。あたしも日々成長してるから大丈夫だよ」

「……もういいや。で、何？」

「ちよつとお化粧したいから小さくても鏡が欲しいの」

今、彼女は何と言った？ —— 困惑がありありとウツデイの眉間に集まる。

「ええ……?! お前って化粧してたの？」

驚きと笑いが同時に込み上げてきて、堪えようとする気持ちを簡単に押し破る。九月までは一緒に昼食をとる機会も多かったが、化粧を

しているような素振など見たこともなかったのに。

言葉と、それ以上に顔に出た気持ちを見つけた途端、シャニーが目を三角にして肩を怒らせだした。

「あーっ、バカにしたでしよ！ 化粧なんかしたってしようがない女って」

「いやいや。仕事に必要無いって思ったただだよ」

上手い言い草を考えたものだと思っただけだ。

「要るんだよなー、これが」

指を立てながら得意顔をしてくるあたり、どうやらうまく丸め込んだらしい。

「そうなのか？ 意外だな」

「意外じゃないもん！ 外回りする時とか絶対するよ。気合も入るしね」

シャニーは怪訝な目を向けてくるウツデイに拳を突き上げた。

新人部隊にいる間は特に気にすることもなかった。部隊長になって他の部隊の先輩指揮官たちと顔を合わせる機会が増えると、やはり皆ちゃんとしていて驚いたものだ。彼らは外国の契約主の許へ営業に行くため、身だしなみにはかなり気を遣っているらしい。

アドバイスをもらいながら先輩を真似、いつの間にか自然とするようになった。どこにも行かない日は面倒くさくて眉の手入れくらいしかない日もあるが、やはり誰かと会う日は化粧が戦闘モードへの大事な切替えの時間。

「でも、寝てるだけじゃないか。今日」

じゃあ要らないだろ——言葉以上に物言いたげな目でジトつと見られ、何も言い返せなくなって上目に口をへの字に曲げる。

「うー……。——ご説もつともですよ。はいはい、そうですよね〜……」

ウツデイに問答で勝てたためしがない。口巧者が羨ましい。今度こそ降参とうつ伏せになって顎を刺さるほど枕に押し付ける。全身の筋肉が骨に張り付いて固まっていくようでウズウズする。

(ウツデイのいじわる！ バーカバーカ！)

もうこんなに元気なのに、ベッドに張付けで居なければならぬ理由が分からない。

顔をくしゃくしゃにしながらいを尖らせ、壁に向かって舌を出す。「ウツデイさん、十二月の予算の事で総務部長がお呼びです」

聞きなれない女性の声が入ってきた。ベッドの中でごそごそして体勢を変え、出入り口の方に目をやってみる。軍服ではないからきつと事務のお姉さんだ。

(相変わらず忙しいヤツだなあ……)

出ていく背中を見送ったシャニーは不意に部屋が静かになったことに気づく。……今なら誰もいない。ニシニシと笑って弾け飛ぶようにベッドから出る。こんなチャンスを誰が逃すものか。さつさとそのまま部屋を出る。

「鏡……鏡つと。アイツ、隠したりなんかして。このあたしにはお見通しなんだからさー!」

薄々感づいていた。彼は何かを隠している。この前の潜入時にレイサがやっていた仕草を真似て辺りを見渡し、少しずつ目的地へと距離を縮める。

目指すは手洗い場。あそこなら必ず鏡がある。運よく道中も、目的地の中にも人気は無い。止められる者は居まい——勝ち誇った笑みで中へと入り、鏡を覗く。

ツ!!!

耳を劈くような悲鳴が廊下に響き渡り、事務所に居たウツデイは血相を変えて廊下へ目をやる。

「?! どうしたんだ! ——まさかつ」

聞き間違えるはずがない。あれはシャニーの悲鳴だ。ウツデイは事務室から飛び出した。このタイミングでこの悲鳴——臍ほそを噛むしかない。

彼女を独りにするなんてうっかりしていた。ベッドに縛っておかなければいけなかった。もうすでに野次馬が何事かと集まり始めている。人の流れに乗って手洗い場に駆け込む——目の前に広がる最悪の光景。

「なに……？　なにこれ……」

鏡に映るシャニーの顔は色を失っていた。まるで彼女が触っている髪と同じくらい。

(これが本当に……あたしの——髪なの?!)

何度髪を触ってみても、鏡の中で揺れるのは白ばかり。蒼白い顔はみるみる引きつって瞳が黎く揺らぎ始めている。

白の世界の向こう——鏡の奥に映る幼馴染を見つけ、震えながら振り向いた彼女は目で訴えた。——嘘だって言って……

「お前が運び込まれたとき、もうそうなっていたんだ」

打ち砕かれた瞳に訴えられても、ウツデイにはそれしか言えなかった。

嘘だと言ってやりたかった。あの美しい活き活きした青い髪は無く、目の前に居るのはすつかり色が抜け落ちて死んだような白。

とにかくこの場所に居続けては哀れだ。手を取り、彼女を白衣の中に包んで医務室への道を急ぐ。左右から突き刺さる視線。こんなにも遠かったか。

「心当たりは無いのか？」

静寂の間へと戻ったウツデイは俯くシャニーに優しく問いかけてみる。小さく、小さく、何度も横に振られて揺れる白銀の髪。

「あるわけないじゃん……」

返ってきた声は先程までの元気が嘘のように沈みこんでいる。髪が色を失い、瞳の青が浮き上がって見える。震えている分、尚更に。

「ああ……どうしよう」

嗚咽を漏らさずにはおれず、シャニーは両手で顔を覆う。事実を受け入れる事もままならず、頭の中まで真っ白でどうしていいか分からない。

なんとか生きて帰って来られたのに。これではどうやって見せたいのだろう。生きていることを一番に伝えたいあの人がこんな髪を知ったら驚くに決まっている。

のしかかる虚脱感。この時ばかりは途方に暮れて、糸が切れたようにへたり込んでしまった。

「何かの病気……とも考えにくいが一応調べてみよう」

ショックを受けて一夜で白髪になるなんて話はただの迷信。絶対に原因はある——そうウツデイは励ましてくれるが、まるで頭に入って来ない。病気——その言葉だけが心に突き刺さった気がした。静かに立ち上がってベッドに向かうが、鉄球でも括りつけられたかのように体が重い。足が上がらなくて引きずっているのが自分でも分かる。

「ウツデイ……」

その足をそつと止めて振り返る。

「心配してくれてたんだね。えへへ、ありがと」

ようやく分かった。ウツデイがなぜあれだけ部屋の外に出すことを渋っていたのか。在るはずの鏡を無いと嘘を言ったのか。彼の優しさに感謝を込めて笑って見せる。今できる精いっぱい。

生きて帰って来られただけで良しとしよう———そう思う事にした。そうでもしないと、笑ってなどいられなかった。

(止めてくれよ。この状況で笑わないでくれよ)

傷心の背中へウツデイは何も返せず、やり切れない思いに唇を噛む。

きつと元に戻る。それを信じてエミリーヌに祈りを捧げる事しか今は出来ないのか。どうしたら戻してやれる……いつしか研究の手は止まり、開く文献はそればかりを探していた。



12月 4日 PM 7:02

雪の夜はどうしてもどこか店に入りたくなる。そんな気持ちを誘うようにあちこちの店から明かりが漏れ、楽しげに響いてくる声。年末が近づくと街は貧しくとも戦争が終わった喜びに溢れていて、過酷な夜でさえも幸せな気分させてくれる。

そんな酒に酔う街の人と人の間を、影に溶けるようにして歩く男。周りの誘いに一切振り向くことなく彼が姿を消したのは一軒のバー。「マスター、ここにいらっしやいましたか」



どうやらこの場所がお気に入りに入りらしい。ウエスカーはカウンターで酒を愉しむ紳士を見つけて小さく頭を下げた。

「ああ。ここは考え事するには落ち着く」

蒸留酒を口に運んだ紳士の眼光は、帽子の下でまじろぐこともなくじつと遠くを見つめている。

「てつきり風セチの契約者を待っているのかと思いましたが」

以前の接触からはや一か月半。そろそろ何か起きてもおかしくない時期。すでにあの女はいくつかを「蝕んで」いる。ウエスカー自身も既に奪われた身。目醒めたのなら、あちらにターゲットが移つてもおかしくはない。

「我々ができることは果たした」

これ以上介入するつもりはない——酒を飲み干す紳士の横顔はそう言っている。奪われたくなければ自身で何とかしろと、そういうことか。背中を押すだけ押して随分と厳しいものだ。

もちろん、ここにウエスカーが来たのは主の様子見などではない。

「ところで、向こうの状況はどうだ？」

紳士も報告を急かしてくる。最近は残念な話ばかりだったが、今回は久々に喜んでもらえるはずだ。

「ええ、今日は良いご報告を。——首謀者の殺害を確認してまいりました」

再び作った濃い目の蒸留酒を味わう紳士の口元が珍しく上向いた。

「そうか……ならば長の計画は成功したのだな」

「ええ。これで……あの未来は回避された事でしょう」

久しく聞けなかったウエスカーの饒舌に乗った報告。紳士は一つ頷くとグラスを傾けた。

組織はようやく大きな作戦の一つを成就したらしい。

竜の門——二つの世界を繋ぐあの門の向こうでは着々準備が進められてきた。その準備を食い止められなければ、侵略戦争は避けられなかっただろう。それが今、最悪は回避されたことになる。残党狩りは、本国にいる組織に任せておけば良い。

「ならば……バランスが崩れたこちらを後は始末するのみか」

「ええ。——まだ仕留めなくてもよろしいので？」

全てが片付いたわけではない。彼らはこちらの世界に種をしつかりと残している。あとは、彼らが蒔いた災厄の種から出でた芽を摘むのみ。

善は急げとは言うが、ウエスカーが急ぐのはただ戦いたいだけだろう。どさくさに紛れて“蝕んで”いったことが癩に障るのかもしれない。

「尻尾を出すまで待て」

許すわけにはいかない。最初から、彼に仕掛けさせるつもりはなかった。あの境界の先から来た異世界の者が、この世界の歴史に残る事はタブー。あくまで、この世界の事象はこの世界の者による処理こそが理。だからこそ、まわりくどくても、鈍臭くても、背中を押すしかないのだ。

「ククク……そうですね。せっかく“黎明の剣”を錬成できそうですね」

「ああ。尤も……今のままでは使いこなせまい」

わざわざ手を貸したのだから役に立ってもらわなければ困る。長たちがようやく向こうを平らげたのに、こちらが失敗したら国に帰れない。だが、まだその時は先になりそうだ。

「剣に順路はない。己が切り拓いたものが軌跡と残るだけだ」

無駄なものなどない。全てが刃を滾らせる力となり、描く軌跡を強く、はつきりとさせる。弾かれようとも、折れようとも、強く握って振り続けた剣だけが残す軌跡。いつになるかは分からない。だが遠くない未来に訪れる瞬間に向けて紳士もまた席を立つ。

「では我々も行くとするか。次なる地へ」

この地での仕事は終わった。次なる舞台は少々先だが、今は待つしかない。黎明を呼ぶ剣が覚醒するその時まで。

彼らは吹雪の中に出ていくと、あおくろ黎い闇夜の向こうへと溶けるように消えた。

## 第4話 風の妖精

12月 5日 AM 10:53 カルラエ城 医務室

ウツデイは落ち着かないでいた。幼馴染と二人っきりの部屋は静寂に包まれて仕事が始まるで捗らない。

やはり、髪が真っ白になってしまったシヨックは計り知れないのか。昨日まであれだけ咲いていた太陽がもう今ではすつかり——  
—と思っていたのも実に短い時間だったからだ。

観念して与えた鏡を使って、すでにシャニーはベッドの上でせわしく手を動かし始めていた。

「シャニー、遊んでないで寝なよ——つて、何してんだ？」

彼女の仲間から聞くに、何度も頭を強打しているはず。いくら魔法で怪我は癒えても、内のダメージまで消えたかは分からない。何度も寝ているように論じているのに。

仕事にキリをつけ、一体何をしているのかとベッドの方を振り向いてみて面食らった。白い髪に乗っているのはカラフルなヘアピン。

「ヘアスタイルを試してるの。この色だと何が合うかなって」

後ろで少しだけ縛ることが出来る長さにはまでは伸びてきた髪を弄って遊んでいた。その顔は真剣そのもので、かなり熱中しているように見える。

「ねえ、こんななんだろうかな？」

「へえ。だいたいイメージ変わるもんだな。かわいいと思うよ」

「よっし！せっかくだし、いろいろ試してみよーっと。ウツデイ、レビューよろしく！」

「僕は仕事なんだが……」

「大丈夫だつて！ 息抜きも大事だよ！」

「お前の息抜きにしかないだろ！」

ようやく満足が行くものが出来たのか、見せつけてくるその顔は楽しそうだ。悲痛に満ちたあの時の顔はどうやっても隠して行こうと言うのか。褒めてやったら、はしやぎ声をあげながら笑って見せてく

るから止めるに止められない。

「前向きだね……お前は」

「案外悪くないかもーとか思ったり？ 嫌になったら染めればいいんだしさ。あつ、ねえねえ！ 何色に染めたら面白いと思う？」

絶対嘘だ。顔は笑っているが、こんな顔じゃない。もつと顔じゅうで笑ってこちらまでほっこりするのが、普段知っている幼馴染だ。

楽しそうに笑う彼女をじつと見ていたら、ふうつとため息をつかれた。

「そんな顔しないでよ。生きてるんならどうにでもなるじゃん？」

無理やり自分を納得させようとしているのが痛々しい。何かかけてやれる言葉はないか……そう巡らせていた時だった。シャニーの睨が急に切れ上がったのが見えた。

「ウツデイ！……」

シャニーは幼馴染の名を呼び目配せした。壁に立てかけてあった剣をウツデイに鞘ごと放ってもらおう。

(この気配……間違いない。くそっ——こんな時に！)

受け取った彼女はベッドから弾けるように飛び出し、剣に手を掛けるながら扉を睨む。

こんな強大な気配など一人しかいない。第六感が騒ぐ。今の状態では絶対に勝ち目はないと。

いくら傷はほとんど癒えているとは言え、体は鈍り切っているのが嫌と言う程分かるし、今は鎧どころかタンクトップ一枚だけ。何よりどこか体が渴いて五感にも、あの感覚にもまるでキレが無い。

「ウツデイ、下がって。——ぶっ放すかもしれない」

ウツデイも気配に気づいたのか、ようやく席を立った。

もう来訪者は扉の前まで迫っていて、窓越しでも分かる高い体躯。やはり間違いない。今の状態でウツデイを守ってやれる自信がない。だが、おそらくあの男の狙いは自分だ。

勢いよく開けられた扉の向こうにいたのは、炭の様に黒く焼けた長身の男。真っ赤な怒髪に筋骨隆々としながら細身を保つその姿を忘れるはずが無い。

「お邪魔！」

彼は部屋を見下ろし、目当てを見つけるとズンズンと乗り込んできた。

「な、なんですかあなたは！　ここは医務室ですよ。関係者以外はご遠慮願いたい」

サングラス越しでも分かる、狙いを定める男の眼。口元に浮かぶ余裕の笑みに危険な臭いを察したのか、すかさずウツデイが正面に立つて止めにかかる。

だが、巨体は気づいていないかのように彼を押し飛ばし、真つ直ぐに視線をぶつけて迫ってくる。シャニーは堪らず剣を引き抜いた。

「よう、さすがにしぶといな？　風の妖精<sup>セテ</sup>さんよ」

不敵な笑みを浴びせられても、睨むだけで何もできないことが悔しい。怪我をしていなくてもこの男にはまるで歯が立たなかつた。

霞に構えをとってはいるが、今の状態では剣技を見舞うどころか、相手の攻撃を躲すだけの動きが出来るかさえ自信が無い。どうにも体が渴いて力が出ない。

(やっぱり用があるのはあたしか——なら……)

とにかく今はこの場から離れなければウツデイが危険だ。窓から飛び出そうと駆け出した。

「随分と大盤振る舞いしちゃったようだな？　空っぽじゃねえか——

——？」

「がっ……?!」

高い音を立てて剣が床で跳ねる。動きを読まれたか、回り込まれたと察した時にはもう腹から鈍い痛みが迫り上がってきた。とつさにみぞおちに手が行き、よろけたところをそのままベッドへ押し飛ばされる。

動けない——ぐったりしていると男の見下ろす視線とがち合ったが、彼は追撃を入れる事も無く、その手はポケットに収まった。

「ぐっ……。何しに来たの？　あたしを殺しに来たの？」

「買い被んじゃねえよ。今のお前を喰ったところで時間の無駄だ。怪我人はさっさとベッドで寝てろ」

何とか上体を起こしても、剣を失っては万事休すだ。

だが、それ以上が来なくて意図が読めなかった。目の前の大男、業火の魔人ソルバーンは今もポケットに手を突っ込んだまま、サンングラス越しにニタニタ見下ろしてくる。

その時だ。シャニーの視界にウツデイの駆ける姿が入った。向こうに落ちている剣を彼が拾い上げた——その途端だった。

「その剣をどうするつもりだ？　まさかそんな拔身をさつきみたいにするつもりか？」

ソルバーンの静かな声がウツデイを威圧している。サンングラス越しでも彼を睥睨しているのが分かってシャニーは悪い汗がじわっと滲んだ。彼は相変わらずポケットに手を突っ込んだまま鼻で笑っている。

「今の状態の妖精コイツに剣を渡したらどうなるか……。——医者コイツのする事とは思えねえな？」

「何だと?!」

初顔合わせのウツデイにとってはパニックだろう。勇気を絞ってくれた事はあるがたいが彼を巻き込みたくなかった。痺れるみぞおちを手で押さえながらシャニーはありつたけを絞る。

「ウツデイ、剣を捨てて。ソルバーンさん、彼には手を出さないで！」  
「言われなくなつて民間人に手は出さねえよ。もう少し信用してくれて良いんだぜ？」

「じゃあ、何しに来たわけ？」

ますます彼の思惑が分からなくてシャニーはついに単刀直入に斬りこんだ。

この男が現れるなど、目的は一つしかないはずだ。どうにも彼は戦うつもりが無いように見えるが、姿勢だけは崩すわけには行かない。ギツと睨み上げると、ソルバーンの口元がニツと吊った。

「ハッ、内心ビビッてる癖に凜として見せやがって。これ以上は可哀想か？」

（くそっ……来るか——ッ）

びくつと腕が身構える。ついにソルバーンの手がポケットから出

たのだ。拳闘を主戦とする相手に手刀で敵うはずが無くとも、もはやこれしかない。

ところが、すぐに構えが崩れて瞳に困惑が浮かぶ。

「お見舞いってな。様子が分かりや十分だわ」

その手はサングラスに伸びて、下から現れた黄金の眼が燃え尽きた白をまじまじと舐めるように見下ろし始めた。

本心は定かではないが、気だるそうな口調からは確かに戦意を感じない。手刀を下したその時だった。ケラケラとした笑い声を頭上から浴びせられて眉が吊る。

「へっ、その頭もなかなか似合ってるぜ」

(好き放題言ってくれちゃって……ッ)

こんな事を言いに来たと言うのか。だが、ウツデイも居る今はさつさと満足するまで言わせてこの場を立ち去らせた方が良い。

しばらくぎゅっとシーツを握って堪えていると、ソルバーンは顔をあげてようやく背を向けた。彼がサングラスをかけ直して歩き出した、その時だった。

「お前！ そのことでどれだけシャニーが苦しんでいるか！」

ソルバーンの視線がウツデイに向いてしまった。彼は腰が引けながらも魔人を睨みつけているではないか。蒼くなつたのはシャニーの方だった。

「ウツデイ、もう良いんだよ！ 止めて！」

焦って彼を止める。彼ではソルバーンに為す術など無い。

だが、彼女の不安をよそに、ウツデイの怒りを聞いたソルバーンの視線は再びシャニーへと向いた。

「苦しむ？ 何でだ？ それこそ、理解に苦しむ」

彼から返ってきたのは、呆れとも嘲りともとれる眠たそうに絡みつく声。怪訝な目と粘るような声を浴びせられ、シャニーは眉をひそめるしか出来ないでいる。

「全部使ったんなら、そうなくても当然じゃねえか」

見開く瞳。そういえばこの男は、以前接触した時も似たようなことを言っていた。

——持ってんのに何で使わねえんだ？

完膚なきまで打ちのめされ、顎を掴みあげられてかけられた一言。あの時は何のことだかまるで分らなかつた。今も飲み込めたわけではないが、彼の言う使ったものが、ヴァルプルギスとの一戦で溢れ出したものらしい事だけは分かる。

(この人は間違いなく何かを知ってる……)

黒の紳士に言われた言葉も理解できないまま、結局使ってしまった。

制御できないまま使うな——その意味を知った今、何でも良いから情報が欲しかった。この力が何なのか、どうしたら制御できるのか。何故——髪が白くなったのか。昏く<sup>くら</sup>緋<sup>な</sup>い交ぜの状態のままでは、もう絶対に居られない。既に……甚大な被害を出したのだ。「ソルバーンさん、何か知ってるなら教えてよ。あたし何も知らなくて」

散々弄ばれた相手に頭を下げるのは業腹だが、駆け引きは得意ではないしこの男を逃せばどこで手がかりを掴めるか分からない。

「めんどくせえガキだな……」

ソルバーンは頭の後ろを掻きながら舌打ちしたが、これも飛び切りの料理を喰らう為とでも思ったか、正面へ向き直してだらつと喋り出した。

「お前はセチの契約者……とでも言えればいいか？」

これで分かったか？ ——そんな声が睥睨の黄金から伝わってくる。ますます頭がこんがらがるだけだ。念のためウツデイに視線を送ってみるが、視線に気づいた彼は何度も首を横に振って来た。「セチって、風の精霊のセチ?? なんで？」

「経緯はお前しか知らねえよ。お前が振るった力はセチの魔力——それは確かだ」

炎の精霊フアラ、水の精霊ニニス、雷の精霊トオルに風の精霊セチ。これはエレブ大陸に遥か昔から伝わる精霊の伝承で魔法の源とも呼ばれている。

学問所で聞いたことはあるがまるで頭が追い付かない。経緯なん



て自分が知りたいくらいなのに、まるで身に覚えなんて無い。現実を直視できず、困惑に両手を広げる。

「あたしが？ 魔力?? そんなわけ」

「チツ、どこまでめんどくせえ奴だよ。しつかり事実を視ろや」

苛立ちを舌打ちにして寄つて来たかと思うと、ソルバーンが背後に回り——凄まじい力で体が引き上げられ、バリバリと引き裂かれる音が耳を劈く。

「背中にこんなアザがあつて気づかねえとは」

あつという間の出来事でシャニーは悲鳴を上げることができず、反射的に腕で身を隠すことで精いっぱいだった。スポーツブラの隙間からはつきりと姿を現すアザ。

「……随分とトロいんだな」

見下ろすソルバーンから唾棄するように投げつけられた言葉はにわかには信じられない。もっと先にある真実を求めるように傷へ手を伸ばす。

「これは小さいころにクマに襲われて」

「んじゃ、それじゃねえの？ “契機” っていうのは。ま、どうでもいいじゃねえか？ お前は風の異能の具現者。それに違いはねえんだし」

やはり、ただ強い者と戦いたいだけのソルバーンにとっては、異能を使いこなせるか、否かだけしか関心は無さそうだ。人の身の上話など興味は無いとあっさり弾かれた。

「そんなの……信じられないよ」

だが、突きつけられたほうは瞳を震わせていた。この男が嘘を言ったところで何の得もしないことは分かっている。途端に湧きあがる恐怖。違和感でも勘違いでも無かった。得体の知れないものが自分の中に棲る。この体の渴きも、もしかや——

「そんなの聞いたことないし。そんな家系でもないし」

「八英雄……だったか？ おかしいと思わなかったのか？ そんな家系でもないお前さんが、その年で世界大戦で活躍なんてな」

最初はデイクの前に出ることさえ許してもらえなかった。それがいっしょに戦場を駆け抜け、師の剣について行けるようになり。最後

にはベルン正規軍や竜族との戦いの場に赴くメンバーとして、ロイに選んでもらえるまでになった。

今思えば、うまくいき過ぎだったのかもしれない。周りには大国の主要人物があんなにいたのに。

「お前みたいな奴は多かれ少なかれ持つている。持つてるものに気づくか気づかないかだけの違いだ。気づかずにいい気になってるとは、お子様……おっと、お子様だったな」

また鼻で笑われたが、湧き上がるのは怒りでは無く虚無感。積み重ねてきた事が自分の力では無い……そんな風に言われたら、どうして良いか分からなくなってしまった。頭がくらくらして真っ白になりそうだ。

「そんな……あんなに努力したのに……あたしの実力じゃないって事？ 無駄だったって事？」

死ぬ思いもしたし、デイクに覚えが無いほど叱られた。生き残るために随分努力したつもりだった。数え切れないほど振った太刀——そんなものは関係なかったと言うのか。

「ハン……。その力を使えるのはための実力だろ。まんまだと気づく処まで登る事は努力って言わねえのか？ ——これで守れるようになったんだぜ？」

「——！！」

頭に電撃が走った。守る為の剣……欲しかった剣を握る資格をようやく得たと言うのか。思わず両手を見下ろす。確かにあの剣は凄まじかったが……本当に守れるのだろうか。

「フッフ、ヴァルプルギスとの一戦、見せてもらったぜ。なかなかいいキレをしている」

ソルバーンにとっては飲み込めるかどうかなどどうでも良かった。ようやく目をつけていた力のお目覚め。それだけ。

青焔を刃に滾らせながら雪原を疾風迅雷に駆け回り、堅氷の騎士の守りを打ち砕いた剣。思い出すだけで血湧き肉躍る。

「あんなの自分じゃないよ。あんな恐ろしい力とでも」

心の中に腕を突っ込んできて、思い出したくない記憶を無理やり

引つ張り出そうとする魔人にシャニーは何度も首を横に振った。

意識で制御できないまま体が勝手に剣を振り回したあの時。悪夢から目を背けるように視線を切る。

「ああん……？ 何言ってるんだ、テメエは」

その途端だった。サングラスの下からでもはつきりと分かるほどの突き刺す眼光。まるで千の槍に貫かれたようでシャニーは思わず手を後ろに突いた。

「鎖を切ったのはテメエの意志だろ？ 今更かわい子ぶるんじゃねえよ」

——鎖は斬った。あとは君自身がどうするかだ

脳裏に電撃が走ったように浮かび上がるあの時の光景。あれは……十月だったか。バーで再開した紳士について行き、『眠るもの』を起こすために決断したあの時。彼はあの時警告していた。

——力を手に入れることは新たな悩みを背負いこむことになる  
それに対して返した答えは……。そして剣を抜いたあの時もそう

だ。  
——この悪夢を払えるって言うなら何にでも委ねてやるッ

分かってている。すべて、己の意志だ。

「なっ、なんでそれを……」

分からないのは、何故この男がそれを知っているのか、だ。

「そりゃ、『同類』なら分かって当然じゃねえか？」

また髪を弄りながら気だるそうにため息をつくソルバーンが口にした言葉に、シャニーは胸を鈍器で殴られた様な衝撃を受けた。同類——魔人にそう言われてしまう意味など一つしか無い。

だが、彼が続けて放った言葉は、それ以上の驚愕を浴びせてきた。

「青く戻ったら喰いごろかと思っただが……その様子じゃ、だいぶ先か」  
「ねえ、この髪戻るの？ 色、元に戻るの?! どうしてこんなことに」

気づいたらベッドから飛び出していた。ソルバーンの胸倉を掴んで揺さぶり早口にまくしたてる。

「エーギルを使い切っただけだろ」

鳥のさえずりのような姦しさに辟易したらしい。胸元への一突きを浴びただけでシャニーはベッドに弾け飛んだ。

「お前は若いんだから一週間もありゃ戻るだろ」

元に戻る。それを聞いた途端に体中の力が抜けてベッドの上で動けなくなってしまった。

「早く回復して、俺にその力を見せて見ろ！ この前のじゃ全然消化不良だぜ」

「いやだよ。あんなの、もう二度と」

ヴァルプルギスに食いついていたあの霹靂閃電へきれきせんてんの剣とやりあえる。そう思うとソルバーンには舌なめずりが止まらなかった。

だが、当の風の契約者はノリ悪く及び腰。望んで手に入れた力のくせに。

再び両腕で胸元を隠す彼女に、彼は顔をずいっと近づけた。

「自分で決めた道なら簡単に振り向くな。前に道がねえのは当然だろ。自分で創れ、風の妖精」

この様子だと……おそらく「あいつ」は相当怒っているに違いない。一度噴火しなければ吹っ切れないか。じっくり味が染みてから喰らうのも悪くないかもしれない。その為にも……覚悟が必要だ。

「つたく、ずいぶんと甘えた事を抜かす嬢ちゃんだぜ」

何の事——そうシャニーが言い返そうとした時だった。ソルバーンはおもむろに背後を睥睨した。ぎよつとしたウツデイが眼鏡をずり上げて睨み返すがお構いなし。

振り向いた彼はウツデイが持っている剣に手を伸ばしてそのまま掴み取る。あまりの威圧感に力が入らないのか、ウツデイはそのまま渡してしまう。

「今回は折らなかつたんだな。てめえの誓いから考えれば、喜ばしい事じゃねえのか？」

コンコンと彼は刀身の根元の部分を指で突いて見せてきて、シャニーは目を見張って固まった。そこは誓いが彫ってある部分だ。

イリアの礎となり、民を守る剣であれ——彼の言っている事は尤もな事。あの力を使いこなす事が出来れば、強大な力から民を守る

事が出来るのは『魔女』と戦って分かっている。でも——

「んなら、俺が折ってやろうか？ いい証明じゃねえか。守りてえつてのは口だけ。実際は、てめえ一人で立てなかつたってな」

その気持ちを見透かされたのか、ソルバーンは不敵な笑みを浮かべてきた。ぐらぐらと腹が煮えてくる。

「大きなお世話だよ！ あんたに何が分かるのさ！」

「誰にでも分かんذار。甘えて、逃げてるだけだつてな」

逃げる——電撃が走ったように眈が吊り上がった。散々好き放題言われてカチンと来た。

「逃げてなんか無い!!」

「踏み出さず、まして向き合いもせず目を背ける——逃げる以外に何て言うんだ？ 甘えذار、んなもん」

「……ッ」

何も言い返せなくなった。無性に腹が立ってきて、腹の中に溜まった怒りを今にも吐き出したくなる。好き放題言われた事——いや、違う。逃げて踏み出せない自分にもだ。

「ハン……。それで免許皆伝てか？ てめえの師匠もずいぶんと甘ちゃんだな？」

「——ッ。デイークさんの悪口を言うな！ それだけは絶対許さない!!」

自分の無明のせいで大好きな人まで貶されている。もう辛抱ならなかった。

「見てなさいよ！ すぐに証明してやる！ その剣に彫った誓いが本当だつて!!」

今まで溜まりに溜まったマグマを全て吐き出すように、眈決して叫んだ怒りが部屋中に響く。それを全身に浴びたソルバーンは二つと口元を吊り上げただけ。

何も返す事無く剣をウツデイに預けると、ポケットに手をつ込み背を向けて医務室を出ていった。

「そんな家系でもねえと来たかよ。ハン……」

扉越しに未だ飛び立たぬ藜いままの妖精を睥睨し、一言吐き捨てる

と彼はぼうつと火影の中に消えた。

## 第5話 堅き信念、揺れる瞳

「へへっ、きつとシャニー喜ぶツスね」

医務室へ向かいながら、ミリアは手に下げた白い箱へ目を下ろしてニコツとした。甘いもの好きなりーダーの破顔が目には浮かぶ。

今日はカルラエ城下町にある菓子店の新作スイーツの発売日。ちようど聖天騎士団への出撃直前くらいに広告されたから、部隊の皆であれこれ話題にしてきた。

宣伝に違わぬおいしきで疲れたりーダーを少しでも癒してあげたい。医務室へ続く廊下の最後の曲がり角を抜けた時だった。

「あ……」

思わず乾いた声飛び出し、足がすくんで動けなくなった。

向かってくる魔人は廊下の真ん中で立ち尽くすミリアにお構いなしにズンズン歩いてきて、そのまま気づいていないかのように跳ね飛ばして去って行った。

「し、心臓に悪いツス……。——大丈夫ツスか、シャニー?!」

あいつは九月にリーダーを襲った男だ。この一本道で彼がどこから来たかなんて考えるまでもない。手足をじたばた空回りさせながら医務室へ向かおうとした時だった。

「ひっ、ひいひ?! お、お助けええ!!」

「バカー！ 静かにしろ!」

ふいに背後から肩へ手が乗り、脳天から中が飛び出すほど跳ね上がった。直後に聞こえてきた声は魔人では無く、恐る恐る軋んだ蝶番のように後ろを一瞥してみる。

「なっ、何なんスか、お前!」

振り向いた先にいたのはアルマだった。バツが悪くなって、ミリアは咳払いして間を取ると火の玉を投げつけた。

「フン、年下のキミにお前呼ばわりされるとは心外だね」

「どうでもいいツス。何の用ツスか?!」

「ちよつと一緒に来てくれないかな? とある人がキミを呼んでてね」

四の五の言わずに来い——アルマの目は語らずともそう言っている。

だが、あのアルマだ。十八部隊を分断し、自分達を散々足手まといとバカにしてきた奴だ。

誰がお前なんか……そう喉元まで出かかったが、遮るように彼女はすつと指を差ししてきた。

「どうにかしたければ、黙ってついて来い」

指先の軌道は白い箱にぶつかってハツとする。業腹だが、今はついて行くしかなさそうだ。

アルマについて元来た道を逆戻りし、重そうな扉の前まで連れて来られた。普段なら素通りする扉……当然だろう。そこはいつも固く閉ざされている場所だからだ。

「え……。何で……開いてるんすか？」

「いいから黙ってついて来い」

重い扉が閉まり、風に揺れる看板。地下書庫入口——そこは第一、第二部隊長以上の最上級天馬騎士が同伴しなければ決して踏み入る事が許されず、トップシークレットが封印されている場所。

秘密をこの暗い極寒に閉じ込めているかのような張り詰めた空気の中、松明を頼りに降りて行くと、ぼうつと奥に明かりが見えてきた。「えつ……つ。ど、どうしてこんなところに?！」

灯に照らされて現れた女性にミリアは堪らず指を差し、その女性は静かに口を開いた。

「待っていたわよ。十八部隊所属のミリアさん」



一方、医務室では極度の緊張から解放された二人が大きく息を吐き出していた。業火の魔人が部屋から出ていくと、二人とも肩から力が抜けてその場で溶けるように崩れる。

今でも心臓がバクバクする。この場所で暴れられたらどうしようかと、気を張り続けていたシャニーは思わず目を瞑って天井を仰いだ。



(何がお見舞いよ！ サプライズどころじゃないじゃん……死ぬかと思っただよ)

剣を持っていたとしても相手をできる男ではないが、丸腰の自分の無力さをまざまざ見せつけられた気がする。相手は拳闘。どこでも戦おうと思えば戦える。まさに銀狼の旅団そのものを示すような男だ。

「何だったんだあの男」

震える声に目を開けて視線を戻すと、未だに腰が立たないらしいウツデイの目からは完全に力が抜けている。非戦闘員の彼には刺激が強すぎたか。机に手を伸ばして何とか立ち上がるとそのまま椅子の上で転げ込んでいる。

「男のクセに情けないなあ」

「お前だって騎士のクセにブルってたじゃないかよ」

「あ、あれは……違うもん！ あれは——」

「ま、そんな事はどうでもいいさ。アイツ、お前の知り合いか？」

ウツデイにそう問われても、どう返して良いか迷う。友達でも無ければ仕事仲間でも無い。勝手に獲物認定して襲って来たただけだ。

「知り合いつてわけでもないんだけどなあ……ははは」

鼻先を弄りながら苦笑いする顔に、はつきり迷惑だと浮かべておく。レイサには係るなど言われていたのに、もう完全に目をつけられてしまった。

あの男に係って以来、ロクなことが起きていない気がする。あの様子だとまた来るに違いない。

(今度来たら……もつと聞き出さなきゃ)

未だにあの男の真意は掴めずにいた。この城で挨拶を交わしただけのはず。それがいきなり賊討伐中に襲い掛かれ、そして今回のお見舞いだ。

でも、あの男は確実に何かを知り、よく分からない黎の領域へ踏み込む事を望んでいる節がある。

——ようやく守れるようになったんだぜ

あの男は嘘を言っていない気がする。だが、怖かった。道がある

かも分からない、自分が自分で無くなってしまふ黎の領域へ意識を委ねる事が。

もつとあの男から聞き出したかった。——同類<sup>魔人</sup>から。

「あんな奴の言うこと真に受けるなよ」

「え？ 何のこと？」

「何のって……全部だよ。お前や師匠さんをバカにしてたろ」

ウツデイにはそんな彼女が心配でならなかった。ただでさえ幼馴染が落ち込んでいる時にあの男がもたらした話は、更に彼女の顔から微笑みを奪ってしまった。

風の妖精——そう伝えられてからずっとあの青い瞳は震えっぱなし。今もベッドの上で手元をじっと見下ろして何かを考えている。しばらくしてその横顔に浮かんだのは、いつもとまるで違う引きつった笑み。

「はは……なんかさ、おとぎ話みたいだね。あたしが？」

もう何と言って自分を納得させれば良いか、シャニーは分からなくなっていた。

どれもこれも、彼の話したことは味わった苦痛を否定するどころか裏付けるものばかり。受け止めたら自分を否定されてしまふ気がして。自分ではない自分が皆の知る自分だと思ふと怖かった。

——それを全部自分の実力だと思つてたのか？

必死に生き抜いてきた今までは、全て……そこまで考えて静かに首を振った。

(これも……あたしの実力なんだ)

受け止めるしかない。受け入れるしかない。力もまた、自分ではない自分ではなく、今まで積み上げてきた自分の一部なのだ。守る剣を握る資格を掴むために今までがあつた——そう考える事にした。

「へへっ、何かカツコイイじゃん」

「シャニー……」

「みんなを守る力が手に入ったと思えばおっけー、おっけー！」

——鎖を切つたのはテメエの意志だろ？

リスクを承知で、未知の世界へと踏み入ったはずだ。そして今、望んだとおりの力を入れた。やってしまったことは返ってこない。とにかく前を向いてポジティブに考えようと思った。

（おじさん……使っちゃいけない理由、分かったよ。でも、使わないと見つからない気もするし……。——少し一人で考えたいな）

問題は……扱いきれないことだ。仮面の魔術師と戦った時も、ヴァルプルギスと斬り結んだ時も、自分が剣を握っていた意識は遠い。

ここがウツデイの職場だとは分かっているが、動けない今は少しだけでも退場してもらわないと一人の時間を確保できない。

見下ろせば上着をソルバーンに引き裂かれてスポーツブラ一枚……使わない手はない。

「そんな事より、いつまで見てるのさエッチ！」

「な、何だよ今更?! 家でいつもそれでフラフラしてるくせに」

「うるさい、うるさい! 早く着替え持ってきて!」

ウツデイに眉を釣り上げると部屋の出口を指さして追い払った。

静かになつた部屋。これで頭を整理できる——その時だった。

——あ……………ば……………か……………に

びくつと肩が跳ね上がり、目が飛び出しそうになる。間違いない、また聞こえたのだ、あの声。焦ってあたりを見渡すが誰もいない。

「うそ……………」

あれは夢なんかではない。そう思い知った途端に胸を掴む。ソルバーンの言っていたセチなのか? この声は。もう、それに答える声はない。ふと鏡に映る自分の顔と視線が合った。蒼い顔、黎い目……………。

「ダメダメ。こんな顔してちゃ、あたしらしくない、ない! 笑って、笑って」

自分でも明朗な性格だと自覚はある。自分の知る顔が目の前に無くて彼女は無理やりにも笑った。受け入れると決めた今、らしくもない顔をしてますます沈んでいくのはもう嫌だ。

「よおし、がんばろー!」

拳を突き上げて自身を鼓舞すると、彼女は再びヘアスタイルを弄り

始めた。この白に青が戻った時のために。



ウツデイが着替えを持ってきた後もしばらく静寂が珍しく続く。いつも騒がしいシャニーがベッドの上で坐してメンタルトレーニングをしているからだ。

彼が持ってきた服は慣れ親しんだ一般隊員の服。

この服を着ていると何か心が落ち着く。士官着は身が引き締まるものの、重い責任も背負うので今はこつちのほうが良い。ただでさえ今は重すぎる罪がのしかかっているのだから。

その罪から滲みだし、トレーニング中でもお構いなしに湧きあがる不安。

「ねえウツデイ」

口から衝いて出てきてしまった。考えない様にしようとするほどの、平常心でいようとすればするほどに湧き上がってくる不安。静かにしているとそれが恐怖を連れて来て囁いてくる。平常心など……無理なのかもしれない。

「なんだ、まだ寝てなかったのか」

「あたし達ってやっぱ、騎士団の中で問題になってるの?」

その問いにウツデイからはしばらくの沈黙が返ってきた。

もうこれだけで十分、シャニーは事態を思い知っていたが、「さ、さあ」遅れて無理やり押し出されて来た言葉に、沈黙よりずっと重い現実を突き付けられた気がした。

「僕のところにはそこまで情報は来てないかな」

今更取り繕ってもダメなのに。シャニーは内心ウツデイに手を合わせた。きつとまた彼は自分を心配してこう言っているのだ。騎士団中の噂が集まってくる彼に何も情報が来ないなんて、今までを考えたらおかしい。

「嘘はいけないんじゃないのか? 軍医君」

それが間違いではないと伝える声がふいに入りの方から聞こえて来た。赤い瞳に赤い髪に。寒色系が多いイリアにあってこの攻

撃的な色はとても目立つ。

出入り口で腕を組んで壁に背を預けていたアルマの眼がウツディをまっすぐに捉える。やめろ！———すぐに反抗の眼差しが返ってくるが、アルマは壁から背を離すと医務室の中へと入っていく。

「アルマ！ 来てくれたの？」

シャニーは嬉しそうだ。手を振って笑顔で招き入れようとしている。相変わらず人の心を融かしてくれる顔だが、今は付き合っている時間は無い。

「ああ。少々、文句を言いにな」

体の方は大事には至らなかつたと確認出来ると、アルマの表情は緩むどころか険しくなった。それを察したのか、シャニーも不安そうに首を傾げている。

ポーカーフェイスのまま彼女の目の前にまで歩いて行き、ずいっと顔を押し付けてなじる。

「何であれだけ警告したのに首を突っ込んだんだ」

聖天騎士団との契約に旅立つ前日、厳しく脅して引き留めたはずだった。今ならまだ引き返せると。

いくらヴァルプルギスを退けて生還を果たしても、もう彼女は出撃前の生活を送る事が出来ない状態にまで追い詰められている。いや……下手をすれば、何もかも終わってしまったかもしれない。

シャニーも文句があるとアルマが言った時点で何を言われるかは予想がついていたが、いざ言われると視線を合わせられなくなった。それも束の間の事。すぐに息を吹き返してまっすぐ親友の目を見つめて叫ぶ。

「だって！ 目の前であんなにイリアの民が虐げられてるのに黙っていられるわけないよ！」

———お願い、信じて……！

祈るような目が訴えてくる。あまりにも予想通りの答えが返ってきてアルマも答えに窮してしまった。それが契約違反に当たる事は分かっているだろうに。

裏表がないのは結構なことだが、それが今最悪の事態を引き起こしている。軍医は良かれとずっと隠してきたのかというのか。

それにしても、彼女の性格を考えれば、的確な任務だ。あの人間も実に喰えない。

「お前、西方三島の連絡所に出向だぞ。このままじゃ」

「せ、西方……?!」

さすがのシャニーでもそれが何を意味するかは知っている。真つ白になった頭がベッドの柵にぶちあたった。

(あたしに……死ねって言ってるワケ?!)

西方三島連絡所……そこは事実上の墓場。荒くれや賊がはびこる無法地帯での任務は自身を守る事に一睡もできないほど過酷だと言う。一度辞令が降りれば二度と還って来られないそこは、天馬騎士団内でも流刑の地と呼ばれ恐れられている場所だ。

「何とかしろ！ イリアで仕事をしたければ今日しかチャンスはないぞ」

逃げることを許すわけには行かない。アルマは責めるようにシャニーに再度顔を近づけ、両肩をがっしり掴んで揺さぶった。

おそらく処分が下されるのは明後日だ。明日弁明しようと思えば今日全てを揃えておかなくては間に合わない。

「何とかって言ったって……証言をもらうしか」

「だったら今からすぐ行け！ 遊んでいる場合か！」

「分かってるよ！ ——どうやって境界線を越えよう……」

シャニーは時計へ目を落とした。もう午後三時を過ぎている。早ければあと一時間もしないうちに暗くなり始める時間だ。この吹雪の中、あの開拓地に飛んで行って証拠を集めてくるなんて……そう考えていた時だ。

「あんだと接点を持ったものは全員消されたよ」

どこからともなく現れた黒い風が運んできた事実、シャニーの目が見る見るうちに見開かれていく。

「え…… ——えっ?! なんで?! どうして!!」

「簡単な話だ。こう言う時のためだよ」

思わずベッドから飛び出してレイサの許まで駆けるとその手を取って揺さぶる。だが、レイサは無情にも静かに首を横に振った。

「もう証拠はどこにもない。聖天騎士団も現場の暴走として現場長を処分して終わりだよ。悔しいけどね」

ヴァルプルガスに敗れ、気を失っていたシャニーが目を醒ました時には大半の執行は終わっていた。それからその地に残り調べ廻っていたレイサの前で、次々に処刑は繰り返されていた。

他騎士団の運営不可侵の掟がある以上、表立って開拓地で証人を探すことなどできない。最初からあの男の手のひらの上で踊らされていたとは思えない手際の良さ。事実上の八方塞だった。

「また……またなの？」

乾いた声が引きつった口元から零れ落ちた。シャニーの肩が震えていたのは証拠が無くなったからなんかではなかった。

あの場で言葉を交わした者たちの顔がひとりひとり浮かんできて、罪悪感に押し潰されそうになる。

「あたしが余計なことをしたから、死ななくていい人が……？ あたしがみんなの人生を……変えてしまったの？」

同じ過ちを繰り返してしまったというのか。

守ると言って賊にちよつかいをかけた挙句、再襲撃にあって全滅した村。あの時と、まったく同じ過ちを。震える声が咽び泣くまで時間はかからなかった。

だが、アルマは下を向くことを友に許さなかった。シャニーの肩に手を置くと顔を覆う手を握って自分の方を向かせた。

「余計な事かどうかはお前が決めることじゃないさ。少なくとも、開拓区の体制は是正されたんだ」

彼女の行動が運営不可侵の掟を越えて他騎士団の活動の是正に繋がった。それは紛れもない事実であり、イリアの歴史を変えた大きな、大きな功績だった。

事実は事実と受け止め、今後の最善へどうしたら繋げることができるとかを考えることが生き残った者の務め。

「隠したって意味無いから伝えておく。騎士団内は非難の嵐だ」

——— どれだけ剣を折られても、信じてくれる人のために戦い続ける。それがあたしの誓いだから勝つまでは負けないよ

自分の故郷で親友が見せたあの強い眼差し。いつも前を向いて歩いてきた親友を信じて、アルマは自身の知る全てを伝えた。

掟を破り、契約に違反して、同族へ刃を向けた。その事実だけが騎士団の中で飛び回り、根も葉もない噂となって広がっていることを包み隠さず、全て。

「……そう」

聞き終わったシャニーはもう泣き止んでいた。

「そうだよ。分かってる。受け止めないといけない事だつて」

知っていた。誰からも認めてもらえるわけが無いことを。覚悟はしていた。誰にも理解なんてされるはずも無いことを。

それでも剣を握り飛び出す決断をしたのは誰でもない自分。誰かに言われて振るつた剣ではなく、己の誓いが叫ぶままに自らの意志でとつた剣。そのこと自体は今も後悔はしていない。

その瞳が折れていないことを見届けたアルマはそつと親友の両手を取ってしっかりと握りしめた。

「少なくとも私はリスペクトしているよ。信じる剣だけを振るうお前の姿をね」

自分の知る通りの親友のままだった。だからこそ、親友なのだ。雇い主の「犬」なんかではない、人として認めた数少ない友。

「アルマ……」

「お前の剣、非難ごときで折れるものじゃないだろ？ 民の為の剣……お前の誓いしかと見せてもらったよ」

今一度強く友の手を握り、アルマは風を切つて医務室から出た。親友の為にしてやれることと言え……イドウヴアに進言して左遷先を変えてやることくらい。だが……おそろくそれは不要だろう。

(きつとアイツは自身で道を切り拓くはずだ)

そう信じる背中清々しさに満ちていた。

部屋に残されたシャニーはアルマに強く握られた両手をじつと見



降ろしたまま動けずにいた。

親友は自分を信じて励ましてくれた。自分の剣を認め、理解してくれた。それは素直に嬉しくて頬を伝うものが止まらない。だけど、だからこそ彼女は自分が怖くなった。

（あたしの剣は、あの最後の剣は本当にあたしの信じた剣だったのかな……）

友を裏切ってしまうかもしれない剣が心の中に潜んだ今、一体どうすればいいのか。どうしたら守る剣として己の意志で握ることが出来るのか。

ソルバーンには啖呵を切ったが、魔剣のままでは誓いの証明なんて出来やしない。

処分の話は気になる。けれど、その事よりも他人の人生を変えてしまふ剣の存在に彼女は震えていた。

## 第6話 密室裁判

—— 12月 6日 AM 9:39 医務室

ウツデイはうんざりした顔で机に向き合っていた。

今日はダメだ。もう朝から騒がしくてとても仕事をする気にはなれない。ベッドの上から壊れた蓄音機があれやこれやと騒ぎ立ててくる。

「あーっ、早く稽古したいよお！」

また突然に叫ぶものだから驚いて試薬の瓶を落としてしまった。

「びっくりするじゃないかよ。いきなり騒ぐなって」

「軟禁者<sup>あたし</sup>を大人しく開放してくれれば要求を呑もう！」

「……人を誘拐犯みたいに言わないでくれる？」

物言いたげな目をベッドに移すと、黒のタンクトップ一枚の幼馴染が両手をこれでもかと真上に伸ばして今にも飛び出していきそうだ。あの手この手でとにかく脱走しようと思つて仕掛けてくるので目が離せない。今日は扉や彼女の剣に鈴を取り付けて抜かりはないはずだ。

「ダメだったらダメ。頭打ってるんだからあと二、三日我慢」

「えーっ！ どーせもう壊れてるんならイイじゃん！ いつつもそう言うクセにさー」

「自分で言ったら終りだからね？ それ」

彼女がこんなにも落ち着かない理由は分かっている。明日は部隊長会議 —— アルマが言っていた処分が下る日。迫る運命の時を前に、いつ来るか分からないノックを静かに待ってなどいられないことは分かる。

「あーっ、天馬に乗りたいー乗りたいー」

それでも子供が駄々をこねるように喚く姿は如何ともしがたい。部隊長になってからその横顔がかなり凛々しくなったように見えていたのだが、どうやら士官服に特別な効果でもあっただけらしい。

ふうっため息をついて床に零れた試薬を拭いていた時だった。ふいにノックする音が部屋をギンと緊張で貫いた。

「総務部のエニスです」

「え……。ウソ……?!」

思わず目が飛び出しそうになったシャニーは電撃が走ったように背筋を立たせ首を伸ばす。恐る恐るウツデイの方に視線をやってみるが、彼も息を呑むばかりで何も返してこない。明日だと思っていた死神の鎌が、一足先にこの首を狩りに来たというのか。

静かに開かれた扉。ついにその時が訪れた。

「シャニーさん、起きてますね」

現れたふくよかな女性は、十八部隊発足の時にテイトが読み上げた辞令を持つてきた人だからよく覚えていて。この人は総務部長のニスという人だ。人事関係の責任者でもある。つまり、この人がここに来たということは……。

(ついに……——来たんだ)

名前を呼ばれてシャニーはぐくりと息をのんだ。とうとうこの時が来てしまった。もう、逃げられない。

アルマから聞かされているから、どんな処分が下されるかは大方理解している。——つもりだった。今でも心のあちこちから自分の甘えた声が聞こえてくる。罰を受けたくない、どこにも行きたくない……——

(違うー。そうじゃないよ！)

訴えたいのはそんな事では無いはずだ。罰は規則や掟からしたらどうしようも無い事。それは分かっている。短い時間だったが、罪については覚悟を決めた。

それでも納得できないままなのは……何故剣を握ったのか——  
——信じて欲しいこの気持ちも誰にも訴える機会が無いからだ。せめて団長<sup>姉</sup>だけにでも聞いてもらいたかった。掟に背くか、誓いに嘘をつくか……何故それを選んだのか。せめて、せめて話を聞いて信じてもらいたい。

「シャニーさん？ 大丈夫ですか？」

「あつ、はい！ 生きてます！」

自分の世界に耽っていたらエニスの声が飛んできて思わず声が裏返る。

焦って飛び出そうとして上半身がスースーする事に気づき急ブレーキをかけた。医務室を自室代わりにして、タンクトップ一枚で自由に過ごしていた事を忘れていた。

急いで上着を羽織り、ブーツを履くとエニスの前まで小走りに駆け寄る。

「タイト団長がお呼びですよ」

分かっているけど、どきつと心臓が跳ねた。今更祈ったところで何が変わるわけでもないことは分かっているけど、心の中で何度も何度も祈る。姉が少しでも話を聞いてくれることを。弁明の場もなく、知らない所で議論されて処分だけ下されるなんて……悔しくて仕方ない。

「理由は、分かっていますね?」

エニスの最終確認に静かに頷く。

まずは謝らないといけないだろう。でも、姉ならきつと聞いてくれる。例えばイリア中から理解されずとも、認められずとも、それでも。

総務部長に背中を押され、静かに部屋を出ていくその後ろ姿を見つめながらウツデイはエリミーヌに祈った。



医務室という、味方が常に声を掛けてくれる部屋から一步出たシャニーを待ち受けていたのは戦場だった。

「あの子、西方に向向ですって」

「髪、真っ白よ? よほど激戦だったのかしら」

ヒソヒソと指を差してくる、廊下で出くわす者たち。打ち砕かれた心へ追い討ちをかける無数の眼と声。あちこちから槍のように突き刺してくる。

仲間達は……自分が寝ている間もずっとこの声を浴びてきたと言うのか。彼女たちは命令に従っただけなのに。それどころか、再三止めてくれていたと言うのに。

(誰も庇ってくれるワケ……無いよね)

甘えた事を考える自分にふと乾いた笑いが零れた。イリア最大のタブーを犯した癖に今更何を考えているのやら。

努めて表情を変えず、シャニーはまっすぐ前だけを向いて歩くことにした。

(エンジェルヘイロー、大丈夫かな……)

今の不安は、仲間の処分と、あの企画が打ち捨てられてしまわないか。ただでさえ、イドウヴァとの交換条件で引き受けた仕事で問題を起こしたのだ。彼女はもちろん、その配下がどんな目を向けてくるかなど考えるまでも無い。

道行く人すべてに信じてもらうことは出来ないと分かっている。あの人には……。姉が今どんな顔で部屋にいるのか。少しずつ、少しずつ部屋への距離が近づくにつれて顔は厳しくなっていく。

「団長、第十八部隊長をお連れしました」

ついに運命の扉の前に立った。先にエニスがノックして外から声をかけている。

「そのまま中に入るように言ってください」

普段と同じ理性的な声が返ってきて、エニスが目配せをしてきた。改めて扉の前に立つ。ひとつ大きく深呼吸してぐつと奥歯を噛みこむと一気に扉を開けて中に入った。

固く閉じられた扉。静まり返る廊下。エニスは奥に消えた若き部隊長へ祈りを捧げた。

静寂に包まれたのは束の間の事だった。どんどん大きくなるブーツの音。

「今日処分を決めるとは聞いていませんよ」

顔に朱が差すイドウヴァは、部屋の前に着くなり尖った声でエニスに問う。

シャニーの処分は明日の部隊長会議で決めるはずだからだ。こんなだまし討ちが許されるはずが無い。

「入れてください」

団長室のドアノブに手を伸ばそうとしたが、エニスがその体を使って扉の前に立ちはだかつてきた。

「団長おひとりでお決めになるそうです。貴女でもダメよ、イドウ

ヴァ」

思わずブーツの底で床を叩きつける。

あの失態は千載一遇のチャンスだった。副団長である以上、団長の決定への反対はよほどの反証が無い限りは通らない。あの団長の事だ、甘い処分で済まずに決まっている。止む無く廊下で待ち伏せる事にした。

——AM 10:00 団長室

「第十八部隊長シャニー、参りました」

自らドアを閉め退路を断つ。

吹雪の音だけが聞こえてくる広い部屋。沈黙の空間がその圧で押し潰そうとしてくる。

凍てつく部屋の奥に自分を呼び寄せた人がいる。彼女は待ち構えていたようにじっと見つめていて、シャニーは吸い寄せられるように団長の座る机の前まで歩いていった。

久々の再会。本当なら抱き着きたいはずの団長から、じつと睨むように見上げられて何も言葉が出てこない。長い沈黙の後、表情を変えないまま団長は静かに切り出してきた。

「——何で呼ばれたか、貴女は分かっているはずよね？」

「はい……」

まるで鋭い氷の刃のような問い。心を感じさせない沈着の声に、わっと腹に広がる重く鈍い気持ち。

怒りよりも、大きな疲労を滲ませる姉の声に罪悪感がどくどく湧きあがって来た。きつと聖天騎士団の激しい抗議を一身に受けたに違いない。大丈夫か——喉元まで出かけた言葉を飲み込んだ。誰が……そうさせたと思っっている？ 今は姉の問いに答え、詫びる方が先だ。

「……西方への出向ですか？」

恐る恐る聞いてみる。自ら口に出してみるとゾクッと背筋が震った。

西方三島はベルン動乱の時に経験しているから、どういう場所かは

分かっている。あの時は皆がいたから怖くはなかったが、女一人であの地に行く勇氣はさすがに湧かない。

姉は不安に返してくれなかった。ふっと一つ息を吐くと席を立つてしまう。

「確かに、副団長はそれを強く主張しているわね」

「申し訳ありませんでした！」

歩いて行こうとするティトの手を取って深く頭を下げる。ティトはその手を払って先に行こうとするが、シャニーは離さなかった。

「分かっているでしょ？ それで片付く——」

「お願い！ 部隊の子たちだけはなんとか！ 彼女たちは、あたしの命令に従っただけなの！」

「……貴女って子は……」

足が止まり、ティトは思わず妹を見下ろす。

それは僅かな時間だった。驚きに小さく開いていた口を一旦固く閉じると、シャニーの手を引いてまた歩き出した。

「気持ちだけ、留めておくわ」

彼女はそれだけ言ってシャニーの懇願に可否を返すことはなく来客用のソファに身を移す。

手で座るようにジエスチャーする彼女に言われるまま、シャニーもテーブルを挟んで反対側に座った。

「——話してちょうだい。開拓地で何があったのか」

「お姉ちゃん……」

驚きを口元に隠せず見開かれる瞳。姉は最初から弁明の機会を与えるために呼んだらしい。

「事実だけを話して。貴女の見解は要らない」

面食らって反応出来ないでいたら、急かすようにティトが続けて声をかけてきた。

もらったチャンスだ。仲間たちの為にも一つも漏らさずに団長に伝えなければ。この目で見て、この耳で聞いて、この身で感じてきた全てを。

（これがせめてもの罪滅ぼしだ。生き残ったあたしが果たさないとい

けないんだ)

部隊の仲間や、二度と会えなくなつた者……彼らの顔を思い浮かべ、心に誓いを唱えた。まだ——戦いは終わってはいない。

最初は静かに始まつた弁明だったが、それは次第に身振り手振りが加わり、しまいにはテーブルに身を乗り出して熱を帯びていく。祈るような眼差し。叫びにも似た口調。怒りさえ滲む身振り。彼女は三十分以上に亘つて喋り続け、ようやく言葉が途切れ途切れになつた頃には十一時近くとなつていた。

「本当なの！ 信じて、お姉ちゃん！ あたし達は痛めつけられてる人たちを助けたくて!!」

それだけ訴えても、タイトの氷のような視線はまるで動くことは無かつた。ただ、無表情に身じろぎする事も無く激情を受け止めるだけ。まるで壁に向かって叫んでいるような気さえしてくる。

(やつぱり、信じてもらえないの……?)

懇願の眼差しを送り続けていると、ようやくにタイトが少しだけ身を乗り出してきた。

「質問に答えて。どうして働いている人たちがイリア人だと分かるの？ ——証拠は？」

思わず視線が逸れた。言つてしまえばレイサに迷惑がかかる。レイサは命令に従つたに過ぎず、今の部隊長は自分だ。

証拠は？ ——言われることが分かつていたとはいえ、いざ問われるとあまりにも重い言葉。アルマは何とかしるとアドバイスをくれたが、何も出来るはずはなかつた。

「それは……そんなの関係ないよ！ イリア人だろうがエトルリア人だろうが、あんなの許せない！」

「証拠は、と聞いているの。貴女の見解は聞いていない」  
「そ、それは。それは……」

逃げることを姉は許してくれなかつた。それまでの激情は火に土を被せるように勢いを失い、震えた瞳は小さく俯いた。

「……そんなの……——あるはず無いじゃない」

やつぱり信じてもらえないのか。悔しくて悔しくて、腹が震えて揺



れる声をぐつと奥歯で噛み砕き、外に漏れ出さないように堪えるので精いっぱい。

どんな罰でも受ける覚悟は出来ている。信じている——ただ、その言葉が欲しい。

紅涙を絞る妹にティトは静かに目を閉じてふうつと息を吐きだした。

冷徹に徹する事が出来ない自分の甘さを叱りながらも、やはりこれ以上は見ていられない。

「……レイサさんと潜入して囚人から聞いたから」

「え……。ど、どうしてそれを」

姉が突然と口にした内容にシャニーは瞠目するばかり。喉元まで出てきて必死に飲み込んだフレーズそのもの。まるで——その場で見えていたかのような口ぶりだ。隠そうとしていた事実をいきなり口にされてどうしてよいか分からなかった。

「私は貴女を信じているわ。でも、先に手を出した事を断じて許せないし、証拠が無ければどうも動けないのは分かっているはずでしょう？」

「お姉ちゃん——！」

一気に堰が切れてシャニーは姉の胸に飛び込んでしまった。信じている、ただその一つの言葉だけでどれだけ救われたらどうか。己の正義が、誓いが、誰にも理解されない事が悔しくて、苦しくて、叫びたいくらい心を抉られてきた。

たった一つの言葉で、打ち砕かれた心に少しだけ勇気が戻る。

「今は仕事中よ。お姉ちゃんは止めなさい。進歩の無い子ね」

しかし、まだ終わりではないとティトは泣きじやくる妹の顔をあげさせてハンカチを渡すと、席に座るように促した。

「もう一つ聞かせて。……任務中に天馬騎士団宛に報告書を出したのは、本当なの？」

「本当なのって……出したじゃない！ でも、任務を続けろって！

お姉ちゃんが……。——ッ。ねえ！」

さすがに質問が露骨過ぎたか。察したシャニーが目には怒りを燃や

して聞き返してくる。

「……当たり前でしょ。契約なのだから」

今はそれを詮索する場では無いから被せて黙らせたが、テイトの脳裏には十八部隊の者達の叫びが蘇っていた。

——団長、私たちは聖天騎士団の虚偽報告を書簡にして報告しましたよ。あいつが戻って直接聞くって言うのを止めるの、大変だったんですから

——そりやないツスよ団長！　ウチら全部報告してるはずツス！

——……私達、報告した。書簡で報告しようってシャニーに提案したの、私だもの

——どうせあいつが握り潰したんだろ？　あのズブズブならやりかねないさ

——俺ははつきり見た。皆が処刑されるところを……あいつら許せねえ!!

内外に憂慮は尽きず、特に内患を見極める必要があるが、まずはシャニーの処分を決める事が先だ。もう、テイトの中で答えは出た。

「貴女以外にも既に同じ場を設けているの。五人全員が同じ証言をしたわ。嘘ではないと信じてる」

テイトはシャニーを招集する前に、既に十八部隊のメンバーを一人ずつ特別室に呼んで事情聴取を済ませていた。

濃淡の差はあるにせよ、語る内容は一樣で、誰もがリーダーへの酌量を求めてきた。そして今、六人目の証言者もまた同じことを語った。誰よりも濃く、誰よりも強く。

「もういいわよ。エニスさん」

ずっと外で待っていたのか、テイトが呼ぶとすぐにドアノブが音を立ててふくよかな女性が入って来た。「判決」の証人となるために。それを察したシャニーはごくりと息を呑み、背中も足も震えだしてしまっていた。

(五人……?)

数が合わないことに違和感はあるが、もうそれも意味がなくなる。西方に出向となればもう姉とも二度と会えない。

「第十八部隊長シャニー。騎士団の懲罰令に則り、12月31日までの期間、貴女の登城および帯剣を禁止する」

透き通った氷のような声が一人の天馬騎士の人生を決めた瞬間。終わった——そう思っただけ目を瞑っていたシャニーは予想していたものとまるで違う懲罰に、えっと口を開いた。

団長の目を確かめるように見つめるが、テイトは微動だにしない。驚きが顔中に広がっていく。

「お、お姉ちゃん?!」

「明日は部隊の引継ぎの時間をあげる。明後日から頭を整理しなさい」

出向に比べたら罰など無いに等しい処分。おまけに個人に対しての罰であり部隊に対するものではない。

姉が自分を信じて最大限の酌量をしてくれたと思うと言葉が出ない。

「いろいろあったのでしょうか?」

そう声をかけてきた姉の顔は団長ではなかった。反発が出るに違いない。姉がまた自分の事で矢面に立つと思うと複雑だった。

「ひぐつ……おねえちゃああん!!」

だけど、もう何も考えられなくなった。生きて帰って来て、大好きな姉の顔を見られて、西方なんて墓場送りも消えた。

心を押し潰そうとしていたものが一気に外され、気づいたら姉の胸に飛び込んで泣きじゃくっていた。

「怖かったよお!! もう死んじゃうって、もうみんなに会えないって! 怖かった……怖かった——あああああ!」

「……心配ばかりかけて。本当に……バカな子なんだから」

ここが団長室など忘れ、自分が部隊長だとか、騎士だとか、何も考えられずにひたすら泣いた。今まで抑え込んできた恐怖を全て吐き出すように姉の胸にぶつけて泣き続けた。その頭上へ優しく載る手が撫でて癒してくれる。

どれだけそうしていたかは分からない。気づくと姉に肩を持たれて立たされていた。

「お姉ちゃん……ごめんなさい」

「何度も言わせないで。今は仕事ですよ。私は貴女を信じてる。でも、——それでは騎士団は済まないの。分かるわね？」

頭は分かっている。だけど心は正直だった。なかなか首を縦には振れない。ただ、下唇を噛んで俯くばかり。

「……」

「貴女の主張は証拠不十分と言わざるを得ない。判断材料には出来ないわ」

「悔しいよ……こんなのがまかり通るなんて！」

「……でも、私は信じてる。それしか言えないわ。さあ、行きなさい」  
「ありがとうございます」

最悪の未来は回避できたがモヤモヤは拭えないまま。

聖天騎士団のやり方は許せないし、それを訴えても騎士団の中では悪いのは自分の方。

姉があの手簡を見ていないような口ぶりだったのも気になる。主張を続けて詮索を始めれば、信じてくれる仲間やタイトに迷惑をかけるしまう。

姉やアルマのおかげで少しは救われたが、処分が降りたら噂を広めている者達はそれ見ると笑うのだろう。悔しさと胸が押し潰されそうだった。

シャニーが団長室から出て行き、背中が廊下の角に消えた事を確認するとイドウヴァは団長室へと駆けていった。

彼女が扉に辿り着くより先に、マントを羽織り腰に剣を差したタイトが部屋から出てきて視線がぶつかる。

「団長！ どういうことですかッ、これでは示しが」

エニスから懲罰内容を聞いた時には耳を疑い、沸々とした怒りが沸き上がった。あの小娘に灸を据えるいい機会だったはずなのに。撤回を迫り怒声を浴びせた途端だ。

「団長の私が決めた事です。決定に変更はありません」

今迄に無いくらい毅然と斬り返された。

「関係者が全員同じ証言をしたこと、聖天騎士団が是正措置を取ったこと。それらを考慮した結果。以上です」

——意見する資格はない

辺りを払うような凜とした眼差しで横を通過していく団長に何も言い返すことが出来ず、小さくなっていく背中へただ拳を握りしめるしかできなかった。

あの時、あの連中が裏切りさえしなければ立場は逆だったはずなのに……。矛先はさらに強く、仕留め損ねた明朗の騎士へと向いていた。

## 第7話 墮天使たちの誓い

—— 12月 7日 AM 7:24 第十八部隊詰所

静かな部屋でぽつんと一人。皆が来るのを待つのがこんなにも苦痛だったなんて。

登城と共に帯剣も禁止されているから剣の稽古すらできずに、シャニーは仕方なく持ち込んだ編み棒で静かに手袋を編んでいく。

(まただ……)

—— あの……ま……ば……か……の……

「……ッ」

思わず顔をしかめる。独りでいるとたまに聞こえてくる自分の声。手に入れたものの代償なのだと言い聞かせて、気にしないようにするしかない。

放り出してしまった編み棒を再び手に取り動かし始めた時だった。よく知る元気な声が部屋へと近づいてくる。

「おはよー」

「ええ?! シャニー、あんた降格になったの?」

いつも通り仲間たちを迎えたはずなのに、なぜか仰天が返ってきた。おまけに指さしながら言われた話は初耳だ。団長<sup>テイクト</sup>だってそんな事、一言も言っていないかつたし、エニスからも減給以外は聞いていない。

殊更、それを言ったのが普段冷静なルシヤナだったから、ドキンと射抜かれたように心臓が跳ねて堪らず立ち上がる。

「うそ?! あたし降格?!」

髪が逆立ちそうなほど驚き、思わず自身を指さして聞き返す。その途端、ルシヤナと一緒に登城したミアアやレンと顔を見合わせだした。

「あ、いや服が私たちと一緒にだったから」

「なーんだ。あゝ、びっくりしたあ。脅かさないでよお、寿命が縮むじゃん!」

「ま、お互い様ってことで」

目覚めてからショッキングな話ばかり。仲間からさえドツキリを仕掛けられた気がして力が抜ける。ふうつと大きく息を吐き出してお尻を椅子に放る様に座った。

要領を得ないで居るルシヤナ達に勘弁してくれと、しなしなした笑みを浮かべて手を払うように振る。

「だって、聖天騎士団に荷物全部置いてきちやったから制服が無くてさ」

大した話で無かったからか、ルシヤナ達がほっと胸を撫で下ろす様な表情をしている。やはり仲間たちに心配をかけてしまったに違いない。

意識が飛んで記憶はないが、急転直下の脱出劇だったらしい。戦場からそのまま離脱してきたからみんなだって同じ状況のはず。

それでも、ずっと医務室で釘づけにされていた一週間弱の間に、皆はもう普段を取り戻しているようで顔も元気だ。

早く降格でも部隊の解体でも無い事を伝えてやりたい。

「処分なだけどさ」

雑談も挟まず切り出した。いつも雑談が長引いてルシヤナが本線に戻す流れに慣れてしまっていたので、普段と違う流れに皆背筋が伸びる。

「あたしの明日から月末までの登城禁止で済んだよ。良かった良かった」

聞かされた処分に三人とも眉をひそめだした。

「良かったじゃないツスよ!」

おまけに、そう思うでしょ? ——とでも言わんばかりの笑顔を向けてくるものだからミリアが肩を怒らせ始めた。

「何でシャニーだけが処罰されなきゃいけないんスカね! 納得いかないツスよ!」

てつきり皆で一緒の罰を受けるものだと思っていた。最悪流刑だって覚悟はしてきたこの一週間。それがふたを開けてみたら、たった一人だけが受けるなんて。

罰自体は軽くなっても、騎士団の中に残る噂の矛先が全部リーダー

に向くのは間違いなかった。

「契約違反をして相手の騎士団に損害を与えた。十分すぎる根拠だよ。団長の恩情に感謝するしかないね」

聖天騎士団の出兵によつては、騎士団の存続自体に係わる問題に発展していたかもしれない。三大騎士団の内之二つが争うとなればゼロツト達も動かざるを得なくなり、内戦に発展しかねないほど危険なものだった。

ルシヤナに冷たく現実を突きつけられると、それまで三角になっていたミリアの目も萎んでしまった。

それ以上に俯いていたのは犯した張本人。だが、彼女はすぐに前を向いて席を立ち、目の前の六つの瞳を見つめた。

「ごめん！ あたしが勝手なことしたばかりに、みんなまで巻き込んで怪我させちゃつて。ごめん、本当に……ごめんなさい」

白い髪を揺らして大きく深く頭を下げる。

顔を見合わせる三人。リーダーがやることなど、だいたい予想はついていた。あの惨状を前に我慢出来ないことも、こうして頭を下げることも。

静かに歩き出したレンが、その小さい体をリーダーの垂れた上体の下に潜り込ませて無理やりに頭を上げさせた。

「シャニー、なんで謝るのか私には理解できません」

きよとんとする青い瞳を銀の瞳がじっと見つめて離さない。その瞳も口調もどこか籠る怒り。

「なんでって……」

シャニーは言葉に詰まった。自分があの場で剣を下ろして仲間へ退避を命令していれば戦闘は回避できたはず。不適切な命令に皆怒っていると思ったのに、仲間から返ってきたのは謝罪そのものに対する不満。

「私は自分の意志でリーダーを信じて戦った。謝られたら私の気持ち、否定されたように感じます」

信じている。その言葉が心に突き刺さった。怒ったところなど見たことが無いレンの口調は静かでもはつきりと伝えてくる。――



—私を信じてくれないの？

ぶつけられた憤りに何も返せなくなってしまった。

——お姉ちゃんはおたし達を信じてくれないの?!

以前自らが姉に叫んだ言葉が蘇る。……九月にも同じような事があつたはずだ。

(あたし……何も成長していないのか)

その自問に静かに首を横に振った。仲間達を信じて、尽くせる手はチームで全て打った。誓いを曲げずに、最後まで信じた道を進んで剣を掲げ続けた。独りで抱え込んで掲げるべき剣さえ放り出していたあの時とは違う。

間違っていたら止めてやると言ってくれた仲間達が、あの時は止めなかつた。それが全てなのだと言分に言い聞かせた。

「ウチはシャニーが先陣を切ってくれて嬉しかったツスよ。自分たちの誓い、守れたんスから」

それを支えるようなミリアの言葉が勇気をくれる。

そうだ、日中の仕事でスタボロになった心を互いに吐き出し、励ましかつた二週間。膨れ上がるモヤモヤを払えないもどかしさは皆一緒だった。

ミリアも天馬騎士団から契約を継続しろと命令が返ってきた時は、腸が煮えくり返ったように怒鳴っていたし、ヴァルプルギスに向かって剣を抜いた時には、真つ先に武器を構えていたのは見えていた。「ありがとう。みんながいるから前を向けるよ」

契約違反だろうが何だろうか、間違つたことをしたつもりはない。そう伝えてくる二人の言葉に熱いものがこみ上げてくるのが分かる。認めてもらえる事、理解してもらえる事。それだけでどれだけ抉れた心が癒されるか。

前を向いた彼女の視界にすつと入って来た優しい手。そんな顔をするなどルシャナの顔が伝えてくる。

「あんたに不服があつたら、あの場で止めてたよ。私たち十八部隊の槍は民のためにある。みんな気持ちは同じだったさ」

ルシャナは握手しようと手を伸ばしてきたシャニーの手を避け、拳

で彼女の胸を小突いてやった。

何度このリーダーには同じことを言わないといけなのだろう。自分たちはリーダーを信じてついて行くと、部隊発足の時に彼女へ面直に誓った。だからこそ、間違った方向に進もうとした時は都度後ろから引つ張って来た。それは今回も同じだ。

「だけど、やっぱりやり方はマズかったよ。全員無事だったから良かったけどさ」

相手がヴァルプルギス一人だったから何とかだったが、あの場に兵力を集められていたら絶対にこの場には誰も居なかった。

互いに家族の無事を確かめるように見つめあい、いつしか抱き合っていた。一人として欠けたら、この部隊は十八部隊ではなくなってしまう。

「よう、生きてたか」

その時だ。どうにも聞き慣れない、けどどこかで耳にしたことのある声と呼んできた。

この女だらけの天馬騎士団で聞く男の声などウツディくらいのはずだが、全然違う野性的なもの。

出入口の方へ振り向いたシャニーは、目を真ん丸にして思わず指を差してしまった。

「あ、あなたゲベル?! どうやってここに」

忘れるわけがない。カルラエの町で自分が捕まえたスラムの青年。

あの時はボロ着を羽織っていたが、今はレイサと同じ潜入服を着こんでいてまるで別人。鍛えられた長軀は様になっていて、後から入って来たレイサが小さく見える。

「こいつも十八部隊の所属だからだよ、あんたを助ける証言したんだから感謝しなよ」

そうだろ? ——そう確認するように彼のお尻を叩くレイサの顔は満足げ。

牢獄に放り込んだ時からあれこれ勧誘していたが、ついに成就したらしい。もちろん、部隊長としては初耳のだが。

それまで厳つい顔をしていたゲベルが、姉貴分が現れた途端おどお

どし始めるのがシャニーには妙に可愛く映った。

五人目の証言者……それがようやく分かつて彼女は思わずゲベルの手を取る。

「ありがとう。ゲベル。約束、守ってくれたんだね」

「へっ、か、借りを返しただけ、ただだぜ」

途端に目を白黒させて全身の毛が逆立つほど狼狽したゲベルは視線を切った。

女に触られたことなど初めてだし、ありがとうなんて言葉はスラムには無かった。もう頭が沸騰してどうすればいいか分からない。

「お前が助けた子供、俺たちのアジトで匿ってるから安心しろ」

この青い瞳を喜ばせてやりたい。その気持ちだけは自然と湧いてきて、今一番彼女が喜ぶだろう情報だけはなんとか口にできた。

見る見る見開かれる瞳。口元が、顔中がぱあつと明るくなっていくのがよく分かる。敵同士だったあの投獄の時には分からなかった。

——騎士にもこんな顔ができるのか。

「あの子生きてるの?!」

再び手を掴まれた。おまけに今度は両手だ。今まで感じたことのない柔らかくて優しい感触に体中をゾクゾクさせていたら、レイサにお尻をひっぱたかれた。

「ああ、お前のおかげだよ。あの場をお前が制圧したからすぐに治療できたんだ」

「ああ……嬉しい。良かった、本当に良かったよ」

もう、それだけで。生きてくれるだけで戦った意味がある。

その場で崩れてしまった彼女を見下ろしてゲベルは確信した。

——あたし、イリアの人に信じてもらえるような騎士になるよ。誓う

牢獄で彼女が口にした言葉。たった一人を守るために飛び出した覚悟を、もう嘘だなんて言う気はなかった。

(シャニーこいつは……この部隊は、俺の知っている「騎士」じゃねえ)

「……自分と同じく、信じてくれる者のために心を鬼にする者がおり、その生き様を信じて自身を貫く者がいる。」

レイサがここに身を置いている理由がようやく分かった。屈みこむと今も嬉し涙に濡れる新たなリーダーの両肩に手を乗せる。

「俺はもう、盗みには戻らねえ。お前のピンチは俺のピンチだ。この拳、お前に預けてやる」

目の前に咲く、雨上がりの太陽のような笑顔。何度も頷く彼女に今までずっと言えなかった事をようやく伝えることが出来て何か晴れやかだった。

「ま、天馬に乗れないあんたは私と同じ班だろうがね」

どうやってこき使ってやろうかとニヤつくレイサの顔が振り向かずとも浮かんでくる。

小さい頃スラムにいたレイサに育てられたゲベルは、まるで頭が上がらず顔に積みあがるのはうんざり一色。

子供の無事とゲベルの哀れな様子に少しだけ重い空気が晴れた時、ルシャナは仲間たちと頷きあつてついにシャニーへ振ることにした。今までずっと気になっていたことを。

「ねえシャニー、答えたくなかったら答えなくていいんだけど、その……髪さ、どうしたの？」

びくつと瞳が震えるのをシャニーは抑えられなかった。心の中は困惑と不安に一杯で、何度も視線が左右に揺れる。

（みんなにこんなことを言つて、信じて……もらえるかな？ ううん……。大丈夫だよ、みんなだもん）

大事な家族が心配してくれているのだ。信じるしかないじゃないか。自分一人で抱えるにはやつぱり重い。

自分でも咀嚼そしゃくしきれない内容はソルバーンのまるまる受け売り。仕方ない。ヴァルプルギスと斬り結んでいた時の記憶は、ぼんやりとすりガラスの向こうを覗いているかのようにしか残っていないのだから。

「信じてとは言わないよ。あたしだって……受け止め切れていないし。だけど、みんなを守る力ならいいかなって！ ネガティブに考えても仕方ないしさ」

嘆いてどうにかなるならいくらでも泣きたい。恐ろしくても、苦し

くても前に進んでいくしかない。あの紳士も、ソルバーンも口を揃えた。

皆を守る力を望んだのは、道を選んだのは他の誰でもない。どうにか刃に乗せる風が自身の望む形に変われることを願い、笑顔で不安を吹き飛ばした。

「信じるも信じないも……あんなもん見せられたらな」

真つ先に口を開いたのはゲベルだった。最初に会った時は華奢で弱そうな口だけの騎士に映っていたから大口を叩く姿に腹も立ったが、開拓地で見せられた姿は天馬乗り三人衆だっただけで見るはずだ。「お前らはそう思わないのか？」

彼から話を振られたものの、三人は顔を見合わせる迄でその先を口に出さずにいる。付き合いの長い彼女たちは困惑も深かった。朗らかに笑うリーダーに何と返せばいいか分からない。

彼女達より先にシャニーが飛び出した。

「ねえー。あの時あたしどうだったの？ あの時……あんまし記憶が無くて」

思わずゲベルの手を握って懇願の眼差しを向ける。まるで制御できない力がある時何をしたのか知りたかった。

「どうって。青い炎を噴き上げて、すげえスピードで動き回ってたくらいしか俺には分かんねえけどよ」

ゲベルも困った顔をしながら、目だけで右上を見上げながら記憶を絞り出している。

「とにかく、——普通じゃなかった」

彼が最後を締めるのに使った一言に全てが凝縮されている気がして、シャニーは胸に手をあてた。そこに添えられたレンの手。

「青い炎はシャニーのイーギルです。私も確認しました。あと異常なイーギルも検出」

「その異常なほうが風の異能ってやつか」  
「ん。たぶん」

高い魔力を持つ彼女でさえも捉えきれない流れ。レイサは顎に手をやって手がかりが無いか考えてみるが、いくら今まで情報屋として

集めてきたものを漁っても何も出てこない。

後頼りになるとすれば……レンと目が合った。おそろく同じことを考えているに違いない。

再び震え始めたリーダーの目に気づいて、もうこの話はひとまず終わりとしヤナが手を取り立ち上がらせる。

「あんたが言うなら信じるけど、受け止め切れないなら私たちにも相談してよ。みんなで考えればなんかいい事思いつくかもしれないし」彼女たちが困惑していたのは、リーダーが振るった力の凄まじさだけではない。知っている暖かなリーダーとはまるで違う、ブリザードのような衝動が剣を振るっていたからだ。

あれが本当に求めた剣なのか。いや、受け止め切れないと言っている以上絶対違う。

支えてやらなければ。独りではないと伝えてあげるだけで、何度も頷いて喜んでいる彼女にあんな剣は似合わない。あんな、全てを薙ぎ倒す悪夢のような魔剣は。

「ありがと、みんな。あたしがいない間、イリアの人たちを頼んだよ」仲間に託すしかない中でシャニーは途方に暮れた。明日からは、ただの村娘になる。民を守る事が許されなくなるのだ。

年末までの三週間、一体何をすればいいのだろう。帯剣は禁止されているが乗馬までは言及されていないし、個人的に村々をまわるくらいか。

「大丈夫ツスカね。シャニー」

「ん。心配」

「放っておけないでしょ。毎日酒でも誘ってやるか」

皆にあいさつする顔は笑っていたが、引継ぎを終えて詰所から出ていく背中までは隠しきれていなかった。

九月のこともある。心配する仲間達は、仕事終わりの夕飯にリーダーを誘うことにするのだった。

## 第8話 天翔けるセレナーデ

——何をすればいいんだろう。一体あたしは、明日から何処へ行けば……

頭の中にそればかりが浮かんでは、何も答えるものもなく繰り返される。

突然訪れた登城禁止令。騎士としての活動を奪われて急に村娘に戻っても、ぽっかり空いた心も時間も埋める術が思い浮かばなかった。

独房同然の実家に向けて呆然と歩く廊下に響き渡る声。

「シャニー。ちよつと待つつス！」

何やら駆けてくる声がどんどん大きくなってくる。惰性に任せて歩き続けていたら肩を掴まれて止められた。息を弾ませながら回り込んできた顔は見上げないと視線が合わなくて、これだけで相手がミリアだと分かる。

「今日の夕飯、一緒に喰いに行こうツス」

「えっ、嬉しい！ うんうん、行こうよ。家に居ても寂しいしさ」

「そうこなくっちゃ」

どうせ家に居たって一人だ。出来る限り一人にはなりたくなかった。静寂に身を置いていると、どうしてもロクでも無い事を考えてしまう。ダメだと分かっているけど、それでも。

元からエデツサのカフェで一日過ごそうと考えていたから断る理由なんて無い。二つ返事で了解を伝えたらミリアも嬉しそうに親指を立ててきた。

「ルシヤナが行き帰りは乗せてくから手ぶらで待ってろって言ったツス」

「げげっ。ル、ルシヤナが……?!」

ところが、彼女が続けて伝えてきた話にはぞわっと髪が逆立った。

酒場へ行くのに、ルシヤナの後ろに乗っていくなんて考えただけでも寒気がする。べろべろの酔っ払いが操る天馬なんて想像もしたくない。

「え、ええと……さ。ミリア乗せてつてくんない？」

「言いたい事は分かるツスよ。了解ツス」

半分命乞いでミリアに手を合わせる。以前の温泉旅行でルシャナのうわばみ振りは誰もが思い知ったからか、ミリアは深刻な顔をしながら頷いてくれた。

待ち合わせの場所と時間を決め、手を振って部隊へ戻って行くミリアに無意識のうちに感謝が漏れた。

「みんな……ありがと」

随分と仲間に気を遣わせてしまった気がする。仲間は信じてくれ、たし、彼らの気持ちもよく分かった。

ただ……何を信じて良いのか分からなくなっていた。あの決断は

——間違つてはいなかったのだろうか。

民を守りたい気持ちに偽りは無かったし、イリアの掟には納得できない。頑張ったと少しでもロイに言えるように努めたつもりだ。

だけど、掟を是として外からは非難と問責ばかりが降り注ぎ、多くの人生を変えてしまったことも事実。

誰も取り残さない——ロイの想いに憧れた身としては、正しかったとは言えない。自身の正義を曲げなければイリアの掟を貫けないのでは、今後と同じ事が起きる。

(あたし……間違っているのかな……)

結局、ミリアの迎えが来るまで過ごしたカフェでもそればかりが頭を巡っていた。



同日 PM 6 : 42

吹雪が晴れ、珍しく月が明るいエデツサの冬夜。ミリアの天馬に乗せてもらって通い慣れたバーに入ったシャニーは、いつも通りの場所を陣取るルシャナとレンを見つけて手を振った。それに気づいたレンが小さく手を振り返ってきて、ルシャナもジョッキを傾けながら手を挙げている。

「お、主役が来たね」



隣に座るとさっそくルシヤナが背中をバンバン叩いて来た。この絡み方、嫌な予感がする。テーブルの上には既に空のジョッキが二つ。どうやら乾杯の練習は十分仕上がりしているらしい。

シャニーはポーチから酔い止めを取り出すと一気に二瓶空けて飲み干した。

「今日は最後までルシヤナに付き合うかな」

今日はここで時間が許す限り呑んで、そのまま酔い潰れて寝てしまおう作戦だった。

家に帰って静かな時間を過ごしていたら、妙な事を考えてしまふに決まっている。帯剣も禁止されていて気を紛らわす手段も無いから、寝てしまふに限る。

「おっ、いいね。嫌な事は呑んで忘れよう！　じゃあ私もウイスキーにすつかない」

それを聞いたルシヤナが嬉しそうに指を弾いて席を立った。背中を目で追っていたら、マスターの所からボトルと湯の入ったポットを引っ張って来るのが見える。まるで自宅かというくらい慣れた動きだ。

彼女にお湯割りを作ってもらい、一口したらさっそく温まった心から愚痴が飛び出した。

「はあー、明日から何するかなあ」

今日は十二月の七日だ。年末までまだ三週間以上もある。

聖天騎士団との契約が終わったら、年末まで企画提案や村への訪問とスケジュールはびっしりだった。それがいきなり何も無くなってしまうとさすがに途方に暮れる。おまけに、横からは説教みたいな事まで言われるので頭がテーブルに吸い付いた。

「ちようどいい機会だし、家の掃除でもすれば？」

「ただでさえへこんでる時に、気が滅入るような事させる？」

シャニーの家がごちゃついているのは、家が隣だからルシヤナも良く知っていた。

服を脱ぎ散らかしているなど序の口。納戸を空ければ雪崩が起きるし、客間は物置状態。下着でふらついている事もザラだ。いつか失

敗しないかヒヤヒヤする。

それを言っても、シャニーは顎をテーブルに乗せたままぶうつと頬を膨らせて気だるそうにするだけ。

「天馬には乗って良いんだし、村の様子でも見に行くかなあ」

ぼつと身を起こしたシャニーは蒸留酒を一口すると、ぼんやりと独り言のように天井へ呟く。

やっぱり家の中でじつとしていいる何て性に合わない。一個人としてイリアの人たちの顔を見に行くくらいバチは当たらないだろう……それを言うのを待っていたかのようにルシヤナに止められた。

「ああ、それ団長から事付け預かってるよ。くれぐれも妙な真似をしないようにって」

「ぐつ……。さすがお姉ちゃん。読まれてたかあ……。トホホ」

何故分かったのかと悔しがり、肩を落として泣き言を漏らす。

その姿に仲間達は苦笑いしていた。じつとしていられないシャニーが思いつく事なんて自分達でも予想がつく。それをタイトが勘付かない訳が無い。

それでも切替も早かった。シャニーは鞆からスケジュール帳を取り出すと、十二月を開いてルシヤナに指さした。

「じゃあルシヤナ、これ訪問予定だった場所と確認ポイント。お願いできないかな」

「こんなこと？」

企画提案する場——部隊長会議は週に二回あるから、一日だつて無駄には出来ない。既に何も出来ずに一週間終わってしまったのである。自分が動けない間は仲間に託すしかない。

シャニーの手帳の中身を書き写しながら、ルシヤナは一度眉間にしわを寄せると鞆から地図を引っ張り出した。

「ってか、知らない場所もあるけど、いつ行つたの？」

「休みの日かな。暇な時とか散歩ついでに」

じゃあその時間で家を片付ける——そんな眼差しが飛んでくるが気づかないフリを決め込み、シャニーは地図を指差す。天馬であちこち飛び回るのはもはや趣味だ。大好きな散歩の延長線に仕事があ

あるようなもの。

「ごめんね、ルシヤナ。イドウヴァさんにも気をつけてね」

心配なのは国力向上活動の事だけではない。十二月の間は部隊長代理としてルシヤナが部隊長会議に出なければいけないから、イドウヴァにどんな事を言われるか心配だった。

彼女の性格だから上手くやるだろうが、カチンと来たら瞬間的に沸騰するからケンカをしないか不安だ。

ところが、彼女はウイスキーを豪快に飲みながら手を振って来る。

「あんたが寝てる時に一回出たけど、聞いてた程じゃなかったよ。嫌味は言われたけど」

何ともケロッとした答えが返ってきた。彼女にとっては、へいへい程度なのだろうか。心臓に毛が生えていそうで羨ましい。

でも、余計に気になった。同じ十八部隊でも、ルシヤナと自分で何故そこまで態度が違うのか。確かに団長選出戦でのやり取りで心証を悪くしているかもしれないが、こうも露骨だと不安よりだんだん苛立ちの方が強くなってくる。

「それどころか、皆心配してたよ。キリネさんとかき。第五のウゼーマリッサのは嬉しそうだったけど」

それを優しく解いてくれたのはルシヤナが続けてくれた言葉だった。イドウヴァ派、テイト派に関係なく、殆どの人は優しくして声を掛けてくれる。彼らにも間接的に迷惑をかけたと思うと複雑だ。

（こんな事なら……あの時——）

そう思う事がまた一つ増えてしまった。一つ口にしたウイスキーをテーブルに置き、揺れる湖面をじつと見つめる。

団長選出戦でイドウヴァに投じていたら……。開拓地で少年に振り下ろされた剣を弾くだけで済ませていたら……。いや、もつともつと前。ロイに誘われた時、あのままフェレに行っていたら——ぶんぶん首を振った。

あの頃は天馬騎士になりたかったし、デイクからもつと剣を教わりたかったし……。とにかく夢を追いかけるのに一生懸命だった。

今なら、自分の心に気づいた今なら。……傭兵の道を選んだ今と

なつては——好きだからこそ、伝えられないものだってある。

前を向かなければ、何も見えない——己を律して顔を上げた時だ。ミリアと視線がぶつかって、彼女は思い出したようにポンと手を打って見せた。

「あ、シャニー。寝ちやう前に渡しとくッス」

鞆からごっそりと取り出した大きな袋をぽんと寄越してきた。両手で受け取らないと滑り落ちてしまいそうな大きさだ。その割には軽く、何かごっごっしている。

「こんなに?! ありがとう。明日確認するよ」

中を覗き込んで驚嘆が漏れた。どっさりと入っていたのは手紙だ。

十八部隊は外回り営業をしないから、国外からの定型的な挨拶状などまず来ない。どれもそこらの店で売っている見慣れた封筒だから、イリア内の個人が出してきたものだろう。

それにしても量が多い。……三週間も空けていた事を改めて実感させられるし、ここから更に三週間空けるのだ。村の人たちに申し訳なくて思わず下唇を噛んでしまう。

「帰ってくるの待ってるッスよ。その間、ウチらしっかりやっておくッスから」

その気持ちを察してくれたのか、ミリアがウインクしてきた。言葉に詰まっていると横から小突かれ、振り向いたらなみなみ入ったグラスをルシヤナに掴まされた。

「この前みたいに妙な事考えないでよ。皆気持ちは同じだったんだし、今回もあなたのおかげで生き残れたんだからさ」

「ありがと。うん、じゃあ改めて——乾杯」

ルシヤナとグラスを交わして一気に飲み干す。

誓いを信じて最善を尽くした。結果が伴わず、多くの犠牲も出した。正しくは無かったかもしれない。だが、もうこれ以上を話しても騎士団内では理解もされないし、認めても貰えないだろう。

腹に煮える苛立ち。もどかしい思いを、ただ酒の灼熱で燃やして夜は更けていくのだった。

「うう……寒っ?!」



目覚めたら十年以上見てきた天井が映った。

身震いしながら上体を起こすと、やはり見慣れた光景が広がっている。どうやって帰って来たか記憶は無いが、ちゃんと実家のベッドで寝ていた。

まわりをゆっくりと見渡す。昨日着ていた服があちこちに放り散らされている……見下ろしてウツとした。どおりで寒いわけだ。どうやら悪い癖が出てしまったらしい。

ベッドから起き上がり、ふらふらとそのままシャワールームへ。シャワーを浴びて戻ってくると、待っていたのはやはり静寂だった。

しばらくぶりに帰ってきた安心感と、深閑に押しつぶされそうな孤独感。ふらふら当てもなく歩き、リビングに着く。ソファの上に無造作に積まれた本を押し崩し、吸い込まれるように倒れこんだ。

「ふう。おうちってこんなに静かだったっけなあ……」

いつもやりたい事が一杯で、あれこれ考えながら家事をしていたからか気にならなかつたが、それら全てを奪われてしまおうと居心地が悪い。

こうやって無の世界にいるとあれこれ浮かんでできてしまう。あの流した血が一体何だったのか——思い出すだけで悔しくて、苦しくて、悲しくて……。

——あの……て……ば……か……の……に

「うっ?! ——何なんだよ……これ」

また聞こえてきた。何だか今までよりしつかり聞こえる気がする。戦場ではつきり話しかけてきて以来、ずっと聞こえてくる声。制御出来ないのに使つてはいけない——その理由の一つがこれだと言うのか? これと後三週間も独りで付き合おうと思うとうんざりだ。

「あーっ、ダメだダメだ!! あたしらしくないよ」

ぱっと身を起こす。ポジティブが信条。こんなところでうじうじしてられない。生乾きの髪をヘアバンドでたくし上げ、鏡の前で頬

を両手で引き締める。

でも、そんな無理をしなくても自然と顔が綻んだ。視界の端に映ったものに手を伸ばす。

「おっ、おっ。そうだそうだ。へへっ、どんな事が書いてあるのかなー」

みんなからもらった手紙の束。今日はこれを全部読むだけで一日終わってしまいそうなほどの数。きつと村の人たちが近況を伝えてくれているに違いない。

「せっかく時間あるんだし、久しぶりにアレ作るかな！」

ふんふん鼻歌をうたいながら、慣れた手つきで軽い焼き菓子をどんどん拵える。バターと砂糖を奮発して作った良い香りを飾り付け、湯を沸かして熱い茶を淹れた。

時計を見たらもう午後。やりだすとつい凝ってしまうが、その分なかなかの出来に仕上がった。プレートとグラスを重ねて作った、  
“なんちゃって” ケーキスタンドに飾り付けたアフタヌーンティーを満足げに見つめる。

本当なら仲間を誘ってティータイムにでもしたいが今は叶わない。独り占めの贅沢と割り切り、さっそく一つ口に放り込みながら手紙の束の一番上を手取る。

「えー！ ホント?! 良かったねー！」

まるで目の前に村人がいるかのようだ。

部隊長会議で提案した、とある村の悩み事への対策。村に設置されたものへの感謝状が村長から届いていた。

解けていく心。次も、その次も。北のあの村、遠かった西のあの村からも便りが届いている。

朝から晩まで空を駆け抜けて集めたものが結果となって返ってきて、目を閉じるとそのままソファに頭を任せて天を仰ぐ。

「やっぱり……あたし達、ちゃんと頑張ってたんだよね。ありがとう。勇気出るよ」

解けた心が頬を伝っていく。誰にも認められていないなんて思っていたことが恥ずかしい。

熱い茶を一口すすって気持ちを落ち着かせようとしても、温まった心が更に動き出すばかり。遠くに居ても傍にある想いたちを両手で抱きしめる。

どれだけそうしていただろう。ようやくに涙を拭き、手紙たちを大切に畳んだ。菓子を口に放り込みながら手を伸ばして次を掴む――

「――ツッ！」

上質な紙の感触――焦って掴んだ手紙が宙を滑る。何度もお手玉しながらようやく捕まえたその表を覗き込だ。間違いない。紋章はフェレ侯爵家のもの。

「ロイ様からだ！ えっ、何通あるの、これ?!」

次も、その次も、さらに次もだ。全部で十通以上も。二日に一通のペースで送られてきている。

最後の手紙が届いたのは昨日。どうやらこの三週間、ロイは何もなく元気であるらしい。それだけでほっとした。

「ロイ様ったら、傭兵に出るって手紙に書いておいたのに。やっぱり優しい人だなあ」

手紙に目を落とすとすぐに目元が綻び、口元が緩む。

遙か遠くにお互い居るのに、手紙を読んでいるとまるで隣に居て、記された光景と一緒に眺めているような錯覚に陥るから不思議だ。

「ロイ様……。いいの？ そんな事まで書きちゃって。あたしみたいな……傭兵にさ――……………」

日常も、新しくリキアで始まった政治的な試みも、その裏で上手くいかずに悔しくて漏らす弱音も。どの手紙にもたくさんロイが書いてあって、読んでいるとふと涙が出てくる。溢れる。何故か止まらない。

あの時もそうだった。ヴァルプルギスの前に沈み、最期を覚悟した時、とっさに浮かんだ顔。

――ロイ様……。ごめん、あたしは……。もう……

「あの時……。何を謝ったんだろ。あたし……」

死ぬなどという約束はもちろんだ。だけど、それだけじゃない。

その時だった。ふいに頭に響く声。

——あのまま寝てればよかったのに——

ついにはつきりと聞こえてしまった。あの声が。

ぎよつとしてあたりを見渡す。もちろん誰もいるわけもなく、胸に手を押し当ててみる。もう何も聞こえない。

「な、なに……今の……」

気づいたら体が震えて、ロイからの手紙をぎゅつと握りしめていた。思い出した……あの時、あの時ロイを呼んだのは……。

「ロイ様……逢いたい。逢いたいよ……」

手紙に頬ずりしてすすり泣く。寂しくて、恐ろしくて、そして恋しくて。もう名を呼ばすにはいられなかった。

一度は奮起して会いに行こうとしたが姉から許可が出ず、二度と会えなくなるかもしれない極限を経験した今、もうこれ以上辛抱なんてできない。

気づいたら筆を執り手紙を書いていた。

——会いたい。十二月のうちのどこかで会いたい

今までずっと誘ってくれていた彼にちゃんとした答えを出してこなかった手前、自分の都合でこんなことを書いたら嫌われるかもしれない。

だけでもう、筆は止まらず、夜にミリアの家まで行つて朝一での配達をお願いしたのだった。



—— 12月 10日 AM 8:50

二日後。シャニーは朝からぼうつとソファの上で天井を見上げていた。洗濯カゴの中で服が干されるのを待ちきれずに雫を垂らし始めているが、意識はまるで遠い所にある。

便りが来ない——あの時は勢いで手紙を書いてしまったが、時間が経てば経つほど不安が膨らんでくる。あれこれ理由を思いついては、勝手都合のいい解釈ばかりをする自分に嫌気が差す。

「はああ……。軽率だったかなあ」



今までのペースなら今日手紙が届くはずだが、もし届かなかつたら……。

相手は貴族。自分は騎士とは言え平民でありただの傭兵。彼が良くしてくれるからと甘えすぎたかもしれない。

「あたしみたいな傭兵が時間作ってくれなんて。……ムシが好すぎるよね」

手紙なら気兼ねなくやりとり出来た。だが……死ぬ思いをしてようやく確信した本当の気持ち。それを知ってしまうと今更ながら恐ろしくなった。

憧れの人だからこそ怖くて言えないし、支えになりたいと想うからこそ……傍に居れない立場。なのになんで、会いたいなんて書いてしまったのか……。

「だあつ——！　何かしよつ、何か！」

いつまでもここでじっとしていても仕方ない。家事を進めようと立ち上がった時だ。

聞き間違えるはずがない。外から届いたこれは——天馬の羽音。洗濯カゴを弾き飛ばし、旋風の如く玄関を突き抜けた。

「シャニー、おはようツス！　手紙来たツスよ！」

聞き慣れた元気な声がおはようを伝えてくるまで時間はかからなかった。朝一番で訪れたミアアの手には手紙が握られて、天馬から飛び降りるなり手渡してきた。

「ロイ様からだ！」

待ち焦がれた紋章。一抹の不安も、興奮が打ち勝った。その場で開封して中を見る。

——いつでも歓迎するよ。次の週末とかどう？　準備難しいかな？

「良かったツスね！」

「やったああ!!　……って！」

二人で思わずガッツポーズをしてから、ミアアが覗き込んでいたことに気づいて赤面する。

次の週末……今日は水曜日。本当なら今から飛んでいきたいが関

所の通行許可証の発行を考えれば土曜日が最速だ。ミリアを家に連れ込み、ロイへの返事を急いで書くとしてそれを彼女に持たせた。

「ミリア、これ、すぐ出してもらえる？」

「ガッテンツス！ 今日の最重要任務ツスね、コレは！」

噂には聞いていたが、リーダーにイイ人がいると分かってミリアはぐっと親指を立てた。こんな機会しか行けるチャンスはない。

「シャニー、ついに行くんスね。通行の事前申請、ウチが出しとくツスよ」

天馬騎士としての通行証は城に行かなくてはもらえない。登城が禁止されているシャニーでは取得出来ない事はミリアも分かっていた。

彼女は城にとんぼ返りすると、午前以内に許可書を取ってシャニーに手渡したのだった。

## 第9話 リキアの若獅子

早く！ 早くあの人の許へ！

天馬の切る風が少しずつ温かさを含んでくる。

「フェレかあ。ああ〜！ どんなどころなんだろう。早く行ってみたいなあ！」

白銀の世界から緑溢れる希望の地へ飛び出した一騎の天馬が、蒼穹に映えて南の空へと消えていく。

楽しい——こんな気持ちで天馬に乗ったのは久しぶりだ。もっと、早く、もっと先へ！

新しい風を全身に受けながら、シャニーは眼下に広がる全てに歓喜して先を見つめる。目指すはあの人が待っていてくれるリキアの地。



—— 12月 12日 PM 12:44

一日がかりでイリアのカルラエからリキアのフェレまで飛んできた。

これだけ長い距離を一気に飛んだのは久しぶりで少し疲れたが、ドキドキはそんなものを軽く吹き飛ばす。

街道に繋がるフェレの西出口にある街灯の下。そこが待ち合わせの場所。

「ここで合ってるよね。時間も……うん、大丈夫なはず」

時計に目を落とす。見習い時代からの付き合いだからボロボロだ。十一月の戦いで、入っていたヒビがさらに大きくなった気がする。調整はしてきたからズレは無いはずだが、そろそろ替え時か。

「う〜ん！ 暖かくて気持ちいいなあ、リキアって」

動乱中、ロイと喋った時に軽く街の感じを教えてもらっていたが、確かにオスティアみたいな喧騒は無い。むしろ故郷にも似た、静かだ。どこか落ち着く田舎町と言った印象だ。

心地よい風。街灯の裏にある小高い丘は緑のじゅうたんがそよぎ、緊張する心をくすぐってくる。

でも、そんな風情に心を委ねていられたのは僅かな間。知らない街に一人で立ちんぼしているとそわそわしてくる。

天馬に身を寄せ、時計を見下ろす間隔が短くなってきた時だった。「シャニー、良かった。無事来られたんだね。迷わなかったかい？」

ドキツと心臓が跳ねる。懐かしい声。ずっとずっと聞きたかった声。それをいぎ前にするとどうしてこうも体が固まるのだろうか。

だけど、体を心が追い越して振り返る。あつ——思わず声が出た。そこにいたのは知っているはずの赤毛の青年。自分が記憶しているよりずっと凛々しく見えるのは、あの時より背が伸びているからだろうか。

「え……？ ロイ様?! ロイ様でしょ?!」

あまりに違つて見え、ついつい指を差して聞いてしまう。

当時から凛々しかったが、こんなにカツコ良かっただろうか。何だかますます、高い所の上つて行つてしまったようにさえ感じる。

「そうだけど。どうしたんだい？」

そんな気持ちを解いてくれる、記憶通りの優しい口調。とても世界の英雄——フェレ侯爵家の嫡男とは思えない気さくな人。

あまりに驚いていたからか、彼はふつと笑うと歩み寄ってきてくれて、しっかりと手を握られた。ドキツとする半分、緊張が解けて握手をり返す。

「ううん、ちよつとびつくりしちゃっただけ。すつごい雰囲気が変わつてたから。カツコいいなって」

一年でこんなに変わるものなのかと驚きを隠せない。

年は一個しか違わないのに、少年と言うより青年の眼差しがそこにあり、あの時より目線が高い彼は傍で見ると大きく見えた。

「二年ぶりだったけど、すぐ君だと分かつて良かったよ。変わってないね、シャニーは」

「えへへ、あたしだって少しは背、伸びたんだよ」

戦争が終結し、別れてからちょうど一年が経つ。

最後はデイクについて行つてしまったからまともな挨拶もできなかったが、彼は当時から遊びに誘ってくれていた。あの時は天馬な

らすぐに行けるからと思つたが甘かつた。

(ロイ様、あたしみたいな傭兵の事、覚えててくれたんだなあ)

文通だけが二人を繋いできた。ずっと会えなかつたのに、彼はすぐに自分を見つけてくれたから何か嬉しかった。

不思議だ。ロイは貴族だし、自分は傭兵でおまけに騎士団幹部の立場。本来もつと力チつとした関係のはずが、彼の隣に居ると気持ちが軽い。まるで……対等な本当の親友みたいに。

「うん、ちよつと大人っぽくなつた気もするね。髪型も少し変わつてるし」

「なーんか、またからかわれてる気がする……」

最初にロイに話しかけられた時も、おバカキャラにでも見えたのか似たようなやりとりだつたことを思い出した。

やっぱり不思議だ。ただの傭兵なんか気軽に話しかけてくれる、このロイと言う人の心の広さは。

「違つて。ぼくは嬉しいんだよ。シャニーの笑顔が変わつてなくてさ」

嬉しい———そう言つてもらえる事が嬉しい。この人がこう言つてくれるのなら、いくらでも笑つていようと思える。

「じゃあ、ぼくについて来てくれよ。疲れただろう、お茶でもしよう」「うんうん。喉乾いちやつた」

握手したまま歩き出した二人。ロイにエスコートされながら歩く初めてのフェレの道だが、周りなんかまるで気にならない。何から喋ればいいのか困るほど後から、後から溢れてくる。

(なんだか……夢見てるみたい)

目の前にずつと逢いたかつた相手がいる。いくら文通をしていたつて逢う事など叶わない。天馬で翔けあがつても届かない———そう思つて来た憧れのひと、手を繋いで歩いている。文字とは全然違う生きた瞳が、弾ける声が互いの傍にある。もうそれだけで、最初の緊張感など吹っ飛んでいた。

しばらくするとロイが立ち止まり、指さした先を見て反射的に口元へ手が行つた。

(わわわっ……。ナニコレ、おとぎ話に出て来るヤツじゃん！)

明らかに高潔な造りの馬車。これに乗れとロイが言う。

彼はどこかの姫と勘違いしているのではないか。護衛する対象で、今まで乗り物と考えた事など無かった。出来る限りのオシヤレはしてきたが、田舎の村娘ではこんな馬車に敵うワケが無い。

違う世界の人が乗るものだと思つて来た馬車を前にたじろぎ、後ろに連れていた天馬を指さす。

「えーっ、いいよ！ あたし天馬連れてるし」

「それじゃ、せつかく来たのに喋れないだろ？」

優しい口調で諭された。確かにそうだ。今日一日しか無いのだから少しでも一緒に居たい。

(でも、どうしよう……)

戸惑う一瞬の間を捉えられ、ロイは背を向けたかと思つたと御者に何かを伝え始めた。すると、彼さえも乗せないまま馬車は行つてしまつたではないか。

きよとんとしているとロイが戻つてきて天馬を指さす。

「じゃあ天馬の後ろに乗せてくれないか？ 後ろから案内するからさ」

思わぬお願いだったが、相手がロイなら驚きもしない。別に今回が初めてではないからだ。

「そう言う事ならお安い御用だよ！ 動乱の時もよくやったよね」  
「もうあれも一年前か。早いものだね」

先にロイを乗せて自分も天馬にまたがりゆっくりと空に舞い上がる。

ベルン動乱の時も、よく彼を後ろに乗せて護衛に共闘に色々やったものだ。封印の剣を手にしたロイと竜殿を翔け抜け、彼の剣から迸る業火が道を切り拓いたあの光景は今でもはつきり覚えている。

それ以来とは言え慣れたもの——のはずだった。

(どっ、どうしよ。やばっ……！ すっっい——ドキドキするよ……)

こめかみが脈打つて背中がぞわぞわする。

それまで活気の中にいたから気づかなかったが、空に飛び出して周りに誰もいなくなったら、急に感じるようになる背後からの視線。

目が左右し、息が詰まって妙に口が渇く。

(ああ……でも風も気持ちいいし、ずっとこのままならいいのになあ) こんなこと、一年前はなかつたはずなのに。どこまでも飛んでいきたくなくなってしまいうくらい、心がすつきり晴れ渡る。故郷の空も大好きだが、リキアの空がこんなに心地良いなんて知らなかった。

キラキラと空を眺める背後では、ロイが青髪をなびかせる背中をじつと見降ろしていた。

こんな華奢な背中がつい最近も傭兵に出て、自分の手の届かないところで戦っていたと思うと彼にはやるせなかった。その彼女が今、目の前にいる。今までずっと声すら伝えられない場所に居た彼女に手が届く――

「あつ、あそこでしょ？ 言ってたカフェ」

振り返ってきた笑顔に空より青い瞳が映える。

意外に狭いフェレの町を残念に思いながら、ロイはシャニーを連れてカフェへと入っていった。



居心地が良くてついついシャニーは両手で頬杖を始めた。

ちよつと足を広げたら、外にはみ出してしまいそうな小さめのテーブルに疲れた皮の椅子。焙煎豆の良い香りと甘い焼き菓子の匂いが鼻を喜ばせてくれる――至って普通の、それこそカルラエにもあるような庶民的なつくりのカフェ。

さつき馬車の前で狼狽してしまつたからロイは合わせてくれたのだろうか。

店は普通でも飛びつきりの特別な時間。飲み物はオーダーしたものの端にもうカップは追いやられて、身を乗り出すように滾々とお喋りが続く。

「リキアにはいつまで滞在できるんだい？ 仕事、忙しいんだろ？」

ロイの問いに頭がフル回転。忙しかった……が正解。

聖天騎士団との契約までは、本当に時間がいくらあっても足りなかった。毎日どの方面へ向かうか調べて、話を聞いて会議に上げる案件を決めて……。

十八部隊を任されてからの二か月は、時間が吹き飛んだかのような感覚だった。それがすつぽり抜け落ちた今、どうやってロイに伝えようか……。彼なら、考えるまでも無かった。

「居ようと思えば十二月中は大丈夫なんだ。あたし、しくじって一か月間お仕事禁止！ って言われちゃってさー。あはは、ドジだなー、あたし」

ロイならきつと受け止めてくれると思った。恥ずかしさに笑って見せたらロイは何も聞かずに、そうか——そう言っただけだ。コーヒーを一口するだけだった。

(ロイ様優しいなあ。……ま、いつか)

何だか、嬉しさ半分、ガツカリ半分。彼が気を遣ってくれた事は分かる。でも、もう少し踏み込んで欲しいと思うのはワガママだろうか。

本当はロイなら何と言うか聞いてみたいところだが、彼の優しさをフイにするのも何だかイヤだ。そんな気持ちにぐるぐるしていたら、彼がもう早くも明日の予定を切り出してきて驚きに全部吹き飛んだ。

「明日はぼくも自由なんだ。あちこち案内するよ」

「ホント?! わあ、嬉しい！ えへへっ、楽しみにしてるね」

イリアにとんぼ返りしても居場所は無いし、せっかくリキアまで来たから一週間はあちこちぶらぶらするつもりだった。

ロイは忙しいだろうから、今日こうして話をするだけかと思っていたのに、まるで夢のような話。シャニーは思わず両手を突き上げて歓喜の声をあげてしまう。

目の前に咲いた飛び切りの笑顔。呼んで良かったとロイはいつまでもその笑顔を見つめていた。

見たかった、ずっとおあずけされて来た顔だ。もう二度と会えないかと思った日もあったが、今までの想いがこの一瞬で全て報われた気がした。





一体何時間、紅茶一杯で粘っていたのだろうか。

シャニーはカフェを出るとうんと伸びをして空を見上げた。もう紺碧の空に茜が入り混じっている。

イリアに比べたら断然温かいので忘れていたが、やはりリキアも冬なのだ。夏ならまだまだ遊べる時間なのに。これだから冬は嫌いだ。何だかロイと一緒に過ごせる時間を奪われた気がして悔しい。

「今日はどこに泊まるか決まってるのかい？」

ふいに問われて今更に持ってきた本を取り出す。特に考えずにイリアを飛び出して来てしまったから何も決まっていない。

元から一人旅は嫌いではなく、思い立ったら飛んで行き、行き先も内容も風任せのスタイルは慣れている。

「ううん。これから探すとこ」

今回も漠然とした野望プランはあった。

港町バトンで新鮮な魚介を堪能して、オステイアの夜景を楽しみながらリキア名物のビールでも呷ろうか。宿ならオステイアまで行けばいくらもあるはずだ。

ぱらぱらとリキアを記した観光本を探していたら、ロイが意外な提案をしてきた。

「じゃあ、城に来るといい。部屋を用意するから好きに使ってくれ」

「ええ?! お城って……ロイ様の住んでる、フェレ城ってコト?!」

「ああ。そうだ。あんまり広くないから、ガツカリするかもだけど」

ロイの住む城なら安全だし明るいだろうし、探す必要もないし。明日一緒に遊びに行くにも待ち合せなくていい。願ったり叶ったりだ。何より——ゲストとは言え彼が傍に誘ってくれるだけで嬉しい。

感激に両手が飛び上がりそうになったが、傭兵騎士としての自分のはしやく気持ちの後ろから引つ張って来た。

(ロイ様は優しいなあ。あたしみたいな村娘を城に入れたら、きっとみんな驚くのに)

自分はただの村娘。仕事でもないのに城へ顔を出すだけでも勇氣

がいること。

ロイは驚きすぎだろうとでも思っていていそうな顔をしているが、シャニーにとつては天国の扉を開けるくらいに覚悟が要る事だ。

「ありがとう。でもさ、あたしみたいな傭兵をお城に入れて大丈夫なの？」

今着ている服だっておめかしはしてきたものの、貴族のそれに比べたら差は明らかだ。城に居たら目立つのは間違いない。彼は優しくしてくれるが、貴族と傭兵——雇う側と使われる側。周りからはそうとしか映らないはずなのだから。

「親友にそんなものは関係ないだろ？」

だが、やっぱりロイは今回も親友と言つて迎え入れてくれた。他の貴族では考えられない扱い。下手をすれば部屋どころか、どこかで野宿の準備をしなくてはいけない雇い先だつてあると聞く。

「嫌なら無理には言わないけど」

「まさか！ ロイ様の住んでるお城かあ、すつごい興味あるよー！」

ロイがここまで言ってくれるのに断るなんて悪いし、本音は飛び上がりたくらい嬉しかった。

一度行つてみたかった。ロイがどんな所に住んでいるのか、とにかく色々なことを知りたい。手紙では分からない、彼の全てを。

はしやいでいたら、時計を一瞥していたロイに手を取られた。

「そう言つて貰えてうれしいよ。今日は十八時から会合があるから先に案内するよ」

やっぱり、忙しいらしい。何と言つても、彼は世界の英雄。リキアをまとめる貴族同盟の重要人物なのだ。今日も聞けば同盟内の重要な会合があるらしい。準備しなければならぬことは山とあるはず。

「ええ?! そりゃ、大変じゃん！ 準備とか大丈夫なの？ あたし、後でいーよ。街で適当に時間潰すから！」

「大丈夫さ。夜は冷えるし、君はフェレの地理に詳しくないだろ？」

大事な親友を放り出しておけない」

そんな会合があると知っていたらもつと早く切り上げたのに。彼の優しい背中が茜色の空に照らされて何とも切ない。

急がないといけなと思う気持ちと、もう少しゆっくり歩きたい思  
いが夕暮れの空のように交じり合う。

「えへへ……心配してくれてたんだ」

「当たり前だろ？ き、天馬に乗せてくれないか？」

「りよーかーい！」

残照が美しい空は幸せに包まれて、触れる風もどこか柔らかい。

不思議だった。こんな風は初めて感じる。すぐ真後ろにある優し  
くて頼もしい温もりに包まれているようで、打ち砕かれてぽっかり空  
いていたはずの心が満たされていく気がした。



案内されたフェレ城はそこまで大きくはなくとも、武骨なカルラエ  
城とは違った。清潔感のある白を基調とした、明るく静かで居心地が  
好きそうな場所。

ロイは官吏や侍女に指示して部屋の準備を始めさせている。その  
横顔をぼんやり眺めていたら、再び手を取られた。

案内されたバルコニーで、何も喋らず二人並んで夕日を眺める。包  
む静かな時間。会話がなくても、このまま動きたくないほど心が落ち  
着く。

「ロイ様、いろいろ優しくしてもらってありがとうございます」

沈みゆく太陽に照らされる横顔をじっと見つめていたが、ふと時計  
を見下ろしてシャニーから切り出した。

「あたし、すっごく嬉しかったよ」

満面の笑みを見せられてロイの顔にも自然と笑みが湧く。

彼はシャニーに体の正面を向け、じつと笑顔を見つめた。

どうしたの？ とでも言いたげに首を傾げてくるシャニーに悪気  
はないのだろう。でも、これ以上は辛抱ならなかった。今日ずっと我  
慢してきたことを知ってもらいたかった。

「シャニー、親友としてぼくらは会ってるんだから、『様』はいらない  
よ」

「へ?! 呼び捨てってこと?」

「ああ。そうして欲しい。親友じゃないか」

皆そうだ。立場は分かっているつもりだが、同世代の者たちが揃いも揃ってこうして「様」付してくる。

もつとくだけた関係が欲しいのに、皆にとつてはそれが普通になつてしまっている。案の定と言うべきか、彼女でさえ、びつくりしたように目を真ん丸にしている。

「で、でもさ。あたしみたいな傭兵なんかそんなことしてたら、みんなに怒られるんじゃない？　うちの騎士団、結構キビシーよ、そういうの」  
彼女がこう言うのは無理もないと分かっている。いつも傍にいる同世代と違つて、彼女のような立場の者は「使われる」だけの存在とハッキリ言う者だっている。

フレンドリーな中にも、使う側と使われる側——彼女の頭の中ではつきり線引ききされていることは、初めて会った時の会話からにじみ出ていた。

今だつてそうだ。彼女は自身の事を何と言つて見せた？　自分と彼女の間にある、見えずともはつきりと引かれた線。線は壁となり、壁は伸ばす手を阻む——それがどうしても許せないことだった。「“なんか”じゃないよ。シャニーだから言つてるんだ。君にまでそんな言われ方をしたら、ぼくはいつ羽を休めればいいんだい？」  
「えーと……それは」

「君と喋つてると頑張ろうつて不思議と元気が湧くんだ。シャニーには、何でも話せる相手でいて欲しい。君だから聞いて欲しいんだ」

君だから——その言葉がシャニーの心を吹き抜け、真ん丸になった目が震えた。ロイの眼差しは真剣だ。とても冗談とは思えないし、嫌とも言える雰囲気でもない。

(……そうできたら嬉しい。でも、ロイ様は貴族だし、あたしは……)  
お喋りで彼を支えられるならいくらでも喋っていたいが、さすがに彼の提案は気が引ける。本当なら飛んで跳ねるところだけれど、きつと許されないことだし、ロイのことを考えたらあまり良くない。

それでも、ロイはそれを求めている。君だからと言つて手をとつてくれる。自分を縛っているのは何か目を閉じて考えてみる事にした。

時間とは意地悪なもので、そう猶予をくれそうにもない。向こうからロイの名前を呼ぶ声が大きくなってきている。――仕事ではないし、今だけなら、許されるかもしれない。

「うーん、じゃあ今はお言葉に甘えさせてもらうね、ロイ」

ここはリキアだ。リキアにはリキアの、ロイにはロイの考え方があ  
る。この場所では、イリア天馬騎士としてのシャニーは捨てよう  
と思った。

何だか今日はロイの言葉に甘えっぱなしだが、彼が喜んでくれる  
らそれでいいと思える。

名前を一つ呼ばれて嬉しそうに手を振った彼は、会合へ向かうべく  
多くの部下と共に馬車に乗って離宮へと消えていく。

「ロイ、忙しそうだなあ」

手を振って見送りながら、視界に映った街並みを見下ろしてみた。

「あたしにしてあげられること……何かないかな」

まだ、この時間なら店も開いているはずだ。

考えるより先にもう足は動いていて、侍女から目当ての店の場所を  
聞いた彼女は天馬にまたがって残照の空へと吸い込まれていった。

## 第10話 重なる影

「え〜？ まだこんな時間なの？ どうしよっかなあ」

何だか目が覚めてしまった。時計を見たら四時半。黎明の空はまだ暗いが、浮き上がるように止まらないワクワクにもう寝てなどいられない。

ベッドから跳ね飛び、窓を開けてテラスに出てみる。こんなに暗くても、外から吹き込む風は暖かい。

イリアでは味わえない風の向こうからは、聞いたこともない鳥の鳴き声が静寂の中に静かな旋律を奏でる。異国の地の空気、これだけでも心が弾む。おまけに今立っている場所が、ずっと焦がれてきた人の住む城。

じつとしていられない心は、大きく伸びをすると部屋へと踊る様に戻っていく。

「今日は何を着て行くっかなー」

掛け声だけでそこまで選択肢などなくても、鏡の前で両手の服を見比べる。

あと四時間くらいしたら、彼とどんなところを歩いているのだろう。とても長く感じる夜明け。こんなにも心躍る朝は一体いつぶりだろうか。

普段の倍以上の時間を使って化粧に眉の手入れに……忙しなく動き回る。

「少しくらい早く行ったってバチ当たらないよね！」

もう待てない。身支度を整えると部屋を飛び出した。昨日別れたあの場所で待っていれば、きっと会える。



静かな離れに用意してもらった部屋とは違い、本館のエントランスはこんな早朝でも人の往来が多い。

長椅子に座り、向こうから誰かが歩いてくるたびにそちらを振りむく。誰だろう——そんな好奇の視線を浴びながら、まるでコン

シエルジュのように笑顔で挨拶すること二時間。

「おはよう！ ロイ」

やっと現れたシルエツトに勢いよく立ち上がり、顔中の笑顔で手を振って名前を呼ぶ。彼が声に気づいて視線が合うと、待ちきれずに駆け寄った。

「おはよう。その服かわいいね」

「ホント！ 嬉しいなあ。えへへっ、おめかししてきた甲斐があったよ」

何を誉めてもらっても嬉しい。ルンルン気分で城を出て、ロイの横に並んで歩いていく。

昨日再会したばかりなのに、何かずっと一緒にいた気がする距離感。やはり、普通に名前を呼べるのは良い。

異国の地なのに自身でも驚くほど自然体で居られるのは、きっとロイの配慮のおかげ。彼に仕える人たちもみんな優しい人たちばかりで不思議な安心感がある。

お喋りしながら広い中庭を抜け、着いた先は厩舎だった。

「今日は、昨日のお返しにぼくが馬で案内するよ。後ろに乗って」

厩舎から出てきたロイは馬を連れていた。彼が馬術を披露するのを初めて見る気がする。ベルン動乱の時は騎乗なんてしていなかったはずだ。

「ふうん。ロイって馬に乗れたんだ？ 慣れない事するとケガしちゃうよー？」

「あ、信用してないな？ じゃあシャニーは歩く？」

「アハハ！ じよーだんだよ、じよーだん！」

つついからかってみたら、乗って見せて意外とムキになるロイに笑ってしまった。

それも束の間。馬上の彼を見上げて思わずぼかんとした。朝日を背に馬を乗りこなす彼が眩しく映える。

「馬に乗ってるロイもカッコイイな。なんか、すっごい凛々しく見えるよ」

「そうかい？ ありがとう。父上に手ほどきを受けてまだ日が浅いん

「だけどね」

ストレートな言葉をかけられ、ロイは照れながらシャニーの手を取って馬の後ろに乗せてやる。

リキア一の騎士と呼ばれた父——エリウッドも馬に乗り始めたのはこのくらいのと年と聞く。広大なリキアの地では馬術が戦術の要であり、騎士は誉れの象徴でもある。まだまだ父の背中には遠く及ばずとも、傍で親友が褒めてくれたらそれだけで今は十分に思えた。

でも、扱いに慣れない馬術はやはり背中が揺れる。シャニーは天馬とはまるで違う感覚にあたふたしていた。

「後ろに乗るのって、あんまり慣れてないんだよね。うぶっ！」

自分で天馬を操って飛び回るのは寝ながらもできる自信があったが、人の操る馬の後ろに乗るなんてほとんど経験が無い。

またひとつ大きく背中が揺れて、バランスを崩したシャニーは支えが利かずに目の前の背中に顔から突っ込んでしまった。

「ごめん、大丈夫だったかい？」

「えへへ……鼻がぺしゃんこになっちゃった」

振り向いて来た彼を見上げ、真っ赤になった鼻を背中に押し付ける。ふわっと温もりに包まれて思わず目を瞑る。

（いい匂い……）

鼻のヒリヒリを忘れるくらい心が弾む。何の匂いか分からないけれど、ずっとそうしていたくなる。今まで味わった事の無い感覚は、別世界に生まれ変わったかのように自身の立場を忘れさせてくれる。

「揺れるし、そのまま掴まっててくれ」

「おっけー！ フェレの街っていいなあ、じっくり見たい」

言われなくともそのつもりだった。ギュっとそのままでいることにする。

こんな事が出来るなんて、昨日まで考えもしなかった。もつともつと、遙か高い所にいるものだと思っていたのに。ゆっくり、ゆっくり進む馬上で夢心地に浮かぶ。

（恥ずかしいけど、次があるか分かんないもんね。今日くらい甘えちやえ甘えちやえ！）



国内任務が続いていたから感覚が鈍っていたかもしれない。自分の仕事がいづつ明日が無くなるかもしれない危険なものだと。それを改めて思い知ったら、今この瞬間がとても貴重に思える。

まして、憧れの人の背中が目の前にあるのだ。手が届く場所に居る……そつと腕を回そうとした時だった。

「シャニーも魚介のパスタが好きだったよね」

「ふえっ?! う、うん」

ふにかけられた声に、ただでさえバクバクしていた心臓が跳ね飛んで体を起こしてしまった。ここからもう一度背中に突っ込むことはさすがにできない。

(あーっ、もう少しだったのに!)

心の中で悔しさを叫びながらロイの問いに返し、すぐに違和感に気づく。

「え、なんで? よく知ってるね」

「だって手紙に書いてあったじゃないか」

言われてみればそうだったかもしれない。どこの店がおいしいと手紙の中で盛り上がった記憶が蘇ってきた。

(よく覚えてくれてたなあ。記憶力すごい)

百通は越えた文通の中の一通だったはずなのに。書きたいこと、知って欲しいことがあまりに多くて何を書いたか忘れていることがシャニーには結構ある。

「美味しいお店を知っているからお昼はそこで食べようよ」

「さんせーい! ロイが連れてってくれるお店かあ。きつと、すつごくおいしいんだろうな!」

ロイに連れて行ってもらえるならどこでも良かった。その彼が特別にと案内してくれるならどこまでもついて行きたくなる。

「ハハッ、なかなかハードルを上げてくれるね。とっておきだから期待しててよ」

「わーい! リキアだしトマトソースかな? あ、オイルソースもおいしいんだっけ? あーっ、楽しみ楽しみ!」

ニカッと笑いながら手を挙げる元気な顔。弾けるオレンジのよう

に爽やかな天真爛漫を背後から浴びて、ロイの口元が自然にほほ笑む。

彼はフェレの城下町の中央通りをぐるつと迂回するようにゆっくり裏路地を進み、街のあちこちを案内しながら行きつけの店へ向かった。



「へえ、もう部隊長なのか？」

「うん。この前の十月から任命されたんだ。えへへ、初任の最年少記録だって！」

シャニーから天馬騎士団の団員証を見せてもらいながらロイは感嘆を漏らした。

一年前も見せてもらったが、その時の身分は見習い騎士だった。今そこに記されているのは正騎士の文字と、その横に追加された所属と資格。

——イリア天馬騎士団 ファルコンナイト 上級天馬騎士

——第十八部隊 部隊長

——国力向上・国内治安維持主幹

本当に、彼女は命を危険に晒す世界に身を置いていることを証明する肩書。

手紙ではかなり熱心に仕事の内容を書いてくれたが、国を支える三大騎士団の幹部に就いているなら納得も行く。一枚名刺を拝借して彼女に団員証を返す。

「すごいな。さすがシャニーだね」

「そうでもないよ、失敗ばかりだし。ロイが羨ましいよ」

褒められても今ここにいる理由が理由だけに、シャニーには苦笑いしかできない。昨日の別れ際、部下に囲まれたロイの凛々しい横顔を見た後だと、自分が本当に情けなく思える。

そんな気持ちをフォローするように、彼は笑って返してくれた。

「ほくも大して変わらないよ」

ロイは両手をテーブルに乗せて身を乗り出した。

「聞かせてよ。どんな仕事してるのか」

手紙でも何度も聞いたことはあるし、悩みを相談されたこともある。それでもやはり本人から聞きたい。どんな環境に置かれているのか、どんな毎日を送っているのか。安全な仕事なのか、恐ろしい経験ばかりなのか。彼女の様子も気になるし、とにかくいろいろ知りたかった。

でも、彼に興味を向けられれば向けられるほど、シャニーは笑いながらも内心困って頭がぐるぐるし始めていた。

(どうしよう……。何を話そうかな)

つい最近の手紙で、聖天騎士団への傭兵契約の話を出してしまったし、そこでの成果をレポートすると書いてしまった。

だけど、こんな楽しい時間に思いついたくないし、とてもロイが聞きたいであろう内容ではない。何より、わざわざそれを話さなくても、国力向上活動の話ならいくらでも喋りたい事や聞いてみたい事がある。

幸い、ロイは聖天騎士団については何も聞いてこない。

カルラエの病院建設やエンジェルヘイロー——鉄道計画に村々への支援……。今まで頑張つて来た事を喋り始めたら、立て板に水を流すように後から後から止まらなくなった。

「あたし、もっともつと、みんなに喜んで欲しいんだ。みんな幸せになったら、きつとイリアもいい国になるはず！」

身を乗り出して十八部隊の仕事を語るシャニーの瞳は生き生きして、望んだ道を進んでいることをそれだけで伝えている。

ロイが相槌を打って頷きながら聞き入ってくれるものだから全部聞いて欲しくなる。

「それってすごい素敵だと思うよ。みんなを笑顔にできる、シャニーにしかできない仕事じゃないか」

「あたしだけかあ……。そう言つて貰えるとホント嬉しい!! ありがとう！」

胸の中にふわっと湧きあがる幸福感。全身を包んで今にも体が浮き上がりそうだ。

なかなか騎士団内では認めてもらえない仕事。この前ようやく目に見えた結果で返ってきてほっこりしたばかり。

そして、一番認めて欲しかった人からこれ以上ない飛び切りの言葉をもらえた。嬉しくて、頼もしくて、晴れ晴れしくて。もうどれだけ非難を浴びても、今の言葉を心で繰り返せば戦っていける気さえする。本当に勇気をくれる言葉。

「ぼくもシャニーが欲しいよ。リキアには君みたいな人が必要だし」  
「えーっ、そこまで言ってくれるの？ うふふー。最近失敗続きでヘコんでてさ。ロイにそう言っただけなら、頑張れそう」

リキアでは忘れようと思っていた重いものが、どこかへすつと溶けていく気がする。心が軽くなったら急にお腹が空いてきた。

ロイと一緒にオーダーしたパスタは頬が落ちるほど美味しく、彼女は顔をジンとさせて足をバタバタするとそこから止まらなくなった。

つつい気が緩んでもぐもぐやってしまっただけからはずと。今正面に座っているのは女友達ではなかったことを忘れていた。

「あれ、ロイ食べないの？ なんかあたしの顔に……もしかしてソース飛んでる?！」

おまけに彼はフォークを持つ手を止めたまま、じつとこちらを見ていたものだから内心焦った。

（あわわ……やっちゃった！ 大食い女とか思われてたらサイアクだよお……）

ロイの視線を追ってハンカチを取り出そうとすると、彼はふっと笑ってようやく一口運び出した。

「いや、見るだけで元氣出るなって。ぼくもなかなかうまく進まないことも多いからね」

「えー？ ロイでもそんな事あるの？」

「いっぱいあるよ。失敗もたくさんしてる。きつとシャニーと同じくらいね」

「ふうん……。やっぱ、タイヘンなんだね。リキア中まとめなきやだもんね」

意外に映った。世界を救った英雄ロイにもそんなことがあるなん

て。苦笑いする姿はそれまでの凜々しい顔とは違って、どこか近く感じる。彼の言葉に救ってもらったから、シャニーは何とかお返ししたくなった。

(ロイのために出来る事……うん、昨日教えてもらったよね)

彼を今はこんな間近で支えられるのだ。許されているこのわずかな時間ぐらひは、彼が望んでいる事を果たしてあげたい。

「昨日の会合かな？」

用意された部屋の窓からずっと離宮の方を眺めていた。馬車が出てきて城が賑やかになったのは夜の九時過ぎ。きつと紛糾したのだろう。

本当はすぐ駆けて行って労いの言葉を掛けたかったがぐつと堪えた。遅い時間だったし、部外者に変わりはないのだ。

「ああ、それもだ」

「遅かったもんね。お疲れ様だよ」

「ありがとう。そうやって傍で笑ってくれているだけで元気が出るよ」

「そっか。じゃあ、いっぱい応援してあげるね」

話を聞くことなら自分でもできるし、大好きな事だ。同じことをたくさんの人にしてもらい、時には叱ってもらってここまで歩いてきた。疲れているなら労ってあげたいし、俯いているなら支えてあげたい。

同世代の親友と言っても、ロイは憧れの人だ。こうして話しているとはとどどん膨らんでくる敬愛の念。ずっと傍にすることはできなくても、リキアに自分がいる間は精一杯できることをしようと胸に決めた。彼が求めるなら、尚更に。



「あー、美味しかった！ あんなおいしいパスタ食べたの初めてだよ！ 連れてって来てくれてありがとう、ロイ」

店から出たシャニーはロイに感謝を口にする、満面の笑みを浮かべてスキップするように歩き出した。

イリアにはこんなお店はエデッサにさえ無い。極寒の地イリアには南部でとれる海鮮は入ってこないからだ。精々、国内で釣れる淡水魚か北部の海でとれる白身魚くらい。

「それは良かった。他にもいろいろあるから、明日にでも行こう」

嬉しい！——活き活きするコバルトブルーの瞳が躍る。

また明日も付き合ってくれてくれるなんて夢のようだ。ここ数か月、醒めない悪夢にうなされてきたが、こんな夢ならいくらでも見続けたい。騎士としての心がどんどん揺らぐ。

（今くらい、少しくらいなら、傭兵じゃなくていいよね。イリアの事……忘れても……いいよね）

ロイがこうやって誘ってくれるなら、今だけは身を預けてしまいたくなる。ぽっかり空いた心を埋めてくれる優しさに今は頼ることにした。

動乱の時はお喋りが楽しいと思うだけだった。けど今はそれだけではない。会話が無くても、傍に居るだけで何か——欠けたピースがすつと嵌ったように落ち着くのだ。

この場所こそが自分の居るべき場所なのだと思ってしまうのはワガママなのだろうか。きつと、今だけならそれを楽しむことは許されるはず……そう傭兵の自分を説き伏せた。

この後どうしようか……馬に乗った二人だったが行き先も決まらないままお喋りが進む。

「お店いっぱいいいなあ。ね、ロイは買い物とかよく行くの？」

「たまにかな。何か見たいものがあるなら付き合うよ？」

「うんっ、お願い！色々見たいから一緒に行こうよ！」

リキアにはどういう店があるのか知りたい気持ちより、今は彼がどういうものに興味があるのか知りたい。

話を振ると快く願った答えが返ってきて二つ返事で行き先が決まった。

未舗装の裏路地はやはり揺れる。またロイの背中で鼻をぶつけ、顔を埋めたまま職人街へ続く道をきよろきよろ見渡す。目に留まった店にあつと口を開けると、彼の肩に手を置いて顔をのぞかせた。

「ねえねえ、あのお店行きたいな！」

「工房か。見てるだけで楽しいよね」

「そうそう！ あの子キラキラしてるの見たいんだ。行こー！」

今日一番に行かないといけない店かもしれない。せっかくなのだから一番喜ぶものを選んであげたい。昨日も雑貨屋に行ったものの、肝心な情報が抜けていてほとんど何も買えなかったから今日こそはと意気込む。

「ねえねえ！ アドバイスちょーだいーい！」

工房に着くとさっそく駆け出し、目当ての棚まで一直線。口元に作ったメガホンで彼を呼び、両手を大きく振った。

「何か気に入ったものがあったのかい？」

「お土産にガラス細工を買ってこうと思っさ、どれが良いと思う？」  
目の間にずらつと並ぶのはリキア名産のガラス細工でつくられたグラスだ。

様々な色のグラスが陽を浴びて虹のように煌めく。見ているだけでも楽しくてどれを選ぶか迷う。

「そうだな……」

ロイはひとつを取り上げて陽にかざし始めた。

(ふむふむ……なるほど、なるほど……)

陽に映えるのはロイの着る服と同じ赤のグラス。じつと見上げていたらロイと視線があった。

「シヤニーはどれか目についたのあったの？」

「あたし？ えーと、この青とかかわいいなって。でも、その赤も気になる！」

「シヤニーは青が好きなのかい？」

「赤も青もどつちも好きだよー」

「そうなんだ。気が合うね」

「ね！」

ロイにそう言われるとなんだか凄く嬉して、手を挙げて笑う。何もかも楽しくて、本当に天国に来てしまったかのようだ。

リキアがこんなに過ごしやすい場所だとは思わなかった。何より、

ロイの傍にいる事がこんなにも心を弾ませるとは。

死線を越えた事で押さえ込んできた気持ちたちが飛び出し、会えずに気づかないままだった心が、彼の優しさに直接包まれて焦がれる程に膨らむ。

このままではイリアに帰りたくなってしまうかもしれない。だけどそれは叶わない。だからこそ、今この瞬間を大事にしようと思っただ。

職人街に着くと馬を降り、二人でぶらぶら店を見渡しながら歩く。普段なら武器屋を覗くところだが今日は止めた。今ここにいるのはイリアの天馬騎士ではないと心に決めて。

ただ歩くこの時間も二人にとっては貴重なひと時。まるでお喋りが止まらない。お互いへの興味は尽きることがなく、聞きたいことが後から後から清水のように湧いてくる。

「シャニーは普段誰と遊びに行ってるの？」

ふと視界に入った雑貨屋の軒先に積んであった毛糸玉を手にしてると、後ろからロイの声が聞こえてきた。

誰と……浮かんでくるのはルシャナにミリアにレン……四六時中行動を共にしている家族の連中ばかり。

「うーん。同じ部隊の子かな。って言っても、ごはんくらいだけね。こんな……リキアみたいにたくさんお店もないし」

今頃彼女たちは何をしているのだろうか。ミリアは応援して送り出してくれたが、何か彼女達だけに仕事を残して楽しい場所に来ている自分に罪悪感さえ覚える。

「そうか。じゃあ行きたいところがあったら遠慮なく言ってくれたらいいよ。どこでも連れていくよ」

「ふうん？ どこでも？ じゃあ例えば……オステイアとかも？」

「ああ。オステイアでもバトンでも。今度行くかい？ オステイア」

「ホント!? 嬉しいよ! この前の時は全然街を見れなかったからさ! えへへっ、楽しみにしてるね」

ただ今だけは、仲間にごめんと心の中で手を合わせた。目の前に



ある、今しか触れることのできない彼の言葉に甘えていたい。その気持を抑えられなかった。

歩いているより立ち止まって喋っていた時間の方が長い気がする。空を見上げたら夕焼けが意地悪く青色を取り上げようとしていた。時計なんか無くなってしまえばいいのに———そう思えるくらい、時間が過ぎるのが早い。

「はー、楽しかった！ 今日も付き合ってもらってありがとう」

清々しい風が吹き抜け、黒くこびりついたものがすっかり取り払われたかのように心が軽い。

こんな遊びで、こんなにお喋りしたのは本当にいつぶりだろうか。いや、記憶にないかもしれない。

「こちらこそ。あと一週間くらいはいるんだろ？」

ロイの誘いに心が揺らぐ。イリアを出てくるときは何も考えていなかったし、行くアテのない異国に居場所など無い。オステイアやバトンの港町あたりまでぶらついて一週間くらいで帰るつもりだった。(傍に居て良いつて言ってくれるのに……———帰りたくない)

帰って一月からの再登城に向けて色々準備もしないといけない。剣だつて聖天騎士団との戦いで傷んだまま。

だけど……今はここが自分の居場所のような気がした。

ダメだとは分かっている。帰りを待つ人たちが居るのは十分理解している。責任ある立場で、今は罰を受けている身だと頭はひっきりなしに引つ張つて来る。だけど———心がどうしてもロイの方を向いてしまった。

「ロイが迷惑じゃないならそのくらいお世話になろうかなあ。すごい楽しいし」

「はは、そう来ないかね。ぼくも毎日何でも話せる相手が居て嬉しいよ」

ここには居場所があるし、楽しいし、支えなくなる人がいる。それでも断る冷厳さは無かった。認めてくれて、必要だと言ってくれる人がいる———理由など十分だった。

「みんなに顔合わせできたし、次は連絡しなくても好きに来てくれたらいいよ。マリナスに言えば引き継いでくれると思う」

ところが、さらにロイが続けてきた言葉にはさすがにシャニーもごくつと息を呑んだ。

いくら彼がこう言ってくれたとしても、自分が彼の親友でありたいとしても、やはり周りから見ればロイと——英雄騎士だ。

「嬉しいけど、それは……」

躊躇っているとロイが手を取って来た。

「何か言われたら手紙でもいいから言ってくれ。事前に皆には言っておくから余程大丈夫だ」

もうあたりは真つ暗になり別れないといけない時間。

城の二階へと戻っていくロイの背中に手を振って見送ると、シャニーは彼に握られていた手にそつと頬ずりした。本当に温かい人だ。

「やっぱり優しいなあ。憧れちゃうよ」

どうしたらあんな優しい人になれるのだろう。

あの優しさにできる精いっぱいまで応えてあげたい。部屋に戻ったシャニーは二人で訪れた職人街で仕入れてきた材料を広げ、早速作業に入るのだった。

## 第11話 きずなの詩

——お願い！ あとちよつとだけ……あと三日……あと一日だけ、ね？ お願い!!

最初は一日だけの滞在予定だったフェレ。だけでもう、ここにいるのが普通になってしまつて離れられない。ロイが誘つてくれた一週間を過ぎても、その都度延ばしてもらつた。

まだ月末まで二週間もある！

大丈夫まだ一週間あるよ！

あと三日……。

そして——

——12月27日 AM8:30 リキア フェレ城

いよいよこの日が来てしまつた。明日にはイリアに向けて出発しないと、一月からの登城に向けた準備が間に合わない。

ロイと待ち合わせているエントランスに向かう途中、シャニーは帰国後の事が頭によぎり、首を何度も振つてそれを払い落した。

(今日が最後なんだ……)

それでも、どうしても考えてしまう。あの顔が、あの声も、あの温もりが……。

もう明日からは“天馬騎士のシャニー”だ。夢から覚めてしまう……。なら——ぐつと両手を胸元で握る。

(今日は今日しか出来ない事だけをやろう。まだまだ、ロイとお喋りしたい事、いっぱいあるんだから！)

渡り廊下の窓から広がるフェレの町を眺める。この景色をゆっくり見下ろせるのも、今日が最後。二週間あつたはずなのに、まだ三日くらいしか経っていない気がする。けれど、イリアの天馬騎士に戻る時は刻一刻と近づいている。

今は、ただのシャニーで居られる大事な時間。一つ深呼吸すると駆け出した。

「ローイ！ おつはよー！」

今日は先にロイが待つていた。手を振りながら彼の許へ駆けついてい

く。声に気づいた彼は軽く手を振ると、迎え入れるようにじつとこちらを見つめてくる。

「おはよ、どうしたの？」

もう肩がぶつかりそうなくらい目の前まで来たのに、まだ彼はじつと見つめてくる。

何か着方が変だっただろうか。最初は仰天して断ったが、リキア土産と言ってプレゼントしてくれた服。今日はせっかくだからと気合を入れてそれを着てきたのだが似合わなかったのか。

「太陽が眩しいなって。うん、おはよう。今日も笑顔がいいね」

朝陽と共に駆けてきた笑顔は眩しかった。ただでさえ眩しいのに、その両方が一気に駆けてくるなんてロイには卑怯にすら映った。

もう形容する言葉が見つからない。これ以上を見せられたら、どうやって彼女を誉めてあげればいいだろうか。今も既に、目の前には今までで一番のはしゃいだ笑顔がある。この顔を見られるのも明日で最後……そう思うと苦しい。

「えへへ。たくさん笑うと自分も楽しいしね」

褒められてシャニーは心が躍り、そのまま体までぐるりと一回転してワクワクを止められない。

嬉しくて仕方ない弾ける笑顔は、無意識の内にロイの手を取って歩き出していた。今日はあの町のどこへ行くこうか。

「よく食べて、よく寝て、よく笑うって以前教えてくれたね」

「あれ、よく覚えてるね。いつ言っただけ。それ」

「シャニーに元気の秘訣を聞いた時、教えてもらったよ。ぼくも出来る限りやっっているんだ」

「うんうん、いいと思うー！」

ロイが口にした信条はシャニーのもの。彼女は歩き出してすぐに笑顔が一瞬驚きに変わった。そう言えば初めてお喋りをした時に言ったことを思い出し、あつと笑いが零れた。

ロイは何でもよく覚えている。自分は壊れた蓄音機と言われるくらいで、喋ったことを忘れている事も茶飯事なのに。何を見るにも、都度ロイは凄いと思えてしまう。

「シャニー、ちょっとワガママを聞いてくれないか？」

ぼうっと彼を見上げながら歩いていたら、厩舎へ向かう曲道のところで引いていた手を引き込まれた。

「わがまま？ うん、いーよ！ なになに？」

「今日はぼくだけのとっておきの場所に連れていくよ。街じゃないんだけど、いいかい？」

とっておきの場所……それを聞いてまた胸が弾んだ。彼の特別な場所。他の人は知らない場所。

どこへ行こうとも彼と一緒に楽しい。日程を十日以上伸ばしても、それでも足りないくらい。その彼に、誰にも踏み入れさせないはずの秘密へ連れて行ってもらえるのなら、断る理由なんて何があるだろう。元氣よく手を挙げる。

「もちろん！ すっごい楽しみ。じゃあ、あたしの天馬で行く？」

ゆっくりと空へ舞い上がろうと一度は天馬に指示したが、イイ事を思いついてしまった。

ニシつと笑うともう一度指示を与えて急加速。いくら今まで何度もシャニーと天馬に乗って来たロイでも、タイトが見たら説教すること間違い無しなこの飛び方を驚かないわけがないはず。

「わあ?! シャニー、もうちょっとゆっくり飛んでくれ！」

「へへへっ！ ちゃんと掴まって無いと落っこちちゃうよ！」

落馬しそうになってしがみついてくるロイにしてやったりの笑みを見せ、そのままトップスピードで駆け抜けていく。彼には悪いが、温もりを独り占めに出来るのは今日だけなのだ。

「東の方に……って、シャニー、そっちは西だろ？」

「あつ、ごめんごめん。リキアは慣れてなくてさー」

後ろから飛んでくる指示を適度に間違えながら目的地を目指す。でも、お互い様な事を彼女は気づいていた。しばらくあっちへ飛びこっちへ飛び、二人だけの空の旅を満喫する。



「ここだよ。何か考え事をするときはここに来てフェレを眺めるんだ」

「わあ〜……」

天馬を下した先に広がっていた光景にぱつと笑顔が広がる。感動に言葉もなく、開いたままの口角がどんどん上向いていく。

彼が連れて来てくれたのは、フェレを一望できる高い丘。

「どうだい？ いい場所だろ？」

「素敵……。うん、心が落ち着くよ」

心地よい風に草がそよぐその場所には何も無い。何も無いからこそ風を感じ、広がる景色に心が洗われるようだ。そして何より……何の邪魔もなく隣の彼だけが映る。

草原へ一緒に座り、しばらくぼうっとフェレの街並みを眺める。透き通った青空の下、白の壁に赤やオレンジ……イリアには無い明るい色合いの屋根が街を彩り、見ているだけで気持ちが華やぐ。

「リキアはいいところだなあ。暖かいし、明るいし。みんな優しいし、ロイもいるし……」

思わず零れた。イリアが求めているものが、このリキアには全てある気がする。あまりにも眩しい光の世界とさえ映った。以前に姉もリキアの繁栄を羨んでいたが、自分の目で見つめてみてその意味がはつきりと分かる。

どうしたら、イリアをこんな光溢れる世界に変える事が出来るのだろうか。たった一人の命を守るために、ここまで心をすり減らしているのに。

「気に入ったなら、いつまでもいてくれていいよ」

ふいにかけられた言葉に思わず振り向いて瞳が震える。動乱の終結を前にした時にもかけられたこの言葉。これだけはしっかりと覚えておきたいし、今ならその意味は分かっているつもりだ。

(あたし……ロイの傍に居たい。支えてあげたいな……)

心を引き寄せられたような気がする。このまま……。

だが、静かな笑みを浮かべると小さく首を横に振った。『もう一人の自分』は決してこの気持ちのまま生きることが許してはくれなかった。

「そうしたいところだけど、みんな待ってるから。今あたしがここに

いるのも、ホントは罰を受けてだしね」

今この瞬間も民は吹雪に震え、仲間はず騎士団内の厳しい目に耐えながら仕事をしているのに、自分だけ抜け出して光の世界で遊んでいる。

もし、もし万が一この世界にいたことを許されるとしても、それは誓いを果たしてから。そう決めた。何か、何かこれだけは自分が残した軌跡なのだと思いを張って言えるものをイリアに残したら、その時は。それがいつになるのか……いや、必ず果たすと誓って。

その誓いを静かにロイは頷いてくれた。しばらく言葉もなく町を二人で見下ろす。

「あたしがリキアに生まれてたら、どんな女の子になつてたのかな……」

独り言のように漏れた言葉。

よくイリアと他地域の女性は比較される。イリア以外の国で女性が戦場に立つことは、それだけで語り草になるくらいのこと。

今まではイリアの普通に染まって生きてきたが、ふいに気になった。なのに、横から聞こえてくるのは笑い声。

「シャニーはどこで生まれていても変わらないと思うよ」

振り向けばいたずら好きな笑顔がこちらを見つめていた。こんな顔もできるのかと驚いたが、お返しに「もう！」と頬を膨らませて睨むように見上げてみる。

「あーっ、またそういうロマンのない事言う！」

「他意はないって。どこで周りを笑顔にしてるかだけだよ、きつと」膨れっ面を近づけたら鼻を突かれた。くすぐったくて思わず笑いながら彼の手をはたく。

彼が言うならきつとそうなのだろう。自分は自分——周りがなんと言おうとも、どこで生きていようと、自分の精一杯で大事な人たちに笑ってもらいたい。その気持ちは変わらないのかもしれない。

「イリアに生まれて良かったって思ってるけどね。そうじゃなかったら、ロイとお喋りも出来なかったし」

天馬騎士としての修行があったから、今この場所にいる。無駄なこ

と、意味の無いこと、そんなものは何も無いのかもしれない。

喜びも、悲しみも、挫折も、後悔も……その全てがあるから今ここにいる。きつとこれからもそうだ。自分だけにしか描けない軌跡の全てを抱きしめてみると、本当に今が貴重で過ぎていくのが惜しい。「どうか。案外うちの騎士になつてたかもよ」

またドキつとするようなことを、ロイはさらつと笑いながら言ってくれる。どんな出発だったとしても、描いた軌跡はどこかで交わっていた……そう思える不思議。

「ロイのどこの騎士かあ」

静かに目を瞑ってイメージしてみる。一体どんな事をしていただろう。騎馬兵？ 剣士？ やはり天馬に乗っていたのだろうか。

「……うん、素敵……」

どの軌跡を描いていたとしても、きつと自分は笑っていたに違いない。ロイの笑顔を支えたい——その気持ちはいつも同じ。

「でも、イリアも大好き。その為に騎士になつて今も戦つてるつもり」それでもやはり、今の自分が一番自分らしく、自分を自分たらしめるものと思える生き方をしている気がする。

姉の背中だけを追って走り抜けた見習いの時とは違う。自分だけの誓い、自分だけの夢を抱き、描いた軌跡は多くの仲間と絆を結んで繋がった。『天馬騎士のシャニー』は自分だけしかいないと断言できる確固としたものを掴んだとはつきり言える。

「うん。手紙からも伝わって来るよ。頑張ってる姿を思い浮かべたものさ」

「ホント？」

「ああ。民の事を想う気持ち、ぼくも励みになっている」

「……嬉しい。うん、みんなのために頑張ってる。頑張ってるんだ……」

手紙が彼の支えになり、そして自分の頑張りをロイに認めてもらえた——途端だった。ぷつんと何かが切れて、頬を一筋流れ落ちた。

「この前の戦いだって、民を守るために……戦った……はずなのに……」



挫折と後悔に打ちひしがれて失意へと叩き落された中で、必死に忘れようとしてきた一か月。でも、ロイの前で思い出していたらもう我慢できなくなってしまう。一か月使って少しずつ癒してきた傷口が一気に開き、あふれ出して止まらない。

「どうしたんだ？」

「だけど……だけど……」

リキアにいる間は、ロイの前では絶対に泣かないと決めていたのにもう堪えきれなかった。両手で顔を覆っても、声は漏れるし涙は止まらない。三角座りの中へどんどん俯き沈んでいく。

その様子をロイは驚くでもなくじつと見つめ、そっと背に手を添えた。

「シャニー、良ければ教えてくれないか。何があつたのかを」

背中に添えられたロイの手が温かい。シャニーは心を直接ロイに擦られているような気持ちになった。不思議だ、どうしてこんなに人の手は温かいのだろう。

「君の力になりたい」

涙の向こうへ届いたロイの声が、抉れた心にすっと沁みて温もりにも包まれる。

——あなたは独りで居たらいけない子なんだよ

ふと、レイサの声が脳裏をよぎった。師の言う通りだ。どれだけ強がっても、凜と構えようとしても、誰かに支えられ、愛してもらえないと傷の一つも癒せない弱い心だ。いくら傷ついても、悔しさに震えても、同じ過ちを繰り返す未熟な人間だ。力を貸して欲しい。今だけでもいい、温かさに包んで支えて欲しい。

「……聞いてくれる？」

「ああ。いつもシャニーに元気をもらってきたから、今度はぼくの番だ。ただ、隠し事は無し。全部話してくれよ」

「うん……」

シャニーは少しずつロイに伝え始めた。十一月から何が起きて今ここにいるのかを、時には涙に詰まり、時には怒気を含んで。震えてきた感情の全てを吐き出すように。

「ホントなんだ。ロイには信じて欲しい。悪手だったとは思ってる。けど……だって……」

今でも、あの時何が最善だったのか答えを出せていなかった。でも言えない。あの時の自分が間違っていたとは。もし、今あの場面に戻ったとしても、きつと同じことをする自分しか想像できない。

また溢れそうになった時、ふわつと温かさが背中に広がる。いい匂いがする……。

「信じるさ」

耳元で囁くように聞こえてきた声に心がジンと震えた。

「信じてもらえなくて悔しい。理解されなくて悲しい。そうだろ？」

……分かるさ、ぼくだってよくあるから」

包むように背中へまわされたロイの腕。彼にさえ分かってもらえたらもういいとさえ思える、温かくて強い感触。肩に回された彼の手に顔をうずめた。全てを受け止めてもらえているような安心感にまします涙が止まらない。

「してしまったことは省みないといけないと思う。だけど、シャニーが本当にしたいと思ったことは、間違っていないかったとぼくは思う」  
彼女の行動は手段であり結果。その行動をとらせた彼女の心の叫びを、ロイはしっかりと受け止めて慰める。

「シャニーは、騎士だから開拓区の人たちを助けたの？」

「違うと思う」

心地よい温かさに身を任せていた心へ不意にかけられた問い。考えるより先に声が出ていた。

「もしこのリキアで同じ憂き目に遭ってる人がいたら……戦うと思う。ロイがそんなこと許すわけないって、信じてるけど」

あの時飛び出したのは騎士だから、イリアだから、リキアだから……そんなことは関係なかった。ただ、守りたい。その気持ちだけ。騎士になったから守っているのではない。守りたいから騎士になった。それだけははっきり言える。ロイの手は、その想いを認めてくれるように背中をさすり続けてくれる。

「見習い時代は今回みたいな任務はなかったの？」

「その時はずっとロイの軍にいた形になったしね。ロイがそんな事するワケ無いって信じられたから」

言われたとおりに動いて、攻め込んだ見習い時代。それでも良かった。指示する人を心から信じられるなら。

自分で考えて動かねばならなくなつた途端に湧きあがる疑念や不安、そして葛藤。その根源を否定して駆け出しても、周りから浴びせられたのは非難、怒号、そしてひたすらの問責。

「今は何を信じたらいいか分からなくなつちやつて。仕事だつて割り切れる人つてすごいと思う……」

こんなに関心の心を殺し続けなければいけないなんて。今更になつて騎士なんか向いていないのではないかとさえ思えてくる己の無力。

でも、ロイは認めてくれた。信じてくれた。それだけでもう十分。静かに笑う。

「へへっ、あたしらしくなかったね」

それでも、ロイは腕を解くこと無く、背中をさすり続けていた。

今ここでこの笑顔を許してしまつたら、また彼女は同じ悩みに苛まれ続ける。リキアを離れ、イリアに戻つても。そんなことはさせまいとロイは彼女を離さなかつた。

「もつと自分を信じていいんじゃないかな。自分を自分が信じてあげなかつたら可哀想だよ」

周りからの声、騎士団の掟、他騎士団との軋轢。それらが少しずつ、少しずつささやき続けたのだろう——お前が間違っているのだと。今の彼女は明らかに自分自身に嘘をついて笑っている。

いつでも自然体だった、朗らかな天真爛漫を取り戻して欲しくて励まし続ける。正しいかそうでないかではなく、考えを理解し、認めて傍で支え続ける。それが仲間。

「ぼくも甘いと自分を思うことがあるけど、本当に間違っていたら仲間が正してくれる。そう信じて今も自分の理想を追求し続けているんだ。もちろんその一人が君さ」

仲間を信じるには、自分をまず信じなければならぬ——騎士団の

軋轢に負けそうになっていた心にロイの言葉が刺さる。年は一個しか違わないのに、人を惹きつける力とと言うのはこういうものなのか。すぐ後ろにいる彼を見上げてその凛々しきに見とれていた。そんな人に信じていると言われて、また涙が溢れてくる。

「なんか……騎士団に入ってから泣き虫になっちゃったみたいでさ」  
彼が信じてくれた心を自分も信じようと誓いながら涙を拭う。せつかくロイに買ってもらった服の袖は、涙ですっかり色が変わってしまった。この一年、一体どれだけ泣いただろう。

「いつでも強くある必要はないさ。ぼくも君への手紙に弱音を書いてだいたい救われてるんだ」

「うん……ロイにもそんな事あるんだって思ったもん」

「弱い所は見せにくいよね。だから、お互い様だ。泣きたい時は泣けばいいよ。ここなら誰もいない」

朗らかな自分に涙は似合わない。苦しいこともぐつと堪えて笑って生きてきた。

「だけど、今はもう無理だ。敬愛する人に泣いていいと言われた今、もう我慢できなかつた。」

堰を切ったように溢れ出した慟哭を抑えられず、気づけば優しさの中に飛び込んで顔を埋めていた。

(こんなになるまで溜め込んでいたのか……)

ロイは静かに頭を撫でて再び太陽が昇るのを待った。涙を預けてくれるならいくらでも受け止めるつもりだ。いつでも元気をくれる、大事な人の朗らかな笑みを取り戻す為なら。

「ご、ごめん！」

「どれだけそうしていたか分からないが、ようやくに自分がしてしまったことに気づいたシャニーは慌てて後ろに跳ね飛んだ。ロイの胸元は、はつきりと色が変わってしまったている。」

「気にするな——優しい微笑みが返ってきて、シャニーの口元にも自然な笑みが戻ってくる。」

「もう大丈夫？」

「うん！ すっごくスッキリした。やっぱりロイはスゴいや。頼もし

いよ」

満面の笑みが目の前で輝き、ロイは静かに頷いた。これだ、これが知っている彼女の笑顔。ようやくに返ってきた笑顔は丘の向こうまで広がる紺碧の空のように美しかった。

「やっと吐き出してくれたね。言ってくれないままだったらどうしようかと思っただよ」

安心してロイにもふっと笑みが浮かぶ。まさかここまで彼女が自分から言わないとは思わなかった。

それを聞いたシャニーが目を真ん丸にし始める。

「もしかして、気づいてたのに聞いてくれなかったの?!」

「ぼくから聞いたたら、きつと全部聞けないと思っただからね」

「いじわる！ ずっと聞いてくれるの待ってたのに」

「はは、すまない。許してくれ」

ロイの優しさに感謝しつつも、シャニーはぶうっと頬を膨らせておく。ずっと心配だったのだ。全然聞いてくれなくて、自分に興味がないのかと。でも、違っただのだ。

「心配してくれてたんだ？ いつから気づいてたの？」

「手紙を受け取った時かな。シャニーを一目見て確信した」

「そんな最初から?! えへへ……。ありがと、ロイ。すっごい……。救われた」

自分の気持ちをはっきりした気がするし、ロイにも伝えられた気がする。弱さも未熟さも、何でも見せられて涙を預けられる特別な人なのだ。

憧れの方がますます尊く見えて、離れたくない気持ちがどんどん膨らんでくる。

「うん、良い笑顔だよ。居てくれたら元気の出る笑顔だ」

一緒に居たい。傍に居て支えてあげたい。そんな気持ちをますます強くするロイの優しい言葉。恥ずかしきなんてもうどこかに飛んでいて、自然に身を寄せていた。

「君の笑顔を信じて待っている人はたくさんいるはずだ。もっと自分を、もっとみんなを信じて、前へ進んで行こう」

彼がこう言ってくれるなら、もつともつと自分を信じよう。仲間を信じよう。何か、将の心得を知った気がする。静かに頷き、そしてもう一度笑った。

その後、丘の上で広がる景色を見つめながらずっと互いの夢を語りあっていた。二人の影が重なる時まで。



——12月28日 AM 11:00

ついにこの時が来てしまった。二人は昨日と同じ場所に向かい合って立っている。違うのは、シャニーの着ている服が私服ではなく軍服なのと……。

「シャニー、髪切ったのかい？」

心地よい風に乗って甘い香りを運ぶ青い髪。ロイの前には、一年前なら当たり前にあつたショートヘアが戻ってきていた。

「えへへ、やっぱりこれが一番かなって」

すっかり吹っ切れた笑顔は一年前よりさらに朗らかで、揺れる青髪に美しく映える。

「うん、それが一番似合ってるよ」

「ホント!? 良かった良かった!」

髪型を誉められて小躍りしたシャニーだったが、何かそれ以上が続いてこない。昨日あれだけ喋っても次から次へと湧きだしてきたと言うのに。わずかな時間でも喋っていたいのになぜこんなに言葉に詰まってしまうのだろう。

互いに見つめるだけで時が過ぎて行ってしまう。ようやく紡げたと思つたのに、それは時計が無情にも別れを伝えたから。

「どうしても行ってしまうのかい？」

「引き留めてくれるの? えへへ、嬉しいなあ」

何度も何度もロイは同じことを聞いてしまう。それが彼女にとつて問われても困ることだと分かっている。

もう一時間もしないうちに、目の前にある顔を見られなくなってしまふと思うと、さすがに冷静では居れなかった。

でもシャニーにとっては嬉しかった。こんなにも聞いてくれることが。自分の事を求めてくれる、敬愛する人の気持ちに答えてあげられないことが悲しい。

「でもさ……、みんな待ってるから」

自身にも言い聞かせるようにして絞り出した言葉。こんな湿つぽい別れ方はしないつもりだった。

そんな空気を吹き飛ばすように、シャニーは天馬から袋を一つ降ろすとロイに突き出した。

「はいっ、これお世話になったお返し！」

何をしたら彼が喜ぶか随分と悩んだ。彼の周りにはいろいろなものが溢れていて困っているようには思えなかった。それでも、自分の気持ちを伝えることが大事だと、結局最初に思い付いた作戦で落ち着いた。

どうか上手くいけますように——その気持ちを込めて、袋を受け取るロイの顔を見つめる。

「これは……?」

「寒いからマフラーとセーター! 気に入ってもらえると嬉しいな」  
最初はマフラーだけの予定だった。一週間だけのつもりだったから。だけど、滞在は二週間を優に越え、プレゼントは二つに増えた。

「これシャニーが編んだの?」

「うふふ、まーね。サイズ大丈夫かな」

袋から出てきた赤色のマフラーを手にして嬉しそうに目を輝かせるロイの反応が、シャニーの顔に浮かぶ笑顔をさらに明るくさせる。

「ありがとう。さっそく帰り道で使わせてもらおうよ」

「うん! 似合ってる!」

その場で巻いてくれた姿に思わず小躍りするシャニーの元気な声が丘に弾む。傍にいてあげられない自分の代わりに彼を温めてあげて欲しい——心の中で祈った。分かっているも切なくなってくる。もう、彼と会えなくなるとは。

「シャニー、遅くなっただけど、ぼくからもクリスマスプレゼントだ」

感傷にふけつてしているとふいにロイの声がした。プレゼント……その言葉にはっとする。もう服を買ってもらって十分もらっているのに。

彼がポケットから取り出した小さな箱が宝飾品だとすぐ分かってごくりと息をのむ。もったいぶって蓋を開けてくれないが、彼が出てきたものだ。きつとスゴイものだと中を見なくても分かる。

「わあー！」

ようやく開かれた箱の中から現れたのは、青い宝玉を使ったピアスだった。陽射しを映して美しい輝きを放つ様子に思わず感嘆が漏れる。

「で、でもこれ、すごい貴重なものなんじゃ」

エデッサ城の宝物室に置いてあったものくらいしか見たことは無い。

騎士と言っても、市民と大して変わらない生活では宝玉なんてまるで無縁だ。それをいきなりもらって感激半分、狼狽半分。自分が贈った編み物と比べてしまうと、とても釣り合っていないくてたじろぐばかり。

「気に入ったら仕事で使ってもらえればいいよ」

ずいっと差し出して箱を手握らせるロイの笑顔に負けた。彼の気持ちだ、しっかりと受け取るとさっそく耳につけてみた。

「どう？ 似合うかな？」

鏡は鞆の中。だけどそんなものは要らない。目の前に一番聞きたい人がいる。

「ああ、すごい似合ってるよ」

「えへへ！ 嬉しいっ、ありがとう！ 大事に使うからね！」

見たかった満面の笑みを最後に見せられてロイの表情は優しい。送った宝玉の石言葉は——『絆を繋げる』。傍にいてあげられない自分の代わりに、この子を守ってあげてくれ——そう何度も祈る。

二人の間に流れる静かな時間。言葉など無くてもこのままずっとこうしていられそうな気持ちにさせてくれる互いの笑顔。

だけど、もう時間だ。ぐつと足先に力を込めて、シャニーはロイへ



背を向けて天馬にまたがった。

「また頼りに来ていい？」

ずっと傍にすることはできない。だけど、また来たいと自然に思える場所。第二の故郷と言える場所が出来てシャニーは誓った。必ずここへ戻つてくると。そしていずれ、誓いを果たした時には、その時には……。

「もちろんだ。言つたら？ 今度は連絡しなくてもいいから、気が向いたらいつでも来てくれ、待つてるから」

「ありがとう。絶対また来る！」

天馬が宙に浮き始めた。もう時が戻ることは無い。

どんどん離れていく互いの姿を名残惜しむ様に二人の視線は繋がっていた。このままでしたら帰れなくなってしまう。

「それじゃ……じゃねー！」

敢えて勢いよく飛び出し、フルスピードでイリアを目指しながらロイが見えなくなるまで振り返って涙を堪える。

結局、伝えたかった本当の気持ちは最後まで言えないまま。もしそれを口にして、ここへ来ることがもう出来なくなったら……そう思うと怖くて震えてしまった。今言わなければ二度と会えないかもしれないと分かつていても、とても勇気が出なかった。

「待つてるよ。いつまでも」

届かないと分かつていても手を伸ばしながら、ロイは遠く小さくなる背中を見送る。

今回も彼女は行ってしまった。命を危険に晒す極寒の大地へ、笑顔を振りまくために。

だけど、彼女は約束してくれた。必ず戻ると。それを信じてあの背中に祈る。大切だと想つてさえいれば、いつかまた、きつと会えると信じて。

再び別の道を歩む二人。だが、互いの軌跡はきつとそう遠くないうちに再び交わる——ロイはそんな気がして止まなかった。

〈第三章 恋歌千里を翔け 終〉

## 第4章 黎明の剣

### 第1話 妖精の飛翔

——エレブ新暦1001年 1月

あの場所が近づくとつれ、誰もが無口になっていく。

もうあいつは、先に来ているのだろうか。

ドアが見えてきた……閉まっている。やはり中に誰かいて、暖を取っている。こんな早朝に、あの部屋に自分たち以外がいるとすれば——あいつしかいない。一体どんな顔をしているのだろうか。大丈夫だろうか、もうすっかり元に戻ってくれているのか。

ルシヤナは共に登城したミリアやレンと顔を見合わせ、頷きあうと詰所のドアを開けた。

「おーっす！ おはよ!!」

開けた途端、元気な声が飛んできて頭を吹き飛ばされそうになる。

この風は間違いない。一か月聞けなくても色あせるわけがない太陽の声。それを聞けば、もう表情を見なくなつて分かる。予想通り、奥の机に座るシャニーが笑顔で手を振っていた。席を立ったシャニーの周りに駆け寄り、さっそくルシヤナは彼女の肩にポンと手を置いた。

「シャニー、良かったよ。元気してた？」

「うん、みんな心配かけたね」

聞かなくても分かる。顔に湛える笑顔は無理して作ったものではなく、良く知る朗らかな太陽。

迎えられたシャニーも、変わらない仲間の笑顔が囲んで見つめてくる様子に安堵を覚えた。自分の帰る場所に、ちゃんと今は居場所がある。

「ありがとう。あたしのいない間、部隊を守ってくれて」

この一か月間、おそらく彼女たちは十一月の事でずっと冷たい視線を浴びてきたに違いない。

登城した時、机の上はきれいに整理されていた。帰ってすぐ仕事を

始めやすいように配慮してくれたのだろう。朝から溜まりに溜まった承認待ちの書類に目を通すのも、整えられていれば苦にならなかった。

「大丈夫ツスよ！ 一か月いなかっただからしつかり働いてもらっただけツス！」

ミリアとレンが机の方に戻っていき、引き出しからゴソゴソ取り出している。何かを両手で抱えながら戻ってくる彼女達の手先が見えてくると、シャニーは目を点にした。

「ん。みんなでまとめた。ちゃんと読んでね」

レンが顔をくしゃくしゃにしながらどきっと机の上に置いたのはたくさんの紙。中を見ればどれもこれも企画書だった。村々を回って集めた困りごとへの解決策が記されたそれは、一か月彼女たちが汗を流してきた証だ。

「こんなに……?! スゴイ、ありがとう。新年早々大仕事だね。よし、バツチり頑張るか！」

この企画書たちを生かすも殺すも、部隊長会議での説明次第。部隊長しか出席を許されないこの会議で、シャニーがうまく理解を取り付けられなければ、すべてゴミ箱行となってしまう。仲間たちの汗を、村人たちの涙を決してそんなことにはさせられない。

拳を突き上げてやり切って見せると気合を入れるシャニーに、ルシャナが手を差し出した。

「シャニー、おかえり。長かったよ、あんたのいない十八部隊」

思い出すようにシャニーの手を握る。リーダーのいない部隊はどこか元気が湧かなかった。いつも太陽のように笑って照らしていた者がいなくなつて、冷たい眼差しばかりが降り注ぐようになって。

「うん。ミリアがすぐサボるから大変だった」

「人聞きの悪い事言うなよな、レン！ ウチはそんな居眠りしてなかつただろ?!」

じゃれる仲間たちを見つめるシャニーの口元に柔らかい笑みが浮かぶ。

みんな待つてくれていた。あんな過ちを犯したのに、駆け寄ってく

る仲間たちがいる。

——君の笑顔を信じて待つている人はたくさんいるはずだ

ロイは本当にすごいと思った。仲間たちは膝を突いてうずくまつた自分に手を差し出し、今もおかえりと言ってくれる。

「ありがとう、みんな。あたしを信じてくれて。これからも信じてついてきて欲しい」

こんな素晴らしい仲間たちを信じないでどうする。

自分の背中について来いなんて、そんなことを言う柄ではないと思っていた。だけど、こんなに信じてくれるなら、前を向かなくて何処を見つめるといふのか。支えられる心強さは、どんな強敵にも心を鬼にして戦う勇気を湧き上がらせてくれる。

少しは……憧れた師匠デイクの背中に近づけただろうか……。そう巡らせていた時だ。

「はは、新年の挨拶かな？」

そんな決意をルシャナはあっさり笑い飛ばした。

「あー。もう、また茶化すんだから！」

「そんな改めてお願いされなくなつて分かつてるよ、リーダー」

目を三角にするシャニーに構うことなく、彼女の胸をルシャナは小突いていてやった。

一体何度目だろうか。この部隊のリーダーはシャニーで、その背中について行く覚悟は決まっている。そう彼女に伝えたのは。

リーダー——そう呼ばれてシャニーはぐつと親指を立てて見せた。

仲間がいるから前を向ける。彼らを、そして自分を信じてただひたすらに先へ歩いていこう——そう新年の初めに誓えた。

きつと今年もいい年にして見せる……そう意気込んでいた時だ。ふいにドアをノックする音が聞こえてきた。

「シャニーさん、お久しぶりです」

すぐに入つて来たのは見覚えのあるふくよかな女性。この体格の人は騎士団には珍しいから忘れるはずがない。何より、処分が下る緊張の団長室にいた人なのだ。

人事の総責任者——総務部長エニスが部屋に入ってくる、  
シャニーだけでなく仲間たちもビンと背筋が立った。

「団長が呼びびですよ」

彼女は今回もあの断罪の部屋への案内人として来たらしい。

行ってくる——まわりを一瞥して頷きあうと、シャニーはエニスに  
ついて部屋を出た。

「あの子、謹慎で済んだらしいわね」

「良かったわね。髪も元に戻ってるみたいだし」

「でも、ちよつと軽すぎる様な……」

ひそひそ……廊下では相変わらず噂話があちこちから降り注ぐ。

でも、今日は耳を塞ぐことなくしつかりと歩いて団長室へと向か  
う。何を言われようが、自身の信じた道を歩んだ結果だ。悔いはな  
い。

何より……ロイと話をして確信できた。自分を信じるべきだと。

あの時、イリアの民を守ろうとした心は——間違っていない。

「第十八部隊長シャニー、参りました」

総務部長に目で促されて、大きな声で団長室のドアに向かって叫  
ぶ。

姉にも結果を伝えなければなるまい。一か月を要して整理した考  
えを。

「どうぞ。適当に座ってて」

ピシつとしていた肩がズルつといった。部屋から返ってきた反応  
は、いつもの緊張感とはどこか違う。

言われるままに部屋に入り、団長に一つ小さく頭を下げると左手に  
見えるソファに腰掛ける。登城禁止令を言い渡されたあの時と同じ  
ように。

手にしていた資料へ押印し、箱にそつと置いたタイトが席を立つ  
た。こちらへ向かってくる足取りに視線が合う。

「久しぶりね、シャニー。ロイ様のところは楽しかった？」

どんな重い切り出し方をしてくるのかと身構えていたシャニーは、  
奇襲を喰らったように頭がぐわんぐわんとして後ろにすうつと重心

が行きかける。

ようやくに聞かれたことを頭が理解すると、途端に目を白黒させて思わず視線を逸らした。

あまりにも予想外な反応だ。怒っているのかと思ったが、姉は堪えているのか口元に手をやっている。だけど、目元までは隠せず、はつきり笑っている。

「どっ、どうして……それを……」

顔が熟れたトマトのように真っ赤になった彼女に絞り出せたのはそれだけだった。

この話を知っているのはミアアだけのはずなのに。もしかして彼女は喋ってしまったのだろうか……ありえる。

大変なことになった。謹慎中に遊びに出かけていたと団長にバレているとしたら、ここに呼び出された理由は一つしかない。なのに、テイトは笑っている。逆に恐ろしい。

そんな大慌ての妹の前でテイトは呆れ顔。

「貴女、ずっと家にいなかったでしょ？ 誰が掃除したと思ってるの？」

そう問われて、シャニーはぼかんとするばかりで返事も出来なかった。まさか新年早々に、団長から部屋が汚いと叱責を受けるとは思っていなかった。おまけに、天馬騎士団の団長室なんて重い場所だ。

確かにおかしいとは思っていた。逢いたい気持ちに胸が一杯で、あの時は何も考えずにロイの許へ飛び出した。家の中は普段のままはずなのに、帰ってきたら魔法がかかったようにきれいに整理されて、別の家に迷い込んだのかと思ったほど。

綺麗すぎて、逆に居心地が悪かった。それがまさか姉が片付けてくれていたとは。おそらく納戸の雪崩被害にも遭っただろう。

「あ、あの……そのっ、ごっつ、ごめんなさい！」

ますます、これは大変なことになった。とにかく色々な意味で謝るしかない。上目遣いに許しを請う。らしくないと分かっているけど、どうしてもしどろもどろに言葉を噛んでしまう。

だが、妹が叱られる犬のようにしゅんと小さくなる姿に、テイトは

呆れながらため息をついた。

「何で謝るの？ 通行許可書にサインしたのは私よ？ 貴女が南方に行く理由なんてすぐ分かったわよ」

本気で気づかれていないと思っていたのだろうか。

以前にも長期休暇申請へ却下を浴びせたことがある。あの時もシャニーは理由を渋ったが、今回も理由のない申請書を最初は却下するつもりだった。何せ申請書がまわってきたのは、彼女に登城禁止という重い罰を与えた初日だった。

しかし、あんなことをされたら認めるしかないではないか。十八部隊の面々が団長室に押しかけてきて、三人から説得の嵐を浴びせられるのは。

「それはいいとして」

ようやく姉が本題に入るらしい。シャニーはゴクツと背筋を伸ばした。座りなおして膝に手を置くのがタイトの戦闘前の仕草だと分かっている。

彼女の顔に緊張が戻るのを確かめると、タイトは一つ咳払いをして場を締め、キンと鋭い眼差しで十八部隊長へ問いかけた。

「二か月の謹慎でちゃんと頭は整理してきたの？」

前にも同じような場面があった気がする。だが今回は答えをシャニーからもらわずとも雰囲気で分かる。

吹っ切れたような清々しい表情に映る、高く澄んだ空のような青い瞳がまっすぐ見据えてくる。また一枚殻を破って、一年前の入団直前と別人のような、凜とした部隊長の顔がそこにある。

「うん。あたしは逃げない。そう決めた」

シャニーは真っ直ぐ姉の目を見てハッキリと言い切った。

自分の犯した罪を過ちとして受け止め、それでも己の信念の剣を放ることなく握りしめて、ただひたすらに前に進む決意。たとえ勝ち目が薄くとも、信じてくれるものが託してくれた想いを刃に乗せて、心を鬼にして戦う気炎。どれだけ非難を浴びようとも、認めてくれる、理解してくれる大事な人たちのために逃げることなく前へ、前へと疾駆する勇気。それらを握りしめるようにぐつと左手を突き出して見

せた。

「どんなに非難されても、どれだけ拒絶されても、託してくれる人たちを、あたしの心を……この剣が信じるままに進もうと思うよ」

本当は元から傍にあったのに。目に見える拒絶、すぐに聞こえてくる非難に怯えて気づこうとしてこなかった、信じてくれた者たちの想い。もう無理だと思った。立ち上がれないと思った。膝が崩れ、突き立てた剣に身を預けるばかりでもう戦えないと諦めかけた。

それを仲間たちや、本当の気持ちに気づかせてくれたあの人のおかげで再び立ち上がることが出来た。

彼らに報いるには、決意の青焔を刃と掲げてひたすら、前へ。それだけだ。

「吹っ切れたようね」

十二月のあの沈んだ顔はそこにはない。死に絶えた意志が藜く積もった瞳はもうない。イリアの黎明を駆ける青き騎士の復活に、テイトの顔にも安堵の笑みが浮かぶ。

「だけど、契約は契約よ。次は無いと思ってちようだいね」

イリアの発展を夢見る同志としての喜びを伝えると共に、団長としての叱責も忘れない。もう次、同じことが起きれば守ってやることは出来ないのだから。

シャニーは静かに頷いた。もうこれ以上仲間や姉に迷惑はかけられない。一か月間不在にしたことが予想以上に部隊の負担になっていた。それを積み上げられた決済待ち資料や企画書だけでも思い知らされている。

分かればよし——そう言わんばかりにテイトが戦闘モードを解き、ソファに背を預けて姉の笑みを浮かべた。

「おかえり、シャニー。リキアに行つてそのまま帰つてこないかと思つてたわよ」

ミリア達に言われるまで、まさか妹がロイとそんな関係だったとは夢にも思っていなかった。自分なら失意の中でクレインの許へ行つたら、イリアに帰つて来られるだろうか。

「そこまで無責任じゃないもん！」



心外と頬を膨らせるシャニーだが、何も無ければ帰りたくなかった。別れの時のあの切なさは、今思い出しても胸がきゅつと絞られる。

信じてくれたもののために戦うと決めたから後悔はしていない。唯一の心残りは、本当の気持ちを怖くて伝えられなかったことだけ。「けど、また行きたいなって思うよ。あの人のおかげで、あたしは帰ってこれたんだ」

リキアは大事な第二の故郷。

刃を振るう事に疲れ果て、膝を突いた時に温かく包んでくれる優しさがあそこにはある。すべてをさらけ出して頼れる背中が、堪えてきた慟哭を全て任せられる大きな胸がある。

帰る場所がある……そのありがたさを噛みしめてシャニーは戻ってきた。今の自分があるべき戦場へと。誓いを果たして必ず帰る。その決意を胸に。

## 第2話 黎き風の囁き

「ぷしゅ〜……」

天馬を駆り次の目的地に向かう空の上。シャニーから空気が抜けた。

「はうあく、今日は朝からブルーだよ」

まだ朝も始まったばかりだと言うのに、口から漏れたのは愚痴だった。いくら前を向いていかなければと思っても、新年早々あれはキツイ。

みんなの願いを叶えてあげたい想いは誰にも負けないつもりだし、不満はご説ごもつともだ。でも……。

（アルマみたいにうまく相手を納得させられる人が羨ましいなあ……）

部隊長会議でどうやったら副団長イトウヅアに領いてもらえるのか、本当に分からなくて途方に暮れる。つつい脳裏に浮かべたライバルからさえ鼻で笑われた気がした。

「シャニー、元氣出して」

心地よい空旅のはずが、どうしても口元がへの字に歪んでしまうシャニーへ、レンが天馬を寄せて何とか慰めようとしていた。

あんな怒りのぶつけられ方をしたら、自分ならその場で座り込んでしまうかもしれない。リーダーが受けた仕打ちに銀の瞳が心配そうに揺れる。

「あんな言い方しなくたっていいと思うッスよ！」

静かに慰めるレンとは対照的なミリアのハッキリとした怒りが、あんなに距離が離れたところを飛んでいるのにまっすぐ聞こえてくる。

ミリアにはチームで頑張っている自信があった。現場は必死に動いているのに、それを理解しようとしないう上層部が悪い。それなのにリーダーが罵声を一身に浴びせられるのは納得できなかつた。

三十分前——

ミリアたちは普段通り任務を開始していたが、今日は何だか空気が違う。リーダーが戻ってきたら途端に部隊が明るくなって、村人た

ちの反応が少し違うように彼女には思えていた。

誰に対しても太陽みたいな笑顔を振りまいて、周りを明るくしてしまおう。リーダーの天賦の才能を羨ましく見ていた時だった。ずんずんその背中に迫る男性が視界に入ってきた。なんだか嫌な予感のする荒い歩調。

「おい、あんたがこの部隊の責任者だったよな？」

乱暴な声が背後から囁みついて、シャニーから一瞬で笑顔を吹き飛ばした。

何事かと驚いて振り向いた彼女の前には、明らかな怒気でジリジリ爆ぜるきつい眼光があった。水の中へ黒いインクを垂らしたように心の中にわつと不安が広がっていく。

「はい、そうです。シャニーって言います」

素直に答えた途端、宙を浮く感覚に体がつんのめる。

「うわっ?! な、何? 何ですか?!」

「ちよつと来い!」

「ま、待って——」

「ごちやごちや言わずに来いって言ってるんだ!」

いくら騎士として鍛練を積んでいると言っても、体格差を簡単には覆せない。

そろそろ十六を迎えようかという華奢な乙女を、壮年の男性が腕の力に任せて引っ張っていく様は異様だ。

相手は村人だから手荒なことも出来ない。シャニーは為されるまま、不安になる心へ己の誓いを言い聞かせながら男性の後ろについていく。

きつと何かの苦情。それ自体はもう慣れている。騎士団の代表として村を訪れている以上は、顔をまっすぐ見て、全部受け止めないといけない。それが、民の声を聞き、寄り添うと言う意味。

ようやく男性の足が止まり、掴まれていた腕を乱暴に放り出された。

「あんた、ここで俺たちに何て言ったか覚えてるか？」

握りしめられていた場所が赤くなっているのを擦る余裕もないま

ま、男性に指された先を見て、口元が歪むのを堪えることで精いっぱい。

男性が何に対して怒っているか察したシャニーだったが、目の前に広がる何も無い空間は、それが答えであり彼女の胸を締め付ける。

「はい。貯蔵庫を作ろうって」

「いつになったらできるんだよ？　なあ？」

食い気味に怒りをぶつけられては、シャニーも簡単に二の句は継げない。ようやく追いついてきた仲間たちがシャニーの周りを守るようにして集まってくる。

怒声は彼女達にまで聞こえていたらしい。辛抱ならぬと目が怒るミリアが前に出ようとするのを、シャニーはさっと手を出して止めた。何も言うなど無言のうちに目で指示し、再度男性の目をじっと見つめる。

受け止めるしかない。今回の苦情は他ならぬ自分たちへのものだ。

「あんたが言ったの十月だぞ？　まるまる三か月あったのに動く気配すらない。どういうことだよ！」

十二月は居なかつたから実質二か月。今更になって、空けていた一か月の重みがずっしりとのしかかってきた。真綿で首を絞められるように、あちこちからじわじわ現実が責めてくる。

（三か月もあつて資材が運び込まれる様子も無いんじゃ……怒っても無理ないよね……）

この場所で三か月前、目の前の男性と共に食糧貯蔵庫や輸送ラインの確立を口にしてしていた事を、シャニーははつきり覚えていた。

もちろん、忘れていたのでも、放り出していたわけでもない。むしろ、ずっと考えてきた事だ。どうしたら、この人たちを笑顔にしてあげられるのか……ずっと。

「あたしたちも何とか動こうとしているんです。案件がいつぱいあつてなかなか許可が降りなくて」

どうしても言い訳じみた答えになってしまいが、背後には言いたくて言いたくて仕方ない部下だっている。

十八部隊として初期に企画した大型案件のひとつだった。だが、部

隊長会議では、イドウヴァの辛辣な言葉に槍の如く貫かれていた。

◆  
十月――

「村々でも出来る範囲の事は、彼らにやってもらいなさい」

イドウヴァのヒステリカルな早口がシャニーの説明を遮った。

「で、でも！ 村の人々に出来る範囲とは到底――」

「我々にも時間に限りはありますし、何より資金面を考えなさいと何度言ったら理解するのですか？」

資金――それを突き付けられてしまうと、どうしても言い返せなかった。

戦後の復興途上にある天馬騎士団。財政状況が芳しくないことは理解している。おまけにシャニー自身が傭兵として出稼ぎに出ている分、どうしても踏み込めなかった。お前は稼いでいない癖に――  
――そう言われている気がした。

「まったく。本当に上級騎士としての資質を疑いますよ」

「イドウヴァ副団長、もう少し言葉に配慮してください」

◆

姉がフォローしてくれたが、そうトドメを刺され、剣は折られた。

エンジェルヘイローの前に起案したものだから、輸送ラインの話など、寝言は寝てからにしろと言わんばかりの門前払い。

しかし、そんな騎士団内の話など村人には関係ない事は分かっている。舌打ちされ、怒気を含んだ目で指を突き付けられても、部隊長として今は毅然と受け止めるしかなかった。

「承認が降りるように頑張ります。気にかけてもらってありがとうございます  
ございます」

「しつかりしてくれよ。あんたら騎士は城でぬくぬくしてるかもしれないが、俺たちは明日死ぬかもしれないんだ」

結果が出ていないことを責められるのは仕方ないと割り切れた。

だが、彼らには自分たちが遊んでいるように見えている。そう思うと心を握り潰されるようで、あの場では涙を見せないだけでいっぱいだった。

何度も何度も頭を下げ、絶対に企画を通すと約束してあの場は許してもらった。自分を、仲間を信じてひたすら前へ——ずっとロイにかけてられた言葉を心の中で繰り返しながら。

「あーっ！ 今思い出してもムカつくツス!!」

火を噴きながら鞍を平手で叩いてしまいうくらい、今でもミリアは怒りを抑えきれずにいる。特に最後の言葉にははらわたが煮えくり返って、ルシヤナやレンに腕力で押し込まれていなかったら食ってかかっていたかもしれない。

「ね！ あたしたちだって頑張ってるのにさ」

その怒りに乗っかり、シャニーももやもや腹に溜まったものを吐き出した。これでもかと口元を不満に尖らせたからか、そうだそうだとミリアの眉が更に吊ったのが見えた。

「でも、あの人の言うとおりでだよ」

そう続けたら、ミリアの眉も困惑を含んでハの字になってしまった。

彼女の気持ちも分かるし、同じように悔しい。だけど、騎士団の中の苛立ちを村人にぶつけるなど筋違いだ。一つ吐き出したら、もう終わりにしなければいけない。

「もつと頑張らなくちゃ。よおーし、次行こー、次！」

いつまでもしよけていても仕方ない。部隊に広がる重くて苦い空気を払うように笑って見せたシャニーは天馬のスピードを上げた。

引きずるなど背中が言っているようで、ミリアも深呼吸すると怒りを腹の奥から吐き出してリーダーの背を追う。

凜々しくなったようなリーダーの背中だが、ルシヤナはスピードを上げてシャニーの横につけた。

「シャニー、無理してない？」

「ううん。見習いの時なんかデイクキン師匠にもっとひどく怒鳴られてたんだし。へーき、へーきー！」

「あんたのへーきは信用ならないんだよね……」

「へ？ 大丈夫だって！ だってさ、叱られるって事はさ、あたしたち

の仕事をちゃんと信じて待つてくれてるってわけだし」

年末の事件からようやく立ち上がったばかりで、新年早々これでは心を抉られているに違いないと思った。でも、信じてくれた者のために戦う——幼馴染から返ってきた言葉は強く、ルシヤナも一つ頷く。

口は悪くても、あの男性は自分たちを信じて待つてくれていた。そうシヤニーは感じていた。それに応えられていない不甲斐なさは受け止めるしかないし、応えられるまで戦い続けるしかない。

悲痛を乗り越えた青の瞳は、それまでなかった強さを湛え、まつすぐ前を見据えて小さく笑った。

「同じ怒鳴られるなら、イドウヴァさんにされるよりよっぽどいいさ」顔を見れば怒鳴られている気がする。はつきりとした敵意を含んだ怒りを前に何も言い返せない立場の差。

何より、村人たちは仲間だ。仲間からの苦言なら、誤っている自分を正す大事な宝。だが、イドウヴァの叱責と言うよりただぶつけられる怒りからは何も得られそうにない。

「はは、確かに」

十八部隊が敵視されていることを知っているから、ルシヤナも親友が珍しく吐く毒に苦笑いで返すしかなかった。



数日後

カルラエ城では部隊長会議が開かれていた。

シヤニーは以前折られた剣を鍛え直し、気炎万丈になって計画の必要性を懇々と訴えていた。各部隊の報告は五分ほどと決まっているのに、もう彼女一人で十分以上喋っている。

早く終わりたいとチラチラ腕時計を見下ろす、第五部隊長マリツサの視線はどんどん厳しくなっていく。いつもなら途中で却下を浴びせるイドウヴァも、何故か何も言ってくれない。不自然だと思っていたら、シヤニーが最後まで説明を終えた途端に拍手し始めた。

「シヤニーさん、素晴らしい提案をしてくれましたね」

シヤニーは一瞬戸惑った。どんな叱責を浴びせられるか。ここか

らが本番と身構えていたところに飛んできたまさかの言葉。イドウヴアが自分を褒めてくれるなんて今まで数えるほどしかなかったのに拍手までついている。

「ありがとうございます！」

無意識のうちにぱつと浮かんだ笑顔で一礼したのも束の間、やはりこの人はこの人なのだと思い知らされた。

「では、この案件は第五部隊で処理することにしましょう」

「え……」

どうでもいいから早く終われ……そう天井を見上げて上の空だった第五部隊<sup>マリッサ</sup>長も、思わず椅子を跳ね飛ばす勢いで背筋が伸びて目を真ん丸にしている。

第五部隊は別名『第二の予備』と呼ばれるような部隊で、イドウヴアのお眼鏡に適わなかった者が第二部隊から異動する先となっている。最近ではシャニーの幼馴染セラが八月あたりから移っていた。

マリッサも仕事を振ってきたのがイドウヴアとあっては拒否しようもない。一応彼女はチャンスをくれたのだから。

「十八部隊は案件の掘り出しを続けてください」

「し、しかし！ この案件はあたし達で企画したんです。あたしたちにやらせてください！」

企画が通って心が躍ったと思いきや、またこんなことになってしまいうなんて。

この前はアルマの母の事もあって、企画を通すために無理を呑んだが、そう何度も鼻面を引き回されるわけにもいかない。この企画の裏には、自分はもちろん仲間たちの汗や想いがいっぱい詰まっている。仲間たちの気持ちを考えたら黙って引くわけにはいかなかった。

だが、副団長から返ってきた返事は余りにも冷淡なもの。

「あなた達では経験もないし、企画を実行に移すマンパワーもないでしょう。第五部隊は今空いていますから、リソースの配分を考えれば適当です」

「で、でも——」

「以上。——では、今回は二日後同刻とします」



冷たい一閃によってすべてを断ち切られてしまった。待っていたかのようにぞろぞろ出ていく部隊長達。

為す術なく立ち尽くすシャニーを一瞥すると、マリツサも副団長の背を追って部屋を出ていった。



重い足取りでシャニーが詰所に戻り、扉を閉めてすぐだった。

「ちよつとまたなの？ あのクソババめっ！」

シャニーのもたらした結果は一瞬仲間たちを歓喜させたが、結末を知るやルシャナが言葉も選ばず青筋を立てて怒鳴りだした。

「気持ちは分かるよ。分かるけどさ」

この前も彼女は同じように怒鳴ったからこうなることは分かっていたが、シャニーにはただこの怒りを収めてもらおうと言葉を掛けるしか出来なかった。

「そこまで怒らなくなっていていいじゃん。可決されてあの村にも設置されるんだよ？ 良かったじゃない」

「あんた人が好すぎるよ」

ルシャナはギツと幼馴染を睨みつける。村で罵声を一身に浴びたくせに、何故イドウヴァを庇うようなことを言うのか全く理解できなかった。

この前だってそうだった。信じてくれる人に喜んでもらえたならそれでいい——そう言っていた。聞かされた方が恥ずかしいような事を真顔で言う人間だとは知っている。だが、結果しか見てくれないのは、あの村人の態度でも分かっているはずだ。

「また手柄取られたんだよ？ あの村の人だって、あんたの事を——」

「あたしだって!! あたしだって悔しいよ! でもっ、でもイドウヴァさん相手にどうしろって言うのさ!」

幼馴染にきつい口調で言われて、シャニーは飲み込もうとした感情の塊を抑えきれなくなってしまった。

怒鳴り散らしてからはっとして思わず視線を逸らす。今ここで部隊長と副将が感情に任せたらどうなるかは理解しているつもりだっ

たのに。

人が好いなんて、そんなつもりは全くなかった。人並みに不満を覚えたり、あまりの仕打ちに怒鳴りたい気持ちはやまやまだった。ずっと地下から掘り出させて、肝心の皆へ見える場所だけをかっさらっていくなんて。

とにかく今は……このまま沈黙は良くない。

「そりゃ……あたしだってムカつくけどさ」

切り出した彼女はルシヤナの手を取って笑って見せた。

「でも、信じてくれた人に応えられたんだからいいじゃない。後であるの村に行つて報告してこよう？　そうすればみんな分かってくれるよ」

「ごめんリーダー。あんたの気持ちも考えずに怒鳴つてさ」

沈黙が途切れてルシヤナは謝つたが、これで良いと思つた。時にはこうして感情をさらけ出さないと、また溜め込んでしまつては困る。昔からそういうヤツなのだ。いつでもポジティブで不満を知らず識らずのうちに溜め込み、我慢の限界までなかなか口にしなない。それを吐き出すのは、姉二人のような本当に甘えられる相手だけ。今はそれが一人増えたようだが。

まずはあの村に行つて企画の始動を知らせ、リーダーに余計な罵声が飛ばないようにしてやる事が今は一番の助け。ルシヤナは年下二人を連れて部屋を出た。

シヤニーも出発するべく槍を手を取つた。握る手が悔しさに自然と震えてくる。その時だった。

「ねーねー、そのままヤつちやいなよオ、ホラあ。——意趣返しなら手伝つてあげるよ？　キヒヒツ」

「……ッ！」

またはつきりと聞こえてきた自分の声。クスクスと声に薄ら笑いが滲んでいてシヤニーは顔をしかめた。一か月くらい聞こえてこなかったはずの声は今もケラケラ笑っている。風の精霊セチは一体何を求めているというのか。すうつと深く息を吸い、憧れの人を思い浮かべて声をかき消した。

「ロイ、あたしは負けないからね」

イリアの礎となる自身の軌跡を残す。軌跡を残してきつと彼の許へ帰る。

誓いを胸に、シャニーはぐつと槍を握りなおすと仲間を追って部屋を出ていった。

### 第3話 失った名前

——1月3日 PM8： 38 聖天騎士団管轄領 フィリア

顧客との契約と言って城を抜け出した天馬騎士団副団長イドウヴアは、腹心のアルマを連れて夜の空を駆け抜けていく。

聖天騎士団が治める都市フィリアへと降り立つと、見るからに高潔な造りの店へと寄り道せずに入った。手にはひと揃えの資料。シャニーたちがせつせと作り上げたその企画書は、今日の部隊長会議で承認して彼女達から取り上げたばかり。

個室に入るとやはり煌びやかな調度品が目につく。聖天騎士団は資金があるためかいちいち華やかだ。

「フェリーズ卿、あの時は大変申し訳ありませんでした」

先に到着して食前酒を楽しんでいるフェリーズに改めて頭を下げた。あの小娘たちが、開拓事業を嗅ぎまわっていると分かっているが止められなかった事を。

（だからどうにでも始末できる傭兵期間中に、さっさと殺してしまえば良かったものを……）

今も気だるそうに天井を見上げるソルバーンを横目で睨む。この男は気が乗らないと言って始末を拒んだだけではなく、ヴァルブルギスがシャニーを捕縛しようとする場を引つ掻き回したというのだから全く手に負えない。

「なんの。いいものを見せてもらえましたよ。『妖精』はお元気ですか？」

結果、よく無事に帰ってきた……とも言えば良いのか。まさかフェリーズがあの小娘に興味を持つてくれるとは。

何をそんなに買っているのかは分からないが二つ名まで授けて、処罰していかないか探りを入れてくるくらいだ。

筆頭騎士ヴァルブルギスと互角の戦いをしたとは聞いていた。あのイリア最強と呼び声も高い『魔女』相手に、だ。副団長の自分をもつてしても、真つ向から挑んだら勝てるとは思えない手練。今でも信じられないが、あの『魔女』で止められないのなら、尚のこと傍に置い

ておきたくない。

「ええ。あの時にお引渡できれば良かったのですが。私の力不足で……汗顔の至りにございます」

「いえいえ。あれで良かったと思いますよ。手に負えない状態で渡されても、私共も鎖で繋いでおくわけにもいきませんから」

どうせなら彼が興味を持っているうちに、高い移籍金を頂戴しつつ処分しておきたかった。残念ながらちゃんと調教してから引き渡せということか。そんな事をするくらいなら、こちらから金を払ってでも放出したいくらいだが、団長がいる間はそれもできない。

そもそも、あの手合いがそう簡単に大人しくなるとは思えない。あの女の娘なのだ。血は争えないとまざまざ見せつけられてきた。どうにも視界の中を邪魔に飛び回る姿は『妖精』そのもので洒落にもならない。

それもこれも、計算が立たないこの男のせいだ。再びソルバーを一瞥する。

「ま……ありやあしばらくはダメだろうな。あんな拒絶してるんじや怒って当然だろう」

今回もどうやら彼は乗り気ではないらしい。いつもの気だるそうな口調のまま、訳の分からないことを言っている。とにかく、殺る気が無いことだけは分かる。彼が「喰う」ならもつと目が爛々としているはずだ。

視線に気づいたか、フェリーズが即警告を発してきた。

「それに……彼女の働きぶりは天馬騎士団であるからこそ輝く。私はそう思います。よくお聞きしますよ。村々を飛び回って彼らの救済に当たっているとか。素晴らしい。さすがにあの血筋の方ですね」

腹立たしい限りだ。天馬騎士団内ではまるで評価のない第十八部隊だが、テイトがイリア連合会議で宣伝するものだから他の騎士団にも存在が知れてしまっている。

こうなっては、そう簡単に始末するのは難しい。『妖精』といい、『疾風』といい、そしてあの『伝説』といい……どうしてあの家系は邪魔する事しか能が無いのか。

イドウヴァはギリつと怒りを噛み砕いたが、すぐにふつと笑って見せた。

「確かに……彼女たちがせつせと情報を集めてくれますから、とても助かりますよ」

掌で踊っているとも知らずに、企画が通つたと今頃小躍りしているのだろう。

シャニーたちが企画書にまとめた鉄路ルートは、組織にとってこれ以上ない重要な情報だった。これだけしつかり集めてあれば色々浮き彫りに出来る。

企画書の中に描かれた地図を見下ろしてイドウヴァも、そしてフェリーズも不敵な笑みを浮かべていた。



「むぎやく〜！ なんだか世の中おかしい気がするう〜」

詰所にシャニーのボヤキが響く。髪をくしゃくしゃにかき乱して天を仰いだ。

「こんなの世紀末……あれ、始まったばかりじゃん?! うそくん」  
天馬騎士なのに、なんでこんな地べたに座っているのだろう。大空を駆つてどこまでも飛んでいるのが本来のはずなのに。

だが、こうしてまとめないと、せつかく集めた皆の想いを騎士団に伝えられない。

今日もシャニーは嫌いな机に向かい、企画書づくりに紙へカリカリ走らせる。最後まで書き終えるとペンをポンと放り出した。

「はあく終わったあ。よくガンバったぞーあたし！ ふい〜。休憩、休憩〜つと」

ようやく解放され、天馬が飛び出すように椅子を跳ね飛ばす勢いで立ち上がった。大きく伸びをし、顔を解放感でくしゃくしゃにしながら詰所を出る。こう机に座りっぱなしだと体中が固まってしまいうでいけない。

気晴らしに向かったのは室内稽古場。腕や足に腰と入念なストレッチでほぐし、もういいだろうと左手が剣を握った時だった。不意

に部屋へ入ってきた声に呼び止められた。

「よう、シャニー。久しぶりだな。恋人とのバカンスは楽しかったか？」

剣を鞘に戻して振り向いた先にいたのはアルマだった。第一部隊で仕事に忙しい彼女と会うのはいつぶりだろうか。

でも、久しぶり——などと声をかける余裕はシャニーには無かった。ジンジンと頭のとっぺんまで血が湧いてくるのが分かって思わず視線を逸らす。タイトに聞かれたときよりもさらに動揺して、顔はもうトマトというよりサクランボだ。

「な、なんでアルマまでそれを……」

「噂好きはどこにでもいるもんでね。うちのエダ先輩とかな」

エダと言えば第一部隊のムードメーカーで大の噂好きだ。

（エダさんってミリアとも仲が良かったっけ。うわあ……そういうことかよお……）

顔の広いエダに話が回ったとしたら、もうオシマイだ。ますます顔に血が集まってきた破裂してしまいそうだ。

そんなシャニーにアルマが両手を広げて呆れて見せたのは、彼女の狼狽ぶりだけではなく、行動がバレていないと本気で思っていたいそうだからだ。

あれだけ好きだ、好きだとオーラを出しておいて、何も無いなどと言ったところで誰が信用するものか。ロイから手紙が頻繁に来るようになってから、本人が自覚するより先に周りの方が変化に気づいて噂し始めていたというのに。別にエダから得意げに話を聞かされなくとも、シャニーが南方に行つたと聞けば誰だって意味は分かる。

「そんなことより」

別にこんな話で親友をおもちやにしに来たわけではない。すぐに話を変えた。

「たまには一緒に稽古しないか？」

「いいね！ やろー稽古！ うん、是非するべき！ 待ってて、武器取ってくるから！」

さっさとこんな話はぶった斬るに限る。渡りに船の話にシャニー

は拳を突き上げ、くるりとアルマに背を向け歩き出した。そうで無くとも、アルマから稽古に誘われたのなら断る理由なんて無い。彼女はふうっと額を拭うと武器庫へと入っていく。

その彼女らしくない行動にアルマは怪訝な眼差しを送っていたが、部屋から出てきたシャニーが手にしているものを見つけると、疑念はますます膨らんだ。

「お前、得物はどうした？」

剣ならここにあると言わんばかりに腰の方に目をやるシャニーに呆れながら、彼女が右手に握る槍の穂先を自身の槍で突く。

ようやく質問の意図を理解したのか、ふいにシャニーの顔が曇った。

「うーん。……ちよつと剣の気分じゃなくつてさ」

「何だと？」

「アルマもあるでしょ？ 甘いお菓子食べたい時と、塩味のお菓子な気分の時！」

「甘党のお前にそんなのがあるのは初耳だ」

どうしてもう少し、「そうか」と言って貰えるような気の利いた嘘を言えないのだろうか。気分でないクセにこの場へわざわざ帯剣してきて、声を掛けるまでその柄に手をかけていた人間のセリフではないだろうに。

顔に浮かんだ明らかにならなく引きつった笑顔で、さあやろうと構えを取られても何も面白くない。

「なんだ……せつかく風の妖精のお手並みを拝見できると思ったのに」

天馬騎士なのだから槍を扱えること自体は驚かないが、シャニーの場合はあれだけの水準の剣があるなら槍など持つ必要は無いはずだ。

それだけで本気では無いと分かる態度を見せられては、一度石突を突いて真上を向いた穂先を再び構える気など起きない。見たいではないか。異能を解放した全力の剣を。

思わぬ無茶を要求され、シャニーは目を真ん丸にした。

「なんでそれを？ 誰から聞いたのさ？」



どうしてあれもこれも、アルマは知っているのだろうか。ロイの話はミリアから広がってしまったのかもしれないが、この話を十八部隊の誰かが外に漏らすとはとても考えられなかった。

アルマからその質問への答えは返って来ない。早く抜け——目が腰で大人しくしている剣を見つめている。

「セチの風は穏やかな風。だがお前の風はブリザードのごとく苛烈と聞く。ぜひ見てみたい」

ドキツと心が締め付けられる。あんなものを見たいなんて、アルマが何を考えているのかサツパリ分からなかった。一体どこまで自信家なのか……付き合う側は堪ったものではない。シャニーは即、首を何度も横に振った。

何とかものにしようとして一月に入ってからずっと稽古の中で試しているが、それは一人稽古だから出来る事。自分でもどうにも出来ない力を親友に向けるなんて恐ろしくて考えたくもない。

「ごめん。あれは使いたくないよ。あたしがあたしじゃなくなっちゃう。あれはあたしじゃないんだ」

「剣は「たらしめるもの」じゃなかったのか？」

あれは自分ではない——なるほど、ソルバーンの言う通りか。アルマにはピンと来た。これでは「怒」っても仕方ないだろう。

だがこのまま、そうかと言って引き下がるのも面白くない。刀身に自身を映して、これぞ自分たらしめるものと言ってきた彼女が、映った自分を自分ではないと視線を逸らしているのだ。

「逃げるなよ」

挑発されて、眉がぴくつと動いたのがシャニー自身もすぐ分かった。

「逃げてるわけじゃ……ないし」

新年早々姉に誓った。逃げないと。そこをピンポイントに、おまけにライバルと認め合って鎧を削る相手に突かれてはさすがにプライドに障る。

彼女が槍を壁に立てかけ、静かに剣を抜く姿をアルマは待ちきれない。そうだ、このシルエツトこそ自分の知る彼女の姿。

(ふふ、早く見せてくれよ。お前のシルフィード・ダンスをさ)

ようやくその気になったライバルを見つめるアルマの口元に、不敵な笑みが浮かぶ。シャニーは目を閉じて神経を集中させ、少しずつ異能を解放しているらしい。

うつすらと彼女の周りから溢れ出し、ゆらゆらと周りを揺れさせる黎<sup>あおくろ</sup>い炎からも分かる。セチの清い風とは違う、何か重い黒く濁るものを炎の中に揺らめかせて……その色が濃くなるとシャニーの眉間にしわが寄った。

「ツマンないなあ。早く使っちゃいなよ、ホラア〜？　なくんでいっつもガマンするのお?？」

意識を黎い世界へ吸い込まれそうになって、恐ろしくなったシャニーは異能を引っ込めた。途端だ。頭へ直接響いてくる自分<sup>セチ</sup>の声。毎回そうだ。稽古でもこの辺りまでは開放できた。でも、恐ろしくなってやめようとする、聞こえてくるのは不快を露にした自分の声。

「ウルサイッ、我慢何てしてない……」

それをされるとますます恐ろしくなって、集中がプツンと切れて揺らめいていた彼女の髪はふっと静かになった。ケラケラと嘲笑を浴びせてくるのは自分の声。

「おいでよお〜、楽になっちゃいなって？　きつとタノシイよ？　アハハッ……」

もう少して楽園への扉を破れそうなところで、いつも閉ざしてしまいう臆病者。そう笑う声が何度も囁いて誘ってくる。顔をしかめていたシャニーはついに剣を放り出し、頭を抱えてうずくまってしまった。

「開放すればいい」

アルマは彼女の許へ歩み寄り、放り出された剣を手にとると、その柄をしっかりとライバルの手に握らせた。逃げるなど。

「それもお前。自分を偽り、偽りの自分を仲間に見せ続けて満足なのか?？」

見上げた先にあったアルマの目にシャニーは唇を噛んだ。どこま

で厳しいのだ、友は。助けて欲しいと目で訴えてみるが、アルマのキツと睨んでくる眼はそれを許してはくれない。

シャニーにとっては、今までの自分こそが本当の自分だった。こんな、どこから湧いてきたかも分からないような力が本当で、今までが偽りだったなんて言われて受け入れられるはずも無い。

今はただ、この得体の知れないものをどうにかしたい。昏くぽっかり空いた黎の世界に呼ばれたくない……ただそれだけ。

「そうそう、その子の言うとおりだって！ 一緒にアソぼうよ！ 私 はあなたを助けたいんだよおく?？」

内から外から、我慢しないで扉を開けてしまえと言われ、どうすればいいか分からなくなってきてしまった。

「ねえってば、あのクソババにいつ倍返しにしてやんの？ ウズウズしてんの、知ってんだよおく？ キャハハッ」

追い討ちをかけてくるセチの甲高い声に頭を揺さぶられる。言われたとおりにしてしまえば、自分が何をするか分からない恐怖だけが剣を納めさせた。欲しかったのは、仲間を守るための力だったはずなのに。

「あなたたちには……あたしの気持ちは分からないよッ」

このままここにいたらどうにかなくなってしまいそうだ。内からの声はどうしようもないが、今はこの場から逃げるしかなかった。誓いに反すると頭で分かっている、それでも。

シャニーは思わず駆け出して部屋から飛び出した。

「……自分でなければ、お前は誰なんだ?？」

拒絶し自己を失った背中が消えた先を、アルマはじつと睨むように見据えていた。

その時だ。大柄の男が突然にその視界に入ってきた。

「残念だったな『滅蝕』、喰い損ねたか。ま、ありやしばらくかかるぜ。諦めることだな」

よく言う。どうせこの男も、あの風の魔力を嗅ぎつけてこの場に喰いに来たと決まっている。

目の前で不敵に笑うソルバーンを睨んでいると、それまでの気だる

さは別人のように彼の目つきが変わった。こんなところで騒ぎを起こされては困る。アルマは槍の穂先を下げると、視線を切つてさつさと部屋を出ていこうとする。

「お前は使わねえのか？ 目の前に”餌”が現れたんだぜ？」

好戦的な性格もここまで来ると病気だ。結果が分かっているだろうに何故この男はこんなにも楽しげなのか。

「もちろん、いずれあなたにもお願いしますよ」

「今からでもいいんだぜ？」

ニツと吊り上がる口元は、明らかに今すぐおっぱじめたくてうずうずしている。大方、『妖精』がまた尻尾を巻いて逃げてしまい、興奮めな気持ちを紛らわせたいだけに決まっている。彼女とは違い、開放に何のためらいもない魔人が闘気に辺りの景色を歪め始めているが、アルマは手を振つてさつさと袖から捌けた。

「いいえ、もっと『舞台』が揃ってからにしてください」

アルマにとつてはまだ舞台上上がったつもりでもなかった。まだまだ、舞台が整うのはもつと先の話。少なくとも、邪魔者を一掃してからでなければ始まる事さええない。

その始まりへと向かうべく再び踏み出した彼女の足を止める声。

「お前、その力どこで手に入れた？ この大陸じゃねえだろ？」

ソルバーンは好奇心の塊をニヤニヤと赫髪鮮やかな背中へ浴びせる。

力そのものも大いに興味があるが、それ自体よりも彼の興味を刺激したのはその入手先だ。一介の天馬騎士が手に入れられるような力ではないはずだ。少なくとも、人が趨勢を握るこの世界では。

「それを知って……どうするつもりですか？」

アルマは言葉を濁した。友でもない人間に教える義理も無いし、こうして興味を持つて周りを魔人がうろついてくれているのがあれこれ都合が良い。

「自分も欲しいって言うのは無理ですよ。もうあの人は討たれたみたいですから」

もうこれ以上語ることは無いと、アルマは再び歩き出して稽古場を

出る。その眼はまっすぐ前を見据えて、逃げていった妖精を追いかけていた。

## 第4話 天馬と射手

——1月9日 AM7:30 カルラエ城

一日を始めるべく郵便部隊が帰ってくる時刻は鶏より正確だ。彼らは毎朝、南の関所ダッドフィヤ西の国境レーミーに集まった手紙を収集してくる。昇る日差しを浴び、青空に映える光景はカルラエの名物となっている。

今日もエトルリアから来たたくさんの手紙が団長室へと運び込まれてきた。この山をかき分けるのがタイトの日課。大半は傭兵契約やそれに付随する挨拶など定型のもの。

(これでもない、こっちも違う……)

仕事を後回しにするつもりは無いのだが、毎回こうなってしまう。目当ての手紙はどこにあるのだろう。最初は丁寧な手に取った手紙を端へ積んでいたが、次第に山は低く広がりだした。

だいぶ辺りに手紙が散乱し始めた頃、やっと見つけた顔に慎ましやかな笑みが浮かぶ。

待ちきれない気持ちを抑えるように、胸元に手紙を抱きしめて窓辺へ身を移す。

「ふふつ、クレイン様も相変わらずね」

封書から取り出した便箋に目を下すタイトは、すぐ手で口元を覆って小さく笑った。よくこんなストレートな言葉を最初に持つて来られるものだ。だけど、もう恥ずかしさはない。いつも手紙の始まりには愛の言葉があり、直接会った時にも目を見てそう言ってくれる。

それにしても、今日はいつもより少し手紙が短い気がする。

(お忙しいのかしら。ご無理しておられなければいいのだけれど……)

どんな返事をしようか考えを巡らせながら手紙をしまい、机の上に散らばった仕事を整理しようとした時だった。

「あれ……何かしら、これ」

他と違い、何の飾りもない白地で小さい封筒。何か、もつと飾った外装の中に入れておくような、すつぴんのままの封筒は逆に目につい

て思わず手に取った。

中を見てみると、エトルリアの貴族がよく使う傭兵契約の締結依頼書ともう一枚何か入っていた。手書きのそれには何やら地図っぽいものと、あちこちアルファベットが書いてある……。どうやら暗号らしく、右下の署名を見て彼女はふっと笑った。

しかし、もう一度契約書に目を移し、面会希望期日を確認すると彼女には珍しく口がぽかんと空いた。——1月9日 17:00

その時間はちょうど、部隊を率いてリキアへの営業に出ている時間。大陸の正反対では、魔法でも使わない限りどうにもならない。しばらく窓の外を見つめて眉をハの字にしていた  
(行きたい。だけど、仕事が……)

この前会えたのは八月くらいだったから、もう半年近く顔を見られていない。彼に気持ちを伝えよう、伝えようと思いながら、こんなに時間が過ぎてしまった。年度末の三月までにはと思っていたのに、気づけばあと二か月しかない。焦がれる気持ちと使命感が振り子のように揺らぐ……その時だった。

「第十八部隊長シャニーです。入っちゃいまーす」

ドキツとして視線をやると妹が手を振りながら部屋に入ってきていた。そう言えば妹を呼んでいた事を忘れていた。エンジェルヘイローの進捗をイリア連合会議で報告する為の準備を指示しようとしていたのだ。

今日は叱られるわけではないと分かっているのか、いつもしおしおと小さくなつて入ってくるシャニーの顔はニコニコだ。

その天真爛漫が見つけて欲しくないものに早速目を付けて小走りしてくる。

「ねえねえ、なあに、これ！」

「ああ?! ちょっと!!」

ちよいつと手紙を取り上げられた。どういうすばしっこさだろうか。伸ばした手をひらつと躲され、もう向こうまで逃げ出している。

戦利品を頭上に掲げていたシャニーが手紙に目を落とすなり、ニヤリと小悪魔な笑みを浮かべてきた。こういう時だけはどうにも勘が

鋭くて敵わない。

「お姉ちゃん。クレイン様にいつ気持ち伝えるのさ?」

「えっ?! い、いえ。それは……」

「だって、春に退団するって言ってたじゃん」

何故だかシャニーがズバズバ攻めてくる。ずっと悩んでいた事を、まるで聞いていたかのように問われて言葉に詰まった。

おまけに、最初はイタズラ好きな笑顔をしていたシャニーが、言葉を詰まらせた途端に真剣な顔になるから思わずたじろいだ。

「そ、そんな事、分かってるわよ。でも、仕事が忙しくて——」

「そんなのダメだよ!」

ふいに口を突いて出た言い訳が、妹の更に強い言葉で跳ね飛ばされた。

「会えるときに会わなきゃ、いつ会えなくなるか、分かんないんだよ?!」

伝えたいこと、伝えられなくなっちゃうんだよ!」

まさか妹に説教されるとは思わず、何も言えなくなってしまった。

今日のシャニーは何か目つきが違う。まるで部隊長会議でイドウヴアと戦っている時の様な目が至近距離で真っ直ぐ見つめて叫んでくる。

「クレイン様、呼んでるじゃん!」

そんな事は分かっている——そう言いかけて飲み込んだ。

団長である以上、仕事は何より最優先だ。私事に現を抜かしている暇など無い。だけど、クレインをずっと待たせているのも事実だ。

仕事も、クレインも、どちらも大事だ。一体どうすれば良い……。  
どンドン俯く視線。

「大丈夫だって! ヘーキ、ヘーキ! ちょっとくらい羽休めたってバチ当たらないよ!」

その時だった。まるで心の声を直感で覗いたように元気な声で励まされた。見上げればシャニーが太陽のような笑顔で手紙を返してくる。この天真爛漫が羨ましい。彼女のように恋人の許へ飛んでいけたなら……いや。

おかげで、何か鍵が外れた気がした。



(……私だって……。——伝えたい)

一度は首を横に振ったテイトだったが、一生に一度だけの横着と誓って部屋から飛び出した。

「珍しいね。団長が予定を変えるなんて」

その足でテイトは副将ソランの許へ駆けていき、無理を聞いてもらっていた。

こんな直前に予定を変えるなど今まで無かったからか、ソランが驚きを口にして何があったのかを暗に聞いてくる。幾多の戦場で背を任せてきた仲でも、男に会って来るなどはさすがに言えない。

「エトルリアは最大の顧客だしね。優先しないと」

なんとか上手く言ってごまかした。言ってから、自分は悪い女だと自己嫌悪に陥る。何だか妹の気質に少しずつ影響されている気がする。

「リキアはイドウヴァさんの配下の部隊も活動しているし、いいんじゃない」

ソランからのフォローに何度も頷いて足早に部屋を出ようとしたのだが、「テイト」背後から呼び止められた。

「頑張つてよ、みんな応援してる」

わつと恥ずかしさと罪悪感が一気に湧き上がってきて、ごくりと息を吞んで動けなくなってしまった。背中に熱した石でも迫っているようにジリジリする。こうあっさり見切られるなら最初から白状しておけばよかった。

観念するようにソランの許へ戻ったテイトは彼女の手を取って静かに感謝を伝え、ソランも頑張れと団長の肩をくるつと回してドアの方へ身を向けさせると、背中を押して見送るのだった。



——PM3:00 エトルリア王国 王都アクレイア

冬の太陽は弱くて、まだ三時だというのにもう一日が終わりそうなほど陽射しは儂げ。

(お願いだから、まだ落ちないでね)

そう願いながらタイトは降り立ったアクレイアの街を歩いていた。アクレイアはある程度歩いたことがあっても、夜になると景色は変わってしまう。迷子何て御免だ。

クレインとの待ち合わせの時間は五時。まだまだ二時間も余裕はあるはずだが、問題は手にした暗号だ。こうして遊び心を入れてくるのは茶飯事。しかし、今回は結構凝っていて一筋縄でいきそうにない。

「ペガサスだから……この道を……突き当りまできつと真つ直ぐね」

どうやら地図自体はアクレイアの街で、書かれているアルファベットがチェス駒の頭文字だとは察しが付く。以前に彼に教えてもらったから駒の動かし方は分かる。直感を信じて裏通りを真つ直ぐ歩いたら、広い表通りに突き当たった。地図を見下ろしてみると、ちょうど次の指示がある地形と同じ。

「あつ、やったわー！ よおし次は……」

ふいに高揚感が湧いて、右手でぐつと小さくガッツポーズをとってしまったからハツとする。まんまとクレインに乗せられた気がして、したり顔を決める彼が脳裏に浮かぶ。

「べ、別にそんなつもりじゃないわよ」

思わず誰もいないのにプイツとして見せた。それでも、この指示の通りに行かなければ彼には会えない。むうつと口を尖らせながらも指示に頭を捻る。

「これ以上真つ直ぐは無理だわ。……あ、クラスチェンジするのね？」

日も落ちかけた地理に昏い街で、こんなにも頭を使うのでは焦りが募る。何とか難題をこなし続けて、中央広場から少し外れた噴水まで辿り着いた。ここは公園になっていて開けている。この時間だと、左右どちらもアベックばかりだ。そんな場所に自分はぽつんと独り。

「もう、クレイン様だったらずいぶんと手が込んだことを」

彼らを羨みながら地図を見下ろす。記されているのは「K」……どの方向にも進める駒だ。この最後の「K」がどうにも分からない。この開けた公園で一体どっちに行ったらいいのだろうか。

「中央に戻るのかしら……いえ、引っかけかもしれない。戻るのかも……」

一歩踏み出しては止め、振り向いては戻り。そんな動きをするティトを、行きかうアベックは不思議そうに眺めて去っていく。恥ずかしくて頭がじんじんしてくるが、下手に動けば今までが台無しだ。途方に暮れていた時、ふいに声をかけられた。

(も、もしかしてクレイン様が?!)

「君、道に迷っているのか？ どこに行きたいか言えば案内するが？」  
振り向いた先にいた男性に思わず凍り付いた。どうやら親切心からどこかのアベックが警備兵に声を掛けてくれたらしい。

「い、いえー！ 大丈夫ですから!!」

こんな地図を見せてどうしましょう？ などと言えるはずがない。思わず当ても無く飛び出した。こうなったら八方向、全部試してみるしかない。次の指示はもう無いから、これさえクリアしてしまえば……。

——それから一時間経ったが、ティトはまた噴水の前にいた。

早く会いたい。優しく笑うクレインの顔が思い浮かぶが、慣れない街で心細い思いをさせる微笑みがこの時ばかりは意地悪しているのかと思うくらいだった。

「はあ……。クレイン様ったら酷いわ……。……あら？」

思わずクレインへ愚痴をこぼしながら彼からの手紙を見下ろす。目についたのは手紙の最後に記された彼のサインだ。クレイン……

「——ッ！ これよつ、きつとこれだわ！」

電撃が走ったように繋がって、ティトは空を見上げて駆けだした。視界の先には残照を浴びて陰影濃く浮かび上がる大きな屋敷。あの方角に向かえば、きつとクレインに逢える。不思議な確信がいつしか彼女を全力疾走させていた。

「……って……」

その「K」がキングではなくクレインのイニシャルだと分かったのは待ち合わせの三十分前。一か八かでリグレ侯爵家の屋敷を目指して北進してみると道はなくなってしまう、突き当たった場所を見あ

げて思わずぼかんとしてしまう。

そこは以前クレインとお茶をした大衆食堂。もう夜の営業時間に入っているからもはや飲み屋だ。荒くれも集まるこんな店にクレイン一人で大丈夫だろうか。心配になって一歩踏み出すと、中から手を振る金髪の男性が見えた。

「意外に早かったね。さすがタイトだ」

店の外に出てきて迎えてくれた笑顔は思い描いていた通りの優しさを湛えていて、安堵が一気にタイトの顔に広がる。いくら何度も来ているとはいえ、この時間にはつきりとした目的地も分からないまま広大な街を歩くのは不安で仕方なかった。

「もう、クレイン様、もう少し……」

文句の一つでも言っておこうと切り出したのだが、口元を塞ぐように人差し指を立てられてしまう。

「タイト、もう忘れたの？」

彼が言わんとしていることはすぐに分かった。体に染みついた癖はなかなか直せないが、今日はタイトも頑張ってみることにした。もう、自分の中で答えを決めて覚悟してこの地に飛んできたのだから。

「もう、クレインがいけないのよ。こんな難しいことするからー」

不安で、不安で仕方なかった。特に最後のKで一時間以上同じところをぐるぐるとアクレイアの街を彷徨っていた時は、何度彼の名前を心の中で呼んだことか。

でも、良かった気がする。あの一時間で気持ちはよりはつきり整理できたつもりだ。自分が心から、彼を求めているのだと。

反応は想定内だったのか、クレインは笑っている。

「アクレイアの街並みを覚えてもらうにはちょうどいいかなと思ってね」

「おかげで宮殿とこのお店と、リグレ侯爵家への道はもう間違えない自信があるわ」

随分と暢気なことを言う。あのまま迷子になって会えなかったらどうするつもりだったのだろうか。

きつと、彼は迎えに来てくれたに違いない。もしそれなら、それで

も良かった。いや、むしろそつちの方が良かったかもしれない。ちよつとくらい彼にも心配してもらえないと何か不公平だ。

どうして年は一つしか離れていないのに、こんなにも余裕があるのだろうか。肩肘張ってしまう自分を優しく包むこの余裕の前では、凍てつく心もすつかり解けてしまう。

「もう不安にはさせないよ。ぼくについてきてくれ」

クレインはさつとタイトの手を取ると店に背を向けて歩き出し、貴族街へと戻っていく。今日の彼女なら、きつとこの前のようにはならない。しつかり握り返してくる手にそう確信していた。



美しい夜景を前にグラスを交わし、落ち着いた雰囲気の中で互いを労う。

「お仕事大変そうね。なかなかうまく進んでいないみたいで」

「ああ。ちよつとした局面を迎えているな。難航していてね。帰宅できない日も多い」

着いた先は貴族街のレストランだった。最上階の窓辺、アクレイアの都市を一望できる席からの景観は、残照の空と灯が浮かび始めた街のコントラストが美しい。

だが、二人の視線は正面の景色には向かず、肩を横に並べてずつと喋っていた。手紙で互いの状況は連絡しあつて来たが、目の前に疲れた顔があるとやはり心配になる。

「だからこうして、君の声を聞けるとそれだけで癒される思いだ」

もつと近くで見せてくれ——そう言いたげに身を乗り出してきて微笑むクレインの視線が近づいてくる。タイトは胸が弾けそうになるが、彼の癒しとなるならと今日は視線を逸らさないようにしてみる。それでも、やはり不自然でどんな顔をすればいいのか分からず、結局いつもと同じようにしてしまった。

そんな彼女を見つめるクレインの笑みはさらに柔らかくなつていく。慎ましさも、不器用さも、全てが愛おしい。

「イリアの方はどうなんだい？ 最近鐵路が敷かれ始めたと聞いた

が」

一報を聞いた時はクレインも驚いた。それまで具体的な動きが何も聞こえて来なかったイリアから届いた明確な進捗。

広大なイリアを鉄路で結ぶ計画の発起が天馬騎士団だと聞いて、クレインは自分のことのように嬉しかった。テイトの苦労が、ようやくイリアに軌跡として残ると思うと祝福せずにはおれない。

「エンジェルへイローね。ええ、村々に物資を届けるための計画を進めているわ」

第十八部隊が作成した企画書。エンジェルへイローはその企画につけられた名前だ。

間伐材輸送用のトロッコを改造して村々へ物資を届ける計画は騎士団間会議にも提出され、天馬騎士団領だけでなくイリア全土への展開を目指すことで合意されていた。

いつもエトルリアの発展を聞いてばかりだったから、今日はイリアの事も聞いてもらえてテイトにも喜色が浮かぶ。

「最近ようやく進み始めたって感じ。国内専門部隊を置いたからやっぱり情報の吸い上げが早いわ」

色々事件も起こしてくれたが、妹は期待以上の働きを見せてくれている。なかなか資金の目途が立たなくて叶えてあげられない案件も多いが、まさかあそこまでたくさんアイデアを出してくるとは予想していなかった。

住民たちから感謝の手紙が届くことも多く、妹の活き活きした顔を見ても第十八部隊以外に配属しなくて正解だったと確信できた。ずっと批判の声に耐えてきた自分の選択を、今なら自信をもって褒められる。

「そうか……。ほくも頑張らねばな」

久しぶりのテイトの嬉しそうな顔を見つめていたクレインは姿勢を整えた。

「エトルリアは今大きな山場だ。一人ではなかなか解決できない問題が多い」

どこかクレインの眼差しが変わった気がして、テイトも自然に背筋

が伸びた。

(何かしら……この緊張感)

視線が合うと珍しくクレインから外し、彼はすでに夜に溶け込んだ街並みを見つめ始めている。

一緒に街並みを見つめてみるが、窓ガラスに映るクレインの顔がどうしても気になる。こういう時、どうやって声を掛けてあげればいいのかだろう。姉のように大きな愛で優しく包むのも、妹みたいになつてくんな言葉と笑顔を振りまくのも自分には難しく思えて、不器用さが嫌になる。

「これからもこういう状況は増えるだろう。いや、これからが正念場かもしれない」

まるで自身に言い聞かせるように語る口調は、はつきりとしていて力強い。

こんな大国で多くをまとめている彼の手腕を想っていると、ふいに手に温かい感触が伝わって来た。びっくりして彼を見上げると、クレインがすでに身を乗り出してきて両手をしっかりと握られていた。

「テイト、ぼくの傍で支えてもらえないか？　もう、手紙だけでは我慢できない」

「クレイン……」

じつと見つめて離さない瞳が訴えてくる。君が必要なのだと。あまりに急な言葉に心の中は幸せと驚きに一杯で、今にも倒れてしまいたいそうだ。

「君の立場はよく理解しているつもりだ。でも、ぼくはもう君がイリアに帰る姿を見送ることが辛くて堪らないんだ」

クレインにとっては、いつも心を引き千切られる思いだった。戦いの場に戻る空色の髪が、蒼穹の向こうに吸い込まれて消えてしまうことが。いつも、このまま二度と会えなくなってしまうのではないか……そんな不安に駆られてきた。

もうこの関係が続けて一年以上。厳しさを増す政治の混乱の中で、傍にいてくれたらと思う夜が今では毎日のように襲ってくる。もうこの掴んだ手を放したくない。

「これからの困難も、君と二人なら乗り越えていける。そう、ぼくは確  
信している。ぼくを支えてもらえないだろうか？　ぼくも君の事だ  
けを見つめて、幸せにすると誓う」

はつきりと瞳を見つめ、強い言葉で君が必要だと訴えられて、どう  
して握られている手を払えるだろうか。

「タイト……良ければ、ぼくを見てくれ」

彼は最上級の言葉を捧げてくれ、仲間も背を押し送り返してしてくれ  
た。そして、あんな難解なパズルを越えてでも会いたいと焦られる自  
分の気持ち——これ以上嘘はつきたくない。

もう何も迷うことはない。引き絞られた彼の思いの丈にもうすつ  
かり射抜かれ、言われるまま彼に身を預けてそっと囁いた。

「私もあなたに伝えようと思ってイリアを出てきたのよ」

本当なら、このまま彼と共にアクレイアの街に消えてしまいたいく  
らい、もう彼の事だけを想っている。クレインが先に切り出してくれ  
て本当に良かった。支えてあげたい、癒してあげたい、不器用でも自  
分に出来る全部で。

「じゃあー」

クレインの驚きと歓喜に満ちた瞳をじっと見つめ、タイトは頷いて  
ありったけの勇気で小さな、小さな声を振り絞った。

「ええ……。よろしくお願いします。クレイン」

もうそれ以上の言葉は二人の間に不要だった。更け行くアクレイ  
アの街並みを見つめ、ただひたすら肩を寄せ合って互いを確かめ合  
う。これから二人で描いていく新たな軌跡の先を祈りながら。



## 第5話 均衡崩壊

「ああ……どうやって切り出せばよいのかしら……」

部隊長会議まであと三十分を切っている。それでも、未だにテイトは皆にどう伝えようか迷い続けていた。

いつもキッチンと準備をして会議に挑んできたが、こんな直前まで固められていないのは初めてで、焦りを抑えらず部屋の中をウロウロ歩き回る。

「出来るだけ手短に……でも、経緯を。いえ、私事なんか詳しく話しても……」

もう決めたことだからその事実を伝えればいいだけなのに、どんな言葉を選んで話をしようか考えを巡らせ続ける。少しでも誤解の無いような形で終わらなければ……。

——1月10日 AM8:00 カルラエ城 第一会議室

時は来た。そろそろと各部隊長が会議室へと入ってきてきて所定の席について行く。

たくさんの資料を机に置き、シャニーは今日も一番乗りで席について戦闘モードへ瞳を切り替える。

（一件でも多く企画を通してやる！）

この部屋でだけは朗らかさは消して、心を鬼に変えると決めていた。

姉が入ってくるのを待っていたら第四部隊長と目が合い、ウインクされた。派閥を越えて、ああして楽しみにしてくれている人もいる。（信じてくれる人達の為にも、勝つまで負けないんだから！）

目を閉じて思い浮かべる。村の人々、姉をはじめとした味方してくれる人や部隊の仲間、そしてロイ……。多くの者へ誓いを唱え、心に宿す青焰を更に強くしてその時を待つ。

だが、最後に入ってきた姉の表情を一目見て、その瞳が驚きに揺れる。いつも硬い顔をしている姉が妙に明るい。

普段なら入室してすぐに議長のイドウヴァに目で合図するのだが、今日のテイトは違った。一度は席に着いたが、すっと立ち上がると

ゆっくり、大きな声で切り出した。

「冒頭ですが、今日は私からお話しさせてもらいたいことがあります」  
改めてかしまる団長に部隊長達がざわめいて顔を見合わせ始める。一体何が始まるのか興味津々の者もいれば、早く会議自体が終わって欲しくてひたすら手帳にメモを続けるもの、隣の部隊長との雑談に興じて話を聞いていない者もいる。

反応は様々だが、テイトは大きく一つ息を吸い込むと、吐き出すように一気に宣言した。

「昨年から団長として率いてきましたが、私は今年の三月をもって天馬騎士団を退団します」

会議室が凍り付く。誰もがテイトが口にした退団の言葉をすぐには飲み込めなかつたらしい。しばらく静まり返った後、一気にざわめきが広がって会議どころでは無くなっていく。

団長の突然の退団はまさに青天の霹靂であり、同席していた総務部長でさえメガネをずり上げて目を点にしている。

(わあ……いーお姉ちゃん……ヤツタんだね！)

シャニーだけがその意味を理解して、顔中の笑顔を姉に送って祝福していた。姉は振り向いてくれなかったが、その横顔は明るく晴れ晴れとしていた。



会議が終わり、驚きの余韻が未だ冷めやらぬ様子の子の部隊長達が一斉に部屋を出て行った。

企画はまさかの十戦全勝だった。余りの隠し玉に意表を突かれたのか、あのイドウヴァがまるで文句を口にする事も無かったのだ。逆に不気味だが、勝利の味は何物にも代えがたい。

何より、今日はそれ以上にもっと祝いたい話があつて、頭の中は歓喜の洪水で大騒ぎ。

「お姉ちゃん!!」

遅れて出ていこうとするテイトを、最後まで部屋に残っていたシャニーが弾けるような声で呼び止めた。彼女は小脇に抱えるファイル

から飛び出してきた資料をばつと空中で掴み取りながらテイトの許へと駆けていく。

「シャニー、今は任務中よ。その呼び方は止めなさいと何度言ったら――」

「お姉ちゃん、ついに決めたんだね！ クレイン様に伝えたの？ お姉ちゃんの気持ち！」

何度言っても、シャニーは騎士団内にもかかわらず姉として呼んでくる。テイトは日課のように彼女を叱ろうと思ったのだが、今日のシャニーはお構いなしに被せてきてあれもこれもと聞いてくる。まるで自分のことのように興味津々。瞳を爛々とさせてくるものだから説教する気が失せてしまった。

「もう少し小さい声で話してちょうだい。恥ずかしいじゃない……」

第一会議室は騎士たちの詰所がある東棟でも一番の奥にある。会議さえ終わればそう人が来る訳ではないが、シャニーの元気な声はメガホンのようなものだ。広い廊下に響き渡る声に、テイトは思わず顔を赤らめて俯いた。

その反応がそのまま答えだと分かったと、シャニーは姉の注意などどこ吹く風。満面の笑みを浮かべながら飛び跳ねだす。

「うわあ！ おめでどう！ 本当におめでどう！ 結婚式とか決まった?? あたしも呼んでくれるよね?! ねえねえ！ お姉ちゃん！」

自分のことのように、目の前で飛んで跳ねて喜んでくれる笑顔が嬉しくてテイトにも笑顔が戻ってくる。確か、以前もこの話で同じように喜んでくれたか。

「そこら辺はまだなにも」

今回も同じ答えしか返してあげられないのが残念だ。もし決まったら一番に招待しようと思える笑顔が次々と聞きたそうに見つめてくる。

「ほら、人の事をあれこれ詮索しないの。決まったら教えるから」

出陣の為か、詰所から騎士たちがぞろぞろ出てきたのが見える。あれだけの耳がある中で妹の声が廊下に響いたらと思うと恥ずかしい。

テイトはシャニーが未だ小躍りしているのを止めさせた。人の喜

びをこんなに祝福してくれるとは本当にいい性格をしている。自分が騎士団にいる間だけでもしつかり守ってやろうと誓う。

「シャニー、あなたも頑張つてね」

今は妹にも良い人がいる。彼ならきつと幸せにしてやってくれるに違いない。

成就することを祈って妹に声を掛けると、彼女はニカッと笑いながら親指を立て、廊下の一番向こうにある十八部隊の詰所目掛けて駆けていった。

普段なら廊下を走るなど追撃するところだが、頼もしい青き騎士の背中を見送る顔は優しく微笑んだままだった。

「貴女が背中を押してくれたようなものよ、シャニー」

彼女が失意の中ロイに会いに行き、帰ってきたときの瞳を見てテイトもまた我慢してきたことが一気に堰を切った。踏み出す勇気をくれた妹に感謝の言葉を贈り、彼女もまた新しい一步を踏み出した。

自らピリオドを打ち、残された時間を決めた。この時間で出来ることを全てこなさなければ。

彼女はすぐに第一部隊を引き連れ、まずはエデツサ城への報告に向かうのだった。



今日のワインはいつもとは比べ物にならないほどに旨い。詰所だろうが、これから仕事だろうが、こんなにもめでたい事を祝わずにどうする。

イドウヴァは第二部隊の詰所の自席で、自身の口紅と同じくらい濃い深紅のワインをグラスに揺らしながらほくそ笑んでいた。

固く閉じたカーテンの隙間から入る零れ日にワインが照らされ、影差す彼女の顔を赤く照らす。

「ふふふ……ようやくですよ。ようやく私の時代が来る」

この野望を抱いて何年目だろうか。このためだけに全てを捧げてきたし、邪魔者はかき消してでも先に進んできた。ユーノはさすがに敵わなかったが、これでテイトが消えればほぼ自動的に団長の座が転

がり込んでくる。あとは残った『妖精』を始末するなり、フェリーズに売り渡しさえできれば基盤は整う。

一層に細くなる目。ワイングラスに浮かべるのはあの憎い青髪の妖精だ。

(親の因果が子に報う……。いえ、貴女自身もよくもまあ散々と……)

——キツチリ、贖つて貰いましょうかね……)

最近急に母親に似てきたあの顔が哀れに思える。親子ともども、散々邪魔をしてくれるとはずいぶん血とは争えないものだ。ならば母親と同じ運命を歩んでもらうだけのこと。あの女も、一人では寂しかろう。

「二年計画が遅れましたが、これでやっと動き出せますよ。我らの『春陽計画』が」

団長の座を逃してきたこの一年間、まともに動けず無駄に過ぎた。思い出すだけでその眉間には深い堀ができ、目じりが吊り上がっている。

計画通りなら今頃基盤の整備は全て終わり、決起しているだろう時期だ。それを邪魔する者が近い未来に全ていなくなる。自然と腹から込み上げる笑いが口の端から零れてくる。

「おめでとうございます。イドウヴァ副団長」

傍らでは、アルマが祝辞をかけながら次期団長の悦に入る横顔へ静かに頭を下げていた。

彼女に返すこともなく吊り上がっていくイドウヴァの口元。この「副」の肩書を背負い続けてはや十二年。あの青髪の母親に仕えるところから始まったこの肩書も、ようやく捨て去ることが出来る。そう思うと吊った口角は限界を超え、快哉を叫び出した。

あそこから、あそこから全てが狂ってしまった。あの女さえ消えれば、団長の座が転がり込んでくる……。踏み外したあの時から。

その呪縛はもう断ち切らねばならない。その為にも、邪魔者には消えてもらうのみ。

「ええ、ありがとう。早速、今夜関係者を集めましょう。アルマ、貴女も来なさい」

ワインを一気に飲み干して席を立ち、槍を取ってアルマと共に詰所を出た。廊下の中央を歩けば、すれ違う誰もが端に避けて道を譲る。もうすぐ、それに例外がなくなる。だがそれも、所詮は通過点……いや、スタートラインに過ぎない。

（ふふふ……。今から焼き付けなさい。これからこの騎士団を……。あなた達を支配するのは、この私なのだ……。ッ）

誰もがこちらに視線を送っている。もはや彼女たちも認知しているのだ。次の時代を作るのが、この二人なのだ。背後を一瞥すれば、後をぴたりとつけて歩くアルマがいる。肩で風を切りながら歩く彼女は、次期団長の右腕として存在を示すかのように真つ直ぐ前を見据えている。

「四月からの新体制では貴女にも重役を担ってもらいます。是非受けてもらいたい」

経験年数など何の意味もない。右腕として動き回ってもらうのに必要なのは、機転の利く頭と野心、そしてバイタリテイだ。彼女の言葉は全て団長の言葉であり、誰も逆らうなど出来ないのだから。

「はっ、身に余る光栄」

驚くそぶりも見せず、アルマは歩きながら小さく頭を下げて副団長の座を掴む。

（ようやくここまで来た。問題は……。ここからだ）

自身が目指してきた場所まで、あと一步のところまで登って来た。その先が難しいことは目の前の古狐の背中が物語っている。

だが……。自分は違う。まだまだ、この程度では舞台にさえ上がれないのだ。繋ぎの先へと視線を向けたアルマは、冷然とした眼差しで未来を見据えていた。



「おめでとうだね、良かったねシャニー」

「ん。テイトさん、幸せになれて良かった」

詰所に駆け戻ったシャニーは、跳ねる息を整えないまま隊員たちに喜び一杯を叫ぶようにして伝え、周りからまるで自分が結婚するかの

ような祝福を浴びていた。

「うんうんっ、ありがとう！ よおし！ 今日企画も全勝利だし、早く切り上げてぱあっと騒ぎに行こう！」

「待ってました！ もちろん部隊長のオゴリっスよね！」

「ヨッシャアー！ どーんと来たまえー！」

「今日の部隊長は輝いて見えるッス！」

姦しい声に包まれる部屋。歓喜一色の若い騎士達をレイサは机の上に寝転がってじっと見つめていた。

暢気なもので、あつさり乗せられたシャニーはまたオゴる約束をしまつてしまっている。十二月は登城禁止で給金がかかり絞られてしまい、家計がヤバいとボヤいていたのはもう忘れているらしい。少し……釘を刺して置く必要があるかもしれない。

「タイトさんもついに退団か」

満面の笑みでバンザイしてはしゃぐシャニーにレイサは声を掛けた。

「本当に嬉しいよ！ お姉ちゃんずっと苦労してきたからさ。あんな嬉しそうな顔久しぶりに見た。良かった良かった！」

シャニーの喜びようと言ったらなく、朝っぱらからとにかくハイテンション。

もう彼女の頭の中は、どうやって結婚式でお祝いしようかしか無いらしい。仲間たちと作戦会議を広げ始めた。本当にサプライズ好きで、びっくりするくらいあれもこれもアイデアを思いつくものだ。

言葉ではいつもこれ以上無いほどまっすぐな言葉を掛けてきたから、今更言葉では足りないのかもしれない。毎度毎度、姉好きが全身から溢れ出している。

「あんたは純朴な子だねえ。最近やつとあか抜けたかと思っただけどさ」

羨ましいくらい姉妹愛を見せつけられて一度は口元が優しくなったレイサだったが、嬉しさに飲まれて何も考えていそうにない部隊長へしれつと毒を吐く。

案の定、シャニーは言われたことが分かっているらしく、きよとんとしているものだから額に手が行ってしまった。

「十八部隊の真価が問われるってことだよ。テイトさんはこの部隊最大の理解者だったんだから」

派手な演出を好まない故にあまり話題に上がっていないだけで、テイトは十八部隊の活動を他騎士団に宣伝するべく、毎回イリア連合会議で成果として報告していた。何せ発足当時、十八部隊は天馬騎士団内はもちろん、連合会議で他の騎士団から非難の的にされることが少なくなかったからだ。稼ぎもせずに国内で穀潰しするような部隊を何故認めただと。

その非難を一身に受け止め、守ってきてくれた者がいなくなる——  
——その意味を刻んで身を振らなければ、即足元をすくわれるだろう。そういう女だ、次期団長は。

「望むところだよ！　って言っても、今まで通り頑張るだけどなんだけどね」

ようやくシャニーも理解して一度は拳をぐつと握って見せたが、だからと言って何をしても出来ないので困惑するだけ。

エンジェルへイローをはじめ、ちゃんと成果は出している。イドウヴアが何故なかなか認めてくれないのか分からないが、さらに精進する以外に思いつかなかった。もともと、承認されても彼女に取り上げられてしまうことが最近多いのだが。

「次の団長ってやっぱりイドウヴアさんなんスカねえ」

ありあり嫌そうなミリアのボヤキに、誰も異見を口にできる者はいなかった。テイトがいなくなってしまうっては、あの人以外に団長を名乗れそうな人間などいないことは前回の団長選出戦で明らかだ。

「ああ、九分九厘そうだろうね」

レイサがとどめを刺してきた。知らなくていいような裏事情まで嗅ぎまわるこの人が言うのでは期待薄か。若い騎士たちの気持ちがいかに沈む。

あの人はいつでも、十八部隊を目の敵にしてリーダーへ酷い言葉を浴びせてきた。それに歯止めを掛ける人が居なくなってしまう。



自然と心配する眼差しがシャニーに集まるが、その視線から摘まみだすようにレイサは名指しした。

「シャニー、何を意味してるか、分かるだろ？」

部隊長だけはそんな気持ちのままでもらっては困る。部隊の護り手として、テイトが遮ってきてくれたもの全てを受けなければならなくなる立場。

心配する必要も無かったか、その現実を突き付けられた青の瞳は力強かった。

「相手が誰で、何を言われても、どこにいようとも、あたしたちの誓いは変わらないよ。勝つまでは負けない」

そうだそうだとミリアは騒いでいるが、レンはその儂げな瞳をさらに弱めて不安げにリーダーを見つめていた。

イドウヴァは十八部隊に対して反対の立場だった人だ。その人が団長になれば最悪部隊の解体だって十分にあり得る。どこにいようと——その言葉が妙に引っかかる。

だけど、今は言えなかった。みんなリーダーの強い言葉に安心している。自分だって背中について歩いていくつもりなのに水を差したくなかった。

「部隊長のおんたがブレたらみんなもブレるからね。その意気で四月からも頑張ろう」

レイサも良く言ったとシャニーの肩をポンポン叩いて褒めているから、レンはただの杞憂と心にしまい込んで輪に加わることにした。

輪の中にさつと突き出されたリーダーの手に、仲間たちは次々手を重ねると決意を叫びにして一気に手を突き上げる。

絶対に負けない——その気持ちを確かめた騎士たちはさつそく詰所を出て今日も空へと舞う。イリアの礎たれ——その誓いを果たすために。

「あたしは戦うよ、逃げない。今度はロイの前で泣きたくないしね」

今度ロイに会う時は、絶対に笑ってしよう。そう決めていた。あんな失敗の泣き言ではなく、誓いを果たし描いた軌跡の全てを彼に聞いてもらおうと。

——君の笑顔で皆を導け  
ロイからの言葉をしっかりと胸の中で復唱し、今日も先陣の風を描いて西の空を目指すのだった。

## 第6話 絆繋ぐ（前編）

輝く朝陽がイリアの白を輝かせ一層に眩しく映る。紺碧の空を見上げ、全身に暖かな光を浴びながら思い切り伸びをするこの瞬間がたまらない。

「うーん！ はーっ」

心地よさそうなシャニーの声が爽やかに風に乗る。

一日の朝を始めるに欠かせないルーティンで、今日も顔をくしゃくしゃにしながら朝陽を味わう。昨夜の吹雪を家の中で聞いていた時は、明日も詰所に缶詰めかどがっかりしていたから喜びも一入。

「今日はいいい天気だなあ！ よおしっ、これなら遠くまで飛んでいけるかなー」

大きく深呼吸して南の空を見つめる。これだけ晴れていればイリアを越えてリキアにだって飛んでいけそうだ。

今頃、彼も起きてきつと一日を始めているのだろう。あの人が頑張っていると思うと、自然にヤル気が湧き上がってくる。うずくまっていた自分を立ち上がらせてくれた彼に、とびきりの成果を早く伝えてあげたい。

あちこちの村が呼んでいる。彼らの力になりたい気持ちだが、雪道を駆ける足も軽やかにさせる。冬場のこんな天気は貴重だ。こうした日はとにかく動き回ると決めている彼女は、真っ先にある場所へと向かった。

◆◆「いつもの朝が帰ってきたって感じがするよ」

もぐもぐもぐ……。見ていると食う気が失せてフォークが降りてしまった。

隣で旺盛に朝食を進める幼馴染の姿を、呆れ半分にぼやくルシャナから苦笑いが零れた。これだけ細いくせに朝からよくこんなにも食べられるものだ。

いつものように呆れた声を浴びせられて、シャニーは相変わらずもぐもぐしながらルシャナへ物言いたげな横目を向ける。ごくんと飲

み込んだ途端、詰まっていた言葉が飛び出してきた。

「だつてさ、こんなにもいい天気なんだよ？　遠くまで行かないや勿体ないじゃん！　腹が減っては仕事はできぬ！」

「いや、それは良いんだけどさ……。だつて、そつからまだビスケット食べるんですよ？」

「あつたりー！」

彼女のいなかった十二月の朝食はあまりに静かなものだった。それが普通なのだと分かっている、やはりいつももあるものが無いと寂しいし、この太陽が傍に無いと調子が狂う。隣で「さあやるぞ」と活力を見せられるだけで、静かな朝の頭に自然にスイッチが入る。

この時間は十八部隊にとつてはただの朝食ではなく作戦会議の場でもあるから、気持ちの入り方で一日が決まってしまう。

「シャニー、今日はどこに行くの？　航路の計算したい」

「んー？　あはひー？」

いつも真つ先に口を開くのは決まってレンだ。目的地への最短ルートや途中の天気を予測して航路を作るのは彼女の役目。

普段なら皆で行き先を決めるのだが、今回は直接リーダーに話を振った。一か月空けていてきつと一番に行きたい先があるはず……。そう彼女は思ったのだ。

シャニーはビスケットをもぐもぐしながら仲間たちを見渡すが、いから早く飲み込めとルシャナに小突かれただけ。

「久しぶりにレネスに行かない？　あそこの鉄路計画、イドウヴァさんが本当に動いてくれるかも確かめたいし」

「イエス、リーダー。計算するから、しばらくもぐもぐしてて」

エンジェルヘイローが動き出していることはシャニーの耳にも入ってきていた。だが、主幹を第二部隊に渡してしまったから実際にどう動いているのかまでは知らない。

旗だけ振つて後は知らんぷり……。では村人をきつとがっかりさせてしまう。自身の目で確かめたかった。自分たちの仕事が、どんな風をイリアに起こしているのかを。

その為にも、今はしつかりと腹ごしらえ……。ビスケットを口に放り

込んだ時だった。

「あれ、ミリアどうしたの？ 体調悪いの？」

決して食は細くないミリアの皿には半分以上残っていて、シャニーは心配になってミリアの顔を見つめる。隣で航路計算に忙しいレンも同じくらい残しているが、彼女はいつものことだし、こうして計算した後はちゃんと食べているのでミリアの様子とは違う。

だが、彼女は心配されて申し訳なきように視線を逸らすと頭の後ろに手をやった。

「いやあ、レネスって言ったらシュティアホルン名物の山菜っすよ。だから朝はセーブしようかと」

「ぶははっ。なにそれー」

思わず吹き出しそうになって、シャニーは口を手で抑えるが目元までは隠せない。飲み込んだ途端、心配して損したと笑いが飛び出した。

「あー、あたしもそうすれば良かったなあ」

「シャニーは大丈夫っすよ。きつとお昼になったらぺこぺこになってるっす」

「それもそっか。よおし、いっぱい仕事してお腹減らそつと」

炎と風のように掛けあう二人の間の抜けた会話。これも普段の十八部隊が戻って来たと思わせてくれる、ムードメーカー的な暖かい風。穏やかな朝陽とこの明るい会話。これが十八部隊の朝の始動だ。

だが、残りの二人は相変わらずな連中へ物言いたげな眼差しを送りながらため息をついている。

「呆れた。あんたらは本当に遊ぶことには熱心だね」

「そんな言い方しないで欲しいっすよ副将。ツライ仕事には楽しみも必要っす！」

「ツライだあ？」

ミリアは我ながら良い切り返しが出来たと思ったのだが、ルシャナからますます厳しい視線が襲って来た。瞬時に沸く彼女をなだめようと、苦笑いで余計に口元が引きつる。

「も、申し訳なかったっす！ で、でも、少しくらい……」

「そんな時間あるわけないだろう？」

ミリアの懇願をルシヤナは最後まで聞くことなく切って捨てた。辛い仕事と言ったって、どうせ彼女の場合はレネスまでの遠路と、到着先での補給物資の運搬を指しているに違いなかった。冬の終わりが近づいているとはいえ、日没が早い冬のイリアで寄り道を食っている余裕などない。

「ま、まあルシヤナ落ち着こうよ。英気を養うのも……」

「あんたがホントはガツンとやらなきやダメなんでしょうが！ だいたい、あんたさ——」

「アー、ハイ。ソウデスネー……」

部隊長が相手だろうが容赦はなかった。角が生えたルシヤナからガミガミ浴びせられ、小さくなりながらもシャニーが横目に聞き流していた時だった。輪の外からふいに声がした。

「部隊メンバーで仲良く朝食か？ 本当に家族みたいな連中だね、お前のところは」

呆れとも羨望とも取れる口調を皆で追っていくと、赤髪が目立つすつきりした顔がシャニーを見つめている。

ルシヤナからの攻撃から逃げるようにまたビスケットを頬張っていたシャニーは、親友の姿に気づくと目じりを下げて手を振った。

でも、他の面子は望まざる客が来たと、それまでのにぎやかさが嘘のように静かになって、黙々とフォークを口に運びだしている。

「おはよ、アルマー！ 今日の仕事の打ち合わせをしたところなんだよ」

何とも緩い部隊だとアルマは内心羨んだ。自身が所属する第一部隊はもちろん、イドウヴァが仕切る第二部隊でも、仲がいい者同士で食事することはあっても、部隊で朝から一緒に行動するなど経験したことは無い。……もつとも、あんな連中と朝から顔を突き合わせるなんて肩が凝る仕事は御免だが。

それなのに、この部隊は部隊長が一つ話を振るとそれだけで笑いが広がって、傍から見たら作戦会議と言うよりただの井戸端会議だ。誤解するなと言う方がどうかしている。

たまにはこんな朝も悪くない。少しだけ、この雰囲気に浸かっていることにしてみる。

「あ、そうだ！　ねえ、アルマ、今日あたしたち、レネスに行くんだ」「またあんな辺境に行くのか。ご苦労なことだ」

その笑いが突然に部外者に飛んできた。

移動だけで半日終わってしまうような場所に足を運んでくれる事には感謝しておいた。

シャニーが楽しげに瞳を躍らせてこんな話を振って来たなら、この後彼女の口から飛んでくる事は簡単に予想できる。仲間たちの視線が部隊長に集まっていることにアルマはすぐに気づいた。

「フン。どうせお前の事だ。レネス名物の山菜料理目当てだろ？」

「ちがいますうー」

半分冗談だったのだが、明らかにシャニーの目は副将を窺っている。二人でため息を浴びせてやると、彼女は流れを切るように咳払いして見せてきた。

「でき、アルマもまた行かない？　アルマのことだから、あれから行っていないんでしょ？」

やはり単純な奴だった。聞き終わらないうちに、アルマは踵を返してその場を去る事にした。

つかつかと出口へ向かうその背中にさつそくミリアが大きく舌を出しているが、シャニーは菓子袋を置くと立ち上がってその背中を追いかける。

「どうしたの？　なんか怒ってる？」

追いついて声を掛けてみるがやはり反応がない。並んで歩き親友の顔を見上げるようにして覗き込んでいると、食堂から出て仲間たちの視線が届かなくなったところでアルマの足がふいに止まった。

「別に。この顔は生まれつきだ。仏頂面で面白みが無くて申し訳ないが気にしなくていい」

「えーと……、いやあ……そういう意味で言ったわけじゃ」

やはり、何か怒っているのだろうか。何だか今日はいつも以上に尖っていて、取り付く島を与えてくれない感じだ。一年近い付き合い

でもう慣れたものの、やはりアルマの考えていることはよく分からない時がある。

今も食堂から出た途端、それまでの顔が仮面かのようにふっと笑いかけてきた。

「せっかくのお誘いは感謝しているが、今回は遠慮させてもらう。お前たちだけで行ってくると良いよ。村の事を気にかけてもらって嬉しく思う」

（こんな優しい言葉を口に出来るのにさ、何で皆の前で掛けてあげないのかなあ……）

仲間達の顔を思い浮かべていたら、ようやくピンと来た。彼女はこの顔を部隊の皆に、いや他の騎士全てに見られたくなかったのだと。この話題を、自分の弱いところを見せることを嫌がったのだと。

何ともアルマらしく、不器用な人間に映る。自分が泣いた顔をみんなに見せたくないのと同じなのだと解釈して、シャニーはそれでもアルマの手を取った。

「でも、お母さんきつと心配してるよ？ 顔を見せてあげればいいのに。この前だって——」

「私は第一部隊の人間だぞ？ あんな荷物持ちみたいな付加価値の無い仕事に付き合わされるのは御免だよ」

あの苦労を重ねたこけた顔を思い出すとどうしても連れて行きたかったのだが、アルマから喰い気味に笑い飛ばされてしまった。

さすがに自分たちの仕事をバカにされるのは業腹だが、親友に荷物持ちをさせてしまったのは確かに悪かったし、おあいこか。

「そんな言い方しなくてもいいのに」

「冗談だよ、冗談」

せめてもの抵抗か、口を尖らせるシャニーにまたアルマは一つ笑った。

どうせいこのくらいキツク言わないと分からない人間だし、三歩歩いて笑えば忘れる彼女なら大丈夫かと思っただが、やはり『三誓』に絡むことになると思いの色が違う。

彼女たちの働き振りは以前見せてもらったし、イリア連合会議で評



働され始めているのは知っている。それでもこんな言い方をするのは、単純にあの村に行きたくないだけだ。シャニーだつてもう気づいているだろうに。

これだけ言つてもまだ何とか誘おうとする親友の優しさには感謝していたが、シャニーが口にした言葉に思わず顔が引きつる。

「分かったよ、じゃあ荷物はあたしたちで運ぶからさ。あーあ、振り分け直さなきゃ」

「……本気で荷物持ちにカウントしてたのか？」

この顔を待つていたかのようにシャニーは白い歯を見せて笑つてきた。

「へへっ、ジョーダンだよ、ジョーダン！」

「ハッ、顔は冗談とは言つていないがな」

負けず嫌いにやり返してきた。そう来なくて面白くない。言われ黙っていられる性格ではないから、曲者ぞろいの部隊長会議でもやっていけているのだろう。何より、ライバルとして打ち付けた槍に斬り返してこなければ張り合いがない。

「でも、本当になんで？ アルマも大好きなんですよ？ お母さんのこと」

「ああ、もちろんだよ。世界で一番に守りたい人だ」

その笑顔がふつと消えて、また心配そうに顔を見上げてきた。

どうあつても逃がしてくれないようだ。彼女は以前、母との会話を盗み聞きしていたようだから尚更なのかもしれないが、そつとしておいて欲しかった。「じゃあー」そう繋いで今も何とか引いていこうとするシャニーの手を振り払う。彼女には悪いが、こういう生き方しかできないのだ。

「立身するまで帰らないと誓っている。誓いは守るもの……お前なら、分かつてくれると思うが」

「――」

結構強く払われてしまった。手首をさすりながらシャニーは目をしょんぼりさせていたが、アルマから彼女だけの誓いを初めて聞かされ、一瞬面食らつたがすぐ笑顔が戻つた。

「オツケ。じゃあ、あたしがアルマの代わりに元気にしてるって伝えておくよ」

彼女には、彼女の誓いがある。自分が誓いをバカにされたら腹が立つのと同じで、アルマだって誓いを犯されたら嫌に決まっている。

善意の押し付けになつていたように申し訳ない想い半分、シャニーは嬉しかった。親友が弱いところを見せてくれたのだから。せめてもの罪滅ぼしと自分にできる精いっぱい伝え、彼女は仲間たちの許へ戻ろうと背を向けた。

「シャニー」

それを引き留める親友の声に顔だけ振り返る。

「母に渡してもらいたいものがある。後で取りに来てくれないか？」



食事を終えて出撃の準備を整えると、シャニーは仲間たちに待機を命じ、アルマに指示された屋上への階段を駆け上がる。鎧を着て帯剣もしていた事を忘れていた。一気に登るとさすがにキツく、足が上からなくなってきた。

「はあはあ……。ここなら天馬で乗り付ければ良かったじゃん……」

わざわざあんな誰もいないところを選ぶなんてアルマらしいと思しながら、上がる息を整えつつ見えてきた赤い背中に近づいていく。

「アルマ。来たよお……へっ、へーっ……」

「……何もそんな急いで来なくても良かったろ。——これだ」

「これ……こんなにも？」

アルマから渡された大きな巾着袋は、中身を見なくてもその感触と重さでお金だと分かった。

ずっしり来るこの感じからしてかなりの大金で、おそらく傭兵で稼いできたお金。普段なら郵便部隊に頼んで送ってもらっているはずだが、いつもの封筒一枚とはわけが違い、別口に溜めてきたものに違いない。

中身を確認させてもらおうとお金だけではなく、手紙やら食べものやらいっぱい詰まっている。

「今の私には、それしか出来ないからな」

ライバルを見つめて言葉にすると、アルマはますます悔しくて堪らなくなつた。

平隊員では出来ることなど知れている。歯牙にもかけてこなかつた十八部隊の方がよっぽど輝いて見えるくらい、今の姿はとても母には見せられない。

母を頼むと親友の両肩に手を置いた後、さつと手を差し出す。

「お前だから信じて渡すんだ。しっかり渡してくれよ」

「その信、確かに受け取つたよ。お母さんにアルマの想い、ちゃんと伝えるからね！」

わざわざこんな大事なものを手渡してきた意味をしっかりと胸に刻むと、シャニーはがっちり手を結び、背を向けて歩き出しながら手を振つた。

袋の口をしつかりと縛つて両手で抱え、親友がかけてくれた精一杯の気持ちを何度も心の中で思い出しながら、恥ずかしがり屋に変わつて彼女の気持ちをしっかりと伝えようと誓うのだった。

## 第7話 絆繋ぐ（中編）

天気の良い朝はどうしてこんなにも気分を良くしてくれるのだろうか。

天馬が駆ける紺碧の空は未だ冬を抜けず、矢のように冷たい風が頬を切り裂いていくのに、この大空の中を飛ぶと全身から開放感と意欲が滾々と湧き上がってくる。

もつと早く、もつと先へ。風に青髪をなびかせ、眼下に広がっては消えていく村や山々を見下ろしながら、快活な笑み浮かぶ口元からは赴くままの歌が漏れる。

「やってきました西の果て〜」

先頭から聞こえてくる爽やかな歌声は、自然に部隊の者たちの心も明るくさせる。

最初はどこへ行けばいいのか迷った空の旅だが、目的も目標もはっきりした今は移動の時間であっても大事なひと時。もちろん移動中に賊を見つければ対処しなければならぬから気は抜けないが、東に昇った太陽を背に飛ぶ顔は、どれも希望が眩しい位に輝いている。

「フライに炒めに煮込みにサラダ〜」

ところが先頭に並んで一緒に歌い出したミアリアの声は、今回も仲間たちの肩をずるっと落とさせるには十分すぎるものだった。もう任務後の事ばかりで頭がいっぱいなのは優に想像できる。

「いいね！ あたしは山菜どうやって食べよっかなあ。サカ風の揚げ料理が気になってるんだよね」

「いやー、さすがに各地の名物は押さえてるっスね！」

「あははっ。役得、役得〜ってね！」

注意するどころか燃える食欲を煽られ、一緒になってシャニーが笑いだすものだから後ろの二人は揃って呆れ顔。

「……副将、お仕置きしないの？」

「ああいうのを、つける薬が無いって言うんだらうね……」

シャニーとミアリアが悪乗りするのはいつもの事。普段ならルシヤナがビシツと二人を叱るのだが、朝っぱらからこれを見せられては先

が思いやられる。

姦しい二人は置いておき、ルシヤナ達は眼下に賊の気配や新たな仕事の原石が無いかを探していた。一か月ぶりに返ってきた、明るく希望溢れる空の旅を楽しみながら。

そこに、前からふいに聞こえてきたリーダーの声。

「今日はいつもの顔出しの前に鉄路を見ていこうよ」

言い終わりもしないうちに北へ旋回し、進路を変え始めたシャニーの背中を皆もついて行く。

イドウヴァに取り上げられたイリア鉄路計画——エンジェルヘイロー。それがちゃんと進んでいるのかを確認するのはレネスへ来た目的の一つだ。

聖天騎士団領との境が近くなり、深くなっていく針葉樹林帯。その中に不自然に切り拓かれた場所を見つけると、彼女たちは吸い込まれるように下降していく。

「ひゃー。どこまで続いているんスカねえ、この線路！」

地平線の先まで続く鉄路。その先を、額に手を添えて眺めるミリアの感嘆が聞こえてくる。

以前見た、全てが疲れ果てて放り捨てられていたようなトロツコはそこにはない。

ぐるっと一周見渡して、あまりの変わりようにシャニーは口をぽかんと開けたまま立ち尽くしていた。驚きと……そして体の内から湧き上がってくるゾクゾク感。何だろう、瞳が震えてくる。

「思っていた以上に……がっちり作ってあるね」

横に並んで鉄路を見つめるルシヤナも、あまりにも予想外な光景に感嘆しか漏らせずにいた。

鉄路は銀色に輝き、まだ錆びていない様子からして総取替が行われたいらしい。この提案をしたのは聖天騎士団との契約の前だったはずだから、まだ二か月程しか経っていないのに。

横目でリーダーを見れば、彼女の瞳からは一筋の涙が零れていた。「何か、ようやく仕事が目に見える形でハッキリ結果になった気がするよ」

シャニーは走馬灯のように走った今までの戦いを思い出しながら鉄路を見つめ、感無量に身体を震わせた。

今までずっと、道なき道を歩いてきた。どこに出口があるかも分からないまま、自分が光と信じたものに向かって、認められずとも、理解されずとも、ただひたすらに前へ。ボロボロになりかけた心で、それでも笑って前を向き、時には仲間や大好きな人に支えてもらって、黒く濁る不安を跳ねのけながらただひたすら駆けてきた。

(やっぱり、あたし達の道は……——間違っていなかったんだ)

その結果が目の前に広がっている。目元はこれ以上無いほどの笑みを浮かべて喜びを湛え、唇を噛んで震える声を堪える。

勇気が出た。もつともつと前を向いて、時には心を鬼にして戦おうと思える。謹慎期間にたくさん届いていた手紙。想いをくれた村にもきつと行ってみようと誓った。

「ほら、イドウヴァさん、ちゃんと動いてくれてるみたいだから良かったじゃん。悔しいけど……こんなの、あたし達には出来ないしや」

涙を拭いたシャニーは真つ赤な目のまま笑って、みんなにすつかり生まれ変わった鉄路を指さした。未だに仕事を取り上げられたことは快く思えはしないが、たった四人で同じことをやってみると言われても、知識も無ければ力もない。

悔しさよりも、今は信じてくれた人たちとの約束を果たせた喜びの方が大きくて、もうこれで良いのだと前を向く。

でも、ルシヤナは線路の端を蹴飛ばしながら堪えきれない不満を吐き捨てていた。

「だからって、他の企画を後回しにされるのはムカつくけどね」

「分かってるよ。みんなで震えながら集めたんだもん。これからも会議で頑張って訴えるからさ」

相変わらず、イドウヴァは理由をあれこれつけて企画を却下する場面が目立つ。特に最近、エンジェルヘイローを盾に他の事などやっていられるかと、内容すら語らせない時だってある。

寒さに震えながらへとへとになって集めてきたものを、足で蹴飛ばすような態度。腹が立つのは実際に面直で戦うシャニーも同じ。こ

れだけの大型案件では仕方ない部分もあるのだろうが、それでも毎回怒りを噛み砕いてはあの声の囁きを払ってきた。

許せなくとも、これ以上敵意を見せても首を絞めるだけ。巡って悲しむのはイリアの民なのだ。今は仲間を宥めるしかなかった。

「あの人が団長になったら、ますます通りにくくなるんすかね……」

今はテイトがいてくれるから、イドウヴァの強硬な態度に待ったをかけてくれる。それが四月からは無くなると思うと、誰も肩に重い気持ちのがしかかってくる。

頭では分かっているつもりだったが、ミリアが改めてぼやくと誰も返せず、皆リーダーを見つめてしまう。会議で直接対峙しているシャニーの顔が、何よりもミリアの問いへの答えとなっていた。

急に訪れた重く淀み、喉が張り付くような絶望感。

「私たち、どうなつちやうんだろ。十八部隊……なくなつちやうのかな」

レンのただでさえ小さい声が消え入るように不安を零す。言つて更に怖くなり、そんな事は無いと言つて欲しくて仲間をぐるつと見渡す。

イドウヴァは当初から十八部隊の存在を反対してきた。イリア連合会議でも十月からの新体制には疑問の声があがっていた。稼ぎもしない部隊を設置するとは何事だと。

おまけに起こしてしまった十一月の事件。条件が整いすぎていた。

跳ね飛ばしたくてもあまりに重すぎる現実。それでも、押し潰されそうな気持ちを吹き飛ばす朗らかな声が雪原に響いた。

「そんなの考えても仕方ないじゃん！ あたし達の誓いは？」

元気な声で仲間を鼓舞すると、レンの許へ歩み寄ったシャニーは彼女の不安げな瞳を見つめて笑つて見せた。

「……イリアの礎たれ」

答えはすぐ返ってきて、彼女はレンの双肩をポンポンと叩きながらもう一度笑つて見せる。沈んだままでいたって、何も始まらない。

「じゃあ、行こうよ。みんな待ってるんだから」

信じてくれる人のために剣を握り、ただひたすらに、前へ。皆で掲

げた誓いを胸に、シャニーは天馬の方へ戻ろうと歩き出した。

騎士団内で何が起きようとも、待っていてくれる人たちには関係ないことだ。今できる事を、今しか出来ない事を精一杯やる——その背中にルシヤナたちもついて行こうとしたのだが、ふいにレンの声の後ろから引つ張つて来た。

「シャニーは心配じゃないの?」

思わぬ問いかけにシャニーの足が止まり、顔だけ振りむいて驚いた。レンの瞳がじつと睨むように見つめてきていた。

自然に体も振り返つて、怒りを滲ませる銀の瞳を全身に浴びて息を呑む。

「悔しく……ないの?」

リーダーの態度がどこか、さっぱりと受け入れて決定に従うしかないと言っているように見えて仕方なかった。大事な家族が奪われようとしているのに。

以前リーダーが口にしていた、あの言葉が未だに引つかかっていた。それが、リーダーの笑顔の裏に滲むものを逃さなかった。

「悔しいよ。十八部隊はあたしにとつて帰る場所。家族のいる家みたいなものだから。それを取り上げられるのは……悔しい」

いつもと違うレンの様子に一瞬固まったシャニーだが、心が先に飛び出していた。気持ちを我慢しているつもりだった。こんな重い気持ちのまま村人たちのところに行つたつて、彼らの笑顔を引き出すなんて出来ない——恐れも悔しさも奥に納めて。

悔しい……それは間違い無いが、彼女はロイに言われた言葉を胸に一步踏み出した。

——どこで周りを笑顔にしてるかだけだよ

どこにいても、イリアの礎たれ——為すべきは変わらないはずだ。「けど、どうなろうとあたしはあたしの置かれた場所で、自分の誓いを果たすつて決めてる。あたしはみんなに笑顔になつてもらいたい。それが果たせれば、イイつて」

笑つて不安を吹き飛ばしながらレンの許へと戻つたシャニーは、未だ表情の変わらない彼女の手を取つた。



「ほら、笑って笑って！」

太陽のような明るい笑顔と爽やかな声。

沈み込む心へ雪のごとく降り積もる不安を解かそうと、前を向くリーダーにルシヤナ達は何も言えなかった。リーダーの口調からはありありと伝わってくる。この先に何が待っているのかを。

「あたし達を待ってくれてる人がいるんだから、その人たちへ今出来る事を精一杯やろう？」

その重い空気を払うべく、シヤニーは明るく鼓舞し続けた。

先の事なんて分からない。四月どころか、明日だって何が起きるか分からない。

この一年で死ぬ思いを三度も経験したシヤニーにとっては、今こそが一番大事だった。今したい事は何で、今しか出来ない事は何なのか。貴重な今を精一杯生きて成すべきを果たそうと。後悔しなくていいように、とにかく動いて、笑って、軌跡を描き続けよう。

だが、レンにはその想いは嬉しくとも許せなかった。もう、もう我慢できない。もうこれ以上沸々湧きあがるものを抑えきれない。

次の軌跡を描くべく、自分の手を引いて歩き出そうとするリーダーの手を力任せに振り払ってしまった。

「シヤニー……勝とうよ」

この部隊で一番力が弱いはずのレンが見せた荒々しい怒り。手をさすりながらシヤニーが驚いて振り返ってみると、今も銀の瞳は震えながらもはつきりとした怒りを伝える。

彼女が口にした短い消え入りそうな言葉に、シヤニーは胸を貫かれたようになって表情が固まっていた。

「シヤニーは行く先があるかもしれないけど、私たち、この部隊がなくなったら……」

もともと落ちこぼれ組だった。天馬の扱い方も知らず、槍も満足に振れず。そんな自分たちを引っ張ってきてくれたのがシヤニーで、帰る場所となっているのが十八部隊だ。

大事な人と、大事な家が、どちらもが奪われそうになっているのに、決定に只従うなんて絶対に嫌だった。戦って欲しかった。今までそ

うして戦ってきてくれた人の、先を見据える諦めにも似た瞳が恐ろしかった。

「ごめん……。——そんなつもりで言ったわけじゃなかったんだ」

ついに泣き出してしまった部下を見つめるシャニーは改めて思い知っていた。自分の一挙手一投足をどれだけ繊細に部下が見つめて、重く受け取り覚悟を決めるのかを。

一度は振り払われた白い手をもう一度握り返して、瞳を見つめてはつきり誓う。

「もちろん勝つき。その為なら、なんだってする」

どこかで諦めていた自分に気づかされた。

相手はイドウヴァだ。こんな鉄路を作り上げてしまう程、名実ともにイリア中でもトップクラスの権力者。それを敵に回している今、一部隊長では勝ち目はない——部隊長会議で戦い続けてきた心が、勝手にそう決めつけてしまっていたのか。やりたい事と、出来る事の間にある途方もなく深い溝に、出来ることさえ全て放棄して。

どれだけ明るく振舞っても、敗色が滲んだ気持ちを敏感に部下に感じ取られてようやく気づいた。

そんな未来は嫌だ。自分に言い聞かせるようにはつきりした口調で決心を伝えると、ようやくレンの顔に笑顔が戻る。

「約束だよ？」

「うん、じゃあ指切りしよ、指切り」

見守っていたルシヤナ達の顔にも静かな笑みが浮かぶ。レンがモヤモヤを全部言ってくれた気がする。何かは分からなかった釈然としない想いを言葉に換えて、リーダーの顔に浮かぶ笑顔に決意を与えてくれた。

もちろん、勝つ——リーダーが口にした言葉を自分たちも胸に刻む。この部隊は、この家族は、皆で何があっても守り抜く。そう誓ってルシヤナは二人の許へ歩き出す。

「その為にもしっかりと成果をあげよう。結果を出せば、簡単に潰したり出来ないはずさ」

二人の間にそっと入って来た手。彼女たちの繋がれた手にルシヤ

ナも自身の手を重ね、ミリアも追って中に加わる。

仲間同士誓いを確かめ合う儀式とも言えるこの円陣を何度囲んできただろう。気持ちをつつけ合った後はこれで締めてきた。今までも、そして絶対にこれからも。

もうこんな沈んだ時間は終わり。皆で手を突き上げて重い空気を払うように誓いを唱え、次なる目的地へと歩き出した。

「シャニー」

後ろから駆けてくる声に振り向くと、先ほどとは違うレンの顔があった。

「なあに？」

「ごめんね、酷いこと言って」

本当はシャニーだけに言いたかったわけではなかったのに。自分も含めた部隊全体にへばりつくようなのしかかる敗色が怖かった。怖くてどうしようもなくて、全てをリーダーにぶつけてしまった罪悪感でレンの瞳は弱くなった。

「ううん。逃げないって決めてたのに、逃げてた自分に気づいたよ。ありがとうレン」

どこかで諦め、我慢していたものを吹き飛ばしてくれた儂げな瞳へ、シャニーはニカッと笑って見せた。

あのままなら、また知らないうちに溜め込んでいたかもしれない。そう思うと仲間の存在に感謝せずには居られない。

ありがとう——その魔法の言葉をかけられて、どれだけ気持ちが楽になっただろうか。これからもよろしく……そう伝えてくるリーダーの手を取ってレンの足取りは軽くなった。

彼女の顔にも慎ましやかな笑みが戻ると、シャニーはレンの手を引いて足取りを強める。間違っていたら仲間が教えてくれる。信じられる瞳たちを背負い、シャニーは顔だけ振り向いた。

「これからも気づいたら色々教えてよ。あたし、みんなに頼られるリーダーになりたいからさ」

まだまだリーダーとしての未熟を思い知らされた。それでもついてきてくれる仲間たちを裏切れない。より確かに思えるようになって

た瞳は、握りしめる誓いをさらに強くしてひたすら前に進むのだった。

## 第8話 絆繋ぐ（後編）

レウスに降り立ち颯爽と天馬から降りてきた十八部隊。彼女たちは流れるような動きでできばきと活動の準備を始めだした。

部隊の中に張り付いていた黒く濁ったものを吐き出して、やりたい事と出来る事をまた一つ鮮明とした彼女達は雪道に強い軌跡を残していく。

（絶対、やってやろうよ！）

レンと目線があったシャニーはウインクしながら彼女と気合を入れた。今この瞬間を戦い抜こうと不屈の闘志を燃やして。

自分たちの帰る場所、大事な家族を守るために最後まで諦めたくない。まだ何も決まったわけでは無いはず。決めるのは、今の自分だ。描き続けた軌跡が未来を決めるなら、振るい続けるしかない。目の前の出来る事を果たし、やりたい事と出来る事の間にある壁を、手にした剣でどう崩していくか……諦めずに考えるしかない。

「第十八部隊、作戦を開始する！ よおし、みんな、いつくよー！」

「イエス、リーダー！」

リーダーから吹く前向きの氣勢に仲間たちもはきと頷くと、それぞれが持ち場へと散っていく。結果を残して、必ず守って見せると瞳に決意を宿して。

「こんにちはー！ 天馬騎士団のシャニーです」

一か月も村人に声を掛けないなんて、十八部隊に配属された四月から考えても初めての事。どこか緊張するが、それ以上のわくわくする気持ちが出る声に乗ってあたりに響く。

いつも心を温めてきてくれた声。すぐ住人の女性は家から飛び出し、久々に現れた陽の風に思わず目元を綻ばせた。

「あつ、シャニーちゃんじゃない！」

歓迎してくれるその顔を見るだけで、シャニーはなぜか自分が救われた気持ちになっていた。自分を待っていてくれる人がいる、それを実感できた気がして喜びがわつと心に広がっていく。大変でも、だからこの仕事が好きだった。

「良かった、罰解けたんだね！」

ところが、女性がシャニーの手を取りながら続けて口にした言葉に、彼女は目が飛び出しそうになった。

「へっ?! どっ、どうしておばさんがそれを?!」

ここはイリアの最西端と言っても過言ではない場所だ。カルラエからは遥か遠く、そんな場所に住んでいるこの女性が、なぜ自分が受けた罰の事を知っているのだろうか。

最初は驚きばかりだったが、ジンジンして顔が赤くなっているのが自分でも分かる。人の噂というものはどうにも恐ろしい。イリア中に自分の失態が広がっていると思うと頭がパンクして卒倒してしまいそうだ。

「伝わってくるわよ。あなた達十八部隊は、私たちにとっては希望なのよ」

だけど、直後に女性が口にしてくれた言葉は、そんな顔から火が出る思いを吹き飛ばしていった。

何度も心の中で復唱してみる。あなたたちは、私たちの希望——そう言っただけで祈ってくれる人たちがいる。笑顔で帰りを待っていてくれる人がいる。

(そんな風に……思ってもらえていたなんてなあ……。夢みたい)

希望——それはシャニーにとつて至上の言葉だった。辛いこともたくさんあるけれど、それを全て吹き飛ばして余りあるほど本当にありがたい宝物をもらった気がする。

心から湧き上がる気持ちにシャニーはいつの間にか目頭を拭っていた。

「へへっ……。ありがとう、嬉しい……」

極寒に帰ってきた自分を温かく迎えてくれた故郷の人たち。みんな大好きな人たちだ。

彼らも最初は、天馬騎士団と聞いても見向きもしてくれなかった。動乱で敵国ベルンについた騎士たちを、彼らは故郷の同胞と決して迎えてくれなかった。

半年以上足しげく通って声を聞き、何とか力になろうと奔走して。

悔しさと虚しさから始まった仕事は今ようやく認められた気がする。  
おかえり——嬉しさに紅涙を絞る彼女を、女性はハグして迎え入れる。

「ちよつとみんなを呼んでくるわ。ずっと顔を見せてくれなくて心配してたんだから」

走り去っていく女性の後姿を、シャニーは涙を堪えて見送る。

守りたい、救ってあげたい。そう思つて空を駆けてきたのに、救われてるのは自分だった。

(えへへ……。なんであんな、みんな温かいんだろうなあ)

涙を拭つているとますます膨らんでくる気持ち。何があつても、大好きなあの人たちを守ってあげたい。脳裏に浮かぶイドウヴァの顔にも立ち向かう勇気が湧いてくるのを感じていた。



ルシヤナ達も呼んで待つっていると、続々と村人たちが集まつて来た。

最初は数人だけかと思つていたが、村人が村人を呼んで賑やかになり、最後には村長まで出てきた。

「鉄路計画を実行に移してもらつて、本当に感謝しているよ。本当にありがとう」

村長から掛けられた労いの言葉に、はにかみながらも嬉しくて四人はお互いの顔を見つめあう。やってきてよかった、その気持ちは皆同じ。今まで個人同士で感謝や労いの言葉をもらう事はあつても、こんな規模で集まつて長から言葉をもらうのは初めてだ。おまけに、この村長からだなんて。

——貴様ら売国奴に用はない！ とつとと帰れ!!

初見で鋏を振り上げて怒鳴られた事を、シャニーは今でもはつきり覚えていた。この人は、ベルンに付いた天馬騎士団を目の敵にしていたのだ。

歩み寄つてきた村長に両手をしっかりと握られた。彼の表情はとても柔らかい。

「あたし達も嬉しいです。積み上げてきた事がようやく形になって」  
鉄路計画だけではない。七月あたりまでは、もう何を言っても天馬騎士団に語る事など無いくらいの剣幕だった。その村長が、こんな優しい顔をしてくれることが何より心にわつと希望を湧きあがらせてくれる。

希薄となった管轄地域の住民との関係を修復することに徹してきたこの半年間。少しずつ、戦後のイリアに笑顔が戻っていることが何より嬉しい。

「良かったつスね！ やっぱり十八部隊は守らないとダメツスよ！」

こんな事を出来るのは十八部隊を置いて他にない自信はある。嬉しそうに拳を突き上げるミリアに誰もが頷いていた。

(絶対に……——負けない！)

ようやく、ようやく形になって来たのだ。それを今までの企画と同じように取り上げられて堪るか。シャニーの瞳にも隼のような厳しさが浮かぶ。

「何かあったのか？」

ミリアのオーバーなりアクションは村長の気を引くには十分で、彼はすぐに声をかけてきた。

「い、いえ、なんでも」

慌ててシャニーは取り繕った。決定事項でもなければ、まだそうした動きがあると聞いたわけでもない。あくまで、現状を考えたら浮かぶ最悪の道というだけ。

それを村人に伝えても動揺を広げるだけだと彼女は思ったのだが、横にいたレンがギュつと手を握って来た。

——戦おうよ

今まで知らなかった部隊を想う彼女の気持ちにあつと口を開けて驚いていると、レンは一步前に出ていく。

「もしかしたら……三月でなくなっちゃうかもしれないです」

どよめきが広がり、それは次第に騎士団への怒気を含んだものが増えていく。

自分たちを大事に想ってくれている人たちがこんなにもいる。そ



れだけでも、もう勇気を行動に変えるには十分な力だった。

「お願いします。助けてください。私たちの十八部隊……守りたいんです」

何度も、何度も頭を下げ、銀髪を揺らすレンの姿を、仲間たちは呆然と見つめていた。こんなに感情を顕にして、身振り手振りするレンは初めて見た。

救う側の騎士が守るべき村人たちに頭を下げ、助けてくれだなんて、弱さを見せて良いものだろうか。シャニーは瞳を閉じて考えてみた。

（やりたいのに出来ない事……それを果たすのに、今あたし達が出来る事ってなんだろう……）

民の傍にあれ——自分たちの誓いは彼らと共に戦い続けること。決して一方通行な関係を目指したものではなかったはずだ。そつと瞳を開くと、彼女もレンの横に並んだ。

「あたしからもお願いします！ 十八部隊はあたし達の帰る場所、生きる意味なんです。力を貸してください！」

守る側、守られる側、それは常に一緒になくてもいい。

希望と言って頼ってくれるのに、弱いところを見せたら彼らは不安になるかもしれない。だけど、イリアを変えていくには彼らにも戦って貰わなければ成し遂げられない。

光を、あるべきを求めて歩くのは騎士だけではないはず。深く頭を下げて動かないリーダーの後姿に、仲間たちが続かないわけはなかった。

「分かったよ」

村長はシャニーに歩み寄り、彼女の手を取ると頭をあげさせた。

「もしそんなことになったら我々も嘆願書を出そう。他の村にも連絡してみる」

「ありがとうございます……」

嬉しくて、嬉しくて。入団からそろそろ一年。人生の中で一番泣いた一年だった。

仲間の前では泣かないと決めて、士官服に着替えてからますます涙

を見せられなくなっていたが、嬉しくて泣いたのは今日が初めてな気さえする。

敵が多い騎士団の中にあって、こうして外から自分たちを見つめ護ってくれようとする人たちの存在は心を温かく包んでくれる。

「シャニーちゃん、ほら顔あげて。みんなが頑張ってるから、村長もこう言ってるんだよ。これからも頑張って」

聞こえてきた声にはっとして振り向く。視界に見えたのは今日一番に会いたかった人の顔だ。

疲れた顔に浮かぶ笑顔を忘れるはずも無い。アルマのお母さんだ。まつすぐな言葉で褒めてくれる彼女の言葉は、両親をあまり知らないシャニーにとっては母に励ましてもらえたような気さえして真っ赤な瞳が綻んでいく。

「……はいー」

いつまでも泣いてはいられない。目頭を押さえて崩れる声を整えようと力強く答えた。

仲間たちを振り返れば、誰もががいい顔をしている。彼女たちとなら戦える。もう一度、胸に咲いた言葉を唱えた。

——あなた達は、私たちの希望

(絶対に期待に応えなきや。みんな信じてくれてるんだ。みんなの希望であり続けなければ。十八部隊は！)



「アルマのお母さん、お元気でしたか？」

皆自宅へと戻っていき、シャニーも足が悪いアルマの母を連れて彼女の家まで送り届けていく。

「ええ。今日のはの子は一緒ではないの？」

やっぱり聞かれた。こうなることは分かっていたからあれだけ泣いても誘ったのに。

どうやって言ったら母を傷つけないであげられるだろう。色々考えを巡らすが、やはり気の利いた言葉が思い浮かばない。

「ごめんなさい。誘ったんだけど……」

「そう……。分かってるわ」

寂しそうな顔が俯き、ぽつりと漏らした言葉は自分を言い聞かせるように弱い。

唇を噛み、シャニーも言葉を何とか絞り出そうといつの間にか俯いていた。この人を悲しませたくはない。けど、アルマの気持ちも伝えてあげたい。二人の気持ちを慮っていると、先にアルマの母のほうが口を開いた。

「誓いを果たすまでは帰らないって言われたんでしょ？ あの子は頑固だから。でも、いい子なのよ」

娘の事で友達を困らせるわけにはいかなかった。あのつつけんな娘が心を開いた相手なのだ。村でシャニーが見せてきた朗らかな風を見ても、優しく娘の手を取ったことは優に想像できる。

「うん。アルマ、すごいお母さんのこと心配してたんだ。だから誘ったのに」

「ふふ、あの子らしいわ」

彼女の言葉全てにうんうんと頷くシャニーはアルマが羨ましかった。こんなに優しい母が無事を祈ってくれているのだから。自分の母も今頃天国から見守ってくれているのだろうか。不意に恋しくなる。

「あの子は元気？」

「うん。それを伝えるように言われて来たの。昨日も二人で稽古してたんだ」

部隊の仲間はアルマのことを異様に警戒しているが、シャニーにとっては彼女たちと同じくらいアルマも大事な仲間だった。同期で、自分にはない力強さと先まで見据える眼があつて。羨望さえする好敵手と剣を交えることは少なくない。

彼女は母へアルマの様子を少しでも伝えようと稽古の内容を伝え始めた。剣では相手の槍を弾いたこと、手槍の精度ではまるで相手にならず地団太を踏んだこと、そして稽古のあと一緒に食事に行つて笑いあつたこと……。

「あの子にも友達ができたのね」

嬉しそうにうなづく母の微笑みは柔らかかった。

「うちのアルマをよろしくね」

「もちろん！ アルマにはスゴイなっっていうも驚かされてるよ」

最初はどんな奴かと警戒していた。無防備な自分へ平気で武器を突き向けてきたり、仲間を引き連れて突然部隊を出て行ってしまったり。

だけど、騎士団の先輩たちをあつという間に追い抜き、第一部隊まで駆けあがるライバルの行動力と実力は、羨ましくて眩しく見えた時期もあった。

今でもそうだ。あの力強さには尊敬の念すら覚える。だからこそ、負けたくなかった。互いに騎士として誓い、そしてリスペクトし合ってきた、すべてはイリアの為に——この気持ちだけでは絶対に。

「お友達なら少し気にかけてあげて欲しいの。あの子は時々目的のために手段を択ばないところがあるから」

ふいのお願いにシャニーはきよんとんとして母を見下ろした。

時々というか、いつもの気がする。騎士団の中では本来以上に肩ひじを張っているということか。

確かに、騎士団を出て街で食事をした時は表情が柔らかかった気がする。自分が鬼の仮面を被れるのは、部隊長会議で企画を通す時くらいが精いっぱい。それをいつもつけていると思うと……息抜きさせてやれる時間になってやればいいのだろうか。

そう考えを巡らせていると、母から思わぬ言葉が飛び出した。

「この前だって。何かの決意か分からないけど、髪をあんな色に染めちゃって」

「え、アルマって……（髪を……染める？ いつ?）」

以前この村にアルマを連れてきた時を思い出してみるのが、あの時だって普段通り赤い髪だったはずで、特別染めていたようには見えなかった。

もう一度、指を口元に当てて空を見上げながら記憶を絞ってみるが、やはりこの白の村に映える赤を間違えるはずがない。

「アルマって元からあの色赤髪じゃなかったんですか？」

入団した時からよく覚えている。寒色系の多い髪質のイリア人中でも明るい青髪の自分と、自分と同じようにシヨートヘアにまとめながら、その青たちを喰ってしまおうかと言う程に際立つ赤髪の彼女。二人は十八部隊のどこにいるかすぐ分かるくらい目立ってきた。その色しか見た事など無かった。燃えるような赫こそがアルマ、そう言っても言い過ぎではないくらいに。

「ええ。私と同じ黒だったのに」

母から返ってきた言葉はにわかには信じられないが、彼女の髪は加齢で疲れているもののはつきりとした黒だ。

「ベルンから帰ってきたらあの色になって……何があったのかしら」

シャニーも同じことを考えていた。別に染めてああなったとは思えないような鮮やかな色。

(アルマ……ベルンで一体何があったんだろう。やっぱり、すっごい苦労したのかな……)

その後、いつも通りに村での聞き込みをし、アルマの母に代わって水汲みに何度も往復する間、ずっとそのことばかりを考えていた。



翌日、シャニーは食堂に向かう道中で、いつも以上にきよるきよるとあたりを見渡していた。

いつもなら一緒に突撃していく仲。今日も人気のおかずの取り合いに駆け出そうとしていたミアは、乗ってこないリーダーに気づいて急ブレーキをかけた。

「どうしたんスか？」

「ええと……あつ、ごめん！ 先行ってて！」

突然に食堂とは正反対の方向へ走って行ってしまった。

リーダーが朝食を放り出して飛んで行ってしまふなんて珍しい。人の流れを縫ってもうあんな遠いところにいる鮮やかな青髪を目で追っていき、その先を見つけてミアの口元がげつと歪んだ。

「アルマ、お母さんやっぱり心配してたよ」

第一部隊は朝から外征の予定なのか、アルマはすでに出撃の準備を始めている。

上がった息を整えないまま声を掛けると、アルマは静かに振り向いて口元に笑みを作ると手を挙げてきた。

これが仮面を被った顔だと思うとその裏に何を隠しているのか気になるが、今までその心を知れたためしはない。彼女から口にしてくれた時以外は。

「そうか、元氣は伝えてくれたんだろ？」

「もちろん！ お母さん、喜んでた」

その短い言葉だけ聞ければアルマには十分だったのだが、シャニーは母の事細かな表情や言葉をいちいち伝えてくれる。

彼女は自身の口元が次第に柔らかくなってしまるのが分かったが、今は気持ちに任せる事にした。それが、親友を一番に安心させるはずだ。

「お前に頼んで良かったよ」

シャニーの手をしっかりと取って感謝を口にする、それだけでアルマは歩き出した。

「その心配に応えるためにも、私は行くよ」

士官服がサマになってきた気がするライバルの前で、未だ平隊員に甘んじる自分の情けない姿は、絶対に母には見せられない。今出来る事を、自分に出来る精いっぱい。それが母を支えることになる。

「アルマー！」

ふるさとの母を想いながら戦地に旅立つ赤い背中をシャニーは引き留めた。

「お母さんにも言われた。そんなに何を思い詰めて先に行こうとしてるの？」

誰にも頼らず、休むこともせず、涙を見せた事だつて一度も無い。

自分以上にただひたすら前へ歩いていく親友の事が、彼女の母の言葉聞いているうちに心配になって来た。

蹴落とされた先輩の中には良く思っていない者も多いと聞くし、何

より彼女は謎の組織から命を狙われている。

一体何が彼女をそこまで駆り立てるのか知りたかった。ライバルとして認めあい、誓いをリスパクトし、背中を任せられる親友の決意を。

一度は立ち止まったアルマは再び歩き出し、そしてまた止まった。

「いずれ話すき。お前なら……話しておきたい事でもあるし」

止まった足は踵を返し、振り向いた顔には普段の厳しい眼光があった。

赤の瞳に突き刺さされ、青の瞳がギンと固まる。逃げられないくらの覇気を伴ってアルマが歩いてくる。

目の前に再び立った彼女は、抱き込むように伸ばした手をしっかりと両肩へ乗せてじつと見つめてきた。

「その為にも、お前も負けるなよ。絶対生きて、生きて。生きるんだ」  
「う、うん……」

要領を得ないまま返事だけすると、アルマにしつかりと手を握られ、再び踵を返した彼女は背を向けたまま手を上げて部屋を出ていった。

「生きる……か。うん、生きるよ。あたしには誓いを果たして帰りたい場所があるもの」

あれが親友の精一杯の優しさ。仮面をつけ身動きが取れない中で見せてくれたありったけの友情。そう受け止めて、シャニーも自分の道を歩み出した。

道は違い、互いに背を向けていても必ず見つめる先は一緒——そう、友の無事を祈りながら。

## 第9話 新風の息吹

手先で転がす石ころの擦れ合う間隔がどんどん早く、そして悲鳴を上げるように強くなつていく。

半年前は取るに足らない未熟な小娘だと歯牙にもかけていなかった。それが最近ではどうだ？ 騎士には似つかわしくない、軽はずみで能天気な声を吐き散らし、事ある毎に騎士団を引つ掻き回している。

今日の会議でもそうだった。意気天を衝き、影無き清新の風を吹き込む『妖精』と言えば聞こえは良いかもしれない。だが、あそこまで主張が過ぎると目に余る。

「そのセリフをキサマが言うな!!」

石を見つめていたイドウヴァは思いのまま机に叩き付け、弾け飛んだ石は床に転がり落ちて割れた。

「クククッ……そうだ、それでいいのですよ。残れない者はそうして底辺で転がってればいい……」

——1月 20日 AM 11:05 カルラエ城 第一会議室

「以上です。ご検討をお願いします！」

もうとつくに十八部隊の持ち時間はおろか、会議自体の終了予定時間だつて過ぎている。ようやく全ての企画を報告し終えたシャニーの声はそれでも枯れずエネルギーに満ちている。

だが、万丈の気を吐いてきた乙女が頭を下げた途端、会議室は静まり返ってしまった。彼女にとっては慣れたものだ。そして、会議を取仕切る副団長からこの後返ってくる言葉も。

「検討も何も、一体何を検討すればいいのですか？」

(今、一から十まで細かく説明したじゃんツ!!)

そう言いたくなる気持ちをぐっと抑えて言葉を飲み込むと、イドウヴァの顔を睨むように見つめる。ここで副団長の威に屈してしまつたら、仲間や、支えてくれた多くの人たちの想いを捨てることになる。

一度背負った想いは簡単には諦められない。勝つまでは負けない



と誓いを刃に乗せて、この部屋でだけは、*“本来の自分”*は捨てて剣を握ることにしていた。

あなた達は、私たちの希望——あの言葉が、あの笑顔たちが、誓いを超えた決意を与えてくれ、心に青焰が噴き上がる。

「ですから、この村には大きな倉庫が無く——」

「それは聞きました。彼らで出来る範囲は彼らにやってもらおうよう、毎回指示しているはずですよね？」

一度は却下された倉庫建設と鉄路の延長を求めた今回の企画だが、イドウヴァは前回と同じように切つて捨てようとしている。倉庫を作るくらいは彼らにできるだろう——と言う事らしい。

数か月前なら、そう言われてしまえば力なく席に座るしかできなかった。だけど、あんなにも自分たちの事を想い、待っていてくれる人がいると分かった今、ただ朗らかな甘い人間のままでこの場に立つことは己の誓いに反する。

「こんな吹雪の中、村人によってもらおうなんて危ないじゃないですか！ それに、村々にはお金だつて無いんです！」

二月まではまだまだ死を運ぶ風が吹き続けるイリア。ろくな設備も装具もなく吹雪の中で村人たちに倉庫建設をさせるなんて、とてもではないが承服できない。

（ゼツタイ通して帰るんだ。それまでは絶対に会議を締めさせないぞッ）

目に鬼火を燃やして声を張り、何とかイドウヴァの心を動かそうとあれこれ訴えていると、不意打ちするかのように横槍が飛んできた。「金がいくらでも湧いてくると思つて貰つたら困るよ、十八部隊長。自分で稼いでんならともかくさ」

ありありと敵意を見せつけるような尖った声をあげながら、回つてきた資料を何度も机に叩き付けているのはマリツサだ。第二部隊復帰をエサにイドウヴァに絆された第五部隊の長は、彼女が右を向けばそちらを向く完全なイエスマン。

（コイツ……ッ）

即反論したくてもシャニーは一瞬言葉に詰まった。十八部隊に

とって一番苦しいところを的確についでくるあたりは、彼女の考えと  
いうより、点数稼ぎにイドウヴァの気持ちを代弁しているようにさえ  
も聞こえる。

それでも、自分達の仕事には自信がある。民が救いを求めているの  
に、彼らはその声を知らない。手を取り合うべきなのに、何故こんな  
金の話ばかりなのだろう。稼ぐ者こそ至上と貴賤を語ってくだを巻  
く手合いには付き合っていられない。

「でも！ 騎士団が資金獲得に奔走するのは、イリアの人びとを幸せ  
にするためじゃないんですか？」

「だからその配分先をきちんと考えなきゃって話でしょ？ 分かって  
ないな」

周りの部隊長もこくこくと頷きだしている者がいる。マリツサが  
ここぞとばかりにイドウヴァ派ナンバーⅡ——第四部隊長キリネに  
目で同調を求めだした。それを躲すように資料へ目を落とした彼女  
から横目にじつと視線を送られ、シャニーはぎゅつと拳を握る。

（キリネさん、ありがとう……。負けませんから！）

派閥を越えて見守ってくれる人もいる。シャニーはありつたけで  
叫んで反論するが相手も黙ってはいない。あざ笑うかのような口調  
で斬り返してくるその顔には明確な敵意が浮かんでいて、企画を潰し  
てやろうとする思惑がはつきり伝わってくる。

マリツサはわざわざ音が出るほどに資料を振りだした。

「こんな案件にいちいち回してたらさあ、いくらあっても足りないん  
だよー！」

吐きかけるように言い切ってそのまま資料を放り捨ててしまった。  
（金も稼げないクセに、人の仕事の邪魔しやがって。ウチにいる下っ  
端と同じ年のくせに……）

彼女にとっては、十八部隊の報告はいい迷惑だった。この前だつて  
彼女達の企画実行をイドウヴァに振られてとばっちりを受けた。結  
局、あの案件も絞られた予算では出来るはずも無く宙ぶらりんのま  
ま。チャンスをもたらたはずが、これではまた格下げだ。今回も、こ  
んな国内の小さな案件ではこつちに飛んできても不思議ではない。

マリッサが蔑みの眼差しで突き刺さってくるが、シャニーの視線は別にあつた。

(あたし達の……みんなの……よくもっ)

放り捨てられて地面に落ちた資料。彼女は珍しく柳眉を釣り上げると席から離れてつかつか歩き出し、資料を拾ってマリッサに突き返した。

「こんなつて！ そんな言い方ありますか?!」

「それ以外に何て言うんだよ？ こんなシヨボいので——」

「あなたは、あの村の人たちがどれだけひもじい中で震えているか、見たことがあるんですか?!」

目の前まで来て気炎を吐く青い瞳に迫られて、マリッサも思わず後ろに退いた。こんな少女を抜け出さないような年の人間なら、少し強く言つてやれば黙るだろうと思つていたのに。

——自分で見てからものを言え!

今もギリつと睨む青き瞳は、月夜に輝く鬼火の如く浮かび上がり、そのまま斬りかかろうかというほどに鋭い。

だが、こんな年下の娘に威圧されて黙つていてはプライドに障る。そっちがその気ならと、マリッサも机を叩きつけて立ち上がるとシャニーに顔を押し付けた。

「じゃあ君は、私たちがどんな苦勞をして外で稼いでいるのか知つているのか？ 契約の一つもこなせない部隊に言われたくないね!」

国内でのんびり仕事している穀潰しに、外の仕事の何が分かるのか。

シャニーの言わんとした事を、そっくりそのままにして返してやつた。自分達の失態は棚に上げて格上部隊に説教など、だからイドウヴアに目を付けられるのだ。

(どうだ？ これでもまだ何か言えるかよ?)

いくらこの能天気な人間でも、十一月に起こした事件を忘れてはいまい。思惑通り、それまで攻め一辺倒だった瞳が揺れたのを見逃すわけはない。

「分かつたらサツサと席に戻れよ。時間の無駄だよ」

勝った——笑みを浮かべて顔を円卓へ戻し、一瞬ぎよつとした。第四部隊はじめ、イドウヴァ派の部隊長達の視線がこちらに集中していたのだ。思わずその先を追うとシャニーと視線が合った。彼女は退いていなかったのだ。

「それは……それについては反省しています。皆さんにも迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

—— やってしまったことは、省みないといけないと思う

耳につけたピアスが揺れる。ロイの言葉を心の中で思い出しながら静かに頭を下げた。その直後に、彼が掛けてくれた言葉をしっかりと握りしめて。

あの気持ちは間違っているとは思えない。だけど今は、それだけを前面に押し出すわけにはいかない。仲間たちの汗と、『護るべき人』たちの想いをいっぱい背負って、今この場に立っているのだ。勝つためには、今は負けるしかない。

「分かったらもう——」

そう手で払ってマリツサが席に座ろうとした時だった。

「大きな事業を騎士団が担わなきゃいけないのは十分心得てます。だけど、目の前で苦しんでいる人一人を救えなくて！ 役目を果たせてるって言っ方がいいんでしょか?!」

悔しさも怒りもすべて飲み込んで、今はあの人たちの剣となり戦い抜く。マリツサから視線を外し、シャニーは会議室にいるすべてに訴えかけるように腹の底からありったけで叫ぶ。

「あたしはイリアに春を呼びたい！ みんなが幸せになって欲しいんです！ 誰も……——取り残したくない！」

あなた達は、私たちの希望——待っていてくれる人たちの想いを刃に掲げ、希望を湛え続けると誓った不屈の瞳が見据える先にはイドウヴァがいた。

どうなんだ?! ——まるで剣を突き向けているかのよう  
に鋭い隼の眼光は視線を逸らすことを許さない。

「あなたの言い分にも一理ありますね。団長、いかががしましょうか」  
「ここまで火花を散らされては、無下に却下する方が難しい。」

ここに來て初めてイドウヴァはテイトの方に視線をやった。もはや負けも同然。可愛い妹の主張をこの団長が却下するとは思えない。

「民の困窮は見過ごせません。すぐ実行しましょう」

案の定の答えが返ってきた。

諦めろ——背中に突き刺さったイドウヴァのまさかの視線にマリツサは瞠目した。それ以上に、振り向いた先で今もギリつと睨んでくる十八部隊長の目とあった途端、自席に尻餅をついてしまった。

「予算なら予備費だつてあるはずですし」

情けない部下から視線を外したイドウヴァは、団長が続けて口にした言葉を聞いた途端眉間にしわを寄せる。だが、団長がこう指示したのでは従う他ない。まさかの完敗だが、このくらいで済んだのが不幸中の幸いだ。

(……それにしても、この小娘……同じ事を……)

若き部隊長を一瞥すると、今も彼女の眼光は霞構えの太刀先を見据えるようだ。やはり……似ている。

「分かりました。ではシャニー部隊長、倉庫建設の方はあなた達に任せます。人の手配等は事務方にあなた達から指示してください。鉄路については我々で検討します」

淡々と決定事項をシャニーへ指示していると、その横で蒼い顔をしているマリツサに目が行った。

彼女は大きく息を吐きだして瞳を震わせている。当然だ。仕事を回さなかった理由くらい察しているだろう。

エネルギーに満ちた若さ溢れる声を恨めしそうに睨む姿から目を切った。

「はいっ、ありがとうございますー!」

剣を下したシャニーの瞳には喜びだけが溢れていて、先程とは別人のような春陽の如き声が会議室に響く。

ようやく、ようやく勝った。席に戻った彼女は椅子に身を預けて天を仰ぎながら大きく息を吐きだした。

時計を見れば十一時半をとつくに過ぎている。一時間の激戦の末、提案した企画全てを通したのだった。

「今後も民の救済には優先して資金を回しましょう。予算は守る事が目的ではないですから」

団長の指示を聞き、部隊長達はいそいそと部屋を出ていく。

誰もいなくなった会議室で、シャニーはしばらく恍惚と天を仰いだまま、勝ち取った高揚感に浸る。

「みんな、あたし頑張ったよ」

ここまで心を鬼にして、刃に炎を掲げて戦ったの初めてだった。それも、大事な人たちが教えてくれた気持ちと、仲間が託してくれた十八部隊の命運の為。

自然と顔には笑顔が湧き上がり、ぼつと立ち上がると猛然と部屋を飛び出した。全力疾走のまま、行き交う騎士たちが慌てて避ける道を一直線に駆け抜けたシャニーは、そのままの勢いで十八部隊の詰所になだれ込む。

「みんな！ 企画通ったよ！」

机に向かいじつと結果を待っていた隊員たちの視線が一気に集まってきて、彼女は歓喜を力の限りいっぱい叫ぶ。飛び込んできた弾ける声は部隊に希望を抱かせるには十分なものだった。

「よしっ、今回は横取りされなかった？」

「うんっ。あたしたちで事務の人たちに指示を出しておけてっ！」

ルシャナを皮切りに、誰もがガッツポーズを隠せず詰所の中が歓喜に湧く。

今までずっと却下されたり、通したとしても他の部隊が実行したり。なかなか自分たちの手で進めることを許してもらえなかったから、何だか夢でも見ているのかのようだ。

「これでまたひとつ実績が出来たっスね！」

部隊をイドウヴァに認めさせるには実績を積み上げるしかない。

嬉々としてシャニーの肩を揉んで労うミアアの顔に満面の笑みが咲く。終了予定時間から三十分以上過ぎているところからしても、リーダーがかなり戦っていたことは部隊のメンバーにも伝わっていた。

「みんなの頑張りのおかげだよ。ありがとう！」

それもこれも周りで笑っている六つの瞳のおかげだ。彼女たちが汗を流して情報を集め、民との信頼を築いて戦いの場へと赴く自分を支え続けてくれたから。シャニーから自然と漏れる感謝の言葉。

「事務の人たちへ連絡したら、あの村の人たちに報告に行こう！」

「ん、みんなきつと喜ぶ」

歩き出した手をレンにとられた。見上げてきた銀の瞳は嬉しそうで小さな口がはつきり微笑んでいる。レンにあそこまで言われていなければ、きつとマリツサに押し切られていたに違いなかった。

シャニー達の間飛び込む様に、ルシャナが二人の肩を抱きながら背中を押してきた。

「リーダー、お疲れ様。私たちの分も戦ってくれてありがとう」

いつも厳しいルシャナからの労いの言葉はすつと心に沁みこんできて、シャニーの顔に浮かぶ笑顔をますます輝かせた。

仲間からの激励、村々から聞こえてきた信頼。背負った全てが、刃に掲げる炎を強くしてくれたから勝てたのだとはつきり言える。人の信がこれほどに勇氣と力を与えてくれるものだなんて、背負ってみて初めて分かった。

事務方に連絡を入れ、厩舎へ向かう廊下に立ち止まったシャニーは、南の空を見つめてそつと漏らした。

「ロイ、あたし頑張ったよ。今度教えてあげなくちゃ」

何よりも、マリツサと戦っていた時にずつと傍にいてくれたような気がする大好きな人に感謝してもしきれなかった。

彼が掛けてくれた言葉が無ければ、きつとこの場に立っていることは無かった。どうやって伝えたら一番喜ぶだろうか。耳に揺れるピアスへそつと手を添えて名を呼び、仲間を追うべく彼女ははつらつと駆けていった。



一方、イドウヴァは第二部隊の詰所がある並びの廊下を歩いていた。その口元は厳しく閉ざされてぴりぴりした肩が空を裂く。憤懣ふんまんが隣について歩くマリツサにも伝わっているのか、女王の機嫌を窺う

ように彼女の視線はおどおどしている。

「やれやれ、最近シャニー部隊長は急に母親に似てきましたね」

独り言のように漏らすイドウヴァの脳裏に二人の顔が浮かぶ。

一年前はまだ幼さ丸出しの新人だったというのに。あの顔立ち、あの気質……全てがあの子に見えて腹立たしい。

自分を抑えてあの女が団長となった日からずっと肩書に「副」を押し付けられてきた。その呪縛は、あの女が消えてからも変わることなくまとわりついてくる。

（何なのだ、あの天を衝くような意気は……。——まさか事を知って、復讐でもしようというのか……）

そんな筈は無いとイドウヴァは無意識に首を振っていた。

たとえばあそこで調べ物をしていたとしても、そこまで辿り着けるはずが無い。そもそも、その話は元から地下にあつたはずだ。もし——元から知っていたとしたら……。

「国内案件に現を抜かしていたら、外に稼ぎに行ける時間が無くなるのに何を考えているんだか。これだからガキは。十五で部隊長なんて時期尚早なんですよ」

考えを巡らせていると、ふいにマリツサの声が聞こえてきてはっと我に返る。そうだ。そんなはずはない。あの話を十五、六の娘が知る訳が無い。何より自分は手を下していないのだから結びつくはずも無い。

（あれは事故。そう……——事故なのですよ）

任務先で団長をはじめとした精鋭部隊が雪崩に巻き込まれたあの事件は、事故なのだ。暗殺を企んだのでもなければ、雪崩を誘発させたわけでもない。たまたま、団長が向かったところに雪崩が起きた——事故なのだ。

「でも、それでも三月で終わりなんですよね？」

マリツサが口にした言葉に、イドウヴァは自身に言い聞かせながら口元へ笑みを浮かべた。

何を焦っているのか。生殺与奪の権を握るのはこちら側ではないか。



「ええ。いつまでも金食い虫のままでおられては困りますから。いい加減稼いでもらわないと」

イリア連合会議の場でも話題に上がってしまった以上、十八部隊は簡単には潰せない。あの生意気な団長の抵抗にはほとほと参る。生真面目だから表の世界にほとんど敵が居ないのは厄介だ。姉も、妹も、つくづく厄介な家系である。それも……三月で終わる。

だが、あの氣質が事に気づいてしまったら何を起こすか分からない。

(やはり、ソルバーンを何とか籠絡ろうらくして亡き者に……いや)

そこまで考えてそのカードは一旦しまった。

あの剣が何も生み出さないうままと言うのも惜しい。今まで浪費してくれた分、しっかり稼いでもらわないと困る。ただでさえ遅れているのだから。

「予算は守る事が目的ではない……そんなこと分かっていますよ。あなた達には不要というだけだ」

もつともつと、他に回す先があるのだ。限られた資金は、相應しい場所に宛がってこそ価値のあるもの。目先の人気取りに使ったところで、それはただの無駄遣いでしかない。

すでに三年後を見据えて動く中、エンジェルヘイロー以外の全ては無駄に映っていた。

だが……大人しくしてくれているのなら、そのための駄賃としては悪くもない。そう、今は。

「……解体だけでは済みませんよ。これ以上邪魔をするならば考えなければ。ただでさえ、あなたは……」

部屋に戻り、机に向かうと目についた丸玉を二つ手に取り掌の上で転がしてみる。

(そうですよ。こうして大人しく、摩擦なく転がっていればいいのです)

それなのに、いちいちと邪魔をしてくれる。傍に残しておけばいずれ災いとなるのは目に見えている。会議の場で見せつけてきた、青の瞳に宿す気鋭。今思い出しても、あの女そのものだった。

「イリアに春を……ですって？　——ッ、そのセリフをキサマが言うな!!」

思わず机に叩き付け、弾け飛んだ玉は床に転がり落ちて割れた。そうだ、それでいいのだ。残れない者は、そうして底辺で転がっていけばいい……。

「後ろ盾がなくなった時が、あなた達の最後です」

席を立ち、今も割れた姿を晒しながらも揺れる石を渾身に踏み碎くと再び部屋を後にした。

## 第10話 元気かな、会いたいな

若草色の髪を風になびかせ、カルラエ城を目指すミリアの小気味良  
い鼻歌が風に乗る。

もう後一か月もすれば終わりを告げる極寒の空は、太陽が未だ昇ら  
ず黎明を黒に包む。その中を飛ぶ純白の天馬はそれでもくつきりと  
輪郭を残し、寒空を引裂きコントレイルを残していく。

いつも時間ギリギリの登城だが、今日は気持ちよく早起きしてし  
まった。たまには一番に登城して皆を驚かせてやろうと気合を入れ、  
急がなくていい黎の空でトップスピードに乗る。

城に着き、詰所がある廊下を歩いていく。やはり部屋に灯りは点い  
ていない。不思議な達成感に白い歯を見せていたミリアだったが、ふ  
と廊下の奥に目が行き、詰所へ入ることなく直進して城を出る。

「ありや、一番だと思ったのに」

一旦外に出て通路を挟んだ反対側に見える扉の先は、夜や吹雪の日  
によく使う室内稽古場。入団して間もないころ、シャニーによく稽古  
をつけてもらった場所だ。

その場所には既に灯りが見え、扉を開けた途端に聞こえてきたのは  
鋭く鋒が空を切る音。この音がするなら間違いない。中に入ってい  
くと予想通りシャニーの背中が見え、電光石火の連撃を振るっては青  
い髪を揺らしていた。

「シャニー、おはようっす。早いつスね！」

「あつ、おはよ。ミリアこそ早いじゃん！」

剣の流れが止まったタイミングを見計らったように掛かる声。

びつくりして振り返ったシャニーは、朝から明るい顔で手を振って  
いるミリアに気づき、白い歯を見せながら同じように応えた。

似た者同士、互いの元気が近づくだけで元気になれる。稽古するに  
したって、一人で籠るより仲間がいる方が俄然力も入る。護りたい人  
が目の前にいれば、やはり意味は大きくなる。

「いつから来てたんスか？」

「一時間くらい前？ あたし、うちが近いからさ」

姉が在籍していることもあり、カルラエ近郊に住んでいるシャニーにとつてカルラエ城は小さい頃から身近な場所だった。

歩いてでも往復できる距離は自然に登城は早く、帰宅を遅くさせた。こんな近い距離ですら、姉は時間を惜しんで城に寝泊まりしていると考えると、団長がいかに大変なのか最近よく考えることもある。

「ミリアもどう？ 朝ごはんの前に軽く」

ただ稽古を見ているだけのミリアへ左手に持った剣を掲げてみるが、彼女は困ったような顔をしている。

いつものノリの良さとは違う表情を不思議に思ったシャニーは、剣を下ろしてミリアの許まで歩いていく。至近距離まで近づいた途端だった。

「ひっ?!」

目が飛び出すかと思った。堪らず両手を挙げてしまう。突き付けられているのはクロスボウだ。

「イイツスけど……ウチだとシャニーが穴だらけになるツスよ?」

ボルトは装填されていないようだが、いきなり銃口を向けられては生きた心地がしない。

クロスボウの威力は高く、十八部隊の主砲と言っても過言ではなかった。広範囲へ短時間で、さらに空中から掃射できる武器は強く、相手を足止めする能力で考えたらいくら剣を磨いてもとても勝てない。

「まさかコレを避ける特訓でもするんスか?! さすがシャニーツス!

レベルが違うツスね!」

「へへへっ、矢癖しは十八番つてもんき! でっ、でも、今はヤメとこうかなあ……ハ、ハハハ……」

ノリを合わせたのが間違いだった。ますます銃口が近づいてきて首をぶるぶる何度も横に振った。冗談で無いのはミリアの目を見ればわかる。

弓矢とクロスボウでは勝手が違いすぎる。ミリアの射撃精度は心得ているし、おまけに最近はクロスボウを研究し、自身でバラしてカスタマイズするくらいだから手に負えない。

(は、はは……。こんな相手にしてたら、いくら命があっても足りないじゃん)

穴だらけになる未来しかイメージできない。

戦場ではそもそも弓兵にそこまで近寄られるような立ち振る舞いはしないし、天馬に乗っていれば高所へ退避すればいいだけなのでちつとも当たる気はしない。

万が一、地上で弓兵に近寄られた後では相手の目線や体の動きを見て、一瞬の読みあい勝負に出るしかない。

それなら射られる前に一気に距離を詰めて斬る——持ち前のスピードを生かした光速の剣技が再び稽古場に軌跡を描き出す。

一から四まで剣技を流し、締めには終の風舞までを案山子に叩き込む。ふうつと大きく息を吐きだして剣を下すと、後ろから拍手が聞こえてきた。

「相変わらずスピードがエグいっすね」

「あたしの一番の武器だからね」

ミリアに褒めてもらえて嬉しさ半分、残り是不安だ。

最近戦場で剣を振るう機会が少なくなっているから稽古には余念がない。任務の性質を考えたら機会はないほうが良いのだが、十一月のような強敵がいつ現れるかも分からないと思うと不安が剣を取らせる。

今までずっとそうだ。現状の剣に満足できない不安が、ひたすらに剣を振る原動力となって来た。

「……何か足りないんだけどさ。うーん……」

額の汗をぬぐい、再び構えを取る。

色々試してきた。構えやら武器の軽量化に刀身の形やら……。

槍は姉から仕込まれたし、今も周りを見ればいくらでも手本がある。

だが、剣はディークに基本を教えてもらってから完全な我流。師の構えも見してきたし、彼の相棒の振りを盗んだりもしてみた。騎士団に入ってからひたすら振って研鑽を積んできたつもりだ。

それでも、未だにしつくりこなかった。今握っている剣もあれこれ

改造していて、もはや騎士剣とは言い難い。どうにも、自身の剣の性格と騎士剣に求められている方向性が噛み合わず引つかかるのだ。

そのズレを整えるべく、再び鋒で空を裂く。剣など触らないからか、ミリアはすぐに退屈になってしまったらしい。また後ろからぼやく様な声が飛んできた。

「それにしても、何でこんな時間からこんなところ籠ってるんすか？」

剣を止めて振り返ると、彼女は頭の後ろで手を組みながらこちらを見つめている。どうしようか一瞬迷ったが、観念して白状することにした。

「この時間にしか出来ないからだよ」

本当はミリアにこの場にはいて欲しくなかったのだが、彼女も一度見ている以上、もう隠しておくことはできない。『もう一人の自分<sup>魔人</sup>』の存在を。

静かに目を閉じ、呼びかけるように奥底に眠るものと意識を繋げていく。

「わっ……！　　そ、それツスか?!」

思わずミリアは後ろに退いた。目を瞑ったリーダーから滲み出てきた青焰が天へと揺らめき、あたりの景色を歪め始めたのだ。

聖天騎士団との死闘で見せた青焰と同じものを、目の前でリーダーが噴き上げている。

その焰は最初こそ透き通った美しさを持っていたが、そのうち何か<sup>が</sup>混じりだして黎く変わっていく。

いつしかどす黒い何かを纏い、どんどん美しい青を飲み込み始めた途端、シャニーは目をばつと開けて剣を放り捨てた。その目は焦燥に駆られるように普段の朗らかさを失っている。

「ダメっ、これ以上はやっぱりだめだ」

あの短時間で掻いたのか、額に浮かぶ大粒の汗を拭う。

恐怖をシャニーは克服できずにいた。途中までは湧きあがるセチの魔力が自分を包むようで力が湧き上がってくるのだが、次第に意識が遠くなって体を制御できなくなってくる。

でも、諦めるわけにはいかない。剣を拾い、もう一度意識を集中さ

せていく。

「大変そうツスね」

気付いたら再び辺りに高い音が響いてしやがみ込んでいた。優しく背中を擦ってくれるミリアに返す言葉はどうしても弱くなってしまう。

「得体がまったく知れないからどうしたらいいのかサツパリでき。でも、なんとかモノにしないと」

大きく深呼吸して気持ちを整え、立ち上がって剣を拾った。

何としても、皆を守る剣として自分のものにしなければならぬ。その為にも、コイツにも打ち勝たなくてはなるまい。

「だーかーらーさあ〜！ ガマンなんかしてないでさア、おいでよオ？ こつち来ちやええばタノシイよおう？」

今も囁いてくる声は、さつきまで意識を繋いでいた相手であり自分の声だ。逃げてはいられない。ユーノにも言われたのだ、抑えるのではなく活かすために自分を説得せよと。

あの時は誰にも打ち明けられなかったが、今はこうして仲間に悩みを吐き出せるだけマシだ。

「あたしを使えば誰だってやれるよ？ 例えばく……あなたの嫌いな副団長とか？ 今すぐやりに行こーよオ！ キャハハッ」

思わずびくつと体が震えた。そんなことは望まない。望んでいないはずだ。ぶるぶると首を振り、再び精神を集中させる。

（まだだ。まだっ。こんな声に負けなくらいの何かをきつと掴まなきゃ……）

何も考えず、無になって平常心を保てばきつとこの声にも克てる。そう言い聞かせて自分と意識を繋ぐ。

その顔をじつと見ていたミリアは、またしてもリーダーが剣を放り出すとそれを拾って取り上げた。

「また今度エデツサに遊びに行かないツスカ？ もちろん、オゴリなんて言わないツスから」

剣をそつとシヤニーに返しながらかた誘ってみる。

最近忙しくてまるで遊んでいない。二人とも家に帰っても誰もい

ないからよく互いの家に行って遊んでいるが、最後に街へ繰り出したのはいつだろうか。楽しいことが大好きな者同士、誘って断られたことなど一度も無い。

「おつ、イイねイイね。行こう行こう！ そろそろ春物も見てみたいし」

今回も白い歯を見せてきて二つ返事で決まった。あれを買おう、これを見たい——そんな会話をしていたら気が紛れたのか、シャニーの剣は完全に下を向いた。

「エデッサかあ……」

天馬ならそこまで時間を要さない場所だが、久しく行っていない気がする。思わず懐かしい場所を思い浮かべてシャニーは独り言を漏らした。

「お姉ちゃんのところ、久しく顔出してないなあ」

エデッサ城には長姉のユーノがいる。彼女と顔を合わせたのは八月が最後。あの閃電の魔術師と戦った後、ベッドから動けなかった時に血相を変えて飛んできてくれて以来ご無沙汰だ。

元気になった姿を見せていないし、何よりお礼をちゃんとしていなかったことを思い出す。今頃姉は元気になっているだろうか……。

「お姉ちゃん？」

思慕を募らせるシャニーへミリアは興味津々を向けた。

「エデッサにお姉さんがいるんスか？」

ミリアの知るシャニーの姉はテイトだけだった。姉のことを口にしながら嬉しそうにするリーダーの顔からしても、テイトと同じようにきつと大好きなのだろうと伝わってくる。

テイトがそうであるように、敬愛する人が大好きな人ならどんな立派な人なのだろう。イメージを膨らませていると、シャニーにきよとんとした顔をされた。

「あれ、話したことなかったっけ？ ゼロツトさんの奥さん。ユーノお姉ちゃんはあたしのお姉ちゃんだよ」

「……はっ……？」

イメージが完全に吹き飛んでいく。結構盛っていたつもりだった



のだが、シャニーが口にした名前は遙か上に行く遠い存在で、ミアは信じられなくて固まった。

反応が不思議でシャニーは彼女の顔を覗き込んでみた。びっくりともせず、顔の前で手を振っても反応がない。

「はあああつ?!」

「うわあ?!」

更に顔を近づけたら急にミアに意識が戻り、飛び出すように迫ってくるものだから思わず後ろに飛び退ける。

「びつ、びつくりしたあ!」

「ぜ、ゼロットってあの聖騎士ゼロット様?!」

「……う？　へ？　そだよ？　（何でそんな驚くんだろ?）」

顔を押し付ける勢いのミアに尻餅をつきかけた。それでもミアの興奮は収まらない。それどころか逃がさんと言わんばかりに両肩を掴まれてしまい、シャニーは危機感を覚えて苦笑いしか浮かべられずにいた。

「と、言うことはユーノって、あの『伝説』の天馬騎士のユーノ様?!」  
「そうだよ。お姉ちゃん凄いいよね!　『伝説』だって。カッコいいなあ!」

ゼロットの名前はイリア騎士なら誰でも知っている。騎士の中の騎士、英雄バリガンの再来と謳われ、イリアの中で最も民の人望と他国からの信頼を集める一流中の一流だ。

その妻もまた、天馬騎士団の中では知らない者はいない羨望の的。『伝説』の二つ名を持ち、実力と包容力を備えた歴代最高の団長と謳われる。

まさかリーダーの姉がそんな人だったとは。道理でその下二人も凄いわけだと内心ミアは舌を巻いた。

「シャニーだって『妖精』ってかっこいいのがついてるじゃないツスカ」

姉の事を語るリーダーの顔は何と朗らかなことか。これだけで姉との関係が伝わってくるし、彼女も憧れていると分かる。

だが、姉の事を凄いわけると言っている彼女自身だって、ミアから

見たら別次元の人だった。二つ名を他騎士団から贈呈されるなんて、常人離れしていなければあり得ないのだから。

だが、自身の二つ名を聞いた途端シャニーが真顔になった。

「おばさんになった時に『妖精』って、なんかイタくない?」

因縁の相手からもらった二つ名だから嫌っているのかと思つたらそんな感じではない。時々、こういう反応に困ることを言う。

「はー、もっとカッコイイのがいいな。『烈風』とかさ、テイトお姉ちゃんみたいにさ」

テイトの二つ名は『疾風』。ああ言うのが良いらしい。その後もあれこれとかっこいい言葉を絞り出しては消していくシャニーだが、ミアはまるで付き合う気にはなれず彼女の両手を取った。

「そんな事より、サインもらつてきて欲しいツス!!」

「サ、サイン?! なんで?!」

『伝説』の天馬騎士ツスよ?! 天上人ツス! 家宝にするツス!」

「あ、あはは……。分かったよ、お願いしてみる」

ミアアにとつてももちろん『伝説』は憧れ。雲の上の存在だと思つていたが、こんな身近に接点があつたなんて夢のようだ。

握る両手をぶんぶん振りながら目を輝かせるミアアの押し強さは、領かないと穴だらけにされそうな気がしてシャニーは苦笑いしながら引き受ける。

「あれ……と、言う事は……?」

「な、なにさ? 顔に何かついてる?」

飛んで跳ねて喜ぶミアアだったが、ふと何かが閃いてシャニーの顔をまじまじ覗き込み始めた。

「ゼロット様つてあの王様になるかもしれないゼロット様ツスよね……?」

イリア国内でにわか湧きあがつて来た建国推進論。以前からしきりに唱えられてはきたが、実現を目指すほどの活気はなく常にマイノリテイだった。

それがベルン動乱後一年が経ち、ここ最近は急に熱を帯び始めているらしい。騎士団内だけでなく、村人からさえも噂を耳にする機会が

増えていた。

その中で常に中心に据えられているのはゼロットだ。イリア最大勢力の騎士団を統べ、民からの信望篤く他国にも顔が広い彼を王に――その声は日に日に大きくなっていく気がする。

「もしゼロット様が王様になったら……シャニーは王族関係者?！」

姉のユーノが妻としてエデツサに嫁いだのなら、シャニーはゼロットの義妹で、ゼロットがもし王になれば彼女もまたロイヤルファミリーの一員ということになる。

ミリアの表情がみるみる変わっていくが、シャニーは困惑しながらも口を尖らせた。

「そんな目で見なくて良くない?！」

まじまじと見つめてくるミリアの眼差しは、羨望と言うより似合わないと思っていて今にも吹き出しそうさだ。

シャニーにとっては、今までそんなことを考えたことすらなかったから王族と言われてもイマイチぴんと来ないし、周りからそう見られると思うと不思議な感覚だ。それでも、この目の前にある反応にはがっかりするばかり。

「だって……。またなんか遠いトコに行っちゃうような気がして。何て呼べばいいんすかね」

「うーん……分かんない。考えた事無いし。ってか、義妹は関係ないんじや?！」

「そうなんすかね? 殿下とか?！」

「殿下?! へっ、へへ……。カツコイイけどあたしには合わないかな、やっぱり」

まだ決まったわけでもないのに妙な呼称で呼ばれて鳥肌が立った。だけど、せつかくできた友が離れて行ってしまふのなら、そんなものは要らなかつた。

それに、仮にゼロットが王になっても自分の生活が変わると思えない。現にユーノとは半年会っていないのだし、ゼロットに至ってはずっと傭兵に出て世界を回っているから一年近く顔を見ていない。

「もしそうだったって、きつとやるコト変わんないよ。あたしで役に

立てるところは助けてあげたいけどさ」

願望にも似た言葉が漏れ出す。一つの国になれば——そう思うことは今までも何回もあった。けれども、いざ国としてまとまった時に、自分がどの立ち位置にいるかなんて考えもしてこなかった。これからずっと民の声を聞き、祈りを形に変える仕事をしていくのだと誓っていたから。

「あの話……ホントなのかなあ」

それでも、いざミリアに話を振られ、*「殿下」*なんて耳にしてしまうと否応なしに気になってしまう。どのようにイリアが変わっていくのかわくわくするし、そこにどのように関わっていけるのかを思うと楽しみだ。

「そうなるといいツスよね。やっぱり一つにまとまったほうが動きやすいツスよ」

仲間の言葉に何か希望が湧いてくる気がする。

今までずっと寒さに耐え春が来るのを待つしかできなかった。それが自分たちも春を引寄せるために動く立場になっている。

(もちろん誰がこの激動に活躍してもいいけど、その輪の中に絶対にあたしもいるんだ！)

イリアの黎明の空に、必ず自分が生きた軌跡を残してやる——青い瞳は意気を湛え、剣を握る手がぐつと強くなった。

「もし王国騎士団の部隊長とか任せられたら、ウチを一番に呼んで欲しいツス！」

彼女の瞳を見つめてミリアは直感していた。自分たちのリーダーは必ず変革の中心へと突き進んでいくに違いないと。支えたいこの人は、必ず新しい世界に自分を誘ってくれると。

今までだつてそうだった。天馬にも乗れなかった自分の手を取って生きる道と一緒に探してくれ、家族と言えるような部隊を率いて騎士としての誓いを示している。

これからもきつとそうだ。ずつとついて行くと誓ったつもりだったが、リーダーは大げさだと笑っている。

「ははっ、なにそれ。よっし、もしなったら一緒に頑張ろうよ」

外国で数多の戦場を駆け抜けている上位部隊ならともかく、イリアの中でちよくちよくと賊討伐に剣を振るう程度の部隊が、国の騎士団など別世界の話——シャニーはそう思っていた。

もちろんそれだって騎士として生きている以上は憧れる魅力的な仕事だが、今突き進んでいる道は性に合っていた。成功も失敗も、全てをたった四人で受け止めなければならぬけれど、行動がイリアに反映されていくのを肌で実感出来るこの道が。

でも、たとえどの道をこの先歩もうとも、ミリアをはじめとした家族とはこれからも苦楽を共にしていきたい、心からそう思える。

仲間を得て、今ならあの時よりは立派になったと、少しくらいは姉に自慢できるかもしれない。

「お姉ちゃんかあ」

日が昇り始めた東の空を窓から見上げ、シャニーは姉への思慕を漏らした。

「ちよつとエデッサに行ったとき顔を出してみようかな。アリスちゃん大きくなってるかなー」

話したいこと、聞いてもらいたいことはいっぱいにある。

今から何を聞いてもらおうかと、ワクワクする心が足取り軽く稽古場を飛び出す。朝陽に青髪を揺らし、一日を始めるべくミリアと共に食堂へと向かうのだった。

## 第11話 この白銀に誓って

「……………ふうむ……………」

四方にこれでもかと武具や勲章が飾られた、書斎と言うよりは応接間のような広い部屋。静かな空間に、椅子にどっかり身を預けた男性の感嘆がひとつ漏れた。黒髪を短く整えた彼は、手にした紙面へ真剣な眼差しを注いでいる。

またひとつ机に積まれた資料を手にした時、ノックが聞こえてきた。

「あら、お仕事中でしたの？ 私が済ませておきますから、帰国中くらい、ゆっくりなさってください」

紫髪の女性は部屋に入るなり驚いたようで、黒髪の男性に柔らかい声をかけて労い、運んできた盆からコーヒークップを添えた。

「すまないな。休んでいるつもりだったのだが、つつい……………な」  
「それは……………」

男性の手にした資料に女性が目を落とすと、見慣れた刻印が映った。

「うむ。先日天馬騎士団から入手してな。なかなか面白い」

男性の指差す先を追うと、資料の右下に記されたサインに行きついた。よく知るその名前を見つけ、女性の目元が柔らかく綻ぶ。

「ふふ、あの子も頑張っているのね」

「ああ。一年前はまだまだ時間が掛かると思ったが、さすがお前の妹と言うところか。民の力になってくれるようで安心した」

男性から驚きと喜びで感嘆が漏れる。彼にとっては懸念している事だった。それを動かそうとしている者がいて、まさかそれが彼女だとは。脳裏に浮かぶのは散々おもちゃにしてくれた小悪魔な笑みだが、それが今どうなっているのか興味が湧いた。

「それを聞いたら、きつとあの子も喜ぶわ。苦労も多いようですし」  
「そうか。『妖精』……………だったか。色々……………聞いてみたいものだな」

—————なかなか騎士団内でまとめられず、却下した案件も多いのです

天馬騎士団長も同じように苦勞を語っていたことを思い出す。なぜ纏まらないかは推測の域を出ないが、せつかく出た芽だ。

資料へ再び目を落とす。黎明抜け行く故郷を色付け始めた花に、彼は何度も頷いていた。



一月も最終週の中日。この時期になると吹雪は止んで太陽が顔を出す日も珍しくなく、近づく冬の終わりを少しずつ実感できるようになる。

今日もイリアの空を駆ける十八部隊は、抜けるような空を見上げてどの顔も柔らかい。やはり青空と太陽の下を飛んだ方が、仕事も俄然やる気が湧き上がるというもの。

イリア東部の村を訪れ、そのままエデッサまで足を伸ばして昼休憩にする流れ。その顔に浮かぶ笑顔がどこか普段よりさらに生き生きしているのは、太陽の輝きのおかげか、それとも繁華街を前にした弾む心か。

エデッサに降り立った四人はそのまま繁華街へ向かいかけたものの、先頭の水色のマントが翻るとすぐに止まった。

井戸端会議の円陣はすぐに解かれた。手を振って皆と別れ、再び天馬に乗って飛び出していくのはシャニーだ。士官着の彼女は天馬だけでなく、着ている服に騎乗用のサイハイブーツまで白で目立つ。

「じゃあみんな、後でねー!」

彼女は宙で一回転して弧を描くと、仲間たちに手を振ってそのまま城下町の奥へと一直線。

目指す先はどんどんと近づき大きくなってくる。あの大きな城の中に大好きな姉がいると思うと、ワクワクする心を抑えられない。

興奮に青い瞳がどんどん輝き、さらに天馬のスピードを上げていく。みるみる近づく正門を前に高度を落としもせず、そのまま城内へ突っ込んだ。

「おーい、お姉ちゃん!」

城の外壁部まで辿り着いてようやく高度を落としたシャニーは、迷

うことなくある部屋の窓を覗き込み、爽やかな声で姉の名を叫ぶ。

中には見慣れた紫髪の女性がいて、突然の声に驚いたか辺りを見渡し始めた。もう一回名前を呼び、窓をコンコンと叩いたら、やつと気づいたユーノが小走りにやってきて窓を開けてくれた。

「まあ、シヤニー。どうしたの?」

「ううん。エデッサの方に来たから、久しぶりにお姉ちゃんに会いたくなって思ってた」

それを聞いても、ユーノはあまり驚かなかった。ずっと昔から見てきた妹だから、このくらいなら普通に映っていた。

八月に会った時は別人かと思うくらい沈み込んでいたから一安心だ。こうしてはつらつとした笑顔で天馬を駆る姿は、自然に笑みを浮かべさせてくれる。

ところが、その元気が眼下を一瞥した途端、顔をゲツと歯が見えるほど凍りつかせ両手を挙げだした。

「貴様何者だ! 降りてこい! 従わなければ撃ち落とすぞ!」

「な、何者って……?! 前一緒に住んでたじゃん! あたしだよ!

シヤニーだよ!」

「いいからさっさと降りてこい!」

姉妹の間柄だから特に驚かなくても、ここがイリアの要衝だとシヤニーはすっかり忘れていた。

城門を無視していきなり突っ込んできた鉄砲玉が、あろう事か夫人の部屋に迫っている——そうとしか映っていないらしい。衛兵たちが怒鳴っているがそれだけで済まなかった。

彼らは蟻の巣を突いたように集まりだして弓を向けてきたではないか。あれだけの数に掃射されたら矢躲しなど無意味だ。

「あわわ……っ、そっ、そろそろ思い出してよオ?! あたしだって関係者なのにい!!」

「降りてこい! 話はそれからだ!」

真っ青な顔のままありったけ叫んで団員証を見せるシヤニーだったが、ますます弓が引き絞られて固まった。

「みんなありがとう。この子は私の妹だから大丈夫よ。ね、『妖精』さ



ん？」

『妖精』……。これは失礼しました」

顔を出したユーノがニコツとして掛けた一声ですぐに彼らは去っていった。あの称号も案外使えるらしい。

胸を撫で下ろしたシャニーはすぐに姉に視線を戻す。

「忙しかった？」

「いいえ。さあ、中へどうぞ。お茶を用意するから少し待っていてね」手を挙げて満面の笑みで返す妹が天馬を下す後ろ姿を、ユーノはじつと笑顔のまま見つめる。ちよつと顔を見て喋っただけですぐ分かる。天真爛漫は変わっていないなくても、もう自分の知っている見習い騎士ではないのだと。



しばらくするとノックする音が聞こえ、扉を開ける執事の横にニコニコする妹の姿が見えた。

だが、彼女が着ているのは軍服だ。シャニーが見習い修行に出る前はこの城で一時期一緒だったが、その時は普段着で妹として暮らしていた。今は任務中なのかしっかりと天馬騎士然の格好をしている。

それに何より目を引いたのは、彼女が着ている軍服の変化。白のミニワンピース風の服に白のサイハイブーツ、水色のマントと士官衣装をまとった姿は天馬騎士団の幹部であることをそれだけで示す。

「あなたがその服を着ているのは初めて見たわ。頑張ったのね」

噂には聞いていたが、この年での部隊長への抜擢は異例だ。だいたいが三年くらい部隊で経験を積んでから次のステップが普通なのに、テイトも彼女にしては随分と勝負に出たように映る。

「えへへ、毎日頑張ってるよー」

頭を撫でられて嬉しそうにする妹の姿は、やはりどこか稚さを残しているが、それでもここまで嬉しそうにするなら、その責を果たしているという事だろう。

「あなたの事は良く聞いているわ。さすが部隊長就任の最年少を更新しただけあるわね」

もう一度妹の顔に視線をやり、その青い瞳を見つめてみる。よく知る朗らかな眼差しだけではない。大事なものを見つけ、誰かの為に戦う強さをはつきりと感じる。

入団半年での部隊長就任は歴代でも最年少であり、それまで記録を持っていたユーノを三か月も上回るスピード出世だった。

ところが、その話を振られるとそれまでの笑顔が嘘のように沈み、はあっと大きいため息をつき始める。

「お姉ちゃんには敵わないよ。色々失敗ばかりしてきてるし」

シャニーにとってはとにかく失敗だらけの一年だった。入団から九月までは、今思い出しても顔から火が出るほど恥ずかしい光景ばかり浮かんでくる。だけど、全てのプロセスが今を導く必要なシーンだったと受け止めてきた。

「……あ、色々ってことは十一月のことも……」

「ええ、もちろん」

「はうあ……。やっぱり……。ガーン……」

それでも、それまで起こした失敗とはまるで別次元の大ごと——契約違反の話までは耳に届いていて欲しくなかった。

不思議だ。特に表情を変える事もなく姉はそのまま頭を撫でてくれる。

「お姉ちゃんはどう思った？」

一度は俯いて外れた視線だったが、懇願の眼差しが再びユーノを見上げる。

聞かずにはおれなかった。姉は、世界で一番の味方だと信じたユーノはあの事件をどう見たのだろうか。

姉の事だから優しい言葉をかけてくれるかもしれない。その言葉は確かに恋しい。けど、今欲しいのは慰めの言葉なんかではない。……ワガママか。

その意図を汲んでくれたのか、特に考える素振りも無く、優しい笑顔のまま姉は返してくれた。

「え？ あなたらしいと思ったわよ」

「へ？ それだけ？」

もつと、あの時あするべきだったとか、部隊長としては思慮が足らなかったとか、先輩としてアドバイスをもらえると思っていた。騎士団中からそんな声を投げつけられてきたから姉の言葉を聞いたかった。でも、ユーノは笑っているだけ。

何か、肩透かしを食らったような気分。失敗をらしいと言われてしまったては、ストレートに叱られるよりよっぽど堪える。

「ええ、それだけよ？　だって、あなたがその時最善だと信じたのでしよう？」

「——ッ」

ユーノの言葉の意図はまるで違った。

その時、その場にいた者が導き出した結論を、現場を知らない人間が結果だけで判断など出来はしない。

「現場に最良なんてそうそう無いもの。逃げずに、信じた最善を貫いたのね」

結果は常に最良と比較されるもの。大事なことは行動した者たちが最善を尽くしたかどうか。覚悟を宿す青焰の瞳を見れば、シャニーが何度も頷かなくとも答えは分かる。

「私はそれを信じるだけ。辛い思いをしたわね」

じんわりと心が喜びに溢れて零れ落ちてくる。

姉から一番に欲しかった言葉は叱責なんかではない。信じている——世界で一番に信じている人から贈られた想いは、部隊長としてどれだけ凜としようとしても、溢れる気持ちを抑え込むには優しすぎた。

「ありがとうお姉ちゃん。いつも、いつもあたしのこと、大事にしてくれて。だーい好きだよ！　うん、大、大、大好き……」

気づけばユーノの胸に飛び込んで、その温もりの中で傷ついた翼を癒していた。やはり姉と言うよりも母だった。

だけど、すぐにばつと顔をあげた。大事な人がまた一人信じて支えてくれていると分かって、喜びがめそめそを吹き飛ばす。昼休憩の時間を使って来ているのだからもつともつとお喋りしたい。

「あ、そうだ。アリスちゃん大きくなった？　久しぶりに会いたいな」

最後に会ったのはいつだろう。動乱が収束して間も無い頃だった。あれから一年弱経ってどんなに成長しているのかと思うと、姉に連れられて歩く廊下もスキップしてしまいうさだ。

その軽く跳ねる気持ち、纏う士官服が押さえ込む。ちゃんと自分が一人前の騎士として生きていると姉に見せたかった。

「うわー、カワイイなあー！」

部屋で乳母と共に女兒がふらふらと遊んでいる。

普段見かけない人に興味津々なのか、屈託のない笑顔と言葉にならない嬉しそうな声をあげながらよちよちと歩いてくる姿に、思わずシャニーは目を輝かせて抱き上げた。

「あたしもいつかこんなかわいい子欲しいなあ」

しばらく頬ずりして抱いていると、普段考えたことも無かったはずなのに急に漏れてくる言葉。自分の娘、一体どんな子なのだろう。赤ちゃんとは本当に魔法だ。

「ふふ……。焦らないでまずは良い人を見つけなさい」

随分先の未来に想いを馳せてうっとりする妹にユーノはふつと笑う。

妹の場合はもう出会っているらしい事は、掛けた言葉への反応で分かる。その成就を祈るように娘をあやす妹を見つめていると、廊下から足音が聞こえてドアが開いた。

「おや、シャニーじゃないか」

「あつ、お義兄ちゃん！ 帰って来てたんだね！ おかえりなさい」

「うむ。先週帰国したところだな」

聞いたことのある男性の声に呼ばれ、振り向いたシャニーはあつと驚いた。

そこに立っていたのは黒髪を綺麗に整えた立派な体躯の男性。この城の城主でありユーノの夫ゼロットだった。

（この人が、もしかしたらイリアを統べる王になるかもなんだ……？）  
思わずまじまじと見つめていたら、ゼロットは視線を外して娘に目をやりだした。

以前おもちやにしてしまったから警戒されているのだろうか。本

当はエライ人なのだが、こうされるとついついイタズラ心が疼いて我慢するのも大変だ。

「アリスを見てくれているのか？　可愛いだろう？」

「うん、すっごいカワイイ！」

威厳溢れるその眼差しとは裏腹に、彼の口から出てきたのは娘への真つすぐな愛情。シャニーが抱く娘を屈んでじつと見つめ、偉大な騎士とは思えないほどに相好を崩して笑うさまは妙にギャップがある。シャニーは思わず口元を抑えて笑ってしまい、ゼロットはばつ悪そうにまた視線を外す。

「なんか義兄ちゃん見たの、一年ぶりくらいな気がする」

「そうだな。あちこち傭兵に出回っていたからな。四月あたりまでは内政に主を置くつもりだ」

聞けば、イリアの長い冬を支えるため、春先からずっと世界中で戦い続けてきたらしい。ある時は戦場に立ち、ある時は町の者を助け、さらにある時は他地方の復興作業に従事し……。

きつとこうして娘を溺愛するのも、長い間ずっと逢えなかったからに違いない。

「お義兄ちゃん。アリスちゃん、パパにだっこして欲しいって言うてるよ」

「うんうん、可愛いな。ユーノにそっくりだ」

そして、またすぐに別れなければならぬのだろう。自然に赤ちゃんをゼロットへ渡していた。逢いたい人に逢いたくても逢えない辛さは心得ているつもりだ。

しばらく娘を抱っこして話しかけていたゼロットだったが、まるでスコールのようにぐずりだしてしまった。あやす手段を持たない彼が仕方なくユーノに娘を任せる顔は申し訳なさそうで、やはり偉大な騎士とは思えない。

「そうだ、シャニー」

手が空くと何かを思い出したようにゼロットに呼ばれた。

「ちようど君を呼ぼうと思っていたんだ。後で私の部屋に来てくれ」

「え？　あたし??　はーい。何かな？　お土産とかかな！」

思わず自分を指さしてしまう。好奇心でゼロットを見上げたら、彼は軽く笑って歩き出した。

「まあまあ。それは来てからという事で」

もったいぶられるとますます気になってしまふ。腕時計に目を下すと、そんなに時間の余裕はなさそうだ。姉に手を振り、ゼロットについて部屋を出た。



通された書斎は初めて入る気がする。ぐるりと見渡すと、書斎と言うよりももつと厳かな場所だった。騎士団の大きな紋章旗が奥に飾ってあり、左右の棚には勲章がこれでもかと彼の武勲を称えている。

「君も大分騎士らしくなったな。もう部隊長なものな。その年で全うし立派なものだ」

「えへへ。ありがとうございます……かな」

彼が自分をシャニーとしてではなく、天馬騎士団の部隊長として呼んだのだと薄々気づいていたが、その声を掛けられると自然に背筋が伸びた。

「これ、君たちが作ったと聞いたが本当か？」

席に着いたゼロットが引き出しから何かを取り出して見せつけてくる。

結構な量があるそれが何か分かると、シャニーはあつと無意識に声をあげながら指を差していた。

忘れるはずも無い、汗を流して情報を集め、浴びせられた苦情に涙を堪えながら生み出した誓いの結晶。ゼロットが手にしていたのは、国力向上任務で作って来た企画書だったのだ。中にはイドウヴァにボツにされてお蔵入りになったものまである。

「え、なんでそれを？」

「イリア連合会議の時に、テイトさんが資料として見せてくれたものだよ」

（お姉ちゃん……ありがとう）

思わず姉への感謝の言葉を心の中で唱える。

騎士団の中でなかなか評価してもらえない悔しさに耐えてきた。振り向いてくれない大勢に訴え続け、少数でも好きだ、信じていると言ってくれる人のために剣を取り戦い続けてきたつもりだった。それがまさか、イリア全土の騎士団長が集まる会議で報告されてゼロットの耳にまで入っていたなんて。

——信じているわよ。私と一緒に戦って欲しい

八月の終わりに姉から掛けられた言葉がふと脳裏をよぎる。彼女もずっと戦ってきたのだと、改めて大好きな姉へ尊敬の念が湧いた。「我々も国内軽視は問題視している。それを専門に扱ってくれていることは感謝しているんだ」

傷ついてきた心が癒えていく気がする。シャニーにとつてゼロットから掛けられた言葉は、もう天にも昇るほど嬉しいものだった。

毎日ボロボロになるまで戦ってきた。自身に鞭打ち闘志を出し尽くした部隊長会議の後には、もう疲れ果てて呆然と空を眺め続けたことも少なくない。

それが、こんな偉大な人に認められ、感謝されるなんて思ってもいなかった。誰にも認められない、誰にも理解されない——そんな風に考えていたのが間違いだったと改めて思い知る。ゼロットの声はすなわち、イリアの声と言っても過言ではない程に大きな影響があるのだ。

「そうやって貰えると嬉しい。部隊の子たちもきつと喜ぶと思うよ！」

まつさきに、今頃昼食に舌鼓を打っているであろう仲間たちにゼロットの言葉を伝えてあげたかった。朝から晩まで共に過ごし、苦しみを分かち合い涙を拭いあって来た仲間たち。自分だけが労いを受け取るにはもったいない気さえしてくる。

「これからも是非、素晴らしい提案をして欲しい。イリア連合として活躍を期待している」

イリア連合、それはすなわちイリアに根を下ろす騎士団の元締め的な組織。連合会議もその催しの一つだ。その長であるゼロットから

の激励は、多くの騎士団から活動が認められたということ。

席を立ったゼロットに呼び寄せられ、さつと差し出された手に面食らう。

(こんな凄い人と……あたしが?)

さつきまで義理の兄妹として接していたはずだが今は違う。イリアの頂点に一番近い人が、騎士団の幹部へ手を差し出しているのだ。

ようやく認められた。バリガンの再来と謳われる騎士の中の騎士。その手をしっかりと握った彼女はすくつと背筋を伸ばし、天馬騎士団の幹部として敬礼してみせた。

「はいっ、天馬騎士団 第十八部隊一同、身に余る光栄、謹んでお受けいたします!」

若さ溢れる爽やかな声に乗って掲げられた誓い。真澄の瞳は活き活きと輝いてゼロットを見つめる。

イリアの黎明の空に色を与え、新しい時代の軌跡を描くであろう新進気鋭の瞳にゼロットも無言のまま敬礼を返す。

初めて対峙する偉大な騎士の威圧感に更に背筋を伸ばした彼女だが、やはり慣れないことは長続きしない。

「……なーんてね。へへ」

ついつい茶化してしまう。やっぱりこんな堅苦しいのは苦手だ。

「やれやれ。騎士らしくなったと思ったのだが、君らしさは相変わらずだな」

舌を出しながらニコつとする彼女に、反応に困ってしまいゼロットも笑うしかなかった。

前もそうだった。自分から人を乗せてきたくせに、最後はふらつと肩透かしを食らわせてくる。『妖精』なんて渾名されるのも領ける話だ。

その風の妖精が凍てつく村々に暖かい風を吹き込み、少しずつ春を呼び寄せてきたのなら、これからも信じて託すだけだ。

「褒めるだけでは何も残るまい。これを君の部隊へ贈ろう」

ゼロットは机から離れると、その隣に飾ってあった槍を取ってシャニーへと手渡した。



どこの店でも売っているような鈍色の鉄槍なんかではない。しっかりと宝飾が施され、まるで意志を示すかのように細くともまっすぐに聳える白銀の槍は、部屋の中でもその輝きを失わず気高い。

「わあ……。綺麗な槍……」

思わずシャニーも声をあげた。こんな綺麗な槍は見たことが無い。

去年の九月まで平隊員だった身には銀製の武器など無縁で思わず擦ってしまう。自分が扱うにはずっしりと重いが、この槍を扱う責任を負うようで、持つだけで身が引き締まる。こんなものをもらっていいのかと聞こうとしたら、もうゼロットは背中を向けている。

「ユーノが言っていたが、君は確か槍より剣のほうが嬉しかったか」

奥の棚に置いてあった剣を持つてくるとずいっと手渡された。これもまた、鞘に施された宝飾からしてかなり高価なものだとすぐに分かった。

何か引き抜くことさえ気が引けるほどに高潔な輝きを放っているが、剣使いとしての好奇心がどんな刀身かと疼いて仕方ない。気づけば目の高さに剣があった。

「剣使いはあまりいないし、置いておいても仕方ないからな。好きにするの良い」

中から現れた銀製の刀身には自分の顔が映っている。

鋒で天を衝き顔の前で掲げてみる。美しい刀身を見上げていると、ゾクゾクと覚悟が湧き上がってくる気がした。

——この剣で、この手で、未来を切り拓いて見せる

誓いを改めて心の中で唱え、そつと鞘へと剣を収める。

(この剣に相応しい騎士にならなくちゃね！)

人々の希望であり続ける……その気持ちに更に高まった。人々に信じてもらえ、高みにいる人たちからも認められた。その自信が瞳を凛々とさせる。もう、迷う事など無い。

「ありがとう！ でも、いいの？ 銀の武器ってすごい高いんじゃない」

銀製の武器など、大国の将が持っているイメージしかない。天馬騎士団でも団長のテイトか副団長のイドウヴァしか持っているのを見たことは無かった。何より扱いが難しいのだ、銀製の武器は。そんな

高価な武器を剣も槍もともらってしまうのはなんだか気が引ける。

「君はもう部隊長だ。騎士団の代表……騎士団外の人にそう見られていると思いなさい。連合会議で名前が出ている以上、もう君は無名の存在ではない」

「イリアの騎士団のみんな知ってるってこと……？」

「そうだ。だからそれなり身を整えないといけない」

何だか夢で見ているようだ。いつも村人相手に仕事をしていて、他の騎士団などあまり接点が無いはずなのに、皆は自分を知っている。不思議な感覚に実感が湧いてこない。

「私の前では天真爛漫な義妹でも良い。だが、騎士として歩く以上はそうはいかない。名を知られる者は、その名に恥じぬよう振舞わねばならない。分かってくれるな、『妖精』」

銀製の武器は名誉の象徴であり、これ以上ない信頼の証。ゼロツトの言葉に剣を握りしめ、これを振るう責任をしっかりとシャニーは噛みしめた。刹那、今更ながらにはっとしてそつと耳に手をやる。ロイがこのピアスをプレゼントしてくれたのは、きつとその意味もあつたのだと。

剣を受け取ったことを確かめたように、ゼロツトが両肩にしっかりとその手を置いた。

「これから先、イリアは激動の時代に入るだろう。その時はぜひ力を貸して欲しい」

無意識のうちに、シャニーは思わずゴクリと息を呑んでいた。

——もし王国騎士団の部隊長とか任されたら、ウチを一番に呼んで欲しいツス！

揚々と語っていたミリアの言葉が脳裏に蘇る。ゼロツトの目は本気だ。

しばらく緊張に固まっていたが、彼女の顔にはすぐいつものものいたずら好きな笑みが浮かんだ。今できること精一杯やる、それは別に何も変わらないはずだ。

「うん。あたしの出来る事なら何でもするよ。任せてください、ゼロツト王！」

途中までは頷いて聞いていたゼロットだったが、シャニーが最後を締めた言葉にはあからさまに困惑を浮かべた。

「止しなさい。そんな噂をあまり言いふらさないでくれよ」

してやったりと舌をペロツと出して笑ってくる顔は、どれだけ凜と構えていてもやはり成人して間もない華奢な乙女。

だが、この高みまで登って来た者には老いも若いも関係ない。

イリアの未来を背負って立つ黎明の剣の目醒めに、ゼロットもまた決心して妻の許へと戻っていくのだった。

〈第四章 黎明の剣 終〉

第5章 風の魔人 く懊悩と慟哭とそして、憧憬とく  
第1話 交錯する声

「——ッ!!」

頭から被ったブランケットを跳ね飛ばす。

昏い決意をそのまま映したような薄闇の仮眠室。手を伸ばしたらすぐ届きそうな距離に仲間達がいるのに、それでもダメだ。真っ暗にしていたらそのまま吞まれてしまいそうだ。

とは言え、体は疲れている。少しでも休めなければ。びっしよりとかいた汗を拭いながら、シャニーは誰に向かうでも無く問いかけた。

「一体、何をしたって言うの？ ねえ、答えてよ、どうしてなの？ ねえ……」

——エレブ新暦1001年 2月

今日も詰所には異様なほど静かな時間が流れている。

リーダーが戦っているこの時間は何も手につかない。誰もが机にお尻を引っかけて天井を見上げていたが、ピンとルシャナの目線が廊下に引っ張られる。

たくさんの足音と喋る声が聞こえてくる。会議決戦が終わって部隊長達が会議室から戻ってきたのだ。いつもこの一団に一つ遅れてリーダーは帰ってくる。

ブーツが床を叩く足音がまっすぐに近づいてくる。その足取りにルシャナ達は顔を見合わせて眉を下げたが、すぐに止めて扉に視線を戻した。

「おかえりリーダー、どうだった？」

シャニーがドアを開けると、早速ルシャナと顔が合った。どうやら待っていてくれたらしい。

掛けられた労いにくつと笑みを浮かべてハイタッチまでが精一杯だった。

脇に抱えていた資料を机へどさつと音がするくらい乱雑に置き、転

がり込むように椅子に座って天を仰ぎながら大きく息を吐きだした。自然に集まって来たどの顔も苦い顔をしている。どうにも気持ちが悪く態度に出てしまつて良くない。態度や表情を相手に「観」られるな——よくデイクに叱られた事をまた思い出してしまった。

「二勝三分け。負けなかつたから良かったのかなあ。なーんか……負けた感じ」

毎回の部隊長会議では枯れてもいい位の覚悟で闘志を乗せて戦うから、会議が終わつた後はいつもぐったりしてしまう。

成果が大きければそんな疲れも吹き飛ぶのだが、今日は満足出来るようなものではない。三分け——企画自体は承認されたものの、イドウヴァの指示で彼女の息のかかつた部隊に実行部署を移されてしまつた案件の事だ。分けと言つても、結局イドウヴァに屈した気がして素直には喜べない。

「その三分けつてやつぱり……」

「うん。大きな三つは全部持つていかれちゃつたよ」

はあつと大きなため息をつきながらルシヤナの問いに答えたら、悔しきでむせ返りそうになつた。頭を椅子の背に任せると自然に目が閉じていく。

耳が早い事に、テイトがイリア連合会議で報告していると知つたらしい。報告出来そうな規模の大きい案件と見るや、イドウヴァはすぐに十八部隊から取り上げて自身の息がかかつた部隊で処理してしまう。

連合会議で名前が挙がるのは、当然ながら実行部隊の活動が主になる。百歩譲つて、信じてくれた人たちの祈りを叶えてあげられたと思えればいい。だが、最近のイドウヴァはそれすら奪おうとしている気がする。

——あなたも進歩しませんね

直接攻撃を仕掛けてきた言葉を思い出して口元が歪む。

「提案力は認めますが、もっと資金の事も検討しないと。しっかりしてください」

食いついて食いついて、今回も何とか企画を通したのだが、その終

りにイドウヴァはそんな言葉を投げつけてきた。どれだけ気を張っていたって、ストレートな個人攻撃は堪える。思い出してしまうと尚更だ。

だが、それ以上に不安を湧き上がらせるのは、彼女が締めに使った言葉——

「他の人間と入れ替えを検討しないといけませんかね」

十八部隊そのものを取り上げられてしまうのではないか。

普段なら少し疲れても笑ったり面白い本を読んだり、ふとしたことで吹き飛ぶが、今はとても笑ってなどいられない。まるで疲労が取れず、乾いた瞳がうつすら開く。ようやく手に入れたものが、奪われようとしている……。

「……十八部隊はあたし達の部隊だよ」

ぱつと目を開けた彼女は、机上に広がる資料を見つめながら副団長への怒りを吐き出す。

自信はあった。自分たちを差し置いて、十八部隊を任せられる人間など居ないと。

一体国内の何を知っていて、あんなことを言えるのか。言えるものなら会議室で叫んでやりたいくらいだ。予備費何て取っておいて一体どうするつもりなのか。イドウヴァが民に還元すべきものを抱え込んでいるようにしか思えなかった。

でも、自分の稼ぎはゼロ。いや、十一月の事件を考えれば赤字かもしれない。悔しい、何も言い返せない。その時だ——

「ねえねえ？ 何をガマンしてるのお？」

ふいに頭の中に囁いてきた自身の声に思わず顔をしかめる。

(まただ……)

自分の声が、自分の口調のまま喋りかけてくる。

十二月まではぼんやり遠くに聞こえる程度だったのに、最近はもう目の前にいるかのように鮮明と聞こえてくるし、自分に向かって言っているのだとはつきり分かる。

しかめていた顔はさらに歪み、ギリつと奥歯を噛みこんだ。

「ぐ、ぐめん。——ちよつと稽古してくるよ」

言い終わりもしないうちに、シャニーは部屋を飛び出して行った。残された仲間達は顔を見合わせて渋い顔。

疲れ果てて動かない思ったら、バツと跳ね飛ぶ勢いで立ち上がり、ドアの空くのも待てずに肩をぶつけて出て行く——それだけなら、動いていないと死んでしまいそうな人間だし驚きもしない。だが、最近 は明らかに異常なのだ。

「まただ……」

ルシャナがため息交じりに漏らすと、ミリアやレンも寄って来た。考えている事は同じらしく、顔を見合わせて互いの不安を確かめ合う。

「シャニーまた剣を振りに行っちゃったツスね。午後からどうするんすかね」

ミリアの困惑の眼差しは、窓の外に見える室内稽古場に点いた灯をじっと見つめている。最近はどうして剣を振りに籠ってしまうことが異様な頻度で増えていた。

会議の結果を村人たちに報告してあげたいし、久しく行けていない場所にも足を運ばないといけない。昼休憩までの残り一時間で、午後の活動を決めないといけないのはリーダーが一番分かっているはずだろうに。

「大丈夫かな……シャニー」

レンの小さな拳がぎゅつと握られる。

剣を持って一人で籠るときは、良くないことを考えている時。しかも、普段不満を漏らさない彼女が目に見えてそんなことをする時は、もう限界のサイン。十八部隊にいるものなら誰でも知っている事。そこへ、天井からレイサが降りてきた。

「レン。……ちよつと」

レイサをレンはじつと見つめ、二人は頷きあうと部屋を出ていった。



室内稽古場ではシャニーが無心に剣を振り下ろし続けていた。

向こうに見えるろうそくの明かりをじつと見つめ、赤く染まった瞳で振るう剣。鋒が鋭く空を裂く音は研ぎ澄まされていて、清々しいほどに高く雑味無く響く。

その剣をじつと見つめている眼差し。頭の中に居座る存在をシャニーははつきり認識していた。

「ふふふっ、いい剣の振りしてるね〜」

何かを企んでいるような悪意のある笑い声を、颯に繰り出す太刀風で無理やり掻き消していく。

「ウルサイツ」

「あなたの剣と私の魔力……一緒にしたらスゴイことになると思うんだけどなあ？」

囁きかけてくる。おいでと呼びかけ、引きずり込もうとしてくる恐ろしい声。今更ながらにあの黒き紳士の言葉が頭の中を駆け抜けた。

——力を手に入れる事は悩みの解決にはならない。新たな悩みを背負いこむ事になる。それでもいいか？

悩みどころの話ではない。純粹に恐ろしかった。

力をものに出来ていないのに声だけはどんどん大きくなってくる。

その不安を掻き消すには、ひたすら稽古して自分を納得させるしかない。握る剣に力が籠る。

「何さ、無視するの？ ヒドい人だね」

吐き捨てるような言葉が頭の中に響く。それでもシャニーは答えず黙々と剣を振るい、そのうち怒声をあげながら激しくなる。

ついに疲れ果てて剣を下すと、肩で大きく息をしながらそのまま膝を突いた。

そんな無様な姿を見下ろすような視線は、しばらく静かになつていったが消えてくれない。大きなため息が聞こえたかと思うと、嘲りに塗れた声でまた囁いてきた。

「……だからずつと言つて来たのに。——あのまま寝てれば良かったのにつて」

初めて聞こえてきた時から、おそろく同じことをずつと言いつつ聞いてきたのだろう。最近でこそあれこれと騒がしいが、最初は明朗に聞こ



えず同じトーンが繰り返されていた覚えがある。

ようやく息を整えたシャニーは静かに立ち上がるが剣は降りたまま。

今まで恐ろしくて聞けなかったが、もうここまで目の前に居られるのでは避けて通れない。意を決し、こちらから声をかけることにした。

「あたしもずっと聞きたかった。それ……、どういう意味？」

おっと、頭の中の視線が揺れたのが分かった。

「簡単な話でしょ？」

だが、相変わらず視線に乗る敵意にも似た鋭さと声に滲む侮蔑は消えない。見えないものが放った言葉に、彼女の手から剣が滑り落ちていった。

「私があなたとして生きていけば、今頃……うふふっ」

絡みつくように聞こえてくる笑い声に青の瞳が揺れ、口元がわなわなと震えだす。

自分の声がこんなにも恐ろしく感じた事はかつて無かった。死ぬば良かったのに——この声はずっとそう言い続けていたのだと分かって、思わず胸元を強く握りしめた。

何故そんなことを言われなければならないのか、理解が追い付かなくて表情が固まる。そんな事などお構いなしに、頭の中から追い討ちをかけるように突っついてくる。

「私が質問に答えたんだから、あなたも答えてよ。なんでガマンするのさ？」

ずっとこれも聞かされてきた言葉だ。この声は何を言いたいのか分かっているからこそ、今までも一貫して否定してきた。

そんなはずがない、あるわけがない——今回も何度も首を振って拒絶するが、頭の中から突き刺してくる視線は、言葉にせずとも囁いてくる。嘘は良くないよ。

もうどうにも辛抱ならない。手にかろうじて引っかかっていた剣を握り直し、地面に叩き付けるとありったけで怒鳴ってしまった。

「ガマンなんてして——ッ！」

「殺したいんでしょ？ ……副団長をさあ」

びくつと震える瞳を見つけて、頭の中からまた見下ろすような笑いを投げつけられる。何も言い返せない。

(なんで？ 何で何も声が出ないの??)

確かにイドウヴァには今まで散々にやられてきた。団長選出戦で彼女の顔に泥を塗って以来、何をすることも厳しい当たり方をされて来た。けども、そんな風に思ったことは一度も無いはずだ。なのに……なぜ自分は何も言い返さない？

もう、何が本当で何がまやかしなのか……虚実緋い交ぜになった心は制御が利かず、狂ったように怒声をあたりにぶちまけた。

「うるさい！ あんたにあたしの何が分かるんだよ！」

そこまで怒鳴ってようやく頭にの中から視線が消えた。

だが、シャニーもあまりの仰天に息が詰まり、目が飛び出しそうになった。

怒鳴り散らして振り向いた先にはレンがいて、彼女は今にも泣きだしそうなほどに銀の瞳を揺らしていたのだ。

「レ、レン……。ごめん、びっくりさせちゃったね」

一体どう取り繕えばいいのか分からない。おろおろしながらレンの肩に手を置くが、彼女は震えたまま。いや、手を置いた途端にますます震え始めてしまった気がする。

あんな自分でもびっくりするような怒号を聞かれてしまうなんて。

「シャニー……大丈夫？」

ところが、心配したはずなのに、レンから逆に心配そうに案ずる声をかけられてしまった。

「なんだか……悪いエーギルの流れをしてる」

魔法を扱う者には他人のエーギルの流れが分かる。

対象の宿すエーギルが大きければ大きい程はつきり見えるそれが今、大きく揺らぎ、歪み、そして黒く重く濁っている。いつも爽やかに笑うリーダーからは真澄の青が溢れだしていたのに、今それに黒が滲み荒々しく揺れているようにレンには見えていた。

もちろん魔法を扱えないシャニーにはレンが何を言っているのか

分らない。それでも、とにかく不安げな銀の瞳を安心させようと笑って見せた。

「大丈夫だよ、大丈夫！ あの力をものにしようと思っけき。稽古しすぎたかな」

一体どれだけの力で叩きつけたのだろう。部屋の隅まで弾け飛んでしまった剣を拾い上げると丁寧な刀身を拭き、じっとその刃に自身の顔を映してみる。この顔はずっと——殺意を滲ませてきたと言うのか。

(そんなことない！ 絶対に、絶対にない!!)

あの声はまやかした。そうに決まっている。

再び剣を上段に構えて振り下ろした途端だった。鋭い金属音と共に、手に衝撃が伝わってきて無理やり剣が視界の中で止められた。

「そう思うんなら止めな。そんな蒼い顔してやることじゃないだろ」

シャニーのほぼ正面にレイサがいて、彼女はシャニーの剣を短剣で受け止めていた。

(あたし……仲間がいるのに気づかず振ってたっていうの……？ 違うっ、そんな、そんなつもりじゃない！ 殺意なんて無かった。無かった……)

「一旦休みな。あんた、帰って来てから働き過ぎなんじゃないの？」

レイサに言われるまでもなく、再び剣を放り出すようにして落とし、シャニーはその場に座り込んでしまった。なぜか漏れ出す笑いが声を震わせる。

「やっぱ……疲れてるのかなあ」

一緒になつて屈みこんだレイサとレンが目でしきりに訴えてくる。早く言え、隠すなど。

耐えられなくなつて、シャニーはやつれ切った乾いた声で白状した。

「最近いろいろな声が聞こえてくるんだよね。頭の中から、あたしの声がさ」

苦笑いする顔は弱々しく白い歯を見せてきた。

思わず顔を見合わせる二人。イドウヴァの毒を浴び過ぎてついに

メンタルをやられたかと思っただが、彼女から嘔き出すエーギルの流れ自体は弱ってはいない。むしろ爆ぜるように燃え上がって、いつもの穏やかで澄んだ青焰はどこかへ吹き飛んでしまっているようにレンには映っていた。

こんなことを言ったら仲間が驚くことは分かっていた。予想通りの反応に、シャニーはゆっくりと立ち上がって剣を拾うと彼女たちに背を向けた。

「ちよつとあたし、昼休憩使って一眠りしてくるよ」

静かな足音が部屋を出ていくと、張り詰めた空気がなくなつて静寂が戻り、レイサたちは大きく息を吐きだした。

剣を止められてぎよつとするあたり、本当に気づいていなかったらしい。だいぶ追い詰められている。これ以上は放っておけない。

ずつとリーダーが黙っていた理由は分かったが、同時に二人に浮かんだものは彼女達の視線をすぐに結ばせていた。

「……レイサ」

レンの銀の瞳がレイサを見上げると彼女も小さく頷く。

助けてあげたいが、自分たちではどうすることもできない領域。祈るように見上げてくる瞳に、レイサは最後の手段を持ちかけた。

「ああ。ちよつと様子見て……話振ってみるかね」



仲間たちと離れたシャニーは詰所の仮眠室へ向かった。

少々、年初めから気合を入れていた自覚はある。だけど、この疲れ方は異常だ。

ブランケットを頭から被って目を閉じる。目の前が真っ暗になると、あれこれ声が聞こえてくる。これは……アイツの声ではない。本当に自分の声のはずだ。

(あの時……何もせずに放っておけばよかったよ)

あの時……あの時とはいっただろう。よく分からなくなってきた。本当にこれは自分の声なのだろうか？きつと十一月の事件の事を無意識に思い出してしまったに違いない。……そう思った時だった。

(どうしてこんな、こんな仕打ちを受けないといけない?)

はっとした。今のは本当に自分の声か？

「一体、何をしたらって言うの？ ねえ、答えてよ、どうしてなの？ ねえ……」

「——ッ!!」

ブランケットを跳ね飛ばす。今の声は間違いない。問いかけてきたのだ、アイツが。急に怖くなってきた。だけど、体が疲れ切っているのか、仮眠室の外に出たくても動けない。そこに語り掛けてくる声。

(見て見ぬ振りは嫌いだから、あの時飛び出してしまったけど、こんなことになるんだったら……応えなければよかったよ)

それだけ言うと声は頭の奥へと消えて、もう呼びかけても何も返って来ない。びっしりとかいた汗を拭いながら、シャニーは頭に手をやり眩いた。

「一体、何をしたらって言うの？ ねえ、答えてよ、どうしてなの？ ねえ……」

## 第2話 侵食する夜

「らああああ——ツツ!!」

大きく振りぬいた剣が稽古用の案山子を真つ二つに切り裂いた。迸る青焰が消え、膝を突いたシャニーは肩を大きく上下させて体を震わせる。

「こんな……こんなはずじゃなかった……。こんな事の為に、あたしは……」

目の前で今も無残に転がり揺れる案山子の残骸。このままでは……いつこれが案山子でなくなるか分からない。

あの時……言われた通り踏み留まれば良かった。

何もせずに後悔するのは嫌だから、あの時飛び出してしまったけど、こんな事になるんだったら……言われた通りにしていれば良かった。

(……ああ、ヤダ……また聞こえてきた……)

耳を塞いでも話しかけてくる声にもう抗えず、頭を抱えて天に吼える。

一体どうすればいい、どうすればこの苦しみから抜け出せるのだろうか。

徐々にセチの力を具現化できるようになっているのは、真つ二つになった証人が教えてくれる。だがそれは、少しずつ黎い世界へ踏み込んでいくからだ。呑み込まれそうな感覚との闘い。どこまでなら、呑み込まれずに済むか……消耗するばかりだ。

——守りてえってのは口だけ。実際は、てめえ一人で立てなかつたってわけだ。それで免許皆伝とは、師匠デイクも随分甘ちゃんだな。

うづくまつていたら、ソルバーンの声がのしかかるように思い出された。悔しい。デイクを貶められ、あの男の言う通り立ち上がれずに居る。

だが、悔しささえ呑み込んで心を支配するのは恐怖だった。黎い世界へ意識を引きずり込もうとする声は日に日に大きくなっていく。声が大きくなる度に強く具現する精霊セチの力。恐怖に体が震えている

のに、心は求めてしまっている。恐怖を抑え込むために、力を自らのものとしようとしている。

これではあの男と同じではないか。人を同類呼ばわりした、あの業火の魔人と。

「あたしは……魔人になっちゃったの……？ ……イヤだ……—イヤだアツツツ!!」

欲しかったのは守る剣だった。

未だ月光輝く夜明けぬ稽古場で、シャニーは天へ懊悩を叫んでいた。



今日も晴天が何処までも続くイリアの空。天馬隊が遠くに見え、カ  
ルラエ城へと吸い込まれていった。

村々への午前の巡回を終えた十八部隊は、厩舎から出てくると急ぎ  
足で詰所に戻った。もうあまり時間が無い。

「……うるさいなっ」

「えっ?!」

昼休憩を前に、村で集めてきた情報をまとめようと席に着いたミリ  
アは、後ろからいきなり飛んできた声に思わず肩をすくめた。何も音  
を立てたつもりは無いはずなのに、リーダーの声が真つすぐに突き刺  
してきたのだ。

何事かと振り向いた先では、滲む苛立ちを噛み砕くように顔をしか  
めるシャニーの姿があった。

どうやら自分に向かつて言ったわけでは無いと分かり、ミリアはあ  
ちこち見渡してみた。やはりそんな騒がしさはこの詰所には無い。

「どーしたんスか？ シャニー」

「えっ?! な、何でもない！ 何も言っていないよ、あたし」

不思議に思っただけ声をかけると、寝ているのを叩き起こしたように  
シャニーが肩を跳ね上げて驚きだした。何度も顔を横に振って、聞いて  
もないようなことを口にし始める。やはり様子が変だ。

ミリアが怪訝そうな眼差しを送れば送るほど、シャニーの顔には焦

燥が募っていく。

「ちよつとあたし、席外すね」

こう言つて場を離れるしかシャニーには術が無かった。

これ以上仲間と共にいたら、今度は何を聞かれるか分からない。もう既にレンに怒鳴つてしまつているのだ。

席を跳ね飛ばす勢いで立ち上がると、言い終わりもしないうちにつま先で地面を蹴つて扉に手をかける。

「待ちな、シャニー」

急に体が動かなくなつた。何かに張り付けられたかのように、背後から近づいてくる黒の眼差しから逃げられない。間違いない……これはレイサの暗殺術だ。

「あんた、正直に言うんだよ？ この前言つてたことは本当なんだね？」

影縫いが解かれたのか、体が軽くなつた。でも、間髪入れず正面に回つてきたレイサに肩を掴まれた。ぎつと睨まれて動けない。

(何もわざわざここで言わなくてもいいじゃん……)

焦つたシャニーはすぐにレイサを連れて外に出ようとするが、レイサの手がぐつと肩に食い込む。

走る痛みに驚いて目を合わせると、あつたのはいつもの優しさではなかつた。思わずウツと身を退いてしまうくらいの威圧感で部屋に押し戻される。

「や、やだなあ。そんな怖い顔しなくても」

とつさに笑顔を作つて場の空気を換えようとしたのが間違いだった。部屋に聞いたことも無い怒声が響いた。

「シャニーー！ 冗談言つてんじゃないんだ。ちゃんと答えな！ この大事な時に、部隊の事もそうやって抱え込むつもりか！」

ミリアやルシャナも、何事かと集まつてきてしまった。

正面にはアサシンの目をしたレイサ。左手にはルシャナとミリア……思わず視線を逸らした右手にレンの不安げに見つめる顔。再び左へと視線が揺れる。

逃げ場を失つた顔はついに下を向いた。だが、宙づりになつた視界



の左端に親友の手が見え、そつと手を取ってきたのが見える。

「シャニー、私たち仲間でしょ？ 信じてくれないの？ 私たちの事」

そんな事は無い！ —— ぼつと顔をあげたシャニーは目ですう訴えた。

仲間を信じていないわけではない。こんなことを言っただけで皆を困惑させるだけだから、何も言ってこなかっただけ。

（言えるはずないじゃん……。こんな……。あたしだって飲み込めていないのに……）

黙ったままでいたら、ルシヤナがみるみる目じりを釣り上げだした。信じている、だからこそ……。逃げるように視線を外して瞠目した。誰もが彼女と同じ眼をしていたのだ。

仲間からまでこんな顔をされてはもう耐えられない。観念したようにシャニーはその場に座り込んだ。

「……声が聞こえる」

しばらく黙ったまま動けなかったシャニーが必死に絞り出した言葉はそれだけ。

よく言ったとルシヤナが屈みこんで背中をさすってやると、シャニーの背中は丸まってますます俯いてしまった。

「どんな声なのさ？」

彼女に覆いかぶさるようにして抱きしめてやり、少しずつ答えを引き出していく。

「いろいろだよ。いろいろ……」

観念してシャニーは顔をあげ、大きく深呼吸して目を瞑ったまま天を仰ぐ。

普段の笑顔が剥がれ落ちたその顔には悲愴が張り付いて、再び開いた別人のような瞳が堰を切ったように語りだした。今まで、あの声が自分に向かって突き刺してきた言葉の全てを。

話せば話すほど仲間たちの表情も硬く、沈んでいく。

（やっぱ……。そういう反応になるよね……）

思った通りだ、信じられる筈が無いのは分かっている。だけど……。これほど家族を心配させては、もうダンマリではいられない。

ここまで来たら全部吐き出すしかない。恐怖も弱さも全てさらけ出すつもりで彼女は続けた。

「独りになるのが怖いんだ。アイツ、独りになるのを狙ってるみたいで」

この前の昼休憩だつて仮眠室へ行つて後悔したばかり。結局あの後ベッドを飛び出し、食堂の隅っこでじつと天井を見上げていた。

仲間の許へ帰れば、また変なことを彼女たちの前で言ってしまうかもしれない。でも、彼らから離れて独りでいるところをあの声は待っている。

「それで最近ウチの家に泊まってたんスか？ 言ってくればよかつたのに」

ようやく合点が行つたと顔が言っている。ミリアも妙に感じていたようだ。俯いたら彼女も屈みこんで手を握ってくれた。仲間の手が温かく、寄りかからずにはおれない。

どうすればいいの？ ——もう一人では太刀打ちできなくて、救いを求めて仲間たちを見つめる。

「言えるわけないよ、こんなの」

もつと早く口に出てさえいれば、ここまで心が疲れ果てる事も無かつたかもしれない。

ただど言えなかつた。仲間にながティブな話をして部隊の空気を悪くしたくなかつたし、何より自身の問題。守る剣を求めて踏み入つた道だから自分で解決したかつた。

それがこんな仲間迷惑をかけるなんて。後悔が頬を伝つて零れ落ちた。

「一月まではそんな顔してなかつたじゃないか。最近急になのかい？」

「うん……。何でかな」

レイサには不思議でならなかつた。

誰もが頷くほどに、一月は元気いっぱいだった。特にゼロットから槍の贈呈を受けた最終週は、まさに太陽の如き眩しさだったとはつきり覚えていた。

はつらつとした笑顔が天馬を駆り、空に明るい軌跡を描く姿は、これから始まる一年を現しているかのように思えた。なのに、それが二週間も経たない内にこんな事になるとは。

レイサの問いに本人も答えられずに唇を噛むばかりだが、レンには心当たりがあった。

「最近剣の稽古でエーギルを使うことが増えたから活性化してるんだと思う。たぶん」

シャニーのエーギルの波動が急におかしくなりだした事自体は、レンはだいぶ前から気づいていた。

最初に気づいたのはヴァルプスギルと戦った十一月。そこから一か月空いて忘れていた。リキアから帰ってきた一月あたりから使いだした魔力を乗せた剣は、振ろうとすればするほど青焰エーギルが揺らぎ、爆ぜて濁っていった。

それでも本人は笑顔だったから大丈夫だと思ったのが間違いだった。

「使わなきやモノにできない。でも、使うとアイツの声が聞こえる……全然上達してるようにも思えないし」

使い始めた一月の頃と状況はあまり変わらず、落胆も大きかった。

いつもいつも、鎖の断たれた向こう側と意識を繋げ、魔力を一定まで開放した途端に襲ってくる卒倒感。そのままでしたら、また十一月と同じことをしてしまいそうで、そこでいつも止めてきた。

「一回開放してみればいいじゃないか」

「簡単に言わないでよー」

レイサに軽い感じでそう振られ、気づいたら怒鳴っていた。

悲鳴にも似た叫び声は自分の声では無いような気さえして彼女自身も驚いた。

それを浴びてもレイサは表情を崩していないが、シャニーは後悔に思わず視線を逸らす。

「……………ごめんなさい」

こんなにも自身を抑えられないくらいに動揺していたなんて。だけど、レイサの言う通りに出来たらどれだけ楽だろうか。

「自分を制御出来なくなるんだよ。怖いんだよ……怖い……」  
剣を扱いきれない悔しさが滲み、辛抱できずに俯いた。  
すると、湧き上がってきたのは悔しさより明確な恐怖だった。得体の知れない声に、意識に、呑み込まれそうになって逃げ場を失っている事への恐怖。

そこまで吐かせて、レイサはようやくシャニーの肩から手を離し、しっかりと頭を撫でて抱きしめてやった。

「私たちが助けてやるから、不安だったら何でも言うんだよ。黙っているのは絶対禁止、いいね？」

シャニーを撫でながらレンに目やれば、彼女も小さく頷いている。

時は来た。二人は今夜にでも向かうことにした。こういう話に詳しいであろう賢者の許へ。



薄暗い庵の中はびっしりと古代魔導書が棚に並べられている。埃臭い彼らは、狭間を歩く者達をそのまま飲み込んでやろうかと言うほど天井までそそり立つ。

読書には無関心で普段は本など見向きもしないが、古書特有のどこかかび臭いが鼻をつくその場所でレイサの眼が久々に踊っていた。

「うひょー、相変わらず銭の臭いがプンプンする場所だな」

「レイサ、早く歩く」

少女盗賊時代に忍び込んで痛い目を見た場所だが、何度来ても宝の山にしか映らず盗賊魂が疼いて仕方ない。

子供のようにはしゃぐレイサを一回り下のレンが引いていく。声を聞きつけてきたのか、向こうから腰の曲がった白髪の老婆が杖を突いて歩いてくるのが見える。

「何だい？ 死臭をプンプンさせた奴が来たと思ったら、おまえかい」  
「冗談キツいね、相変わらずばーさんは」

孫を出迎えるには余りに過激な言葉を投げつけてくるが、前科があるから仕方ないのか。

今もレイサの目に映っているのは、希少価値も飛び切りの一番高額

な最上級<sup>デスベント</sup>古代魔導書のようだ。それを庵の主ニイメは見抜いているらしく、杖で孫の頭を引つ叩いた。

顔をしかめるレイサを押しつけてレンがぺこりと頭を下げる。

「師匠、お疲れ様です」

「おお、レンかえ。今日はリザイアの研究でもするかい？」

（え、エライ態度が違うじゃないか……）

レイサは婆の明らかに綻ぶ目元を見て思わず口元を歪めた。レンとは四月ごろからの付き合いだからまだ一年経っていないのに、ニイメのこの心の開きぶりは信じられなかった。

こんな孫を見るような目を見たことは無かった。ニイメとの約束を守って一度も欠かさず魔道研究に勤しんできたレンと、毎日昼寝三昧の盗賊では無理もないか。

なら、レンから言つて貰つた方がよさそうだ。彼女にウインクして背を押してやる。

「師匠、私のリーダーを助けてください。師匠しか頼れる人がいないの」

唐突な愛弟子の言葉に最初は首を傾げたニイメだったが、悲痛に歪む彼女の言葉に耳を傾けるうち、彼女は二人を庵の奥へと案内して座らせた。

用意した暖かい茶に心が落ち着いたか、次から次へとリーダーの異変がレンから溢れ出し、助けて欲しいと何度も何度も銀髪が揺れる。

「ほう……、そりゃ興味の湧く話だね。あたしも話に聞いたことがあるくらいだけ」

ニイメがようやく口を開き、ほつとする二人。もしニイメまで知らなかったら八方塞になるところだ。

知つてさえいれば、後は知識欲が彼女を動かしてくれる。そういう人だ、ニイメと言う研究家は。

「聞いたことあるのか。さすが伊達に六十年以上生きてるだけあるね」

「自然魔法は専門じゃないから、アテが外れるかもしれんがね」

おだてるようにレイサは褒めるが、ニイメにふんと鼻で笑われた。

ここまで露骨に態度を分けなくてもいいとも思うのだが、今回ばかりはこの意地悪な婆さんに感謝するしかない。魔法のまるで分らない自分では、あの子を助けてやれないのだ。愛してくれる者など居なくなったこの世界で、好きだと言ってくれたあの子の事を任せられる人は、自分を闇から引き揚げたこの婆しかいない。

「悪いね、ばーさん。いつも面倒ごと持ってきちゃって。肩くらい揉むよ」

さっそくニイメの背後に回って肩を揉む。相変わらずニイメの顔はツンとしたままで、おまけに憎まれ口まで叩いてきた。

「別にあんたの為じゃないさ、可愛い弟子の為だよ」

「ハン…………。…………ありがとうよ。ばーさん」

何かして欲しければ、まず自分がしなければダメだという事か。それをいつでもできる者たちが羨ましい。お互い素直でないからいつもこんな会話しか出来ないのがどうにも歯痒い。

「大事なんだろう？ そのリーダーの子は」

一つ茶を啜ったニイメは湯呑を置くとしつかりとレンの瞳を見つめて問う。

答えなど聞かなくとも彼女の瞳で分かるが、その口から聞きたかった。引つ込み思案な弟子が、外の世界でしつかり他人と絆を結んでいる姿を。

「私…………私たちの大事な人。ずっと私を引つ張ってきてくれた人だから…………恩返ししたいの」

「だったら、その子連れてきな。一刻も早くだよ」

ばしっとお尻へ不意打ちを浴びせてやったら、レイサは思わず体反らせて痛がって見せてくるが、演技ばかり一流の孫など心配するだけ無駄だ。

ニイメはレイサの腰に手を回してテーブルに屈ませると、二人の目を見て冷たく言い放った。

「呑み込まれてからじゃ手の施しようがないよ」

見る見るうちに歪んでいくレンの瞳。分かっているなら早くしろと、ニイメの眼が更に厳しくなった。

魔道を扱う者ならその意味はすぐに分かる。分かるからこそ、口にした言葉も恐ろしくてどこか口ごもってしまふ。シャニーが戦っているのは、魔道のそれとはまるで次元が違ふとレンは薄々気づいていた。

「呑み込まれる……何に？」

「巨いなる精霊の力——さ」

目の色が変わった。挨拶も済ませず珍しく走って庵を飛び出したかと思うと、レンは天馬の嘶きと共にあつという間に見えなくなつた。

残されたレイサも顎で行けとジェスチャーする婆の顔から察し、目つきが変わったアサシンは一瞬でその場から姿を消した。

### 第3話 風の精霊セチ（前編）

ニイメの庵から閃光のごとく飛び出した天馬。

あつという間にカルラエ城へと帰還し、弾けるように相棒から飛び降りたレンはそのまま駆け出した。

時間は18時を過ぎていて、もう城に残っている騎士は昼間の半分からい。レンは目的の人物を探して廊下を駆けていく。

厩舎、食堂……すれ違う騎士たちは、普段道を譲る姿しか見たことのない小さな弾丸に跳ね飛ばされかけ、びっくりして避けていく。

ドアを勢いに任せて押し開ける。詰所の中からきよとんとするルシヤナとミリアの視線を浴びるが、目当ての顔はない。

部屋の奥を見渡してみる。窓の外に見える明かり……室内稽古場だ。

「レン？ なに？ どうした?!」

ルシヤナに問われるが答える間も惜しい。彼女とミリアの手を取ってずいずいと稽古場へと入っていった。



「そんな不安そうな顔するんじゃないよ、シヤニー」

「ムリあるじゃん！ こんな事しておいて、よくそんな風に言えるよ！」

ありったけ抗議を叫んでもレイサからは何も返って来ず、きよろきよろとシヤニーの視線が跳ねる。

戦場さながらの完璧な連携だった。稽古場に乗り込んできたレンの無言の圧に固まった隙に、三人がかかりで天馬に乗せられ今に至る。

拉致されるように連れてられて来た先はニイメの庵。昼間ならともかく、こんな日没後に訪れる魔女の庵は不気味でしかない。おまけに、脇を固める仲間たちががちり両腕を掴んでいて、これで安心しろなんて無理がある。

庵の闇はどんどん深くなり、天井まで届く書棚が見通せない暗闇の



先まで続いている。なんだかゆらつと本棚から手招きされた気がして悪い汗が止まらない。

「ん、師匠なら大丈夫」

レンが言ってくれると少しは安心できる気もするが、庵が近づけば近づくほどやはり不安が広がり足元が震え始める。

大人しくするしかなかった天馬の上で一応にレンから説明は受けたものの、具体的に何をやるまでは聞かされていない。

ろくに明かりも入らない暗い庵は、恐怖を増大させるには十分すぎる光景だった。少しずつ下半身が引きずられ始める。

「もう一度さ、念のためだよ？ いちおー聞くけどさ……痛いことしないよね？」

誰に聞くでもなく、視線をきよろきよろとさせながら何が起きるのかを探ってみる。

「あんたも騎士のクセに往生際が悪いね」

「エ？ツ?! い、痛くないんだよね？ そう言ってたよね?!」

左右にいる二人は視線をわざと合わせてこないし、前を歩くレイサやレンも振り返ってくれず、明瞭に答えようとしない。それどころか、レイサの言葉は引き込んでしまえばこちらのものとも言いたげで、悪人のセリフにさえ聞こえて来た。

「ねえ……やっぱりパスかなあ。痛いのはちよつと……」

苦笑いしながらやんわり拒絶を伝え、足にブレーキをかけて逃走準備を始めたならレイサにバレたらしい。ようやくに振り返って来たかと思うと、顔に鼻先を押し付けられた。仰天して左右の二人に視線を送っても、みんなレイサの味方か。ますます強く腕を掴まれた。

「あのね、痛いのと解決しないのとどっちが嫌なんだい?」

「やっぱり痛いことするんじゃない? ウソツキー!」

「バカだね。1パーセントでも真実を含んでりや嘘とは言わないんだよ」

「うわーん! 屁理屈だ! 謀略だあ! 人でなしー! 悪魔あーツ!

「ハン、部隊長からお褒めに与り恐悦至極に存じますってな? 裏の

人間に何求めてるんだか」

心の準備さえさせてもらえていないシャニーは、得体の知れない恐怖に目を震わせ喚き散らす。馬上では怖いことはしないから大丈夫だとレンは言っていたのに、レイサのこの言い草だと何をされるか分からない。

全力で駆けだそうとするのだが、両脇で腕を掴む二人がそれを許してくれない。

それでも命の危険をピンピン伝えてくる第六感のまま大暴れして振り払ったまでは良かったが、レイサに影縛りを喰らって万事休す。後ろ手に手際よく縛り上げられてしまった。

「ルシャナ、ミリアー！ カづくでも連れて行くよ!!」

突然の出来事にもがくシャニーは、レイサがポシエットから取り出したものを見て仰天した。あそこから出てくる瓶なんて、毒薬以外にない。

「ぎゃー！ 助けてええ！ 人殺しい!!」

泣きわめくシャニーを三人がかりで担いで庵の中に入っていく。庵の中ではそんな喧しい声に顔をしかめたニイメが、描かれたペンタクルの前にちよこんと座っていた。

「どっかで見えたことがあると思ったら、レンと武器を探しとったボウズか」

なるほど。ニイメの顔にふっと笑みが浮かんだ。あの時からレンを引っ張っていたと思ったが、そのまま彼女のリーダーとなっていたとは。

この庵でもレンは事ある毎にリーダーの話をしてきたからだいたいの人物像は分かるが、彼女の言っていたような太陽の笑顔は無いし、エーギルは異常なまでに乱れている。

「どうやらレンたちが言っていた事象は誇張などではなく本当らしい。」

「女の子なんだけど……」

立ち上つていそいそと準備を始め出したニイメの背中に、シャニーは四月の時と同じ言葉を漏らす。

「ま、そんなことはどうでもいいさ」

「全然よくないもん！ 女の子なんだからあー！」

「騒がしいボウズだね。 んじゃ、——早速始めようか」

分かったと言うまで抗議するつもりだったが、直後にニイメが口にした言葉に思わず身震いしてしまった。

この部屋の雰囲気……色々な護符が部屋中に貼られ、魔物を描いた掛け軸があちこちから睨んでくる。蚊帳のかかった部屋の中央に描かれた巨大なペンタクル。仕切られた空間の四隅ではパチパチと炎が焚かれていて、広がるお香で頭がくらくらしってくる。こんな部屋で一体何をするといいのか。

「あのー……痛いことはしないよね？ ゼツタイだよな？」

レイサが濁したことをもう一度聞いてみるが、孫の方はまだ優しかったのだと思い知った。

「おまえはどこかの令嬢か？ 騎士なら切った張ったで慣れたもんだろ？」

「あたしは慣れてないし！ 避けるから慣れてないし！」

「ん。いつも一撃もらうとうずくまってる」

「レンツ、それフォローになって無いからね！」

何をされるか分かったものではない。察したシャニーは後ろ手に縛られたまま立ち上がり、踵を返して駆け出そうとする。もちろん、周りを固めていた仲間たちがそれを許してくれるはずも無い。上背のあるミリアに行く手を阻まれ、また三人がかかりで引きずられてペンタクルの真ん中に無理やりに座らされてしまった。

「ヒイツ?! お願いッ、洗脳とか改造手術とかしないで！ 魔人なんかなりたくないよお!!」

「これだから最近の若いのは……。ドルイドを何だと思つとる。下世話な話に影響されすぎだね」

まるで処刑される前かのように顔がくしゃくしゃに歪む姿にニイメは呆れ顔。そつと触れただけでも大げさに飛び上がっている。

「あなたの魔法への耐性は……ほう、騎士にしちやさすがだね」

「は、はは……。それはどうも」

まだニイメはシャニーの魔法防御力を触れて調べただけらしい。

彼女の驚いたような声にシャニーは褒められたのだと思つて一応感謝しておくのだが、どうやらそれは違つたようだ。

「シャニー気を付けて。魔法耐性が高いと副反応も酷いから」

レンの顔が今は悪魔に見えた。やはり何か身の毛がよだつことをされるのだと察し、どんだん血の気が引いていく。

このままここに座っていたら命がいくつあつても足りない。脱兎のごとく駆け出すのだが、またしてもミリアに跳ね返されて数分後には元の場所に座らされていた。今度は足まで縛られて。

「ごちゃごちゃやかましい。そんなのが憑いてんだから魔法感応が低いわけないだろ」

諦める、そう顔が言うニイメがついにペンタクルを挟んで正面に座つた。

「ああ……、揚げパン食べときたかつたしリキアの海鮮ももう一度……。あつ、あの高級店のマカロンも食べてみたかつたなあ……。あと、あとね——」

「幸せな人生だつたね。レイサ、コイツを黙らせとくれ」

「はいはい」

レイサのポシエツトから取り出された瓶にシャニーは絶句して全部飲み込んだ。

もはやこれまで……。最期を覚悟してシャニーは目を瞑つてしまつた。ここまで来たらもうどうにでもなるしかない。

彼女が大人しくなつたことを確かめるとニイメは魔力をペンタクルに注ぎ始めた。呼応するように光り出し鮮明となる印。照らされたシャニーの顔に陰影が濃く浮かび上がっていく。

(なつ、何これ?! うう……。気持ち悪ツ……)

不思議な感覚に彼女の表情があつという間に歪んでいく。まるで胸の中に直接腕を突っ込まれて弄られているようで、拒絶するように体が震えるのをぐつと奥歯を噛んで堪える。

すぐに湧き上がる吐き気に口元を覆うとしても、後ろ手に縛られて叶わない。ついに息苦しくなつてきてその場に倒れこんでしまった。

その姿を見つめていたニイメの目が瞠目し固まる。しばらく倒れたまま視線が遠いシャニーをまじまじ見つめた後、ようやく魔力の放出を止めた。

「……なんと言ったことじゃ。おまえ…… 本当」だったのかい」

周りがしきりに声をかけてくれるがイマイチ聞き取れない。ニイメの声だけがハッキリ聞こえた。

これが副反応というものなのか。頭がジンジンして頬を地につけたまま身を起こせず、凄まじい冷や汗は頬周りに池でも出来てしまっただけだ。

仲間たちが駆け寄ってきて、縄を解くと水を口に流し込まれた。

「な？ 痛いことはしなかったら？」

「……レイサさんのオニ」

彼女たちをうつろにしか見上げられないが、とりあえず極限の苦痛が去ったらしい。ホツとしてそのまま介抱するレイサの腕に身を任せ。

その姿をニイメはじつと見つめるばかりで何も語ろうとはせず、シャニーの方が不安になって口を開いた。

「あの……何か分かったんですか？」

本当に何も知らずにここまで生きてきたと顔が言っている。

これほどのものを抱えておきながら……。ニイメは人生で初めての経験に武者震いが止まらなかった。古文書や噂話に見聞するだけだと思っていた存在が目の前にいる。

「ああ分かったよ。おまえがバチ当たりだっただけがな」

ここまで無知なら回りくどく言わなくてもいいかもしれぬ。真つ青な顔で今も仲間横にさせられているシャニーへ短く答えてやった。

「おまえはセチとの契約者じゃ」

人の身でありながら精霊の力を宿し、人外の異能を具現化する者。魔法と言う理の外に身を置き、無からその意志一つで無尽蔵に有を生み出し変幻自在に操る者。古文書はそれを契約者と呼び、噂は魔人と伝えてきた。

それが今、顔を真っ青にして横たわっている。齢六十を越えて初めての経験に、ニイメはぞくぞくと身を震わせる。もつともつと調べてみたい……。だが、愛弟子の視線はそれを留めさせた。

「契約者って……ソルバーンさんも言ってたやつだ」

ニイメが同じことを言った。ソルバーンは本当の事を言っていたとようやくシャニーは悟るが、湧きあがったのは納得ではなく疑念、不安、そして更なる恐怖だった。どうしても一層の困惑に眉が下がる。

「契約者って何？　　というかセチって本当にいるの？」

——ま、どうでもいいじゃねえか？　　お前は風の異能の具現者。それに違いはねえんだし

あのときソルバーンに言われた言葉が浮かんできた。それでも聞かずにはおれなかった。

未だに信じられない。ではあの声は、いつも自分に囁きかけてきた悪夢のような声はセチかどうか？　　精霊なんて聖典に出てくるだけの空想だと思っていた。

「まんまの意味じゃよ。契約したおまえなら、セチの力を自由に使えるはずなんだがね」

自在に扱えずにいるのは、そつと視線を外す素振を見なくてもここへ運び込まれている時点で分かっている。その理由も、ここまでのシャニーの態度でニイメにははつきりとしていた。

「で、でもあんな恐ろしい力、自由にだなんてとても」

本人はまるで気づいていないらしく、シャニーは今も狼狽して震えた声で力を前に怯えている。

「それじゃよ。そうやっておまえが拒絶してるから、セチが怒っている。セチの本来の力は穏やかなものだと聞くけどねえ」

「拒絶って……言われても……」

ニイメにこう言われては、信じないと自身に言い聞かせる方が難しかった。この状態は自分のせいだというのか。

拒絶……確かに拒絶している。だって恐ろしいから。仲間は何をしてしまうか分からない刃を握らせようと囁くこの声が、この魔力

が。

颯を生み出し神速に駆ける跳刻の力と、全てを切り刻む疾風迅雷が自分の意識とは別に仲間に向かう——鍵をかけておくしかないじゃないか。

だけど、怒っている……静かな庵でそつと考えたら、確かに怒つても仕方ないかもしれないとも思えてくる。鍵を掛けて、だけど力だけ自分のものにしてしようとしている。セチに向けて掛けた言葉は……たった一つだ。

——うるさい！ あんたにあたしの何が分かるんだよ！

「その状態から抜け出したきや、セチを受け止めてうまく調和する方法を探すんだね」

無情にもニイメからはそれを止めるように言われてしまった。

誰もが言う、開放しろと。ソルバーンも、アルマも、そしてニイメまでも。いや、もつと前からだ。セチの力と気づく前から、ユーノにはつきりと言われていた。抑えるのではなく上手く付き合えと。

——初代団長も、貴女みたいな一面があつたそうよ

あの時言われた言葉を思い出した。ユーノは分かっているあんなことを言ったのだろうか。色々な情報が一気に浮かんでは頭の中に駆け巡る。

「ちよつと待つてよ、全然ついていけないよ。なんであたしがその……セチの契約者なの?? そんな家系の人間じゃないしよ」

ようやく気分の悪さは収まって身を起こしたものの、騙されているような気分のままだ。話だけがどんどん先に進んでしまつて、シヤニーはついに髪をくしゃくしゃとし始めた。

そんな家系の人間ではないのに……同じことを口にしてソルバーンに言われたか。 “そんな家系でもない” と分かっているなら現実を受け止めろ、と。

「何か……心当たりはないか？ 命が危険に晒されて、心から力を渴望したことは無いか？」

心当たりなんか無いから聞いているのに……そう言いかけたが、静かに目を瞑つてニイメの問いへ真剣に考えてみる。

……そんなの、いくらでもあった。ベルン動乱中は自覚ある危機だ  
けでも何十回と。だけどその都度、デイークをはじめとした傭兵団の  
仲間や、ロイに助けてもらったからそれで済んでいった。

本当に……本当に心の底から死を覚悟する場面に陥ったのは騎士  
団に入ってからのはず。——いや。

「……心当たりと言えば、背中に消えないアザがある。ソルバーンさ  
んにも同じこと言われた」

——背中にこんなアザがあつて気づかねえとは随分とトロいんだ  
な

あの時、ソルバーンは答えを与えてくれた。準備の出来ていな  
い心は金言をただの石ころと放り捨てていた。

もつと早く彼の言葉に気づいていれば、セチを怒らせずに済んだの  
かと思うと唇を噛む視線が俯く。

「じゃあその所縁の地に行つてみることだね。そこなら、精霊をよ  
りはつきり感じられるかもしれん」

明確なアドバイスはようやくにシャニーの顔に少し明るさを浮か  
ばせたが、直後にニイメが放つた警告が太陽を覆い尽くした。

「いいか、セチを拒絶し続ける限りそのままだ。それどころかいつか  
おまえ、精霊に呑まれるよ」

頭からすうつと血が引いていくのが分かる。何かとんでもない事  
が知らないうちに進行していた——それを伝えるにはニイメの言葉  
は刺激が強すぎた。

「呑まれるってどういうこと?!」

「あなたの精神を精霊が支配するってことだよ」

言われていることは何となく分かる。今まで魔力を解放しようと  
した時に現れた、あの卒倒感を指しているに違いなかった。

——私があなたとして生きていけば、今頃……ふふふつ

セチも最近口にするようになったあの言葉。意味を知って体中に  
震えが走った。

しかし、ようやくに、ようやくに分かった。何故セチがあんなこと  
を言ったのか。どうしてこの異能があり、どうしてあの絶体絶命で生



き延びられたのか。

(あたしを……ウツデイを救ってくれた恩人を、あたしは拒絶し続けてきた……)

一気に罪悪感が湧いてくる。途端、それまで弱り切っていた黎い瞳に普段の青が戻って力強く立ち上がった。

「みんなを守る剣が欲しくてここまで来たんだ。怖いけど行ってみるよ」

年初に決めた誓い。逃げずにただひたすら前へ。少し足踏みしたが、もう一度踏み出すことにした。

目の前に道があったのに恐ろしくて踏み出せないでいた。後ろにも道が無くなり立ち止まるこの場さえ吞まれるなら、飛び出すしかない。

今まで通り、何もせず後悔するなら動いてから受け止めよう。そう思える瞳たちが守ってくれるように四方から見つめていて、早速レンが手を差し出してくれた。

「シャニー、みんないるから。大丈夫」

「そうツスよ！ いざって時はウチらでシャニーを止めるツス」

暴走を恐れているなら、受け止めてやればいい。

どんなことがあっても互いの背中を守りあうと、部隊結成時から誓う瞳たち。

誰もが逃げることなく真つすぐ自分を見つめてくれる力強さと優しさに、自然とシャニーの顔に笑みが浮かぶ。一番逃げてきたのは、逃げないと誓ったはずの自分かもしれない——そんな気持ちに違いと語りかけるように、ルシヤナが肩を組んできた。

「家族でしょ？ あんたのピンチは私たちのピンチだよ。背中は任せて、戦つていだよ」

仲間を繋いだできたのはこの想い。入団してまだ間もないころからシャニーがレンたちを守るために口にした言葉を、仲間たちは今も胸に刻んできた。今こそ、あの時守ってもらった分、守るとき。

「ありがとう、みんな。あたし頑張ってみるからね」

仲間たちに決意を見せつけるように、はきと頷いたシャニーの足取

りは庵に來た時とは別人のように力強く、前を見据える瞳は不屈を湛えていた。

## 第4話 風の精霊セチ（後編）

翌日、天馬を駆るシャニーが向かったのはカルラエ城では無かった。

曇り空の向こう……あの事件——幼い頃野獣に襲われた溪谷を指していた。

後ろには仲間たちも全員がついてきている。休みを取ると言ったら、まさか全員が一緒になって休みを取ってくれるとは思ってもしなかった。

（ありがとう。ホント、心強いよ）

あの場所は……訪れるだけでも勇気がいる場所だった。

二月も中旬に入り、極寒の隙間からようやく零れるようになって来た春の兆しのおかげか、山に積もる雪の色がどこか淡い。そんな希望を抱かせてくれる白き大地の中でも、あの場所を捉えると心が震えた。

忘れもしない悪夢の場所。今まで幾度となく空の上から見つめ、そして目を背けてきた。シャニーは一つ息を呑むとゆっくりと天馬に降下を指示し、近づく恐怖に唇を噛む。

「……か……。あの時以来なんだな。ここ来たの」

広大な山の中にある溪谷の道中。他の人には何の変哲もない登山道の一風景も、シャニーにとっては訪れるだけで体震え、トラウマ蘇る場所。

川のせせらぎも、心地良さなどまるで感じない。耳が拾おうとするのは、その裏に隠された野獣の咆哮ばかり。

何も、何も変わっていない。この景色も、自分の傷も。敵と対峙するのはまるで違う戦慄に、シャニーは立ち尽くしたまま溪谷を見つめるばかり。

「シャニー？　がんばって」

寒空を飛んで冷え切った手を、握る声がそっと励ましてくれる。

振り向けばレンの瞳が静かに微笑んでいて、さらにその後ろからはミリアヤルシャナも笑顔で頷き、踏み出す一步を応援してくれてい

る。

「任せて！——行ってくるよ！」

独りじゃない。そう思わせてくれる仲間の顔は勇気をくれた。覚悟を瞳に宿し、はきと彼女たちに頷いて見せたシャニーはついに踏み出す。

膨らむ不安を煽るように、どんどん視界に大きくなってくるのは聳え立つ大岩だ。ぎゅっと手を握り、じっとそれを睨むように見つめて下まで歩いていく。

(……) あたしは……)

思わず口元を抑えた。迸るフラッシュバック。背中を引裂かれ、ボールの様に跳ね飛ばされてこの岩に叩きつけられた。激痛に朦朧とする中、向こう側に飛んだ。意識はあつたはずなのに記憶の無い空白。

その空白に、きつとアイツが絡んでいる……。

「セチ……もし本当にいるなら応えて」

震える体を律しながら手を胸に当て目を瞑り、何度もセチを呼ぶ。エーギルの流れに異常を覚えたか、レンがあたりを見渡すまで時間はかからなかった。きよろきよろしていたかと思うと、すぐに彼女の視線は一点を凝視して動かなくなった。

何が起きるのかと一緒に無を見つめていたミリアは、目の前に浮かび上がるものへ思わず指さす。

「あつ、あれ……何スか?!」

魔法など扱えなくてもはつきりと見て取れる。シャニーの体から湧き上がる焔のような青く透き通った流れ。それが少しずつ一点に集まって、何か形を作ろうとしている——人だ。

この世のものでは無いとはつきり分かるのは、きつとその“人”が真正面に捉えている人物と鏡のように向かい合っているからだ。

「……ふえっ?!」

明らかに主張してくる気配に瞳をそっと開けたシャニーは、目の前でじつと見つめてくる翠緑の瞳とかち合っと思わず尻餅をついた。

「そんなに驚く必要ある？　あなたが呼んだんでしょ？」

目の前に、自分がいる。今日の朝、姿身に映してきた自身の姿そのものが目の前に立っていて話しかけてきた。シャニーは口をあんぐり開いたまま固まってしまう。

気配は本物だ。この呆れたような視線だって知っている。でも、いつものような敵意は感じない。彼女の存在に頭は追いつかないが、心が理解して立ち上がる。

「あなたが風の精霊……セチ？」

輪郭がぼんやりとして湖面のように揺れる姿はとても人ではない。向こう側が透けそうで透けないくらい淡い存在に畏怖を抱く。

それ以上に驚いたのはその容姿。精霊が自分と同じ姿をしているのが違和感でしかない。違うのはせいぜい瞳の色くらい。

美しい翠緑の瞳を持つ乙女は、笑いかけることもなく静かに口を開いた。

「そうだよ。初めまして……かな？　ずっと一緒だったのにな」

声まで一緒……そうだ、今までずっと頭の中に響いてきた声が、外から今度は話しかけてきている。こんな超常的な光景なのに、疑う気になれないのは何故だろう。

「ずっとって、やっぱりクマに襲われたときから？」

今迄の人生でセチを感じた事など一度だつてなかった。閃電の魔術師との戦闘でうつすら気づき、黒き紳士に鎖を断ち切ってもらってからだ、急速にその存在感が内から膨らんだのは。

「うん。キミの叫びに応えた。大事な人を守りたいってね」

セチにそう言われ、流れ込む様に鮮明と脳裏に浮かぶあの光景。背中を引裂かれ、大岩に叩きつけられた意識はもう遠かった。隣には腰を抜かして動けないウツデイがいて、野獣の視線はそちらへ向かっていた。

確かに……叫んだ気がする。誰か助けてくれと、助ける力をくれと。

——だれか……ッ。アクマでもなんでも……ウツデイを守れるチカラを貸して！　そのためなら——なんでもするからッ

はつきり頭を走った。そうだ、呼んだ、叫んだ。そして、その願い

に応える声も。

——今こそ風を纏え

「そうか……」

もう受け入れるしかない。シャニーは意を決し一步前に踏み出した。

「あの時はありがとう。あなたのおかげで、あたし達は生き延びられた」

その叫びに伝えて力を貸してくれたのが、まさか精霊だったなんて。埋もれていた記憶が蘇っただけでも驚いているのに、頭はその存在に追いつけるはずもない。

でも、目の前にいるのは命の恩人だ。差し出した手でセチの手を取ろうとした。触れられる……その驚きにも似た喜びにそのまま握ろうとした途端だった。

「——ッ」

セチは手を払って睨みつけてきた。はつきりと感じる手先の感覚よりも、突き刺すような視線が痛くて表情が固まる。

「……都合の良い人だね」

そんな彼女を軽蔑するかのような瞳が静かな怒りを口にした。

「え??」

「必要な時だけ呼んでおいて、用が無くなったら拒絶してさ」

口調は静かだが、だからこそ怒りが言葉からはつきりと滲み出ている。

シャニーは喉が張り付きそうになった。セチが怒っている——ニイメはそう言っていたが、なぜ怒っているのかあの時はまるで分らなかった。

鋭い眼光と共に本人の口から怒りを浴びせられて初めて、心当たりが色々浮かんでくる。思わず視線を逸らしてしまった。

それをセチは許さなかった。今度は自ら近づき、今まで伝えたくても伝えられなかった怒りをぶつけた。

「キミは私を何度も拒絶したんだよ。私はキミを助けたいのに、なんで……あんな酷いこと言うの?」

ウエスカーに弄ばれた時も、ヴァルプスギルに絶体絶命へと追い詰められた時も、しきりに呼び掛けたつもりだ。自分の力を使えと。その内なる声に怯え、向き合うこともせずただ、怖いと一つに片づけて手を取ろうとしてくれなかった。

これまでも契約主シヤニーと意識が合えばその度に呼びかけてきたのに、毎回彼女は自分から繋いできた意識を一方的に切り離してきた。声を掛けてくれるどころか……振り向いてくれる事さえ無く。

——うるさい！ あんたにあたしの何が分かるんだよ！

しまいには、ようやく声を掛けてきたと思ったら怒鳴りつけてきたわけだ。

存在に気づいていなかったとしても、ぶつきたい文句は一つや二つでは済まないが言うだけ無駄だろう。これだけでもう、シヤニーは狼狽し始めている。

「だ、だって！ ヤっっちゃえなんてセチが言うから！」

何故なんだ——シヤニーは早口に答えながらセチに目で訴えた。

何度も何度も囁いてきた声は、間違いなく修羅の道へと誘おうとしてきた。気に入らないものに、この力をぶつけて黙らせろと。一度踏み込んでしまえば楽園だぞ……と。

ところが、セチの表情はますます歪んでいくばかり。

「あれはキミの声を映しただけじゃん？ 仕返しだよ。無視するキミが悪いんだからね」

「へっ?! あ、あたしの声?!」

人のせいにするな——そう言わんばかりに眉を釣り上げる自分の顔が、怒りを吐き捨ててきた。

投げつけられた怒りにシヤニーは自分を指さすだけで精一杯。そんな事ない……すぐに言い返そうとしたが、目の前で睨むように見つめてくる翠緑の瞳を、嘘だと言えないのは何故なのか。

また視線を逸らしたシヤニーの頬に手を添え、セチは無理やり正面を向けさせる。

「皆を守る力を私に求めたよね？ でもキミの声はそれ。制御出来なくなるのは、キミの願望の問題じゃん」

拒絶するだけ拒絶して、都合の悪いことはすべて人のせいにして何も認めようとしない。悪夢だと言って逃げてばかりいる契約主に現実突き付けても、彼女は視線だけまた横に逸らす。

「そんなこと……」

「誰でもあるよ。人なら、そう言うの。みんな聖人じゃないんだし。でもさ……」

その気持ち自体を責めているわけではなかった。過ちを受け止めず、人のせいにする姿が許せなかった。今もシャニーの顔に納得は浮かんていない。そんな事は無いと言い返したいのだろう。あれこれ考えを巡らせているとはつきりと分かる、黎き虚ろな目。

「無明な黎い剣……。そんなのが私を纏ったら……魔人だよな？」

「——ッ。そんな、そんなつもりじゃ！」

この際、はつきりと言ってやることにした。一度契約した以上、この人間が死ぬまで付き合うしかない。

「そんなこと無いって言うなら、ヴァルプルギスって騎士を何で殺そうとしたの？ 私が止めなかったら、あのままヤってたでしょ？」

「そつ、それは……。で、でも、あたしはソルバーンさんとは違う……違う、違う、違う——ッ」

錯乱に目が焦点を失い、シャニーは頭を抱え何度も首を振った。

心の震えを見透かされたか、さらに問うようにセチの瞳は強い。それをされるとシャニーの声は更に弱く震え出す。魔人——その未来に、必死になって集めていた守りの薄氷など、あつという間に崩れて雲散していった。

ヴァルプルギスの時も、閃電の魔術師と戦った時もそうだ。最初は民の為に確かめながら戦っていたが、最後の方はそんな事はどうでも良くなっていた。

それを思い出し、自分の心と向き合った彼女はもう反論するのを止めた。

——力を持つものは、正しくその力を使う義務がある

ユーノに言われた言葉が痛いほどに突き刺さり、観念するようにセチを見上げる。力を何に使うか誤った自分が間違っていたのだと。



「エーギルを使い切ったんだと思ってた。セチが止めてくれたの？」  
「キミ……何も知らないんだね」

後一閃でヴァルプスギルに止めを差せる——恍惚な気持ちで振り上げた剣が、突然何かに引つ張られるように固まったのを今も覚えていいる。止まったのではなく、止められたのだと知ってシャニーの目が驚きに見開いた。

「今のうちに言っておくけどさ」

無知というものは怖い。ため息交じりのセチは、加減を知らない契約主を蒼褪めさせるに十分な言葉を投げつけた。

「エーギルを使い切るまで放出したら死んじゃうよ？ 石みたいに なってね」

「し、死ぬ?! い、いいい、石って……?!」

「あの時は私に主導権があったから止めたけど、気を付けた方が良く んじゃない？ 私はどうでもいいけどさ」

死——その言葉を聞いて表情が固まる。エーギルはその人の命そのもの。それを全て燃やし尽くしてしまえばどうなるか……考えるまでも無い事だった。

今更気づいて思わず口に手をやるシャニーの顔は蒼い。日常的に命を危険に晒していたなんて。同時に湧きあがる恐怖はセチの放った言葉の中にあつた。

「それって……吞まれてたってこと？」

「失礼な表現だと思うけど、そう言う事」

主導権を握る——セチは確かにそう言った。意識がどこか遠いところにあるように思える、あの独特の感覚の意味が分かってぞつとした。

ニイメの言っていたことは本当だったし、もう片足を突っ込んでい るような状態だったのだ。何も知らずに生きてきた今までが恐ろし く感じる。どれもこれも、一つ間違えていたら死んでいたかもしれない。

「でも、あの時止めた理由は違う」

異常に恐れる契約主がセチには心外だった。

別に呑み込んでやろうなんて思ったわけではなかった。今まで中からずっと見てきたつもりだ。この人間が何を考え、何を抛り所にして、何を誓ってきたのかを。

「みんなを守るのに、あの騎士を殺す必要あったの？」

精霊に求めた力は制圧する暴虐の凶嵐ではなく、春を導く反抗の息吹だったはずだ。

道を外れた黎き剣を見て見ぬ振り出来なかった精霊からの問いに、シャニーは静かに首を横に振った。あくまで自分の意思がああ剣を握っていたのなら、尚更に恐ろしい。

「この前も暴走する自分を制御出来なくて、みんなを不幸に巻き込んだんだ。大事な仲間をまた傷つけたらって……怖くてもう使えない」

十一月の事件はきつと、この先も絶対忘れられない。最初は守りた一心だったのに、最後には戦場に誰もいなくなるまで駆け抜けて。あのままセチが止めていなければヴァルプスギルも、もしかしたら仲間までに——そうと思うと声が揺れる。

それがセチには許せなかった。必死になって差し伸べた手を怖いと言って払いのける主の姿に、また静かな怒りが、そして大きな落胆が滲む。

「キミ達を守ってあげたいのに、私がキミ達を傷つけるというの？」  
「ううん……違う」

あの剣が自分の意思だったと分かった目が震え、シャニーは唇を噛みしめる。

ずっとこの声のせいだと思ってきた。自分ではない自分が囁くからだと自分を守って来たけれど、そうではないと知った今、ギユつと勇気を振り絞った。逃げない、その誓いを自らに言い聞かせるようにセチを見つめる。

「自分が弱いから。守る剣が欲しいのに、違うことを望んでいたんだと気づいたから」

答えを求めて彷徨う、ぼやけた夜に侵された黎さ明け、青の瞳は真っ直ぐセチを見つめ始める。

ずっと共にいて手を差し伸べてくれていたのに、背を向けて避け続

けてきた。顧みることもしせず、自身の理想像だけを信じ、過ちを犯す現実を認めなかった。

周りを囲む者たちに背中を押され、勇気を絞って踏み出した先でようやく気づいた一歩前の姿。踏み出した事で、やりたい事と出来る事の間にある、為すべき事を見出せた気がする。気づいた今、もう逃げないとまた一歩踏み出した。

「今迄の事は悪いと思ってる。本当にごめんなさい！　なんとか、なんとか見つけるから、これからも手を貸して欲しい。——お願い……します」

もう一人の自分からの詫びと祈り。セチはすぐ答えを返さなかった。

——うるさい！　あなたにあたしの何が分かるんだよ！

差し出した手にあんな風に怒鳴って剣を振って来た顔が、じっと見つめて懇願してくる。こんな詫びの言葉一つで、今迄扱られ続けてきた気持ちを流して一緒に前を向こうなど、そんな気持ちよく行ける筈無かった。

「……勝手な人」

不機嫌そうな言葉を残してふいにセチの姿が風に溶けていき、エーギルの流れが自身の体の中に吸い込まれていくのを見てシャニーは焦った。

まだ話したいこと、聞きたいことは一杯あるし、あんな一言を最後にいなくなってしまうなんて。

「でも、文句言えたいし、キミの気持ちが知れて……、——ちよつとだけ気が晴れたかな」

ぎよつとしてあたりを見渡すが、やはりもうどこにもあの姿はない。この感覚は間違いない。再び頭に直接話しかけてくる声は以前よりどこか明るかった。

「後は行動で見せてもらう。忘れないで。私も、キミが繋いだ絆のひとつ。一人で抱え込まないで、ちゃんとキミから私を呼んでよ、相棒。今度無視したら……呑んでやるんだからね」

相棒——その言葉にシャニーはドキッと胸が跳ねた。

許してくれたわけではない、認めてくれたわけでもない。だけど相棒はチャンスくれた。

もう絶対に逃げ出さないと心に刻み、胸元に置いた手をぎゅつと握りしめるとシヤニーは新しい仲間と誓いを立てる。

「ありがとう、セチ。あたし、絶対に見つけるよ。あなたと一緒に戦える剣を」

殺意なんかではなく、守りたい気持ちを刃に乗せられるように。

ウツデイを助けたい一心で叫んだあの時。その純粹な気持ちを青焰と燃やし、刃に掲げられるよう絶対なると誓って、シヤニーは相棒と共に仲間たちの許へ帰っていった。

## 第5話 青き妖精

非番の日、シャニーは両手に武器をとり、狭い家の中を風のように飛び回ってせつせと家事をこなしていた。

「ヤッター！ 最速更新つと!! 次い！」

洗濯物を籠一杯に詰めて放ったかと思うと奥の部屋へと消えた。戻って来た手に槍……では無くモップを握り、廊下を駆け抜け洗濯物を飛び越していく。

何とも騒がしい家事風景だが、彼女の後姿から鼻歌が聞こえてくることは無く、常に意識は別のところにあった。

「ハツハツハー！ 風の妖精のスピードを見るがいい！ ササササッーと！」

誰に向かうでもなく得意げにはしゃぎながら旋風の如くモップを滑らせる。

こうして家事をいつも以上にできぱきとこなしているのも、午後にとある作戦を計画しているからだ。

「あたしってば、やれば出来るじゃーん！ さって、準備、準備くつと」  
あつという間に家事を終えた彼女は一息つくこともせず、その足で寝室へ駆け込んでいく。

しばらく無音が家の中を包み、ようやく出てきた彼女は軍服に身を包んでいた。

「お母さん、行ってくるね。最近ね、みんながお母さんに似てるって言うんだ。へへっ、ちよつぴり照れちゃうよ」

姿見でしっかりと確認し、帯剣ベルトをもう一度締め直す。ようやく自身でも、この士官着姿を見慣れてきた気がする。

準備を整え終わった彼女は姿見の中の自分にひとつ頷くと、天馬にまたがり空へと飛び立つ。

「皆に守ってもらったんだ。今度はあたしが守る番に回らないと」

今のまま——力を持っているだけでは、いざという時に皆を守る剣にはなれない。

もう、この前のような失敗は繰り返したくはなかった。十一月の事

件を思い出しながら、シャニーはひたすら雪原を目指す。

失敗しないためにはとにかく準備しておくしかないが、準備するには相応の環境が必要になる。少なくとも、人里の近くではまだ自信が無い。

「ここまで来れば大丈夫かな。ちよつと降りよーよー！」

シャニーがようやく天馬に降下指示を出したのは、カルラエ城から西に遙か遠い針葉樹林帯のど真ん中。

あたり一面に広がる緑のキャンパスの中に、一点だけ白くぽっかり色の抜けた場所があり、彼女はそこに降り立っていた。

「危ないからここに居てね。吹っ飛んだら、逃げちゃっていいからさー！」

相棒が翼の中に包んでくる。守ろうとしてくれているのだろうか。心配そうに見つめる彼を撫でながら語り掛け、木の裏に留めて手を振った。

雪原の真ん中まで歩いてきたシャニーは、ふうつと大きく息を吸い込み目を瞑った。意識を集中させ、胸元に手を置いてそつともう一人の相棒に語り掛ける。

「セチ、お願い。——力を貸して」

少しずつ扉の向こうに意識を伸ばし、その奥へと踏み込んでいく。彼女の周りを青焰エーギルが包み始め、辺りの景色を蜃気楼のように大きく揺らめかせ始めた。

少しずつ、少しずつ深淵へ手を伸ばし、奥から伸びてきた手に掴まれたような感覚を覚える。刹那、意識を奪われてしまいそんな卒倒感が襲ってきて、堪らず顔をしかめた。

いつもならここで止めてしまおうが、セチと約束した今日は奥歯をぐつと噛みこみ、黎い深淵へと更に入り込む。

「くっ……飛びそう……。このままじゃ、ヤバイ……」

自分でも分かる。渦巻くエーギルが、普段とはまるで違う激しい流れで体中を滾り、そして辺りに噴き出していることが。

その激しさに意識が今にも押し出されそうだが、今日は止めるわけにはいかない。相棒と共にこの剣を握る為にここに来たのだ。

「ここまで『餌』の匂いを漂わせれば、絶対にあの男はやって来る。  
「ようやく現れたか。風の妖精さんよ」

(来た———ッ!!)

背後の声に一瞥すれば、炭の如く焼けた黒い肌を見せつける長身のサングラス男が仁王立ちしていた。

普段はあまり遭遇したくない男だが、今日はこちらからデートに誘ったのだ。今にも飛びそうな意識に鞭打って振り返り、戦乙女は強気な笑みを男へと投げつけた。

「やっぱり来たね、ソルバーンさん」

「あん？」

普段のビビった顔が無いことにソルバーンは違和感と興奮を覚えた。サングラスを取り、黄金の眼でまじまじ見つめる。

(いい面してんじゃねえか……これなら今すぐ『喰って』もそれなり良い味を出しそうだ)

彼女の周りを吹き荒れるエーギル……風刃に包まれる姿はこれまで見た仮初では無い。下手に突っ込めば、それだけでかまいたちの餌食になりそうだ。アレでは矢だの魔法の類は風に巻かれ、もはや目標を失うだろう。

しっかりと見据えてくるその瞳からは、セチの翠緑の魔力が溢れている。以前ほど彼女の怒りを感じないあたり、どうやら……セチと会話したらしい。

「待ってたんだよ、あなたのことを」

(ハン……。力を持てば、使ってみたくなるのが『人』ってわけか)  
おまけに彼女は、自らわざわざ舞台を整えたと伝えてくるから愉しみで仕方ない。

面白い。ようやく、ようやく剣を握る気になったらしい。

高慢な者共はそれを品性の欠けた『人』らしい愚かな感情だと罵るのだろうか……それこそが生きる道であり、生きる価値だ。高みを目指さない生に価値など無い。

「ほう？ この俺を待つとは、死地と決めたって事で良いんだな？」

シャニーは思わず剣を抜いた。目の前でソルバーンが嬉しそうに

目を瞑り、異能を解放し始めたのだ。

見る見るうちに彼の周りは発するエーグルで歪みだし、赤く黒いものが燃え上がりだしている。

ぞつとするほどの闘気と熱波が、ただでさえ飛びそうな意識をこれでもかと揺さぶってくる。こんな男と付き合っていたら、いくら命があっても足りない。

「勝手に殺さないでよ。まだ十五だよ。これから人生楽しむんだからさ」

それでもデートに誘ったのは、これから先を楽しみたいからだ。いつまでも恐怖に怯え、何も出来ない屈辱に震えているのは嫌だ。

それを伝えた途端、ソルバーンの口元がニツと吊ったのが見えた。

「という事は、俺を倒す自信があるのか。面白い！ さあ見せてみる、『妖精』の力!!」

興奮と共に熱波があたりに迸った刹那、爆発でも起きたかのように彼の体から赫灼とした業火が吹き荒れ、一気に辺りの雪を吹き飛ばした。

以前も見た、黄金の眼を赫々とさせて獲物を見つめる業火の魔人。それが目の前に現れ、ごくりと息を呑む。

（底が見えないぞ……。どんなデタラメだよ……）

空すら焦がし尽くそうと延びてくる焰——その強烈さは以前対峙した時と比べ物にならない。九月に叩きのめされた時ですら、彼は手を抜いていたのをハッキリと示してくる。

普通の人間なら、この熱波だけで火傷を負い倒れているに違いない。セチの魔力が生み出す、全身から吹き荒れるこの風の障壁が無ければ、シヤニーにも立っていられる自信はなかった。

「——さあ、血の臭いに咽せ返る、魔人同士の狂宴の始まりだぜ!!」

好戦的にこれでもかと吊り上がる魔人の口元を見ても、シヤニーは剣を構えなかった。ここに来た一番の目的は、この魔人と戦う事ではないからだ。

もちろんこちらから誘惑した手前、付き合わずに済まず訳にはいか



ないが、終わり方が読めないなら最初に持つてくるしかない。

魔人の眼をキツと見つめ一歩踏み出す。せつかくの獲物を前にマテを喰らったソルバーンが、舌打ちしながらギラギラした目で見下ろしてくる。

「戦う前に、教えて欲しいことがある」

「興が覚めちまうぜ。なんだ？ 事後まで起きてる自信が無エのか？」

彼は早く見たかった。ようやく覚悟を決めた風の妖精が宙に舞う姿を。

待てない、辛抱ならないと渦巻く炎が一層に荒々しく吹き出す、そんな興奮を冷ますようなことをシャニーが口にした。

「ソルバーンさんはどうやってこの力を制御してるの？」

「制御……だと？」

どうやらまだ、覚悟が決まっていないと見える。力を制御しようとする時点で、限界を低く構えているわけだ。

本質を捉えきれしていない未熟な風を前に、ソルバーンは思わず額に手をやって再び舌打ちを始めた。

そんな苛立ちにシャニーは付き合っては居られなかった。今でさえ、いっぱいいっぱいで、答えを聞き出すまではと気を張っているのだから。

「あたしは見れば分かると思うけど……呑まれそうなんだ。ソルバーンさんはそんな風には見えないから」

激流に呑まれそうになっているのを、指の二、三本でかろうじてひっかかっているだけの意識。

目の前にいる好戦的な魔人のぎらつく眼光を見たって、彼も同じ状況とはとても思えない。現に、問うた途端、ソルバーンは見下した眼をぶつけてきた。

ソルバーンにとっては信じられない問いだった。理解できない。契約者のくせに、何故従おうとするのか。

「簡単な話だ。呑んじまえばいい」

精霊に契約を結ばせるだけのものを持つているのなら、その力の中

に精霊を引きずり込んでしまえばいいだけの事。『持つて』いるだけではない、『まんま』の彼女にならそれは簡単なはずだ。

「全然簡単じゃないし……。どこまで規格外なオジサンなのさ」

それなのに、まだこんな事を零して己の限界を下げようとする姿はもどかしく、純粹に腹が立つ。このまどろっこしさもまた『人』の愚かしさというわけか。

「気持ちに任せちまえばいいだけだ。さっさと目エ醒まして狂っちまえよ?」

理性など、自分が勝手に作り上げた理想像と比較するルールに過ぎない。

客観視する自分に縛られた哀れな理想像などに惑わされず、心と認識する向こう側を知り、魂そのものが求める叫びに身を委ねてこそ、理想を越えた至高に辿り着く。

まだ、この稚き風は目を醒ましていない。己の叫びにどこかでブレーキをかけ、どこかで拒絶している。

「楽しみだぜえ、踊り狂う妖精の剣……全部ぶつ壊しちゃえヨオツ!!」  
狂喜を叫ぶ魔人。噴き上がる焰が天を鷲掴みにするが如く焦がし、シャニーの髪も顔もすべてを赤く染め上げた。

(焰の魔人……。あたしも、いずれこうなる……)

身に任せて……破壊の衝動に預けたらこうなってしまう。

あまりにも分かりやすい最悪例を目の当たりにして、絶対に自分はいこうなつてはいけないと確かめた彼女は剣を鞘に納めた。

それはあまりに臆病で理解出来ない行動に映る。ソルバーンは困惑と共に怒りをその眼に滾らせた。

「何でだ、何で自分に枷をする? その力があれば天馬騎士団を牛耳るなんぞ朝飯前……いや? ——イリアをどうにかする事も出来るはずだ」

剣を収めても、見据えてくる瞳は変わらずセチの魔力を湛えている。それでも、戦意をまるで感じない。

簡単なことだろうに。芯から求める叫びなら、精霊を懐柔するくらい。その叫びに呼応して契約を結んだわけで、セチはそれを待っていない。

るはずだ。

「あたしの剣は民の為の剣。それが相棒との約束だもん。そんな外れた剣は持つてないんだよ」

まだ目醒めて間もない寝ぼけ眼でも、全てを屈服させる剣としては十分なキレがあるに違いない。なのに、まだこんなことを言っている。

騎士道とかいうヤツはどうにも嫌いだ。こうやって自身の叫びに蓋をして、退屈で窮屈な人間を増やすだけの箱庭。

「もつと愉しむことを知ったほうがいいぜ」

「楽しんでるよ。イリアのみんなを守るために飛び回る毎日をさ」

ソルバーンの助言にシャニーは静かに目を瞑った。

この男の狂気はよく分かったが、同時に大事なことをしつかりと教えてくれた。ただ、彼と自分では向いている方向が違うというだけ。

「あたしの気持ちに任せるまま……か」

静かに自分の気持ちを見つめてみる。

怒りや憎しみ、不安に寂しさ……そんなもの、一杯あった。自分にはそんなものは似合わないとか向かい合って来なかっただけで、いつでも心の中のあちこちに浮かんでいたのがセチと話して分かった。

でも、それは浮かんでるだけだ。いっぱい満る心に浮かぶ泡沫。そんなちつぽけなものばかりを見つけて何も出来ないとかえ、満たしてくれる大切なものも、求めた本来も、強さも弱さも見失った。

この心一杯に広がっているものは……繋いだ絆。たくさんの人たちの顔が浮かび上がってくる。

彼らが叫ぶ名前はなんだ。

この数か月、力の前に震え、己を己では無いと言って失っていた自分の名前はなんだ？

その名を持った者が叫び続けてきたものは何だ？ その者に皆が祈ってくれたのは何だった？

意識がはつきりしてくる……鮮明となった意識が失った名前をしかと掴み取った。

（イリアの礎であれ。この剣こそ、あたしの軌跡。この軌跡こそ、みんな

なの希望を守る暖かな風でありたい……あたしの名は——」

「ほう……いい感じだ」

青焰が一気に膨らんだかと思うと辺りを歪める焰の流れはすつと収まり、感情と感情のぶつかり合う烈風は静まった。

叫びに身を預けたエーギルの流れは清流そのもの。再び開かれた瞳は溢れる魔力で翠緑に光る。

その光景をソルバーンは満足げに見つめ、進化の瞬間をしつかり焼き付ける。

「だが……まだ濁ってんな。もつとだ、もつと高めろ！」

ようやく自分を取り戻した瞳ははつきりしている。だからこそソルバーンは満足しなかった。

この領域まで来たのなら分かるはずだ。天井など、その蒼天に無いという事を。

「掴んだ気はする……」

そんな魔人の咆哮を聞いていないのか、シャニーは翠緑に光る眼で自身をぐるりと見渡すと一つ確信を漏らす。

先ほどまで飛びそうだった意識は鮮明と戻ってきた。けれど、はつきりしてさらに強くなった、操られているような感覚。相変わらず呑まれたままということか。

ソルバーンのように呑み込んでやろうとは思わない。望みは、セチと共に剣を握る事。これからまだまだ修行が必要のようだ。

「でも……」

静かに剣を抜き脇に構えると、ソルバーンが飢えた笑みが浮かべてきた。そう、だからこそ、彼でなければならぬのだ。

「一度こうなると、今のあたしには止める術が無いんでね。——とことん付き合ってもらおうよ！」

扉の奥へ踏み込む術は心得た。

だが、一度踏み込んだらもう後ろにあったはずの道は消えてしまう。今までもそうだ。解放した力を自力で収めたことは一度も無い。

今回も力と同化する術を知るためだけに彼を呼び寄せたわけではない。『後始末』も彼ぐらいでなければ頼めない。

「いい反応だ……」

目の前に凜と構える清流に、ソルバーンも興奮を口元に隠せない。久しぶりに暴れられそうな相手の闘志はゾクゾクと沸き立つ焔を激しく揺らめかせる。

「これなら少しは燃えられそうか」

轟々と燃え盛り、爆発するように膨らんでシャニーを呑み込もうと手を延ばす焔。周りを駆ける風が炎圧を吹き飛ばす。

赤の中でもはつきり主張してくる翠緑の瞳は、剣を握りなおして鋒を魔人へ向けた。

「苦労が楽しくなるほど苦労しろ、それが苦労つてもんだって師匠にも言われたしね。燃え尽きるまでやってやるさー！」

この剣が一体どこまで業火の魔人に通用するのか……今の内に見ておきたかった。

九月に戦った時はまるで丸腰も同然だったが今回は違う。呑まれたままとは言え、セチと同じ方向を見つめて握るこの剣は以前とはまるで別次元——天にさえ届きそうでゾクゾクするほどに。

ようやく取り戻した自分の名を、剣を確かめたい。

「ディークか……はっ、らしいな」

教えを宿す剣が今、己の名として新しい道を切り拓く様を見たら、あの男はきつと喜ぶだろう。

ソルバーンは戦友を思い出して笑うが、すぐにその笑みは蔑みを含みだす。

「しかし……こりゃあ騎士の言葉とは思えねえな。私闘は禁止じゃなかったのか？」

「自分の剣を手に入れるために必要なことだから」

結局、妖精が自由に飛び回るのに、箱庭では窮屈過ぎたという事か。

素直にそう言えばいいのに、こういうところはやはり騎士なのか退屈な言い回しをしてきた。

「どのみち、人間じゃないあなた相手に騎士道なんか関係ない」

突き向けていた剣を再び脇に構え直すと、シャニーは咆哮一閃に飛び出した。

「行くぞッ、『赫竜』の魔人！」

「『同類』が何を言う。さあ見せて見ろ『妖精』！」

(軽いッ。体が軽い……これなら！)

構えを取るソルバーンに突っ込んだシャニーは、今迄の自分とはまるで別人のような体の動きに驚嘆を漏らしながら駆ける。

身を包む風に体が浮く感覚は、天馬で滑空しているかのようだ。周りを渦巻く烈風でソルバーンの拳から飛んでくる火炎を跳ねのけながら距離を縮めていった。

## 第6話 無間と無尽のバリトワード

(軽いッ。体が軽い……これなら！)

構えを取るソルバーンへ、シャニーは雪を巻き上げ突っ込んだ。湧き上がるエーギル、宙に舞う感覚。あまりの軽さは氷を滑るかのよう。いや、風そのものになったような気分だ。

それ以上に驚愕したのは、湧き上がるエーギルの変化だった。知っていたセチの魔力は、解放すると重くて、息苦しくて、恐怖ばかり湧き上がる黎き風だった。

今は違う。清く澄み、爽やかで心地良い。体から全ての毒を吹き飛ばしてくれそうな、いつまでも纏いたい青き巨いなる風。激情に燃え上がる強大な嵐ではないのに、全ての悪夢を薙ぎ払えそうな穏やかなる風の刃だ。

自身を包む風に体が浮く感覚は天馬で滑空しているかのよう。渦巻く烈風でソルバーンの拳から飛んでくる火炎を跳ねのけながら距離を縮めていく。

白銀を射抜く青き風は瞳から迸る翠緑の魔力をなびかせ、その軌跡は流星のごとく魔人へと突っ込んだ。

「先手必勝ッ、翔刻イクシード・アクセルの青嵐！！」

時と時の間を跳び越え加速するかのような流星が、巻き上げる白銀の雪煙の中にふつとその翠緑を消し、黄金の目がピクリと動く。

(この俺がロストしただと……?)

視界から消えた妖精を次にソルバーンの視界が捉えた時には、すでに左手の絶好のポイントを押しえられていた。

魔人から嘖きあがる烈火の守りを自身に吹き荒れる烈風で押し返しながら、シャニーは脇に構えていた剣で渾身に斬り上げる。

(刃が……通った！)

確かな感触は以前の戦いでは一度も無かったもの。

刃に渦巻く風のエーギルで、ソルバーンを包む炎の鎧を切り裂いていた。そのまま踏み込んだ軸足に全体重を移動させ、鋒が天を向くほどに最後まで斬り上げた。

(さすが……セチの風。その鋭き事、千の剣なり)

刃の直撃を受けた魔人は久しぶりに覚える痛みに一歩退いた。カウんターの剛腕を振り下ろすも、もうその場には残像すらない。

「ぐう……ッ、ふふふ、さすが風の妖精。以前とはダンチだぜ」

脇にできた大きな切傷。久しぶりに見た自身の流血を見下ろしてソルバーンは嬉しそうに口元を釣り上げた。流れ出す血の全ては噴きあがる炎の前に消し炭となり、あつという間に傷が塞がっていく。

(あたしの力じゃ……そこまで深くいかないか……!)

シャニーは霞に構えを取り直す。まるで体が岩か何かで出来ているかのように硬く、確実に剣先で捉えたはずなのに押し込めなかった。

自身の手に残る感触が間違っていないことは、目の前で好戦的な笑みを浮かべ続ける業火の魔人を見てもはつきりと伝わってくる。

「これなら少しばかりは燃えられそうだな!」

ソルバーンが一吠えして両手をぱつと広げると、それまで抑えていたかのように業火は更に膨らんで煌々とし始めたではないか。迸った衝撃波が風の守りをも貫いて足元が浮きそうになる。

(底が全ッ然見えないぞ……。一体、この人のホンキはどこなんだよ?!)

噴きあがった閃光に腕で目元を押さえ、踏み込んで衝撃波に抗っていると魔人のシルエットが突然土煙を挙げた。

「速ッ?!」

弾丸のごとく突っ込んできたソルバーンはあつという間に目の前に迫り、両手を組んで振り上げる。

「喰うぜッ!!」

ハンマーのように降り下ろされた組手が大地を抉り、それだけで隕石が衝突したかのように爆炎が迸り地面が天へと跳ね上げられた。

風に飛ぶような身のこなしで避けたシャニーだったが、目の前で起きている究極の破壊衝動に、言葉にならない乾いた声が漏れる。

(あんなの当たったら……痛いじゃ済まないぞ……)

相手は何周りも上背がある2メートルを優に超す魔人。その筋骨



隆々とした体から繰り出されるあのハンマーが当たっていたら……想像するだけでも寒気がする。

野生のままのスピード、衝動に任せた破壊の拳。全てを焼き尽くす無限の業火。これが、『赫竜』のソルバーンと言われる魔人……今更ながら、とんでもない相手をデートに誘ってしまったらしい。

呆然としていたわけでもないのに、飛び掛かるかのように地を駆つてくる暴君はもう目の前に迫っていた。

「誘ったんならそう簡単にイッちまうなよ！ 妖精セチツ！」

「勝手にストーリーカーしといてよく言うよ！ でも、動きは見切ったぞツ、逢魔レイヴン・カレイドの閃光！」

鋭い回し蹴りが襲い、強靱な右足から吹き出した豪炎の刃が木々を薙ぎ倒していく。

蹴りを、そして炎の刃を風に舞って避け、そのステップのまま時を跳び正面に立つ。衝動のまま荒ぶる暴虐に整える間も与えず、再び脇へ構えた剣で描いた弧が月光の輝を放つ。

再び炎を押し退けて切り裂く風の刃が、魔人の体を大きく抉った。  
(行ける、これなら行けるぞ！)

右下から左上にかけて体に大きな斬撃の痕を残し、一步、二歩と後ろによろける魔人の顔は相変わらずに修羅のごとき眼光を保って迫ってくる。

ここで怯むわけにはいかない。この剣が持ち合わせる防御は、無間の刃を浴びせ、相手の思考を妨害してひたすら次の手を遅らせることしかない。

「二の颯ツヴァイ、万華シリオン・ミージェイアの流星ツ」

まさに光速。ソルバーンの背後を取り、炸裂の矢風に刻を跳び越え斬撃の嵐に飲み込んでいく。駆け抜けた風はかまいたちか、次から次へと斬り刻み、目から迸る翠緑だけがあたりに軌跡を描く。

(技のキレが全然違う……これならツ)

元々スピードと手数に任せた連撃がセチの魔力で無間の刃と昇華し、流星の如く襲い掛かる凄嵐のかまいたちが白銀と輝く。四方八方から切り刻まれたソルバーンは烈風に炎を吹き飛ばされてついに膝

を突いた。

「へっ……この俺が目で追うのが精いっぱいとはな」

膝を突くなど一体いつぶりだろうか……記憶にあるうちにそんな光景は無かったはずだ。さすが「同類」か、その動きはもはや捉えきれない。精々、急所を外すくらいまでしか許さない、刹那すら跳び越えるあの動きはまさに神速と言って良いほどだ。

(なるほど……これが風の異能というわけか……)

一体この異能を自身の目で見るのは何年ぶりだろうか。光速に空を駆け、時空すら切り裂く千の刃を携えて、瞬きする間も与えず斬り捨てる。

あまりに攻撃的な異能に契約者が求めるものが破壊ではないとは、以前の契約者が見せたものしかり、随分と「贅沢な」使い方をするものだ。だが……だからこそ面白い。ゾクゾク湧きあがる興奮をソルバーンは抑えきれなかった。

「さすがだよ、言う事ねえ。ようやくだ、ようやく目エ醒ましやがった。もつとだ、もつと見せろ！シルフィード・ダンス セチの死の舞をもつと見せろヤア！！」

魔人と言われる所以かのように、普段の気の抜けたような顔つきはそこにはない。狂喜を叫ぶその眼は見開き、口元は大蛇の如く裂けた。

あれだけの斬撃を与え、隆々とする体にはつきりと傷跡を残しているはずなのに、その顔は苦痛に歪むどころかますます悦の咆哮に吊り上がっていく。

(どうしよ……不死身の化け物じゃんツ)

尽くせる手はすべて尽くしているはずだ。確実に相手の剛拳を躲し、セチの魔力に身を乗せて自身を矢のように鋭くした渾身の刃を浴びせて……。なのに何故だ、どうしてあんなにピンピンしていられるのか。刃は通っている、流血もしている、なのに何故だ……。

それでもシャニーに考えている暇はなかった。とにかく前に出て相手の思考を妨害し続けなければ、相手の暴虐にペースを持つていかれたら終わりだ。

「刃さえ通ればこっちのもんだ！ 狂咲の風花！」

フレンジー・フルール

確実に相手の体力を削っていることは間違いない。最初に見せた獅子のごとき跳躍をソルバーンが見せなくなってきた。

体に漲るセチの魔力は今も滾々と湧きあがって体に満ちる。

（もう少しなんだ！ もう少しだけ……隙を作れば……）

我慢比べがしばらく続く。風の刃を千と浴びせて一歩、また一歩と魔人を後ろに押し退けていく。

「どうしたよ？ それがテメエの全力かア?!」

あまりに間合いを詰めすぎて、浴びせられた反撃の拳が頬を掠めた。

間一髪避けても風の護りを一瞬でも吹き飛ばされると、それだけで熱波が頬を引裂くかのように痛みが走る。それでもひるまずさらに一歩踏み出し、再び脇から斬り上げ一閃。ついに魔人が膝を突いた。

「セチー！ 行くよ！ この剣に集まれ！」

気流を起こして飛び上がり、白銀の刀身に青焔が揺らめく。一閃に懸けるべく魔力を全開に噴き上げ、紺碧の波動は音を立てて刃を包み燃え上がった。持てる全てを刃と掲げ、上段に構え決意を叫ぶ。

「これがあたしの進む道だ！ いっけええッ青焔の軌跡……！」

リベリオン・シルフライド

生み出したダウンバーストと共に見開いた翠緑の瞳が流星の如く空を裂き、渾身に魔人の肩を叩きつけた。

確実な手ごたえが腕を痺れさせるほどの衝撃となって跳ね返ってきて、青焔が起こした烈風が辺りの雪も大地も全て抉って辺りは真っ白に染まる。

……一向に魔人が倒れる気配がない。視界を遮る白煙が少しずつ晴れてきてシャニーは背筋が凍り付いた。

（?! 嘘……）

瞳目が正面に捉えたのは狂喜に吊り上がる口元。思わずシャニーは乾いた悲鳴とも取れる驚愕を漏らしていた。

（あ、あたしの一番の技……）

身体のキレも、斬撃の鋭さも、そして魔力の伸びも、全てが完璧だったはず。なのに、見上げてくる黄金の眼光は嬉々として輝き続け、口

元は勝ち誇ったように白い歯を見せていた。

(そんな……、どうしてよ?! 間違いなく捉えて切り裂いたはず……)  
彼の顔から剣を振り下ろした肩に視線をやって、瞠目しながら驚愕にこじ開けられた口は声を無くし血の気を失った。

「お前の力は風、俺の力は炎。風は炎を煽り……強くする!」

剣は狙い通りのポイントで、狙い通りの場所を正確に捉えていたが、彼の肩は妖精の渾身を完璧に受け止めていた。

シャニーが驚いたのは受け止められたことだけではない。剣を受け止めている彼の肩は、既に人の身では無いと見せつけてきた。焰を押し固めたような紅蓮の鱗が浮き出ている、食い込む銀の刃を完全に飲み込んでいた。まるで——無傷。

「竜?! ソルバーンさんは竜族なの?!」

見間違えるはずも無い。ベルン動乱で何度も遭遇した竜族の体にも、今日の前に浮かび上がる巨大で荒々しい鱗がその身を覆っていた。

あの時も剣は乾いた音を立てて跳ね返され、ドラゴンキラーを使つてようやく傷を負わせられたくらいに相手。動乱の最後に向かった竜殿で、後から後から出てくる竜の姿に震えたのは忘れられない。ロイの背中を守りながら戦ったあの戦場は、どうやって立ち回ったか記憶が無いほどに必死だった。

あの竜ですら凌駕する威圧感と殺気が今、目の前で我欲をむき出しにした暴虐を双眸爛々とさせて串刺しにしてくれる。

「俺が誰かなどどうでもいいッ、さあ身をもって味わえ! これが本物の劫焰だ!! お前ら“人”の畏怖が何たるかを知れ!!」

止まった風などもはや何の力もない。刹那に噴き上げた爆炎に目がくらんだシャニーへ渾身を振り上げ、業火をまとう蹂躪の拳を浴びせにかかると。

——タイラント・ロリア赫キ竜焰ノ哮リツ!!

シャニーは焦って剣を鱗から引き抜くが、その刹那の内に拳が目の前に迫っていた。

もうこの距離では避けられない。脳裏に九月の戦いが蘇る……あ

の時と同じようにするしか——いや……違う。今はある——逆境を打ち返せる反抗の力が、今はある！

「セチー・拘束全解放だよ！ 負けないんだから!!」

今一度セチの魔力を全開に引き出して刃に乗せ、拳に向かって青焰を渾身に打ち付ける。

「異能同士の真っ向勝負……ッ、面白い!!」

ただの剣ではない、精霊の“まんま”が握る剣から迸る風の魔力を、火炎の魔人は嬉々として受け止め、さらに純粹なる炎を練り上げ拳に渦を作り上げていく。

「いいだろう……。——“まんま” 同士、格の違いを見せてやろう!」

“持っている”程度の人間なら今まで飽きるくらい喰ってきたが、目の前にいるこの妖精は違う。精霊と契約を結び、精霊の化身として“まんま”操るこの女なら、久しぶりに本気を出せる日も遠くないかもしれない。

だが……この程度で目を虚ろにするようでは、まだまだ食い足りない。

「己の限界を知れ!! 妖精!」

シャニーは何度も目を見開こうとしたが、どんどん視界が霞んでくるばかり。相手の拳を押し返すことに精一杯だったはずが、どこか意識が遠くなってくる。

そこへ怒号と共に膨らんでのしかかって来た業火。どれだけ意識を引き戻そうとしても、何故かどんどん遠くなるばかりで気力だけが空回りしているように宙に浮く。

(何故、どうして?! セチ……!)

迫りくる灼熱の太陽の如き拳をついに抑えきれなくなつて限界を超えた。バランスを崩した剣が宙に弾かれ、シャニーの体もまるで指で弾かれたボールのように跳ね飛んだ。

「がはっ」

精霊の加護を失った彼女に空中で態勢を戻す術はなく、天馬騎士として培ってきた受け身も暴君の一撃の前では全くの無力。地面に叩きつけられ、そのまま雪原を転がりようやくやくに止まった。

かろうじて肘をついて上体を起こすと、雪原に突き刺さった剣が視界に映った。その後ろからゆっくり赫髪の暴君が地面を揺らして歩いてくる。

「まだ……まだだ、セチ……もう一度」

武器が無ければ何もできない彼女にとって、剣を弾かれた時点ですでに勝負は決していた。それでもまだこの距離なら、風の魔力に任せて飛び出せば剣を掴めるかもしれない……。

希望を掴もうと呼びかけても応える声はなく、乾いた体からはもう何も湧き上がってこなかった。

まただ。またしてもこの男の前に為す術なく弾き飛ばされて転がる姿を見下ろし、思わず悔し涙が零れた。

「これでも……届かないのか……ッ」

技も力も全てを跳ね退けられ、ぼやけた視界は支えを失いそのまま雪に伏した。無意識に瞳が閉じていく……。高めれば高めるほど、より高くなる炎の壁に跳ね返される悔しさと、ようやく止まった自分への心地よい安堵に沈んでいく瞳。

ソルバーンは進路にある剣を引き抜くとシャニーの許まで歩いてきて、彼女の前言通り燃え尽きた姿をじっと見降ろす。

「バカめ……」

未熟さを残す稚き妖精の寝顔に静かな落胆を漏らすとサングラスをかけた。

「ようやくスタートに立っただけで満足してんじゃねえよ」

今のところは、一人で立とうとしただけ合格にしておくべきか。

まだまだ、こちらも燃え尽きられるくらい楽しめるようになってくれなければまるで喰い足りない。

彼はシャニーを片手で抱えると肩の上に乗せ、次なる強者を求めて雪原から姿を消すのだった。

## 第7話 春の夢

崩れた足音が一步、また一步と少しずつ廊下を歩いていく。

その足取りは、先程まで刻を跳び越えるように駆けていた風の妖精とは到底思えない。鞘を杖代わりに足を引きずる姿は、何か聞かずとも激戦を切り抜けてきたとはつきりと主張していた。

遠目に見ても目に付くそれは、近づけばさらに異様に映る。服は破れてあちこちに擦り傷を残し、何より頭髮は真っ白。

近づくことすら気が引けるような凄惨な姿が、ようやくに城のエントランスまで辿り着き、場の視線を一斉に浴びた。

「ちよつと、君大丈夫か？」

シャニーは放っておいて欲しかったのだが無理な話か。早速声をかけられ肩を介抱された。

見上げてみるとそこには見覚えのある顔。そうだ、いつも姉の傍で厳しく部下を指導している第一部隊の副将ソランだ。

出撃の準備をする者、会議に向けて駆けていくもの、井戸端会議に花を咲かせるもの……エントランスにはたくさんさんの騎士や事務方が行き来しており、誰もが白と枯れた妖精の姿を一瞥しては目をむいて去っていく。

恥ずかしくて恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。

「へーきです、へーき……ははは、ちよつと頑張りすぎちゃって。えへへ……」

「何を頑張ったのかは聞かないとして……とても平気には見えないな」

ソランは周りの騎士とは違い、特に表情を変える事も無い。背後に回って鎧を解いてくれ、そのまま肩を貸して歩き出した。

厳しい人だと聞いていたからもつとあれこれ詰められるかと思っただが、頭やズタボロの服へチラチラ視線を注がれるだけだった。

「君のやんちゃぶりはよくお姉さんから聞いていたが……。優しいお姉さんで良かったな」

「うん。お姉ちゃんは大好き。あーあ……。これじゃまたしばらく顔

出せないなあ」

「まったく。医務室まで歩けるか？」

「大丈夫です、大丈夫……自分で行きますから……」

自分の行動が引き起こしたことだ。最初は断ったが、医務室がある東棟の入口まで肩を貸してもらえなくなった。

支えてもらったら急に体の力が抜けてしまって尻餅。周りから突き刺さる視線が痛すぎる。こんな無様な姿を見られるなら、ちよつと無理してでも天馬で裏庭に回って直接窓から入れば良かった。

「無茶するなどは言わないが、お姉さんをあまり心配させないようにな」

「はあい。ありがとうございまーす。あつ……。お姉ちゃん、元気してますか？ 最近お喋り出来てなくて」

「やれやれ……。元気だよ。その状態に比べたらな」

再び壁に身を預けながら体を引きずって城の奥を目指す。

ソランは言いたくないのだと察してくれたのか、すぐ開放してくれたが、灰に沈む失った白を引きずる姿はやはり好奇の的か。井戸端会議中らしい騎士たちのヒソヒソが背中に突き刺さる。

「あの子、ちよつと前も髪が真っ白になってた子よね」

「相当イドウヴァさんにやられてるみたいよ。早く折れておけばいいのに」

どうやら皆は、執拗に個人攻撃を続けるイドウヴァの餌食になって髪色が変わったと思っているみたいだ。

今はそちらの方が都合はいい。セチには申し訳ないが、この力の事など誰に言っても話をややこしくするだけ。

「おいおい、大丈夫か!？」

「へーきですよ。あはは……。いつもの事なんで」

「そうなのか……？ いつもイリアの為に戦ってくれて感謝する」

事務方のいる東棟に入ると好奇の視線はさらに激しくなり、何度も介抱の声に笑顔を向けて断りながら歩き続ける。……私闘だなんてとても言えない。

ようやく食堂の脇を経て、曲がり角を抜けると大きく息を吐きだ



した。ここまで来ればもうほとんど視線はない。

自分の無様さを嫌というほど噛みしめて、次はこうはならぬと意気込んだシャニーは医務室のドアに体重をかける。

「ウツデイー、おーっす」

今腹から絞り出せるありったけの声と、顔に浮かべられる精一杯の笑顔を湛えて幼馴染の名前を呼ぶ。

研究に没頭する彼なら、元気な声で呼んでおけばまた遊びに来ただけだと思ってくれるだろうと考えたが、軍医が医務室に来る人間に視線を向けないはずもないか。

「何だシャニー久し……」

今日はずっと静かだったこともあり、親しい声に心が弾んだウツデイーにとつて、視界に入つて来た幼馴染の変わり果てた姿は、時が凍り付いたかのようにで一瞬動けなくなった。

「おっ、おい!? どうしたんだそれ!」

試験管の割れる音。膝の上に置いていた分厚い医学書も、座っていた椅子も一切を放り出して立ち上がる。

進路にあるもの全てを跳ね除けながら幼馴染の許まで駆けていき、崩れそうな肩の下に自身を突っ込んで静かに立たせてやった。

髪の色を見て、またあの力を使ったのだとウツデイーにはすぐ分かったが、幼馴染の横顔は以前のように悲痛に沈んではおらず、弱々しくも笑いかけてきた。

「ちよつと……やんちゃしちやつてさ。へへへ……傷薬もらおうかと」

これだけボロボロになっているのに、何故そんなに笑っていられるのかウツデイーにはまるで理解できなかった。

鎧をつけていたであろう部分はともかく、露出していた大腿はあちこち擦過傷だらけ。服はもちろん、下に仕込んでいた革鎧すら引き裂かれ、防御の薄い脇腹は肌が露出し純白を真っ赤に染めている。

今もシャニーは傷薬を保管している戸棚に向かつて歩き出そうとしていて、ウツデイーは無理やり進路を変えさせた。

「待てー!」

「大丈夫だよ！　ある場所分かってるから」

「そうじゃない！　つか、数が合わない時があると思ってたがお前か！　勝手に持ってたのは！」

「ギクッ。アハハ……ナ、ナンノコトカナ？　と、とにかくケガしてんだし傷薬ちようだい！」

「傷薬で済む状態じゃないだろ！　全く無茶して！」

聞けばここまで歩いてきたと言うのでますます仰天してしまった。

見た目は軽傷でも、どこが折れているかもしれないくらい凄惨な姿をしているというのに。おそらく今の彼女は、一度座ってしまったらしばらく起き上がれないに違いない。

「ごめんごめん、えへへ……」

今もへらへらと笑って誤魔化そうとする幼馴染の膝の裏に手を回すと抱き上げ、そのままベッドへと運ぶ。彼女は自分の体の華奢さ加減が分かっているのだろうか。

「まったく、一体何があったんだよ、こんなになるなんて」

触診する限り骨折している様子はなく、ほっと胸を撫で下ろしたウツデイは柵から治療薬とガーゼを持ってきた。

市販品の傷薬ではない。ウツデイが独自に配合した特製の治療薬だ。この分野を得意とする彼の治療薬は魔法を使わずとも傷跡が残らないと、騎士団の中でも評判がすこぶる高い。

これも元々はこうして幼馴染が怪我をした時のためにと試行錯誤してきたものだが、いざ実際に機会が来てしまうと心が痛む。

「修行に決まってるじゃん、修行。八英雄たる者、研鑽を怠らないようにしないとね！」

「八英雄ねえ。お前、騎士団入ってから負けっぱなしじゃないか。その称号も賞味期限切れじゃね？」

「グサツ……。あのね！　負けて無いの！　引き分けなの！」

「あー……。うん、イリアの為に体を張ってくれて——」

「もう言うなよお……」

軍服を脱がせ黒のスーツブラー一丁にさせると、ガーゼにしみ込ませた薬を患部に塗り付けていく。その都度、背中を弓のように反らし

て悶えながら歯を食いしばる姿は哀れ。

ジロジロ見るなど物言いたげな視線を浴びせてくるあたり、見た目の具合通り軽傷で済んだらしいのは不幸中の幸いか。後でレンに魔法で治療してもらえば痕も残らないだろう。

「冗談抜きで無茶するなよ。修行つてレベルじゃないだろ。髪真つ白じゃないか」

「でもさ、バツチリ成果はあつたし。あたしの剣、ようやく握めそうだよ」

何度絶体絶命に遭つても何かしらラッキーが起きて無事に済む。幸運の星そのもののようなヤツだ。

とは言え、修行で毎回こんなことになってはこちらの気持ち持たない。ウツデイは呆れをため息にして浴びせてやった。

「何してきたんだよ」

「ソルバーンつてオジサンとやりすぎちゃつて。ほら、前に医務室に来たムキムキの人だよ」

だが、シャニーがその男の名前を口にした途端に部屋の空気が一変する。

「ソルバーンだつて?!」

どこからか聞こえてきた動転する声。天井から降ってきた黒い影が駆け込むとシャニーの肩を乱暴に揺する。

「あんだ、あの男と戦ってきたのか!」

突然の出来事にシャニーは茫然としてなかなか返せない。ますます急かすようにレイサは肩を揺すってくる。その顔にはいつもの飄々とした表情はなく、こんな顔は初めて見るくらいに瞠目している。

「え、う、うん……」

「あれほど近づくなと言っただろ!!」

吹き飛んでしまうかと思うくらいの怒声を浴びせられ、思わず目をぎゅつと閉じて顔を歪めた。

止めようとしてくれたのだろうか。レイサに近づいたウツデイも鬼気迫る双眸にとても声をかけられそうではない。

その眼光を浴びせられているシャニーも、ベッドに座った状態で肩を押さえられていて逃げ場が無かった。

「でも、おかげでセチとちよつと仲良くなれたから。——ッ」  
鋭い音が響いて笑顔だったシャニーの視線が飛ぶ。

ジリジリと熱くなる左頬に手を添えて正面に視界を戻したら瞳が揺れた。まるで鬼がいるのかと思うほど、怒りに満ちたレイサの目が串刺しにしてくる。目も、そして口元もわなわなとしているのがあり伝わってくる。

「バカだねッ、あんたは！」

今まで感じたこともない恐怖に駆られていると、それまで腹の中に留め、押さえ込んでいた想いがついに爆発するかのように炸裂した半狂乱の怒声。

「みんなを守る剣だろうが何だろうが、あんたが生きて無きや何にもならないだろ！」

一年前の彼女ならともかく、徒な戦いは誓いに反すると剣を抜くの嫌ってきたシャニーが、わざわざソルバーンなどと言う狂気の塊の許へ行つた。理由など、レイサには聞かずとも分かつていた。

迂闊だった、この子の性格ならやりかねないと分かつていたのに。レイサは怒鳴りながらも自身への深い後悔に今も拳を震わせていた。

だがそれ以上に今は、目の前で青の瞳を震わせる乙女への怒りとも、安堵とも言えない感情をぶつけずにはいられない。

「あんたにもしもの事があつたら、あんたを信じた私たちがどう思うか、考えたことないのか！」

闇の世界に生きてきて、誰にも愛されない、誰も愛する資格などないと思っていた。その両手を取って、好きだと言ってくれた人が、業火に飲み込まれようとしているなど耐えられなかった。

シャニーにグサリと突き刺さった手加減の無い怒声。それは半年前にテイトからも釘を刺された言葉そのまま。

レイサのこんなな感情を高ぶらせる姿も、テイトのあんなに悲し気な眼差しも見たことが無いものだった。分かっていた事とは言え、今更ながらに罪悪感がひしひしと湧きあがってくる。

「ごめんなさい。あたし、ついつい……」

「ついつい、じゃ済まないんだよ。死んだら取り返しつかないんだ」

よく、あのソルバーンが生きて帰したものだ。この時ばかりはレイサも天に感謝するばかりだった。

聞けばソルバーンと戦い、力負けした後の記憶が無いらしい。次に意識が戻ると、カルラエ城が視界に映るくらい近場の森に転がされていたと言う。

あの男が慈悲を持ち合わせているわけがないから、おそらく喰い足らずに「熟成」させるつもりなのだろう。

ふうつと安堵を吐き出してふらつくレイサの体をシャニーが支えていると、不意に声が聞こえてきた。

「ま、死にかけたけどね、キミ。またイーギル使い切るところだったじゃん」

「うわあ?! い、いきなりびっくりするじゃん……」

「いい加減慣れて欲しいかな? それとも、毎回、発言よろしいでしょうか? とでも言わせる気なの?」

「い、いやあ……。精霊様にそんな……。でも、また守ってくれたんだね」

いきなりの声に仰天したが、またセチに命を守られていたことを知り俯いた。

あの時、ソルバーンの挑発に乗ってイーギルを全開に放出し続けていたら、目の前で崩れる大事な人をもっと悲しませるところだったと思うと、未熟な自分が虚しくて唇をぎゅつと噛む。

「ありがとう、相棒」

声をかけるとセチはツンとして意識の中へと消えていった。追いかけてよとすると今度は外から呼ばれて意識を引き戻される。

「いいかいシャニー、もうあんたは新人じゃない。私たちのリーダーなんだ。前にも言ったろ、焦るなって」

焦ってもろくな結果にならないことは、入団してからもうずっと味わってきた。ミリアを負傷させ、仲間との絆を傷つけ、11月の大事件……そしてこれだ。どれもこれも、大事な人たちを焦りが傷つけて

きた。

どうしたら一度抜いた青焰の刃を収められるか分からないままで、これ以上大事な人たちを悲しませたくもない。自分が悪かった――シャニーは一旦剣の事は忘れることにした。

「みんな、守ってくれてありがとう。いつか必ず恩返しするから」

その言い草にレイサは腰に手を当て、困ったように鼻からため息を漏らす。

別に改めて恩返しなんてしてもらおう必要はないと、この性分はきつと言つても分らないのだろう。その英気こそが、掲げる刃に百折不撓の炎を燃やす勇気をくれる朗らかな風。彼女の周りに皆が集まること、その時点で想いは十分に伝わり皆を包んでいるのだ。

ピンと耳を弾いてやる。

「恩返しはいいいけど、もうあんたは一人じゃないんだ。我侂一つで勝手に扱っていい身じゃないんだからね。あんたには帰りを待つ人がいる……忘れんじや無いよ」

揺れるピアスを手に取り、シャニーはレイサに言われた意味を思い知つて言葉に詰まった。

つい、目の前に必死になつてしまふ悪癖。だが、目を瞑つて静かにロイの顔を思い出すともう何も言えなかつた。

そつと目を開けて静かにレイサに頷くと、いつもの顔に戻り、彼女は頭を撫でてくれた。ようやく医務室に穏やかな時間が戻る。

「あ、そういえばウツデイ、おめでとう。騎士団報見たよ」

この場所に来たら真つ先に言おうと思つていたことを思い出して、シャニーはずつと蚊帳の外で様子を見守つていたウツデイの手を取るように声をかけた。

予てから彼が研究を続けてきた、イリア風邪の特効薬に関する研究成果が大々的に報じられていたのだ。

高価になりがちな特効薬にあつて、イリア民でも手が届くようにと研究を続けてきたウツデイの不撓不屈は知っていたから、騎士団報を読んだ時は飛んで跳ねて喜んだものだ。

「ありがとう。もう少し効果を立証できれば、命を落とす人がぐつと

減るはずだ」

ウツデイも照れくさそうにしながらも相好を崩している。

なかなか結果が出ず、出資元から詰められ焦った時期もあるに違いない。民に寄り添い、彼らの声を守るために戦って来た者同士、彼の苦労はシャニーにとっても他人事では無く励まし合って来た。

それでも彼は諦めることなく突き進んできて、ようやく長かった闇夜を抜け出した。

黎明が広がる空の先には、きつと明るい未来が待つ。そう信じてきて良かった。

「シャニーが実験台になってあげればいいじゃないか、幼馴染の好で協力してやんなよ」

後は立証実験を繰り返すだけだと聞くと、レイサが面白おかしく茶化してきた。突然最恐の病をパスされ、シャニーは首をぶんぶん振った。

「じよ、ジョーダンじゃない！ イリア風邪なんかかかりたくないよ」

あの風邪の恐ろしさは村でよく見てきた。嘔吐を繰り返して衰弱し、何日も続く高熱で意識を失って、そのまま息を引き取る同じ村の老人や幼子を。抵抗力のある若者なら軽症で済む事も多いが、かからないのが一番に決まっている。

真に受けていたらウツデイに笑い飛ばされた。

「風邪を引いたところも見たことない奴ですから。彼女じゃ検証にならないですよ」

両手を広げて呆れる軍医に、レイサも腹を抱えて笑いだす。

「ははっ、そうか、そうだったね。何とかは風邪ひかなかったか」

二人の様子をむうっと頬を膨らせて睨んでいたシャニーだったが、ふと窓の外を見つめるとその眼差しは不意に優しくなる。

この雄大な自然の中で生きる人たちに、もしウツデイの薬を届けてあげられたなら。

その為に企画したエンジェルヘイローは、着実に進行している。少しずつ、少しずつだが描いた夢が形になっていく気がして、溢れた夢が口から零れた。

「村に病院を作って、そこで治せるようになるといいね」

彼女の視線に気づいたウツデイも、シャニーの座るベッドの縁に腰掛けて一緒になって窓の外を見つめる。冬が終わりを迎えようとする中、残照は再びイリアに闇夜の到来を知らせるように遠くまでぼやけた光を映す。

「ああ、そうだな。病院が出来ればみんなを救える」

今は病院のない村が圧倒的に多い。施設が無いことはもちろん、戦争で多くの医者が野戦病院に駆り出されて命を落としていった。そこにまた、今度はイリア風邪と言う招かれざる客がやってくる。

病院さえ、薬さえあれば救えるはずの者を救えない歯がゆさ。医者として一番に感じてきたウツデイは隣でイリアを映す青い瞳をじつと見つめる。人も、資材も、何もかもが行き届いていない現状を訴えられるのは、この十八部隊しかない。

「大きい病院に、ウツデイみたいな人を育てる学校に……欲しいものは一杯あるよ」

希望を映す紺碧の瞳から溢れ出すイリアの未来。村人たちの想いを受け止め、絆を繋ぎ続けてきた顔は常に夢を語っていた。

太陽の如き笑顔が紡ぐ暖かな風に惹かれ、さらに大きな声が集まりつつある。

混迷極める黎明のイリアに広がる紺碧。そこに描かれた一筋の希望に寄り添い、頷きながらウツデイも静かに未来へ想いを馳せていると、シャニーは新たな夢を静かに口に始めた。

「早くイリアに春を呼び寄せたい。もつともつと、皆に喜んでもらいたいんだ。その為の剣に、あたしはなりたい」

願いと言うよりも、それはもはや誓いであった。

彼らの為ならば、描いた夢が現実となった明日を掴む為ならば、どんな言葉を浴びせられようとも、千の矢が降り注ぐようとも戦える気がする。

イリアの礎たれ、半年前に掲げた誓いは更に磨き上げられて、自分たらしめる存在意義そのものと昇華していた。魂という名の刃をどれだけ折られても、ただひたすら前へと切り拓く剣、それこそ自分の



名。

それでも不安は残り続ける。自身の力が持つ破壊衝動は築き上げたもの全てを飲み込んでしまうかもしれない。

どうすればいい……。そんな不安が聞こえているかのような、肩に置かれた優しい声が心を支えてくれる。

「発信し続けな、その夢をさ。そしたらみんなの夢になる。一人で抱え込むんじゃないよ」

生きて、生きて生きて、生きて絆を繋ぎ続けること。それがお前の使命。レイサの手はそう伝えてきた。

入団からずっと支えて来てくれたこの手。ありがたくて、シャニーは思わず手に取って頬に添える。先ほど自身を打ったこの手がなんとありがたいのだろうか。

残照がすっかり消え入るまで、三人はイリアをじっと見つめていた。

## 第8話 罪雪ぎ、業繋ぐ

シャニーが医務室で夢を語っている頃、第一部隊副将ソランは団長室を目指して廊下を歩いていた。

背筋のピンと張った姿はそれだけで威圧感を醸し出し、行き交う騎士たちは思わず頭を下げていく。

鬼將軍の異名をとるほどに厳しい彼女は、たとえ所属部隊外の騎士であつてもだらしなければ容赦なく叱責を浴びせるので、皆刃に触れるかのような緊張感に包まれて自然と背筋が伸びる。

「第一部隊副将ソランです」

何か様子がおかしい。いつもならノックをしてすぐに声が返ってくるはずなのに、まるで中に誰もいないかのような静寂が廊下まで伝わってくる。

あの生真面目なタイトが、妹のようにやんちゃをして一人でどこかへ出かけていくとは考えづらい。

しばらく待っても返事は返ってこず、ソランは腰に差した短剣に手を当てながらドアを開けた。すぐに見えてくる空色の髪。

「タイト、どうしたの？ 返事もしないで」

ツカツカ歩いていき、窓辺に佇む傍まで行ってもまだタイトは気づかない。

顔を覗き込んで声をかけると電撃でも流されたかのように肩が跳ね上がって、見開く瞳を見ても本当に気づいていなかったと分かる。

「えっ、ドアノック……しないわけないわよね、あなたが」

タイトは改めて相手の顔を見て首を傾げた。

また妹が何か見つけて報告しに来たのかと思っただが、目の前にいるのはソランだ。ドアのノックを忘れて飛び込んでくるような性格では無い事は一番に知っている。

「あなたらしくないね、どうしたの？」

タイトは真面目を絵に描いたような人だ。彼女の反応に首を傾げるソランは視線をタイトから机の上に映してみる。契約書類が日付を記入したところで途中のまま放り出してあった。やはり、いつもと

様子が違う。

怪訝そうに見つめてやると、しばらくティトは困った顔をしていった。

「クレイン様の事で頭がいっぱい——なんてあなたに限ってないとは思うけど」

「ち、違うわよ！」

それでも、クレインの名前を出した途端だった。詰まっていたものが飛び出すかのように反論してくるものだからソランは笑ってしまった。

茶化されたティトは口をへの字に曲げると一つ咳払いをして無理やり話題を切った。

「今日はもう、2月20日よね……。あと1か月なんだなって」

そつと窓の外に視線を映し、ティトは独り言のように漏らした。

今年の今頃はまだ、天馬騎士たちを集めて廻った旅を終えたかどうかの時期。

もうずつとこの部屋からイリアを見つめてきた気がするが、まだ1年しか経っていないと思うと不思議な気持ちだった。

そして、天馬騎士としての人生があと1か月でピリオドを迎えると思うと、それはもつと不思議な感覚だ。ずつとどこまでも続いていくと思った道が、ある日突然無くなる……。その時どんな気持ちになるのだろうか。

「あつという間だったね。あなたが暫定団長になったの、まだつい最近みたい」

ソランも窓辺に歩いてきて、団長と二人でイリアの雄大な自然を見つめる。

ベルン動乱が始まるまでは、ティトは分隊長だったしソランにいたっては役職も無かった。

だけど、幼馴染が金のブローチをマントに輝かせたあの日、何故か何も違和感は湧かなかった。そこからずつとタッグを組んで第一部隊を守って来たが、もうずつと二人で戦って気さえする。

「本当に大変だったわ。あちこち聞きまわって世界に散らばった天馬

騎士を探して……」

とにかく様々な事柄が起きた1年だった。波乱の入団式から始まり、妹の暴走に何度も落胆し、アルマの傍若無人に肝を潰して、団長選出戦では変わらないイリアの悪しき轍に悩んだ。

走馬灯のように浮かんでくる記憶からは、次第に嬉しい思い出も一杯に湧き出してきた。騎士団の再建、妹の叙任、そして士官への任命、クレインとの再会にゼロットからの称賛……。

「まさか……私なんかが、団長になるなんて思ってもいなかった」

ユーノからブローチを手渡されたときは正直逃げ出したかった。もつと適任者がいると思っただし、自己主張の強くない自分では務まらないと、内心首を横に振っていた。

それでも、姉の期待やシグーネの無念を背負う決意で、先頭をここまで走って来れた。

動乱で浮き彫りとなった弱きイリアを、他の国同様生まれ変わらせるために、天馬騎士団の礎を作ることが出来たなら……ようやく恩返しのできた気もする。

「そう？ 私はあるたしかにないと思っただけだね。シグーネさんもだいぶ鍛えてたじゃない、あなたのこと」

ティトは謙遜なのか狼狽しているが、ソランにとって新生天馬騎士団の団長は、最初から一人しかイメージは無かった。

もしイドウヴァが団長になっていたら騎士団には戻らなかったかもしれない。それくらいにティトの堅実で実直な性格を信頼していたし、それが決してマイノリティでない事は団長選出戦でハッキリ結果として出た。

本当にそうなのか……ティトの顔にはそう書いてあり、シグーネの名前が出るとそれは更に色濃くなる。

「今でも分からないの。シグーネさんが生きていたら、天馬騎士団をどうしていたか」

国を守るために、やむを得ず敵国に付く選択をしたシグーネを討つたあの時の事はあまり思い出したくはない。

シグーネの想いは雪へと埋もれ、敵国に付いた事実だけが残り、民

との関係に亀裂が入った。

もしシグーネが生きていたら、どのようなかじ取りをし、どのように民との関係を修復したのか……大先輩ならきつと、自分と違うもつといい方法を探ったのではないか。そう思えてしまう。

「あなたがやって来たことが一番正しいのよ」

その考えをソランは真っ向から跳ね除けて疲れた団長を労った。

「あなたを否定できる人なんて誰もいない」

誰も歩んだことの無い道、そこへ新たなレールを敷く者を一体誰が非難できるだろうか。もし、異論があるならば、石を投げるのではなく共に支え共に歩むべきで、かけるべきは罵声批判ではなく、慰労と意見のはずだ。

「そうかしら……」

今も領こうとしない団長に、ソランは机の横で誇らしげに輝く銀の槍を指さした。

「そうだよ。軌道に乗って来たし、肝入りの部隊も成果出してるじゃない」

戦力的に動乱前のレベルまで戻るにはまだかなり時間があるだろうが、確実に進化したと言える部分もある。

ソランが指さす銀の槍はゼロットから十八部隊が賜ったもの。どんな批判にも耐え、彼女たちの傘となり護り続けた半年。そこから咲いた花が認められ、イリア連合に話題が上がるほどにまでなったのは、団長の一貫した方針があったからだ。

——新人を、ただの傭兵で終わらせない。イリアを創る人財を育てる

クレインにも以前言われた。これは国を動かす者の葛藤だと。

少しでも実を結んだならば……テイトの口元によく微かな笑みが浮かぶ。

「あの子たちは本当に頑張ってくれてる。心から感謝してるわ」

最後までその道に残ったのはわずか4名ではあるが、それでもこれだけの成果が出たのだ。妹のあの瞳を、あの誓いを信じて良かったと思える。

一人が花を咲かせれば、きつと周りにもたくさん咲くはず。来期の新人たちもきつと配属させて大きく育てていくべき部隊だとテイトは確信していた。だからこそ、この道から自分だけ外れていくのは寂しく残念でもあった。

「もつと自信持ちなさいよ。クレイン様を支えるんでしょ？」

これだけ目に見える成果を出し、イリア連合からも認められていると言うのに、テイトはいつも謙虚で、見ているソランのほうがむず痒かった。

もつと喜びを前面に出したっていいと思うことはしよつちゆうだ。本人が言えない分、自分たちががしつかりと労い、讃えてやること。それが彼女にとっての一番の癒しになることを第一部隊のメンバーは知っている。

だが、これからはそれではいけない。それをする側にテイトは回らなければならないのだ。

「ええ、今迄ずっと支えてもらったから今度は私が……どこまで出来るか分からないけど、精いっぱいやるつもり」

ほつと安心した。テイトの口ぶりからするに、それは彼女も理解しているらしい。あのリグレ侯爵家の銀の貴公子が見初めた人だからそんな心配は要らなかつたか。

肩をポンポン叩いて幼馴染の健闘を祈りながら、ソランは窓の外に映していた視線を少しづつ降ろし、カルラエ城の中庭まで辿り着くと大きくため息を漏らした。

「あなたがいなくなつた後が心配だよ。あの人が団長じゃね……」

今迄は副団長の立場だったから、そこまで目立つた行動はとつてこなかつたが、以前から現体制への不満はありあり伝わってきていた。

国内蔑視の意識、改革への批判、資金の出し渋り……浮かび上がるシーンの尽くにおいて、テイトに盾突いていた顔ばかりが思い浮かぶのは、ただの被害妄想ではないはずだ。あれに枷をする存在がいなくなると思うとぞつとする。

「いくらイドウヴァさんでも、そんな露骨なことはしないと信じてるわ」

口にした心配にテイトは首を横に振るが、どこまで本心なのだろうか。彼女が心からそう思っているなら、もう少し違う言葉が口から出ていたはずだ。

何より、正面に立ってあの古狐の視線を浴びてきた彼女が何も思っていないはずなどない。会議の場での二人の関係など、ほんの氷山の一角に過ぎない。露骨なことが出来ないはずのその場面でさえあの態度だったのだから。

「どうだか」

自分でも捨鉢だと思っくらしい、言葉に態度が出てしまった。

「私たちは下位部隊に降格だろうね。ま、西方へ飛ばされなきゃヨシかな」

おそらく大規模な部隊の再編成が待っているだろう。

団長直下が第一部隊に昇格となり、あそこの副将……アルマがそのまま第一部隊の副将となるか、空いた第二部隊の部隊長に昇格するか。

第三部隊や旧第一部隊のようなテイト派の人間が集まる部隊は、二桁の部隊になればまだマシぐらい。最悪西方三島出張所への流刑が待っていても、あの女ならおかしくない。

もしそうなったら、テイトには申し訳ないが騎士団を退団するつもりだ。

自分は辞めて実家の商売を手伝えればいいが、もっと問題な部隊がある。

「私たちより、テイトの妹さんかな、心配なのは。目の敵にしてたでしよ」

7月の団長選出戦以降、十八部隊に対するイドウヴァの態度は余りに露骨だった。それでも9月までは部隊長がレイサだったからかイドウヴァも手を出していなかったが、10月以降の攻撃の激しさは噂になっていくくらいだ。

「何だか……あの子たちに辛い役目を押し付けてしまったみたいで心苦しいわ」

不安ではあったが、それを第三者の口から改めて言われるとテイト

の目も弱く俯いた。

部隊長会議でも、執拗な個人攻撃を妹が浴びせられていた場面を何度も目撃してきた。団長の立場からしかそれを見つめることが出来ず、胸を痛めたシーンも数えきれない。

十八部隊への怒りの全てをシャニーへぶつけて、それでも足りないくらいの剣幕だった。

「まあ何とかするしかないけど。遅しいじゃない、あの子。みんな噂してるよ、お母さんとそっくりだって」

これからは守ってあげられなくなる。テイトにとっては胸を締め付けられる思いだが、ソランはあっさりとした物言いだった。

普通の人間なら10月の内にとつくに病んで辞しているに違いない。

それがここまで戦ってきて、聖天騎士団からは『妖精』の称号を、イリア連合からは名誉の銀を贈呈されているのだ。

このままの勢いなら、将来きつと団長まで上り詰めるのだろう——ソランは漠然としたイメージを浮かべていた。イドウヴァと戦う姿をすでにシャニーたちの母親、何代か前の団長の姿と重ねている古参も少なくない。

問題は……そこまで騎士団が生き残っているかだけ。あの焼き畑的なイドウヴァのやり方では先細りするばかりだ。

「シャニーには命を大事にして欲しい。それだけよ、あの子に望むことは……」

妹が名誉の道を突き進むことは、それはそれで嬉しい事。だが、テイトにとつてはとにかく妹の無事だけが全てだった。

この1年間だけで、何度妹と会えなくなるかもしれない絶望に叩き落されたことだろうか。特に聖天騎士団の筆頭騎士ヴァルフルギスに刃を向けたと聞かされた時は、目の前が真っ白になった。フェリーズの下へ頭を下げにいったあの時でさえ、頭の中はシャニーの寝顔で一杯だった。

「あの子のためなら、私は……——心を鬼にできる」

誓いを鮮明にして1年前とはまるで別人と成長したのに、それでも彼女はどうしても分かってくれない。



自身が傷つくことは、仲間の心も傷つくということ。それが何も変わっていないことをソランの言葉が伝えて来て心が抉られる。

「ああ、そう言えばあの子、またどつかでやんちゃしてきたのかな。頭真っ白でぼろぼろだったよ、さつき」

あまりにサラツと言うので、最初は頭が受け付けなかった。理解した途端、体が氷になっていくかのように固まっていく。

それまでじつと窓の外を眺めていた彼女は、凍りついた顔をようやくソランに向けたが、表情を作る余裕などなく真っ青に死んでいる。

「なっ、何でそれを早く言ってくれないの?！」

雑談の間にぼろつと挟むような話ではないだろうに。

しばしの沈黙の後、胸倉を掴む勢いでソランに駆け寄ったテイトは目で問うた。妹は無事なのかと。

そんな懇願の眼差しを前にしても、ソランの言い草は実にあつさりとしたものだった。さすが鬼將軍の異名を持つだけあるのか、判断基準もかなり厳しいらしい。

「自分で医務室行きますって言うから、ああそうって。きつと大丈夫だよ、笑い返す元氣くらいはあったみたいだし。やっぱ遅しいよ」

穏やかだが芯の通った人間にソランには映っていた。だとしても、やはり可愛い妹なのだろう。居ても立っても居られない様子でテイトは見つめてくる。

ひとまず安心させようとしたのだが、居場所を知るとテイトはもう体の向きを変えてドアへと踏み出そうとしている。

それでも、やはり彼女は団長だった。ここが団長室なのだと思います出した背中がふいに立ち止まる。

「そう言えば何か用があったんじゃないの?」

「ああ、そろそろ連合会議の準備をしないとって声をかけに来たのよ」ソランに言われて思い出したかのように時計へ目を下ろしたテイトは、はっとしてすぐに踵を返すと外出の準備を始め出した。

妹の事は心配だが、イリア連合の会議があるエデツサ城まで、すぐにでも飛んでいかなければならないほど時間が経ってしまった。「資料のチェックもだけど、今日の挨拶、しっかり考えないといけない

でしょ？」

ソランは武具を装備し終えた背に回ってマントを羽織らせてくれ、今日の主役なのだと言を掛けてきた。

任期中最後となるだろう今回の連合会議で、他騎士団の長へ退団を報告するつもりだった。

もう大分前に、ゼロットやフェリーズと言った大手の騎士団には直接赴いて報告してあるが、それでは済まないほど天馬騎士団は大きな騎士団なのだ。

「ええ、もう決めたことだもの。ケジメはしっかりつけないと」

一堂に会するあの場で、自らの口で宣言する事が何より大事となる。

天馬騎士団の再建の完了と、新生天馬騎士団の出発を宣言する重要なケジメの場。

終わりと始まりを記す場所へ向けて、ティトはゆっくりとした足取りで団長室を後にし、ソランはその背中にずっと敬礼していた。

97代目団長は、間違いなく偉大な人物だったと尊敬の念を込めて。

## 第9話 孤墨の女王

——2月20日 17時 50分 エデッサ城 大会議室

巨大な円卓を囲む者たちは定刻をひたすら待っていた。

この規模ともなるとぎわめきは無く、あまりにも張り詰めた緊張の静寂が包む。

右も左も、イリアをまとめる騎士団の長ばかり。テイトはもちろん、フェリーズの姿も向こうに見える。

その光景を見つめてイドウヴァはほくそ笑んだ。

ようやくこの舞台に立てる。時間は掛かったが、隣の目障りな小娘が退団すれば、遂にスタートを切れるわけだ。

ぐるりと円卓へ滑らせるように視線を一周させていると、ついにイリア連合の長が入室してきた。

「今日は天馬騎士団のテイト団長から特別報告があったな。お願いできるか？」

定例的な挨拶もほどほどに済ませたゼロットは、早速にテイトへと主役を渡す。

ここまで来て少しぎわめきを見せた室内で、イドウヴァはさらに目を細くし、団長の宣言を待つ。ここで口外してしまえばもう引き返せない。正式な手続きを待たず決定的となるはずだ。

震える足元を律し、手を突き静かに立ち上がったテイトは、ぐるりと円卓を見渡して一礼すると淑やかな声を会議室に響かせた。

「私、天馬騎士団団長テイトは、3月末をもって、天馬騎士団を退団する事となりましたのでご報告いたします」

事前通達の無かった騎士団長達から驚きの声上がり、会議室内が騒然となった。

イドウヴァの視線に気づいて静かに頷くフェリーズは、歴史の終わりと始まりを確かに感じ取っていた。

ついに潰えることになるのか。初代から代々受け継がれて来た『バリガンの加護』も、この97代目を最後に途絶えるというのか。いや……おそらくは98代目もまたそれを握りしめるのだろう。ただ、振

り向ける先がまるで違うだけで。

「うむ、天馬騎士団の再建という重責を果たしてくれて感謝している。エトルリアでも頑張ってくれ」

そんな交錯する視線をよそに、ゼロットから退団の経緯が説明されて場は更にざわめいていた。

イリア三柱のひとつ——天馬騎士団の団長が、大国エトルリアでも五本指に入る名門貴族へと嫁ぐ。エトルリアとの関係を強固にするにはこれ以上無い話で、政略結婚かと口を滑らせる者までいる。

手をサツと上げ、彼らの声を止めたゼロットは再びテイトに視線を移す。もうこの場から、新しい天馬騎士団は始まっているのだ。

「後任の団長についてはもう決まっているのか？」

誰もがごくりと息を呑むのもやむをえまい。イリアでも特に力を持つ騎士団の長。その強大な力を一体誰が握るのかによってイリアの進む道は——引っ張られる中小の騎士団の命運は大きく変わってくる。

十中八九、隣に座っている副団長なのだろうと誰もが思っていた。騎士団の長しか上がることの許されない、この斉いし舞台の袖に上がっているのだから。

しかし、テイトからの発表は若干に言葉を濁したものだっただ。

「いえ、後任については3月に実施予定の選挙結果に基づいて任命します」

どこまでも往生際の悪い小娘……ピクリと目じりが吊ったイドゥヴァは内心テイトを罵った。

前回の選出選挙を見れば明らかではないか。自分を差し置いて立候補できる者など誰もいないのだ。それが分かっているからこそ、こうして呼んだはずだろうに。

何も身動きを取れない小娘の最後の抵抗か。この娘もまた、あの憎い女の血を引いているのだと今更ながらに思わされる。

「そうか」

短く受け取ったゼロットは、円卓を見渡して木管楽器のような広く深い声で新生天馬騎士団の、そしてイリアの新たなる出発を宣言し

た。

「我々イリア連合は、これから激動の時代に突き進むことになる。統一国家建国に向けて、一層に結束を高めていかなければならない」誰もが視線を他の騎士団の長へと向けている。

統一国家の建設……にわかにマジヨリテイへと膨らんだこの議論。いつもその中心に据えられてきたゼロット自らの宣言は、それまでの賛成論とは意味が違う。

待っているのは吸収と合併。

対等な合併など存在しないだろう。おそらくはイリア三柱に全てが収まることになる。

自然と場の視線はゼロットやフェリーズへと集まり、フェリーズは相変わらず柔らかな笑みを浮かべながらも、その眼は強く遠くを見つめている。

「天馬騎士団の担う責任は大きい。頼むぞ、タイト団長、そしてイドウヴア副団長」

ゼロットの激励を皮切りに、万雷の拍手を受けてタイトが静かに頭を下げて席に着いた。

もう今日の仕事は全て終わったと、心の声が顔に滲んだのは一瞬。凜とした普段通りの目で円卓の中心に視界を戻す。

その横でイドウヴアが深々と頭を下げながら、これ以上無いほどに相好を崩していた。場の反応は……予想通り。これで状況は整ったわけだ。後は着々と準備を推し進めるのみ。

「今後、この場を用いて建国に向けた討議を行う時間も増えるだろう。諸君も大いに参画していただきたい」

今まではそこまで大激論が繰り広げられることも無かった。今後は互いの利権をかけ、諸説紛々として雁行のような状態が続くのだろう。

それは、この部屋の中で納めなければならない。そうでなければ、悲惨な思いをするのは民なのだ。ゼロット自らが声をあげたのは、そこを確かとする為だった。

動き出した大きな歯車を前に、誰もが覚悟を決めた眼差しを白き円

卓に向けていた時だ。

「ああ、そうだ」

突然にゼロットが話題を変えるかのように切り出す。「私からも一つ、今日は諸君に報告することがある」

国家建設に向け、全ては民の為に——この声を大きくするための大事なピース。いや、現状の外征至上主義に待ったをかける象徴とも言って良い。この場でも散々に批判されて来た若き花々をゼロットは高く掲げた。

「先月、我々イリア連合として天馬騎士団の第十八部隊へ、その功績を讃えて銀の槍を贈呈したことを報告させてもらう」

場が再びざわついたことは言うまでもない。

今まで十八部隊の処遇については、この場でも何度か話題に上がってきた。稼げる金を稼がないその態度から、団長テイトへ容赦ない声を浴びせた者も少なくない。

そのテイトの意志が、盟主ゼロットによって肯定されたのだ。あるうことか、名誉の銀を贈つてまで。

これまで非難を浴びてきた者たちが視線に困ったのは言うまでもなく、その中でもイドウヴァは目にあり狼狽を映していた。

あの部隊がまさか……イリア連合の中で存在を肯定されてしまうなど。

そんな焦燥に駆られた心を煽るような拍手——フェリーズだ。

「ほお、素晴らしい。さすが『妖精』ですね」

これ以上無いほどに相好を崩し、自らが十八部隊長へと贈った称号を口にしながら称賛する様は、自身に先見の明があつたとしても主張したいのか。

彼もテイトを面直で責めていたくせに、今も大きく拍手するフェリーズをイドウヴァは恨めしく見つめていた。

「うむ。国内軽視は今後国家建設においても重大な懸念となる。各騎士団も事情はあろうが注力をお願いする」

だが、話題はどんどんとイドウヴァを追い詰めるように進められ、場の空気が変わっていくのが嫌でも伝わってくる。

たった、たった4人の小娘たちに追い詰められている気がして、彼女の眉間はみるみる厳しくなっていた。

これでは……これではあの時と同じではないか。ほぼ掴みかけた栄光を搔つ攫った、新進気鋭の青髪。12年前のあの日と……同じではないか。

その怒りに止めを刺すかのように、ゼロットの声が目の前を通り過ぎていく。

「テイト団長。君が様々な苦難に屈することなく着実に積み上げた結果だ。本当に感謝している。後ほど勲章を授与しよう」

イリア連合からの勲章……それはイリアとしての価値観の肯定と称賛。

一気に周りの白が黒にひっくり返っていく気がして、言い尽くせない程の絶望感がイドウヴァにのしかかった。

横ですくつと立ち上がり一礼したテイトからは、追い打ちをかけるような声が飛んできて突き刺してくる。

「ありがとうございます。残り短い期間ですが、尽力させていただきます」

死してなお……楔を残したというわけか。あの女も、その娘も。

致命的な一撃を受けたイドウヴァの耳には、それ以降の議論など何も入っては来なかった。ただ口をわなわなとさせ、行き場を失った視線が円卓の白の中で泳ぐばかりだった。



連合会議は定刻で終了した。一人、また二人と会議室を後にしていく。

最後までゼロットと談笑していたフェリーズもようやく部屋を出ると、そこには静かに頭を下げる赤髪の騎士がいた。

主よりも余程落ち着いた眼差しに柔和な笑みで返し、先で待っていたイドウヴァと共にエデツサ城の中庭を歩いていく。

彼女は重い空気を引きずって無言が続く。

厩舎が大きくなってきた。だいぶ城から離れ、淀んだ空気を払い退

けるようによく突いて出た罵る声。

「何が……建国に向けた懸念ですか。その気になるには早いのではないですかね」

ゼロットは王にもうなったかのような言い草だった。宣言したからと言って、簡単に進まないのは自明の理。

だがイドウヴァが口にしたそれは、もはや願望に近いようなもの。ここまで積み上げてきたものを守るには、とんとん拍子に行って貰っては困る。

主の目に湧きあがる焦りをずっと横目に映していたアルマは堪らず声をかけた。

「しかし、十八部隊の処遇については慎重に決定すべきかと」

「分かっていますよ、そんなことは」

本当か？——そんな眼差しを彼女からに向けられていたのだが、まるで気づかずイドウヴァの足取りは重くなるばかり。

これまでの論調は追い風。外部圧力も利用して、テイトの実権が失われたタイミングで十八部隊を潰す計画だった。

こうして大々的に存在を肯定されてしまつては、下手なことをすればこちらの立場を危うくしかねない。

弱き花々が見せたまさかの棘に刺され、脳裏にはあの顔が浮かんだ。

「シャニー……あなたはどこまで私の邪魔をすれば気が済むんですか」

7月の選挙から始まり、11月の事件。そして極めつけは今回のこれだ。

思い出せば思い出すほど浮かび上がる、団長の座を掠め取ったあの女の顔。シルエツトのみならず、あの気質がどうしても母親を思い出させ、苛立ちを噛み砕く口元が震えてくる。

その存在が、今イリアを味方につけ立ちはだかろうとしている。たった十六になるうかの小娘にまた足元をすくわれるというのか。何度も首を横に振った。

「ここまで来て……これ以上邪魔される訳にはいかないですよ」



計画も次のステップに移らねばならない時が来た。

ゼロットが宣言せずとも、建国推進派が主流となるのは分かっていた。それが強力に後押しされた今、初動こそが何よりも肝心だ。

今立ちほだかるのなら――

その決意の眼差しにフェリーズは困惑しながらも、哀れむような、見下ろすような視線を向けていた。

「イドウヴァ殿、そう心配めされるな。『妖精』は貴女の配下なのですよ？ どちらに剣を向けさせるも貴女なら自在のはずでしょう」

どれだけの力を持っていようと、所詮は叙任騎士。二人の間にある力の差は抗いようも無いはずだ。どうしてこうも怯えているのか、フェリーズには全く分からなかった。

団長こそが生殺与奪の権を握る。殺すことばかりを考えている彼女の心が全く理解できない。あれほどに使える剣も、そうそう無いだろうに。

「フェリーズ卿、あなたも1月に思い知ったはずです。彼女にルールなど通用しないのです」

知った風な口を――喉元まで出かけた言葉を飲み込んだが、思わずイドウヴァは睨んでしまった。

あの小娘がああ事件を知っているとは思えない。誰も知るはずが無いのだ、あの雪崩に巻き込まれて団長が死んだ事件は、誰も。当時の報告書も、誰も入れない地下書庫の奥で氷っているはずだ。

だからと言って、いつ寝首を搔くか分からないあの剣を傍に置いておくのは恐ろしかった。

（直接手は出せない。でも、手遅れになる前に……――ああ、どうすれば……）

焦燥の眼差しは天馬と共にあつという間に西の空へと消えていった。

「どんな名刀も……手にした者が愚者ではただの鈍というわけですか」

これはチャンスだ。一枚岩で無い状況で、ゼロットが扉を開けたのだ。

追い風のはずが彼女は震えていた。あろう事か、切り拓く剣を放り捨てようとしている。

やはりあの時、糸目をつけずに投資するべきだったか。フェリーズはその口元から柔和な笑みを消していた。

間違いなく、新団長の下であの剣が輝くことは無く、下手をすれば母親と共に地下書庫へ永遠に封じられるかもしれない。

惜しい、実に惜しい。部外者のままとなってしまった今は、そうならないようにただ『妖精』が『下手』を起こさない事を祈るのみ。



一方、カルラエ城に戻ったイドウヴァは、アルマと共に第二部隊の詰所へと戻っていた。

その手に宝玉を転がしながらじっと見降ろしていた彼女は、横に立っているアルマにきつと目を向けた。

「アルマ、貴女は何かいい手段を持っていますか？ シヤニーを大人しくさせる方法を」

これ以上大きな顔をされては、どんどん選択肢を狭められてしまう。何とか手を打たなければ……その気持ちは言葉を選ぶ余裕すら奪って思うまま飛び出した。「弱みを握ったりだとか？」

彼女の傍にいればいるほど、弱点だつて分かるはずだ。あれだけ攻撃してやってもびくともしないのでは別の手段を考えるしかない。

「彼女の弱点……ですか」

静かに目を閉じると、必死に剣を振るう青髪の中が見えてくる。彼女に恨みなど無いアルマは、その気になれなかった。ライバルとは言え蹴落とそうとは思えない、あの垣根を作らない朗らかな顔を裏切りたくはない。

「強みこそが弱み……でしょうね」

彼女は親友を信じた。両極端な奴だが、弱さ以上に強さを持つ親友なら、弱みを突かれてもきつと戦ってくれるだろうと。

「なるほど、そう攻めますか」

「ええ。彼らを盾に取れば、彼女は必ず交渉の場上がるでしょうね」

妙案を得て、口元がこれ以上無いほどに吊り上がるイドウヴァの姿は、もはや大蛇と呼んでも過言ではないほど毒を湛えている。

その眼光を横目に流したアルマの顔つきは鋭い。

提案はしたものの、自分なら絶対に使わない手でもあった。

もし、彼女とやりあうなら真正面からぶつかって、参ったと言わせたい。これだけやってきて勝てないのなら、そういうことなのだ。覚悟を決めて今まで歩いてきた。

「それも一つの選択肢にしておきましょうかね。カードは何枚あっても困りませんから」

しかし、新たな団長は決してそうでは無いようだ。

本当ならあの女の許へ送ってやりたいくらい、とにかくあの顔は見たくない——いつもイドウヴァはそう漏らして来た。

実害も出始めている以上、3月迄に何としてもケリをつけたいのだろう。そうなれば……。

選択肢が絞られたのか、イドウヴァの目が徐々に据わっていく。

なぜここまでの私憤を抱き、八つ裂きも辞さない構えでいるのか。腹心のアルマですら分からなかったが、新たな出発を凶変が襲う予感ばかりが膨らむのだった。

## 第10話 いつか飛び立つあなたへ

二月も終りの昼下がりに。

カルラエ城には明るい日差しが差し込み、春がそこまで来ているとはつきり伝えてくる。

シャニーは両手を天へと突き上げ、背を弓のように反らして食後の心地良さに欠伸び始めた。

その細めた視界の端に見えた、騎士団で一番親しいシルエット。ぱつと笑みを浮かべて廊下の向こうへと駆け出した。

「おーい、団長ー！」

テイトの視界に眩しい笑顔が一杯に映り、自然と心が軽くなる。

何度叱つても廊下を走る癖は直らないが、今日はどうにも叱る気分にはなれない。あんな元気いっぱいの明るい笑顔で寄って来られたら、そんな気持ちは吹き飛んでしまった。

テイトの許まで駆けてきたシャニーは、ニコニコしながら手を取って嬉しそう。この様子だと、特に用事があるわけではなさそうだ。

「あら、珍しいわね。あなたがちゃんとそう呼ぶのって」

こんな基本的なことも出来ずに「お姉ちゃん」と騎士団内でも平気で口にしてた一年前。イリアの恥と切り捨て、新人部隊へ放り出したのがずっと前のように思える。

顔つきも入団したての頃の幼さと尖ったものが取れて、凜としながらも丸みを帯びてあか抜けたように見える。

「えへへ、あたしだってやればできるんだから」

そう言っ得意げに笑うこの顔だけはあの頃と何も変わっていない。

変えるべきところは変え、変えない勇気も持ち続け……。どれ程この一年で妹は乗り越えてきたのだろう。ソランの言う通りかもしれないとテイトは思った。本当にたくましかった。

「だったらいつもそうして欲しいわね」

でもやはり、口から出たのは厳しい言葉。

「言うと思ったよ」

口を尖らせながらあつさりと返すシャニーも、いつも通りの姉で安心したかのようにすぐ笑顔が戻る。

テイトが団長室へと歩き出すと、シャニーもついて手を握った。嬉しそうにぶんぶんと振るものだから、テイトには恥ずかしくてたまらない。それでも、気持ちを手を軽くさせる春の日差しの中、もうちよつとの距離だからと妹の温もりを感じながら歩いていく。

「お姉ちゃんを団長と呼べるの、もうあと少しだし、名残惜しくてさ」

今日はやたらと妹が甘えてくると思っていたら、ふいにそんな事を言い出した。

もう二月も最終週。

籍は年度末までも、三月はそこまで登城する時間も無く、顔を見られる時間はもつと短い。

それをシャニーは感じ取っているのか、ふつと差したものの悲し気な眼差し。何か言いたげな、だけどそれを堪えているようにも見えた。

そんな顔を見せたのも一瞬のこと。すぐ笑みが戻った。

この朗らかな笑顔と触れ合えるのもあと僅か……妹の横顔をじつと見つめていると、テイトははっと思いだして立ち止まった。

「そうだシャニー、ちよつどあなたに言おうと思っていたことがあったの」

「なあに？」

「近いうちに食事でもどうかしら？ ランチでもディナーでもいい。空いてる日を教えてくれれば私が店の予約を取るわ」

おっ、とシャニーの顔がサプライズに揺れて、直後また笑顔に弾けた。

外食なんてめったに出来ないし、それを姉と一緒に楽しむ機会となると一体いつぶりだろうか。お茶をしたこと自体が、どれだけ遡れば良いか考える程記憶に遠い。

嬉しい……小躍りする姿からその気持ちが溢れ、日差しのような笑顔を見せていたシャニーは天井を見上げながら「うーん……」と唸って行き先を考え始めたが、返ってきた答えは意外な場所だった。

「なら、おうちで食べようよ」

テイトは面食らった。

シャニーならレストランで食べたいと言うかと思った。幼いころはいつもそればかりで姉二人を困らせていたというのに。

最後くらい、妹を喜ばせてやろうと思っていたので不思議な気持ちだ。もう、昔のままの妹として見たらいけないほど成長したということか。

「家で？ いいの？ レストランの予約を取ろうと思ったのだけど」

再びの問いにシャニーは静かに首を振った。

姉の提案は嬉しかったし、一度でいいからエデツサにある貴族街で食事してみたい夢は変わっていない。

だけど、今回は自分でも不思議なほど、シャニーの中で最初からはつきりしていた。頭に浮かんだ、姉と一緒にいる場所は――。

「お姉ちゃんとなら、やっぱりおうちが一番いいよ。時間を気にしないでいっぱいお喋りしたいもん」

シャニーが口にした言葉は、やはり彼女は彼女だとテイトに思わせるものだった。

家で妹と食事。昔は当たり前だったのに、その当たり前が失われてしまったここ数年。

そして、これからそれは永遠になくなってしまいかもしれない。エトルリアに嫁ぐという事は、もうイリアにはほとんど帰れないはずだ。

二人にとつての世界で一番のプライベートスペースで、帰る時間もテーブルマナーも気にせず、ただ一緒に居たい――そんな妹の愛情が伝わってくるようで、テイトは妹に抱き着かれように嬉しかった。

「お姉ちゃん忙しいでしょ？ 日にち教えてくれれば、あたしご飯作っておくからさ」

自分が提案したはずなのに、逆に妹は招待しようとしてくれる。何だか目頭が熱くなってくる気がする。

元から人の懐に飛び込むのは彼女の得意。知らない間に、人の気持ちを知って心を配れる人間になってくれたかと思うと、不思議な喜びが湧いてきて今にも頭を撫でてあげたくなる。

以前から妹は自分を大好きだと言ってくれて来たが、それが表情や仕草から溢れていて心が温まるばかり。

「ありがとうシャニー。じゃあ二人で夕飯を作りましょ」

そんな大事な妹だ。

もちろんタイトだって大好きだったが、今まで口には出してこなかった。

恥ずかしいではないか。こんなに近い間柄だし、何より周りにはあらゆる視線があると云うのに。

だけど、彼女と共に出来る時間を少しでも増やしたい……今はそう思える。

こんな、終わりが見えて初めてこんなことを考え出すとは。いくらでも時間はあったし、機会だってこの瞬間でさえいくつも脳裏に浮かんでくると云うのに。

そんな後悔はそつと心の底に置き、約束を交わすと互いの戻るべき場所へと帰っていった。



数日後、非番の日にシャニーは朝からせつせと掃除に精を出していた。

この日に合わせて仕事を早く切り上げ帰って来る姉を、びつくりさせてやりたい目は真剣に戦場と向き合う。

いつもなら納戸に押し込むだけの掃除も、ちゃんと置き場に戻して廊下も壁もピカピカに磨き上げた。

「あたしだってやればできるじゃん！」

自画自賛してから、また姉に言われた言葉が脳裏をかすめて一人で苦笑いすると、休む間もなく買い出しへと家を飛び出していった。

野草芽吹く道を駆け、ようやく訪れた春の日差しに心を弾ませながら。

三時過ぎになつて天馬の羽音が聞こえ、リビングでお菓子を摘まんでいたシャニーは飛び出した。玄関まで走っていき、ドアの向こうに見えた大好きな姉を招き入れる。

「やっぱりここは安心できるわ」

軍服から着替えて戻ってきたタイトは、リビングに広がる何も変わらない光景を不思議な気持ちに包まれながら見渡していた。

何か……昨日もここにいたかのような、夢から醒めて部屋から出てきただけにすら思える。

互いに軍服を着ていない状態で会うのはいつぶりだろうか。少なくとも去年は一度だつてそんなことは出来なかった。

鎧も、団長と言う肩書も。すべてから解放され、妹に出してもらつた熱々の紅茶を一口すると、何だか肩の力が一気に抜ける気がする。

「ねえねえ！ 結婚式決まつた？」

そこに飛び込んできた元気な声。士官着をまとつていない妹は、良く知る天真爛漫が全身を包んでいた。

「そんなに気になるの？ ご馳走狙いかしら？」

「違うよう！ お姉ちゃんのドレス姿を早く見たいなつてだけ」

ここなら気軽に冗談も飛ばしあえる。

妹からストレートな喜びをかけられ、タイトの口元が緩んでいく。こんな素晴らしい場所があるのに、レストランに行かなくて良かった。

この一年、様々な敵と相対して疲れ果てた心が一気に癒される気がする。自分の幸せを心から祝福してくれる人がいる事が、こんなにも嬉しいことだとは。

「今のところ六月の予定なの」

まだ決まっていないが、ずっとお預けにしておくのも可哀相かと思ひ予定を口にする。

「結構先なんだね……」

えっと、口を空けて驚いて見せたシャニーからは残念そうな声が漏れた。

「色々決めないといけないことも多いから。決まったらすぐ教える



わ

エトルリアに入ったら即式が待っている……最初はそう思ったのだが、なかなかそう言うわけにも行かないらしい。

式自体の準備にあちこちへの報告に……おそらく四月からもしくはらくドタバタすることになる。向こうに行つたらとりあえず何をしようか……そう考えているとふいに手に伝わってくる温もり。

「お姉ちゃん、本当におつかれさま」

いつの間にか席について、正面からシャニーが見つめていることに気づいた。

彼女はしっかりと手を握っていて、笑顔で労ってくれている。

何でもない光景のはずなのに、どこか妹の視線が恥ずかしくてティトは照れ隠しに笑って見せた。

「どうしたのよ、いきなり」

「部隊長になってき、部隊の子の気持ちを考えるって大変なんだなって分かってき。お姉ちゃんは団長なんだもん、どんな大変なんだらうってずっと思ってた」

今日は姉を茶化さず、シャニーはそのまま尊敬の眼差しを送る。

自分の言動一つが部隊に大きな影響を与え、隊員たちの受け止め方も少しずつ違う。ちよつとの齟齬でも隊員を不安にさせ、家族の力を引き出すどころか半減させてしまう。シャニーにとって、強さと重さと思ひ知った半年だった。

たった三人の部下でさえ大変なのに、姉が団長として背負った百を超える想い。重責から解放され、幸せの許へ飛び立っていく姉を労わずにはおれなかった。

「ふふ、あなたもなれば分かるわよ、団長の大変さ」

そう言えば、同じことをユーノからも言われた。ティトは口にしてから思い出していた。

なったものにしかきつと分からないだろう。信を、責を、そして過去を——全てを背負うこの気持ちには、背負ってみなければ分からない。

それを理解しようと心を寄せ、声をかけてくれる想いは、日差しを

浴びるかのように疲れ果てた心を抱きしめて温めてくれる。

「あたしが団長かあ」

天井を見上げながら漏らす妹に、ティトはきつとなれるとエールを送る。

もう既に彼女は信を集め、それを背負って戦った勲章を手にしているのだから。

「シャニーこそ一年ありがとう。特に十月からの活躍は見事だったわよ」

正直、予想外だった。分隊長も経ずにいきなり部隊長——騎士団の幹部に任命したから、最初の半年は勉強くらいに考えていた。

騎士団をまたいだ大問題を引き起こしてくれるとは、さすがに完全な誤算だった。

それでも十八部隊の名をここまで知らしめ、イリアへ目に見えた変化を与えて様々な名誉を手にするとは。

これなら、自分がいなくなってもイドウヴアときつと戦っていける。

「光栄に存じます、お姉ちゃん！」

座ったまま背筋を伸ばして敬礼する、朗らかな笑顔が妙に逞しく見えた。

もう一年前の、戦場での身の振り方に長けるだけの思慮無き剣ではない。

守るべきもの、目指すべきもの、それら己の抛り所をはっきりとした誓いが握る剣は、きつともう折れることは無いのだろう。いや、例えどれだけ折られようとも立ち上がり、刃に全てを滾らせ敵へと向かっていくに違いない。

この半年、その姿をずっと見守ってきた。この人なら信じられる——そう思える一人になってくれた事が嬉しい。目の前で輝く青の瞳が、淹れてくれた紅茶のように心を温めてくれる。

ふざけていたのは僅かな時間だった。笑みをしまったシャニーは姉の手をしっかりと握る。その真顔にはティトも驚くほど。

「ただでさえ大変なのにさ、いっぱい迷惑かけちゃってごめんね。

ずっとお姉ちゃんが守ってきてくれたの、本当に感謝してるし、ごめんって思ってる」

ずっと言えずにここまで来てしまった。姉が傘となり、どれだけ様々な非難から守ってきてくれたか。きつと自分の想像する以上に辛かったに違いない。

それを顔に出しもせず、騎士団の長として凛と構える姉は憧れだった。

姉は自分を見くびっている……そう考えていた一年前が、顔から火が出るほど恥ずかしい。

「どうしたのシャニー、今日はやたら素直じゃないの」

「へへっ、あたしだってもう大人だし」

あんなに反抗的だった妹が……。

あんなに厳しかった姉が……。

お互いに目頭が熱くなってくるのを止められなかった。

照れ隠しにテイトが笑いかけると、シャニーは隠すこともなく涙をすすって笑い返してくるものだから、彼女も辛抱できなくなってしまう。今日は楽しい場にしようと思ったのに。

「あーあ、天馬騎士団に残るのあたしだけかあ、寂しいなあ」

何だか湿っぽい空気になってしまった。

それを払うようにシャニーは頭の後ろで手を組み、椅子を揺らすと独り言のように天井を見上げだした。

ずっと姉の背中を追いかけてここまで来た。

もう四月からは追いかける背中はなくなつて、本当に一人で飛んではいかなければならなくなる。辛い時に団長室に飛び込んで泣いたりできなくなると思うと不安もあった。

その気持ちはテイトも同じだった。今でも……目の前にいる妹は“普通”ではないのだから。

「シャニー……その、髪どうしたの？」

ずっと聞こうと思ってきた。けれど、何か聞くのがとても恐ろしくて、なかなか切り出せずにここまで来た。

十二月に一度見て以来忘れかけていたこの真っ白な髪を改めて聞

近で見ると、聞かずに別れることが今度は恐ろしくなった。

何か……妹がどこかへ消えてしまおうような、この消えた髪の色のように雪の中へ飲み込まれてしまうような恐ろしい錯覚。

「え？　これ？　大丈夫、大丈夫！　放っておけば治るからさ」  
ところが、夕飯を口に運ぶシャニーの顔はいつも通り朗らかで、まるで気にも留めていない様子。

そういう問題ではない……放っておかねば治らないような、異常には首を突っ込んで欲しくなかった。

騎士である以上、戦いや負傷を避けられないことは分かっているし、そう部下に散々言ってきた。なのに、今ティトの心に渦巻いているものは全くの逆だった。

「……あなたはもう一人前の天馬騎士。いえ、天馬騎士団の幹部として見ているから、あれもこれも言うつもりはないけれど」

もう彼女に天馬騎士として注文を付けることは何も無かった。どこに出しても妹だと胸を張って誇れる天馬騎士だ。

だが、だからこそ……ティトは席を立つと妹の横に立った。  
夕飯を食んで浮かぶ満面の笑みがある。手放したくない——そんな想いが手を伸ばさせる。

「びつくりしたあ」

いきなり頭の上に手が置かれ、シチューを頬張ろうとしていたシャニーはスプーンを落として肩を跳ね上げた。

見上げれば頭を撫でられていた。

こんなことをしてもらえたのはいつぶりだろうか。この厳しくて恥ずかしがり屋の姉が……こんな優しさに満ちた目で見つめて撫でてくれるなんて。

「シャニー、命を大事にしてね。お願いだから無茶しないでね」

「お姉ちゃん……」

姉から贈られた、何の飾りも無い真つすぐで深い愛の祈り。

頭を撫でられる感触と共に心へ吸い込まれた祈りが体を包む。その感覚に、シャニーはしばらく呆然と姉を見上げるしか出来なかった。

今までも散々姉には同じことを言われて来た。だけど、今姉が向ける眼差しは、まるで母に見つめられているかのように心が解けてくる。

その青い瞳を見つめて、テイトは勇気を振り絞った。

「大好きなのよ、あなたの事。この一年、あなたの心配をしなかった日は無かった」

これだけの言葉を掛けてあげるのに、どれだけ時間をかけたのだろうか。

伝えてやれば喜ぶことを知っていたのに、まるで天馬から飛び降りるかのような覚悟を決めた気がする。

だが、これだけは神に誓って言える。

家に戻らなくなり、城を空ける日が増え、シャニーがイリアの空を駆ける日が増えても、この朗らかな太陽の無事を祈らなかつた日は一日も無いと。世界でたった一人の、世界で一番大事な妹の存在を、忘れたことは一刻とて無かつたと。

「お姉ちゃんがそんなに心配してくれてたなんて……あたし、知らないで口答えばかりして」

姉の愛がまつすぐに降り注いで、シャニーは瞳を震わせながら動けなくなってしまった。

ずっと欲しかった姉からの言葉。だけどそれは考えていたより遥かに深く、溢れる喜びは姉に抱きしめられているように心を温かく、軽くさせる。

こんなに苦勞させた姉に、今してあげられる恩返しは……。

シャニーは姉の本当の気持ちで全身で受け止め、今日一番の笑顔で大好きな人に捧げた。

「あたしだって、お姉ちゃんの事大好きだよ！ うん、大、大、大、だいすき！」

ジンと心が震え、テイトはきゅつと唇を噛んだ。

不器用でうまく表現ができない自分と違い、いつも妹はこうして一番嬉しい事をしてくれる。

愛おしい。切ない。手放したくない……——テイトは思わずシャ

ニーをいっぱい抱きしめた。

「少し遠くなるけれど、私はあなたの事をずっと見守ってる。困ったら、いつでも言っつて。力になるから」

どれだけ離れていたって、家族の絆は消えたりはしない。無事を祈る場所が、団長室ではなくなるだけだ。

姉の温もりの中で、シャニーは幸福感に包まれていた。それは柔らかくて、目を瞑って全てを預けられそうな安らぐ温もりだった。

「ありがとう、お姉ちゃん……。お姉ちゃんの妹で、あたし本当に幸せだよ」

姉が在任の間では、そんなにたくさんの恩返しは出来ないかもしれない。

けれど、見守ってくれる姉の心をきつと軽くさせるような活躍をしてみせる。そう誓い、時間の許す限り姉の温もりに甘え、シャニーは傷ついた翼を癒すのだった。

〈第五章 風の魔人 終〉

紺碧のコントレイルⅡ 終章 蒼天に繋がれ  
第1話 こんなの夢だ

——エレブ新暦1001年 3月2日

春を迎えたイリアの朝空はどこか優しく、未だ包む黎も夜明けが少しずつ早くなるのを知らせるかのように淡い。

その中を翔ける一騎の天馬。今日もシャニーの青いショートレイヤーが風に踊る。駆け抜けていくイリアを見つめ、わくわくが溢れて横顔から白い歯が零れた。

城に着くと廊下を軽いステップで叩いて詰所に入り、暖炉に火を点け井戸水を汲みに行く。キンと冷たいはずの水も、どこか温かくなつた気がするのは春を迎えたからだろうか。

東の空を見上げてみた。

絵の具を溶かすように少しずつ黎に青が浮かんでくる。

「はあく！ 気持ち良い朝だなあ！」

両手を天へと突き上げ、背を弓のように反らしたシャニーからは気持ちよさそうな声が漏れた。

今日は何をしようか？ 好奇心の塊のような、くりつとした青い瞳はじつとしていられない。汲んだ水を詰所の暖炉の鍋に移すと、剣を持って室内稽古場へと入っていった。

剣を振り気持ちを整え、穏やかな顔が凜と引き締まっていく。

しばらく剣を振っていると、向こうでブーツが床を叩く音が聞こえてきた。部隊の誰かが来たようだ。今日の二番は誰か、足音で推理が始まる。

「おつ、早いねシャニー」

予想通りの声。振り返った先に、槍を持って稽古場に入ってきたルシヤナが見えた。手を挙げて早速声を掛ける。

「おっはよー」

「ははっ、春と一緒にあんたも帰って来たって感じがするよ」

「ええ？ 何それ。あはは」

「二月の時はマジでヤバかったからね。全部雲が吹き飛んだみたいな顔してるよ」

「その節はご心配おかけしましたってね。うん、もう大丈夫だよ」

シャニーは再び稽古場の中央を向いた。背はピンと伸びて、鋭い一閃が空を裂く。

その背中を見て、ルシヤナはふっと笑みを浮かべた。

「私も少し付き合うかな。勝負だよ、シャニー」

普段は見ているだけのルシヤナが槍を構えだし、真剣だったシャニーの顔に笑顔が咲く。

今年の冬は何か例年より厳しかった気がする。本当に辛いことがいっぱいにあった。それらの全てを乗り越えて迎えた春。自然に声も弾む。

「良し来た。望むところさー！」

独りで稽古するより二人でしたほうが楽しい。

ニカつと剣を掲げたシャニーは、さっそくルシヤナの槍相手に構えを作った。

湧き上がる感謝を噛みしめながら、一閃と回避のステップを繰り返す。

一年ずつと一緒だった瞳。部隊崩壊の危機も、死の赤に塗れた絶体絶命も、共に切り抜けてきた。

これからも絶対に一緒——それは祈りではなく、誓いと言ったほうが近いかもしれない。

稽古に熱を帯びてきた時だ。扉の蝶番が軋む音が聞こえ、ミアアとレンが今日も二人で登城してきた。

「熱いッスねえ」

まだ陽の登り切らないうちから、軽快に稽古場を躍動する二人の姿に彼らは感嘆を漏らす。

一瞬だけ二人とも振り向いて手を挙げたかと思うと、すぐ気合の一吼と共に剣を振り、槍で払う。

熱気に吹き飛ばされそうで、ミアア達は稽古場の隅に座って持っていたマグカップを傾け始めた。



「ホント、朝から気合が違うツスね」

「ん、青春だね」

四人で迎える、いつも通りの朝。色々事件はあったが、こうして今まで守って来た。

弾けるように稽古場の中を裂空する二人。部隊を引つ張って来た太陽と月の明るい声に、レンは紅茶を啜るとぽつりと漏らした。

「私……— 帰りたかって思える場所が出来るって思わなかった」

彼女の独白のような言葉にミリアは一瞬ポカンとしたがすぐ頷いた。

「んだね。人生で初めて、同世代に尊敬できる人が見つかった」

「ん。ただミリアについて行こうって、そのくらいの気持ちだった。でも、今は違う」

「きつとこれからもこの家族を大事にしたいって、ウチもそう思うツスよ」

黎明の空が朝陽にすっかり青を取り戻した頃、ようやくにシャニーの剣が下を向いた。

「ふいー、お腹空いた！ 朝ごはん、朝ごはんっ」と

朝稽古を終えて室内から出たシャニーは、うんと伸びをしながら朝日を浴びる。体も火照って、一日の始まりにワクワクがますます膨らんでくる。

「あー、今日のおかずは何かなあ」

「早くしないとコロツケ無くなっちゃうツスよ！」

「そうだね。よおし、今日も数量限定を勝ち取るぞ！」

ミリアと雑談に花を咲かせながら一旦詰所へと戻り、稽古で乱れた服を姿見で整えていた時だ。

何やら、廊下が騒がしくなってきた。

「何だろ？」

ベルトを整えながら顔だけ廊下の方へ向けてみる。

どうやら足音のようだ。やたらとバタバタと軽く、天馬騎士の履く戦闘用サイハイブーツではないことは分かる。

「ウツデイさん！大丈夫?!」

「大丈夫です！」

何やら騎士たちの悲鳴の後に聞き慣れた声が詰所に流れてきた。転んで心配でもされたか。

バタバタした足音はどうも彼らしく、その音はどんどん大きくなってくる。

きつとこの詰所を目指しているに違いない。シャニーが出迎るべく歩き出した時だった。蹴破る勢いで彼は飛び込んできた。

「おっ、おはようウツデイ。一緒にござは……」

親しい顔にシャニーは手を挙げて歓迎したが、どうにもウツデイには普段の落ち着きがない。

小さく跳ねながら存在をアピールしていたら、部屋を見渡す彼とようやく目が合った——途端だった。

「シャニー大変だぞ!!」

「うわっ?! びっくりしたあ」

いきなり肩を掴まれシャニーは口を驚かせてみたが、ウツデイの大変はそんなに珍しい事でもない。今度は何だと苦笑いに変わった。

「どうしたのよ、そんなに朝から慌ててさ」

走ったのは久しぶりだったのだろうか。

掴まっていたシャニーの肩からするりと滑り落ちた手を膝にあて、ウツデイはゼイゼイして声が出て来ないらしい。

彼の背中をさすってやりながら、シャニーは彼の相変わらずの体力の無さに笑っていた。

「慌てずにいられるか!」

ようやく声をさせるくらい回復するや、ウツデイは身を起こしてシャニーの目をしっかりと捉えて叫ぶ。

ここまで来て、冗談では無いとようやくシャニーも分かって口元が半開きになった。

「十八部隊が……解体されるらしい!」

「……——へ?」

今、彼は何と言ったのだろうか?

はつきり聞こえたはずなのに、何も聞こえない気がする。

頭が言われたことを理解するにつれ、重く、黒いものがわつと湧きあがって心の中に溜まり、底が引き千切られそうになってきてシャニーの瞳がみるみる震え始めた。

イドウヴァの反応から、ある程度覚悟はしてきた事。だけど、最悪の予感が当たってしまった、詰所に絶望が広がって春の陽気が一瞬で吹き飛んだ。

「そ、そんな話どこから?!」

信じられない気持ちは無意識のうちにウツデイの両手で掴んでいった。

「冗談だよね?! ——何か言つてよ!」

今ならまだ笑える。お願いだから夢だと言つてくれ……。揺れる青の瞳にそう懇願を向けられても、彼女の望む言葉をかけてあげられず、ウツデイの顔も沈んでいく。

「第一部隊のエダさんだ。第二部隊の人も言つていたから……。おそろく」

あの人の噂話の精度は皆も知っていた。おまけに、イドウヴァ直属の騎士まで口にしていたとなれば逃げ道は無い。震える声が崩れ落ちていく。

「そ、そんなの……。えへへっ、ウソだよね。そんなの……」

もう壊れた笑顔しか浮かべられなくなって、ウツデイの手を掴みながらも身を支えられなくなった。

膝が崩れその場に吸い込まれるように割座したシャニーから漏れてくる声に、誰も返せない。

「あれだけ頑張つたのに……。お義兄ちゃんも褒めてくれたじゃん。結果だつて出してきたのに……。何で? 何でなの? あたしたち、何がいけなかつたの……?」

固まった表情の中で光を失つた瞳が呆然と浮かぶ。

「残念ながら、本当の事だ」

突然に現実で突き刺してくる止めの声。

皆の視線は、ドアにもたれ掛かり、睨むように見下ろしてくるアルマを串刺しにする。

見る見る見開かれた黎き瞳は、次の瞬間には飛び出していった。

「ね、ねえ！ アルマ！ どういう事なの？ なんて?! どうしてなの!!」

我を失った、絹裂くような声。

何故を繰り返しても、アルマはただ無表情のまま見下ろしてくるだけ。

「アルマならきつと知ってるよね！ 何で何も答えてくれないの?!」  
揺すつても叫んでも何も返ってこない。

悔しさと絶望に打ちひしがれ、咽び泣きながら彼女の前で再び崩れて手を突いた。

ぼやけた視界の中で、アルマのため息が聞こえ、背を向けたのが見えた。

「……私に聞いて分かると思うのか？ イドウヴァ団長代理に聞いて来いよ、自分の言葉で」

結局、アルマは何も教えてくれないまま場を去った。

もう、テイトは団長ではない。四月からの新体制に向け、副団長イドウヴァが暫定団長として騎士団を牛耳っている。

その途端にこれだ。

旧体制破壊を進めるにあたっての、騎士団中へのメッセ見せしめージ——そう言う事なのか。

徐にもたげられた顔に沈む黎は、何かに取り憑かれたように立ち上がる。

「こんな、こんなバカげたことが許されるはずがない。一体何がいけなかったんだ。どうすれば撤回できるの……」

アルマの言葉に誘われるように心が体を押していく。その手を後ろから不意に引かれた。

「シャニー、私たちもついてく。いいよね」

振り返ればルシャナが手を掴んでいて、仲間たちの覚悟を決めた瞳たちがじつと見つめていた。

（そうだ……この部隊のリーダーなんだ。あたしが一番に取り乱しちやうてどうすんだ）

ふつと我を取り戻したシャニーは服の袖で涙を強く拭うと、奥歯をぎゅつと噛みこんで自身を戒めた。

真つ赤なままでもその瞳は強さを取り戻し、仲間たちに一つ頷くと彼らは弾かれたように部屋を飛び出した。

目指すは第二部隊の詰所。そんなに離れていないのに、千里にも感じるほど長い廊下を駆け抜けて、ノックもないまま飛び込んだ。

「イドウヴァ団長代理!!」

加減を知らない力で開け放たれたドアが壁にぶつかり、静かな詰所を騒然とさせた。

一気に突き刺さる視線。そんなことに構ってられない。敵陣へ切り込んだかのような、鬼火を燃やす瞳で第二部隊の騎士たちを押し分けていく。

(あの人が部隊を取り上げようとしている……。なんで? どうしてッ……!)

シャニーは先陣を切り、部屋の奥で怪訝そうな目を向けてくるイドウヴァの許へと一本槍の如く突っ込んだ。

「何ですか、十八部隊長。我々は出撃の準備で——」

「十八部隊を解体するって本当ですか?!」

勢いのまま、上段から斬りかかるようにドンと机へ手を突き、ありったけ叫ぶ。相手が団長だろうが、加減してられる心の余裕など無い。

それまで斜に構えていたイドウヴァも、華奢な乙女が放つあまりの威圧感に思わず目をむき、態勢を整えてじつとシャニーの瞳を睨み上げている。

「ええ、三月末で解体予定です」

あつさりと、息を吐くようにそうイドウヴァは口にした。

心を握り潰されそうな感覚。跳ね除けるようにシャニーは言い返そうとしたが、読まれた様に被された。「新職制はその時発表しますから、口外は控えるように」

決定に変更はない——もう一度強く睨んできて、席を立ったイドウヴァは部屋を出ていこうとしている。

現実を脳天から浴びせられてその場に突き刺さっていたシャニーだが、奥底からメラメラと燃え上がり、パチパチ爆ぜだした心が嘖き上がって瞳に力を取り戻す。

足先に力を込めて狭い部屋の中を裂空し、背を向ける肩を力任せに引っ張った。

「何故ですか?! 軌道に乗ってきて…みんなにも知ってもらえて、これからっていう時になぜ!!」

今まで心の中で叫び続け、ずっと答えもないまま跳ね返ってきた自分の声をありつけたイドウヴァにぶつける。

何故——その気持ちはいつの間にか怒りと燃え上がって、許せないに変わっていた。

「放しなさい!」

鋭い音が響き、打たれた手首を抑えてシャニーは顔をしかめた。

それでもすぐその眼には焔が戻って睨み返す。イドウヴァは槍のように鋭い目で睥睨してきた。

「見直しが必要だからです。組織自体は必要ですが、今の体制では不十分ですからね」

イリア連合から認められていることを、もちろんイドウヴァも知っているはずだ。

だが、だからこそ今の体制では規模も方針も不足しているというのだ。

淡々とした説明を受けても、シャニーは瞳を震わせ、小さく何度も、何度も首を振るだけ。

盾突いた者の末路に唾棄するように、第二部隊の騎士たちは冷たい視線を送りながら部屋を出ていく。

彼らにも聞こえるほどのはっきりした声で、イドウヴァは止めを刺した。

「あなた達には傭兵に出ていただく予定です。国力向上の任は体制を見直します」

突きつけられた決定的な言葉。

もう、今迄の仕事は出来ない。再び天から降り注いだ槍に串刺しに

されたようにその場から動けなくなった。

(別部隊が……あたし達の仕事を……?)

心の中で復唱した途端、ぐらぐらと心が嘖き上がってきて、わなわな拳が震えだした。

(そんな事、そんな事……——許すもんか!!)

ギリっと奥歯を噛みこみ、鬼の青焰滾る瞳は部下を追うべく背を向けた。かけたイドウヴァの両肩を掴んでありったけ叫んだ。

「十八部隊はあたし達の部隊ですッ！ この仕事はッ、あたし達にしか出来ないと自負していますッ！ どうか、どうか！」

懇願だけでは足りず、ショートレイヤーを何度も何度も揺らす。

この仕事の為なら、この家族の為なら、何だっつてする覚悟だ。

絶対に負けない、諦めない、逃げるわけにはいかない——最後まで戦う覚悟の背中に、仲間たちも一緒になって嘆願するが、

「勘違いしないでくださいよ、シャニー部隊長。部隊は貴女のものではなく、決定権は団長にあります」

これだけの熱を向けても、イドウヴァから返ってきたのは冷え切った命令だけ。彼女は続けた。「貴女は従う側の人間だ。付け上がるのもいい加減にしないで」

イドウヴァの言葉はまるで心に入って来ない。

何も問いに返してくれていない。何も、何も納得できない。こんな一方的な、鉄で打ちつけるような仕打ちに引き下がるなど出来るはずなど無かった。

立ち去ろうとするイドウヴァの足を掴んで、その場に膝を突く。

「どうかお願いします。何卒、ご再考を！ この仕事はあたし達こそっ」

「くどいー」

髪を垂らしていたシャニーが頭を挙げた瞬間、仲間たちは思わず飛び出しそうになった。

その額に向けて、持っていた銀の槍をイドウヴァが突き向けたのだ。

「騎士団の決定に従えないのであれば、規則に則り全員叙任を剥奪し

ますがそれでも良いか?!」

完膚なきまでに剣を弾き飛ばされ、イドウヴァから突きつけられた最終警告。

このカードを切られては、ルシヤナ達には何も出来ない。

絶望さえ奪われた——震える掠れた声を漏らしながら、首折れてうなだれたシャニーを見下ろすイドウヴァの顔に、勝ち誇った笑みが浮かぶ。

だが次の瞬間、静かに顔を上げたシャニーの口から出た最後の反抗に、彼女も、仲間たちも耳を疑った。

「……一晩考えさせてください」

「シャニー?!」

「あたしは誓ったし約束したんだ。その道が断たれるなら……考えるよ」

団長が何と言おうと、絶対に負けられなかった。

もうどれだけの人々の想いを聞いて、彼らと約束しただろう。イリアに春を必ず呼び寄せると。

もう何度、泣き疲れ、寒さに震える人たちの未来を、託されたこの手で切り拓くと掲げた剣に誓っただろう。

彼らの想いを、受け取った信を、一度背負った自分たちの未来を、こんな薄っぺらな命令一つで放り捨てるなんて出来る訳が無い。

(覚悟はもう出来てるんだッ。みんなの想いを全部掲げて切り拓き続ける! 戦って、戦って、戦えなくなるまで戦ってやる!)

今も団長を見据えてはつきりと宣言する瞳は、覚悟の青焰をめらめら滾らせる。

「分かりました。では明日の晩、しっかりと考えを聞かせてもらうことにしましょうか」

槍を退くと、イドウヴァはさつと背を向けて部屋から出ていった。

誰もいなくなった扉のその先を、シャニーは下唇を噛みながら険阻に焰を宿して睨み続けていた。





一方、部屋から出たイドウヴァは鉄仮面に歩きながらも内心は煮えていた。

あんな四面楚歌にわざわざ突っ込んでくるとは身の程知らずもない所だ。少々知るのが早かったようだが、好都合か。

（——その目を……あの女と同じその目を私に向けるんじゃない!!）

思い出しただけでゾクつと背筋が震った。本当にどこまでも……母親にそっくりな目。

ギリギリとシオルダーパッドを掴んで来た、鬼気迫る眼光が今も睨んでくるようで、わなわなした口からは辛抱できずに蔑む言葉が飛び出した。

「フン、何が、『あたしの部隊』ですか。十六の小娘が随分と粹がってくれるものですよ」

隠すことなく嘲笑った。

従う側は体さえ動けばいい。あの魔剣がようやく金を稼ぎ出すと思うと、やっとイリア連合会議での面目も立つというもの。

あそこまで言ってやれば分かるかと思っただが、あの女同様に本当にしぶとかった。

——どうかお願いします。何卒、ご再考を！ この仕事はあたし達こそっ

耳障りな声、視界に入るだけで苛つくあの目。

彼女は槍を握る手を強く握り込んだ。

よく、あの場でそのまま串刺しにせず抑えられたものだ。そう、ここからすっかり彼女には稼いでもらわねば困るのだ。

それにしても、本当におかしな奴だ。あの女は、一体何と言った？ 思い出しただけで嘲笑が噴き出した。

——あたしは誓ったし約束したんだ。その道が断たれるなら……考えるよ

「面白い事を。この程度の事で、騎士としての命を懸けるといいうのですか？」

それがどれ程に馬鹿げているかは、止めようとした同僚の反応を見ても明白だ。

「いいでしょう。……——その目、あの女の目と同じその焰を消し去ってくれ!!」

勝手に天馬から飛び降りていくような笑止の沙汰ではないか。

もうあと一日で全てが終わる。そう考えれば、後は何もせずに放つておけば済む。

武器無く宣戦布告した愚かな部下。決定的な未来に安堵したかのように、天馬が空に飛びあがった。

## 第2話 ラスト・オーダー

(一体なんで、こんな事になってしまったの？ どうしたらいい？  
何処へ行けばいいんだ……)

先頭を歩くシャニーの黎き瞳は死んだままループに陥っていた。  
一列になってツカツカ歩く十八部隊は、まるで繋がれた囚人のよう。

行きかう騎士たちは下された処遇を知っているのだろうか。視線  
があちこち刺してくる気がする。

ますますスピードを上げるリーダーの俯く背中に、仲間たちは何も  
声をかけられずにいた。

ようやくに見えてきた詰所。

皆が部屋に入ったことを確認すると、シャニーは静かにドアを閉め  
た。

重すぎる沈黙が部屋の中を包む。

「シャニー……どうしよう」

固まったままの背中。

ドアを閉めた格好のまま、石のように動かなくなったシャニーの背  
に手を添え、堪えきれない不安に答えを求めてレンが声をかけた。

だが、イドウヴァと精魂懸けて戦った今の彼女に、仲間を支えるだ  
けの気力は残されていなかった。

悔しさに腹が震えて、喉が、声が引きつり嗚咽が漏れる。どれだけ  
奥歯を強く噛もうとしても、腹から噴き出す絶望は凜と構える心を  
易々乗り越え涙が溢れてきた。

「こんな……こんなことって……ある？　こんな……バカにされるこ  
となんて……ある？」

その場に崩れ落ちて、腹から込み上げるものに抗えなくなった彼女は  
悲痛に喘いで彷徨った。

悲しみ。それは春を迎え周りが喜ぶ中、自分だけ雪の中へ沈んでい  
くような深い悲しみ。頭に、肩に、雪崩のようにのしかかる絶望に立  
てない、動けない……。

普段の自分を抑え込み、己を奮い立たせて力の限り戦って、それでも何も変わらなかった。

精根尽き果てた今、どうやって立ち上がればいいか、もう分からない。

「イドウヴァア団長代理の意向は理解したか？」

悲痛の氷雪に埋もれていく背中へ掛けられた声。

振り返ってみると、部隊長席の端に腰掛け、腕を組みながらこちらを見つめるアルマの視線とぶつかった。

シャニーの脳裏に、あの部屋で叩きつけられた言葉が蘇る。

どうして、何故……その問いに納得できるような答えは一つももらえなかった。

お前たちでは実力不足——。……そんなはずはないのに、イリアの人々はみんな託してくれたのに、なぜあの人は生きる意味を取り上げようとするのか。

何一つ納得出来ずアルマを見上げた。下唇を噛みながら咽び泣き、言葉を上手く絞り出せない。

「アルマ……あたし悔しいよ。悔しいよ……こんなの、こんなの……」  
自分の気持ちとどう向き合えばいいか分からない。

ずっとイドウヴァアの仕打ちには我慢してきた。我慢して、託してくれた人たちの顔だけを思い浮かべて戦ってきた。成果だつて出したのに……。

——命令に従えないなら身分を剥奪する。お前達では不十分

あまりに一方的すぎるじゃないか。

人から大事な家族を、生きる意味を奪つておいてあまりにも冷淡ではないか。

今でも気持ちは変わらない。この仕事は、十八部隊は自分たちでなければ務まらない。そう断言できる。

なのに、あんな命令一つでそれを手放さなければならぬ現実と、どうやって向き合えばいい？

やり場を失って天を仰ぎ、憤りをぶちまけながら痛哭していると、ふいにアルマの声がした。

「お前は自分の手で切り拓くと、そう言ったよな？」

「言ったよ……言ったけどさ……」

「けど、何だ？ お前が欲しいのは慰めか？ 少なくとも、私が知るの  
は、こんな無様な姿ではないな」

涙に化粧が崩れ、目元を真っ黒にするシャニーは嗚咽を漏らすしか  
出来ず何も返せなかった。

彼女の言う通りだ。戦えなくなるまで戦う覚悟だつてとつくに出  
来ている。

だけど、仲間の命まで握られているのでは身動き出来ないではない  
か。

感情の振り先を間違えたら、周りの人生を狂わせてしまう。もう二  
度と、そんな真似はしたくない。

鎖に繋がれた今、打ち砕かれた心は震えるばかりで何も湧き上がっ  
て来ない。

「お前！ 団長の腰巾着のクセに！」

「私は知っているから言っているんだ。——シャニーの強さを」

ミリアが怒鳴ったが、アルマは落ち着いた口調のまま返してシャ  
ニーをじつと見つめている。

未だに何も言わない態度に苛立ったのか、その語気が強くなる。

「ずっと今まで見せつけてきたくせに、ここに来てこんなつまらない  
終わり方をするのか？」

絶対にさせるものか——アルマの目は怒りさえ含んでそう言って  
くる気がした。

「アルマ……」

「どれだけ剣を折られても、信じてくれる人のために戦い続ける。そ  
れが誓いだから勝つまでは負けない……そう、言ったよな？」

思わぬ憤りをぶつけられ、シャニーは自身を見下ろした。

負けたくない、背負った信のために戦い続けたい。

だが今、その剣を奪われようとしている。権力という、抗う術の無  
い絶対的な力によって。この弱い自分にどうしろと……言うのか。

なのに、アルマは容赦ない言葉を投げつけてくる。

「だったら、いつまでそこで泣いている？ 泣けば勝てるのか？」

「勝てないよ……—分かってるよ！ そんな事！」

「考えるより動くのがモットーのはずだろ。そんな……悲観に暮れて何もしないのは、騙されたような気分だ」

うなだれていたら、アルマが胸倉を掴んで揺さぶりだした。意識を引き戻される。

「何とかしろ。まだ決定事項じゃないんだ。足掻いて足掻いて、泥水を啜ってでも生き残れよ」

だが、されればされるほど、シャニーの心に湧きあがるのは絶望ばかり。半開きの口からは嗚咽が漏れ、玉となった涙が零れていくだけ。

言われなくても分かっている。人々の信の為なら、大事な家族の為なら、何だつてする覚悟で戦ってきた。

だけど、だけど今回ばかりは一体何をすればいいのか分からない。

このまま抗い続けても、待っているのは身分剥奪だ。仲間にも波及する地獄の末路に向かって、無策に歩いていくわけにはいかない。

「何とかって……言っちゃって……」

「諦めるなど私は認めないぞ。そんなお前は、私の知るお前ではない」  
体中を絶望で雁字搦めにされ底なしの沼に沈む今、揺さぶり、立ち上がらせようとする親友の言葉があまりにも遠い。

諦めたくない、その気持ちはアルマに負けなくらい抱いてきたつもりだ。分かっている、こんな自分が自分ではないことは。

今度こそ終わり。押し掛かる絶望に再びうな垂れた、その時だった。頭上から稲妻の如くアルマの声が打ち下ろす。

「いいのか、お前は！ このまま何もせずに終わっても何とも思わないのか！ お前の誓いは嘘かッ！」

嘆き、喘ぐ心へ直接投げつけられたような腹に響く怒声。突き刺さるや目は見開き、青が光を取り戻す。

「そんなわけッ、そんな訳無いに決まってるじゃない!!」

シャニー自身も驚くくらい、大きな声が出た。

この誓いが嘘だなんて絶対に無い。悲しみも苦しみも、悔しさに喜

びに痛みでさえも全て掲げた、生きてきた軌跡そのものが嘘なんて。嫌だ。このまま終わるなんて嫌だ。今までを全否定されて、この悔しさをそのままに諦めるなど。

（――絶対に嫌だ!!）

親友の言葉が、少しずつだが絶望の沼に沈む心を引き上げる。

譲れない想いと、逃れられない現実。狭間で視線は左右に彷徨いながらも下唇を噛む。

とにかくまずは……泣くことを止めなければ。

「リーダー、私もアルマに賛成だよ。このままやられっぱなしじゃ悔しいじゃないか」

背中に添えられる手。見上げたらルシャナの真剣な眼差しがあった。

覗き込むように見つめられ、俯いていた顔がようやく正面を向く。何か、救われた気がした。

駆けてくる足音と共に今度は右手を取られた。ミアアの元気な顔が氷の女王に凍らされた心を熱くさせる。

「そう思うっス！　ウチはシャニーが隊長の王国騎士団の一番になるっス、それまでは絶対に諦めたくないっス！」

ミアアの叫びは祈りのようだ。強く手を握られ、目に力が戻ってくるのがシャニー自身にも分かった。

肩に押し掛かる絶望から引っ張り出すように、ミアアは更に強く握り引っ張って来る。

「約束したじゃないっスか、一緒に頑張ろうって！　ウチ、シャニーと戦えなくなるまで戦う覚悟なんてとっくに出来てるっスよ！」

仲間、今も信じてくれている。もはや処刑台上がったも同然なのに、それでも戦うと言うのか。

呆然と仲間を見つめて力なく垂れたままの左手を、静かに屈んで寄り添うレンが握る。

「シャニー……約束した。逃げないって。一緒に戦おう？　シャニー」

ハツとして思わずシャニーは息を呑んだ。レンが彼女の団員証を握らせてきたのだ。

瞠目していると彼女は静かに微笑み、団員証を握る手を自身の手で包んで、そして続けた。「どんな運命が待っていても、一緒に戦って全部シャニーと受け止める」

信を託す八つの瞳に見つめられ、震えだした青い瞳は見る見るうちに輝きを取り戻す。

それを確と感じたアルマは、掴んでいた胸倉から手を離した。

「お前が集めた信はその程度なのか？ そんな簡単に放り出してしまふのか？ 背負って、足掻いて、最後まで戦ってくれよ。 皆を、――私を裏切るなよ」

裏切る――その言葉を聞いた途端、瞳が揺れた。

一体、何を考えていたのだろうか。 何故、やる前から諦めていたのだろう。 仲間がこんなに覚悟を決めているのに、どうして自分だけこんな座り込んで泣いていたのだろうか。

彼らの信から背を向けて裏切ろうとしている。 気づいたら、絡みつく底なしの沼に沈む気持ちが一気に噴きあがってくる。

自分の存在意義は、誓った想いは、掲げた剣は、一体何のためだった？

（あたしが諦めたら、誰がイリアの人々を守るの？ ——礎になって、イリアに春を取り戻すんだ）

まるで夜が明けるかのように、力を取り戻した瞳が前を向く。

「……分かったよ、最後の最後まで足掻いてやる。 この剣は誓いを貫くためにあるんだ。 戦ってもダメなら、その時は肚を括るさ」

覚悟を決めて立ち上がったら、仲間たちに自然と笑顔が咲いた。

腹を括る……その意味は一つしか無いが、前に進む以外に十八部隊には残されていない。

「良く言ったよリーダー。 私たちも最後まであんたについていくさ。 絶対に勝とう」

決戦を前に、背中をさするルシヤナの励ましが温かく沁みる。

「ルシヤナ、ごめん。 いつも支えてもらって、ありがとう」



「何度も言ってきたら？ リーダーはあんたで、ついて行く覚悟はとつくに出来てるって。最後の戦いかもしれない。けど、その瞬間まで独りにするつもりなんてないよ」

上官と部下の関係ではなく、一人の友としてルシヤナは肩を包んで抱きしめてくれる。

絶望と決別させてくれる友の想いに、ぎゅつと閉じた目じりから涙を零すシャニーの両手を、ミリアとレンが取って立ち上がらせる。

「絶対に十八部隊を守るッス！」

「ん、私たちの帰る場所。家族を守る」

為すべきは最初からはつきりしていた。それが今、十八部隊としての絶対命令と変わる。

背負った信の鼓舞に支えられて立ち上がり、再び開かれた瞳。

誓いを取り戻した青焔を滾らせ、前をはきと見据える力強さをその横顔は取り戻していた。

一時の感情で、託してくれた全てを裏切ろうとした自分を戒め、彼女は青焔をそつと心にしまおうと白い歯を見せて笑って見せた。

「そうだね。こんな時こそ笑って、笑って！ へへっ、らしくなかったね、あたし」

この瞳があれば戦える。不思議とそう思わせる朗らかな春風が戻ってきて仲間たちの顔にも、そしてアルマの口元にも笑顔が浮かぶ。

「それだ、それこそが知っているお前だよ。お前の強さは、誰にも奪えやしない」

共にイリアを築く——戦友の契りを交わした決意を宿す笑顔へ、すつと差し出すアルマの手に躊躇いはなかった。

「……微力ながら、私も手を貸そう。何かあれば言うといい」

ミリアをはじめとして、目をむいて仰天したのは言うまでもない。

あのアルマが、ずっと十八部隊を貶し続けてきたイドウヴァの右腕が、敵に手を貸すと言ったのだ。

だが、シャニーだけはその目に浮かんでいた驚きは違った。

絶体絶命を前に駆けつけてくれた親友が絶望から立ち上がらせて

くれ、今度は背中を守ると言ってくれた。千切った涙はもう絶望の為なんかではない。

「アルマ……ありがとう。本当に……ありがとう」

友の存在をこれほどまでにありがたく思ったことは今まで無かった。アルマの両手を取って何度も、何度も感謝を口にする。

だが、アルマはそんな時間を許してはくれなかった。シャニーの手を払いのけた彼女は、壁に立てかけていたショートランスを手に取る。とじつと睨んできた。

「感謝は後だ。今はとにかく動くしかないだろう？」

どれだけ決意を燃やしても、結果が伴わなければ何の意味もない。イドウヴァに指定された明日の夜まで、もう時間は限られているのだ。

——早くオーダーを出せ。お前がリーダーだろう

睨むような目がそう伝えてくる。

今の自分たちに何ができるだろうか……目を瞑ると色々な人々の顔が浮かび上がってくる。

助けてもらうしかない、あの人たちに。

再び開いた瞳が、第十八部隊へ決戦前の最終オーダーを告げる。

「よし、皆のところをお願いしに行こう。嘆願書を出すんだ」

かつてレネスを訪れた時に村長が約束してくれた言葉。

彼は本当に各地の村々に連絡を取ってくれていたらしく、行く先々で声を掛けられたことを皆忘れるわけはなかった。

わずかな時間で出来る最大の反抗。これに賭けるしかない誰も静かに頷く。

「レネスは私に任せると良い。お前たちはとにかく近場で数を稼げ」

「え、でもレネスに帰るのは誓いを果たして——」

アルマの誓いを思い出したシャニーはそれを問おうとしたが、彼女はそれを遮った。

「そんな事を言っていられる場合じゃないだろ。お前は絶対必要なんだ。こんな所で途中退場されて堪るか」

お前が必要——その言葉にシャニーは心を撃ち抜かれた気がした。

認めてくれない人もいる。だけど、周りにはこんなに好きだと言ってくれる人がいる。

親友の力強い後押しに、彼女は笑顔を隠し、決意をその瞳に映して仲間たちへ次々指示を下していく。

「あたしは東のエデッサ方面に行く。ルシヤナは西を、ミリアとレンは北と南をお願い」

リーダーから指示を受け、今にも飛び出していこうとするミリアをレンが止める。

シャニーはそつと腰から剣を引き抜いて頭上へと掲げていた。十八部隊が大きなオーダーをこなす前の大事なルーティン。

リーダーの掲げる銀の剣に仲間たちは次々自身の武器を重ね、最後にアルマも槍を重ねる。

一度は別れた道。だが今は、夢を同じにするこの心は共にある。

「第十八部隊、これより作戦を開始する！ あたし達の部隊を守れ、行くぞー！」

「イエス、リーダー！」

誓いの号令が響き、弾丸の如く飛び出していく若い部隊。

これからの作戦に全てがかかっている。誰もが覚悟を刻んだ滾る瞳で厩舎に飛び込み、天馬を駆って各々別の方角へと飛び立っている。

シャニーも東のエデッサに向かいかけたが、何かを思い出したように天馬を宙返りさせて引き返し、西を目指すアルマの背を追った。

「ありがとう、アルマ。でも、いいの？ アルマはイドウヴァさんの……」

「それ以上言うな」

早く戻れと言わんばかりの視線を向けられた。

それでも、感謝は伝えておきたかったし、何より聞いておきたかった。もしかしたら、このメンバーの中で一番腹を括っているかもしれないのはアルマなのだから。

だが、彼女の鋭い横顔は伝えてくる。余計な心配だと。

「私はあの人になびいたつもりはない。信じる道を行くだけだ。お前

だってそうだろ？」

怒りさえ含む鋭い眼差しを向けられても、シヤニーにとっては聞いて良かったと思えた。

そうだ、友の言う通りだ。自分の信じた剣は、決して独善の魔剣なんかではない。多くの人々の想いを聞いて、受け止めて、少しずつ磨き上げてきた剣。それを簡単に放り捨て、裏切ろうとしていた。

全てを遮り、蝕む絶望とは、なんと恐ろしいものなのか。そこから引き揚げてくれた仲間たちの声が今でも脳裏に響く。

「みんなのおかげで目が覚めたよ。絶対に諦めない、絶対に逃げないよ」

今までも何度も躓き、立ち上がれないと泣いて、その都度仲間たちに手を取ってもらって再び歩いてきた。そして、今回も。

(この気持ちのまま……行けるところまで行ってやる！)

決意が疾駆し、ショートレイヤーで風を切る横顔にアルマは何も返さずじつと見つめている。強さと弱さ、その両極端を湛える青い瞳を。

その視線に気づいたシヤニーはアルマをしっかりと見据え、武運を祈って敬礼すると一言決意を残した。

「どんなに非難されても、どんなに拒絶されても。託してくれる人たちのために、あたしの剣は、信じるままに進むんだ」

宙返りして東へと転進し、小さくなっていく背中。再び二人は背を向けあうが目指すところは今も一緒。

「それでこそ、私の知るお前だよ」

ポーカーフエイスをふいに彩る笑顔。アルマは一言呟くとその眼差しは一気に鋭くなった。今は友を信じて、ひたすらに前へ進むしかない。

残された時間は一日半。明日を掴むため、戦乙女達は空の彼方へと吸い込まれていった。

### 第3話 明日を掴むために

夜空を翔ける一騎の天馬。その軌跡に鋭さはなく、ふらふらして危なっかしい。

「もう、もうこれだけ集めれば十分かな……」

馬上でシャニーは意識を引き戻そうと、自身に声をかけた。

視界が垂れるまま、肩から下がるカバンを見下ろした。中には嘆願書がぎっしりだ。

「いや、まだだよ、まだ時間あるじゃん！ あと三十分……ううん、飛ばせばまだ一時間はある！」

十分——そんな言葉は、どこまで行っただって無い。

団長を説得する武器は、いくらあつても不安だ。それでも、少しずつ、まぶたが落ちてくる。

「眠い……」

震える声で一度は弱音を吐いたが、すぐに自ら叱る。

「ダメツ、今この一時間をムダにしたら……ずっと後悔するよ。そんなのイヤ！ 絶対に、ゼツタイに諦めないぞ。十八部隊は……あたしたちの帰る場所なんだ!!」

——3月3日 PM 11:00 カルラエ城

とても、とても静かな夜。春を迎えたイリアとは思えないくらい、風もなく、獣の遠吠えも聞こえてこない。

無音だった廊下を叩き始めた靴。弱く、途切れながらに続くそれは、ようやく詰所まで辿りつき、扉に体重をかけて押し開けた。

「アルマ……」

シャニーは真っ先に見えた赤髪の友を呼んだ。

すぐに仲間たちが駆けて来て介抱しようとするが、シャニーは両脇に抱えたカバンを差し出した。

一睡もせず、持てる限りの体力と引き換えに託された、両手いっぱい、きずなの証。

渡したら、糸が切れてしまったように動けなくなった。みんなに暖炉の前まで運ばれる。

寒い。体が小刻みに震え、カチカチと歯が鳴る。

見下ろしたら手先やヒザは泥だらけだ。ずっと目いっぱい空を翔け、行く先々で頭を下げて回ったからか。

それでも、時間はない。渡されたホットミルクを一口しただけで、シャニーは近づく気配に立ちあがった。

「遅かったな。イドウヴァ団長代理なら団長室だ。お前ひとりで来いと仰せだ」

振り向けばアルマがいた。

ひとり……。疲れきって、何も考えられない頭の中に、わっと湧きあがる不安。

（あの人と独りで戦わなきゃいけないのか……。ううん、違うよね）

静かに振りかえり、机の上を見つめる。

二日間イリアを飛びまわり、みんなを集めてきた嘆願書は、背丈と同じくらい積みあがっている。

（みんな応援してくれてるのに、なにを弱気になってるのさ。絶対に……絶対に勝つよ。勝つてみせる！）

もう今この瞬間だけでもいいと振り絞り、再び目に力をこめて覚悟を決めた。

その両手にふと伝わる、しつかり握る感触。

「シャニー、任せたよ。私たちのぶんも戦ってきて」

振り返れば同じように覚悟を決め、決意を燃やす八つの瞳が見つめていた。

前も、背中も、信たちが強く囲んでくれる。これなら、怖くなんかない。

時計を見おろす……。日付を越えるまであと二十分。そこで運命は決まる。

顔をあげ、覚悟を決めて歩き出そうとしたら、ルシヤナに強く抱きしめられた。いつも傍にいる——そう言われた気がした。

自然にみんなで寄りあい、いつしか円陣を組んで武器を掲げ重ねあわせる。勝ってくるぞと勇ましく、最終決戦を前に誓いの咆哮が響く。

「うんっ、まかせて！　もうここまで来たら、真正面からぶつかるだけさ！」

もう昨日までの沈んだ気持ちはない。全ての信を受け止めたシャニーは、今できる精一杯で笑ってみせ、仲間を労った。

そのまま姿見の前へと身を移し、激戦に乱れた服を整える。

泥だらけのレザーグローブを取替え、サイハイブーツを濁す泥を落とし、風に乱れきった髪へクシを通す。再び鏡に映る自分が、ふと母と重なって見えた。

（お母さん……あたしを、みんなを守って。おねがい）

静かに手を結び、祈っていると肩に何か乗った。

振り向けばアルマがマントを整えてくれている。羽織りなおし、銀の紋章でしっかりと留める。

出撃の準備は整った。シャニーは嘆願書がこれでもかと詰まったシオルダーバッグを双肩にかけ、仲間へ身を向け、たがいに頷きあった。

——必ず、みんなの信に応えてみせる

青焰滾る瞳は静かにマントをひるがえし、案内人のアルマと部屋を出た。

早足に廊下を叩く。二人ともぞつとするほどの眼光を宿してまっすぐ、ただひたすらにまっすぐ前を向いて進む。その姿は、まさに戦場へと向かう、勇気凛々の戦乙女。

ついに、たどり着いた運命の扉。

シャニーは立ち止まると静かに見上げ、胸元で手をぎゅつと握りしめた。

（少しづつでいい……この胸に、みんなの勇気を分けて）

その肩へアルマが静に手を置き、横に並んだ二人は背筋を伸ばした。

これからの十分で、すべて決めてみせる——二人は新たな運命をたぐり寄せるべく扉を叩いた。

「イドウヴァ団長代理、アルマです」

先に声をあげたアルマが、中からの返事も待たずに扉をあげ、団長室へと入っていく。

やはり、この時間でもイドウヴァが団長席に座っていた。

団長然とした厳しい眼差しは、よく知る赤髪が見えたからか、少しだけ緩む。

「アルマですか。どうした……ん？」

それも束の間のことだった。視線があうと、すぐ眉を歪めたのが分かった。

シャニーは静かに頭を下げると、背筋を立て、イドウヴァをまつすぐ捉えて部屋へと入った。

再びぶつかった視線に、イドウヴァの眼差しがさらに厳しくなる。

「あなた、よく顔を出せましたね。ここに来たということは、考えをまとめてきたのですよね？」

そう言いながらも、イドウヴァの視線はアルマへ向けられている。

彼女は小さく頭を下げただけで、部屋の奥へと誘うようにシャニーの背中を押した。

「はい。イドウヴァ団長代理」

ハッキリした声で団長の威圧を跳ねのけたシャニーはゆっくり、だがつまらず前だけを見据えて団長席へと歩み寄っていく。

ついに距離を詰め、睨み上げてくるイドウヴァの眼光に串刺しにきれながらも、ぎゅつと胸元で手を握りしめた。

（みんなの夢と信、無駄にしない！）

勇気を振り絞り、襲いくる千の槍を跳ねのけて、しずかに、だがはつきりと言いきった。

「国力向上の任は、やはり十八部隊にこそ相応しいと思います。今一度、ご再考をお願いします」

「やはり……—そう来ましたか」

ため息をつくように、そうイドウヴァは口にした。

シャニーが頭を上げたときには、彼女の視線はアルマに向いていた。アルマの視線に誘導されるようにシャニーを捉え、また視線がぶつかる。



「……貴女はどこまでも、母親にそっくりですね」

その視線から逃れるようにイドウヴァは席を立ち、窓辺へと身を移した。

「天真爛漫にして、溫柔敦厚でありながら勇往邁進し、信望篤い人でしたね……あの人は」

シャニーは反応に困った。いきなり母を語りだして、何を言いたいのだろうか。

その口調は不思議だった。嬉しそうな、なのにどこか尖り、なぜか苛立ちながらも懐かしむようで。

でも、詮索する余裕はなかった。まるで首を叩き落すべく槍を握るように、振り返った目は鋭かった。

「だからと言って、何をしても良いわけではありません。貴女は今、騎士団の決定に従えないと言ったのです。覚悟はできていますね？」

(やっぱり、頭を下げるだけじゃダメか……)

きゅつと下唇を噛んでいたら、横から再びアルマの声がした。

「お待ちください、団長代理」

その声に振り向いたシャニーは、アルマが目配せしてくることに気づく。

彼女の視線はすぐに、双肩にかかるバッグへと移る。

まだ何も始まっていない。武器もない丸腰で挑んだって、勝てる相手でないのは分かっていたはずだ。

胸元のロケットに手を添え、もう一度いのる。

(おねがい、みんな。——力を貸して!!)

何度も心の中で号令を叫んだシャニーは、槍握り死をちらつかせる団長をはつきりと見据え、さらに一歩踏み出した。

「イリア民の嘆願書です。イリアの人々も存続を望んでいます。どうか、どうかご再考を」

団長席に、鞆から嘆願書を取り出して積んでいく。一枚、一枚、みんなにいのりながら。

一枚は薄く、小さくとも、どれも真っ黒になるほど名前が書きこまれ、血判が押されている。

集まった信は視界を遮るほどに積まれた。シャニーでさえも息を呑むほどの量の訴えに、イドウヴァが目を驚かせている。

いくらイリア連合会議で話題にあがったとはいえ、この数は天馬騎士団領に存在する村の数から考えたら、総意と言っても過言でない規模だったのだ。

「団長代理、これだけの反響がある中で解体は、騎士団への風当たりを考えると得策とは思えません」

「アルマ……貴女は十八部隊長の肩を持つというのですか？」

イドウヴァも想定外だったのだろうか。困惑の眼差しを右腕に向けている。それはどンドン、沸々としていく。

「それは誤解です」

しかし、アルマはひとつ首を振ると静かに頭を下げ続けた。

「あくまでイリアと、団長代理の御為を思つての愚見。今、いたずらに騒ぎを起こす必要はないかと」

右腕に諫められ、イドウヴァの目元から一瞬力が抜けた。

槍を退いたまま左右に揺れる視線。親友が作ってくれた一瞬の隙を、シャニーは見逃さなかった。

「お願いします！ あたし達から十八部隊を取りあげないでください。お願いします！ お願いします……」

必死になつて何度も頭を下げる。

何度も何度もショートレイヤーを揺らし、仲間の方まで持てる力の限りを叫び続けた。

下げた頭に、いつ銀の槍を振り下ろされるか分からない。怖い。それでも、まぶたの裏に浮かぶたくさんの人たちにいのり、返ってきた信を勇気に変えてひたすらに声を張り上げる。

窓辺から嘆願書越しに見つめていたイドウヴァが視線を逸らした。

その刹那、アルマが踏み出してシャニーの横に並ぶ。

「団長代理、私からもお願いします。どうか、十八部隊の存続をご検討ください」

必死に戦いながら、シャニーは横から飛んできた言葉にはっとした。

ちらつと見てみる。もう目が飛び出しそうになった。アルマが一緒になって頭を下げていたのだ。

あのアルマが自分たちのために頭を下げてくれている……不思議な勇気が湧いた。

深く、深く、祈るように二人で頭を下げて訴える。十八部隊を、民の希望を取り上げるなど。

しばらくの沈黙の後、鉄のような冷たく乾いた声が聞こえてきた。

「……分かりました。あなた達の気持ちは、沁み入るように分かりましたよ」

再び長い沈黙が部屋を包む。

実際にはほんの数秒かもしれないけれど、必死に刃を振り抜いてきたシャニーにとって、かけられた言葉はすぐには信じられなかった。

ぱつと顔を上げたら、見張った目が飛び出しかけた。あんぐり固まって、口のネジが外れてしまったみたいだ。

水がしみ込むように、じわじわイドウヴアの言葉が心に入ってくる。爆発する気持ちを押しえられなくて思わず団長席に手を突いた。

「ではっ！」

「ええ。十八部隊の存続をお約束しましょう」

（今、団長代理は何て言った？ 本当に？ 本当に存続って言った？）  
横に視線をやると、アルマの満足そうな横顔が映って、これが夢ではないことを伝えてくる。

ようやく、ようやく勝ち取った言葉。

疲れも、恐れも、憎しみも、全てから解放された気がして湧きあがる希望。窓から飛び出してもそのまま飛んでいけそうなほど、心を軽やかに浮き上がらせてくれる。

「ありがとうございます！ ああ……やった、やった!!」

彼女は思わずアルマの手を取り、笑いながら飛びはねる。不思議だ、涙が溢れて止まらない。

でも、アルマは笑って返してくれなかった。それどころか、ギリッと睨んでくる。

「ただし、条件がふたつあります。それを飲めるならの話ですよ」

イドウヴァからいきなり重い言葉が飛んできて、ドキッと振り向いた。

「ひとつ、来週の団長選出戦では、部隊として必ず私に投票しなさい」  
「シャニーはきよとんとしてしまった。」

条件なんて仰々しいことを言うから何かと思つたら、また選挙の話だ。

四月からの新体制に向けて、団長選出選挙が来週ある。対立候補は数合わせで出したような面子だ。選挙結果なんてやる前から分かっているじゃないか。

だからこそ、ゾクつと背中を走る悪寒。

今まで薄々は勘付いていたが、未だにあの時を根に持っているとはつきり分かつてしまった。

だから、こんな仕打ちを繰り返してきたと言うのか。

「分かりました……。でも、あたし達の票なんて、すこしだし……」

また……作られた意志で投票しなければならぬのか。

せめてもの反抗を端に漏らしたら、アルマにマントを引つ張られた。

「忠誠を誓えと言われているんだ、シャニー」

票の数など、もはや問題ではなかった。

そんな、今回限りで終わるような話ではないことを耳打ちされて仰天し、声にならない衝撃が漏れた。

「不服ですか？」

視線の先には、不敵に笑うイドウヴァの顔。

「……いえ」

そう返すしかなかった。

ここで反抗を口にすれば、せつかく掴み取った明日をまた奪い取られてしまう。

——そうだ、それでいい。お前に逆らう術は、もうない

そう投げつけるかのような微笑みが返ってきた。

まるで枷をされたように身動きが取れなくて、逃げ場を失った視線が俯く。

全ては、全ては背負った信のため……そう言い聞かせていると、決定的な言葉がうな垂れる首へ振り落とされた。

「ひとつ、前回の選挙での無礼を謝罪しなさい。自分が何をしたかくらい、貴女でも理解しているはずですよね」

忠誠を誓うには、まず過去を清算しろと言うのか。

窓辺で月光に映し出される陰影濃い顔。光る紫紺の瞳が野心にキラついたのが見え、思わず重心が踵に傾く。

確かに泥は塗った。けど、間違ったことをした覚えなんてない。

曲げられた意志で投票し、イリアの未来を決めるのは誓いに反する。あの決断は、今でも間違っていたとは思っていない。

誓いを、みんなで決めた想いを、横でじつと見つめてくる親友とのきずなの証を。その全てを自分で否定して、あの紫紺に塗り替えるというのか。

すでに四肢へ鉄球を括りつけられた今、羽ばたくことも、駆け出すことも許されてはいない。

それを思い知らせるかのように、イドウヴァが自身の足元を指さし始めた。

「そこに座って手について詫びれば、これまでの無礼は無かったことにしてあげましょう」

脳天から槍で串刺しにされたかのように、体が突き刺さって動かなくなった。

あれだけ膝を突き、前髪で地面をなぞっても、イリアの人々の前ではこんな感情は湧き上がらなかった。

でも、イドウヴァが指さす月光の処刑台で、膝を突く自分の姿を思い浮かべると虫唾が走った。

（イヤだ……そんなのは絶対にイヤだよ）

何も、何も間違っていないし、詫びるような理由は何もないはず。あの団長選出戦での決断は、間違ってたなんか絶対じゃない。あそこで詫びれば、信に嘘をつくようなもの。

（——そんなこと、絶対に来ないよ！）

腹からぞつとするほどの怒りと憎しみが沸き上がり、喉元まで飛び

出しかけたその時だった。

——ひと時の感情で事実認識を誤るようなことは、部下を持っていく人間として最もしてはいけないことだよ

ふいに脳裏をなぞるレイサの声。団長選出戦でのあの教えが、怒りをぐつと押し戻す。

「どうなんですか？」

催促の声に、まるで繋がれた鎖を引かれるように歩き出す。

槍で貫かれた体が、無理やり繰り寄せられ千切れていくように、拒絶する心と現実を受け入れる頭が、バラバラになりながらイドウヴァの許へと足を引きずっていく。

遂に、目の前に立った。

「早くしなさいよ」

差し込んでくる月光の中に立ち尽くし、なかなか動けないでいたら、痺れを切らしたか苛立ちが飛んできた。

視線を合わせると、ほくそ笑む顔が映って堪らず視線を切った。俯いた眼がわなわな震える。下唇をぎゅつと血が出そうなほど噛んで気持ちを殺す。

——どうした？ できないのか？ 部隊がどうなってもいいのか？

浴びせられる無言の嘲笑を前に、少しずつ、少しずつ震えながら膝を折っていく。

「……申し訳……ありませんでした。十八部隊を、どうか……」

完全に額を地につけて、消え入りそうな心を必死に奮って謝罪と懇願を漏らす。

無限とも思える悪夢のような世界。

舐めるような視線を感じなくなり、ブーツが床を叩く音が遠くなつて扉の蝶番が軋む。

終わった……そう思ったシャニーにとどめを刺すようだった。間を置かず、妖魔の快哉が深い夜に響き渡る。

声から逃れるように、頭を床に押し付けていたシャニーは、あたりに静寂が戻ると、ゆっくり手をつけて前髪を揺らした。

「これも、イリアの人々のためなんだ……」

今も心は拒絶に怒りを吼え、爆ぜ続けている。

震える瞳を、拳を、月光が陰陽濃く浮かび上がらせる。

騎士の核心を失ったかもしれない。だけど、翼を塗り取られるまで戦った。

「一番大事なものを守り抜いたんだ。勝ったんだ……勝ったよ、あたしたち」

自身に言い聞かせながら口にした言葉は、それでも屈辱に震えたままだった。



部屋を出たイドウヴァの顔は、もぎ取った勝利に普段の鉄仮面が剥がれていた。

最初は少々驚いた。逆らえば身分剥奪と言っておいたはずが、どう見ても頭を下げに来た様子ではなかった。

立ち止まり、窓から外を眺める。

「あの日も、こんな夜でしたね……団長」

春を前に雪が緩んだ夜。その向こうを見つめっていると、あの女の姿が浮かび上がってくる。

「本当に……貴女にそっくりですよ、あの子は」

あの部屋で凜と立っていたあの青髪は、そのシルエットを追うかのようだった。

「ふふ……どう頑張っても、どれだけの策を講じても、貴女には勝てませんでしたね」

在りし日を思い出し、イドウヴァはぼつりと漏らした。

何回負けても、何回陥れても。それでもあの女は、いつもと変わらない笑顔を湛え、手を差し伸べてきた。

嬉しくもあり、だが悔しく、何より恐ろしかった。

そして今、その時の感情を掘り起こそうとする視線が、背後から突き刺してくる。

母親とそっくりな目だった。

昨日絶望へと沈めてやった蒼は、別人のように強く青焰を滾らせ、前を見据えるその目力で貫いてくるようだった。

徹底抗戦……あの目を見るだけで、何をしに来たかはおおよそ見えただが、まさかあれだけの嘆願書を持つてくるとは。民の全てを敵に回しているようで、さすがに焦らせてくれたものだ。

アルマもアルマだ。あの青髪の中へ、槍をねじ込む役に回ってもらわねばならない立場。それがまさか、彼女と一緒になって槍を向けてくるとは。

しかし、彼女には今回も助けられたとも言える。

「フツ、敢えて落とした負け戦とも知らず……愚かな小娘よ」

確かに、あのときは一瞬追い詰められた。

未だ団長の座が確定していない今、下手に事を大きくするのは、百の害があるかもしれない。

ゼロットも三月中はまだ国内におり、何よりあの嘆願書の量だ。無視して強権を発動すれば、その反動がどんなものかは想像が難しくない。

しかし、あそこで撤回すれば、あの青髪に……あの女に再び負けることになる。

一瞬そう思ったが、いや、そんなことは無い。フェリーズの言葉が脳裏をよぎったのだ。

——『妖精』は貴女の配下。どちらに剣を向けさせるも自在のはずでしょう

あくまで、生殺与奪の権を握るのは団長だ。

……今なら、あの剣が向く先を自由にできる。むしろ、この形になつて良かったかもしれない。

「あの笑顔もまた……貴女そっくりでしたよ。一体どこまで眩しいのか……人の気持ちも知らないで」

それにしても、最後はあつけなかったものだ。

部隊存続を伝えた時の、満面の笑み。ただただ、天真爛漫に幸せを叫ぶ乙女の笑顔が弾け、飛び上がる度にショートレイヤーが軽やかに揺れていた。



そして、彼女は背中を見せたのだ。槍を握ったままの——敵に。

本丸を取ったつもりでのシャニーにはもう、あの凜とした青焰はなかった。その後は簡単だった。

そのあつけなさままで……どうして思い出させてくれるのか。

「しかし、これで邪魔する者はいなくなった……」

あの青髪が地に伏す様……そこに母親の姿を重ね、湧き上がったのは屈服させたかのような優越感。

今でも思い出されるあの顔、あの気質……。

——イドウヴァ、あたしの夢はね、このイリアを統一することなんだ  
だ

脳裏に響く声。あの小娘にも似た、それよりも全然覇気と自信に満ちた声。

忘れるわけもない。ずっと傍で聞き続けた、ずっとその背を追い続けた、その声を。

——毎日のように聞いてますよ、部隊長

——ははっ、そうか。早くイリアの人々に春を呼んであげたいからね

もう十何年も前の話なのに、今でも鮮明に聞こえてくる声。

ずっと追いかけて、亡霊のようにまとわりつく声に駆られて今までやってきた。何時からなのだろうか……この声が、——憎しみと変わったのは。

——あたしが団長になったら一番槍になつてよ。もちろん、あなたがなつたら、あたしがなつてあげるからさ

そうだ、イリアに春を……そのために争ったあの時からだ。

その志も、団長の座も、もうすぐ目の前まで迫っている。その直前で、忘れがたき面影を屈服させられて、良いケジメとなったものだ。

「イリアに春を……。貴女の夢を果たすのは私ですよ。——私でなければ……ならないですよ」

面影から目を切り、再び歩き出した。新たな明日を掴んだ喜びと、そして、湧きあがる使命感に駆られるように。

## 第4話 黎き空の向こうに（前編）

団長室を後にし、詰所へと戻る静寂の廊下。

ろうそくが照らす薄明りの中、アルマの気まずそうな声に呼ばれた。

「おい、シャニー。……——大丈夫か？」

「うん？ 何が？」

振り向くと、彼女は顔に困惑が浮かび、珍しく眉がハの字に弱くなっていた。

せっかく山場を越えたのに、どうして元気がないのだろう。

アルマが何を言うのか気になり、目を合わせたらますます彼女は顔が渋くなった。

「さっきまで憤っていた人間と同じとは思えなくてな。拷問を受け続けて壊れてしまったか？」

「へ?! ど、どう言うコト？」

親友の言い草に一旦は声を上げてしまったけれど、すぐにピンときた。みんな隙あらばからかってくる。

「あーっ、もしかして、バカにしてる？ もうっ、いつもウツデイにも言われるんだよね。お前は壊れてるーって！」

「いや……あんな仕打ちを喰らって、そんな笑っていられると気味が悪いのだが」

人の顔を見て気味が悪いなんて、ずいぶんヒドイもんだ。でも、心配してくれているなら、安心させてあげたい。

「だってさ、もう終わったことだし。悔しいけど、大事なモノ守れたんだから勝ちじゃん？」

「……はっ。やはり、壊れてるな」

寝不足だからなのかな。アルマの口調にはいつもの様な鋭さが無いし、どこか歯切れが悪い。やっぱり、彼女も思うところがあるのかもしれない。

シャニーも、自分で口にしておきながら、どこか胸に落ちていなかった。

確かに、過ぎたことで、前を向かなきゃいけない。でも、終わったこと……？ 本当に、終わらせていいの？ このままにしておいて、それで何とも思わないの？

「でもね、アルマ、ごめん」

これだけは言っておきたかった。前置きなく謝ったからか、アルマは困ったような目をしている。

「あたし、アルマを、ううん。みんな裏切ったんじゃないかって。イドウヴァさんに謝るって、きつとそういうことだし」

真剣に謝ったつもりだったのに、アルマからはフツと鼻で笑われてしまった。そんなことか——そんな気持ちだが、上向いた口元に見える気がした。

「お前なら、『そんなことは出来ない！』とでも言うかもしれないとヒヤヒヤしたが……それは別の機会に期待させてもらおうさ」

「……そっか。えへへ、ありがとう」

なんだか、救われた。

感謝を口にして笑ったら、視線を逸らすようにアルマは腕時計を見下した。一緒に追うと、深夜二時を指している。

これで、二日寝ていないことになる。体はぐったり。それでも、心にはもう朝が来ている。

早くみんなに勝利を伝えたい。そのままスキップするように歩く。ついに十八部隊の詰所まで戻ってきた。

力尽きた戦友たちが互いに背を任せ、重なるように眠る安らかな顔が室内に見える。

「ありがとね、アルマ」

アルマに視線を戻し、ニコツとして見せた。

うまく笑えない。いつものような元気は出ないし、疲れ切った顔の筋肉が引きつって張り付くみたいだ。

それでも、仲間の様子は安心させてくれるし、なにより、掴み取ったんだ。十八部隊の明日を。本当は、喜びを窓の外に叫びたいくらい。

「何のことだ？」

別に感謝されるようなことをしたつもりなど無い——そう言いたげにアルマは眉をひそめている。

照れ屋さんはいつものこと。笑って茶化しながら親友の肩を叩く。「またとぼけちやつて。さつき一緒にお願いしてくれたことに決まってるじゃん」

自分だけでは、到底太刀打ちできない相手だった。

部屋に入る際、先陣切ってイドウヴァさんの警戒を逸らしてくれた。突き返されたり言葉に窮した時も、自然な形で間に入ったりして。とにかく、的確だった。

なにより、一緒になって頭を下げられて、心に沈んだ重いものが吹き飛んだ。

独りでは掴めなかった明日。感謝してもしきれないのに、やっぱりアルマはアルマだ。彼女は鼻で笑ってツンと視線を逸らした。

「私はイリアのために頭を下げたんだ。別にお前のためじゃない。あの女は、完全に私情で十八部隊を消そうとしていた」

アルマの見立ても同じみたい。

国家統一を今後果たそうという時に、国内強化の部隊が必要なことくらい、団長なら考えていたはず。それでも、イドウヴァさんは槍を突き向けてきた。

あの時を思い出したら、なんだか震えてきた。

穂先が、部隊じゃなくて、あたしへ向いていた気がしたんだ。この目の傍に居ちやいけない……直感がそう叫んだ。

「ねえ、アルマ……。なんでさ、あたし、こんなに嫌われてるんだろ……」

「分からん……」

前も聞いたことがあった。今回も同じ答え。

聞くなどということか、アルマは視線を外してしまった。そんなふうにされたら、自然と俯いてしまう。

「だが……」

アルマの声に顔を上げると、彼女は再びしっかりと見つめてきた。

「私は、そんな私情で親友の背を守り、槍を敵へと向けたつもりはな

い。あくまで客観的に、イリアの未来のために必要だから決断しただけだ」

「アルマ。ありがとう——」

「それをまたお前はお人好しに……そんな風だからあんなザマを晒すんだ」

アルマは相変わらず口が悪い。いつもなら笑ってやり過ごすところでも、今日はそうも行かない。

彼女にも知って欲しい。頭を下げたのは、決して認めたらなんかにじゃない。

「それはあたしだって同じだよ。勝つために負けたんだ」

「ハッ……。壊れてなんかいなかったか。そうか、そうだな。私が認めた親友だ。そう来なくてはな」

「十八部隊がイリアのためになるって思ってくれて、支えてくれたことが嬉しかったんだ。ありがとう」

すつと手を差し出す。

他でもないアルマが、誓いの号令の下へ集まり、約束のために身を挺してくれた。それが、シャニーには嬉しくてたまらなかった。

誰も経験したことが無い、ルールが無い道へと飛び出して、少しづつ敷いてきた未来への軌跡。それが間違っていないと言って貰えた。イリアの人々から、ゼロット義兄さんから、そしてアルマから。

今が人生で最悪の瞬間。けど、同時に信の持つ大きな力の素晴らしさに、感動する瞬間にもなった。

その気持ちを込めて労いを贈る。アルマは相変わらず無表情だけど、正面を向き、前髪を掻き分けまっすぐ見つめてきた。

「ふん、自分が認めたものを貶されては、私が貶されているも同じだからな」

しっかりと互いの手を握り返す。

ライバルと同じ先を向いている実感が湧き、またひとつ絆が繋がった気がして、シャニーは微笑んだ。

「アルマって不思議。冷たいって思うのに、熱い」

「別に冷たい態度を取っているつもりはない。認められないものは、

認められないと言っているだけのこと。そして、認めたものに対しては、決して譲らないだけだ」

「あつ、じゃあ、あたしのこと、認めてくれてんだ？」

「甘くて反吐が出るがな。けど、到底勝てないものがあるのは確かだ」  
「シャニーは内心驚いていた。アルマが人を褒めるなど見たことが無かった。たいてい、苦言を呈して先輩たちから渋い顔をされていた。」

「今回もキツイ前置きがあったものの、はつきり言った。勝てないと。」

「わあ、アルマにそう言っただけで貰えると嬉しい！　ねね、それ何？　勝てないものって何？」

「フン。それだけ見せつけて来て、何で分からないんだか」

アルマは教えてくれなかった。それどころか、呆れたような目を向けてため息をつきだしている。

彼女ほど——副団長昇進の噂もあるくらいデキる彼女が認めてくれるモノ、それを知っておきたい。

何とか聞き出そうと、言葉を選んでいたら先を越されてしまった。

「……それに、隣で友があんな無様を晒すのは、長く見ていられないかな。小麦みたいな奴だし、心配はしていないが」

「まあたそうやって。さつき心配してくれてたじゃん」

「せっかく人に頭を下げさせたんだ。これからも頼むぞ」

アルマは両肩に手を置いて、じっと見つめてくる。

不思議な感じ。照れくさいのに、視線を外そうとは思えない。ううん、外しちゃいけない気がする。

二日間眠っていないなくて、目が疲れているからかな。なにか、ジンジンしてくる。

「絆を繋ぐ者。イリアに春を呼び寄せる暖かい風を、こんなところで失って堪るか。私には、お前が必要だ」

「アルマ……。ありがとう」

何だか変な気持ち。嬉しいのに、笑っているはずなのに、涙が溢れてくる。

——お前が必要だ

この短い言葉が、どれだけ心を打っただろう。理解されず、認められず。誓いを捻じ曲げられ、精根尽き果てた心にスツと沁みこんだ言葉。どんな慰めよりも癒してくれる——魔法みたい。

「アルマにそう言って貰えると、なんか自信出るなあ。嬉しいよ」  
厳しい彼女に十八部隊を、自分たちの生き様を認めてもらえたら、誰から否定されようとも、びくともしない気がする。

イドウヴァさんも折れてくれた。これだけ多くの人から認められ、信を託してもらえたなら、もう信じてひたすら前に飛んでいけばいい。

掴み取った明日。湧き上がる希望に声が弾ける。

「アルマ、きつとあたし達、夢を果たそうよ。イリアの中は任せてよ！」

朗らかに笑ってアルマの双肩に手を置き、シャニーは赤い瞳をじっと見つめて決意を口にする。

互いの歩む道は違うかもしれない。背を向けることも時にはあるかもしれない。

けれど、目指す先はきつと一緒に、困ったらどんな時でも駆けつける。

生きて、生きて生きて、必ず明日へと軌跡を描き続けて夢を掴む。それをはつきりと、互いの胸に誓いと刻みこむ。

「ふっ……。誰にも、背中を見せられないと思って入団したのだがな」「アルマ??」

ふいに目を瞑り、独白のように喋り出したアルマに呼びかけてみるが、彼女はそのまま続けた。

「頂に居るのは常に私一人。周りは全て従わせる対象で、駒でしかない、心を見ようとしなかった。だが、一年前とは決定的に違うことができた」

それが何か聞こうとしたら、アルマは肩に置く手を退き、背を向けてしまった。

気になって仕方なく、回り込もうとした時だ。シャニーはごくりと息を呑んだ。顔だけ振り向いたアルマが……笑っていたのだ。

「振り返れば常にアイツがいると思える————親友が出来たことだ」

「アルマ……」

「私は、今ここに誓おう。お前が刃で未来を切り拓き、天馬に希望を乗せて振りまく青空ならば、私はイリアの混沌を総て薙ぎ払う闇夜の槍となろう」

言葉にならない声が漏れる。

親友として、好敵手として、アルマは認めるだけでなく、誓いを立ててくれたのだ。

なら、友にしてあげないといけないことは、ひとつだ。

シャニーは剣を引き抜き、顔の前でまっすぐ掲げて、去り行く紅蓮の騎士に力強く誓言して見せた。

「あたしは誓う。アルマが騎士団として国家建設に全力を注げるように、あたしは人々を守って、彼らの希望であり続けるって。必ず、必ず呼び寄せるんだ。イリアに春を！」

「ああ。任せたぞ。私の背中はお前ぐらいしか託せないよ」

とても清々しい。こんな夜は初めてだ。

アルマの顔には、ポーカーフェイスが剥がれ落ちた満足げな笑みが広がっていた。

「よおし、明日からもがんばろつとー」

その背にずっと手を振っていたシャニーも、ぐつと拳を突き上げて一人小さくジャンプすると仲間たちを見下ろす。疲れ果ててぐつすり眠っている。

背を預けあって重なるようにして眠る三人の仲間に入れてもらい、そつとルシャナの肩に身を任せる。

目を瞑ると突然に眠気が襲ってきた。この大事な仲間たちに、明日伝えてやらなければならない。十八部隊の未来を、イドウヴァと結んだ約束を。そして、アルマが見せてくれた友情の証を。

「イリアに春を……呼ぶんだ。必ず……」



戦い疲れた天空の騎士は、春が広がるイリアの夢に浮かぶのだった。

## 第5話 黎き空の向こうに（後編）

翌日、目が覚めたシャニーは、すぐに違和感を覚えた。  
なんだか、周りが明るいなあ。あれ、時計、時計……。

預けていた柱から身を起こすと、ぼんやりとした視界の正面に映り  
んでくる時計。……——針の位置、おかしくない?!

仰天して飛び上がろうとした途端だった。

「ふぎや?!」

ガチャンと大きな音が頭に響いてきて、目に星が走った。お尻を突き出したまま、頭を押さえてうずくまる。机の柱にもたれていたのを忘れていた。

「……………——ッ」

し、死ぬ……、みんな助けて……。

うめき声を漏らしても、周りの気配たちは心配するどころかクスクスしている。ちらつと見上げたら、複雑な表情を浮かべている仲間たちと目が合った。

もうちよつと、心配してくれてもよくない?

おかげで目が覚めたってもんだ。

頭をさすりながら、笑って深夜の決戦を仲間の説明する。

ルシヤナたちは最初は嬉しそうに聞き、存続を知るとガツツポーズした。でも、その後付け加えた、団長に括りつけられた条件を聞くと、誰もが眉間にしわを寄せ始める。やっぱり、そうなっちゃうよね。

「……分かったよ。背に腹は代えられないし、今回は万事休すか」

飲まなければ十八部隊の存続どころか、部隊全員の身分剥奪まであった。いつもは怒りを口にするルシヤナも、ぐっと押し込むように一度口を噤み、そしてシャニーを労った。

「ありがとう、シャニー」

仲間たちがとりあえず飲み込んでくれてほっとした。

シャニーは明るく声を弾ませる。

「十八部隊を存続させてくれるって言ってたし、とりあえず良かった、良かった」

仲間たちと一緒ににはしゃぐ。勝ち取った十八部隊の明日に両手を広げて飛び跳ねていると、ミリアが白い歯を見せてきた。

「良かったツス！ シャニーの笑顔が戻ってきて！」

「え？ あたし？」

「これツスよ、十八部隊の原動力って！」

ミリアは相変わらず大げさ。でも、やっぱり、嬉しい。

「あはは。なら、ずっと笑ってよっかなー！」

彼らの喜ぶ姿を見て、シャニーは決めた。

みんなには、あのことは言わないでおこう。イドウヴァさんに謝ったこと。団長選出戦での行動は間違いだったって。

今でも納得できたワケじゃないし、思い出したら、なんだかムカムカしてきた……。

剣を取り、今も歓喜に咲く詰所を後にして室内稽古場へと向かう。

こういう時は、剣を振って気持ちを落ち着かせるに限る。こんなままの気持ちじゃ、セチに力を貸してもらえないよ。

静かに、しなやかに剣を振るう。暖かな陽が差し込む落ち着いた場に、空を裂く鋭い音が響く。

分かる。剣が裂く音に、雑味がある。理解している以上に、心がイラついているみたいだ。

あたしだって、ムカつくことはある。ううん、あたしが一番、腹立ってる！

たまには吐いてしまおうと、大きく剣を振りかぶった時だ。

「——ツ?!」

いきなり背後から牙をむく、黒い風が首元を襲った。

首に食いついてきた短剣を弾いて火花が散る。

ホント、相変わらずの挨拶だよ。こうやって、油断が無いか試してくるのは一人しかいない。

振り返ったら、やっぱりいたのはレイサさん。でも、その目を見てウツとなった。

宿していたのは怒り。ぐらぐら湧きあがる黒いマグマみたいな、ハッキリした怒りで睨まれていた。

「イドウヴァの軍門に下ったか」

そして突きつけられた言葉。

怒っている人は、ここにもいた。もしかしたら、一番怒っているかもしれない。十八部隊として頭を下げたということは、レイサさんにも頭を下げさせたも同然だ。

シグーネさんを弔いもせずにはいたイドウヴァさんを、嫌っているのは知っている。

「レイサさん……、ごめんなさい。あの時は、ああするしか」

それしか絞り出せなかった。

レイサさんやゲベルは、地元カルラエのスラムをはじめとした、闇の住人でしか行けない場所をわざわざ回って嘆願書をもたらってきてくれた。その信を踏みにする行為だったかもしれない。

だが、短剣をしまつてシャニーへ歩み寄ったレイサは、静かに彼女をなで始めた。

「皆まで言わなくていいよ。あんたは最善を尽くした、そうだろう？」

「レイサさん、怒ってないの？」

「ま、思うところはあるけどね。あんな事させて……あの女、出来るものならぐちやぐちやにしてやりたいところだ」

まるで、その場を見ていたような言い方。

そこまで考えを巡らせてハツとした。レイサさんは、そう言うのが大好きなのを忘れていた。

「ええと……もしかして、イドウヴァさんとのやりとり、天井裏で見た？」

「それが仕事つてもんさ」

「じ、じゃあ……——土下座もっ？」

「思い出しただけで反吐が出るよ」

体中の筋肉が、凍り付いてしまったかのように動かない。

あの部屋での出来事は、自分とアルマだけの秘密にしようと思っていたのに。

何かいい説得方法は無いかな……そう頭を絞っていたら、ふいに笑いかけてきた。

「大丈夫さ、妙な真似はしないよ。あんたがあそこまでして守ったものを、踏みにじるわけにいかないからね」

そう言ってもらえて、本当に救われた。

レイサさんやみんなに申し訳ない気持ちはある。

でもそれ以上に、この戦いは勝つて終わつたと伝えたかった。決して、イドウヴァさんになびいたわけじゃないし、軍門に下つたつもりだつてない。

色々やりづらくなつたかもしれないけど、守りたいものは守つた。だから、最高の形で終わつたんだ。

「あたしは待つてくれている人のために頭を下げたんだ。負けたつもりはないもん」

———上等

レイサさんはふつと笑っている。安心したような顔。きつと、認めてくれたんだ。

シャニーは春風のように朗らかに言った。

「ようやく掴み取つたんだからさ、これからまた頑張つていけばいいんじゃないかなつてね」

去年からずっと、少しずつ積み重ねてきた希望。

今まではタイトお姉ちゃんに傘になつてもらつてきたけど、今回は自分たちの力で逆境を跳ねのけた。

一人前の騎士になつて、今度は一人前の部隊になれた気がした。さつきまで心をざわつかせていた怒りが、ふつと消えていく。

そうだよ、そんなことに気を煩わせている暇はないよね。ようやく、自由に羽ばたけるようになったんだ。

翼の生えた背中を、レイサさんが力強く押してくれる。

「ああ、あんたが折れない限り、負けはしないよ。ほら、行つといで。みんな待つてる」

稽古場の外で手を振り名を呼ぶ仲間たちを見つけ、シャニーは妖精のような軽いステップで駆け出した。

何度も、何度も、剣はこれからも折れるかもしれない。でも、シャニーっていう名の剣は、どれだけ折れても一本しかない。

折れても、折れても、それを握りしめて立ち上がれば、負けないんだ。立ち上がって掲げることさえ出来れば、みんなが支えてくれて、新しい剣になる。それを、知った。

「みんな、あたし達の誓いはこれからも変わらないよ！ みんなにありがとうって言いに行こう！」

仲間の許へ戻ったシャニーはさっそくオーダーを伝えようと、剣をスツと引き抜いて頭上に掲げる。

春の日差しを受け、輝く銀の剣を見上げる仲間たちの顔も明るい。希望、まさに刃に掲げられた光は十八部隊にとって希望そのもの。ルシヤナは自身の槍を高く掲げ、剣へと添えて叫んだ。

「給料泥棒と蔑まれようと、信じてくれる人たちの為に戦う。それが十八部隊さ」

今回は二人にすぐミリア達も加わってきた。若草色の髪を揺らす桃の瞳が自信を拳に突き上げる。

「やっぱりこの四人が十八部隊ツスよ。他の奴じや務まりませんって！ ウチはリーダーを支えたいし、ルシヤナやレンを守りたい」

「ん、絶対に負けない。シャニー、約束守ってくれた。私もシャニーを守る」

レンは誓いと共に杖を掲げながら、シャニーの右手をぎゅつと握った。

大事な家族を独りにしない。絶対に守る——その気持ちを受け取ったシャニーは朗らかに笑い、爽やかな声を張り上げた。

「よおし、みんな行くぞー！ 第十八部隊、出撃する！」

本当はこの円陣にもう一人、大事な親友に入って欲しかった。でも、今は違う道を歩む。掲げた武器に彼女の分の想いも込めた。

掴み取った新たな初陣を前に、仲間をぐるっと見渡したシャニーは、青空を見上げて皆と誓いをありったけ叫ぶ。

——イリアの礎たれ！

新たな出発を切った天馬たちが、紺碧の空へと吸い込まれるように消えていった。

◆◆  
翌週、団長選出選挙があつたが、事前の予想通りイドウヴァの圧勝で終わっていた。

大抵こうなるから、前団長の指名制になっていたのだが、結局元に戻った形だ。

「イドウヴァ団長、当選おめでとうございます」

団長室の机に腰かけるイドウヴァに、アルマが静かに頭を下げる。前回のような祝賀会の予定はなく、団長室にいるのもアルマと配下の第二部隊の面々だけ。

新たな出発にしてはとても静かで、どこか不気味な空気が部屋を包み込む。

その気を放つ新団長は、掴みとつた栄光を前に武者震いしていた。「ついに……ついに私が団長に……ふふふ……」

いつも冷然なイドウヴァも、この時ばかりは相好を崩していた。

この瞬間の為に、どれだけ長い時間と、どれほどの屈辱に耐えてきただろうか。

ようやくに苦労が実をむすび、そして……飛び回る『妖精』にも鎖を繋げられた今、もう邪魔するものはない。

彼女の手には六枚の紙が握られていた。それは十八部隊の投票用紙。レイサやゲベルも含めたすべてが、イドウヴァの名前を記していた。

（それが最後の、『妖精』の反抗ですか）

一枚取り出した紙、それは企画書でよく見てきた筆跡……シャニーのものだ。

用紙の上の部分が大きくよれて、端がわずかに裂けている。

出来まい、それ以上は出来まいよ。忠誠を誓ったのなら、それ以上引裂けば、すなわち騎士の全てを引裂くことになるくらい、ようやくあの小娘も理解できるほど成長したようだ。

「早速、各騎士団へ連絡を。アルマ、今夜の会合の手配をお願いします」

「イエス、ママ」

今日からようやく始まるのだ。丸々一年、後れを取ったが、ようやくに。

あらゆる準備が遅れている今、次の一年で取り戻さなければならぬ。

アルマを見上げたイドウヴァは矢継ぎ早に指示し、最後に彼女を手招きして呼びつけた。

「アルマ。これはまだ内々の話ですが、貴女には第二部隊の部隊長……そして副団長として、私の右腕となって働いてもらいます」

「身に余る光栄、謹んでお受けいたします」

団長が第一部隊を、副団長が第二部隊を率いる。これまでと一見変わらぬが、中はがらりと変わる。

団長と反目の槍の関係から、腹心と変わったのだ。

上位二部隊が同じ方向を向けば、それは騎士団全体が同じも同義。まずは、アルマに旧第一部隊の連中の「教育」をしてもらうことになるのか。

新しい朝の到来を知らせるべく、早速イドウヴァはアルマと共に詰所を出た。



## 第6話 夢に終わるものか

にぎやかな喧騒、さまざまな色の明かり、あふれ出すしらべ……。世俗の騒がしさを避けるように、一段高い場所へ構え、貴族街は今日も厳かさを保っている。

イリアが迎えた、あたらしい春。

雪とけ、すべてが動きだす喜ぶべき季節の巡りのなか、また別の歯車が雪中から姿を現し、このエデツサ貴族街で回り出そうとしていた。

「イドウヴァさん、団長就任おめでとうございます。いやあ、めでたい」

高級レストランの個室はよく音がひびく。

白金色の法衣を揺らし、目袋をこれでもかと緩ませながら、フェリーズが柏手を向けてくる。

柔和な声で賛辞を受けると、エミリーヌに祝福をもらったような気分になる。さすが教団の高位聖職者のなせる話術か。

いつもこの時期は、慰められるばかりだった十年余り。だが、今回でようやくにそれも終りだ。

「ありがとうございます。ようやく念願が叶いました」

笑いが止まらない。一つ頭を下げると、手にした紅血のワインを一口する。これほどうまいワインがあっただろうか。

長かった、実に長かった。

あれだけ策を講じ、あれだけ踏みつけてきて、結局最後は消去法とは。どこか虚しいが、結果がすべてだ。

「だいぶ時間かかったな」

苦しかった十数年をワインに浸して余韻を楽しんでいたときだ。ふいに野太い声がちよつかいをかけてきた。

ソルバーンは足を机に引っかけ、天井を見上げて独白のように続けている。

「ま……約束どおり、婆さんになる前には就任したわけか」

焼け焦げた鉄が混じるような、赤黒い顔に浮かびあがる黄金の邪

眼。

絡むような気だるい声。ぼんやり天井を見上げ、祝っているのか貶しているのか、まるで分からない。

それでも、イドウヴァは表情を変えなかった。

本能だけで生きているこの男は、元から味方かといえば微妙なところ。こうして計画メンバーに入れていられるのも、用心棒の意味合いが強い。彼の興味を外に向けておけば、その背は安泰というわけだ。

奔放な邪眼は、そんな思惑など関係ないと言いたげに、あくびをしながらまた独り言のように呟いた。

「それにしても……これで、自由に騎士団を動かせるわけか」

「ええ、資金確保は本当に苦労しましたよ」

今までずっと押し込められ、満足に動けずに来た。

97代目団長は品行方正で有名だったから、どれだけ神経を尖らせても、裏帳簿の残高は知れていた。

おまけに最近『妖精』の配下が、国力向上の任で少ない畑から更に奪っていたからなおさらだ。

それが、今日からはすべてを支配できる。

お手並み拝見とじつと見つめる黄金と視線がぶつかった。

「ええ、若干抵抗勢力もありますが、おおむね順調ですね」

「抵抗勢力ねえ……」

息をするのも面倒そうな、覇気のなかったソルバーンの口元にふつと好戦的な笑みが浮かぶ。

一体なにを考えているか見当のつかない男だが、これ以上バカにされるのも癪だ。

「まあ、もう手は打ちましたから、かごの中の鳥のようなものですよ」

「ハン……どうかな」

ソルバーンの鼻で笑う声はどうにも耳に障る。そこへ逆撫でるように彼は続けてきた。

「この魔人の下へわざわざ命を捨てに来るような奴だぜ？　人ごときの下で大人しくしているとは、到底思えねえわ」

ニチャニチャして、そうなって欲しいと言わんばかりだ。背中がぞ

わぞわする。

「ご安心を。彼女とてそこまでバカではないでしょう」

「ま、俺はあんたがどう手腕を振るうかより、それにどうやって抗うかが楽しみでな」

恐ろしいことを言う男だ。

だから、傍に置いておきたくないのだ。ソルバーンの言いたいことは分かる。あの気質が大人しくしているとは、どうにも考えにくい。とは言え、あの娘の肩を持つようなことをされては困る。やはり、味方に数えるのは危険だ。

どうにも、彼女を買っている者が多くてやり辛い。そう言えば……こちらの男も、か。

「貴女も神と交信する席へようやく座ったのですね。いやいや、責任重大ですな」

ワインをグラスに注ぎながら、賛辞を惜しまないフェリーズの顔から笑顔が消えることは無い。

だが彼は確かに伝えてきた。計画は明確に遅れていることを。そして、その遅れの挽回は、必ず天馬騎士団が為すべきだと。

「ええ。いままでの遅れ……まことに汗顔の至り」

イドウヴァにも自覚はあった。

当初の予定通りならば、この席は決起の会となっていたはずだ。何分邪魔が少なくない今は、半歩でも先を急ぐ必要がある。

「これでフェリーズ伯爵とお仕事しやすくなりました。これからもお願いしますね」

もう、なにも阻むものはない。全ての決定権を掌握した今、聖天騎士団との関係も強化できるだろう。前団長にさんざん警戒され、『妖精』に関係を引裂かれかけた時はさすがに肝が冷えたが、もう二人ともいないも同然だ。

自然に肩が揺れ、また一口、美酒に口元が緩む。

「もちろんですとも。しかし、これからですよ、まだスタートラインに立ったばかりですから」

フェリーズから警告が飛んできた。どうにもこの男は、説教臭くて

かなわない。とは言え、彼の言葉はもつともだ。

いくら団長として強権を発動できるようになっても、すぐに変えるのは不可能だ。おまけに、表立ってそれを使って、「抵抗勢力」に勘付かれるのは避けたい。

天を駆る騎士としては少々窮屈だが、飛翔のその瞬間まで潜航し続け、一気に浮上しなければなるまい。

「貧困にあえぐ者たちを救済するためにも、我々は急がねばならない」  
ばつと両手を広げて天を仰ぎ、フェリーズはエリミーヌの加護を全身に浴びようとするかのよう。

これを真顔で言っているのだから恐ろしい男だ。この男が放つ光は、あまりに眩しすぎて目が潰れてしまいそうになる。

それは魔人でさえ同じか。ソルバーンはすぐに視線を逸らし、顔に手をやって視界から無理やり聖者を消している。その視線はアルマに向いていた。

「前より膨らんだな。さすが『滅蝕』か。闇夜にとつちや眩しいだろうな」

「ええ、少々刺激が強いですね」

「ハッ、光だろうが闇だろうが、そんなものは『人間ごとき』に扱えるシロモノじゃねえわな」

なにやら、また良く分からないことをアルマに言っている。部下に妙なことを吹き込まないか心配だ。

ただでさえ、宗教で洗脳しようとする眩耀の司祭の高説に、頭がくらくらすると言うのに。

その彼は、ソルバーンの言い草が気に入らないのか、珍しく困惑を浮かべている。

「なにを言うのです。我々は、神の慈悲を民へと伝えなければならぬのですよっ。」

「ま、結構な大儀だ事で。……俺は戦えりや何だっつていいぜ。『妖精』がじゃれに来るくらいじゃ、ツマンねえしな」

この男が『春陽計画』に参加しているのは、戦えるからに他ならぬいのだろう。

計画には、立ちは大かかろう障壁が多い。だからこそ、内患を抱えたままでは不安だ。

「ソルバーン。シャニーが妨害してくる時は、次こそ頼みますよ」

「ああ……—まあ、考えとくぜ」

念押ししたはずだったが、返ってきたのは生返事。これは、危険だ。

「なぜ貴方は彼女を狙わないのですか？」

「そうだな……。羨ましいから、かねえ」

「……はい？」

思わずいら立ちが声に漏れてしまった。茶化されているとしか考えられない。視線を合わせることもせず、天井を見上げたまま気だるそうに言うからますます気に障る。

「ヤツには意志がある。彷徨う俺とは、大きな違いだ」

聞いたのがバカだったかもしれない。この男の言うことは、どうにも理解しがたい。

籠に押し込めたとはいえ、用心棒がアテにならないのでは、もう少し思案が必要だろうか。

「そうそう。アルマさん、副団長に就任予定だと聞きました。お若いのに立派ですな」

ぼうつと考えを巡らせていると、フェリースの声が聞こえてきた。彼がアルマに興味を持つとは珍しい。今まで何度か顔を合わせてきたが、話しかけたのは初めてののはず。

「はっ、重責に身が引き締まる思い。これからもよろしくお願いします」

彼女の凜とした姿にフェリースはまた拍手をしている。

「なるほど、これが急伸の槍。そして『滅蝕』のアルマですか」

その柔らかな視線の中でもじつとアルマを見据え、そしてイドウヴァへにこりとしてみせた。

「なかなか面白い状態になっていますな」

「？ はあ……」

何やらフェリースまでよく分からないことを言い出した。一体ど

うなっているのか、今日の会合は。

何のことか聞こうとするより先に、彼は続けてきた。

「イドウヴァ団長、感謝しますよ。こんな素晴らしい人材を抜擢していただいたて」

「いえ、彼女は入団の時から、他とは違うものを持っていましたから」  
「天馬騎士団が羨ましいですよ。『滅蝕』に『妖精』と強力な槍と剣を両手に携えて、何と素晴らしい」

半分嫌味だろうか。アルマはともかく、シャニーを大人しくさせるのに、どれだけ神経を尖らせてきたやら。

あの剣は敵に向くどころか、いつ気まぐれにこちらの寝首を搔くか分からない、いわば”デビルソード”のようなものだ。

「その剣が、ちゃんと外を向いてくれれば良いのですがね。なかなか上手いきません」

「はは。……まあ、いくら団長<sup>アナタ</sup>が命じたからと言って、あの剣が鋒を向ける相手を変えるワケが無いでしょうね」

心を見透かしたような言葉が返ってきた。おまけに、普段の柔和な声に乗って来るとゾクつとする。

他人事だからと、ずいぶん気楽に言ってくれるものだ。やはりあの時、強引にでも売却してしまうべきだったか。

面食らったまま固まっていると、向こうから鼻で笑う声が聞こえてきた。

「ま、今のあんたじゃ手を焼くだろうな。……先代以上だぜ？　ありやあ」

目元がぴくつと動いたのがイドウヴァ自身にもはっきり分かり、黄金の目が呆れたようにまた一つ笑う。

「生前に何回かちよっかいをかけたが、なかなか面白い奴だった。その娘は、若さも手伝ってか輪をかけたようなイイ眼をしてるしな。これから楽しみだな？」

「楽しみとはいったい——」

「どうするつもりだ？」

いつも会話が自己完結する男が、珍しく問いかけてきた。

その問いの意図はまるで分からないまま、次にソルバーンが口にした言葉に、全身が痙攣したように動けなくなった。

「……また先代のように沈めるか？ 深い雪の中に、何もかも」  
心臓を串刺しにされたように、血の気が退いていく。

あまりに静まり返ってしまい、居心地が悪くなったかフェリーズが話題を引き戻した。

「とは言え……足踏みはできませんからな？ ゼロット殿はすでに動き出されている」

相変わらずイドウヴァにとっては居心地の悪いまま。

言葉に詰まるイドウヴァをフェリーズの言葉が攻め立てる。しかし、再び前を向いたイドウヴァの顔には、焦りはなかった。

「ええ、行動を起こすにはもう少し時間が必要です。その為にも……邪魔なものには消えてもらう」

ゼロットが全てを決めてしまう前に、事を起こす必要がある。イドウヴァもそれは十分に心得ていた。

だからこそ、これ以上計画を遅らせる因子はすべて取り除く必要があった。

その権限が今、手中にある。

あの目障りに飛び回る妖精も、所詮掌の上で飛んでいるだけ。その気になってこの手を握れば、たちどころに押し潰せるだけの力を今は持っているのだ。

ところが、踏み出そうとする目の前へ槍を突き刺すように、アルマが待ったをかけた。

「お待ちください、团长」

アルマは、返事をする間もなく続けてきた。『妖精』はいずれ必要な駒です。殺してしまうのは余りに惜しい逸材です」

アルマが言い出すことはだいたい察しがついていたが、それを何の悪びれもなくはっきり言うとは。イドウヴァの顔には失望が浮かんだ。

先週もそうだ。やたらとあの小娘の肩を持って。

同期との友情に現を抜かすとは、何ともアルマらしくない話だ。上

だけを見つめて、ひたすら蹴落としてきたこの女が。

「アルマ……貴女はどうしてそこまで、彼女の肩を持つのですか？」

この際、聞いておくことにした。

シャニーがアルマと交渉できるような知恵者とは思えない。となれば、アルマから歩み寄ったことになる。

一体何がそうさせたのか……。彼女がシャニーの背を守るようでは攻めるに攻められない。

「私もそう思いますぞ」

フェリーズの声が飛んできた。最初は自分に味方してくれたのかと思ったが、後から続けてきた言葉は、それを違うとはつきり伝えてくる。

「イドウヴァ団長。不要ならば、買い取りましようか？」

ここにも、あの小娘を買いかぶる者がいたか。

しかし、これは願っても無い提案だ。以前はタイトに邪魔されたが、今なら高く売りつけられるかもしれない。

かねてより、フェリーズはシャニーの戦闘力を高く買っていたから、ヴァルプルギスと対を成す剣が欲しいのだろう。手なづけられるものなら、やってみると良い。

ところが、今回もまたストップがかかった。

「民の信望から考えて、下手な動きは避けるべきかと」

アルマが横やりを入れてきたのだ。

——あの嘆願書を忘れたか

彼女の目に貫かれて、視線が泳ぐ。

今のシャニーの背中には、無数の護り手がいる。下手に槍をねじ込もうと襲い掛ければ、こちらが飲まれてしまう。

ようやく手に入れた力を、早速跳ね除けられた気がして沸々してくる。どうしたら……。

アルマは、それを待っていたかのようだった。

「ここは、一時退場してもらおうことにしてはいかがですか？」

「一時退場……ですか」

随分と面白いことを提案してくれるものだ。確かにその方法なら



ば、直接槍を向けずとも良い。

正直なところ、あんな厄介な剣をイリアに置いては、いつ寝首を搔かれるか分からない。手を下さずに済むなら最高ではないか。

「ふふふ……そうですね。そうしましょうか」

さすが我が右腕だ。称賛を目元に滲ませてアルマを見つめる。

「ハン……。俺には分かんねえな。目指しているものは、そんなに変わらないはずだろ」

その時だ。相変わらず気だるそうな横目で、ソルバーンが呆れたようにつぶやいた。

「な、なにを知ったふうな」

「もう少しだけでも、あんたが違う道を進んでいれば『妖精』は腹心になったはずだ。『妖精』も、その母親も、そしてあんたも、誓ったことは同じ……違うか?」

「一緒にされるとは心外ですよ」

思わず彼から視線を外すと、また鼻で笑う様な声を浴びせられた。

「あんたも不憫だな。未だにあいつの幻影を追っているとは」

何も、何も言い返せなかった。

あの事故以来、すべてが変わってしまった。まわりの世界も、自分の心も。そして、イリアの未来も、きつと。

「追ってなどいませんよ。追ってなど……」

いつから、追いかける背中が憎くなったのだろう。

何が、憧れの背中に槍を突き向けさせ始めたのだろう。

追い込んで追い込んで、どれだけ己に鞭打つても、あの背中を抜き去ることはできなかった。

今、その背中があの小娘に変わろうとしている……そんなことは、そんなことは絶対に許せない。

——へへっ、またあたしの勝ちだね。だけど実力伯仲、イドウヴァも強くなった!

脳裏に聞こえてくる、懐かしくも、忌まわしい声。

自身を鍛えに鍛え、今日こそはと毎日のように部隊長に戦いを挑んだ。

その都度跳ね返されて膝を突いた。屈辱の前にはいつも、朗らかな笑顔があつて手が伸びてくる。

——まだ追いつけないんですか……本当に尊敬しますよ、その槍捌き

その手を取つて立ち上がるが、心も体もボロボロだった。

なぜ勝てないんだ……どこからこんな力が……そればかり頭に浮かぶ。

民の信望の篤さは山と高く、槍術でさえ勝てない。なぜだ？

同じ夢を追い、身を粉にして戦つて、誰よりも報酬を稼いでいるはずなのに。

——一緒に稽古しようよ。さっきの手合わせで、あんたの弱いところ見つけたからさ

また、手を差し伸べてくれた。

最初は嬉しかった。だけどそのうち怖くなった。

自分がすべて否定される気がして、この人さえいけば、自分なんか要らないのではないか。……イリアに春を呼ぶために、この人さえいれば、この人さえいれば……。

「……貴女は、私には眩しすぎたんですよ」

グラスに揺れる血のようなワインをじっと見つめて、イドウヴァはぽつりと漏らした。

もう、後戻りはできない。幻影を追っているのではない。この手で、誓いを果たすだけなのだ。

イリアに春を——ただそれだけの為に、今までも、これからも見果てぬ夢に、終止符を打つために。

## 第7話　これが夢だ！

爽やかに透きとおる朝日。シャニーは朝食を終え、食堂からの帰路を仲間と歩いていた。

はずんで止まらない談笑。笑い声に揺れ、木の上の残雪がまた一つ落ちて縁を取り戻していく。

じつとなんかしていられない。詰所に戻っても、武器を手取るやドアを開け放ち、跳ねるように飛び出した。

イドウヴァと戦って一週間。部隊には、今までと同じ時間が流れ始めていた。

一度は途切れかけた十八部隊の軌跡。それを全員で繋ぎ止め、掴み取った朝に映える顔はどれも明るく前を向く。

「よしっ、さあ今日もがんばるぞ！　ねえ、どこ行こうか？」

帯剣ベルトにしっかりと剣をさし、シャニーは弾ける笑顔をレンにむけた。彼女が見下ろす地図を、背後から一緒に眺めてあちこち指さす。

「朝から燃えてるツスね！　ウチも何だか燃えてきたツス」

駆けてきたミリアが、シャニーの肩に寄りかかるようにして、一緒に地図を見下ろしはじめた。

彼女の指は、すぐに南の方角をさす。みんな行きたい場所、やりたいたことがたくさん浮かんでくるみたいだ。

「嘆願書をお願いしに行つたとき、困りごとともに一緒に聞いたんスよ。もつと詳しく聞きに行きたいんスよ！」

「おっ、いいね、いいね。行こう！　レン、お願いね」

ミリアの提案にうんうんと頷き、レンに航路計算を指示したシャニーは、ふと視線に気づいて振り向いた。

「なあに、ミリア？」

気づかれると思っていなかったのだろうか。ミリアはびっくりしてみせ、なぜか照れながら目線を外して頭の裏をかき始めた。

「いやあ……」

「また昼にどこの名物食べようか考えてたのか？」

ルシヤナの怒り滲む声が聞こえてきて、ミリアはぶるんぶるん首を振った。

「ち、ちがうツス！ シャニーの笑顔が傍にあって、勇気が湧くなつて」

相変わらず、ミリアは大きなきことを言う子だよ。

シャニーは手を払い、無い無いと笑って見せた。

「ははっ、おだてたつてオゴんないよ」

「ホントツスよ、朝一番で気力は満タンなのに、あふれ出す感じツスよく分かんないけど、ミリアが元気になるならそれでいいか。

そこに飛んでくる、ふいの質問。

「ミリアは今日のお昼、なに食べるの？」

「そりやあ今日は南部だからキイチゴのスイーツ……」

レンにミリアが軽く答えた途端だった。

「……って、それは目的じゃないツスから、副将！」

「行きたい場所をアンタから指定してくるから怪しいと思ってたけど、やっぱりそう言うことか！」

「ちがうツス！ 誤解ツス！」

ぎろりと睨む視線に気づいてももう遅い。必死に弁解しながらレンの頭を小突くミリアを、ルシヤナが叱ろうとしている。

でも、スイーツに釣られたシャニーは、お構いなしに肩をぶつけてミリアに情報をせがんだ。

「いいなー、いいなあー！ あたし何にしよっかなあ」

ミリアのベルトに挟んである雑誌がずつと気になっていた。

待つてましたと言わんばかりにミリアが手に取って、折り目をつけてあつたページを開いて得意げに語りだす。

それは予想どおり、スイーツの特集記事。今日の目的地、イリア南部の記載箇所を二人で爛々とした目で見つめ、あれこれ指さしてはしゃぐ。

「……元に戻ったのは良いけど緩すぎでしょ、あんたら」

ぎくつと肩を跳ね上げ、後ろ目に恐る恐る祈つてみたが現実は変わらない。やはり、そこには角が生えたルシヤナがいた。今日も朝っぱ

らから説教を受ける。

トホホ……これじゃだれが部隊長か分かんないじゃん！

しおれたまま、説教が早く終わることだけを祈っていた時だ。

「シャニーさん、おはようございます」

穏やかで落ち着いた壮年の声。

小さくなっていたシャニーは名前を呼ばれ、おっと口を開けながら振り向いた。

「あ、おはようございます！何かあったんですか？」

やっぱりこの声はそうだ。総務部長のエニスだった。

人柄はとても良い人なのだが、この人が持つてくるものは、いつも重い話ばかりでどうしても内心は身構えてしまう。配属の時、12月の処分の時、そしてこのタイミングで彼女が来たということは……何となく予想できる。

「イドウヴァ団長がお呼びですよ」

ああ、やっぱり……。そんな心の声が漏れ出しそうになった。

スイーツの話に混ざってくるワケがないことくらいは分かるけどさ、朝だし、もう少し軽い話にしてよー。

シャニーはイドウヴァの名前を聞いて一瞬顔に出かけたが、周りを見てぐつと堪えた。

もう、あの人には頭を下げて全部水に流したはず。これからは、いい関係を作って行かないといけない。周りの仲間たちが、汗を流して集めてくれる人々の祈りを、あの人に認めてもらうためにも。

「みんなそんな顔しないで。大丈夫だよ！きつと悪い話じゃないって」

すぐにそれまでの笑顔に戻ったシャニーは、沈む仲間一人ひとりの顔を見つめて明るい声で前を向かせる。

「ほら、笑って笑って！」

最後まで下を向いていたレンの背中に手を添え、にこっと白い歯を見せたら、ようやく小さな口が上を向いた。

「シャニー、何かされたら、ちゃんと私達にも教えてね」

ふいにそう言われ、シャニーは胸がドキンとなった。

「え……？ ……うん。そうするよ」

手を振りながらエニスと一緒に歩き出す。でも意識はずっと背後にいる仲間達にあった。

レンのあの言い方、きつとレイサから聞いてしまったに違いない。やっぱり、隠しごとはダメだ。

次はもうしないと決めて、シャニーは前を向いて歩き出す。

「どうですか？ 最近は何？」

すぐにエニスが穏やかな口調で聞いて来た。

「イイ感じですよ。毎日楽しくやってます」

ニカッと白い歯を見せ、シャニーは爽やかに答えた。

思い出す。この中庭は、一年前、十八部隊の集合場所だった辺りだ。国外で仕事をしたくて、それを叶えてくれなかった姉に、悶々としながらこの場所に立っていた。

あれから一度も国外で仕事をしていない。なのに、毎日楽しいってさ。一年前の自分が聞いたらどう思うだろう。

「最近はおちこちの部隊長からも、貴女の話はよく聞こえてきますよ。みんないい子だって」

エニスからかけられた言葉に、シャニーは一瞬きよんとした。

何せ周りは敵だらけだと思っていた。イドウヴァを敵に回し、戦場で敵を見るような目が会議室を包んでいた気がしていた。

「え、それは嬉しいなあ。ありがとうございます」

それは、ほんの一部の話だったと知って心が軽くなる。

今でも、イドウヴァの腰巾着——第五部隊長マリツサの口調は刺すようなものがあるが、派閥を越えて声を掛けられる機会が増えた。

彼女らと話をしてみても、怖い存在でも、敵意を持っているわけでもなく、根は優しい人達なのだと思っていたが、こうしてエニスに言われると確信できた気がする。

みんな、イドウヴァが怖くてあんな怖い顔をするしかないのだと思うと可哀そうに思えた。逆らえば……自分のようになるのだから。

「ふふ、貴女の顔を見ると、貴女のお母さんを思い出しますよ。とてもいい子だった」

最近、よく言われる。あのイドウヴァからも同じことを言われた。なんだか恥ずかしい。でも、それ以上に、母がこんなにも騎士団の中で慕われていたことが誇りに思える。

「お母さんやお姉ちゃんみたいに、あたしもみんなに頼られる人になりたい」

物心ついた時にはいなくなっていた母だが、写真を見ても自分がそっくりなのは分かる。

母や姉の背中を夢中で追いかけてこの世界に入ってきて、ずっとあの背中のように大きくなりたいと願ってきた。

今は、少し違う。

「でも、あたしにはあたしの誓いがあるから。あたしは、あたしの道を行こうと思います」

自分を形作った大きな背中に間違いないが、もう目の前に彼らの背中にはない。後ろで支えてくれる、背負っていくべき大事な信と変わった。

彼らのやることが正で、敷かれたレールに沿って走ればいい時はずう終わった。

誓いを果たし、イリアの未来を掴み取るために自らレールを敷いて、その先頭で刃を掲げる立場になったんだ。

「貴女の道ですか？」

エニスに興味津々の目を向けた。

「うん。イリアに春を。……今の夢はこれ。だからちよつぱり、団長に何言われるか怖いんだけどね」

もう、震えて春が来るのを待つのは嫌だ。ずっとそう思ってきたし、アルマと友情を結んだ時にも、そうはつきり口にしたことは覚えてる。

あの時は、ひとりの新人騎士にとっては途方もない大きな夢で、何が自分にできるのか分からなかった。

けど、もう今は夢じゃない。背中から聞こえてくる信たちの声が、為すべきを教えてくれる今、明確な目標となって誓いの抛り所となっている。

この誓いのためなら、みんなの祈りの為なら、どれだけ剣を折られても戦う。その剣が掴み取った未来を、今しつかりと歩んでいるから確信できる。進む道は、間違っていないのだと。

「悪い話ではないわよ。ほら、行ってらっしゃい」

それでも隠せない不安を少しだけ零したシャニーの背中を、エニスは優しく押して送り出した。

直線廊下の先に見えてきた団長室の扉。

振り返ったシャニーは改めてにこっつとしてエニスに感謝を伝えると、力強い足取りで廊下を抜けていく。

その後ろ姿を見つめ、エニスは満足げな笑みを浮かべて、静かに敬礼していた。

「イリアに春を……。ふふ、良かったわね。志を継いでくれる人が現れたわよ」

目の前に現れた大きな扉。他と変わらないはずなのに、飲み込まれてしまいそうな威圧感。

扉の前で大きく息を吐き出し、マントを、服を、そして髪を整える。大丈夫、きつと悪い話ではない。エニスだってそう言っただけで送り出してくれた。

頑張れと自分を励まし、両頬に手を当てて気合を入れると、部隊長のスイッチを入れた。

「第十八部隊長、シャニー。参りました」

「入りなさい」

思わず腰が引けた。

そうだ……。もう中にいるのは姉ではなかった。分かっていたはずなのに、返ってきた声に驚いてしまった。

あの時は厳しい声だと思っていた。『どうぞ』の声。それがもう、聞けないと思うとふいに寂しくなった。

妙に心細い……。何をしてるのさ。あたしは部隊長だよ！

小さく首を振って、腹の中に溜まった不安をふうつと吐き出すと、シャニーはドアを開けて一気に中へと踏み出した。

やっぱり、団長席に座っていたのはあの優しい姉ではなく、ベテラ



ンの威圧感溢れるイドウヴァだった。

手招きされるまま机の前まで歩いて行くと、ふいにイドウヴァは優しく笑いかけてきた。

「シャニー部隊長、貴女に正式に回答しようと思いましたが」

「部隊の存続の話ですよ」

その笑顔で、やはり悪い話ではないと悟ったシャニーが単刀直入に聞くと、イドウヴァは紫紺の瞳で彼女を見上げて静かに頷いてみせた。

凜としていても、ごくりと鳴る喉を抑えきれない。

「十八部隊の存続を決定しました。これからも頑張りなさい」

本当に？ 今本当に存続って言った？ ねえ本当に、本当に？ あれだけ十八部隊を目の敵にして潰そうとしていたイドウヴァさんが？ ねえ、夢じゃないよね、これ、本当なんだよね？

思わず聞き返す。

「存続なんですか?!」

「ええ。一度で聞き取りなさい」

本当に、掴み取ったんだ。本当に、戦いに勝ったんだ。

みるみる見開かれていく青い瞳が震えて、言葉にならない声が漏れだす口を、シャニーは思わず手で覆った。

「はいっ、ありがとうございます！ ありがとうございますッ……」

何度も何度も、青のショートトレーヤーを揺らして頭を下げる。

最初こそ、春風のような爽やかさを湛えていたが、すぐ雪解雨のように涙がぼろぼろこぼれだした。

この嬉しさをどうやってみんなに伝えようか。一番はやっぱり共に戦った仲間たち。アルマにもお礼をしたいし、ロイにだって頑張ったと伝えて褒めてもらいたい。

天馬で飛び立ったかのような高揚感に包まれ、嗚咽を漏らすシャニーを、イドウヴァは相変わらずの冷徹な声で呼び戻した。

「その程度で泣くんじゃありませんよ。騎士団の幹部なのですよ、貴女は」

「申し訳……ありません。……でも、あたし達にとっては、生きるか死

ぬかくらいの話だから」

真つ赤なままの目で涙をすすり、袖で目元を強くこすったシャニーは、背筋を伸ばしてもう一度部隊長の姿勢を取り戻す。

長い夜を抜けて、ようやく息を吹き返した気がする。これでこれからも、夢のためにイリアの空を駆けられる。

雨が止んだ顔に浮かぶ爽やかな笑み。イドウヴァは視線を切った。

「以上です。さ、任務に戻りなさい」

「イエス、マム！」



春風過ぎ去り、静寂が戻ってきた団長室の中で、イドウヴァはじつと扉の向こうを見つめていた。

背を向けて歩き出した足取りは、駆け出そうとするのを堪えているのが外から分かるくらい軽やかだった。

あれだけ生に満ちた笑顔を見せられると、罪悪感さえ湧きあがってくる。何か、あの笑顔をそれ以上見ていられなかった。

「私も……あんな感じだったんでしょかね」

まだ十六になったくらいか。そんな小娘が部隊一つの為にあそこまで熱心になる姿には、イドウヴァも何も言えなかった。確かあのくらしい年で自分も部隊を持ち始めたから、部隊長の気持ちは十分理解しているつもりだ。

……本当に、あの剣が自分の懐刀となればどれだけ良いことか。

「生きるか死ぬか……ですか」

だが、これから先、必ずあの顔はこちらへ向けて剣を抜く。

イドウヴァはおもむろに引き出しを開けると、中から一枚の紙を取り出した。

騎士団の幹部の名前がずらりと並ぶ職制表の中にペンを置く。思案に揺れるまま放置されたペンは、置かれた名前を黒く塗りつぶしていく。

——ならば、お望みどおりにしてやろう

イドウヴァはインクが黒く広がっていく様子をじつと睨みつけて

いた。

◆ 翔ける。翔けて、翔けて、青髪で風を切る。

廊下を抜けて中庭に飛び出したシャニーは、足元にぐつと力を込めて曲がり、まっすぐ前を向いて風のように翔けていく。感激を少しでも早く伝えたい。

「みんな!! おーい!!」

見えてきた。仲間たちに手を振りながらありったけで叫ぶ。

仲間たちも待っていたのか、顔を見るや駆けてくる。

「十八部隊の存続が正式決定したってー!」

ぶつかるくらいの勢いで駆けてきた仲間たち。最高の吉報を届けたら、耳を劈くくらいの歓喜が返ってきた。

あまりの姦しさに、他の部隊の連中が好奇の眼差しを送ろうが、彼らはお構いなしにはしゃぎまくる。

「ヤッター!! やったんだ!! あたしたち、やったぞー!!」

仲間たちの歓喜する姿に、シャニーもはち切れそうだった喜びがついに爆発した。あまりに嬉しくてその場に倒れこむと、両手を広げ、腹いっぱい力を込めて空へと叫ぶ。

それを真似して、ミリアも一緒になって叫びだすから周りの視線が痛い、ルシヤナやレンも今回ばかりは止めずに彼らの歓喜を笑って見ている。

ようやく一息つくと、シャニーは上体を起こして仲間たちを見渡した。

危機は去った。長かった……部隊存続の危機を覚え始めた一月から、本当に長かった。

でも、ずっとひたむきに前を向き、イリアの空を駆け続けた一年が間違いではなかったと、こうして叫ぶことが出来た。

もう、深い夜に飲みこむ悪夢は終わり。さあ、春の到来とともに、新たなスタートを切ろう。

彼女は自身に一つうなずくと立ちあがった。

「あたし達は一足先に春を迎えた。新しい一年に向けて、あたしは一つ、新しく誓うよ」

すつと剣を引きぬく。銀の刀身に陽射しを乗せ、爽やかな声を春陽に響かせた。

「イリアに春を！」

その姿を、ミリアやレンは呆然と見上げていた。

「さっきまで、一緒にスイーツの話してたのに……」

「ん。何だか、リーダーじゃない気がする」

恍惚とした表情を浮かべて拍手する二人の尻を、ルシヤナが叩いて引き戻した。

「ほら、その二人、拍手してないであんた達もこっちくるんだよ」

シャニーの許へ歩くルシヤナの手には、しっかりと槍が握られている。ミリアも机に放り出してあったクロスボウを手に取って駆け戻る。シャニーが彼女を待っていると、横にどこからともなく黒い風が現れた。

「あつ、レイサさん、おかえり」

「混ざって良いかな？ 私の短剣は血みどろだけどさ」

シャニーはその問いに一瞬きよんとしたが、すぐに笑って返した。

「あつたりまえだよ！ レイサさんだつて十八部隊の仲間じゃない」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか。今なら姉貴シグリーネに胸張って言えるさ。イリアのために、私は尽くしてらつてね」

レイサはシャニーの横で短剣を高く掲げた。その時にレイサが見せた笑みは、今まで見たことの無いような、アサシンとは思えない柔らかさだった。

「レイサさん……」

「姉貴、見ててくれてるかね。……この希望を支える短剣の向く先をさ」

その短剣に次々加わる仲間たちの武器。

「その誓い、私たちも乗せてもらおうよ。これは十八部隊の誓いだ」

シャニーの剣に槍を掲げると、ルシヤナはシャニーの肩を後ろから

がちり抱き寄せた。

「へへっ、待ってたよ、ルシヤナ」

シヤニーも抱きしめ返すと、掲げる剣の先を眩しそうに見上げ、ルシヤナは懐かしそうにつぶやいた。

「部隊が崩壊しかけてレイサさんに頭さげに行った時も、妙な魔術師やソルバーンと戦った時も。十八部隊が正式部隊になった時も、聖天騎士団とぶつかった時も、んでクソババ団長と戦った時も……いつもあなたの背中があった」

「ええ？　ははっ、どーしたのさ、いきなり」

なんだか照れくさい。笑って茶化してみたが、ルシヤナの顔は変わらなかった。いや、それどころかもっと強く見つめてくる。

「あんたはいつも、先頭で剣を掲げてきた。あんたについて行けば、こいつと一緒に夢を語って戦っていけば、イリアに春を呼び寄せることだって出来るんじゃないかってさ。……——独りにしないよ」

肩を抱き寄せる力が強くなった。なんだか、胸がいつぱいになって苦しい。

リーダーとして、少しはディークに近づけたのだろうか。いつも先陣に立って、その背中であくさん教えてくれた、今どこにいるかも分からない恩師に。

「ルシヤナ、……ありがと。みんなもついてきてくれて、頼もしいよ」  
最初は小さな夢だった。誰かの役に立ちたい……それくらいの気持ちだった。それがどんどん膨らんでいき、大きくなってきた未来の鼓動。

自然と湧き上がる希望。今までだって、小さな春をあちこちに呼び寄せてきた十八部隊なら、きつとできる。

希望が生み出した、どんどん大きくなる明日への鼓動。目を閉じてそれを静かに聞いていたシヤニーは、再び開いた瞳で仲間たちをぐるりと見渡し、新たな誓いの号令を春の始まりに轟かせた。

「行こう！　あたし達が懸け橋になるんだ！」

——イリアに春を！！

一人の夢は、またひとつ大きくなって青空に広がっていった。

## 第8話 芽吹きの日

今日はうれしい雨。

しとしと降り続く雨が屋根伝いに落ちてきて、最後まで残っていた日陰の雪を少しずつ穿つていく。この雪解雨ゆきげあめが過ぎれば、一気に緑が戻ってくる。

曇天と静かな雨が心を落ち着かせる朝だが、今日も向こうの稽古場からは、そんな空気を吹き飛ばす元気な声が響いてくる。

詰所がもぬけの殻で辺りを見渡していたアルマは、聞こえてくる妖精のはしやぎ声を見つけ、ツカツカとブーツで廊下を叩く。

灯の入る扉を開けると、中では案の定、十八部隊のメンバーが朝稽古で威勢のいい声をあげていた。

稽古場の中央でシャニーとルシャナがそれぞれの槍をぶつけ合い、それを端からミリアとレンがマグを傾けながら眺めている。

あいつも槍を使うことがあるのか……。そう言えば天馬騎士だったと思いついて一人笑う。

シャニー達の稽古が終わるまでしばらく様子を見ようとしていると、気配に気づいたレンが振り向いて手を振ってきた。それに気づいたミリアも一緒になって白い歯を見せてくる。

……不思議なものだ、ついこの前まで、あんなに牙をむいていた奴が。

「シャニー、十八部隊の存続、おめでとう」

稽古を終え、大きく息を吐きながら額の汗を拭うシャニーへ、ポンとタオルを放つてやる。突然顔に飛び込んできたタオルにもごもごしはじめた。

ようやく顔からタオルを外すと、シャニーはぱつと春陽のような笑顔を咲かせる。どうやったらこんな満開にできるのか、アルマには不思議なほどの笑顔だった。とても真似できそうにはない。

「ありがとう！ アルマのおかげだよ」

歩み寄ってきてシオルダーガードをポンと叩きながら、弾むような明るい声で感謝を口にしてくる。

何度彼女から贈られても、この言葉は本当に慣れない。無茶苦茶を通してきた自覚はあるから、恨みを買うのは慣れたものだが、感謝されるなんてどうにもむず痒い。

「何のことやら」

今回も、体はツンと当たり前のように視線を外し、白を切ろうとしている。そんなものが通用する相手ではないことくらい、分かっているはずなのに。

「もう、毎回毎回照れちゃってさ」

やはりと言うべきか、もう反応を見切られているのか。シャニーは白い歯を見せながら一段とトーンを上げた声で笑うと、肩に後ろから手を回して抱き込んできた。

一年前なら跳ね除けただろう。今でも馴れ合いは好きではないが、彼女と結んだものは決して馴れ合いなどではない。何より、少しほつとした。冷血に生きてきたつもりだったが、自分に流れる血は、“あの連中”に比べたら遥かにこの十八部隊に近いのだと分かって。

ここまで自分の血を温かく、熱くさせてくれた親友の手が、声も、今も温めてくれる。

「フン、部隊長レベルで満足してるようじゃ先が知れてるな」

だからこそ、口を突いて出る言葉は厳しくなった。

いずれもつと上を指す時、シャニーには右腕であつて欲しい。こんな、たった四人の小規模部隊で済ましていい人間ではない。

……だからこそ、罪悪感が湧く。あの酒宴での決定は、ああするか無かったとは言え、副団長として最初の提案人事となってしまう。それがまさか、横で朗らかに笑う親友を突き落すことになるとは。

ぐつと罪悪感を押し殺し、友を信じることにする。きつと彼女なら、この逆境さえも見事に吸収して、もつと大きな太陽となつてくれるに違いないと。

「あたしはこの仕事に性合ってるから、十八部隊があれば十分だよ、じゅーぶん」

朗らかに笑う彼女が、本当にそう思っているのか不思議だった。

あの屈辱を味わったのは、まだ一週間ほど前の話だ。いくら寝れば忘れると周りから茶化される彼女であっても、下手をしたら一生消せない記憶のはずだ。

「お前らしいよ。まったく」

そう口にしながらも、シャニーを見つめる視線は厳しくなった。

強さと弱さが両極端な彼女の性格を忘れるはずもない。不満を彼女が口にする頃には、もう手遅れ。嫌な顔をされようとも、それを防ぐのもまた、親友としての務めだろう。厳しく現実を突きつけてやる。

「だが、今回思い知ったはずだ。力が無ければ……何もできないと」

最大の危機は切り抜けたが、下位の部隊長レベルではこれからも同じ目に遭う。それを跳ね除けるには、もつともつと高い椅子を目指し、騎士団内で、いやイリア内でたくさんの人間を従えるしかない。

シャニーはあれほどにイリアの民の信を背負っている。後は騎士団の中で駆けあがり、騎士団間の脈さえ作ってしまえば、誰より頂に近いはずなのに、

「あたしにとつての一番は、イリアの人々だから」

そう言つて今も、見上げれば手が届くはずの最も大きく高い椅子に見向きもしない。それどころか彼女の天馬は、イリアの野へと降りていこうとしている。彼女にとつての一番の声を聞くために。

「それを果たせるなら目指すかもしれないけど、今は目の前のことでもいいんだよ。あたし、アルマと違ってあれもこれもはできないし」

部隊のメンバーを愛でるような目。見渡す横顔に映える青の瞳は優しかった。出会った時はもつと、自信に尖っていたように見える眼差しが、今は何か別人のようだ。何か、春風の中に紛れる雲がすっかり払われた、高く澄んだ空で包むような青さをその瞳は湛えている。この瞳に、あの笑顔に。彼女に国内を任せておけば、きつとこれからもイリアのあちこちに春が咲くのだろう。

……だからこそ、申し訳ないし、現状で満足されても、近い将来訪れる新たな局面に負けてもらつても困る。きつとそれを乗り越えて、もつと大きな春を呼んでくれることを、今は願うしかできない。



「ぎつさと上がってきてくれないと、夢の達成が遅れる。呼び寄せるんだろ？ イリアに春を」

彼女がこんな性格だからこそ、自分が果たさなければならぬのかもしれない。そう自身に言い聞かせ、柔らかい青い瞳をじっと見つめる。

団長になれば、彼女の権限だつて自由に決められる。彼女が右腕として力を発揮してくれば、団長として常に外を見ていられる。イリアに春を呼ぶための勝負手に出られる。

イリアに春を——その言葉を聞いたシャニーの顔が振り向く。嬉しそうに頷いた彼女との抱擁を終えると、暖かい場所に背を向けた。雨の肌寒い廊下を抜けて団長室へと向かう。

「第一部隊副将アルマ、参りました」

「入りなさい」

もうすっかり団長が板についた声が返ってくる。

何時までもこの声を聞いているつもりはない。必ずや、すぐに抜き去ってやる。そんな気持ちを扉に込めて勢いよく開け、つかつかと部屋の中央まで歩いて行くと、団長席に座るイドウヴァに敬礼して見せた。

「ここが、最初の〃目標地点。今はその前で敬礼する高さまで上がってきた。後は目の前の女が、しっかり準備してくれるのを今は待つだけ。」

「アルマ、この前内々に話していた件ですがね」

目袋を緩ませながらイドウヴァが手招きする。机を越えてイドウヴァと同じ向きで、引き出しから彼女が出してきた一枚の紙を一緒に見下ろす——職制表だ。右上の適用開始年月を見てみる。1001年 4月……新年度からのもの。

他の名前など視界には入ってこない。無意識のうちに、自分の名前が何処にあるのか探す。少なくとも、第一部隊にはない。と言う事は……。

「記載の通り、貴女には副団長をお願いしようと思います。引き受け

てもらえますね」

ついに見つけた……。口元が不敵に吊る。名前は部隊の頂にあつた。

——第二部隊 部隊長：アルマ

その職制表にはもう一か所名前があり、それは職制表の頂点の一つ下。団長から直接経路が伸びており、副団長とはつきりと記されていた。

ここまで来た……。武者震いが止まらない。どれだけ自身を律しても、やはりこの瞬間は堪らない。見下ろせばイドウヴァの不敵な笑みとぶつかった。

「はっ、謹んでお受けいたします」

一歩退いて再び敬礼する。

これで、四月からは団長の独裁が始まり、その手助けをすることになるわけだ。とは言え、遅れた資金獲得のために、外征至上主義が加速するだけだろうが。フェリーズから釘を刺されている以上、それ以外に現を抜かし、独断で何か打ち上げるようなことはしまい。精々、しばらくは腹心として動くことにしようか。

「お望み通り、十八部隊も解体しませんでしたよ」

……。そんな気持ちさえ打ち破るような言葉を、イドウヴァが早速口にするとは思ってもいなかった。

そう言えば……。あいつの名前はどこにあるんだ。確か、今の職制表なら右側の一番下……。団長直下の特殊部隊の欄にあったはずだが……。

左右に揺れる視線をどれだけ小刻みに往復させても、無い……。どこだ、どこにあるんだ。だんだん焦燥に目が震えてくるのが分かる。ついに、あるはずもないと視界からあえて外していた場所で見つけ、視界に急ブレーキがかかって堪らず目を見開いた。

まさか、まさか「ここに」にあるなんて。一体どういう事なんだ?!

「だ、団長?! こ、ここは……っ」

ウルフシヨートをばつと振り乱して顔を上げ、イドウヴァの顔を見つめると、そこには大蛇の如く邪に笑う顔があつた。

正気なのか……そんな声が喉元まで出かける。

「一時退場してもらうには、ちょうど良いでしょうか？」

思わずぐつと奥歯を噛みこんだ。

確かに一時退場してもらうべきだと進言はした。だが、選りにも選つてまさか「ここ」だとは。

こんなところに踏み込んだら、もう二度と帰って来られない。それこそ、冬の山中に防寒具も無しに放り込むようなものだ。

我ながらよく考えたとも言いたげな涼しい口調を、今ほど恐ろしく感じたことも無い。ぞくぞくと体に虫が這うようで、赫灼のマグマのように噴きあがる怒り。それさえも凍てつかせるのは湧き上がる罪悪感。自分のあの時の言葉が、アイツを地獄へ叩き落そうとしている……。あの時の自身の声が何度も再生されて、心の中から凍てつかせてくる。

「し、しかし、ここは」

「あの子たちにとっては生きるか死ぬかだそうですね、ちょうどいいのでは？」

いくらイドウヴァでもここまですることは無いだろうと思っていた。第一、こんなことをしてゼロット達にどう説明するつもりなのか。

あれこれ反対材料をかき集めていると、イドウヴァはあっさりと主旨を口にした。

「どのみち消してもらおうわけですし、そこなら死んだとしても不思議ではありませんから」

……本気で殺すつもりだ。おまけに、自身で手を下さずとも殺せる最高の手段だ。『ここ』なら、誰も手を差し伸べられない。

ここまでよく、下種を考え付くものだ。反吐が出る思いでもう一度職制表に視線を下ろす。何度見ても、親友の名前がある場所は変わらない。部隊の任務は何なんだ……

——特殊任務：エトルリア関係強化

無理がある。ならばどうして、エトルリア本国に拠点を置かないのか。彼らが手を焼く場所で恩を売ろうとでも言うのか。

イリアの希望を、イリアから最も遠い場所に隔離し、人知れず消す……まだだ、まだ決定事項ではない。

「お待ちください、団長！」

部屋を出ていくイドウヴァの背を、アルマは焦って追いかける。

絶対にこの人事は通させない。どんな手段に打ってでも、止めてやる。変えて見せる。背を守ってくれる、信じて背を預けてくれる親友の首に、この手で刃など向けられない。

アルマはイドウヴァの横に並び、次々と提案を始めた。

部屋に残された職制表。その最左列は、太枠で囲われている。その枠の中に、シャニーの名前はあった。



昼頃には上がった雪解雨が、緑の上で明るい陽射しに眩しく光る。雨の中でも村の巡回に出ているシャニーは、濡れた髪をタオルで拭きながら詰所に戻ってきた。

びしょ濡れで早く服を着替えないと風邪を引きそうだが、春を迎えた喜びか、ちつとも寒くない気がする。それより、早くペコペコのお腹を燃料満タンにして、次の村へと飛んでいきたい。そんな気持ちを、机の上の手紙が引き留めた。

「あつ、ロイ様からだ！ うふふ、今日は何かな」

やっぱりこの気持ちには勝てない。

見慣れた紋章が入った手紙を見つけたシャニーは、蝶が花に吸い寄せられるように机へ小走りしていく。

タオルを放り出し、濡れた髪に櫛を入れるのも忘れて鼻歌をうたう後姿に、仲間たちは羨ましいような呆れたような眼差しを浴びせている。それでもお構いなしのシャニーは、中から出てきた結構な枚数の便箋に目を落とすなり、蜂蜜を頬張ったような微笑みを浮かべた。

リキアで別れてから三か月。悲しいことも、苦しいことも、もちろん嬉しいことだって全部ロイに打ち明けてきた。返ってくる手紙は、まるであの胸で受け止めてくれるかのように温かくて、どんなに苦し

くても前を向く勇気をくれた。

——頑張り抜いたんだね。やっぱり君は、どこでも皆に必要とされているんだね。僕だって君が居てくれたらって思っているよ。

会話の一つくらの流れで、この前の大事件も赤裸々に書いた。そして、励ましがいっぱい書いてあって、思わず手紙に頬ずりして抱きしめた。彼なら何でも受け止めてくれる。そんな幸せをいつでもくれるあの胸の匂いが恋しい。

「メロメロな顔してんね、リーダー」

背後の視線に気づく。呆れたルシヤナ達のジト目とかちあつた。

「えへへ……」

笑ってやり過ぎそうとしたら、仲間たちが集中攻撃を浴びせてくる。

「でも、ロイ様にもどってるッス」

「やっぱり会えないと冷めるもん？」

ミリアとルシヤナがズケズケ攻めてくる。どうにも彼女たちは、ロイとの関係を面白おかしく盛り上げたいらしい。シャニーは困って眉をハの字にし、頭をかいた。

「ううん、そういうワケじゃ。でもやっぱり、あたしにとっては、ロイ様なんだよね」

それを言った途端、ルシヤナが聞こえるほど大きなため息をついて両手を広げだした。

「なんでそこで線引きするんだか。お互い好きならそんなの関係ないじゃん」

「あ、アハハ……——お互いかどうかは分かんないし」

苦笑いしたシャニーはまたすぐ手紙に目を下ろし、便箋をめくった途端のそき込んで歓喜を上げた。

「すつごーい！ みんな、見て見て！」

クリっとした目を真ん丸にして、口元をわっと明るく広げながら仲間たちに手を振る。

興味津々に駆け寄ってくるミリアを先頭にしてシャニーの周りに皆集まると、彼女が指さす手紙を一緒になつて見下ろした。

シャニーの手には、手紙のほか新聞の切り抜きが握られている。リキアの地方新聞だ。

「イリア連合王国の誕生か……？　へえ、すごいね。ほんとに実現するのかな」

記事のタイトルを読み上げたルシヤナが感嘆を漏らしている。

「あたしもそう思ったよ。何だか、スケールが大きすぎて、どっか別世界の話みたいだね」

最近ぼちぼち聞くようになっていた、イリアの騎士団統合と国家建設の話。まだまだ噂の域だと思っていたら、他地方の貴族が読むような新聞の記事を飾っているなんて。この大きさでの扱いだと、もしかしたら第一面だったのかもしれない。

「シャニー、ウチを一番に呼んで欲しいッス」

「うんうん、任せといてよ。絶対呼ぶからさー！」

もう王国騎士団の隊員になったかのようににはしゃぐミリアとシャニーの会話に、ルシヤナは呆れた目をしている。

でも、記事を手に取り、中をまじまじ読んでいたレンが指さす先を見て、脳天から驚きが突き抜けたような、すつとんきような声をミリアがあげた。

「天馬騎士団の国力向上部隊の活躍もあり……って書いてあるッスよ！！」

シャニーがニコニコしていたのはこの一文。

幾重もの綾となった喜びが、太陽を背に浴びるかのようになつと広がってくる。自分たちの活動がイリアの未来を創る礎になつていて、それが世界に発信されているなんて、まるで夢みたい。

自分たちの歩んできた道は間違っていない。そう確信させてくれるのは新聞記事だけではなかった。

——シャニー、君の活躍を僕も誇りに思う。また二人でパスタでも食べながら話を聞かせて欲しい

世界中が敵に回ったとしても、ロイが認めてくれたらそれだけで嬉しい。思わずシャニーは手紙にまた頬ずりを始めた。

手紙に記されているのは明確なラブコール。シャニーの幸せそう

な顔に、レンの小さな口元も緩む。

「リーダー、ラブだね」

「えへへっ、まあね〜」

あまりに緩んだシャニーのデレデレの顔に、ルシヤナが両手を広げる。

「あーヤダヤダ。ついこの前まで全然自覚もなかったし、聞いたら顔真っ赤にして否定してたのにさ」

「だってもうバレたんだし、隠す必要ないじゃん？」

「なのに、ロイ様なの？」

「いや、えっと。それは……ね？　ロイ様は英雄なんだし」

「ハッ、そのうち同じこと言っただよ。今度はいつ行くの？」

この三か月間、仲間の存在に支えられてここまで来たけれど、心の中にはいつもロイの存在があった。

辛いときはいつでも彼に語り掛け、十二月の時の感触のままに抱きしめてもらった。彼の支えになろうと手紙も毎日のように書いて、その中で逆に何度も励ましてもらった。

思い出される優しく凛々しい顔。ロイがまた呼んでくれていていなるなら、今すぐにも飛んでいきたいくらい。

でも、シャニーはその気持ちこそと手紙と共にしよう。

「しばらくは無理かなあ。春になれば、できることも増えるし」

雪さえ消えてくれれば……そう願った冬が過ぎれば、やりたいことは一気に広がってくる。

次の冬を迎えるまでの短い時間で、とにかく一つでも多く軌跡を残して、イリアに小さくてもたくさん春を呼び寄せたい。こうして記事になるくらい認められているなら、俄然やる気だって湧いてくる。

「ロイ様、あたし、いつあなたに会いに行けるかな」

窓辺に身を移したシャニーは、南の空を見上げてロイに語り掛けた。

次に会いに行くときは、志を果たした時と決めている。イリアに自分が生きた軌跡を残したら、必ず——と。

今度はあんな泣き顔じゃなくて、笑って彼と時間を共にしたい。そ

のためにも、今を精いっぱい生きて、生きて、未来をこの手で切り拓くんだ。

南の空にそう誓った彼女は、再び詰所を出て、イリアの高く澄んだ空へと戻っていった。



## 第9話 風光る（前編）

「母さん、姉さん、私はやり切ったと言っているのかしら……？」  
広がる山々が、白から緑に変わってきた。

もう今まで何度となく見つめてきた景色も、今日を最後に見ることが叶わなくなる。

どんな気持ちで表したらよいか分からない。肩の荷が下りてほつとするが、ようやく動き出した道から、志半ばで去る無念。そして、この景色を二度と見つめられない寂しさ。様々な気持ちが心の中で渦巻くなか、テイトは窓から広がるイリアをじっと見つめていた。

母も、姉も通った道。彼らに胸を張って戦い抜いたと言えるのか、今でも答えは出てこない。

「テイト、こんなところにいたの？ 探したよ」

テイトがいるのは団長室ではなく、十八部隊の詰所。

振り向くとソランがゆっくりと歩いてくるのが見えた。彼女は部隊長席に目を落としふつと笑う。

「整頓してあげたの？」

「ぐちやぐちやで見ていられなかったの。もう、あの子は本当に片づけが出来ない子よ」

懐かしさにふらつと訪れたこの場所。最初に目についたのがシャニーの席だった。今でこそ端にきちつと積んだ資料も、机中に散らばって手を置く場所に迷ったくらい。

不思議。今でもこうしてここにいるのが当たり前で、自然に手が動いていた。明日から、もう叙任騎士では無くなるのに。

「珍しいじゃない。急にいなくなるなんて」

「ごめんなさい、ソラン。ちよつと……新人の頃を思い出しちゃって」  
何も分からなかった新人時代。見習い修行をしたからどこでも飛んでいけると思っていたら、シグーネに大目玉を喰らったことが今でも忘れられない。色々浮かんだ疑問は傭兵として戦場へ出ていくうちに忘れ、そしてベルン動乱で思い出し、ようやくイリア騎士の誓いの意味を理解して……。

走馬灯のように蘇る記憶の一つひとつを、なごり惜しく追いかける。横では部屋をぐるつと見渡したソランが、柱のキズに手を置きながら感慨深そうにしている。

「私たちがよく泣いた部屋も、今や公式部隊の詰所か」

辛かったことや悔しかったこと、泣きたくなることも、この部屋にはたくさん思い出が詰まっている。その思い出の場所に、後輩たちの思いが積み重なってこの部屋は守られてきた。

そして今、この部屋には部隊名が与えられている。

イリアを創る天馬騎士の揺りかごだった部屋は今、イリアそのものを創る任務を背負っている。

何か、運命的なものを感じる。ソランもそうなのか嬉しそうだが、テイトの声は沈んでいた。

「……無くなりかけたんですってね。十八部隊」  
ぽつりと寂しさを零す。

退団後の動きを決めるため、エトルリアへ飛んだ一週間。その間に、一年を費やしてようやく芽から若木へと育ってきた変革の象徴を、無残にも摘み取ろうとしていたなんて。話を聞いたときは頭が真っ白になった。

金のブローチをイドウヴァに預け、三月はほとんど登城していないから入ってくる情報も断片的。不安で不安で仕方なかった。

「やっぱりあの人は、あの人だったよ」

怒りを噛み砕くようにソランがイドウヴァを罵る。

テイトも同じ気持ちだった。そこまではしないだろうと信じていたのに。どこまで裏切られれば良いのだろうか。

「でも、さすが貴女の妹さんだね。存続が決定したらしいよ」

ソランが言うには、イリア連合から称賛された十八部隊の解体は、騎士団内でも大きな波紋を広げるものだったらしい。

でも、騎士団間の運営不干渉の掟がある以上、団長が解体すると言えどそれは絶対命令。見せしめ一号かと噂が広がったと思ったら、二日後には掌返しとなっていて、何が起きたのかと再び大きな話題になった——そう語るソランは彼女には珍しく興奮気味。

「そう。良かったわ。……本当に」

ほっとしてテイトは静かに目を閉じた。心の中に浮かぶ妹の顔を何度も愛でる。

妹たちがあちこちから認められる様子が、まるで自分のことのように嬉しかった。

多くの反対や批判を押し切って、半年間を考える時間として与えた。公式部隊とすることをイリア連合会議で報告したときの非難は、まるで千の槍のようだった。そのすべてを受け止めて、十八部隊を守ってきた。

妹たちは批判を跳ね返すように少しづつ、それでも確実に成果をあげて、イリア連合の風潮を変えてくれた。

「私は何もできなかったかもしれない。けれど、十八部隊だけは胸を張って言えるわ」

十八部隊の中心にいるのは妹たち。それは心得ていても、自分もその輪に入って一緒に喜んでいいと思えるほど、この部隊には思い入れを持って戦ってきた。

その自負が、さつきまで弱かったテイトの声に張りのある強さを与える。

「何もなんてとんでもないよ。貴女は人をつくった。イリアの次世代を担う人財をね。もし、この一年の団長がイドウヴァさんだったら、どうなってたやら」

団長としてやりたかったことを、ソランは成果として褒めてくれた。今までのどんな非難も心から吹き飛んで空く思い。こんな気持ちになったのは、いつ振りだろうか。

「それさえ出来たのなら……私は自分を褒めたいわ」

「あれだけ批判を受けて信念を貫くのは真似できないと思ったよ。テイトは人を残して、未来への礎をつくった。なんでもっと評価されないのか不思議だよ」

「ふふ、褒めすぎよ。皆が頑張ってくれたから、私は心を鬼にできた」  
自分がいなくなっても、根付いた想いたちが未来への懸け橋となり、新たな人と未来を創って行ける。その礎となれたなら、きつと誓

いは果たさせた。

やっとそう思えて、ティトはほつとした。母や姉達にかなうかは分からなくとも、精一杯がんばったと自分を納得させられそうだ。

ようやく表情が柔らかくなったティトの肩を抱きこんで、ソランは優しく笑いかけた。

「ああ、褒めちぎっちゃいなよ。貴女は私にとって最高の団長だったよ」

「ソラン……ありがとう」

厳しいソランが見せた微笑みは、ティトにとって最高の労いだった。

新人の頃から、いやその前からずっと苦楽を共にしてきた。その彼女から飛び切りの言葉をかけられて、ティトは声が震えてしまった。

もう、叙任騎士では無い、もう、我慢しなくていい。そう思うと、今までずっと団長だからと堪えてきたものが一気に溢れてくる。しばらく親友の胸を駆りて、嬉し涙で自身を労う。

「ほら、皆のところへ戻ろう。待ってるんだよ、みんな」

ソランに手を引かれ、最後に頭を下げて十八部隊の詰所を出る。

お世話になったのはこの部屋だけではない。皆にどんな言葉をかけてあげればいいだろう。どんなに心で準備しても、きつと上手く言えない。たくさんの人の、たくさんの手に支えられてきた。わずか数十分では、その全てへ言い尽くせないだろう。

でも、きつと言いたい。愛するイリアを共に支えてきた、そしてこれからも支えていく仲間達へ感謝と、そしてエールを。

「ティト団長、今までお疲れさまでした!!」

エントランスに出ると、城にいた騎士総出でティトを待っていた。

あちこちで労いの声をかけられ、両手は渡された花束で一杯だ。

泣きながら別れを惜しむ者、抱き着いて動けなくなる者。この際だからとイタズラを仕掛ける者。協力的だった人も、何かと舌戦を戦わせた人も、皆門出を全身で祝ってくれる。

色々な想いにもみくちゃにされて、ティトには不思議な気持ちが膨

らむばかり。こんなにも祝福してくれることが、何かを夢でも見ているかのようだ。こんなに多くの人たちに支えられていたのだと、あらためて知ろうとは。

嬉し涙をほろほろと流していると、ふいに後ろから聞き慣れた声でした。

「テイトさん、結婚おめでとうございます」

振り向いた先にいたのはイドウヴァだった。

この一年、ずっと団長と呼ばれていたのに、いきなり“さん”付けは何か違和感があるが、団長の証である金のブローチはイドウヴァの胸で輝いている。もう叙任の証である団員証も返納した今、こう呼ばれるのが正しいと思うと、ふいに切なくなってくる。

「いずれお世話になるかもしれませんが、その時はお願いしますね」

テイトは先導してくれるソランの手をぎゅつと握った。イドウヴァが何食わぬ顔でそう言った途端に拳を握ったからだ。気持ちは同じ。自分が居なくなつたと見るや、苦心の結晶を引き千切ろうとしておいて、こんなことを言えるとは。今でも信じられない。

「ええ。イドウヴァ団長、天馬騎士団のこと、よろしくお願いします」

「はい、もちろん」

それでもテイトは顔色を変えることなく、すつとイドウヴァに頭を下げた。

道から降りた以上はもう、こうするしかないのだ。テイトは心配だった。もう守ってやれない妹たちが。

「妹のことも、もう許してあげてください」

改めてもう一度イドウヴァに頭を下げる。

十八部隊を解体しようとしたのは、半分はシャニー達への報復人事だろうとテイトは思っていた。

今までは団長としてできる限り守ってきたが、これからもあんな剣幕で妹が攻撃されると思うと体の芯が震えてきた。

「大丈夫ですよ」

でも、イドウヴァは意外にもあつさりと手を差し出して続けた。

「去年のことは、しっかりと話し合ってもう解決しましたから」

それを聞いたテイトの安堵に満ちた顔は、今まで見たことも無いほどに柔らかい。

「ああ……そうですか。良かった」

これでもう、心残りはない。握手して再度頭を下げると、テイトはイドウヴァに背を向けた。おそらく、シャニーがイドウヴァに謝つたのだろうが、どんなに悔しかったのだろうか。妹の気持ちを慮ると、胸がキリツと痛む。

テイトはイドウヴァと別れた後、すぐ隣にいたアルマに目を向ける。彼女の胸には一か月前までイドウヴァがつけていた銀のブローチが輝いていた。

「前団長、今までお世話になりました」

彼女はいつもと変わらず、ただでさえ目立つ赤の瞳をはつきりと開いて言葉も力強い。もうずっと前から副団長をこなしているのかと思うほどに、その姿には覇気が溢れている。

最初こそ警戒したが、特に部隊をかき回すこともせず、アルマはソラン達ともうまくやってくれた。

「こちらこそ。第一部隊ではよくやってくれたわ。副団長、大変だと思っけど貴女ならできると思う。任せたわよ」

テイトから手を差し出し、若きナンバー2の手をしっかりと包む。

最初はあれだけ頭を悩ませた存在が、今では一番頼りになる存在になっている。でも、その期待が、イドウヴァの暴走を止めてくれるのではないか——そんな脆い希望が含まれているのがどうにも悲しい。

「もちろんです」

それでも、しっかりと握り返してくるアルマの力強い手は、そんな不安を解かしてくれるようだ。

「シャニーと共に、貴女が果たせなかった夢を果たしますから、エトルリアからどうぞ気を安らかに見守ってください」

どこかシャニーと同じで、入団してきたときの尖った感じが取れ、丸くなったように思える赤い瞳。

新人部隊でも一人で稽古していることが多かった彼女が、自身の志

に妹の名を挙げて共に歩むなんて言葉を口にするとは。やはり、何か夢を見ているかのようだ。

でも、これほど心強いことは無い。イリア内に大きな信を背負う妹は時に暴走しがちだ。アルマなら彼女を止めて最善を提案してくれる気がする。テイトは二人がどんな色にイリアを染めるのか、期待ばかりが膨らむ気持ちをアルマの手を託す。

そうしていると、ふいに背後から誰かが腰に抱き着いてきて、空色の瞳があたふたする。

「団長。本当に行つちやうんですか？ あたしも連れてつて下さいよー」

第一部隊のムードメーカーのエダだった。相変わらず、ネジが一本外れていそうな抜けた声で別れを惜しむので、どこか雰囲気は緩む。普段なら場を和ませてくれるそれに、ソランが頭に角を生やしていた。

「こら、お前と言うヤツは本当に締まりがない！ 遊びに行きたいなら退団してからにしろ」

「違いますよー！」

そんな声を出せるなら普段からそうして欲しいくらい、エダとは思えない真面目な声が返ってきて、思わずテイトはソランと息を呑む。

「あたしにとって団長は世界で一番だったから。第一部隊のみんなそう思ってますよー！」

「エダ……」

どうやって感謝を伝えれば良いか、テイトは言葉に詰まった。裏表のないエダに言われると、嬉しい以外の他の言葉が思いつかない。

「ふふ、それは私も同感だよ、テイト。97代目団長は、偉大な団長だった」

周りの隊員たちも何度も頷いて涙ぐむ。

泣かないと決めていたが、やっぱり駄目だった。

仲間の涙に思わず目を潤ませて唇を噛むテイトへ、ソランもそっと彼女の肩に手をまわして、耳元ではつきりと感謝を伝える。

「幸せにね」

別れをはつきりと思い起こさせる言葉。テイトは静かに頷くと、彼女も戦友の背へそつと手をまわす。

「あなたも……武運を祈ってるわ」

天馬騎士団を背負ってきた二人が、別れる道を前にしつとりと抱き合う姿を、第一部隊の誰もが涙をすすりながら焼き付けるように見つめている。まるで、瞬きするのさえ惜しそうに、じつと。

しかし、時は来た。

最高の仲間たちの許を離れ、テイトは城の出口の手前まで進んだところで、手を振るレイサを見つけてそちらへ小走り。彼女の周りでは十八部隊が背筋を伸ばして敬礼している。

「おめでとう。そして、お疲れ様。団長」

「ごちらこそ、重責を果たしていただいて感謝しています」

腰に手を当てながら、変わらない口調でさっぱり喋るレイサの声には、いつも何か安心させられてきた。

悩みを聞いてくれる彼女は、テイトにとつてもう一人の姉。何より、レイサが十八部隊を背負ってくれなければ、今頃まるで違う未来になっていたに違いなかった。

影の功労者としつかりと握手を交わしていると、姉貴分の後ろから飛び出してくるようにルシヤナ達がレイサの後ろから一步前に出てきて、ゼロットから賜った銀の槍を掲げる。

「私たちを守ってきてくれて、ありがとうございます。きつとこれから期待に込めて見せます」

ルシヤナとレンがペこりと頭を下げ、レンにスカートを引っ張られて遅れてミリアも挨拶をはじめた。

彼女たちが、自分やレイサが守り育ててきた大事な未来への懸け橋。そう思うとテイトは目頭が熱くなってくる。

「貴女達はイリア民の希望。これからが大事。イリアを頼むわよ」

エールを送ると、感激したのかミリアが顔をジんとさせて手を結びだしている。

緊張しきっていつもとまるで違う彼女のお尻をルシヤナがひっぱたき、三人で再度敬礼して見せた。



「イエス、ママ！」

一年でこんなにも頼もしくなるものなのか。

あのイドウヴァにも立ち向かった勇氣は伊達ではないと示す強さをどの瞳も湛えていて、テイトは確信していた。彼女たちはきつともつと大きなことを果たしてくれると。

でも、その期待を一番にかけたい希望の一番星が、どれだけ見渡してもこの場にはいない。

「……あの子はいないんですか？ レイサさん」

念のために聞いてみるものの、レイサも両手を広げてため息をつき始めた。

「あいつ見回りに出ててね。ちゃんと時間どおりに帰ってこいって言うてあったのに」

「……相変わらずな子ですよ、本当に……」

最後は飛び切り褒めてあげようと思っていた。

彼女にかけてあげたい言葉はいっぱいあって、この場に来るまで何を最初に言おうかずつと考えていたのというのに。『妖精』の称号らしく、本当に奔放さは変わらなかった。

テイトは寂しさに引つ張られながらも歩き出し、ついに城の出口に足をかける。

あと半歩、あと半歩踏み出せば、天馬騎士テイトはその道を終えることになる。踏み出したくない寂しさと、踏み出せない恐怖を、飛んでいきたい最愛への想いで振り切って、彼女はついに新しい一歩を踏み出して振り返った。

「皆さん、今までありがとうございます！ 天馬騎士団の、イリアの繁栄を、エトルリアの地から見守っています！」

それまでの苦労をすべて吹き飛ばすような、大きな拍手と労いを一身に受けたテイトは、両手に一杯の花束を携えながら騎士団へ背を向け外門へと歩き出した。いつまでも、その背に称賛を浴びながら。

石畳の道を一步、一步、静かに踏みしめながら歩いて、周りの景色を立ち止まっては眺めて焼き付ける。

ついに石畳も無くなつて、雪解けにぬかるんだ道まで来ると、テイ

トは振り返ってそつと見上げた。紺碧の空は今日も高く澄んでいて、その青に美しく映える白い巨城は、どこかいつもよりも大きく感じる。

この城で今まで生きてきて、この城に生きるすべてを背負ってきた。それがもう、自分からぶつりと切り離されてしまった気がしてただただ、湧き上がる寂寥感にしばらく呆然とする。

いつも、忙しくてこんなことを考えたこともなかったのに、今はただ、この景色が愛おしくて、切なくて。今振り返ったらもう、二度と見られないと思うとなかなか動けない。

でも、進まなければいけない。槍を置き、勲章も騎士団へ残してきた。もう、天馬騎士テイトはいない。もう、自分を包んでいるのは軍服ではない。自身を見下ろして言い聞かせた彼女は、静かに頭を下げた。

「ありがとうございました……。本当に……。お世話になりました」

深く、深く頭を下げる。

走馬灯のようにまた記憶が蘇ってきた。仲間とともに笑い、泣いた詰所。相棒とゆっくり会話できた厩舎。美味しいとは決して言えなかったが、たくさんの笑い声に包まれた食堂。苦しくも、常に天馬騎士団の業の深さと向き合えた団長室……。

緊張した入団式のこと。配属されて迎えた初陣の震え。初めての分隊長への就任……。ベルン動乱……。そして団長となり、イリア連合から勲章をもらい……。ここまで戦ってきた。

ずっと包んでくれたこの城、この仲間たちとの別れは、何度自身に言い聞かせてもなかなか先へ進めない。

「さようなら。天馬騎士団……。さよなら、私の愛した……。イリアのみんな」

静かに頭を上げ、湖面揺れる空色の瞳でもう一度カルラエ城を見上げて、消え入りそうな声で別れを口にする。

志は消えたわけではない——そう自らに言い聞かせ、髪を揺らした彼女は、ついにイリアのために生きた場所に背中を向けた。次の未来へ、愛する人と飛び立つために。

## 第Ⅱ部 最終話 風光る（後編）

「ああー、まだかな。まだかなー！ もうすぐ来るはずなんだけどなあ！」

岩陰からちらちらと城の様子をうかがいながら、シャニーはその場をバタバタ踏んで待ちきれない心を引き留めていた。

こんな誰もいない道の影にずっと隠れていると、どうにももうずうずして落ち着かない。今頃みんなは姉と別れの挨拶をしているころだ。本当はその輪に入りたい。だけど、こうして待つことにしたのだから今はぐっとガマンだ。

天馬騎士団として姉に最後の別れをするのは、絶対に自分だと決めていた。

なのに、姉は来ない。きつとみんなと盛り上がっているんだ。そりやそうだ。みんなだつて、きつと同じ気持ち。でも、早く来て欲しい。もつともつと、一番のとびきりを準備してるんだから！

「来た、来た、キターー！」

空色の髪が外門に小さく見える。小声を弾ませ、ニシニシ笑って岩陰に隠れなおす。もう一度顔を出したシャニーは、今度は口を尖らせた。

「もう、お姉ちゃんつてば、何してんだろ」

城を見上げたまま、テイトは動かなくなってしまった。

ずっと、見ている。やっぱり、寂しいのかな。もし、同じ立場だったら、どんなことを想うのだろう。騎士を退き、去る気持ち……イメージが湧かない。きつと、寂しいんだと思う。

いつの間にか、シャニーも同じようにカルラエ城を見上げていた。白く、大きな城。今日の城は静かで、どこか寂しそう。まるで、姉に行かないでくれと言っているかのようだ。

「あ……」

テイトが城に背を向けた。ついに歩いてくる。さつきまであんなにこの時を待ちわびていたのに、妙に緊張してきた。姉は今、何を考えているのだろうか。少しずつ大きくなってくる姉。見えてきた顔は

いつも通り硬い……というより、重い。泣いてるのかな。

イリア最後の思い出を、とびきり良いものにして欲しい。足音まで聞こえるほど近づいたティトの前に、シャニーはだっと飛び出した。

「お待ちしておりました。ティト名誉団長！」

春風が寂しく吹き抜ける丘に響く、温かい朗らかな声。

クリっとした青い瞳を綻ばせながら白い歯を見せたシャニーは、目を真ん丸にして驚くティトに敬礼して見せた。

よほど驚いたのか、ティトは固まったまま動かない。もう一度二カつとしてみせたら、ようやく駆けてきた。傍まで来たティトにシャニーは敬礼を解き、また白い歯を見せてしてやったりと笑う。

「えへへっ、驚いた？」

「あなた……どうして」

ティトは言葉に詰まっているようだ。シャニーの手を取るティトの目はとても嬉しそう。ぐっとガマンして待っていてよかった。

「へへっ、名誉団長の右腕として、みんなとはちよつと違うコトしようと思つて」

これだけでも姉は喜んでくれたみたいだけれど、こんなのは序の口。本当のサプライズはまだまだこれから。なのに、握っていた手がするりと離れてしまつて焦つた。

「わっ、わっ?! な、泣かなくなつていいじゃん！」

「……こんなの……ズルいわよ。せつかく、覚悟を決めてきたのに」

伏した顔を手で覆い、声が漏れないように堪えているみたいだ。誰も周りにいないのに。

「ふふん。そんなに感動してもらえるなんて。やっぱり仕掛けがいがあるなあ、名誉団長は」

「名誉団長なんてやめてちょうだい」

昔から、姉にはいろいろなサプライズを仕掛けてきた。もちろんイタズラだと口をきいてくれなくなったりもしたが、誕生日やお祝いごとの時は、いつもこうして照れながらも喜んでくれる。それでも、泣かれたことは初めてで、仕掛けたシャニーの方がドツキリだった。とりあえず、ハンカチを差し出す。

「まあまあ。今日くらい良いじゃん！ それ、持ってるから、とりあえずこれ着て！」

しみりする空気を払う、太陽に負けないくらい暖かい声のはしやぐ。

テイトが持っていた花束を預かると背後にまわり、するすると彼女に外套を着せていく。周りを旋風のように動き回るシャニーにテイトはなされるまま。

「何をするつもりなの？ シャニー」

「ひみつー！」

シャニーは訝しがるテイトをその場に残し、小走りに岩陰へと駆け込む。後を追ったのでき込もうとするテイトの前に、隠しておいた天馬と共に飛び出したシャニーは、相棒の横で背筋を伸ばしてしやきつと敬礼して見せた。

「名誉団長の門出を、天馬騎士団 第十八部隊長シャニーがお供いたしますー！」

凜と立つ華奢な騎士。

姉は口を半開きにしたまま動かない。どうやらドツキリはまた成功みたい。……と思ったら、姉は歩き出して顔をまじまじ見つめてきた。まるで何かチェックするかのようで、思わず退く。

「な、なあに？ 大丈夫だよ、イタズラじゃないよ？」

「ふふ……。そうね。じゃあ、お願いしようかしら？ シャニーさん」「えへへっ、そうこなくっちゃ！ 行こう、名誉団長！」

テイトの背に回り、もう一度外套をしっかりと着せて天馬の後ろに乗せた。姉がいつもと違う場所に乗っている違和感がぎゅつと胸を締め付ける。

慣れた身のこなしを見せつけながら飛び乗り、腰に差した剣が揺れ終わらない内にあつという間に空に舞い上がった。

「どこへ行くの？ まさか、このままエトルリアに行く気じゃないでしょうね」

急に心配そうな声が後ろから聞こえてきた。もっと楽しめばいいのに、姉の心配性は相変わらず。そうになると、心の中でニシニシ始

まっつてしまう。

「えー？ ダメなの？」

「あなたのことだから何しても不思議じゃないけど……まさかなの？」

本当に冗談が通じない。姉の声が一段低くなった気がした。

「クレインとは別の場所で待ち合わせているから、行っちゃダメよ？」  
ずいっと顔を近づけて、警告しながら本気で心配し始めている。

右腕なんだからもう少し信用して欲しいんだけど……。そんなことされちゃ、ますますイタズラ心が疼いちやうじゃん。

「まあまあ、現役騎士に任せておきなさいって」

こうやって姉にイタズラを仕掛けられるのも最後かもしれない。敢えて行先を言わずに加速する。もっと姉は焦るかと思った。でも、風を切る音ばかりで何も返ってこない。なんだかツマらない……。そう思って振り返ろうとしていた時だ。やっと掛けられた言葉は、まるで違った。

「あなたを第一部隊に呼んで、一緒にイリアの空を飛ぶことはできなかったけど、最後にこうやって飛べてよかったわ」

こんな言葉、まるで予想していなかった。きゅんと胸が締め付けられて、思わず口をきゅつとつぐむ。姉のドツキリの方が、自分の仕掛けたドツキリよりずっとズルい。

「お姉ちゃん……？」

「ゼロット義兄さんの意向とは逆に、騎士団は外征至上主義に戻りつつある。そんな中で、国内へ目を向けて、創っていけるのはあなた達しかない。そう思うと心配よ」

姉が零した、初めての不安。どう返していいか、とっさに良い言葉が浮かんでこない。なんとか、安心させてあげたい。半開きの口から無理やり声を押し出した時だった。ふっと優しく笑う声が耳をなぞった。

「でも、あなたに託してよかった。ずっと背中を合わせて戦ってきたんですもの」

どきんと胸が跳ねた。サプライズをかけたはずなのに、こんなサブ

ライズ、ホントにズルい。震える心をそつと包むように、肩に添えられた姉の手。鎧の上にあるはずなのに、柔らかくて、温かい。

「志を継いでくれる人がいることが、こんなにも心に安らぎを与えてくれるなんてね」

「お姉ちゃん……」

紺碧の空に走る一筋の白い光の上で、シャニーも静かに笑い、そしてすっかり前を向いた。姉は、誰よりも信頼してくれていた。そして、これからをすべて託してくれた。きつと、その期待に応えたい。その気持ちがあつと大きく膨らんでくる。

それより前に、自分だつてとっておきを姉に伝えたい。そのために、こうして姉を連れてきたんだから。

しばらく空を飛び、シャニーは目当てを見つけて天馬を止めた。

「ハハ……」

それだけ言つて、テイトは眼下に広がる光景をじつと見下ろしている。きつと、ここへ連れてきた意味をもう分かってくれているみたい。

ここは、シャニーたち十八部隊が国力向上の任で企画した第一弾の場所。

「へへっ、ここ、一年前は何も無かつたんだよね。大きい病院ができて、みんなここに来るようになったんだよ」

シャニーが部隊長に就任して、まだ一週間も経たない内に開催された部隊長会議。そこで企画提案したのが、このカルラエ城下町への病院建設だった。

部隊長に就任する前から、ずっとイリアの人々の許を飛び回つて集めた困りごとメモ。それを必死に読み上げたのに理解してもらえず、皆でこの場所まで飛んできて空中会議したが、まだつい最近のようだ。

でも、あの時なにもなかった雪原には、立派な病院が聳えて人の往来が見える。

「よっし、次いくよー、名誉団長！」

テイトがほつこりと笑つてくれたことを確かめると、シャニーは再

び天馬を駆り西の空を目指す。

「もう、天馬に乗るのもこれが最後なのかしら……」

寂しそうに零すティトに、シャニーは首を振った。

「えー？ エトルリアに行っても乗ればいいのに。お城脱走するのに便利じゃん！」

「なんで脱走する前提なの？ でも、ふふ。たしかに、イリアに遊びに行く時のために練習はしておかないと」

「へ？ 脱走の？」

「違うわよ！ 乗馬に決まってるでしょ？」

ふだんの姉妹の会話を楽しみながら、イリアの蒼天を翔ける。

今度は短かった。風に踊っていたシャニーの青髪がとまり、眼下を見下ろして揺れる。

「この村は井戸を作ったんだ。みんな、すっごい喜んでくれたんだよ」  
シャニーはまだ新しいレンガ造りの建屋を指さした。嬉しくてついつい声が弾む。

とにかく大変な企画だった。一度は却下されたもののリベンジだったが、イドウヴァだけでなくマリツサまで横やりを入れてきて大分戦った。

「そうね。あの企画の時も大変だったわね。なかなかイドウヴァさんが折れなくて」

ティトも覚えてくれていたようだ。敗色が漂っていたが、それでもシャニーが食い下がって、ティトが背中を押してくれたから通った案件。

「あの頃くらいからかしら。あなたの会議室での顔つきが変わったのは」

「え？ やっぱ、分かるんだ」

シャニーにも自覚はあった。あの頃からだ。第一会議室が戦いの場所となったのは。

村人たちの喜ぶ顔を見て覚悟を決め、あの部屋でだけは心を鬼にすると決めた。戦い疲れて動けなくなることもあるけれど、やはり村人たちの笑顔は何物にも代えがたい。



今も村を眺める横顔は朗らかそのもので、それをしばらく見つめていたテイトは安堵を漏らす。

「もう、イリアの恥なんかじゃない。どこへ出しても、イリア騎士と胸を張って紹介できるわ。イリアを、志を託せる信じられる人になってくれた」

とびきり嬉しい言葉をかけられて、シャニーは内心小躍りしていた。それでも、今は姉を喜ばせる番だ。嬉しい気持ちそのままに、手を突きあげて天馬を飛ばす。

「よし、次だよ、次々、名誉団長！」

「そろそろ、その名誉団長っていうの、やめない？」

「えー！ ヤダよ！ 今日はこちらでいく！」

まだまだ紹介したい場所がある。風光る蒼天の爽やかさに任せて天馬を駆り、結構な場所まで飛んできた。もうすぐエトルリアの国境がある、連峰付近まで来たはずだ。

「ここには道ができて、雪崩に巻き込まれる心配がなくなったって、いろんな人が喜んでくれたよ」

「素敵……。母さんみたいな人が出なくなっただけで欲しいわね」

雪崩による事故は毎年後を絶たない。その事故で母親を失った二人にとつては、住民たちの声は他人事に映るはずもなかった。

今まではその声に何もしてあげられなかった。それを前に進められ、シャニーは何度もうなずく。

「うんうん！ あたしも本当にそう思うよ」

姉の喜ぶ声を背中に受けて、シャニーも声を弾ませながら新しくできた道に沿って天馬を駆る。

二人で見下ろす、イリアの大地にできた新しい道。それはまさに、二人のこの一年の軌跡に映る。その道は遠くまで続き、そして白銀の鉄路とぶつかった。

「後は……。これがいつ完成するのかなって、今は思ってる」

鉄路に沿って進んでいくと、工事器具が並べられてたくさんの人が見え、そして路は途切れた。春になり、ピッチを上げて進められるエンジェルハイローは道半ば。

「これさえできれば、食べ物も、薬も、病気の人も、みんな運べる。イリア中が繋がるんだ」

天馬を旋回させ、鉄路に沿って東の空を目指す。あちこち途切れているが、まだ無い鉄路を天馬で繋ぎながら、シャニーは未来を語る。

その背中を、テイトはじっと見つめていた。

「この一年、本当にあなた達は頑張ってくれたわ。言葉では言い表せないくらい、本当に感謝してる」

こんなに姉が褒めてくれたことなど、去年までなかった。それこそ、入団時にはイリアの恥とまで言われたくらいだったのに。

嬉しい。ずっと追いかけてきた姉が認めてくれて、今までの全てが無駄ではなかったと心が風に浮かぶ。

それでも、シャニーは首を振った。

「ううん。違うよ」

顔だけ姉へ向け、シャニーは天馬を止めた。

朗らかな笑みを浮かべ、両手を広げて全身に春陽を浴びながらテイトを見つめた彼女は、山々に聞かせるように、高く澄んだ空に爽やかな声を響かせた。

「これ、みんな、みーんな、お姉ちゃんのおかげだよ！」

「私……？」

テイトは思わず眼下を見下ろす。

遙か先まで続く軌跡。あの向こうには、シャニーが企画してきた様々なものが、戦争に砕けたイリアの沈んだ白へ、新たな色を与えてあちこち咲いているのを彼女は見てきた。

地平線まで視線を移しても、テイトの顔に浮かぶ困惑は変わらなかったが、シャニーは姉の瞳をまっすぐ見つめ、心からの感謝を口にした。

「そうだよ、お姉ちゃんのおかげ。お姉ちゃんがイリアを変えようと戦ってくれたから、イリアに少しだけ春が来たんだ」

何故だろう、今はちっとも恥ずかしくない。つい最近まで、なかなか姉には素直になれなかった気がするのに。

実行部隊として動いていたのは確かだし、この仕事は自分達にしか

できないとシャニーにも自負はあった。

「だけど、ベルン動乱でも同じだった。俯瞰して考え、傘となって見えない敵と戦ってくれる人がいるから、自分たちが目の前の問題と戦えるのだと。強かった姉の背中を見続けてきて、シャニーは確信していた。」

「そのおかげで、あたしも今ここにいます。お姉ちゃんがいてくれなかったら、今頃あたし、騎士として死んでたかもしれない」

「姉が団長ではなかったら、十八部隊に配属してくれなかったら、事あるごとに相談に乗って叱責してくれなかったら、外からの非難や攻撃から守ってくれなかったら……。」

「戦場での誉ばかりを追いかけのままの自分であつたなら、今この場に『天馬騎士シャニー』はいなかったと断言できた。どんな時でも、自分の前には姉の大きな背中があつて、その後ろからイリア騎士たるを学び続けたこの一年。ついに姉を背中に乗せた今、他の誰よりも深い想いを、姉に一番伝えられるこの紺碧の空で伝えたのだった。」

「ありがとう、お姉ちゃん。ありがとう、97代目団長。あたしを、イリアを導いてくれて」

天馬に突いたティトの手にそつと自身の手を添え、青の瞳にぐつと力を込めながら、まっすぐ空色の瞳を見つめてハッキリ最後まで言い切った。

あの強かった姉が、瞳を震わせてる。初めてかもしれない、こんな顔を見るのは。

「やめなさいよ、こんなところで……。今日のあなたは、本当に……」  
「こんな高いところを飛ぶ天馬の上では、ただでさえ涙を隠せないのに、手まで抑えられてティトには為す術がなかった。剥がれ落ちた団長の仮面を拾うこともできずに、ティトはほろほろと涙を流して俯く。それを見てもシャニーには言い足りなくて、触れる姉の手をぎゅつと握った。」

「あたしにとつて、お姉ちゃんは最ツ高の団長だったよ。誰よりも、誰よりも……ずつとずつと最高の……」

みんなきつと、お姉ちゃんを最高だつて言つたはず。だけど、あた

しが一番、みんなよりずっと、ずっと最高だって思ってたんだよ。だって……世界で一番、大好きなお姉ちゃんなんだもん！

何度も、何度も、繰り返し贈る。どれだけ力を込めていても目元が揺れ、腹が震えて、思わず目も口も、顔中をぎゅっと結んでも、やっぱり喉から想いが溢れ出てきた。

しばらく、紺碧の空には乙女二人のすすり泣く声だけが響く。

だが、今や別れの時。最後は笑ってしよう。シャニーは顔を袖で拭い、明るく照らす陽を見上げた。

「へへっ、騎士にあるまじき姿、失礼しました！」

「シャニー……あなたという子は本当に……大好きよ」

見上げてくるテイトの顔は未だ崩れたまま。お疲れ様——その気持を込めてニカッと笑って未来を誓う。

「あたしはこれから戦うから、お姉ちゃんの意志を継いで戦い続けるからさ。安心してよ」

一緒に戦って欲しいと姉から言われたのは、まだつい最近な気がする。その姉の背中が、もう無い。

でも、独りで戦うわけではないと知る瞳はまっすぐ前を向いていた。

一緒に剣を握る仲間がいる。疲れた時に支え、癒してくれる人々がいる。この三月に起きた絶体絶命の危機も、全ての人と一緒になつて戦っているのだと強く胸に焼き付けられて、想いは更に強くなった。「お願いだから、無茶だけはしないでね。あなたの道は、ひとりだけのものじゃない。あなたは、イリアの希望になったのよ」

握っていた手をしっかりと握り返された。そしてかけられた言葉に、はっとシャニーは言葉を失う。

「……。えへへ、何かカッコイイなあ」

思わず照れ笑いを見せながら髪をいじる。その顔から一瞬笑顔が消え、東に広がるイリアの大地をじっと見つめ始めた。

——あなたはイリアの希望

村人達からもかけられた言葉。それを今、イリアの陣頭に立ってきた姉から言われた意味をしっかりと胸に焼き付ける。

これからは、お姉ちゃんの代わりに先頭に立って、希望の光を掲げてみんなの想いを繋いで行かきやいけない。あたしみたいなちっぽけな騎士に、そんなのできるのかな……。

今は不安も大きい。けれど、この手で未来を切り拓き、創りあげる旗手になった高揚感はそれを大きく上回る。不安なら、いつでも振り向けばいいのだから。

「……お姉ちゃんはエトルリアから応援してよ、あたし達のこと。必ず、イリアに春を呼び寄せるから」

疲れたら、困ったら、絶望したら……信として背負った者たちが助けてくれる。その一人に姉がいることが、どれほどに心強い。イリアからは去るかもしれない。けれど、シャニーにとってはこれから、姉と一緒に歩む頼もしい先輩に違いなかった。

決意の瞳を見つめるティトは、もう一度包むように妹の手に握る。「一番手を焼いてきたあなたが、一番信じられる希望になってくれるなんてね。……ええ、もちろんよ。困ったことがあったら、何でも言つて。あなたの為なら、私は何でもするから」

喜びと想いを伝える手が、優しく包んで温もりを教えてくれる。

それを確かに受け取ったシャニーは前を向き、天馬が風を切り始めた。

別れへと近づく帰路。姉への餞として、そして、これから始まる、自身の新たな出発への誓いとして、シャニーはさっと剣を引き抜き、力強く天へと掲げた。

「イリア天馬騎士シャニー、みんなに誓います！ イリアに春を呼ぶ剣に、あたしはなるよ！ なつてみせるんだ!!」

山々へ遙かに響く爽やかな声で、イリアに生きるすべての人々に聞かせるように力の限り叫ぶ。全ての想いを繋ぎ、全ての信のために戦つて、未来を切り拓く剣となると。

その刃に映える太陽の輝きは、黎明の先で人々を導く希望の光のごとく、眩く煌めいて紺碧の空に白き軌跡を描くのだった。

へ  
フ  
ア  
イ  
ア  
ー  
エ  
ム  
ブ  
レ  
ム  
紺  
碧  
の  
コ  
ン  
ト  
レ  
イ  
ル  
Ⅱ  
完  
◇